現代日本文學全集



杉浦非水装幀

長谷川如是閑集
内田魯庵集
武林無想庵集

改造社版



昭和五年六月の如是閑(上)無想庵(下)二氏と魯庵翁得意の遺影(中)並に筆蹟

(ベンの字の俳句短册と苦心の名譯『罪と罰』の原稿の一部)

「如是閑・魯庵・無想庵集」目次

長谷川如是閑集

内田魯庵集

武林無想庵集

長谷川如是閑集

誰れもの場合。それは一種の排泄物である。それは飲食が偶然に喰はせた食物の結果である。それを偶然は偶然以外に生きぬかけて行つた。生きちやけ小ばいつてくの意味で命がある。が私自身の場合、それが他人の喰覚にどう影響か、それは果して何かの肥料になるか、その点に自信のあるわけではない。

如是閑

額の男

？額の男序

新作家は出ぬか、何處そこに新作家が居らぬか、とは屢〻聞くところ、が新作家は此頃の貸家と違ふ、さう直ぐと見附け得られる筈がない。併し決して居らぬとは言へぬ、日本の文運は今の作家を以て十分とするほど寂しく無い、必ず居ると認めて置かねばならぬ。居るは居る、確に居るのであるけれど、文士連が閥を造つて容易に紹介せうとせぬ、恐らく知らうともせぬ。現に如是閑叟の名をだに知らぬ者が少くないでないか。閑叟が作家としての運命は、叟自らにも分からぬらしいが、資格だけは備はつて居る、其の尋常一樣でない事も疑を容れぬ。作を讀んだ者は皆之を明言するに躊躇せぬ。

閑叟は明治の生れで、而も初年の方でないが、實に生粹の江戸子である。深川で幅をきかした木場の次男、世が世ならば、十八大通の隨一と爲り兼ねまい、と思はれる。所が有爲轉變で悟つたか、他に事情あつてか、商賣する氣は無く、道樂もせず、耽溺もせず、至極まじめに新聞記者として立ち働いて居る。論文も雜錄も飜譯も出來る、探訪も出來る、さうして小說も出來る。どれが一番の長處かは一寸判斷に苦むが、小說を以て一家を成すに何の困難もなからう。既に殆ど一家を成して居ると言つて差支ない。それに不思議な事、弟は畫かきであつて、其の繪畫に於ける猶ほ兄の文學に於ける如く見える。

天才は生れる者であつて造られる者でないと曰ふは、一理がある。併し或は亦曰ふ、天才は主に努力を意味する、ヂョーヂ・エリオットはインスピレーションで書くといはれるのを笑つた、エール大學總長ドワイトは天才を以て努力するの能とし、依りて學生を奬むるを常としたと。これも一理がある。閑叟の「？」は處女作とかでないが、單行本として初めてのもの、是より作家の列に入る譯である、列に入つて如何たる位置を占むるか、今後どう爲るであらうか、成功とやら大成功とやらに爲るであらうか、「？」は即ち「？」、額の男が「？」であると共に、作家としての閑叟も「？」である、「？」に「？」を加へて解決を求むるは、閑叟の閑叟たる所であらう。

明治四十二年七月　　雪嶺迂人

自題

古人云く、是亦彼也、彼亦是也、彼亦一是非、此亦一是非。さう悟つてもよし。又云く、神の曲げたまひしものは誰か之を直くすることを得ん。斯う悟つてもよからん。

僕自身さう悟つて居るや否やは知らぬ。ただ斯るものを書く時、彼此平等、曲つたものは曲りなり、と高を括つて居るつもりなり。蓋し、括らなかつたところで奈何とも爲べからざるが故かも知れず。然しそんなことは何うでも構はざるを、斯る作物の本義と爲すとかや。

（一）

が兎に角、さる男が大きい隱元豆を箸の先に挾んで、喉の頭を去る五分の所迄持つて行つたといふ現象が、今現に客觀的事相として存在して居る——居ないかも知れぬが——と假定する。

一切が此の假定の上に立ち、此の假定から出立する。

此の假定の上に立つて——坐つて飯を喰つて居る男が、今其の隱元豆を箸に挾んで鼻の先へ持つて行つた。其の男の顏の面積は大部分額が占めて居る。曾て聯想疾速症を有する躁狂患者に此の男の額を見せたら、患者は突如として、廣大たる原野、突兀たる禿山、三尺廻り大鼈、動物園の大象、バラックの屋根、某女の尻といふやうな大きいものに關してノベツに饒舌り出した。此の男の額の廣く大きい特徴が患者の感覺を刺戟して病的聯想を起さしめたのである。

總て物は其の特徴によつて代表される、特徴は物の一部分である場合にも其の物の概念を得んが爲には寧ろ全體を見ないで特徴のみを見る、すると特徴は部分たる地位を脫して全體となる。此の男の額も、顏の部分たる地位を脫して顏の全體になつて居る。人若くは物が、限られた範圍を守るのは畢竟無勢力故である、勢力の前には制限も範圍もない、でなければシーザーも奈破崙も皇帝にはなれぬ筈である。此の男の額も生際より眉毛迄の範圍を守るには餘りに優勢であつた。一種の輝きのある——事實輝いては居らぬでも、確に一種の光輝體として印象される——生命の包まれた、なだらかな、柔かい色の弧線を肉體に見るのは女性の裸體の場合を除いては此の男の額である、其の色、其の輝きは藥罐頭の如く、黃色に古びた歷史的、終局的の光でなく、曉の東の空のやうに淡紅色に輝いた、新しい、エナージチックの放射である。が其の額の裡にエナージチックの何物かがあつて、其の輝きなりや否やは斷じ易からぬ。女の皮膚の美しい色が、其の裡に包まれた何物をも說明して居らぬ所を見れば、額の色を以て其の內容を判斷するのは危險である。

琴の調子を合せる音がする。

『朝ぱらから。』と男は鼻の先まで擡げた隱元豆の裏を返して、恰も其の隱元が琴を彈ずる當の主でもあるかの如くに、凝と視た。

男の向うに坐つて同じく其の隱元を見て居た婆やは、頭の邊に手を擧げるかと思ふと、其の甲で膈ひしやげた丸髷の背中をスイと撫でるやうな事をして、

『うまく煮いて御座んせう。』

男は依然として隱元豆を視て居る。琴の音は已んで仕舞つた。

『うまく煮えてゐる。』と男は件の一粒をショイと口に入れて、『けれども及ばんね。』

『賣つて居るのにて御座いますか。』

『イヤ非常に美味い隱元が昔あつた。』と男は偲ぶに餘る或る物を回想するやうに、美しい額を天井に向けて眼を瞬いた。

『昔と申しますと？』

『國會が開けるスッと前だ。私の子供時分のお得意だつた、其の隱元屋が、鬼が笑つたやうな顏の爺だ、汚い、怖い、懷かしい爺だと思つた。何んな寒い時分でも、跣足で、素肌見たやうな上に古い兵隊の着るやうな黑い外套を着て、岡持を右の肩から左の腋へ、紐で釣して、走るわ、走るわ、「煮立て——」と雷のやうな聲を出して、「隱元——」數鳴る頃にはモウ半町も先へ行つて居る。此の爺の說によると、隱元はちやんと定まつた釜を使つて、一定の時間、一定の方法で煮て、ある定まつた時間內に夫れを食ふべきもの

である、此のうちの一つが法に外れても眞の意味を味ふ事は出來んといふのだ。で走る。走る爲に賣れずに仕舞へば、家へ歸つて近所へ只で呉れて仕舞ふ。美味かつたね、だから。』

男は更に一粒を挾んで、例の地位に擧げて、

『こんな物おやない。』と凝と視て、『其の後爺の家が火事で燒けて、其の一定の釜を燒いて仕舞つた。以來其の爺は何うしても隱元豆を煮ない、たうとう豆屋を廢業して、虎列拉病院の看護人になつて仕舞つた。』

男は憮然として挾んだ豆を元の鉢に抛り込んだ。

『昔の人は眞面目だつた、こんな豆屋にも天分に對する確信があつた、難有い事だ。』

男は瞑目して、深い息をする。婆やは主人公の額の淡紅色が、夕日の沈むやうにスーッと褪せて、涙の珠がスル／＼と頰を滑つて、薄い長い八字髭に觸れるのを見た。

男は目を開いて微笑した、けれども恍然と小鉢の隱元豆を視る眼の色の如何にも頼りなげなのを隱す譯に行かなかつた。食ひかけた飯を此の上續けて行くのは何の爲か解らなくなつた、今まで食べて居たのも何の要求に基いたのか解らない、恐らく惰力に過ぎなかつたので、而して今其の惰力が全く盡きて仕舞つた、といふやうな顏をして、男は俯向いて手にして居る茶碗を眺めた。食ひかけの飯が少し殘つて居る。

琴の音が再び起つて、緩い、穩かな春の風が若草の野をわたるやうな調子で續く。男は、眼の前を其の琴の音が徐かに練つてでも行くのを見て居るやうに、凝と瞳を据ゑて茫然として居る。閑却された隱元豆から薄い陽炎が立つて、味噌汁の碗がジー／＼と蚯蚓のなくやうな音を立てる。

婆やが默つて盆を男の胸の邊に差し上げると、男は威勢好く茶碗を其の上に載せた。婆やは手早く飯を盛つて出す。

『茶だ／＼。』主人公は烈しく首を振る。

『オヤ／＼。』婆やは屢〻出會す事に又出會したやうに、飯を小皿に移して、茶を差し出した。

主人公は知らぬ顏をして居る。

『ハイお茶。』

主人公は跳ね上げられたやうに手を上げる、拍子に盆と衝突して熱い茶が膝の上から脛へかけて溢れる、

婆やは慌てて主人公の膝を拭ふ。

自分と自分の動作とが離れ〲になつて、自分は動作に關知せず、動作は自分に關知せず、各自勝手に活動を始めて居るのだとでも思つたのだらう、男は、

『此樣なものだ、今の人間は。』と云つて顏を赧くした。婆やは平たい聲で高く笑ふ。

『けれども之ほど眞面目ではない。』と男は沈んだ重くるしい聲で、『昔の人は眞面目だつたなア。』

『昔の方はねえ。』と婆やも同意を表する權利のあるやうな顏をする。

『今でも眞面目な人間はある事はある。』

『夫れはねえ、貴方。』

『自分で死ぬ奴だけは眞面目だ。』

『マア……』婆やは主人公の言葉の意味が解つて驚いたやうな、解らなくて驚いたやうな曖昧な聲を出す。

『一生きて居る人は悉く不眞面目だ。生きて居るといふ事が既に不眞面目なのだ。』と云つて男は隱元豆を一つ挾んで、

『此樣な豆を煮るにしても、眞面目にやらうとすれば、天分を自覺する事、あの爺の如くでなければならない。天分を自覺した人間ほど眞面目なものはない、眞面目な人間ほど尊いものはない。』と箸の先の隱元を[illegible]動かした。

婆やは重々しく首肯いた、[illegible]ンプンをシンカク

した人間は幸いものだと思つたのだらう。男は一切顧着なく、自分に物を云つて居るやうに、

「此樣な豆を煮るのにも、最も尊い人間が必要なのだからなア。眞面目になつた日には豆を煮るにも容易ならざる覺悟を要する、而して容易な事業でない。釜が焼けて仕舞つたら斷じて再び煮ない位の覺悟がなければならない、寧ろ虎列拉病院の看護人となるともだ。今の人にはさういふ、確信がない、プライドがない。」と男は挾んだ豆を口元迄ボイと口に入れて、婆やの顔を見た。婆やは口をへの字形に曲げて主人公の顔を見て居た。

「然し自分で死ぬ奴だけは眞面目だ、今の世の中では何事も眞面目では出來ぬが、たゞ死ぬ事だけは眞面目でなければ出來ぬ。外の事は眞面目にやれば必ず失敗する、好い加減にやるので成就する。けれども其處が大事人間の尊い所で、何うしても好い加減では氣が濟まぬ事がある、又濟まされない場合がある。といつて、眞面目にやらうとしても世の中が許さない、で何うしても眞面目な事がやりたいとなれば、死ぬといふ事をやるより外に仕方がない。」

男の調子が俄に迫つて、長閑な流れの、狹い谷に掃かれて、巴まき、渦立ち、泡沫を空に高く散らすやうな、烈しい調子になつたと思ふと、何時しか元の緩い瀬に返つてハタと已んだ。

（二）

彈き已んだ琴の餘韻が、縹緲として靜かな床の間の山水の、谷から峯へとたゆたつて居る。ト女は半身を傍に外らして、席を滑らして、其處の大きい唐机の角に、輕く頰杖を突いて居る男の傍に進んだ。

男は徐かに身體を起して、美しい髭の先を摘んだ。色の白い、眉毛の濃い、口元の女性的な、けれども輪廓が、太い鋭い線で現されて居る一種強味のある男の顏を、かりそめに諦視めて居るやうな女の眼は、闇に大きい。其の瞳は更に大きい。何物にも怖れない力、何物をも征服する力、などが此の女にあらうとは思はれぬが、此女の瞳には、何物も怖くない、何物でも征服し得るといふ確信の光がある。夫れがたゞ瞳から發する光ならば、女のエキスプレッションは何物をもエキスプレッスして居るものでない。

「ピアノの方が好いわね。」と女は爪を收めた金梨地の小箱を掌に撫で廻す。男は葉卷莨の口をナイフで切りながら、

『ピアノは未だ新調されんですか。』

「え、兄が何うしても聽いてくれませんの。」

「相變らずね。」と男は莨に火を點けた。

「東洋の音樂は感情の節制で、西洋の音樂は感情のエキザゼレーションだから女には有害だつて。」

「有害は酷しい。」

「兄の說はね、女の墮落は感情の無節制から來るといふのですの。夫れでなくとも女の感情は節制を失ひ勝ちなのに、西洋音樂は、夫れでも未だ足りない足りないつて極端まで連れて行くのだから、墮落を强ひて居るやうなものだ。歇私的里患者の叫び聲に一種のメロディーがある、あれが西洋音樂だつて。隨分だわね、だから已れは西洋音樂に反對だつて、ホヽ。」

「反對は好い。音樂は議論ぢやない、反對も贊成もないぢやないか。」男は高く笑つて口に銜へた莨を落しかけた。

「眞實に兄は酷いのよ、私だつて人のやる事はやりたいわ、夫れでないと自分だけ何んだか獨りぼつちに取り殘されたやうで心細いぢやありませんか、夫れを兄は何のかのつて故障を云ひますのよ。」女は男に近く唐机に凭れかゝつた。

「狩野のドヽマと云つたら昔から有名なものだ

つたな。』と男は自分の肱に觸れるばかりに差し伸ばされた、女の藥指に輝く、蔦の葉を彫つた金指環の寶石に眼をやりながら、「所謂葛根エールの稱があつてね、エールといふから文明的の飲物かと思つて口に入れて見ると、葛根湯臭くつて飲まれないといふのです、皆其の葛根エールには惱まされたものです。』

『ホヽ、今も葛根エールね、眞實に葛根エールよ。』と女は面白さうに笑ふ。

『羽仁君當年の説によると、社會が全體として推移つて行くのは無意義だとかいふのだつけ、推移つて好ければ移る、推移つて惡ければ移らぬ、人間の力が其處まで行かなければ人間も畢竟物たるに過ぎぬ、物ならば自然の奴隷として盲動して居れば濟む、今の文明は人間を物として推移らしめて居る癖に、自然に反抗するやうな努力を人間に強ふる、矛盾だ、といふやうな事を盛に云つたものです。』

『今でもさうよ、二階の家が五十階になつて、馬車が自動車から飛行機になつた所で、人間其の物の價値が何れだけ増した譯でもない、月へ達く家を建てて、太陽まで飛んで行つた所で、何が何うなる事もない。全體今の人間は、何を目的として、何ういふ滿足を獲ようといふのだか殆ど譯が解らないつて、さう云ひますのよ。自分の方が餘程譯が解らないのですわね。』

『勿論書生の頃には誰れも一度はさういふ風な事を云ふ時代があるもんですがね、まあ學校でも離れて、世間へ出て少し許り揉まれると、大概は穩健な考へになる、大抵曲りくねつた針金も板と板との間に入れて轉がすと眞直になるやうなものですがね、羽仁君に至つては、何うしても昔の葛根エールの徳利を手放さないから不思議だ。僕等も其の點では確かに羽仁君に敬服して居る一人だが、然しさういふ風に敬服される側には廻りたくないものだ。』

男は笑つた、女も笑つた。

女の白い、細い指先は、何時しか夫れと觸れ合つて居た男のカフスの釦を摘つて居る。指環と揃ひの蔦の葉を彫刻した純金の釦で、其の指環と其の釦の蔦の蔓が、此の女と此の男とを一つにからけて、其の指環の裏に彫りつけた羅甸文字に間違なくば Interpres lauriere fontaine 溢るゝ泉から飲むの境に二人を投じて居る筈である。其の時、

『妙子。』と襖の外。

指環は釦から跳れ退いて、二人は眼を合せてクスと笑つた。女、

『兄樣、お客樣よ。』

『羽仁君。』と男も聲をかけた。

現れたのは羽仁君即ち額の男である。唐紙の此方側に超然と坐つて、

『屢來るやうだな、君は。』

『屢來ては惡いか。』と上遠野君は洋服の袖を引張つてカフスの釦を掩うた。夫れを額の男は睥目に見て、

『善惡の問題ぢやない。』

『何の問題だ。』

『アットラクションの問題だ。』

『人を馬鹿に……然し君も時にはナツな事をいふね。』と上遠野君は嬉しさうに女を顧みた。

『尤もアットラクションにも種類がある、エレクトリカル、アットラクションのやうに可なりの距離を隔てて猶存する奴と、モレキユラー、アットラクションのやうに無限小の距離に於て初めて存する奴とある。』

『僕等のはエレクトリカルの方かね。』

『君等のは無距離の間に存するアットラクションだ、無限小の距離があつてもモウ存在しないのだからな。』

『何故？』

「解らん男だな。妙子が産れる時君が死んだら何うだ、何も無からう。」

「馬鹿にして居る……解らん男とは君の事だ。土臺其樣な事を考へて何うしようといふのだ。」

「其樣な事ばかりは考へちや居らん。大抵其樣な性質のものだ。何うも我々には君の目的が解らん、君の努力の目的が。」

上遠野君は葉卷煙をパク〳〵と強く吸ふ。

「君等の努力が何んな立派な目的を持つて居る。」と林仁君は額を輝かした。

「僕等の努力は、努力其のものに價値がある。君は社會といふ團體的生活を何う考へて居るか知らんが、人間の本能——といつては狹いが、畢竟人間の一切の機能のノーマル、デベロープメントとでもいふかな、それが社會組織の原因で同時に目的ぢやないか。個人は社會のインテグラル、パートとして、其の努力が自ら社會の目的に適ふ時に初めて價値を認められるのだ。僕等の努力は即ち此の目的に合致して居るのだ、例へば、一個の細胞の働きが身體全體の目的に適つて居るやうなものだ。然るに所謂林仁流の努力は——若し之を努力といひ得べくんば——社會の目的と沒交渉な勝手な方面に發展する努力だ。或る細胞が特種的に發展して瘤になつて居るやうなものだ。之を要するに瘤だね。」と上遠野君は掌を丸くして目の上に加へた。

「假りに瘤とする。」と林仁君は、上遠野君のカフスを廻つて此方へ流れる莨の煙をやり過して、「然し瘤は、瘤自身が生じた現象ぢやない、瘤の生じた原因について瘤自身に責任はない。」

「責任は無いかも知らぬが、外科手術で切り取られて仕舞ふ事を免れぬ。」

「切り取られたら又出來る、原因を除去しないで、出來た瘤のみを切り取らうとするのが今の平凡醫者の仕事だ。」

「然し切り取られねばならぬといふのは瘤の光榮ではあるまい。切り取るべき瘤よりも、切り取るべからざる指の方が價値があるではないか。」

「瘤にも大事なのがある、夫れを切り取れば生命に關る瘤がある、指の五本や六本切り取つた所で生命に別條はない。指は決して生命を支配せぬ、瘤は時に生命を支配する。」

句切りの短い文句を途切れ〳〵にいふのが林仁君の癖である。

「希臘の生命は瘤であつた、希臘の滅びたのは其の瘤を切り取つた故であつた。佛蘭西革命は瘤の仕事だつた、當時の佛蘭西は指や腕を切り取つた上、頸まで落しさうな外科手術をやつたが、瘤が健全だつた爲に、佛蘭西其のものは平氣で生きて居た、愈々健全に發達した。瘤は生命と交渉がある、指は生命と沒交渉だ。」

自づと上遠野君の側に立つて、無言の應援に努めて居た妙子は、愛に至つて主人に仲裁の茶を薦めた。上遠野君は忌々しさうに其の茶を啜つて、

「夫れでも瘤は瘤だ、身體の必要機關ではない。我等は指に甘んずる、瘤でなくして健全なる指たる光榮を感ずる。」

「腕の關節が腐つて居ては指は間道にもならぬ。」と林仁君は憐む如く、「手足の腐つて居る奴に瘤を論ずる資格はあるまい。」

「では兄樣は何うしても瘤なのね。」と妙子は菓子器の蓋を滑らして上遠野君の前へ押しやつた。上遠野君はボン〳〵を一つ取つて口に入れた。

「瘤かも知れんなア。」と林仁君は、菓子器から上遠野君の口へ行くボン〳〵を目送した。

「自分で瘤と定めてよ。」と妙子は上遠野君が瘤を見て竊むやうに笑つた。

上遠野君は默つてボン〳〵を舌の先で轉がし

て居る。

『瘤の自覺は何んなものでせう。』と妙子は上遠野君に云ふやうに、『瘤が自分の瘤といふ事を自覺したら隨分忌なものでせうね、自分の存在を自分で否定しなくちやならない事になるわね。』

『さうだ。』と上遠野君は急いでボン／＼を噛み碎いて仕舞つて、『だから狩仁君はネゲショニストなのだ、總般的否定家なのだ。君のアンチソシアルの態度は其處から出て居るのだ。自分のアブノーマルを自覺するから先づ自分を否定する、自分を否定すれば、一切の存在を肯定する必要が無くなる。鼻のない奴は一切の鼻の存在を認める必要がない、從つて總ての鼻を否定する、世間の人の鼻を持つて居るのが癪に障る。』

『酷いわね。』と上遠野君を睨む妙子の眼には同意の色がひらめいて居る。

『僕は否定はせん、眞の存在の價値は十分に認めて居る。夫れだけ無價値の存在を否定せざるを得ないのだ。自分に鼻がなくて人の鼻を憎むのではない、鼻の重大なる事を認めるから、世間の人の鼻を鼻とは認めないのだ。』

『瘤が指を否定するのだ。』と上遠野君は茶を飲んで、『指は夫れ自身滿足して居るから餘計な方面に關係する事はしないが、瘤は夫れ自身不滿足だから、他の滿足をも破壞しようとする。君は自分の不滿足を以て總般の不滿足たらしめなければ已まんのだ。困つた男だ。』

『ハッハ。』と狩仁君は笑つた。

『兄様は自分では十分滿足して居るんですつて。』と妙子は兄の笑聲に脚註を加へた。

『狩仁君が滿足して居るつて、これは驚いた。』と上遠野君は大いに笑つた。セロのやうな低音で、折々咽喉を吹く時に一種の鈍音を發する特徴のある笑ひ方だ。

妙子も蔦の指環を唇に當てたが、笑ふのではなくて、ムッと口を閉ぢて、あぢきない、恨めしい眼附で、竊に兄の顏を見るのである。

妙子には兄の滿足ほど、あぢきないものはない、恨めしいものはない。といふのは、妙子の朋友にも丁度家の兄様と同じ年輩の兄を持つて居るものが澤山ある、而して其の兄等は夫々社會に立つて、公私の人として働いて居る。一寸算へて見ても、外交官として倫敦に居るのが一人、獨逸に留學して居るのが一人、大學の助教授が一人、參事官と地方事務官が各一人、會社の重役が一人、此處に居る上遠野君は兄とは小兒のうちからの知合だが、歳は兄より三つ下で、昔は何事も兄の下だつたのが、今では一廉の實業家として屢々新聞などに唱はれるやうになつた。妙子の知つて居る、兄位の年輩の人で、家の兄様のやうに何を爲るのか爲て居るのか譯の解らない人は一人もない。大學を中途で已めて、一遍銀行に入つた事があつたさうで、其の後何かで朝鮮に行つた事もあつた、學校の教員になつた事もあつたやうだとばかり、家に多少の財産があつて、恥しからぬ生活をして居られるのを幸ひ、ぶら／＼して居るやうなので、妙子も餘り取り止めた事の無さ過ぎるを、何となく腑甲斐なく感ずる。考へて見れば兄様もあんまりだ。外の友達が、兄の身分を笠に着て、花々しく交際社會に出入するのが、強ちに羨ましい譯ではないか、財産から云へば敢て敗を取る程でもないのに、たゞ兄に社會上の地位や身分がない爲に、其樣な仲に交つても何となく肩身が狹く、自然氣怯れがして、引込勝ちの生活をせねばならぬかと思へば、口惜しいやうでもあり情ないやうでもある。さりとて打ちつけに兄に云へる事でもないから、獨りでヤキモキして、時には、濟まないけれども、兄様もあんまり腑甲斐ない、私が男なら、と唇を噛む事もある。

夫れだのに、兄自身は大に滿足して居るといふ。何といふ情ない滿足たらう、何といふ恨め

し、満足たらう
「満足といふ言葉の革命だ、困つた満足たなア。」と上遠野君は更に大に笑つたが、妙子は可笑しくも何とも無かつた。
上遠野君は勝ち誇つたやうに、
「君の満足は要するに卑い意味――イヤ寧ろ古い意味の知足安分主義だ。満足は機能の目的が充實された時に來る、機能の目的は活動によつて充實される、即ち満足は活動の裡に求むべきものだ。満足と活動との關係は、丁度經濟上に於ける資本と勞働との關係に同じだ。勞働かなければ資本もない、活動もせずに何うして満足が得られよう、活動もせずに満足し得らるる人間ばかりだつたら世の中は滅亡して仕舞ふ。君のは寂滅的の満足だ。」
「活動は満足ではない、勞働は資本ではない。」と妙子の顔には聊か癪さうな色を染めた。
「夫れは知れた事だ、親は子でない、けれども親のなければ子もあるまい。
活動は満足の親ではない、資本は勞働の子ではない、
怪しからん! 君は詭辯家だ。」
社會がソフィストケートされて居るのだ。見給へ、活動には常に不満足が伴つて居る、勞働には必ず貧乏が伴ふ。社會其の物が詭辯家なのだ。」
「夫れで君は活動を否定するのか。」
「否定はせん。僕の満足とは沒交渉だといふのだ。君の満足は活動から來るかも知れぬが、僕の満足は所謂壺中の天だ、其の境に在つては満足夫れ自體を世界とする、何の結果、何の原因たるを知らんのだ。活動の結果かも知れぬ、無活動の結果かも知れぬ、富貴の結果かも知れぬ、貧乏の結果かも知れぬ。原因とか結果とかいふものに僕の満足を規定しては居らぬのだ。」
「夫れなら君は、人間が若し阿片を飲んだ場合のやうに或る満足の心理狀態に入れば、それも亦一種の満足として立派なモーラルアクションと認めるのだね。」
「妄想は満足では無い。僕のは健全の心理狀態だ。たゞ活動とか進歩とか努力とか野心とか慾望とかいふものを離れて存在し得る――寧ろ離れた所に存在するといふのだ。世間には金を貯めるとか、名譽を博するとかいふ事自身を満足として居るものもある。僕の満足はさういふ葛藤を離れた所に在る。朝に道を聴いて夕に死すとも……」
「ハヽヽヽ、そろ／＼論語エールが出るぞ、而もヒネ臭い奴かつ」と上遠野君に例のセロを揆いたやうな笑聲を發した。
妙子は俯向いて居る。林仁君は廣い膈を前に突出して、
「孔子が弟子共に其の志を言はしめた時に、多くは君等の流義で、政治家になるの學者になるのと云つた。獨り莫春には春服既に成る、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し舞雩に風し、詠じて而して歸らんと答へたのは曾點だつた。孔子は喟然として、我れは點に與さんと嘆じたではないか。孔子の時代は腐敗して居た、孔子は失意の人だつた、然し孔子をして、如何に立派な時代、如何に得意の境に居らしめた所で、其の満足は矢張其處に在つたらうと思ふ。」
林仁君の聲は顫へて居る。
「妙子。」と林仁君は沈んだ聲で呼んだ。
妙子は默つて顔を擧げた。兄の額は赤く輝いて、其の瞳は晴く濕んで居た。
「私はさう思ふのだ。」と林仁君は重くるしい調子で、「けれどもこれは私一個の考へだ、必ずしも夫れを人に强ひようとは思はぬ。然し内に在れば自然外に現れる。お前などにも定めし迷惑な事が多かつたらう。又兄が意氣地なしの爲に肩身の狭い思ひもせねばなるまい。何うも仕

方がない。」羽仁君は、妙子の廂髪を凝と見て微笑んで、『斯んな兄を持つたのが妙子の不運なのだ。』

「其様な事兄さん。」とかすれ聲で慌てて打消した妙子の言葉に僞はない。妙子は兄と相對する時、兄の額が赤くなつて、瞳が暗くなるのを見ると、何故か知らぬが、何時も〳〵、あゝ兄樣の事を兎や角思ふのは眞實に濟まない、モウ〳〵忘れてもあんな濟まない事は考へますまい、と胸の底から後悔がこみ上げて來る。

今も兄の額を見上げて、同じ思ひに打たれて居る刹那、更に優しい言葉を聽かされたので、堪らなく胸が迫つて、「其様なこと兄樣。」といふのがやつとで、大きい眼を瞬くと、横を向く暇もなく、ハラ〳〵と唐机の端に露を散らした。

上遠野君は悵然として、ボン〳〵を又一つ口に入れた。

暫時談話が途切れた。羽仁君は天井を仰いで居る、妙子は自分の膝を觀て居る、上遠野君のボン〳〵を噛む音がカリゝと聽えた。

『あゝ忘れて居た、件理學士から端書が來て居たつけ。』と上遠野君はポッケットから繪端書を出して二人の眞中に置いた。

『ラチュームの寫眞だ、蟇口の錢が透き通つて寫つて居る所は、流石アメリカだ。此處の文句が振つて居る。』と上遠野君は端書を取つて、ペンで書いた細い文字を讀み上げる。

『總ての物が原子に歸つても、尙之れを千分するを得べし、原子を千分して電子に達すとすれば、電子を千分して或る物に達すべし、其の或る物を更に千分して何物にか達すべし、斯くて千萬分億兆分しても終に分つべからざる或る物を求め得たりとすれば、夫れに歸つた人間が即ち羽仁の兄キに候。」といふのだ。人間が面倒「解らない行き止り」といふ謎だ。だけに謎も中々廻り煩い。』

三人は笑つた。

～～～～～～～～～～

件理學士といふのは羽仁君の朋友で米國留學中の男である。羽仁君と此の男との關係は、雪の降る寒い朝、東京大學の文科の前の植込の裡で始まつた。

其の朝、羽仁君は所用あつて法科の事務室に入つて行くと、書記の一人が頗る重大な顏附をして、其處に立つて居る一人の生徒の顏を眺めて居た。

「何うも已むを得ません。」と其の生徒は、胸の邊に捧げて居た揉みくちやの角帽を、グシャと胸に押し闢けた。書記は其の生徒から受取つたらしい書面を讀みながら、夫れは何うもと云つた時、其の生徒けもう踵を廻して、後に立つた羽仁君と肩を觸れ合つて、重い扉の蔭に消えて仕舞つた。

羽仁君は其の男を知つて居た。否恐らく同級の生徒で其の男を知らぬものはあるまい、苟くも法科の一年生で、此の寒い寒の中にも決して羽織を着ず、縞目も分らぬやうな古布子に、裾の裂けた、名譽の聯隊旗と他の生徒が惡口を云つた戰功のありさうな古袴を穿いて、日の當つて居る時は何時も三十番教室の煉瓦に背中を押し附けて、ポカンとして鐘の鳴るのを待つて居る男の存在を無視するものはあるまい。而も誰れも此の男と口をきいて居るもののあるのを見たことはない。其の癖呢近の薄い一年生の間に早くも此の男の評判が擴まつて、某辯護士の食客で、或る小新聞の運動記事を擔任して學費を獲ながら苦學をして居る男だといふ事は、殆ど知らぬものはない。羽仁君も其の締閑内に於いて此の男を知つて居る。此の男が今、書記に居つた事について、少からず好奇心を起しかけて居ると、先の書記は、

「學費がないと明ら樣にいふものは一寸少い。」と云ひながら、隣席の書記に疊んだ書面を渡すと、之は、

『氣の毒な。』と附け加へた。

羽仁君が西の小口から出て正門の方へ斜めに松の植込を拔けて雪の中を進んで行くと、雪を避けて前に傾けた洋傘の下から、二三間先を、養の聯隊旗の古袴の裾が、慘たらしく雪風に煽られて居るのが見える。

羽仁君は暫く其の裾を眺めながら進んだが、[illegible]て傾けた洋傘を上げて、

『作君。』と後から聲をかけた。此の男の作進といふ二字名なる事も、煉瓦壁の前なる此の男の姿を眼にしたものの間に知れ渡つてゐる。

『君は學校を退めるんぢやないですか。』

『否、』と作君は水洟をすゝつて、不審さうに羽仁君の姿を眺めた。

『退めるんぢやないのですか。』と羽仁君は同じ事を云つて居る。

『退めるといふ譯でもないですか……』と作君は自分の雨傘を見上げた。言ふ迄もなく黑く煤けて、所々の穴から自由に雪風が往來して居る。

羽仁君は低に餘計な事を聽いたと思つた、何う結局をつけて好いか解らぬ事業に着手して仕舞つたやうな氣がして、一寸次の句が續けぬ。

『けれども矢張退めるのでせうな。』と作君は苦笑した。

『退めるのですか。』と羽仁君は助けられたやうな心地がする。

『理科へ轉じたいと思つて居るのです。』

『理科へ？』

『然し夫れが六ケしいから結局退める事になりませう。』

『法科には居らんですか。』

『法科へは已むを得ず入つたのです。モウ忘になつたから、理科へ行けなければ退めた方が好い。』と作君は獨言のやうに云ふ。

二人は正門を出て、泥濘の往來を横切つて森川町に入つた。二人とも何處へ歸ると聽くでもなく、羽仁君は左側を、作君は右側を、掛け離れて歩いて居る。

羽仁君は横町を二三度曲つた。作君も同じ横町を曲る。羽仁君が自分の下宿の前に來た時、右側を見ると其處を作君は矢張澄まして歩いて居た。羽仁君は多少の勞力を費した末、作君を自分の下宿に引入れた。

作君は羽仁君の下宿の二階に連れ込まれて、其處から肱掛窓の硝子越しに、木立の多い西片町の谷の雪景色を見下ろした。

『これは好い。』と硝子に鼻をつけると、硝子が息でボーと曇る。作君は不得要領の顏を振りむけて、

『あんな講義を聽きに行くより、此處に坐つて居た方が好い。』と呟いた。

二人の話は法學のつまらないと云ふ事から始まつた。羽仁君は、案外つまらない、といふ。作君は、案の條つまらない、といふ。作君は今日學校で、權利は主格なくして存在するや否やといふ件を、イエーリングか何うの、ウヰンドシャイドか斯うのと二時間も饒舌つた教師を、氣の毒なものだと云つて、此の廣大な宇宙に住つては、現に我等の目に觸れて居るものだけでも説明し盡す迄には何千萬年かゝるか解らないのに、有りもせぬものまで說明しようとして居る。巢鴨病院に行つた時、友達の醫學士が、近に遊んで居た一塊の患者を見せて、これだけの患者も一々研究すると中々骨が折れると云つて居ると、其のうちに醫師で精神病になつた奴があつて、壁に向つて、居りもせぬ奴を叱りと診察して居た。法學者は其の患者見たやうなものだ、と笑つた。羽仁君は、夫れは少し酷

見たと思つて、

「法律學の對象は矢張現實の社會現象なのだから、無いものの說明とは違ふ。」

「さうです、芋は、作る奴もあり、煮る奴もあり、喰ふ奴もある。芋を作るのでも、煮るのでも、食ふのでもなく、たゞ轉がして居るのが法律學者だ。芋は無いものぢやあるまいか。」と伴君は嗤いた。

「すると哲學者なども、芋を轉がして居る連中ですか。」

「哲學者は芋を分析して居るのです。たゞ分析は科學の力を借りなきやならぬのに、科學の進まぬ時代に、たゞ肉眼や舌の先で分析して居たのだから、辛いとか甘いとか固いとか柔かいとかといふ水掛論に終つたのです。昔の人間は眞理に達するには考へるより外に仕事が無かつたが、今では考へるよりも見る方の仕事が多くなつた、見る方が肝要になつたのです。まだ／＼人間は見る時代です、考へる時代は未だ容易には來まい。」

「然し獸の眼も見る、人間の眼も見る、人間がたゞ獸のやうに見るのみでは仕方がない。」と狩仁君は故障を入れた。

「さうです、哲學者は見ないで考へたがるのです、科學者に見て貰つて居るのです。さういふ哲學者と科學者は思想界の進步に與かる事は出來ません。ヘッケルも云つて居つたです、現代科學の成果は、例へば細胞說にしろ、進化論にしろ、實の哲學的成果であるか、而も夫れは單に冥想から得られたのでなくして、廣く深い實驗の結果だと。要するに哲學者が總て、科學者が考へなければいけない、法律學者などは下駄の商人のやうな者だ。下駄を穿く者がある以上は必要に違ひない、從つて大に商人を思案研究するも好からう。僕は忌だ。」

狩仁君は伴君を一種の雄辯家だと思つた。狩仁君は元來談話好きだが、何方かと云へば口の重い方で、言葉と言葉の間に空があつて、往々聯絡のないことをいふ。伴君は一つ說き出すと、滔々と言葉が續いて、一氣に終まで言ひ切つて仕舞ふ、其の代り相手が語り終つて自分の番になつても一寸口を開かずに考へて居る。其の風采から推して伴君が此の明晰な聲と淀みのない言葉を持つて居ようとは、狩仁君も意外に思つた。今日偶然此の人を自分の下宿に連れ込んだのは、大した拾ひ物をしたやうな氣もした。

で談話は間斷なく續けられたが、終に伴君の專門問題には及ばなかつた。さういふ實際問題に入るには、二人共餘り多くの理想世界を持つて居たのである。然し伴君が實際上の事を出す[illegible]狩仁君の保護の下に[illegible]する事になつたのは、此の日の偶然の會見に起因したのである。斷じて伴君は狩仁君から學費の支給を受くるに至つたのだが、夫れは伴君の權利としてであつた。

「富が個人に專屬するのは偶然の出來事だ」と何かの議論の流れから狩仁君は伴君に云つた、「社會や法律が富の個人に專屬するのを認めて居るのは、現狀維持に過ぎない、現狀維持も政治上では平和といひ、社會上では秩序といふティラニーの下に、專制政治の下に、一種の權威を存して居るから、若し現狀を破壞しようとすれば、其暴主の怒りに觸れぬ範圍でやる必要がある。又其の範圍內でも、經濟上に行はれる重力の法則を考へて、ちやんと馬鹿を見る。僕の鄕里の或る地主の跡繼息子が社會主義を聽き嚙つて、自分の土地を小作人に分配してやつたは、大に殊勝だつたが、程なく其の小作人にやつた土地は、皆近所の大地主に吸集されて仕舞つた。現狀維持に反對するものは、大抵こんな馬鹿を見る。然し馬鹿を見ない範圍に於いて反對するのは寧ろ吾人の義務だ、權利だ。例へ

へは僕が學費を節約して無暗と人に分けてやることは惡だが……』と云つて來て羽仁君は急に調子を更へて、『あゝ君に相談がある。君……僕が學費を補助するから怎な辯護士の家を出て理科へ轉じて仕舞ひ給へ。』

伴君は不意を喰つて茫然して居る。

『さうし給へ、之も馬鹿を見ない範圍で現狀を打ち壞すのだ……』

熱心に說き出した羽仁君の言葉を抑へて、伴君は、無意義に人から學費の支給を受けるのは快くないと謝絕した。羽仁君は、

『僕の家に多少の財產が專屬して居るのは矢張偶然の出來事に過ぎない。人は富を利用すべき權利がある、偶然に自分に專屬した富すら利用の權利がある、正當の理由で他人の富を利用するのは立派な權利だ。之を利用せしむるは僕の義務で、之を利用するのは君の權利だ。』

伴君が謝絕すればする程、羽仁君の議論は複雜になつて、こぐらかつて、何が何やら解らなくなる。同時に伴君の謝絕は愈頑然となる。

此の日はたうとう物別れになつた。

其の後羽仁君は折さへあれば、自分の義務、伴君の權利を繰返す。伴君も亦頑强に現狀維持を主張し、其のまゝ終に半年餘りを經過して仕舞つた。

折柄羽仁君の父が老死した。羽仁君は後事を整理して再び出京した時、直に伴君を捉へて、

『君が保留して居た權利を實行すべき時機が來た。』と云つた。

伴君は依然として聽かない。

『可矣、夫れなら僕も父の財產を繼承する事を已めよう。』と云つた羽仁君の言葉は、伴君の耳には直に事實となつて現るべき聲の如く響いた。

『僕の財產の極めて僅な一部が、正當の理由で君に歸するのが無意義なら、父が死んだといふ偶然の出來事から、其の財產が僕に歸するのは一層無意義な事だ。』と羽仁君は絕望した人のやうに嘆息した。

夫れから一月程經つて、伴君は理科に轉じて、同時に羽仁君の下宿に移つた。が羽仁君は夫れと共に大學を退めて仕舞つた。

其の際羽仁君は上遠野君を相手に激烈な議論を鬪はした。結論が未だ遙か遠くにあるうち、二人はモウ論じ疲れて互に赤い顏を見合せた。其の時席に居つた羽仁君の同鄕人の青海といふピアニストは初めて口を開いて、

『各自の意見には夫れ〳〵理窟がある。其のうちで羽仁の學校を退めるといふ理由が一番不得要領だ。元來退めるに理由なんぞは要るものぢやない。僕が音樂をやるにも理由などはない、況んや法律なんぞ、夫れもやるのなら格別、已めるに理由も絲瓜も要るものか。死にたいから死ぬといふ奴を、他から不承知を唱へて生かして置いた所で何うなるものか。尤もリンコーンなどは死にたい病の人で、剃刀を見ると咽喉へ持つて行きたくなるといふので、身の廻りに刃物などを置かぬ位に要心して無理に生きて居たが、十分役に立つ人になつた。けれども夫れは生命の話だ。學校などはソンナ苦しい思ひをしてまで入つて居なければならぬ所ではない。生命と學校とは少し違ふ。』

上遠野君は勃然として、

『リンコーンが何故無理に生きて居た、義務の意識があるからではないか。やりたくない事がやれないやうな意志の弱い人間は生存の權利がないッ。』

『やり度くない事をやらねば生存の權利とやらが貰へぬといふなら、ソンナ物は貰ひたくない。』と音樂家は笑つた。

『君は義務の自覺がないのだ。』

「僕の義務は、やりたい事をやるといふ義務だ、中々重大な義務で容易に履行は出來ぬ。やり度くない事までは手が廻るまいぢやないか、羽仁も大方さうなんだらう。」

『其の邊だらう。』と羽仁君は苦笑した。

終に羽仁君は學校を退めて仕舞つて、郷里から妹を呼び寄せて東京に家を構へた。伴君は理學士になつて、一年程大學の助手をやつて、米國に留學する事になつたが、羽仁君の補助に待てるはいふ迄もない。

此の伴君には兩親も身寄もない、たゞ一人の妹があつて、留學の際、之を羽仁君に託して行つた。

〰〰〰〰〰〰〰〰

伴君の繪はがきを摑みながら上遠野君は、『今日は小夜子が見えないね。』と云つた。其の小夜子は卽ち伴理學士の妹である。

（三）

大に笑つて上遠野君は妙子の室を出て、硝子戸を閉め切つた廊下傳ひに、明け放された羽仁君の書齋に入つた。

上遠野君は此の室に入る度に、羽仁の廣い額ほど厄介な額はないと思ふ。十二疊の座敷の、床の間といはず、壁際と云はず、一間口の襖を殘して、天井まで一杯の硝子張の本箱が隙間なく列んで、座敷の眞中には高い書棚が何筒も列んで居る。上遠野君が羽仁君の努力の目的が解らないといふのは、此の書齋の內容から割出した計算であつた。上遠野君は殊更內容を檢査した譯ではないが、青羅紗を張つたデスクの上に出て居る書物を、時々手に取つて見ると、歷史や哲學や政治經濟に關する書物の外に、『エチュード、アントロポメトリク、ス、ル、プロスチチューエ』、娼婦の身體測定研究なんて譯の解らぬものがあつたり、『液體運動の數理』とか『エナージーのエレクトリカル、トランスミッション』などといふ本があつたりする、上遠野君には此等の本の解る解らないは別として、其樣な本の此處に在る事が解らない。

で今入つて來た上遠野君は、暫く端の方の本箱を見廻して『鑛業家必携』といふ本を取り出してから、尙其處らを見廻つて歩いて『貧窮論』といふ英書を引出して、安樂椅子に凭れ込んで、先づ『貧窮論』を取つて手當り次第に開かつた所を見る。

『數年前の寒氣凜烈なる冬の朝なりき、余はクックカウンティー戶外救濟局の前に、何れも憐なる服裝を爲し飢餓に迫れる如き顏色にて寒氣に慄へながら、列を爲して立ち並びたる男女の一群を見たり。彼等は手に手に施物を入るべき袋若くは籠の類を携へ居れり、是れ皆市俄高市の貧民窟其の他より集まり來れる窮民に外ならず。或るものは恥かしげに沈默し氣臆れの色を示し居れど、或るものは哀訴し、嘲罵し、犇き合へり。されど中には風采端然として紳士らしき自尊心を失ひ居らざるも見ゆ。其の光景恰も珠數繋ぎの囚人を見るが如し。此等の人々はたゞ貧困といふ罪を犯せるのみにて徧く屈辱の下に曝され居るなり。感じ易く、又尊敬すべき貧民をも一列に斯る慘憺たる待遇の下に包括する墮落的勢力に關しては殊に指摘するの要なからん。斯る救濟制度の一日も早く排棄せらるべきは心ある者の一致する所なるも、現在に於ては彼等を斯くの如き公然の恥辱の下に曝す外何等救濟の方法も講ぜらるゝ事なし、此墮落獎勵的の待遇は彼等の自尊心を破壞し、不幸なる貧民をして益々無恥の底に投ずるに終る、是れ慈善にあらずして亂暴なり。』

上遠野君は變な顏をして、本を閉ぢようとし

て、更に外の頁を拾ひ讀みをする。

『野蠻人の中には、自己が其の種族の重荷と爲れるを知れる時には、自ら墓穴を掘り、血族と訣別の宴を張り、其の父の爲したる如くを爲して自ら死に行くの風あるものあり、老蜂の新蜂の爲に巣を去るに類す。是れ食物の乏しき時代に於ては種族保存の上より見て須要にして尊ぶべき行動なりしも、富み且開化せる人民には全く斷る行動を採るの要なかるべき筈なり。而も今日の米國に於ては多數の頽齢者——のみならず不具者、癈病者、結核患者等は饑ゑ凍えたる乞食として道路に棄てられつゝあるなり。』

上遠野君は不興な顔をしてハタと本を閉ぢて仕舞つた。其の時襖の外で、

『兄さま。』と可愛らしい女の兒の聲。

『小夜子さん。』と上遠野君は聲をかけた。

『上遠野の兄樣だつたのね。』

襖が細く開いて、小夜子の眞白な顔と、眞赤な被布の襟が目に立つ。

ピアニストの青海君は小夜子の顔を伊太利趣味と評した。歐羅巴婦人の顔は、顴骨や顎骨の角度も、筋肉の波動も、餘り鋭くつて、自然輪郭が鋭い感じを與へるが、伊太利の女は其の角度も波動も緩和されて穩かな感じを與へる、といつて日本の所謂丸ポチャのやうに徒らに肉感的の丸みを持つたのではなく、寧ろ歌麿の型のやうな維新前の江戸趣味に近くつて今少し角度の鋭いのだ。小夜子の顔は夫れである、而して色が白くて鼻骨が發達して眼が澄んで、瞳に稍碧い光がある。物を言ふとき、唇を押しつけるやうに結んで、口の兩端が心持下がるやうになる、何うしても西洋式だ、とは青海君の説で、上遠野君は子供の癖に何んだか高慢な顔だと云つた。小夜子は十三歳である。

『上遠野の兄さんでは可けなかつたかね。』と上遠野君は澄まして居る。

『さうぢや無いのよ。』と小夜子は小さい籠を下げて入つて來て、上遠野君の椅子に取りついて、籠の中の嫁菜を自慢さうに見せて、『こんなに摘んだのよ。羽仁の兄さんは？』

『兄樣は妙子さんの御部屋だ。小夜子は何處へ行つたかつて、兄さん大變心配して居たよ、今朝起きたらもう居なかつた、屹度亞米利加へでも行つて仕舞つたに違ひないつて。』

『嘘。』と小夜子は少し顔を赤くして、『裏の堤で里と二人で摘草して居たんぢやありませんか。』

『嘘ぢやない、今朝兄さんは御飯を半分しか食べなかつたつて、婆やが心配して居た。』

『あら……』と小夜子は半信半疑の眸を向けて、『眞實？』

『眞實さ。兄さん青くなつて居たよ。』

『譃でせう、兄さん青くなんかなりやしないわ。』

『間違つた、赤くなつたのだ。』

『まあ譃々。』と小夜子は漸と安心したやうに、『私、忌、上遠野さんは、何時でもあんな事云つて私を威嚇すんですもの、大嫌ひ。』

『上遠野さんは大嫌ひで、羽仁の兄さんは大好きかね。』

『いゝわ。』と椅子を離れて逃げかける小夜子の肩に手をかけて、上遠野君は、

『まあ左樣嫌はんでも好からう。』と抱き寄せようとする。

『嫌よ。』

『羽仁の兄さんに何時でも抱かつてる癖に。』

『知らないわ。』と小夜子は白い頬を少し赤くして、振り拖つて行きかけると、脊の高い小間使の里が入つて來て、繪端書をデスクの上に置いて行つた。

上遠野君は手に取つて、

「亞米利加の兄樣から來たのだ。』

『アラさう。』と小夜子は嬉しさうに、上遠野君の手先に縋り付いて覗き込む。

雲雀の聲の聽えさうな長閑な廣野の高い空に二の字を書いたやうな飛行機が小さく浮んで居る、其の間に例の細い文字が入つて居る。

「不風流のエーロプレーンも斯うなると又春野の一風情なり。ほのかに聽く、上遠野男爵は曩頃の動亂に乘じて一氣に飛び上れりと。飛行機も進化さるゝ事あり、知らず飛び上りの株屋は如何。」

上遠野君は端書を見詰めて苦笑した。小夜子は、

「こんな凧があるの？」

『これは飛行機といつてね、人が乘つて飛んで居るのだ。」

『まあ好いわね、私兄樣にお願して此の端書頂戴しようや。」

『これよりモット好いのがある。」と上遠野君は隱袋から嚢の繪端書を出して、小夜子に見せながら、「ホラ蟇口の中の銀貨と小さい鍵が透き通つて見えて居るだらう、ラヂニームといふ光る石に照らして見ると斯う透き通つて見えるのだ。これを上げよう。』

「奇體だわね。戴いても好いの？」

「好いとも。其の代りこれは私が貰ふ。」と上遠野君は飛行機の寫眞を[illegible]袋に入れて仕舞つた。

「兄さんに御覽に入れないの？」と小夜子は上遠野君を見た。

「兄さんは飛行機は大嫌ひだ。」と上遠野君は高く笑つた。

小夜子は仕方なささうに笑つて、

『兄樣は姉樣の御部屋ね。」と大事さうに嫁菜の籠を下げて、廊下傳ひに其方へ行く。

上遠野君は立ち上つて、「窮論」を元の所に收めようとして硝子戸をあけてから、未練らしく更にパラ〱と開けて見て一寸讀んだ。

「文明人は、野蠻人が其の老者を藪に棄てて餓死せしむるを了解すべからざる蠻行なりと云はん、而も野蠻人は、所謂文明人の、己れは奢侈を競ひつゝ、其の隣人及び同胞を道路に棄てて窮死せしむる行爲の殘忍なる事を、能く了解し居れり。」

上遠野君は額を擧げて、硝子に寫つて居る自分の苦い顏を見た。本を閉ぢて其の背を見ると、ロバート、ハンターとある、米國の富豪で社會主義の人だと聽いた事のあるのを思ひ出した。思ひ出したばかりで上遠野君は、其の本を元に收めて、「實業家必携」を小脇に挾んで出て行つて仕舞つた。

（四）

日の射した縁側に、安樂椅子に凭れてウトウトとして居た羽仁君は、額の上に物の氣勢がしたやうに感じて、眼を覺ました。

「ホヽ、お眼覺め？」と低いけれど爽かな、一種際立つた女の聲が耳元に響いて、プンと床しい香が輕く鼻を打つ。

羽仁君は再び眼を瞑つて、

「富佐子。」と夢の續のやうな聲を出した。

鼠の霜降の上衣に黑の袴の、質素な洋裝の女は、安樂椅子の枕に寢かした羽仁君の後頭部に胸が觸れさうに立つて居る。

血色の佳い、眉の張つた、生々とした眼附の、頰の豐かな、口のやゝ大きい、輪郭が極めて鮮明で、一切の機關が悉く要領を得て居る女の顏と、其の一呎許り下に在る羽仁君の不得要領な顏との對照は確に注目を値する。殊に其の女の眼は妙子の眼より大きくはないが、效果に於ては遙か著しい。妙子の眼はあらゆるものを屈服せしめようとして居るが、此の女の眼はあらゆるものを醉はせようとして居る、パッと

開いて凝と見ると、あらゆるものが其の瞳の裡に溶け込む。羽仁君が額の男なら、此の女は瞳の女である。而して今まさに羽仁君の額が其の瞳の裡に溶け込みつゝある。

瞳の富佐子はピアニスト青海君の細君の身寄で、可なり富有な家に產れたが、早く兩親を喪くして、青海、羽仁の兩家で育てられて、娘盛を單身獨逸に留學したといふ女である。歸朝後官立學校の體操教師になつたが、外人の催の演奏會で、裸體同樣の上に紗の衣服を着て、クレオパトラのダンスを踊つたので物議を生じて、今に私立學校に轉じて仕舞つたといふ女である。去る富豪から結婚の申込を受けて、拳闘をやつて敗けたら承諾しようと返事をした女である。羽仁君の獨逸語を習つた女である。

『ジンド、ジー、シューレフリヒ?』お睡くつて、と獨逸語で云つて、羽仁君の廣い額に脣をつけさうに俯向いて、兩の頰に笑を含んでクッと鼻を鳴らした。

『煩い女だ。』羽仁君は眼を開けて斜めに女の顏を見て眉を顰せた。女は反り返つて、

『此の好いお天氣に硝子戸を閉て切つて、居睡りなんぞして……』

『夫れなら開けてくれ給へ。』

富佐子は輕快な態度で、硝子戸を殘らず明け放して、

『モウ櫻が彼樣なに膨らんでよ。貴下でも矢張春が來たやうな感じがして?』

『君は感じるか。』羽仁君は此の女を君といふ、此の女の代名詞は、一人稱では僕、二人稱では君だと、義兄の青海君は云つた。

『僕は感じません。』女自身も青海說を採用した一人であるが、此の使用法は羽仁君と相對した時、而も只二人きりの時に限る。

『譃を云へ。』

『譃ぢやないわ、年中春なの、僕は。忘れねばこそ思ひ出さず候なの。』

『何ういふ春だ。』

『當てて御覽なさい。』

『花の咲く春でも、鳥の鳴く春でもなささうだな。』

『花も咲かず、鳥も鳴かない春があつて?』

『精神病は春が一番多い――といふ春だ。』

『マア! 好いわ。』富佐子は羽仁君の椅子をグイと強く搖つて、ぐるりと身體を廻して、投げたやうにデスクの前の廻轉椅子に倚り掛つた。

羽仁君は立ち上つて、外を眺めた、生垣に沿うて列んだ櫻の蕾が、今にもハチ切れさうに膨らんで居る。

羽仁君は何時迄も空を眺めて居る、富佐子は何時までも羽仁君の横顏を眺めて居る。羽仁君が向き直ると、富佐子も目を外らした。

富佐子は小さい銀の鉛筆で、其處の紙片に何か樂書を始める。羽仁君が傍へ來ると、富佐子は掌を其の上に伏せて、凝と羽仁君の顏を視た。

『何を隱す。』

押へた掌に其の紙片を採み込みながら、富佐子はニッと笑つて、

『私にも祕密はあるわ。』

富佐子は確に『私』と云つた。

『青海の說によると、女の祕密はヴェールのやうなものだ、何かを隱すのではなくして美しく見せる爲だといふが、富佐子の祕密もヴェールかな。』

『僕の祕密は……』と富佐子は仰々しく仰向いて、斜に羽仁君の顏を見る。

『マイ、ピース、イズ、ゴーンといふマルガレットの祕密だらう。』

富佐子は突然、立ち上つて羽仁君の肩を突く。羽仁君が素早く體を交はすと、富佐子は其の廣い額に千切つた紙片をバラリと打ちつけて、高

く笑つた。

羽仁君は肩や胸にふりかゝつた紙片を拂はうともせず、其のまゝ安樂椅子に倒れて、

『美貌と腕力とを丼せ與へられた代りに、其の他のより好きものを奪はれた、と青海のいつたのは適評だ。』

『奪はれるものなんか無いわ、何にも與へられないのですもの。』と富佐子は椅子に腰を下ろして、デスクの上に兩手を組み合せて、凝と外を見た。

『或は何も奪はれては居らんかも知れぬ。』

富佐子の色のよい頬は更に濃くなつた。

『ヤツ富佐子も來て居つたか。』と突然襖を開けて、快活な聲で吶鳴るやうに云つて入つて來た小い男がある。才藏の頭巾のやうな帽子を思ひ入れ斜めに被つて、鼻の下の髭が左右に一の字を引いて、顎は綺麗に剃つて下唇の眞下にハート形に濃い鬚を殘して居る。

『アラ兄さん。』と富佐子は跳ね上げられたやうに椅子を離れて、廊下に出た。

『其樣に驚かんでも好からう——ヤ失敬。』と頭を振ると、例の大黒頭巾がダフ〳〵する。

『青海君か、久しく見えんかつたな。』

『ウン何うも流行る藝人は中々忙しいよ。』と帽子を取ると、モヤ〳〵と延びた髪がモルモットの背のやうに渦回いて居る。羽仁君は此の頭髪を人工の極に達した自然の狀態と稱した。

『何うしてさう流行る。』

『流行らない奴は中半端な天才だ、最上等の天才と、最下等の天才は何時でも流行る。』

『君のは何方だ。』

『曰く云ひ難し……然し餘り流行ると何だか世の中に馬鹿にされて居るやうな氣がして癪に障る。然るに此處の家に來て居る間は世の中を馬鹿にして居るやうな氣になる、羽仁流の流行らざる所以だね。』

籐椅子を緣に持ち出しながら青海君は疊の上を見て、『何うだ此の紙片は。』と羽仁君を見て、『君の肩にも大分掛つて居る。』

『カーニバル。』と富佐子はくすぐられたやうに笑つた。羽仁君は、

『富佐子が、秘密を千切つて拋げつけたのだ。』

『ハヽア。』と青海君はハート形の鬚を撫でて、

『羽仁君に秘密を浴びせかけたのか、容易ならん事だ。我輩も自由の時代には、至極美人を目がけて秘密を浴びせかけたものだが、惜むらくは悉く不成功に終つた。』

富佐子はデスクに顏を伏せて、身體を搖つて笑つた。羽仁君はたゞ微笑して居る。青海君はケロリとして、

『今日我輩は、何も君の家に用があつて來た譯じやない。今日には限らぬ、僕は五歳の折に生後二十何日かの君と交際を始めて以來、用があつて、君の所に來た事は未だ嘗て一遍もないやうに覺えて居る、恐らく將來も無からうが……』

『あつてよ。』と富佐子は遮つた。

『何んだ、君の知つた事か。』

『恩惠は砂に書くてのは夫れね、結婚の入費は何うして？』

『さうだ、一遍あつたかな。』と青海君は澄まして居る。

『イヤあの時は、來やしなかつた。』と羽仁君は笑つて『手紙だつた。君は我輩に幸福を詛ふやうな惡人になりたくないなら金を出せ、借りたくも貰ひたくもないが、君を善人とする爲め之も已むを得ん、といふやうな文句だつた。』

『マア其樣なだつたの、夫れだのに、姉さんが式は成るべく質素にしようつて云つたら、金の點では心配は要らぬから、大に派手にやるつて聽かなかつたのよ。』と富佐子は青海君と列んで、其の肩に手をかけた。殘念ながら青海君の頭は富佐子の耳の邊に在る。

何んとでも云へ、最後の手段に訴へられると

迷惑だから僕は敢て爭はぬ。」と青海君は椅子に倚つて、「で本問題だが、今日我輩は或る所で妙な事を聽いた、上遠野が千駄谷に堂々たる邸宅を構へるさうだな。君は知つて居たのか。』

『知らん。』と羽仁君は僅に額の肉を動かして、「眞實か。』

『眞實か嘘かは此方が聽きたいんだ。而して其處へ出來上り次第、盛大なる新築祝と艶麗なる新婚披露を一しよに行ふといふ評判だ。」

青海君は眦を裂つた。富佐子は眼を輝かした。羽仁君は默つて諾いた。

「怪しからん。」と青海君は小さい身體を一跳ね跳ねさせて、「上遠野が堂々たる邸宅を構ふるといふだけなら、一の快心事たるに過ぎぬが、考へて見給へ。奴は我々同志の中では、作理學士に次ぐミゼラブル黨だつた。淸貧我輩の如きものを捉まへて、牛肉を奢れの、汁粉を奢れのと責つて居た男だ。夫れが十年經つか經たぬに十萬圓以上の大邸宅を構ふるなんて事は、理解し難き經濟現象だ。さうだらう。此度の經營其の他から察して、彼れの財產は、如何に內輪に見積つても、決して五六十萬を下るまいといふ噂だ。彼れが今日まで物も喰はず、衣服も着ず、家にも住まず、空氣も碌に吸はぬやうにして生きて居たとしても、年々四五萬を蓄積するといふのは正當の狀態の下で出來得られる事ではない。銀行や會社が何んなに儲けるものか知らぬが、あんな箕で掬くやうな社員に年々萬の二萬のといふ金を呉れるといふ事は、日本の今日の富の程度では、人の物を只取る泥棒株式會社が出來たところで、あり得べからざる話だ。我輩は斷言する、上遠野の暴富は決して正當の勞働の結果ではない。果然、町內で知らぬは亭主ばかりなりだ。」青海君は喟然として、『上遠野が近頃或る一派の黑幕として惡辣の手腕を株式界に振ひつゝある事は、其の道のものゝ明かに認めて居る事實だ。先頃の市場のパニックは、其の一派の作戰が主たる原因を爲して居たのだ。上遠野等は作戰圖に中つて、一擧にしてミリオネーアの地位に達したのだ。株といふものが何んな工合にして、さう富の偏頗な分配を生じ得られるものか、我輩は未だ曾て研究した事はないが、たゞ時々人の談を聽いて果して然らば、ピアノを叩いて御祝儀を頂戴して居るから見れば、太分早く埒の明く商賣らしいと思つて、時々新聞の株式欄を研究して見ると、立會初めに氣配を崩し、凄じくも六七圓急轉直下の勢ひを以て崩落したとか、後場の刎ね返しにて一圓方引戻したとか、極めて平凡なもので、六七圓下つたり一圓上つたりするのを、凄じくも、なんていふ所を見ると頗るケチなものだと思ふのみで、一向要領を得た試しがないが、上遠野は其の裡に飛び込んで、今や大に要領を得て仕舞つた。而も其の得方が惡辣を極めたのだ。殺すも殺されるも、獸同志の事だから、我々人類の問題たらしめる價値はないが、或るものは、上遠野の肉を食はずんば已まずと力んで居るさうだ。面白い、やるなら其の位に言はれるまでやるが好い、然し夫れは泥棒をやるなら五右衞門になれといふので、泥棒となる事を肯定した上の話だ。苟も我々同志の間から泥棒を出すといふのは……」

『ホヽ、兄さん。』と富佐子は青海君の言葉を遮つて、羽仁君を指した。

羽仁君は顎を胸につけて居眠つて居る。

『ヤツ此奴。』と青海君は足を延ばして羽仁君の膝をグイと突いた。羽仁君は赤らんだ目を開けて、

『ム……』

『ムもないものだ、散々僕に饒舌らして坐睡をして居るといふ法があるか。』

『聽いて居たよ。』

『何を云つたか、言つて見給へ。』

「泥棒株式會社を建てるとかいふ話だ。」

宮佐子は羽仁君の椅子に縋りついて大に笑ふ。

「好し、好し、最う何も言はん。」と青海君は椅子を離れて、低い脊を力一杯に伸ばしたといふ態度で、廊下を歩き始めた。

宮佐子は羽仁君の胸や肩に散りかゝつた紙片を拂ひながら、赤い色の頬に褪せ去つた羽仁君の額を見て、

「何處か御惡いのぢやないの。お顔の色が惡いわ。」

羽仁君は默つて外の方を見て居る。

「我輩は歸る。」と青海君は呶鳴つたが、依然として往つたり來たりして居る。

「お歸りなさいとも。」と宮佐子は笑ふ。

「イヤ歸らん。これから上遠野の所へ出かけて大に問責を試みる。」と大股に歩きながら、

「ヘン豪さうな、人間は活動の動物だなんて懐手をして不義の富を貪つて居やアがる。ふふん、ノーマル、デヴェロープメントが聴いて呆れる、昨日まで貧乏下宿の四疊半に燻つて、我輩に汁粉を奢らせて、好いかモウ一杯白餡を食つても、などと惴々焉として我輩の顔色を窺つて居た奴のノーマル、デヴェロープメントなら、此の頃漸く五六圓の家賃の家へ敷金をまけて貰つて滑り込む位が關の山だ……」

「能く彼様ペラ〳〵饒舌れてねえ。」と宮佐子は羽仁君の顔を見て笑つた。

「ピアノではあゝは行くまい。」と羽仁君は兩手を擧げて伸をした。其の手を宮佐子は抱へ込むやうに、自分の掌と羽仁君の掌を組み合せて椅子の肱掛に輕く押へつける。途端に青海君はくるりと此方を向き直つた。

男の手と女の手と觸れ合つたのを、手と手と觸れたばかりと解せらるゝ場合は甚だ鮮い。さりとて夫れが、手と手以外の何物が觸れ合つた事を意味して居るかは明瞭でない。古來幾多の男女の手と手とが觸れ合つたが、多くは手と手と觸れ合つたといふよりもまだ意味のない接觸であつ　。

で羽仁君の手は宮佐子の手に觸れて居る。青海君がくるりと向き直つても、依然として觸れ合つて居る。青海君はソロをやるやうな姿勢で、

「我々同志のうちから惡魔を出した。」と呶鳴つた。

宮佐子は仰山に笑つて、羽仁君の椅子を少し飛び除いたが、尚羽仁君の手先を離さなかつた。

「兄さん此の間、つく〳〵お金が欲しいつて云つたのね。」

「云つた。」と青海君は足踏みをして、「己れは所謂お出入先からお祝儀を頂戴する度にさう思ふ、己れに金があれば、此樣な奴等にウント金を呉れて、忠といふ逆ピアノを聴かしてやる。若し聴かぬと云へば、柱にフン縛つて置いて死ぬ迄聴かしてやる。あゝ金なるかな。」

青海君の説では、人生なんてものは無い、名生と金生と肉生とを寄せ合はしたごも〳〵めやうな生があるのみだといふ。酔ふと何時でも「金生五十金なきを恥づ。」と放吟する。

「オイ羽仁。」青海君は羽仁君の眞正面に直立して、「君は平生……エート……今日は團體、向上し、個人が墮落して居る、團體の滿足があつて個人の滿足がない、夫れは各個人が悉く團體の奴隷となつたからだ、で其の、而も團體の意志には道徳がない、團體の慾望には節制がない、で其の、從つて團體の發展には道徳性を缺いて居る、だから個人は團體の意思、團體の慾望を人道化したる個人の意志、個人の慾望を確立せねばならぬ、團體の惡性を代表して權力を誇り富強を誇るが如きは個性の自殺である、と論じて居つたではないか。然らば我々同志のうちより、

團體の惡性を代表するが如き人間が出たら、之を我黨の謀叛人と認めればなるまい。然るに極めて冷淡に構へて、半唾を以て我輩の演說に對するとは不都合千萬ぢやないか。夫れとも妹の婿とするには、金持の方が好いのか、乃至は平生駄法螺を吹いて居たのか。何うぢや。」

「僕は自分の事に全力を注いで居る。」と云つた時には羽仁君の手は最早全く富佐子から自由だつた。

「人は何うでも構はんといふのか。」

「構ふだけの事は既に構つて居る。」

「夫れでは上遠野の行動を是認して居たのか。」

「否認して居た。」

「否認した？ 夫れならば何故鼓を鳴らして之を責めんのだ。一人を善に導くのは萬人を征服するよりも偉い事業でないか。君は何んで奴の墮落を默過した、君は何故戰はん。」

「僕は戰はぬのではない、時代を敵としても戰ひたいと思つて居る。然し上遠野一人を奈何ともする事の出來なかつた所を見れば、我輩には戰士たる資格はない。自分の一身を支へる力のないものが、人と戰へば、敵に苦痛は與へられずに、己れに苦痛を招く……」

『ハ、、、、』青海君は放笑して、「其樣な仙人じみた事を云つて居た所で始まらぬ。君は戰はずして先づ敵を恐れるのだ、然らざれば徒らに自ら藏して現さざるを得意として居るのだ。善を人に勸め、道を世に行ふも、畢竟は物を人に售ると違ふ事はない。昔から大賈は深く藏して空しきが如しなどと頤を撫でて澄まして居ても客が來たが、今日では駄目だ。稚氣滿々でも衒氣滿々でも構はぬ、太鼓を叩き喇叭を吹いて大道を廣告しなければ、存在をも認められずに仕舞ふ。主義も抱負も、寶の持ち腐れになる。孔子さへ沽らん哉／＼と吹鳴つたではないか。君のやうな仙氣滿々では上遠野一人をすら何うにも出來んではないか。世の中から云へば君のやうなものは居ても居なくても好い人間だ、徒らに己れを清うしたつて何になるッ。」

青海君は兩肱を蟹の足のやうに突張つて吹鳴つた。

「徒らに己れを清うする！」羽仁君はグタリと背を椅子の寄木に倒して、「責めて夫れだけも出來れば好いのだ。」

富佐子は羽仁君の色のない額に、珠の汗がジリ／＼と滲み出すのを見た。

「正雄さん。」正雄は羽仁君の名である。から呼んだのは富佐子であつた。

羽仁君は傍に富佐子の居る事は忘れて居た。羽仁君の額の先で輝つて居る電燈の球も、其の下を三尺離れて富佐子の居る事を忘れて居た。富佐子は、自分が羽仁君にも電球にも、全く忘れられて居たのを、一時間餘り堪へて居たのである。

青海君が散々怒鳴り散らして歸つて仕舞ふと羽仁君はデスクの前の椅子に倚つて、輕く頰杖をつきながら、

『あゝ上遠野か……二十年來日々思ふ事を語り合つて居た人間さへ、斯う違つた方へ行つて仕舞ふ。我々に大なる自信を持てといふのは殘酷だ。我々は思ふ――考へる。けれども我々の思ふ事は、我々の居る所を去る三尺の隔りにも達して居らぬ。我々の考へた事は我々の居つたあと三分の後にも殘る事ではない。千里の外、千萬年の後に其の考へた事を傳へ得る人は、千年に一人しか出ない。我々の天分は、己れの一身、己れの生涯を自ら支配するを以て能事とせねばなるまい。」

羽仁君は太い息をした。

「さればといつて、乏しい天分を與へられた事を恨むのも愚だ。全力を傾倒して天分を盡すと

いふ點から見れば、我々の努力も偉人の努力も、各其の分に從つて完全なものといふ事が出來よう、蟻が一寸の塔を積むに全力を注ぎ盡すのは、人間が千尺の塔を建つると努力の價値に於て變る所がない。地球と其の僅の周圍とを世界とする人間も、全宇宙を掌の裡に置く全能の神を羨むには及ばぬ。』と羽仁君は腕を組んで天井を仰ぎながら獨言のやうに云つた。

「我々は滿足せねばならない。」

青海君が飛び上りざま後に倒して行つた籐椅子を座敷に入れて、斜めに夫れに倚つて、富佐子は恍然と瞳を漂はして居るうち、デスクの上の電燈がポーッと明るくなつた。

黄昏の色が芝生の淺緑を掩うて、廣い庭に鳥も鳴かず、房々と垂れた櫻の蕾は、ゆらりともしない。

書齋の裡が次第に明るくなる。富佐子の恍然とした視線は暫く羽仁君の額の上を撫でた。羽仁君の額は漸く其の固有の耀きを回復しつゝある。其の時、

「正雄さん。」と沈んだ聲で富佐子が呼びかけたのであつた。

呼ばれては羽仁君は額の筋肉をたゞ少し許り動かした。が夫れが何時も富佐子に呼ばれた時の羽仁君の返事である。

『私、貴下が羨ましいの。』といつて富佐子は續けたい言葉を控へるやうな調子で口を緘んだ。

羽仁君は又少し許り額の筋肉を動かした。

「けれども……」と富佐子は一寸口を噤んで、

「世の中だの、世間の人だのを少しも眼中に置かないで、全く自分一人を守る――而して滿足を其のうちに求めるといふ事が、眞實に出來るものですか知らん。』

富佐子は羽仁君の顏を眺めて返事を待つたが羽仁君は只烈しい上眼を使つたまゝ何とも云はなかつた。

『自分を欺いて居るのぢやないの？』と富佐子は少し高い聲で迫るやうに、『夫れだと滿足ぢやなくつて苦痛だわ。』

「僕が悩んで居ると見えるか。」羽仁君は初めて口を開いた。其の調子は法官の聲のやうに無趣味であつた。

「私が悩んで居ると見えて？」富佐子は急に平常の快活な聲に返つてフト椅子を離れた。

羽仁君は富佐子から視線を外らして電燈の球を視ながら、

「何の事だ、夫れは。」

富佐子は羽仁君の傍に寄つて來て、デスクに兩手を突いて、

「細い鐵道見たいな所を小さい人が、這つて往つたり來たりして居るのを、高い所から見て居れば夫れは、可笑しいわ、けれども自分も矢張、高い所で同じやうに這つて居るのかと思ふと、其の小さい人を可笑しいと思へば思ふけど、此方の苦しみが増す譯でせう。」

「私がどうだらうといふのか。」

富佐子は少し躊躇つてから、

「えゝ。」と切つて放つたやうに云ふ。

「餘計な推量だ。」物倦な調子ではあつたが、富佐子は叱られた猫のやうに少し身體を退らせた。

「己れはお前等に何を云つた事があるか。」

「アラ、譯といふ譯ぢやないんですけれど、自分で自分の事を思ひ違ひする事もあるぢやありませんか。」

「お前にさういふ考へがあるのか。」

富佐子は後退りに再び椅子に倚つて、上眼で羽仁君の顏を視ながら、少し頭をかしげて微笑んだ。其の顏を、羽仁君はチラと視たのみで、

「己れを欺かんといふことは容易でない、女などには不可能といつて好からう。」と呟いた。

「自分を欺いて居るといふのでせうと思ふのよ。」富佐子は少し頰の色を濃くして、「私ね……」

羽仁君は富佐子の顏を凝と視ながら默つて首を振つた。

富佐子はサッと顏を赤めて、不意に起つて廊下に出た。庭は暗い、月のない空に、濁つた星影が二つ三つ見える。富佐子は夫れを眺めるでもないらしく、只羽仁君と電燈とに背を見せて居る。

「兄さま。」と鈴のやうな聲と共に襖が開いて、黒の紋附に海老茶袴の小夜子が入つて來た。

「小夜子か。」羽仁君は之を迎へるやうに手を伸ばした。

「只今。」と小夜子は驅け寄つて羽仁君の伸ばした手に吸ひ附いたやうに取りついたと思ふと、「アラ富佐子さん！」と其の手を離れて、廊下に立つて居た富佐子の後から抱き附いた。

富佐子は默つて向き直つて、小夜子の肩へ兩手をかけて、其の桃色の頰に接吻して、頰と頰と觸れ合つたまゝ、小夜子を抱へて籐椅子に倚りかゝつた、其の途端に富佐子の眼はチラと羽仁君の眼と合つた。富佐子の瞳が今夜の星のやうに濁つて居つた事を、羽仁君が視たか何うかは解らない。

小夜子は富佐子の膝に縋りながら、富佐子が今日姉さんの學校の運動會に來なかつた恨みを云ひ立てた。富佐子は浮かない調子で、

「さうね、私、今日行くつもりで來がけに此方へお寄りしたら、家の叔父さんが來たりなんぞしてつい後くなつて仕舞つたの。」

「マアさう、青海の叔父さん、今日學校へおいでてよ、お正午少し過ぎに。そしてね、可笑しかつたわ、三年の眼隱競爭の時に、叔父さんが其の中に交つてやつたのよ、さうしたら一番遲くなつて、皆がもう競爭を終つて日隱しを取つて歸つて行くのに、叔父さんてば、まだ眞中のところで手探りをしてまご〱して居るんですもの、皆笑つたわ。」と小夜子は富佐子の腕に顏を伏せて笑つて居る。

富佐子は寧ろ冷かに笑つた。羽仁君は寧ろ面白さうに笑つた。小夜子は富佐子の膝から羽仁君の膝に驅け寄つて、

「兄さま。」と羽仁君の顏を仰ぐ。

小夜子が「い、い、兄さま」と判然尻上りの强いアクセントで云つて、羽仁君の膝に取り附いて、碧みかかつた瞳を輝かして顏を見上げると、羽仁君の顏も一種新しい輝きを帶びる。

「私、上遠野さんよ。」小夜子は小さな決心を可愛い聲で云ひ現しながらも聊か不安な眼附で、一寸富佐子の方を振り向いて、更に羽仁君の顏を見た。

「何んで忌か。」羽仁君は笑を見せる。

「姉さん今日歸りに上遠野の兄さんの所へ廻つたのよ、ですのに、私今日品川の電車に乘つたら、上遠野の兄さんが乘つて居たのよ。私腰かける所がなかつたから上遠野さんの所へ行つて上遠野さんにつかまつたら、大變にお酒臭いの！」と小夜子は可愛い眉を顰せて、「さうしたらね、傍に坐つて居た女の人が私の事を、上遠野さんにね、何處の子だつて。忌アね。そしたら上遠野さんてば、恐い叔父さんとこの子だつて。そしたら其の女の人は大變笑つて、私の事を。此方の隣に坐つて居た女の人も笑ふのよ。私きまりが惡くつて忌になつて仕舞つたわ。而したら好い鹽梅に次ぎの停留場へ來たら、上遠野さんが先へ降りて仕舞つたのよ、私の事を笑つた女の人は降りるの忌だつてキャッ〱つて騷いで、外のお客に叱られてよ。上遠野さん大勢女の人を伴れてたの、綺麗な女の人よ、藝者でせう彼れ。」と少し考へて、「けれども家の婆や見たいなお婆さんも居てよ。」

富佐子は瞳を曇らして羽仁君の顏を見た。羽仁君は小夜子の手を取りながらハッハッハと笑つた。

『御飯を何うぞ、何誰様も。』と藝者に似たといふ婆やが襖の際に蹲つた。

『私、もうお暇しませう。』と富佐子は立ち上る。小夜子は慌てて富佐子に縋りついて、

『アラ富佐子さん、もつと居て頂戴な、ね。』

『私、遲くなると怖いんですもの。』と小夜子の口調を眞似る。

『電車まで兄さまが送つてあげてよ、ね兄さま。』と小夜子は兩人の顏を見較べる。

富佐子はホヽと笑つて、小夜子を確かと抱いて頰ずりをした。

（五）

『オヽ丁度好い所へ來た、今日は例の唔咿會が我輩の所に在るのだ、今始めようといふ所だ。』と上遠野君は羽仁君と青海君とを玄關に迎へた。

『何んだゴイ會たア。』と青海君は顏を顰める。

『僕等の連中の讀書會さ、兎に角出て呉れ給へ。』

『讀書會を唔咿會か、大ざらひを溫習會と稱するよりも更に愚な名稱だ、推して知るべし、我輩は歸る。』青海君は後退をする。

『さう馬鹿にしたものでもない、夫れに中々美人が出て來る。』

『美人？　好矣！』青海君は羽仁君の手を取つて座敷の方へ引張つた。

座敷の中央に列べた三つの唐卓を圍んで、男が六人女が五人、別々に塊つて居る。

『何だ、大分知つた顏が列んで居る。』と青海君は無遠慮に突つ立つて居る。

羽仁君も席を見渡して、法科の向笠助教授、某新聞經濟主任の小谷法學士、駒井銀行の駒井君、大藏省の渥美參事官などの知つた顏と、代る代る笑を交換した。大尉の軍服を着た青白い顏の、髭の濃い軍人が一人居た。女の方で丁寧に頭を下げたのは、渥美の細君で時子といふ妙子の學友だつた、其の隣には向笠君の妹の雪子も居る。妙子は勿論女連の中央に主人然と構へて居た。

『吾々は娛樂として書を讀む暇が少いから、一人が何か雜誌なり書物なりで面白い事を讀んだら、夫れを此處へ持ち寄つてお互に融通するのだ。』と上遠野君は青海君に說明する。

『僕は又唔咿會といふから、經を讀むやうな工合に皆で本を讀むのかと思つた。』

『畢竟讀書銀行さ。』と駒井君は銀行家らしい事を云つて、『先達後藤さんに話したら、大變贊成して、己れも出て見たいなんて云つてたつけ。』

『後藤といへば、奴此の間我輩の所へ五圓借せつて云つて來やがつた。』

一同笑ひこけると青海君も笑つて、

『相變らず窮せりと謂ひつべしだ。』

『僕のいふのは後藤男爵の事だよ。』と駒井君は苦笑する。

『何んだ滿鐵か。』

『もう滿鐵ぢやない、遞信大臣だ。』と駒井君は顏をしかめる。

『其樣な重大事件見たいな聲を出し給ふな、後藤男爵が、滿鐵だらうが大臣だらうが我輩のヒアノの調子に影響はない。』

『國民として國務大臣の何人たるかを知らんといふ法があるか。』

『知つて居るとも、伊藤總理大臣、森文部大臣、陸奥外務大臣、阪谷大藏……アレは次官だつたかな。』

『青海君が國務大臣の誰れたるを知らんといふのも一種の誇りだ。』とカイゼル髭の向笠助教授は一同の笑聲の鎭まるを待つて、日本では政治

に無關係といふ事が、品格を作る一つの要素になつて居る。政治が下劣無理想な專門政治家の手に歸して仕舞つたのも當然の事です、今更官僚政治打破なんて騷いだつて仕方がない。國民の多數は青書生と同じやうな考を持つて居る間は、日本の立憲政治は何時迄たつても、官僚政治でなければ政治屋政治です。亞米利加人のやうに、個人に公人としての方面と私人としての方面とあつて、其の兩方面に向つて完全に働くのが眞正の米國人だといふ風に考へる事は日本人には出來ないと見える、日本人は悉く私人で、公人がない。米國といふ國は餘り感心した國ぢやないが、此の公的生活といふ觀念を能く具體的に現して居ることと、夫から私的生活でも勞働の觀念が非常に能く實現されて居るのは感心です。所謂米國に徒食階級なしといふが、資本家でも地主でも米國では夫れ夫れ働いてゐる、英吉利の貴族のやうに財產の自然的增加のみを賴りとして寢て暮らすやうな事は、米國人は決して爲ぬ。其處へ行つても日本人は駄目だ、少し金が出來ると、何も爲ぬといふ事を誇りとするやうになる。英吉利の貴族ほどの金はなくて夫れよりも何も爲ぬ程度の甚しい連中が大分ある。羽仁君なども、何も爲ぬといふ事を自分の人格の基礎としてゐるやうだ。」

「僕の小言へ點火した。」と青海君は前にあるカルヽス煎餅を二枚摘んで、一枚羽仁君に渡した。

「人は死んで仕舞ふ自由さへある、何も爲ぬ位は……」と羽仁君はカルヽス煎餅を口に入れた。

『死んだ氣になつて働くといふ事はあるが、羽仁君のは死んだ氣になつて何も爲ぬといふのだから一寸珍だ。」と小谷法學士は山羊鬚を摘んで仰向いた。青海君は、

「死んだ氣になつたら働く必要はない、羽仁君の方が論理上正當だ。」

女達は黄な聲を合せて笑つた。青白い顏の青年士官は、美しい髭の下の女らしい口元を微笑ませて、

『死んだ氣になるといふ奴を一つ通り越して仕舞ふと又一種の氣になる、アノ氣を何といふのでせうかな。』と羽仁君に話しかけた。

「參謀本部の江差副官。」と上遠野君は士官を羽仁君に紹介して、更に羽仁君の事を、『これは何も爲ぬ人格の羽仁君。」

『ハア。」と江差副官は眞面目な顏で丁寧に頭を下げて、『戰爭でも、先づ耳元を彈がスー／＼通ると、初めは所謂死んだ氣になりますな、夫れから少し經つと死んだ氣を通り越して、死んだも生きたもない、一種の超然たる氣になる。何とも云ひ樣のない精神狀態ですがね、アレは何といふ氣になつたといひますかね。』

「夫れが平氣といふのでせう。」と青海君が口を出す。

『成程平氣ですかね、然し平氣も、彈なんぞの來ない所に居る平氣と、所謂彈雨の裡に居る時の平氣とは自ら違ひますな、前の平氣は零見たいなもので、後の平氣は∞ですな。』

『成程な、零の平氣に∞の平氣か。」と青海君はハート型の髯を無上に撫でて、「借問す羽仁君の何も爲ぬといふのは、零か∞か。」

『羽仁君のはXだ。」と小谷君も山羊鬚を撫でて、『零かも解らない、∞かも解らない。』

「何も爲ぬといふ事が、時には何事を爲るよりも難しい事があります。』と江差大尉は、『戰爭の折なども、司令官や參謀などが時々自分の軍が何も爲ぬといふ苦しい仕事を爲にやならぬ場合にぶつかります、而も其の何も爲ぬといふ事が、大に何か爲て居るのだから妙です。羽仁さんの何も爲ぬといふのも或は其の類ぢやないですか。』

『感謝々々。』と青海君は青年士官の白い優しい手先を採つて、『我輩も羽仁の何も爲ぬのをさういふ風に解釋して、滿腔の同情を注いで居るのです、所が人はさう見ない、何のかのと批評をしたり嘲罵したり、イヤ早や……司令官や參謀もさういふ目に遇ふ事がありませう。』

『ありますな。』と副官は笑ふ。

『實は、羽仁に何か爲らせるといふ同盟さへ出來上つて居るのです、同盟なら同盟で、何か氣を揃へて一つ事を勸めるのならいゝが各自勝手に何を爲ろ、彼を爲ろと好きな註文を持ち込むのです。其處の向笠先生は教師を爲せるといふし、駒井君は、何やら商會の紐育支店の番頭に爲れといふし、上遠野君は共同で鑛山を買はせると云つて居るし、小谷法學士は、己れに論文の材料を供給させると云つて居るし、渥美參事官は、アゝいふ男には芋でも作らせろと主張して居るし、田舍の叔母さんは、今年中には是非結婚させると力んで居るし、渥美夫人は、アンナ古汚い化物屋敷見たいな家は氣味が惡いから移轉を爲せるといつて居るし……』

『アラ私何時其樣な事を云つて。』と筋向うに坐つて居る渥美夫人は顏を眞赤にして、『青海さん出鱈目ばつかりいふのね。』

『アッ其處に居られたのだつけ、これは失敗つた。渥美夫人に關する件は事實無根として、夫れから妙子孃は是非ピアノを買はせるといつて居る、婆やは、二三日内に忌でも頭髮を刈らせるつて威張つてゐる……』

肩を震つて笑つて居た江差大尉は、

『頗る我田引水の同盟ですな。』

『左樣、然り而して最も甚だしい我田引水家は我輩の妻です、これは羽仁君をして我輩に小言を云はせようといふのです、驚くべきですな。斯る大勢に反抗して羽仁の何も爲ぬのを放置する主義を採つて居るのは、米國に居る件といふ理學士と、我輩と、我輩の義妹です。然し件は、何も爲ぬ人間といふものは無い、羽仁も生きて居る以上何か知らん爲て居る、海鼠でもダラリとして何も爲ぬやうな面をしながら、濟まして生殖作用などを營んで居るといふのです。濟ました面をしながら、生殖作用だけを盛に營んで居るのは敢て海鼠には限るまいと我輩は思ふのですが、場所柄ですから委しくは論じません。義妹に至つては猛烈です、羽仁に何も爲せぬ爲に積極的に努力して居るのです。先達も大きな書物を羽仁の所から擔いで來たから、ソンナ本を讀んで何うするといつたら、羽仁君がこんなものを讀んで居て人が行つても相手にしなかつたから、其の本を奪ひ取つて來たのだといふのです。本さへ讀ませまいとするのです。尤も義妹は腕力家です、失禮ながら貴下なども腕力の爭になると義妹の敵ではないやうにお見受けする、と云つて強ち……』

女連の笑ふ聲で、青海君の話は聽えなくなつて仕舞つた。

『能く饒舌る男だな。』と渥美參事官は青海君に向つて、『オイ今日は勝手な事を饒舌つては可けぬ、書物で讀んだ事を話し合ふのだ。』

『よし。』と青海君は渥美夫人の方に向いて、『マダム渥美、貴女は基督教徒で女權擴張論者だと承つて居りましたが、此頃何かの雜誌で、亞米利加の金持の娘で英吉利の公爵に嫁に行つたとかいふ女の書いたものを見たら、基督教は元來女を束縛した宗教である、基督教の出たお蔭で希臘や羅馬時代に社會的活動の地位や資格を持つて居た女が、忽ち家畜同然になつて仕舞つた。基督教の初期に於ける女の義務は、亭主に服從する事である、蓋し亭主は女の頭なり、主君なり、優者なり、女房は亭主を恐れ、畏み樂しましめ、物も碌々云ふ權利はなく、たゞ絲を紡ぎ、家事を理め、寺に行く時と、

病氣の兄弟を見舞ひに行く時の外は、決して外出すべからず、云々、といふのだつた。畢竟女といふものを罪惡の塊と見たのです。十二使徒の約書にも、女は扮裝を凝らして、先づ男子の心魂を醉し、其の眼の一瞥によつて毒藥を注射し、其の擧動を以て男子を擒にする、去れば、男子は總ての女に對して其の感覺を鎖さざるべからずとある。神父タータリアンは曰くさ、女の天然の美麗は、藏匿と荒廢とによつて之を廢滅せしめなければならぬ、蓋し見る者の眼にとりて危險千萬の代物なればなり、とは隨分振つた言草でせう。基督教は女が、人の婚禮や、芝居を見に行つたり、例の風俗壞亂の共同風呂に入つたり、見世物を見たりするものを嚴禁して、外に出る時には厚いヴェールを被らなければならないとして居つた。當時羅馬では女がヴェールなどを被るのは時代後れの東洋流だとして居たのだが、基督教は之を復活したのです、今日西洋の女の顔に網を被せてあるのは、基督教の命令の惰力です。當時の俚諺に、女といふものは男の船にヒッ附いては之を燒いて沈沒させようと焦つて居る火の船だといふのがある。考へて見ると、ヴェールは即ち安全燈に被さつて居る金網と同じ用をするのですな。

保羅の說によると、アダムは欺されなかつたが、イヴは欺されて破戒に陷つた、ただ此の罪を許されるには、信仰と、貞操と、神聖とを守つた上に、赤ン坊を產まねばならぬといふのです。要するに基督教では、本來女は亭主の尻にブラ下つて、赤ン坊を產むといふ刑罰に服する爲のみの動物……』

『勝手な事を仰しやい。』と妙子孃は、策の出づる所を知らずといつたやうな顔をして齒を喰ひ縛つて居る渥美夫人の腕を押すやうにして、『渥美さん、貴君默つておいでの事はないぢやありませんか、何んとか云つてお上げなさいな。』

『我輩が云ふのではない、今日は書物で讀んだ事を話す日だ。何とやら公爵夫人が云つて居るのです、誠にハヤお氣の毒のやうな譯で……』

『聖書には夫が妻に對する道を說いて、理に循うてこれと共に居りこれを敬ふ事生命の恩を嗣ぐものの如くすべし。』とあるぢやありませんか。』と渥美夫人は妙子孃の激勵に聊か力を得て、『基督教だつて其樣な貴下……』

『ハッハッハ、失禮ながら貴女は中々策略家だ、只今御引きになつた文句の後は確か『夫たる者よ、爾曹も妻を遇ふこと弱き器の如くし。』といふのぢやなかつたか知らん。といふと聖書通のやうだが、實は件の公爵夫人に唆かされて昨日一寸彼得前書を見て見た譯です、兎に角、精々買つて上げた所で、妻は弱い器ですな。僕の妻なども弱い器です、始終病院通ひで修繕ばかりでも容易でない。此の弱い器に赤ン坊を產む大任を負はせるのは、保羅の云ふ通り女の罪は中々深いとしても、隨分殘酷な刑罰です。クレメントは、女は全野心を料理に傾倒すべきものだ、夫れでこそ初めて、亭主においいしかられる細君即ちパラタブル、ワイフだと洒落れて居るが、先づ其處等で許してやつてもよい。のみならず、基督教では女が赤ン坊を產むさへ罪惡だといふ事になつて仕舞つたとある、基督教の見地によると、世界は既に赤ン坊を持ち倦んで居る、出產は悲しみの原因にして喜びの原因にあらず、てな事に立ち到つた。其の頃或るものは赤ン坊が初めて胎内を出た時のオギャー〳〵といふ泣聲を通譯して、エヽ何んとか云つたげな、Why, O moth'r, didst thou bring me forth to this life, in which prolongation of life is progress to death? あゝお母さん、何故私を生んでお呉れだ、命が延びるのは死ぬ方へ進む事ではないか、といふのだと云つて居る。日本でも說教坊主が赤兒の泣

聲を「苦の娑婆苦の娑婆々々。」と通譯して居るが、駄法螺の暗合だ。』

『prolongation of life is progress to death.』と羽仁君は青海君の云つたのを繰返して、「夫れは生れる時の聲だ、死ぬ時には夫れが倒さになる、progress to death is prolongation of life.』

云つて誰れを見るともなく一座を見廻す羽仁君の額には例の輝きがあつた、而して微笑む口の内で、

「死に行くといふのは、命の延びる事だ。』と繰り返した。

「死は生命の延長なりか、夫れも安心の途かも知れぬ。」と小谷法學士は商賣柄と掛け離れた事を云ふ。

「然し極めて幼稚な、而して意氣地のない安心だ。』と上遠野君は、「弱者の安心で、强者の安心でない。」

『さうです、生命の滿足を終に得られずに仕舞つた劣敗者の安心だ。」といふのは向笠助敎授である。

『生命といふものは夫れ程趣味のないものではないと思ふわ。』と妙子も向笠君の令妹を顧みた。

「さうね。」と雪子は、兄に似ない細面の沈んだ眼附の、淋しい容貌の女である。「ですけれど、死といふ方から考へて見ると、矢張何か趣味のあるやうにも考へられるわね。」と云つて、向う側の江差大尉の顔をチラと見た。

「死の趣味！』と青海君は仰山な聲を出して、「向笠君は死は人格の滅亡だといふ主義です、さういふ物質主義の兄さんを持ちながら、雪子さんは……死の趣味！　あゝ死の趣味！　僕は嬉しいッ。』

雪子は耳の根を赤くして俯向いて仕舞つた。

『が然し聊か穩かでない。春の趣味は聖人に可なると共に氣狂ひにも可である、死の趣味も亦然らざるを得んやだ。僕は當今の青年子女が死の趣味を解し得たりといふを危む。雪子さんが死の趣味を解し得た動機奈何は、抑も重大なる社會問題ぢやあるまいか。』

「ホヽヽヽ。」と渥美夫人は雪子の横顔を覗き込むやうにして、「あんな失禮な事を云つててよ。」

雪子は眞赤になつた顔を半ば擧げて、口の内で何かいつたが、顔の傍に耳を寄せて居た渥美夫人にばかり聽えた。夫人は、青海君に向つて、

「マア、雪子さんは！　今の若い方は死の趣味なんぞ解しては居らないつて、仰しやるのよ。」

「グレート、ヘヴンス。』と青海君は太いいきみ聲を出して、「愈以て事が重大になつた。」

雪子は思ひ切つたやうに顔を擧げて、

『でも、自殺する人は皆泣くぢやありませんか、矢張死ぬのが嫌なのでせう、種々、生きて居るよりも好い位なんでせう。死は矢張恐ろしい嫌なものと思つて居るのですから趣味なんか解りやしないわ。』

『夫れを雪子さん一人に解つて居るとすると愈問題だ。』

「アラ私に解つて居るつて云やしませんわ。」と雪子は更にチラと江差大尉の顔を見た。微笑して居た大尉は、

『死が生命の延長と云はれたのを、意氣地無しの安心と斷言するのは當つては居らんやうですな。理窟は何うか知りませんが、實際では、死が生命の延長のやうに感ぜられる場合がありませう。死といふものを、たゞ生命の絕たれる瞬間の現象と解するのは餘り無造作です。死は矢張延長を有つた現象です、而も無限の延長を有つたものでせう。とすれば其れが何んなものの延長かといふ事も考へられます、さうなる

と生命の外に何の經驗もない我々は、矢張夫れを――死を生命の延長と考へるより仕方がありますまい。」

「君は哲學者だ。」と青海君は江差大尉の手を採つて、「誰れか軍人を土偶の坊といふ。」

「イヤ哲學でも何でも無い、僕等の經驗なのです。」と大尉は淋しく笑つて、「僕は奉天の戰爭で露軍の捕虜になつた時には、重傷を負つて二日程人事不省だつたのです。氣が附くと露助の軍醫共が自分を取り卷いて居るのです。虜られたなと思ふと同時に、ア、自分が彼處で死んで仕舞つたら、其の死こそ自分の光榮ある生命の延長であつたに、といふ風な――元より其樣な判然と纏つた考へではありませんが――兎に角さういふ考へが頭腦の底にムラ〳〵と浮んだのです、而して平常の場合に生命の光榮を想ふやうな工合に、其の死後の光榮をつく〴〵と想ふのです、で其の死を獲損つた口惜しさが胸にコミ上げて來て獨りでに涙が零れるのです、何うも自分ながら諦めやらないのです、まるで子供が甘い御菓子を貰ひ損つて泣く時のさうな心持だらうと思ふのです。」

「貴下は捕虜になられたのですか、ハーハ。」と青海君は頗る感心した樣に、「日本人としては頗る貴重な經驗を積まれたのですな。囚はれる位なら死んだ方が好い、といふのは最も貴重な經驗です。」

「夫れで江差君は絶食をやつたのです、其のうち日本軍に取り戻されて助かつた譯さ。」と向笠君が註釋を加へた。江差大尉は青白い顏を少し赤くして苦笑した。

『絶食？』と青海君は目を三角にして、「夫れは可かん。囚はれる囚はれぬは精神上の問題で肉體上の問題ではありません。手足を縛られた時に口惜しいつて死んで仕舞つたら、解かれた時にオイソレと生き返る譯には行きますまい、其樣な下らぬ眞似をするものぢやない。人間、手足などは必ずしも始終動かして居らんければならんといふものぢやありません、縛られたら縛られたで、ヂッとして居たつて少しも差支へない。羽仁君の如きは縛られも何うもせんのに、ヂッとして動かずに居るぢやありませんか、動いても動かんでも生命は生命です。昨日まで堂々たる軍人だつたものが、捕虜にされて動かれなくなつたからといつて急に人格が打壞される譯はありません。動とか靜とかいふ事は生命の本體ではない、だから死を生命の延長といふ事が出來るのです。」と云つて青海君は一寸頭を縮めて、「如是我聞、實は羽仁君二十年前の說の受賣りだ。多少アルコールも混つて居るかも知れない。」

「可哀想な事をいふ。羽仁君だつて、二十年前は、鯖を採るつて田舍の家の裏の川へ入つて、深みに陷つてブク〳〵やつて、漸やに上げられてワイ〳〵泣いて居たものだ。如何に寄寓兒でも未だそんな屁理窟は列べなかつた。」と上遠野君は笑つた。

「生命のエッセンスと鯖と交換しようとした位の樂天家が、何うして斯う惡く考へ込んだものだらう。」と小谷法學士はいふ。

「矢張深みへ陷つたのだね、……マア其樣な詮議立は何うでも好いとして、早く始めようぢやないか、打ち壞し屋が入つて來たので大分時間を空費した。」

『廢せ〳〵。』と青海君は蟇股で身體を乘り出させて、「君等が書物なんぞ讀んだつて何うなるものか。」

「我々だつて書物は讀むさ。」と上遠野君は渥美君に向つて、『先達の約束の奴をやつて呉れ給へ。』

「廢せと云つたら廢せ。」と青海君は卓の上へ兩手を突張つて、「惡事を爲る奴に書物など讀

まれて堪るものか。」

「悪事をする？」と上遠野君も稍氣色ばんだが、思ひ返したやうに苦笑して、「此處には悪事などをするものは一人も居らんよ。」

『富は何物かの代價ではないか、單に富の爲に富を漁するものは、何物をも與へずして代價を貪るのだ、堂々たる盗賊ではないか。」

「何を云つてるんだ。」と上遠野君は相手に爲ぬ風を見せて『サア始めよう。』と一同を見廻したが、青海君の赤くなつた顔を睨んで、一同の不得要領の顔が列んで居るのみで、誰れも何とも云ふものもない。青海君は錐のやうな鬚を二三度引つこいて、

『盗賊だ。』と焦つた調子で、『夜人の家に――イヤ現代文明の缺陷は此等の盗賊の、其の何んだ――元來名譽とか富貴とかいふものは人間が其の天分を發揮した場合に獲らるべき――與へらるべき報酬ではないか、自己の天分を抛擲して、たゞ名譽を盗み、富貴を盗まんとする……オイ上遠野聽け。』

青海君は隣に坐つて居る上遠野君の肩をウンと突いた。

「馬鹿々々しい。」と上遠野君は心に掛けぬ色を見せようとはして居るが、常の優しい眼附は稍險を帶びて居る。

『青海君歸らう。』と羽仁君は立ち上つて後から青海君の腕を引き立てた。

『歸らぬ。』と捉られた腕をふり離して、『上遠野、君は文明の道德を口にしながら、文明の罪惡を行つて居るではないか。富强は國家生存の第一要件だなどといふが、公平に分配せらるべき富を何等正當の理由もなく自分一個に集めなければ國の富强が得られぬならば、國の富强なるものは詛はるべきものだ。其樣な事は獸的慾望を充さんが爲に富を漁する奴等の口實だ。夫れだから盗賊に書物などを讀まれては堪らぬといふのだ。大泥棒めら、ポッケット論語が聽いて呆れら。盗賊が子曰くだと、ハッハ、人殺しの念佛だ。國が富ましたければ、書物などを讀んで惡智慧をつけずに、誠心誠意を以て肥桶でも擔げ。』

『喧しい奴だな。』

『喧しいから。賊が入れば盗賊と呶鳴るのは當り前だ、呶鳴られて困るなら盗賊をするな。』

『好い加減に默り給へ。』と上遠野君も流石に色を作して、『氣狂ひッ。』

『氣狂ひとは何んだ。』

中腰になつた青海君を羽仁君は後から抱へて引き立てた。

『何をする、オイ離せ、コラ羽仁。』と青海君は藻搔いたが、羽仁君は小さい青海君を引抱へたまゝ、

『諸君失敬します。』と少し開いて居た襖を突き外して、座敷を出て仕舞つた。

『氣狂ひと吐かしやがつたな、泥棒と氣狂ひと何方が人間らしいか試して見せる……』と呶鳴る青海君を押しながら、羽仁君は後からついて來た上遠野君と妙子を頤で座敷へ追ひ返して、玄關の敷臺に下りたが、青海君は地團太を踏んで何うしても靴を穿かぬ。女中は二人の調子で額を半分隱してクス〳〵笑つて居る。

所へ人力車で入つて來たのは富佐子であつた。車の上から二人の爭つて居るのを見て、微笑みながら、活潑に飛び降りて、

『屹度さうだらうと思つてよ。』

『靴を穿かして呉れ。』と羽仁君は青海君を敷臺に引き据ゑた。

富佐子は青海君の足を捉へて無理に靴を穿かせて、抱へるやうにして引き立てると、青海君は突然富佐子の乘つて來た車に飛び乘つた。汗を拭いて居た車夫は忙てて膝掛を懸けて、梶棒を上げながら、

「御歸りになりますか。」
「歸らん。」と青海君は車の上で吹鳴る。
「ぢやお所へ行け。」と羽仁君は云つた。

小夜子は羽仁君と倖れ立つて門を出る時、

「私今家へ歸つたら姉が、兄さんが大層な意氣込で上遠野さんの許へ用掛けたから、何か失禮でもあると惡いから直ぐ行つて見て呉れて云ひますから、大急ぎで來ましたの、あなたが御一しよと知らないものですから――困りものねえ。」
と羽仁君の顔を見た。
羽仁君は微笑んで、
「青海は眞面目だ。眞面目な人間が今の世の中へ出て來れば氣狂ひになる。氣狂ひにならなくとも他で氣狂ひに認て仕舞ふ。」

（六）

小夜子は羽仁君の大きい回轉椅子に腰をかけて、赤い被布の總を卓子の縁に押しつけて、少し首を傾げながら、卓子の上の小さい花瓶に插してある菜の花を見た。赤い西日が斜めに障子に射して、菜の花の黄色い色が、野にあるやうに輝いて、柔らかに差し出した青い莖と一しよに、あるか無きかの風にゆら／＼と搖れた。

小夜子は恍惚と、其の菜の花が廣い／＼野に果もなく咲いて居るのを眺めるやうに、其の碧みがかつた瞳を漂はせる。と後の書棚の上の木製の置時計は、蚯蚓の鳴くやうな聲と共に四時を打つた。

小夜子は手にして居た編みかけの毛絲を膝の上に置いて、
「兄様。」と呼んで、慌てたやうに一寸振り向いて、眞白な頰をほんのりと染めた。
「兄様、早く歸つて來て頂戴。」と微かに云つて、甘えるやうに身體を斜めに捺りつけて、卓子の上に優しく重ねた掌に頰を載せて、横に俯向きながら、上目で菜の花を見た。

裏の小川の堤傳ひは、行つても／＼菜畑の花盛り、小夜子は此處の菜の花、何より好き、今日も所謂伊太利趣味の眞白な衣に、暖かい日影を浴びながら其の畔を歩き廻つては時々細い高い聲で、「野邊見れば、菜の花盛り。山見れば……」などと唄つて居たのである。さうして、
「今日は日曜ですのに、兄さんも姉さんも私を置き去りにして、上遠野さんの所へ行つて仕舞ふんですもの、あんまりだと思ふわ。」と菜畑を歩きながら赤斑の捲毛の、大きい犬の首輪に手をかけて、
「ポチ、青海の叔父さんてばいけないのよ、兄さんを無理に上遠野さんの家へ連れて行つて仕舞つて。でなければ兄さん今日、私と一伴に方々散歩したのに。ポチも一しよに行けたのよ、ポチ、お前口惜しかないの？」

小夜子は菜畑の裡の狹い畦にしやがんでポチの首を抱へた。ポチは嬉しさうに眼を細くして小夜子に凭れかゝつて來る。小夜子は片頰をポチの頭に押しつけて、深い毛に半分顔を埋めて凝と考へて居る。ピッ／＼と急しい聲で頭の上を飛んで行く鳥があつた。
「行きませう、ね。」と小夜子が立ち上ると、ポチは家の方へ後も見ずに走つて、一町程行つて、急に立ち止まつて、小夜子の方を見る。
「ポチ、歸るの？」と小夜子は甲高な聲で呼んで、『忌、ポチは。今歸つたつて兄さん御いでならしないわ。』

ポチは何かに逐はれたやうに一散に驅け戻つて、小夜子の膝に身體を打ちつけた。小夜子はよろめきながらポチの頸を抱へて、
『好い子、好い子、歸つて來たわね。サア、もつと彼方へ行くのよ。』

小夜子はポチと後になり先になり菜畑の間を縫つた。

ふと立ち止まつて振り返ると、家の屋根が、遠

い遠い果の、高い杉の木の蔭に小さく見える。

『マア。』と小夜子はポチの頸輪を抑へて、『こんなに遠くに來て仕舞つたわ、私、兄樣が御歸りになつて居たら何うしませう。』と頬を赤くして、『ポチ、歸るのよ、大急ぎだわ。』小夜子は袂を抱へて馳け出した。

羽仁君の書齋に入つた時、小夜子は眞赤な頬、をして、固く口を結んで、被布の總に波を打たせて居た。夫れでも手には菜の花を大事さうに持つて居る。夫れを卓子の上の花瓶に插して、小夜子は羽仁君の椅子に腰をかけたのであつた。

而して今、片頬を掌に載せて、茫然其の菜の花を見つめて居ると、碧い瞳が自ら曇つて、大きい眼が段々細くなる。

『アラ青海の叔父さん。』と小夜子は顏を擧げて眼を睜つた。

『何んな夢を見て居つたね。』と青海の叔父さんは安樂椅子に寄りかゝつて居た。

『叔父さん何時おいでだつたの、私ちつとも知らなかつたわ。』

『夫れは別よ。たつた今來たんでせう。』

『叔父さんは今朝來た。』

『イヤ今朝來て今まで小夜子さんの可愛らしい寢顏を眺めて居た。眞實に何といふ可愛い顏だつたらう、叔父さんは、可愛くつて〳〵、何度も何度も接吻をして上げたよ、些とも知るまい。』

『厭、叔父さんは。今來たばつかりの癖に。人が惡いのね。』と小夜子は卓子に顏を俯せる。

『可愛いつて賞めるのに、人が惡いなどと云はれては少し勘定が合はんな。』

『兄樣は？』と小夜子は顏を擧げる。

『兄さんは今日は歸らない。』

『アラ叔父さん、眞實のこと云つて頂戴、他へ御寄りして居るの？ 私大變待つて居るのに……』

青海君は微笑みながら凝と小夜子の顏を見る。小夜子は熱心に開いた眼を瞬いて、額際を少し赤くした。

『眞實は最早直に歸る。』

『さう。』と小夜子は溶けるやうな眼で青海君の顏を見て、口元で笑つた。

途端に玄關の方で婆やの聲がする。

『アラ兄樣お歸りよ。』と小夜子は椅子から跳ね下りて、飛んで行く。

小夜子の後姿を見送りながら青海君は、

『奇蹟だ。』と背を椅子の凭れに倒して、『She who loves, knows what love is.』と呟いた。

羽仁君は小夜子の肩に手を掛けて入つて來た、後から富佐子も來た。

其處に青海君の居るのも、後から富佐子の跟いて來るのも知らぬやうに、羽仁君は小夜子を抱へながら卓子の前の椅子に腰を下ろして、自分の胸に兩手を懸けて恍乎と濕んだ瞳を向けて居る小夜子の顏を詰視めた。

青海君は興味を有つた眼で二人を視ながら、嘗て羽仁君が小夜子を連れて銚子に行つた時に、其處から寄した羽仁君の手紙の一節を想ひ浮べた。

『……小夜子の前には物みな輝く生命を有ちし居り候。波にも岩にも樹にも山にも、小夜子は己れと同じ生命を見出し候。去れば小夜子は自然の生命と自己の生命との間に何の隔てを置かず、是を以て彼れに投じて全く歸一融合したるものとや申すべき。斯る自他の一致を愛と云はずして何とか名くべき。去れど世の常の愛は餘りに多くのものを希求し、需求せらるゝ愛なり。小夜子の愛は何物をも求めず、求められざる愛なり。世の常の愛は渇したる者の水に對する愛にて、小夜子のは、春の鳥の花に對する愛に候。彼の愛の目前には慾求の焔燃え、此の愛の

行手には永劫の生命のほの見え候。求め求めらるゝ愛にも潔きふしはあらん、求めず求められざる愛には些かの穢れもあらず。純にして潔きは人の子の愛にあらずとは今の人の、科學より教へられたりと稱するものに候へど、科學は決して斯ることを教ふべき筈なし。科學は人の智より進みたる事を教ふれど、如何ばかり進み行くべきか其の限界を定め得るものにはあらず。人を神にすべき道を求めたる昔の科學と、人を獸にすべき術を求むる今の科學とは、魔道の兩極端に走れるものに候。人の子にも純にして潔き愛はあり。たゞ人は、斯る愛を蔑しまんには餘り多くの求め求めらるゝものを有するなり。見よ、求むるところも、求めらるゝところもなき小夜子の愛の、爾く純にして潔きを得るを……』

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

羽仁君が小夜子を連れて、銚子の濱に遊んだのは冬の初めであつた。

蒼い浪が眞黑な岩に當つてドウと吼えると、四邊の海は雪の積つたやうに白くなる。小夜子は羽仁君の手を離れて、崩るゝ浪の飛沫の、夕立のやうに降りかゝる岩の上に驅け上つた。

小夜子の小さい姿が大きい岩の端に現れる。羽仁君は小夜子の眞白な額を、曉の空に輝く星のやうだと思つた。豐かな下げ髮は、雲のやうに亂れて、襦袢の袖の紅がひら〳〵と靡く。高い濤が岩を呑みさうに轟ひかゝると、小夜子の姿は湧き立つ霧に包まれる。羽仁君は手招きをして小夜子を呼ぶと、小夜子は頭を振つて羽仁君を手招きした。

岩を傳うて歩み寄つた羽仁君を迎へて、小夜子は、

『私、何時までも〳〵此處に居るの。』と確と羽仁君の胸に縋つた。

夫れは或る朝の事である。

松山をダラ〳〵上りに上つて行くと、總て松の盡きた所に、更に小高い丘がある。小夜子は羽仁君の手を曳いて昇つた。上に小さい石の宮がある。

急に眺望が展けて、太平洋も常總の平野も一眸に集まる。銚子の町は足下に甍を浴して、其の間から白い絲が一筋此方に走ると、次第に太くなつて、小石を敷いた街道になつて、丘の下の松山の裾を廻つて松に隱れる。其の松の上には眞白な犬吠の燈臺が聳えて、夫れに釣るされたやうに、細い煙を引いた汽船が行く。

利根の流れが、紫の地平線を出て青い野を、一筋白く蜿蜒りうねつて、次第に湖のやうに廣く、香取鹿島を洋々たる水の上に、夢よりも淡く浮べて、悠々と海に續いて居る。

後は松原が丘を廻つて、海が松原を廻つて、雲が海を廻つて居る。沈んだ夕日の名殘を受けてほんのりと紅らんだ海に、蝶々のやうな犬若島が、朧に黑く沈んで居る。

『兄樣。』と小夜子は耐へた呼吸を一時に放つたやうな溜息を洩らして、倒れるやうに羽仁君の胸に凭れて、恍乎とした瞳で羽仁君の額を仰いだ。

『其の眼は潔き愛の外何ものをも語り居らず。』と羽仁君の手紙にあつた。

夫れは或る夕の事である。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『奇蹟だ。』と呟いた青海君は、今も羽仁君の胸に凭れて同じ眼に羽仁君の顏を仰いだ小夜子を見て、そつと溜息を洩らして、

『求めず求められざる愛には些かの穢れもなし。』と胸の裡に繰り返した。

其時羽仁君は小夜子の手を採りながら初めて、

『青海。』と呼んで、『僕や小夜子は、自分の信ずる所を守つて居るのだ、夫れが人に背くか、人が夫れに背くかは必ずしも問ふ所でない。總ての人が能く其の信ずる所を守れば、之を已れに施すと同時に之を人に施す事になる、人に施すの道は即ち已れに施すに在るのだから。』

『夫れは極めて小乘的だ。』と青海君は、『見給へ、音樂は情緒の聲で、元々他人に對するものではないから、人が聽いて居ようと居まいと好かりさうなものだが、事實に於いて音樂は人に聽かせるものと定まつて居る。といふのは人間は一種の社會的感情を持つべきものであつて、已れの感情と人の感情との間に、共通の點の成るべく多く存在せん事を求める。即ち自他を感情によつて同化せしめようとするのだ、百人百色の心を感情によつて統一せしめようとするのぢやないか。言語、音樂、繪畫などは即ち此の同化の機關になつて居る。我々が妙な聲を出したり、變な音をさせたり、已れの感情をメロダイズして、其の印象によつて他人に同樣の感情を起させようとするのは、即ち同化を求めるのだね。さうなるから、我々は最も多くの人を同化せしめ得た場合に、最も多く滿足する。自分の情緒の聲すら尙且然りだ。況んや理性をやだ。理性の滿足は、已れの道理が萬人の間に行はれる事を感じて初めて獲らるべきものだ。山に入つて道を得た佛陀は、山を出でて其の道を衆生に施さざるを得たかつた。「我れ衆生を調伏せずんば誰れか之を調伏すべきぞ、我れ衆生を教化せずんば誰れか之を教化すべきぞ、我れ衆生を覺悟せずんば誰れか之を覺悟すべきぞ、我れ衆生を淸淨にせずんば誰れか之を淸淨にすべきぞ、これ我が作すべき所」と菩薩が仰せられたといふのは萬更說教坊主の譃ではない。寺の奧の龕の裡に引込んで居る木佛金佛にすら此の意氣込があるではないか、生きた人間が佛に敗けて何うする。又猶太の神の子も已れ一個天國に入つてもつまらないといふので、天下を率ゐて天國に入らしめんが爲に、甘んじて十字架に上つたではないか、人の子にして神の子にだも如かざるべけんやだ。君の主義は、此の世界に流行らないのみならず、極樂にも天國にも流行らない。夫れも君だから好いが、若し釋迦や基督が君のやうな事を云つて居て、山の奧で往生して仕舞つたり、獨りで天國へ入つて澄まして居たら、今日世界人類の三分の二以上を教化しつゝある二大宗教も出ずに仕舞つた譯だ、想はざるべけんやだ。』

『釋迦や基督には何億萬の人類を教化する力があつた。我々は唯一個の人を教化する事が出來れば望外の幸だ。』と羽仁君は小夜子の手先を握つた手に一寸力を入れて、『現代の人に、能く一個の人を化せしむる事の出來る力あるものがあるか何うかは問題だ。』

「イヤ、釋迦とか基督とかいふ連中と我々とさう懸隔があると思ふのは間違ひだ。天理教のおみき婆さんでも十數萬の人を教化したではないか。』

『おみき婆さんは豪かつた。婆さんは、滿足を純主觀の安定にのみに求めたストア主義と、自家の慾求を充す快樂を主たる滿足としたエピクロス主義とを折衷したのだ。主觀に一種安心の地を作つて「結構々々。」と嬉しがると同時に、慾望にも滿足を與へて、三味線を彈き歌を唱つて、お踊りまでして十分の快樂を貪ることを勸めた。最も能く時代の傾向に投じた所が中々我々如きの及ぶ所でない。』と羽仁君は笑つた。

『だから君に强ひて、おみき婆さんの如くせよといふのぢやないが、人の事業まで妨げるのは宜しくない。』

「一人の事業は妨げやしない。』

『イヤ妨げた。先刻我輩が、思ふ存分上遠野を

罵倒して呉れようと思つたら、腕力を以て止めだてしたではないか。『己れの信ずる所を守るなどといひながら、僕が己れの信ずる通り盗賊を盗賊と呼んだのを妨げたのは、人の事業を妨げたのではないか。』

『ホヽ、人を盗賊呼はりするのを自分の事業と定めて居るのね。』と富佐子は笑つた。

『事業だとも、立派な事業だ。羽仁君の假聲を使ふぢやないが、今の人間は、盗賊を見ても大きな聲で盗賊といふ事も出來ないのだ、云ふ權利が無いのだ。盗賊を盗賊といふのは容易ならん事業だ。其の事業を妨げるのは不都合千萬ぢやないか。』

『餘り亂暴だからよ、貴下は。』

『少しも亂暴な事はない、我は心の柔和なる者なり、といふ基督さへ、「爾の手爾の足己れを礙かさば斷りて之を捨てよ、眼己れを礙かさば抉出して之を棄てよ。」と云つたではないか、己れの手でも眼でもない上遠野如きを斷るのが何うしたといふのだ。僕は皆の面前で奴を打つ斷つて呉れようと思つたんだ。』

『「若し爾の兄弟爾に罪を犯さば、其の獨りある時行きて諫めよ。」とあるぢやありませんか、多勢居る時に行けば基督だつて屹度停めたわ。』

『イヤ外の連中に警戒する必要があるからだ。基督も數萬の群集に向つて「パリサイの人のパン種を謹めよ、是れ僞善なり。」と叫んだではないか。』

風呂が沸いたと小間使が知らせて來たので、羽仁君は座敷を出て行つた。

『人の議論を湯に流すとは怪しからぬ。』と青海君は追ひかけて行く。

富佐子は羽仁君の椅子に腰を掛けると、縁先の小さい卓子の上に載せてある、鉢植の、水仙のやうな濃い黄色の花をつけた草卉に目をとめて、

『あの花は小夜子さんのでせう。』

『えゝ、ラッパ水仙。』と小夜子は富佐子の腕に凭れて、『私が植ゑたのよ、私水仙が大好きなの、先の眞實の水仙がもう花が落ちて仕舞つたから、これを植ゑたのよ。』

『兄さんは青海の叔父さんが彼樣に色々の事を云つて居るのに、小夜子さんの水仙ばかり見て居て何とも仰しやらなかつたわね。』

小夜子が富佐子の言葉の意味を解きかねたやうな顏で富佐子を見ると、

『兄さんは小夜子さんが餘程お好きなのね。』と富佐子は片頬を微笑ませて、『小夜子さんも兄さんが一番好きでせう。』

『えゝ。』と小夜子は富佐子の手先を自分の胸の邊に抱へて、『富佐子さんは？』

『私？』と富佐子は少し聲を高くして、『私は嫌ひ！』

『アラ、富佐子さんは兄さん嫌ひ？ マア何うしてでせう。』

『でも兄さんが私をお嫌ひなんですもの。』

『嘘！』と小夜子は斷乎たる口調で、『兄樣富佐子さんが餘程お好きよ。』

『マア小夜子さんは。』と富佐子に採られた手先を引いて、更に小夜子の肩を押へて、『好い加減な事を仰しやるのね。』

『アラ然うよ……』と小夜子は少し額際を赤くして言ひ淀むと、富佐子は、

『私、何時でも兄さんと喧嘩ばかりして居るぢやありませんか。』

小夜子の小さい顏には當惑の色が浮んだ。羽仁君と富佐子と喧嘩した事があつたか何うか小夜子は知らないが、二人で口も利かずに一時間も二時間も睨み合つて居たのは小夜子も屢見て居る。けれど夫れは富佐子さんが餘り惡戲をするから兄樣がお怒りなさるのだと小夜子は思つた。何時かも、さういふ時に小夜子が入つて

行くと、「兄樣は富佐子さんに、『歸れ。』と煩さうに仰しやつた。すると富佐子さんは、突然小夜子を抱へて兄樣の膝の上に拋り出すやうに置いて、男のやうな歩き方をして歸つて行つた事があつた。小夜子は今其樣な事を想ひ出して、これが喧嘩か知らんと思つたが、何うも喧嘩らしく思へない、ばかりでなく何んだか兄樣は富佐子さんが好きらしく思はれてならない。でなくとも、富佐子さんのいふやうに、兄樣が富佐子さんを嫌ひとは何うしても思へない。何故富佐子さんは彼樣な事をいふのでせうと、小夜子は聊か不滿にも思つた。

「喧嘩ぢやないぢやありませんか、彼樣な事。」

と小夜子は賢げに否定する。

「彼樣な事つて、何んな事か小夜子さん御存じ？」

「えゝ、兄樣が口をおきゝなさらない事でせう。」

「さうね。」と富佐子は笑つて、「兄樣は誰れにでも無暗に色々なことを仰しやつて、時によると叱つたりなんかするでせう。ですのに私には戯談ばかり云つて、ちつとも叱つて下さらないのよ。兄樣は餘程私がお嫌ひなんですわ。」

富佐子は自分の口調が少し眞面目過ぎたのに氣が附いたか、薄く頬を染めて苦笑する。

「夫れは富佐子さんの方が戯談ばかりお爲なさるからだわ。」と小夜子は烈しく打消して、「富佐子さんを叱らないのは矢張お好きだからぢやありませんか。」

「夫れぢやお好きと定めませう。」と富佐子は其の話に倦きたやうに、恍然と側の水仙を見た。

「夫れなら富佐子さんも兄樣が好きでせう。」と小夜子は念を押した。

『いゝえ大嫌ひ！』と富佐子は仰山に云つて、小夜子の頭を抱へざまに、其の眞白な頬に二三度烈しく接吻して、其のまゝ不意と立つて緣に出た。

小夜子は後から富佐子に抱きついて何か云はうとすると、富佐子は、大きいラッパ水仙の花を一寸指の間に入れて、

「昔、希臘といふ國でね、木靈といふ女の神樣が林の裡に居たのよ。」と獨語のやうにいふ。

小夜子は不思議さうな眼で富佐子の顔を仰ぐと、富佐子も小夜子の顔を見下ろして、

「其の女神はね、ナーシサスといふ美しい男の神樣が大へん好きでしたつてね、けれどナーシサスは木靈の事を好きとも何とも思はないもんですから、木靈は悲しくつて、悲しくつて、消えて仕舞ひたい程悲しく思つたのですよ、夫れだもんですから、たうとう木靈の身體が段々消えて仕舞つて、聲ばかり林の裡に、今に殘つて居るのですとさ。」と微笑んだ。

「まア可哀想だ事！」

「可哀想でせう。ナーシサスはさういふやうに木靈を嫌つて、自分の姿を水に映して夫れを一番好きにして居たのよ、さうしたらたうとう水仙になつて仕舞つたんですつて。ですから水仙をナーシサスと云ひますの。」

「マア水仙に！」と小夜子は珍らしさうに喇叭水仙を眺めて、「ぢや木靈は聲ばかりになつても、矢張、此度水仙が好きでせうね。」

（七）

「姉さん未だお歸りにならないのね。」

妙子の部屋で、大きい唐卓に凭れて本を讀んで居る羽仁君の傍に坐つて、小夜子は編物の手を休めて、眠さうな眼で、電燈の球を眩げに見上げた。

「眠いかい。」と羽仁君が云ふと、

「えゝ。」と大きい眼を開いて、茫然として、「お話をして頂戴な。」

羽仁君は折々小夜子に西洋雜誌の挿繪をした

り、小説の一節を話して聞かしたりする事もある。今手にして居る雑誌で讀んだのは、ハイゼの小品で、伊太利のネープルス灣の漁村生活を材として、境遇の爲に妙にひねくれて、態と女性の特性を矯めて居る意志の強い女と、善良な正直な、たゞ戀の爲には一時目の眩む事のあるといふ若い男との間に、不思議な而して當然な、清い美しい戀愛が成り立つことを描いたものである。

ヴェスヴィアス山の懶げな煙を向うに見て、鏡のやうに静かなネープルス灣に、品のよい僧侶と、無口な若い漁夫と、憎らしいほどツンとした美しい村の娘とを乘せた一隻の小舟が浮んで居る。

軈てカプリの島に僧侶を送つて、歸りの舟路には、若者と娘と二人きりになる。

陸は遥かの後方に遠く、一羽の鴎も目に入らぬやうな、静かな海のたゞ中で、餘りに無情ない女の素振に激せられて、男は急に狂氣のやうになつて、

「己れ等の居所は此の海の中だ、モウ我慢が出來ねえ、たつた今、一しよに飛び込んで呉れ、サア。」といふより早く、飛び掛つて女をひつ抱へようとする、其の途端に女は激しく噛み附いて、ひるむ所を振りもぎつて、ざんぶと許り海の中へ飛び込んで、暫くは姿を見せなかつた。軈て浮き上ると、陸の方を目がけて達者な姿勢で泳いで行く。

男は驚く暇もない、茫然舷の中に突立つて、抜手を切つて泳いで行く女の姿を眺めて居る。まるで「奇蹟を見せられて居るやうだ。」とある。

男は我れに返ると、慌てゝ舟を女の方に漕ぎ寄せて、

「後生だから舷へ上つて呉ンねえ、己れア今氣が違つて居たンだ。己れの行爲ぢやねえ、神樣が御存じだ。モウ何も云はねえ、勘辨して呉れツてンぢやねえ、お前を助けずにや置かれねえんだ。やいローレルラ、後生だ、上つて呉ンねえ。」

夢中で叫んでも、女は何も聽えないやうにさつさと泳いで行く。

「到底陸迄は泳げやしねえ、二里もあるだらうぢやねえか、お母の事を考へて呉ンねえ、お前に此處で死なれちや、己ら恐ろしくつて到底生きちや居られねえ。」と男は泣聲になる。

女は首を擧げて陸の距離を測つたが、軈て向き直つて、舟に泳ぎ着いて舷に手を掛けた。男も助け上げようとして舷に寄る。舟が急に傾いて舷に掛けてあつた男の上着が海に滑り落ちて沈んで仕舞つた。女は敏捷く舟に飛び上つて元の處に坐つた。男は安心して櫂を採り始める。髪や衣服の水を絞りながら、女はフト、自分が噛みついた男の腕から流れた血汐が、舟底を紅く染めて居るのを見ると、迅速に目を男の腕に注いだが、其の腕は流れ出る血汐を物ともせず、何處に傷があるかとばかり、平氣で櫂を操つて居る。

「サア。」と女は舟の中に落ちて居た自分の頭巾を男の前に差し出した。男は默つて首を振つた。女は立ち上つて男の腕を掴んで、其の頭巾で固く繃帯をして、而して男の無言で拒むのを無言で争つて、其の手から櫂を奪つて、代つて漕出した。男の顔は少しも見ずに、舟底の血汐を凝と見詰めながら、確乎とした調子で漕いで居る。兩人とも眞着だ、兩人とも無言だ。

といふやうな所がある。

羽仁君が其處を一寸摘んで話して聽かせると、小夜子は編物の手を休めて熱心に聽いて居た。而して再び編物を始めながら、

「夫れから何うして？」

「夫れから兩人は御夫婦になつたの。」

小夜子は目を圓くして、

「御夫婦に？　夫れで何うして其様に喧嘩したんでせう。」

「喧嘩をするほど仲が好かつたのだらう。』

『マア「喧嘩をするのは仲が好いの？」と小夜子は半ば迷つたやうな、半ば會得したやうな眼附をして、ホッと溜息を洩した。先刻の富佐子との問答を、胸の裡に繰り返してでも居るのか。

編物の手が次第に御留守になつて、小夜子は俯て、羽仁君の膝に倒れ掛つて來る。そつと抱き寄せると、細い目を開いて微かに笑つて、嬉しさうに羽仁君の胸に顔を押しあてたまゝ、小夜子は餘念なく寝入つて仕舞つた。

勢よく襖を開けて、入つて來たのは妙子であつた。羽仁君は振り返つて眼配せをした。

妙子は羽仁君の胸に餘念なく寝て居る小夜子を見て、

『マア。』と微笑んで卓の傍に坐つて、『唯今。』と聲をひそめる。

『人間の睡眠には必ず秘密の夢がある、如何なる聖賢も明らさまに自分の夢を語れば俗人だ、「枕をして言はしめば聖人も赤面すべし。』と羽仁君は、口元に笑を含んだ小夜子の寝顔を凝と視て、『小夜子の睡眠は神の睡眠だ。』

何時ものことゝ妙子は別に驚いた顔もせず、無意識に兄の言葉を聴き流して、薄い手套を脱いで卓の上に置いて、

『今日は早く仕舞つたのですけれど、あの……』と言ひかけて、羽仁君の顔を見て、『青海さん眞實に何うしたんでせう、あんな事を言つて、私も隨分腹が立つてよ。』

羽仁君が若し顔を擧げたら、妹のきかぬ氣の顔に包み切れぬ不滿の色の現れて居るのを見たらうが、依然目を落して小夜子の寝顔を眺めて居る。

妙子は眉の邊に穏かならぬ皺を寄せて、力のある目で兄の顔をチラと見て、

『里。』と強い聲で小間使の名を呼んだ。

小夜子は大きい眼をパッと開いて羽仁君の顔を仰いで、其の胸を離れた所へ、小間使の里が入つて來る。

『小夜子さんを彼方へ連れて行つて寝かして上げるの。』と妙子は艶のない調子で命ける。

小夜子は初めて妙子の居るのに氣が附いたが能く／＼眠いと見えて頓に言葉も出ない。

『サア小夜子さん、モウお寝みなさい。』と妙子に云はれて、小夜子は里に手をとられながら、半ば夢のやうに、

『お寝みなさい。』と出て行く。

小夜子は行つて仕舞つても、羽仁君は尚問題を繼續して、

『小夜子の睡眠は清く、けれども其の清さは總てのものを拭ひ去つて何物もないといふ清さではない。總ての物は其の裡に在つて、而も其の物自體が何れも清く美しいのだ。』

『さうねえ。』と妙子も仕方なしに應答する。

『若し神が心あつて女の外貌を殊に清く美しく作つたとすれば、夫れは其の清く美しい内容を示さうとしたのだ。男の外貌の強くたくましいのも、畢竟其心の強く逞しい事を要求したのだ。然るに社會現象の厖雜な爲に、夫れが邪道に入つて仕舞つた。其の後順當に其の目的と手段とによつて男女を作つて居るものは、神でなくして美術家だ。美術家は神が失敗し、次いで詩人が失敗した事業を回復しようと努めて居るのだ。今日の世界では、神が望んだやうな男女は、モウ詩にも無い、畫で見るより外にはない。さう思ふと小夜子も或は繪として清く美しい女なのではあるまいか、少くとも、さうなつて仕舞はないだらうか。』と羽仁君は電燈の球を睨んで深い息を吐いたが、暫くして、

『イヤ女は決してさういふものぢやない。一女

の眞に女らしいのは、最も尊敬すべき、最も崇高な感を余に與へて、其の姿を見、其の聲を聽くのみで、何ともいへぬ尊い空想を以て、心を豐かにされるやうに感ずる。」と云つたのは女の本來の性質を能く説明して居る。神が作らうと思つた女は夫れだつた。」と云つて突然、「妙子、お前夫れを讀んだか。」

「何を？」妙子は一向見當がつかぬ。

「伊太利建國の少し前の志士でシルヴィオ・ペルリコといふのが居た、日本でいへば丁度賴山陽といつたやうな時代の人間だ。尤も山陽は歴史家だつた、イヤ歴史家といふよりは寧ろ一種の愛國的文學者だつたが、ペルリコは劇詩家で同じ役割を勤めたのだ、ついに墺國官憲の手に捕へられて死刑の宣告を受けたが、減刑されて、十年の間殘酷な禁錮に遭つて居たのだ。」

妙子には何の話だか少しも譯が解らぬ、夫れより、今日青海君が滿座の間で、上遠野君を罵つたので、流石の上遠野君も非常に怒つて、一同の歸つた跡で妙子に向つて色々な事を云つた、其の大要を妙子は兄に語つて自分の意見をも云はうと思つて居るのだが、羽仁君の樣子が餘り取り止めがないので、云ひ出す機會を得ない。さりとて伊太利の愛國者の話を默つて聞いて居る氣もしないので、思ひ切つて、

『ねえ、兄さん、今日青海さんは何うしたんでせうね。』

羽仁君は妹の顏を瞻めて、

「青海は別に何うしたのでもない。」

「でも彼樣な亂暴な事を云つて、如何に遠慮のない仲でも、餘りぢやありませんか。上遠野さんも隨分怒つてゝよ。」

「上遠野が何と云つて怒つて居た。」

「自分は些も疚しい所はないから、何と云はれても平氣だが、青海が今更他人の前で理由もない罵詈を加へたのは、何か底意があつたのだらう、人の前で盜賊呼はりをするのは、全く自分に侮辱を與へようとしたのだつて。而して上遠野さんに自分の爲て居る事は、何んな明るみへ出しても耻づべきものとは思はないが、あゝ云ふ人に對つて辯疏する必要はない、若し青海さんが氣に喰はぬと思ふなら、サッサと絶交して呉れるが好いつて言つてゝよ。」

「お前は何う思ふ。」

「私だつて青海さんが餘り常識が無さ過ぎると思ふわ。實業家と云へば、學者や教育家の樣に清廉潔白なものぢや無いのは解り切つた話ぢやありませんか、又夫れでなければ、生存競爭の烈しい實業界へ出て、人並以上に頭を擡げる事が出來る筈はないわ、而して、さういふ人も世の中には隨分有用なのぢやなくつて？ 聖人や學者のやうな人ばかりだつたら世の中は建つて行くものぢやないでせう。』

「夫れも好からう。」と羽仁君は微笑して、卓の上の雜誌を擴げて EARN $25 A WEEK と大文字の出た看護婦學校の廣告を讀んで居る。

「夫れを青海さんが盜賊の何のつて罵りだわ。音樂家たんてものは非常識に定まつて居るのでせうけれど、夫れを看板にして人の名譽を傷けるやうな事をしちや、自分の品位にも拘るぢやありませんか。』

「大に論じるな。」と一週二十五弗を儲けるといふ廣告を讀んで居た羽仁君は其の標題の直ぐ下に Woman's noblest Work とあるのを見て微笑みながら、「一週で二十五弗儲かるとあると、金を儲けるのが目的のやうでもあるが、婦人の最も貴い仕事とあると、貴い仕事を爲るのが目的のやうでもある。金が目的なら、仕事の貴いと否とを問ふ必要はなからう、貴い仕事が目的なら金の儲かると否とを問ふ必要はなかりさうなものだ。今の人間は中々慾が深い、金さへ儲ければ好いといふ奴でも、同時に其の金

備け仕事に何か道徳上の價値を附加へようとする。又道徳上の價値のあることを爲らうと思ふ奴でも、同時に金が儲からなければ實際爲るに至らない。今の人は、道に依つて自分の行動を律しようとしないで、自分の行動に依つて道を律しようとする。自分を、心の欲する所矩を踰えずといふ聖人と同格と心得て居るのだから凄じい。惡人が自分のみを獸化して居つた時代は漸く過ぎ去つて、道徳其のものを獸化しなければ滿足しない時代が來た。昔の人間は心の欲する所矩を踰えざるの域に達せんが爲に、己れを改造しようと努めた、今の人は同じ目的を以て、矩の方を改造しようと焦つてゐる。脊髓の曲つた人間が矯正器を嵌めて其の曲りを直さうとはしないで、矯正器の方を歪めて曲つた脊髓に合せようとするのだ。形式の上から見れば夫れも適合だ、調和だ。論理を合せたのみで滿足が出來れば夫れでも差支へなからう。衷心疚しくないといふのは、己れの心も行ひも法則に適合したものだと確信して居るといふ事だが、今の人は曲つた脊髓に歪んだ矯正器を嵌めて能く適合して居ると確信して居る病人だ。偶眞直な矯正器を持つて行くと、夫れは、昔の人か馬鹿か狂人かが嵌めた器械だと云ふ、其樣な器械に嵌まる脊髓があつてたまるものかと笑ふ。醫師から見ると、さういふ病人の方が馬鹿か狂人かだ。』

『夫れは上遠野さんの事?』と妙子は震へ聲で兄の言葉を遮つた。顏は眞赤だ。

『上遠野の事といふ譯もないが、上遠野にしても、衷心疚しくないと云はうと思ふなら、先づ自分の矯正器が曲つて居るか居ないかを檢むるのが肝要だ。けれども其の曲りを見るには定木が無ければならない。上遠野はモウ定木を失くして居やしまいか。』

妙子は益々顏を赤くして、絹半巾を口に銜へて引張つて居る。

『青海はたゞ常識を失つた男だ、上遠野は常識よりもまだ大切のものを失はうとして居る。今の人間としては典型的だ。確信のない人間は、自分が全く其の當時の典型に合へば夫れで立派な人間だと思ふ、上遠野が衷心疚しくないといふのは譃ぢやあるまい。』

妙子は半巾を噛み切りさうに引張りながら、眼を濕ませて庇髮を震はして居たが、

『ねえ兄さん。上遠野さんも云つてましたわ、兄さんも屹度青海さんと同じ御意見だらうつて。全くさうなのね。』

『同じでも異つて居ても好からう、私は青海のやうに呶鳴らんから。』

『ですから猶困るつて云つてゝよ。』

『困る事はあるまい。きまりが惡いといふのは處女の事だ、既にヷーヂニティーを失つたものが、人に指差さゝれたからつて、狼狽へる事もあるまい。』

赤かつた妙子の顏の色は次第に青くなる。

『すると兄さんは、上遠野さんの事を、何う爲さらうといふの?』

『何う爲ようとも思はぬ。』

『勝手にしろといふのね、夫れぢや餘り不親切ぢやなくつて?』

『私には上遠野一人の事を問題とするほどの餘裕がない、さういふ細目に亙るまで頭腦に餘裕が無いのだ。尤も上遠野といふ男が、元來特別の問題となる價値のある人間ではない、あゝいふ人間を一人々々に就て特に考へるといふ事は不可能だ、不可能でないにしても無益の事だ。』

妙子は萎れたやうな顏で、マジ/\と兄の廣い額を見た。

上遠野君が妙子に結婚を申込んだのはつい此の頃の事だが、兩人の間には、早くから、元より汚れた意味は毫もないが、一種の關係が成

り立つて居た事は、羽仁君の家に出入するものの間に、公の秘密になつて居た。羽仁君は上遠野君から交渉を受けた時に斯ういふ意味の事を云つた。

「愛は絶對に自由だ、自由は他の干渉を許さぬ。其の代り自由を存する者は、自ら一切の危險を負擔せねばならぬ。上遠野君に對しても妙子に對しても、僕のいふべき事は平生言つてある、此の場合に特に言ふのは夫れ丈けだ。」

で兩人は一切の危險を負擔して婚約を結んだ譯であるから、今更何んな危險が出來しても、其の負擔を羽仁君の所へ持つて行く事は出來ぬ。從つて妙子は今、兄に、上遠野の事などは何うでも好いと突き放されても、故障を申し出る權利といふやうなものはない。けれども兄さんは、上遠野さんとは小兒のうちからの朋友であつて見れば、特に研究する價値のない人間だといつて上遠野さんの事を、何うとも爲れと云はぬばかりに扱ふのは、なんぼ何んでも餘りだ。平生些細の事でも、何うかすると、一時間も二時間も眞になつて論じつける癖に、自分の妹婿の一身の問題を、考へる價値すらないとは、到底眞面目な言葉とは思はれない。これは屹度兄さんが上遠野さんの事を餘程何か氣に障へて居るに違ひないと妙子は思つた。と共に動悸が昂つて、左の胸の邊がヅキ／＼と痛むやうに感ずる。

「兄さん。」と急に力のない聲になつて、妙子は訴へるやうな眼で兄を見た。

「ム、。」といつたきりで、羽仁君は再び卓の上の雜誌を繙いて、妙子の方を見向きもせぬ。

「兄さん、私其樣な事を云つちや濟みませんけれど、上遠野さんの事をさう惡いとは思へませんの。けれども兄さんが然ういふ風に思つておいでだと、私何うしたら好いでせう……」

妙子は子供らしい甘えたやうな調子で云つて卓に胸を押しつけて、下から兄の顏を覗くやうに見る。

「心配する事はない。」と羽仁君は優しい微笑を見せて、「私の考へと上遠野の考へとはさういふ風に、懸隔のあるどころでなく、全く見當違ひの所にあるのだが、夫れが爲め私は上遠野を何んとも思つて居るのではない。今の世の中で、兎に角、合法と公正といふ事だけでも考へる人間は殊勝なものだ。合法や公正と云ふやうな事は、夫れを考へないと人が通さないから、何人も已むを得ず考へるものなので、云はゞ鐵道の切符のやうなものだ。今の人は其の切符をさへ持つて居らぬ。偶〻持つて居るものがあれば僞造切符だ。上遠野は兎に角眞實の切符を持ちたいといふ希望だけはあるらしい。たゞ其の切符が何處へ行く切符だかは漠として知る所がない、何の爲めの合法、何の爲めの公正だか一向解らないのだ。然し夫れは、元來我々の乘つて居る文明といふ急行列車其のものが、何處に向つて走つて居るのだか解らないのみならず、果して軌道の上を走つて居るか何うかさへ解らないのだから仕方ない。さういふ世の中で、人間を選擇するに、上遠野位のを捨てて仕舞つたら取るものは殆ど無からう。」

「ぢや兄さんは、上遠野さんの事を怒つておいでぢやないの？」

「上遠野一人に對して、青海のやうにムキになつて怒つたら、全人類に對して何ういふ怒り方をして好からう。」と眼を瞑つて天井を仰いで、「あゝ我々如きは思ひも及ばぬ事だ。」

羽仁君の廣い額に困惑の色が浮んだ。

（八）

「夫れで聊か安心した。」と上遠野君はウヰスキーの洋盃に手をかけた。

庭の櫻がハラ／＼と散つて、徐かに宵を攝い

て、一片二片緣に舞ひ込む。

羽仁君は默つて上遠野君の洋盃にウヰスキーを注いだ。上遠野君は洋盃を取り上げて、

『君は元來超然主義だから、一々用もない事を報告しなかつたのだ。外にもまだ君に云はぬ事は幾何でもある。』と高く笑つて、『然し御蔭で青海に誤解されたのだから、これからは煩くとも折々報告する事にするかな。』

『矢張爲ぬ方が好からう。』と羽仁君も笑つて、『然し頗る發展したものだ。』

『イヤ前途遼遠だ。所で青海の所謂大建築も、僕は今の秋田の鑛山の用向きで、二三月彼地へ行つて居らんければならぬから、當分は着手されまい。結婚は延びる程味はあるが、成るべくは其の前に濟ましたいと思ふ。』

兩人は雜談に移つて、上遠野君は幾杯か洋盃を乾した。

『アヽ好い花だ。』と上遠野君は艶々と紅くなつた額を撫でて、『我々の生活も隨分厄介なものさね、落ち附いて花などを眺める閒もないんだからな、時間はあつても頭腦に暇がない。考へて見れば馬鹿々々しいやうだが、之が人生だらう。我々の方からは、君などは何を爲に生きて居るのだか解らないし、君の方からは、我々が何の爲に齷齪して居るのか解らないといふ、各本領を異にするのだから已むを得ない。青海のやうに、自分の流儀でないものは片端から攻擊するなんてのは、矢張人生の眞相を知らんのだな。我々が斯ういふ活動をやつて居るのも、青海が藝術に身を委ねて居るのも、同じ本能の働きだ。何といふ事なしに、好む所に趨つて居るので、其の無我夢中なる所に天眞を見るのだ。何も金を儲けて下等の慾望を充したいといふやうな事を、特更考へてからかゝつた仕事ではない。たゞ金が出來れば、其處は人間だから、多少慾望も增して、金の無い奴が無理に押へて居ると同じやうな譯には到底行かぬ。然し多少の慾望を滿したからつて、夫れを以て直に人間が劣等だと斷定する譯には行くまい。立派な家に住まつて上等な食物を喰ふといふやうな事が、道德上の問題になるやうな時代はモウ經過して仕舞つた。生活程度の高まる事が進步の刺戟になるのだから、人間は慾望を制して未開の生活に甘んぜんよりは、寧ろ慾望を發達させて生活狀態を益昂めて行く事が、人類の進步を促す途だといふ事になつた。簡易生活などを說くものの如きは、畢竟會席料理に飽きて澤庵で茶漬が喰ひたいといふ類で、たゞ一時の息拔きを欲するに過ぎない。進步が社會の常態だとすれば、我々は十分慾望を發達させて、之を滿足させる途を案出しなければならんのだね。』と上遠野君は滔々論じ來つて、『尤も君等は、何も其樣な事を考へて金儲けをやつて居るではないが、強ひて理窟を捏ねれば其樣なものだ。』と昂然として洋盃を擧げた。

『さうさ、娘が白粉を塗る動機を詮索するには及ばぬ。其の綺麗な首だけ見て居れば好いのだ。』と羽仁君は微笑した。

『相變らず烈しい一人合點だ。』と上遠野君は笑つて、『我々は現代に惚れ、且惚れられて仕舞つたのだから幸福な譯さ。君等は現代に振られて燒糞になつて居るのだ。』

『ヤア。』と入つて來たのは青海君だ。

『來たな。』と上遠野君は眞赤な顏をむけて醉を吹いた。

青海君は其處に坐るや否や、羽仁君の洋盃を取つてグイと呷いだ。

『盛な男だな。』と上遠野君は、『我輩は何れ君に一談判しようと思つて居たのだが、今羽仁君の說を聽いて一先づ思ひ止つた。命冥加な奴だ。』

『マア注げ。』と青海君は洋盃を差出して上遠野

君に注がせながら、
『思ひ止まるには及ばん。我輩こそ大に談判せにゃならん事がある。』と羽仁君に向つて、『今日は此間の事とは別の筋だ。君は暫く默つて聽いて居つて呉れ。妹子も小夜子も居らんで丁度好い。』
青海君は衣袋から一枚の繪端書を出して卓の上に置いた。二重瞼の判然と撮つた十六七の女の寫眞である。
『此の女を君は知つて居るか。』と青海君は夫れを上遠野君の前へ押しやつた。
上遠野君は充血した眼で其の寫眞を暫く眺めたが、急に仰山に笑ひ出して、
『此樣なものを何處から盜んで來た。』
『何んでも好い。』と青海君は眞面目に苦い顏を見せて、『此の女を知つて居るか居らんかと聽くのだ。』
『夫れは知つて居るさ。』
『何者だ。』
『藝者さ。』
『何處の藝者だ。』
『新橋さ。』
『何といふ者だ。』
『可愛い奴だな。好い加減にしろ。』
『誤まかさうと思つてもだめだぞ、サア往生しろ。』と青海君はウヰスキーの洋盃を閑却して、詰め寄せながら、『不埒な奴だ。』
『何が不埒だ。』と上遠野君はムッとしたらしく、冷かに、『君等に不埒と云はれる覺えはないぞ。』
『羽仁、此奴を見ろ、新橋の君奴とか何んとか云ふ動物だ、此奴に旦那があるんだ。オイ上遠野、其の馬鹿野郎は誰れか、此處で言へるなら言つて見い。』
『其の馬鹿野郎は此の己れさ、夫れが何うしたんだ。』上遠野君は洋盃を擧げて呵々と笑つた。
『驚かざるを得ない。』と青海君は腕を組んで羽仁君の面を見た。
『平凡な男だなア。』と上遠野君は嘯いた。
『君は多年我黨の士として……』
『不景氣な事を云つて呉れるな。』と上遠野君は青海君の言葉を遮つて、『我黨なんてものは何んなものか知らないが、僕は君方のやうに、手も足も出ないので、已むを得ず坐して正義を唱へるやうな憫れな人間の仲間入りは眞平だ。盜賊とでも何んとでも言へ、我々は飽迄奮鬪するのだ。戰の人は、「殺す勿れ」といふやうな坊主の出來ない相談などに耳を傾けて居る暇はない。切つて、切つて、切つて、切りまくるのだ。男たると女とを問はんぞ。殺されまいと思ふ奴は自ら防禦するンだ。僕等は其の鏖殺の間に無上の快樂を獲る、殊に女を殺す時に於て最も然りだ。』と上遠野は燃えるやうな顏を崩して大に笑つて、『尤も腰を拔かして囀つて居るやうな奴は相手に爲んから安心するが好い。』
『腰を拔かして囀る?』と青海君は肩を搖つて小さい身體を詰寄せた。
『駒が勇めばア、花アがーちイるー、イヤサノサー。』と上遠野君はふら〳〵と立ち上つて洋服の兩手を左右に伸ばして、妙な腰附で摩足をしながら、『これより新橋なる君奴許參らうずるにて候ふ……これは青海流の能樂だ。』
『オイ待て。』と青海君は中腰になる。
『これから銀行集會所で藏相の御說法を承るのだ。君等の屁理窟を聽くよりも愚だが、商賣となれば已むを得ない、豫め醉つぱらつてでも行かなきや助からん。左樣なら。』
青海君は上遠野君の後姿を見送つたが、ガックリ腰を落して、羽仁君の顏を見た。羽仁君は微笑して居る。
『君は笑つて居るな。』と青海君は泣き出しさう

な聲を出す。

『笑つて居る。』と羽仁君は、青海君の前の洋盃にウヰスキーを注いで、『笑ふより外に仕方あるまい。マア飲み給へ。』

『仕方がないといつて、あゝいふ人間を放つて置くか。』と青海君は恨めしさうに自分の前の洋盃を見た。

『放つて置かなければ何うするのだ。』

『何うすると云つて放つて置けるか。』

『放つて置けるかと云つて……何時まで言つても同じ事だ。』と羽仁君は笑つた。

『あゝいふ人間に、君は妹を呉れてやる氣か。』

『呉れるも呉れないもない、妹は僕のものぢやない。』

『誰れのものだ。』

『寧ろ上遠野のものだらう。』

『これは怪しからん。君は妹の墮落を默過するのか。』

『妹は現代の標準に據つて居る。』

『夫れが墮落でないか。』

『水の裡に住むものは水を吸はぬ譯には行かぬ。今の人間を現代の標準に據らしめないといふのは不可能だ。』

『といつて、上遠野如きに欺されて居るのを、兄として知らん顏で居るといふのは殘酷ではないか。』

『上遠野は少しも欺しては居らん。妙子は一切心得て居る。』

『心得て居る？　此奴の事もか。』青海君は君奴の寫眞を叩いた。

羽仁君は君奴の寫眞を取りあげてつく／＼と見て、

『男女の愛も今は、心と心とのみの愛ではないのだ。』

『人は心のみにて生くるものにあらずか、馬鹿馬鹿しい。』

『さうだ。一切の本質が沒却されて仕舞つた世の中に、愛のみが本質を保つと云ふ事はむづかしからう。今の女の愛は財布のやうなものだ、之を男に渡すのは、呉れてやらうといふのではなくして、夫れでもつて男の愛と、男の身分や地位から得らるべき虚榮とを買はうといふのだ。』と羽仁君は君奴を抛り出した。

『妙子も或はさうかも知れぬ。』と青海君は、『妙子には君の主義も精神も能く解つて居るのだ、解つて居るだけ夫れだけ、虚榮のない生活の苦痛を感じて居るのだ。而して自分の苦痛から推察して兄も亦同じやうな煩悶に在るものと誤解して仕舞つたに相違ない。實は僕には話さずに仕舞つたが、斯ういふ事があつた。』と青海君はウヰスキーを僅に舐めて、『伴が大學を出た時、我輩は奴に妙子を貰つてやらうかと思つて、伴の意向を探つて見ると、先生頭ごなしにはねつけたが、其處は我輩だ、其の刎ねつけ方の烈しいだけ夫れだけ御座つて居るのだと見て取つたから、早速妙子の方に探りを入れると、之は驚いた。「理學者なんてものは細君の事なんか構つて居る隙はないものでせう。ドクターの研究室へ産婆が入つて來て、「おめでたう御座います、男の兒さんでございました。」生れた赤ン坊の報告をしたら、ドクターは澄まして、「今忙しい、御用の筋は何か聽いて下さい。」と言つたといふ話があるわ。」つて、僕の鼻面を指で彈くのだ、妙子奴がさ。流石の我輩も勃然たらざるを得なかつたね。夫れは學者の赤ン坊だけに、自分の産れて來た用件を諒す事が出來ただらう、なんかんと口ぢや云つてたが、全く腹が立つたね。要らぬおせつかいをして、面目玉を踏みつぶされた譯さ。然し之を以て僕は、妙子が愛といふものを科學以上に尊いものと認めて居るのだとは推定しなかつた。妙子が科學者を排斥したのは科學者に愛が無いからぢやない。

妹子には愛よりもモット欲しいものがあつたのだ、夫れを科學者の僕は持ち合して居らぬと妹子は諦めたのだ、だから夫れを持合して居る上遠野に行つたのだ。」

「一昔の女は愛を生命とした、今の女は愛を上衣にして居る。」と羽仁君は苦笑して、「而して其の上衣を生命よりも大切にして居る。」

「さうだ。」と青浦君は、「玉の緒よ絶えなば絶えね、愛の衰へて生きんよりは寧ろ焦れ死に死するに如かずとあるぢやないか。今の女は百人一首も呑み込めないのだ。餘計な渣滓の多い生存から「愛」といふ甘い汁液のみを絞り取つて吸ふ、夫れが女の權利であり、幸福である、といふ事を知らんのだから寧ろ憫むべきものだ。」

「文明の濃霧は人生の標的を掩ひ隱して仕舞つた。今は女は愛の的を失つた外れ彈だ。中るものを貫かうとして居るが、夫れは愛でなく、而も何物だか解らない。此の迷つた彈に行手を教ふるものは、文明の怪霧の裡に潜んで居る惡魔だ、而も其の惡魔はファウストを陷れたメフィストフェレスでなくして、マクベスを惑はした妖婆だ、だから今の女は愛に魅せられたマルガレットのやうには悶えず、虚榮に渇したマクベス夫人の如くに悶えて居る。」

「大に然り。亞米利加の富豪の娘が、莫大の持參金を擔いで英吉利や獨逸の貧乏貴族に嫁に行くのも、其の妖婆の媒妁だ。マアルボロー公爵夫人になつたヴァンダービルトの娘などは一人で一千萬弗も背負つて行つた。今日まで米國の嫁が英國へ持ち込んだ持參金の總額は實に五億二千八百萬弗、十億圓餘だからなア、日本の外債程ある、娘の嫁入の爲に米國の經濟界に恐慌の起る事が出來ぬとも限らぬと、心配するものもあるのも無理はない。」

「富豪の娘が英吉利や獨逸へ出かけるやうに田舍の娘が、紐育や市俄高といふ腐敗した都會の生活を慕つて續々集まつて來る、夫等が都會の惡風に染つて奢侈心は限りなく增長する、所得は其れに伴はぬといふので、勢ひ女子たる事を犧牲として不潔生活に入る、所謂冒險女と云ふ奴だが、たゞに田舍娘のみならんやだ、天下の女は悉く冒險女だ、一千萬弗を背負つて公爵夫人となる女の如きは最も甚だしい冒險女ではないか。文明はあらゆる方面に於て冒險女を製造しつゝある。工業の發達が女子の勞働を擴張せしむるのも、中流社會の生活難が女子に職業を選ばしむるのも、上流社會の女の、猫と小說とピアノを玩弄にする外に仕事のない懶惰生活も、皆冒險女を作る途だ。殊に女子高等教育の勃興は、最もリファインドされた最も始末の惡い冒險女を作り出しつゝある。而して此の風潮は世界の女を漂はせなければ已まぬ勢ひだ。今の女にして冒險女たる事を脫れようとすれば、全く現代の標準を離れなければならない。」と羽仁君は落膽したやうに、「夫れは革命だ。」

「革命！革命！」と青浦君はウヰスキーの盃を擧げて、「我々は必ず其の革命を來さねばならぬ。」

「其の革命の來るのは彌勒の世だ、審判の日は世界の終りだ。」

「來れ終りの日よ！ 斯くの如く愛に障る世界に、最終の日の來るのは祝福だ。滅亡は幸福である。世界は改造されねばならぬ。最終の日は初めの日だ。オイ羽仁、妙子の結婚を最後の日まで延ばす事にしろ、切めて此處の家だけでも、最終の日まで現代の空氣の入らぬ所をこしらへて置きたいと我輩は思ふ。」

「一世に革命を來すべき人もある、一家に革命を來すべき人もある、たゞ一身に革命を來し得るに過ぎぬ人もある、人の天分と運命とは如何とも爲る事が出來ない、僕は其の最後のものだ

るに滿足せざるを得ない。』

『又始まつた。』と青澤君は舌打をして眉を顰めながら、『一家に革命を來すは譯もない事ぢや無いか、妙子に嚴命を下せば夫れで好いのだ。何うせ革命は火と鐵とを以て實行するのだ、妙子が聽かなかつたら拳固位喰はしたつて構ふ事はない、ピアノなんぞさへ禁じたではないか、より大切の事を強制されんといふ理窟はあるまい。』

『犧牲を要求するのは、夫れよりも優れたものを與ふる爲だ。何物をも與へないで犧牲のみを要求するのは酷だ。僕は妙子から或物を奪ふ事は出來るかも知れぬが、何物をも與ふる事は出來ない。』

『奪ふのは即ち與ふるのだ。現代の犧牲となる事から妙子を救ふのだから、最も大切の生命を妙子に與ふる譯ではないか。』

『腐水の池を嫌つて甘んじて沙の上に死する魚は愚だ、他の魚を腐水より救はうとして、之を愚なる魚と同じ運命に置くのは無慘ではあるまいか。』と羽仁君は目を瞑いで微かに頭を振つた。

（九）

觸るゝものを醉はせる富佐子の瞳と、觸るゝものを征服する妙子の瞳と、羽仁君のデスクの眞上でヒタと出會つた。小夜子の水仙の黄色い花が其の下で謳いて居る。

『ホヽ、妙子さんは。』

『ホヽ、富佐子さんは。』

異口同音に云つて、合せた瞳を離して兩人に額を伏せて笑つた。人肌の生温い風が兩人のほてつた頬を撫でる。

『眞實に隨分でしたわね。』と富佐子は水色の刺繍をした上衣の胸を少し突出した。

『何うも御氣の毒さま。』と妙子は、銷納戸の御召の優しい肩を一寸竦めた。

『マア彼樣な事を。』と富佐子は笑ふ眼で睨んで、『あゝ彼處を寫眞に撮つて置いてあげれば好かつた。』

『さうして戴きたかつたわね。』

『貴女は！』と富佐子は椅子を離れて妙子の傍に寄つて、其の手を採つた。蔦の葉の指輪の寶石が妙子の藥指にギラ〳〵と輝く。其の指を富佐子は妙子の眼の前に差しつけて、

『これは何？』

『私の希望。』と妙子は態とにこりともせずに、富佐子の顔を見上げる。

富佐子は其の指輪の手をヒタリと打つて、妙子の膝に投げつけて、後の椅子に凭れた。

『オヽ痛い。』と妙子は美しい指先を揉みながら、『痛いぢやありませんか。』

『希望にも苦痛がありますか知らん。』

『自分に希望のない人は、他の希望に苦痛を與へて、僅に慰めるのね。』

『何とでも仰しやい。これでも希望があるのですからね。』

『最早希望の打ち壞しはお已めにしたの？　變節ね。』

『眞實の希望は何時あつたつて打ち壞しやしないわ、打ち壞したのは無價値の希望ばかりよ。』

『貴女にも眞實の希望があつて？』

『夫れはあるわ。』

『マア訝しい。何んな希望？』

『私の？』と富佐子は嘲笑つて居る。

『お生憎樣でせう、御氣の毒ね。』

『ありますとも、たゞ貴女の指にあるやうな金や寶石の希望でないばかりよ、ホヽヽ。』と富佐子は起ち上つて、『左樣なら、ミセス上遠野。』

『マア何うして歸るの？』と妙子は起ち上つて遮らうとした、其の手を採つて富佐子は書齋を出て仕舞つた。

赤蜻蛉が檐を外れて、スイと座敷に入つて、

卓の上の水仙を一廻りして出て行つた。

軈て戻つて來た妙子は、椅子に凭れて卓に轉ろく頬杖を突くと同時に、ほんのり顔を染めてクスと笑つた。

今日妙子は或る邸の園遊會で、富佐子に出會したのであつた。

櫻に近い椎の葉の蔭に隱れたベンチに、妙子は上遠野君とたゞ二人。

「さう何もかも兄さんに知れて仕舞つちや困るわね。」と妙子は氣遣はしさうに上遠野君の顔を見た。

「イヤ兄さんは一向平氣だ、青海が頭から湯氣を立ててゐるのを見て笑つて居た。」

「でも、先達貴下の事を不具だつて云つてたよ。」

『羽仁君の標準に據れば、世間の者は皆不具さ、其の代り世間の標準によれば羽仁君が不具だ。然し羽仁君は自分の不具を自覺して居る、青海に至つては自覺しない不具だ。』

『眞實に何とも思つちや居ないでせうか。』と妙子は不安らしく、『若し何かむづかしい事を云ひ出されると弱つて仕舞ふわ、てんで御話も出來ないやうな變つた事を云ひ出すのですもの、而して私が何か云へば頭から刎ね附けるのよ。私だつて餘りだと思ふから、つい口答へもしたくなるぢやありませんか、さうすると屹度終ひに、私の云ふ事は自分に云ふので、お前に云つて居るのぢやない、惡かつた、最早何も云はないから機嫌をなほして呉れなんて、情ない事を云ひますのよ。私嫌になつて仕舞ふわ、叱られるより餘程嫌だわ。ですから私、兄さんには成るべく餘計な心配をさせないやうにして居るのよ。」

上遠野君は微笑んで、自分の膝の上に輕く置かれた妙子の手を抑へた。

「ですから貴下も、好い加減にして置いて下さらなきや嫌。」と妙子は甘えるやうに、「少しは他の心持も察しるものよ。」

少し隔つた崖際の躑躅の上から、白髮頭の西洋人の首と、花やかな日本婦人の顔が出て居た。

「アラ富佐子さん。」と小さな聲でいつて妙子は顔を赤くした。

富佐子は脊の高い老齢の西洋人と連れ立つて知らぬ顔で二人の傍を通りながら、躑躅の蕾をむしつて、そつと二人に擲げつけて行つた。少し行き過ぎてから、西洋人は富佐子に何か言つて、皺枯れ聲を張りあげて高く笑つた。妙子は面の憎い西洋人だと思つた。

今妙子は羽仁君のデスクに凭れながら、夫れを思ひ出してクスと笑つたのである。

妙子は頬杖を突きながら、庭の櫻の、折々松の雪の滑り落ちるやうにバラリと散るのを眺めて恍乎として居ると、身體が其の生温い風に溶け込んで、散る花と一つに、暖かい空を漂つて居るやうな心地になる。

妙子は瞳を動かして、薄黑く燻つた壁や柱や天井を見て眉を顰めた、而して上遠野君から説明された千駄谷に新築するといふ邸宅の設計を胸に描き出すと、先達上遠野君と二人で、其邊を散歩した時の光景があり／＼と眼に浮ぶ。

「あの森から斜に低く谷になつてゐる、其の谷を越した處までが此方の地面で、其の向うは御料地だ。」と上遠野君は廣々とした野面を見渡しながら杖を上げて、左から右へ、大きい半圓を描いた、夫れが今度購入れた土地の區域である。

上遠野君は果の知れない麥畑の畔を眞直に通つて居る可なり廣い道を歩きながら、

「此の往來を邸内に入れて仕舞つて、通り抜を許す事にしようと思ふ。」と云つた。

妙子は眼を輝かして太い息を吐いた。

二人は其の道を細い畦にそれて、薄暗い竹藪を拔けたり、高い森に入つたり、谷に降りたり丘に出たり、妙子が疲れて上遠野君の手に縋るまで、歩き廻つたが、今迄歩いた所が、皆自分の地面内だと聽いて、妙子は邸の内に山もあり谷もあると話に聽いた英吉利の貴族になつたやうな氣がした。

妙子は頰杖を突いて居る手先の指輪が、向うの本箱の硝子に映つてピカリと輝くのを見た。と妙子の笑顏は拭はれたやうに消えて、眉が曇る。

「貴女の指にあるやうな黄金や寶石の希望でないばかり。」といつた富佐子の言葉がフト妙子の胸に浮んだのである。妙子は富佐子の言葉の意味を捉へようと思つて目を瞑つた。

富佐子さんは若しや私の事を黄金や寶石を希望として居ると思つて居るのぢやないか知らん、夫れだら餘り失禮な方よ。上遠野さんは、兄さんや青海さんのやうな拗ねた人から見れば、何のかのと惡く云はれるけれども、兄さんや青海さんにさう云はれるだけ、世間から觀れば立派なんだわ。當世流だつて惡く言ふけれど、二十世紀には二十世紀流でなければ、發達は愚か、生きて居る事も出來やしない、時代に同化しては不可いと云つたつて、時代に同化しないものが其の時代に生きてる必要もなし、時代の方でも、其樣な人は死んで仕舞つて吳れた方が餘程好いんだわ。人間ばかりぢやない、國だつて支那や朝鮮のやうな時代に同化しない國は滅びかかつて居るぢやありませんか、ですから私上遠野さんが：：

妙子は頰杖の手を外して、其の甲を脣にあてて微笑んだ。

あゝさう〳〵、富佐子さんは何時か、智的戀愛だつて私のことを、冷かした事があつたつけ、夫れなら富佐子さんは盲目的戀愛が好いのか知らん、ホヽ、愛だつて理性のチヤンとした人の愛は智的だわ、智的なのが何故惡いのでせう、解らないわね。

妙子は實際『解らないわね。』といふ顏をして、卓の青羅紗を諦視めた、けれども直ぐと笑顏になつて、

「マア何うしませう、下らない事なんか考へて。」と獨言を云つて椅子を立たうとして、デスクに手を突くと、其の掌に觸るものがある。

「マア！」と妙子は何時の間にか拔かれて居た蔦の葉の指輪を摘み上げて眼を見張つた。

何う考へても何時拔いたのか覺えがない。考へ事をしながら我れ知らず拔いたに違ひ無いが、さりとは自分ながら餘り惘然して居た。矢張下らない事を考へた罰だわ、もう誰れが何と云つても考へますまいと、妙子は夫れを指に嵌めようとして、其の裏に彫つてある細い文字の

Integres haurire fontes（潔るゝ泉から飲む）

と云ふ文句を讀んで嫣然とした。

上遠野君が此の指輪を妙子に送つた時に、青海君は其の文句を讀んで、昔の落語家の話に、「貴方が是非吞み込んで置いて下さい。」と云はれて、御馳走の惡姑を目を白黑して吞み込んだといふ話があるが、妙子も此の指輪を吞み込まぬやうに氣をつけなければいけないと云つた。すると羽仁君は、コーランにも「神の納るゝものは、供物の肉にあらず、又血にあらず、汝等の敬虔の心のみ神は納るべし。」とある。上遠野も妙子に、其の指輪を吞めと云つて遣した譯ではあるまい。而も「汝の神は一神なり、之を以て汝等自身を全く彼れに捧げよ。」とコーランは云つてゐる、指輪なら一つの神にでも二つの神にでも捧げられるが、汝自身では一つしか持ち合せがないから二つの神には捧げられぬ譯だ、上遠野は其處まで心得て居るか知らん、と笑つた。

妙子はもう何も考へまいと思つて、指輪の文

何を讀んで、たゞ嗒然とした。青海君の言葉も、拜仁君の言葉も思出さなかつたに違ひない。

『プリーズ、プリーズ、プリーズ。』と小夜子の鈴のやうな聲が廊下傳ひに近づいて來る。

妙子は云ふ聲を落ちつけて、一寸居住ひを直した。小夜子は櫻の枝を振り廻し〳〵花片を散らしながら入つて來て、

『マア姉樣、今お歸り？ 私も御友達の所へ行つて今歸つたの。兄樣は？』

『兄樣は御讀書。小夜子さんは、今日好い所へ連れて行つてあげようと思つたのに、何處へか行つて仕舞つたのね。』

『さう？ でも私知らなかつたのですもの。何處へ？』

『園遊會。』

『マア好かつたのね。兄樣もおいでて？』

『兄樣は御嫌で、一人で園遊會をして居るの。』と妙子は笑つて、『さうね、小夜子さんは兄樣といつしよでなきや何處へも行かなかつたのね。』

『アラ噓よ、……でも私……』と小夜子は櫻の枝で妙子の膝を輕く打つ。

『マア花片が散るぢやありませんか……アラ小夜子さんは廊下中を花だらけにして、いけないわねえ。』

『綺麗ぢやありませんか。姉樣花の散つたの嫌ひ？』

『ホヽ、御庭へ散つたのは綺麗だから好きですけれど、御座敷の中は嫌ひ。』

『お庭へ散つて綺麗なら、御座敷でも綺麗ぢやありませんか。』

『マア小夜子さんは自然主義ね。』

『自然主義ッて？』

『兄樣に聽いて御覽なさい。』といつて妙子は慌てたやうに、『兄樣に其樣な事聽いちやいけない事よ。小夜子さんは綺麗な、好い子といふ事なの。』

『いゝわ姉樣は。』

『さう〳〵、小夜子さんは姉さんが嫌ひですつてね。』

『噓よ姉樣、誰れが其樣な事を云つて？』と小夜子は眞面目な顏で傍に寄つて來る。

『ホヽ、小夜子さんはうちの兄樣が大好きで、お遠野の兄さんと妙子が大嫌ひだつて、チャンとさう云つた人があるンですもの。』

『アラ噓よ。』と小夜子は眞白な顏を、紅を塗つたやうに赤くして、櫻の枝を片頰に當てながら傍を向いて仕舞つた。

『ホヽ。』と妙子は後から小夜子の肩を一寸突いて、『ねえ、さうでせう、兄樣も小夜子さんと同しよ、而して矢張小夜子さんが一番好きですつて。』

『姉樣嫌。』と小夜子は振り向いて、眞赤な顏をチラと見せて、廊下へ出たと思ふとバタ〳〵と驅けて行つて仕舞つた。

『ホヽ。』と笑つて妙子は立ち上つたが、如何にも物淋しい氣の拔けた樣な笑顏が、向うの本箱の硝子にあり〳〵と映つて居るのに氣がついて、眉を顰せて凝と視た。其の本箱の中の妙子の顏の邊に、シルヴィオ、ペルリコと背に記された小本があつた。妙子は、過日羽仁君から聽いた、伊太利の藤田東湖とか賴山陽とかで、眞實の女を見ると崇高の感に打たれるとか云つた人の事を想ひ出した。

『これだわね。』と妙子は其のペルリコの英譯本の『禁獄十年』を取り出して、何處で其樣な事を云つて居るのかと頻りに繰つて見たが出て來ない。いゝ加減にして二十九章といふ所を拾ひ讀みをする。

『此の日から余は、何故とも知らず、此の若き娘の相讀相手となり心の友となつた……』

若き娘といふのは何物かと、妙子は更に前の章を少し讀んで見ると、典獄官の娘アンデオ

ラとあつた。

『娘は余に向つて、「貴下は眞實に好い御方ね、でも私、貴下の所に來て居ると、何故だか貴下の子になつた樣な氣がしてならないのですもの。」と云つた。

「これは御挨拶だ。」と余は娘の手を振り放して、「私はやつと三十二になつたばかりだのに、老父さんにされて仕舞つた。」

『いゝえ、いゝえ、違つたの。兄樣よ、眞實は。」と娘は眞から無邪氣な、隔てのない、愛くるしい風をして、余の手を採らうと爭つた。』

妙子の強い瞳は輝いた。更に先の方を飛び飛びに讀む。

『此の娘の性が餘り若いので、余が娘の事を兎や角想ふ事になるやうな危險のないのが幸ひであつた。』といふやうな文句がある。さうかと思ふと、『余は此のアンヂオラと戀に陷ちなかつたのを、余の德操の堅固であつた爲といふなら、夫れは己れを欺いて居るのである。』などといふ所もある。そして、『余はさうは云はぬ、此の女には既に自ら擇んだ情人があつた、此の娘は全く其の情人に打ち込んで居たのである。Heaven help me！若しさうでなかつたら余は危急存亡の地位に立つたに相違ない。』とある。

妙子は本を手にして茫然と考へた。而して當度もなく目に觸れた所を讀んだ。

『忘れもせぬ、或る夕の事である。此の哀れな娘は、自分の悲しい境遇がつくづくと身に滲みたのであらう、余の頸に兩手をかけて、胸も張り裂ける悲痛を訴へるやうに、さめざめと泣いた事があつた。女の心には毛程の狹しいところもない、如何なる娘も、これよりも無邪氣な、これよりも打ち解けた情愛を以て、斯ういふ風に其の父を抱く事が出來ようか……』

『姉樣、兄樣未だ御歸りがないのね。』と小夜子は何時の間にか入つて來て、少し鼻にかゝつた聲で、妙子の膝に取りついた。

妙子はハッと思つたらしく、急いで本を閉ぢて、小夜子の顏を見て笑つた。其の笑顏は、前の小夜子の顏よりも眞赤であつた。

（十一）

羽仁君の門を出た富佐子に、裏の小川の土橋の袂でポチに飛び附かれた。細い堤の上を向うから羽仁君が杖を振つて歸つて來る。富佐子はポチに相圖をして、小[illegible]に[illegible]、

「來たのか。」と羽仁君は立ち止つた。

「いゝえ、歸るの。貴下もやかし散歩なさいな。今度は私の歸る方へ。」

二人は堤を下りて、こんもりと繁い[illegible]の[illegible]に[illegible]いて、黄ばんだ[illegible]の[illegible]、廻つては消えて居るのを向うに見て、[illegible]に添うた[illegible]の道を上つた。[illegible]い西日を受けた[illegible]の花の香がプンと鼻を突く。[illegible]りつめると展けた[illegible]の景色を見渡す小高い所に出る。伐り倒した[illegible]の立樹が[illegible]に積んである。羽仁君と富佐子は[illegible]を[illegible]へて其處に腰掛けた。其の足元にポチは[illegible]くなる。

「今日久し[illegible]でプロフエッサーに逢つてよ。」と富佐子は[illegible]を[illegible]いで、[illegible]、惜しげもなく野[illegible]に吹かせ乍ら、「相變らず暢氣な事ばかり云つて[illegible]んね。けれどもウスぼんやりして居るやうで、中々世間の事を氣をつけて居ると見えて、上遠野さんの事なんか能く知つて居てよ。英吉利人などで上遠野さんの手に乘つて大分損をしたものがあるつて云つてよ。日本ではさういふのを矢張愛國主義と言ふるかなんて、皮肉な事を云つてましたつけ。夫れから日本の學者で、亞米利加の富有の女などを引懸けて、其の金で世界漫遊なんて洒落れて居る人に

彼地で逢つたが、軈て其の人が日本の國の誇りに關する堂々たる書物を彼地で著した。不思議に思つて居たら、日本に來て見ると、其の人は立派な愛國の人だつた、尤も一等國になつたらモウ其樣な自墮落マキアベリズムはあるまいなんて云つてよ。さう言つてたら桂さん來たのよ、さうしたら、あの人の相貌は羅馬の若君で、兵隊の長靴とか何とか綽名されたカイアス・シーザーに似て居る。カイアスの首は人相學者が初學のものに暴虐、酷判、淫奔、狂亂の人相を教へる標本になる位だが、日本のマークイス桂の首が夫れに似て居るのは遺憾だつて。頭の周圍が膨んで居るのは事務的才能の發達を示して居るのだが、肝心の眞中が平たいのは敬神、同情、自由尊重、慈悲、仁愛、とか何とか色々な事を云つて、夫れが足りないのだつて、而して、頭の兩側がブク／＼して居るのはお鯉さんが捨てられない理由で、眞中が發達して居るのは、何でしたつけ、さう／＼大藏大臣で株屋を篭絡られる所以だつて。若し桂さんが羅馬時代に産れたら屹度カイアス以上になるに違ひない、虎でもロンドンの動物園の虎は阿弗利加の內地に住む虎よりも紳士的だつて。」

羽仁君は笑つて、

『カイアスが舟橋の落成式の時に、お客をドシドシ海の中に投げ入れて大に祝意を表したなどは中々振つて居る。今の人間のやうに惡事をやるのに名分を正さうとするやうな邪氣の無い所が好い。自分の馬を僧正や、コンサルに任命したり、「羅馬人の頭が全體で一つだつたら刎ねるに世話がなくつて餘程好いのだが。」などと云つたのは、要するに形式が紀元前式なだけで、其樣な考へを二十世紀式にした政治家は今日にも鮮くない。カイアスだつて二十世紀に産れゝば、まさか馬をコンサルに任命する樣な事はしまい、其證據には桂侯さへ馬券を禁止した。」

「ホヽ。」と富佐子は、「夫れからね、日本の政治家で一身の修つて居るものゝ鮮いのを見ると頭の恰好は皆桂さんと一つなんでせう、成程さう思つて見ると日本の政治的活動は悖德狂の發作同樣、些とも道德性が現れて居ない、桂さんの頭は日本の政治家の頭としては典型だつて。日本の政治狀態を改善するには政治家の頭から取換へずばなるまいだつて。』

「さうだ。」と羽仁君は、「英米などでは、政治といふ觀念と丁度儒教と同じで矢張、修身齊家治國平天下の觀念に基いて居る。卽ちあらゆる社會現象に對して總括的判斷を下すに足りる素養と資格のあるものが初めて政治家として及第するのだ。而も總括的判斷の主たる部分を組立てるものは、學術的の判斷でも事務的の判斷でもない、要するに廣義にいふ道德的判斷だ。だから英米の政治家は同時に道德家だ。グラッドストーンとかリンコーンとかいふ模範的人物は云ふ迄もないが、此の頃のつまらぬ政治家が一寸演說をしても、直ぐ昔の儒者のやうに自分の道德的自覺をほのめかすやうな事を云ふ。又問題が重大になつた場合に相手の道德性を批評する事が敵を破る重な兵法の一つになつて居る、ローズヴェルトの成功したのは此の兵法に依つたお蔭が多い。」

「プロフェッサーもね、政治家は哲學者だつて二千年も前の人の云つた言葉が此の頃漸く實現されかゝつて來た、社會現象が非常に複雜になつて、判斷の材料が餘り多くなつて來て、部分的の批評家には見當が附かなくなつた、之を總括して判斷を下すものは政治家と哲學者だつて。而して此の點から云へば私やミストル羽仁などは、尤も適當の政治家だが、今日のやうな國家で我々が政治家になつたら、半日位で國を潰ほしてやるつて。』と富佐子は笑つて、「夫れは

好かつたのですがね、プロフェッサーが二人で庭を見ようと云ひますから、同伴に歩いて居るうち、裏の森の方へ行つたら、蔭の方のベンチでね、二人切りでヒソ〳〵話をしてゐる方があるのよ。プロフェッサーは態と私の腕を引張つて、白髪頭を妙に振りくつて、其の方へ行くんでせう。さうしたら妙子さんに上遠野さんだつたの。」と富佐子は羽仁君の顏を見て微笑した。

『些も珍らしい事はない。』

「でも可笑しかつたわ、プロフェッサーも上遠野さんの顏は知らないのでせう。さうして眼が悪いので、妙子さんと氣がつかないもんですから、其の前を通りながら、「私の三十年前の夢をキネマトグラファイズして居る。」だつて。而してね、「私もカツティナと一伴に泣いたのは、モット眞靑な憂鬱の森だつた。」つていふのよ。カッティナて誰れかと思つたら、「マイ、ヴェニティアン、ミストレッス。」ですつて、ホホ。さうして得意になつて其の頃の話を始めたのよ。伊太利に行つて居た頃の事なんでせう、舟に乗つて其の森のところへ行つて、自分が女の手を取つて上げてやつて、二人で森の中に入つて思ひ入れ泣いたのですつて。けれども後で泣き飽いて仕舞つたら、何んだか馬鹿々々しくなつて、女をしつかり胸に抱いて居る心持が、まるで、雇人が主人に賴まれて宴會の餘興にイヤ〳〵芝居をして居るやうだつて。そしてモーパッサンにも舟から女の手を採つて上つて何うしたとかいふ所があつたから、其の男のやつた通りにやつて見ようと思つたが、何うしても其處が思ひ出せないので、失望して女を突離して仕舞つた、なんて云つてるのよ。私、「貴下にも其樣な墮落生活の經驗があるの。」つて聽いたら、澄まして、インディセントが眞理で、ディセントが非眞理なのですつて、而して其の兩方を超絶したものが超眞理なのですつて。先生はもう自分は今では超眞理の境に在るが、三十年前は未だ眞理を離れられなかつたのですつて。而して今の文明は丁度三十年前のプロフェッサーと同じで、眞理の眞中でウロウロして居るんですつて。ですから今の人の戀愛も眞理ですつて。戀愛は詩人や哲學者の考へ出したものぢやない……」云ひかけて富佐子は稍躊躇つて羽仁君の顏を見た。羽仁君は何とも云はぬ。富佐子はクスリと笑つて、

『詩人の空想して居る戀愛は彫刻家の作る美人か、音樂家の作るメロディー見たいなもので、理想ばかり高い詩人が、其の頭の中で最も美とするものを選り集めて、人間の純粹の要素や、自然の最も調和を得た線ばかりを使つてこしらへたものだから、實際には存在しやうがない。フラキシテレスが雅典中の美人を集めて一人々々檢査したら、めい〳〵何處かに缺點があつたつてね、其の缺點を捨てて美しい所を殘らず寄せ集めて、プラキシテレスは初めて完全なヴィナスをこしらへたんですつて。詩人の戀愛は此のヴィナス見たやうなもので、現實の世界に其樣な戀愛を求めるのは、往來を歩きながら、其のヴィナスを探して居るやうなものだつて。鶯や杜鵑か如何にいゝ聲でもベートウェンのシンホニーを歌ふ譯には行きやしない。完全を現實に求めるのは最も危險な人生の愚擧ですつて。廣大無邊の空を仰いで感心して居るのは好いけれども、其處まで飛び上らうとすれば命が無いですつて。雲雀でも餘り高く昇れば死んで落ちて來る、而して基督初めの昔の馬鹿には、其の高い空へ飛び上らうとして命を捨てた、夫れを眞似て甘んじて獅子の檻に飛び込んだ殉教者などは馬鹿の行き止まりだ。今でこそ其樣な人間は一人も居ないが、昔は大分あつたつて。まだまだ色々な事を云つたのですけれど、早口の英語だもんですから能く解らなくつてね。而し

て終ひにね、これは昔、私の友人のモッシウ、ミューゼの友人のモッシウ、デジュネーといふ青年法律家の説だつて。すつかり人を擔いだのよ。而してね、法律家も中々いい事をいふ、これは狩仁にもうミユーゼから直接に聞いて居るかも知れないけれど、是非傳へて貰ひたいつてね。The mad man desires to possess the sky, the sage admires it and kneels down but does not desire it ですつて。」

宮佐子は狩仁君の顔を見て微笑んだ。狩仁君は矢張默つて微笑して居る。

「空を捉へようとして居る狂人が好きなら矢張氣狂ひね。」と宮佐子はソッと云つて手巾で口元を掩うた。

狩仁君は夫れが聴えなかつたやうに、

「空を捉へようといふ狂人の希望に、現代の希望の果も皆なものだ。」

「けれども空を捉へようなんて、矢張迷妄の希望に過ぎないでせう。」

「實現せられない故に迷妄といへば、希望は一切迷妄だ。」と狩仁君は額を輝かした。額が輝くと其の言葉も强くなる、

「己れ以上の何物かを希求するのが、人の禽獸より高い所以ではないか。禽や獸には本能慾の充實以上の何の希求もない、其の生活は、現實の鎖の長さの範圍内で、ぐる／＼廻つて居る生活なのだ。而も今の人間の生活は夫れだ。彼等は野蠻から文明に進んだといふ、けれども彼等が無限に増長せしめつゝあるものは、只禽獸も之を有する本能慾のみだ。彼等と禽獸との差は、現實の鎖の長いと短いとに過ぎない。三尺の鎖に繋がれた熊と、一間の鎖に繋がれた猿との差だ。

「現實の外に何物もない、夫れが自然である、夫れが一切である」と、科學の教ふる所だといふ。何んぞ知らん、科學は現實の一切をすら教ふる力はない、何うして、現實の外に或る物のあるかないかを判斷する事が出來よう。地上の生活が見を離れる事の出來ないのは知れた話だ、さりとて地の上の知識が、天に於ては無とは限らぬ。現在の生活は到底現在に囚はれる事は出來ない、けれども我等には過去もあり未來もある。現在が我等に眞實である如く、過去も未來も亦眞實だ、地上の人と雖も猶天を現實と感ずる事地を現實と感ずるに異らない。現在に生くる人間も、過去未來を、現在と等しく適切に現實と感ずる。我々は五感に一粒の罌粟と共に有るか無きかであるか、猶、我々は無邊際の大宇宙に在りと感じて居る。人は斯くの如く大なる宇宙にあつて、只己れの極微なる事を感ずるのみではない、其の極微を以て、斯くの如く廣大なる宇宙よりも大なりと感ずる境に達り得る。現實に繫がれたものから見れば、夫れは迷妄だ、禽獸は「我れ思ふ、故に我れ在り。」といふ人間を、思ふが故に迷妄なり、と觀ずるだらう。而も禽獸の現實は、人間の迷妄よりも迷妄だ。彼等の有は、我れ等の無よりも一層無だ。狂人の天を捉へようとする希望は、迷妄かも知れぬ。然らば今の人間の、何物をも捉へ得ずして大に捉へ得たりとして居るのは何だ。」

一望空濶、人影もない麥畑を渡つて、青い風が狩仁君の輝く額を吹いて居る。

「廣大なる國家を建て、强い軍隊を養ひ、幾萬噸の軍艦、百千尺の巨屋を作り、アルプスを鑿つて鐵道を敷き、ナイヤガラを涸らして電氣を起し、空を翔り地を潛る、之が今日の文明だ。而して買ひ得た滿足は何んだ。其の滿足と、豚が糞の中に眠つて居る滿足と、性質の上に何れ程の相違がある。同じ自覺のない本能慾の滿足を獲るに、豚は糞の中にて足りて居る、人は何故に自ら困しんで、山を鑿ち谷を埋め、相殺し、相食むのだらうか。本能慾の滿足に眠らんとする

ならば夢の中でも十分ではないか。一度夢の中を出た時は、其の欲望の無限の增長を抑へる事が出來ないのだらうか。而して其の小舍を千尺の巨閣とし、其の家族を大にし、其の勢力を張つて、然し後獲た所の滿足は、夢に在る中で得た滿足と何の差があると思ふ。而も彼等自身、其の一切を現實に、眞理だといふ。笑ふべき事だ。如何なる迷妄も、斯る現實、斯る眞理よりは、遙か現實だ、遙か眞理だ。

一切の生命には限りがある、而も我々は現に限りある生命に生きながら、常に悠久無限を感ずる、生れて死ぬまでを我等の一切とすれば、何の悠久があらう、何の無限があらう。短い生命の外に出れば我等は、悠久の生命を感ずるのは迷妄に相違ない。けれども其の悠久の生命を、我々は現に有する短生活以上に現實と感ずる。我々に此の現實の短い生活を迷妄とする事が許すとも、此の悠久の生命を迷妄とする事は許されぬ。一切の生活を幻であると悟る時は來ても、此の悠久の生命を無視し得る時はあるまい。我々は若し、此の悠久の生命の裡に生きる事が出來なければ、寧ろ、其の悠久に對する希求を以て生命とする。』

羽仁君は蒼い空を仰いだ。富佐子は目を羽仁君から離した、醉はせるやうた其の瞳は、醉つたやうに濕んで居る。羽仁君は言葉を續けた。

『狂人は天を捉へようとする希望は迷妄でない、希望其のものが生命だ。我れ若し、已れの一切を希望其のもののうちに投ずれば、希望は直に現實であり、滿足であり、融合である。渴仰はやがて歡喜ではないか、如來を求むるの心は卽ち如來の心ではないか。

『我々は狂人たるに甘んずる、有限の血と肉とを以て無限の希求に生きる。自然は一切の物に無限を與へた、獨り人間のみ有限の裡に生死する事があらうか。永久の歡喜はたゞ狂人にのみあるか、我々は狂人たる事を感謝する。』

富佐子は半巾で額を拭うた、吹く風は其の亂るゝ髮の毛を振はせた。

（十一）

妙子がシルヴィオ、ペルリコを閉ぢて、小夜子に眞赤な顏を見せた時、ポチが庭先を飛んで來て、緣先に足をかけて、長い舌を出した。

『あゝ兄樣。』と小夜子は妙子の膝を離れて走り出た。

羽仁君は緣に上つて、小夜子を抱へて、卓の傍の籐椅子に倚つた、其の橫顏を妙子は凝と視て、

『兄樣。』と呼んで、『私、今これ讀んでよ。』と卓の上に置いた『獄中十年』を取り上げた。

『何處を讀んだ。』と羽仁君は妙子の赤い顏を見て微笑んだ。

『アンヂオラといふ獄吏の娘の事を書いて居る所。』

『何う思つた、其處を讀んで。』

妙子はまだ、何う思ふといふ閑も無かつた。何うとか思ふべき刹那に、小夜子に遮られて、ただ何といふ事なしにハッと思つて赤くなつた、而して其の理由もない狼狽から立ち直る間もなく、羽仁君が歸つて來たのであつた。

『何と思ふツて……』と妙子は眞面目に答へて、橫目で兄の顏を見て、『大そう眞面目な人らしいわね。』

『眞面目といふ事が解つたか。』と羽仁君は嬉しさうに、『さうだ、飽迄眞面目な人だ、極惡たる現實の裡に常に極美の理想を求めようとした人だ、而して確的に求め得た人だ。十年も牢に入つて居ながら、始終悠々として寸も事を忘れなかつた。而も枯木冷灰の人でなくつて、多情多恨の詩人だつた。泣く時には人一倍泣いた、怒る時には人一倍怒つた。而も、其の烈しい喜

怒濤激浪の底には一點動かすべからざる信念があつた。時には山のやうな怒濤を揚げ、時には美しい漣を描く海も、其の底の方は始終、靜かな靜かな碧い水だ。動も靜も、彼に在つては其の信念の姿であつた。」

「何ういふ信念でしたんでせう。」と妙子は漸く聲の色を穩ました。

「如何なる生活も余には災禍ではない。死ぬまで、考ふる事と愛する事の樂み —— pensare e amare —— を失はぬやうにせねばならぬ。」と云つて全く其の通りに行つたのだ。考ふる事と愛する事とが、彼れの信念の基礎―寧ろ彼れの全生命だつた。屈辱と貧困とに苦しみ果てて、血も肉も全く腐敗し終らんとしつゝある伊太利人の血管に、清い美しい、愛と自由の血液を注ぎ込む事を得たのは、彼れの詩業ではなくして彼れの信念であつた。伊太利の建國は、其後多くの愛國の志士に依つて遂げられた。ペルリコの注ぎ込んだ血液は、衰弱した伊太利に此等多くの愛國者を產むべき健康を與へたものだつた。革命は天才のみの事業ではない、而も天才の血液が國民の血管を流るゝに及んで初めて革命が起り得る。吉田松陰の事業は些々たるものであつた。其の上、彼れは、學者としても詩人としても武人としても、必ずしも匹敵の無い人ではなかつた。而も、彼れの維新に對する功業を思へば、所謂元勳と稱するものの如きは寧ろ斗筲の輩であるかのやうに感ぜられる。西鄕、大久保と雖も單に事業の人ではなかつた、而も其の事業の爲に人格を掩はれた形がある。松陰は、志一として蹉躓せざるなく、遂に刑辟に觸れたのは、其の人格を萬世に輝かしむる所以だつた。ペルリコの天才は、單に詩人として終つても、伊太利近代の誇りだが、十年の獄舍生活は、彼れの人格をして其の光輝を擅にせしめた。而して愛と自由との福音を伊太利全土に齎し來らしめた。いや、伊太利全土に止まらぬ、一篇の「禁獄記」は憎惡と壓迫とに滿ちた此の世界に、永久に愛と自由の福音を傳へて居るのだ。』

說き來つて彌仁君は例の調子で、

『妙子。』と呼んだ。妙子は彌仁君の顏を見た。小夜子は彌仁君の膝に肱を置いて凝と妙子の顏を見て居る。

『ペルリコの愛は何ういふ愛だつたか。殘忍と熱病の外に何も無い、慘たらしい獄舍の裡で、ペルリコは眞から自分の周圍の醜惡なる人々を愛した。鬼のやうな獄吏をも、獸のやうな囚徒をも、ペルリコは百姓の如く正直な、いや寧ろ天使の如く淸いものと信じて居つた。隣の監房に居る女囚が折々、如何にもウヰードな聲で、

Chi renda alla meschina

La sua felicità?

といつて唄ふ。「誰れか哀れな女に、再び彼女の幸福を返して吳れるだらうか。」といふ悲しい絕望の聲を聽いて、ペルリコは、其の女の天眞の美を信ずる事を禁じ得なかつた、さうして、其の唄を聽く度に其の女の爲に熱誠の祈禱を捧げた。斯くの如きペルリコの信念に異常の力のあつたのは當然だ。ペルリコの爲に信を置かれたものは、極惡の囚徒も無道の獄吏も悉く同じ信を以てペルリコに酬いたのだ。』と彌仁君は卓の上の英譯本を取つて、中程を開いて妙子の前に置いた。

『此處を御覽――ペルリコが、獄吏の隙を見て、同志のオロボオニ伯爵の監房に飛び込んで伯爵の腕に縋りついた時に、獨逸人の獄吏のシルレルといふのが見附けて、Der Teufel! Der Teufel! と呶鳴つて大に威さうとしたが無益だつた、彼れの眼には淚が溢れて、終に泣きながら、「オ、神よ、此の哀れなる若き人々と私の上に慈悲を垂れ給へ。」と叫んで、其處に

居た他の押丁も衛兵も皆泣いたとあるではないか……妙子、これがペルリコの愛だ。』と云ふ羽仁君の聲にも涙があつた。

『これが愛だ。』と羽仁君は稍經て言葉を續けた。『人が生活の快樂に醉ふ時、春の野の花のやうに輝くものは愛だ、人が生活のあらゆる快樂を奪はれた時、闇の夜の星のやうに燦くものは愛だ。凡そ自然の手に造られたもので愛の力に背き得るものは無い。我々は時に、一切の物が我れを離れ去つたと感ずる事がある、けれども夫れは、自分の方が一切の物を離れ去つたので、愛の力さへ我れにあれば、一切の物は永久に我れと共にある。地の上の一切の希望が我れを離れても、愛の力は、地の上を離れた新たな希望を我れに與へる。此のペルリコの友人のオロボオニ伯爵は病を得て、たうとう獄舎の裡で淋しい死を遂げたのだが、死に至るまで、四方の人々を愛し、悲慘極まる境遇の裡に常に祝福を見出した。たゞ死際に、八十歳になる父の事を想つて涙を流したが、軈て思ひ直して、父の幸福な運命を嘆く事はない、彼れは既に、永久の平和の國に於て余と再會すべき夕に在るのだといつて、徐かに目を瞑つた。死も愛の力を如何ともする事は出來ない。……妙子、愛はさういふものだ。』

羽仁君は妙子の顏を見ながら、『愛はさういふものだ。』と云つた、妙子は之に對して何とか應へなければ濟まないやうに感じた、けれども妙子には、羽仁君の言ふ事が、妙子自身に直接關係のある問題とは思へなかつた。地の上の一切の希望が我れを離れるとか、死際に八十歳の父の事を想ふ、などといふ出來事は、妙子の現在の生活とは餘りに沒交渉である。尤も妙子が何か一身の相談を持ちかけた時でも、羽仁君は動もすれば沒交渉の問題に飛んで仕舞つて、驚くべく掛け離れた事を諄々として說き出す事がある。妙子は其の度に眉を顰めて、焦り焦りする聲を抑へて夫れを聽くのを隨分迷惑にも感じて居る。勿論今は初めから掛け離れた問題を取扱つて居るのだから、妙子も落付いて、伊太利の愛國志士の話を聽いて、隨分高潔な、靜肅な、尊い人だと思つて、シルレルとやらが泣いたといふのを聽けば、矢張妙な心持になりもしたのが、羽仁君が、愛はさういふものだ、さういふものだ、と幾度も妙に念を押すので、妙子は、何んだか、自分の行爲でもない事を執念く責められて居るやうな氣がして、私の故でもない事を、何うして兄さんは彼樣に、私の罪を責めるやうな顏をして、私を見て居るのだらう、と思ふとつい默つて居られなくなる。

『其樣な廣大もない愛は人間の愛ぢやないでせう、まるで神の愛だわ。ペルリコだつて詩人ですから、自分の空想で其樣な愛をこしらへたんでせう。理想の愛で實際の愛ぢやないわ。』

妙子は格別麗々しく云つたつもりでも無いが、羽仁君の膝に凭れて居る小女子は、少し眼を瞠つて妙子の顏を見た。羽仁君は苦笑して、

『お前のやうに考へるのが現代の思想だ。昔の人間は、理想を現實の歸着點と見た。元より現實が何時其の歸着點に達すべきものか判らんでも、近づき得るだけ現實を理想の方へ進ませうとしたのだ。所が今の現實は理想を背後に見て進んで居る、而して出來るだけ之に遠ざかるのが進步だとして居る。昔の愛の最高の滿足は、普通の愛、宇宙の愛に融合する事にあつたが、今の愛は、普通の愛、宇宙の愛を離るゝ距離の大なる程滿足も亦大なのだ。神の愛から下つて人間の愛となれば夫れだけ滿足なのだ。人間の愛から下つて獸の愛となれば一層滿足だ。今日の無上命令たる進化の法則は、愛を除外して居る。』

妙子は、兄さんの說は、まるで、人間の愛を

認めない、少くとも男女の愛を墮落の愛と認めて居る、人が皆、宇宙の愛だの普遍の愛だのつて云つて居たら、結局人類は絕えて仕舞はなければならない、兄さんのは全くの空想だ、とは思つたが、妙子は夫れを羽仁君に云ふ勇氣は無い。といつて兄の說を默つて承認するのは、忌々しいばかりでなく、腹にもない服從を強つて居るやうにも當つて氣が濟まない、何とか美しい言ひ現し方は無いかと考へても何うも浮ばない。すると羽仁君は、

『だから男女の愛も、肉が肉を愛するのだ。』と云つた。

妙子はハッと思つて、何の思慮もなく、

『では兄さんは結婚も否定するのね。』

『否定するほどの價値もない。男女が永く一緒に結合して居るのだ、便宜上の話だ、夫れに何んといふ名を附けようと構つた事はない。』

『マア。』と妙子は何んだか情ないやうな悲しいやうな氣になつた。自分が今着ようと思つて持ち出した立派な衣裳に、汚泥を掛けられた心持である。

『ペルリコは獄吏の娘にも戀をした、見ぬ高塔の女囚にも戀をした、夫れがペルリコの縋り得た女の殆ど全體だ、して見ればペルリコはあらゆる女に戀をしたのだ。而もペルリコは終世娶らなかつた。眞の愛には形式は入らぬ。清い愛は一切を包括する。』

『マア！』と妙子は我れ知らず、『兄さんの愛は人類が滅びて仕舞つても好いといふ愛ね。』

『種の保存は人類の絕對の目的ではない、人類は到底絕滅すべきものだ。而も地球の冷却を待つて凍え死すべきものではない。』

『マア嫌、兄さんは。』と妙子は眞から嫌なやうな聲を出した。伊太利の愛國者の話から突然人類の絕滅に引きずり込まれたので、妙子は一寸眩暈のするやうにクラ／＼として、覺えず斯う云つたのである。小夜子は妙子の樣子を見て、可笑しさうに、羽仁君の膝に顏を伏せて笑つた。

『何うして滅びるの夫れなら？』

『解らない。が理想としては、男女の絕對的貞操によつて絕滅すべきものだ。』

『嫌ね小夜子さん、兄さんは、世界中の人間は今に皆死んで仕舞ふつて云ふのよ。』

『さう？』と小夜子は羽仁君の顏を見た。

『世界は今に氷の塊のやうに冷えて、生きたものは何んにも居なくなつて仕舞ふんですとさ、其の時小夜子さんは何うして？』と妙子は問題を玩具にして紛らかさうとでも思ふらしい。

『其樣になるまでに私達は皆死んで仕舞ふわね、兄樣。』と小夜子は事もなげに羽仁君の顏を見る。

『死んで仕舞ふか。』と羽仁君は微笑んで、『死ぬのは小夜子一人だらう、外に死ぬ人は無ささうだ。』

『誰れだつて死ぬわ。死なない人つてありやしないわ。』

『私は死なないわ。』と妙子は笑つた。

『お婆さんになつて、皺クチャになつて、腰が曲つても、姉さんは矢張何時迄も死なないの？』

『マア嫌！』と小夜子も笑つた。

妙子は目を丸くした、たゞの戲談には違ひないが、何んだか問題が少し自分に近くなつて來たやうに思はれる。兄の云ふ地球の冷却は自分には全然沒交涉と思へぬでもないが、小夜子の所謂皺クチャのお婆さんに至つては、全く自分に無關係とは思はれない。皺クチャになつても何時までも生きて居るといふやうな事に、萬が一立到らぬとも限らぬやうな氣がする。未だ、必ず其處に行くといふやうな氣は何うしてもしない。死刑の宣告を受けたものが愈〻絞首臺へ上せられるまで決して死の運命を諾はないやうなものであらう。

『腰の曲つた人間は死ぬ。』と羽仁君は、『夫れが、死は生命であるといふ證據だ。個々の生命には必ず死がある、而も個々の生命の死は卽ち、より大なる生命を作す所以なのだ。人間の細胞は絶えず新陳代謝して、舊い細胞は時々刻々に死滅して新しい細胞が之に代る、十年も經てば人間の身體の細胞は全く一新されて仕舞ふ。けれども其の人の生命は、細胞の生死を超絶して一貫して存在する。人類の團體に於てもさうだ、舊い人間は絶えず死滅して新しい人間が其の跡を充たして、百年の後には團體の內容は全く變つて居るのだが、其の團體の生命は個人の生死を超絶して一貫して居る。若し人間の身體に細胞の生死が無くなれば、其の人の生命も無くなつて仕舞ふ、若し人類の團體に個々人の生死が無かつたなら、其の團體の生命も無いのだ。更に大きく考へれば地球の絶滅も宇宙の生命の條件に外ならない。死は、より大なる生命の條件なのだ。だから生きる事の重大なると等しく死する事も重大だ。從つて總てのものは生きて居らねばならぬと共に、又死なねばならぬ。

『要するに、總て死とは新なる生命に入る事だ。終りでなくして初めだ。全人類は其の死滅に依つて初めて絶大の生命に融合するのだから、人類生存の最後の目的は卽ち絶滅だ。絶滅は究極の滿足だ。從つて個人に於ては、死するといふ事は生れるといふ事よりも滿足なのだ。

『而して人間の滿足は自覺的だ。より大なる生命の存在を感知して、之に融合同化する事の自覺が、人類生存の全意義を爲して居る。愛は卽ち其の自覺の動態だ。個人の各細胞は、其の人の生命の爲に、相吸引して決して反拒せない、個々人が、より大なる生命の爲に相吸引して反拒せざるものは卽ち個人と人類間の愛だ。全人類が、より大なる生命の爲に一致するのは、人類と宇宙間の愛だ。是等一切の愛の自覺の外に、人類生存の意義はない。而して此の愛は、個人が全人類に沒却し、全人類が大宇宙に沒却する事によつて滿足を獲る。斯くして人類生存の意義が完うせられる。』

羽仁君は小夜子の美しい頸筋に輕く手を掛けて引き寄せながら、獨言のやうに云ふ、

『死は愛の成就だ。』

引寄せられて小夜子は、眞白な兩腕を羽仁君の頸になげかけて、其の肩に横顏を押し附けながら、妙子の方を見て嫣然とした。妙子は、小夜子の碧味がかつた溶けさうな瞳が、『此の兄さんは私のよ。』とまざ／＼と語つて居るのを見て、一寸眼を瞠つた。

『死は一切の利害を離脫して居る、愛もさうだ。』と羽仁君が少し首を傾けると、其の赤らんだ頰は小夜子の眞白な頰に觸れ合つた。

『己れを、より大なるものに沒却せしむるが死だ、而して夫れが愛だ。眞なる愛には死と同じく決して利己はない。』と羽仁君は小夜子を膝から少し離して笑顏を見合した。

『ぢや愛には快樂もないのね。』

妙子は、何んだか言ふべき事が澤山あるやうに思はれながら、夫れが纒つて胸に浮ばずに切れ切れに腦の底にひらめいて居る。夫れを一寸口に出して、斯ういつて見たのだ。

『快樂はある。愛の快樂は、無我の歡喜だ。母の胸に縋る稚兒の快樂だ。あらゆる快樂の初めにして亦終りのものだ。純なる生命其のものの歡喜だ。我々が誤つて愛の快樂として居るものは、眞の歡喜を妨ぐる不純の昂奮に過ぎない。死にかゝつたものがカンフル注射によつて昂奮されて居るやうなものだ。何の快樂でもなくして只死の歡喜を妨げて居るに過ぎない。夫れならば未だよいが、今の人間の愛の快樂と稱するものは、カンフル注射で僅に生き

て居る人間が、其の間に酒を飲んだり美しい衣服を着飾つたりしてゐるやうなものだ。快樂でなくして殘酷な苦痛だ。今の人の愛は慾望を充實する手段だ。愛が目的でなくて慾を充すのが目的だから、他の手段で夫れが達せられゝば、必ずしも愛を要しない。若し憎惡によつて達せられゝば喜んで憎惡を採る。今の人の愛の性質は、高利貸の憎惡と同じだ、何れも利己の手段に過ぎない。憎まずとも其の目的が達せられゝば高利貸も必ずしも人を憎むまい、愛せずとも其の目的が達せられれば、今の人は決して人を愛さない。だから昔は人面獸心も愛の衣を着たが、今の人面獸心は裸體だ。而して男子は多く其の裸體である事を誇として居る……』

『其樣な事は……』と妙子は赤くなつた。

『若し愛見たやうなものがあれば、夫れは目的を達するに必要な範圍で、愛に似て非なる手段を採つて居るに過ぎない。』と羽仁君は少し強い聲で云つた。妙子は泣きさうな顔をして默つて仕舞つた。

『妙子。』と羽仁君は程經て、穩かな調子で、『此の間此處の村に情死があつたらう。女の親が北海道に行くので、到底夫婦になれない、其の位なら死ぬ方が好いといふのだつた。』

さう云つた限り、羽仁君は濟まして、小夜子の背を撫でて居る。妙子は夫れが何うして、といふ顔もしなかつた。

『ロムブロゾと云へば、總て罪人は犯罪的典型を持つて居ると主張した物質本位の學者だが、若い頃には詩なども作つた。』

話が亦掛け離れたので、聊か妙子の注意を惹いた。

『此刑事人類學者が、此村のと殆ど同じやうな情死を論じて、道德家や宗教家は何とでも云ふが好い、此金儲專門の下劣な時代に斯ういふ出來事のあるのを聽くと、我々は何とも云ひやうのない一種奥床しい感に打たれて、自ら涙がこぼれる、といふは畢竟彼等が、こんな時代の人間も、但理想的な、利害を離れた、強い感情を持つ事が出來て、而も何時たりとも其の爲に命を捨てる覺悟さへ存し得るといふ事を證明して居るからだ、と云つて居る。而も夫れを自分の科學的大著述の裡で堂々と論じて居るのだ、自殺者をデヂェネレートと認むる學者も、一方に此の見地を容れざるを得ない。人生の判斷は數理的計算ばかりに依る事は斷じて出來ないのだ。全く利害を離れた愛に殉ずるのは、絕大の生命に殉ずると精神を同じくして居るから、他の細い利害に悉く背いても、但限りなく尊い行爲なのだ。』

何時の間にか點いて居た電燈が次第に明るくなつて、卓の上の小夜子の水仙を照らして居る。夫れを羽仁君は凝と見て、獨言のやうに、

『今の男子にはナーシサスの自愛もない。今の女には「反響」の執着もない。』

『ナーシサスつて男の神樣は、「反響」つて女の神樣を大へん嫌つたのですつてね。』と小夜子は先達富佐子から聽いた話を思ひ出して、斯う云つて、羽仁君の顔を見た。

『オヽ知つて居たか。』と羽仁君は微笑した。

『エヽ富佐子さんが御話をして下さつたの。ナーシサスは何故「反響」が好きぢやなかつたんでせう「反響」はほんたうに可哀さうね。』小夜子は羽仁君の腕を捉へて詰るやうに云ふ。

羽仁君はナーシサスを見ながら淋しく笑つた。

（十二）

青海君はスーッと羽仁君の書齋に入つて來た。書齋には卓の上のナーシサスが獨りで黃色く考へて居る外、誰れも居らぬ。何時もなら舞踏のやうな足どりで入つて來べき筈の青海君

が、今日はスーッと入つて來て、

『早く歸つて來れば好い、イヤ早く歸つて來なければ好い。』とドカリと卓の前の椅子に倚つて、天井を仰ぎながら頸をキリ／＼と左右に搖かした。

青海君としては重大の事件が起つたに相違ない。

重大な事件だ。何んな事件か、何が重大か、青海君自身に於ては頗る判明を缺いて居るが、判明を缺くだけ夫れだけ重大の感がある。

一昨々夜即ち狩仁君がナーシサスを見て淋しく笑つた夕だ、青海君と富佐子との間に下のやうな事件があつた。

其の夕方、青海君が例の通り突然、富佐子の部屋の西洋戸を開けると、薄暗い部屋の裡に、富佐子は園遊會に行つた服裝のまゝで、しよんぼり窓緣に倚りかゝつて居た。ばかりなら格別記載を要する事柄でも無い。

所が青海君が電燈を捻ると、富佐子はフィと窓の外を、見るといふでもなく、たゞ燈に顏を背けた。青海君は其の傍に寄つて富佐子の肩と手先を抑へて、

『何うした。』と子供を扱ふやうに云つた。夫れだけでもまだ格別記載を要する事柄ではない。斯樣な時に、斯樣な風に、青海君が富佐子の手を採つて『何うした。』といふと、富佐子が、フイと起つて、『ホヽ。』と笑ふか、或は默つて青海君の顏を凝と見るか、といふやうな事は、何時もない事では無い。

所が富佐子が振り向いた、其の顏を見て青海君は例の、

『グレート、ヘヴンス。』と一步退いて、腕を組んで首を傾げた。

『兄さん。』と富佐子は青海君の手先を採つて兩人で長椅子に列んだ。青海君が富佐子の背中に腕を廻して、其の手を自分の膝の上に引き附けながら、顏を覗き込んだ恰好は、若し富佐子と青海君の大小が反對であつたら、隨分人を感動させもする形であつたらう。

富佐子が青海君に採られた手には手巾を握つて居る。青海君は其の手巾が太く濕つて居るのを感じて、見て居た富佐子の顏を更めて見て、今一度、

『何うした。』と云つた。

『兄さん。』と富佐子は、小さい青海君の顏を見下ろした。

『ウン。』と青海君は十分同情を持つた強い聲で應へて次ぎの言葉を待つたが、富佐子は默つて青海君の顏を見て居る。

『富佐子、女は強いものだ。』と青海君は勵ますやうに云つて、『男は思ふ事の云へぬ動物だ、云ふ事の行へぬ動物だ。女はさうでない、思ふ事以上を云ふ動物だ、云ふ事以上を行ふ動物だ。其の涙は何んだ、何が云へない涙だ、何が行へない涙だ。』

『ホヽ。』と富佐子は淋しい眼で笑つて、『何うして斯う弱いのでせう。兄さんは私を強いと思つて居て？ 弱いと思つて居て？』

『サア。』と青海君は考へて、『男では腕力のない奴が弱い、女では腕力のある奴が弱い。』

『眞實に弱いのよ。』

『お前の弱い事に就ては、私は寧ろ大なる尊敬を拂つて居るのだ。腕力を以て男子に對抗するといふのも弱い爲だ。あらゆる誘惑に對して拳鬪で來いと力んで居るのも弱い爲だ。男子と同じく思ふ事の云へぬ證據だ。云ふ事の行へぬ證據だ。此の、女の強い世の中に、男子よりも弱い女は尊むべきものだ。富佐子、お前を己れは尊んで居る。令夫人の次ぎはお前だ。』

『兄さん、許して頂戴。』と富佐子は濕つた半巾を青海君の手先に卷いて、『私も女よ。』と俯向いた。

『お前も女か。』と青海君は天井を仰いで長太息をした。

『困つた事になつた、元より夫れは場合が限られて居るだらう。けれども其の限られた場合が最も困る場合だから、更に困る。男で居れ、男で居れ、死んだ氣になつて男で居れ。何うしても女でなければならなければ、男よりも弱い女で居れ。』と青海君は富佐子の背を輕く叩きながら、『羽仁は、お前が永久に男で居ると確信して居る。』

富佐子は俯向いたまゝ、ハラ／＼と涙をこぼした。

『其の涙は悲しい涙ではあるまい。』と青海君は眼を拭はうとする富佐子の手先を抑へて、

『安心の涙、滿足の涙で無ければいけない。若し其の外の涙ならば、安心の涙、滿足の涙が出るまで、外の涙をすつかり絞り出して仕舞へ。』

富佐子は顔を掩うて諾いた。

青海君は、富佐子の髮の毛の微かに振へて居るのを見て首を振つた。

『現代に對しては不安心と不滿足の極に居り、自己に對しては安心と滿足の極に居る、理想の人の現代に處するの道は其の外に無い。羽仁は確に斯の道を採つて居る、我々は採らんとして未だ能はざるものだ。富佐子、お前も亦斯の道を採つて、羽仁と共に成功の域に達せなければならない。自己に對する不安心と不滿足とは羽仁を殺すに足る。否、羽仁のみでない、理想の人が能く斯くの如き時代に生き得る所以のものは、自己に對する安心と滿足とがあるからではないか、之が無かつたら生命は苦痛だ、だから我輩の如きは常に死んで仕舞ひたいと思つて居る。死んで仕舞つてはピアノも彈けず歌も唱へないと思ふから已むを得ず生きて居るのだ、生きて居るのが已むを得ないのだ。之に反して、自己に對して安心と滿足の域に在るものは、生きて居るべき理由を有つて居る。イヤ其樣な理由なんか有つて居るか居ないか知らんが、少くとも死なねばならぬ理由はない……イヤあるかも知らんが、要するに生きても死んでも羽仁は羽仁だ。生も死もない、其の安心と滿足が卽ち羽仁なのだ……富佐子、羽仁は何うして此の安心と滿足とを得て居ると思ふ。』と青海君は富佐子の手を抑へた手先に力を入れて、

『何人も僅の物は之を理想に求める事を爲る。けれども大部分は之を現實に求めて居る。之に反して、羽仁は大部分を理想に求め、極めて僅を現實に求めて居る。理想に求むるものは其の居る所によつて其の樂しみを更めない、羽仁は斯くの如くにして悠々と樂んで居る。現實に求むるものは其の居る所によつて其の苦しみを更めない、上遠野一流の輩は、斯くの如くにして懊惱して居る。羽仁にも悶えがあらう、けれども夫れは理想の甘露に醉はんとする神の子のあこがれだ。上遠野にも樂みがあらう、けれども夫れは現實の血と肉とを舐る獸の舌鼓だ。富佐子、お前は神の子のあこがれと獸の舌鼓と、何方を選ぶ。理想の甘露が好いか、現實の血と肉が好いか、問ふ迄もあるまい、答へる迄もあるまい。』

富佐子は猶も顔を掩ひながら、諾いた。

『けれども富佐子、所謂「白く塗りたる墓」の如く、外を美にして内に骸骨と諸々の汚れを充す位なら、寧ろ初めから骸骨のまゝで諸々の汚れを背負つて舞踏を踊つて居る方が罪が無い、苦痛もない。現實の血と肉とを舐らうといふ慾望の根が絶たれなければ、結局の安心と滿足とは到底得られるものでない。而もそれが頗る無理な註文だ、川柳點に困くさ、「極無理な意見、魂入れ換へろ」だ。魂の入換へは殆ど出來ない相談に等しいが、此の出來ない相談を出來し得る奴でなければ、理想の甘露に醉ふ資格はない。

理想の甘露に醉つてヘベレケになつて居るやうな面をして居る今の奴等は、悉く白く塗つた墓のパリサイの徒だ。さういふ奴よりは寧ろ土遠野主義の、十分現實の血と肉とを食つて、ドシドシ現代の肥料を作る方が國益に成る。少くとも愛國者たる事を得る。大に肉を食ひたがる癖に、肥料が臭いなどと生意氣な事を吐かして居る奴が大分あるが、其樣は奴等は肉を食ひながら肥料も作り切れぬ意氣地なしなのだ、……少し話が岐路に入つたやうだ……エヽト何んだつけな……』

富佐子は赤くなつた額を擧げて莞爾とした。

『アヽ富佐子、白く塗つた墓でもなんでも好い、己れはもう骸骨を見飽きた、其の骸骨を隱して置いて呉れさへすれば好い。』と青海君はがつたりしたやうに椅子の背に凭れた。

『ねえ兄さん。』と富佐子は沈んだ聲で、『何うせ人間は衣服を着て居るのでせう。』

『さうだ、富佐子のやうに裸體で躍れば免職だ。』

『ホヽ、理想に醉つて恍惚となるやうな所まで行つて仕舞へば、誰れでも神樣のやうに平氣で裸體で居られると思ふわ。けれども私達には其處まで行けるか何うか自分にも解らないでせう。マア行けないと思はなくちやねえ。ですから矢張な服を着て居ない譯には行かないわ。でも私、夫れでも好いと思ふのよ、神樣のやうに裸體のまゝで美しいやうにならうといふ希望さへ確かなら。』

『さうだ、人間が人間で居る間は到底天國には入れぬ、けれども天國に入らうといふ希望の裡に、此の「我」を投げ込んで仕舞へば、畢竟夫れが天國に入つたのだ。希望でよろしい、希望でよろしい。富佐子が、其の涙を安心の涙、滿足の涙と全く思ひ込んで仕舞へば、多少のサルチル酸は入つて居ても、矢張安心の涙、滿足の涙に違ひない。理想は永久に我等の前面に在る、我等の手に在るものは希望だ。富佐子、己れは、多年お前が希望に生きようとして努力奮闘して居るのを知つて居る。己れは同情に堪へんのだ。羽仁の努力には綽々として餘裕がある、まして男の事だ。お前の奮闘は惡戰だ、まして女だ。己れはお前の敗北を氣遣つて腋の下に汗を流した事が幾度あつたか解らぬ。其の度お前は、頑強に戰つて、今日迄立派に自己を維持して來た、今に及んで敗北してはならぬ。己れのやうなものの同情に頼れといふのではない、富佐子……』と青海君は、富佐子の顏を覗き込んで、『羽仁を失望させるのは罪惡だ。羽仁は常に云つて居つたぞ、富佐子は我輩を失望させる女ではないと。』

富佐子は眼を睜つて青海君の顏を見た。其の大きい眼から溢るゝ涙を、青海君は自分の所謂、安心の涙、滿足の涙と定めた。

トいふやうな出來事のあつた翌日、青海君は用ありげに羽仁君を訪れたが、留守だつた。其の翌日も訪れた。其の時は羽仁君は居たが、青海君は三時間も坐り込んで居る間、小夜子に、ラパンゼルといふ、長い〳〵髮の毛の、美しい女が、妖婆に捕へられて、高い塔の上に載せられて、其の長い髮を下に垂らして、妖婆が塔に乘る階子の代りにさせられて居たが、或る日その髮の毛を傳つて上つて來るものがある、ラパンゼルは又イヤなお婆さんが來たと思つて居たら、それが自分の仲好しだつたお武士で、たうとう塔の上からラパンゼルを助け下ろした、といふ話を一つした限りで、飄然として歸つて仕舞つた。

而して斯の如く、今日も亦ヌーッと入つて來たのである。

何故しに毎日やつて來るのか、青海君自身にも解らないか、元來青海君は人の家に行くに、何故

しに行くかといふ事などを研究してかゝる男でなし、又研究してかゝらねばならぬやうな家へは決して出掛ける男でないから、其の點は一向平氣なものだ。けれども何か重大な事が胸に痞へて居るやうでもあるので、夫れを處置せなければならぬ責任を感じて居るやうにもある。

で其の責任を感じつゝ青海君は、安樂椅子に凭れ込むと薄ら眠くなる。責任といふものは眠いものだと思つて居ると、其の責任が俄にドタリと胸の上に落ちて來て、危く押し潰されかゝつて、眼をあけた。

小夜子は青海君の胸に縋つて『ホヽ。』と笑つた。

『アヽ小夜子か、兄さんは何うした。』

『ホヽ、後に居てよ。』

青海君は振り向いた。成程羽仁君は後に立つて居る。青海君は責任の化けた小夜子を抱へて、膝を揺つた。

羽仁君は卓の前に腰を掛けて、

『富佐子は何うした。』と云つた。

『健全だ。』と、青海君は威張つたやうに、『心神も身體も。』と附け加へた。

『健全か。』と羽仁君は微笑した。

『正に健全だ、小夜子のやうに健全だ。』と青海君は膝の上の小夜子を揺り動かして、『然し小夜子の健全のやうに、無爲にして化したのではない。努力的奮闘的健全だ、悲喜交到る的健全だ、トラヂコミック健全だ。然し、苟くも木佛金佛ならざる以上は、換言すれば、血と肉とを持つた人間たる以上は、健全を保たんが爲には、努力奮闘せざるを得まい。例へば君にしてもだ、其の健康狀態に達するまでには、人知れず經營慘澹だつたに相違ない。泣きもし、笑ひもし、憤を發して見たり、溜息を吐いて見たり、起つて見たり、坐て見たり、人に見せられない色々な芝居をやつたに違ひない。夫れで好いのだ、其のコンフリクト其の物が人生なのだ。先達何とかいふ青い大尉が云つたぢやないか、零の平氣と∞の平氣があるつて。小夜子の健全は零の健全だ、富佐子の健全は∞の健全だ。』

『少し姉さんの所へ行つておいで。』と羽仁君は青海君の椅子を離れて傍に來た小夜子にいつた。

小夜子は横目で一寸羽仁君を視て、默つて首背いて、沈んだ顏をしながら出て行く。

小夜子の後姿を見送つて、羽仁君は徐かに卓に倚りながら、

『青海。』と呼んで、『僕は西洋へ行く事にした。』

『西洋！』と青海君は椅子から飛び上つた。

羽仁君は首背いた。青海君は睜つた眼を瞬いて、

『何しに行くのだ、全體。』

羽仁君はたゞ澁い笑顏を見せる。

『何しに行くのだ、全體。』と青海君は繰返したが、慌てて兩手を左右に振つて、『愚問、愚問、我れながら愚問だつた。何んで西洋へ行くと聽けば、何んで日本に居ると聽かずばなるまい。可、可。』

青海君は落膽したやうに椅子に倒れて、

『西洋へ行くか……好からう。所で何しに――ではない……エヽと其の何んだ……行くかね。』

『行く。』

『ウンと……エヽ……さう〳〵、何處へ行くのだ、全體。』

『何處といふ事もないが、先づ伴の居る所へ行つて、夫れから先は――』

『足の向いた所へ行つて、氣の向いた所に止まる。大に可。で何時行く。』

『上遠野が近々式を擧げて、兩人で秋田へ出掛ける事に定つて居る、夫れが濟めばもう用はない。』

『金は何うする。』
『ありたけの財産を處分して仕舞ふ。』
青海君は天井を仰いで、『ム、。』と唸つた。羽仁君は青海君の額を見ながら、
『で小夜子だ……』
『小夜子だ……』と青海君は反響のやうに云ふ。
『伴は遠からず歸る、夫れまで君が引受けて呉れ。』
青海君は重々しく首肯く。
『夫れで總てが片附いた。』と羽仁君は目を閉ぢた。
青海君は、未だ片附かぬものがあると思つた。否、片附いたものは一つもないと思つた。而して今自分の胸に痞へてゐる或る物は、其の片附かぬもののうちの、殊に片附かぬものであると思つた。けれども、其の片附かぬものの總ては、片附かぬまゝに、片附いて仕舞ふか片附けられて仕舞ふかの運命にあるものだとも思つた。
『羽仁。』と力のない聲で青海君は、「君は何時ぞや、Hadjは靈的向上の最後の階段だといふやうな事を云つたな。さうして夫れは順禮に於て、自己の一切の生活を犧牲とする事を意味し、順禮の終りの供牲に於て、自己其の物を犧牲とする事を意味して居ると云つたな……君のは文明の順禮だ。』
青海君は羽仁君の額を見た、羽仁君は默然として居る。
『然るに、今の文明にはメッカも無ければジュルサレムもない。』と青海君は、『僕は君の前途を危惧まざるを得ない。』
『メッカもジュルサレムも異教徒の手に埋められた。』と羽仁君は微笑して、『加之今の十字軍は昔の十字軍よりも慘だ。昔、兒童の十字軍が大半奴隷に賣られた、今の大人の十字軍の運命も夫れだ。』
『君はたゞ其の慘狀を見物に出掛けるのか。』
『僕は常に、自分一個のメッカ、自分一個のジュルサレムを求めて居るのだ。』と羽仁君は冷かに笑つた。
『羽仁。』と青海君は聊か言ひ淀んで、『君は平然として一切を捨てるか。』
『青海！』と羽仁君は強い聲で呼んだ。青海君は眼を輝かして次ぎの言葉を待つ。
『青海、一切を捨てるのは一切を求めるのだ！』と云ふ時、羽仁君の額の紅がスーッと褪せる。
其の額を凝と視て、青海君は太い息を吐いた。而して口の內で呟いた。
『額には目も鼻もない、羽仁は額の男だ。』

或る朝、隱元豆を摘んだ時、羽仁君の額の紅がスーッと褪せた。
知られて居る羽仁君は、隱元豆を摘んだ朝から、一切を捨てる夕迄の羽仁君だ。其の前後の羽仁君は解らない。其の間の羽仁君も解らない。人々は只、羽仁君の額の色の濃くなり薄くなるのを見たのみだ。羽仁君は終に、「額の男」であつた？

跋

嘗て故紅葉山人は其の門弟子に一節句を與へて「金屎をひれ」と敎へたと聞いたことがある。苟も小說家として世に立たうとする者は、所謂『馬鹿な金使ひ』をした後でなければならぬといふのであらう。碎いて言へば、遊里に出入して、粋も甘いも嚙みわけねばならぬといふ意味であらう。
江戶文學――戲作者文學は、一面から言へば殆ど遊里文學であつた。通又は粹を競ふ衒粹文學であつた。明治初年の文學が、面目を一新したといふても、過渡時代の事例として、其の餘弊を受けぬといふことはな

かつた。殊に馬琴を排して、西鶴を宗とした爲めでもあらう、當時の小説は多く遊里を出でず、又粋をも脱し得なかつた。紅葉が「金糞をひれ」といふたのは、寧ろ當時の作者の理想を自白するものであつた。爾來文學は幾度か變遷して、通人は粋の如きは、文學究極の目的でないことも明らかになつた。「金糞をひれ」などといふ詞は、一種の譫語の如く考へられて來た。自己の經驗を中心とする眞面目の態度に到著したのである。

然りと雖も、自己の履歴——平凡な、單純な、萬人共通的な履歴が、文學として何程の價値ありやは論辯する迄もない。理想の低い、素養の少い、趣味の狹い、多くの作者の制作は、遂に一面幼稚な淺薄な青年の戀以外には出ぬ。紅葉の言を藉りていへば『戀糞をひれ』の程度を脱し得てはをらぬ。大勢は如何に推移しても、態度が如何に變化しても、皮相を學ぶ者の到達する點は、略ぼ想察せられる。小人玉を抱いて罪あり、早くも形式を破らんとする形式を生み、他の奇なき直接經驗の套習を踏む。ゲーテの所謂『一つの事を仕遂げるに、實際どこ位の困難があるものか一向知らないで、自分の力の及ばない事をたゞ無暗に計畫して喜ぶ「ディレッタント」の境界を脱せない』のを遺憾とする。

能樂の盛んな時代には辻能といふものがあつた。歌舞伎の流行した時代には乞食芝居といふものもあつた。其の時代の大勢に附隨して、模倣者の生ずる謂ひである。さうして其の大勢に縋つて衣食する者の生ずる所以である。今日の我が文學が、世界の文學の大勢に附隨する模倣でないと誰が辯明し得るであらうか。其の大勢に縋つて衣食する者でないと誰が問答し能ふであらうか。

革命は常に其の社會に無關係な他の一角から生れねばならぬ。但し意義の徹底せぬ革命は、又常に生活問題に覆はれて仕舞ふ。言を換へて言へば、在來の習慣に埋沒してをる專門家——黒人と沒交渉な素人の仕事も、生活問題に逢著して軈て第二の黒人と作る。最初奮起した時の意味は、中途何處にか煙散霧消するのである。舊歌舞伎を革命的に覆すべく起つた新壯士芝居が、今日如何の情態にあるかを想ふべきである。小説方面の作家が、それと同轍を踏まぬものと認定するものは餘りに達眼に過ぐるであらう。

明治文學の振作を翹望する者は、要するに常に文學以外の刺激を期待せざるを得ぬ。新に出る素人も、第二の黒人となり、次に現るゝ素人も第三の黒人となる。途に當る黒人の底知らずの陷阱は斯くの如くにして遂に永久の魅毒を絶たぬ。片時も、文學者ならざる人の制作、小説家ならざる人の小説を忘れることは出來ぬ。

如是閑叟の著『額の男』出るに及んで、敢て之を推奬する所以の偶感を記して跋に代へるのである。

碧梧桐



○聖人の死は自己の復活なり、豪傑の死は他人の復活なり。

○古の精神は沈みて丹田に在り、消化營養の機關なりき。今の精神は浮きて頭腦に在り、耳目口鼻の機關なり。（「如是閑語」より）

ふたすぢ道

上

「何ンだつて。八貫出せつて。エ、吉ちやん、馬鹿におしでないよ。馴染甲斐のねエ。掛引なんぞアあるもんかナ。」と縁の毀れた長火鉢を前に控へて、燃えかけの半分程混つた消炭を、顰め面でプー／＼吹き付けながら、婆は怒鳴つた。

赤ッぽい雙子の半天の生新しいのを、若々しく引掛けてゐるが、五十の坂は確かに越したらしい。火の付きさうな胡麻鹽頭に、小さな丸髷を載せた、色の悪い、黒い肥り返つた婆で、頸筋の所には、乳首の様なヒッツリが二つ許り、半襟の下から出没してゐる。

吉ちやんと呼ばれたのは、其向うに両足を投げ出してゐる、年の頃十五六の少年である。豊頬のふッくりとした面質だが、始終鬱陶しさうに眉を顰めて、何となく険のある目付で、不絶、處定めず睨め付けてゐる。投げ出した足の邊には、一箇の銀時計が不作法に抛り出してある。

黒ずんだ縞の、汚れ腐つた布子の襟を、無上にむしりながら、吉は例の険い目付で、婆の頻りに吹き付けてゐる消炭の、ともすれば消えさうになるのを、案じてでもゐる様に、一心に見つめてゐた。婆は、頓て、周圍の炭を火の上に掻き集めて、黒薄りに光つてゐる、小形の鐵瓶を、其上にかけて、衣物の袖を一寸返して鼻の周圍を二三度摩でながら、ホッと溜息をついた。

吉は、待ち遠しかつたといふ風で、

「エ、、お熊婆さん、いけねエか。」と口早に尋ねた。

婆は無言で、火鉢の上に伏せてあつた湯飲茶碗を、悠々と起して、鐵瓶の湯をついで、グッと飲み干し、ウ、生ぬるい、と呟きながら、手早く膝の下を探つて、長煙管を取り出し、二三度ポン／＼とはたいて、指先を煙草の箱に差し入れながら、

「エ、、吉ちやん、お前何時にねエ頻いぢやねエか。」

『頻いけど、お熊さん、今日は言價で買つといて見ンねエ。又今度、どしこと儲けさしてやらあナ。』と吉は両手を組んで、五分刈の坊主頭に載せて、左右へ振りながら、苦笑した。

『儲けさせるッて。ヘーン、言つてやアがら。』と婆は哈つて、「夫れでも妾に儲けさして見れようッてエ心持が嬉しいや。吉ちやん、驕らうか。」

『驕る代りに、夫れで取つといて見ンねエ。』

『オヤ／＼、うつかり御世辭も言へないんだねエ、アハヽヽ。だが、吉ちやん、戯談ぬけ、これぢや八ッは出せないよ。』と婆は雑巾を取つて、せッせと火鉢を拭き出した。

『だつてお熊さん、藏の親分の所へ持つてッて見なせエ、黙つてたつて八ッは出して呉れるぜ。』

「ヘン、藏の親分だつて？ そんなら其方へ持つてくさ。」

「何さう言ふ譯ぢやアねエんだよ。」

「ホラ持つてけめエ、様ア見たがいゝ。」と婆は雑巾の手を休めて、少し眞面目な面付で吉を見ながら、「お前何ンてエと、藏の藏ンッてエが、彼奴は、お前、平生餓鬼等を苛めつけちや、皆

え上汁、啜つてるンだもの、責めて何か持つて來た時位は、俠氣を見せてやらなくッちゃ、何ンで餓鬼等がくッついてゐるもんかな。お前そんなに高く取つて貰ひてエんなら、何故藏の親分の所へ行かねエんだ。さうして人、面白くもねエ、妾ン所へ來といて、やれ高いの廉いのッて愚圖ついてサ。さッさと藏の親分の餓鬼になりア、それでいゝんだ。」

異様の目付で、向うの壁を睨んでゐた吉は、向き直つて、七六ケ敷い婆の面を見つめたが、別段言譯を爲ようでもなく、却つて笑顔を作つてゐる。

「早エ話がさうぢやねエか。」と婆は火鉢の灰を搔きまはして、消炭を取り出しては一つ〳〵火の上に落してゐる。

『ソリヤさうよ。』と氣の無ささうに、吉は言つて、『だけどもサ、藏のへ行つていゝ位なら、てんで此方の厄介にやアなりやしねエやな。後生だ、エヽ、お熊さん、ダメか。』

「夫ンな薄情なんぢやア猶更ダメだ、アハヽヽハ。」と婆は仰山に笑つて、一先づまあダメと思つて貰はう、因業な様だけれど。夫れッてが、お前、これエだ出獄つて來た馬車金の野郎が、何ンでも探偵の下アやりやアがるッてんで、いの一番で毬ッ平が入獄つて、夫れからつてエものア、己らの方の厄年で、彼方でもやられた、此方でもやられたッてんで、田圃の赤鐵なんぞア、堪え切れなくなつておッ弃つちまつた位よ。此間も聖天下のが捕げられたんで、お前、己らの所なんかハケ場に困つちやつて、仕方がねエから、横町の鶩癡な彼奴に持ち出さしたのよ。さうすると、お前、此方も失策つたのさ。野郎め相變らず不間やりやアがつて、危く赤いつよ。あんなに動悸つかせた事はありやしねエ。夫れから此方、己らの所なんぞア片時氣が許せねエのサ。眞實に鶩癡た怖えものはねエんサ。夫んな鹽梅だから、ちッたあ察して呉ンなくつちや、あんまり可哀想てエもんだ。」

『可哀想の見當違えだ。』

「エヽ口が惡い、眞實に間食に合つたもんぢやないんだよ。」

『巧く言つてるぜ。』

「巧えも不巧もねエ、夫れに違えねエぢやねエか。」と婆は尤もらしく言つた。

吉は握拳で兩方の内股を叩きながら、

『ウン、そんなら夫れでいゝとしよう。』

「愈々いゝと決つたかね。」

『仕方がねエや。』と吉は態とらしく俯向いた。

「仕方がねエ？ オッウ情ないんだね。」と婆は一寸考へて見せて、『夫れぢやかうしよう、此りや五貫にまけといてもらつて、お前八貫丈是非要るツてんなら、足らず目の三貫は前貸にしといて上げよう。そんならよかッペエ。』

『ヂャ左うして貰はうか。』

「何ンだか氣の無い返事だね、此方は無理に御願ひ申すんでもなんでもないンだよ。」と笑へば、

『左うして貰はう。』と語尻を强めた。

「貰はう許りに力を入れてサ。慾張りきつてるねエ、眞實に。」と婆は高く笑ひながら懷から着てゐる半天と同じ縞柄の小さな財布を取り出し、銀貨やら銅貨やらザクリと摑み出して、汚い疊の上に行儀よく列べ、一ッ〳〵中指で押しやりながら、「夫らよ、六十錢、七十錢、これで七十五錢、ホラ八十錢だよ、間違ないね、いいかえ。」

吉は手早く搔き集めて、銀色の大きな金物の附いた青羅紗の蟇口を出して、夫れを投り込んだまゝ懷に入れてパチンと音をさした。

『夫ンなら己ら歸こよ。』と吉は四方を見廻したが、臺所の破れ障子に薄ぼけた夕日さして、煤けた家の中は早や薄暗くなつてゐた。

「まあいゝぢやねエか。」と婆は後にある洋燈を點して、吉の額の傍へ釣しながら、「今日千住の方へ用足しに行つて貰つて來た餅があるから、摘んで行きねエ。」と火鉢の側の眞黒な鼠入らずから、竹の皮のまゝ萩の餅を取り出して、皮を開けていきなり一ツ頬張つて、オヽ旨えや、喰つて見なせえ、」と吉の前へ突き出して置い、湯飲に白湯を注いで吉に渡した。

「有難う。」と受取りながら吉は、「もう何時だらう。」

「左うよナ、かれこれ六時にアなるだらう、何ンか用でもあるのかエ。」

「何左うぢやねエ。」と言つたが、何となく落付かない様子である。

「夫ンならゆつくりして行きねエ、サア摘んで見なせえ、旨えから。」

吉は氣のなささうに萩の餅を摘んで口へ入れたが、旨くもかいくも無ささうである。

其中婆は懐中時計を何處へか仕舞込んで、半天を脱い簞笥に收め、其處に掛つてゐた襟先から腸のはみでた怪しげな半天を着かへて、火鉢の前に坐り込んだが、吉は慌しく立ち上つて土間に下りた。

「オヤ最早歸るのか、ヂヤ又ゆつくり遊びに來なせえ。」

「ウン、あばよ。」と吉は其家を出た。

夕餉の夫れとも受取れない怪しい臭氣の咽せつぽい煙は萬年町の狹い往來を籠めて、角の質屋の醋たらしく眞白な土藏の白壁に棚引いてゐる。

異様の男女の夥しい雜沓の間を縫ひ〳〵、吉は急いだ。毎晩曲角を水だらけにする濡れ魚屋のカンテラの油煙漸う烈しく、亭主の皺枯れ聲と嬶の金切り聲とを中心として、其周圍に喚いてゐる老弱男女の凄まじい聲々を後にして、吉は較人の氣薄い山伏町の裏手に出た。突き當りに淺草田圃を少し許り見せて、名殘りの夕日に染められた入谷稲荷の千木は事々しく棟割長屋の上に聳えてゐる。

吉は右側の長屋の中程で、竹格子の肱掛窓に薄く明りのさしてゐる家の潛戸を入つたが直小さな風呂敷包を抱へて出て來た。

淺草田圃に出て、吉は暫時立ち止まつて向うを見渡したが、晩烟四方を閉して目に入る人影もない。唯、案山子と言はれたも昔、藁束を貫いた竹の十字架が、枯田の中に倒れかゝつてゐるのに一寸目を注いで、吉は淋しげに微笑んだ　頓と、しつかり包を抱へたまゝ駈け出して、太郎稲荷の森を左に見ながら危い畔道を走つた。

道の兩側に新しい長屋の散在する邊へ來ると、吉は少し歩を緩めて、頻りに行違ふ人に目を注めてゐる。

左に折れて、向うに高く十二階を眺める通に出た。公園の森も漸う朧になつて、十日の月は淡白い姿を晴れ渡る空に現はした。吉は茫然と往來の大溝に沿うて、歩むともなく停るともなく佇んでゐる。

「オヤ吉ちやん。」摺れ違ひ様に呼び止めた女がある。吉は撥ね返された様に振り向いて、

「アヽ、お仙さんか、危く行き違えになる所だつた。」

「何うしたの、妾を索してたのかエ。アラさう、丁度いゝね。妾も少し話があるから、一緒にぶら〳〵お行でな。」とお仙は先に立つて歩き出した。

装は雙子づくめの黒足袋で、思ひ切つて曲つた吾妻下駄を危げもなく穿いてゐる。年は十八九の、寧ろ丸顔だが、頬は削けて目元の淋しい、キリヽとした口付も何うやら打ち解けない色を添へて、貧相と言ふではないが如何様愛嬌の乏しい容貌である。

吉はお仙と連れ立つて、元來た道へ戻つた。月は漸う光を增して、二人の影を鮮かに地に印した。
「吉ちやん、お前は未だ小さいね、ほら影法師を御覽、妾の肩迄しきやありやしない。」と言つて、お仙は吉の肩に手を掛けた。
『己らアチンチクリンなのかなア。男のチンチクリンは駄目だな。』と吉は言つた。
「何アにお前が小さいンぢやないンだよ、妾が全體お馬の質だからね。身體許り氣がしける樣に大きくなるンだもの、弱つちまふわ。』
『お仙さんなんぞア夫んななもんか。』
『いんえ、夫んななんだよ。だけども大きいッて云やあ限のないもんざね。お粂さんなんかは隨分大きい方だつたよ。妾がお馬なら、お粂さんは駱駝だつて皆さう言つた位サ。』
「ウン能くお仙さんと一件に歸つて來たあのノッポかえ。隨分大きな女だつけな。己らなんぞアてんで腰ッ切りだ。アハヽヽヽ、あれ此頃見えねエね。何うしたんだい。』
「あの人はもう疾うにお嫁に行つてしまつたアね。』
「お嫁に？』
『あゝ、お嫁にさ。厄介だね。」
『お嫁が厄介か。』と吉は獨言の樣に問うた。
「大厄介だあね。妾はお嫁なんぞに行くのは大嫌ひさ。此上の厄介はありアしない。』とお仙は聲高に笑つた。
　二人は太郎稻荷の鳥居際から右に折れて、入谷の手前の原の在る所に來かゝつた。
「吉ちやん、お前先日の返事を聞かしてお呉れな。』とお仙は稍嚴格な調子で、「お前の身體の處置の事たから、正可忘れてしまやあしまいね。」
「アヽ、今夜其事て會はうと思つてたのさ。」
「夫んなら親方へ御詫を願はうッてエのかえ。」
「ウン。」と吉は強く諾いた
「だけどもね、」とお仙は須臾默して、『お前先の樣な所業は疾うに止めてゐたんだらうね。」
　吉は唯俯向いてゐる。
「や　あしなかつたらうね、あればつかりは。」
　吉は愈々俯向いた。
「やつてるのかえ。止めてるのかえ。』とお仙は兩方の袖で、後から吉の肩を抑へて、「エヽ吉ちやん、何うしたてンだね。』と振りかぶさつて、吉の面を覗き込む樣にして其の答を催した。
『お仙さんにアすまねエけど、實は己らあ已めずにゐた。」と聞きとり難い程低い聲で、吉は答へた。
「何ういふ料見なんだらうね。』とお仙は低い聲に力をこめて、呟く樣に言つたが、『夫んな事ちあ、到底も眞實に護謨屋さんへ歸つて辛抱する氣は無いンだらう……困るねエ。」
「全くさう云ふ譯ぢやないンだけど……」
「さういふ譯でないンなら、何故さつさと止めてしまはないンだい。眞實に眞人間の爲べき事ちあないだらうぢやないか。お前だつて學校へも行つたし、書物もちつとは讀んでて、あんな餓鬼等とは一件にならない身でゐて、夫れであんな事が止められないとは、能く〳〵因果なんだね。さうして一遍だつて嫌な所へでも行つて來て御覽な、並の人間なら、考へても身慄ひが出るンだよ。』
　二人は知らず〳〵立ち止まつて道傍の低い埒に倚りかゝつた。吉は包を埒に凭せて、地に倒れて居る自分の影を側目もふらず諦視めてゐる。お仙は更に語を續けて
「お前は夫れでいゝ氣になつてゐられるだらうがね、夫れでは死くなつたお前のお母さんやお父つさんに申譯のないッてエもんだよ。なんぼお前が男の子で何も氣がつかないからッて、ちッとは其處イらへ考へのつきさうなもんぢや

ないか。』

『實はねお仙さん。』と吉は俯向いたまゝ、沈んだ聲で、『先日親方の所を出る時持つて出た、衣物やなんかを質に入れちやつたもんだから、いけねえ事をした、と思つたけど、お詫をして貰ふには何うしても、其いつを持つていかなくツちや惡からうと思つて、そんな事でお錢が要るもんだから。』

お仙は慌しく其語を奪つて、

『馬鹿な面な。お金が要るンなら、何故妾に相談をして呉れないンだい。夫れを何時でもさう言つてるンだよ。』と思はず聲高に言つて、お仙は前後を見廻したが、急に聲を祕めて、『お錢が要るからツて、其都度そんな惡い眞似をしていいのかえ。よしや死ぬ程困つたからツて並の人間にそんな事が出來るもんぢやアないんだよ。お前なんか立派な人間で、何もそんな眞似を爲ないからツて威張つてやつて行ける身體を持つてゐて、何が面白くツてあんな事が已められないのだい。おまへの料見ぢや、護謨屋なんか、朝から晩まで眞黑けになつて、何年經つたツて何なれるもんかツてヱ樣な事を考へてゐるンだらうけども、そんならあんな眞似をしてゐりや何んな立派な者になれるンだい。一ツ間違へば、人間の行くべき所でない所へやられてさ、出て來たからツて二度と再び人間の仲間入りをする事も出來ないで、何うかかうか飛んで歩いてゐられる内はいゝが、年でも老つて誰もかまひ人もなくなりやア終ひには野倒死をする位が落ちぢやアないか。よしや、お前、何んな處へやられなくともサ、散々ぱら惡い事をした末に、何んでいゝ事のあらう筈がないやね。夫れから思やア、堅氣にしてやつてさへすりやア夫れこそ自分の器量次第で、立派な旦那樣にでも何んにでもなれるだらうぢやないか。お前も知つてるあの入谷の藤助さんなんかア矢張お前位の時分にア金魚屋の水車を轉して居たんだツてヱぢやないか。夫れがお前今ぢやア地主樣の御隱居で、まるで華族樣見たいな暮しをしてゐられるのも、皆自分の辛抱次第器量次第、眞實に豪氣なもんぢやアないか。又其處までは行かなくとも、第一お前大手を振つて人の前へ出られる丈も何んなに威張つたもんだか知れやアしない。惡い事をしたものはそこへ行つちやア情ないもんで、始終小さくなつてて、大きな聲で口もきかれないツてヱ話だ。當然だあね。自分に夫れだけ闇い所があるンだもの。お前だつて覺えがあるだらう、護謨屋さんで一生懸命働いて居た時と、あんな事をしてほツつき歩いてゐた時と、何方が氣が樂だか。夫れにお前なんぞは、自體が利發な質で、物の解らないンぢやアないンだから、ちつと自分で料見さへつけりやア、眞人間になるのはなんでもない仕事なんだよ。今度こそ心から料見を入れかへて、辛抱してお呉れよ。』と、一層低い聲に、一層力を入れて、『いいかい。解つたらうね。』

『ムヽ。』と涼しげの笑顏を月に照して、吉は答へた。

『そんなら六兵衞爺さんに頼んで御詫に連れてツて貰ふ樣にして上げよう。彼の人だつて、まさかお前がそんな眞似をしてゐる人間とア知らないから、色々世話もして呉れるンだよ。萬一そんな事が知れでもすりやア、もう介つちや呉れやアしないよ。もう〳〵今度てヱ今度は間違はあるまいね。』

『今度は乾度大丈夫だ。』と吉は明了と答へて、『己れだつてお仙さん、』と乾とした調子で、『お前が色々言つて呉れるのを聞いてる時にア、眞實に惡い事を爲ようなんてヱ氣はちつともねヱんだよ。夫れだからお仙さん、お前に言はれた事を思ひ出すと、己らア何んな惡い事をしてゐる時でも、哀しい樣な恐い樣な變な氣になつて、

其度もうこんな事はふつ〳〵嫌だと思つちやア、又何うかしてついやらかすのサ。さうして又後で、何んでさつきあんな眞似をする氣になつたんだらう、と思ふ位だけども、やらかす途端にア、何ういふものか、お仙さんに言はれてる事をふッつり忘れちやつてるのサ。其癖平常惡い事がしたくなつたら、お仙さんに言はれた事を屹度思ひ出さうと、何時でも考へて居るンだけど、其時になると、惡らしい樣に、思ひ出されねエんだもの、さうしといて、後になつて何時でも思ひ出しちや、腹が立つて腹が立つて、獨りでに泣きたくなつてくるよ。』と急に俯向いて、「ねエお仙さん、己らア、始終お前と話をしてゐられる所か、始終面の見える樣な所に居りや、マアそんな事ア出來ッこねエけれども、さうして居さへすりやア、惡い事をする氣なんかになれッこはねエんだぜ。」と仰いでお仙の面を見た。

お仙は吉の肩を抑へてゐる手に一寸力を入れて、ホヽヽと笑つた。

「ねエお仙さん。」吉は獨言を續いで、「己らアお仙さんがゐて呉れなかつたら、今時分は何んなになつてるかわからないンだね。」と力のない聲で、「眞實に己らアお仙さんさへ居なけりやア、何んなになつたつてかまはねエんだ。』と呟いた。

「何を言つてるンだね、吉ちやんは。妾はさう言はれるのは、そりや眞實に嬉しいけれども、お前、そんな氣でゐちや困るよ。』とお仙は口早に云ふ。

「何困るもんか。」と吉はすげなく言つた。

『だけどもお聞きよ、お前だつて立派な人間ぢやアないか、誰が何んと言はないからツて、あんなもんの仲間に陷つて、人間一匹をだいなしにしちまつて、いゝ譯のもんぢやないだらう。さうやつて碌でもない妾の樣なものを力にして呉れるのは、そりやア嬉しいけれども、よし妾がゐないからツて、お前が何うなつてもいゝなんてエ事が、何處にあるもんかね。』

「だけどもサ。」と言つたきり、吉も當もなく向うを睨んでゐる。

『そんな事たからお前はいけないんだよ。何うするもかうするも、人の爲ぢやアないンぢやないか。自分で決心をつけなくツちやア、そんな人をあてにしてゐる樣なこツちや、到底もだめだよ。もうこれでいけなけりや、妾はもう〳〵介はないよ。今度はほんたうにこれで最後なんだよ。何時でも今度々々ッていふもんだから、お前の方ぢや高を括つてゐるだらうけども、實妾は何うしたもんかお前の事ッてエと他事とは思へないで忘れようたッてさうもいかず、氣になつて、氣になつて、妾アお前の事を思ひ出すと、何をしてゐても茫然としちまつて、工場で仕事をして居ても、時々夫れだもんだから、皆に笑はれるのサ。眞實に何うしたんだか、自分で訝しい位なんだよ。これも何かの因緣なんだらう、と思つてゐるんだけども、ねエ、吉ちやん。』と少し體を屈めて、吉の耳の邊に口を寄せて、低い聲を顫はして、「妾は倩々さう思ふ事があるんだよ、こりや何でもお前のお母さんが妾に憑りうつッてでも居なさるんぢやあるまいかッて。』

吉はお仙の腕に凭れた儘、包に面を押し當てて歔欷の聲を洩した。

下

「天下握る手も五本の指よ。私ア其手で護謨を布く。」と乾場一面に張られた護謨布の黒襟をうつてゐる間から、彼方此方に海坊主の樣な半身を現はして護謨ひきの小僧等は長閑な聲で謠つてゐる。

胸から腰の邊へかけて、一面に護謨汁に塗つ

てゐる仕事半天を纏つて、乾場の片隅の生垣の傍で護謨ひきに餘念もなかつた吉は、頓てもう一枚だぞ、と呟きながら、護謨だらけの兩手を烈しく振つて、側の低い埒に腰を掛けて、眞黒な顏の目ばかり光らして四方を見廻してゐる。

『オヤ〳〵、吉ちやんだよ。』と杉垣の外に聲がした。吉は思はず其方に目を注ぐと、

『眞實に吉ちやんだよ。何うしたらよからう。』と仰山に叫んで、疎らの杉垣に身を倚せて、此方を覗いてゐるのはお熊婆である。

『アヽ、お熊さんか。己りあ誰だと思つた。』と吉は氣のなささうな聲で言つた。

『何だな、小塚へ用足しに行つて、今歸りよ。』と婆は頻りに、吉の身體を眺めながら、『豪氣に精が出るな。眞黒になつて稼ぐたアよく言つたもんだ、ホヽヽヽヽ。だが、護謨屋さんたアオツリキだな。己りア又、どうして此頃はちツとも見えねエのか、と思つてたが、これぢやア來ねエ筈だ。夫れぢや何ンだな、あつちの方はすつかり足を洗つちやつたんだね。』と少時默して、吉の答を待つ樣に見えた。

『當然よ。』と吉は益々氣の無い返事をしたまま、俯向いて自分の足の先を諦視めて居たが、急に顏を上げて、『アヽ、お熊さん、前にお借があつたつけな。』

『ウンさうだつけな。何お前の事たから、かまふ事はねエが、錢金は他人だツてエから、出來る時に、して呉れせえすりやア、夫れでいゝわサ。だが何か、お前護謨屋さんで年期を入れて、終に護謨屋の親方に爲らうツてエのか、何しろよからうサ、あんな眞似してゐるよりア、幾らいゝかわかりやしねエ。』と妙に生眞面目な面付で吉を諦視めた。

『さうだらう。』と吉は笑顏を作つた。

『さうに違えねエ、と己れア思つてるのよ。ねエ吉ちやん、己れアあんな事こそしてゐるが、何んでも堅氣にこした事はねエ、と思つてるのだよ。何アに己れの樣な女の古ぼけたのなんかア何うでもいゝが、若え者は堅氣の事さ。だが、お前堅氣でやつて行かうてエなア、辛抱が肝腎だよ。十年なり二十年なりよ、骨が折れようが、苦しからうが、其內にア年を老つて面白をかしい時は二度と再び來やしねエ。人間老少不定だ、其內にお陀佛を喰ふめエもんでもねエつてエ談だ。だがよ、堅氣でやつて行かうてエなア。』と惡く力を入れて、『そんなことなんかア、思つちやアいけねエんだ、アハヽヽヽヽ。』と聲許り可笑しさうだが、目は一種の光を帶びて、俯向いてゐる吉の上に注がれた。

『なア吉ちやん、それに違えあるめエ。堅氣になつといて、やれ旨え物が喰ひてエの、面白い事をしようの、樂しまうのツてエ、そんな料見ぢやア、何の役に立つもんかな。何んでも堅氣ツてエなア、一生懸命働いて、三度の飯は香物で茶漬さへ喰つてりや間違えしきアねエんだ。何サ、其位な料見でなくツちやア堅氣になつたツて、何んで辛抱が出來るもんか。見なせえ、お前だつて此頃は前時分の樣に、飛んで步いてる譯にも行くめエ、旨え物も喰へめエ、面白え事も出來めエ、をかしい事もありやしめエ。其筈だアな、其處が堅氣なんだ。己れだつて、生れついてあんな眞似をしてゐた譯でもねエんだアな。矢張、底にア蓋もあつて言つて見りや、據ねエ因緣から、あんな事をする樣になつたんだが、元ツてやア、これでも堅氣な人間だつた事もあるのサ。そりや堅氣の時分なんぞア、今の樣なもんぢやねエや、何しろお前、樂しみなんてエ事は藥にしたくもありやしねエ。偶に嬉しい思ひでもするのは、何の事はねエ懲役人が握飯にでもありついた樣な工合しきよ。だが、これが堅氣だと思やア、別段愚痴も出ねエのさ。

夫れから思やア、今日は長閑なもんさ。好きな眞似僞度放題で、喰はうと飲まうと巫山戯ようと御勝手次第てんだからな。何アにお前、妾なんぞア何うせもう、人間並の相場通り越して、此先百迄生きこたつて知れたもんだ、齷齪骨折る丈つまらねエから、まあ勝手な眞似やつてるのサ。だが若え者は夫れぢやアすまねエんだよ、なあ吉ちやん。」

吉は唯俯向いたまゝ、指先で埒の丸太を彈いてゐる。

「さうぢやアねエか、ちツたア堅氣の味もしらなくツちやア、修業にならねエつてエもんだ。流石は吉ちやんだ、堅氣にならうツてエ料見が見上げたもんだ。眞實だよ、何でも堅氣に越した事はねエよ。何しろ辛抱しなせエ、餘計なお世話だが。」と空を眺めて、「オヤ〳〵、あんまりお饒舌をしてゐたんで、日が暮れさうになつてきた。マア吉ちやん、辛抱しなせエ。雨でも降つたら遊びに來なさるがいゝ。オツト、妾の所はお前さん方の來なさる所ぢやなかつたつけ。おいねエや、アハヽヽヽ。」と言ひながら、婆は急足に立ち去つた。

「皆もうそろ〳〵仕舞ひな。」といふ親方の號令の下に、一同は各持場の護謨布を疊み始めた。

吉は目の覺めた樣に立ち上つて、一同に立ち雜つて忙はしく働き出した。

「エ、吉や、お前先刻話をしてゐた婆樣は何んだい。」一人の男は疊んだ護謨布を兩手に提げながら言つた。

「ウン、あの重箱面の小汚ェ婆樣か。何んなんだありやア、エ、吉や。」と向うにゐた一人が和した。

「何んでもねエんだよ。」と吉は護謨汁を充した鐵鍋を手にして、行過ぎながら答へた。

「何アにありや吉やの大切な伯母さんだとサ。」と前へ立つて行く一人が、態と大聲で怒鳴つた。

吉は恐ろしく身を慄はして、物をも言はず、後から勢込んで手にした鐵鍋を其男の背に投げつけた。肩から脊の先まで、一面に護謨汁の夕立に逢はせられた男は、不意を喰つて二三間逃げ出したが、急に振り返つて矢庭に吉の胸倉を捕へて、忽ち拳固の雨を返して、ウンと許りに突き放すと、吉は後に蹌く拍子に乾場の丸太に足をすくはれて見事に顚倒した。之を見て聲を揃へて囃し立てながら、一同は家の方に去つた。

吉は靜かに起き上つて、其邊に散亂してゐる、ブラシや鍋を拾ひ集めて、悄然臺所口に行くと、俄爾親方の噛み付く樣な聲で、烈しく叱り付けられた。先刻の相手もこれに口を添へて、猶躍起と罵つてゐる。吉は寧ろ平氣な面付であつた。

一同夕飯を終つて店へ集る頃、吉は獨り家を出た。

見渡せば護謨屋の前通の往來は、一面の畑の中を貫いて、末は朦朧と黄昏の空に入つてゐる。吉は較急歩で一町程來ると、偶然六兵衛爺さんに出會した。

「吉公か、何處へか行くのか。己ら少し話があるんだが、お前使にでも行くとこか。」と六兵衛爺さんは立ち止まつた。

「何別段お店の用ぢやねエんだ。」

「實は外でもねエんだが。」と六兵衛は道端へ寄りながら、「實はな、お仙さんな。」

「ウンお仙さん。」と鸚鵡返しに吉は云つた。

「其何んだアな、お仙さんが其。」と六兵衛は悠々としてゐるので、吉はもどかしげに、

「お仙さん何うしたんだよ。今己ら逢ひに行かうと思つてた所だ。」

「さうか、何か用でも出來たのか。」

「そんな事は何うでもいゝやな。お前の方を先

へ言つて吳んねエ。』
『さうでねエよ、先づお前の用てエのを言ひなせエ。と六兵衛は益々沈着き拂つた。
『エヽ面倒臭えな。己らな此處へ來る前、知つてる奴から、少し許り錢を借りてるのが氣になるから、お仙さんに借してもらつて、濟しちまはうと思つたのよ。』
『さうか、幾干あるんだ。』
『三十錢許り。』
『夫りや己らア出しといてやらう。今持ち合せがねエから、明日にも屹度持つて來てやるわ。』と又少し途切れて、『夫れで實は何んだ、お仙さんは今度家の都合で、無據遠くへ行く樣な事になつたのだ。』
『遠くへ、何うして。』と吉は言忙しく尋ねた。
『何、色々譯もあるんだが、夫れでなんだ、實はお前にも會つて、色々話もして行き度えのだが、夫れぢやア却つて、相互に未練が殘つて、思ひ切りがよくねエからッて、昨日な、己らの所へやつて來て、お前の事を吳々も賴むッてエのよ。己れもこんな爺で、人の世話所ぢやアねエ意氣地なしだけども、まあ出來る丈骨を折つて、面倒を見てやるから、安心しなせエつてな、左う言つて歸してやつたのさ。眞實に若えに似ねエ感心な娘だ。己らつく／＼感心した。お前の事が可哀想でならねエつて、昨日も淚をこぼしてるのよ。まあさう言ふ譯だから、お前もお仙さんの心持を無にしねエ樣に、能く辛抱したせエ。若しもの事でもあれア、己れがお仙さんに對して面皮を失ふ譯だからな。夫れから此りや何んだ』と手にしてゐた包を吉に渡しかけながら『お仙さんがお前に置土産だッてな、小倉の帶に腹掛に股引だ、大切にしねエぢやいけねエぜ。』
『譯ッてエ何んな譯なんだい。エ、六兵衛さん。』と吉は其包を受取らうともしない。
『何其譯か。夫りや言つたッて仕方がねエ。夫れにお仙さんも決して言つて吳れるなッてエ事だから、まあ聞くにア及ばねエ。お前はお前で、精出して働いてて吳れせエすりやア夫れでいゝんだ。』
『お仙さんが云つて吳れるなッて。夫りやア虛だ。』と吉は荒々しく言つた。
『虛なもんかな、虛を吐いたッて何うなるもんか。まあ、其つもりで……』
『己らア嫌だ、言つて吳んなくッちや己らア嫌だ。』と突然に吉は六兵衛の袖を捉へた。
『聞いたッて仕方がねエ事たからよしねエ。聞かしていゝ事なら、何んで隱してるもんかな。』と二人は少時爭つてゐたが、吉はいつかな捕へた袖を放さない、果は泣き聲立てゝ、
『よう六兵衛さん、後生だから話して吳んねエ、己らア嫌だア。』と喚き出した。
『弱らせるな。そんなら言ふがな、まあ袂を放しねエ、己れも可成言ふめエと思つてたが、さう氣になるんなら仕方がねエ、聞かしてやるがな、實はお仙さんはお嫁に行つたのよ。』
『お嫁に。』
『ウン、夫れもよ尋常のお嫁なら目出度え事たが、中々そんなぢやアねエんだ。其何んだアな、餘程以前の話だが、お仙さんの親父てエのが、何うのかいふ都合で、上州の何とかいふ機屋から四五十圓の金を借りた事があるのよ。全體夫れを今迄うつちやつて置くてエのは、親父もよくねエのさ。所が此頃になつて、其機屋の主人てエのが出て來て、是非お仙さんをお嫁に欲しいッてエのよ。せえから能く聞いて見ると、其機屋てエのが、土地で評判の惡やで、色んな惡い噂が絕えた事がねエつてエ樣な人物だもんだから、親父は何の氣なしに體よく斷ると、向うぢやア、そんならあの時の借を返せッてエのよ。身代限をするか娘をやるかッてエ事になつて、

仕方がねエ、長い物には巻かれろで、お仙さんは結局上州下りへ連れて行かれる事になつたんだ。何アに、親父やお袋はあんな人間だから、何うでもいゝが、己らア眞實にお仙さんが氣の毒でならねエ。昨日もあんな娘だから平氣な風をしてゐるが、腹の中ぢやア何んなに嫌だらう、と思ふと、涙のこぼれる程可哀想だ。』

『四十や五十の金でか、忌めエましいな。己らア金さへありや其奴の横面へ叩き付けてやるんだがな。ねエ、六兵衞さん、金せえやりあいいんだらう。』と吉は聲を顫はした。

『五十兩たつて五萬兩だつて、出來ねエ味は一ツだからなア。眞實に忌めエましいが、無い袖は振られねエで、何うも仕方がねエ。』

『だがな、六兵衞さん。』

『ウン何だ。』

『お仙さん其んな所へ行くのを、嬉しがつてるンぢやねエか。』吉は低い聲で言つた。

『馬鹿ア云ひねエな、そんな奴があるもんかな。だから可哀想でならねエんだ。……夫れぢや、まあ、己らア歸るがな、其つもりで辛抱が大切だよ。いゝかエ、サアお前もお店へ歸りな。』と六兵衞は包を吉に渡して立ち去つた。

吉は茫然店に歸つたが、隅の方に坐りこんで、恍然と洋燈の灯を諦視めてゐる。

其翌朝、吉は相變らず仕事着を着かへてゐると、親方の女房さんが、一洗濯濟すまで奥で乳兒を氣を注けてゐて呉れ、と云ふ事であつた。

玩具笊の中へ乳兒を坐らして緣側の日當りへ据ゑて置いて、女房さんは吉を呼んで、這ひ出さない樣に氣を注けて、欠伸をしたら小便をさして、お腹が饑ると泣き出すから、さうしたら連れてくるんだよ、と言ひ付けて、井戸端の方へ出て行つた。

吉は早蕨の樣な兩手で頻りに笊の緣を敲いてゐる乳兒を、つまらなさうに眺めて、手持不沙汰に坐つてゐる。

頓て、乳兒は笊の中ですや〳〵寢入つてしまつた。吉は猶更つまらなさうに、座敷の中を見廻したが、ふと床の間の傍の用簞笥に目を注ぐと、急に振り顧つて、烈しく四隣を睨み廻した。

用簞笥の下の方の開戸の錠には、茶色の太い打紐の結いた鍵が殘つてゐる。吉は再び夫れに目を注いで、更に四方を見廻したが、其顏の色は青ざめて、目には異樣の光を帶びてゐる。

吉は、頓て、立ち上つて、用簞笥に近づいて暫時四隣の動靜を窺つてゐたが、男共の聲の乾場の方に聞ゆるのみで、車井戸の響は女房さんの水汲む音であらう、家の内は靜り返つて耳をかすむる微音もなかつた。吉は靜かに鍵に手を懸けると、開戸は直に開いた。手早く上の抽斗と抽開けたが、其中には僅一圓紙幣一二枚と小さな蟇口とのみを見た。それを閉めて更に下の抽斗を開けると、其中は虛だ。今は四隣に目も注けず、吉は少時抽手を攫んで考へ込んでゐたが、忽ち急はしく其抽斗を抽き去つて、奥の方へ手を差し入れて、蓋のない小箱を取り出した。箱は半紙幣の束に充されてゐる。

吉は其一束を攫んで懷にするや否や、慌しく四方を見廻しながら、手早く箱を元の通りに收め、開戸を押し付けて靜かに緣側に戻つた。青ざめてゐた額は俄に、紅を漲らして、呼吸は如何にも急はしげに見えた。

吉は直に庭に下りて、乾場の隅の便所に趣つて、藪の方へ廻つて、竊かに紙幣の束を取り出して見ると、其帶封の端に小さく五十と書いてあつた。吉はそれを見て、淋しい笑を作つた。

頓て、緣側に來て見ると、笊の中の乳兒は猶旨々と寢入つてゐる。直に目を用簞笥に注ぐと同時に、吉は顏色を變へて顚へ上つたが、忽ち冷笑つて、緣側に腰を掛けたまゝ、向うの垣根を諦

視めてゐる。用箪笥の開戸に下つてゐた鍵は、今の間に見えなくなつてしまつたのである。折柄便所の戸の開く音がしたので、吉は慌しく振り顧くと、女房さんは手を洗ひながら、もう少時だから氣を注けてゐておくれよ、と云つて又忙はしく臺所の方へ趨つた。

其日の夕刻、例の六兵衛爺が訪ねて來て、店前へ吉を呼び出して、昨夕の三十錢だよ、と斷りながら、手にしてゐた紙包を渡しかけた。

『六兵衛さん、少し話があるんだ。』と吉は其紙包に目もくれないで、先へ立つて乾場の隅の方へ六兵衛爺を誘つた。

『なあ六兵衛さん。』と吉は生垣の蔭に立ち止まつて、『お仙さんなあ、』と少時口籠つて、『其機屋の借さへ返せば、そんな田舍へなんぞ行かずといゝんだらう。』

『そりやさうよ。だが其金がやれる位なら……』

『まあサ、やれゝばいゝのだらう。』

『そりやアお前、やれせえすりやそれに越した事はねエのサ。』

『そんなら、六兵衛さん。』と吉はきつぱりとした調子で、『己れが若し、其金を持つてるとすりやア、お前夫れをお仙さんの家へ持つて行つて、田舍へなんぞ行かずとすむ樣な話にして呉れねエか。』と輕く言つてのけた。

『馬鹿言ひねエな。そんな事があつてたまるもんかな。』

吉はすまし込んで、懷からかの紙幣の束を取り出して、

『なあ、六兵衛さん、此りや實は、己れのお袋が死ぬ時遣いてつて呉れたんだが、能く〳〵困しい死ぬ程困つた時でなくツちや、使つちやいけねエお金なんだ。お前これ持つてツて談をして見て呉んねエか。』と紙幣を六兵衛に渡さうとした。

『お前其金何うしたんだ。』と六兵衛は目を圓くして、顫へ聲で微かに叫んだ。

『だから今話したぢやねエか。』と吉は益々すまして、『なツ、持つてツて談して見てくんねエ。』

『そんな金をお前が持つてる筈はねエ。』と六兵衛は目ばかり光らして、顏の色もない。

『そんな事は何うでもいゝからよ、なツ、六兵衛さん、一ツ談をして見て呉んねエ。お仙さんせえ行かねエ樣になつてしまやア跡は何うでも介はねエんだからサ。さうして呉れせえすりやア、己ら何うなつても、お前やお仙さんに迷惑をかける樣な事は決しこしねエからサ。後生だ、なツ、六兵衛さん。』

六兵衛は益々目を圓くするのみで、半句もない。

『なツ六兵衛さん、嫌か、エ、オイ。』と吉は益々迫つた。

『己らア知らねエ。係合にでもなるとつまらねエ、よしなせえ、惡い事は言はねエから。』と六兵衛は小聲で言つて早や立ち去らうとした。

『後生だ、六兵衛さん。』と吉は六兵衛の袖を執らうとしたが、六兵衛は昨夕の樣には容易く捉ませない。己ら知らねエと無上に振りもぎつてすた〳〵驅け出した。吉は强ち追ひ縋らうともせず、滿圓い撫肩を震ぶりながら、覺束ない足踏で、後をも見ずに立ち去る六兵衛の後姿を少時目送つてゐたが、頓て、臆病爺め、と忌々しさうに呟いて、悄々店の前迄來たが、店へは入らないで、ぶら〳〵歩き出した。

やがて、少し急歩で、箕輪の邊に來たが、其處をも通り過ぎて、彼方此方と折れ曲つて坂本の裏から入谷に出た。

小野神社の後手の小さな寺の墓場について、左に曲ると、其處は狹い往來で、右側は荊棘の垣根で、向側の墓場の外れには、四五軒續の長屋がある。其長屋の前まで來ると、吉は急に

立ち止まつて、其中位の戸の締つてゐる家の軒下に差し寄つた。はや黄昏の時分とて、隣の腰高窓からはほんのり燈がさしてゐるが此家には灯の氣のある模樣もなかつた。吉は稍暫時樣子を窺つてゐたが、頓て、隣の窓下に來て、

「お隣はお留守？」と聲高に尋ねた。

「ハイお隣？」と窓から顏を出したのは、年若い女房であつた。「お隣に御用があるの。お隣はね、あのお仙さんが田舍の方へ行きなさるので、擧家彼地へ引越すとかで、昨日の正午頃、皆お立ちになりましたよ。」と云つて、吉の姿をすかし見た。

「さう、有難う。」と言つたまゝ、吉は方向もなく驅け出した。

ひた走りに走つて、淺草田圃に出たが、急に道端の枯叢の中に倒れて、仰向きになつて、兩手を額に當てたまゝ、身動きもせず、空を諦視めて豚の樣な呼吸を吐いてゐる。

夜は益々迫つた。灰色の雲は天地を閉して、枯田の水のみ白く冴えてゐる中に、太郎稻荷の杜は兀として朦朧たる影を浮べてゐる。

『お熊さん今晩は。』とお熊婆の長屋のガタクリ戸を開けた者がある。

『オヤ吉ちやんかえ。珍らしいね。』と婆は不思議の眉を吉に向けた。

『何が珍らしいんだ。』と吉は早や上り込んだ。

『オヤ、えらい權幕だね。何うおしだい、アハヽハヽヽ。』と婆は仰山に笑つて、頻りに吉の姿を注視めてゐる。

『何うするもんかナ。一仕事出來たから遊びに來たのよ。』

『さうかい、豪氣な勢だね。護謨屋さんは何うおしだ。』と言つたが、吉の目付の異樣なので急に調子をかへて、『何しろ丁度いゝね。』と急に小聲になつて、『八ちやんや何んかが二階で遊んでるよ。』

『夫りやいゝ鹽梅だ。今日はお熊さん、お前の嗜きな鰻を奢るぜ。皆も喰ふだらう。かまふ事はねエ、どしことそ言つて來て呉んねエ。いいかえ。』と吉は後をも見ずに梯子を昇つて行つた。



○男子は結婚によつて女子の賢を知り、女子は結婚によつて男子の愚を知る。

○結婚によつて滿足を求めんとする者は寧ろ自殺を擇べ。結婚は滿足を拂つて不滿足を買ひ、自殺は不滿足を拂つて滿足を買ふ。

○男子の貞操は聯隊旗の如く、女子の貞操は糠袋の如し。前者の完きは侮られ、後者の破れたるは棄てらる。

○初戀は麻疹の如し。何人も一度は免れずして再び經驗し難し。

○戀を知らずして嫁ぎ而して幸福なる女は、咀嚼せずして珍味を嚥下せるなり。戀を知らずして嫁ぎ而して不幸なる女は、ゼラチンに包みて劇藥を飲めるなり。

○お姫樣の戀はスペキュレーティヴなり、ややもすれば獨斷に陷る。藝者の戀はエキスペリメンタルなり、やゝもすれば懷疑に陷る。

○少女の戀は詩なり。年增の戀は哲學なり。

○花嫁は口取なり、世話女房は刺身なり。

○遂げらるゝ前の戀は天使の戀なり、遂げられたる後の戀は人間の戀なり。

○男子は羽織より賣り始め犢鼻褌に至りて窮まり、女子は肉より賣り始め羽織に至りて窮まる。

（「如是閑語」より）

めぐりあひ

ふだん、郊外の青々とした道ばかり歩きつけてゐる登代子は、こんな往來を歩くのを何となく不愉快に思つた。

格子造りの家ばかり並んだ間に、所々に割り込んだやうに、煙草屋や藥屋などが、退屈さうな顏を出してゐる。角並の格子造りも、何となく當り前の家らしくなく、中には變な行燈などの出てゐるのもある。通りがかりの女の子は、眞白に塗つた頸を抜き衣紋にして、手にさげてゐる濡れたタオルの包みから白粉の罎が首を突き出したりしてゐる。イヤに深閑としてゐながら、妙に落付きがなく、締太鼓の音などが裏の方から聽えてゐた。

登代子は、樹立の間から瀟洒な洋館の棟の見ゆる、自分の住居の近邊のことを思ひ浮べて、こんな所に住まはないで濟む自分を幸福に思つた。

其の途端に、髪を變な恰好に束ねて、帶をダラリと締んで、素足に下駄をつゝかけた若い、色艶のよくない女が、格子戸の前に立つて、ジロ〳〵と通りがかりの登代子の姿を眺めてゐるのに氣がついた。登代子は、その女の高慢な目つきを憎らしく思つたが、見返してやる勇氣もなく、刎ね返されたやうに、外方を向かない譯に行かなかつた。その時、自分の顏の眞赤になるのが、自分にもわかつた。

少し急ぎ足になつた登代子は、二三間進んで顏を擧げた時に、向うから來る若い女と顏を見合はした。

『マア登代子さん！ 何うしてこんな所を通るの。でも久しぶりだわね。』

若い女は續けさまにさういつて、登代子の兩の手首を握つて、子供らしく頸をかしげて、上目使ひで登代子の顏を見た。

登代子は吃驚して、暫時口がきけなかつた。さうしておどかされた時のやうな動悸をさへ感じた。でも漸く細い聲で、

『ほんたうに久しぶりね。』とだけ云ひ得た。

『でも私、何うしようかと思つたのよ、あんたが向うから來るのを夙うに氣がついてゐたんだけれど、……横町へ曲つてしまはうかと思つてゐるうちに、もう横町がなくなつてしまつたの、ホヽヽヽ。』

登代子は默つて諾いて見せて、取られた手首をそつと引きぬいて、さうしてあべこべに相手の手首を心持強く掴んだ。その女の顏が少し明るくなつたと、登代子は思つた。

落付いて見ると、登代子は、何んで自分が今、こんなに狼狽へた氣持になつたのかわからなかつた。今逢つた若い女は、登代子が學校にゐた頃、最も親しくしてゐた友達であつた。學校では皆がイリーさんと呼んでゐたが、眞個の名前は伊理子といふのだつた。何んでこんな變な名をつけたのか、その譯は誰れも知つてゐなかつた。片親が西洋人だといふやうなことをいふものもあつたが、イリーの目の色や毛色には、全くそんな痕跡もなかつた。始終洋裝で、男の着るやうな厚羅紗の二重前の短い外套を着て、恰好のいゝ長い足をバネのやうに活潑に運ぶ歩き方が目立つてゐた。

そんなことを思ひ出してゐた登代子に抱きつくやうにして、イリーは、その頃――といつても僅か二三年以前のことだが――と同じやうな、口笛のやうな響のある聲で、自分達が往來の眞中

にゐるのを忘れてゐるやうに喋舌つた。

「登代子さんだけよ、御年始狀を吳れるお友達は。澤山年箋の付いたのを確かに頂戴したわ。御返事もあげずにしまつたわね。でも氣がぬけたところに着くのですもの。尤もそればかりぢやないの。そんなこと解つてるわね、登代子さんには。…私の家に寄つて下さらない？」

「でもあなた今、逃げようとしたつていふぢやないの。御迷惑なんでせう。」登代子は、半分戯談のやうに、半分眞面目でそんなことをいつた。

「それでも私面倒臭いと思つたからよ。それにね、久しく逢はなかつたから、あなたもひよつとすると、皆と同じになつてらつしやりやしないかと思つたのよ。そんなら、今すぐにさうと仰しやつて戴くわ。さうすれば、私こゝでお別れしてよ…さやうならつて。」

イリーは獨りでそんなことを云つて、御辭儀をする眞似をして見せた。

イリーの心持は、登代子にはよくわかつてゐた。イリーは或る事情で學校をやめて、その後しばらくは消息もわからなかつたが、今は如何はしいすべての一座に加はつてゐるといふ噂は、友達の間に傳へられて、誰れでも、イリーの話が出ると、唾でも吐きかけさうな見幕で彼女を評するのが常であつた。イリーは何時の間にかそれを知つてゐたのであつた。そんな話の出る時には、登代子は、何時でも餘り口を入れなかつたが、心の中では、イリーを罵る人達を面憎く思つてゐた。別段に辯護したこともなかつたけれども、皆がイリーの惡口を云ふのが聽きづらくて我慢し切れなかつた。で或時こんなことを云つて皆を驚かしてやつたこともあつた。

「私達は、今往來へ抛り出されて、勝手にしろつて云はれたら、皆餓死するより仕方がなささうですけれど、イリーさんだけは、そんな時には一番威張つてゐられさうだわ。」

さうはいつたものの、登代子は決してイリーの生活に贊成してゐるのではなかつた。自分がそんな所へ落ち込んだら不幸の絕頂と考へてゐることは、皆と變りはなかつたのであつた。それでゐて、そんなことを云つたのは、自分ながら、何の意地からだかわからなかつた。皆が餘り高慢らしく、人の身の上を批評するのに反感を持たない譯には行かなかつたにしても、學生時代のイリーの振舞が、如何にも人もなげであつたことを想へば、皆がその弱り目につけ込んで攻擊するのも無理もないことだと思つた。

そんなことを思ひ出してゐる登代子に抱きつくやうにして、イリーは、

「私は今でも、ちつとも閉口しちやゐないのよ。誰れにも敗けてるやうな氣はしてゐないわ。さういふとあんたに叱られるけれど、あなたの叱るのはダメよ。私に贊成しながら上べだけで叱つてゐるんですもの。私ちやんと知つてるわ。けれど今私がこんなになつてゐながら、誰れにも敗けてゐないなんていふと、いかにあんたでも眞劍で攻擊するでせう。だから私「さやうなら。」つて云ひたいのよ。」

「今の方が攻擊しないわ。前ならば、あんたが敗けたつて私何とも思はないけれど、今敗けちや口惜しいと思ふわ。」

登代子にさう云はれて、いつもイリーが嬉しい時にする睨むやうな眼で凝と登代子を見たそのイリーの顏は、以前のイリーと寸分違はない彼女を登代子の前に連れて來たのであつた。

登代子は、無上に嬉しくなつて、學校の運動場でしたやうに、イリーが自分と腕を組んで、そこら中を驅け廻りでもしてくれるといゝと思つた。さうして更めてイリーの姿を見た時に、登代子の眼に見馴れない、汚れ臭つた派手な衣裳と、そのだらしのない着つけとが、登代子の

胸を重くした。

「私嬉しい！」イリーはさういつて、周圍を見廻した。

先刻登代子の姿をじろ〳〵見た女が、まだその格子先に立つてゐた。イリーは、その女が此方を見てゐるのを發見すると、急に大きい聲で、

『登代子さん〳〵。』と仰々しく呼びかけて、

『私もう「さやうなら。」なんて云はないことよ。私の家へ寄つて行つて下さらない？　すぐそこの露路よ。ね、行きませうよ。』

さうしてスタ〳〵登代子のもと來た方へ歩き出した。登代子も向き直つてそつちへ歩き出さない譯に行かなかつた。さうして、妙にそはそはした心持になつて、イリーの跡からついて行つた。

露路とはいひながら、眞中の溝を、立派な花崗岩で塞いで、兩側の格子先は三和土で堅めてある小綺麗な露路であつた。その中程の格子を潜つてイリーは、上り口の障子を開けて家の中の樣子を一寸見て、ふり返つて登代子に相圖をした。

上り口のすぐ傍の階子段を上ると、そこは天井の低い二階で、兩方が窓になつてゐる六疊の間であつた。着物や身の廻りのものが、そこら中に取散らされてゐるが、其の中には男物らしいのも混つてゐた。眞中に据ゑてある所々剝げた一閑張の卓の上の灰皿は、卷煙草の吸殼で一杯になつてゐた。

登代子は出來るだけあたりを見ないやうにして、何氣ない態で、イリーのすゝめた座蒲團の上へ坐つた。イリーもそこへ坐つて、自分の肩を登代子の肩に凭せて、その左の掌を登代子の右の掌に合せた。二人は何年ぶりかで、昔の自分達を取り戻した得意の色を見せ合つた。

登代子は、もうそれだけで澤山の樣な氣がした。イリーも默つて、觸れ合つた肩に力を入れてゐるだけであつた。そのイリーの肩の温か味が、登代子の肩に熱い湯をかけられたやうに感じ出した。が、力に充ちたやうな豐かな肉付で、若い血の漲つてゐた元のイリーの顔に、大部分その力を失つてしまつたやうな疲れた色を見出した時、登代子は、可愛い子の病んでゐるのを見た時のやうな悲哀を感じた。それは、その後の彼女の虐げられた運命を十分に語つてゐると登代子は思つた。

それにも拘らず、昔の通りの、大きい、濕味を持つた無邪氣な眼で、凝と登代子の顔を見上げて、そこに再び見出した登代子を、確乎と、離すまいとしてゐるイリーを、登代子は瞬きもせずに見るに堪へなかつた。譯のわからぬ涙が胸にこみ上げて來るのを、登代子は齒を喰ひ縛つて堪へた。

「姉さん。」イリーは低い聲で、そつとさういつて、大きい眼に哀願するやうな色を見せながら、「好い？」と怖々のやうに聽いた。

登代子は、默つて諾いたが、もう我慢がしきれなかつた。涙が頬に傳はるのを感じて、イリーに淋しい笑顔を見せた。

『いやよ姉さん、泣いたりなんぞして。』イリーはさう云つて、熱い肩で痛いほど強く登代子を押して、

「姉さんは、私のこと、敗けちやいけない、敗けちやいけないつて云つてたぢやないの。私敗けちや居なくてよ。」

イリーは、眼の前にゐる敵に、虚勢を示すやうに、さういつて、昔の通りの傲慢な風をして見せた。

さうして元氣らしく反り返つて見せたが、登代子の眼には、イリーの頸筋に纏つてゐる垢じみた着物の襟しか眼に入らなかつた。

登代子は、今更ながら、イリーが學校をやめられた當時のことを思ひ出して、運命の崖際に立

つてゐたイリーを、此の深味に突き落して、知らん顏をしてゐる世の中を怨めしいと思つた。

　登代子とイリーとは、××學校の生徒中で、極端の對照を爲してゐる二人であつた。登代子は友達の間に、その大人らしい、落付いた心持や舉動やを十分尊敬されてゐたが、それだけ地味で、陰氣で、その沈んだ考へ深い樣子に、人の氣を滅入らせるところがあつた。これに反して、イリーの方は、顏容から舉動から、服装まで、花々しく、陽氣で、晴れ／＼しかつた。何處の隅にゐても、彼女の容貌と、姿と、聲とで、彼女は何時も全校の中心になつてゐた。

　それでゐて登代子とイリーの二人は、非常の仲好しで、お互に誰れよりも親密にしてゐることは、學校中で隱れもなかつた。遊戯でも何でも二人の趣味や好みが、極端に違ふので、一緒に何かをすることは滅多になかつたが、一人のすることは、必ず他の一人の承諾を經てゐるのであつた。その點では、自ら考へ深い登代子が、何かにつけイリーに注意もし、世話も燒いた。さうして一つ年下のイリーは、學校では、登代子を『姉さん』と呼んでゐた。

　登代子には、何もかも相談してゐたイリーも、自分の家のことについては、悉しく登代子に話さなかつた。たゞ兩親は早くなくなつて、兄弟も何もないことは登代子にもわかつてゐた。イリーが世話になつてゐるのは、獨身者の叔父さんの家だつた。それは山の手にあつて、其邊によく見る地位の低い官吏の住居位にしか見られなかつた。その叔父さんといふのは、もう六十近い老人で、毎日近所の碁會所へ通ふのを日課にしてゐた。昔牧師をしてゐたことがあつたといふが、宗教家らしい樣子は少しも見えず、そんな話をしたことも、登代子は聽かなかつた。此の叔父さんは間もなく、北海道へ行つてしまつて、イリーは、その叔父さんの知り合ひだといふ英國人の未亡人の家に移ることになつた。イリーがそこへ移つてからも登代子は、たび／＼訪ねたが、イリーは、何時も西洋婦人の部屋で、その人と一緒に登代子をもてなすのであつた。

　その英吉利の未亡人なる婦人は、恐ろしく脊の高い、頰のこけた、眼の色の力のない、ヒステリーらしい婦人だつた。日本語がよく出來て、登代子といろ／＼の世間話や、むづかしい宗教がかつた話などを、達者な日本語で話した。けれどもイリーと話をする時には、乾度英語を使つてゐた。イリーほど英語の出來なかつた登代子には、結局それの方が都合がよかつたけれども、登代子が、時々不完全な英語で話しかけても、夫人が、矢張り日本語で答へるので、登代子は何だか侮辱されてゐるやうな氣がして、此の夫人と話をするのが不愉快であつた。自然登代子は、夫人の前では、持前の沈默勝ちでゐると、夫人とイリーとが、親密らしく、登代子に能く解らない英語で頻りと話をするので、なほ不愉快だつた。その上、能くわからないながらも、時々半分ほどわかると、乾度それが、友達同士でも云ひ合はないやうな親密な意味の話のやうなので、登代子は、自分ながら、嫉妬と思はれるやうな苛ら／＼する心持になつて、益々面白くなかつた。けれども、登代子が、夫人のゐない時に、それをイリーにいふと、イリーは乾度、『煩いお婆さんだつたらありやしない。』と眉をひそめて見せるのであつた。

　問題は、イリーが此の『お婆さん』のところにゐる間に起つたのであつた。

　××學校の記念祭で、生徒等の催す餘興の相談のあつた時に、今までは、一切生徒任せで、教師初め學校の當局者にも祕密にされて、當日

にアッと云はせることになつてゐたのを、今年からは、生徒の案は一應學監の檢閲を經るといふことになつた。生徒等は極力それに反對したが、學校側は頑として聽かなかつた。結局雙方で讓り合つて、學校の檢閲はホンの形式だけで、種類と名題位を屆出るといふことで妥協した。

對話や活人畫や演劇やのいろ〳〵の案が、生徒の委員によつて選擇されたらちに、イリーの提出した案も採用されることになつた。

それはイリーの自作の野外劇といふ觸れ込みであつた。何事も登代子に相談するイリーも、かういふことにかけては、登代子が全く無能力であることを知つてゐるので、相談しないのみか、何うかすると、他の生徒と同じに扱つて、當日に初めて見せて、登代子を驚かせて得意がるのであつた。今度も、その流儀で通すだらうと思つてゐた登代子は、意外にも、そのことでイリーから相談をうけたのであつた。

その野外劇といふのは、昔ある國の王樣がその領民に對して非常に苛酷な年貢を課したので、領民はいろ〳〵にその撤廢を王樣に歎願するのであつたが、王樣は何うしても聽き入れなかつた。するとその王の妃が、領民に同情して、何うぞさういふ苛酷な年貢を免じてやつて下さるやうにと、王樣に哀願した。王樣は餘りに妃が頻く歎願するので、難題を持ちかけて妃を默らせてしまはうと思つて、妃に向つて、『お前が晝間眞裸體になつて、馬に乘つて、城下の賑かな街を一廻りして來れば、領民共に苛酷な年貢を免じてやる。』と云つた。妃は、領民の爲ならば、此の一身さへ抛たうと覺悟してゐたのに、そんなことはいと易いと、王のいふ通り、眞裸體で市中に馬を乘り出した。すると早くも此の事を傳へ聞いてゐた城下の民は、その日は朝から家の戸を固く閉して、誰れ一人街にも出ず、家の中に閉ぢ籠つてゐたので、妃の通過するまで、市中は眞夜中のやうであつた。然るに、ただ一人、王妃の姿を垣間見ようとして、壁の穴から覗いた男があつた。所がそこへ王妃が通りかゝると同時に、その男は眼がつぶれてしまつた。で王妃は無事に城に戻つた。王樣は、約束通りに領民の年貢を免じない譯に行かなくつて、たうとう領民共に免税を申渡した。

イリーは、それを話して、これはテニソンの詩にある、英吉利のカヴェントリーといふ市の傳説だが、彼女は、それを英吉利の「お婆さん」から敎はつて、二幕物に書いて見たのだといつた。でイリーは、自らその王妃に扮して、二幕目には、馬にのつて、學校の運動場を乘り廻すことになつてゐるのであるが、登代子に相談といふのは、その時の王妃の扮裝についてであつた。

それはイリーが肉襦袢を着て、薄絹をはおつたきりで、それを演じたらば、後日、問題が起るだらうか何うかといふのであつた。

イリーは、假令問題になつても、それを敢行する理由があると云つてゐた。毎年生徒等のやる演劇や對話の類は、見てゐても腹が立つやうな、子供じみた、無意義な、意氣地のないものばかりで、そんなものしか出來ないやうな生徒を仕上げた學校の恥を明る味に曝すやうなものであると、イリーは委員會の會合の折に主張した。自分の今度作つた野外劇は、そんな因襲から獨立して、平凡な敎員や學生達を魂消さして、若い私達の内に燃えてゐる血は、そんな人達の姑息な壓迫で抑へ切れるものでないことを示してやらうとするものであるといふのであつた。

そんなことを云つてゐるイリーの眞個の心持は、登代子にはよく解つてゐた。で、登代子は、イリーに、それよりも、眞個の理由を白状するやうに強ひたのであつた。

イリーは眼を丸くして、登代子の千里眼のや

うな――でも隨分深い――推察に驚いた。が結局それを白狀する外はなかつた。
それはイリーが例の未亡人にすゝめられたのであつた。あの西洋の未亡人は、イリーの肉體が、日本人としては珍らしい、人間美の極致を示してゐるといひ／＼してゐたが、今度イリーが餘興の相談をすると、早速此の機會に、イリーの持つてゐる一番美しいものを利用しなければならないと說いて、右の野外劇のヒントをイリーに與へたのであつた。さうして、その日本語の知識で、白や歌なども、大分作つてくれて、日本語の及ばない所は、英語でこしらへてくれて、イリーにそれを譯させたといふことであつた。
登代子は、それを聞いて、大へん不快な感じがした。さうして、イリーに中止を勸告したいと思つたが、それを押し切つて云ひ出すことが、何となく、未亡人に對する何時もの嫉妬心からのやうな氣がして、自分で自分が咎められて云ひ出せなかつた。でたゞ、それは十分問題になる危險があるといふことだけ云つた。
イリーの意氣込は中々强かつた。危險を冒しても、それをやる方が、自分といふものに對して忠實である、肉體美を示すといふことは、衣裳の美や、金銀寶石の美を示すよりも遙か道德的でもあり健全である、さうしてそれは、衣裳の上に施されてゐる虛僞の敎育を諷刺するに十分である、一番好い所は示されもせず、從つて認められもせず、上部の衣裳だけが、塗られたり飾られたりしてゐるので、私達は、本物の自分を、段々いけないものにしてしまつて平氣でゐる、私達のうちで私達の眞個のものを赤裸々にした時に、人に笑はれないやうな立派なものを示すことの出來るものが何人あるだらうか、私は幸にも、自分の眞個の物を傷はれなかつたことを、皆に示さうとするのだと、イリーは力んだ。
登代子はふだんイリーの肉體美に――自分のもののやうな――誇りを感じてゐる癖に、このイリーの理窟をきかされた時には、甚しい不快の感じがこみ上げて來るのを何うともすることが出來なかつた。登代子は、それを抑へる方が好いとは思つたけれども、抑へてゐるのも虛僞のやうな氣がした。で登代子は云つた。
『でもあなたは、自分の眞個の好い物が、人の見せ物になるのを不愉快に思はなくつて？』
「見せ物の氣で見てゐる人達だつて、眞個のものを見れば眞劍になるわ。」イリーは中々屈しなかつた。
「あなたのやうに、自分の肉體美にそれほど自信が持てると好いわね。」
登代子は、そんなことをいふ自分を、われながら沈着を失つてゐると思つた。さうして恥かしくも思つた。けれども、それを取繕つてゐられないほど、焦ら／＼した心持になつてゐるのであつた。
「だつて姉さん、私もう學校を廢めても構はないと思ふわ。」イリーは昂奮すると何處でも構はず、登代子を『姉さん』と呼ぶのであつた。
いつもの登代子ならば、イリーがそんな風な物の云ひ方をし出すと、その反對に沈着いて、冷靜な態度になるのであつたが、今の登代子は、イリーと同じやうに捨鉢なことが云ひたくなつて、
『學校をやめて、肉體美專門にでもなるの？』
そんな皮肉なことを云つて見た。
「アラ姉さん、あんまりね。姉さんは今度に限つて、私と大變立場が違つてしまつたのね。私の好いものは、姉さんの好いものぢやなかつたの？」イリーは表情に富んでゐるだけに、すぐと、その悲しさうな色を强く見せるのであつた。
『それは、イリーさんの好いものは、私の好い

ものよ。けれども、私は、自分の好いものを、餘り人に見せびらかしたくないわ。』

『そんな個人的のことを云つちや嫌よ。私はこれでも主張があるんぢやありませんか。さつきからそれを云つてゐるのよ、姉さんは、何を聽いてゐたの？』イリーは焦れつたさうに登代子をこづき廻した。

『先刻は、主張よりも肉體美だつて云つた癖に。』

『でもそれは、家のおばあさんがさう云つたのですもの。』

『それぢや、おばあさんにだけ見せてゐれば好いわ。』

『アラ姉さん。』イリーは顏を赤くして俯向いた。それでも敗けない氣で小さな聲で『姉さんのはまるで感情論よ。』

『さうよ。何時ものイリーさんの眞似なの。だつてイリーさんが、今日に限つていやに理づめなんですもの。』

二人の問答はそんな風に、不得要領に終つてしまつたが、イリーは何うしても主張を曲げないで、私かに仲間を未亡人の家に集めて、野外劇の稽古に餘念もない樣子であつた。

記念祭の當日には、登代子は、例年の通り接待掛に廻つて、運動場や講堂には時々顏を出すばかりであつた。それでもイリーの出る時刻が近づくに從つて、不安の動悸の昂まることを感じた。

見物の着席を求める鐘が、運動場に響き渡ると、登代子は居たゝまれないやうに、慌てた心持になつて、幾度も窓際に行つて廣場を見たが、しまひに、そこがもう見物で一杯になつてゐるのを見ると、逆上せて耳鳴りがして、外の見えないやうな所の椅子に倒れかゝつてしまつた。

一番目が始まつたらしく、拍手が盛んに起つた。登代子は、初の幕は、動悸を抑へながら、窓から覗くことが出來た。

舞臺はこゝからは、自然の背景になつてゐる植込を通して、背後から見るのであつた。その植込を背景として、芝生を舞臺としただけで、何の裝置もないやうであつた。長い髪の毛と、豊かな頬髯とを持つた、王樣のやうな裝の役者が出て居た。それは學校中で一番身體が大きくて、濠洲さんと綽名されてゐる――それは生徒が皆で畜産博覽會へ行つた時に見た濠洲種の豚から思ひついた綽名だつた――上級の生徒であつた。それが大きい犬を引張つて歩いてゐると、イリーの王妃が現はれて、跪いて何か云つてゐる。農民に扮した生徒達がその周圍を取卷いてゐるのも見えた。

第一幕の濟んだらしい拍手が響き渡つた。愈々二幕目だと思ふと、登代子は、ヂッとして居られない氣がした。と云つて窓から見てゐる勇氣もなかつた。

凄じい拍手が起つたので、登代子は、我知らず窓の外を見た。

農民に扮した生徒が、今度は、すぐ窓の下を少し離れた、植込の蔭に大勢隱れて居た。その中には、登代子の方を見て、顏をちゞめて舌を出して見せたものなどがあつた。

と植込の透間から、眞白な馬に乘つたイリーの姿が見えた。が登代子の豫想と全く違つて、イリーの肉體美は、黄金の波を打つてゐる長い髪の毛で殆んど全體を蔽はれてゐて、一寸見ると、まるで熊の身體のやうに見えた。登代子はホッと溜息を吐いた。

イリーの乘馬の姿が、段々近くなつて來るのを見ると、その髪の毛の下から長く垂れて居る薄絹を透して、イリーの恰好の好い足が眞白に、美しい曲線を描いてゐるのを見ることが出來た。

プログラムに刷り込んである歌詞が、イリー

の銀線のやうなソプラノで唱はれるのを、登代子は恍乎として惚れた。

「…………………
しづ〳〵と、妃は馬を、すゝめけり。
操のきぬもて、王の膚を、つゝみつゝ。
…………………』

歌がやんで、急に馬の蹄の音が高く響いたので、登代子は見るとはなしに、その方を見ると、イリーの姿は、植込の蔭を全く離れて、輪乗りに大きく乗り廻しながら急に馬の足搔を早めた。房々とした髮の毛と、純白の薄絹とは、吹き流しのやうに後に流れて、イリーの肉體は、強い午後の光線を受けて、石像のやうに眞白に輝いた。

登代子はハッと思つて身を引いた。見物の歡呼が、登代子の耳には、落雷のやうに響いた。

果して問題が起つた。學校の當局者は、イリーに諭旨退學をさせようとしたので、生徒等は、一致してそれに反抗した。

溫和しい登代子も、イリーと親友であるところから、生徒側の委員に選ばれて、屢々學監と談判の席に列した。學監は、生憎國語漢文の先生だつたので、生徒の委員等は、面白がつて、好い加減の西洋の例などを、外から聽いて來て、色々のことをいつてからかつた。學監は終ひに、英語の先生に後援を賴んで、生徒の交涉に當つた。

生徒等は、英吉利のカヴェントリーでは、毎年毎年、丁度イリーが扮したと同じやうな扮裝の女が行列の中心となつて市中を練り歩く年中行事があるなどと、イリーのところの「お婆さん」から聽いて來たことを述立てて、先生側をやり込めようとした。

『その女になつた人が、學校を退校させられたことなぞはありません。』と頓智のある小さな委員は叫んだ。

學監は、英國は英國、日本は日本、我が淳風美俗に反することは、天國の禮儀でも、極樂の風習でも、斷じて排斥しなければならないと力んだ。英語の先生は、『テニソンの詩にあるなどといつても、元來テニソンの詩といふ奴が、往々如何はしい文句があつて、英國でさへ教科書用の書物には改删を加へられてゐるところがある位だ。テニソンだから好いといふ法はない。』などと云つて生徒を凹ませた。

滑稽だつたのは、生徒が、民衆の爲に女子の誇りを捨てたゴディヴァ姫の道德性を頻りに高調したので、學校側は、結局倫理の先生を煩はすに至つたことである。此の若い先生は、平生新しい學說と稱して、生徒の嬉しがりさうな道德ばかり講釋してゐるので、學校から、生徒を言ひ伏せるやうに賴まれて、多少當惑を感じたが、結局、生徒等を集めて一場の講演をすることになつた。その要旨はゴディヴァの傳說は、女子の肉體美を、肉感的に賞玩しようとしたものが盲目になつたといふ點をその道德の重心點としてゐる、テニソンにも、

…So the Powers, who wait
On noble deeds, cancell'd a sense
misused;

とある、日本人は女子の肉體美に對して全く鑑賞力を持つてゐない人種である、かゝる人種に女子の肉體美を示すのは、要するに感覺の誤用を誘發せしめるに過ぎない、皆さんは、危く澤山の盲人を作らうとしたのである、といつて生徒等を笑はせた。

理窟も權力も先生側の方が有力なので、イリーは結局退學を命ぜられてしまつた。

登代子は、あの時に、イリーに思ひ止まらせようとして云つた理窟は、自分ながら無茶苦茶だとは思つたけれども、さうして何時までも、イリ

ーに對してそれを恥ぢてゐたけれども、からなつて見ると、イリーがその無茶苦茶な道理に從はなかつたことを怨めしく思つた。少しもイリーを責めることは出來ないと思ひながら、登代子自身が、イリーのあの企てを不快に感じた、その感じを、イリーが尊重してくれなかつたことを、彼女に責めた。前には廣言を吐いたイリーも、青い顏をした登代子から譯の解らない小言を云はれると、たゞ謝るより外はなかつた。

學校を廢めたイリーは、例の英吉利の『お婆さん』のところで自修してゐるといふことだつた。登代子は、その後イリーを訪問する度に、未亡人とイリーとが、親子か姉妹のやうにしてゐるのを見るのが不愉快でたまらなかつた。で度々イリーに、早く外の學校の寄宿にでも入るやうに勸めて見たが、登代子自身も、イリーの奔放な性分が、寄宿生活などに堪へる筈のないのを知つてゐたので、それをしない彼女を責める譯に行かなかつた。

そのうちに、英吉利の『お婆さん』は神戸へ移ることになつて、イリーも一緒に神戸へ行くといつて、登代子に急の別れを告げに來た。

その時、登代子は、自分の大事のものが、自分のものでなくなつてしまふやうな、うら淋しい感じに打たれて、殆んどイリーに物を言はなかつた。イリーも、登代子に縋りついて、離れて行くことを、非常な罪でも犯すやうに詫びた。登代子は、自分の指環をぬいて、默つてイリーの指にはめてやつた。イリーも自分のをぬいて、同じやうに默つて登代子の指にはめた。二人は、平生逢つた時の半分も口數をきかずに、淋しい目を見合せて別れた。

神戸へ行つてからのイリーと登代子とは時々手紙の遣り取りをしてゐた。が翌る年の暮になつて、登代子から出した手紙に對して、何時まで待つてゐても、イリーから返事が來なかつた。それから先は、或は返事が來なかつたり、附箋つきで戻つて來たりした。さうかと思ふと、突然イリーからハガキが來たりしたが、名前ばかりで所になかつた。消印が大阪だつたり、九州だつたりして、見當もつかなかつた。そのうちに、イリーは東京へ來てゐて、オペラ女優の仲間に入つてゐるといふ噂を聽いた。有名な△△△△子といふのは、イリーのことだといふものさへあつた。登代子は、一度その一座を見たいと思つたが、機會を得ずにゐた。神戸の元の宛名で、そのことを書いた手紙を出して見たところ、戻つて來なかつたので、東京にゐるといふのは嘘かとも思つた。けれども、現にイリーを舞台で見たといふ者もあるので、迷はされない譯に行かなかつた。

その二人は、端なく今日こゝでめぐり合つたのである。逢つて見ると、それからのことは、お互に一言も話し合はないうちに、もうすつかり、聽きたいことは聽いてしまつた人達のやうに、默つて手と手を重ね合つてゐるのであつた。

強いことを云つたイリーは、登代子の、涙に曇つた眼を盗むやうに見て、急に暗い〳〵顏をして遣る瀬のないやうに傍を向いてしまつた。

その時のイリーの、淋しい〳〵顏を、靑んだ眼でチラと見た登代子は、それまで抑へに抑へてゐた衝動を、もう我慢することが出來なかつた。登代子は、いきなりイリーの肩に兩手をかけて、強く彼女を引き寄せようとした。

イリーは飛びつくやうに登代子に抱きついてその胸に顏を埋めて、絞るやうな聲で叫んだ。

『姉さん、許して!』

そのまゝ咽び泣きに泣き出したイリーの背に登代子は顏を伏せて、髮の根を震はせた。

馬

「確かにアカツキだ！」

見物の一人は、呟くといふよりも、寧ろ叫ぶやうにさう云つて腰を浮かせた。

貧弱なテント張りの曲馬小屋で、ブリキを擦り合はせてゐるやうな奏樂につれて、姿の好い一頭の馬が頻りに曲藝を演じてゐるのを絶えず喝采するに忙しい見物には、無論そんな叫びは耳に入る氣遣ひがなかつた。

けれどもさう叫んだ男は、自分の聲が近所隣りの人達はおろか、テント内のすべての見物を驚かしはしなかつたかと懸念したやうに、狼狽して四方を見廻した。が彼れの方を見向いてゐるものさへ一人もなかつた。男は自分だけ眞赤な顔をして、更に熱心に所謂「太夫」の藝當に目を注いだ。

馬は、今度は梅鉢形に立てられた丸太の間を縫ひながら、或は速足、時には駈足で驅け廻る藝當をやり始めた。その丸太は、たゞ地面に突立てただけなので、馬の身體が少しでもそれに觸れば倒れてしまふのであつた。馬はそれを倒さないやうに、梅鉢形の間を、長い身體をバネのやうに、右に左に曲げながら、いろ／＼に驅け廻るのであつた。

今しがた「確かにアカツキだ！」と叫んだ男は、そんなことはすつかり忘れてしまつたやうに、固唾をのんでそれを見物してゐるのであつた。梅鉢の外側や内側を圓く驅け廻つてゐるかと思ふと、一つ／＼の丸太をグル／＼廻りながらSの字8字に目まぐるしく廻轉する。

見物は割れるやうに喝采した。

男は額を眞赤にして、頻りに額の汗を拭いた。

そのうちに、馬の廻轉は徐々急になつて、ゼンマイ仕掛でもあるやうにクル／＼廻り始めた。と少し身體の調子の狂つた故か、頭だか尻だかが、中心に立つてゐる丸太に觸れて、その丸太は、長い鞭で馬を追つてゐた怪しげな燕尾服を着た男の方へ倒れかゝつて、その横面をしたゝか叩いた。

燕尾服が、眞赤な顔をして、その丸太を立て直してゐる暇に、それまで首を揚げ胸を突き出して走つてゐた馬は、急にその首を長く前へ差し出したと思ふと疾風のやうに樂屋を指して逃げ込んでしまつた。

見物席は、割れるやうな笑聲と混ぜ返しの拍手とで蔽つた。

「確かにアカツキだ！」と叫んだ男は、馬が姿を消すと同時に、汗ばんだ眞赤な額をして、窃むやうに四方を見たが、直ぐに俯向いて、再び顔を擧げた時には、その男の眼に涙が一杯たまつてゐた。

此の男は、日本に軍制が敷かれて以來、初めて行はれた「軍縮」――それは今からはもう五六年前のことであつた――の最初の犠牲者の一人であつた。

洗ひ晒した單衣物ではあるが、ひどく糊が利いて、肩の邊が石部金吉のやうにイカつてゐるのも、五分刈頭に、跳ね上つた眉毛や、尖つた眼尻、盛り上つたやうに結ばれた口付、それに、一々の動作がオイチニといふ作法を作つてゐるかのやうに區劃的なのも、すべて此の男の前身を自白してゐるのであつた。

軍縮の初期には、さういふ軍人精神の滓で出來たやうな男も珍らしくはなかつたが、もう此頃では、昨日軍隊生活を廢めたといふ男でも、

そんな風に見えるのは鮮なかつた。世間では、融通の利かない軍人の運命に頻りと同情したのだが、それは全くの素人考へで、サーベルを棄てないうちに、もうサーベルのブラ下つてゐるのが訝しく思はれるやうな人達も鮮くなかつた。

けれども、此の男は、全くそんな時代とは没交渉に出來てしまつた男で、失職して後も、軍人精神が單衣物を着て下駄を穿いてゐるのだといふ恰好をしてゐた。人間をこんな風にこしらへ上げてしまつて、それを今の社會に抛り出すのは、佐野源左衛門常世を銀座通りにウッちやつたやうなものだと、同僚の誰れ彼れが評判した位、此の男は、文字通りの軍人に出來上つてゐた。

尤も此の男はよく八木節を唄つた。さうして地方にゐた頃は、醉ふと酌婦を捻ぢ伏せるので有名であつた。『猪河少佐酌婦の腕を折る』と田舍新聞で、カイゼルが逃亡した時の活字と同じ大きさの活字で報道されたのが、現役としての最後の逸事であつた。猪河といふのは此の男の姓だが、『俺の姓はキヌシカハと讀むんだ、青島攻圍軍司令官の姓はカンノと讀むんだ。』といふのが此の男の口癖だつた。けれども誰れも此の男をキヌシカハと呼ばずに、必ずキカハと呼んだ。そのことが此の男をローマ字論者にしたのであつた。

然し佐野源左衛門は、偶々八木節を唄ひ酌婦を捻ぢ伏せても、又ローマ字を主張しても、矢張り佐野源左衛門であるやうに、此の男も、それこれに拘らず洗ひ曝した軍人精神の、糊の利いたのであつた。

失職當時彼れは、他で心配するほど、彼れ自身慌てはしなかつた。陸軍の方針として犧牲に擧げられた譯で、自分の落度の故でもなければ無能の故でもないので、顧みて恥づるところはすこしもなかつた。生活といふことについても、大和魂をしやぶつてゐても、五年や十年は生きて行けるやうに思ひ込んでゐた。尤もそれは比較的豐かな手當を貰つた當座の氣分であつたのだが、本人そこには氣がついてゐなかつた。

軍縮の初期には、よく人間と馬と一緒に淘汰されたものだつた。將校連がめい/\の首を懸念してゐる時に、數千頭の馬が拂下げにされて市中に職を求めなければならなかつた。その中には荷車を曳かされる練習を强ひられて、憤慨して馬子を蹴殺したりしたものもあつたが、大抵はそんな我儘もいへずに、それ/\秣を喰ひ外さないやうに心懸ける外はなかつた。それは人間の方も同じであつた。人間が、馬の運命に同情してゐるうちに、自分の番が來たので、賣れ口のない人間は、却つて馬の賣れて行くのを羨んだりした。けれども二年三年一つ馬を手馴づけたものは、それと別れるのに泣き顏をしないではゐられなかつた、まして自分も馬と同じ運命に落されたものは、全くそのものになつたやうな氣がした。しかも馬でないことが殘念でもあつた。又は馬が人間でないことが殘念でもあつた。一方が人間で一方が動物である爲め、互の同情の通じの惡いのが痛ましい程殘念だつた。尤も猪河少佐は、人間と動物との生理學上の區別を全く忘れてしまつた位、馬と一體になつてしまつたのであつた。雙方の同情は、少佐の手綱が馬のハミに感ずるよりもしつくりと通じ合つた。少佐が涙を流しながら馬の首を撫でた時に、馬も潸々と泣いた。――と少佐は信じた。

少佐は騎兵出身の將校中にも、特に調馬にかけては專門の調馬師に劣らない自信を有つた一人であつた。普通の將校は下士のやる新馬の調教を監督するだけだが、少佐は、手に終へ

ない新馬を自分で手がけるのが得意で、兵卒と一緒になつてそれをやつた。少佐は素人をつかまへると、よく自慢に、自分の左手の拇指を見せた。その拇指は右手の拇指に比べるとずつと短く、且つその爪は半分ほどに減つてゐるのであつた。

「これは君、馬を調教する時、左の手でから手綱を抑へるのに、グイと拇指の先に力を入れるものだから、たうとうこんなに減つてしまつたんだ。」さう云つて少佐は、その半分殘つた薄氣味の悪い拇指を、西洋人が念を押す時にするやうな恰好で、人の眼の前に差し出すのであつた。

「自分の馴らした馬は、まるで自分の教育した子供だからね。全く動物といふ氣はしないんだ。しまひには、僕の顔色や、指先を一寸ふれただけですぐ僕の心持を知つてしまふのなんかもあるからね。人間を教育したつて、さうは行くものぢやない。それを君、動物がそこまで僕の心持通りになるのだからね、ほんたうに涙がこぼれるぢやないか。」そんなことをいつては少佐が、氣に入つた馬の頸を撫でながら眼をしばたゝくのを見なかつた少佐の友人は一人もなかつた。

そんな馬を、誰れかが一寸でも下手に扱つたり苛めたりするのを見つけると、少佐の憤怒は恐ろしいほどであつた。兵卒だらうが、同僚だらうが、上官だらうが、容赦はなく、生れる前から少佐の頭に植ゑつけられたかと思はれるほどの階級觀念も、その時だけは少佐の頭から吹き飛ばされてしまつて、全く同じ音聲、同じ文法で怒鳴りつけるのであつた。上官などが、彼れのその非階級的の調子に立腹して、彼れの警告を聴かぬふりでもしようものなら、彼れは、顔を眞青にして、脣を噛みしめて上官を睨みつけながら、固く握つた兩手を腰の邊でブルブルふるはせるのであつた。で大抵の上官は、彼れを三分間もそんな狀態に置くと、彼れのでなく、自分の身の上に面倒なことが起りさうに思はれるので、彼れの命令に從ふ氣にならざるを得ないのであつた。

軍人社會では、馬は、少くとも兵卒よりも重んぜられることになつてゐるが、猪河少佐はそれに辶をかけて、馬を將官以上の動物とした。

「將官だつて君、馬に乘る時に、馬自らの法則に從はにやならんだらう。人間を働かす時にはあべこべだよ、將官の法則に我々が從ふんで、將官が我々の法則に從ふんぢやないからね。馬の方が權威があるだらうぢやないか。」

馬以外のことでは、理窟らしい理窟を云ふ詮も知らないで、部下にやり込められてばかりゐる猪河少佐は、馬のことになると、そんな風にこじつけた理窟を際限もなく列べるのであつた。

「君等は、肉體美の程度は人間の肉體だと思つてゐるが、僕に云はせれば、馬の肉體美は人間の比にあらずだよ。最も完全な馬の肉體は、線といひ角度といひ實に微妙を極めたものぢやないか。殊に角度だが、あれは人間の肉體美には全く缺けてゐるものだよ。人體の線は好いが、角度はなつちやをらんよ。馬の前半身や後脚の角度の美は、實に生物の形態が有つてゐる幾何學美の最たるものだよ。人間はダンスなんぞで、角度の美を出さうとするやうだが、馬の角度の美にはとても及ばん。」

酒の席などで同僚が、「オイ猪河にあんまり飲ませるなよ。又アングルを出すと助からないからね。」といふのは、即ち此の馬體美論をいふのであつた。

「馬に對しては君、全く互助的精神を以て對す

るより外ないんだよ。強制的や命令的の態度で向つたら馬といふ奴は決して本心から從順にはしてゐないよ。引出す時だつてさうだらう。眞ともから「サア出ろ。」と引張つたら出やしまい。馬と一緒に列んで「サア一緒に歩からね。」といふと出て來るぢやないか。乘つてゐたつてさうだよ。乘手が馬ばかりに歩かせたり、廻らせたりする氣だと決して、馬は歩かないんだよ。つまり此方が一緒に歩くといふ心持がすつかり馬に呑み込めてゐないとダメなんだよ。僕のやうな名人になると、乘つたばかりで、もう僕の心持がすつかり馬にわかつてしまふんだからね、何の事はない、掌がプランセットの上に乘つたのと同じなんだよ。プランセットといふ奴は、此方の心持が、掌の感じでプランセットに移つて、此方の心持通りをプランセットが字に書くのだらう。馬と乘手の關係もさうなんだ。人間と馬の合せ物ぢやなくつて、人馬一體となつた一つの生物なんだよ。』

相手が一人逃げ二人逃げ、殘つたものが新聞を讀み出しても、彼れはそんなことを何時までも云つてゐるのであつた。

「人を馬鹿にするよりも、君の、馬を人にする方が、餘ッぽど質がよくないね。」同僚はよくそんなことを云つて彼れを冷かした。

『厩が燒けたら、「馬を傷れりや否やと、人を問はず。」だらう君は。』などと師團長にからかはれたこともあつた。そのやうな周圍の形勢は、益々馬に對する猪河少佐の眞劍さを增さしめるのみであつた。さうしてその眞劍味は、馬と彼れとが一緒に失職した當時に於てクライマックスに達したのであつた。

無論少佐は、彼れ自らの失職については、殆んど何の感じもなかつたといつてゝ位であつた。それは例の大和魂をしやぶつても當分は生きて行けるといふ理由があつたせゐでもあらうが、然し馬との別離が彼れの胸裡を占領し盡したことがなかつたならば、彼れはも少しは自分のことを考へたに違ひないのであつた。

少佐は、夫人――それは少佐に恩義のある上官の令孃であつた――が殊の外、失職を氣にかけたのであるが、彼れの愛馬が、少しでも彼れの失職を氣にかけたら、少佐は、夫人の心配よりも、馬のそれを一層氣にしたに違ひない。幸ひに馬は、主人の失職については、主人との別離に於て表したほどの萬分の一の表情をも示さなかつたので、少佐は、自分の失職を氣にする夫人を無視することが出來た。

夫人は先年たつた一人の子供を喪くした代りにヒステリーを獲たのであるが、そのヒステリーも馬の方であつたら、少佐には大分の惱みとなつたのであらうが、幸ひ夫人の方だつたのでたいして問題にもしずにすんでゐた。

これに反して愛馬アカツキと別れることは、全くごまかしや知らぬふりの利かない悲しみとなつて少佐の胸を抉るのであつた。愈々引渡しの日の近づくに從つて、少佐は、毎日々々厩から馬を引出して、乘るのでもなく、引いて歩くのでもなく、たゞ庭先へ引いて來て、絶えずクドクドと何か馬に話しかけながら、馬の鼻面を擦つたり腮を抱いたり、キッスをするやうな風をしたり、態々自分で買つて來た蔗飴をたべさせたり、自分と馬の飯時を除いては、終日そんなことをしてゐるのであつた。初めのうちは、眼をしばだたきながらそれを見てゐた夫人も、しまひには、まるで自分の夫が見知らぬ婦人とふざけてゐるのでも見付けたやうな尖々しい眼付でそれを見るやうになつた。さうして御飯時でも、碌々自分には口も利かない少佐を、忌々しさうに睨みつけて、つけもない所で、フンと鼻で笑つて見せたりした。がそれを馬がした譯ではないので、少佐は一向感じなかつた。

愈々、隊に馬を引渡す當日になつて、少佐は自らそれに乘つて隊に行くつもりで、軍装をつけて玄關に出た。少佐は踏段の上に置いてある長靴を穿かうとして、それを手にとると同時に、少佐の眼からこぼれ落ちた大粒の涙が、黑光りにみがかれた靴の上にハラ／＼と散つた。と少佐は取り上げた靴を抛りつけるやうに投げ出して、そのまゝぷいと立つて奥へ入つてしまつた。

追つて出た夫人は、驚いて夫の後へついて奥へ入ると、少佐はプラ／＼と縁を通つて書齋に入るなり、襖を手荒くしめてしまつた。

馬丁の作爺が待ちあぐんで催促したので、夫人は書齋の襖をそつと開けると、少佐はテーブルの上に組んだ腕に面を伏せて身動きもせずにゐた。

夫人は、同情したやうな、けれども隨分馬鹿らしいと云つたやうな顔付で、徐かに、「あなた、あなた。」と呼んで見た。がお返事がないので、夫人はやゝ持前のヒステリー聲で、

「おでかけにならないの？ 作藏が待ちくたびれてゐるぢやありませんか。」

もつと何か云ひたいのを打ち切つたといふやうに、夫人は口の端をピク／＼させた。

「作に連れて行かせ。俺は今日は行かん。」少佐は顔を上げたが、夫人の方とは正反對の方を向いてさういつた。

「馬鹿々々しい、まるで女の腐つたの見たいに、見ツともない！」夫人は、書齋を出て、襖を閉て切らないうちに、少佐に聽えよがしにさう云つて、慳貪に襖を柱に叩きつけた。

この猪河少佐其の人であつた、今曲馬を見物しながら、『確かにアカツキだ！』と叫んだのは。

樂屋に逃げ込んだ太夫の後を追ひかけて燕尾服も樂屋に驅け込んだが、暫くして太夫の口を取つて再び舞臺に現はれた。馬は、樂屋で餘程嚴しい懲罰を受けたらしく燕尾服の一擧一動に、その敏感らしい首をバネのやうに跳ね上げ跳ね上げした。そのオド／＼した樣子には、誰れの眼にも彼れが嚴罰をうけて來たことがありありと見えるので、見物も同情したやうに、鎭り返つてしまつた。燕尾服は、馬にお詫びをさせると稱して、前足を折らせて首を上げたり下げたり、お辭儀をするやうな風をさせた。見物は大喜びで喝采した。

唇をかみながらそれを見てゐた少佐は、急に立ち上つて、混雜した見物席を、八方から肱突を喰ふのをかまはず荒ッぽく割つて通つて、樂屋口の方へ出て、揚幕を潜つてその中へ入つて行つた。

そこには肉襦袢の男女や、道化の装をした男達や、豹の檻や、馬や、玉乘や輕業の道具や、藁束やが一緒にガヤ／＼してゐたが、見知らぬ男が舞臺の方から入つて來たので、一同の驚いたやうな視線が八方から少佐を射た。

「支配人に逢ひたいんだが……」少佐は誰れにといふことなしに、そこの空氣に向つて、軍人口調でさう云つた。

誰れも返事するものはなかつたので、少佐は焦立たしい聲で怒鳴つた。

「支配人は居らんのか、こゝの支配人は。」

白い詰襟に辨慶縞の乘馬ズボンをつけた恐ろしく體格の好い、四角な顔の、怖い眼の男が少佐の前に現はれて、默つて少佐の姿をジロ／＼と眺めた。

「支配人は居らんのかと云つとるぢやないか。」

焦れば焦る程軍人口調になつて、少佐は其の男を睨め附けた。

『一體おめえさんはナンなんだい。』怖い眼の

大男は、さう云つて、少佐の頭から足の先まで見てゐるのだといふ風に態と首を上げたり下げたりした。

『僕はキヌシ河と云つて、在郷將校だが、支配人に一寸話がしたいのだ。』

『わつしは又新めえの刑事かと思つた。』辨慶縞は、そんな失敬なことを云つて笑つて、支配人にも社長にも、わつし一人だが、一體何ういふ御用なんです。』

用件を聽かれて見ると、少佐は一寸躊躇しない譯に行かなかつた。實をいふと、何のつもりで樂屋に飛び込んだか、それさへはつきりしなかつた。愛馬アカツキに不意に出會しただけでも、少佐にとつて、一種のショックだが、それが殘酷な興行人の手で虐使され侮辱されてゐるのを見たので急に逆上したやうな心持になつて、我慢し切れずにこゝに飛び込んだのであつた。

その時の少佐の心持は、自分の愛馬がそんな風に取扱はれてゐることの不平を支配人に訴へてやらうといふやうな昂奮にハチ切れさうになつてゐたのは事實だが、それだけのことでは、こゝまで出て來られる筈もなかつた。逆上したやうな少佐の頭の裡にも、もつと立派な計畫が咄嗟の間に湧いたのであつた。而も不平と腹立ちとで攪亂された刹那には、少佐はそれを忘れてしまつて急に答へが出來なかつたが、しばらくして漸く切り出した。

『實は今あそこで藝をしてゐる馬は、多分見違ひではあるまいと思ふが、あれは僕のもとの乘馬のアカツキといふ奴なんだ。』

『ハヽア成程ね。』根つから面白くもないことを聽いてゐるやうな風で、支配人は空々しく調子を合せた。

そこへ大喝采と共に、その馬が獨りで舞臺から驅け戻つて來て、支配人の傍で立ち止つた。少佐は眼の前に來たその馬を見ると混ふべくもないアカツキであつた。

堪へ切れずに、少佐はいきなり支配人を押しのけて、『ホー〳〵。』と聲をかけながらアカツキの肩の邊に近づいて首筋を撫でその長い顏を抱いた。

馬は、普通さうされた時に示すやうな懷かしさうな表情をしたが、別段舊主人に逢つた嬉しさを示すやうな風を見せなかつたので、少佐は俄かに物淋しさを感じた。それは、外にやられた兒が年經て親に逢つても、疑はしい眼で自分の肉身の親を見てゐるやうな光景であつた。

少佐は、遣る瀬ない悲しさに打たれると同時に、一しほ棄てられた兒のいぢらしさをあはれに思ふ外はなかつた。

『何うでも俺は、再び此の馬を連れて行かねばならない。』少佐は腹の裡にそれを考へて、馬の頰のふくらみを撫でながら、支配人に云つた。

『實は、それで相談だが、僕は、何うしても再び此の馬を手に入れたくなつたのだ。』

『あなたがですかえ？』支配人は少し馬鹿にしたやうな調子でさう云つた。

『僕がだ、で讓つて貰へれば大變仕合せだと思ふんだがね。』少佐は、もう此の馬が再び自分の手に入つたやうな心持になつて、自分の肩を馬の頸につけて、その氣持だけを滿足させた。

『さういつちや失禮ですが、あなたは將官ででもおありですか。』支配人は矢張り、『さうぢやあるまい。』と云はぬばかりに、そんな餘計なことをいつた。

『いや實は少佐なんだ。』

『ぢや失敬だが、お家は財産家とでもいふのですね。』支配人は、何處まで少佐を見縊つてゐるかを見せようとするやうに、又そんなことを云つた。

『いやそんなことは全くない。』少佐は、支配人の擧動に全く氣付かないで眞面目にそれを取合つてゐる。それはアカッキが彼れの傍に來たので、馬以外の生物の擧動なんかはもう少佐には沒交渉になつてしまつてゐたのである。

「ぢや失敬だが、あなたの御身分で例ひ一頭でも馬なんか飼つて行くのは無理でせうぜ。けふ日は昔と違つて馬糧も滅法高くなつてゐますし、馬丁だつて安い給料ぢや來やしませんや。外へ預けるたつて五六十圓を缺かしちや何處だつて預かるたア云ひませんぜ。』

そのことは咄嗟の間の計畫のうちに、多少見込をつけてゐないでもなかつた。それは夫人の里方の中將に賴んでその空いてゐる廐に入れて貰ふと同時に、中將の乘用にもして、費用は中將と半分づつ持つ位に相談して見ようといふのであつた。で、

「それは十分成算があるのだが。所で讓り渡して貰へるか何うか、それが肝要の點なんだが……」

『エヽ、わつし共は儲かりさへすりアいゝんですから、話によつちやお讓りしまいものでもありませんが、然し今此奴を持つて行かれると一寸困るからマア六かしい方でせうな。』

少佐には、相手の口調が懸引としか思はれなかつた。で少しは相場より高くとも讓るには讓るだらうと思つた。

「然しその興行の方の損を多少値段に見込んで手渡したら好いだらう。少しは高いのは承知だから、もと〱此方から望むんだからね。』

「サア。」支配人の顏には明らかに話にならないと書いてあるに拘らず、もう馬の顏しか讀むことの出來ない少佐には、それが全く見えなかつた。

「エヘッヘ。』支配人は人を馬鹿にするやうに笑つて、『興行の損なんぞ見込んだらそれア大變でさア。そんなことはなしにしても、隨分高くなつちやね。あれだけ仕込んであるんだから、もしあんたが興行人だつたら、すぐ萬て金を此奴が稼ぎ出すんだからね。」

好い加減にして歸りなさいと云はぬばかりに支配人は、少佐の抱へてゐる馬の首を引離して、愛想氣もなく馬を引いて歩き出した。

手の裡の寶物を浚はれて行くやうな氣がして、少佐は夢中でフラ〱と馬の尻を追ひかけながら、

『マア思つた通りの値段を云つて見んかい。云ふだけなら好いだらうが。」そんなことを頻々と云つて、支配人に迫つた。

支配人は、少佐の言葉を、振り向きもせずに聽き流して、さつさと廐の方へアカッキを引張つて行きながら、鼻唄でも唄ふやうな調子で、

「さうさね。マア五千兩にビタ一文缺けてもご免だね。』

その鼻唄のやうな聲は、玄翁で腦天をグヮンと喰はせられたほど、少佐をボーッとさせてしまつた。少佐は肉襦袢や道化服が、八方から嘲り笑ひを自分に浴びせかけてゐるのも眼に入らずに、まるで誰れも見てゐない書齋に居る氣になつて、そこへ打ッ倒れてしまひさうになつた。全身に血が無くなつて、頭だけが熱湯のやうな血でハチ切れさうになつて、遠ざかつて行くアカッキの姿も、周圍のむさくるしい光景も、一時に湧き上るキラ〱する雲につゝまれてしまつた。

グル〱廻轉する頭の裡の世界だけを歩いてでも來たやうに、少佐は不意に廣い並木通りに出た。

此の通りを左に折れた細い往來に、少佐の馬丁だつた作爺が、小さな煎餅屋を出してゐるのであつた。少佐は、態々此の邊へ廻り道をしても、その店によつて爺とアカッキの昔話を

して、うまくもない煎餅を買つて歸るのであつた。

　少佐は何時しかその店の前に立つてゐた。煎餅の型を押してゐた作爺は、慌てて店先へ飛んで出て、何時もの通りの挨拶をするのであつた。

『作爺や。』少佐はさう云つて、今思ひかけず出會したアカツキのことを話さうとしたのだが、急に胸が塞がつて、次の句が出なかつた。

　作爺が怪訝な顏をして此方の面を見守つてゐるので、少佐は、言ひ混らす事も出來なかつた。で、かすれ聲で、

『今日偶然アカツキに出逢つたよ。』

『ヘエッ、アカツキに、それア何處でごぜいす。』作爺は、芝居の中間のやうな聲を出して、眼を丸くした。

『あの燒跡に曲馬の小屋があるだらう。あすこにゐるんだよ、アカツキが。』

『ヘエあの小屋にね。あれは私共の心安い人間がやつてゐるんですが……』

『何？ お前あの支配人を知つてゐるのか？……』

　少佐は意外の便宜を得たやうに思つた。もう萬事ダメになつたあとではあるが、作爺があの男を知つてゐるとすると、たゞ漠然と、そこにまだ一縷の望みがつながつてゐるやうな氣がした。

『エヽ、あの男は、あつしの子供の時分からの友達で、もとは伯樂で、隊へも時々やつて來たんです。あつしが旦那樣のとこを下つた時にも、一緒に一座の仕事をやらないかなんて云つたものですが、あつしは香具師なんぞにはなり度くないつて斷つたんでごぜえすよ。アカツキがあいつの手に入つたことはちつとも知りませんでした。さうと知つたら早く行つてやるんでしたつけ。何しろあの一座は年中日本國中をぐるぐる廻つて時々公園裏へ來るんで、めつたに逢へねえでごぜえすよ。』

　少佐は、けれども先刻のいきさつを作爺に洩らす氣にはなれなかつた。

『何か藝當でもやつてるんでごぜえすか。』

『あゝ中々うまいことをやつてるぞ。けれども俺は……』少佐はその先を何と云つていゝかわからなかつた。さうして齒をくひしばつて言葉を途切らした。

『うまいことをね。』作爺は急に眼をショボショボさせて、『やれやれ△△中將閣下や××少將閣下や旦那樣を御乘せ申した名馬だがなア。世が世なら一生飼ひ殺しで御隱居の身分なのに、香具師なんぞの手に渡つて苦勞さしなきやならねえなんて、旦那さま、可哀想なもんぢやごぜえせんか。貴忠め〳〵しい世の中になつたもんですなア。あア長生きはしたくねえ。』

　作爺はさう云つて、蔑むやうに舊主の見すぼらしい姿を見たが、堪へ切れずに垢だらけの手の甲で涙をこすつた。

『作爺、もうアカツキの話はしツこなしだ。』

　少佐は、態とらしい作り聲でさう云つて、仰々しく煎餅の箱をあつちこつち見廻しながら、『煎餅をくれツ、煎餅をツ。』と號令をかけるやうに怒鳴つた。

『ヘッヘッ。』作爺もベソをかきながら作り笑ひをして、『年をとつちや、旦那樣、ダメでごぜえすよ。』

『でもお前なんかア寧ろ結構な身分なんだ。倅は一廉の職人になるし、店は繁榮するし、もう苦勞はない。僕等のやうな素浪人はそこへ行くと寧ろ始末が惡い。アッハッハ。』

　笑つて見たやうなものの、われながら戯談を云つてゐるやうな氣はしなかつた。少佐自身の暗い前途に比べると、此の煎餅屋の方が遙かに明るいのであつた。

『ご戯談を仰しやる、然しマアお蔭樣で店の

方は足かけ四年何うか斯うか持ち耐へて來ましたんで、もう御得意樣も出來ましたやうな鹽梅で、年寄の小遣取りには十分でごぜえます。然し肝心の倅が葬儀屋の棺桶職人ぢや、一生うだつが上りッこはごぜえせんで。然し職人はありがてえもんで、から諸式が高い〳〵と云つても、マア親子三人ご飯をいたゞいて行けるてもんでごぜえますア。」

少佐が作爺の手から煎餅袋を受取つてゐると、作爺の倅の若い嫁が外から歸つて來た。下町の娘らしいあどけない顏付に、丸髷を結つた恰好はまるで子供芝居のおやまのやうであつた。少佐はいつもうち、下女ほども興味を持たずに見てゐた此の嫁が、今日は絽の單衣に博多の夏帶を結めて、商家の家内のやうなキチンとした姿で現はれたので、頗る物珍らしく眺められた。無論棺桶屋の職人のかみさんとは思はれなかつた。

「おゝ今日は大層立派な奧さんになりよつたな。働きものの御亭主を持つて仕合だなア。」

少佐も失職を五六年も續けてゐるうち、こんな人間並の愛想をいふことを覺えたらしい。

嫁は聲がつかへて持ち上げられない首を据ゑて、上眼使ひで少佐を見ながら、氣まりのわるいやうな羞かしいやうな笑ひ聲を立てた。

少佐は、やつぱり此の煎餅屋の店の方が、自分の家の内より餘ツ程明るく感じた。アカツキの一件も、忘れたやうに頭から消えて、少佐は輕い氣分になつてそこを去つた。

電車へ乘らうとして並木道へ出て、停留場に佇んでゐると、樂隊を先頭にして、赤い幟を何本も立てた廣告隊が通りかゝつた。見る氣もなく見ると、「東京曲馬團大一座」とある。先刻の曲馬の廣告である。ハッと思ふと、その中程に、如何にも不恰好で劣等な、花火から飛び出したやうな洋裝の少女が、西洋西瓜を倒さにしたやうな醜い太い脛をブラ下げて、男乘りに馬に跨つてやつて來る。

『アカツキだ！』少佐はその少女の乘つた馬を一目見ると、それを發見して、クワッとなつた。さうして無意識にそつちの方に二三步驅けよつた。

少佐は、矢庭にその少女を馬から引きずり下ろして、この屈辱の狀態で市中を引廻されてゐるアカツキをこの場から救ひ出してやりたい氣がした。少佐はそれを敢てする力が自分にないことを知ると同時に、醜怪な行列の中央にアカツキがゐるのを手を拱いて眺めてゐる自分が、此の往來を歩いてゐる澤山の人間の誰れよりも一番の意氣地なしだとしか思へなかつた。もし自分に勇氣があるならば、前後を構はずあの行列の中に飛び込んで、アカツキを辱しめてゐるすべての人間を片端から薙ぎ倒すことが出來る筈だと思つた。

少佐は、辱しめられてゐるアカツキを見てゐるのは、自分の苦痛を増すだけで何の役にも立たないことを知つてゐたけれども、こゝから避けて、その行列の眼に止らないところへ行つてしまふ氣には何うしてもなれなかつた。寧ろ反對に、少佐は、行列が行き過ぎてアカツキの姿が見えなくなりさうになると、我れ知らずその方へ足を進めて、再びアカツキの姿を見出して安心するのであつた。

『俺は何うしてもアカツキを見棄てることは出來ない。そんな勇氣は俺にないのだ。』少佐はフラ〳〵と行列を追ひかけながら、そんなことを思つた。

それは墮落して行く自分の子供を見つけ出した親が、その子供の墮落に絶望してそれを棄ててしまふことの出來ないのと同じであつた。さうしてその子供が自然の傾斜面に沿うて深味へ落ち込んで行くのを何うすることも出來ない親

の運命が少佐自身のそれであると思つた。

『ヤイ・どいた／＼。何を往來の眞中でぼんやり突立つてやがるんで。』

後から息のつまるほど横腹を突かれて、少佐は歩道の方へよろけた途端に、境の滯石に躓づいて、大の男が、叩きつけられたやうにプラターナスの根元に打ち倒された。

『コラ待て。』少佐がさう叫んで立ち上つた時には、割れるやうな大勢の笑ひ聲を後にして、威勢の好い男が二三人で先引きをしてゐる荷車は、さらに突き倒す人間を見つけ出したやうに走り去つてしまつた。新聞紙に包んだ煎餅袋は何かに當つたと見えて、歩道一杯に散亂して、通行人は皆、その煎餅の零落と少佐の顏とを見比べて、その間に多少の聯絡を見出したやうに、氣の毒さうに苦笑して行つた。

『不埒な奴だ。』少佐は、影も形も見えない荷車の跡を睨んでさう叫んだ。そこらの人達には、無論、何が不埒なのだか解らぬらしかつた。無上に腹の立つた少佐は、そんな顏をして少佐の砂まみれの姿を見てゐる通行人を皆撲り倒したい氣がした。それをする勇氣のない自分を、少佐は先刻の意氣地なしに毛をかけた意氣地なしだと思つた。

少佐は、電車に乘るためにこゝに立つてゐたのであつたことを忘れてしまつて、幾臺かの電車を行き過ぎさせた後、見當も構はずに歩き出した。

二三町歩くうちに、又何かに躓つまづいたので、少佐は髮の根がムヅ／＼するほど癇癪が起つた。さうして自分と同じ意氣地なしの足を、ぬげてしまつた下駄に突込まうとして、鼻緒の切れてゐることを發見して、往來の人全部が自分を見てゐるやうな恥辱を感じた。

蒲燒の臭ひが鼻を突いたので、ふと見ると、こは少佐が作爺を連れて時々やつて來る馴染の蒲燒屋の門前だつた。鼻緒の切れた下駄を引きずりながら少佐はその門を入つた。

變挺な大男が、肩から腰にかけて砂まみれになつた、糊の利いた古絣の、西洋紙の紙屑のやうにクシャ／＼になつた單衣物を着て、鼻緒の切れた下駄を引きずり／＼入つて來たので、下駄番の若い衆も『いらつしやい。』といふのも忘れて、ジロ／＼と少佐の姿を眺めて居るのであつた。

『君のところは客を上げんのか。』少佐は、餘憤のゴミ溜めのやうになつてゐる胸のクシャ／＼から、さう云つて若者を怒鳴りつけた。

その聲に驚かされて現はれた女中は、『マア何うなすつたの？』と見覺えのある少佐の變な樣子に目を丸くして、『喧嘩でもなさつたの？』

少佐は、通された薄暗い小さい座敷に坐り込むと、急にがつかりして、今までのことが夢のやうに思はれた。

『一體何うなさつたの？』仕着衣を持つて來た女中は、さう云つて少佐の着物をぬがせた。

『何だか馬鹿に景氣の好い男共が五六人で前後から引張つて驅けて來た荷車に突飛ばされたんだ。一體あれは何の車だらう。』

『さうね、今時分河岸の歸りでもないでせうね。けれども矢張りそんな連中でせうよ。』

『もう少し早く起き上れたら引捕へて伜を打つてやるんだつたが、何に躓いてひどく倒れたものだから間に合はなかつた。畜生ッ。』

『でもあなた、あんな連中が五六人もゐるのに、あなたお一人で喧嘩なんかしたらひどい目に逢はされますよ。手出しをなさらないでよかつたんだわ。』

さう云はれて見れば、喧嘩どころではなく、返り討は必然だつた。物事は少し遲れた方が好いやうだ。少佐はそんなことを考へて、今自分は、

ヤケ酒でも呷りつけるつもりでこゝへ飛び込んだのだが、さうしてゐる必要があるかも知れないと、甚だ反省的な氣分が兆した。が、すぐとそれが意氣地なしの口實のやうにも思はれた。

「酒だ。酒だ。」と少佐は叫んだ。

その晩、蒲焼屋から少佐が作爺を呼びによこしたのは、もう九時過ぎだつた。作爺は、とうに歸つたと思つた少佐が、まだこの邊に居たのを不審に思ひながら來て見ると、少佐は浴衣がけで、見知らない、藝者にしては年を取り過ぎた女を相手に頻りに酒を飲んでゐた。

「ヤア作爺か、よく來て呉れた。實は貴公に是非一寸頼みたい用事があるんだが、それは後刻として、マア一杯やれ。」振子のやうな手つきで少佐は盃を作爺に差し出した。

作爺は、少佐がもう十二分に醉つてゐることに氣がついた。傍の藝者といひ、少佐がこんなところへ來てへゞレケになることといひ、何んだか唯事でないやうな氣がして胸に不安な動悸を感じた。

「コレ作爺や、何もそんな妙な顔をして、ジロジロ俺達を見るのだ。」と少佐は眼をすゑて、そこの藝者の姿を改めて睨んでから、作爺に向つて、「作爺、此の婦人はな、先達まで赤坂で鳴らした老妓なのだよ。……アッハッハ、老妓は失敬々々、然し、老妓とはこれ國寶的藝者のことでな、決して侮辱にあらず。さてその老妓が、今日偶然我輩の尊敬する[illegible]靈教大主教猊下の一座に侍つてこのうちに居つたので、我輩は、大主教猊下及び老妓閣下に拜謁の光榮を得た譯なんだ。猊下はダメ……彼女は偉物だ。我輩がチャンと此の黒い眼で睨んだ。彼女は確かに偉物だ。云ふことが成つちや居らん。此の老妓閣下の方が遙か上手だ。相撲にならん程上手だ。今晩は偶然この老妓閣下とこゝで出會する光榮を得ちやつたんだ。偶然こゝで……」

「およしなさいよ馬鹿々々しい、[illegible]なんかして、[illegible]さんが怖いんだよ此の人は。」女は巻煙草をふかしながら、そんなことをいつて、その煙を少佐の鼻の先へ吹きつけた。

「それで旦那様、そこでご用と仰しやるのは？」作爺は、まだ落付かない腰を浮かせながら、『ご用を先に承つてしまはねえと、御酒をいたゞいても氣づまりでおいしくござえません。」

「作爺は相變らず忠僕だな、我輩感服仕る。實に殊勝に堪へん。然らば頼みおくが、あの時に話をした曲馬の支配人を一寸こゝへ連れて來て貰ひたいのだ。何うだ、お前心安いといふから出掛けて行つて頼んでくれんか、實に、今日あの支配人と一寸話をしたんだからね、その人間だといへば知つてゐるに違ひない。」

少佐は如何に醉つてゐても、流石に用件を云ふ時は判然してゐると作爺は思つた。

『承知しました。でご用はその今日お話のあつた件についてでごぜえすか。』

『いや、それは違ふ、大違ひ。さうだ、その點をよく云つてやつてくれ、昔の話とは全然違ふんだといふことを。實は、我輩の身上に關したことなんだが、マアそんなことは逢つて話すとして、とにかくも決して迷惑になるやうなことではないからとよく云つてくれ。』

作爺が、[illegible]の乗馬洋袴を連れて戻つて來た時には、少佐は、青い顔をして、眼を据ゑて、もうすつかり女を捻ぢ伏せる形勢になつてゐた。が幸ひにもう前の老妓なるものは姿を見せなかつた。

支配人は室に入るなり、昔の態度とは打つて變つて、[illegible]の方に平突く張つて、

「手前は先刻御目にかゝつた曲馬團東京一座の元締をいたして居ります東洋新寅と申すもの

でございます。今日は存じないとは申しながら失禮をいたしまして、何とも相濟みません、作藏老人の御主人とはちつとも存じませんでしたので、……」

『いや／＼失禮はお互樣だ、殊に主從なんてことは昔の話で、今は友達同士だ。小笠原流はぬきにして、さあ／＼まづ一こん。作爺、それ支配人閣下に杯を……』

實際少佐は、甞は、馬にばかり氣をとられて、支配人が何んな態度をしたのか殆んど氣づかなかつたので、失禮の詫をうける理由なんぞは全く無いと思つたのであつた。

作爺は主人が眼を据ゑながら、案外應對が確かなのを意外に思つた。これなら誰れの膽も捻ぢ上げる虞れはなささうに思へた。而も、用事といふのは何事だか、早く片付けさせるに如くはなしと思つて、口を切つた。

「で連れて參つた此の新寅に御用と仰しやるのは……」

『マア／＼ゆつくり聽いて貰はんければならん。二人とも、十分飲んでくれたまへ。』

二人が好い加減赤くなつた時分に、少佐は、益々青白い顔に、薄氣味惡い眼を据ゑてその用件を切り出した。

『實はだ、僕はだ、今日といふ今日、一身上の大問題にぶつかつたといふ譯なんだ。話は眞劍だぞ、笑つたりしちやいかんぞ。一言一句が眞劍だ。眞劍だぞ。』少佐は頻りに眞劍を繰り返して容易に言葉を進めなかつた。

作爺は、矢張り少佐は醉つてゐるんだと思つた。從つて話し出す用件なるものが、果して素面の話か、酒の上の話か見當がつきかぬると思つた。

『何しろ、今日は如何なる吉日ぞだ。』少佐はまだそんなことを云つてゐる。『△靈教大主教猊下の一座がこゝに見えたについて、我輩は、「猊下、本日は特に一身上について御教を賜りたいから、失禮ながら別室へ。」とこゝへ請じて、御教を乞ふたんだ。所が何うだ。あいつは……と申しては失禮だが、我輩の話が頓と理解出來んのだ。我輩の話といふのは外でもないんだ。「猊下、こゝに我輩は二大公案を提げて猊下の御教を仰ぎ奉る。第一に、我輩は喰つて行けない。これを如何。第二に、我輩は命にかけて愛馬アカツキと離れることは出來ない。これを如何。」すると猊下の曰くだ。「二つながらアラズぢや。」アッハハ、何がアラズぢやだ。あるからいふんだ。何がアラズぢやだ。「喰へんといふ法はない、人間は眞を體し、正道を踏み、己れを正しくし、努めて已まずんば、天道それこれを棄てんや。喰へないといふのは懈慢、緩怠の致すところぢや。」だとさ。「第二に、牛馬、犬猫如き畜類に煩悩の愛を生じて悶々するはこれ汝の心境裡に獸畜の心の宿れるものぢや。會ふものは別れ、生あるものは死す。これ大地の通理、△靈の大法、陳芬漢芬でござる。」だとさ。

「これ猊下、人を馬鹿になさるなよ、我等の喰へないのは、正道を踏み、己れを正しくし、努めて已まない故に喰へないのですよ。邪道を踏み、己れを曲け、怠けて已まない奴等は、皆立派に喰つてゐる。さういふ猊下もその一人だ。」と我輩さう云はうと思つたが、その一句だけは差し控へた。何うだ、作爺、我輩は決して醉つて管を卷くのでないことは、それでわかるだらう。第二にだ、獸畜の心が我輩の心境に宿つてゐるか居ないか知らないが、アカツキが居ないぢや坐ても立つても居られないんだから、誰れが何といつても、これは讓歩出來ない。死んでも讓歩しない。割引もしない。月賦でもいけない。即時現金拂ひでなくちや承知出來ない。△靈教でも佛教でも耶蘇教でも大本教でも此の

仲裁はご免蒙る。サア第一が喰へない。第二がアカツキだ。猊下何うしてくれる。猊下曰く、「御前は今日は醉つてゐる。何れ素面の時にとくと敎を授ける。」だと。「天下皆醉ひ△靈獨り醒む。」なんかんとぬかしてゐる癖に、醉つたものに敎が利かないで醒めるまで待つんぢや、藥が病の癒るまで待つてるやうなものだ。「エヽもう知らない。」我輩はさう云つて猊下を破門しちやつたぞ。

「そこへやつて來たのが、今までこゝにゐた老妓だ。我輩此度は二大公案をあの女に持ちかけた。女の曰くだ。そんなことはイト安い、二つとも一度に解釋するに造作はない、とかうだ。然らば、何うするんだと聽くと――兩君これから本文だ、よく聽いてゐてくれ給へ……女の曰く、「あんたが東金一座に入つてアカツキを使ふ役になるんですよ。」だと。何うだ兩君、成程さうすれば、我輩は喰つて行ける、アカツキと夫婦くらしが出來る、一擧兩得、一石二鳥、ウーンウーン……」

少佐は妙な唸り聲を發して二人を睨んだ。

作爺は、少佐が卒倒でもするのぢやないかと、びつくりして腰を浮かせた。

「成程ね。」と新伍は、よく話がのみ込めないで顏で、たゞそんな合槌をうつた。

『成程ねぢやないよ君、僕は彼れ老妓の一言で、君の一座に加はる決心をしたんだ、何うだ東金君、貴意如何ッ。』

「旦那樣、何をご戲談仰しやるんです。そんな馬鹿々々しい話を、誰れがほんとにするもんですか、二人を舁いで笑つてやらうなんて、旦那樣にしちや念入りの御戲談でござえすね。」と作爺は眞個にそんな風に思つてゐるやうな顏でいつた。

「戲談だ？ 先刻から僕は、一言一句眞劒だと云つてるぢやないか。何を物好きに僕が今夜に限つて戲談をいふか。これ作藏、今日は我輩の一身にとつて、實に切ない、苦しい、淋しい、悲しい、――死ぬ方がよつぽど樂なやうな思ひをした日だぞ。その今日、我輩が何うして戲談なんぞ云へると思ふ。我輩は醉つてゐるかも知れん、然し醉つても本性はコレほども失つちや居らんぞ。」

「でもそんなこと、第一中將閣下や奧樣に御話も出來るこつちやないぢやござんせんか。」作爺はまた眞個にしなかつた。

『そこだ、猊下なるものもさう云つた。「中將閣下や令夫人を何うしめさる。一家一族を辱しめなければ喰つて行かれんのなら喰はんがよい。」だと。ヘッ人のことなら、一生でも喰はんでゐられるだらう。第一我輩目下の問題は、中將閣下や嬶の爲めに何うしたら好いといふんぢやない。己れが喰へないから何うしたら好いといふんだ。俺は十數年も軍人生活をしたが、軍紀風紀に觸れるやうなことは毛ほどもしなかつたぞ。御用商人や請負人達には役所以外で顏を合はしたことなんかたゞの一度もなかつたぞ。而も退職してから職業を求めれば、會社でも銀行でも、此方へ來いつてものは唯の一軒だつてありやしない。その言ひ草がいゝ。貴下のやうな嚴正な方には、我々商人は大分苦しめられたものだが、それだけ信任するに足る譯で、實に模範的人格でござるだと。そんなら使つてくれといへば、もとの官職の因緣を辿つて大官や役所へモグリ込む役には立ちさうもないから使つたつて仕方がないだ。つまりあなたは泥棒が出來ないからダメだてんだ。老妓はほんたうの事を云つたぞ。あんたは、惡い事が出來ない癖に、泥棒の中にお辭儀をして割込まして貰はうと思ふから皆に肱鐵砲を喰ふんだ。そんなことをしないで、自分の腕で自分の仕事をして買ひたいものは買ひに來いと云つてたらい

いぢやないか。それで買ひ手が來なかつたら、腕がないんだから餓ゑ死にするより外はないとあきらめなさい。さうだ、さうに違ひなからうが、此の我輩には、その腕がないんだと云つたら、老妓の曰く、ぢや電車の車掌にでも、ガタ馬車の馭者にでもなりなさいだと。殘酷千萬なことをぬかすやうだが、泥棒の出來ない人間は、そんなことでもするより外生きて行く道はないらしいぞ。僕の腕と來たら、何だらう。まあ馬の兵隊上りだから、曲乘りの一つ二つは出來るから、東金一座の末席を汚す資格がある位のもんだ。何うだ東金君、役に立ちさうか、六かしいか。それが六かしいとなると、我等の二大公案は永久の謎になるんだ。』

少佐の呂律は大分怪しいが、云ふことは作爺にも解つてゐた。それだけ作爺は、大變なことになりさうな氣がして、動悸が烈しくなつて來た。東金の方は、凝と考へ込んでゐたが、少佐の言葉の終ると同時に、

『そいつは面白い。近頃の珍事件だ。だが全く眞劍ですかい。』

『ダメを押し給ふな、今晩だけは、我等の咽喉から出るものは、オクビまで眞劍だ。』

『眞劍と定つたら旦那、わつしは乘り出しますぜ、あとで逃げを打つちや助かりませんぜ。』と新寅は身體をのり出した。

『バ、バカいふな、これ新寅。』作藏は胸の動悸で聲が慄へて、思ふやうに口がきけなかつた。『旦那樣、そんなつまらねえこと、酒が云はせてるんですぜ。明日まで、そんな相談は此の作藏に御預け下せえし。新寅、おめえも、好い加減慌てなさんなよ。旦那樣にそんなことが爲せられるか何うか、つもりにも見るが好い。』

『作藏、今晩は、僕は、いくら忠僕のいふことでも聽かないぞ。僕は全く決心した。誰れが何といつても此の決心は曲げん。』

さういふ少佐の脣は、だらしなくゆるんで、涎がだら／＼顎を傳つて流れた。眼はどんよりとして、物を見る役は何處か外でしてゐるとしか思へなかつた。

作爺はこんな醉つぱらひの言草を、本氣にして乘氣になつてゐる新寅の方が氣狂ひじみてゐると思つた。見れば、新寅も、隨分酒が廻つたらしく、赤い顏に太い青筋を出して、塗りかけの仁王のやうな顏で、瞳を寄せて、無暗と舌なめずりをしてゐた。

『えゝ旦那、大いにやつつけませう。』新寅は商賣人らしく、これも呂律は怪しいが、頗る事務的な調子で云つた。前以てお話をして置きますが、あつし共の一座ぢや、あつし初め皆給料で、純益は山分けといふことになつてゐるんでさア。世間の香具師とは大變違ふんです、だから皆兄弟同然にしてゐまさア。尤も旦那がおいでだつたら、一座の元締は旦那にして、儲けのことは何んなにでも御相談しまさア。』

『何、今まで通りでよし、それで結構、それで結構。』少佐は鷹揚にそんなことを云つた。

作爺には、尤もらしい二人の應對が可笑しかつたが、全くの戲談とも見えないので不安だつた。

『面白えな。世間の奴等乾度膽をつぶしますぜ、陸軍少佐の曲馬師てんですからね、こいつは一度で御釜を起しちまふな。らめえことになつたぞ。』

『そんな馬鹿なことが出來るかい。』作爺は出鱈目にしても聞きすてに出來ない氣がして、『帝國軍人の面汚しだ。』

『馬鹿いへ、大將の中將のつて働き盛りの年をしてブラ／＼穀つぶしをしてゐるよりは、自分で働いて世の中の爲をしてゐれば立派なもんだ。帝國軍人だつて、食客しかしちやいけねえて理由はあるめえ。第一陸軍少佐が香具師の仲

『間[illegible]をするなんて、我々の格を上げるだけでもお[illegible]人助けだ。普賢菩薩は花魁になつたてえぢやねえか。凡だが凡夫の仕事をするのに墮落もへツたくれもあるもんか。藝妓のいふことは間違ひねえや。[illegible]師じやるのもほんたうだ。ぜーかとか何とかいふ先生だけが飛んだわからねえ[illegible]だぜ。』

乘氣になつて饒舌り出した東伍に、再び事務的態度に返つて、

『おや旦那、堅くお約束いたしましたぜ。お互の間に證文もオツでねえから、紳士的てところで、間違えなしにしませうぜ。作藏老人は、立派な人だぜ。』

『俺は知らねえよ。[illegible]手にす[illegible]い。』作爺にまだ相手にするほど本氣に出來なかつた。

『好いや、こゝに居るから達者人だ、紳士的で間違ひねえとこた。俺で旦那、旦那の本名で名乘りをあげ[illegible]せうか。』

『いゝとも／＼、[illegible]お作ヰヌシ河一座大曲馬か、アツハツハ、愉快々々。』少佐は身體をゆすつて嬉しがつた。

『陸軍大佐ヰ：ヌ：何ですて、それア一體何ですえ。あゝさうか、猪の河でヰヌシカハか。ちといけねえな、やつぱりヰ河一座でなくちやいけねえ、ヰヌシ河一座なんてをかしいや。』

『いや、ヰヌシ河でなければ許さんぞ、ヰヌシ河一座だ。』

『いけねえね。ヰヌシガハなんて、第一縁起がわるいや。犬死に河と間違えら。ヰヌシガハなんてだめだ／＼。』新寅は呂律の廻らない舌で、ヰヌシカハを態とイヌシニガハ／＼と、さもいやな名のやうに繰り返した。

『默れツ、香具師めが！』少佐はいきなり割れるやうな聲で怒鳴つて、ヒヨロ／＼と立ち上つて新寅につかみかゝつた。

『何んだ此のイヌシニガハめ。』新寅もヨロヨロと立ち上つた。

二人は一寸ぶつかつたまゝ一二間離れて更にヨロ／＼とぶつかり合ふ途端に、からみ合つて膳の上に倒れた。さうしてそのまゝころがりながら拳骨をふり廻して、そこら中の道具を跳ね飛ばして、ガラ／＼と大きい音をつゞけさまに立てた。

作爺は面喰つて、仲裁に入つたが、これも隨分あぶない足どりで、すぐと二人の上に重り合つて顚倒してしまつた。

飛んで來た男や女中が三人を引離すに隨分骨折つた。漸く離れた三人は、が[illegible]たになつた諸道具の上にベツたりと坐つてゐたが、少佐と新寅とは、そのまゝそこへ倒れて、大きい鼾をかき出した。

作爺だけは、少し殘つてゐる正氣が、さつきの少佐と新寅との固い約束を想ひ出させると、又不安になつて變な動悸がやまなかつた。



○相對的貞操は人類繁殖のための約束なり、絶對的貞操は人類絶滅のための約束なり。

○恥辱ならざる犧牲あり、名譽なる滿腹あること[illegible]し。

○食を絶たして殺すは野蠻也、食を減じて殺すは文明也。

○光榮は女子を殺し、屈辱は男子を殺す。

○失はれたる戀と亡びたる國とは詩によつて生く。

○人間の生命は國の生命より永からず、國の生命は地球の生命より永からず、地球の生命は宇宙の生命より永からず、宇宙の生命は人道の生命より永からず。

（[illegible]より）

象やの粂さん

『さあ〳〵象をお召しなさい、象を。お坊ちやん方、お嬢さん方の、おうちへのお土産。』

野天の電燈のブラ〳〵してゐる下で、玩具の象を列べた臺を前にして、うはの空のやうに、さう叫んでゐるのは、どんつく布子に厚い襟卷をした、若いやうな年寄りのやうな、賣物の象に少し似た顏を、好い加減赤くしてゐる男である。

『さあ〳〵象をお召し下さい。大象、中象、小象、お好み次第。象は動物のうちで、一番大きくて一番可愛らしい。それがこんなに小つちやくて、こんなに可愛らしいのだから、それは〳〵可愛らしい。「これ〳〵小象さん。」「ヘイ〳〵何御用。」鼻ピヨコ〳〵のピーピーピーと御返事をする小象さん。上等舶來のゴム細工。おうちへ御歸りまで、おや壞れた、泣かなくなつた、なんぞと申す品ではございません。さあお坊ちやん、お手に採つて御覽下さい。こちらは大和好み眞鍮細工。泣かないのは育ちのよい爲め。お嬢さん方のお友達には、持つてこいの小象さん、さあ〳〵お召し下さい。ハックショイ。象は印度ベンガルの產。印度は熱國、お寒いのは少々閉口。鼻は人間の兩手指先の用をいたします。さあ〳〵お召し下さい。何うゾーおめし下さいだ。アッハッハ。』

『象や、相變らず元氣だね。』と通りかゝつた風船屋のお婆さんが聲をかけた。

『根つから元氣でもないんだよ、おつかあ。今朝から見ると何だか象の數が殖えたやうだ。』

象やは臺の上の、所謂小象、中象、大象を見廻して、べソを搔く眞似をした。

『象が子供を産みやしまいし、馬鹿にしてゐるよ。賣れないのかい。』大きな包を背負つたお婆さんは、寄つて來て、慰めるやうにさう云つた。

『賣れねえ。今時の子供は象でもなからう。あれ見や、いやにこまつちやくれてゐやあがら。』

象やは、向うから來る夫婦連れの紳士の連れてゐる、洋服の子供達を見ながらさう云つた。

『賣手がそんなこと云つてちや、誰れが買ふもんかね……もうお仕舞ひよ。ポツ〳〵やつて來たよ。』お婆さんは眞闇な空を見上げた。

『おつかあ、もう歸るのかい。おや一緒に行かう。お隣の大將、仕舞はねえか、ポツ〳〵やつて來たとよ。』象やは、荷物を片付けながら隣の南京豆屋に聲をかけた。

『やつて來た?』豆やは、ガラ〳〵取手を廻しながら、『情ねえ時にやつて來やがつたな。俺の店はこれからだ。』

『惡張つてるよ。』お婆さんは、クンと鼻をならして、『あんまり儲けると、歸りに追剝に遭ふよ。』

『追剝に遭ふほど儲けたら、追剝にだつてちつとは呉れてやらア。』

『南京やさん、お休み。』象やは、片付けた荷を背負つて、お婆さんと連れ立つた。

『粂さん、お前さん又此頃お酒を始めたさうだね。』お婆さんは、薄暗がりの狹い町に入つてから、象やにさう云つた。

『始めたつて、おつかあ、可哀想に、酒を飲んだつて氣のするほど飲めた試しはねえんだからね。』

『でも、お前さんとこのきいちやんが泣いてるぢやないか。てんで一文だつて家へ持つて歸ら

ないで、皆飲んぢあふんだつて。きいちやんだつて可哀想ぢやないか。晝間工場へ行つてさんざん働いて、夜は夜つぴて内職ぢや、やり切れやしないよ。」

「そりやおつかあ、きい坊は可哀想さ、けど俺だつて隨分可哀想だ。」

「何をいつてるんだい、此の人は。まだおつかあに死なれたこと、クョ〳〵思つてるのかい。無理はないけど、もちつと男らしくおしよ。」

「おつかあ？　あんなものは何んでえ。誰れがクョ〳〵なんぞ思つてるもんか。・・・さうぢやねえんだよ。」

「何うしたんだよ。それぢや。」

「何うもかうもねえんだから、始末に終へねえや。」

「訝しな人だねえ。お前さんはそれでよからうが、きいちやんが可哀想ぢやないか。」

「だからよ、俺だつて可哀想だつてんだよ。」

「變たよ、お前さんは。象が賣れない〳〵て云つてる癖に、何うしても外の商賣をしないんだもの。さうしといて、俺が可哀想もないもんだ。」

「賣れたつて賣れなくつたて、象やはやめられねえ。」

「それだから訝しな人だつて云んぢやないか。・・・きいちやんだつて、もう年頃だつてえのに、お母さんはゐやしず、親爺は構ひつけず、眞黒けになつて獨りで働いて、ほんたうに感心な子だつちやありやしない。あの子があんたでなかつたら、お前さん、泣いてもおつかないんだよ、有りがたいとお思ひよ。」

「有りがてえ。」

「人を馬鹿にしてゐるよ。今に子罰が當るからさうお思ひ。」

「思つてらア・・・けれどおつかあ、さうだぜ、世の中つてものは、かうのんきにしてゐねえといけねえもんだぜ。俺象を列べて勝手なこと喋舌つてると、いろんなことすつかり忘れちやつて、から大變のんきなんだ。のんきに限らア。おつかあだつてのんきの方だぜ。」

「そりや私はのんきさ。のんきでなきやア、此の歳になつて、孫を相手に風船なんか賣つて生きてゐるもんかね。」

「さうだ、それで好いんだ。俺世間のことは何も知らねえけれど、おつかあ見てえに、風船賣つて、のんきにしてゐるのア一番だぜ。俺それが一番好いと思わ。」

「何が一番だい。呆れるよ、この人は。お前さんなんざア働き盛りで、何んでも出來るんぢやないか。こんな年寄りと同じやうなことしてゐて何うするの？　しつかりおしよ。」

「でもそれが好んだ。俺象を賣るのをやめたら駄目だ。何だか駄目なやうな氣がすらア。」

「馬鹿にしてるよ。餘ツぽど何うかしてゐるんだね、お前さんは。」

二人は、そんなことをいひながら、一つ露路を入つて、お互に向ひ同士の、破れ格子を引きあけて別れた。象やの粂さんは、薄暗い上り口から、すぐと階子段を上つた。

「おやお父さん・・・今夜早かつたのね。」薄暗い電燈の下で、鼻緒を手にしながら、十七八の、目のくるりとした、口元の締つた、粂さんの象のやうなのとは大分違つた、賢さうな顔付の娘が坐つてゐた。

「今日はから駄目だつた。何うも彼處は何時もいけねえ、何ういふもんだらう。それに、御向うのをばさんが、ポツ〳〵やつて來たつてえから、急いで仕舞つて來ちやつた。」親爺は術を解いて、縁のとれた小さい長火鉢の傍に胡坐をかいて、「もう大分寒くなつたな、これからは、吹き曝しは下さらねえな。」

「さうねえ。」娘はさういつて、一寸笑つて見

せながら、「飲んで?」

「済まねえなア。だがあるかい?」条さんは、子供が物をねだる時のやうな顔をした。

「あるのよ。」娘は立ち上つて、手早く支度をして、徳利を湯沸の中に差入れた。

「何うして有るのか知つてて?」娘は首をかしげて見せた。

「済まねえ〱。」親爺はむやみに恐縮して、「今日問屋へ行つたのか。」

「いんえ、さうぢやないの。」

『さうぢやねえ。ぢや何うしたんだ。』

「今日ね。」娘は焦らすやうに、「好いお話があるのよ。」

『何だい、好い話つて。何うせ碌なことぢやなからう。」親爺は、まだ出來る筈のない徳利を出しては觸つて見てゐる。

「好いお話なの。今しがた、あの新さんが來たの、お酒をお土産だつて持つて來てくれたのよ。」

「何、植木屋の新公か。何んでえ、何年にも俺のところへなんぞ來たこともねえ癖に、何うしたんでえ。其れに酒なんぞ持つて來やがつて、まさか毒は入つちやゐやしめえた。」そんなことを云ひながら、条さんは、待ち切れないやうに、徳利を出して一寸猪口に注いで、又湯沸へ返した。

『ひどいことといふのね、お父さんは。』娘はたしなめるやうに、「新さんは、大變好い植木屋さんになつてゐるのよ。田丸様つて伯爵とかだつて華族さんのお出入なんですとさ。……それで好いお話があるの。」

「何だつて? 田丸さんてえ華族さんのお出入だつて? 新公の奴は若えうちからおべんちやらがうまかつたから出世すらア。で好い話てえのは何なんだい。」

「その華族さんの別莊が澁谷とかにあつてね、それが大變に廣い〱、上野見たいに廣いんですとさ。そのお邸には、立派な御殿や西洋館があつて、それから動物園見たいに、孔雀だの鶴だのいろんなものが居て、御馬も澤山飼つてあつて、殿様や若様が皆でお乗りになつて、奥様まで御乗りになるのですつて。さうしたら今度、何とかいふ、私聽いたけど忘れちやつたわ、實業家がね、象をお邸へ獻上したんですとさ。」

「何、象?」条さんは、口に持つて行きかけた猪口を中途で止めて、小さい目を見開いた。

『えゝ象よ。』娘はつゞけた。『何でも若様達がふだんから、象に乗りたい、象に乗りたいつて云つたもんだから、その實業家が獻上したんですつて。華族さんなんて好いものね。そんなことをいふと、すぐ誰れか象を持つて來てくれるなんて。私華族さん、ほんとに好いと思つたわ。』

「その象が何うしたてんだい。」親爺はもどかしがつた。

『でね、その象の番人を探したけどないんですつて。印度から態々取り寄せたんで、誰れもまだ馴らしたものがないんですつて。それで新さんも頼まれてね、考へて見ると、お父さんが象やだつたので、こりやうまいと思つて、大變お父さんとこ探してやつと解つたんで、今夜お酒のお土産を持つて、今しがた來たのよ。お父さんの歸りが遅いつて云つたら、ぢやあしたの朝早く來るから何處へも行かずに待つてゐるやうにつて、歸つて行つたのよ。こんなに早いと思つたら、待つてて貰ふのだつたのに。』

『で何か、俺にその象の番人になつて、馴らしてくれつてんだな。』

「えゝ、お邸のお長屋へ入つてね、御給金も澤山出るんですつて。何んでもね、象を馴らす人なんか、滅多にないから、お父さんが來れば、御給金はいくらでも出すつて、お邸ではさう云つ

てゐるのですつて。いくらか知らないけど、何でも大變らしいのよ。新さんがさういつたわ、お父さんがたまけるほどの御給金だつて。お父さんは承知するだらうねつて新さんがいふから、私、それは承知しませうてつたわ。お父さん承知して？ するわねえ。」

「そいつアトツりきな話だ。象も、「善八」見てえに、あんな稼業さして日本中引張り廻して、たうとう殺したりしちや、もう俺眞平御免だが、お邸のならそんなこともあるめえ。」粂さんはさういつて暗い顔をした。

「善八」といふのは、粂さんが使つてゐた象の名である。粂さんは横濱で生れて、「濱の黑坊」で通つてゐた印度人の動物商に使はれてゐた經驗から、或る興行師が、其の印度人の手から買つた象について、その興行師の手で興行をして歩いてゐたのであつた。善八は其のころまだ生後二歳足らずの小象だつたので、粂さんは自分の子のやうにそれを育て上げて、十何年間、その象が小山のやうな大象になるまで、一日でもその象の傍を離れたことがなかつた。それは必ずしも粂さんの愛着ばかりでなく、子供のやうに粂さんに馴致んでゐた象は、一日位は兎に角、二日三日粂さんの姿を見ないと、氣が荒くなつて、無やみに吼え狂つて、外のものの手に終へないので、粂さんは、必要上何うしても、長く善八の傍を去ることが出來なかつたのである。けれども、粂さんも、自分の留守に善八が物を喰はないで暴れ狂つてゐる話を背から聽かされると、自分も、とても長く善八と離れてゐることは出來ないと思ふのであつた。

「善公、何んだつて俺の留守にそんなに暴れやがつた。」と粂さんが傍へ行つて怒鳴りつけると善八は、詫びるやうに首を下げて、垂れた鼻をブラン〳〵やつて、頻りにフウ〳〵と嬉しさうな息を吐くのである。

粂さんがその善八を引張つて、各地を興行して廻る際には、元より汽車には乘せられないのでズックで大きい蚊帳のやうなものを作つて、それをすつぽりと善八の身體に被せて、街道筋を歩かせるのであつた。善八は、鼻の先だけを幕の下から出して、巧みに方向を定めながら、のそ〳〵と往來を練つて行くのであつた。

或る歳、善八はさうして木曾街道を練つて行つた時に、雨後の崖壊れで軟かくなつた地盤を知らずに踏んで、數丈の崖から河原へころげ墜ちて、たうとう命を失つてしまつた。その際傍についてゐた粂さんも一緒に轉げ落ちたが、幸ひに土砂の上を辷つただけで、一時は氣絶したけれども、救けられて直ちに蘇生した。粂さんは、自分が息を吐き返すと直ぐに、善八のことを尋ねた。善八は岩に打たれて重傷を負うてゐると聽いて、粂さんは人に扶けられて、善八の倒れてゐる河原に下りて行つた。さうして、善八の頭にしがみつきながら、下唇を引抱へて、粂さんは聲を限りに善八の名を呼んだ。その聲を聽くと共に、善八は細い眼を開いて、悲慘な叫び聲を二聲三聲擧げたきりで、そのまゝ絶命してしまつた。粂さんは、善八に取りついたまゝ、「善八が死んだ、善八が死んだ。俺も死んでしまふ、俺も死んでしまふ。」と物狂はしげに叫んだ。それから數日の間、粂さんは殆んど失神の態で、たゞ時々、善八が死んだ、俺も死んでしまふ。」と繰り返すばかりなので、一同は嚴重に粂さんを監視してゐた。善八の遺骸は、その河原で火葬にして、山のやうな遺骨をそのまゝ河原に埋めて、一同はそこを引揚げたが、粂さんは、東京へ歸つてからも久しく興行師の世話で腦病院に入院してゐた。回復してからも、

条さんは口癖のやうに、「俺は死ぬ時には、あの河原へ身を投げて死ぬのだ。」と云つてゐた。

条さんは、その後いろ／＼の仕事を轉々して、結局象を賣る大道商人になつたのは、それから何年かの後のことであつた。条さんは何商賣をやつても善八が眼の先にちらついて、ちつとも氣乘りがしないので、すべて失敗に終つて、ひどく貧乏してしまつて、親子三人喰はず飲まずでウロ／＼してゐるやうな日も鮮くなかつた。

その頃、ふと往來で、条さんが横濱時代に出入した貿易商に逢つて、事情を聞かれて、その後の身の上を話すと、主人は氣の毒がつて、自分の店で扱つてゐる玩具の象を分けてくれて、条さんはそれを大道で賣ることになつたのであつた。

条さんは、玩具の象を賣るやうになつてから、ひどく商賣熱心になつて、雨の降らない限り、何處かへそれを賣りに出ない日はなかつた。さうして、それを臺の上に列べて、その前に坐つて、賣れても賣れなくても、何か一人で喋舌つてゐれば氣が濟むのであつた。その代り、自分の前に玩具の象のないところでは、条さんは、言葉を忘れてしまつたやうに、口を利くのを億劫がつて、酒でも飲つた時の外―― その時はまたよく喋舌つた、―― 話の受け答さへ頓珍漢なことが多かつた。

尤も善八の生きて居たころから、条さんは、そんな風だつた。条さんが面白さうに話をする相手は善八だけで、人間と話をするのは、条さんには難儀なことのやうに見えた。餌をやる時でも寝藁をかへてやる時でも、

「さあ善公、御馳走だぜ。なんて嬉しさうな面しやがるんで。それ涎が滴れら、見つともねえ。十日も喰はずに居たやうだな。だが圖體が大きいから饑じからう、辛抱してくれ、俺が悪いやうにアしねえから。」

そんなことをいふのは、雨でも續いたりして入りの悪かつた時は、食料の玄米の分量を減らされるので、条さんは苦心して、平日少しづつ誤魔かして取つて置いて、そんな時に足してやつたりすることをいふのであつた。

「さあ善公、蒲團が敷けたから寝なせえよ。好い株だなア。けど俺達はおめえのお蔭で、御まんまが喰べられるんだから、おめえに使はれるなァ仕方がねえや。今夜濟まねえけど、おめえと雑魚寝をさせて貰ふぜ。藁が新しいから、臭え蒲團よりいくら好いか知れねえ。眞ツ平御免よ。」

そんなことを云ひながら、条さんは、よく善八と一緒に藁の中に轉がつて寝るのであつた。仲間が、蔭で善八をいぢめたり、馬鹿にしたりしたのが条さんに知れたら、それこそことだつた。

「やい善公、おめえのお蔭で飯を喰つてゐる奴らに、あんなにされて、黙つて引つこんでゐる意氣地があるかい。なんだつてその鼻でヒッぱたいてやらねえんだ。人の善いにも程があら。おめえが恥を掻かされるなア俺が恥かかされるも同然だ。待つてゐねえ、仇を打つてやるから。」

条さんがさう云ひ出すと、相手は、条さんが象を使ふ商賣を小癪にかい込んで堪はれない先に、貧乏徳利と黒砂糖を持つて、条さんと善八に詫びに行かなければならなかつた。

その代り、善八が少し条さんの云ふ事でも聴かないで、満足に藝當をしなかつた時には、条さんは半日位善八を怒鳴り付けてゐるのであつた。

「大きな圖體しやがつて、大飯を喰やがつて、働くのが厭だア何の事た。手前のやうな奴だつて、人間を多勢喰はしてくれるからと思ふから、俺だつてブツとも云はねえで、手前に奉公してゐるんだ。働くのが厭で、毎日ぶら／＼遊ん

でゐてえなら勝手にしろい。俺はもう手前に奉公しねえから、さう思へ。人間が遊んでる獣に奉公するギムはねえんだ。俺達の命の親だと思ふから、大飯を喰はしてやつてゐるんだぞ。手前が忌だつてえなら、俺だつて忌だ。綺麗さつぱりと縁を切つてしまふ。その代り、明日から手前、人間の米を喰やがると承知しねえぞ。人間の爲めをしねえものが、人間の米を喰ふケンリはねえんだ。敲潰しだ殺してしまへ、といふ奴があつても、俺アもう助けてやつてくれとは云はねえからさう思へ。……』

そんな風なことを、のべつに善八にまくし立てるのである。善八を前にしての粂さんの雄辯は、丁度今、玩具の象を前に置くと、ペラ／＼出鱈目な口上が、口を突いて出るのと同じであつた。

『新さんの話ぢや、』娘は、粂さんに、話の續きを云つた。『その象てえのは、まだ小さいけれど、少し荒くつてね、檻から出した時に大へん暴れて、向うから附いて來た番人を大怪我さしたんですつて、それで今ぢやゆはいた切りで、遠くの方から桶に入れた食物を、棒の先で押してやつたりしてゐるんですつて。誰れも傍へよれないんだつていふのよ。お父さんなら大丈夫だけども、もう久しく象の世話もしたことないから、怪我でもされると私大變だつて、新さんに云つたのよ。お父さん何う？　大丈夫？』

『そりや俺たら大丈夫だ。萬公だつて、一生荒つぽかつたんだからな。動物園の象見てえになつちやつたんでも、俺なら馴らして見せる。そんな子供は屁でもねえや。』粂さんはチビリチビリやりながら、流石に得意の色を示した。

『それならいゝけれど。でも新さんはさう云つてよ。萬一怪我でもして片輪になつたら――お父さんなら、そんな事はないけれど――まあそんな目に逢つたら、一生樂に遊んで暮らして行けるやうな手當が、お邸から出るんですとさ。象一匹でも、隨分京けたお入費ぢやないつて、新さんがさう云つたわ。』

『さうかなア。ぢや何だな。俺が行けば、象を相手にして遊んでゐて、お給金を澤山貰つてゐられるつて譯だな。うめえな。明日新公が來たら、すぐでもお邸へ行つてやらう。玩具の奴よりも本物なら何んなに面白えか知れねえ。きい坊、俺も運勢が向いて來たんだぜ。』粂さんは、他愛のない顔をしてうまさうに飲んでゐる。

『嬉しいのね。私だつてさうなつたら、工場へ行かないで濟むかしら。私も何かお邸の御用でもしてゐれば好いでせうね。』

『さうだ。象も象だが、人間が第一だ。おめえだつて、さうなりアちつとは樂になるだらう。それだけでもお邸へ行くがものはあらア。……けど何か？　お邸ぢや、別にその象を興行師に貸してやる譯でもなし、見物人に見せて、藝當やらせて木戸錢取るんでもねんだな。』

『それはさうよ。華族さんがそんなことをする筈はないわ。』

『それぢや何んで象なんぞ飼つてゐるのだらう。』

『あらお父さん、いやだわ。だから私云つたぢやないの、若樣が象に乘りたいつて云つたものだから、誰れかが獻上したんだつて。耄碌したのね、お父さんは。』

『あゝさう／＼。若樣のおもちやだつけ。……けど訝しいなア。それならもうちつと玩具の象を買つてくれてもよささうなものだになア。』

『でも、大道で賣るにしちやあの象は高過ぎるつて、お向うのをばさんも云つててよ。だから賣れないんだわ。』

『高えたつて、象だもの。本物なら千兩もするんだ。當今ぢや中々そんなものぢやあるめえ。そいつを玩具にしてゐるものがあるんだから、三十錢や五十錢の象は高えことはねえや。』

「でも、それは大變な華族さんなんぢやないか。そんな人は世間にざらにあるもんかね。子供のおもちゃに三十錢も五十錢も出すな贅澤だわ。」

「だつて何千兩もする本物の象をおもちゃにするものさへあるんだ。三十錢や五十錢の……』

『お父さん又同じことを言つてるよ。だからお酒を飲むと、あたいお父さん忌だつていふのよ。』

粂さんが、田丸子爵の別莊――といつても、そこが實は本邸で、市内の邸は寧ろ先代の奥方の隱居所になつてゐるのであつた。――に引移つたのは、それから數日後のことであつた。

その翌日粂さんは、植木屋の新さんに連れられて、お邸に象を見に行つた。馬場の傍に、新しく建てられた洋風の洒落れた象の小舎は、先づ粂さんを驚かした。粂さんは、もうすぐと、そのことを象に話し出した。

『やい手前、こんな西洋館にへえりやがつて、我儘一杯にしてやがるたア太え奴だ。善公を見ろい。年中テント小屋に寢起をして、日本國中稼いで廻つて俺達を養つてくれたんだ。さうしてしめえに、崖から墜つこんで死んでしまつたんでえ。あゝあ、一遍でもこんな西洋館に入れてやりたかつたなア。』

粂さんは、さういつて、ポロ／＼涙をこぼした。象を馴らす名人が來たといふので、ゾロゾロ出て來て周圍を取りまいてゐた、殿樣や奥樣や若樣達を初め家令や召使の男女は、粂さんがそんなことをいつて泣き出したのを見て、驚くよりも可笑しがつて、腹を抱へて笑ふものもあつた。譯を知つてゐる植木屋の新さんは、寧ろ粂さんに同情したやうに、

「善公を思ひ出すのは無理はねえ、粂さん、善公の二代目だと思つて、此奴を可愛がつてやるが好いや。』

そんなことをいはれると、粂さんは堪へられなくなつて、手拭でごし／＼眼をこすつて、外聞もなく鼻を啜つてゐるばかりである。その眞面目さ加減は、笑ひながら見てゐた人達も、笑つたことを間を惡がつて、しんみりとした心持になつたやうな顏をする位であつた。

「新公濟まなかつた。俺はもう大分年を取つちやつたから意氣地がなくなつちやつた。』粂さんは、漸く涙を收めて、そんなことを云ひながら、小さい象に近づいて行つた。

何しろ、誰れも近よつて世話をするものもないので、折角の石疊の床も、糞尿で一杯で、象は太い足で、泥濘にゐるやうにそれをくちや／＼と捏ね返してゐた。

「ヤア大變だ。」それを見て、粂さんは顏をしかめて、「こんなことをして置くから象だつて機嫌が惡いんだ。赤坊がおしめを汚したまゝで置くと、ギャ／＼泣くのと同じだ。」

粂さんは、象を一遍馬場へ追ひ出すから、男衆が皆で小舎を掃除してくれといひ出した。居合はしたものは、そんなことされては大變だと騷いで、家令の老人は、それは所謂虎を野に放つが如きものだ、などと云つたけれども、粂さんは、まあ見てゐて下さいといつて、鳶口を手にして悠々と象の鼻の先へ歩み寄つた。

ブラン／＼と象は鼻を振つたので、粂さんは、今にもその鼻の先で刎ね飛ばされるかと、一同ヒヤリとしたが、意外にも、象はその鼻を高くあげて、ホールドアップを喰つた西洋人のやうな風を見せた。粂さんは、自分の身體を象に凭せかけて、その下の方へ差し出てゐる下脣を攫んだかと思ふと、象は、恐ろしい聲を立てて

リサーと叫んだ。取り卷いてゐた連中は、同じやうな聲を立てて逃げ出したが、粂さんは、そこでもう象の友達になつて、鼻先に突立つて、隱に入れた堅パンを出してやつてゐた。もう無いよ、と手を振つて見せると、象は鼻の尖を粂さんの懐に差し入れたので、一同は大笑ひだつた。

粂さんは象の後へ廻つて、太い杭に繋いである後足の綱を解いてやつた。象の身體が全く自由になつたので、取卷いてゐた連中は驚いて皆馬場の埒の外へ出てしまつた。久しい間、そこに結ひつけられてゐたので、象は自由になつても、動き出さうとはしなかつた。粂さんは、堅パンで象を誘つたけれども動かなかつた。頸の邊に卷いた綱を男達が大勢で引張つて見たけれども、大磐石で、ビクともしない。

すると粂さんは、男達を悉く埒の外へ出してしまつて、自分はシャツ一枚になつて、例の鳶口を持つて、象の後に廻つた。皆は、粂さんが何をするかと遠方から見てゐると、粂さんは、いきなり、その鳶口を大上段に振り上げて、エイとばかりに象の尻を目がけて打込んだ。それでも象がビクともしないのは一同を驚かしたが、粂さんが更に矢聲を上げて、二つ三つと打込むと、象は俄に恐ろしい叫び聲と共に小舍を飛び出して、そのまんまろい體軀を疾風の如くに走らせて、埒の外の見物まで聲を立てて逃げ惑ふのを追ひかけるやうに、馬場の埒の内をぐるりと一周して、小舍の前に立ち止つて荒い息を吐いてゐる。埒の、象の身體の觸れたところは、苧殼のやうに外の方へ折れ曲つてゐた。その時、何よりも皆を驚かしたのは、象の後に立つて鳶口を象の尻に打込んでゐた筈の粂さんが、荒れ狂ふ象の頸玉の綱に釣り下りながら象と一緒に馬場を一周したことであつた。フウ〳〵と息を吐いてゐる象の頸の下で、粂さんもフウ〳〵云つてゐた。

多時して、粂さんが象の頸の綱を採つて徐かに歩み出すと、象も、同じやうにのそ〳〵と歩き出した。一同は覺えず喝采した。それからもう、象は、若樣初め一同の友達になつて、埒の内から鼻を伸ばして、その人達の手から堅パンを貰つて喰べた。

で粂さんは、所謂魂げるやうな給金で、象の家庭教師——若樣がさう云つた——として、田丸子爵家の長屋に住むことになつたのであつた。

粂さんは、この象に「善八」といふ名をつけることを子爵家に願はうかとも思つたが、善八の最期のことを考へて、此の象の爲めに、それはやめて、元から付いてゐたゴルコンダといふ名の頭だけ云つて、ゴルさんと呼んでゐた。さんといふのは、善八のやうに興行師の持物ではなく、華族樣の持物といふので、敬意を拂つた譯であつた。

ゴルさんのお守役となつて、子爵家に入つた粂さんには、自分の生活も周圍の生活も、皆粂さんを面喰はせるやうなものばかりだつた。

第一自分の月給の百圓といふのが、粂さんには最初の驚きであつた。善八を連れて歩いてゐた頃は、給料といつては月二十五圓で、たゞそれに木戸の步合がつくが、これは甚だ不定で、ひどく景氣が好ければ百圓位になることもあるが、それは寧ろ稀れで、大抵はその半分にもならなかつた。而も粂さんは、步合ならば、百圓が二百圓でも、もと〳〵木戸がそれだけ入るのを、約束通り分けて貰ふのだから、誰れのお情をうけてゐる氣もしなかつた。象のお守をするのに百圓も呉れるのは、何ういふ勘定なのだか、粂さんには分らなかつた。で娘のきいちやんを捉へて、さういつた。

『だつておめえ驚いちやあぢやねえか。象のお

守に百圓も呉れるのは大變なことだつと思つたら、何おめえ、それどこぢやねえんだぜ、自動車の運轉手だつてその位貰つてゐるんだとよ。それからおめえ、今は居ねえさうだが、犬ころのお醫者が居たんだが、それはおめえ驚いちやいけねえぜ、月三百兩だつてえぢやねえか。尤もその犬てえのが千兩からするんだつてんだ。新公の奴時々殿様の鐵砲のお伴をするんだてえが、その時殿様やお附きのものが持つて行くものだけで、一萬兩からの金目のものだてえから驚かア。第一、鐵砲が、何とかいふ奴で一挺千五百兩てえのを何人かで一つ宛持つて行くから、それだけでぢき五千圓位にならア。それに犬が千兩よ。洋服がおめえ、鞣皮の洋服だつてえぢやねえか。これもぐづ／＼すりや千兩だとよ。まるで夢見てえな話だ。せえから自動車てえものは、俺今まで、そんなたいしたものたア知らなかつたが、殿様の乘つてるのは一萬六千兩だてえぜ。それで日本一てえ譯でもねえんだとさ。馬だつて矢張り一萬兩。いやになつちまはア、一萬兩がそこら中にごろ／＼轉がつてゐやがら。俺アつく／＼いやになつちやつたア。」

けれども粂さんは、ゴルコンダのお守をしてゐると、そんなことは皆忘れてしまふらしかつた。粂さんは、若様達をゴルさんの背中に乘せる外に、ゴルさんに、前足をあげてチン／＼することや、片足をあけて招き猫の眞似をすることや、前足を折つてお辭儀をすることや、碁盤乘りと稱して、四角な石の上へ乘つてグル／＼廻ることや、鼻で喇叭を吹くことや、オイチニの號令で足踏をすることや、いろ／＼のことを教へ込んで、晝の間はまるで家に居なかつた。

娘のきいちやんは、工場へは行かず、内職はせず、暇な身體を持ち扱つたが、御殿からの言ひ附けで、晝の間、お臺所を働くことになつた。で親子二人は、夜になるとお互に見たり聽いたりした外國の生活のやうな御殿の生活を話し合つた。きいちやんは目を丸くしてこんなことを云つた。

「ねお父さん、あたい今日、お奥が皆お留守だつたので、お掃除番にくつついて、御殿をすつかり拜見したのよ。その立派なことつたら、まるでお芝居の御殿のやうよ。お廊下がずつとあつて、廣い／＼お座敷が澤山列んでゐて、誰れも居ないのよ。疊がつる／＼して、あたい駈け出したら滑つてころんぢやつたわ。それから、西洋館の方たらないのよ。大きな油繪がいくつかあつて、そこに絨氈がキラ／＼して、けれど道具屋へ行つたやうにいろんなものが列べてあつたわ。せえからちよいと／＼お[illegible]、お寢間を拜見したわ。そこら中に立派な[illegible]がかかつてゐて、大きい寢臺があつて、それがすつかり幕で隱れるやうになつてゐるの、せえから、殿様と奥方とそこへお入りになると、お部屋の内から鍵をかけてしまふんだつて、ホヽヽヽ、訝しいわね。」

「へツへツへ。うまくやつてやがら。」粂さんは、例によつてチビリ／＼やりながらそんなことをいつた。

粂さんは粂さんで、自分が新公につれられて、お庭を拜見したことをきい坊に話して聽かせるのであつた。

「何だつておめえ、山があつたり、谷があつたり、森があつたり、物凄い八幡知らず見てえなとこがあるかと思や、綺麗な芝生になつてゐて、好い見晴しがあるんだ。立派な石橋が懸つてゐるかと思やア壞れかゝつた田舍の土橋のやうなのが、滿更見てえなとこにかゝつてゐるんだ。さうかと思やアお池の中へ八ツ橋が懸つてゐて、藤棚があつて、風流つて奴なんだらうな、あれが。せえからおめえ、さつきの芝生のとこに、

土藏の拔け殼見てえな、眞白い變挺なものがあるんだぜ。これやア何だつて聽いたら、それがおめえ、野天で芝居をする舞臺だつてえぢやねえか。その芝居てえのを新公は見たんだつてえが、なんでも若い別嬪が、紗のやうな着物を着て、身體を丸出しにして、大勢でひつからんで踊るんだつてえぜ。たまらねえてやがら。そいつ一つ見てやりてえもんだな。昔大名が、御殿女中に裸踊をさせて涎を滴して見物したつてえが、そいつを西洋で行くんだな。けど、野天だつてえから、こいつの方が豪えや。何しろ豪的なもんだ。好い株だなア。年中そんなことして、仕てえ三昧してゐたらたまるめえな。三日でも好いからやらして貰えてえな。あゝあ、俺何だか變挺になつちやつた。』粂さんは、何かいふと、屹度しまひにそんな嘆聲を發するのだが、根つから厭になつたらしくもなく、うまさうに尖つた口を猪口に持つて行くのであつた。

きいちやんは、そんなこともいつた。『何處とかの新華族たらの殿樣なんぞは、御自分の御殿の御臺所へお出ましになつたことはないなんて方があるてえけど、こちらの御殿樣は、奥方と御一緒に、時々御臺所へおいでになつて、やれ流しがこれぢやいけないの、御戸棚の工合を斯うするので、大工に御指圖するんですつて。その度、又御模樣代へで勝手がわからなくなるつて皆困るんですとさ。今日は、女學校の生徒だつてのが、大勢で來て御臺所拜見ですつて、ワイ〳〵云つて、それア大騷ぎだつたわ。奥樣がお出ましで、長い間そつちを開けたり、こつちを揚げたりして、皆に御話してゐたわ。道理で、今朝から總掛りで、入物を始末したり、いろ〳〵な食物をそつちへ置いたり、此方へ置いたりしてゐるから、何が始まるのだと思つたら、女學生が、見に來るんでその御支度だつたんだわ。何んだつて華族さんの御臺所なんか拜見に來るんだらう。』

『そりやおめえ、華族さんの御臺所は大きなもんで、いろんな御馳走が澤山仕舞つてあるから、拜見するんだあな。おめえが殿樣のお寢間を拜見に行くやうなものだ。そこが下々だ。そんなもの見たつて、何うにもなりやしねえんだが、矢つぱり見てえんだ。下等社會てものは淺ましいもんよ。』と粂さんは、矢張り嘆聲を發するのであつた。

そんな風で二三月たつた頃のことであつた。或る晩、きい坊は粂さんに、こんなことをいひ出した。

『私ね、御殿の奥女中の隊長の、あのほら、よく象を見に來る肥つた御婆さんね、あの人が、私に、貞守樣の御邸へお小間使に行かないかつていふのよ。行儀見習つてんですつて。さうして何年か辛抱すると、お花だの、お茶だのを教へていたゞけるのですつて。』

『貞守樣てえ何だ。』粂さんは、嬉しさうに、さういふきい坊の顏をじろ〳〵見ながらいつた。

『貞守樣つて、御殿樣のずつと末の弟さんなのよ。何度も象を見にいらしつたぢやありませんか。』

『おめえ此頃いやに言葉が丁寧になつたなア。矢張り御殿へ上つてゐると、人間らしくなるのかなア。』粂さんは、つけもなく、そんなことを云つた。

『あれ言葉なんかどうでも好いのよ。それより、貞守樣のお邸へ上つちやいけない?』

『貞守樣つてえのは、馬に乘つてよくふざけるあの人か。』

『えゝ、立派な若樣よ。でもまるで書生さんね。』

『書生さんて云や、此方の大將だつて、まるで書生つぽぢやねえか。奥方だつて、女書生に

毛の生えたやうなもんだ。あんな風をして、何うしてこんな立派な御殿やお庭がいるんだらうな。昔の大名なら『下に居ろ』で道中を練つて歩いてゐるんだから、御殿もいるだらうが、今の華族なんざア書生つぽだもの、こんな大きい屋臺骨を抱え込むことたんざア入りやしねえんだ。何だか可笑しいや。』

『そんなこと何うでも好いぢやないの。それより私貞守様のお邸へ上るわ。』きいちやんは、頻りに貞守様を主張した。

『それやおめえが行きたけれア、行くが好いや。家にゐて、毎晩、親爺の酔つぱらつた面ばかり見物してゐたつて面白いことはあるめえ。行きなせえ。貞守様でも、笠森様へでも行きなせえ。』

粂さんは、別段不機嫌といふ風でもなく、皮肉らしいことを云つた。

『あれお父さん、そんな譯ぢやないのよ。私だつてちつたア行儀も覺えたいし、何か稽古位したいぢやないか。工場へ出たり、内職ばかりしてゐたんだもの、學校だつて碌に行きアしないから、御殿へ上つたつて、肩身が狭くつて、泣きたくなるわ。』きい坊はそんなことを云つて、少しはツンとして見せた。

『エヘツヘ。御殿へ上つたと思つて、大分氣位が高くなつたな、さうして何か、華族さんの御聟さんでも貰はうつてのかい。』粂さん自身も柄にない戯談をいつてゐる。

『馬鹿におしでないよ、お父さんは。そんなこといふんなら私、お父さんに構はず行つてしまつてやるから好い。』

『ま、まつて呉れよ。お父さん、てめえに行かれちやふとちよと困るなア。』

『何だい。今まで散々人を困らして置いて、今になつて、俺が困るつてないもんだ。』きい坊の氣焔は中々強い。

『だからよ。今になつたから困るんだ。俺は一人ぼつちは、馴れつこになつてるけれど、此頃は、何だか、年の故か、一人ぼつちが淋しくつていけねえ。』

『ゴルさんがゐるぢやないか。お父さんは象の顔さへ見てゐればいゝんぢやないか。』

『ところがいけねえ。』粂さんは、酔つてもゐるが、酔つたよりも、外の心持でそれをいつてゐるやうであつた。

『何うもゴルさんは、善公見てえにいかねえ。』

『何うしたのさ。』ときい坊も少し意外のやうに目を見張つた。

『何だ、俺は善公に藝當をさして歩いてゐた時分にア何んだかかう、善公と俺とで皆を征伐してゐるやうな氣がして、善公と俺と居さへすりや、何處を轉がつて歩いたつて、皆がお賽錢を上げて俺達を拜んでやがると思つてゐたんだ。だつて、さうだつた。善公と俺とは、何處の何奴にも、頭を下げて金を貰つて居たんぢやねえんだ。見てえ奴は見ろ、見たくねえ奴は見るなつて威張つても、皆見に來たんだ。そればかりぢやねえや。善公だつて俺だつて、同勢を皆喰はしてやつてたんだ。俺達二人は隊長だ。指でもさす奴があれば唯措かなかつたんだ。だから善公だつて、皆が『太夫さん/\』と立てゝゐて、御機嫌でも悪いとお世辭を使つたもんだ。善公と俺は夫婦の王様だつたんだ。その善公が死んぢやつたんでえ。』粂さんは久しぶりで又善八の死を追想して、ポロ/\涙をこぼした。

『お父さん、もうおよしよ。お父さんは善公のことを云ひ出すと、屹度泣くんだもの。ゴルさんが居るからいゝぢやないか。二代目善八が出來たつて云つて、お父さん喜んでゐたぢやないか。』

『うん、もうよさう。』粂さんは、水洟をすゝつて、『けれどな、きい坊、ゴルさんぢやいけねえんだ。何うしても駄目だ。俺はもうつく/\い

やにこつちやつた。百兩は惜しいけど、俺もう象やは廢めたくなつちやつた。』

『何うしてさ。』ときい坊も多少不安な顏をした。

『だつてさうぢやねえか。善公と俺は王樣の夫婦だつたんだ。誰れにだつて頭を下げて、幇間見てえなことはしやしなかつたんだ。俺のすることを見せてやるつて、威張つてゐたんだ。』

『そりや解つたよ、お父さん。ゴルさんが何故いけないんだつて訊いてるんぢやないか。』きい坊はもどかしがつた。

『ゴルさんはおめえ、あんな小さな餓鬼に玩弄にされて、おんぶしたり、御辭儀をしたり、意氣地がねえんだ。さうしなければ飯を喰はされねえから仕方がねえや。』

『そりや善八だつて同じぢやないか。』

『違はい！ 善公は俺の間夫なんだ。俺と一緒なら、嬉しかつて何でもしたんだ。それだから、俺が厭だつて云へば善公だつて厭だつて云つたア。善公がいやな時にア、俺だつていやだつた。二人で厭だつて云つたら、皆閉口しちやつたんだ。御酒だの御砂糖だの持つて御願ひに來やがつた。俺よく善公がふてると人間の役しねえ奴は死んぢまへて呶鳴つてやつたけど、馬鹿にされたり、强引で來られたりすりや、誰れがすなほに働いてやるもんか。働かねえで困るつてなら、ちやんと道を立てて來いつて云つてやるんだ。』爺さんはもう猪口を忘れてしまつて、水洟をすゝりながら續けた。『ゴルさんは駄目だ。そんなこといつて威張つたつて誰れも困らねえ、あんな餓鬼つ……』

『お父さん、若樣のこと―餓鬼々々。』つて何だねえ。人に聽かれでもしたら大變ぢやないか。』きい坊は隣を氣にして遮つた。

『何でえ、若樣だつて、餓鬼は餓鬼だ。……あんな餓鬼にヘイコラしねえぢや飯が喰へねえんだ……俺だつてさうだ。ゴルさんと一緒になつて、チン〳〵したりお辭儀したりしてゐるんだ。全體あんな大きな圖體したゴルさんが――俺だつてさうだ。これでも一人前の人間だ――そいつが二人揃つて、あんな餓鬼の前で、チンチンしたりお廻りしたりして、堅パンの一つや半分貰つて喜んでゐるたア何の事たい。あの餓鬼共は何のケンリで俺達にそんな眞似をさせやがるんだ、餓鬼の癖に、三千兩もする象を玩弄にしやがつて、世間の子供は、俺の賣つてた五十錢の象だつて、高えの安いのつて、買つて貰えねえでゐるんだ。第一親爺の奴が間違つてら、鳥屋へ行つて、一兩も出せばウンと來る鳥を取るのに、千兩の犬だの、二千兩の鐵砲だのつて、何の眞似だ。裸跣をする土藏なんぞオッ建てやがつて、いゝ年をしやがつて、ちつとは考へろ。親爺がそんな量見だから、餓鬼が増長するんだ。ゴルさんの頭玉に乘りやがつて、俺の頭を靴で蹴るのを自慢してゐやがら。俺善公と歩いてゐて、そんな眞似をされたら唯は置かねえんだ。今だつて百兩貰つてなけれア引きずり下ろして蹴飛ばしてやるんだ。俺初め百兩なんて貰ふな大變だと思つたら、何だ彼奴等、犬の醫者に三百圓もやつてやがるんだ。俺は、嬶が死ぬ時だつて、碌そつぽ醫者にも見せられやしなかつたぞ。俺の嬶は犬ぢやねえ、人間だぞ。人間を見殺しにしやがつて、犬が風を引いたつて、三百兩だ。……』

きい坊は、爺さんが、今まで醉つて管を巻いても、これほど理窟をいふのを聽いたことはなかつた。爺さんは、巡業中に、善八と自分とが仲間に馬鹿にされた時には、何時も醉つぱらつて呶鳴り出して皆を弱らせたのだが、きい坊はそれを知らなかつた。だから、お父さんがこんな風に呶鳴るのを初めて聽いて、恐ろしくなつた。壁一重の隣の馬丁の家へ聽えても大變だつ

た。で一生懸命に遮つたが、中々默らなかつた。

「お父さん、もうおよしつてば。後生だからよしておくれよ、お父さん。そんなことといつてると、私何處へか行つてしまふから好いや。」

「え丶行つちまへ〳〵。貞守様でも何處へでも行きやがれ。俺も行つてしまはい。誰れがこんなとこにゐるもんか。」

きい坊はしく〳〵泣き出した。彼女は、蒼くなつて呶鳴つてゐるお父さんの様子を見て、全く恐ろしくなつたのだらう。さうして、又工場へ通つたり内職をしたりしなければならないことを考へて悲しくなつたのであらう。

「何を泣いてやがるんで。おめえは貞守様へ行けば好いんぢやねえか。だから行きねえつてんだ。俺一人は、何處を轉がつて歩いてたつて濟まア。」

「おい粂さん、大分御機嫌だね。」さういつて入つて來たのは、植木屋の新さんであつた。障子をあけて、其の場の様子を呑み込めないで、變な顔をして突立つてゐる。

「何だ、新公か。え丶いけねえ〳〵。入つて來ちやいけねえ。」粂さんは、無暗と手を振つた。

『入つちやいけねえつて？ 何うしたんだい、粂さん。大分御神酒が廻つてゐるね。おや、きいちやん、泣いてるのかい。何うしたんだい。」新さんはつぎ穂のないやうな顔をしてそこへ坐つた。

「え丶、出て行きなせえつてことよ。此處はおめえ達の來るところぢやねえ。出なせえ〳〵。」

粂さんは、執念くさういつて、首を振つた。

『何うしたつてんだよ、粂さん。まあ落付いて話をしたつて好いぢやねえか。何うだい一つ猪口を貰はうか。」

「何を云つてやがるんで、おめえらに猪口をやるやうな惡い事をした覺えはねえ。」

「こいつは嚴しいな。だが久しぶりで昔の粂さんに逢つたやうな氣がするね。十年前には、それで隨分皆を困らしたもんだぜ。」

「餘計な御世話だ。もういゝから歸んなせえ。」

「何うも困つたね。……きいちやん、一體、何うしたんだい。」

きいちやんは、自分が貞守様に行けと勸められてゐることをお父さんに一寸話したのが始まりで、こんなことになつたことをいつて、

「お父さんは、もう直ぐにお邸を出るつて云ふのだもの、私いやになつちやつたわ。……』

『さうよ、おめえが貞守様へ行けば、俺はお邸を出るのは當り前だ。」粂さんはいつた。

『粂さん何故かい？ きいちやんが貞守様へ行くのが、おめえ不服なのかい？」新公はきいた。

「餘計なこといふない。不服だらうが感服だらうがおめえに用はねえ。」

「さうぢやねえ、大ありなんだ。實は今日もそのことで貞守様からお話があつて、おきくを小間使に使ひたいから、お前一寸、親爺のところへ行つて相談して來てくれ、當人は來るやうなことを云つてたさうだからつてお話だつたから、畏りました、今晩早速行つて話して見ませうつてやつて來た譯なんだ。」

『何だと。」粂さんは恐ろしい權幕で新公を睨みつけて、「そーれ見ろ、俺の推量通りだ。やい新公、てめえ、きい坊を貞守の邸へ、妾奉公に出す相談に來やがつたな。」

「馬、馬鹿云つちやいけねえ。」新さんは身體が一尺位横へ揺れたほど面喰つて、「そ、そんなことはあるもんか。唯の小間使だよ。そんなこと云つちや困る……」

「嘘をつけ。」粂さんはせゝら笑つて、「華族の若殿が、自分で小間使の心配をする奴があるかい。妾奉公に出せつてに違えねえ。」

「アッハッハッハッハ。」と新さんは唇を舐め

るやうに首を下げて笑つた。「おめえは當世を知らねえからそんな事云つてるんだ。今時の華族さんは、そんなものぢやねえよ。自分で、小間使どころか茶漬の指圖までしるつが當世なんだ。」

『何んでも好いからいけねえ。てめえは、昔からそんなことをして方々のお邸へ首を突込んでゐやがつたんだ。さうでなくつたつて、手前が面を出しやさうに定まつてら、歸れ〳〵。」

『困つたなア、何うしてもいけねえや。ぢやきいちやん、今夜はあつしは歸るからね。明日お父さんが歸つて來ねえ時に能く話さう。ぢや粂さん、まあ大人しく寢てしまひなせえ。きいちやんが可哀さうだ。』

『さつさと歸れ。寢るにてめえの世話になるかい。』

『こいつは違えねえ。アッハッハ、ぢやきいちやんお休み。』

翌る朝の粂さんは昨夜のことはすつかり忘れてしまつたやうに、早くから汚い洋服を着てゴルさんの世話をしてゐた。一仕事濟まして、小舍の前のベンチに腰をかけて日なたぼつこをしてゐると、新さんが仕事の裝でやつてきた。

『粂さんお早う。昨夜は大分御機嫌だつたぜ。』云つて粂さんと並んで腰かけた。

「さうだつたな。何うもよく覺えねえが、何んでも、おめえに「歸れ〳〵。」て云つたな覺えてら。」

「さうだらう。そればかり云つてたんだもの。時にきいちやんの一件だが、おめえやつぱり不服なんかい。」

『きい坊の一件て、貞守樣へ行くて事か。』

「さうよ。お前も一人になつて不自由だらうが百兩がとこ取つて居りや、産婆さんの一人やそこら置くに世話はねえや。もしなんならもうちつと若い調法のも置けるぜ。アッハッハ。」

「人を馬鹿にしてやがら、頭を見てくれ、頭を。そんなことは三十年も前の話だ。」粂さんは上機嫌で應對してゐる。

『三十年たア大きく出たな。もつと近所で、つい此間まで隨分話の種をこしらへてた癖に。アッハッハ。』

「よしてくれ、冗談ぢやねえ。ゴルさんが笑つてら。」

「そんなこと何うでも好いが、そのきいちやんの一件だぜ。好からう、何うだい。」

『そりや何俺のとこは何うでも好いんだ。けど俺アあんな生白い殿樣のとこへ小間使なんかにやるのア何んだか蟲が好かねえんだ。」

『生白くつたつて、眞黒けだつて、殿樣は殿樣だ。何でも好いや、きいちやんも乘氣になつてるんだから、さうしなせえ。惡い事はいはねえ。それに小間使てえものは中々給金もいゝんだぜ。』

「さうか、幾何位なんだ。相場は。」

「相場つて、別にあるめえが、貞守樣のとこへきいちやんが行けば、三十兩でも五十兩でも、話のしやうで、何うでもなら。」

「五十兩!」粂さんは、目を丸くして、『何でえ、それア小間使でか?」

「まあよ、小間使にも、いろ〳〵あるてもんだ。象の御守をしたつて百兩になるんぢやねえか。殿樣のお守をして五十兩ぢや安過ぎら。」

「ハッハッハ。」粂さんは、案外に上機嫌で、「おめえは、昔からそんなことばかりやつてるやうだが、きい坊のは、全くそれぢやあるめえな。」

『フッフ。』新さんは、變に笑つて、「粂さん、『歸れ歸れ。』て呶鳴らねえかい。」

「何云つてやがるんで。」粂さんは苦笑ひをして、「それの話か。」

『實は、それの話でなくちやねえんだ。』新さんは瀨ぶみをするやうに、「貞守樣は、奧方が病氣で、此の春から鎌倉へ行つてなさるんだ。肺だつてえからまあずつとあつちに居据りだらう。それで實は、きいちやんが、御殿で働いてゐるの、を貞守樣が、目をつけなすつたて譯だ。お邸にも隨分若いのが居るけれど、こゝはそれ、奧方が女學校仕込みと來てゐるんで、若いのも皆妙にツンとしたんだの、いやにちやら／＼するのだの、面白くねえのを揃へたてもんだ。きいちやんはそこへ行くと、生意氣けはなし、さつぱりはしてゐるし、条さんの前だが、きりやうだつて十人並はぬけてゐら、ほんたうだ、俺は二三年見ねえうちに、見違えちやつた。此間の晩家へ行つて、何うも迸やしねえかと思つた。あんたに別嬪ぢやなかつた筈だ。アツハツハ。』

「ウツフ。」条さんは、人の好ささうな顏をして笑つた。

「それで何うだい、一層初めから先方の思惑通りイエスとやつたら……おつと「歸れ／＼。」は御免だぜ。』

『いけねえ／＼。』条さんは、首を振つて、「おめえも隨分氣の利かねえ男だな。これがおめえ、俺が「象をお召し下せえ。」てやつてた時分なら、何しろ親子二人、燒芋で凌いでゐたことが、いくらあつたか知れねえんだから、そんな話でもあつたら、俺も背に腹は代えられねえ、そんなことを承知したかも知れねえが、今はおめえ、俺はこれでも百兩の月給取りだぜ。それが娘を妾奉公に出したつてちや、世間に濟むめえぢやねえか。駄目だ、そんな話は。』

「それもさうだ。」新さんは案外すなほに、「それに違えねえけど、まあさういつて見れば、百兩の月給をおめえに吳れてる殿樣だ、きいちやんを所望なんだぜ。だから否とでもいつたら、まづい事に爲るかも知れねえよ。』

「馬鹿いひなせえ。如何に華族だらうが殿樣だらうが、娘を妾に出さねえからつて、親爺を首にするなんてそんな亂暴な話はあるもんぢやねえ。』

「ところが、困つたことがあるんだ、条さん。』新さんは、眞個に弱つたやうに、『おめえ、昨夜飛んでもねえ失敗りをやつちやつたぜ。』

「何うしたんだ。』条さんは、驚いて目を丸くした。

『何うしたつておめえ、隣の馬丁の奴に皆聽かれちやつたんだ。おめえが、若樣のことを餓鬼だの殿樣を色氣違ひだの、飛んでもねえことを呶鳴つたのを。』

『ト、そんなことを云つた覺えはねえぜ。』誰れが、そんな事云つてた。』条さんは、呆れたやうな顏をしてゐる。

『だからおめえ酒を飮んぢやいけねえつてんだ。馬丁の奴すつかり聽いちやつたんだから、おめえ云はねえたつて駄目だ。若樣を餓鬼は仕方がねえが、あの何でもねえ殿樣を色氣違ひとは何うこつたい。ひでえことを云ふにも程があるぜ。』

『俺、若樣を餓鬼たア云つたやうな氣がするが、殿樣を色氣違ひなんて云つた覺えは、何うしてもねえぞ。馬丁め、何んだつてそんなこしれえ事いやがつたんだ。あの野郎唯置かねえからさう思へ。』条さんは、「象やの条さん」の本性を現して、いきり立つた。

「おい／＼条さん、そんな大きな聲出しちやいけねえ。ちつとはおまけもあるだらうが、何しろ根のねえこつちやねえんだから始末にいけねえ。すつかり三太夫に內通してしまつてやがるんだから、荒立てちや却つて此方が破滅だ。まあ、あんまり象の評判が好いんで、馬が燒もちを燒いたんだと思ひなせえ。アツハツハ。』

『笑ひごつちやねえ。あの野郎何うするか見や

がれ。』
『まあ待ちなせえ。もう一遍坐りなせえ。』と新さんは、立上つた粂さんを無理に引据ゑて、『何しろ奥へ知れた日にやことだ。三太夫め、忠義ぶつて、碌なことはしねえに定つてら、此頃は、象に徐々要る／＼つて云つてやがるから、好い汐にして、おめえをお拂ひ箱にしねえとも限らねえ。おめえも、その年になつて、何時まで、ゴムの象を列べて喋舌つても居られめえ。さうなつたら、きいちやんが第一可哀想だ。又工場通ひで、夜は夜つぴて鼻緒と首つぴきぢや浮ぶ瀬はねえや、考へて見なせえ。うめえ分別でもあるかい、え、粂さん。』
粂さんはぼんやり考へ込んでしまつた。今更象を並べて喋舌つて見ても、親子二人は愚か、自分一人の口糊も六つかしいのは知れたことである、さうかといつて、若公の夢から何うしても醒め切れない粂さんに、象を離れて生活することが出來るか何うか自分にもわからなかつた。少くとも、何かの象によつて生活する外に途はなかつた。その外の途を取る氣にもなれなかつた。
『ひどく考へたつたな。思案があるかい。』
新さんは催促するやうにいつた。

いくら催促されても粂さんには手も足も出なかつた。ゴルさんには未練はないにしても――子供の玩弄になつてゐるゴルさんのお守は、粂さんには不愉快な仕事に違ひないけれども――それをやめられた時に、もつと好い仕事があるとは思へなかつた。好い仕事どころか、善いにも惡いにも、この頃の寒空に、玩具の象を列べて吹き曝しの中で夜つぴて立ち通す仕事の外には何もなかつた。同じ玩具の象でも、ゴルさんの方は、粂さんに月百圓の收入を與へてくれる點で、ゴムや眞綿の象とは比べものにならなかつた。心から忌だと思ひ出した今の仕事が、急に、何よりも獲難い、善い仕事のやうに思はれた。
『粂さん、さう考へ込んでしまつちやいけねえ。』新さんは、親切らしく、『おめえは正直だから、うつかり話が出來やしねえ。首のことは心配は入らねえんだ。三太夫を取つちめるには、いゝ法があるんだ。貞守様に御頼みして、一寸御聲がかりがあれば、三公いくらジタバタしたつて駄目なんだ。彼奴貞守様に睾丸を握られてゐやがるんだから。それだから粂さん、きいちやんの一件を、寧そのこと、貞守様の思召通り、オーライとくりや何んのことはなく濟むんだぜ、さうしなせえ。え粂さん。』
『いけねえ／＼。』粂さんは無上に頸をふつて、『俺ア歳を取つたつて、自分の頸をつなぎてえばつかりに、娘をそんな目に遭はしたつて云はれちや男が立たねえ。俺はなんぼ意氣地なしだつて、そんな眞似は出來ねえ。』
『まあ、さう固いことをいふには當らねえ。當世は、そんなものぢやねえぜ。それにおめえは、きいちやんをそんな目に遭はせるなんていふけれど、きいちやんがそれを好いてら何うする。』
『馬鹿抜かせ。』粂さんは、何うやら白面で昨夜の勢を盛り返しさうに見えた。『俺の餓鬼は、野倒れ死したつて、そんなさもしい根性は起しやしねえぞ。』
『アッハッハ。』新さんは昨夜のやうに閉口はしないで、事もなげに笑つて、『いけねえよ粂さん、おめえ根つからきいちやんのことなんか構ひつけもしねえで、俺の餓鬼も人の餓鬼もあつたものぢやねえ。』
『だつて、俺だつて自分が野倒れ死をしかければ、餓鬼だつて思ふやうに構へねえのは當り前ぢやねえか。』粂さんは、もう幾何かタジ／＼の氣味となつた。
『だから、いけねえつてんだ。おめえが構ひた

くも構へねえたア察してら。けど構はなかつたにア違えねえんだ。今更きいちやんが何をしたつて、おめえが小言をいふ權利はありやしねえ。」

『それアさうだけど、俺アきい坊の親爺だ、勝手な眞似はさせねえぞ。』

「まあ、いくら親爺だつて、さう力んでゐるばかりが能ぢやねえ。實は何だぜ。』新さんは、物々しげに、四方へ眼を配つて、いやに聲を低くして、『貞守様ときいちやんは、當人同士もう出來てるらしいんだぜ。』

『えゝ。』と粂さんは、飛び上るほど驚いて、『そりや眞個か。え、新公、出鱈目をいふと聽かねえぞ。』

「そんなに驚くことはねえやな。」新公にいやに落着いて、「惡い話ぢやねえぜ。象やの娘が殿様を射止めるなんざ、大手柄てもんだ。』

「馬鹿にしちやいけねえ。』粂さんは、息をはずまして居る。

『おい／＼。眞個に落着いて考えて見なせえよ。これこそおめえの運勢が向いて來たんだ。嘘でも出鱈目でもねえ。先月だつけが、奥が皆御留守の時に、貞守様ときいちやんが、殿様のお寢間へ入つて中から鍵をかけたのを、出る時にお掃除番の女中が見つけちやつたんだ。貞守様は、ちやんとその女中に口留料をやつたんだけれど、天知る地知るだ。この新さんはちやんと御承知なんだから惡いことは出來ねえ——おつと、惡い事ぢやなかつたつけ、つい口が滑つた。」

粂さんは、目をぱちくりさせて、舌がひきつつたやうに口をわく／＼させた。



南禪寺の門はあんな堂々たる門でありながら私に反感を起させなかつたのは妙だつた。然し考へて見ると、私は南禪寺には本堂がないやうな氣がしてゐる。つまりあの門は私には門でなくて本堂なのだ。石川五右衛門の利用したといふ話なども、幾分私の反感を柔げたかも知れない。

南禪寺の前の瓢亭といふ料理屋には門がなくて、繩暖簾でもないが、變な淺黄の暖簾のかかつた門口から入つて行くので、私の氣に入つた。父が三十年程前に、そこへ入つたことがあるといふので、私は父と二人で初めてその暖簾をくゞつた。入口の原始的なのに引代へて、中は頗る當世的で、外面だけ書齋の感じがしたが、それでも入口が愉快な丈け得だつた。義理か交際かでなければ、生れてから料理店といふものに、自主的に行つたことのない私も、京都で晩飯を喰ふ必要のあつた時に、一二度こゝだけへは入つたけれども、矢張り愉快でもなんでもないことは、外の料理屋と變りがなかつた。

凱旋門といふ門は、羅馬あたりの廢墟の中に見るのが好い。歴史となつてしまつては、死んだ人と同じで、門もさう腹は立たない。作られた當時には、凱旋門は好い感じを與へるものではない。勝利を誇るといふやうなことは、何時でも時代の冷靜な人の批判を脱れない。へつらひ者が智慧のありたけを絞つて、勝利者の爲めに作つた門などは、いかに建築學上の價値があるものでも、大工の手本だけのものだ。大工の手本としても、羅馬以後感心するものが出來ないとすると全くやめた方が好い。

（「門」より）

反抗と否定

「ブルッ、ブルッ、ブルッ、ブルッルッルッルッルッルッルッル……

隣の自動車のエンヂンの爆音が、四邊の靜かな空氣をバラ掻きにするやうな響を立てた。

『あれッ又！』その響と同時に細君の、怒鳴るともつかず、唸るともつかず、呟くともつかない聲が、彼れをビクとさせた。

「ねえ、あなた、私もういやだわ。早く引越しませうよ。」細君は頗るエクセントリックのカーヴを持つた聲で、彼れを抓るやうに云つた。

兩足を投げ出した眞中に新聞を置いて、それを見てゐるふりをしてゐた彼れは、自分は、そんなことを意に介さないうちに、自然と細君に同情してゐるやうに見える態度を示さうとした譯ではないが、結局そんな風を見せるやうな態度で云つた。

「困るなア。……引越すたつて家はなし、隣の自動車を叩き壞す譯にも行かないし、此方が聾になることも出來ないし……」

「あなたは無神經だから駄目だわ、平氣なんですもの、あんな人殺しのやうな音を。」

「アッハッハッハ。」彼れには『人殺しのやうな音』といふのが一寸可笑しかつた。

『笑ひごつちやないぢやありませんか。』

實際彼れにとつても笑ひごと以上ではあつた。

彼れは數ケ月前に此處に越して來たのであつた。その前に彼れの居たA町の家といふのは、荷馬車や荷車の往來は可なり烈しいが、極めて貧弱な家並の、表通りの貸家であつた。年寄りの齒齦のやうに、汚い家が出たり引込んだりしてゐる中に挾つて、彼れの家は、道路よりも二尺ほど低い地點に、も一歩入れたといふやうな凹みに、格子戸の、腐りかけた敷居が埋まつてゐるので、彼れは、自分の家を見ると、何時も、流し元のジク〳〵した泥の中から出て來る蚯蚓を思ひ出した。さうして毎日、朝の五時ごろから、輜重大隊でも通過するやうなけたゝましい車の音に驚かされて目が醒めるのが、非常に辛かつた。ある朝、眠いのに起き上つて、窓から往來を見下ろして、それが肥車の行列であつたことを發見して、「もう我慢は出來ない。」と思つた。が何時の間にか、彼れは、その音響に眼を覺まされる朝が稀れになつたので、細君に、肥車が減少した喜びを述べたら、細君は、自分の夫が馬鹿であつたことを初めて發見したやうな顏で、他を眺めて、

「呆れたわね、あなたは。」と悲しさうに云つた。

細君は、彼れの神經が、段々と鈍つて行くことを知る度に、悲しさうな表情をするのである。夫の神經の鈍ることは妻にとつて一番悲しいことでもあるかのやうに。

彼れは、自分の神經の銳鈍などを別段念頭に置く男ではなかつたのであるが、細君の悲しさうな表情を度々見せられたので、自分の神經の働きに關して、成るべく公表しない方が好いといふやうな氣になつた。肥車の時にも、シマッタと思つた。

「ねえ、この家どうかしませうよ。」その時も、細君はさう云つた。

「どうかしようたつて、僕の建てた家ぢやなし……」彼れはそんなことをいつた。

『さうぢやないのよ。何處かへ引越さうといふのよ。』細君は、家といふものは、何處へ行つても建てつまつてゐるので、そのうちの何れへでも入つて行けるやうに考へてでもゐるらしかつた。

彼れは氣の毒さうに、細君に向つて教へた。

「引越さうたつてお前、今家はありやしないよ。偶々空く家があつたつて、大抵一年も前から豫約濟みなんだからね。」

「そんなことは解つてゐますよ。」案外にも細君は、そんなことはよく知つてゐたのだ。

『それなら、引越さうといつたつて、どうも出來やしないぢやないか。』

『そりやあなた、この時節に、坐り込んでゐて、何處にか空家はないかつて云つてゐたつて、誰れが持つて來てくれ手があるものですか。あなた位無情な人はありやしない。火鉢の前に坐り込んで、「家はないか、家はないか。」と云つてりや、家が獨り手に歩いて來ると思つてゐるんですもの。』

『そんなことはあるものか、この家だつて、隨分苦心して探し當てたのぢやないか。』

『だから、こんないやな家しか探しあててないんだわ。Mさんだつて、Nさんだつて、皆氣の利いた家に入つてゐるぢやありませんか。うち見たいに高い家賃を出してこんな汚い家に入つてゐるものはありやしないわ。Tさんなんか何時の間にか金主を見つけて自分建の家に入つたつていふぢやないの……私こんな家いやになつちやつたわ。』と細君は額中を歪めて、そこらを見廻した。

細君は、自分の言葉が、自分の耳に入るのを聽いて、段々昂奮して行く質であつた。だから、彼れは、細君ばかりに物を云はせるのを危險がつた。けれども途中から割り込む隙間を見付けることが容易でなかつたので、大抵は濟んでしまつてから、彼れはポンプを持ち出すのであつた。

『だつてお前、あんな人達は皆上手なんだからね。何時の間にか、重役と懇意になつたり、取引先の家庭に入り込んだりして、何うもそれは不思議だね。』

『不思議なもんですか。そんなことの方が本職なんですもの。』

『だから僕には、あんな連中の眞似は出來ない。』

細君は默つて彼れの顏を見た。細君が默つて彼れの顏を見るのは、屹度彼れに同情するか、感服するか、少くとも異存のないことの知らせであつた。彼れは嬉しかつた。

で彼れはその家に何年か居た。細君はその家で初めてのA子を産んだ。細君はその産後に長く患つて、その後健康は回復したが、様子が何處となく前と變つたやうであつた。勿論彼れがそれを感ついた譯ではなく、極親しい友人のHにそれを云はれた時には、彼れには能くも合點が行かなかつた。Hといふ男は自分勝手なものの言ひ方する男だけれども、彼れに向つて作り譃を云つたこともないし、譃をいふ必要のある關係を持つた間柄でもなかつたので、彼れは比較的、誰れの云ふことよりも、Hの云ふ事を信用した。

細君の様子が、自分には一向變なやうにも思へないが、さういはれると少しどうかしてゐるやうでもあり、萬一實際にさうであつたら、どうかした方が好いかと思つて、彼れは細君のかゝりつけの醫者にそのことを相談した。醫者は、さういふ病人ならば、もつと閑靜な所に引込む方が好いといつた。

『どういふ病人ならば、さうした方が好いのですか。』と彼れは尋ねた。

『あなたが今仰しやつたやうな病人ならばで

す。』と醫者は、演説口調で答へた。

彼れは、自分の言つた病人なるものについて、正確の概念は持つてゐなかつたが、兎に角さうした方が好いのならばさうした方が好からうと思つて、歸つて細君に引越の相談をした。細君は大變喜んで、その話をした日が、日曜だつたので、二人は子供の手を引いて、院線の電車でN――附近を尋ね廻つた。

蚯蚓のやうな家の中から出て、青々とした生垣續きの、こんもりした樹木の間から屋根を少しばかり見せてゐるやうな住宅ばかりの、この邊をうろついてゐると、鮮しい空氣で肺の中を掃除してゐるやうな氣がして、彼れは蘇き返つたやうに思つた。

『實に好いなア、この邊は。お前のやうな病人には、かういふ閑靜な所で靜養するより外別に仕方がないのだぜ。』と彼れはくたびれた子供を背負つてゐる細君にさう云つた。

『私のやうな病人て？　私病人でも何でもないぢやありませんか。いやな人ね。』裏の垣越しに見える、安ッぽい白堊塗りの洋館を眺めてゐた細君は、此方を向いて笑つた。

偶然に貸家の有無を尋ねた酒屋が、親切に、間もなく空くといふ家を世話してくれて、數月前に引移つたのが、彼れの今の此の住居である。

近所の大きい邸宅や別莊に挾つて、それこそ、樹木の多いこの邊では眞上からでも見なければ有るか無いか解らないほどの小さい住居ではあるが、土地柄とて相應に庭もあり空地もあつて、殊に兩隣も、前後も、樹木ばかりで家の見えない位、大きい邸宅なので、晝間でも、深閑として、あの町から移つて來ると、まるで山の中であつた。

『好いなア。』と彼れは緣先に立つて、貸家にしては、檜や松や梧桐や躑躅や、家主の植木屋の有り合せのものにしろ、割合豐富に木の植つてゐる庭を、すばらしい庭園でも見渡してゐるつもりで眺めながら、得意になつて、叫ぶやうに云つた。

『ほんたうに好うござんすことね。』細君は、戀人の顏でも見るやうな樣子で、彼れの方を見た。彼れも同じやうな心持で細君を見た。

『あれ、何だか、鳥が鳴いててよ。』細君はピピピッピ、ピピピッピ、と單純な調子の小鳥の聲に、天才のメロディーでも聞き惚れてゐるやうな顏をして耳を傾けてゐる。

『好いなア、向ふの松の木は。隨分高いね。どうだい、まるで畫に描いたやうな枝ぶりぢやないか。』

彼れは、隣家の庭の、谷のやうに低くなつた邊の木立の上に、二三本高く差し出てゐるその松の木を指した。

『あゝ淺黄色の空のところへ、くつきりと松の樹の姿が現はれてゐるところは、何とも云ひやうがないわね。』細君は、伸び上つてさういつた。

『大分蟲が啼いてゐるね。』彼れは、垣根越しに、別の隣の方を見た。そこは、草が莽々と生えて、芒の穗がキラ〳〵と光つてゐる。

『土地がないの何のといつたつて、町から一寸出ると、自分の邸の内に、こんな廣い草原のあるうちがあるんだからなア。日本はまださう悲觀したものでもないテ、狹い〳〵なんていふけれど。』彼れは、緣先の雨戸を開けると、隣の高窓の格子に頭を打ちつけさうになる、昨日までの住居のことなんかは、すつかり忘れてしまつた。

『それだから、土地がないんぢやありませんか。』と細君は、頰をふくらして、さう云つたが、何時もの態度から見ると餘程批評的、超越的であつた。

『どうして？』彼れは、細君の方を見るでもな

く、口をあけて廊下の天井を眺めながらから問ひ返した。

『こんな人が、皆自分のとこへ取り込んでしまふから、私達には無いも同然だわ。』

細君は、前の家に居たらば眞劍でいふことを、今は戯談らしく云ふのであつた。

『まあ、さうお云ひでない。隣の人の地面でも、から私のとこの垣根續きにあれば、私の土地も同じぢやないか。隣の主人よりも、私の方が、この草原を利用してゐる譯なんだよ。緣先からあの芒の穂を眺められるだけでも、隣の主人よりも、私の方があの土地を使つてゐることになる。』

『でも、あすこへ高塀を作られてしまつたら、あなた何うするの。いけないつていふことも出來ないぢやありませんか。』

『あんな所へ塀なんぞ作るものか。誰れの得にもならないことは、誰れもやりやしないよ。』

『それでも、あすこへ此處の家が蔭になつてしまふやうな高い家を建てたらどうして？』

『さうしたら、此方が引越すまでさ。そこへ行くと貸家住居は便利至極だ。』

『だからあなたの議論は勝手だつていふのよ。私が引越さうつていふと、あなたは屹度、今時空家がそこら中に轉がつてゐると思ふのか、たんていふ癖に、自分の都合なら今にも引越せるやうなことを仰しやるんですもの。』

『アツハツハ………。』

『オホホホ………。』

若し此の爭論が、以前の住居で起つたら、それこそ細君は土瓶を二つ位壞すのだが、環境の變つたお蔭で、それは樂しさうな笑ひ聲で解決してしまふのであつた。

二人は、一週間ほどは、そんなことばかり云ひ合つて暮らした。

引移つてから、初めての日曜日の晩は、非常に好い月夜だつたので、細君の發起で、隣の芒を利用してお月見をすることになつた。家主の植木屋から緣臺を借りて來て庭先に据ゑて、その上に坐り込んだが、さうすると、隣の芒が見えないので、その緣臺の上に、家に二つだけある椅子を持ち出して、二人はそれに腰をかけて、枝豆を齧つた。

『みんな人のものね。緣臺も、芒も、お月様も。』

と細君は笑つた。

『お月様が人のものといふことはあるものか。我々のものだ。』と彼れはいつた。

『あなたはお隣の庭まで自分のものだつてんですもの、お月様もあなたのものでせうさ。』

『「自然は萬人の財産なり。」だ。』彼れは何かでそんなことを讀んだと記憶してゐるが、意味はさうでも言ひ方がもつと違つてゐたやうに思はれた。然し細君が、それを讀んでゐさうにも思はれないから、違つてゐても構はなかつた。

『フン。』と細君は顎をしやくつて、上眼で彼れを見た。

『何がフンだい。』と少しばかり飲んだウヰスキーに陶然となつた彼れは、さういつて小さいコップを突出した。

『私達の財産は自然きりね。』そのコップにウヰスキーを注ぎながら細君は、首を縮めて、クク』と鼻をならした。

『さうだなア。』と彼れも聊か心細さうな聲を出したが、ウヰスキーをちびと舐めると、急に反り返つて、大きな聲で『「自然は無限の富なりイ。」』と生徒が讀本を朗讀するやうな調子で怒鳴つた。

『吃驚するわ。Aちやんが眼を醒すぢやありませんか。』

『好いなア。此の邊ぢや夜中にどんな大きな聲を出しても、何處からも尻は來ないからね。』

『ほんたうね。先の家のお隣の御主人は、何い

時でも十二時ごろに歸つて來るんでせう。だもんだから、お風呂に入るのに、お湯の音がヂャブヂャブするのを近所に聽かしちやならないつて、そうつと入るんですとさ。そんな氣がねまでしなけれやならないんだから、あんなところにゐると大變ね。私ほんたうに此處へ來てのうのうしたわ。」

細君のその言葉は、彼れに結婚當時の彼女を想ひ出さした。

「あんな鬼のやうなお母さんのところへ歸つて行く位なら、私死んでしまふわ。」さう云つて何處までも續けて行かうとした彼女の漂浪の生活に、彼れが飛び込んだのは、もう今から七八年前のことであつた。

彼れは別に、彼女の漂浪の生活に同情した譯でも何でもなかつた。極めてつまらない插話が、二人をこんな運命にしたことを想ひ出す度に、何時も彼れは擽つたいやうな氣がした。

貧乏書生であつた彼れは、或る日根つから親友でもない同窓の金持の息子に伴れられて、ある料理屋に行つたが、そこはその息子の馴染と見えて、頻りに傍若無人に振舞ふのが、血氣盛りの彼れには忌々しくつてならなかつた。自分の生活とこの馬鹿息子の生活とを對照して見て、彼れは、山のやうな御馳走と綺麗な女どもの眞中で、泣きたいやうな心持になつて、ベッをかいて坐つてゐた。その質に取られた猿のやうな彼れの態度が、馬鹿息子を初め、綺麗な女どもの興味を惹いて、八方から彼れに、外國語のやうな言葉で盛んに何か云ふのだが、彼れは頭が熱して、耳がガン／＼云つて、返事をするどころか、先方のいふことも解らなかつた。

たうとう耐へ切れなくなつた彼れは、そのまま飛び出さうとしたが、帽子を尋ねて居る間に見つけ出されて、再び座敷に引戻されて、大笑ひの眞中に坐らせて、嘶し立てられた。

そのうちに馬鹿息子は醉ひ倒れて、女どもは座敷の隅で何かたべながらこそ／＼話をしてゐる。その女どもの中に彼れが皆に玩弄にされてゐるのを、初めから、彼れの側に立つて防戰してくれた一人の女がゐた。彼れは、その女が座敷から見えたくなるのを心細がつてゐたが、この時も、片隅の連中を一人離れて、彼れの前に坐つて、罪もないことをいつて相手になつてゐた。

彼れはふと思ひついて、此の女に向つていつた。

「君は、今此處にお金を持つてゐないかい。」

女は驚いて彼れの顏を見て、急に返事もしなかつた。彼れは、慌てて言葉を續けた。

「君、僕は今夜は口惜しくつてしかたがないのだ。金がないばかりに、こんな馬鹿野郎に散々馬鹿にされて……僕は實は二人で牛屋へでも行くつもりで來たんだ。こんな目に逢つて、忌々しくてたまらない。僕は奴に鼻をあかしてやらなければ承知が出來ないのだ。僕今夜の勘定を僕が拂つて歸りたいと思ふんだが、實は一圓ばかししか持つてゐないんだ。」

彼れは眞赤になつて、きまり惡さうに俯向いたが、勇氣を鼓して、その先をいつた。

「幾何持つてゐたつて、僕等の金はこんなことに費へる金ぢやないんだ。けれども、馬鹿野郎に欺かされて來たのが僕の失敗だから仕方がない。ねえ君、君は何うかね。能くかういふとこの女中は、隨分金持のもあるといふことを聽いてゐたが、今こゝに持つてゐるといふ譯でもあるまいね。僕は歸つたら外套や衣服を質に入れて、屹度金をこしらへて返すから十圓ほど貸してくれないか。」

彼れは目に涙を一杯ためて、齒を喰ひしばつてそれを云つたが、云つてしまつても、女中の顏を眞ともに見る勇氣がなかつた。

「およしなさいよ、馬鹿らしい。それに十圓ばつかしぢや足りやしませんよ。あんな金持にはいくらでも費はしてやる方が功徳だわ、あなたが百だつて出すことはないぢやありませんか。」

女中は、低い聲で、たしなめるやうにさういつた。

『さうぢやないんだ。僕はあんな奴に威張られるのが癪に障つて〳〵しやうがないんだ。僕の家は貧乏な上に、母しか居ないんだ、だから學資だつて血の出るやうな金なんだ。』多少醉つてゐた彼れは段々昂奮して聲をふるはせた。

「だからそんな貴いお金をこんなところへ捨てるのはおよしなさいよ。」女は益々低い聲に力を込めていつた。

『けど僕は、けど僕は……』彼れは咽喉が塡つて口が利けなくなつた。眞黒な腕で頻りに眼をこすつて、たゞ首を振つた。一層寢てゐる馬鹿息子を蹴飛ばして歸つてやらうかと思つた。けれども、どうしても今夜の金を、自分で拂つて高慢な馬鹿息子の鼻を明かせてやらないと、明日から學校で奴と顏を合はせるのもいやになる。學校を卒業するまで此の馬鹿野郎に威張られてゐるのはとても堪らない。

「幾何でもいゝんだ。百圓でも二百圓でも、僕は月賦でも返すから、此處の帳場に頼んで、僕の勘定にして置いてくれゝば好いんだ。……畜生、人を貧乏人だと思つて玩弄にしやがる。こんなとこを母に見せたら、口惜しがつて自殺するかも知れない。それでなくても母は、僕が東京へ出て、貧乏書生だつて馬鹿にされやしないかつて、手紙を寄すたんびにさういつて來るんだ。畜生ッ。』

彼れは一生懸命に聲を忍ばせるつもりでも、片隅の女連は、一齊にこつちを見て、何かひそひそ云ひ合つてゐる。

それを見ると彼れは急に間が惡くなつて、おづおづと前の女中の顏を見た。さうして彼れは驚かされた。女は半巾で片方の眼尻を拭きながら、泣き笑ひのやうな顏をして彼れを見てゐるのであつた。彼れの眼から、堪へてゐた涙がハラハラとこぼれた。

『いゝわ。私帳場に頼んで、私が立替へたことにして置くわ。』女はさういつて立ち上つて行つてしまつた。

何時まで經つても女は歸つて來なかつた。彼れはそのうちに、馬鹿息子が目でもさまして下らないことをいつたら、今度こそ毆りつけてやらうと待ちかまへてゐたが、醒ましさうにもなかつた。彼れはもう片時も坐つてゐる氣がしなかつた。堪へかねて、廊下に出ると、今の女中が紙片を手にして小走りに驅けて來て、手早くそれを彼れの懷にねぢ込んで、

「これ受取だわ。あなた譃だと思ふといけないから。」といつて笑顏を見せた。その笑顏は彼れに特殊の印象を與へたが、今はそれどころではなかつた。

『どうも有りがたう。實際僕は感謝する。幾何か知らないが僕は屹度返す。僕はかういふものなんだ。』彼れは袂口から名刺を出して女に渡して、

『餘り澤山だつたら月賦にして貰ふ。』

「何をいつてゐるんですよ。そんなこと何うでも好いのよ。又來て下さいね。……あら、あなたこんな所へ來る方ぢやなかつたのね。……私御伺ひしちやいけない？　勉強のお邪魔をしないやうに。」

「來てくれ給へとも、……けど僕のところは大變汚いからね。』

二人は長い廊下を驅けるやうに歩きながら、そんな話をした。

かういふ一幕から二人の生涯の始められた

ことを、彼れは、「のら／＼したわ。」といつた細君の言葉で思ひ出した。それは細君が、初めて「鬼のやうな」養母の手を離れて、派手やかな漂浪の生活から、一轉して彼れと貧乏な間借り生活に移つた時に發した言葉だつたのである。

彼れは、今から考へると、何んであの晩にあんなに昂奮したのか、全く譯が解らない。あんな馬鹿息子とつまらない競爭をしたことが何ういふ氣だか、いくら考へて見ても理解されなかつた。それは馬鹿息子に馬鹿にされる遣り方で、馬鹿息子を馬鹿にする遣り方ではなかつたのである。

けれども、その歸りがけに、廊下で、受取を彼れの懐にねぢ込んで、「貴方謔だと思ふといけないから。」といつて微笑んだ彼女の俤は、何時までも／＼彼れの瞳の底に生きてゐる幻像であつた。それは彼れを何時も、今夜の月夜のやうな、さえ／＼とした思ひ出の裡に投げ込むのであつた。

陶然となつた彼れは、肩を列べてゐる細君の方へ上半身をよろけさせて、それを支へようとするやうに、細君の二の腕を輕く握つた。細君は重いものでもそこに載せられたやうに、自分の肩を彼れの方に傾けて、彼れの肱にそれを凭せかけた。それは彼れにとつて實際重かつたので、彼れは力みながら、細君の身體を起さうとしたが、意としてゐる細君の抵抗の爲めに、さうするまでに息がきれた。

「おい、何か唱つて聽かせないか。お前の唄を久しく聽かないね。考へて見ると、處女時代に於けるそれつきり、全く聽かなかつたぜ。」

處女時代とは、彼女の漂浪時代のことを二人のなかでいふ時の符牒であつた。

『「處女時代に於けるそれ」つて何？ そんな、ハイカラな言ひ方をしなくたつてい ゝぢやありませんか。馬鹿々々しい。』

『オ痛。』彼れは眞個に痛かつた。腿がヒリヒリする。

『痛いなア。けど、隨分久しぶりの痛さだね。フ、、。』彼れは何うしても彼女を唱はせたかつた。

『唄はないかい、陣芬漢芬を。久しぶりで聽いてやるぜ。』

『「陣芬漢芬」も久しぶりね。』さういつたかと思ふと、突如彼女は唄ひ出した。

『しかも櫻の初日の夜、はでな一座のその中で、
ついをかぼれのうはきから、人の客衆に
しのび合ひ…』

『いゝでせう。』細君はケロリとして枝豆を摘つた。

彼れは、細君の唄が、人に聽かれて恥かしくない程度のものか何うなのか、自分では判斷つかなかつた。然し彼女が、先の家では決して唄はなかつたことから考へると、餘り人に聽かせられるものでもないのぢやないかと思つた。でも彼れには、細君の聲が月夜に響き渡るのを、先の家の隣の主人公が風呂の湯の音を遠慮するやうに遠慮する必要のない、この野中の一軒家見たいな住居を嬉しく思つた。

『お前の唄は、元來それで飯が喰へる程度なのかい。』

「いやなことを聽くのね、あなたは。私だつて今まで續けてやつてゐれば立派にやつて行けるやうになつたんだわ。」と細君はいつた。

『さうかなア。』と彼れは云つたが、一向さう思つてもゐないやうだつた。

『あなたは駄目だわ、何太夫だの何だのていふと、私達と別の世界の人間のやうに思つてゐるから。私たつて、あの人達だつて、同じ日本人ぢやありませんか。』

『それや日本人だが、同じ日本人でも、僕のやうに君が代一つ唱へないものもあるからなア。』
細君は再び小聲で何か唄つてゐたが、急に沈んだ聲で、
『何んだか私つまらなくなつちやつたわ。』とさつきの唄のつゞきのやうな調子でいつた。
『何うして。』と彼れは、多少面喰つたやうな聲でいつたが、別段面喰つた譯でもなかつた。
細君は何んとも答へなかつた。少し顔を上げて、空を見上げたが、夢を見てゐるやうなその顔は、月の光の故か、青白かつた。
『私、何だか一人で遠い〳〵所へ行つてしまひたいやうな氣になつたの。』多時して細君は低い聲でさう呟いた。
『いけない〳〵、そんなことを云つちや。』
彼れには局面の急激な變化が諒解出來なかつた。たゞ、これがHの所謂『變挺』なるものだなと漸く合點した。でさういつた。
『そんな考へは、からいふ閑靜な土地へ來て、花を作つたり鶏を飼つたりしてゐれば自然に癒つてしまふよ。』と醫者から云はれたことをそのまゝ繰返した。
細君は、彼れの言ふことは全く耳に入れないやうに、見當違ひの方を眺めてゐたが、急に身體を彼れの方に倒して、彼れがオヤと思ふ間もなく、彼女は彼れの胸に顔を埋めた。
彼れは自分の心臓の運動が止つたかと思つた。無論口も利かなかつた。さうして勿體ないものにでも觸るやうな手つきで、彼女の背に手を載せた。啜り泣きの聲と共に、彼れの胸に押しあてられた細君の髪が根元から搖れた。
彼れは悲しくなつた。さうして悲しくなりたくもあつた。で衝動的にこみ上げて來る悲しさを押へようともしなかつた。涙が彼れの頬を傳つて、彼女の襟元に落ちるのが嬉しかつた。
それは可なり長いことであつた。彼れは曇つた眼で、月を見つめたり、雲の走るのを眺めたりした。さうして偶には全くほかのことを考へたりした。今度來た雲は、屹度月にかゝるだらう、オヤ避けた、なんてことさへ考へた。さうして又、そんなものが見えなくなるまで涙を流した。
『濟まなかつたわね。許してね。』
細君の微笑した顔が、出しぬけに、彼れの鼻の先に現はれた時、彼れは驚いたけれども、蘇き返つたやうな氣がした。心から嬉しくつて、矢張り口が利けなかつた。強く細君を抱いて、さうするつもりでもなんでもなく、彼女の顔に接吻した。すると又涙が流れた。
『許して！ 許して！』細君は力のこもつた低い聲でさういつて、彼れの肩に兩手をかけた。
彼れが自分の衣服も細君の衣服も夜露でぐつすり濕つてゐるのに氣がついたのは、それから大分經つてからだつた。
彼れの細君が、四十度以上の高熱を出したのは、その翌晩のことであつた。それが三日も續いたが、時々夜着を刎ね除けて暴れ出すので、下女にばかり任しても置けず、彼れは晝夜片時も、細君の傍を離れることが出來なかつた。醫者は窒扶斯の疑があるといつたが、さうでもなかつたらしく、數日で、熱は綺麗に取れたが、疲れ切つてたゞ昏々と眠つてゐた。
大分良くなつてから、うつら〳〵と眠つてゐる細君の枕元に彼れが坐つてゐる時、その肱掛窓から二三間離れた隣の檜の植込の中から、突然、
『ブルッ、ブルッルッルッルッ……』と耳をつん裂く響が起つたのであつた。彼れは咄嗟に、飛行機がそこへ墜落したのぢやないかと思つた。彼れがハッと思ふ拍子に、
『あれーッ。』と絹を裂くやうな細君の聲に、彼

れは二度吃驚した。

細君は半身を起して、大きな眼を見張つて、キヨロ／＼とそこらを見廻してゐるが、身體中がワナ／＼慄へてゐるやうであつた。

『何でもないのだよ、自動車の音だよ。餘り傍で急に起つたものだから、私も吃驚した。』

彼れは彼女の床にすり寄つて、彼女を寢かさうとした。

『私いやだわ。アレ又するわ。あゝ私どうしよう。いやだわ。』彼女はさう云つて、兩手で耳を押へようとしたので、身體は支へを失つて、ドシンと蒲團の上へ倒れた。

『あれ、そんな亂暴な眞似をしてはいけないよ。もう音はしやしないから安心おしよ。』

さういつて彼れが、蒲團をかけてやる途端に、また、

『ブルッ、ブルッ、ブルッ ルッ ルッ ルッ ルッルッ……』

と鼓膜をバラ搔きにして脳味噌をヒッ搔き廻すやうな響が起つた。

『あらいやーア。』細君は子供のやうに悲鳴をあげて、耳を抑へて夜着を頭から被つた。

彼れは、今まで、こんな近くに隣の自動車の置場があるとは全く知らなかつた。それは檜の植込に隱れて見えないで居たのだが、この音の樣子では、生垣から何間も離れてゐないに違ひない。それにしても、今まで少しも音のしなかつたのは何の譯かわからない。或は偶々本邸から來るだけかも知れない。さうであつてくれゝば好いが、と彼れは思つた。

けれどもそれは空頼みであつた。翌朝彼れが朝飯をたべてゐると、昨日と同じ鼻の先で、始まつた。

『ブルッ、ブルッルッルッルッルッ……』

細君がこの音に怖えることは前日よりも烈しかつた。下女が寢間から飛んで來て彼れを呼んだので、彼れは茶碗を抛り出すやうにして行つて見ると、細君は、まだ兩耳に人差指を突き込んだまゝ、眞靑な顏をして、眼をすゑてゐた。

『私いや。あゝいやだ。あなたあれどうかして下さいな。私、頭が割れさうだわ。足の爪先までビリリッと響くのですもの。あらまたしさうだわ。あゝいやだ。』

細君は昨日のやうに身體を慄はせて、首を振つてゐる。それを見ると、彼れも、今にもあの音が起りさうな氣がして、不安な豫感に胸がドキドキした。

幸ひにも、もうその音は起らなかつた。シユといふ音がして、自動車は出て行つてしまつたらしい。

『もう大丈夫だ、何處へか行つてしまつた。』

彼れはさう云つたが、細君は目を据ゑて、耳から手を離さなかつた。

『いゝえ、まだですわ。あれ又するわ。』何かに魘はれたやうに、細君は顏をふせた。

その晩にも、その音が起つた。翌る朝も起つた。彼れは、仕方なしに細君の寢床を、そこから一番遠方な部屋に變へた。それは彼れが書齋と稱してゐる自分の居間なので、彼れには隨分迷惑なことだつた。その部屋では、音は少し遠いけれども、細君の怖えることは變らなかつた。

『あなたお隣へ行つて、あんな音をさせるのを止させて頂戴よ。』少し病氣の輕くなつた頃、細君はさういつて彼れを責めた。

彼れは無論そんな命令を隣へ下すことが出來ようとは思はなかつた。隣の人がそれを聽き入れる筈のないのは知れ切つた話であつた。でそれを細君にいふと、細君は怖い目で彼れを睨みながら、

『だつて隣に病人があるのに、無遠慮にあんな音をさせるなんて、近所の迷惑を思はないにも

程があるわ。先にゐた家のお隣の御主人は、夜お風呂へ入るにも隣近所に遠慮して、お湯の音をさせないやうにしてゐたぢやありませんか。實業家だか華族だか知らないが、そんな世間に構はないものは恥をかゝしてやる方が好いわ。』

細君は、病み上りの骨立つた頬の削けた肉をピク〳〵させながら、神經的の聲でさういつて焦れた。

『實業家で、さうして華族さんだからね。』

彼れは、自分にも何の意味だか解らないことをいつて見たが、ふとそれが自分の細君に關係してゐることのやうな氣がして、覺えず彼女の顔を眺めた。

彼れは偶に、自分の細君が、實業家か、華族の夫人だつたら、彼女の爲めには無論のこと場合によつては、彼れ自身の爲めにも――仕合せであつたかも知れないと思ばせられることが無いではなかつたのである。今も病み衰へたその顔を見ると、自分の妻の病み衰へたのよりも、別の婦人の病み衰へたそれのやうに思はれた。と云つて、それは彼れに不滿足を與へることでもなければ、不愉快を與へることでもなかつた。彼れは却つてそれによつて幸福を感じてゐるのである。細君のいふ通り、「自然」の財産の外は全く無一物に等しい彼れの生活は、細君一人の爲めに、冬の自然であることを脱れて、春の自然であり得るのである。彼れは今そんな風に考へた譯ではないが、細君が、隣家の主人を、「實業家だか華族だか知らないが。』といつたのは、彼れに、覺えず、細君自體のことを考へさせたのであつた。がそれと同時に彼れは、アノ馬鹿息子のことを思ひ出した。がそれは何ういふ譯だかわからなかつた。

自動車のブル〳〵は、病上りの細君にとつても彼れにとつても、迷惑千萬に違ひない。然しそれは多くの人間のやつてゐないことだとは、彼れに考へ得られなかつた。それを他から禁止させようとすると、恥をかくのは、隣の主人か、こつちの方か、彼れには判斷がつかなかつた。で更に、

「實業家で、而して華族なのだからなあ。」と繰り返した。

さういつてポカンと口を開いてゐた彼れが、細君の眼には、實業家でも華族でもない人のやうに見えたのは疑ひなかつた。然し細君にとつて、それは不幸なことでも、不快なことでもないのは、彼女の次の言葉が證明してゐる。

「實業家だの華族だのつてものに、少しは人間らしいことを教へてやらなければ駄目だわ。自分たちはまるで月世界の人間か何ぞのやうに、地球上の人間などは何うにでもなれつてえ風に思つてゐるのですもの。』

「地球上」といふ言葉が、如何にも古典的なのを、彼れは面白く思つた。「凡そ地球上の人種は、」といふ彼れの時代よりは一世紀前の文句を彼れは思ひ出したのであつた。細君は恐らく、さういふ成語のあることを知らないだらうと彼れは思つた。そんなことを考へてしまつたので、肝心の細君のいつたことを彼れは聽いてゐなかつた。でも何とか返事をしなければならないと思つてさう云つた。

「自動車の置場から火事でも出しやがるといゝのだがなア。」

「駄目よ。あんなそばから火事が出たら、家がけんのんぢやありませんか。よく自動車から火事を出すから、私それもけんのんだと思つてゐるのよ。』

なるほど、それは彼れの忘れてゐたことであつた。然し彼れはさういつた。

『なあに、家の燒けるのは此方の損害ぢやないから好い。そこへ行くと貸家は氣樂だ。』

「でも着物や道具を燒かれるだけでも、私たちは大損害だわ。」

細君の此の言葉が彼れには甚だ細君の言葉らしくなく聞えた。この細君は、場合によつては、彼女の又は彼れの一番大切な道具を打ち壊すことを少しも躊躇しない女であつた。多くの場合に於ては、それをしなければ承知しない女であつた。平生彼れは、細君のさうすることに賛成はしないが、然し今の場合は、自分が細君の地位に立ちたい氣がした。

「何構ふものか。時々はすつかり燒けてしまつて、全部新しくなるのもいゝものだよ。」

「馬鹿々々しい、私たちの物は塵ッぱ一つだつて、華族や實業家のお蔭で無駄にされてたまるもんですか。」細君は昂奮して云つた。

「ブルッ、ブルッ、ブルッ ルッ ルッ ルッ ルッ ルッ……」

又も例の音が起つて、家内の空氣がピリ〳〵と震動した。

「えッ、口惜しいッ。」けたゝましい叫び聲と共に、細君は括り枕を刎ね飛ばした。そこらの藥瓶や、水差が「ブルッブルッ」に喝采したやうな音を立ててひつくり返つた。

見ると、細君は目の色を變へて息をはずましてゐる。彼れが驚いたやうな顏をして細君を見たのが、一層彼女を焦立たせたらしく、細君は、今にも彼れに掴みかゝりさうな見幕で、聲を顫はした。

「私もう忌です。何うしても忌です。何處へかやつて下さい。こんな處に居ろといふなら私逃げ出してしまふ。誰れがこんな目に逢つて辛抱してゐるもんか。「今に音をさせてやるぞ、今に音をさせてやるぞ。」つて、年中人を威してゐる。私達を何だと思つてゐるんだ。そんな人間の隣に居なければならないんなら、死んでしまつた方が餘ッぽど增しだ。あなた！ あなた！ 私を何處かへやつて下さい。あなた！ あなた！」

それは彼れを『ブルッブルッ』以上に驚かした。實をいふと『ブルッブルッ』は彼れに何んでもなかつたのだ。たゞ細君へのお交際に、それを問題にしてゐたまでであつた。然しこの細君の昂奮には、彼れは息のつまるやうな煩悶を感じない譯には行かなかつた。彼れには、隣の自動車よりも、家の細君の方が餘ッ程恐ろしかつた。

でその日すぐと、彼れは醫者に賴んで、細君を入院させることにした。もう八分通り全快してゐる細君を車にのせて病院へ送り込む時、彼れは車の上で、度々その失費について考へさせられた。

間もなく全快した細君は、家に歸つて、再び隣の「ブルッブルッ」を聽いた時には、初めてそれを聽いた時に劣らないほど昂奮した。たゞ病氣が癒つてゐた爲め自制することが出來たが、それだけ彼れは細君を氣の毒にも思つた。その後『ブルッブルッ』の聽える度に、細君がまるで脾腹でも打たれるやうな苦しさうな顏をして、「あれッ。」といふ、隨分耐へてゐるらしい聲を出すのを聞くのが、彼れを憂鬱にさせた。尤も彼れの憂鬱は、その間に、細君がその音に對して必ず何か奇抜な評を下すのを面白いと思つたりする程度の憂鬱であつた。

話が初めに戻つて、彼れは、今も細君が「人殺しのやうな音」とその「ブルッブルッ」を評したことを面白いと思つた。自動車が西洋で出來初めの頃、往來の人達は、それを「惡魔の車」と呼んだといふ話を、彼れは思ひ出して、細君が西洋人だつたら、きつと、あの音を『惡魔の合唱』とでもいつただらうなどと考へて、彼れは自分

ながらその想像を面白いと思つた。

『今日の日曜はあなた家にゐて下さい。さうしてAちやんのお守をしてゐて下さい。私家を探しに出て行きますから、あなたを當てにしてゐたつてちつとも埒はあきやしない。』細君は、身支度をしながら、そんなことをいつた。

『それは助かる。Aちやんと温和しくお留守番をしてゐるわ。』彼れは思ひ出したやうにA子の名を呼んだ。

『まだ好いんですよ。今Nやが御飯をたべさせてゐるんぢやありませんか。…あなたは、平生ちつともAちやんのことを構はないから、馴染まなくつていけないわ。ちつとも、自分の子供を可愛がらないんですもの。』細君は、その終ひの文句を絶望した役者の白のやうな口調でいつた。

『僕は非常に可愛がつてゐるから、可愛がれないのだよ。』

『又人をひやかすやうなことを仰しやる。』

『だつてさうだよ。何れだけ可愛がつたら、僕の思つてゐるほど可愛がつたことになるかわからないから、いつそ可愛がらないことにするのだよ。大に慾の深いものは、金を儲けようといふ氣になれないものだ。何れだけ儲けたらよいか見當がつかないからな。』

彼れは全く譃をつく氣でさういつたのではなかつた。實際彼れにもその邊の見當がつかない氣がしてゐるのである。

『何を云つてるの！』細君は、彼れのいふことなんぞ相手にしないといふ風で、身支度を急いだ。もう細君の頭には彼れのこともAちやんのこともなく、これから探し當てようといふ貸家の幻影で一杯になつてゐるのであらう。

細君が出て行く間もなく、例のHがやつて來た。Hは、彼れに細君の「變挺」であることを注意した男である。彼れと同窓で、同じ會社に彼れと同じ頃から出た男だが、何時の間にか社内の利け者になつて、地位も俸給も、今では彼れよりも何割がたか好いところに居る。彼れはHを自分より何割がた豪い男だとも何とも思つてゐるのではないが、彼れにとつては非常に好い男で、萬事此の男のいふことに從つてゐれば、實踐的に間違はないと思つてゐる位、彼れは此の男と仲が好い。

『今そこで細君に逢つたぜ。貸家探しだつてね。例のブルブルをまだ氣にしてゐるのかい。』彼れは坐りもしないうちからさういつた。

『氣にしてゐるどころぢやない。この頃はもう精神的に、アレがいけないんだね。』

『精神的にいけない。』たア何ういけないんだい。』

『マアさうなんだよ。反抗的にだね。少し變になつたら、あそこへ火でも放けかねない勢だ。…いや火は放けまい。』彼れは、あすこから火事が出るのは困るといつた細君の言葉を思ひ出したのであつた。

『火なんぞつけて堪るものか。だが矢張り變挺だからだよ。かういふ閑靜な所へ來れば癒るといつて來たのに、最も閑靜でないものにぶつかつたんだから堪らないや。困つたなア。家はないかい。』

『ないね。それに此頃は、夜遲く何臺もの自動車があれをやるんだよ。十二時頃にブルップルッとやられちや僕でも餘りいゝ氣持はしないね。全體君あのブルブルは何の必要があつてやるんだい。』彼れは、自動車については、乘合自動車と、會社の自動車に二三度乘つた外に何の知識も經驗もなかつた。

『あれかい。』Hも自動車の知識は、彼れと伯仲の間にあるのだつた。『あれは何さ。自動車が動き出す前に、一寸小手試しをやるんだね。マア相撲で云つて見ればシコを踏むやうなもの

さ。』
〝自動車がシコを踏むのかい。』彼れには何のことかわからなかつたが、マアそんなものかとも思つた。
〝でも必要なのかしら、そんなことをするのが。マサカ俺は自動車を持つてゐるぞといふことを吹聽する爲めに、あんな音をさせるのぢやなからうね。〟彼れは細君の心理を思ひ出して、そんなことを云つた。
〝そんなことはあるものか。第一君、自動車を持つなんてことは、我々にこそたいしたことだが、あの先生達には何んでもないんだからね。そんなものを自慢しようとも思やしない。』
〝でも君、隣近所に構はずあんな音を立てて、少しは遠慮しさうなものぢやないか。』
〝なあに君、彼奴等は、自分の自動車の音がそんなに喧ましいと思つちやゐやしない。「人の屁は臭く、己れの屁は香し。」だ。〟Ｈはそんな文句を覺えてゐては、時々それを云ふ。彼れは喋舌りつゞけた。
『さうなんだよ。君の細君だつて、あれが、君が細君に買つてでもやつた自動車だつたら、ブルブルやる度にゾク／＼するほど嬉しいと思ふ位のものだよ。』
〝さうだらうかね。〟彼れにはさうも思へなかつた。
『さうさ。だから細君の病氣の一番好い治療法は、自動車を買つてあてがふことだね。さうしたら細君は隣の自動車とブルブルの競爭でもさせて、痛快がつてゐるだらう。』
『つまらないッ。〟彼れは實際つまらないと思つたのである。『それよりか君、何とか方法はないかね。家は一月や二月探したつてありつこはないよ。その間僕が彼奴に苦しめられてゐるのは實際煩いからね。』
〝君も矢張り細君にかぶれて、ブルブルが氣になるやうになつたのかい。』
『さうぢやないよ。妻がブウ／＼いふのが煩いんだよ。』
〝ブルブルでなくて、ブウ／＼の方かい。なるほど、何方も兄たり難く弟たり難しだね。困つたなア。……ウンよし僕が一つやつて見よう。』Ｈは何か思ひついたと見えて、さういつて乘り出して來た。〝僕が一つ隣の大將に會つて、君のとこの事情を話して、細君が强度のヒステリーでからだとか、君がそれを苦にやんで、會社の仕事も手につかないとか……〟
〝そんなことがあるもんか。〟彼れは口を容れた。
『マア先方へは、よろしくいふのだよ。それは手なんだからね。君は何うも正直でいけない。で自動車をあの置場の所でブルブルやることだけは、運轉手にさういつて止めていたゞけまいかといふことを嘆願に及ぶのだ。主人には、僕も一二度會などで逢つてゐるのだから顔を見たら向うでも思ひ出すだらう。マア僕に任せ給へ。今日は屹度家にゐるだらうから、今から行つて來るわ。そこで一寸土産物がいるが、五圓ほどあるかい。イヤ僕のとこにあるから後で勘定しよう。停車場前で果物の籠でも作らせてかつぎ込むことにしよう。さうだ／＼。早くさうすれば好かつたに、僕の智慧がこんなに後から出たのは少し變だぞ。』そんなことをいひながら、彼れは獨りで合點して出て行つた。
彼れは細君から賴まれたＡ子のことはすつかり忘れてしまつて、そのまゝそこに身體を横にすると、つい睡くなつて、うたゝねをしてしまつた。
目を覺ますと、日影は大分移つてゐた。Ｈはまだ歸つて來ない。談判行惱みで長びくのかしら、と彼れは思つたが、それにしても少し長過ぎる。彼れはＡ子のことを思ひ出して呼んだ。

子守と一緒に庭で遊んでゐたA子は飛んで來た。數へ歳の五つにしては柄が大きい、お母さんに似て、眼が大きくて、男のやうな口をしてゐる。日曜の晴衣の白い洋服を着せられて、活潑にお父さんに抱きついた。

彼れはA子の手を引いて、Hの歸つて來るのを迎へ旁々外に出た。背中合せの隣家の邸の表門は、大廻りに廻つて、こゝから四五町の距離がある。そこへ出るまでの廣い野原に咲き亂れてゐる草花を摘みにかゝつたA子は、もうその先に行きさうな氣色もなかつた。

彼れは遊んでゐるA子をそのまゝにして、少し許り行つて見たが、Hの姿も見えなかつた。多時して原に戻つて來て見るとA子は、知りもしない派手な令孃風の娘と二人で、面白さうに騒いでゐた。彼れが近づいて、A子を呼ぶと、A子はふりむいて彼れを見たが、令孃の袂を取つたその手を離さうともせずに、令孃を引張るやうにして彼れの方に來て、

『姉ちやん〳〵。』と叫んだ。

『オヽ姉ちやんに、遊ばせていたゞいてゐるのかい。』と彼れは云つて、令孃に挨拶した。

令孃は心持顏を赤くして、御辭儀をしたが、

『ほんたう、お可愛いお子さんですことね。』といつて、束ねた花を、A子の手に渡した。

令孃は海水浴にでも行つた名殘らしい血色の好い顏をして、涼しい眼で、彼れを凝と見て、少しはにかむやうに俯向いたが、晴れやかな、凜とした聲でA子に、

『A子さんのお家は？』と聽いた。いつのまにかA子といふ名を彼女からきいたらしい。

『あこ。』とA子は、後を指した。

『まあ、御隣ね。』と令孃はふり向いて、彼れの家の、少しばかり見えてゐる小さい屋根を眺めた。

令孃と離れるのをいやがるA子の手を引いて、彼れは家に戻つたが、Hの戻つて來たのは、それから一時間もたつた黄昏時だつた。

『大成功々々々。』Hはそこへ大胡坐をかいて、『奴さん、大に同情して、それは少しも知らないで氣の毒なことをした、いや置場をあすこへ置いて、香をさせないといふ譯にも行くまいから、早速あの置場をもつと遠方へ引かせようといつてね、運轉手や大工を呼んで、ちやんと設計までさせてくれたよ。いやもうちつとも文句なしさ、早くさういつて行けばよかつたのだ。』

『さうかい、それは有りがたかつた。僕は又餘り時間が長いから談判行惱みかと思つてゐたよ。』彼れも成功を喜んだ。

『馬鹿いひたまへ、自動車のブルブルの談判が、如何に不調だつたつて、それに四時間も五時間も費すべらぼうがあるものか。僕だつて、まさか自動車ブルブルの談判だけで訪問したと、三百屋見たいなことは言つても行けないぢやないか。ブルブルの件は歸りがけに一寸話しただけで、直ぐ解決させた譯さ。』

そこへ疲れ切つたやうな細君が歸つて來た。お客のHへは碌々挨拶もしないで、

『駄目だつたわ。』とベタ〳〵と崩れるやうにそこへ坐つた。

『駄目結構。夫人、僕は今隣へ行つて、すつかり談判して來た。』とHははしやいだ聲でいつた。

『何を談判して來たの？』細君は煩ささうに、首を後へ振つた。

『隣の大將に、此の家の事情を話したら、大に同情してしまつてね、自動車の置場を早速外へうつすが、それまではあすこでブルブルやらせないことにしようといふことになつたのです。もう今日からブルブルはずつと向うの門の傍の空地でやるさうですから、御安心なさい、貸家

探しも用なしですよ。』

Hのしやべるのを聽いてゐる細君の眼つきが段々變つて來るのを彼れは見た。Hがしやべり終つた時の細君の顏は殆んどあのブルブルを聽いた時のそれのやうだと彼れは思つた。すると細君は、

『それは何うも有りがたうございました。』と變な切口上で、誰れにいふともなしにいつた。

Hは意外の樣子に、大に面喰つた調子で、

『別に有りがたくもないが、然し奧さん、それでいゝぢやないですか。兎に角先方を讓歩させたのだから。引越すたつて、今家はありませんからな。あの音さへしなければ、こんないゝ家は、何處にもありませんぜ。』

『えゝさうね。』細君は氣のない聲で、そんなことを簡單にいふだけだつた。

『H君の盡力で大助りだ。當つて碎けろといふのはこのことだわ。』彼れは取りなすやうにいつた。

細君はフイと立つて隣の室へ行つて、音のする程高く襖を閉めた。サラ／＼と帶を解く音が聽えた。

Hは、彼れに眼くばせをして、首を振つた。彼れには何だかわからなかつたが、取り敢ず諾いた。

Hが細君には聽えないやうに、彼れに『氣をつけたまへ。』だの『まだ變挺だぜ。』だのと云つて歸つたあとで、細君は待ちかねたやうに彼れの居間にやつて來た。

『Hさんは誰れに頼まれて、お隣へ談判なんぞに行つたの。』細君の聲は尖つてゐた。

『別に頼みもしなかつたのだがね。例の通り自分獨りで合點して出て行つたのだよ。』

『あなた何故止めなかつたの？』

『僕が？　止める理由はないぢやないか、うまく行けば結構なんだもの。』彼れは意外の詰問に狼狽して、訥りながらさういつた。

『何が結構なんです。隣ぢやそんなことを恩に被せて、私達に頭を上げさせまいとするんですわ。此方は此處にゐる間隣に頭が上りやしない。道ででも會つたら御禮の一つも云はなければならないぢやありませんか。誰れが馬鹿々々しい、あんな奴に、死んだつてそんな眞似をするものか。何だつてHさんにそんなことを云はせたんですよ。』

『だつてお前も何時か僕に、隣へ行つて、あの置場を何處か外へやらしてくれつていつたぢやないか。』

『それはあなた、あの時分私も逆上せてゐたから、あなたが隣に暴れ込んで、あの置場を打ち壞すか、何うかしてくれゝば好いと思つてゐたんですわ。誰れが謝り閉口して、嘆願に行けつていふものがあるもんですか。忌々しい。もう何うにもなりやしない。こゝにゐる間、恩に被なきやなりやしない。私いやだわ。そんな思ひして片時もゐるのはいやだわ。あんなものに恩を被せられて、一日だつてゐられやしない。』細君は痙攣的に饒舌りつゞけた。

『でも好いぢやないか。毎日ブルブルに怖えてゐるよりも。』彼れは遮つた。

『何が好いものですか。ブルブルは一日に何度しかないけれど、恩に被せられてゐるのは、しよつちうですからね。隣の植込を見てゐるだけで、忌々しくなるわ。音のした方がよつぽど好い。何うして男つてえものは、皆そんなに無神經で意氣地なしなんだらう。私もういやになつちやつたわ。』細君は、例によつて、そこら中を引ツ掻きまはしたいやうに、上づつた眼で周圍を見た。

彼れは、湯呑や、灰皿などを何氣ないやうに片寄せながら、

『Hと來ちや、その點はまた頗るのんきだか

らね。今日も五圓ほどの……』云ひかけて彼れは、惡い事を云つたと思つたが、もうごまかし切れなくなつて續けた。『停車場で果物の籠を作らして持つて行つたのだよ。』

案の定細君は、一層馬力をかけてまくし立てた。

『馬鹿らしい。向うから何か持つて來たら十倍にして返してやるけれど、此方からあんな奴に物なんぞやる義理はあるもんか。Hさんのやうな幇間のやうな人が勝手にするのなら好いけれど、何うせ此方の名前で持つて行つたのでせう。何んで私たちが、華族の大金持なんかに物をやらなければならないんです。あんな音をさせて人をさん／＼苦しめてゐるものに、遣物をやる馬鹿が何處にあるもんですか。』

『だつて物を賴むのだから、マア普通の禮儀として持ち込んだのだらうよ。』彼れはなるべく自分に責任を取るまいとして、人事のやうにさういつた。

『何も嘆願することなんかないぢやありませんか。打ち壞してやるか、それが出來なければ此方が退けば好いんですわ。あんなものに御願ひするなんて、マア何ういふ氣だらう。もう此處にゐられやしない。音位なら、その時だけいやな思ひをすれば好いんだけれど……あゝ私何うしたら好いんでせう。もう片時もこゝにゐるのはいやだわ。ねえあなた、家がなければ、皆で何處かへ下宿でもいゝからしませうよ。』

『所がその下宿が中々ないのだからね。偶々あれば、目の玉の飛び出るやうに高いんだからね。それに子供をつれて下宿住居も氣が利かないなア。』

玄關の方に、女の聲で訪れがあつた。細君は膨れ切つて動かうとしないし、下女は何處へ行つたか出て來ないので、彼れが出て見ると、品の好い中老の婦人が、大きい菓子折をそこに置いて、馬鹿丁寧に挨拶をして、

『手前はお隣のKから上りましてすが、主人から、先刻は結構なものを澤山にありがたうございました、能く御禮を申すやうにといふことでございました。それからこれは到來ものでござんして、甚だ失禮ですけれど、手前共のお孃さんから、此方のお孃さんのお目ざに差し上げるやうにと申すことで、何うかよろしく……それからお孃さんに是非お遊びにおいで下さるやうにつて、手前共のお孃さんから御言傳でございます。大そうお可愛いお孃さんで。只今あすこでお女中さんと御遊びになつておいでのところをお目にかゝりまして……』

彼れは、細君のことが胸にあるので、この婆さん、持つて來たものを置いてさつさと歸つてくれゝば好いと思ひながら、無器用なお辭儀を二つ三つして、老女の歸るのを待ちかねて、引浚ふやうにその折を持つて、居間に來た。

『なんですこの折は。』細君は、汚い動物でも見てゐるやうな樣子で、その折を睨みながらいつた。

『Kのお孃さんが、Aちやんにつてくれたのだよ。』

『Aちやんに。』と細君は又新しい問題に不快な興味を持つたといふ調子で、『何うしてKのお孃さんがAちやんを知つてゐたでせう。』

『何今一寸僕がAちやんを連れて出たら、向うの原にKの令孃がゐて、Aちやんがひどく令孃に懷いてしまつて、歸らうとすると、令孃がもう少しA子を貸してくれといふものだから、ついあの原で長く遊んでしまつた。』

『いやな人ね、あなたは。』細君は眉を寄せて吐き出すやうにいつた。

『何うしてだい。』彼れには、全く細君の意味がわからなかつた。

『何うしてつて、あなた。』細君は、全く侮蔑し

た口調で、『考へて御覽なさい。あなたが、Kの令孃が可愛いからつて、も少し貸してくれつて云つたら、Kが貸してくれますか。』

『成る程ね。』彼れは、細君が中々面白いことをいふと思つた。けれども、まさか細君がそんなことを眞個に考へてゐるのだとは思へなかつた。でさういつた。

『だつてお前、あの美しい令孃が、無邪氣にA子を可愛がつてゐるところを見て御覽、お前だつて腹は立てないだらうぜ。』

『あの人達は、自分のやうな身分の尊いものが、人を可愛がりでもすると、その人達が屹度有りがたがると思つてゐるのだから腹が立つわ。自分達が一寸何かすれば、それがたいした有りがたいことになると己惚れてゐるのだから始末に終へやしない。それも、あなたがたのやうにそんなことをむきに有りがたがるものがあるからですよ。増長しきつてゐるんだわ、あの連中は。』

　その時、遠方から例のブルッブルッブルッがかすかに聽えた。隣家では早速約束を守つて、表門の方でそれをやつてゐるのであつた。

　細君はそれを聞くと、殆んど呶鳴るやうにいつた。

『忌々しい。もつと此方でやるが好い。あんな遠方でやつてゐるのを聽くと、此方へ謝り閉口して嘆願したことを思ひ出して、胸が惡くなる。私もう我慢が出來ない。ねえあなた、引越しませうよ。』

『おい、腹が減つた。夕飯の支度でもしてくれないか。』彼れは細君を臺所へ追ひやりたいよりも、寧ろ實際に腹が減つてゐたのであつた。

　細君は、返事もしなければ、立ち上りもしなかつた。

『Aちやんのお相伴をするかね。』彼れは、菓子折の蓋を取つた。見事な西洋菓子が一杯つまつてゐた。

　それを一つ摑み出して喰べながら、彼れは、美しい令孃がA子の爲めに花束を作つてやりながら、小聲で何か唱つてゐる、さゞなみの響のやうな震へ聲を思ひ出した。彼れが近づいた時に、此方をむいて、直ちにA子の父と察して微笑を送つたその生き〳〵とした表情を思ひ浮べた。一寸俯向いてA子に『お父さま？』と小聲で尋ねて、彼れの方を竊むやうに見て、その癖親しい人にでも見せるやうな笑を、彼れに見せたことを思ひ出した。彼れは、菓子をたべてゐるのが、紙でも嚙んでゐるやうであつた。

『令孃つていくつ位？』細君は強ひて冷靜にしてゐるやうな調子でさう聽いた。

『さうさな。二十前後だね。』

『美人？』

『ウン。』と彼れは氣のない聲で『マア美人だらうな。』と云つた。

　彼れが細君との會話の間に、少し嘘に近いことをいつたのは、此の一句だけだつた。實際彼れはあの令孃を『マア美人だらう。』位に考へてゐるのではなかつた。

　彼れは喰べかけた菓子を折の蓋の上に置いて細君と面と向つてゐた身體を少し外した。彼れは自分の考へることが、細君の眼に見える譯ではないが、それを考へるには、頗る目の前の細君が邪魔になつた。彼れはたゞ、令孃の無造作に分けた髪の毛や、血色の好い顏の色や、すらりとした後姿や、震動する音聲や、そんなものを切れ〳〵に考へたが、そのうちに我れ知らず深い溜息を洩らした。ハッと思つて細君の方をそつと見ると、細君の鋭い眼が、彼れの眉間の邊を突き刺すやうに睨んでゐるので、彼れは苦笑しながら視線を外した。

　物を投げたやうなガタンバサ〳〵といふ音がしたので、彼れは驚いて振り向いて見たら、今

の菓子折が庭に拋り出されて、折は踏石に當つてバラ〳〵に碎けて、綺麗な西洋菓子がダリアの咲いたやうに散亂してゐた。

縁に出た細君は、振り返つて、瞳の寄つた眼で彼れを睨みながら、

『あなたはよつぽどぐうたらねえ。』と今菓子折を叩きつけたと同じ調子でさう云つて、荒ッぽい足音を立てて臺所の方へ行つた。

彼れは、そのまゝ仰向けに寢て、『A子さんのお家は？』さういつて少し屈んだ令孃の、すらりとした下半身の曲線を想ひ浮べた。その途端に、臺所で細君が瀨戸物を投げつけたらしいガチャンといふ音が響いた。隣の自動車の遠方でやつてゐるブルブルがかすかに聽えた。

『アーア。』大の字の身體を引き伸して、大きい欠びと伸びを一緒にした時の彼れの頭からは、今まで起つたすべての事が、綺麗に拭ひ去られてゐた。

頭で歩く人間

人間は頭で歩くことになるだらうと考へた。

頭腦は身體の全部を支配してゐる塊だ。だから身體にとつて一番大切な部分だと考へるのはよい。然し一番大切な役目を持つたものの居所は、上の方とは定つてゐない。我々の生命の源といはれてゐる太陽は、我々の上の方にあると人々が思つてゐるのは、亞米利加が日本の下にあると考へるのと同じ間違ひで、彼れは我々の上にあるのではなく、我々に役立つやうな地位に在るに過ぎない。

一番大切な役目を持つたものの居所が何處であるべきかは、その役目を果すには、如何なる居所が一番好いかといふことによつて定るのである。果してさうだとすると、一番上の方に、而も、全體からはたゞ細い頸によつて關係を繫いでゐるに過ぎないところに、一番必要なものが、懸け離れた、超越的の地位を保つてゐるといふのは問題である。

さういふ地位に在る小さい肉の塊は、動もすると、身體の全體を、自分が乘つかつてゐる大切な土臺と考へないで、自分にブラ下つてゐる厄介な重荷と考へる傾がある。さうして下にある身體の全體から上つて來る血液で、而も胴體の方に持つてゐる肺臟や心臟によつて新鮮に釀造され、活潑に活動せしめられてゐる血液で、頭が養はれてゐることを忘れてしまつて、身體全體が、頭から湧出する血液に養はれて生きてでもゐるかのやうに考へる。

そんな間違を頭が考へるのは、その頭の居場所が惡いからだ。一番大切な役目をしてゐるものは、一番下の方に居るのが自然なのだ。家屋に對して一番大切な役目をしてゐるものは、家屋の一番下の方に、人の目につかぬ土の中に埋まつてゐる。樹木に於て一番大切な役目をしてゐる根もさうだ。

一番大切なものならば、自然に、さうして必然に、一番下の方に居る筈だ。一番上の方に居るのが自然であるやうなものは、一番大切なものではないのだ。

人間の頭が、人間にとつて實際一番大切なものだとすると、それは當然、一番下の方に在つて、樹木の根のやうに確かと地に喰ひ入つて、――さうなると、歩くに不便だから、確かと地に附いて身體の全體を負擔して、運んで行くのが頭の・・・

こんな旋風のやうな考を何時までも述べてゐる必要もあるまい。（「低氣壓前後」より）

乞食同志の會話

乞食A『おい、そこに居るなア○州ぢやねえか。おめえその盆の窪を何うしたんだい。』

乞食B『や、△的か、久しく逢はねえな。何うしてゐたい。』

A『お彼岸中××へ行つてゐたア。けどあつちも根つから貰へなかつたよ。遠いとこ足腰を痛くして出かけるがものはねえや。いめえましい。おれ達の遠いつてえなア何處から遠いんだかわからねえけど、何しろ遠いや。』

B『さうかい。×も此頃はから駄目だ。こんなに時候が好いと、場も寂しいや。』

A『何處も此處も不景氣だ。時にその盆の窪よ、何うしたてんだい。でき物か。ひでえかさぶたぢやアねえか。』

B『でき物ぢやねえや。これえだひでえ目に逢つちやつたい。大怪我しちやつたんだ。』

A『何うしてね、毆られでもしたんか。』

B『毆られたんならまだ氣がきいてら、犬にガクリやられたのよ。』

A『犬に？ おめえ相應なことだなア。でもそんなとこやられるのア訝しいぢやねえか。のめずつたとこでもガクリ來たんかい。何にしても變挺れえなとこやられたもんだな。』

B『根つから變挺れえでねえからをかしいや。アッハッハ。』

A『笑えごつちやねえ、一てえどうしたんだい。』

B『なアにな。まア聽いてくれ。あこつ、それおめえ知つてるだらう、××のとこの坂を上つた××寺から少し行つたとこに、生垣がずうつとあつて、曲り角のところに、石で刻つた狆ころか何かが坐つてゐるお邸があるだらう。知つてるか。』

A『知つてるどこぢやねえ。あの邸の？』

B『あこに大きな犬がゐらアな。』

A『うんゐらア、氣味の惡い犬だ。おら達が通ると、ガチャ／＼鎖の音をさせて吠えてら。おら彼奴の聲を聞くのが蟲が好かねえから、つひぞあの裏ア通つた事アねえ。……あれにやられたんかい。』

B『さう／＼、おめえは柄にねえ、犬がでえ嫌えだつたなア。……矢つぱり彼奴にやられたんさ。何たな、おらア、彼奴が鎖でフン縛られてるから怖えことねえと思つて、よくあこを通るんだ。……これえだよ、久しく雨がふつた時があつたつけな、あの時分隨分饑じい思ひしてゐるうちに、やつと天氣になつたから、何時ものとこへ出かけようと思つたんだが、何しろおめえ、一週間ばかりてえもなア、てんで食物らしい臭ひのするものにアありつけなかつたんだから、歩くとふら／＼して何うにもかうにもやり切れねえ。仕方がねえから、畠に入つて大根をひつこぬいて噛り／＼あこの處へやつて來るとおめえ、何だか素的な臭ひがするだらうぢやねえか。見るとおめえ、あこの女中さんが湯氣の出るお鍋をさげて、犬の小屋のとこへやつて來てるのよ。何うするんかと思つて垣根からそつと覗いてると、大きい顔を洗ふ眞白え金盥な、あん中に、そのお鍋をぶちまけた。やアいゝ臭ひだつちやねえ。その筈だア、見るとおめえ、牛肉だのジャガ薯だのがうんと入つたおじやだらうぢやねえか。おらアそいつを見たら、もう歩くもしくも出來なくなつて、身體がゾッとして、

足がすくんぢやつた。』

A『アッハッハ、〇州がやりさうなこつたア、……何しろそいつア素的だつたらう。』

B『何が素的だい、おらア垣根が無かつたら、とても我慢し切れなかつたに違えねえ。何しろおめえ、牛肉だぜ、上肉だア、おまけに、しこたまと來てゐら。ジャガ薯が好い色に煮えてよ、まだそれに菜つ葉のやうなものや、葱だの燒豆腐だのも入つてたア、おじやだ、素的だア。』

A『やつぱり素的かい、アッハッハ、うんでそのおじやが何うしたんだい。』

B『だからよ、おら歩けなくなつちやつたんだ。何しろおめえ、腹の皮が背中の皮にひつ付いちやつてやがるんだらう、その臭ひを嗅いで我慢が出來ると思ふかい。牛肉だぜ、上肉だア……』

A『解つたてことよ。いめましい、おらつちは久しいこと臭ひだつて嗅いだことはねえや、おめえは、間がぬけてる癖に時々仕合せするなア。やつぱり德があるてものだ。正直に出來てるから、結局惡いことはねえや。』

B『あんまり好いこともあつたためしはねえぜ。けどマアその臭ひを嗅いだ時にア茫ツとなつちやつた。するとおめえ、女中はお鍋をぶちまけてしまつて、「まだ熱いよ、冷えてから喰べなさいよ。」とか何とか云つてあつちへ行つちやつたのよ。犬め小屋の中から首だけ出して、おとなしく云ふことを聽いて、冷めるのを待つてるだらうぢやねえか。そのうちに奴さん待ちくたびれて睡くなつたと見えて、頭を前足に乘せてウト〳〵やり出した。その時おら何うかしてその犬の御馳走を横取りしてやりたいつて氣になつたんだが、何しろ垣根の外で何うにもならねえや。いろ〳〵考えて見たがうめえ案じがつかねえ。そのうちに犬が喰ひ出しやしねえかと思つて氣が氣ぢやアねえ。するとおめえ、傍の電信柱に太え針金がぐる〳〵卷きつけてあるんだ。工夫が使ひ殘しの針金を忘れて行つたに違えねえ。そいつを見たら、好い工夫が浮んだのよ、犬に悟られねえやうに、徐かに針金を解いて、それをから輪にして、垣根の根元のとこに犬の通り道になつてゐる隙間が出來てるんで、そこからそうつとその輪を中に入れて、犬の食物の入つてる容物の上からから輪を下ろして、うまく容物を引つかけちやつたんだ。もう占めたてんで、その針金をそろり〳〵と引張つて見た。好い鹽べえに赤土のスル〳〵すべる地面なんで容物は音がしねえで、此方に來るだらうぢやねえか。犬の奴に氣がつかれちや大變だと思つて、時々そつちを見て見ると、コクリ〳〵やつてゐやがらア。天の助けだてんで、エンヤラ〳〵。何しろ根仕事だ、音がさせられねえし、動くのが見えてもいけねえし、腹の蟲がグウ〳〵云つてゐるのに、欺し欺しそいつを引張つてゐるのア生やさしい仕事ぢやねえや。』

A『面白え〳〵。〇州丸出しだ。見てゐてやりたかつたなア。』

B『それどころぢやねえや、此方は命がけだ、物ずきで引張つてゐるんぢやねえんだ。何うでも其奴にありつけねえぢやア、もう一足だつて歩けねえんだからな。……エンヤラ〳〵やつてるうちに、何うかかうか垣根の穴まで漕ぎつけた。所がおめえいけねえや、生憎と容物の方が穴より大きくて、何うしても外へ出て來ねえて勘定だ。いめましい、こゝまで漕ぎつけて、お預けを喰つてるんぢや愈々堪らねえや、おらアもう我慢がしきれなくなつて、いきなり四ツン這ひになつて、垣根の穴に此方の首を突込んで、容物の縁に口をあて

がつて、雨手で容物を傾げると、占めた、おじやが牛肉やジャガ薯と一緒にズル／＼と口の中へ入つた。うめえもヘツたくれもあつたもんぢやねえ、からもう夢中でガブ／＼やつてゐるとおめえ、ワン／＼／＼といふ聲がしたかと思ふと、いきなり腦天をガクリとやられちやつた。逃げ出さうとしたつて、何しろおめえ、四ツン這ひになつてるんだらう、首は垣根の中へ入つてゐると來てら、それでも夢中で、首を引込めようとしたら、容物の縁に顎がつかへて、おじやが眼や鼻や口に一杯つまつて息がつまるだらうぢやねえか。首根ツ子は垣根の穴にはまり込んでしまやがつてぬくも差すもならねえ。そこへ持つて行つて、ワン／＼／＼、ガリ／＼／＼だらう。おらアおめえ正氣はなかつたぜ。」

A『そいつア大變だア。豪え事になつたなア。』

B『豪え事になつた。おらアもう何うもからもならねえ、てつきり死んぢやつたと思つてると、誰れだか知らねえが、容物を顎から外してくれて、頭をぐい／＼外へ押し出してくれた。でもおらアもう逃げる氣もねえから、そのまゝそこんとこに轉かつてゐたア、頭の上ぢや犬がワン／＼吠える。女の聲でガヤ／＼いつてたよ。』

A「でも好かつたなア、抛つて置かれたら、盆の窪を半分ばかりは喰ひ取られちやつたらう。』

B「確かに喰はれたなア。……おらア寢た切りでゐたら、誰れだか來て抱き起してくれた。見るといつも邸の前を掃いてゐるあの爺やさんだ。おらもう起き上る力もねえから抱かれたまゝでゐると、爺やさんは、おれをずる／＼引きずつてお邸の裏木戸から中に引きずつて行つて、臺所の縁臺の上に寢かしてくれた。能く見ると女中も見えるんだ。その外におめえ、つひぞ見かけたことのねえ、素的に美しい若い奥樣がそこに居なさるのよ。その奥樣がおめえ、おれの頭の毛を鋏でザキ／＼切つて下すつて、石炭酸で、犬にやられたところを洗つて、すつかり頭をグル／＼卷きにして下すつたらうぢやねえか。すつかりさうされつちやつたら、根つからたいした傷でもねえのか、でえぶ痛えにや痛えが、なアに死ぬやうな氣もしねえんだ。』

A「あたりめえよ。病犬にでもやられなけれア、犬に嚙まれた位で死んで堪るもんか。』

B『さうだ、奥樣もさういつてなすつた。うちの犬は病犬ぢやないから大丈夫だつて。それからおめえ……あの奥樣はご親切な方だなア、さうしておめえ、美しいつてつたらねえや。あんな奥樣おらア見たことはねえ。あのお邸に居なすつたのかなア。』

A「さうよ、あのお邸はおめえ奥樣のお邸なんだ。旦那樣てえのは居なさらねえんだ。』

B「さうか、變挺なお邸だなア。……何しろおめえ、奥樣は、女中さんにさういつて、牛乳を丼鉢に澤山入れて、おれに飲めつて云ひなさるんだ。牛乳なんてものア、それおめえ知つてらなア、餘つぽどめえのこつた、××を通つたら牛のゐる家でビールの瓶に一杯貰つて、おめえにも分けたことがあつたなア、あの時おめえが、牛乳てものア酸つぺいもんだなアつてイヤな顏をして、よつぽどしてからゲロ／＼やつたらう。あれツきり何年にも飲んだことはねえんだが、奥樣からいたゞいた牛乳と來たら、何んだかおらアまるつきり違つた味だと思つたなア。うめえのなんのツて、あれならおめえいくらでも飲めらア。そんなことをしてゐるうちに、何時の間にかお醫者さまが來なすつて、頭のグル／＼卷きを解いて見たが、もう奥樣のしなすつた通りで

好んだつていつて、すぐと又グル／＼巻いて、さつさと座敷の方へ行つてしまつた。よつぼどしてから女中さんが丼鉢へお粥を澤山入れて、も一つの丼鉢へ、それ今の牛肉だのジャガ薯だのの煮たてのほや／＼の奴を盛つて、喰べろつて持つて來てくれたらうぢやねえか。おらア無我夢中でそいつを喰つてしまつたら、もう何の事はねえピン／＼したものさ。平氣になつて見ると、もうそんなところにゐるのが窮屈でならねえから、御禮をいつて歸つて來たんだ。』

A『それで何か、おめえはそのまゝ歸つて來たのか。』

B『さうよ。……奥様は、何んだ、傷はもう二三度洗はねえといけねえから、あのお醫者のとこへ行けば何時でも書生さんが洗つてくれるから癒るまで行けつて云つて下すつた。』

A『それつきりか。』

B『うん、それつきりだ。』

A『譃つきやアがれ。あの奥様はそんな筈はねえ、お前屹度いくらか貰つたらう。』

B『……そりや何んだ、實は貰つたんだ。』

A『それ見やがれ、いくら呉れた。』

B『……いくらつておめえ、……後生だから人に云つてくれちや困るぜ、實のところ五圓札一めえ貰つた。』

A『うめえことしやがつたなア、おい、おめえそれそこに持つてるんかい。』

B『持つてねえ。』

A『持つてねえ？ ぢや何處にあるんだい。』

B『何處につて、……何しろこゝにア持つてねえ。』

A『アッハッハッハ、心配しなさんな。おれに貸してくれなんて云やしねえから。……持つてるんだな。』

B『……△的だからいふが、實は持つてゐるんだ。おら實は氣になつてしやうがねえんだ。かうして歩いてゐても、誰れか後から來て、おれの首をしめて、そいつを持つて行きやしねえかつて氣がしてしやうがねえ。おらア心配でならねえ。』

A『アッハッハッハ。おめえの氣の小せえにも困つたもんだなア。何處の箆棒が五圓札一枚と命と取ッけつこをする奴があるもんか。』

B『おれだつてさうは思つてゐるんだ。けど氣になるんだから仕方がねえ。おれアあれからこつち、何だか人間が怖くなつちやつた。いつそ奥様のとこへ持つて行つて預つて貰はうかと思つたこともあるんだ。』

A『誰れがおれ達の金を預つてくれるかい。おめえも隨分人が好いなア。だから犬に腦天なんぞやられるんだ。當り前の人間なら向う脛が定りだアな。アッハッハッハ。』

B『眞個だよ、△的、おらア人が好いんだ。おらアあの奥様に物をいはれると涙が出てしかたがなかつた。』

A『意氣地のねえ奴だなア。さうしておめえあの奥様のことをちつとも知らねえのか。』

B『ちつとも知らねえ。』

A『頓馬だなア。』

B『頓馬だつて、誰れも知つてやしねえぜ。』

A『ところがおれア知つてるんだ。あれア何んだ、大變な金持のお孃さんで、華族さんにお嫁に行つたんだが離縁されちやつたんだ。であんな淋しいとこに一人ぼつちで、爺やや女中を相手にしてゐるんだ。』

B『何んだつてあんないゝ奥様が離縁されたんだ。その華族てえなア飛んでもねえ箆棒ぢやねえか。』

A『それがよ、箆棒にや違ひなからうが、譯があるんだ。考えて見れア氣の毒さなア。』

B『何うした譯なんだい。』

A「おめえ知つてるだらう。あの××のとこをよく馬に乘つて通る女の人があつたらう。時々二人で來るが、大抵は一人で歩いてたアね。」

B「あれアおめえ女ぢやアねえぜ。男の洋服を來てらア。」

A「だからおめえは頓馬だつてんだ。あれで女なんだよ。あれが今のお邸の奧樣なんだ。」

B「さうだつたかな。おれア男だとばかり思つてた。」

A「あの奧樣は、なんでも貧乏人を救けるつてやうな仕事が好きで、お上でもやつてらなア、あんな役人や何んかと一緒になつて始終貧乏人の中に入つていろ／＼なことをしてゐたんだ。下谷だの本所だのへ行くと、時々あの奧樣が、そんな連中と歩いてゐるのを、おれも見た事があらア。」

B「それアおれも見たことがあらア。あの女異人の眞似をしてゐたのがそだつたんか。」

A「さうよ。それがあの奧樣なんだ。それがマア飛んだ目に逢つたつてもんだ。」

B「ど、ど、どんな目に逢つたんだい。え、おい、あの奧樣がどんな目に逢ひなすつたんだい。」

A「何だい、○州、確りしろつてば。そんなに慌てたつて間に合やしねえ、もう一年も前のこつた。」

B「でも何うしたんだい、心配だアな。」

A「もう仕方がねえよ。……何んだか知らねえが、奧樣が下谷の××町のところを馬に乘つて通つたんだ。あの邊は善くねえやな、そいつをおめえ、又運惡く、往來で遊んでゐた子供を蹴とばしたもんだ。サア事だ。何しろあすこいらの奴は、おれ達と違つて、「お旦那樣方や。」で行くんぢやねえんだからなア。まかり間違やどころぢやねえ、ふだんから命のやり取りが商賣だ。怪我だつて、たいしたこともなかつたんだが、皆して奧樣を馬から引きずり下ろして、あこらの露路へ引張り込んで、一體何うしてくれるつて話だ。その時、あの奧樣が當り前の女だつたら慄え上つて、ありたけ渡して逃げ出して助かつたんだらうが、何しろ平生からそんな中に入つて、そんな連中を扱ひつけてるつもりなんだから、ビクともしねんだ。お金で濟むことなら何うにでもしてあげるから、兎に角も此の子の家へ行つて親達にも能く詫をいはう、誰れか案内してくれないかつていふ話だ。」

B「廢せば好いのに、飛んでもねえことを云つたもんだなア。」

A「そこがやつぱり奧樣だアな。ふだん役人達に連れられて歩いてゐる時の心持だつたに違えねえ。ところが又惡い事にアそこんとこへ、「わしが案内しやせう。」つて出て來たのが、あの寅だつたんだ。」

B「寅つて誰れだい。」

A「さうだ、おめえは、あつちの方はちつとも知らねえんだな。寅つてえのア何よ、あの邊に××熊つてえのが居るんだ、それの乾兒よ。見たとこは優しい色男なんだ。そいつが、馬なんざアそこらの奴に番をさせといて、奧樣を連れて、こゝが此の子の親の家だつて案内したもんだ。奧樣は入つて見ると、ガランとした空家見てえなとこで、誰れも居ねえぢやねえか。寅の奴、「オヤ居ねえ。」とか何とかいつて、近所で聞いて來るなんて云やがつて、奧樣を待たして置いて、やゝ暫くしてやつて來て、「今朝引越しちやつたんで、漸く行先が解つた。」なんていひながら、そこら中ぐるぐる廻つて、奧樣を變挺なとこへ連れ込んだもんだ。來て見ると、親父は二階に居るから、汚いけど上つて呉れつて、奧樣を二階へ上げ

たもんだ。」

B「何のこつたい、そんなに七面倒な眞似をするのは。」

A「まあ聽いてなせえ、……奥様は寅と一緒に二階へ上つて見ると、大きな、酒呑童子のやうな男が一人で酒を飲んでるだらうぢやねえか。奥様は、この人があの子のお父さんかつて聽くと、「まあそんなものでせう。」なんて挨拶だ。奥様は、詫びに來たに違えねえんだから、それをいつて、お金で我慢出來ることなら、邸へ歸つてからでも何うにでもするつていふと、酒呑童子は、醉つぱらつて、「そんなこたア何らでも好うがさア。マア此處へ來てお酌をして貰ひませう。」なんて話だ。「あんな餓鬼は其處ら中にウヂャ〳〵してるから、いくら蹴飛ばしたつて種はつきねえからご心配にア及びません。」なんてんだ。」

B『何んだかおれにアちつとも話が解らねえ。』

A『おめえにア解るめえ。その酒呑童子が××熊なんだ。熊つてのアをかしな奴なんだ。人のしてゐることは何んでも出來るつて威張つてゐるんだ。成金て奴が女なんぞ連れて歩いたりするのを見ると、熊は屹度、「おれだつてあんな眞似しようと思やア何時でも出來る。」つて威張るんだ。立派な風をした美しい女が馬車や自動車で通るのを見ると、「おれだつてあんな別嬪にお酌をさして抱いて寢るに譯はねえ。」なんて威張るんだ。そいつを乾兒が笑はうもんならムキになつて怒つて、「今に見ろ。」なんて呶鳴るんだよ。それをあの寅の奴が本氣にして、「おれだつて親分にそれをさせようと思や譯はねえ。」なんて、力んでゐるんだ。でおめえ奥様を捉えて、何でも酌をしろつて聽かねえだらうぢやねえか。「おれアおめえさんのその男のやうな裝がすつかり氣に入つちやつた。美人て奴は何をしても好いが、男の裝をすると又格別だ、そいつは西洋の手古舞て奴だらうな、あいつア日本でも素的に意氣なもんだ。」なんてんで、何うにもならねえ。奥様は凛とした顏をして、熊を睨んで居なすつたが、ふいと立ち上つて歸りかけなすつた。すると寅が階子段の所へ頑張つて、奥様を下りさせねえんだ。奥様は仕方なしに又坐つて、熊が何云つても身動きもしずに居なすつたんだが、何らしたんだか、そのうちに、奥様からお酌をしようと云ひ出しなすつた。熊め好い氣になつて、奥様にお酌をさして、「寅公何うだい、おれは譃はつかねえぞ。」なんて云つてやがら。そのうちに熊はいゝ心持になつちやつて、いきなり奥様を兩手で抱へ込まうとしたんだ。奥様は、小鳥のやうに飛び上つて壁を背中にして身構えして、ピストルを向けて、寄れば撃つぞつてんだ。」

B「大變なことに成つたなア、だから女はお轉婆はしねえこつた。でもピストルを向けられちやア熊でも寅でも閉口したらう。」

A「ところが駄目よ、ピストルなんか西洋人向きで、日本人には利かねえやなア。横つちよから寅が飛び込んで、奥様を抱きすくめて、熊が「ピストル頂戴。」だ。さうして寅に、「おめえこれ持つて下で張番してゐねえ、お前がこゝに居ちや別嬪がはにかんでいけねえ。」だとさ。」

B「やれ〳〵飛んだことになつちやつたなア。それから何うした。」

A「おめえの頓ちきも圖が知れねえなア。「それから何うした。」だつて云やがら。アッハッハッハ。それでご離縁て譯ぢやねえか。解つたかい。」

B「それぢや奥様は何か……たらとう熊ッて奴に何か……」

A『何が「何か。」だよ。犬に喰はれた韋駄天がまだ盛り上らねえな。アッハッハ。』

B『お氣の毒樣な。……恐ろしいこつた。……そのお氣の毒な奧樣を又、何で旦那樣が離縁したんだらう。』

A『そいつアおれにも解らねえ。華族なんてものは何んな眞似でも出來ると見えるなア。』

B『それでも罪咎もねえ奧樣を追ひ出すなんて、あんまりな華族さんだ。』

A『さうだなア。熊のしたことを、それまでそんな華族さんがしてゐたのかと思ふと、いめいめしい氣がするなア。』

B『おれにア何だかよく解らねえ。』

A『解らなかねえぢやねえか。考えて見なせえ、熊も可哀さうだぜ。成金や華族が譯なしやつてゐることを、熊にや命がけでなきア出來ねえんだからなア。』

B『だから誰れもそんな恐ろしいことはやられねえんだ。そいつをやつつけるんだから恐ろしいんだ。……あゝいやだ。……△的、おれは怖くなつちやつた。恐ろしい奴がゐるもんだなア、あの好い奧樣を飛んでもねえ目に逢はしやがつた。おれは眞個に怖くなつた。そんな奴が澤山ゐるかと思ふと恐ろしい。だからおれは後から首を絞められさうな氣がしてならねえんだ。』

A『箆棒め、おめえのやうな薄汚えジャンコ首を絞めたつて何になるい。己惚れてやがら。おれ達に怖えなア飯場に寢る晩に新佛に起される位なもんだ。』

B『だつておれは奧樣にお金を貰つてから、それが怖くつてしやうがねえんだ。そんな恐ろしい人間が居るたア知らなかつたけど、怖くて怖くて夜も財布を彼方へやり此方へやり、おちおち寢たことはねえ。』

A『アッハッハッハ。それつぽちの金を持つてるのが、そんなに怖けれアみんなおれに呉れちまひなせえ。さうすれア今夜から樂々寢られるぜ。』

B『さうよ。おれもさう思つてるんだよ。けれどもやつぱり人に遣りたかねえんだ。』

A『そんなら勝手に絞められなせえな。』

B『えゝいやだ。後生だからそんなことを云つてくれねえでくんな。……飛んでもねえ話を聞いちやつたなア。……おめえ、それ眞個か。』

A『眞個か虛か寅公に聽いて見なせえ。』

B『あゝいやだ。身體がゾク〳〵すらア。おれの頭をグル〳〵巻いてくれたアノ親切な立派な奧樣を……えつ考えてもゾッとすら。……おらアもう行くぜ。あばよ。』

A『あばよ。氣をつけねえよ。アッハッハッハ。』



○豚の悲劇は屠者の喜劇なり。

○外交家と幽靈とは微笑を以て敵を威嚇す。

○捨てられたる政治家の壯語すると、破れたる靴の鳴るとは悲し。

○嗅覺なきものには屁は快活なる音なり。

○古の君子は盗泉の名を惡んで飲まず、今の君子は盗泉の名を更めて飲む。

○鷄犬を養ふを樂みとし、父母を養ふを煩ひとす。

○女子たることを失へる女子は女傑たり得べし。男子たることを失へる男子は二本棒たるに止まる。

○昔賣りたる良心を、金錢にて買戻さんと試むる慈善家は徒勞に終らむ。

○貧者に惠むは天に返すなり。(「如是閑語」より)

老人形師と彼れの妻

『何うも僕には能く解らんのだがね。君に話したら屹度解ると思ふ。』

そんなことをいつては、よく色々の話を私のところへ持ち込むのが此の男の癖なのだ。時々フラ／＼と旅に出て、短くて一月、長いと一年近くも行方を晦ましてゐるかと思ふと、又フラフラと歸つて來て、大抵は夜遲くなつて、私のところへやつて來て、携帯のウヰスキーの壜――ポケット用の平壜でなく、惡く胴の張つた、頭の馬鹿に長い大壜をかゝへ込んで來るのだから驚く――を、自分の尻と一緒にそこに落ちつけると、物々しく頭をかしげながら、例の『何うしても僕には。』を呟くのだ。

疊み込みの、ニッケルの小さなコップの先を指で伸ばして――赤坊を抱いたほど嵩ばる大壜を平氣でかゝへて歩きながら、コップを疊み込みのにしてゐる理由はわからない――ウヰスキーを手酌でチビリ／＼舐めながら、話し出す話は、大抵は眞個に出來ないやうなものばかりなのだが、私には、それが眞個でないと思はれるだけ、それだけ眞個よりも確かなことのやうに思はれて、ついうかと終ひまで聽かされてしまつて、彼れが、

『何うだい、君には解るかい。』と調子を變へて話の終つたことを告げる時に私は、初めて自分に返つて、『何んだか能くは解らない。』と思ひながら、彼れの信頼を裏切るのが彼れには氣の毒であり、自分には恥辱であるやうに思はれるので、曖昧に、しかも『解つてはゐるが、君に云つて聽かしても駄目だ。』といふ腹を見せるやうな調子で、たゞ、

『さうさなア……』などと、思はせぶりをするのが常である。

それにまた、ちつともほじくり立てをせず、一層うまさうにウヰスキーを舐め出す彼れの樣子を見ると、彼れの方が私よりも餘つぽど能く解つてゐるやうにも見えた。

この時も、櫻の咲きかけたジト／＼雨の降つてゐる晩だつた。何もかも例の通りで、彼れはやりだした。

彼れは、その意味のない旅行の間に、フラフラとA――峠をS――港の方から越えつゝあつた。

A――峠をS――港の方から此方に越すと急に寒くなる。彼方では、なだらかな丘の蜜柑畑から陽炎が立つて、薄緑に色つきかけた枯山に照りつけてゐる強い光線が、キラ／＼と眩いほどで、A――山脈の明るい色をバックにした一體の空氣は、紫色に生温かかつたが、峠のトンネルをくゞると、急に、まるで舞臺裏に入つたやうに、冷めたい陰鬱な感じが身に浸みる。舞臺を明るく温かくしてゐたA――山が、打つて變つて、光線と温度とを峠の向うに喰ひとめてゐる障壁となつて、暗く、重たく頭の上に蔽ひかぶさつて、脚下にはドス黝い常緑樹と、柴を積んだやうな落葉樹と埋もれた、深い、冷めたい谷が、薄暗い山あひを果もなく續いてゐる。

Y――温泉に着いた頃は、もう日が暮れてゐた。

街道から谷に降る急坂を、轆々と凄じい音を立てて、白泡を湧かせてゐる流れまで下つて、そ

この釣橋渡ると、すぐそこが温泉宿だ。都會風の派手な繁華な温泉場からは、四里ほども山路を上つて來なければならないので、この宿は、まるで山の奥の靜けさと、淋しさと、冷めたさとを持つてゐた。殊にこの頃は、都會の客の姿もなく、三階建の宿は、薄暗い電燈に淋しく照らされて、人の氣もないやうに深閑としてゐた。

透き通るやうな湯が、淡い湯氣に撫でられて、惜し氣もなく溢れてゐる湯槽につかりながら、直ぐ下を流れる谷の、一種の抑揚を持つた高い水音を聽いてゐると、彼れの疲れた身體が、溶けるやうに魂から離れて、何處かへ流れて行つてしまひさうな、何ともいへない夢心地になる。

と彼れは、俄かに温かい何かで、鼻と口を押へられて、烈しく嚥せ返つて、我れに返ると、

『ホ、ホ、ハ、ヽ、ヽ。』

突然刺すやうな甲高な笑ひ聲が耳元に聽えて、眞白いものが湯槽の裡の彼れの直ぐ傍で搖れた。湯の波が彼れの顔の下半部をベロリと洗つた。

『ア、可笑しい。私ソーッと入つて來て、一寸身體をかうやつたら、お湯があなたの鼻の上までかぶさつて、「ゴボ〳〵、ゴホン〳〵。」だつて。ア、可笑しい、ア、可笑しい。』

流石の彼れも、夢の續きのやうな顔をして、その女――それは女だつたのだ――を見た。

その女は、半身を湯から出して、身體を悶えさせて笑つてゐた。女は、薄暗い電燈の光を背にうけてゐたに拘らず、彼れは、判然と、その女の印象を得た。

蒲鉾形の眼――彼れはそんな風に思つた――が黒眼で一杯になつてゐて、無造作に投げつけた眉毛が運よくその上に止まつた自然の手際に（彼れはそんな風に語つた）彼れは見惚れた。彼女の大きい口は、想像し得られない角度で自由に動く時に、キリ〳〵と音がしさうだつた。凝と見せられても、想ひ浮べることの六かしい動的な彼女の顔の輪郭に、彼れは、むごく引きつけられて、その上引ッこつかれるやうな、美と力とが協同した虐待を感じた。

（『たまらないんだ。たまらないんだ。』と彼れはウヰスキーを舐める手を休めて、身體を悶えさせた。――本氣のやうに、又空々しい樣子で。）

無論彼れは、本能から云つても、經驗から云つても、さういふ場合に、蠱惑や、感激や、羞恥や動悸を感じたりする男ではなかつた。從つて當然、それは彼れにとつて、感謝でも反感でもなかつた。たゞ湯にひたりながら、少しばかり寒氣を感じた。――といふさへ誇張に近かつた。

彼れは悲しくなつた。何故ならば、この光景が、彼れにとつて、たゞそれだけだつたからだ。閃光のやうな刹那の刺戟からさへ長い劇や複雜な詩を感ずる頭腦と胸とが、彼れにとつて、この場合何ものよりも欲しいものだつたに違ひない。

『アヽア。』と彼れは湯の中の身體を、全く前のまゝの姿勢に保ちながら、生欠伸をした。もうその時は、何も欲しいものはなかつた。

『何方からおいでになつて？』漸く笑ひ已んだ女は、さういつて、その潤く張つた胸を湯に沈めた。

『S――の方から來ました。』女の性質が解らなかつたので、彼れは、一寸用語の形式に迷つたが、さういふ場合に取る安全の方法を選んで、彼れはさういつた。さうして彼女に同じ問ひを向けようと思ふ途端に、村の人達らしい男や女が、ゾロ〳〵と子供まで連れて入つて來て、彼女を湯槽の中に發見するや否や、めい〳〵勝手な

挨拶を、ガヤ〳〵と彼女に投げたので、浴室は、一時雑音の反響で賑ふ外はなかつた。

皆は、彼女を「奥様」と呼んでゐた。さうして、天氣のことや、村の誰れ彼れの今日一日の消息などについて、代る〴〵彼女に話しかけた。彼女は、時々皆を笑はせるやうな批評を挾んで、それに相槌を打つた。

彼れは部屋に歸つて、晩の膳に向つて、女中を相手に、例のウヰスキーを舐めながら、彼女について尋ねた。

女中は、近頃S――から此方へ來たので、委しい事情は何も知らない樣子だつたが、彼女が、何年か前に此方へ來た、東京の豪い人形師の妻だといふことを話した。この女が、話には聽いてゐるがついぞ見たことのない「生人形」といふ、眞個の人間ほど大きい人形を作る名人が、彼女の夫であると話した。村ではその人を「ヲカ（人形師の家の在る邊の總稱）のとうさん」といつてゐるので、――それは彼女自身が夫の人形師をさう呼んでゐるから起つた呼び方らしい――此の女中は、その人形師の名は知らなかつたが、何時も此の宿の湯に入りに來るので、人物は能く知つてゐた。その人が、彼女とは大分年が違つて、もう六十に屆いてゐるかとも思はれる禿頭の老人だといふことを聽いて、彼れは驚いた。

この老人形師は、彼女の外に、細君があつて、子供が六七人もあつて、總領は、親の跡を繼いで、一家は東京で立派に暮らしてゐるといふことだから、彼女は、或は妾ではないかといふ評判だと、女中は附け加へた。

見ず知らずの彼れに對する、湯槽の中での彼女の振舞は、良家の夫人としては、餘りに不作法な、餘りに子供らしいものであつた。が、それでゐて、彼女が「奥樣」であるといふ事實、及び立派な妻子のある六十に近い老人が、かういふ女と同棲してゐるといふ事實は、彼れをゾク〴〵させ　ほど、生き〴〵とした事實として彼れに受け容れられた。萬事が、こんな風に出來てゐたら、彼れは、今よりは遙か多くの好意を以て、生存と妥協したに違ひないと思つた。從つて、それらはすべて遠からず、全く平凡な事實の思ひ誤りとして、明日の朝は、もう幻滅に歸してしまふ事實であるに違ひないと思つた。

「そんな御誂へ向きなことが、間違ひでなくつて何んだらう。」さう思つて彼れは、それについていろ〳〵と考へることは、ペテンにかゝることに過ぎないとして、成るべくそれで考へないことにして床についたけれども、睡りに落ちるまで、そのことの外は、何も考へられなかつた。

そのことがなかつたら、彼れは翌朝乾度此の宿を立つたに違ひないが、朝になつても彼れは立たうといふ氣がしなかつた。彼れはそのことについて、もつと探査して見ようといふやうな、おつくうな氣分には無論なれない男であつた。默つて滯在してゐたら、その事柄が、彼れの目の前に、自らやうに開展して行くとでも考へてゐるやうに、彼れは、何といふことはなしに、晝ごろまで宿にゴロ〳〵してゐた。

すると宿帳を持つて來た主婦が、何かのことから、老人形師について語り出した。

主婦のいふところによると、老人形師は、此の土地に少しばかりの田地を持つて、贅澤といふほどでもないが、この土地にしては派手な暮らしをしてゐるらしい。Y――といふ土地の豪家でも、奥さんの平生の身裝や、家の雜用などは、人數こそ多いが、人形師のそれには及ばない、尤も萬事東京風に氣が利いてゐるので見た眼に花々しく映ずる割に、土地の人の考へてゐるほどさう贅澤なのではないかも知れないが、人形師の奥さんの、水際立つた容姿や身

裝には、眞夏になると偶に此の温泉に見える東京の令孃方にも見られたいやうな、雅びた花やかさがある、尤も髮などは、始終洗ひ髮を雜に束ねたやうな結び方をして　時によると、火が附きさうに、モヤ／＼にさせたりして、滅多に白粉氣はないが、それでゐて、透きとほるやうに、氣味の惡いほど綺麗だと、主婦はいつた。

　彼女と老人形師との關係については、主婦も噂の外には、餘り知つてゐなかつた。その噂によると、彼女は、老人形師の出入してゐた華族の令孃で、老人形師との關係の爲めに、勘當されてゐるのだといふことである。老人形師も、彼女の爲めに、家を棄てゝ此の地に來てからは、妻子とは、音信不通の有樣で、たゞ末の娘といふのが、何の關係でか、彼女と非常の仲好しで、時に内所で、父老人形師にも内所で、此の地へ折々尋ねて來て、此の宿に泊つて、一寸の間彼女に逢つて、何時も名殘惜しげに歸つて行く。二人は丁度同じ年頃で、顏立こそ異ふが、容姿といひ、擧動といひ、兄弟といつてもいゝ位、能く似てゐる。その上聲まで同じやうで、襖で聴いてゐると何方が何うやら判じかねる位だと、主婦はいつてゐた。

　老人形師は、毎日々々木彫の女の人形をこしらへるのを仕事にしてゐる。けれども、一つでもその人形の完全したのを、此の村では誰れも見たものがない。人形師の家の婆やの話では、こしらへ掛けては、打ち碎いて、焚木にしてしまふのださうである。從つて老人形師の作品を手に入れたものは決して無い譯だが、何かの拍子で、老人が、碎くことを忘れたのを、ソツと婆やが持ち出して、此の宿の主人に呉れたのが、此の村にある老人形師の唯一の作品なのである。

　主婦が態々持つて來て見せてくれたその未製品は、たゞやゝ首の形が出來てゐるといふばかりで、胸から下は全く素材のまゝになつてゐて、割らない薪の樣に見える位の全く混沌たるものであるが、紅ごなしの首を能く見ると、その枯れ切つた堅い木材が段々生長して行く肉の塊ででもあるかのやうに見えて、その不完全のうちに、限りない完全を隱してゐるとしか思はれないと、彼れには感じられた。しかも、さうして見てゐるうちに、その混沌たる女の首が、昨夕湯槽の中の夢の續きに見た彼女の相貌そのまゝになつて來ることを感じて、彼れは慄とした。

『これはたいしたものだ。』彼れは覺えずさういつて、手に捧げてゐたその素材をそこへ置いて、『これは大事にしてお置きなさい。』

『何んですか、御覧になる方が皆さう仰しやります。繪をお描きになる方などが能くお見えになるので、御目にかけると、屹度大事にして置けと仰しやるんですよ。』主婦はさういつて、餘り大事でも無ささうに、手荒く、引摑むやうにして、それをブラ下げて行つた。

　流石に谷の底も、日中は温かい。庭先の桃の花は眞紅に咲き誇つてゐる。所在のない彼れはふら／＼と宿を出て、高い街道筋の往來に出た。通りかゝりの、村の人らしいのに「ヲカ」の方角を聴いて、其方に足を向けた

　街道筋の人家の中程の、『成田不動尊出張所』といふ標柱の立つた道を曲つて行くと、一側並びの人家の裏は、すぐに畑や水田が階段のやうに、山の方へと重なつて、その鼻の先が、A——山脈の屛風のやうな峯つゞきの裾に突き當つてゐる。その屛風が折れ曲つた奥へ、石の多い一本道が續いて、所謂「ヲカ」の方へと上つて行く段を此方から見ると、直ぐにも、山峡

の、松や檜の奥深い茂みに入り込みさうに見えるが、上つて行くと、道は、山に沿うて、何時までも何時までも、ひらけた美しい芝草の傾斜に沿つて上つてゐる。Y――温泉のある谷が、目の下に開展して、岩にせかれた急流は、白粉を流したやうに眞白で、深い森の底に、宿の三階が箱庭の家のやうに見える。

　彼は傾斜の芝山の裾の草原に腰を下ろして、恍乎と眺めてゐると、強い日光に、背中が熱い湯を浴びてゐるほど温かい。近いと思つたナカが思ひの外に遠さうなので、もう此の先へ進む氣にもなれないほど、暑くるしい倦怠を感じて、彼れは尋ねる人の通るまで、その芝生に横になつてうつら／＼してゐた。

　籠を背負つた子供が、ナカの方へ下る路を來かゝつたので、横になつたまゝ距離を尋ねたが、子供の言葉と言葉とが通じないので、要領を得なかつた。

　元來た道へ下りようとして立ち上つた彼れは思ひかけず、彼女が、同じ芝山の道もない枯草の裡を此方に來かゝるのに出會した。小さい籠を小脇に抱へて、裾をからげて、赤い長襦袢を蹴返しながら、所々に刈り殘された枯草を、跨ぎ跨ぎ此方へ歩いて來る彼女は、彼れの居るのに全く氣づかないらしく、折々舞踊のやうな足どりをしながら、少女のやうに、彼方此方に道草を喰ひながら歩いてゐる。

「マア昨晩のお客様ね。何うしてこんな方へ？　お散步？」さういつて、彼女は、親しい友人にでも逢つたやうに、自分の行く方角をさへ取り違へて、彼れと列んで步き出した。

「貴方のところを訪問しようと思つて。」彼れは、殆んど謔をつくやうな心持で、眞個のことをいつて、大きく笑つた。

「眞個？　謔でも嬉しいわ。けど私のとこなんぞもう訪問する必要はないわ。」

「何故です。」

「でも私こゝにゐるぢやありませんか。」

「ところが私は、その「人形師のおとうさん」といふ老人をお尋ねしたかつたのです。」

「おやさうだつたの？　だけど、そんなことをいふと、私を恥かしめることになりはしなくつて？　失禮な方ね。」

「自惚れといふものが、尊敬さるべきものであるとすると、如何にも、私は貴方に失禮しました。」

「イヤな口の利き方をするのね貴方は。まづい飜譯芝居かなんかに出たことがあつてゞ」彼女は眞から忌な言葉を聽いたやうな顏をしたが、直ぐに、「許して！　私のいひ方が惡かつたのだわ。そんなことは何うでも好いにしませう。でなんなの？　あなた私のおとうさんに逢ひたいのですつて。」

「えゝ、一寸そんな氣がしたのでこゝまで出掛けたんです。」

「あなたが女でなくつて仕合せだつたわ。」

「何うしてです。」

「私これでも隨分嫉妬心が強いのよ。」

「さうですか。人形師といふ方はつまりあなたの御主人なのですね。」

「御主人つて？」

「御良人です、ハズバンドです。」

「何故そんなこと聽くの？」

「矢張り失禮でしたか？　けれども、昨晩あなたは、私の鼻と口へ湯を入れて、私を湯槽の中で溺死させうと企てたでせう。こういふ大それたことをなさる方には、その位な質問をしても好いでせう。若し私がもつと復讐心の強い人間だつたら、中々そんな質問位では承知しますまい。」

　彼女は又も、昨夜のやうに笑ひ出した。さうしてたうとう苦しさうに、芝の上に笑ひ轉げて

しまつた。

慌てゝ、起き直つて、涙をふきながら、下から彼れを見上げて、

『あゝ苦しかつたこと。少し寄りませうよ。まるで御座敷のやうに、暖かですことよ。』

二人は芝生の上に、斜めに相對するやうに坐つた。彼女は、しげ／＼と彼れの顏を見ながら云つた。

『私ゆうべは口惜しかつたから、あんな惡戲をしたのよ。』

『何が口惜しかつたのです。』

『私ゆうべね、何の氣なしにお湯に入つた時に、ふとあなたの顏を見てドキッとしたのよ。てつきりあの方だと思つて……』

『あの方とは？』

『あの方よ――誰れでもいゝぢやありませんか。――それにね、極く傍へ寄つて能く／＼見たら違つてゐたのよ。口惜しかつたから、睡つてゐたのを幸ひに、お湯をかぶせてあげたのだわ。あなたがあの方に似てゐるのが惡いのよ。ほんたうに明るいとこで見ると、なほ能く似てゐるわ、他人のそら似ね。』

『あなたが失戀させた人に、私が似てゐるといふのですか。』

『失戀だつて？……さうぢやないわ。でもさうかも知れないわね。……いゝえ矢張りさうぢやない！』

『何ういふ關係の方です。』

『私の……今あなたが何とか仰しやつた……さう／＼御主人よ。』

『御主人？　さうするとあなたには、おとうさんの外に、御主人がおありになるのですか。』

『さうよ、だから私嫌ひなの。ほんたうに不自然だわね。』

何が不自然だか、彼れには見當がつかなかつた。

『その不自然の御主人に私が似てゐるのですか。』

『さうよ。アラほんたうに似てゐる事よ。いやね、そんな六かしい顏をすると、なほ似て來てよ。よして頂戴！』

蓮葉にものを云つてはゐるが、例の蒲鉾形の、黑瞳で一杯になつてゐる彼女の大きい眼は、恍乎と、影を追ふやうな、悲しさうな色を見せてゐる。

彼れは一方で、縁もゆかりもない他人の祕密から、この邊で引き返さなければならないといふ自制を感じながら、他方では、何處までも、その祕密に喰ひ込みたいといふ強い誘惑を感ぜずに居られなかつた。それに自分の心の影を落す大地を求めてゐるやうな、彼女の、いぢらしい態度に觸れて、彼れは、そんな道徳問題以上の立場に立つてゐるやうにも感じた。幸ひにも、彼女は、もつと先まで彼れを引きずつて行かなければ已まなかつた。

『あの方はね、あなたのやうに善い人だつたのよ。さうしてあなたのやうに、私のことを善い人だと思つて下さつたのよ。』彼女は、あの方にあるものはすべて彼れに在ると信じたらしかつた。『でもね、大抵の人は、お互にみんな善い人たちだと思つてゐるんでせう。けどさう思つてゐる人達同志がみんな結婚してしまつたら大變だわね。つまり善い人だつてのは、人間だつてのと同じ事なんですから、善い人だつてんで一緒になるなら、人間だつて理由で一緒にならなければならない譯だわね。』

『大そう論理的ですな。あなたはあの方が人間だといふ理由だけで一緒になられたので大に後悔されたのですね。』

『さうね……別に後悔てこともないのよ。たゞ一緒になつてゐなければならないといふ心持がちつともしなかつたのよ。あの方はね、それ

は男ぶりも立派だし、地位もあり、將來もあり、財産もあり、學問もあり、思想もあり、趣味も中々發達してゐたし、行ひも正しいし、……マア社會や男子に必要なものは大抵持つておいでだつたのよ。だからあの方が人間でなくて會社銀行か學校だつたら、大勢の人が喜んで入つて行つたのでせうけれど、人間だものだから、さう大勢の役には立たないでせう。で私がそれを獨占してしまつたつて、大そう皆に羨ましがられたのよ。けれども私は、何もそんなものを獨占したくも何ともなかつたのですわ。財産や、學問や、才能は、成るべく大勢の人の役に立たせた方が好いのですから――男ぶりだつてさうだわ、立派なものなら成るべく大勢に賞翫させた方が廢物利用ぢやありませんか、私そんなもの、ちつとも獨占したかないわ。』

『と云つて、あの方を大勢の賞翫に供する勇氣もなかつたでせう。』

『勇氣なんか要るものですか。あの方の持つてゐるそんないろ／＼のもの、少しも欲しかないんですもの。あなた解らないのね。あの方の才能や、學問や、道德やそんなものは、私に呉れる爲めにあの方が持つてゐるものぢやないのよ。あの方はそれを世間に賣つて御金にしてゐるんぢやありませんか。そんな代物をいくら私の前に積んだつて、私はあの方が欲しくなりはしないのよ。呉服屋の番頭が、いくら私の前に立派な帯や着物を積み上げたつて、私はその番頭が好きになりやしないわ。』

『それだのに、何んであなたはあの方と結婚されたのです。』

『さうねえ……、私少し誘惑されたのかしら。』

『誘惑とは？』

『番頭が澤山立派な帯や着物を見せびらかすでせう。で皆が、「お前あの番頭と一緒になると、あの帯や着物は皆お前のものになるよ。」つて私に勸めたのよ。で、私誘惑されたのかも知れないわ。子供だつたのですものね。』

彼女は一寸考へたが、急に烈しく身體と一緒に首を振つて、

『いゝえそんなことはない、そんなことはない。私そんなものはちつとも好きぢやなかつたのですものね、屹度、皆さうするから私も何といふことなしに、たゞ皆にいはれて、皆のする通りしたんでせう。さうだわ、皆の眞似をして、皆のよりもつといゝ物を取らせられたんでせうね。』

『其の時分は、今のおとうさんとは何うだつたのです。』

『今のおとうさんは、私そのもつと前から大變すきでしたの。』

『それでゐて、何うしてあの方と結婚されたのです。』

『結婚したつて、好きなものが嫌ひになる筈はないと思つてゐたからよ。そんなら構はないぢやありませんか。』

『その通り行きましたか。』

『えゝ、なほ好きになつたわ。』

『それで結局あの方をすてておとうさんと一緒になられたんですね。』

『すてるなんて……そんな必要ないわ。』

『すてたから、おとうさんと一緒になれたのぢやありませんか。』

『すてたつてのか、何てのか、知りませんけれど、初めから何んでも無かつたのですものね。だから私たゞ、「もうつまらないから廢しませう。」つて云つたのよ。さうしたらあの方は大變驚いたやうだつたのよ。何んでも無いことを廢しにするのが、何うしてそんなに驚くことなんだか、私にはちつとも解らなかつたわ。あの方はね、「その理由は何んだ。」つてさういふのよ。私「理由なんかないわ。」つて云つたのよ。元々

そんなことを續けてゐる理由がないんですもの、ね、廢す理由なんか要るものですか。さうしたらあの方は「理由がないと廢す譯に行かない。」つていふのよ。「何故です。」つて云つたら、「理由がないと法律が廢すことを許さない。」つてさういふのよ。あの方はそんなこと云つたんですけど、何時の間にか私達は廢してしまつたのよ。でも法律から何とも云つて來やしなかつたわ。オホヽ、脅威ね。」

「でその時から、おとうさんと新しい關係が結ばれたんですね」

「別に新しい關係なんか結ばれたんぢやないのよ。前の通りですわ。」と彼女は少し怪訝な顏をした。

「ぢや、おとうさんとの關係は、それからずつと後のことなのですか」

「ずつと後だつて同じことよ。」彼女は益々怪訝な顏をして、眉を寄せた。

ウヰスキーの醉の廻るにつれて、愈々滑らかな調子で、こゝまで話して來た彼れは、ふと話を切つて、赤くなつた顏を向けて云つた。・

「夫を捨てて人形師に走つた彼女が、その人形師と「新しい關係なんか結ばれたんぢやない。」「ずつと後だつて同じことよ。」といふのを聽いて、僕が何んな感じを持つたか、君にも大抵推察がつくだらう。實際僕は、日本語で話されさへすれば、大抵の事は解るつもりでゐたが、彼女の日本語は僕の語學の自信を覆してしまつた。全く僕には、和蘭語を聽いたやうに解らなかつた。で僕はもう堪忍がならないと思つた。それまでの彼女は、初めて逢うた僕に對して、產れ落ちるとから對面してゐる彼女自身に對するが如き調子で、物を云つてゐた。無論それは矢張り解らなかつたさ。然しその解らなさは大きい透明の硝子玉の中味が空間であるか塡充されてゐるかが解らないといふのと同性質の解らなさだつた。解らないには違ひないが、僕の眼には、ちやんとそれが見えてゐた。然るに此處に至つて、彼女の硝子玉は、忽然としてビリアードボールのやうに、中味のわからないものになつてしまつた。彼女は矢張り不透明の衣服と皮膚とにつゝまれた並の女になつてしまつた。僕は果然ペテンを喰つたと思つた。初めからそれは覺悟の前で、今の世界では僕の面白いと思ふことは三分とは續かないと、今の今まで十分覺悟をしてゐながら、つい引つかゝつてしまつたなと思ふと、僕は耐らなく腹が立つた。――何がそんなに腹が立つたんだなんて、質問されちや遣り切れないね――腹が立つぢやないか、僕は彼女が、人形師と自分との關係を、證據不十分の裁判で無罪にして貰はうと思ふ心根を賤しみ且つ憎んだのだ。彼女は、何故に堂々とその關係を公言して、「懲役にでも死刑にでもしやアがれ。」と叫ばないのだ。そんな平凡くたな女ならこんな山の中まで探しに來なくたつて、何處にでもごろごろ轉がつてゐら、とさう思つたのだ、僕は。然しまあ怒らんで聽きたまへ――なに怒つてゐるのは僕の方だつて、成るほどね――で僕は大に腹が立つたが餘り立ち過ぎてしまつたので、すつかりつまらなくなつてしまつて、狐に憑まれたのが急に醒めたやうな氣持になつて、ふいと立ち上つてしまつたのだ。

「あなた怒つたの？」

「さういふだらうぢやないか、彼女が。

「いゝえ少し醒めかけて來たんです。」

「僕がさういふと、彼女もやゝ鬱陶しさうな顏をして、こんなことをいふのだ、それは、あの方が彼女に對して思ひ違ひをしてゐることがあるから、それだけをあの方に理解させたいと思つたのだが、それも自分の無罪を主張してゐる

と思はれるのが忌々しいから云はずにしまつたのだ。所謂あの方なる先生は――彼女はいふのだ――自分が立腹の結果、紳士の體面をすててある處置をとれば、彼女はすぐに縛られる人間だと、さう思つてゐるのだ。彼女は縛られることなんか怖くはないが、先生が、さう思つて立腹を我慢してゐるのが氣の毒だといふのだ。然し眞個のことは自分とおとうさんとが知つてゐるからそれでいゝ。あの方にも、イミテーションのあの方なる僕にも、何もいふ必要はないてんだ。彼女は、その眞個のことを、あの方には斷じて話すまいといふのだ。それは縛られるのを恐れてゐると思はれるのが忌々しいといふ意地だらう。ところでそれをイミテーションのあの方に話して、僅かにあの方の氣の毒な誤解を解く努力を用ゐたといふ言ひわけにしたかつたのだらう。然しそれも、もう諦めたといふのだ。さう聽くと、僕の一旦醒めかけた狐の醉がまた廻り出して、今は寧ろ此方から、百方嘆願の形で、彼女の淋しい慰安を果させることに努力したものだ。」

さう云つて、彼れの續けた話には、彼女の事實と彼れの幻像との何方を多量を含んでゐるかはわからないが、とにかく、それは次ぎのやうな物語であつた。

彼女が物心を覺えた頃の彼女の家は、K――驛から一里ほど、鐵道線路に沿うてG――街道を上つたところの、高い丘の裾にあつた。S――川の河原のうねりうねつてゐる廣い平野を越して、H――の山の群を眉近く仰いで、その上に眞白なF――山を見上げる、雄大な景色は、幼い彼女の記憶にすら、長く消えなかつた幻像を止めたのであつた。

彼女が物心を覺えてからの第一の印象は、常に彼女の小さい顏の眞上に接近してゐた眞白い女の顏であつた。その白い顏の印象は次第に彼女に明瞭になつた。それは、眞黒な眉毛、細い線の鼻、小さい口、それと際立つた髷を持つた、眞個に眞白な顏であつた。さうしてそれは彼女の母であつた。その母の膝に上つて、その髷を指のさきで突つくのが、彼女の幼い頃の重な遊戲の一つであつた。白い細い母は、殆んど始終彼女をその膝の上から離さなかつたのである。

彼女は母と二人きりで、小さい離れに住んでゐた。廊下續きの母屋には、澤山の男や女が居たが、そのうちで母の次ぎに、彼女の印象に上つたのは、やさしい眼と高い鼻と、凹んだ口とを持つた、全體にまん圓い恰好の、赤い顏の老人であつた。それは彼女の祖父であつた。祖父は母の次ぎに、始終彼女を膝の上に載せてゐる人であつた。彼女は、母の膝の上にゐなければ、必ず此のお爺さんの膝の上に居た。さうして髷を突つく代りに、高い鼻をつまんで遊んだ。

さうして何年か經つた。彼女が六つか七つになつた幼い頃のことであつた。離れに母と共に寢ることになつてゐた彼女は、或る夜ふと眼を醒すと、その傍に必ず寢てゐる筈の母が居なかつたので、彼女は遠い所にすてられたやうな淋しさを感じて、けたゝましい聲を上げて泣き出した。長い間泣いてゐても、母は歸つて來なかつた。彼女は不平と不安とに堪へ得られないで、聲を限りに叫び續けた。その聲に母屋から、お爺さんが驅けつけて、彼女の爲めに母を求めたが、何處にも見出せなかつた。家中の男女が、母屋から來て彼女を取圍んで集つたり、彼女を取殘して何處へか行つてしまつたりしたが、母はたうとう歸つて來なかつた。

彼女は、その朝になつても母の戻つて來ないことを、譯もなく腹立しく思つて、泣き叫んだ。

母屋の老人は、泣き喚く彼女を背負つて、離れに坐つたり、母屋へ行つたり、庭へ出たり、野へ出たりして、しまひに、彼女を母屋の縁に下ろした。漸く泣きやんで、母の居ない理由を尋ね出した彼女を、老人は痛いほど抱いて離さなかつた。彼女は、お爺さんの眼からホロ／＼と涙が流れてその頬を傳はることを見た。

お爺さんこそ、彼女には、第二の母であつた。暫の間は、彼女は、お爺さんが、指先に唾をつけ／＼、澤山の紙撚を、いろ／＼の形に綯んでゐるのを、傍に坐つて、凝と見てゐた。さうしてお爺さんが紙撚をそこに置きさへすれば、彼女は直ぐと、その膝に上つて、鼻を摘んだ。夜は、お爺さんの懐に、顔を突き込んで、圓い身體にすつかり自分を包まれて寢た。時々親類に泊りがけに出かけるのがお爺さんの習慣であつたが、彼女の第二の母となつてからのお爺さんは、さうする時には、必ず彼女を連れて歩いた。初めてさうしなかつた時に、お爺さんのゐないことを發見した彼女は、家中を暴風雨のやうに、泣きながら驅け廻つた。それ以來家中のものは、彼女とお爺さんとが離れることを、洪水の來るよりも恐れた。

それでもたうとう、彼女がお爺さんから引き離される時が來た。彼女が小學校に通ひ出してからの事であつた。或る日曜の休みに、彼女はお爺さんに連れられて東京に來た。さうして近所の親類で何時もするやうに、そこの家に二三日泊つた。彼女は、軈てお爺さんと一緒に歸ることゝばかり思つてゐると、お爺さんから、出しぬけに、彼女が一人其の家に殘されるのだといふことを聽いて、驚いて泣き出して、宥められると、何時もするやうに暴れ出した。けれどもその時は、お爺さんは、何うしても彼女を一緒に連れて歸らうとは云はなかつた。ばかりでなく、しまひに、大きい聲を出して彼女を叱つた。それは彼女に取つて全く意外のことだつたので、彼女は、暫時泣くのを忘れてしまつたほど驚かされた。けれども矢張り泣くより外に仕方がなかつた。お爺さんはいろ／＼のことをいつたが、彼女の耳には一つも入らなかつた。そこの家の小父さんや小母さんは、傍に坐つたまゝで、彼女に何も云はなかつた。泣き疲れて、少し落着いた彼女は、お爺さんが、そこに居る小父さんと小母さんとを指して、「これがお前のお父さんとお母さんだよ。」といふのを聽いて、思はず二人を見上げた。さうして、お爺さんの命令に對して、反抗心の起るのを感じた。

それから數時間經つて、彼女は何時のまにかお爺さんは此の家から居なくなつたことを發見して、自分の家でしたやうに、泣きながら暴れ回つた。小父さんは居ないで、小母さんと婆やと小婢とは彼女を追ひ廻して抑へた。長い間泣き叫んだ彼女は、何うしてもお爺さんの歸つて來ないことを知つて堪らなく淋しくなつた。さうして、急に、お母さんやお爺さんやにしたやうに、誰れかに抱きつきたくなつて、半分夢中で小母さんに抱きついた。小母さんは、彼女を抱いて、さうして、襦袢の袖を引き出して自分の眼を拭いた。

彼女の新たな東京の家は、眞黒に光つてゐる田舍の家に敗けない位、古い、暗い家であつたが、彼女が、家の中の地理を覺えるまでは、可なり長くかゝつた位、廣い、複雜な家であつた。さうして、澤山ある廊下の何れかを傳つて行くと、眞白に輝いてゐる二階建の洋館があつた。その洋館の内には、彼女に解釋されない、キラキラしたものだの、古ぼけたものだの、油繪だの、懸軸だのが澤山あるばかりで、人の子一人ゐなかつた。森として、冷たくて、晝間でも其

處に入ると、彼女は、遠い淋しい國へ行つたやうな氣がして怖かつた。

　こんどの家は、田舍の家のやうに緣先から、遠い野や山が見えない代りに、こんもりと樹木の繁つた廣い庭があつた。大きい池や、小さい山があつて、その池には、緋鯉が澤山に居て、人の足音がする方へ浮んで來るのを、彼女は一番喜んだ。洋館の前には、硝子張りの溫室があつて、その中に咲いてゐるいろ〳〵の草花も、彼女を喜ばせた。

　彼女の新しいお父さんは、古い暗い方の家の、廣い座敷の眞中の大きい机の前に、何時でも獨りきりで坐つてゐて、滅多にお母さんや、彼女のゐる所に來なかつた。さうして彼女が傍へ行くと、默つて、自分の側に坐らせて、默つて彼女の髮を撫でてゐた。

　彼女の新しいお母さんは、居なくなつたお母さんのやうに、彼女に大變優しかつた。さうして居なくなつたお母さんほど綺麗であつたうへに、あんなに悲しさうな顏をしてゐないで、時々彼女が可笑しがるやうなことを云つたり、したりするので、彼女はそれを嬉しく思つた。お先のお母さんは、彼女には、懷かしい人だつたが、今度のお母さんは、たゞ面白い人だつた。先のお母さんは、時々何んだか怖いことがあつたが、今のお母さんは、ちつとも怖くなかつた。

　今度の家には、彼女の新しい弟もゐた。弟は彼女よりも二つか三つ下で、大抵お母さんの傍に、おとなしく坐つてばかりゐる靜かな兒であつた。初めて彼女が、その兒を見た時に、眞丸い眼をして膨れた頰をして、珍らしさうに彼女を見た。その時に彼女は、すぐとその兒が大變好きになつた。さうして、それが自分の弟だといふことを聽かされて、嬉しくてたまらなくなつて、その兒に抱きついた。さうして、はにかみながらにこ〳〵してゐるその兒を引張つて、庭に下りた。彼女は、その兒を引張つて、誰れも人の居ないところに行きたいと思つたのであつた。けれども、そのあとから、お母さんが、笑ひながら附いて來たので彼女は失望させられた。

　東京に於ける彼女の生活は、こんな風にして始められたのであつた。

　それから十年近くも後のことであつた。

　彼女が、A——女學校を卒業する前の年の春に、その頃澤山の會社の重役だつた彼女の父は、それを殘らずやめて、或る大會社の社長になつた。それから間もなく、この古い黑い彼女の家は取毀されて、その秋には、新しい明るい大きな家が出來上つた。同時に、庭續きの竹藪や雜木林が切り拂はれて、そこに借家が四五軒建てられた。その一番庭に近い一軒は、知り合ひの人でなければ貸さないことにしたが、彼女の學校友達で、彼女と仲好しのF——子が彼女の家へ遊びに來て、その家を、自分の父の隱居所に借りたいと云つた。彼女は喜んで、早速父の承諾を得たが、友達が隱居所といつたので、不審に思つて聽いて見た。

『あなたのお父さんは、もう御隱居をなさる歲なの？』友達の父といふのは、東京で有名な累代の人形師であることは、彼女も知つてゐた。さうして大きい名札に、その人の作と記してある生人形を感心して見たこともあつた。彼女の仲好しのF——子はその六人兄妹の末子であるといふことも知つてゐるので、人形師は可なりの歲であるとは思つてゐたが、自分と同じ歲の娘の親が隱居するやうな歲であらうとは、彼女には思へなかつたのである。

『いいえ、まだ隱居する歲ぢやないのですけれど……』

聽かれた友達は、さう答へて、急に顏を曇らせて言ひ淀んだ。
「御病氣なの？」と彼女は同情したやうにたづねた。
「さうでもないのよ……」
躊躇した末に、F――子は自分の父に關して、彼女にこんな話をした。
「名人M――」と呼ばれたF――子の父は、若い頃から變人で通つてゐたが、この頃になつて、全く人形を作らなくなつてしまつた。どんな註文があつても、今では皆總領の倅にやらせて自分はちつとも手を下さない。幸ひ總領は父と同じく、子供のうちから、その職に親しんで、今では一廉の腕前になつてゐるので、父の名で、その作を出しても、誰れも不承知をいふものもないし、それに店には澤山の弟子もゐて、それが何れもその道の一粒よりの職人なので、稼業には少しも差支ないが、肝心のM――はもう一切その仕事に關係しなくなつたばかりでなく、家の奴等か、あんなものを拵へてゐるのを見ても胸糞が惡くなるといつて、家に居ても、奥に坐つたきりで、少しも仕事場に出て來ない。さうなる前に、久しい間M――は、註文の仕事を長びかせて客を困らしたことが續いた。その時分彼れは、註文主の意向や經濟に關係なく、勝手なものを作り上げて、偶々、氣の向いたものが出來ると、彼れはそれを眺めながら、
「これを賣つて飯を喰はなくちやならねえなんて、何んて下らねえ世の中なんだらう。糞忌めえましい。」と塞ぎ込んでゐるかと思ふと、その人形の首を摑んで、今にも向うの壁へ投げつけさうな見幕を見せるので、弟子達が驚いて、それを取り上げるやうなことが度々あつた。
『此奴を賣つて飯を喰はなきやならねえくれえなら、うちのあまつちよ達を賣り飛ばして飯を喰つた方が、餘つぽど好いや。こんな解らねえ世の中てえたねえ。おらアつく／＼いやになつちやつた。おめえ達で好いやうにやつてくんねえ。』
さう云つて、「名人M――」は、段々註文の仕事に手をつけなくなつて、毎日考へ込んでばかりゐる。時々思ひ出したやうに、木彫の首などを作つて、何かぶつ／＼云ひながら、それを眺めては、乾度しまひは、鉈を振つてそれを微塵に碎いてしまふ。人が驚いて理由を尋ねたりすると、たゞ、「駄目だ／＼。」といつてゐる。
總領の倅は、父のこの態度を、自分の技術の未熟を諷するもののやうに解して、何とかして、父の嘲りが防げるだけの腕前にならうと、一心不亂に勵むので、その技術は凄じく進んで、世間でも「名人M――」の後繼は、親勝りだと、評判するに至つたが、それでもM――の擧動に少しの變りがないばかりでなく、愈々昂進して、此の頃では、總領の顏さへ見れば、
「おめえは好い氣なもんだなア、飯が喰ひてえばかりに、魂の切り賣りをやつても苦しかねえと見えるなア。尤もお前達のア、百姓がジャガタラ芋を作るより造作はねえんだから、構ふこたあねえや。やつてなせえ、やつてなせえ。』なんてことをいふ。
男優りで聞えてゐる體量二十貫といふM――の妻は、こんなお父さんが家にゐては、皆が氣を腐らせるばかりで稼業にも障るし、お父さんも、段々變手古になつて、氣の毒だしするから、何處かに隱居所でもこしらへて、F――子をつけて、そこでゆつくり靜養させることにするといふ相談になつてゐるのであつた。
學校では彼女と同じやうに、誰れよりも快濶に、周圍を搔き廻すほどはしやいでゐるF――子が、沈んだ顏でかういふ話をするのを聽いて、彼女は同情に堪へなかつた。けれども、彼女には、F――子が心配らしく話してゐる父の人形

師の擧動が、少しも心配すべきことのやうには思へなかつた。で、云つて見た。

『でもあなたのお父さんのいふことは當り前ぢやないの？ あなたは大變心配しておいでのやうだけれど、私にはそんなに心配することのやうには思へなくつてよ。』

『そりやあなたは、自分のお父さんでないからよ。』F――子はさういつて、怨めしさうに彼女を見た。

『あら、さうぢやないのよ。自分のお父さんだつて、私ならあなたのやうに心配はしないわ。』

『何うして？』とF――子は解せないやうな顏をした。

彼女には答へは出來なかつた。『何うして』と云はれると、理由を說明することは出來ないが、たゞ心配でないことは事實だつた。さうして、それは人形師が自分の父でないといふ理由からでないことも事實だつた。で彼女はこんなことをいつた。

『よかなくつて？ 私があなたのお父さんだつたら、矢張りつまらなくなると思ふわ、屹度……でもつまらないぢやありませんか。』

『私いやよ、あなたは。』F――子は呆れたやうに彼女の顏を見て、『實際私、心配してゐるのよ。お母さんはのんきだし、大きい兄さんは、氣が小さくつて、お父さんにそんなこと云はれると、青くなつてわく〳〵してゐるばかりだし、私、家にゐても氣が氣ぢやないのよ。』

『いゝことよ。あなたお父さんと一緒にお隣に來て頂戴ね。それでいゝのよ。私嬉しいわ。』

彼女はひとりではしやいでゐた。

『いや、あなたは、私がこんなに心配してゐるのに、嬉しいなんて、あんまりだわ。』F――子は泣き出しさうな顏をして下を向いた。

彼女は驚いて、F――子に抱きついて、その顏を覗き込んだ。

『許して。許して。怒らないでお隣に來て頂戴ね。私達が二人でお父さんを慰めてあげませう。さうすれば、屹度お父さんは、よくなつてよ。そんなに心配することなんかないのよ。ね、さうしませう。』

こんな風にして、人形師の「名人M――」はF――子と共に、彼女の隣に住むこととなつたのである。

それから數日たつて、愈々F――子が父と共に移つて來る日の二三日前から、彼女は重い風邪に犯されて、床についてしまつた。F――子は學校から歸ると、毎日のやうに彼女の病床を尋ねて看護した。一週間ばかりして漸く彼女が床を離れた時に、二十貫のF――子の母は、娘と共に、彼女の病氣見舞に來て、自分の夫が、當り前の人間なら、引越しのご挨拶旁々お見舞にも參る筈だが、變人で、長年の間そんな作法は一切儀はない流儀を通してゐるので、失禮してゐるといふ言譯を云つたりした。彼女は、その言譯の方が詳しい位そんなことを何とも思はなかつたので、もう二三日で、自分も外に出られるから、さうしたら早速お隣に行つて、F――子のお父さんに逢ふのを樂しみにしてゐると答へた。

その次ぎの日の午後、彼女は、風もない、靜かな日和につらされて庭に下りて、久しぶりで、麗かな秋の空の、冴え切つた空氣に、心持よく觸れながら、ふら〳〵する足を馴らすべく、そこかしこを步き廻つて、池のほとりの築山に上つて、そこの腰掛に腰を下ろした。

築山のうしろは、すぐF――子の新しく移つた家の生垣になつてゐて、こゝからは家は木立に隱れて見えないが、その庭先が見下ろされる。暫く休んでから、彼女は、ふとその庭に瞳を落すと、そこに箒を手にしたまゝ、此方を見てゐる人があつた。可なり大柄な釣合の好い體格をし

た、彼女の父よりも、ずつと年上に見える、福々しい顔立の老人であつた。彼女は一目見て、その福々しさがF——子の顔立に何處か共通のところのあるのを感じて、すぐそれがF——子の父であることを知つた。

　彼れは棒立ちに突立つて、たゞ凝と彼女を見てゐたが、やがて輕いお辭儀をした。

『F——子さんのお父さん?』と彼女はお辭儀を返してから聲をかけた。

『さうでがすよ。何うも娘が始終御世話になりまして　あれは隨分お轉婆でがして、嘸御厄介をかけることでせう。先達中は御病氣のやうで……つい御見舞ひにも出ませんで、誠にはや……まアおよろしくて結構で……』

　彼女には、無論當りまへの人が當りまへの口を利いてゐるとしか思はれなかつた。そんなことを殊更考へさせられもしなかつた位であつた。

『えゝ有りがたう。もうすつかりいゝんですの。』と彼女は云つたが、急にそこへ行きたい衝動を感じたので、

『今お訪ねしてもよくつて?』

『えゝ何うぞ。』と老人は——彼女は、初めて見たF——子の父を、老人と感じた。たゞ『少し若過ぎる老人』であつた。——落着いた歩みぶりで境の生垣の柴折戸のところまで來たが、かき金が此方の側にあるので、手持不沙汰に、そこに立つてゐた。

　彼女は、此方から柴折戸をあけて、隣の庭に入つた。老人形師は、やゝそは〳〵した態度で、先に立つて、庭木の間をくゞつて彼女を案内した。生々しい土の香が、彼女の鼻をうつた。新しい庭土の、粗れた肌に剋明に落日が入つて、そこらの小さい景色が、幕の明いた舞臺のやうに小綺麗であつた。

『大そう綺麗に　お庭のお掃除が出來ましたこと。』彼女はそんな大人じみたことを云つて見て、緣先に腰をかけた。

『いやもう、はなのうちだけでさア。』さういつて、老人形師は、彼女を座敷に誘つて、古びた大きい紫檀の唐机の前に、自分と相對して彼女を坐らした。

　彼女は物珍しく新しい座敷を見廻した。床には、役者を描いたらしい、女の立姿の浮世繪が懸つてゐて、大きい眞黑な假面が、花臺に載つかつて、据ゑてあつた。その傍には、赤銅作の太刀が、刀立に立てかけてあつた。續いた棚床は、古い本や、錦繪の折本らしいのや、いろ〳〵な彫刻物のやうなもので、一杯になつてゐた。その中には、灰色によごれた大理石の手首や、アイヌ細工の人形のやうなものや、石膏の埃及模樣の缺けらのやうなものや、眞物か作り物か、茶色になつた頭蓋骨などが目についた。

『おとうさんは、この頃はもう、人形をこしらへないのですつてね。』彼女は、F——子が自分の父を、『おとつさん』といつてゐるので、今まで噂の中の老人形師を、自分もさう呼んでゐたつもりであるが、自分の言ひ癖で、『おとうさん』といつてゐたのであつた。本物の老人形師を見た今も、それが出て、『おとうさん』といつたのである。

『えゝ……私でがすかえ。』老人形師は面喰つたやうに少し吃つて、『なアに、たいしたことはねえんですよ、何うせ私等のこせえるものは碌なもんぢやねえんですからね。やめつちやつたつて、誰れも損をするものはねえんですよ。』

『私さう思つたのよ、違ふかも知れないけど……』と彼女は、少し歩き疲れた身體を樂にして、胸のところを唐机に凭せて、輕く兩肱をついて、『あの、何んぢやなくつて?……』

　さういつて彼女はそれを云はうとしたが、いはうと思つてゐることが、自分によく解つてゐ

る癖に、言葉になつて出て來ないで、當惑して、微笑みながら、老人形師の顏を見てゐた。

老人形師は、電車のなか何かで、見知らぬ人に顏を見られてでもゐるやうに、うつとりと、彼女を見返してゐるばかりで、別に彼女が何か云ひ出すのを待つてゐるやうな風でもなかつた。

彼女は寧ろ、老人形師が何か云つてくれるかと思つて、それを微笑で誘つたのであるが、老人形師は、何時まで經つても、彼女の顏を見てゐるばかりで何も云はなかつた。彼女は根敗けしたやうに、

『私、やつぱり解らないわ。でもおとうさんの方が、何うしても、ほんたうのやうにしか思はれないのよ。ねえおとうさん、私達はどうしてこんなに、つまらないんでせう。……自分が心から好きと思ふことを、……自分がほんたうに好いと思ふものを、しつかりとから抱いて……ねえおとうさん、私達は何うしてそれを一つも許されないんでせう。私何んだか、淋しくつて、淋しくつて……』

彼女は、急に身内が熱くなるほど、焦立たしい心持になつて、口惜し涙のやうな涙が、こみ上げて來るのをぢつと堪へて、辛うじてさう云つて、曇つた眼で老人形師を見た。

『えゝ。』と老人形師は、福々しい顏を淋しくうつむけて、膝の上に兩手を支へながら、『私どもは何も解らねえんですけど、何だか、かう物ごとが皆つまらなくなつてしまつて、……それでも若えうちは、そんなことを云つてちや、頤が乾上つちやふから、我慢しい／＼やつて來ましたが、この頃はもう、その我慢が續かねえんでさア。それに今ぢやまあ子供等がみんなでやつてくれてますし、私なんざあ手を出すものはねえから、すつかりお廢しにしてしまつて、ぶらんさんで暮らしてゐる譯なんでさア。これが時代遲れつて奴なんでがせう、アハッハ。』と老人形師は、聲ばかり笑つて、情ないやうな顏をして、彼女を見た。

『誰れでもさうな筈よ。……でも皆はさうぢやないのかしら。だから私腹が立つてしまふのよ。……あら私いけなかつたわね。』彼女は急に調子を變へて、『私何うしたんでせう、こんなことを云ひ出して。もうよしませうよ、おとうさん、あのね 私、F――子さんとお隣あひになつて大變嬉しいのよ。私毎日遊びに來てよ。いゝでせう。おとうさんも私ところへ來て下さる? あゝ、おとうさんはよそのうちへは決して行かないんですつてね。いゝわ、私の方から來てあげるから。F――子さんは大變心配してゐたのよ。でも私さう云つてあげたわ。「そんなに心配しなくつてもいゝのよ。私がおとうさんならやつぱりさうするわ。」つて。いけなくつて?』

『アッハッハッハ。』と老人形師は、福々しい顏を崩して、心から可笑しいやうに笑つた。

『お孃さんは……』

『「お孃さん。」なんて、いやよ。』と彼女は慌てて彼れの言葉を遮つて、『K――子つていつて頂戴。』

『さうですか、アハッハッハ。』と老人形師は矢張り笑つたばかりで何も云はなかつた。さうして急に身の廻りをキョロ／＼見て、何か探してゐる。

『煙草入?』と彼女は尋ねた。

『私は煙草も酒も戴かねえんです。これだ、これだ。』と云つて彼れが卓の下から取り出したのはお友達から、F――子のところへ來た一枚の繪端書であつた。

それはロダンの彫刻『姉と弟』の寫眞であつた。若い裸體の女がその膝に、確かと自分に抱きついてゐる小さい弟を載せて、右の手で輕

く、その子の腋を抱いて、うつとりと夢を見てゐるやうな顔を、心持うつむけてゐる姿が、黑いバックの中に眞白に浮び出てゐる。

『やつぱり、あつちの人はうめえや、う　の倅のやうなものぢやねえね。アッハッハ。』と老人形師は投げつけるやうに云つて、そつぽを向いた。

彼女は、自分が心から好きと思つても、ほんたうに好いと思つても、それは遠いところにある影のやうに、彼女には何うにも出來ないことを、この彫刻が、ひたと肌につけて、抱きしめてゐるかのやうに思はれて、胸のときめくほど、羨ましいやうな淋しいやうな感じにうたれた。

『何故私達は、此の人達のやうに幸福でないのでせう。何故私達はかういふ風に出來ないのでせう。』彼女は、獨言のやうに低い聲で云つた。

『なあに、出來ねえ事はねえんだ。やられこまでのことですよ。生きてなくつても好いと思やあ、ぢきに出來まさア。ご飯をたべな、ちやならねんで、だめの皮になつちやふんだ。情ねえもんさねえ。』老人形師は、彼女の心持とは、喰ひ違つたやうな、喰ひ違はないやうなことを、捨鉢らしくいつて、膝をくづして胡坐をかいた。

『あら、こんなとこに居てよ。』とF――子が庭口から飛ぶやうに驅け込んで來て、もどかしさうに靴をぬいで、座敷に上るなり彼女に抱きついて、

『いまおうちへ上つたら、お庭だつてんでせう。お庭をぐる／＼廻つて、いくら探してもゐないぢやないの。そしたらこんなとこに澄し込んでゐるなんて。』

『いけなくつて？』

『いけません！　今いらしつたの？』

『いゝえ、もうさあつきよ。おとうさんとお話してゐたの。』

『あら、そんなに長く外にゐていゝの。あらここは外ぢやなかつたのね。今あなたのとこのお母さんがさういつて内へ連れて入るやうにつて仰しやつたものですから、私外と間違つちやつたわ。まあおとつさんお茶もあげないで。』

『おゝさうだつたな。婆やの奴が、朝あつちの家へ行つてしまつたものだからな。ぢや入れて貰はうか。』

『私もう歸るわ。』と彼女は立ちかけた。

『あら、私今歸つて來たばかりぢやありませんか。も少しゐて頂戴よ。』とF――子は不平さうにいつた。

『でも何だか、私大變疲れたやうなの。初めて外に出たんですもの。F――子さん、うちへ一緒に來て下さらない？』

『さう、ぢやさうしませうか。身體に障ると私の責任になりますからね。おとつさん、もう少しお留守番をお願しますよ。そのうち婆やも歸つてくるでせう。』とF――子は彼女を助けて、靴下のまゝ庭下駄をはいて、二人は庭先に立つた。

『さうか。ぢやお孃さん。』と老人形師は緣さきに立つて來て、お辭儀をした。

『又「お孃さん。」だつて。』と彼女は、老人形師の膝の邊を掌で打つて、『さやうなら、又來ますわ。』

植込に消えてしまつた二人の姿を、何處までも追つて行くやうな眼付をして、老人形師は、何時までも／＼緣先に立つてゐた。

それから一日二日經つて、F――子は、彼女のところへ、何枚かの半紙に何か描いたものを持つて來て彼女の前に置いた。見ると、何れも皆同じ女の首を、毛筆で、日本畫ともつかず、西

洋畫ともつかないやうな線でスケッチしたものであつた。よく見ると、その顏が彼女自身に似てゐるやうに思はれた。

『何うしたの？　これ私に似てゐるわね。誰れが描いたの？』

『誰れが描いたと思つて。』とF——子は焦らすやうに、笑つて見せた。

『わからないわ。云つて頂戴よ。』と彼女は云つたが、ふと思ひついて、『おとうさんでせう。確かにさうだわ。』

F——子は默つて諾いて見せた。

『さうでせうと思つたの。』と彼女は得意になつた。『けど何うしてこんなに澤山描いたのでせう。』

スケッチは、重なり合つた線で、雜に描いてはあるが、それが彼女のいろ／＼の表情を現したものであることは能く解つてゐた。

『それはね、この間初めてあなたが、うちへ來て下ずつた日の晩から描き始めたのよ。あの晩に、おとつさんは、腕組をしてぼんやり考へてばかりゐますのよ。さうすると軈て机に向つて、何かしきりに描いてゐるやうなの。何をしてゐるのかと思つて見に行つたら、それを描いてゐたのよ。さうして翌る日もね、私學校から歸つて來て見ると、やつぱり腕組をしてぼんやり考へてゐるのよ。さうして机の上を見ると、さういふのが澤山描いてあるんでせう。「おとつさん、何うして、こんなにK——子さんのお顏ばかり描いてゐるの？」て私聽いて見たのよ。でも餘りをかしいのですものね。さうしたら、おとつさんてば……』F——子はさう云ひかけて、更めて彼女の顏を見て、『あなた怒らないで頂戴。——私おとつさんが可哀想なんですもの。』と少し顏を赤めた。

『何うしたつていふの？　私怒りなんかしないわ。何の事なの？』と彼女は、全く合點が行かなかつた。

『あのね。おとつさんは、いきなりこんなことをいふのよ。「俺あの女を一つ彫つて見てえんだ。」て、——あなた怒らないで頂戴——ムキになつたやうなおつかない顏をして、さういふのよ。私驚いちやつて、「おとつさん、何ですね、『あの女』なんて、失禮ぢやありませんか。」とさういつたの。するとおとつさんは又、「俺此の歳になるが、あんな女に出つくはしたことはねえ。」だつて、こんなことをいふの。「『あの女』だの『あんな女』だのつて、何んでおとつさんそんな云ひ方をするの、當り前に仰しやいな。」て、私ほんたうに怒つてさういつたのよ。さうしたらおとつさんはね、「女」で惡きや「人間」だ。」てつて、又腕組をして凝と考へ込むのよ。で私ふと思ひついたのよ。おとつさんは、あなたを見て、急に仕事がして見たくなつたに違ひないとさう思つたのよ。それでね、「そんなら、おとつさん、K——子さんにお願して、モデルになつていたゞいて、人形なり何なりこしらへて見たら何う。」と、さういつたの。そしたら、おとつさんは矢張り考へ込んで何ともいはないの。さうかと思ふと、しばらくして、「あの人間は生きてらア。」なんて獨言いつてるの。私、「當り前だわ、K——子さんが生きてなくつて何うするの。」て、あんまりだから、少し大きい聲で云つたのよ。さうしたら、「アッハッハ。」なんて笑つてゐるんですけど、眼の中に涙を一杯ためて、ベソをかいたやうな顏をしてゐるぢやありませんか。私可哀想になつちやつて、「おとつさん、そんなに諦めてしまはないで、K——子さんにお願して、こしらへて御覽なさいよ。」て進めたの。けれども、おとつさんは、「駄目だ／＼。」つて頭を振つてばかりゐるのよ。さうして、あなたの顏を描いた紙をびり／＼破き始めたのよ。私又始まつた

と思つて、あと〳〵を取り上げてしまつたの。それがこれなのよ。』F――子は、彼女に嘆願するやうにいつた。

『ねえ、ですから、あなた、うちのおとつさんを可哀想と思つて下さつたら、御氣の毒ですけど、モデルになつてやつて下さらない？』

さういはれて、彼女は、何だか胸が躍るやうな氣がした。嬉しさに、寒けを感ずる樣な氣もした。

『でもおとうさんは駄目だつて云つてるのぢやなくつて？』

『えゝ、けれども、あなたから、自分の人形を拵へてくれつて仰しやれば、屹度喜んで仕事にかゝるに違ひないのよ。さうすると、又昔のやうに仕事し出すかも解らないと思ふのよ。』

『さうね。でもこしらへて下さるかしら。』

『えゝ、屹度大變嬉しがるわ。』

結局、明日、F――子が學校に行つてゐる間に、彼女が老人形師を訪ねて、それをいつて見る事となつた。

F――子との約束通り翌日彼女が隣へ行つて見ると、老人形師は、矢張り卓に向つて腕組をして考へ込んでゐた。庭に立つてゐる彼女を、眼をあげて見た老人形師は、夢から醒めた人の樣にぼんやりしてゐた。

彼女は、座敷に上つて、F――子がするやうに老人形師の傍に凭れるやうに坐つて、F――子と打ち合せをした通り、それが自分の希望であることを、老人形師に話して、

『ね、おとうさん、私の人形をこしらへて下さらない？』

『何んだ、お孃さんは、ふう坊に何か聽きなすつたな。あいつは、始末に終へねえ奴だなア。……駄目ですよ。お孃さん。駄目ですよ。』と老人形師は無暗と頭を振つた。

彼女は、老人形師の膝の邊をこづくやうにして、それを賴んだ。

『駄目ですよ。あんたは、生きてなさるぢやねえか。私はお孃さんのお顏を拜見してゐると……』

『よして頂戴、「お孃さん」だの「お顏を拜見」だのつていふの。F――子さんと同じにして下さらなくつちや、私いや。』と彼女は甘えるやうに、身體をゆすつていつた。

『大きにね。』と老人形師は、諾いて、『それで何でさア。お孃さん……おつといけねえ、まあいゝや、「K――子さん」なんて言ひ惡いや。心持だけふう坊のつもりでゐまさア。「お孃さん」で堪忍しといてくだせえ。で何んだア。あなたは、生きてなさるから、私がお顏を見てゐても、千變萬化てえ奴で、……何ともいへねえ、……かう何んだ、やつぱり、生きてるんだなア。』

『何をいつてゐるの、おとうさんは。』彼女は笑つた。

『まあ聽いて下せえ。すべてこの、私の流儀は、チーッとから眼を瞑つて考へてると、お孃さんならお孃さんが、ありありとそこに見えるやうにならなきやあ、仕事にかゝれねえんでさあ。生きてゐる人間は、今のそれ、千變萬化でがせう。どこを捉まへようたつて、捉まへりや、又違つちやふんですからね。でかうチーッと考へるんだが、すつかり、こつちの腹に、お孃さんならお孃さんが入つてしまはねえと、いくら考へたつて、出て來ねえんだからしやうがねえ。ところがね、お孃さん。』老人形師は、重い口で言葉をつゞけて、『私この間、初めてお孃さんを見た時に、何うも、すつかり驚いちやつたんだ。何んだつておめえさん、私が始終チーッとから考へ込んでゐる時に、ぼんやりと眼の前に出て來た顏が、――えゝさうぢやねえ、その顏が、今まで何うしても出て來ねえんで苦しんぢやつたんだ――その何うしても出て來ねえ顏が、實

はお嬢さんのその額だつたんでさア。私は、今まで、私の頭の隅の何處かに隠れて、何うしても出て來ねえ額が、いきなり私の眼の前に現はれたんぢやねえかと思つて、ギョッとした位だ。ところが、そこが駄目なんだ。こいつだなと思つて、取ッ捉めえようとすると、お嬢さんは生きてら、例の千變萬化で、一つ捉めえれア又一つてんで、矢張り駄目だ。そいつを彫つてかゝつた日にや、幾千萬こしれえたつて果しがねえつて話だ。それで、やつぱり一遍ヂーッとかう考え込んで、こいつが動きのねえお嬢さんだなつてとこを、私の頭の中で、こしれえなきやならねんでさア。そいつア何年かゝるか解つたもんぢやねえ。』と老人形師は落膽したやうに首垂れた。

『何年かゝつても好いぢやないの、ね拵へて下さいな。』彼女は、老人形師の肱に、身體を凭せかけて、下から彼れの顔を覗いていつた。

老人形師は、彼女の額を凝と見て、獨言のやうにいつた。

『あんたは、生きた人間で、こゝに居なさるんだから、それでいゝんでさア。なにも、私なんかが拵えてあげなくつたつて好んでさア。……たゞ私のものでねえだけなんだ 私のものぢやねえんだ。』

彼女は、老人形師の福々しい顔が、こんなに淋しい顔に見えようとは思はなかつた。さうして何んだか自分が老人形師のものでないことが、自分にとつても、矢張り大變淋しいことのやうに感じられるのであつた。彼女は衝動的にさういつた。

『私、、、、おとうさんのものになつてあげてよ。ね、いゝでせう。』

老人形師は、彼女の身體を凭せかけられてゐた自分の肱を、そつと外して、少し身を退らして眼をすゑて凝と彼女を視た。その瞳に、彼女は自分を引き入れられる様に感じた。彼女は一寸寒氣を覺えたが、直ぐに、身體が赫と熱くなつて、全身の血が頭に沸き上つて行つた。彼女は、ほてつた顔を兩の掌で掩うて、卓の上に俯伏せになつた。すると、輕い抱擁を、肩の邊に感じた。彼女は、ぢつとさうしてゐた。彼女は、肌に汗の滲み出すのを感じた。

老人形師は、徐かに彼女から離れて、さうしてもとの通りに、腕を組んで、考へ込んだ。

彼女は、健康を回復してから、毎日のやうに、隣に行つて、老人形師と遊んでゐた。彼女は自分の人形は、老人形師の頭の中の彼女が、老人形師に捉まへられてからこしらへてもらふことに定めてゐたけれども、老人形師は、始終さういつてゐた。

『私にあ、出來ねえ。忌えましいなア。けどまあいゝわ。私のお嬢さんが、こゝに居るんだもの。』

さういつて老人形師は、自分の膝に凭れて居る彼女の顔を眺めながら、拳程の大きさの木片で、彼女の首を彫刻するのを樂しみにしてゐた。それが一つ殖え二つ殖えるのを、彼女は、女の兒が手鞠でもためて喜んでゐるやうに喜んだ。その首は一つ〳〵皆違つた彼女を現してゐた。けれども、それが二つ三つたまると、何時の間にか、老人形師は、皆それを燒くか碎くかしてしまつてゐた。さうして一つでも、それを彼女が持ち去ることを許さなかつた。その譯を聞けば、こんなことをいつてゐた。

『あんたは、自分のあんたを持つてゐなさるんだから、こんなものはいらねえ。私だつて、いらねえ理窟なんだが、何んだかから、お嬢さんを見ると、自分の仕事が出來たやうな氣がして、彫つて見たくなつてしかたがねえから、入りもしね

えものをこしれえてゐるんでさア。こしれえてえと思ふものは、いじやう經つたつて出來つこなし、まあ氣安め見てえなもんさねえ。』

彼女の首がいくつも〳〵作られ、いくつもいくつも碎かれた。彼女もF――子もA――學校を卒業して、やがて又次ぎの秋が來た。

その時、彼女の結婚問題が起つて、さうして、間もなくそれが決定してしまつた。相手は、彼女の父の會社の課長で、前途有望と目されてゐるO――學士であつた。O――は彼女の家にも始終出入して、彼女の友達の間にも、その整つた容姿や、そのそつのない言語擧動や、その學識や、その趣味や、その毛髪や、そのネクタイピンや、その香料やが、始終問題にされてゐたのであつた。從つて彼女と此の青年紳士との婚約は、それ等の婦人達の羨望の的であつた。

彼女には、此の結婚は、別に意外の出來事でも、驚くべきことでもなかつた。それは彼女にとつて、白い細い母が居なくなつたことや、圓いお爺さんと引き離されたことや、默つて彼女の髪を撫でる新しい父を得たことや、何事も彼女に贊成する新しい母を得たことやと、同じ性質の出來事に過ぎなかつた。それは自分が知らないうちに、いつしか自分をそのうちに置いてゐる、今までの壓制の歴史のつゞきに止まつてゐた。

無論彼女は、その青年紳士と結婚する必要も義務も感じてゐたのではないから、そんなことをしないで濟むものなら、したくないと思つて、そのことを兩親にも告げたのであるが、然し彼女は、そのことの實行が、自分の今の生活と、衝突するものとは思はなかつた。(後でも、さういふ衝突があつたとは思へなかつた。)ですずるずるに事件の進行するに任せた。それは彼女が、白い母や、圓い祖父との別離、新しい父母との結合に於て採つた態度と同じなのであつた。こん度の歴史も亦前のそれ等と同じやうに、彼女と沒交渉のうちに進行して、最後に彼女を、その歴史の中に捲き込んだのである。

このことの話の定つた時、彼女はそれを老人形師に話して、さうしてしまひにかういつた。

『私一生そんなことにならないで暮らしたいのよ。おとうさんに何か好い考へがなくつて。』

『それあ駄目でさア。それが女の大役なんだからね。女アそいつをやらなかつたら、世の中に女なんてえものは、要らねえことになつちまひますさア。まあ仕方がねえ、諦めておいでなさえ。でも好いや。お婿さんてのア、豪勢な若紳士ださうだから、お孃さん仕合せだ。うちのふう坊なんざ羨ましがつてべソかいてやがら。可哀想に、私のとこなんぞに産れて來ちや、碌なとこへ嫁けつこはねえからね。高が職人の娘ぢや、當世になつちや、理窟はありませんや。だから私は女學校へ行くのせえ、餘計なこつたつて叱つたんだが、あいつがまた碌でもねえことが好きで、中々聽かねえんですからね。けどお孃さんなんぞをお友達に持つことが出來たのアそのお蔭なんだから、矢張り有りがてえもんにア違えねえ。』

翌る年の春に、彼女とO――との盛大なる結婚式が、神の前や、人間の前で行はれた。その日の彼女の晴れ〴〵しい洋裝は、F――子に眼を見張らせた。F――子は、その日の晩のご飯が咽喉へ通らなかつた。

新夫婦の家庭は、誰れの目にも、幸福の別の名であつた。それは隱れた家の奧の幸福ではなく、花々しい、眞晝の街頭の幸福であつた。到るところの晴れの集りでは、必ずこの水際立つた一對が、男女の渦卷の中心を爲した。殊に

或る大使館の夜會に現はれた、彼女の、巴里女擬ひの妖艶な服裝や、際どい大膽な言語擧動は、同極の電氣のやうに、外國婦人連を片隅に跳ね寄せてしまつて、最も自信のある外國紳士等を棒立ちにさせた。

その眞最中のことであつた。或る薄曇りの午後に、F——子は、初めて彼女を新しい家庭に訪ねた。二人は、十年も逢はなかつた女達同士のやうに、ヒシと抱き合つて、危く泣かうとした。それ以來のことが旅行鞄を打ちまけたやうに、話し合はれた。その我樂多を掻きのけるやうにして、彼女はF——子に聴いた。

『おとうさんはお變りがない？　何うしてゐて？』

『えゝ、それもお知らせに來たのよ。おとつさんはね、をとゝひN——へ越してよ。』とF——子は、聲を沈ませた。

『あら、何うして、あの家が氣に入らなくなつたの？』

『いえさうぢやないの。あなたが居なくなつた故なのよ。すつかり又前の通りになつてしまつたの。』とF——子はやる瀬ないやうな顏をしてそれからの樣子を話した。

老人形師は、彼女がO——に嫁てしまつてから、もう小さい彼女の首を彫ることも、全くやめてしまつたが、彼女に逢はなかつた前と違つて、庭いぢりをするでもなく、戯ら書きをするでもなく、たゞ茫乎と卓の前で腕組をして、朝から晩まで身動きもしないことさへある。昔自慢をF——子に話すことも殆んどなくなつて、さうして困つたことには、飲めもしない酒を飲み出して、時々飲み過ぎたりして、一晩苦しんで、翌日は氣のぬけたやうにぼんやりしてゐる。そのうちに、何うしても今の家を引越すといひ出して、誰れが何といつても聽かない。自分で家を探して歩いても、何うしても見つからないので、たうとうN——の、婆やの宿の近所の百姓家の離れを借りて移つた。N——驛から二十町近くもあるので無論F——子は一緒に移れないので、炊事その他の世話は母屋に賴んで、老人形師一人、手廻りのものを持つてそこへ行つた。

F——子の話を聽いてゐた彼女は、急に憑きものでもしたやうに、眼の色をかへて、長いこと凝と考へてゐた。

彼女は、鼠の群に飛込んだ猫のやうな心理で、手當り次第に幸福や快樂の、腐つた果實の山を引つ掻き廻してゐる現在の自分を目の前に　て氣の狂ふほど腹立たしく思つた。彼女は、手荷物を肩にして、ヨボ〳〵と田舍道を歩いてゐる老人形師の姿を想ひ浮べて、烈しい不安の動悸を感じた。卓の前で、凝と彼女を見詰めながら、重い口で、貴い心持を彼女に話つた、その聲が、彼女の耳に、今聽いた聲のやうに鮮かに殘つてゐる。

彼女は、今自分の追ひかけてゐる幻像が何であるかを考へた。それは餓ゑた豚の漁つてゐる汚い餌であつた。O——といふ彼女の夫も、彼女の追ひかけてゐる幻像ではなかつた。O——は彼女には彼女の生活を引張つてゐる馬車の馬に過ぎなかつた。彼女は、女王のやうに、その馬車の上に傲然と坐つてゐた。馬車馬などは、女王の眼中に無かつた。

それを考へて、彼女は又、ポツネンと坐り込んで、『何んだか、物事がみんなつまらなくなつてしまつた。』と呟く老人形師を想つた。『私のものでねえだけなんだ。私のもんぢやねえんだ。』と淋しい〳〵顏をした彼れを想つた。凝と彼女を視た彼れの火のやうな瞳を想つた。卓に俯伏して、背中に輕い抱擁を感じた彼女自身を想つた。彼れの膝に凭れてゐる彼女の顏を見い〳〵誰れにも奪ひ取られない、彼れ自らの喜びを

以て、コツ／＼と彼女の首を彫刻してゐる彼れを想つた。さうして又ヨボ／＼と荷物をかついで田舍道を行く彼れを想つた。

自身の前にゐるF――子の何か云ふ聲を、遠い水音のやうに聽いてゐた彼女は、

『私行くわ。今すぐ行くわ。』とうはの空のやうに口走つた。

『何處へ行くの？　今すぐにつて、何處へ？』

F――子は驚いた顏をした。

「いゝゝ、おとうさんのとこへ行つて來るわ私。あなた一緒にいつて下さらない。』と彼女はもう立ちかけてゐる。

「まあ、何うしたの、K――子さんは。大變よあんな遠方へ今から出かけるのは、それにO――さんもうお歸りぢやないの。家を拔殼にして叱られるわ。』

『ぢや、かうして貰ひませう。私一人で行つて來るから、あなた家が歸るまで、こゝに居て、歸つて來たら譯を話して下さいな。さうして夕御飯でも喫べて行つて頂戴。私女中にさう云つて置くからね。」と彼女はもう支度をしてゐる。

『でも私きまりがわるいわ。あなたがおいででなくつちや。』

「きまりが惡いことなんかあるものですかね。向うを藁人形と思つてゐれば、何のこともありやしない。』

そんなことをいつて、結局彼女は、老人形師のN――の住居の地理をF――子から聽いて、留守をF――子に賴んで、自動車を命じて出かけた。

N――町を通り過ぎて、彼女は、とある小徑の角で、自動車を返して、その細い道に入つた。そこを二三町行つて、更に狹い田舍道に入つて一町ほどのところに、高い槇の繁つた廣い百姓家が目的の家であつた。家の内にはもう電燈が灯つてゐた。彼女は、母屋で訪ねて、すぐに、老人形師の住居の緣に立つた。

障子は明け離されて、老人形師は、電燈の下に例の卓を据ゑて、その前に胡坐をかいてゐた。彼れは彼女の姿を認めて、すかすやうにして眺めたが、自分の眼を疑つてゐるといふ風でたゞ首を傾けたりしてゐる。

「いゝゝゝ、おとうさん。」と彼女は高い聲で叫んだ。「來たのよ。』

『あゝ矢張りお孃さんか。」老人形師の大きい身體は刎ね飛ばされたやうに立つて來て、いきなり、彼女の手を取つて、四疊半の狹い座敷に引張り上げて障子を閉めて、何時もしてゐたやうに、卓の前に自分と列んで彼女を坐らせた。

彼れの傍には、今母屋から持つて來たらしい膳があつて、その上に德利が載つてゐた。

「ご飯はまだでせう。私も御馳走になるのですけど、不自由なとこだらうと思つて途中で御鮨を買つて來たの。」と彼女は土産の包をあけて卓の上に載せて、『私も一緒に戴くのよ。』

『それは有りがてえ。丁度お茶が入つたところだ、早速やりませう。話は、やりながらでも出來らア。」

「あらおとうさんは、いゝゝゝ、矢張り飮めもしないお酒をのみ出したのね。」と彼女は德利を見てさういつた。

『なあに、ほんの少し許り、百藥の長てところをやつてゐるんでさア。』と老人形師は、きまりわるさうに、お膳を少し後にずらしたりしてゐる。

『でもね、いゝゝゝ、おとうさん。」彼女は、もう胸が逼つて來て、それをまぎらかすやうに、たゞさういつた。

『よく來てくだすつたなア。けど何んだつてこんなに遲く來なすつた。よく探しあてなすつた

なア。』

彼女は、今日の一什始終を話して、

『もう矢も楯もたまらなくなつて、自動車で來たのよ。』

『自動車たア豪勢だな。何にしても有りがてえ。私はこんな嬉しいことはねえ。歸りは停車場まで送つてあげるから、ゆつくり遊んで行つておくんなせえ。まあご馳走をいたゞかうぢやありませんか。』

二人は、彼女の土産の鮨をたべながら話を續けた。老人形師は、膳の上の徳利を見向きもしなかつた。

『おとうさん、御酒がついてゐるのでせう。お飮りなさいな。』と彼女は、自分に遠慮してゐる老人形師を氣の毒に思つて、さういつた。

『いけねえ／＼。今夜はそんなもの飮んでふらふらしちやゐられねえぢやありませんか。それよりか、お孃さんのその何とかいひましたつけ、さう／＼新婚旅行てえ奴のお話でも伺つて、醉つぱらつた方が好いや。』

『いや、おとうさんは。私つまらなくつてしやうがないのよ。おとうさん、私先達中は、ざわざわしてゐたものだから、おとうさんのことを、忘れるつていふんぢやなく、つい考へずにゐたのよ。濟まなかつたわね。許して頂戴ね。』彼女は、先にしてゐたやうに、老人形師の膝に身體を凭せかけるやうにして、さういつた。

『飛んだこつた。お孃さんにあやまられるやうな覺えなんか、私にはありやしませんや。お嫁にいつたら、旦那大事に、一心不亂に家のことを治めるのが、女の勤めといふものでさア。よその年寄りのことなんざ、心配しなさることはねえ。』と老人形師は、投げつける樣に云つた。

『でもね、私あんなにおとうさんと仲好にしてゐて、……さうして私は、おとうさんのものだつたんぢやありませんか。それだのに、もう滅多におとうさんに逢へないなんて、そんなことはないわ。おとうさんだつて、隨分淋しかつたでせう。でもおとうさんは、あんなにも、私を好きだつたんですもの。』

『いけねえ、いけねえ。』老人形師は、眼の前の蜘蛛の巣を拂ふやうな手つきをして、『お孃さん、そんなことは云ひつこなしにしませう。私はこれで諦めのいゝ人間のつもりなんだからね。』

『でも私、そんなことを諦めてしまふ必要はないと思ふのよ。お互に仲よしにしてゐるのが、何んでいけないの！　私、だから腹が立つのよ。私達は、ほんたうにこれが好いと思ふことは、皆禁められてしまつて、好くもなんともないことばかりさせられてゐるのですもの。こんなつまらないことはありやしない。おとうさんは、それを忌々しがつて、何もしないことにきめてしまつたんですけれど、私は、自分の好いと思ふことまで、皆やめてしまふ必要はないと思ふわ。私、いやだわ。おとうさんは、それで、私を可愛がることもやめてしまつたのね。』と彼女は、昂奮して、老人形師に縋りついた。

『何がやめるもんですかい。私は、何んにもやめやしねえんです。だから私は生きてゐるんでさ。』老人形師は、彼女の肩に手をかけて、今までにない元氣な調子で云つた。『お孃さんは、やつぱり私のもんでさア。私だつてお孃さんのもんなんですもの。けど私なんかは、お孃さんにあ何んでもねえでせうが、お孃さんが私のものだつてえなア、私にはたいしたことなんだ。何んでそいつがやめられるもんですかい。』

『ぢや、おとうさん……』彼女はさう云ひかけたが、その先は何をいはうとしたのか、自分にもわからなかつた。

彼女は、自分の夫の○——のことが胸に浮んだ。それが彼女を一層焦立たせた。それはまるで貴い金屬の鎖が、彼女を彼女の生活から遠いところに繋いでゐるやうに感じられた。彼女は、その鎖の延びるだけの範圍内で、仕たい放題をして暴れてゐるのであつた。が自分の生活からは、遠い／＼他國で、そんなことをしてゐる無意義を、彼女はしみ／＼と感じたのであつた。彼女は一足飛びに、自分の心の鄕里に歸つてしまひたかつた。彼女は云つた。

『いゝえ、おとうさんは、もう餘つぽど前に、皆つまらなくなつてしまつたのですけど、私には、その怖い／＼いやなことが、今來たのよ。私はもうずつと前から、——いゝ、おとうさんのことを聽かない前の前から、何んだかそんな氣がしてゐたのですけれど、いゝえ、もう屹度つまらなくなつてゐたんですけれど、今度といふ今度はもうもう我慢し切れないほど、つまらなくなつてしまつたのよ。けれども、私はいゝ、いゝ、おとうさんのやうに皆やめてしまはないことよ。……あゝ、いゝ、おとうさんも、皆やめてしまつたんぢやなかつたのね。私、嬉しい……けど私達は何うしたら好んでせう。』

彼女は、途方に暮れたやうに、老人形師の額を見上げた。

『何うもしなくつたつて好んでさア。』と老人形師は、微笑んで、『私は、かうチーッと考へてゐると、皆もすつかり好くなつてしまふんでさア。』

『そんなこと駄目よ。』と彼女は笑つた。

彼女は、魘された夢から飛び出さうとする樣な慌しさで家を出た先刻の自分を想ひ浮べて見た。さうして、再びその、自分の生活でない生活へ、歸つて行かなければならない少し後の自分を想ひ浮べて見た。さうして、いゝ、おとうさんと一緒にゐる現在の自分を顧みた。さうして此の短い現在の外に、彼女の生活がないことを考へると、何うかして、永久に彼女自身を、この現在に置く途はないかといふやうなことが考へられた。彼女は、ふと死といふことを考へた。同時に彼女は奇妙な戰慄を感じて、覺えず老人形師に縋りついた。

老人形師は、彼女の戰慄を感じたらしく、不安な面持で、眞白になつた彼女の額を覗いた。

『私、何うしても歸つて行かなければならないのね。』彼女は力のない聲でさういつて、老人形師の膝に額を埋めた。

『ほんたうに人間てえ奴は、何うしてかう意氣地がねえんでせうなア。何んだか、かうギュウて目に逢はせられても、ウンともスウともいへねえやうな氣がして忌々しくてならねえ。』と老人形師は、電燈の球を睨んで考へ込んでゐたが、『さあもう遲いや。電車がなくなるとことだ。停車場まで送つてあげるからお歸りなせえ。』

彼女は額を上げなかつた。二人はそのまゝ長いこと、さうしてゐた。障子の外のジー／＼といふ蟲の音が際立つて聞えた。

多時して彼女は、夢から醒めたやうに額を上げて、老人形師の頸に兩手をかけるやうにして、さうして微笑んだ。老人形師は、子供を扱ふやうに、彼女の兩腋を抱へて輕く自分の膝にずり上げるやうにして、

『大きな赤ちやんだなア。』と笑つた。

抱かれてゐる彼女の腕時計を見た老人形師は果してもう電車の時間には間に合はないことを發見した。當惑したやうな老人形師を見て、彼女は手を拍つて笑つた。老人形師は、母屋を起して蒲團を借りて來た。狹い四疊半の部屋の道具を、隣の物置部室に搬び込んで、二人は枕を列べて其處に寢た。

けたゝましい太鼓の音で、彼女は眼を覺まし

た。雨戸が一枚だけ開いて、外はもう薄明るかつた。傍の床にはおとうさんの姿が見えなかつた。彼女は半ば身體を起して、部屋のうちを見廻さうとすると、外からおとうさんは上つて來た。彼女は聲をかけた。
『おとうさん、何處へ行つてたの?』
『何處へ行つてたつて。お孃さん、昨夜の騒ぎを知らなかつたのですかえ。』
『騒ぎつて何、泥棒でも入つたの?』
『いんや、泥棒よりも、もつと大騒ぎだつたのだ。鷄小屋へ狐だか、犬だか入つて、その騒ぎつたらなかつた。今母屋で聽いたら、三羽やられたつてね。ひでえことをしやがつた。』
『私ちつとも知らなかつたわ。ほんたうに昨夜ほどよく寢られた晩はなくつてよ。』彼女は狹い部屋のむさくるしい蒲團の中で、更めて、樂々と身體をのばして、つゝましやかな伸びをした。
　その後は、彼女は、バザーや夜會に現はれて、貴婦人や紳士連を片隅に刎ね寄せたり、棒立ちにさせたりすることが稀れになつた。その代りしげ〳〵N——に老人形師を訪ねて、泊つて來ることも度々あつた。
『つまらないから廢しませう。』と彼女が、良人のO——に申し出したのは、その頃のことであつた。O——は紳士の體面を重んじて、彼女を縛らせることを我慢して、彼女と合意の離婚をした。彼女の父の怒は非常であつたが、母の取りなしで、彼女は、父から多少の財産を分けて貰つて別家することになつた。
　A——山の麓のY——村に『ヲカのおとうさん』と『奥樣』とが現はれたのは、それから間もなくのことであつた。
〔彼れの話の盡きた時、彼れのウキスキーも盡きてしまつた。彼れは、うら淋しげに最後の一句を附け加へた。〕
　A——山の頂に、入日の影が、眞赤に、美しく照り映えて、夕嵐のぐわう〳〵と吹いてゐる裾野の果を、彼女の鮮かな小さい姿は、老人形師の棲んでゐるといふヲカの森の、こんもりとした茂みの底に、神話のなかの森の乙女のそれのやうに消えて行つた。

◇

門の起原は威嚇と防禦とだ。だから、平和的な建築には、今の意味の門といふのが昔から無かつた。埃及にも希臘にも羅馬にも門といふものはない。それがあるのは防衛の構造を持つ城の意味の建築物だけだ。即ち市を一廓にして、それに門をつけた。日本でも西洋でも、古代から城に限つて門を持つたと謂ふことが出來る。西洋では、この意味はやゝ嚴重に守られたが、日本では、城内の各戸が武士の家である限り、皆門を持つた。これは、日本の武士が屯田的であつたことの遺習だと思ふ。即ち彼れは武士として、それ〳〵一個の小さい城のやうな物を構へた豪士が、大名に征服された場合には、その大名の城下に、自分の小さい城を持つた心持でゐない譯に行かない。「武士の住ひは城だ。」とは彼等の信念だつた。

（「門より」）

或る謀殺犯人の陳述

辯護士「裁判長に申しあげます。被告は、本日、裁判長からの御訊問にお答をいたします前に、自ら進んで、本件に關する一切の事實を、些か僞るところなく申上げ、併せて被告自身の心理をありのまゝに告白いたしまして、公明なる裁判を仰がんことを希望いたして居る次第でございます。公判の劈頭に於て、その陳述をいたすことを希望いたしまする理由は、萬一にも、豫斷を以てする訊問をうけて、それが爲めに知らず識らず、不自然の作爲を試みんとする心理狀態に陷りまして、眞實を告白する障碍を、被告自ら作り出すに至らんことを虞るゝが故であります。願くば、被告の希望をお容れ下さつて、僞らざる告白を御聽き取りあらんことを、私からも御願いたす次第でございます。」

裁判長「それは裁判長として、寧ろ被告に向つて希望する所である。被告は、毫しも拘束を感せずに、思ふ存分本件の事實なり被告自身の心持なりを述べるが好い。」

被告「幸に私の希望をお容れ下すつたことを感謝いたします。……豫め御斷りをいたして置きますのは、私が私の犯罪――もしそれが、犯罪であるとすれば――それについて申しあげようとする趣意は、決して、自分の刑を輕くして戴きたい爲めとか、又は、自分を潔くしたい爲めとかいふ動機によるのではないといふことです。私は今日まで、自分の行爲について、一切積極的の陳述をいたしませんでした。さうしてたゞ警察官や豫審判事の推斷を肯定したり否定したりするに止めました。それは、私といふものが何う解釋されようと、誰れにも差支のないことであるからといふ理由もありますが、一つには、私がありのまゝに事實を告白しますると、全く、この私の利害の爲めに他の或る人間が、その罪惡を――本人もその暴露を望みませず、社會もその暴露を要求してゐない罪惡――を不當に此の法廷に於て暴かれることになるからであります。而も、その或る人とは、實に私が手をかけて殺したその人であります。私は、自己の滿足の爲めに、既にその人の生命を奪つた上に、更に、私の滿足の爲めに、その人の罪惡を剔抉するのであります。これは如何に我心の強い私でも忍び難いところです。で右のやうな態度を取つたのでありますが、然し、これは他人をして、眞實を誤らせることで、それも私にとつて一つの罪惡を構成することです。尤も實際のところ、私といふ人間は、そんな、何人も脫れ難い罪惡を犯すことを躊躇するほど、纖細な道德心を備へてゐるとは、自分ながら思つて居りません。で矢張り、これを申上げる眞の動機は、自分を正しく見て貰ひたいといふ、利己心の發動に過ぎまいと思ひます。ですからつまり、公明の裁判を望むことになるのでございます。然し「正しく見て貰ひたい」といふことは、誤つて見逃されんことを望むのでないことは特に御斷りをいたすまでもないことでございます。

餘計な、辯解がましいことを申しあげて濟みませんでした。これから卒直に事實を申しあげます。

警察官や豫審判事が斷定された處によると、

私の犯罪事件は、次ぎのやうな經過を取つて居るといふことでございます。

私は、本年──月──日、信州のS溫泉からH溫泉に向つて旅行の途中、昔の學校友達のK──に出逢ひました。さうして同夜H溫泉の旅館に二人同宿いたしました。然るに私は、其の晩K──が多額の金錢や、寶石入りの指環、金時計等の貴重品を澤山所持してゐることを知りました。當時私は、東京でC會社を罷められ、Y學校を罷められ、屢々失職して、生計困難の餘り、夜逃げ同樣に失踪して信州方面を徘徊してゐたことでありますから、K──の所持する金品を見て惡心を起して、K──を殺してその金品を奪ひ取らんことを企てました。私は、その目的を以て、K──にN嶽登山に同行せんことを薦め、同月──日、二人はN嶽に登り、その山頂に於て、私はK──を僞つてそのピストルを借用し、それを以てK──を射擊して、殺害の目的を達したのですが、自分も誤つて足を踏み外して、崖から落ちて人事不省に陷つてゐたのを、同夜深更、H溫泉から派遣された搜索隊に發見されて、逮捕されたのである。といふことであります。

その調べによりますと、私の犯行の證據は歷然たるものであります。私は、K──と私とがN嶽で共同の自殺──調書の所謂「男心中」──を試みたもののやうに見せかける爲め、自ら遺書を認めてH旅館に遺し、尙K──の筆蹟を模して、辭世樣の文句──「私は先きに行く、幸福に暮すやう頼む」──と認めた端書をK──の妻宛に送つたのであります。

それから、K──の妻の申述によれば、K──は、妻に隱して預金千餘圓を銀行から引出して携帶したに拘らず、その金は、旅館に殘した鞄の中にも、死んだK──の洋服のポケットにもありませんでした。それは私が一旦死んだK──から奪ひ取つたのであるが、私が崖から落ちる際に、私の和服の懷から飛び出して谷底へ落ちてしまつたのであるといふのです。金時計も指輪も亦同じ運命だつたといふのです。それも何處にも發見されなかつたのです。

K──は肩や後頭部に數發の彈丸を受けてゐるので、大に私に對して抵抗したことは明かです。その手には石塊を握つてゐました。彼れの致命傷は、背部の右側から脊髓を貫いて心臟に達した彈丸です。K──は私に對して奮鬪したが、到底敵し難いことを知つて逃げ出して打ち倒れたのを、後から私が射殺したのであるといふのです。K──の奮鬪した今一つの證據は、七連發のピストルの彈丸が悉く射盡されてゐたことです。

豫審決定書が斷定した私の犯罪事實は、大體かやうに構成されて居るのです。

私は、これから一切の眞實を申上ぐるのですが、それは決して、初めに申した通り或る人の罪を暴かうといふのでも、私自身を潔くしようといふのでもなく、又刑を輕くして戴かうといふのでもないのですが、外に現はれた事實は、全く警察官や裁判官の見られた通りであつて、さうして全く、異つた眞實をそれから見出すのでありますから、私の心狀について信用されなかつた場合には、それは決して、豫審決定書の見出した誤つた眞實を打ち破ることは出來ません。從つて、私は人間の裁判が、此の事件に對して何ら下らうと、それを念頭に置くものではありません。

又、私は、今日の法律が、私の眞實に對して、必ず有罪を宣告すべきものだとは信じてゐないにしろ、必ず無罪を宣告するとも思

つて居りません。要するに、私はこれを申上げても、申上げなくとも、結局同じ刑を受けなければならないでせう。それが人間の裁判です。

卒直に、事實だけを申します。

私がS温泉からH温泉に來る途中にK――に逢つたこと、それと一緒にH旅館に投宿したこと、私からN嶽登山をすゝめたこと――その他外面の事實は、皆只今申上げた豫審の斷定の通りです。さうして更に、私がK――を射殺した事も、その態樣までも、殆んどあの斷定の通りです。

けれども私は信じます。私はH――を殺す權利、さういへなければ、理由を有つてゐました。

私は、それを明らかにする爲めに、不必要な苦しい暴露を自らしなければなりません。――それも今まで積極的の陳述を避けた理由の一つです。

私が自殺――それは豫審が「虚僞の自殺」と斷定したものです――を決意したのは、生計の爲めではありません、生計の困難を來すやうな、度々の失職を招いた、その原因が、私を自殺に導いた原因なのです。それは生存に對する興味を失つたのです。その以上のことは、こゝで申上げる必要はありません。又本件に關して裁判官各位がそこまで追究されるならば、それは各位の好奇心を充たさうとするに過ぎないと云ふ越權に陷るでせう。のみならず、それは、或る人々の現在の幸福に恐ろしい陰影を投げることです。いや、これだけ申上げただけで、その陰影はもう十分に、その人々の幸福の上に投げられてしまひました。これは私にとつて不必要の苦痛たるのみでなく、有害の苦痛なのです。

私は生存の興味を失ひました。私は生活を投げ棄てて放浪しました。あらゆるものを投げ棄てた末に、私は生命の外に投げ棄てるべきものを持たない境遇に立ち到りました。

けれども、私は自狀します。あらゆるものにさへ興味を失ひ、生命そのものにさへ興味を失ひながら、私はなほ、自分自らに興味を持つてゐました。自分自らを、私の生活の最後のものとして大切に抱へて、生命と共にでなければ決して投げ棄てまいと思つてゐました。いやさうではありません。生命は投げ棄てても、なほ、自分自らの興味を失ふまいと思ひました。それは、考へ直して見ると、全く、絶望したもの、最後にかじりつく野心でした。あらゆるローマンスを失つたものの、危く摑んだ大海の藻屑のやうなローマンスでした。

私は昔の宗教家が、その宗教的野心を、最後の大往生に於て發揮しようと企てたやうな、笑ふべき企を踏襲しようとしたのでした。私は、この誰れの滿足でもない――自分の滿足でもない――つまらない野心の爲めに、N嶽を自分の死に場所と選んだのでした。それは後には、さう反省されますが、然しもし私が今放免されたとして、今後再び同じ運命が繰返されたら、更に、その最後のものまでも繰返さぬとも限りません。

で私はN嶽に登る爲めに、H温泉に行つたのでした。その時偶然、少年時代の學友のK――に逢つて、私は、感傷的な回想に耽りました。私は危く、一切をK――に語らうとしました。けれども、さうしない前に、意外にも、二人はもつと深いことを知り合ふことになつてしまひました。

私は、遺書を認める必要があつたので、K――と同室に迷惑に感じたのですが、それ

を云ひ出す理由を見出すに苦しんで、たうとう同室しました。然し靜かに、思ひ出しながら、日記を認めるといふ口實で、數時間別室へ行つて簡單な遺書を認めました。――それが豫審決定書の所謂「虚妄の遺書」です――然るに、此の遺書は私が、封筒を取りに、二人の室へ戻つて荷物を開いてゐる間に風呂から出たK――の爲めに讀まれてしまつたのです。

私は別室に歸ると、K――は、私の書いた遺書を手にしながら、意味のわからない笑顏をして私を見ました。私は驚いて、それを奪ひ返さうとすると、K――は手を後に廻して、靜かに私を制して、私を座につかせて、思ひもかけぬことをいひ出しました。

「暗合だ。全く暗合だ。」

K――はさういひました。私は、その意味が急に呑み込めないで、慌てた心は、少しも靜まりませんでした。するとK――は、自分も自殺の爲めに、場所を探し廻してゐるのだと云ひました。さうして云ひました。

「お互に事情など云ひ合ふことも聽き合ふこともないから、一緒に決行しよう。然し何十年ぶりかで逢つて、かういふ道連れになるなんて、二人は餘程の親友に違ひない。」

そんなことを極めて落ちついて云ひました。私はさういはれてから初めて、K――の今までの樣子が、尋常でなかつたことに氣付きました。自分に屈託して、全く氣付かずにゐたのでしたが、K――は、昔のK――とは人物が變つたかと思はれる位違つた調子をしてゐたのでした。

二人は、事情も何もいひ合ふことは要らぬと云ひながら、何時か話がそこへ落ちてしまひました。然しK――は、成るべくそれを避くるやうでした。私は絶對の孤獨が、友を見出した嬉しさについ私が生活の興味を失つた事情についてK――に語りました。さうして幾度か泣きました。K――も私の爲めに泣いてくれました。

私の話を聽いてしまつたK――は、私の爲めに泣いた涙を、自分の爲めに流しながら、たうとう私に重大な告白をしました。

K――は實に怖るべき殺人罪を犯した人間でした。

Kは精神病の系統を有つた或る財産家の庶子でした。それは父が、家に置いた下婢に生ませた子なのでした。家には丁度K――と同年位の嫡出子が居たのでしたが、父は、却つて日蔭者のK――を可愛がつて、私かに庇護してゐたのでしたが、年頃になると、K――は恐ろしい浪費者になつて、父を困らせたのでした。然しその爲めにK――が一家から排斥されるやうになると、父は屢々K――を庇ひました。父が晩年に精神病的傾向を少しづつ示すやうになつてからK――は父を欺しては、いろ／＼の事業に手を出させたり、大部分の財産を、K――自身又はK――の妾で後にK――の妻となつた婦人の名義にしたりしましたが、最後に、父の本妻が沒した後、K――は父をして自分に有利な遺書を正式に作らせたりしました。それが爲めに、嫡出子の方は、父の沒後自分に分けられた財産の意外に少額なのに驚いて、非常に憤怒して、終に屢々K――を相手取つて、訴訟を起したりしましたが、何度起しても敗訴しました。それが爲めに、精神に異常を來して、一種の訴訟狂となりまして、多數の人を相手取つて訴訟をして、しまひに誣告罪で未決に繋がれましたが、精神病者といふので放免されて、間もなく自殺してしまひました。それをK――は自分で犯した殺人罪と云つてゐまし

た。

同胞の自殺には流石に、K——も驚かされましたが、然しその良心の聲を、K——は巨額の遺産と、それによる放恣な逸樂の生活とで擾亂させてしまひました。その後のK——は、一時引續く失敗で、殆んどその遺産を蕩盡した上に、非常の負債に惱まされるに至つたに拘らず、一般の好景氣と共に、一擧に恢復して、所謂成金の惡夢を貪ることが出來ました。たゞ彼れが唯一の不幸は、出來る子供も出來る子供も悉く夭死することでした。然し充された物質の慾望で、その失望を瞞着して行くことが出來たのでした。

ところが、大不景氣の襲來は、一擧にその砂上の樓閣を覆して、K——は忽ち破産の悲境に立ち到りました。逸樂の夢の深かつただけに、此の打擊は、精神的にK——を打ち倒したのでした。その際又も、珍らしく五六歳に達したたゞ一人の子供を喪つたのでした。絕望したK——は、良心を抑へつけてゐた鐵力を一時に失つて、打ちのめされたやうな、全身の打擊を感じました。

K——は、最後に殘された千餘圓の預金——それは何うせ、債權者のものになるのでしたが——それを引出して、それを持つて家出したと見せかけて、其の金は或る方法で、結局妻の手に歸るやうな方法を講じて、自殺の決心を定めて——然しなほ、多少躊躇の心を抱きながら——諸所方々を迷ひ歩いた末にH溫泉に向つたのでした。

さうして、尙ほ迷ひつゝあつたのでしたが、私の遺書を讀むと同時に、決意は、猶豫なく勇氣を與へられて、私と共に、それを實行することを思ひ定めたのでした。

これがK——の私に語つた大要でした。

K——は語り終つて、それで重荷を下したやうな樣子をしました。

然し私は、K——の話のうちに、重大な曖昧の點のあることを直覺的に知りました。それは同胞の自殺についてです。K——がそのことを語つた時に、その眼の中に、何かを恐れる色が明らかに見えました。私は、その時殆んど無意識に、K——を睨みつけました。そんなことをする氣ではなかつたのでたが、彼れは、先に、何事も死と共に葬らうとしたのを思ひ返して、これだけのことを私に語りながら、尙ほ或るものを、死と共に葬らうとしてゐるのであると、私は感じたので、我れ知らずその心を憎んだのでした。

私は、短刀直入に、それをK——に突込みました。K——は間が惡さうに、さうして恐ろしさうに或る事を自白しました。

然し此の事は、他人の犯した罪で、而もその人は既に今は、一切の罪から許されてゐる人ですから、その內容について、私は裁判官各位にも、誰れにも申上げる必要を感じません。』

裁判長『被告の告白を妨げるのではないが、その事も、本件に無關係ではない——少くともそれが無關係であるといふことは、全體を知識した上で決定しなければならない——その理由で裁判官としては、それを被告に訊問しなければならない。』

被告『それは、私の知つたことではありません。私は自分の罪を裁かれに此の法廷に立つてゐるのです。他人の罪をこゝへ同伴する必要はありません。』

裁判長『でも本官の職權がそれを要求する。』

辯護士『裁判長それは、被告が全部の告白を終つて後、適當の時期に於て、それも實際の必要の發生した時にされては如何でせう。』

裁判長『然らば、それで好い。被告は告白をつ

づけるがよからう。』

被告『では續いて申します。

一切を語り終つたK――は、初めて學校時代のK――の俤を取戻して、その頃のことを快活に話し出しました。があの端書――遺書――をかいた時には、一寸暗い顏をしました。その顏を私に見られたのを知つて、きまり惡さうに苦笑しました。

翌日は、早朝に、二人は何氣なしに、辨當の用意などをさせて、宿を出ました。晝頃には戻れる豫定だが、多少遲れても、二人は案内を知つてゐる故心配の必要のないことなどを、宿にいつたりして、全く普通の登山客のやうにしてN嶽に向ひました。私の氣分も、實際そんなでした。

宿を離れるに從つて、私達の氣分は緊張しました。私達は、途中殆んど一言も話し合はずに――さうでも無かつたのでせうが、――殆んど無言で頂上に向ひました。

O――の池の見えるとこまで登りついたのは晝少し過ぎる頃でした。K――は、そこで立ち止りました。私はもつと頂上へ――海拔一萬尺以上の空の上へ――昇つて行くことを主張したのですが、K――は、一度此の山に登つたことがありまして、頂上は、廣漠な砂礫の山で、つまり、かういふ事業の跡始末に不適當だといつて、寧ろ此處を主張しました。

いゝ棲んでゐさうな眞蒼な水を湛へたO――の池が日の下に小さく見えて、それを圍むH――の國の山々は鏡を包む緑の布のやうに起伏してゐました。

「こゝが好い〱。」

K――はさういつて、もう實行の支度にかゝりました。K――は、石入りの指環と、今一つの金指環とをぬいて、昔やつたボールの投手のやうな姿勢で、それを谷底へ投げながら、

「嚊のとこまで屆け!」さう叫びました。

次ぎに彼れは、金時計を同じやうに投げながら、「子供等のとこへだ!」さういひました。私は、それを見て思はず涙を流しました。でK――は懷からピストルを取り出して、彈丸を檢めました。

私は何方が先きに決行するかと尋ねると、K――は同時を主張しました。然し武器が一つしかないので、結局、私は、崖から谷底目がけて飛び込むことにして、――それは私が初めから考へてゐたことでした。――K――はそれと同時にピストルで眉間を擊つことにしました。

さう決めてから、二人は崖際に坐り込んだまま、長い事默つて身動きもせずにゐました。景色を見てゐるのでもありませんでした。何を考へてゐるのでもありませんでした。K――は知らず、私は、自分の胸の、狹い往來を、何十年かの私の歷史が、押し合ひへし合ひながら驅け拔けて行くやうな氣がしました。それはいくら眺めてゐても、譯の解る混雜ではありませんでしっ

二人は立ち上つて、私は崖際に、スタートを切るやうな姿勢をとり、K――はピストルの筒先を眉間に宛がつたのは覺えてゐますが、それから急に意識が不明瞭になつて、一向覺えません。

兎に角私は、崖から飛び込んだらしいのです。

然るに、それ切り死んだ筈の私は、何の位時間の經つた後か知らないが、再び意識を回復したのでした。

私は全身が、知覺を失つて、自分の身體が、全く自分のものでなくなつてゐるのです。た

だ痛みとも、退屈ともわからないやうな一種の感じが身體中に行き廻つて、嘗て經驗したことのない變な感じでした。これが死といふものかしら、とさう思ひました。

そのうちに夢の覺めるやうに、意識が明るくなりました。急に頭の先から足の先まで、踏み碎かれたやうな痛みを感じて、息もつけませんでした。覺えず身を悶えるのですが、大地に植ゑつけられたやうで、一寸も動きません。たゞ手足をじたばたするだけです。

段々判然して來るうちに、自分が崖から飛び込んだ後の經過を考へるやうになりました。

頭の上を見ると、こんもりとした木の枝が蔽ひかぶさつてゐます。考へて見ると、私は、飛び方が足りなかつた爲めに崖に添うてずり落ちるやうに落ちて來て、此の木の繁みに落ちこんで、その彈力で安全に此の岩の上に落されたのでした。

さう思ふと、急に私は命拾ひをしたやうな安心を感じました。けれども、すぐに私の岩の上の地位でなく、生活の上の地位に想ひついて、私は苦々しい、胸のつまるやうに笑ひを催しました。

私は何うしていゝのかわかりませんでした。が私の意識は、それを考へるほど判然してゐませんでした。私は、漸くに前半身を少し起して、四方を見廻しました。初めは朦朧としてゐましたが、段々それは判然して來ました。

すると何うでせう。ピストルで死んだ筈のK――が、私の寢てゐる岩から數十間距つた向ひ側――それは私達が上つて來た、道もない道でした――を歩いてゐるのを見ました。

私は、自分も覺えないほど、たゞ反射的に聲を立てました。それが、K――の歩いてゐる先の崖に反響するのが私にも聽えました。

K――はよろけるやうに立ち止りました。さうして四方をキヨロ〳〵見廻して、たうとう私を見つけ出しました。

するとK――は、俄かに前の通りの方向を取つて驅け出しましたが、數間行つたと思ふと、急に立ち止つて、また此方へ戻つて來て、私に向つて何か聲をかけたが、私にはわかりませんでした。

K――は、此方へ來よ としてゐるやうに、谷になつてゐる所を苦心して下りて行つて、姿を消しました。

暫くすると、私は、自分の前にK――の立つてゐるのを見ました。

K――の言葉の初めて私に通じたのは、私に、立てるか何うか、と尋ねた言葉でした。

私は試みたが立てませんでした。

私の意識が判然するに從つて、K――の變つた樣子に氣がつきました。

K――は、何か落ちつかない風にそは〳〵しながら、それでも私の樣子を、熱心に注意してゐました。私は、非常に腹立しくなつて來ました。

全體K――は、何んで下の方へ、元來た道を戻つて行つたのであらう。さうして、私に認められて、何んであんな慌てたやうな樣子をしたのであらう。さうして此處へ來ても、自分が、何うして死なずにしまつたかを説明するでもなし、私が何うして助かつたかと尋ねるでもなし、すべてが明白な事のやうに、二人は何の説明もし合はずに、さりとて此の上何うするといふことを語り合ひもせず、全く奇怪な再會といはなければなりません。

私は、實は、すぐに思ひついたのでした。

K――は私の飛び込むのと同時に、引金を引くつもりのところ、何うかして引かなかつたか、或は引いても發射しなかつたか、又は覘ひが外れたか、兎に角、自分は何のこともなしに助かつて、たゞ私の落ち込んで行くのを見物させられたのでした。

さうしてK――は、私の死んで行く有樣が眼に入ると同時に、よく情死者の一方に起る例の通り、急に死を恐ろしく感じて、もう再び決行する勇氣を失つて、ノコ／＼と歸つて行かうとしたのです。

私の此の判斷は、間違ひなかつたに違ひありません。K――が、私に何の說明もせず、私の說明も聽かないのは、その爲めでした。さう思ふと私は、矢張り情死者の不幸な一方の境遇に陷された人のやうな氣がして、烈しい腹立ちを感じました。然し此の腹立ちは、絕望と一緒になつて、私を諦めさせました。

で私はK――に、自分は、此のまゝ此處で死んでしまふ故、君は遠慮なしに生き殘つて、山を下つてくれと云ひました。

K――は、一寸いやな顏をして、何んとも返事をしませんでした。さりとて立ち去らうともせず、何か考へ込んでゐました。

暫くしてK――は突然いひました。

「いや僕は矢張り死なう。君と一緒に死なう。」

さういつて、K――は又ピストルを取り出しました。そのK――の言葉とピストルを取扱ふ樣子で、私は、K――に少しも死ぬ氣のないことを直感しました。いや、それよりももつと重大なことを直覺しました。K――は私を殺して、自分だけ生き殘らうとするのでした。

K――のピストルを持つ手は慄へてゐました。さうして彼れの眼は鼠を咬へた猫の眼のやうな光を見せてゐました。私は確かに今一瞬間の後はK――のピストルに擊たれるのだと感じました。

自分一人生き殘る氣になつたK――は、私を生かして置くことは出來ません。私はK――の重大な犯罪をK――の口から聽きました。私は世界中で、K――の犯罪を知つてゐる唯一人の人間です。私さへゐなければK――はその犯罪の暴露される危險は絕對にないのです。同時に私がゐれば、K――の生活の安全は常に脅かされなければなりません。K――は此の山から這び下りた後の生活の安全を心配してゐるのでした。私はそれを明らかにK――の顏色に讀むことが出來ました。

で私はK――に云ひました。

「今度は僕が先に死なう。然し僕はもう身體を動かせないから、そのピストルを貸してくれたまへ。」

するとK――は案の定いひました。

「さうか、然し、僕が君を擊つてやつてもいゝ、さうして次ぎに僕自身が御伴をする。」

私は無論死ぬつもりではゐるが、K――の逃亡に感づいてからは、K――の爲めに殺される氣にはなれませんでした。それは恐らく、誰れでもかういふ場合に遭遇したら、私と同じでせう。死は一つです。然し自分の意力で死なうとするものが、少しでもその意力を、詐欺や强力によつて壓迫されて他人の爲めに殺されることを肯じ得る道理はありません。で法律は、自殺の決心をしたものにも、正當防禦の權利を認めてゐるのではありますまいか。

私はK――の底意を觀破すると同時に、

K――に對する憎惡は、火のやうに燃えてゐるのです。誰れがそんなものの手に殺されることを承知しませう。

けれども私は、身體が利きません。一發でやられてしまふ事を防ぐ力はありません。

私は、K――を詐く外はなかつたのです。で云ひました。

「人に殺されるのはいやだ。自分で死ぬ。」

するとK――は、變な笑ひを示して、

「では又崖から飛び込み給へ。」

K――は、私の身體の利かないといふのを疑つてゐるのでした。

私は、絶對に身體の利かないことを云つて、ピストルを貸して、自分で死なしてくれと、K――に賴みました、K――も漸く疑念が晴れたやうでした。さうして急に私に親切になりました。私の身體を凹凸の岩の上から傍にずらして呉れたりしました。さうして私にピストルを貸してくれました。

私はピストルを受取つて、自分の心臟に擬するやうに見せかけて、突然K――に向つて發射しました。

K――は、アッと叫んで、轉げるやうに逃げました。私は次いで一發放ちました。K――はもう私の居た岩を下りてその下に身を隱しました。その時血が私の額にかゝつたので、私はK――が負傷したことを知りました。

すると岩の下からK――の聲がしました。

「何で君は、僕を殺さうとするのだ。」

私は可笑しくなつて笑ひました。さうして云つてやりました。

「君も死ぬ筈ぢやないか、何んで殺されるのが怖いのだ。」

「俺も自分で死にたいのだ。」K――は私の口眞似をしました。私は云つてやりました。

「君は、僕を殺して逃げ歸るつもりだらう。」

「そんなことはない。それは君の思ひ誤りだ。僕も死ぬのだ。」K――はさういふのです。

「それなら、僕に殺され給へ、僕は君を殺して、其の後で死ぬ。」私はK――の口眞似をしました。

K――は、長いこと出て來ませんでした。私は何んだか、再び意識が朦朧となるやうな氣がしました。で一生懸命に氣を張つて、K――の隱れてゐる岩の方へと、ソロ〳〵と身體をずらせました。それは大事業でした。漸く一尺ほど摺つて行くと、すぐ意識を失ひさうになります。又目を覺すやうにして一尺ずると、又朦朧とします。とても一間餘りの距離のあるその岩の端まで行かれませんでした。

私は、計略を思ひつきました。ピストルを外方へ向けて、一發放つて、その筒先を胸に當てて死んだ風を裝ひました。

K――は、果して計略に釣られて、岩に這上つたやうでした。私はK――の身體が十分私に近づいた頃を計つて、目を明けて、K――に向つて發射したと思ひましたが、それきり意識を失つてしまつたのでした。

私が意識を回復した時、私は、自分が謀殺犯人として逮捕されてゐることを知りました。

私は確かにK――を殺しました。而も誘き寄せて殺しました。然しあの時、私はK――を殺す外に、意志を有つた人間として採り得る道があつたのでせうか。」

虎使ひ志願

上

『虎使ひになつちや何うだい、さういふ口があるんだが。』と云はれた時に、彼れはハッと思つた。

その『ハッと』の意味は、彼れ自身にも解らない。別段それを恐ろしいと思つた譯でもない。恐ろしいにしても、強制徴兵ではないから、それになりさへしなければ、ちつとも怖いことはない。無論そこに虎が出て來たと思つた次第でもない。たゞ反射的にハッと思つて、自分に胸の動悸を感じたのだ。

それは、彼れが往來で一人の友人に出會した時のことだ。その時彼れはたゞノシ〳〵と街から街を歩き廻つてゐたのだ。

それは冬の末のイヤに温かい日の眞晝のことだ。灰色に凍つてゐた都會の空氣は、僅かの温氣に蒸されて、濃い蒸發氣になつて、低く沈んで往來を曇らせてゐた。車道の端の凍り切つた黒い土は、湯氣を立てながら溶け出してチャンのやうな色で人道のアスファルトにニチャ〳〵なすりつけられてゐた。

そんな景色は、彼れには何うでも好かつた。彼れはたゞノシ〳〵と往來を歩いてゐた。何時頃から歩き出したのか、それも知らない。歩いてゐるといふことも知つてゐるか何うか解らないほど、彼れは機械的に大跨を踏ん張つて、たゞ歩いた。

時々彼れは覺めかけたやうな朦朧たる意識で自分の周圍を感じた。さうして、家や樹や人間が、一種の波動を爲して自分の左右を後ろの方へと急し　走り去つて行くのを覺えた。が、その一瞬の經過し　後は、彼れはたゞ風のやうに動いてゐた。彼れは、釣られながら宙を行く失神した人のやうな感じで歩いてゐる。

けれども、時々彼れは、宙から大地に投げ落されたやうに感じてハッと思つた。その時、彼れは、矢張り高い所から落ちた人のやうに、自分を喰ひ止めた大地のあつたことを感謝して、ホッとしながら四方を見廻した。其の時は、無論彼れは立ち停つて居た。さうして暗闇から出て來た人のやうに、眼をパチクリさせて、其處ら中をキョト〳〵見廻すのであつた。けれども、彼れは、周圍にも自分にも、少しも意外のものを見附け出さなかつたので、驚いたのを後悔したと云つた風に、殊更に澄して歩き出すのであつた。家や樹木や人間は前のやうに、彼れの左右をあわたゞしく、彼れの後方へと急いだ。

さうして歩いてゐる彼れの頭腦は、全く空虚であることを彼れ自身感じてゐた。たゞ何か知らぬ或る空氣のうちから彼れ自身を脱却せしめなければならないといふ痛烈な要求を、その空虚な頭腦は感じてゐた。その空氣は、氣體のやうな壓力の乏しいものでなく、流動體のやうな重苦しいものであることを彼れは感じた。寧ろ固形體のやうな硬さで彼れを締めつけてゐるとも感じた。一刻も早くその裡から脱却しなければならないことを、彼れは夢の裡の經驗のやうに茫となつて感じてゐた。で彼れは非常に氣忙しなく感じた。彼れは一瞬間でもヂッとしてゐられないと思つた。一刻でも躊躇すればするだけ、彼れはその危險な空氣のうちから脱却する可能から遠くなるやうに思つた。彼れは無上に急いだ。さうしてさう急いでも、夢の中で

大汗になつて一つ處を踏んでゐる時のやうなもどかしさと苦しさとを覺えて無闇と足掻いた。

さうしてノシ〳〵と街から街を歩いた。

家や並樹や人間は不安な波動を作りながら彼れの左右を彼れの後ろの方へと風のやうに通り過ぎつゝある。彼れは自分の頭腦がさういふ要求に締めつけられてゐる爲めに、彼れ自身を街から街へと追ひやつてゐると思つた。けれどもさうして歩いて何處まで行つても同じ空氣が彼れ自身を包んでゐることを知つた。それが彼れを死ぬほど苦しめた。彼れの頭腦は、その空氣から彼れ自身脫却し得た未來を想像することによつて、その苦しみから脫れようとした。彼れはノシ〳〵歩きながら、それを想像した。けれども其の想像には內容がなかつた。彼れはさういふ想像の內容を充實させる經驗を持つて居なかつた。けれども彼れの頭腦はその內容のない想像で一杯に膨らんでハチ切れさうな痛みをさへ感じた。その想像に緊張し切つた彼れの頭腦は、高壓の蒸氣機關のやうに、彼れの足どりを速めて風のやうに歩いて居る彼れの風速を加速度で強めた。けれども彼れの緊張した頭腦は時々息を吐くやうに緩んだ。その時彼れの頭腦の裡で旋回してゐるその考へは、吹き疲れた暴風の小休みのやうに一瞬間穩かになつてゐた。

無論その穩かさは暴風の小休みと同じく、次の瞬間の猛烈な襲來を豫感させて一層彼れを不安にした。けれども、この小休みの間に彼れの意識內のいろ〳〵のシーンがフラッシライトに照らされた景色のやうに瞬間的に彼れの頭腦に映射されるのであつた。それは過去の經驗の追憶であつた。が、それが又彼れの焦立たしさに油を注ぐものであつた。いろ〳〵の違つた過去の場面か極端のモノトニーを以て繰り返されて居るのが彼れには我慢し切れなかつた。その多くはたつた一つだけで澤山なものばかりであつた。さういふ場面の連續から成つてゐる生活は、唯一瞬間だけ切り離した一片を必要とするのみで、その同じものを長く繼ぎ合はす必要は少しもないものであつた。彼れは過去といふ長い尻尾のやうなものが、彼れの尻から後ろに續いて離れないのを忌々しがつた。彼れは急激にそれから飛び離れたかつた。彼れは大急ぎで歩いたら、その過去といふ尻尾が彼れから離れ去りでもするかのやうに、ノシ〳〵と街から街を歩いた。けれども、彼れは振り返つて見たら、過去の尻尾が押出し齒磨きのやうに彼れの尻から湧き出して、何時まで經つても、彼れの後ろにクッ付いてゐるのを見出したであらう。こんな懊悩に、ノシ〳〵街から街へと歩いてゐる彼れは、客觀的には暴風に吹き飛ばされてゐる案山子のやうに不安なものであつた。が其の不安の主人は矢張り暴風に吹き飛ばされてゐる案山子のやうに平氣なものであつた。彼れはたゞ非常に氣急しなかつた。彼れの周圍の家や並樹や人間は、スー〳〵と風のやうに眞向ひから彼れに吹きつけて、彼れの後方に過ぎ去つた。と、彼れは何かに突き當つた。彼れは立ち停つて、宙から落された人のやうにキョロ〳〵と自分の周圍を見た。

「何をそんなに急いで歩いてゐるんだい、不景氣な顏をして。」

彼れの前にゐた一人の男は、いきなり彼れの腕を取つて、彼れと列んで歩き出した。それは彼れが何年か前に別れたきり逢つたことのない友人であつた。

友人は、二三間先の汚い横町を曲つて、灰色に塗られた陰氣な酒場の硝子戸を押した。

兩人は絡み合ひながら倒れかゝるやうに其處の椅子に掛けて卓子に凭れかゝつた。數人の赤い顏が兩人の方に向いた。一番近い男は、舌な

めずりをしながら、「何んでえ。」と口を歪めて、上眼を使つた。室の内は全體に薄暗くて、隅の方に坐つてゐた青い顔の給仕女が幽靈のやうに見えた。

『君はアレから何をしてゐた。』

彼れの友人は、さういつて給仕女の持つて來たウヰスキーをひつたくるやうにして、一息に半分ほど飲んだ。

『君のしてゐるやうなことをしてゐた。』

『おれのしてゐるやうなことゝツて、何をおれがしてゐたか知 てるかい。』

「それは知らない。知らないだつて、それと同じことをしてゐたてことは知つてら。』

彼れは、上の空のやうに、そんなことをいつて、眼の前のウヰスキーを眺めてうつとりとしてゐた。

『さうさなあ、前に永い間同じことをしてゐたなあ、君と僕とは。』

『だれだつて同じことをしてゐらあ。』

『だれだつて同じ事をしてゐる？　そんなことがあるもんか、なあ君、君と此の男と同じことをしちやゐなからう。』

と友人は、傍へ來た青い給仕女にさういつた。

『してますよ。同じことを、え好いことをね。』

と給仕女はとんきやうな聲を出して其處の椅子に倚つた。

『何を云つてやがるんで。全體君の鼻だつて外の人と同じ方を向いてねえぢやねえか、飛び損つた飛行機て鼻だよ、上を向きながら曲つちやつてら。』

『何んでも好いことよ。あなたにこさへてもらやしないから。』

『ハツハ、お前をこしらへるやうな惡い眞似はした覺えはねえや。シツ〳〵、向うへ行つて敷島一つ啣へて來てくれ。』

『知らなくてよ。人を犬だと思つてら。』

『なんかんと云ひながら、持つてくるところを見ると、矢張り犬だつたかな。』

『ひとりで騷いでゐるよ此の人は。御覽なさいお連れさんを。おとなしいぢやありませんか。あなた、默つて考へていらしやるのね。けれども少し不景氣だわ。私が慰めてあげてよ。』

『氣味の惡い聲を出すなてえことよ。寒氣がして醉が醒めツちやつたぜ。早くもう一杯注いでくれ。君にそんな聲を出させるのは、此處の亭主の酒を賣る策略だな。時に君、大に飲んでその後の話でもしようぢや……オヤ居ない！』

彼れは、何時の間にか、友人を殘して往來に出てしまつた。彼れは非常に氣急しなかつた。此の氣急しなさの爲めに、彼れは何物も振り拂つて急いだ。彼れは、絲目の切れた凧のやうにふら〳〵と酒場を飛び出した。

『冗談ぢやないぜ、相變らず困らせるなあ、待てててことよ。』

追ひかけて來た友人は、彼れと列んで、仕方なしに大跨に踏み張つて歩いた。

『虎使ひになつちや何うだ。』

と云はれて彼れがハッと思つたのはこの時のこと　あつた。

友人は、それを知らなかつた。無論彼れを、そんなこと位で驚く人間とは思つてゐなかつた。虎使ひになれといつたら、屹度それに相應した返答が、即座に彼れの口から吐き出されることと思つてゐた。が彼れは何時ものやうに、直ぐと夫れに答へなかつた。

彼れは、『虎使ひ』といふ一言を聽いた時に、それが、自分のノシ〳〵往來を歩いてゐることに、重大の關係を有つたことのやうに、無意識に感じたのであつた。ハッと思つたのは恐らくその故であつたらう。けれども、何ういふ風にそれが關係を有つたものか、彼れには解りやう

もない。彼れ自身の動機も知らないし、虎使ひ其のものも知らないのだから、知らないものと知らないものとの關係が解りやう筈もない。友人は默つてゐる彼れをもどかしがつた。必ずしも彼れを虎使ひにしなければならないのぢやないが、そんなことを云はれてイヤに考へ込む彼れを毫碌したやうに思つたらしい。で獨りで喋り出した。

『全體君は、前から少し間違つてゐたよ。自分の相手は人間ばかりだと思つてるからいけねえ。おれのやうに、酒ばかりを相手と思つてても始まらねえが、世間の奴等でさう人間ばかり相手にしてゐるものは一人だつてありやしねえ。マアおれのやうに酒でなければ女——女は人間のうちぢやねえぜ。でなければ金よ。少し悧巧がつてゐる奴は、名譽だ。……何だか話が平凡になつてしまつたなあ。けど實際だよ。人間を相手にする仕事に、一つだつて商賣になつて行くものはありやしねえ。儲つてゐるのは女郎屋位なものだ。少し人間以外の代物を相手にしろよ。商賣にならねえことばかりやつてちや喰つて行けねえてもんだ。そりや喰つて行く必要はなからうさ、けど喰つて行かなきや死んでしまわ。そりや死んでしまつて悪い理窟はなからうさ、けど死んでしまつちや生きて行かれねえてもんだ。だから何奴も此奴も商賣にならねえ人間なんか相手にしてゐるものはありやしねえ。』

それでも彼れは何とも答へなかつたので、友人は呂律の廻らない言葉を續けた。

『と言つて、君に、酒や女を相手にしろと云つたつて、今更小學校から始められもしめい。金だつて、向うで寄りつかずよ。それで虎は何うだてんだ。オイ君、彼奴はキビ〳〵してゐるぜ、第一毛並が好いや。面構へだつて惡くはねえ。こんな面をしやがつて、ウフツ、ウフツ、グーウーツ、ガアーツ……』

兩肱を張つて兩の掌を額の左右に開いて、こんな聲を出した彼れの友人を、擂れ違ふ人達は笑つて行つた。

下

賭博でもしてゐたのであらう、天井の高い、薄暗い小屋の隅の方で一塊りになつてゐた男達は、其處に入つて行つた彼れに怪訝な顏を振り向けた。

『虎やの△さんて人は居ますか。』

と彼れはその一塊りに言葉をかけた。

『△てのはおれだが、お前さんは？ あゝ何かい。先生から話のあつた人だね。マア此方へ來なせえ。』

傍の戸を開けると、プンと異な臭氣が鼻を突いた。廣い土間には、大小の檻がこちら向きに列んで、其の一番大きいのに逞しく肥えた虎が寢そべつてゐた。隣の熊の檻では、とぼけた顏をした小さい羆がクル〳〵廻つてゐた。小さな象が隅の方で、糞と小便とでぬかつた土を、大きい後足で、グチャ〳〵踏んでゐる。

虎使ひは、後任を作つて退隱しようといふので、もう好い年をした人の好ささうな老爺であつた。兩人は、虎の檻の前の石油箱に腰をかけながら話した。

『おめえさん、少しはけだものを扱つたことでもあるのかい。』

『けだものを扱つたことはないがね、獸よりいゝものを扱つたこともない。』

『先生は、おめえさんが、そんなことをしてゐたやうなことをいつてたつけ、相變らずチャラッポコかい。驚いたね。然したいして六つかしいことぢやねえ、一寸氣合を呑み込みや造作もねえんだ。ビクついちや駄目なんだ、ビクつきさへしなけりやあ、直きに物になるんだよ。け

れどマア始めねえうちに、親方んとけえ證文を入れなくちやならねえんだ。怪我をした時には療治は親方持ちだ。死んだ時にあ……そんなことは、今日が日まで一度だつて無かつたんだが、兎に角死んだら嬶子供に相應な葬え金を出す代りに、損げえなんぞ持出さねえつて證文を入れるんだ。してどんなけんのんな目に逢つても虎を殺さねえつて約束をするんだ。虎を殺しちや此方が怪我をしても一文も貰へねんだよ。』

『さうして全體どんなことをするのかね、君のとこぢや。』

『今やつて見せらア、何アにもう虎の方がすつかり教え込まれてるから、直きに出來るよ、ビクついちや駄目なんだ。』

虎使ひの老爺は、頻りに『ビクついちや駄目なんだ。』といつた。さうして、立ち上つて、其處に掛けてあつたズックのズボンと上衣をとつて、隣の部屋に向つて聲をかけた。

『オイ、太鼓と喇叭、一寸濟まねえが頼みてえんだ。』

隣の部屋から、太鼓を持つた男と、クラリネットを持つた男が入つて來た。虎使ひの老爺は、衣服をぬいで、赤いヘリの取つてあるズックの洋服を着た。その上衣の左の肩のところがドス黒く汚れてゐる。

虎使ひは、虎の檻の傍に行つて、

『さア八公、一揉み揉んでやらうか。』

と云ひながら、太い青竹を、鐵格子の間からさし入れて、寢てゐる虎の腹の下に入れてグイと持ち上げると、虎は不承々々に起き上つて、忌々しさうにその青竹を押へつけた。それを刎ね返して、老爺は、ガラ〳〵と青竹を烈しく鳴らした。虎は、その威厳のある顏を少し傾けて、牙を出して威嚇的な唸り聲を出した。

と思ふと、老爺は、もう其の檻の中に入つてゐた。人の好ささうな老爺が、急に獰猛な野蠻人のやうに、彼れの眼に映つた。さうして唸り立てる虎と相對して睨んでゐる光景は、見てゐる彼れを緊張させた。彼れは心臟の烈しい鼓動を感じた。

突然甲高なクラリネットの響が、間のぬけた太鼓の音を伴つて、不調子なマーチをやり出したので、彼れの緊張した感じは打ち破られた。けれども、それと同時に虎が猛然と立ち上つて、虎使ひに飛び付いたのを見て、彼れは、覺えず拳を握りつめた。

飛びついた虎は、伸び上つて虎使ひの肩に掴みかゝつて、大きい口をあけて噛みついた。

彼れは冷やりとした。虎使ひはその虎の口を左の肩にうけて、渾身の力をこめて下から虎の顎を突き上げ〳〵これを禦いだ。虎は離れては飛びつき、離れては飛びつき、しまひに恐ろしい唸り聲を立てて虎使ひに絡みついて、それを抱へたまゝその大きい胴體を前後左右に烈しく搖ぶつた。

突然喇叭太鼓の音が止むと、虎は虎使ひを振り離してグタリと横倒れに寢てしまつて、ケロリとした顏を上げて此方を眺めてゐる。虎使ひの老爺は、檻の外へ出て、荒い息をしながら、

『マアこんな工合さ。』

と元のやうな人の好ささうな老爺になつて微笑んで、

『何うだい、やつて見る氣があるかい。』

『直ぐ入るのかい。』

彼れは覺悟してゐたやうなものの、もう一遍決心をし直す必要があるやうにも感じた。老爺は笑つた。

『何うして。今入つて堪るもんか、ガブリやられちやツた日にあ、元も子もねえや。マア當分餌の世話をしたり檻の掃除したりして馴染をつけるんだ。性の合はねえものは何うしたつて駄

目だ。もつと若え虎なら何うにでもなるが、斯う育つちやつた奴ア、馴染まねえとなつたらどんなに骨を折つたつて駄目だ。その性の合はねえこのは、矢張り兩方で恐がるんだね。けだものだつて何も初めから人間を取つて喰はうてんぢやねえんさ、手めえが恐えから正當防禦をするんだね、八かましくいへばつまりさうよ。だからこの人間は怖い人間でも何んでもねえ、おれを何うしようてんでもねえと解つてしまやア、奴アもう何んにもしやしねえ。獅子の足のうらのとげを拔いてやつたつて話を學校の先生がするが、ありやほんたうよ。おれも覺えがあるんだ。牝の虎だつたつけが、なオイ、あのそれ因州のとこのおさんよ。」

と老爺は、まだ傍で太鼓をブラ下げてゐた男に向つてさう云つた。

「うんさうよなあ。」

と男は氣のない聲で返事をしたまゝ隣へ行つてしまつた。老爺は言葉をつゞけて、

「その、おめえさん、牝の虎は、滅法性の惡い奴で、來る虎使ひも虎使ひも、皆直ぐにガブリやられちや逃げ出してしまつて、てんで動物園行きより仕方がねえとなつたんでさア。それでおれに使つて見てくれつて話があつたから、何あに、屁でもねえと思つて出かけて行つたんだが、さアいけねえや。てんでけんのんで、一ときだつて入つてられねえ始末さ。威かしたつて瞞したつて、少し風向が惡いと直ぐガブリなんだからね。豹て奴アそれなんだ。溫和しい時は猫見てえだが、いつ何時氣が變るか知れねえから片とき油斷が出來ねえ。その虎もそいつなんだが、溫和しい時てえのが、てんで無えんだから始末に終へねえや。さうしたら、おめえ、牡の虎が手に入つたんで、一つ檻に入れて置くと、子供が出來たらうぢやねえか。そりや當りめえの話だが、そのお產の時に其奴が一通り苦しがつたんぢやねえ、腹を出してころ／＼轉がつてやがるんだ。ふだん忌め／＼しい奴たア思つてたが、苦しんでるのを見ると眞から可哀想になつちやつて、おれは一晩中寢ねえで、檻の外から其奴の腹を擦つてやつてたよ。マアお蔭でお產が無事に濟んだが、それからてえものア、おめえ、その虎はおれを見るとじやれかゝつて、爪一つひつかけようとしねんだ。產の後ぢや子供を取られると思つて氣が荒くなつて中々人を寄せつけねえんだが、おれだけあ別扱ひよ、可愛いもんぢやねえか。つまり怖えと思ふから人間に噛みつくんだから、怖くせえなけりア何うもするんぢやねえ。だから此方がビクついちやあ駄目なんだ。ビクついてるなア、つまり向うが何うかするだらうつて疑えが此方にあるんだから、それが何うしても此方の樣子に出るてえもんだ。向うぢやそれをけ取つて、こりあおれを何うにかしようてんだなと思ふから、もう敵と見てしまふんだ。けだものたア云ひ條それあ感心なもんだぜ。子供のうちに世話をしたものなんざあ、十年經つたつて忘れやしねえ。此奴がさうなんだ。五六年前にてんで赤ん坊で、横濱へ上つたんだが、そん時から一年ほど世話した男が今でもやつて來ると、知れねえやうに見物の中に隱れてゐても直ぐに見つけちやふんだ。さアさうなつたら、まるで氣違えで、餌も喰はなきア藝もしねえで、其の男が傍へやつて來ねえと、吼える、暴れる、始末に終へたもんぢやねえ。そけえ行くと人間なんざア薄情なもんさね。早え話がちつと位恩をかけてやつたつて、此方が微祿してみれア鼻もひつかけやしねえや、けだものの方が餘ツぽど感心さ。虎は死して名をとゞめ、人は死して皮も止めねえて話だ。」

爺さんは、そんな警句を云つて、ニコリともしないで、言葉をつゞけた。

「だが豹てえ奴あ、いけないよ、あいつア器用でいろんなことを覺えるけれど、何うも油斷がならねえ。でえ一オッウ澄してやがつて、機嫌が好いのか悪いのか、てんで解らねえ。おれア随分長い事手がけた奴に、此處んところをひどくやられちやつた。」と老爺は、一寸頭の横禿を押へて言葉をつゞけた。

『矢張り此方が性に合はねえて氣があるからいけねえんだ。一遍やられたんで、此奴どんな時にやつて來るなてえ呼吸を飲み込んだから、それからはもう平氣だつたが、あいつ、やられたまゝ怖ぢけちやつたらもう駄目だ。此奴なんざア。」と老爺は檻の中の虎をふり向いて、『まるで人間さ、例の男が來せえしなけれあ、云ふ事を聴かねえことなんかありやしねえ。少々氣に向かねえ日でも、おれが入つてつて、樂隊をやりせえすれア、仕方なしに立ち上つて取ッ組むから可愛いもんさ。まるで、給金を貰つてゐるから、藝當をしねえと濟まねえッて云つたやうな鹽べえ式さ。その代り樂隊を廢めると、もう濟んだッて風で、ゴロリ寝轉んでしまやがるんで、餘り八百長じみてちつとばかり工合が悪いや。……マアやつて見ねえ、けだものたあ思へねえから。』

さうして此の老爺は、虎使ひの基礎的原理を要約してから云つた。

『何んでも好いから、相手を虎だと思ひせえしなけれア好いんだ。人間だと思つたら間違ひはねえ。白痴正直な人間だと思ふんだね。ほんとの人間て奴は、腹にもねえことをうはべでこしれえたり、腹にあることをうはべで抑へつけたりして、怒つたつて怒らねえ風をしたりするが、けだものは正直だから、そんなことはしねえ、怒つたら直ぐ本氣になるからね、其處んとこが嘘つきの人間と違ふんだから氣をつけねえといけねえ。マア白痴正直な人間を相手にしてゐると思ふんだね。人間は、虎ッてえと譯も解らねえで亂暴するけだものと思つてるが、その料見をうつちやッちやアねえと、檻の中へは入れねえよ。そんな料見でへえッてつたら大變だ、兩方で喧嘩するより仕方がねえことになる。喧嘩ぢやア人間はとても虎に敵ひこねえ。向うをウンと安心させちまふんだね。それより仕様がねえんだ。入つてゐるうちに相手が虎だてえことを、一寸でも思ふと、何うかすると、直ぐガブリとやられるから氣をつけねえ。此方が向うを虎だと思やア向うが此方を人間だと思ふなア當然だ。虎にア人間は、矢張り、人間が虎を怖がる、同じで怖えもんなんだからな、さう思はせたら往生だ。何んでも向うをすつかり安心させちやふんだ。それより外に秘傳も何んにもありアしねえ。』

それから餘程經つて、彼れの友人は前に彼れに出會つた街で、風のやうに往來を歩いてゐる彼れに再び出會した。兩人は、矢張り汚い横町の酒場の、薄暗い部屋にころげ込んだ。

「何うしたい。やつてゐるかい、虎使ひを。はなのうちはあんまり氣持の好いもんぢやなからう。」

友人は、彼れの鼻の先に、顔を突出して何時もの酒臭い息を吹きかけた。

「やつて見たが、矢張り同じ事だ。」

彼れは失望した人のやうに、氣ぬけのした聲で答へた。友人は怪訝な顔で、

『何が同じ事なんだい。』

「何がつて、虎使ひといふ仕事がだよ。」

「何と同じだつてんだい。」

「今までしてゐた事とよ。そりア君、初めてあの檻の中に入つた時には、怖いよりも、自分を此の上もない豪勢なものと感じて、逆上するほどの誇りを感じたものだ。殊に多數の見物に、さうした征服を見せつけた時の僕の意氣込みは、

豪いものさ。然しそれは、其の豪勢なところを多數の人間に見せつける喜びといふよりも、寧ろ自分の自分自身に對する大發見を歡喜してゐるんだ。おれにこんな偉大な力があつたといふことを見出して歡喜してゐるんだね。けれども少したつうちに、もう一つ發見しちやつたんだ。夫れだからもう駄目になつちやつて止めてしまつたよ。』

彼れはそれを説明するのも面倒臭いやうな風で、苦しい顏をして默り込んでしまつた。

『どんなだい、もう一つの發見てのは？』

『同じことなのよ。今までの僕等の生活と。』

彼れはさう、何時もの言葉を繰り返して、ウヰスキーのコップを口にやつてちよつと舐めて其處に置いた。

つまり彼れは、虎といふけだものに、彼れが人間に要求して得られない或る物を得ることを豫期してゐたのであつた。一番初めにはこれが得られたやうな氣もした。けれども、それが繰り返された時に、彼れは直ちに虎といふけだものに、恐ろしく發達してゐる人間らしさを見出してしまつた。そして虎と彼れとは、今まで人間と彼れとの間に繰り返されたモノトニーを以て、その人間らしさを繰り返すことになつた。

のみならず、動物は、自分の備へてゐる典型的生活を人間よりももつと正確に反復した。彼れの虎は、虎の典型的規範を躬行實踐する點に於て、到底人間輩の及びもつかない道徳家であつた。動物の衝動的生活を、亂雜な不規則な暴戻な不統一なものと思つてゐる人間――實は彼れもさう思つてその動物に、その亂雜、不規則、暴戻、不統一を見出すべく期待したのであつたが――の考へは、飛んでもない間違ひであつたことを、彼れは發見した。それは彼れの非常な失望であつた。多くの人間が、日々繰り返してゐる「同じ事」に焦立たしさを感じて其處から拔け出ようとした彼れにとつ、それは確かに大なる失望であつた。人間からけだものにぬけ出したら、その同じ事から脱却し得ると考へたのは、何んたる間違ひだつたらう、と彼れは悔んだ。

それで彼れは虎使ひになると間もなく、虎の道徳性を惡み出した。その卑屈な因循な無能な生活を卑んだ。彼れは虎が自分に反抗して來ることをすら望んだ。『檻の中で相手を虎だと思ふが最後ガブリと來る。』といつた老爺の言葉を思ひ出して、彼れは檻の中で、何度も何度も、相手が虎だと思つて見た。けれども一度もガブリと來なかつた。それが彼れを限りなく焦立たせた。

彼れは老爺の頭をガブリとやつた豹を憧憬した。彼れの親方のところには豹は居ないので豹を持つてゐる香具師を尋ね廻つたりしたが、今は誰れも持つてゐないといふので落膽した。けれどもそれは彼れが豹を求め得た後にする落膽の手數を省いた落膽であつた。

見物の眼には、虎と彼れとの間に日々猛烈な戰闘が行はれてゐたのであつたが、彼れ自身にとつては、その戰闘は最初の一回だけで澤山であつた。二度、繰り返した時には、もう戰闘でも何んでもない、機械的運動の反復に過ぎなかつた。その體操のやうな規則正しい繰り返しは、彼れを怒らせるに十分なものであつた。それが日々の新規な見物の眼に新しい戰闘と見えるその虚僞の創造を彼れは心から恥ぢた。彼れと人間との生活で、それと同じ虚僞の創造に堪へ切れなかつた彼れは、虎と彼れとの生活で、それを繰り返さなければならない必要は少しも感じてゐなかつた。さうなつたら、彼れは一日も虎使ひでゐられなくなつた。で彼れは虎使ひを廢業してしまつた。

彼れは同じ廢業を、彼れと人間との生活に對

してすることの出來ないのを彼れ自身變に思つた。虎使ひを直ぐに廢めたやうに、それと同じに彼れを焦立たせ、彼れを怒らせてゐる人間相手の生活から、何故即座に脱退しないのであらうか。さう思ふと彼れの焦立ちは、堪へ切れなくなつた。

彼れは、給仕女を捉へて管を巻いてゐる彼れの友人をそこに置いたまゝ、絲目の切れた凧のやうに酒場を飛び出した。さうして街から街をノシ〳〵と風のやうに歩いた。

臍のない人間

臍のない人間が考へられた。

臍といふものは、人間が、此の世の空氣を吸ふまでは、極めて重大な必要を持つた命の綱の結び目の痕だ。胎兒としての人間は、臍を通じて生命を繋いでゐたのである。それは茄子や瓜の蔕と同じで、喰ふ時には、取つて捨てられるほど役に立たないものであるが、茄子や瓜がそれだけ育つたのは、全く蔕を通じてであつた。その運命の綱の結び目が蔕であつたとすると、それは實に、大事な記念でなければならない。人間の臍がそれだ。

出來上つた人間には、それは全く要らないものだ。それはたゞ腹の眞中にある、「め」の字のやうな皺の寄つた窪みで、美觀も壯觀もある穴ではない。がそれが圓い腹の眞中にない時には、腹は、所謂畫龍の睛を點ぜざるもので、尻や背中と見分がつかないばかりでなく、その裡に斗の如き膽を藏する莊嚴な肉塊とは受け取れなくなる。

無論それは笑窪のやうな、深刻な又は嬌艶な表情を持つた穴ではなく、全く自動作用を營む能力を失つた、彈力のない固定した窪みに過ぎないのだが、美しい色彩と、柔かい曲線とを持つた、人の胸をどきつかせるやうな、筋肉のふつくりと盛り上つたお腹の眞中に、この無意味の小穴が無かつたら、見た人は考へ直さなければなるまい、さうして噴き出すか、又は薄氣味惡く思ふであらう。

がそれは確かにもう要らないものなのだ。それが無かつた時に、人間の腹が、滑稽な若くは無氣味な肉塊と化してしまふのは、それを觀る人が、總ての人間の腹に、此の無用なものが、中心の位置を占めてゐるので、偶々それの無い腹を、腹の役をしない肉塊かと思ふに過ぎない。それは痕跡なのだ。有つても無くても好い痕跡なのだ。

がそれは、有つたところで、些しの害をも、人間の腹に與へない穴なのだ。さうして、それを取り去らうとすれば、却つて、腹を損めなければならないのだ。それで誰れも、それを取らうとはしないのだ。のみならず、それを取り去ることをしたところで、「め」の字形の穴は無くなつても、更らに取り去つた痕が、何んなかの形で殘るのだ。そんな餘計な手間を好んでとるにも及ばないし、又取らうとするものはない。

自然は過去に役立つたものの痕跡を、何等かの形で永久に殘すものだ。それを取り去れば、又他の形で痕が殘るのだ。そんなことをするのは無駄手間であることを、人間の臍に於て、人間に教へてゐるのだ。

臍のない人間は、産れて來ない。産れた人間には臍がある。

『臍のない人間』の考へでは、私は失敗した。

（「低氣壓の前後」より）

京に行つてゐた娘

私はその頃、何かの本で、『澤山の人は、明日喰ふ麵麭も、その麵麭を得る手段も持たずに、ぼんやり暮れて行く日影を眺めてゐるが、その翌日になると、その人々は、一人も其處に斃れて居ずに、皆何處へか行つてしまつてゐる。それは彼等が尙ほ何處にか生きてゐる證據である。何が彼等を生かしてゐるのであらうか。何故彼等はそんな風にしてまで、生きて行かなければならないのだらうか。』といふやうな意味のことを書いてあるのを讀んだ。

　私自身も蟲けらでさういふ實驗をしてゐた。燈火を目がけて煩く飛んで來るかなぶんぶんや何かを指の先で摘んで、潰すやうに指先に力を入れて、それを窓の下に捨てて置くと、翌る朝には一匹もそこには居ずに、何處へか行つてしまつてゐる。『それは彼等が何處かに生きてゐる證據である。』が、何が彼等を生かしてゐるのか、何故彼等がそんな風にまでして生きて行かなければならないのか、その邊のことは、格別研究もしなかつた。此の文句を讀んだ時に、人間の場合は、蟲の場合とは少し事情が違ふやうにも思はれた。又違はないやうにも思はれた。人間の場合にも、指の先で摘まれた時に、摘む人の指先の殆んど無意識の力の入れ方一つで、潰されたり助かつたりすることも隨分あるやうに思はれた。優しく摘むのが道德で、ムズと摘むのが殘忍だなどといふ際どい差別が人間の場合にも說かれてゐるやうにも思はれた。窓の下にすてられた蟲と同樣に、生きて行かれる理由も、生きて行かなければならない理由もない人間が、澤山生きて行きつゝあるやうにも思はれた。生きて行くといふ事が大變困難なことのやうにも又頗る譯のないことのやうにも思はれた。

　强ひて解決しなければならない譯でも何んでもないが、兎に角そんなことが問題の形で、私の頭の裡に現はれたり消えたりしてゐる時に、私は大阪の郊外の天下茶屋の下宿からその近邊の貸家に引移つた。

　田圃を見晴らした小高い道の端に、大阪一流の、東京ならば藝人か圍ひ者かゞ住みさうな、高い所に窓のついた華奢な板塀を廻らした長屋であつた。私の勤め先の女小使が世話をして吳れた、五十そこ／＼の婆やと十四五のその娘とに、家のことを一切取賄はせて、私は毎日大阪へ通つてゐた。

　その婆やの素性や經歷などについて私は何も知らなかつた。たゞ娘と二人で、何處かの二階を借りて、人仕事をして活らしてゐたといふことを聽いただけであつた。好い加減皺が寄つても差支ない歲でありながら、箍をかけたやうに皮の張り切つた額をして、壺口で物をいふ、甚だ感じの好くない女であつた。別段若い頃の容貌を想像させるほどの顏色ではないが、態度や物ごしに、何となく或る種の女の年を老つたのに能く見るやうな倦怠と、傲慢と、氣取り氣とを持つてゐた。

　これに反して――といふほどの問題でもないが、その娘は、風もかまはずに、がさつに働く、何方かといへば田舍風な女の子であつた。娘に對して、彼女の母は、常に、彼等の間に、嚴格と考へられてゐる特別の形式を備へた小言を云ひつゞけてゐた。古道具屋が、一切合財を纏めて持ち込んだ世帶道具の新古いろ／＼の安物を、下の六疊と茶の間の四疊半とに列べて、その內

の一品たる小さい長火鉢に、折目のついた白つぽい縞の羽織を着て、斜めに凭りかゝつたその婆やが、型のやうに、長い煙管の雁首を摘んで煙脂を掘じくりながら、眉に八の字をよせて、働いてゐる娘に何か口小言をいふその光景を私は、別段の感興を以て眺めもしなかつた。アトから回想して見ると、何だか自分の家の光景としては、少し變手古だと思へぬでもないが、それも強ひて考へれば……なので、その當時は、勿論それを矛盾とも撞着とも、滑稽とも悲慘とも考へなかつた。

私が大阪から歸つて來て、風呂から上つて、浴衣がけで――此の生活は、或る年の春に始まつて夏にかけて營まれたのであつた。――下の茶の間で食事にかゝると、娘が給仕をしてゐる傍の長火鉢に、例の恰好で、件の婆やが、番茶の世話か何かしながら、ちよい／＼世間話をしたり、娘に小言をいつたりしてゐる。たゞこの光景だけを見たものは、恐らく全體を誤らずに解釋するのは困難だつたであらう。尤も彼等の想像に適合するには、その娘が餘りに子供で、さうして田舍ッ子であることであつた。そこに多少の醇化を加へれば、私の地位は、日本の紳士の因襲的な享樂生活のそれに似たものであつた。現に東京にゐる友人から、その頃、何とも意味の知れない變な手紙を受取つた。私は漸く推察がついて、こゝの實際を通じてやつたところが、『氣の利かない。同じ手數をかけるなら、も少し氣張つて……』何だとかいふ返事をよこしたことがあつた。實をいふと私は、此の友人の手紙を受取つた時に、ちよつと推量がつきかねた位、私の新しい家の內の光景に無頓着であつた。尤も、私は、二階の二間を、書齋と客間にして、食事と便所に行く時にしか下に交渉はなかつた。それに可なり忙しいので、何かの話を婆や達にするのも、その食事の時だけであつた。實際私は、書齋にゐる時に、誰れか家のものに襲はれることを子供のうちから好かなかつたから、婆やや子供が萬一それを犯すと、態と苦い顏をして見せてやつた。賄ひは、月々、私の俸給の袋のうちから、私の入用だけを引きぬいてあとをそのまゝ婆やに、『帳面につけて置くのだよ。』と言つて渡して遣つた。婆やは、生憎『一』の字から『十』の字位までがわかるばかりで、帳面をつける事も出來なかつたと見えて、月の末に見せられる帳面は、子供がつけたのであつた。子供は高等何年かまで行つたといふのが婆やが帳面を見せる時に附加へる自慢であつた。けれども、私は婆やの希望通り彼女の手蹟を氣にとめて見ることもしなかつた。その計算の當否も私は知らなかつた。私は初めから、『帳面に附ける』と云ふことを、たゞ彼等の間に不正が行はれてゐない、といふことの諒解としてゐたのだから、『附けました。』といつて見せられゝばそれで安心してゐたのであつた。さうして、それがために別段損もしなかつた。――話が外れたが、そんな風だから、平生は、私と婆や達との間に、頻繁な交渉は少しも起らなかつた。婆やは、夜晩くまで、時々夜明けまで書齋にばかり閉籠つてゐる私の生活に同情してゐたが、それが何ういふ意味の生活なのか、少しも解らなかつた。さうして偶々下りて來る私の顏を見ると、『旦那樣は、時々イヤな咳をして居なはる、氣になる咳や。』と云つてゐた。私の生活のうちで『咳』だけが彼女の諒解し得た全部であつた。婆やには、私といふものは、月末に金の入つた袋を渡す、咳をする主人であつた。

或る日の夕方、私が大阪から歸つて家の玄關を上ると、何時もの通り婆やと子供で出迎へたが、そのまゝ二階へ上らうとすると、その上り

口に、派手な浴衣に、細帶を卷きつけた一人の若い女が、だらしのない風で、身體を横にくねらせて、裾の方の赤いものなど見せながら、半ば寢たやうな恰好で蹲つてゐた。帶を背負つてゐない腰の邊が取つてつけたやうに圓味を持つて膨んで、全く二階の上り口を塞いでゐるほどに尨大に感じられた。

私は驚いて立ち止つた。この驚きには一種忌な感じが伴つてゐた。それは、こんな恰好のものを見せられた時にすべての人の感じるやうな忌な感じであつた。女は依然横を向いたまゝ、崩れた身體をも一つ崩したが、それがお辭儀であつたらしく、さうして少し居ずまひを直したけれども、根つから前の恰好と違ひもしなかつた。たゞ、その大きい圓味を、上り口から少し傍にずらしたばかりであつた。それは、私に通路を作つてくれたのであつた。

二階への上り口を得た私は、無論直ぐに階子段に足をかけようとしたが、その拍子に、反射的に婆やを振り向いた。それを質問の態度と解したらしく、婆やは、『京に行つてゐた娘が、一寸歸つて參りまして。』と、無論こゝに再現したよりも、もつと關西訛りの言葉とアクセントでさういつた。別に人を驚かしたといふ風もしなかつた。

『京に行つてゐた娘。』と私は胸のうちで繰り返したばかりで、何も云はずに二階に上つてしまつた。手にしてゐた書物や雜誌をテーブルの上に置いて、洋服を代へに下に降りて行くと、『京に行つてゐた娘』は、依然として階子段の上り口にころがつてゐる。その無作法な態度は、流石に無頓着な私を少し考へさせた。玄關の間に續いた茶の間の次ぎの六疊の薄暗い座敷に來ると、後ろ向きになつてゐた『京の娘』を正面から見ることになる。そこで洋服をぬいだり衣服を着たりしてゐると自然その娘が眼に入る。肉づきの好い身體をして、容貌は、たゞ少し整つてゐるといふだけで、何の感情も持つてゐない輪郭で、表情に乏しい目鼻立ちだが、田舍娘じみた妹娘とは違つて、何となく『京に行つてゐた娘』といふ婆やの言葉を想はせるところがある。たゞその顏の色が、光線の工合とは思へないほど青白かつた。

風呂から上つて食事をしに茶の間に坐ると、『京の娘』は、次ぎの六疊との境目の所に、同じ崩れかゝつた姿勢で坐つてゐた。その顏が一層青白いので、私は、食事しながら、もしか病氣ではないかと尋ねた。

『脚氣でして、主人が暇をやるから連れて行けて云はれてね。』

と婆やは事もなげに嘯いてゐる。娘は青い顏を少し外向けて、苦しさうに笑つた。その笑ひ顏は、艶めいたうちに人を嘲るやうな驕慢を示したもので、矢張り普通の娘に見ることの出來ない特徴を帶びてゐた。

その笑ひ顏を見ると同時に、私は、何時か婆やから、此の事について聞いたことのあるのを想ひ出した。それは祇園の何樓かに勤めてゐる職業婦人だつたのである。婆やは、その娘の身賣りをした事情についても、曖昧に何か話した事があつた。それは無論娘を賣る親が誰れにでもする申譯と同じ、意味のないものだと思つた爲めか、私はすつかり忘れてしまつたが、兎に角何年かの年期といふ契約は、いろ〳〵の事情で、次第々々に延びて、今のところ何時年が明けるといふこともわからないといふ話も聽いてゐた。私は、元よりその娘が、私の家へ來ることにならうなどとは、想ひもかけなかつたから、その身上について、少しも知りたいことはなかつた。現に私の家に來てゐる此の婆やの身上についてさへ、格別知らうとも思はない位なのだから。それで頓と忘れてゐたのである。が、婆や

は、兎もすれば、此の娘のことを話したかつたらしい。それはまさか自慢のつもりでも無かつたのだらうが、さういふ生活そのものの良し悪しを度外に措いたときに、婆やは、自分の娘が、その生活法に從つて、可なり優秀な地位に在ることを誇りたかつたに違ひない。婆やは確かに、彼女が勤めのうちに、次第に増加して行く借金の額を話して、その巨額に上つてゐることを誇りのやうにいつたかとも覺えてゐる。それが彼女の、職業上の地位を高める爲めの、云はゞ權威を購ふ代價でもあるやうに、婆やは云つてゐたのであつた。婆やは、自分の娘がその生活法に從つて、誇りも持ち、光榮も持ち、權威も持つてゐることを信じてゐたらしい。さうしてそれらのものは、自分の娘の、婦人としての優越が當然酬いられた結果に外ならないと思つてゐたらしい。それを想ひ出して私は、改めて、そこにゐる娘を見た。誇りと光榮と權威とを持つた一個の婦人は、細帶姿で自分の母の奉公先の主人の家に病氣の身體を運び込んで、青い顏をして、崩れかゝるやうに坐つてゐるのである。私は婆やの理想主義が、この現實と何うして一致するだらうかと危んだ。

婆やが、私の食事中に説明したところによると、此の娘の脚氣は、數日前から惡性を呈して、醫師から斷然職業の中止を命ぜられたが、それはもう時期が遲れてゐたらしく、きのふ急に衝心の病狀を呈したので、今朝早く電報を婆やに打つたのであつた。婆やは、電報を受取つて、直ぐに京都に行つて、主人の命ずるまゝに、こゝまで連れ歸つたのであつた。婆やにとつては、私の家の外にその娘を連れ歸る家はないのである。主人が、その事情を知つて居ながら、又此の病人を汽車などに乘せることの危險を承知して居たに拘らず、一刻も早く連れ歸ることを命じたのを、婆やは別に不合理なこととも考へないやうな調子で私に話した。それが、主人の亂暴な處置よりも、一層私を呆れさせた。主人は、巨額の借金を背負つてゐる此の娘から、その借金を取り上げるあらゆる機會を逸する筈がない。それにも拘らず入院を拒んで、連れ歸れといつたのは、恐らく此の娘の病氣が非常の危險狀態にあることを醫者から聽いてゐたのではあるまいか。さうして醫者と共に、その眞相を、娘の母に隱して、連れ歸れと命じたのではあるまいか。恢復の機會の少い病人を入院させて萬一のことがあつたら、借金を棒にふつた上に、その費用をも負擔せねばならない。主人にとつてはこの娘が即座に死んでくれた方が經濟的なのである。で何も知らぬ婆やは、その娘を汽車に乘せて私の家に連れて來たのであらう。

さう私は解したのであるが、さういふ社會の事情に、私よりも遙か明るい婆やが主人のかうした心事を觀破つてゐない筈がない。觀破つたとすれば、この婆やは、自分の娘が、何がしかの金と引替へに殺される運命にあることを、悲しむか、怒るか、何かしない譯に行かない筈である。然るに婆やは、さういふ經過を私に話しながら、まさか嬉しさうでもないが、別段激昂した樣子もなく、唯の話を話してゐる年よりのやうに澄してゐた。私は、それに驚かされたのである。

私は、自分の食事の濟んだのか濟まないのかを忘れてしまつたほど、慌てた心持になつて、そんな病人を汽車に乘せたりして連れて來る法があるかと叱つた。

婆やは、それでも落付いて、昨日まで非常に惡かつた娘が、今日は歩行も平氣でする程快くなつてゐたので、連れて來たのだと辯解した。無論私の言葉を、私がこんな娘の來訪を迷惑と思つて、外の理由を借りて怒つてゐるのだと

邪推したやうな樣子もなく、極めて冷靜なものであつた。

そればかりでなく、連れて來た娘を、すぐと湯に入れたことを、妹娘の口から聽いて、私は又慌てた。脚氣衝心の病人を湯に入れるのは、猫の子を熱湯に入れるやうなものである。さう聞いた時、私の胸はドギと、何か堅い物を打ち込まれたやうな感じがした。それは惡いことが直ぐ湧いて來るのぢやないかといふ豫感であつた。

私はこの驢馬のやうな婆やと、口を利く張り合がなくなつてしまつた。で私は『大事にしなけりやいけない。氣をつけなければいけない。湯に入れるなんて亂暴だ。』と獨言のやうにいつて、二階へ上つてしまつた。それはもう電燈がついて餘程經つてからであつた。

二階へ上つた私は、書物をひろげて見たり、雜誌をあけて見たりしたが、先刻の豫感が胸に痞へてゐて不安のうちに空しく時間を費してゐるばかりであつた。終に私は堪へ切れずに、便所に行くのを口實にして、下へ降りて行つた。

六疊の間に床を取つて仰向けに寢てゐる娘が目に入つた。傍には母がついて頻りに、娘の胸の邊を撫でてゐる。便所へ行きながら私は寢てゐる娘の顏を見た。娘は、詫びるやうな苦笑を私に見せて、電燈の影の方へ顏を背むけた。

便所を出た私は、そのまゝ二階へ上つて行くより外なかつた。二階へ上つて見ると、矢張り前の通りの不安が私を支配して、物などを讀む氣には無論なられない。平氣な顏で煙草をふかしてゐる婆やの顏が、幻覺のやうに、私の眼先にちらついてゐる。私はその顏を掴み潰してやりたいやうな腹立しさを感じた。

下の座敷が急に騷がしくなつた。私は刎ね上げられたやうに椅子から離れて、下へ降りていつた。見ると、病人は、苦しさうな唸き聲を上げて、眼をつむつて青白い顏を左右に動かして悶えてゐる。婆やと妹娘は、狼狽して左右から娘の身體を撫で廻して居る。私は直ぐと妹娘に醫者を呼びにやつて、醫者が來たら、樣子を話しに二階へ來て貰ふやうに賴むことを婆やに命じて、二階へ上つて行つた。

病人が、苦しいうちにも、その唸き聲を一生懸命に抑へてゐる樣子を見た時、私は、非常に慘たらしいものを見せられたやうな氣がして、傍にゐるに堪へなかつた。二階へ上ると、その聽えない聲が、私の耳を經ないで、直ぐに胸に響いて來るやうに感じて、堪らなく不愉快だつた。

軈て醫者が來た樣子であつたが、永いことたつて、漸く二階へ上つて來た。脊の低い、中肥りの親切らしい年輩の先生であつた。病人の樣子を聽くと、醫者はいきなり、

『貴下は、大變御迷惑なことで、飛んだご災難ですな。』

といふのであつた。私は面喰つて、何にも返事をしないでゐると、醫者は、先づ病人に逢はせなければならない身よりでもあるなら電報で直ぐに呼ぶやうに命じた、といふことを話して、病氣は脚氣衝心で、今にも心臟痲痺が來るかも知れないといふ。

私は、もうそれほど慌てなかつた。醫者の言葉は、私の長い時間持つてゐた豫感に一致したものに過ぎなかつた。醫者は、たゞ頻りに、私のことを氣の毒がつた。私自身はさう自分を氣の毒とは思はなかつた。驢馬のやうに無感覺な婆やも、少しは刺戟されたかと、痛快にも感じた。醫者は、汽車に乘せたのと、湯に入れたのが惡かつたのであるが、そんなことをしなくとも、十分危險狀態に在つたらしいのを、追ひ出した樓主が怪しからんと咎めた。その樓主よりも、それを許した醫者は一層怪しからんと怒つた。

『けれども一番貴下が御迷惑でしたな。』

とまだ、それを云つてゐる。私も、先刻は、醫者のいふ通りのことを考へて樓主や廓の醫者を不埒だと思つたのである。が然し最も密接の、親身の關係や、利害の關係を持つて居る當の娘の母の感覺が、あゝいふ風に鈍痲したものであつて見ると、そんな親身の關係のない、さうして利害關係からいへばさうした方が都合の好い赤の他人の感覺が、同じくあゝいふ風であつたところで、少しも驚くに當らないことである。たゞさういふ鈍感の間に抛り込まれた一人の女の命は見じめなものであると思つた。然しこれとても、其の女の感覺の如何によることで、それが周圍の鈍感と同じ程度の鈍感であるならば、當の女は、たいして迷惑を感じてゐないかも知れない。ほんたうに醫者のいふ通り、一番迷惑なのは、私自身かも知れない。

醫者は、今一度注射をしに下りて行つたが、更に上つて來た時には、今夜は、一晩警戒を要するし、絶えず注射を續けなければならないから、代診を寄こすといふ話であつた。幸ひにして、今夜持ちつゞければ、多少の望みはある。さうすれば、それから一週間が危險區域で、それを越せばもう大丈夫だが、此の病人は、假令、今夜持ちつゞけても、恐らく次ぎの一週間内に片付くであらう。然しそれまでは、絶對に動かすことは出來ないから何處へも移す譯には行かない。「さればといつて、お宅から葬式を出す譯にも行きますまいから、愈々となつてから、釣臺で身よりの家へでも搬ばせるのですが、今聽けば、大阪には身寄りも何もないさうで……。困つたものですなあ。何うも飛んだご災難で。」と又私に同情を持つてくれて、「直ぐと代診を寄こします。」と歸つて行つた。私は醫者の來ない前とは、まるで變つた落付いた氣分になつて、下の座敷に進行してゐる事件が、私の家に不自然なことでも、不合理なことでもないかのやうに思はれた。家から葬式を出すことも、決して考へられない事とは思へなかつた。たゞその事件に妨げられて、私の仕事が少しも氣乘りのしないので閉口した。

代診が來たので、私は、もしもの時には起すやうにと賴んで、寢床へ入つたが、寢つかれなかつた。さうして一體これは何うした事だと考へた。

彼女の生活法に從つて、可なりの誇りや光榮や權威を持つてゐた彼女は、その生活の鍵を握つてゐた主人に閉め出しを喰つて、權威ある身體を、私の家の階子段の上り口に轉がすより外に行く途がないことになつた。さうしてその身體は死にかゝつてゐるのであつた。しかも、彼女の死んで行くことについて痛切の感情を持つてゐるものは、彼女自身の外に一人もなかつた。彼女の母親でさへも、彼女が權威ある境地から、一躍して野倒れ死の次ぎまで墮ち込んだについて、唯當惑を感じてゐるといふ外に、何の感情をも持つてゐなかつた。母はその當惑を何處へ持つて行かうといふ意志もないのであつた。さういふ境遇に彼女を突き落した彼女の主人の道德を肯定してゐたのであつた。さうして、彼女が、その場合に、潔く主人から引下ることは、一方では彼女の誇りに相應した自負的態度であると同時に、他方では、より以上の負債を主人に對して負はぬ爲めの經濟的態度でもあつた。それ等の過程が、重大な社會的缺陷から産まれたものであるや否やといふやうなことは、これ等の關係者の誰れもが、少しも考へてゐないことであつた。めい〳〵は、各自の道德と利害とによつて妥當な、從つて避け難い途を歩いてゐるのだと信じてゐるのであつた。當の彼女でさへ、自分がたゞ偶然のゆかりを持つたのみの他人の家で死んで行くことについて、自分自身にも、自分の周圍にも、何の缺陷をも感

じてはゐないといふ風であつた。もし彼女が、自分の死の避け難いことを思つた時には、自分の負うた巨額の負債を償却することが不可能に陥つたといふことについて、重大の責任を感じたに相違ない、社會は彼女に、さういふ道徳しか教へてゐないのであつた。彼女は、今日まで、さういふ道徳に基礎を置いた誇りと光榮とを把持した生活を續けて來たのであつた。彼女の肉體が負うてゐる巨額の負債は、それらの優越感を彼女に與へる材料にも證據にもなつたものであるが、自分の肉體がその負債の償却を完うせずに朽ちて行くことは、債主に對する物質上の、同時に道徳上の負債であると共に、彼女自身にとつても、その肉體が十分の代價を得なかつた殘り惜しさであつた。「現在」の外に何物もない彼女は、その「現在」の支配の下に、從順に生きて行く外に何の希求も憧憬もなかつた。彼女は、「現在」が、何ういふ風にして人間を虐げる法則を作り、それを何ういふ風に人間に適用してゐるかといふやうなことには、少しも考へ及ばなかつた。要するに彼女は平和であつた。

彼女の母は、彼女の居る社會の道徳的頽廢について私に語つたことがあつた。自由廢業とか前借の踏み倒しとか、女衒の詐欺手段とか、更にその女衒をすら欺騙する職業女のことなどについて、慨嘆したやうな嘲笑したやうな調子で語つて、自分の娘が、それらの道徳的頽廢から超然として、傳統的の權威を保つてゐることについて自ら十分の誇りを持つてゐることに多大の滿足を感じてゐるといふ風であつた。從つて今彼女は、その道徳の犧牲となつて、見ず知らずの私の家で死んで行くといふことについて、彼女も彼女の母も、格別の不滿を感じてゐないに違ひない。私は、「現狀の安泰」が全くかういふ「奴隷の滿足」に依賴してゐるものであることの實際の證據を、更に一つ見出したのであつた。それは全く私の考へてゐたことの裏書だつたので、私は、それを見出した時に、細帶でころがつてゐる彼女を階子段の上り口に見出した時ほどは驚かなかつた。私は、何時の間にか眠つてしまつた。

翌朝起きた時は、代診が今歸つたといふときであつた。病人は、死んだ人のやうになつて、眠つてゐた。一晩注射で持ち堪へたのは寧ろ不思議だ、と代診は云つてゐたさうである。今夜あたりは何うであらうか、と首を捻りながら、代診は歸つて行つたのである。

私は、萬一の時には電話をかけるやうにと命じて大阪へ行つたが、その日は電話も來ずに、夕方に歸つて見ると、二三人の男や女が、病人の枕許で畏つてゐた。それは、電報で出て來た田舍の縁者であつた。その人達は、主人たる私が歸つて來ても、別段挨拶をするでもなし、病人の傍に行つて樣子を覗いても、母一人が答へるといふ風で、至極のんきな人達であつた。が、私には此の人達の無頓着が決して悪意でないやうに見えた。さうしてその眞面目な、眞劍らしい態度を嬉しく思つた。私は、丁度、かういふ大病人を控へてゐる家の、厄介な客人のやうに、獨りで二階へ上つて、洋服をぬいだ。無論食事は外で濟して來たのであつた

その晩、大阪から友人が訪ねて來てくれた。その人は、常から少しのことに驚いた風をして、その癖たいして驚きもしない人であつたが、何となく物々しい下の樣子に、例の通りの目を瞬つて、口を烈しく開けたり閉めたりして、何事か起つたのかと、慌しく尋ねるのであつた。「それは大變だ　早速代りを置いて、皆に出て行つてもらふが好いでせう。私のところに、一人婆やの心當りがあります。」とその友人は、私の話をきくか聴かぬかに、自分の方が困つてゐる

人のやうに急き込んで、早々に歸つて行つた。

その時、醫者が來診した時にも、あぶないのは今夜だと宣言して、歸つてから代診を寄こしてくれたが、矢張り何うかから持ち堪へた。朝下に行つて見ると、昨日來た人達は、昨日から坐つたまゝ、まるで動かなかつたやうに、めい〳〵の地位に固くなつて畏つてゐた。

醫者が、「もう大丈夫。」と云つたのは、それから三日目であつた。あと三日ほどたつたら釣臺で動かすことも出來る。「さうたつたら近所へ間でも借りて移らせませう。」と、醫者は自分の責任のやうにいつた。

二三日經つた夕方、私が歸つて見ると、病人も婆やも居ないで、妹娘が一人で働いてゐた。それは醫者が、自分で近所の座敷を借りてくれて、病人を其處に移らせたのであつた。私は少女に、診察料と、藥代とを持たせて、篤く謝意を傳へさせた。

婆やは、娘の看護の爲めに暇を貰ふといふことであつたが、妹娘にも、何うかして暇を貰つて手傳ひに來いといふのであつた。娘は、年のゆかない自分に、旦那樣のお世話は出來ないが、それでも旦那樣を一人殘して行つてしまふなんて、そんな勝手なことは出來ないと、殘つて居るのであつた。さうして母の我儘と、自分の不行屆について頻りに詫びをするのであつた。私は、それも當分のことだからと慰めたり、勵ましたりした。

翌朝になつて、姉を見舞に行つた妹が歸ると、母は、執念く自分にも暇を貰つて看護に來いと命じたとかで、當惑した少女は、旦那樣をお一人にして……と泣き出しさうな顏をしてゐるのである。私は、母の我儘に對して腹を立てるよりも、此の少女の當惑に對して同情して、此方は代りを置くから心配せずに看護に行くが好いと云つて、大阪の友人の話した婆やを早速寄こして貰ふやうに手紙を出した。

翌朝その婆やはやつて來た。前の婆やとは正反對に、細く痩せて脊の高い、一寸品もある優しいお婆さんであつた。私は飛んだ拾ひ物をしたやうに思つて、早速少女を母の所へ返してしまつた。

新規のお婆さんは、物ごしから、仕事の樣子などが、前の婆やとは、まるで階級を異にするやうに違つてゐて、何となく、都會風の物馴れたこ、、なしが目に立つた。身體が少し弱さうだが、病氣はと尋ねても、たゞ少し喘息はあるが外に故障はないといふ。それは友人も云つてゐたことであつた。

數週間は何事もなしに過ぎた。先の婆やは全く姿を見せなかつたが、妹娘は、毎日數回往復してゐる樣子で、姉娘も、漸く秋風の立つと共に、めつきり快くなつたといふことであつた。

袷の季節になつた。新規の婆やは、時々烈しい咳を始めた。「喘息が起つて來まして。」と、その度に言譯のやうに呟いてゐたが、或る薄ら寒い晩に、私は一時過ぎに寢に就いてうと〳〵としたと思ふと、急に猛烈な一種の雜音に目を覺まされた。それは下に寢てゐる婆やの喘息の咳なのであつた。

まるで犬の遠吠えに薪割りの音を加へたやうな、吸ひ込むやうな、吐き出すやうな、何うしてあの細い身體からあんな猛烈な音が出るかと思はれる烈しい咳を、默つて聽いてゐると、何時までも續けて、時々引きつけるやうな、絞め殺されるやうな聲を上げるのであつた。私は日常私達もしてゐる咳といふものに、あんな烈しいのがあらうとは知らなかつた。それが下の天井に響いて、私の枕に直かにぶつかつて來るので、私は時々、頭を擡げて枕から耳を離さない譯に行かなかつた。が幸ひ、そのうち

鎮まつたので私は眠つてしまつた。
　翌朝婆やの顔を見ると、ケロリとしてゐる。そのことを話すと、存外平氣で、そんなことがあつたかといふ風であつた。
　ところが、その晩も同じ時刻に、同じ事件が起つた。今夜のは、その猛烈の度と、その時間の長さとで、遙か昨夜のに勝つてゐた。私は絞められたやうな聲が、一度は一度より細くなつて行くのを聽いて、堪へ切れずに、身體を起して様子を窺つた。すると咳きながら雨戸をガタ／＼やる音が聽える。何うなつたのかと私は猶豫せずに下に降りて見ると、暗闇の中で、婆やは雨戸の隙から、緣先に頭だけ出して、身體を轉がすやうに悶えさせながら、「ゼー／＼ゲー／＼」と咳いてゐる。私はその背中を撫でてやらうかと思つたが、あとで恐縮されることが煩いので躊躇してゐるうちに、少しづつ鎮まつて行つた。やがて婆やは、身體を起して、寢間着の袂で、額中を撫で廻したり、襟首をこすつたりしながら、頻りに私に詫びをいつた。この謝罪ほど、私にとつて受け入れ難い謝罪はなかつた。私は、何か藥でもあれば用ゐるやうに注意して二階へ戻つた。
　かういふ事が、三晩か四晩引續いて起つたので、私は、睡眠不足の結果神經衰弱に陷りさうな氣がした。此の調子で、今少し寒くでもなつたらどんなことになるだらうと思ふと、私の神經衰弱の進行よりも、此の婆やの喘息の進行を怖れた。無論それが私に沒交渉に進行するのだつたら、私は別に苦にもしなかつたのであるが、（その證據には、此の婆やが出た後で、その喘息が何う進行したかについて、私は格別の興味を感じなかつた。それが私の生活を動搖させるので閉口したのであつた。婆やも、毎晩のやうに、下に降りて來る私を見ることに堪へなかつたと見えて、たうとう、先の婆やの妹娘に再び來て貰ふことに自分から話を纏めて、暇を取つて出て行つた。私は此の婆やが、その重大な喘息を、些事のやうに言ひなして、私の所へ住み込んだその境遇のことを思つて、出て行くことを氣の毒に思つた。さうして私が、奉公人の咳などの聽えないほど廣い邸宅を持つてゐたら、此の婆やを出さずに濟むのであるがとも思つた。
　戻つた少女は、始終その母から、看護の手不足を訴へられて困つてゐた。けれども彼女は「お母さんは我儘で濟まないことばかりいひます。旦那樣を一人にして私が……」と子供が云ひ難いとこだけ略しては、詫びを云つて居た。無論母の言葉に從つて出て行く氣はなかつたのである。
　そんな風にして一週間ほど經つた日の晝過ぎ頃、大阪に居る私に電話がかゝつて、妹娘の聲で、今家に泥坊が入つて、いろ／＼のものをとられたといふのである。途切れ／＼震へ聲で一向要領を得ない。何しろ直ぐ歸ろといつて電話を切つて、歸つて見ると、少女は、晝頃に晩の食事の材料を調へに、下の町の方へ行つたほんの三十分ばかりの間に、表口をコジあけて、空巣覗ひが入つて、私の衣類の和服の分を大部分――といつても、全部の嵩が知れたもの故、たいした量でもないが、兎に角、持つて行つてしまつた。テーブルの鍵のかゝつた抽匣をコジあけたが、そこに袋から少しばかり引きぬいて原稿紙に包んだ紙幣の入つてゐたのは、搔き廻した拍子に、手紙や用紙の中に混れ込んだと見えて、助かつてゐた。裏にかゝつてゐた猿股も持つて行かれた。
　妹娘は責任と恐怖とに慄へて、たゞわく／＼してゐた。巡査が來ていろ／＼のことを尋ねても、元より手がかりにも何にもならなかつた。入り口の潛り戸の輪かき金を外から巧みに抜き取つた手際は、專門の空巣覗ひ相違ない

〵、その巡査は、そこのところを撫でたりさすつたりして感心して歸つて行つた。
妹娘は、もう恐ろしくて、何うしても獨りで留守は出來ないといひ出した。それは無理もないことであつた。つい一月ほど前にも、一軒置いて隣の家の主人が、詐欺强盜の犯人だつたとかで、二人の刑事巡査と大格鬪をして縛られて行つたといふ――實際はたゞ連れて行かれたものらしい――新聞の仰々しい報道を讀んだことも、此の妹娘の恐怖を唆る種であつた。
そこへ、母は母でそんな恐ろしいところに娘は置けないと云ひ出した。無論この位のことを恐ろしがるやうなお婆さんではなかつたので、それはたゞ娘を手許に戻す口實に過ぎなかつた。
私は寧ろ、代りのあるまで一人で居ようかと思つた。留守にしても、もう持つて行かれるものは、書物と洋服の外に何もない。大阪の泥坊は、書物と洋服とは決して持つて行かないとは、嘘か眞實か、巡査の話であつた。晝間あけて置いても、私には差支がなかつた。然し、近所からも巡査からも、以來留守にしないやうにとの要求を喰つてゐた。私は、再び元の下宿に引揚げる外はなかつた。
元の下宿へ行つて見ると、幸ひ先に借りて居た十疊が明いてゐたので、す、移ることにして、家に歸つた。玄關に立つたまゝ、そのことを少女に話して、直ちに荷物を取纏めるやうに命じると、少女は涙ぐんだ眼をふせて、「濟みません、濟みません。」と微かな震へ聲で繰返しながら、子供らしく、柱につかまつて、顏をそむけた。

下宿に移つて十日ほど經つと、「別嬪さんが見えました。」と宿の亭主が一人の女を私の室に案内した。『京に行つてゐた娘』が長い病氣から恢復して禮に來たのであつた。素人臭い束髮に結つて衣服も職業女らしくない地味な風をして、薄く化粧した顏は、病後とは思へないほど好い血色をして居た。其の樣子は、無論、大きい圓いものが階子段の上り口に轉がつてゐるのを見た時のやうな不快な感じを起させるものではなかつた。世話になつた禮をいつて、再び京都へ行つて職業を續けることを話して、それきり默つて坐つてゐた。職業女としては、頽廢的氣分に乏しいその硬い感じに、私は寧ろ同情した。輪郭だけの整つたその表情のない容貌や、殊更素人らしく作つたその身裝や何處かに、職業女に必然な一種の野趣を示してゐるのを氣の毒に思つた。
私は、此の女が、その物質上並に道德上の負債を果たす爲めに、從順に、再び前の生活に返つて行くことを考へて、現狀に盲從して、廻り燈籠のやうな生活に滿足してゐる人間の平和を悲しく思つた。當然死んでしまふべき筈の人間――强ひてその死から逃げ歸らなければならない理由を持つて居ない人間が、かうして平氣で元の生活に返つて行くのを私は不思議に思つた。その生活は、再び、當然死んでしまふべき筈に追ひやらるべき生活なのである。私は多くの人間が、私の窓の下に捨てられたかいかなぶんぶんのやうに、潰されかゝつては生き返つて、生き返つては又潰されに飛んで來る、その果かない運命の裡に安住してゐる事によつて持ち來されてゐる平和が、何時まで續くものかを考へさせられた。
晴れやかに、にこ〳〵しながら歸つて行く此の女の犬儒的な態度は、殉教者のそれに近いまで悲壯なものであるやうに私には思はれた。

二人の輕業師

身體の節々がぬけるやうに痛むのを訴へようとして聲を立てた時に、彼れは、着物を着たままで風呂に入つてゐる夢を見てゐた。

半分ほど眼が覺めると、身體中が汗でジトジトしてゐるので、たまらなく氣持が惡かつた。恐ろしい目に遭つたすぐ後のやうな動悸がして今の前の夢の中のことを回想するのが恐ろしかつた。

頭は箍をはめられたやうで、顏の鼻から上の部分が、別のものを取つてくツつけられたやうに感觸を失つてゐた。鼻の孔が、何か臭いもので、奧の方から栓をされたやうで、すつかり鼻が塡つてしまつてゐる癖に、嗅覺が無暗と鋭敏に働いて、自分が動物のやうに臭かつた。

やゝ意識が判然して來ると、狹い部屋の眞暗な空氣が、溶けた鉛のやうに自分を壓してゐるのを感じた。その上に、戶の隙間からさし込む强い光線は、その鉛の液を溶かす火でもあるやうに、恐ろしく熱く感じられた。その鉛の底に横になつてゐると、今にも壓し殺されさうな恐怖を感じて、彼れは、半ば夢中で鐵彈でも持ち上げるやうな努力で頭を擡げて、寢床のすぐ傍の雨戶を慌しく押しあけた。

自由な、冷たい空氣に頭を冷さうとした豫期に反して、蒸したやうな空氣が、彼れの熱した顏を撫で廻して、彼れを窒息させようとした。

曇つた空はイヤに眞白に輝いてゐた、所々に黑い綿のやうた雲の塊が、小搖ぎもせずに盛り上つてゐた。空が眩いほど照り返してゐる癖に、下の方は黃色にどんよりとして、少し隔つた土藏の棟は、薄ぼんやりとぼやけてゐた。

石塔でも押し倒したやうに、彼れは再び床の上に倒れて、熱でも煩つてゐる病人のやうな唸き聲を出した。其のまゝ混沌となつて、下のボン／＼時計の八つ鳴るのを、誰れかと何かで烈しく諍つてゐる最中に聽いた。

蒸されるやうな熱さで、汗ぐつしよりになつて眼が覺めると、寢床の腰から下に强い日が當つてゐた。

「こんな日は、俺はいけねえんだ。休みてえな。」彼れは起きながらそんなことを呟いた。

彼れはA公園のY一座の輕業師だつた。

「休みてえな。……所が生憎今日は日曜だ。」そんなことを考へると情ない氣がしたが、フト高い宙天で、いきなり彼れに飛びついて來る彼女の肉體の重味を、床の中の自分の身體に感じて、彼れは不安な快感に全身を壓せられて、身悶えした。

何だか急に元氣が出て、彼れは跳ね起きた。が寢床を上げようとして、彼れは骨の拔けたやうな疲れを感じた。

「起きたのかい。」階子段の穴から、小さい、白髮澤山の丸髷の頭が一寸見えて、皺がれ聲がさう云つた。それは彼れの年を取つた母であつた。

彼れはそれには答へずに、階子段の所へ行つて、默つて突立つて、老母の後戾りするのを待つてゐた。

「きいちやんが來てゐるよ。」老母は、そろりそろりと降りながら、さう云つた。

「きいちやんが？」彼れは、覺えず鸚鵡返しにさう云つて、一寸動悸を感じた。

「こんなに早く何しに來たのだらう？」彼れは思ひ當ることもなかつた。

『あの事かしら?』さう思ふと、彼れは堪らない不安に襲はれて、階子段を驅け下りたい氣がした。

それでもゆつくりと、彼れは階子段を下りて、家の中を見廻した――六疊に三疊と、小さい臺所しかない家の中は、こゝからすつかり見通しになつてゐるのであつた。――がきいちやんは何處にも見えなかつた。

『きいちやんは?』危く口から出さうになつたのを、彼れは前齒で喰ひ止めて、臺所へ行つて楊枝を使つた。水を汲みに行かうとして共同栓の鍵を見ると無かつたので躊躇してゐると、きいちやんは大きいバケツに水を汲んで重さうにさげて來た。

『をばさん! 今日もおひるから水切れですとさ。』彼女はそんなことを鈴のやうな聲で叫んで、バケツを流元に入れて息を切らしながら、彼れの顏を見上げて、淋しく笑つた。

彼女は寧ろ角顏の、力んだ口をして、優しく睨んでゐるやうな意味ありげの眼付をした、誰れにでもといふのでなく、好きなものには、堪らなく引きつけられるやうな力に充ちた容貌を持つた少女であつた。さうして彼女はY一座で、彼れと組んで、一番危險な藝當を演ずる一座の花形であつた。

赤くなつた、少し汗ばんだ顏を袂で撫でながら、彼女は訴へるやうな眼付で彼れを見た。それを見た彼れは、心臟の不整な鼓動を感じて、覺えず質問するやうな眼で彼女を見返した。

彼女に彼れに淋しい微笑を返しながら、力のないやうに、臺所へ上つて、外を向いて立つた。

楊枝を使ひながら、彼れは、變に鼻の奥が塞がつてゐるやうで、咽喉も妙にいがらぽかつた。

『風をひいたかな。』彼れは獨言のやうにさういつて、物々し 額に手を當てたりした。

『お天氣のせゐぢやない? あたいもちつと變だわ。』彼女は後向きのまゝでそんなことを云つて、汚い庇合ひの上に少しばかり見える曇つた空を、身體をかゞめて見上げた。

彼れは一刻も早く、この息のつまるやうな不安の原因を知りたかつた。大體あの事だらうとは想像したが、それなら、事柄を聽いてしまつても、不安が減じる譯でもなく、寧ろ聽かないうちが花のやうにも思はれた。

『きいちやん。』彼れは低い聲で後から彼女を呼びかけた。

『待つてよ。今をばさんがお店へ行くて云ふから……』彼女も低い聲で囁くやうに云つたが、彼れは少し耳の遠い母にも、彼女の聲が聽えやしなかつたらうかと其方を見たら、母は長火鉢にかけた鍋の下を、顏を横にしてフゥ〳〵吹いてゐたので、安心した。

老母が、大きい風呂敷包を背負つて出て行つた後で、兩人は長火鉢の横と角とにくつつき合つて坐つた。彼女は、彼れの膝にある茶碗を取つて御飯をつけたり、お椀に汁を注いだりして世話を燒いた。が今朝の彼れは、そんなことに感興を持つ餘裕がなかつた。

『どうしたのさ?』彼れはぶつきら棒にそんなことをいつた。

彼女の晴れやかな強さうな顏は、弱々しく曇つて、火鉢の上のものを、忙しさうに、無意味に彼方此方に動かす手先が震へてゐた。

『あとで……』彼女はたゞそんなことを微かにいつて、沈んだ顏で番茶を呑んだ。

彼れは口の中に何か入つたのかまるで覺えないやうな食事をしまつた。彼女がそれを流元に持つて行つて始末するのを待ちかねて、彼れは彼女を二階に連れて上つた。

そこへ坐るか坐らぬに、彼女は袂を顏にあててしやくり上げて泣き出した。

彼れは顚倒して、衝動的に彼女を抱へて、そ

の燃えるやうな身體を確かり彼れの胸に押へつけたが、何とも口を利くことに出來なかつた。

フト或る考へが彼れの胸に爆彈を投げ込まれたやうに湧き上つた。彼れは、頭が廚爐にでも載せられたやうに熱して來て、周圍の暗くなるのを感じた。

『さいちやん。お、お前、……』彼れは吃りながら、彼女を抱きしめて、さう云つた。

『お前、細根大根の奴に何うかされたな。』

彼女は、それには答へなかつたが、聲を立てゝ泣き出して、彼れにシガミついて身體を震はした。

『一體何うしたんだ。』彼れはそんな怒聲を發したが、何うしたもかうしたもない、それは、彼女には早晩ふりかゝる殃であることは、彼れにも大抵推量がついてゐた。

細根大根といふのは、一座の親方Yの總領息子源ちやんに、下廻り連がつけた綽名であつた。源ちやんは針金渡りの名人で、追て親方の一座の名跡をつぐべき男だつた。親方の方針は、Y一座は將來身内のものばかりで幹部を組織しようといふのであつた。それは、強ち經濟上の理由ばかりからではないが、それが重大な理由であるとは、一座のもの達の輿論であつた。

此の方針に從つて、親方は、座中の有望な連中を、大抵名義上自分の養子や養女にしてゐた。さうする爲めには、無論親方は、十二三歳の子供を購ふにしては不相應な高價を、その親達に拂ふことを辭さなかつた。

で親方は、十歳ばかりの時に、傘屋の下職をしてゐる親達から買つた彼女が、容貌からも技倆からも、一座のうちで、親方自身の娘の次ぎか、實はそれをも凌ぐ人氣者になつたのを見て、彼女を總領の倅の嫁にしようと考へついたのであつた。それは――一座の誰れもがそれに氣付いたのは最近のことだが、――隨分前からのことらしかつた。彼れと彼女とが、それに感付いて不安に陷つたのも、一座のものがそんな評判をするずつと前からであつた。

彼れは、親方の一座のうちで、親方が高價を拂はずに獲た唯一人の藝人であつた。彼れは、何うして親方のところへ來たのか、判然と記憶して居ないし、誰れもそれを彼れに話して聽かすものもなかつた。まるで棄子から拾はれたやうにして、親方夫婦の手に育て上げられたのであるといふことだけが、彼れの知つてゐる自分の生涯の歴史の發端であつた。彼れはその前のことを詮索する必要を感じなかつたし、それを詮索するのが怖いやうにも思はれた。

何うか斯うか一人前の輕業師になつて、自分の名が見物にも仲間にも唱はれるやうになつて間もなく、突然、自分が彼れの母だといふお婆さんが現はれたことは、尠からず彼れを面喰はしたのであつた。そのお婆さんを親方から引合はされて、親方に、『これから親孝行が出來るてもんだ。』と云はれた時には、嬉しくもなんともなくて、却つて何となく、親方夫婦から遠くなるといふ悲哀の方が強くつて、それが爲めに涙ぐんだ位であつた。

けれども、そのお婆さんが、彼れの顏を見て、萎びた眼からぴちや／＼と涙を流しつゞけてゐるのを見ると、矢張り何となく悲しかつた。さうして、親方の世話でそのお婆さんと一緒に世帶を持つやうになつてから、段々それが自分のお母さんのやうな氣がして來て、今では、二人の貧乏暮しは、彼れにとつて極めて自然で、さうして一人で親方の家に世話になつてゐた生活から見ると、ずつと上手の生活であると感じるやうになつた。

親方のことを、一座の下廻り連は、強慾張りのいゝはん坊のと、何時も蔭口を利いてゐるが、彼れにはそんな風に思へなかつた。成る程、新規の

子供を連れて來たものに對しては、隨分露骨な應對はしてゐるが、彼れは、それが此の商賣の當り前の遣り方だと思ふ外はなかつた。さうして可なり莫大な前借金を取つてから、何のかのと口實をつけて子供を取り戻してしまふやうなものも尠くはなかつたことを思ふと、親方の頑固にも理由があるとしか思へなかつた。そんな眞似をせずに正直に勤めてゐるものには、親方は可なり親切にしてゐると彼れは思つた。

彼女に對しても、親方はいろ／＼親切にしたことを彼れは知つてゐた。彼女の家は傘屋の下職で、家中に、薄氣味の惡い眞白けな傘を一杯ひろげて、彼女の父も母も、その傘と同じやうな色をして、朝から晩まで働いてゐて、それでも夫婦向ひ合つて、明日の朝の米を何うしたものかと、途方に暮れることさへ屢々あつた。彼女が親方の一座に加つてからも――其れはもう七八年前のことだつた――僅か十歳かそこらの子供を賣つた金が、いかにそんな風な生活にでも、さう長く役立つ筈はなく、絶えず親方に不義理な借財を作つて、結局、今では、何時になつたつても濟せる氣遣ひのない負擔になつてゐるのであるが、親方はそれが爲めに、別に彼女の父を責めるでもなく、たゞ彼女の藝が進んで行くことを、その返濟法でもあるかのやうに思つてゐるらしく、彼れには考へられた。

彼れは、そんな風に自分や彼女のことを思ふと、皆と同じやうに、親方のことを強慾張りだのいゝはん坊だのと云ふ氣には何うしてもなれなかつた。

××町の親方の家は、いかつい格子戸の四間間口で、あの町内では、それに敵ふやうな構への家は、背中合せの棟梁の家の外にはなかつた。彼れがそこにゐた時分の、子供の頃には、そのことが彼れにとつて可なりの誇りであつた。親方の總領と同じ學校へやられて同じ級でゐたが、順番は彼れの方が何時も上だつた。親方はいつでもそれを云つて總領を叱つてゐたが、彼れは、その總領に對しては、學校内でも、決して主人に對する小僧の態度を失はなかつた。主人の子供が、讀書や算術を當てられて、出來なくてベソをかいたりすると、彼れはハラ／＼して、許されることなら、傍へ行つて敎へてやりたいと思つたりした。

それが今の、細根大根の源ちやんその人であつた。

年頃になつた彼れは、別段源ちやんを尊敬してはゐなかつたが、主人の倅に對する態度は失はなかつた。たゞ子供のうちから、そんな風に一緒に育てられながら、成長した後の源ちやんに對しては子供の時に感じたやうな親しみを感じなかつた。子供のうちは、二人とも比較的弱蟲で、能く皆に苛められたので、互に同情し合ふ機會が多かつたが、段々大きくなると、源ちやんの方は、何かの折には、軟かものをひけらかして、氣の利いた若者然としてゐるに反して、彼れには、誰れもそんなことをさせてくれる人もないので、偶に一緒に遊びに行つても、何だか氣が利かないやうで、不愉快だつた。

それに源ちやんが盛に遊び出して、彼方此方の娘達や商賣人などと變な噂を立てられるやうになつてから、彼れは源ちやんを輕蔑する氣になつた。いろ／＼な藝事を隨分金を使つて習つても、何一つなつてゐるものもなく、その癖無暗に通がつたことをいふので鼻もちがならなかつた。その度に、子供の時分敎場でベソをかいたことを云つてやりたい氣がした。それでゐて、針金渡りだけが妙にうまいのも癪に障つた。

そんなことは何うでもいゝとして、此頃その源ちやんが、煩く彼女につき纒ふのを知つた時には、彼れは我慢し切れない氣がした。初めに彼女は、そのことを彼れに隱してゐたが、親方

が彼女を源ちやんの嫁にしようと考へ出した頃から、源ちやんの態度が餘りに露骨になつたので、もう彼女はそれを彼れに隱すことは出來なかつた。

「私、困つてしまふのよ。」と彼女は樂屋にゐても、誰れも側にゐない時などは、恰好の好い薄桃色の肉襦袢の身體を、怖ろしさうに縮めて、さういつて彼れに囁くのであつた。

「うつちやつて置きねえ、彼奴は誰れにでもさうなんだから。」彼れはその度に、たゞそんな定まり文句をいふより外なかつた。

がそんなことを彼女から聽く度に彼れの不快は譬へやうがなかつた。そんな日には、彼れが高い所で、倒さの身體を宙に吊して、もつと高い所から同じく眞倒さまになつて落ちて來る彼女の身體を受け止める時に、そのことが太い物で胸に刺し込まれたやうに突然思ひ出されるのであつた。その場合には、彼れの無心の[illegible]が、掻き亂されたやうな混亂に陥つて、非常の危險を感じて、我れ知らず油汗を流すのであつた。

それを、此の上もなく恐れた彼れは、神信心によつて、さういふ妄念から潔められる外にその危險から脱れる術はないと思つて、人知れず夜中に觀音樣にお參りしたことも度々あつた。

その源ちやんの爲めに、彼女はたうとう取り返しのつかない目に遭つてしまつたのであつた。

彼れの頸に兩手をかけて何時までも泣いてゐる彼女を抱いて、彼れはたゞ朦朧としてゐた。

彼れは、何うしようといふ考へも浮ばなかつた。何か大きい出刃のやうなもので細根大根の胸先をグサと刺し貫いてやつたら清々とするだらうと思つた。が、無論そんなことをする料見にはなれなかつた。

ずつと前から人知れず——お互同士にも隱し合ひながら——思ひ合つてゐた二人か、初めて此の春に、その思ひを打ちあけ合つた時のことが、活動寫眞のやうに彼れの眼先にちらついた。

その時も、この二階で、さうしてやつぱり朝だつた——二人は朝でなければ、誰れもゐない所で話をし合ふ機會は殆んど無かつた。——彼女は丁度今してゐるやうに、彼れに抱きついて泣いた。けれども暫時して彼れの胸から離した彼女の顔は、櫻色に輝いて、眩ゆさうに一寸彼れを見て、すぐと俯向いてしまつた。

『お待ちね。今に親方に頼んで、お前をお嫁に貰つてやるから。』彼れは彼女の耳に顔を伏せてさう囁いたのであつた。

元來が臆病で、高い所で離れ業をする外の勇氣の全く缺けてゐる彼れは、彼女との間に、今日までたゞその日の嬉しかつた心持を、大事な寶でも抱へたやうに胸の底に抱へて、たわいのない子供らしい感情を享樂し合つてゐるに止まつてゐた。

「芳ちやん」と、彼れの名を呼ぶ彼女の特徴のある音聲をきくだけで、彼れは十分幸福であつた。朝ちよい〳〵と彼れの家に立ち寄つて、水を汲んだり、彼れの老母の賃仕事を手傳ふ眞似をしたり、二階で彼れの傍に坐つて、子供らしいことながら、誰れにもいへないやうな彼女の眞個の心持を彼れに語つたりするのが、彼女と彼れとの關係の全部であつた。子供のうちから、親方の家で外の子供等と一緒に育てられた彼等二人の間には、隨分早くから、兄妹のやうな淡い懐しみが流れてゐた。それがどんなに培養されても、結局その子供らしい親しみを傷けることを、彼等二人は無意識に恐れてゐるらしかつた。

彼れは、時々そつと、彼女に罪もないわるさを試みるやうな時でも、彼女が睨むやうな眼に笑を含んで彼れを見ると、彼れはそれ以上に手を出す氣にはなれなかつた。彼女が彼れに對してそれをする場合にも、彼れは眞面目な知らぬ

振りの顔を見せるのであつた。
　彼れはどうかすると、自分の臆病を齒痒がつたこともあつた、彼女の臆病を忘々しがつたこともあつた。けれども勇氣のないのをどうすることも出來なかつた。
　彼れは親方が、彼女を源ちやんの嫁にする氣だといふことに感付いてからは、何うかすると十分の勇氣を獲たやうに感ずることもあつた。けれども、彼女が、力のある顔を一層緊張させて、烈しく源ちやんを罵倒するのを聽くと、彼れは緊縮した氣分になつて、少くとも、源ちやんになつてはならないと、自分を鞭撻しずには居られなかつた。だから反抗的な勇氣を生じても、亦それを抑へつけるだけの力を、彼れは彼女から與へられたのであつた。
　彼れは齒痒がりながら、時々それを誇らしく感じた。
　ところが、今彼れに抱きついて泣きいる彼女を觀ると、彼れは、たゞ全く自分の臆病から、此の取り返しのつかない破目に彼女を陥れてしまつたのだと感じない譯に行かなかつた。
　彼女を抱きながら、彼れは身體を震はして、自分の腑甲斐なさを憤つた。源公づれに大事の彼女を滅茶々々にされてしまつたかと思ふと、今までの自分の誇りなどは、半文の値打ちもないものになつてしまつた。
「俺は馬鹿だつた。」彼れは吐き出すやうにさう云つたが、今更そんなことに氣がついても、取り返しの道があるとは考へられなかつた。
　愈々かうなつたからは、親方は、邪が非でも、彼女を源公の嫁にしなければ承知しまい。源公自身は、ほんの一時の悪戯のつもりでも、親方は、自分の將來については眞面目で、眞劍であつた。彼女や、彼女の親達が、それを拒めば、頑固な親方は、時によつて一歩を引かない。その頑固さ——強慾張りと呼ばれる原因——を發揮し、親達に今までの借財を綺麗に返せと迫るに相違なかつた。その上、彼女の兩親は、自分の娘が、親方の家の嫁になることを涙を流して喜びこそすれ、拒むなんてことのありやう筈がなかつた。で彼女がそれを拒めば、親達は親方と一緒になつて、無理にも彼女を親方の家へ嫁にやるに定まつてゐた。彼女の運命は、どの道逃れつこはないと、彼れは思つた。
　彼女をつれて逃げようか。そんな考へが、閃光のやうに、彼れの頭に浮んだ。彼れは忌な、重苦しい氣分に壓しつけられて、息がつまつた。そんな大膽なことが自分に出來る位なら、源公などにしてやられるずつと前に、彼女は彼れのものになつてゐる筈だつた。
　それに、このことは彼れはまだ彼女にも云はずにゐたが、親方は自分の娘——それは矢張り一座に出てゐて、玉乘りの連中のうちの花形になつてゐる美人であつた——の婿に彼れを擇まうといふ下心のあることを、彼れは内々感づいてゐたのであつた。親方は、さうして腕利きを皆自分の一族にして、一座を堅める希望だつた。
　彼れが彼女を連れて逃げれば、親方は、彼れの爲めに、伜の嫁と娘の婿とを一時に失つた怨みで、あの恐ろしい氣象で、どんな猛烈な仕返しを彼れにするかわからないと思ふと、身慄ひのするほど恐ろしかつた。彼れは、自分のやうなものは、親方の前には、猫の前の鼠も同然だと思つてゐたのであつた。
　憤怒と、恥辱と、恐怖と、絶望とが、彼れの混亂した頭の中で渦卷いた。
　彼女が彼れの膝から離れた時には、彼れの全身は汗でびしよ／＼になつてゐた。ぼんやりして腫れ上つた眼を伏せて、半巾を嚙み裂きさうに嚙んでゐる彼女の顔の色は青白かつた。
　彼れは燃えるやうな自分の身體の處置に窮して、じり／＼する頭を掻きむしつた。

「源公の野郎、どうするか見やアがれ。」

そんな取り止めないことを云つた時に、彼れは、突然、いやな、ゝ感じに襲はれた。それが何んであつたかを取り纏める暇もなく、彼れは、昨夜の源公の擧動と、それに對する彼女の抵抗し得なかつた恥辱の光景とを想つた。

彼れの胸は急に早鐘を撞き出した。彼れは覺えず、力なげに横になつてゐる彼女の姿を視つめた。

彼女は蒼白い顏を心持赤くして、疲れ切つたやうな身體を起さうとして、延びてゐる片足を引つこめる時、膝の邊に現はれた赤いものを、褄先を引き合せてつゝましく隱した。

彼れは半ば意識を失ひながら、突き飛ばされたやうな衝動を感じて、無性に、彼女の疊についてゐた片手を掴んでグイと引いた。

……………………

階子段の所まで行つて此方を振り向いた彼女の眞青な顏を、彼れは、朦朧とした意識の裡に認めて、さうして、力のない足音を二つ三つ聽いたと思ふと、彼れはそのまゝ昏々と眠つてしまつた。

搖り起されて眼を覺ますと、母が傍にゐて、もう小屋へ行く時刻になつてゐることを彼れに告げた。彼れは、身體を起して、締めつけられてゐるやうな頭を二三度振つた。

出かけに格子戸の内で、何時も老母の打つてくれる切火が、今日はいやに長いので、彼れはもどかしがつて振りむいた。何か口のうちに唱へながら、眼をつむつて燧を打つてゐる老母の顏は、まるで死人のやうに血の氣がなかつた。平生がそんな色なので、彼れは常にそれを母に云つてゐたのであるが、かうして眼をつむつて、眞劍になつて何か唱へてゐる顏を見ると、彼れは少し慄とした位變な心持になつた。

「お母さん、好い加減にしてくんねえ。」さう云つて、彼れは格子を飛び出して、高い音をさせてそれを締める後で、母の「アレさ。」といふ聲と、追ひかけて二三度又燧を打つ音とが聽えた。

日曜の公園も、流石此頃の俄かの暑さで、いつもの押しかへされるやうな雜沓はなかつた。小屋の前まで來た時に、彼れはかすかな胸の鼓動を感じた。それは子供の時、初めてこんな小屋に出された時に、毎日小屋の前まで來てその景色を見て感ずるそのやうな心持であつた。

「芳や、何うだい。」

鼻の先に立ち塞がつて、眞ともから彼れの肩を叩いた男があつた。彼れは喫驚してその顏を見たら、それは親方の金主の若旦那だつた。座中の子供等を連れて、鰻飯や洋食を喰はしたりするのが好きな、彼れにも時々小遣を呉れたりする人だつた。

まだ彼れの出るまでには時間があるとか何とか云つて、彼れをカフェーに連れ込んだ。何時もならば忌と思はないどころか、嬉しくもあるのに、今日、それが彼れに恐ろしく迷惑だつた。迷惑といふよりも億劫だつた。

彼れは、馴染の給仕女が、ぺちやくちや何か話しかけるのに、相槌をうつのが辛かつた。若旦那が、持つて來た新聞などをひろげて、悠々と構へてゐるのが忌々しかつた。

「えゝおい芳や、君等に迷信のあるのは仕方がないが、飛行家なんてものも、恐ろしくかつぐのだから遣り切れないね。」若旦那は、新聞を見ながら言葉を續けて、「一等飛行家免狀には、十三といふ番號を飛ばしてしまふんだつて、飛行將校が話してゐるぜ。」

彼れも、西洋人が十三といふ數を忌むといふことはきいてゐた。然し、彼れは、自分自身の迷信は持ちながら、今まで別に十三といふ數を氣にしたこともなかつた。で飛行家のそれを忌むのが可笑しい御幣舁ぎのやうにも思はれた。

「三といふ數は君、變な數なのだよ。」若旦那は、さう云ひながら、萬年筆を取り出して、新聞紙の白いところに三の字を澤山列べて書いて、それに又三を澤山列べたのを乘け出した。

それ君、三三が九、三三が九、それをから加せて、出るのを見ると、それ尻が九で、それから上は、屹度1と8とが同じ數だけ列ぶんだ。さうして、若しその數が偶數でないと、1と8の眞中に0が出て、その左右の1と8が同數になるのだ。3といふ數字は、何處まで行つても1と8を産み出すといふ因緣を持つてゐるのだね。』

さういつて若旦那は、今澤山の3の行列を乘け合はして出た數の 111110888889 といふ數字の行列を彼れに指し示した。

彼れはその變な數字の行列を見ると同時に、今日の日曜が十八日だといふことを想つた。と豫期しないいやな感じが俄かに彼れを襲つた。十三といふ數をちつとも氣にしなかつた彼れは3といふ字が何處まで行つても産み出すといふ1と8の數字が今日の日を現はしてゐるのに、說明の出來ない不快を感じた。

空中の曲藝を一くさり終つて、彼れは高い横木に腰をかけて舞臺を見下ろした。舞臺の他の端には、彼女の桃色の姿が子供のやうに小さく見えた。

やがて吊された長い繩をする〳〵と傳つて、彼女は、彼れの位置よりもずつと高く、舞臺の柱に猿の腰掛のやうに取り附けられてある小さい臺の上に立つた。

彼れは横木に兩足を確かとかけて、身體を眞倒さまに吊して、彼女の方を見ながら、兩手を十字に開いて『ハッ。』と聲をかけた。

彼女は、恰好のいゝ身體を少し前に倒して、右の手を高く左の手をやゝ低く、左右一ぱいにひろげて、その鈴のやうな聲で『ハッ。』と聲を掛けた。彼れは、彼女の眼が、喰ひ込むやうに彼れの眼を見てゐることを感じた。

そこから彼女は、もんどり打つて、眞倒さまに彼れの上に飛びかゝつて、彼れに抱きつきながら横木に足をかけて、二人は相抱いて、横木を軸にくる〳〵と回轉するのであつた。

倒さに吊り下つた彼れは、何時になく緊張した氣分になつて、今朝からのいざこざなどは、何處へケシ飛んだかと思はれるほど、無心に、落付いて、飛びかゝつて來る彼女を待ち受けることが出來た。この樣子では、彼女の飛び方が如何に狂つても、平氣で受け止めることが出來ると思つた。一尺位そつぽへ飛んでも――そんなことはある筈もないが――平氣で抱へて見せると、自分ながら心強く感じた。

彼れは、再び『ハッ。』といふ掛聲と共に、兩手をひろげて合圖をした。彼女が、同じ姿勢でそれに答へた瞬間、彼女の身體は、勢よく跳ね上つて、虹のやうに、彼れの上に飛びかゝつて來た。

全身の力を込めて彼女を抱き止めようとした彼れは、思ひもかけず空を抱いて、彼れ自身の身體が、自分の力のハズミを喰つて横木にからみつかうとした。

ハッと思つた刹那、彼れは、桃色の彼女の身體が眞倒さまに、舞臺目がけ流星のやうに落ちて行くのを見た。

彼れは、頭がぐら〳〵として、自分が何處にゐるのか忘れてしまつた。その瞬間、彼れは、自分の身體が横木を外れて宙に浮んだかと思ふと、矢のやうに彼女の後を追うて落ちて行くことを感じた。

眞靑な彼女の顏と、死人のやうな母の顏とが、電光のやうに彼れの眼にちらついた。

くらげと穴熊

「結構なお天氣さまで……」

長吉は、自分が休んでゐた見晴らしの亭に入つて來た夫婦づれの紳士を見ると、すぐと聲をかけた。

長吉は東京の大工だつた。一月ほど前に、足場から落ちて大怪我をしたが、出入場の旦那の世話で此の温泉場に養生に來てゐるのであつた。

温泉場といふ所は、夏の盛に一寸仕事に來たことがあつたばかりだが、その時は素敵に賑かな、馬鹿に景氣のいゝ所と思つてゐたのに、此頃の此の温泉場と來た日には、まるで火の消えたやうで、山の奥だつてもうちつとは人間臭いだらうと思つた。長吉はアテが外れて、全く面喰つてしまつて、湯槽で自慢の咽喉を聽かさうにも、りナ聾同然の田舍者相手では張合ぬけがして、我れながら寢ぼけ聲しか出ないのが情なかつた。二週間もたゝないうちに、長吉はもうすつかり退屈してしまつて、身體の持つて行き場に困つて、「こいつア全く體のいゝ島流しだ」と呟いた。

で長吉は人の顔さへ見れば我れ知らず話しかけるのがこゝへ來てからの癖になつてしまつた。が時々言語不通の相手に出會して面喰はせられた。そんな時に、東京の旦那らしい人間が眼の前に現はれたのですぐと無意識に話しかけたのであつた。

旦那の方の風體は、長吉には見當がつきかねたが、瘦形のスラリとした恰好で色が生白く一、鼻の穴のすぐ下の所と、黑いベロを出したやうに下脣の所とに濃い髭をちよつぴりと殘した工合は、院長さんか何かだらうと思つた。細君の方は長吉にはとても値ぶみの出來ないハイカラ風で、電車で出會す女事務員の年を取つたやうな恰好だつた。何方も、ふだんの長吉なら、いきなり言葉をかける氣になるやうな柄ではないが、そこは温泉氣分になつてゐるのと、多少旅の恥は搔きすての氣で、こんな違つた世界の人間にも、言葉をかけられるのが嬉しくもあつた。

『いゝ天氣だね。』

紳士は、さういつたが、その調子は全く獨言のやうで、さういつてからジロリと長吉の方を見て、すぐとそつぽを向いて知らん顔をして、遠くの景色を眺めてゐる。

『こつちは滅法時候が早えと見えて、もう梅が散つてしまつてやがら。』長吉は、紳士が自分を取り合はないので一寸テレたが、そんなことを獨言のやうに饒舌つた。

「さうねえ。でもちつと温か過ぎやしないかしら。」お嬢さんのやうな細君は、やつぱりお嬢さんのやうな調子で、長吉にさういつて、『又地震でも來るんぢやない？」と笑つた。

『奥さん、威かしちやいけませんぜ。こつちは地震の本場だつてえぢやありませんか。態々本場へ出かけて來てグラ／＼やられちやたまらねえ。あつしはまだビッコだから、此度目は助かりッこなしでさ。」と長吉も笑つた。

「やつぱり地震で怪我したの？」

「いんえ、さうぢやねえんです。バラック工事で足場がゆるんで振り落されて、あんたさん、飛んでもねえ目に遭つちやつたんでさ。あつしや大工なんでさ。」

長吉は、自分で足場を踏み外したことを隠す

氣もなかつたのが、たゞそんな風に云つてしまつた。

『マア命拾ひをしたのね。』細君は仰々しい表情をして、『でも大工さんは景氣がいゝんで、あんまり慾張つたからだわ。』

『こいつア驚いた。』長吉は相手が相手なので、全く不意打を喰つた。

『慾張るつたつて大工なんざ、奥さん、高が知れてまさ。手間の四圓や五圓で、眼の玉の飛び出るほど高いなんて言はれますけど、三四の十二で、一月にすりや百二十圓にしかなりやしませんや。商人でごらうじろ、百圓やそこらの儲けは、儲けのうちに入れてやしませんや。ライスカレーだなんて猫のヘド見たいものを喰はして、一日百兩の商賣をしたなんて奴があるんですからね。こちとら汗水滴らして月百圓がとこを稼ぐのが關の山なんだからお話になりやしませんや。慾張るにも何んにも……』

『いゝのよ。誰れも慾張つて惡いてんぢやないから、そんなに言譯をしなくたつていゝぢやないの。』

長吉はまた面喰つて、

『へい。ぢや慾張りませうだが、肝心の慾張り際にへマやつちやつて、人が慾張るのを涎を滴らして見物してなきやならねえなんて、泣いてもおッつきやしねえ。』

ほんたうにそんな氣がして、事新しく情なくなつて、長吉はしよげ返つた。

『お氣の毒だつたわね。』細君は一寸慰めるやうな顔をして、『でも温泉へ出養生に來られる位だから、相當慾張つたに違ひないわね。』

『ご戯談もんですぜ。出入場の旦那が、俺の所の仕事で怪我をしたんだから出養生位させてやつてもいゝつて、お馴染の宿へお世話して下すつて、萬事御厄介て譯なんでさア。温泉場のイソ的なんて、生れて初めてでさ。身體にあけえられねえんで我慢してますが、何だか肩身が狭くて、温泉場の效能書のやうに壽命が延びるよりも、縮まる方が受け合ひでさ。』

『どうせ今時分温泉場なんかへ來るものは皆さうよ。ねえあなた、さうぢやない？』夫人は夫を横目で見て妙に笑つて、『あなた、此の方よ、いつも大勢の入るお風呂場でいゝ聲をさせてゐるのは。』

長吉は立てつゞけに面喰はせられて、一寸文句が出なかつた。

『あゝさうか。』紳士は初めて長吉の方に顔をむけてさういつたが、片頬を笑を一寸見せたきりで、又あつちを向いて煙草の煙を吹いた。それを追ひかけるやうに夫人は、

『大工の長さんてえ方なの。』

『こいつは驚いた。……すつかり御存じの癖に。奥さん、人が惡い……』長吉は眞つ赤になつて、どぎまぎした。

紳士は腰を上げて、默つてのそのそ歩き出して、傍の坂道を下りかけた。

『さやうなら。』夫人は元氣のいゝ聲でさういつて、兩の肩を態としてゐるやうに前後に大きく搖ぶりながら、夫の後を追うた。

『變挺な奥樣だが、あの旦つくはまた何んてえ道陸神だらう。』と長吉はさう思つた。

それにしても長吉は、今まであの二人が自分と同じ宿の客だとは少しも知らなかつたを惜しいことをしたと思つた。退屈まぎらしには飛んだ面白い奥さんだつた。

長吉は、すぐと宿に歸つて、番頭に、紳士のことを尋ねると、番頭は、勿體らしい顔をして、

『あれはあなた、江波博士といつて、世界に響いた大學者なんでさあ。』と云つたので、長吉は又吃驚した。

『あつしはまた、何處かの院長さんかと思つて

ました。世界に鳴つた學者てえと日本に一人か二人て方でせうね。豪勢なもんですね。で一體何んなことをする學者なんです。』

番頭は、その點は一寸知らなかつた。で傍にゐた若主人に助太刀を求めると、高商出だといふ書生風の若主人は無造作に、

『くらげ學者だよ。』と云つた。

『へえー。』長吉には合點が行かなかつたので番頭の顏を見たが、これも解しかねたやうに、若主人に尋ねた。

『くらげ學者てますと？』

『くらげを研究して博士になつた人だよ。海水浴でよく刺される奴があるだらう、あのくらげだよ。一生あいつを研究してゐる學者なんだ。』

長吉にはやつぱり解らなかつた。元來長吉は、あんまり遠方の海水浴なんかに行つたことがないので、くらげそのものを知らなかつた。隅田川や芝浦なんかで泳いでも嘗て、そんなものに刺されたことはなかつた。然し、それがどんなものであるにしても、大の男が一生涯そのくらげを研究してゐるといふのは、正氣の沙汰とは思へなかつた。道理であの道陸神、いやに變つてると思つた。

夕飯をすました長吉は、退屈紛らしに好奇心お手傳ひに、いゝ、くらげの先生の座敷の様子を見ようと思つて、庭傳ひにその部屋だと聽いた邊りの縁先をうろ／＼した。灯のともつてゐる部屋は少いので、先生の座敷はすぐとわかつたが、硝子越しに見ると奥さんだけ縁の椅子に腰をかけてゐた。

下駄の音をきいて此方を見た夫人は長吉の姿を見ると、慌てたやうにガタヒシと硝子をあけて、晝の調子に[illegible]をかけたやうな聲で、

『まあ早いこと、今女中さんを迎ひにあげたばつかりなのに。』

『お迎ひを下すつたのですつて、そいつは恐れ入りました。いんえ、別段こちらへ伺ふつもりでも何でもなしに、たゞこの邊をうろついてゐましたんです。』長吉は、此の奥さんの前に出さへすれば、面喰はされずにはゐなかつた。

『おや、ぢや行き違ひになつたのだわ。暗合ね。さあ、上つて頂戴。』と夫人は、蒲團を小さい唐机の前に据ゑて、自分もその傍の蒲團に坐つた。

『恐れ入ります。』

長吉は上り込んだが、やつぱり先生の姿は見えなかつたので聽いて見た。

『先生は、御風呂へでも？』

『先生なんて。何處かで身元調をしたのね。』夫人は一寸長吉を睨むまねをして、『先生、今夜はお友達が見えたんで、あすこの何月とかいふ家へ行つたの。何うせ遅くなるから、お前のすきな長さんでも呼んで話して居ろ、ですとさ。オッホッホッ。』

長吉は、眼の玉のすぐ前で風車でも廻されたやうに、何んだか一寸ぐら／＼とした。すると、急に恐ろしく新まつた氣持になつて、身體が妙にしやちこばつて、兩方の肩を左右から絞めつけられてゐるやうにたまらなく窮屈になつた。

一體何しにこんな所へ出かけて來たのかわからなくなつてしまつた。自分の部屋に退屈してゐる方が餘つぽどよかつたと思つた。奥さんは、急にあたりまへの調子になつて、

『實は東京からお菓子が届いたんでね、お裾分けをしようと思つたんでね…でもあなたお酒のみぢやない、…何方？』

奥さんの世話女房らしい調子に長吉はホッと息をついて、

『兩刀使ひの方で、エッヘッヘ。』

『何方でもお好み次第よ。』と奥さんは、ウヰスキーの瓶を見せたりした。

「先生は、世界に響いた學者でおいでださうで……奈勞なもんですな。」長吉は今しがた番頭から聽いたまゝを繰り返した。「あつし共には皆目わかりませんけど、何でございませうな、さういふ方はこの日本にも一人か二人てんでせうな。貴いお方にア違ひござんせんな……一方を貫くてえものは大變なことで……」

長吉は、自分にも譯のわからないことを饒舌つてゐるが、いゝ、くらげには何うしても合點が行かないので聽いて見た。

「いゝ、くらげのケンキウをなすつておいでゝさうで……何でございますか、いゝ、くらげてえものはそんなに六づかしいもんなんでせうかね。」

「オッホッホ。」奥さんは恐ろしく仰向いて笑つて、「先生はいゝ、くらげ位がいゝお友達なんだわ。御本人もくらげの同類なんですもの。」

「でも奥さん、世界に響くてえのはたいしたもんですぜ。こちとらのやうなものは千匹や萬匹タバで死んだり生きたりしてゐて、まるでボウフラ同然ですが、先生見たいな方になると、お一人が世界の寶てえんだからキチョウた譯でさ。たいしたもんだな。」いゝ、くらげは腑に落ちないが、長吉も先生を心から豪いものと思つてゐた。

「先生はいゝ、くらげをいぢくつてゐればいゝか知れないけど、私達は何をいぢくつてゐればいゝんだらう。まさか蚯蚓もいぢれないぢやないの？ハッハだ。」

奥さんも何うやらいゝ、くらげが腑に落ちないらしい、と長吉は思つた。

「でも奥さん、大抵な奴は、日本のうちぢや威張り臭つてゐたつて、世界へ出ちや田吾作同然なんぢやござんせんか。先生なんぞはそこへ行くと……」何うなんだか長吉にもあとはわからなかつた。

「だめよ。」奥さんはぶつけるやうにさういつて、「いゝ、くらげのことはわかつても、人間のことがわからないんだもの。そんならいゝ、くらげを奥さんにも何でもするがいゝぢやないの？」

「アッハッハ。違えねえ。」さう云つたが、長吉は、勿體ないことをいふ奥さんだと思つた。世界に響いてゐる御亭主を持つても不足をいふのだから、女てえものは贅澤なものだと思つた。自分のやうなものの女房になつた女は何んなに不服だらうと思ふと、うつかり鼻も持てない氣がした。

「大工さんなんて生活はほんたうにいゝと思ふわ。」奥さんは突然そんなことを云つて、笑を含んだ横目で長吉を睨んだ。

「飛んでもねえことを仰しやる、アッハッハ。」長吉は心から可笑しかつた。

「でも人間を相手にしてゐるだけでも[illegible]しいわ。人間を相手にしてる人はやつぱり人間らしくてほんたうにいゝわ。話をしてもきび〳〵してゐて、いゝ、くらげと話してゐるのとは雲泥の違ひですもの……」

「ハッハッハ。それはあつし達だつて、恰好だけは人間の形をしてゐますさ。」

氣がつくと、長吉は、いつかウヰスキーのコップを何杯か代へてゐた。見ると奥さんも眼のふちを赤くしてゐた。長吉は恐縮して、

「これは何うも、いゝ氣になつて、すつかり頂戴してしまつて……エッヘッヘ。」

お菓子のことは、長吉もすつかり忘れてしまつてゐた。飲みつけない強い奴をやつたので、チビリ〳〵やつてゐたんだが、可なり堪へて來た。

「いゝ、くらげの話なんか、もうよしッこ。」奥さんはさういつて、「お風呂場でお湯に流してしまふのは惜しいやうなあの咽喉を聽かして頂戴な。」

「こいつは驚いた。」長吉は實際驚いて、「旦那の方にお聽かせするやうなものぢやありやしませ

んや、狼の遠吠だの、さかりの乘つたどら猫だのつて、ひどく評判のいゝ代物なんで。アッハッハ。」

「でもくらげの聲ぢやないから嬉しいわ。私人間が戀しいんですもの。」

長吉は變な氣がした。第一そんなことをいつてゐる奧さんが、それほど醉つてもゐないやうだけれど、しどけない風をして、段々長吉の方へ凭れかゝつて來るやうで、さうしてハイカラの眼附で長吉の顏を見ては妙に笑ふのも薄氣味惡かつた。

主人の留守に、ろくに知りもしない男を引入れて……長吉はそんな風に考へ出すと、急にイヤな氣がし出した。

一體何うしようといふんだらう、此の奧さんは。長吉はさう考へて、世界に響く學者の奧さんてえのは、こんな風なものかとも思つて見たが、何うもさうも思へなかつた。

長吉はふと、自分が玩弄にされてゐるのぢやないかと思つて、赫とした。こんな上流社會の婦人が自分のやうなものを何うしようなんて筈がない。退屈まぎらしにいたづらをする氣だらう。長吉自身も、宿の女中なんぞをそんな氣でからかふほど退屈してゐるんだから。

さう氣がつくと、今まで、氣さくな奧樣のやうに見えた奧さんが、女の癖に、人を馬鹿にしてゐると無上に面が憎くなつた。長吉は、もう少し醉つてゐたら、卓を蹴とばしたに違ひなかつたが、それほど廻つてもゐないので、粗相のないうちに早く引上げることだと思つた。

「大分頂戴して、すつかりいゝ心持になつてしまひました。先生のお留守中に出て、こんなに醉つぱらッたりして、叱られッちやひまさ。此の邊で御免を蒙つてと……ではお休みなさいまし。」

『いゝぢやないの！』奧さんは、癇高な聲で高飛車にいつた。

長吉は危く、「何だと！」と怒鳴る所だつた。辛うじて抑し默つて、腹の中で、何んぼ旅の恥は搔きすてでもいゝ加減にするがいゝ、と思つた。そんなことが腹にあると、長吉は、口先でお世辭をいふことが出來ない質だつた。で默つて、丁寧にお辭儀をして、奧さんの顏を見ないやうにして立ち上つたが、我れ知らず顏をあげた時に、睨んでゐるやうで笑を見せた奧さんの眼と出會つて、長吉は嬉しいやうな忌々しいやうな、エゝ儘よ、てな氣もしたが、落付かなくなつてゐたので、二三度腰をかゞめて、緣先から下りてしまつた。

外はまるで東京の櫻の頃の晩のやうな月夜だつた。長吉は、ぶら〳〵庭を歩いて行くと、急に醉が廻つたやうでふら〳〵した。庭口から表に出て見ると、人通りもない夜の街は重くるしく深閑としてゐた。

長吉は一筋道を街道の方へと歩いた。冷たい海風の、ほてつた顏をなでるのがいゝ氣持で、鼻唄を唄ひながら長吉は街の外れまで來た。その時に長吉の宿の提燈を持つた三人連れの男とすれ違つた。一人は醉つぱらひで、それを引つ抱へてゐる男は、やゝもすると一緒に往來に倒されさうだつた。提燈を持つてゐる男は宿の番頭だつた。よく見ると、醉つぱらひを介抱してゐるのは、晝間逢つたくらげの先生だつた。

醉つぱらひはたうとう往來に坐り込んで、何だかぶつ〳〵云つてゐる。先生と番頭とはそれを引立てようとするのだが、自由にならなかつた。長吉は聲をかけて先生に提燈を持たして番頭と二人で醉つぱらひを引立てて、舁ぐやうにしてわッしよい〳〵と宿へ連れ込んだ。

あとで番頭に聽くと、醉つぱらひは縣下で有名な有志者とかで、柄が小さくて圓まつちいの

で穴熊といふ綽名のある男だつた。温泉宿や料理屋などを荒し廻るので、此の界隈でも手古摺つて居る有志者だ。それがくらげの博士の學校朋輩だとかで、此度久しぶりで此處で出會して、先生の御馳走であすこへ飲みに行つて、酔ひつぶれたので、先生が閉口して番頭を呼んだのであつた。

穴熊は、先生の奥さんに、まるで友達のやうな口をきいてゐた。昔は三人が餘つ程仲の好い友達だつたに違ひないと、番頭はいつた。

『おい、もう一本つけろ。』なんて穴熊は晝も奥さんに怒鳴つてゐたさうだ。

奥さんの番頭に話した所では、何んでも、先生が學生時代に奥さんと結婚の約束をしたのを、學校朋輩が勘違ひをして、燒餅半分、先生を毆ると騒いだ時に、穴熊は、先生の加勢をして、大勢の生徒を相手に大喧嘩をしたこともあつたさうだ。

翌る朝長吉は散歩に出かけて、ふと袂を探ると穴熊の鳥打帽が出たので、それを返しに、先生の座敷の縁先にやつて來た。が昨夜のことが頭に殘つてゐて、妙に氣おくれがして、少し離れて中の樣子を窺つた。

穴熊は歸りがけと見えて踏石には彼れの俎板のやうな下駄が揃へてあつた。中を覗くと穴熊は、座敷の眞中に大胡坐をかいて、何か云つてゐるが、先生は隅の方に畏つて苦笑をしてゐた。

奥さんが紙幣を一二枚穴熊の前に置くと、穴熊は不作法にも、片足を突き出して、それを爪先で搔き寄せて指でつまんで袂に入れた。

『マアひどい、足であんなことして。』奥さんがさういつて穴熊を睨んだが、根つから怒つてゐるやうでもなかつた。

『こんなしみつたれた金、手が汚れら。』

穴熊はそんなことといつて立ち上つたが、一寸よろけた。朝つぱらから大分酔つてゐるらしかつた。

穴熊が縁先に出て來たので、長吉は傍へ行つて、

『ゆうべお落しになつたお帽子を……』と恭しく帽子を差し出した。

穴熊は、長吉には眼もくれず、帽子をじろりと見て、いきなり猛烈な勢ひでそれを長吉の手からひつたくつた。

長吉はぐいとしたが、酔つぱらひだと思つて腹をさすつて、唯『フン』と鼻で笑つた。

『何がフンだ。』穴熊は恐ろしい顔をして長吉を睨み下ろした。

『人が帽子を持つて來てやつたのに、禮もいはねえでひつたくるつて法があるかい、箆棒！』

長吉は我慢がしきれないで怒鳴つた。

穴熊は物もいはずに、カッと長吉の顔に唾を吐きかけた。

『ウヌ。』長吉は叫んで、足の悪いのも忘れて、穴熊に飛びかゝつて、その兩足を掴んで引き倒した。穴熊は、不意を喰つて縁からころがり落ちたが、長吉は襲ひかゝつて滅多打ちに毆りつけた。

穴熊はすぐと身體を立て直して、『エイ』と叫んで長吉を引倒して、地面へ押へつけた。

長吉は、恐ろしい足の痛みを感じたと思ふとボーッとなつてしまつた。

氣がついて眼をあけると、長吉は先生の座敷の毛布の上に寝かされてゐた。周圍には先生や奥さんや番頭や女中や、洋服姿の見知らぬ人やが坐つたり立つたりしてゐた。

『氣がついたね。』洋服の人はかう長吉にいつて、『何處か痛まんですか？』

『へい、足が少しばかり……』長吉は足は勿論そこら中が痛いやうだが、そんな痩我慢をいつた。

「あつしは一體何うしたんです。」長吉は全く狐につまゝれたやうな氣がした。

「まあ好かつた。」奧さんはいつもの賑かな聲で、「あんた、穴熊に絞められちやつたのよ、ほんとに氣が利かない。あの穴熊は、柔道三段で豪いのですよ。私あなたに、あぶないからお逃げなさいと云はうと思つてゐるうち、もうやられちやつたんだわ。でも、大怪我がなくつて仕合せだつたわ、私壽命が十年ほどちゞまつちやつた。」

長吉は起き直つたが、足の痛みが堪らなかつた。

「どうも飛んだ御世話をかけて相濟みません。全く奧さんの仰しやる通り、氣の利かない眞似をして面目次第もありません。」

さう切口上で云つてお辭儀をしたが、如何にも皆の前でヒケを取つたのが心外でならなかつた。足さへ惡くなければ何のあんな奴にやられるもんかと、口惜しくて泣きたい氣もした。何とかして仕返しがしたくて堪らなかつた。

「もう大丈夫です。」さういつて立ち上つたが、足が痛んで一人では歩けないので番頭の肩につかまつて漸く部屋に歸つて床を敷いて貰つて寢た。

長吉は寢ながら一生懸命に仕返しのことを考へた。けれども段々頭が靜まつて來ると、それ等馬鹿々々しいやうな氣がした。あんな熊見たいな奴にかゝり合ふ方が損だとも思つた。

それにしても、長吉には、あの連中が皆譯のわからない人達だつた。第一、いゝくらげと眺めくらで暮らしてゐるといふ先生がわからない。人間のことなんか知るもんかつてやうに、何が起つても默りくさつて、口も利かうとしない。全くいゝくらげとしかつき合はないつて云ふ風だ。

だがわからないに至つては奧さんだつてさうだ。何が不足で、あんなにヒステリー見たいに怒つたり騷いだりするんだらう。世界に響いてゐる旦那に不服で俺達見たいなものを玩弄になんぞしたり、まるきり見當がつかない。

穴熊と來ちやお話にならない。先生の學校友達だといふから相當學問なんかもした男だらうが、あれぢやまるで押借り強盜だ。そいつが大きな面をして、有志者だか何だか知らないが、大手を振つて生きて行けるのが不思議だ。これ正直に汗水滴らして働いてゐる俺達はほんたうに馬鹿々々しいものだ。こいつア一體何うしたてんだ。

長吉は、足の痛いのも忘れて考へたが、結局何の見當もつかなかつた。しまひには、何を考へてゐるのかもわからなくなつてしまつた。

長吉は床の中で呟いた。

「あの連中の社會と俺達の社會たアまるきし世界が違ふんだ。」

「さうだよ〳〵。」と彼れは大聲で獨言をいつた。



○富豪の眼は充血のために盲し、貧者の眼は貧血のために盲す。

○黄金の鎖は鐵鎖より重し。

○因人は前非に誇り、宗教家は懺悔を誇る。

○人間の前に懺悔し、神の前に隱蔽す。

○食慾の滿足は一人の快樂なり、性慾の滿足は二人の快樂なり、知識慾の滿足は多數の快樂なり。

○權勢に饑ゑて堂上に乞ふものは政治家なり、食に饑ゑて路傍に乞ふものは乞食なり。

○十八世紀の偉人は才子なり、十九世紀の偉人は科學者なり、二十世紀の偉人は金滿家なり。

（「[illegible]語」より）

或る富豪の教訓

M　第一流の實業家
H　失業者

上海通ひの××丸の喫煙室にて、深夜。

H　おいM君、Hだよ。

M　H？……おゝさう〳〵、Hだね、いや何うも久しぶりだね。とてもわからんよ、御同樣だらうが。……マア懸けたまへ。さア。

H　君は然し變らんよ。僕は下の三等のデッキから君を見かけた時に、すぐと君だなと思つたよ。でも間違つたらいかんと思つて、念の爲め事務長に尋ねたらやつぱり君だつた。

M　それならすぐと聲でもかけてくれゝばいゝのに……。

H　然し君、僕がこんな見すぼらしい風をして、君が堂々たる人達を相手に話をしてゐる中に『おいM。』と入つて行く譯にも行くまいぢやないか。

M　何そんな遠慮がいるもんか。君の方はいらなくとも、僕の方でいるよ。

H　實は、今夜君が一人でさうしてゐるのを見つけて、いゝ折だとは思つたが、やつぱり多少考へたからね。

M　何も考へることなんかないぢやないか。

H　考へるさ。金でも貰ひに來たかと思はれやしまいかと思つてね。

M　相變らず臆病だね。……然し最後に逢つた時から何年經つたかしら。三十年近くになるだらうな。

H　さうなるだらうな。君が職に就いて大阪へ行つてしまつた時から逢はんのだからね。

M　さうだ、あれつきり逢はんね。あの時君が汽車で沼津まで送つて來てくれたつけな。覺えてるよ。横濱まで行かうつて乘つて來て、横濱に着くと、面倒臭い、も少し乘り越せつて大船に來て、又面倒臭いつて、そのまゝ通過して國府津ぢや降り忘れてしまつて、たうとう函根を越してしまつたので、僕はお蔭で途中下車をして、君を沼津の宿屋に送り届けるつて始末だつたつけな。

H　さうだつたね。……それほど仲の好かつた友達同士が、それつきり顏も見ないやうになるといふのは寂しいもんだね。

M　さうだね。何も喧嘩をしたといふ譯ぢやなし、全く寂しいね。運命とでもいふのだらうね。……時に君は、今は……

H　今はご覽の通りさ。

M　震災の失業者かね。

H　さういふと體裁がいゝが、實は慢性でね

M　學校時代の癖がぬけないと見えるね。でも何處かの鐵工場にゐるといふやうなことを、餘程前にチラと聽いたことがあつたが……。

H　これでもお蔭で、一人前の熟練職工なんだがね。

M　なんだ職工かい？　僕は又オフィスの方かと思つた。でも役人をしてたんぢやなかつたか……？

H　[illegible]出した役人だつたのさ。然し、僕は學校といふ奴を蟲がすかなかつたら……。

M　さうだつたな。君の學校嫌ひは然し一風變つてたね。あの頃君は[illegible]な國家主義者で、

國粹主義者で、今で云へばムッソリニの若いの見たいだつたつけな。あの頃の學校が國家的でないといふので君は猛烈に非難したもんだつたね。教育といへば英語を教へることと心得てゐやがる。彼等は、今に日本の歴史まで英語で教へようとするだらうなんて憤慨したものだね。尤も今ぢや大分君の意見が通つてゐるが……。

H　お蔭で役人になつても、とてもうだつの上る見込なしといふ譯さ。

M　國家主義者國家に用ゐられずかね。

H　で僕は考へたのさ。國家に役立つのは何も役人などになるに限つたものぢやない。もつと適切な道がある。それは即ち殖産興業だ……とね。

M　大に然りだ。で何うした？

H　で殖産興業だが、元も子もないのだから、身體一つで殖産もし興業もしなければならない譯さ。

M　君が好んで讀んだ鹽原太助一代記といふ奴だね。

H　さうだけれども此の鹽原は別れる馬も持たないといふ位貧弱な鹽原だからね。志は壯だが、全く志つ切りぢや手も足も出まい。

M　さうだね、貰ひ物でも志だけぢや物にならんからね。

H　然し、そんなことに挫折しては日本國民ぢやないと思つて、これは一つ職工に身を落して、艱難辛苦を重ねて、將來はエヂソンを凌ぐ大發明家となり、クルップを凌ぐ大工場主となり、ロスチャイルドを凌ぐ大富豪となり……。

M　やたらに凌いだものだね。

H　以て大に國家に貢獻する所あらんと覺悟をきめたのだ。

M　成る程、如何にも君らしいね。

H　で職工から叩き上げて、とにかく一かどの熟練職工となつて、日給一圓を貰つた時には、全くびつくりしたよ。

M　少くッてかい？

H　いや多くッてさ。あの頃は月二十五圓取るといふのはたいしたものたつたからね。で僕は大にたんのうして、もうエヂソンにもロスチャイルドにもなる必要はないと思つた位だよ。

M　大分安値なムッソリニだね。

H　所が何うだい！　それから約三十年經つて、四十何歳の我輩が此の體たらくなんだ。えゝ君！　馬鹿にしてゐるぢやないか。

M　僕に怒つたつて仕方がない。餘り早くたんのうしたせゐだらう。もつとロスチャイルド志願を續けてゐればよかつたに。

H　それは續けてゐなくもなかつたのさ。然し職工生活に入つて見ると、實際君、そんなのんきなことを考へてゐる暇もなし、又馬鹿らしくてそんなことは考へられないね。

M　なんで馬鹿らしい？

H　だつて、君、機械一臺作るにも、シャフト一本作るにも、汗水滴らして大勢が働かなければならないのだよ。誰れがロスチャイルドの製造なんか考へてゐる暇があるかい。考へる暇はあつたにしろ製造する暇はありやしないよ。……所で君は、そのロスチャイルド製造の方らしいが、何うやら物になつたらしいね。

M　いやその點は僕等だつて同じさ。ちッぽけな日本の高の知れた遣り取りで、寧丸を上げたり下げたりしてゐるんぢや、やつぱりロスチャイルド製造の餘裕はとてもないね。

H　でも重役の十も持つて、東京と大阪にあんな邸を構へて、今度は上海へ別莊を購ひに

行くのだといふ話ぢやないか。

M　何そんなことは譃だよ。

H　譃にしても、僕等の譃見たいに、野倒れ死したさうだなんて、不景氣なのとは大分違ふから豪いもんだよ。それにしても變なものだね。『おいＨ、一寸湯錢を貸さんか。』なんてよくやつて來た君が、こんなになるなんて。それから見ると、僕がこんなになつてゐる方が遙か當然だね。

M　さうだね。あの頃のことを考へると夢のやうだね。

H　所が僕は、あの頃のことを考へても根ツから夢にならないから困るんだ。現在があの頃の通りなんだからね。これが夢であつてくれると有りがたいんだがね。

M　それも國家の爲めだと思つて我慢するさ。

H　こんな風に國家の爲めになるつもりぢや、全く無かつたんだがね。同じ國家の爲めでもロスチャイルドで行くんなら我慢も出來るがね。……現に君なんかは、今ぢやいくら國家の爲めになつても、平氣で我慢が出來るだらうが、湯錢で外債を募集してゐた時代には、何うだつたい？……さうだ、あの頃の君は、猛烈な社會主義者だつたつけな。

M　冗談云つちやいけない。社會主義なんか研究する金があつたら湯錢を君に借りに行きやしないよ。

H　でもいつだつたか、徹夜で僕と議論した事があつたぢやないか。君が社會主義でやつて來る奴を、僕が學校の教場できゝかじりの國家論で防ぎ止めようとして、夜明けまでかかつて、二人ともへト／＼になつてゐるところに、隣の部屋から安眠妨害の猛烈な抗議を申込まれて、兄弟墻に鬩ぐも外その侮を禦ぐてんで、二人がかりで隣の先生を毆りつけようとしたことがあつたぢやないか。

M　さう／＼そんなことがあつたつけね。

H　その時の君の議論は、まだマルクスの飜譯なんかもなかつた時代だし、ボルシエヴィキーなんかは精蟲にもなつてゐなかつたのだから、無論ユートピアン、ソシアリズムて奴だつたらうが、盛に私有財産のない極樂社會のことだの、不勞所得は泥棒だといふことだの、國家なんてものは貧乏人には湯錢の足しにもならないものだてなことを盛にまくし立てたものだつたぜ。僕の方は又ムッソリニの先輩面をして丁度、彼奴等が外國電報で盛に僕等に吹き立てたやうなことをとうの昔もつと上手に君に吹きかけたものだ。實際あの頃の僕は、君の社會主義に反感を持つてゐたね。

M　それはさうだつたね。君はあの頃はとにかく、親爺の脛をかじつてゐて、而も親爺は隨分景氣が好ささうで、君の小遣錢は豐富だつたし、學資はあり餘つて僕にも供給したことがあつた位なのに、僕の方は又國に親はあつても、あべこべに僕に小遣錢をせびる位貧乏だつたのだからね。實際、僕は、君等と同じやうな學校生活をして行くのに、彼方こつちで月謝や下宿代をせびり取るといふ始末だつたからね。もう少しで泥棒をする所だつたと、あとから冷や／＼する位、金が欲しかつたことが幾度だつたか知れなかつたのだよ。今でこそいふが、僕は實はあの頃の君に全く反感を持つてゐたね。始終こしらへたてのやうな制服を着込んで、月に何度となく牛肉を喰つて、讀めもしないエンサイクロペディアなんか買はして、さうして學校へはちつとも出ないで、國粹主義ばかり振りまはしてゐるんだらう。全く取るところがこれツばかりもない人間としか思へなかつたね。

H　これはひどい。なるほど、議論になると君

の眼の色が變るとは思つたが、それほどとは知らなかつた。

M　然し強ち君に反感があるといふのぢやなく、貧乏でない奴を見ると片ッ端から反感を持つたのだね。だからあんなに八方から金を借りたり貰つたりしたが、全くぶッたくる氣だから、ちつともありがたいとは思はなかつたね。

H　道理で、僕も一遍だつて君に禮を云はれたことはなかつたね。

M　そんなことはないさ。貰つた時にはやつぱり「ありがたう。」とは云つたさ。然し心からありがたうといふのぢやないのだから、君も禮を云はれたやうには感じなかつたらう。一體人に金を借りたり貰つたりする位つまらないものはないのだからね。貰へないと癪に障るし、貰へた所で威張る譯には行かず、あんな間尺に合はないことはないよ。

H　貰つた方でも間尺に合ふまいが、やつた方でも間尺に合はないね。

M　けれどもやつた方はやれるだけの餘裕があるのだし、威張れもするから、そんなに氣持の惡いものぢやない。

H　さうだ、あの頃の君はさう云つてゐたね、一體同じ人間が一方では人にやるものを持ち他方では自分だけのものも持たないなんて道理はあるものぢやないつて。だから少しでも餘裕があつたら俺によこせつてロヂックだつたつけ。

M　すると君はよく云つたぜ。天が僕のやうな貧乏人を見殺しにしない爲めに、俺のやうな金持を作つて置いたのだつて。一方で貧乏人を作つても、他方では救濟者を作るから天は公平だつて說だつたね。

H　そんなことをいつたつけな。

M　いつたよ。で僕が、天はそんな面倒な手数をしないで、初めから救濟者だけしか作らなかつたらなほいゝぢやないかつて云つたら、君は、そんなことは、天が胃の腑を作らずに食物だけ作つたらいゝ、病人を作らずに醫者だけ作つたらいゝといふことだと云つたので、僕はグウと詰つたよ。

H　それほど金持派だつた僕が一向金持になれず、金持撲滅派だつた君が大金持になつたのは變なことだね。やつぱり運命かな。

M　運命だらうね……僕は無論アンチ金持派だつたのだから、あの後だつて格別金持にならうとして努力した譯ぢやちつともないんだ。たゞ金を獲ることについて君と全く異つた立場に在つたのだね。

H　さうだ、君は、金といふものは、人から奪ふものだといふ信仰を持つてゐたね。僕等だつたら、何うして親爺から學資を貰はないで、學校をやつて行けるのか、てんで見當がつかなかつたが、君は、何處からか金を持つて來て、自分ばかりならまだいゝが、同じやうな仲間を何人か養つたことさへあつたぢやないか。だから、君は或る意味で、その頃からもう僕等より金持だつたのだ。僕は、君一人だけさへ全部養ふ資力はとてもなかつたが、君は、友達の分まで何處からか奪つて來て、とにかく學校を出させた奴が何人かあつたらう。

M　そこが我等と君と根本的に異ふ點だよ。僕は君に湯錢まで貰つてゐたが、然し友達には學資を給してゐたんだからね。何うしてそんなことが出來るんだつて、君はよく僕に聞いたつけな。

H　實際僕は親爺が多少有福だつたけれど、纏つた金を十圓と貰ふには相當に骨が折れたものだ。然るに君は、親爺でも何でもない奴から、月々大金をせしめてゐた譯だからね。親

爺が失敗してから、僕は學資に窮して筆工なんぞになつて寢ずに苦しんだつて、君が獲る十分の一も獲られなかつた

M　さうだよ。君は、金といふものは何かの報酬として受ける外、取る道はないものと信じてゐたのだね。君が困つてから僕が學資を世話しようと云つたら、君は變な顏をして斷つたことを覺えてゐるよ。

H　別に斷る理窟はなかつたのだが、たゞ變だつたのだね。親爺以外の人間の脛をかじりつけなかつたからだね。

M　さあ、その根性が君にぬけないので結局貧乏してゐる譯なんだよ。

H　さうなんだ。僕は金を獲ようと思ふと、必ず、どれだけの仕事をしたら、人がその金を僕に與へるだらうかといふことを考へたのだ。だから金を獲ようとすれば先づ仕事を探すだらう。所がその仕事が無いと來てゐるから、金も出來ないといふことになるのだ。然るに君は、金が欲しいとなると、直ちに先づ金そのものを獲ようと考へるのだね。そいつが僕等凡慮の及ぶところでないのだ。

M　全くだ。僕は、別段金持にならうとした譯ぢやないが、先づ金そのものを獲ようとするのだ。すると、金以外のものはちつとも獲られないで、君と正反對の結果に陷るのだね。

H　さういふ結果に陷つて見たいと思ふんだけれど……一體教育が惡かつたかも知れないね。僕の叔父といふのが始終貧乏してゐた癖に、貧乏すればするほど、仕事のことばかり云つて、ちつとも金の事を云はなかつたからね。

M　あれが惡かつたのだよ。君は何かといふと叔父が叔父がつていふから、定めし金持の叔父でもあるかと思つて、一度逢ひたいと思つて君に連れて行つて貰つたら、素敵な貧乏人だつたので、僕はそれから足踏もしなかつた。然るに君は、學資をくれる親爺が大嫌ひで、何もくれない叔父が大好きだつたのだ。僕がそれをいふと、君は、それは犬が食物をくれる下女を侮つて、何もくれない主人に懐くやうなものだつて、親爺を下女扱ひにしたつけ。一體あんな人間を信仰してゐたのが病的だつたね。

H　君は又第一流の實業家の玄關番にもぐり込んだり、何とか子爵の書生になつたり、實際不思議に、そんな連中と懇意になつてゐたね。

M　あの時分君は、そんなことをしてゐる僕をよく罵倒したつけな。それを僕は默つて聽いてゐたが、然し腹の中ぢや泣いてゐたんだよ。

H　あんまり默つても聽いちやゐなかつたぜ。僕も君に泣かれて弱つたことがあつたよ。何かの時に、皆の前で君を罵倒して、しまひに物質なんてといつたのを、後で君は泣いて怒つたぢやないか。

M　それは泣いたさ。然し何ともいへなかつたから泣いたのだよ。だつて君、君等がのんきなロマンチックな英雄主義を振り廻して威張つて生きて行けるのに、僕等は乞食のやうに、人の家の掃除口を潜つて行かなきや、生きて行かれないのだと思ふと、心から腹が立つたね。同じ人間が、何で好き好んで、乞食の役廻りに廻るものか。ちよい其の面を見ただけで喧嘩を吹きかけたくなるやうな若い身そらで、そのちよい共にペコ／＼頭を下げて、奴等の御機嫌まで取つて行かんきやならんなんて、君、生きる爲めの無意識にこそ、知らず知らずそれもするが、考へさせられたらやり切れたものぢやないぜ。それを[illegible]は、まるでそれとしてあるで[illegible]きもしさうに、罵倒するんだものね。如何に心安立てでもそん

な時ばかりは、君を生涯の仇だと思つたね。

H　恐ろしい譯だつたね。それで何かい、君は金色夜叉式に發奮して金持になつたのかい？

M　そんなことがあるものか。それはたゞ女郎に癪が來るやうに、時々兆す氣持に過ぎないさ。それも君等に突つつかれての話さ。あとぢや、そんなことはケロリと忘れて、妾の御機嫌なんぞも、可なり愉快に取れたものだよ。さうして、つまらないことを威張つてゐる君等を氣の毒な馬鹿ものどもめと思つてゐたね。あんなことを云つてる連中も、十年經つか經たないかに、僕が今ペコ〳〵してゐる爺共の子供等にコキ使はれるのだから、つまり僕の方が君方よりはワンゼネレーションだけ先輩だつて譯でね。

H　全くその通りだつたな。然し、僕も時々君を罵倒したが、君が實際は口でいふやうに、金庫の化物見たいな爺やその妾なんぞにペコペコしてゐた譯ぢやないことはよく知つてたよ。向うも中々豪傑だからソンナ奴には却つて金なんぞは出さないだらうさ。

M　そこの呼吸は、我々はチャント本能的に呑み込んでゐるから、決して世間の思ふ程、汚らしい眞似をして來た譯でもないんだよ。金つて云つてゐても、やつぱり仕事だつて君方より上手にやるだけの腕は用意して置かなければね。

H　さあ、そこ.なるとやつぱり違ふんだ。仕事といつても、君方のは、あの時分でも既に爺共が金持を訪ねて會社創立の談話をしたり、大臣を訪問して利權の運動をしたりするやうな仕事のセクレタリーだつたのだから、僕等から見れば、仕事ぢやない、やつぱり金を追ひ廻してゐる遊戲に過ぎないのだよ。子供に毛の生えたばかりの君が、そんなことをしてゐたのは、僕等には寧ろ一種の驚異だつたね。

M　云つて見れば、ゴルフの玉拾ひ小僧見たいな仕事だつたのだね。所が不思議なんだ、そんな仕事をしてゐると、當人一向ゴルフの名人にならうといふ氣もないんだが、いつのまにかその仲間に入つて、實業家とか何とかいはれるやうになるんだからね。決して我輩の罪ぢやないんだよ。

H　罪でもいゝから犯して見たいね。……何うだい、成金監獄の居心地は？

M　可なり惡くないね。その上此の監獄は、一向犯罪心を矯正しないからありがたいよ。

H　でもお蔭で社會主義は忘れてしまつたらう。

M　所が忘れないね。僕は昔から同じ方法で金を取り、同じ方法で金持になつたのだから、何も僕の主義を變へさせるやうな體驗はなかつたのだよ。あの社會主義時代だつて、僕は君より金持だつたのだからね

H　さうだね。何億の借金を持つてゐる英國の方が、一文の外債もないシャムよりも金持だつてのと同じ理窟でね。……然し、此頃の君は、奪ふ方から奪はれる方に廻つたのだが、それでも社會主義に差支ないかい？

M　それはちつとも差支なしさ。奪はれる方に廻つたつて、昔の君等のやうに親爺から貰つたものを奪はれるのぢやなくて、モノしたモノをモノされるのだから、それだけ餘計なものをモノして來ればいゝ譯さ。……一體僕等の此頃の生活は何んな性質のものだと思ふ。昔と全く同じなんだよ。何處にどの位の金があると見當をつけて、そいつを捲き上げるのだが、たゞ昔の僕は、先輩の懐を透視したり、舌の先で捲き上げたり、頗る原始的の方法でそれをやつたのだが、今日では、統計、調査などと大に科學的にそれをやる譯さ。銀

行だつて鑛山だつて、水電だつて、船だつて、苟も我輩の關係してゐる事業は、悉く金と而して我輩の間を結びつける手段に過ぎないのだよ。つまり妾の御機嫌を取る代りに統計を取るのだよ。すべての事業はその兩極に金と我輩とがゐなければ、一つも成立たないのだよ。君の叔父のやうに、貧乏と而して君とが、兩端に控へてゐるのぢや、あの頃の僕にさへ沒交渉だつたからね。昔だつてその通り、今だつてその通り、ちつとも變つたことはない。

H　で社會主義は？

M　だからさ、昔の社會主義は、今でも昔の通りキチンと僕の傍に坐つてゐるのさ。

H　でも今ぢや一向君の事業と交渉はないやうだね。

M　昔だつて何の交渉があるものか。『ある所にはあり餘り、無い所にはちつともない。これ不條理千萬なり。』なんて社會主義が、あの頃の僕にだつて、何の交渉があるものか。武藏野には平野があり、京都には山があるといつて見たつて、僕の別莊にはちつとも交渉のあることぢやないんだ。

H　それぢや何んであの頃、無暗に武藏野や京都を振りまはしたのだい？

M　つまり君方が今盛に、それを振りまはしてゐるのと同じだらうよ。僕は昔振りまはして、今は床の間に据ゑてあるのだが、君達は、昔は塵芥へすてた奴を、今拾つて來て振りまはしてゐるのだ。こいつも僕の方が一世紀先輩だね。

H　床の間へ据ゑないで、も一度振りまはしたら何うだい？

M　あいつも、うたひや長唄と一緒で、一つやつて見ようて氣分にならないと六かしいよ。君等に今うたひや長唄をやれつたつて、そんな氣分にはなれなからう。……何うだい？　君等の慢性失業といふ奴も、あんまりあいつを振りまはす故ぢやないかい？

H　さうかも知れない。

M　『知れない。』よかつたね。然し君に忠告するがね、これ　僕の實際の經驗からいふんで、君のすきなセオリーぢやないんだよ。……君はあの時分盛に國家主義を振りまはしたらう。今の君の社會主義はつまりそれと取つ代へつこをしたに過ぎないんだよ。昔は「國家主義」といふダンベルを、誰れかが君にあてがつたので、夢中でそれをふり廻してゐたんだが、今は、社會主義といふコロツプ鐵砲を誰れかが君等にあてがつたので、君等は、そいつをポン〳〵鳴して廻つてゐるんだよ。

H　でも、昔の僕の身體には、ダンベルの方がよかつたのだし、今の僕の身體にはカラ鐵砲の方が適してゐるから振り廻すのだらうよ。

M　さうすると君もやつぱり家に床の間を持つてゐて、昔はそこへ社會主義を置き去りにして、國家主義を振り廻したが、今ぢや、國家主義といふ骨董品を床の間に置き去りにして、社會主義を振り廻してゐるんだね。僕はそのあべこべをやつてゐるのだよ。今ぢやこれでも昔君等のふり廻した國家主義を時々ふり廻してゐるんだよ

H　人間はめい〳〵自分の身體に適つたものを振り廻してゐればいゝんだよ。腹の張つた奴はダンベルを振り廻すもいゝが、スキ腹でオイチニでもないからね。

M　さうすると僕も君も同じだよ。たゞ場合によつて床の間から舁ぎ出す品物が違ふだけぢやないか。

H　そんなものだらうよ。

M　それなら一つ相談だが、先づ二人カラ手で床の間の前に列んで坐らうや。

H　で何うするんだい？

M　面白いゲームをやるんだが、一寸設備がいるんだ。それ此のテーブルを床の間とする。こゝへ例のダンベルとコロップ鐵砲とを置くんだね　それから二人の眞中に、金と學問を置くんだ。このマッチを列べたやうに置く。よしか。そこで一、二、三で、僕等が同時に手を出して、金の方を摑んだものはダンベルを取り、學問の方をつかんだものは鐵砲を取るといふんだ。何うだい？

H　それが何うしたんだ？

M　すべて、その時の間拍子で、金か學問か何方かに手の觸つたものが、ダンベルにもなりカラ鐵砲にもなるんだよ。さうして金と學問の兩方摑んだ奴は、時にはダンベルをふり廻し、時にはカラ鐵砲を鳴すのさ。僕と君とは昔からみんなゲームをやつてゐたんぢやないか。

H　ハッハ。金も學問も摑み損つた僕には、ダンベルも鐵砲も取れない譯だね。僕はたゞ腕一本を振り廻してゐるだけだ。お蔭で日本ぢや喰へないで、上海くんだりまで仕事を探しに行く途中なのさ。

癡狂患者の相貌

原君の口は、喰物に噬みつく動物の口に還元しつゝあるのだが、感心なことには、原君は、たゞ口の恰好で、黨員に餌を垂れてゐるだけで、比較的喰物には淡泊だといふ評判だ。マア蜂須賀小六にしても、國定忠次にしても、親分株は、皆綺麗さつぱりなので顏を賣つてゐるのだから、さうあるべき筈だ。

又ロムブロゾーだが、原君は、ロ氏の學說に從ふと、天才の趣がある。ロ氏に云はせると、若いうちからの白頭も、大思索家の資格の一つだ。それから性慾に比較的缺乏してゐる事、これは原君は何うだかと思はれるが、子供のないことも——何方の故ともわからないが——先づ天才の條件の一つだ。

それに甚だ失禮だが、ロ氏によると、屈列陣(クレチン)人相即ち癡狂患者の相貌を供へたものは天才に多いといふが、原君の人相は確かに屈列陣相である。顏面に一種のダルミがあつて、眼が少しドンヨリとして、口が例の猿口と來てゐる。尤も、悲觀するには及ばない。ソクラテス、スコダ、レンブラント、ドストイエフスキー、カーライル、ダーウィンの諸天才は何れも屈列陣面をしてゐたのだとロ氏は云つてゐる。

結婚が不幸に終るといふことも天才の一資格だ。その例は無數で一寸擧げ惡いが、私共の知つてゐるのでも、シェキスピア、ダンテ、バイロン、コルリッヂ、アヂソン、カーライル、コント、ミルトン、ヂッケンス其他だ。原君は、その點でも天才である。

それから早熟も天才の一資格で、ゲーテの如きは十歲にもならないうちに、七ケ國の國語で小說を書いたと傳へられてゐる。原君の早熟も有名なもので、子供の時分からさうだつたといふか、司法省の法學校に在學當時は、他の書生とは餘程離れて大人のやうだつたので、たうとうストライキの首領に昇がれて退學を命ぜられたといふ話だ。

（「原敬の人相」より）

喰ひ違ひ（喜劇一幕物）

人物
伊丹（洋畫家）
源吉（植木職）
おうめ（草取娘、源吉の情婦）
早見（子爵）
多美子（子爵令嬢）
霞町の若様（大實業家の次男）
其他老人（早見家執事）、女中

場所
早見子爵家邸内果樹園

上手、こんもりとした檜林、その間の小逕によつて出入。
正面少し下手寄りに垣作りの梨畑、その後が桃畑。遠景に、母屋の洋館の一部、其れに續く和室の屋根が見える。
下手、躑躅の植込に添うてやゝ下る道。遠く築山、池などを見渡す。遠見に、然し目立つ位置に大きい石燈籠一基据ゑる。

源吉　二十三四歳の體格のいゝ元氣な若者、印絆天、背ろ向きで梨の手入をしてゐる。

伊丹（三十歳前後、型の如く髪の毛を長く伸した、極めて無邪氣な容貌の脊の低い男。何となく滑稽の味ある風采態度。赤い裏の背廣を着てゐる）源吉を少し距てた上手寄に畫架を据ゑて筆を動かしてゐる。

伊丹（筆を動かしながら）それは君、僕は早見家の援助は受けてゐるさ。然し僕が早見家から捲き上げてゐる額は、早見家が世間から捲き上げてゐる額に比べたら所謂九牛の一毛、言ふに足らんものなんだからね。早い話がだね、僕がいくら逆立をして、早見家の財産を減らす爲めに僕の畫を賣りつけたり小遣錢をセビリ取つたりして見た所で、太平洋の水を蜆貝でカイ出してゐるやうなもんだからね、張り合のないこと夥しい。

源吉（此方を向くやうな姿勢になつて、何だ仕事の手を休めずに）あんたはほんたうに好い株ですぜ。殿様のお金を只使つて、年中ノンキなことばかりいつてゐて、それで殿樣から先生々々つて崇められてゐるなんかんて、こんな甘えことはねえぢやありませんか。あつしも今度生れて來たら畫師に限ると思つてるんでさア。然しそんなに髪を長くしてゐねえといけねえんぢや、隨分鬱陶しくて困るだらうと思つて、今からそいつが氣になつてるんだ、アッハッハ。

伊丹　君らは僕のノンキらしいうはべだけ見て、如何に僕が生命の悶えを悶えてゐるかを察することが出來ないからそんなことをいふのだ。

源吉　あんまり悶えてるつて恰好でもねえぢやありませんか

伊丹　だからダメだといふのだ、アヽこの血と涙の悶え、（天を仰いだ形で、一寸首を振つて）アヽ君、僕のこの胸の内を君等に見せることが出來たら、君等はもう決して、同情の涙なしに僕を見ることは出來ないにきまつてゐる。

源吉　鰌の涙か鰻の涙か知りませんが、何う見ても先生は德人に生れて來たとしか見え

ねえね。

伊丹　所がだ、僕のこの胸の底には熱い血が沸き返つてゐるんだよ君。見給へ此の畫を！此の強烈な色が何を表現してゐると思ふ。此の活動してゐる線が何を暗示してゐると思ふ。それは破壞だ。たゞ破壞だ。藝術を君等は何だと思つてゐる。より強き人間の力がだ……ネエ君、より強き人間の力がだ、好いか、より強きだ……人間の力がだ。……

源吉　又始つたね、伊丹さんの陳芬漢芬が。先生今日は惡い所へ店を出してくれましたね。

伊丹　（焦れて地だんだを踏んで）エイやかましい、默れ。無自覺な動物に天才の大精神がわかるか。貴樣のやうな下等動物を人間らしい生物にしてくれようといふのが我々の大理想なのだ。貴樣達は因襲の奴隷、歷史の盲從者、特權の崇拜者、人類墮落の標本だ。而もそんな下等動物にされたことを感謝し歡喜してゐるけだものなのだ、貴樣等は

源吉　けだものはひどいなア。でも伊丹さん、こちとらは、かうやつてたつて、自分で働いて自分で喰つて、一文だつて人樣の厄介にアなつてゐねえんだが、畫かきなんてものは、先生のめえだが、みんな華族や金持の厄介になつてゐるんぢやねえんですかえ。あつしのお出入のお邸にア大抵ひとりふたり畫かきを飼つてゐねえ所はねえね、

伊丹　やいコラ、畫かきを飼つてる。とは何といふ言草だ

伊丹は、パレットを抛り出して兩腕を張つて源吉の方へ二三歩進みよつたが、急に立ち止つて、右の手を長く差し出して源吉を指しながら、

伊丹　ア、無自覺者よ、汝の名は源吉なり。

源吉　あつしの名は源吉ですよ。

伊丹　實に度すべからざるものだ。かくの如くにして天下は泰平なるかなだ。これ源吉君。

源吉　源吉が出世して源吉君になりましたね、今度は源吉閣下か。

伊丹　君等は此の慘憺たる現代の社會に於て、よくもそんなノンキな生き方をしてゐることが出來るね。

源吉　戲談云つちやいけませんや。これでも伊丹さんほどノンキぢやねえつもりですぜ。

伊丹　そ、それが間違つてゐるのだ。僕の胸には熱い血が煮えくり返つてゐるといつたではないか。僕はだ、如何にも早見子爵家の保護は受けてゐる。然しだ……

源吉　又始つた。餘ッぽど氣になると見えますね。

伊丹　……然しだ、僕はそれを少しも有難いとも忝ないとも思つてはゐやしないんだよ。

源吉　亂暴な人だね、あんたは。

伊丹　いや、決して亂暴ではない。彼等の財產は、僕等が使用してこそ社會に有益に役立つといふものだ。彼等に使はせるのは溝に棄てさせるやうなものだ。

源吉　全くだね。あんたのやうな畫かきの描いたものを千兩なんて大金を出して買つたりしてね。

伊丹　違ふよ。アレは千圓の賣價をつけて置いたけれど、こゝへ買つて貰つた時には六百八十四圓三十錢に割引したんだよ。

源吉　八十四圓三十錢とは、又妙にこぎつたもんですね。

伊丹　運賃を僕が持つたんで差引そんな勘定になるんだ。

源吉　華族さんも、此の頃のは中々細けえね。

伊丹　そのしみつたれから小遣錢をせびり取る僕の苦心を察してくれたまへ。

源吉　アッハッハ、違えねえ。こりア並大抵のことぢやなからう。

伊丹　しかも畢竟するに、僕等や君等が働いて彼等の巨萬の財産を作り上げてやつてゐるんだからね。隨分馬鹿らしい話だ。

源吉　いゝえ、あんたそれでも働いてゐるつもりなんですかい。アッハッハ。然し此頃はそんなことをいふ人がだいぶんありますね。此間も此處の大將が重役になつてる會社の園遊會で、醉つぱらつてそんなこと云つてたものが一人や二人ぢやなかつたやうでしたぜ。矢張りインフルエンザ見てえな流行病なんでせうね。

伊丹　馬鹿をいへ……然し源吉君、君は中々感心な男だ。うはべでは僕等の事を笑つてゐるが、腹では大に僕等に共鳴してゐることを僕はちやんと知つてゐる、白狀したまへ。

源吉　これア驚いた。全體何を白狀しろッてんです。

伊丹　僕は知つてゐるぞ。君は此頃あの池のふちの、奈良から持つて來たといふ大きい石燈籠を指して『これだけで一萬圓からかゝつてゐる。華族なんてえものは冥利の惡いものだ。此の石燈籠のカケラ程の金が俺にあつたら、肺病の妹を見殺しにせずに濟んだんだがなア。』と嘆息したらう。何うだ、子爵は、それを誰れからか聽いて、源吉めは危險思想だ。』と執事の爺にさう云つたといふぞ。何うだ。

源吉　『何うだ。』つて、それに違えねえぢやありませんか。

伊丹　全くそれに違えねえ……違ひないのだ。そこだ、我々の……。

伊丹は頻りに妙な腰つきをする。

源吉　何ですエ、變な風をしてゐるぢやありませんか。

伊丹　實は、今日は少し腹工合がわるくて、……さつきから我慢してゐたんだが……アゝもう堪らない……。

伊丹植込をぬけて母屋の方へ驅けて行く。

源吉　アッハッハ。何うでえあの風は。隨分變りモンだぜ。西洋の茶番てえなあんな人ばかり出て來るんだらうぜ。でもあれで本氣なんだから驚かせらア。然し好い人だなア。セチ辛え世の中だの何のていふけれど、あんな人が生きて行けるんだから頼もしいや。

早見子爵令孃多美子（二十歳前後、表情に富んだ容貌、それに適ふ化粧と服裝）植込の間の小徑から登場、源吉の眞背後に立つて源吉の獨言を聽いてゐる。

（振り向いて）これは〳〵孃樣、好い天氣ぢやござんせんか。

多美子　源吉は何を今獨言云つてたの？

源吉　エッヘッヘ。今まで伊丹さんと馬鹿云つてた所なんでさ。ほんたうに伊丹さんは好い方ですなア。

多美子　ほんたうに純な方ねえ。

源吉　『ジュン』てえんですかね、あゝいふのは。……何だか知りませんけど、面白えことばつかり云つて、今怒つてたかと思ふと、すぐと笑つて、笑つたかと思ふと泣き出すてんだから變つてまさア。

多美子　さうよ、あの方は外の方見たいに、自分を隱したり、つくろつたりすることの出來ない方なんだわ。かうと思ふとすぐそれを云つてしまつて……云ふばかりぢやないのよ、すぐとそれを實行しないと我慢が出來ないのよ。

源吉　それアあつし共だつてさうでさア。だから伊丹さんたア、いくら喧嘩してもすぐ仲直りしてしまつて、『源吉君。』と來るんですからねエ、ほんたうに面白えや。あれでちつとは畫が描けるんですかえ。

多美子　そんな失禮なこと云つて。伊丹さんの畫はね、あの方の氣象の通り自分の胸にある

ものが色や線になつて出て來るのでね、ふゝ、やつて寫生してゐても、ちつとも自然の景色を描いてゐるのぢやないんだわ。自分の胸の裡の畫がカンバスに出て來るんだつてさらいつていらつしやるわ。眞實だわ、それは。

源吉　へエ、胸の裡の畫ねえ？　先刻も、俺の胸裡には血が沸き立つてゐるつて云つたつけ、道理であの畫はイヤに眞紅だと思つた。

多美子　源吉なんかにわかりアしないわ……けれども源吉、私お前達のやうな生活が隨分羨しいと思ふわ。

源吉　アッハッハ。お孃さんも御戯談もんですね。それアご馳走を喰べ倦きると、いゝ、かうこで茶漬が欲しいてナものですけど、茶漬ばかり上つてたらお孃さんなんかは、三日位で閉口しておしまひになるでせうぜ。譃と思ふならやつてご覽じろ。

多美子　そんなことといふけど、源吉は私達の生活が何んなものか知りアしない。それはまるで譃で固めてゐるのだわ。

源吉　そんなことはありますまい。お邸へ見える方は皆立派なお方ばかりで譃なんかつきさうな顏をしてる方は一人だつて無いぢやありませんか。

多美子　だから遣り切れないんだわ。皆ほんとのやうで何れをほんとにしていゝかちつともわかりアしない……。

源吉　アッハッハ。お孃さん面白えことを仰しやる。どれもこれも皆ほんとでせうぜ。

多美子　そんなことがあるもんかね。それはお前達の社會のことだわ。

源吉　あつしどもの社會にアそれア譃つきが澤山ゐますぜ。あの留公なんかは、何時でも色んなことを云つてやがるが、皆譃ツぱちなんだから驚いちまひまさア。

多美子　それがほんとなんだわ。私達の社會には、そんな顏をしてるものは一人もありやしない。

源吉　だから結構ぢやありませんか。

多美子　だから譃ばつかりだといふんぢやないか。

源吉　何だかお孃さんの仰しやることはあつし共には飮み込めねえね。……あつしたちにア敎育てものがねえからわからないんでせうね。困つたものだが、あつしのせゐぢやねえ、親爺のせゐなんでさ……親爺のせゐでもねえ、誰れのせえでもねえ、植木屋の倅に産れついたのが不運だと思つて諦めるより仕方がありませんや。アッハッハ。

多美子は輕い溜息をそつと吐いて、源吉の方を見る。源吉　眼と逢ふ。

多美子　（慌てたやうに叱りながら）でもね、源吉、あの何だわ……敎育なんてダメなものよ。その證據には、私達の社會でやつてることとお前達の社會でやつてることと何方が正しいか、譃がないか、比べて見てごらんな。

源吉　比べるツたて、あつしどもには上つ方のことはわからねえから比べやうがありませんや。マア歩くにしてもこちとらはテク〳〵歩きで、上つ方は自動車てナ譯でせうね。

多美子　ほらご覽な。テク〳〵歩きと自動車に乘るのと何方が正しいと思ふ、源吉は。

源吉　道惡で出會すと、あいつは馬鹿に忌め忌めしいもんですね。

多美子　（焦れッたさうに）そんなこつちやないのよ。

源吉笑ふ。

もうそんな話はよさうね。あたし焦ら〳〵してくるわ……ねえ源吉、今年は梨はよく出來さうかい。

源吉　えゝ今年は受合ひでさア。今までは土が

いけなかつたんでさ。此の邊の土はあんまり梨なんぞにア肥え過ぎてまさア。去年すつかり砂の多い土と入れ換へといたからもう確かですよ。

多美子　源吉、私にも手傳はして頂戴。

　多美子、源吉と列んで梨の枝をためる。

これで好いんだらう。うまいわね。

源吉　なるほど、中々お上手ですね。あつしの……何とかいつたけな、さう〳〵……助手になつていたゞかうかな。アッハッハ。

多美子　ホヽヽ、さうしたら、私隨分働いてあげてよ。

源吉　肥料なんぞもやつてくださいますかい。

多美子　肥料？　ちつと困つたわね。……でもあれ臭いんでねえ。

源吉　臭はねえ肥料てえのはお生憎樣でさア。肥料がくせえやうぢやとても本職にアなれませんぜ。

多美子　ぢやあたし一生懸命に我慢してよ。

源吉　おつとお孃さん、そこんとこはちつと混み過ぎてますから、少し下へためて見てくださいね、それからその邊の朽つた枝を、一つ此の切出しで、切口のさゝけないやうにうまく切つていたゞきたいもんですね、お助手さん。

多美子　ハイ畏りました。ホヽ。

　多美子、源吉から切出しを受取つて切る。

多美子　かういふ風にかい。

源吉　ほんたうにお上手だ、少々怪しい手つきぢやアあるが……

多美子　それアまだお弟子入りをしたばかりだもの……源吉、いつも獨りで唄つてゐるあの唄を唄つて聽かせない？

源吉　エヘツヘ。名人にものアさら何時でもすぐ唄ふッて譯にア行かないんでね。それよりか、お孃さんが何時かお唄ひになつてゐるのを一つ聽かしていたゞけませんかねえ。

多美子　私が唄つたら源吉も唄つて聽かせる？

源吉　エヽ、さうすればあつしア敗けねえ氣で唄ひますア。

多美子　ぢやあたし唄つてあげるわ。

　多美子、小刀を使ふ手を休めて唄ふ。

君よ知るや、南の國。樹々はみのり、花は咲ける。風はのどけく、鳥はうたひ、時をわかず　胡蝶舞ひ舞ふ。……

　源吉、笑ひを嚙み殺す。堪らなくなつて吹き出す。

アラ源吉、人が一生懸命に唄つてゐれば吹き出したりして、ひどい人ね。

源吉　（涙を拭きながら）ア、苦しい。あつしは又、一生懸命に可笑しいのを堪へたんで横腹が痛くなつちやひました。いつも遠くで聽いてゐる時にアそんなに可笑しいとも思ひませんでしたが、近くで聽くと隨分たまらねえもんですね。何處からそんな聲が出るんですえ。ヒュルルルッてやがら。アッハッハ。

多美子　いやな源吉。（睨むまねをする）さア今度はお前の歌だよ。早く唄つてお聽かせよ。

源吉　エヽ實は唄ふつもりでしたが、今お孃さんの歌を聽いたんで、あつしの奴アびつくりして引込んぢまやがつた。

多美子　ずるいよ源吉は、あたしにばかり唄はせて。唄はないと承知しないからいゝ。

源吉　エヽ、唄ひますよ、唄ひますがね……可笑しいな。何んだかきまりが惡いな。

多美子　あたしだつて唄つたぢやないの、源吉の爲めに。だから源吉だつてあたしの爲めに唄つて聽かせるんだわ。

源吉　ぢやアやッつけるかなア。伏討に笑つたりしちやいけませんぜ。

　源吉、仕事をしながら唄ふ。

流れナアー――、ナカノリサン、流れくる

水、ナンチャラホイ、止めても見よか、ヨイ〳〵、止めてナア――、ナカノリサン、止めて止まらぬ、ナンチャラホイ、色の道、ヨイ〳〵。

多美子、うつとりと聴き惚れる。

アッハッハッハ、何んなものです。

多美子 （我れに返つたやうに）源吉、あたし何んだか悲しくなつたわ。

源吉 悲しく？ そいつは困りましたね。ぐちぶしで悲しくなつたら、義太夫でも聴いたらモンゼツしなきア、アッハッハ。あつしがお嬢さんの唄で可笑しくなつて、お孃さんがあつしの唄で悲しくなれば、差引元の杢阿彌でさア、アッハッハ。

多美子 ホヽヽヽ（再び梨の枝を切り始めて）源吉はいゝ聲ね……アッ痛――

多美子、けたゝましい聲をあげる。

源吉 （驚いて多美子の傍へ驅け寄つて）ド何うしたんです、手を切りましたかい。

多美子 （右手で左手の指先を押へながら）ほんのちつとばかりかすつたんだわ。源吉、私のこつちの袂に半巾があるから出して頂戴。

源吉 何んでもねえことをしましたね。あつしがお餘計なことをお願ひしたんで……（多美子の袂から半巾を出して）これア少し勿體ない。

多美子 いゝのよ。それを裂いて結へて頂戴。

源吉 勿體ないが、そんなこといつちやゐられねえ。（半巾を裂いて多美子の指先を結へながら）痛みますかい。

多美子 いゝえ、少しばかりよ。有難う、もう好いわ。

源吉 あつしびつくりしちやつた。でも少しでよござんした。大怪我でもしたらあつしは腹でも切つて申譯しなけれアならないとこだつた。アヽ、壽命が三年ほど縮つた。

多美子 （笑つて）飛んだ助手を雇ひ入れたのね。免職しちやいやよ。

源吉 いゝえ、いけません。もう免職々々ぐづぐづしてゐるとこつちが免職になつちやひますからね。

多美子 尤もあたし免職にならないでも、もう指を結へたんで助手が出來なくなつちやつたわ。

源吉 あつしも其だつたら飯の喰ひあげつて所ですね。日に一本づつ指が使へなくなつちや、月に三十本の指が要る譯ですからね。年に三百六十五本も指が要るつてんぢや平民にやアとても續きませんや。アッハッハッハ。

多美子 ダメねえ、あたしたちは

源吉 何うしてダメなんです。

多美子 （俯向いて凝と地を見つめて）何うしてでも……ダメぢやないの……。

若い女中登場。

女中 アノお孃様、霞町の若様がお見えになりまして一寸お孃様に

多美子 今参りますつて、さう云つて頂戴。

女中、お辭儀をして退場。

源吉 霞町の若様がよくお見えになりますね。あの方はほんたうにお立派ですね。芝居の若様ツてもねえや。やつぱり上つ方は違[illegible]

多美子、眉をよせる。

お孃さん、なんでせう？ 源やが當てて見ませうか。霞町の若様は、お孃様のおいひなづけつて譯なんでせう

多美子 知らないわ。

多美子、行きかける、源吉、追ひかけるやうに、

源吉 アッハッハッハ、すつかり當つちやつた。

多美子、退場。伊丹、眞菰の間から出る。額の汗を拭く。

伊丹 ア、何うも待ちくたびれてしまつた。

源吉　今まで何處に居たんです。

伊丹　そこに居たんだ。イヤ君が令嬢と話をしてゐるので、僕はあすこに凝とこらへて待つて居たんだよ、隨分長かつたなア。唄ひこをしたり、癡話喧嘩をしたり、たうとう痺を切らせるなんて、頗るお安くないね。

源吉　伊丹さんも人が惡いなア、何もあつしがお孃さんと内所話をして居たんぢやなし、出て來たつていゝぢやありませんか。

伊丹　所がだ。（と僻の調子で右の手を大きく源吉の方へ伸して）ア、無自覺者よ、汝の名は源吉なり。

源吉　又始つたぜ、此の人は。苦味が惡い、

伊丹　いゝや、君は確かに自覺してゐる、僕に隱すなんて他人臭い。白狀したまへ。

源吉　又白狀ですかえ。今度は全くわからねえや。てんで見當がつかねえ。

伊丹　嘘をいひ給へ……だが一寸待つた。これは聊か警戒を要する話だから……。

　伊丹、さう云ひながら四方をぐる〳〵廻つて元の所へ來て、

大丈夫……で源吉君は、君は多美子孃が、君をラヴしてゐることを十分悟つたらう。

源吉　（枝をいぢる手をやめずに）伊丹さん、馬鹿が始つたぜ。取り合つた日にア飛んだ目に逢わ。

伊丹　いや源吉君、君は自覺してゐる。たゞ因襲道徳によつて、それを僕に隱してゐるのだ。僕にのみならず、多美子孃その人にも隱してゐるのだ。

源吉　何を隱してゐるもんですか。馬鹿々々しい。

伊丹　全くか。

源吉　全くでさア。

伊丹　これ源吉君、では一寸こゝへ來たまへ。

源吉　マアご免蒙りませう。あんたに取り合つてゐると仕事が捗取らなくて、親方にどやされつちまア

伊丹　何んだ、そんな仕事なんぞは何うでも好い、花なんぞお前が出來ようが惡く出來ようが、何うせ君が喰ふんぢやないんだから構やせん……一寸こゝへ來たまへ。來たまへといふに。

　源吉、澁々伊丹の傍に來て木の根にかける。

源吉　何いね、何ですえ。

伊丹　破壞だ、大破壞だ……いや建設だ、一大建設だ。

源吉　誰れか別嬪でもおつ立てるんですかい。

伊丹　マア聽き給へ。多美子孃は實に羨むべき女性だ。さうして君は實に羨むべき……男性だ。

源吉　何んの事ですえ。忙しいんだから手取り早く用を云つて貰ひてえなう。

伊丹　僕はもう決心した。もう實行に斷行に行きかけた、……何だつけな……斷乎と行くんだ。源吉君、現代に於ける生活の建設は、それは古きものの破壞から出發するより外はない。そこには犠牲が要る。それは多美子だ。けれども彼女は、その犠牲の甘味に生きる外、彼女としては生きる道はないんだ。

源吉　それで何の建設ですえ。

伊丹　建設ではない、君自身の一大建設なんだ。源吉君、君は多美子と共に、その重大な建設の役割を演ずる氣にはなれないか。

源吉、もう少し日本語で云つて貰はねえとあつしにはかい目判らねえや。お孃さんと一緒に何をやるんです。

伊丹　そこだ。（源吉の傍へ床几を引寄せて）源吉君、多美子孃は全く時代の子なのだ。彼女の周圍の虚僞の生活には、彼女はもう我慢がし切れないんだ。さうして純粋な、まじり

氣のない、アラのない人間を求めてゐるのだ。誰れだつてさうなければならんだらうぢやないか。さうして霞町の若樣なる生物と彼女との婚約は、彼女に最後の打撃を與へたのだ。それは彼女の關係したことではないのだ。彼女は全く、知らないことなのだ。

源吉　お孃さんは知つてますぜ、さつきあつしがさう云つたら、眞紅になつて逃げ出しちやつた。

伊丹　いや、その意味ではない。霞町の若樣なる動物と、多美子孃との間には何等の愛もないのだ。霞町は、あの通りのお坊ちやんで別段惡人でも善人でもない、云はゞ教育と金と親爺とを持つた普通人に過ぎないから、多美子孃を獲たことに決して不滿はなからうが、多美子孃の方はさうでないのだ。彼女は、地位も、財産も、學問も、着物も、白粉も、それを塗りつぶすことの出來ない人間的の　るものを、彼女自身の裡に持つてゐるのだ。その彼女自らの裡にある或るものが、彼女をして、同じ人間的のものを求めなければ已まない欲求を抱かしめてゐるのだ。そこでだ、彼女は、自分の裡にある眞純の人間と同じ人間を、自分の外に求めてゐるのだ。眞純の人間なのだ、源吉君、解つたか。まじり氣のない生粋の人間なだ、彼女は求めてゐる。眞劍で求めてゐる。命懸けで求めてゐる。一切をすててたゞそれだけを求めてゐるのだ。

源吉　へー？　で何うしたつていふんですえ。

伊丹　でその眞純な人間的のものを、彼女は君といふ人間、即ち源吉君に於て發見したのだ。

源吉　へー……？

伊丹　一へーぢやないよ君。多美子孃の君をラヴするに至つた所以は即ちそこにあるのぢやないか。お孃さんは……一口にいふと、君と戀に陷ちたのだよ。

源吉　戯、戯談云つてら、伊丹さんは。眞面目になつて聽いてれア、何のこつたい。エヽつまらねえ。

源吉、立上らうとする。伊丹、慌てて抑へる。

伊丹　マ待ちたまへ、戯談とは何だ。僕がこれほど眞劍になつてゐるのが君には解らないのか。僕は多美子孃に心から同情してゐるのだ。僕は彼女の……。

伊丹、半巾で眼を拭ふ。源吉、驚く。

僕は、ぢきに物に動かされるさ。然し、人間が人間に動かされるのが何で惡いのだ、何で可笑しいのだ。多美子孃は、僕の妻に向つて彼女の眞純な戀を確かに告白してゐるのだ。

源吉　ほんとですかえ、それは。

伊丹　ほんとだとも。彼女は僕の妻に、もし彼女が、生活の束縛から自由にされるなら、自分はすぐと源吉のやうな人間の妻になるとさへ云つたのだ。無論彼女は「源吉のやうな人間」といつて「源吉」とは云はなかつた。然し、今僕が蔭から見てゐた樣子では、彼女は決して「源吉のやうな人間」を求めてゐるのではなく、「源吉」その人を求めてゐるのだ。多美子孃は、君に戀してゐるのだ。

源吉　だつて仕樣がないぢやありませんか、……なんて、あつしもついほんとにするんだから笑はせら。……もうやめませう、馬鹿々々しい。

伊丹　やめてはいかん、斷じてやめてはいかん。

源吉　やめないにしても、何うもなるものぢやねえぢやありませんか。うつかりしたことをしやべると、不義はお家の御法度だなんて、頸でもちよん／＼切られたらことだ。

伊丹　君は實に貴族的の男だなア。

源吉　馬鹿いつてら、あつしが貴族的なら、この殿樣は職人的だ、アッハッハ。

伊丹　いや、君はたしかに貴族的だ。昔或る大名が、戲談に『切つてしまへ』といつた爲めに、ほんたうに切られてしまつた家來があつた。君のはそれだ。君は戲談のやうにそんなことを云つてゐるが、その戲談は、多美子孃といふ人間を一人殺すことになるのだよ。君は昔の大名と同じぢやないか

源吉　驚いたね。ぢや何うすればいゝんです。

伊丹　君は多美子孃の愛を受け入れゝば好いのだ。

源吉　『愛を受け入れる』つてえと?

伊丹　早くいへば、多美子孃を妻にするのだ。

源吉　飛んでもねえ。植木屋の職人があんな華族のお孃さんを嚊にするなんて、そんなことが出來てたまるもんですか。第一あつしは喰つて行けやしねえ。嚊にあんな風でゾロゾロしてゐられちや、あつしがいくら稼いだつてやり切れやしねえ。

伊丹　そんなことは末の末の事だ。人間と人間との共鳴だ。君の純な僞りのない生活を多美子孃はあこがれてゐるんぢやないか。所謂手鍋下げてもといふ通り、手鍋を下げるといふことに彼女は人間の生活を見出さうとしてゐるのだ。多美子孃は何も生涯あんな風をしてゐなければならないといふ道理はない。

源吉　飛んだ丑川くま子事件だ。いやなこつた。

伊丹　實際いやか。あゝいふ純な美しい處女が、一人の同じやうに眞純な男にあこがれるといふ事は、決して神樣の罰に逢ふ虞れのない、ほんたうに尊いことなのだ。たゞ囚はれた人間だけが、それを忌み、それを罰しようとするのだ。然し、さういふ人間があべこべに神樣から罰しられてゐるぢやないか。君は實際いやか。それとも恐ろしいのか。

源吉　(少し迷つたやうに)伊丹さんは人が惡いな。あつしだつて人間ですぜ。譃にもそんなことを云はれゝばちつとはをかしな心持にもならア。

伊丹　それ見給へ。だから僕の前に隱すなといふのだ。先刻の多美子孃の言葉といひ態度といひ、あれが君に通じないとすれば君は人間ではないのだ。

源吉　さう云はれて見ると、何だか樣子が訝しいやうでもあつたなア。でもあつしとしちやそんなだいそれたことは思ひもつかねえからなア。

伊丹　僕等は決して、惡事を話しあつてゐるのではないぞ。誰れに聽かしても恥しくない眞劍の心持を語つてゐるのだ。君がそれを罪惡と思ふのは、全く今までの間違つた因襲に囚へられてゐるからだ。多美子孃は立派な道德を持つてゐる。君がそれに共鳴するのは人間の當然なところだ。共鳴しなければ、君は一匹のけだものに過ぎない。

源吉　でも、だから何うするつて譯にも行かず、これで話が大詰なんだからつまらねえや、まるで夢を見たやうなものだ。

伊丹　それが間違つてゐる。決してまだ大詰ではない。

源吉　何うするんです。

伊丹　實行だ、實行だ。

源吉　實行つて?

伊丹　多美子孃は時々僕のアトリエ……畫室に來られるのだ。明日も來られる筈だ。で明日君は僕の家に仕事に來たまへ。僕は多美子孃に一寸留守を賴むといつて、妻と婆やを連れて三越へ出かけることにするからね。アトは君方が然るべく直接行動を採るのだ。

源吉　飛んでもねえ事をいふね、伊丹さんは。

それぢやまるであつしに悪いことをしろつて云はねえばかりぢやありませんか。

伊丹 「悪い事」？ 何が「悪い事」だ。それが人間同士のほんたうの事ぢやないか。そこで初めて、人間と人間とが出會ふのぢやないか。……君はそんなことで、平生何であんな廣言を吐くのだ。何時か、殿様が、あの大きい石燈籠を二三間北の方へ移した時に、君は何と云つた。「この石燈籠め、二三間歩くのに四五百兩も金を喰やがつた。この殿様のお大名旅行よりは餘つ程豪勢だ」といつただらう それを聴いて、子爵が何んな顔をしたと思ふ それは君の裡にある人間の聲なのだ。その人間が、多美子孃の人間と出會ふのが、何で悪い事だ。人間の皮を被つたならそのけだもの其の出會ふのが善い事で、人間同士の出會ふのが悪い事か 源吉君、僕は多美子孃を殺さうとしてゐるのぢやないのだよ、生かさうとしてゐるのだよ。で君がもし人間であるならば、彼女を見殺しにすることはしまいと僕は信じてゐるのだ。イヤ、君自身もさうして人間に生きるのだ。それは大きな人間の仕事なのだ。僕は僕自身譃の人間でありたくないと思つてゐる がどれだけほんたうのことをしてゐるか、顧ると恥しい次第なんだ。

源吉は伊丹の眼からホロ〳〵涙の出てゐるのを見て、悄氣たやうに俯向く。

源吉 でもあつしは済まねえ。

伊丹 済まない？ 何済まないことがあるものか。

源吉 いんえ、あつしの方の話なんです。

伊丹 君の方の話とは？

源吉 （おど〳〵して）あつしには……伊丹さん、笑つてはいけませんせ……これでもお互に思ひ込んでゐる奴があるんですからね。

伊丹 （ハッと驚いて）――それは少しも知らなんだ。それは實に何らも、……全く知らなかつた。……で、然しそれは、……その相手といふのは？

源吉 これア今まで誰れにも云つたこともねえんですがね……なアにしみつたれた女でさア。……親方の遠縁のもので、親も兄弟も失くして親方の所へ厄介になつてゐるんですよ、何時もこのお邸へ草むしりに來てゐるまさア

伊丹 さうか それは僕はつい氣が付かなかつた。……それは孤兒だね。ウンそれも實に好いことだ。有りがたいことだ……然しだね、それは要するに、在り來りの平凡な行動だね。敢て破壊でもなければ、從つて建設でもない。今の時代では、人間はもつと痛快な仕事をしなければならないんだ。たゞ在り來りの満足に安定してゐてはいけないのだ。君のその草取君とのラヴも決して悲観すべきものではない。が然し、それは餘りに容易な満足だよ。もつと世間に對して目に物見せる行ひか、今の時代には肝要なのだ。誰れでも、それをしたものが、それだけ世の中を救ふ仕事をしてゐるといふ事になる。さうしてそこに現代人の犠牲があり満足があるのだよ。ね、君、僕は決して、悪い事を君に勧めてゐるのぢやないんだよ。だがぢやね、これだけは是非君に考へて貰ひたいんだ。何うか、その君の餘りにありふれた満足をすてゝ、も少し時代に觸れた、さうしてもつと意味の多い満足……それは犠牲だ、確かに犠牲だ……が満足だ……その満足を取つて貰ひたいんだ。僕は多美子孃の胸の裡を察し、さうして彼女の日頃の悩みを想ふと、もう堪らないんだ。邪が非でも……君にとつてそれが何んな犠牲であつても……是非彼女を譃の生活から救ひ出して、

眞純の人間が經驗しなければならない人間苦を彼女に味はせたいのだ。君にも味はせたいのだ。平たくいへば、君方二人に、人間らしい苦しみをさせたいのだ。それが二人を救ふことなのだ。さうして社會を救ふ事なのだ。

源吉　（考へ込みながら）でもあんまり不人情だからなア。

伊丹　不人情？　草取君に對してか。……さう……、然しだ、今の我々は人情とか不人情とかいふ以上の仕事をしなければならないのだよ。無論人情に外れるといふことは好ましい事ではないさ。然しだ、昔から社會人道の爲め、言ひ換へると、大きい人情の爲めに、不人情を忍んだ人が澤山にあるぢやないか。その苦しみも亦人情の行き止りなのだよ。

　源吉は茫乎して考へ込む。

君、明日僕の方へ仕事に來てくれ給へ。ただうしてくれさへすれば好いのだ。アトは自然がやつてくれる。……ね、來てくれたまへ。

　伊丹は立ち上つて源吉の肩を叩きながらその顔を覗き込んで、頻りに促す。源吉一寸諾く。

來てくれるね。確かに來てくれるね。アヽ有りがたい。さうして多美子孃の手を取つてやつてくれたまへ。僕は嬉しい。生れて初めて人間らしい仕事をしたといふ氣がする。こんな畫なんぞは何んだ、しやらことなしの自慰に過ぎないんだ。源吉君、僕は君に感謝する。

　伊丹は頻りに涙を拭ふ。源吉は考へ込んだまゝ立ち上る

女中の聲　（蔭で）源さん、お茶ですよ――。

源吉　……。

女中の聲　源さ――ん。

源吉　ハーイ、只今參ります。

　源吉はぼんやり俯向きながら退場。

伊丹　アヽ愉快だ。僕も初めて生きた仕事をした。令孃は明日確かに來る。これは自然の手に委ねて可なりだ。アヽ理想は實現する。彼等は苦しむだらう。然し彼等は幸福だ。……これで僕は又新しいインスピレーションを獲る。好い畫が澤山出來るぞ。

　伊丹はパレットを拾ひあげて、カンヴスに向ふ。女の啜り泣く聲聽ゆ。

ハテナ、女の泣いてゐるやうな聲が聽えるぞ。

　伊丹、そこらを見廻しながら下手の傾斜を下りて退場。

（蔭で）何處か惡いのか、さうぢやない？

　すぐと草取娘おうめ（十八九歲、つゝましい、やゝ田舍じみた娘）の背を叩くやうにしながら登場

あんな所で泣いてたつて仕方がない。アそこへかけ給へ。……何うしたの？　誰れかと喧嘩でもしたかね。

　娘はたゞ泣いてゐる。伊丹、途方にくれる。

一徳君は……

　伊丹、急に思ひ當つた心持。驚いたやうに立ち上つて女の顔を覗き込む。

ア、君は何んぢやないか、源吉君の親方の所にゐる娘さんぢやないかね。

　娘、泣いたまゝ諾く。

矢張りさうだつたか。で何で泣いてゐる……（ソク／＼しながら、キヨロ／＼此處らを見廻して）で何んだね。今の僕と源吉君の話を聽いてしまつたんだね

　娘、一層烈しく啜び泣く。

何うも困つたことになつた。すつかり聽かれてしまつたんだ。一徳君はあんな所に居るといふ法がない。あすこにはちつとも草なんか

生えてやしないぢやないか……だが然し、そんなことを云つたつて仕方がない。……君は聽いたんだね、僕等の話を。困つたなア。確かに聽いたね。確實に聽いたんだね。

　娘は愈々高い聲で泣く。

これさ。さう泣いてばかり居ても話が出來ない。それは無理はないさ。然し僕等も決して君を憎んだ譯でも嫌つた譯でもないんだからね。全くより大なる理想の爲めなんだからね。

　娘は益々泣きじやくる。

何うも困つたね。……君は何ださうだね。お父さんもお母さんも無いんだつてね。氣の毒な事だ。で親方の遠縁ださうだね。

　娘は默つて首を振る。

さうぢやないつて、それは訝しい、源吉君はさう云つてゐたがな。

　娘、漸く顏にあてゝゐた手を片手だけ離して、

娘　親方は、私がみなし子だと思つて皆が馬鹿にするといけないから、遠縁のものだつて云つてゐるんです。

伊丹　（幾度も諾いて）何うも親方は感心な人だね。で何ういふ因緣で君を養つてゐるんだね。

娘　昔親方が若い頃少しばかり私のお父さんの世話になつたことがあるつていつてるんです。でも何でもありやしないんです。たゞ親方は大變私を可愛がつて呉れてゐるのに、おかみさんがやかましいことを云ふんだから、昔世話になつたことがあるなんて云つてゐるんです。私ちやんと知つてるんです。

伊丹　（何度も諾いて）ウー、何うも感ずべき親方だ。で君は幾歲の時から親方のとこに居るんだね。

娘　十三の時から……その時お母さんがなくなつたの。

伊丹　お父さんには子供の時に別れたんだねお母さんは人仕事でもしてやつてゐたのかい？

　娘、泣く。

でお母さんが死んだので、君は何うすることも出來なかつた所を、親方が君のお父さんを少しばかり知つてゐたといふので君を引取つてくれた譯なんだね。何うも君等の社會は何といつても互助的だ。實に話だけ聽いても氣持の好いことだ。めい／＼が喰ふや喰はずで居ながら、決して人を見殺しにしないのだ。彼等は皆幾分か、人間らしいものを失はずにしつかり抱へてゐる。ほんたうのものが少しばかりでも殘つてゐるのはたゞ彼等の社會だけだ。アヽ美しいことだ。アヽ有り難いことだ。（頻りに涙をふきながら）で源吉君とは何時頃からの知り合ひだい。アノ子供のうちからの仲好しなのかい。で嬉しい約束をしたのは？

娘　……。

伊丹　マア好いや。……それは確かな事實なんだね。さうして立派な事實なのだ。大變いゝことなのだ。尊いことなのだ。

娘　源さんがいろ／＼私のことを親切にしてくれて、……私がおかみさんに叱れて泣いてゐると、源さんは何時でも……。

伊丹　ウン、ウン、尊い事だ、ありがたい事だ。

娘　私はもう世の中に頼りといつたら親方だけですのに、親方はもう大變年をとつて……私源さんに、見棄てられたら……。

伊丹　サアそこだ。世の中はたゞ喰つて行ければ好いといふものではない。生命は別だ。親方は君を喰はしてくれるだらう、然し源吉君は、君に生命を與へてゐるのだ。源吉君を失

ふことは生命を失ふ事なんだ。

娘　ですのに、先刻あなたが源さんにあんなことを云つて……私いつそ死んでしまはうと……。

伊丹　マ、マアさう、下手な小説のやうに、性急に君の運命を片付けてしまふには及ばない。僕は如何にも先刻源吉君にあんなことを云つた。然しだ……確かにあゝは云つたが、然しだ……。

娘　けど私又さう思ひましたの。源さんだつて乞食同様の私のやうなものを手足纏ひにしてゐるよりも、此方のお孃さんのやうな方に思はれゝば何んなに仕合せか知れないから、いつそ私は……いつそ私は……思ひ切つて、……それが源さんの仕合せになることなら……私はもう思ひ切つて……。

娘、咽び泣く。

伊丹　ムウ、ムウ……。

伊丹、ホロ／＼と止め度なく涙をこぼす。

娘、泣きながら、

娘　私は、このまゝ何處かへ行つてしまつて、……何うせ元の乞食になるまでのことですから……。

伊丹　コレ、さう悲しいことをいつてくれては困る。……君は實に純だ。何といふ尊いことだらう。僕は今まで君のやうな女らしい女の人に出會したことはない。人は君を弱い女といふだらう。然しその弱い君に誰れが勝つことが出來る。弱い女ほど、強い人間はない。アゝ僕は全く打ちのめされたやうな氣がしてゐる。……然し君、決してそんなに悲觀する必要はない。源吉君は何處までも君のものでなくてはならない。君は源吉君を奪はれなければならないわけはちつともないのだよ。しつかり捉へてゐて好いのだ。源吉君も君を棄てることは出來ない。

娘　でもさつき、あなたは源さんにあんなことを仰しやつてたぢやありませんか。

伊丹　それは云つた。確かに云つたが、然しだ……然しだ……。アもう僕は正直に云つてしまはう……君、僕は全くあんなことを云つたに違ひないのだ。がそれは僕が君といふ尊い人のゐるのを全く知らなかつたからだ。たゞ一個の平凡な婦人が源吉君を束縛してゐるんだと思つたから、そんなものは棄てても好い、より大きい立派たものを選べと云つたのだ。君を見て、君の心持を知つてから、僕は全く後悔してゐるのだ。で今まで、何とかして、源吉君にあんなことを云つたのを正しい事のやうにごまかさうと思つてゐたが、それは我れながら忌ま／＼しい醜態だつたのだ。僕は今まで自分をそれほどきたない人間とは思つてゐなかつたが、矢張り駄目た。エエ忌ま／＼しい。僕は君に對して恥ぢ入る。源吉君にも濟まないことをした。

娘　でもお孃さまも、源さんのことをそれほど思つて下さるのに……。

伊丹　いや、君として、それを考へてくれるといふ心持は實に尊いことだ。然しそんなことを君がいふのは、餘りに卑屈だ。自分をへり下つてゐるやうたが、實は自分を奴隷にしてゐるのだ。多美子孃は、成る程それは氣の毒だ。然し彼女の惱みは、生活の充ち足りた人の不滿だ。徒らに上部だけが金ピカに塗り立てられた生活の虚僞に對する不滿なのだ。……君にそんなことを云つたつて解るまいが……一口にいへば、彼女のは、贅澤ものが、贅澤はウソの皮でこしらへた衣裳だと悟つて、それを脫ぎ捨てて素裸の人間にならうといふのだ。君はもと／＼、素裸の人間なのだ、それから剝ぎとられたら、自分の身の皮を剝がれる様なものだ。君は、今眞純のもの

だけしか持つてゐないのだ。何一つ擲げすてる必要はありやしない。源吉君は、君にとつて唯一の尊い命なのだ。命を人に與れてやる必要はない。いかにへり下つても、そんなことをする必要はない。又、してはいけない。僕は、君のあることを知らなかつたのだ。知つてても、そんな尊いものだけしか持つてゐない婦人だとは思つてゐなかつたのだ。であんなことを云つてしまつた。飛んでもないことをした。僕は實に濟まなかつた。君、安心してくれたまへ、君……エ――何さんといふ名だね。ウンおうめ……おうめさんか、ね、おうめさん、何うか安心してくれ給へ、さうして僕を許してくれたまへ。僕は今すぐと源吉君にさう云つて、さつきのことをすつかり取消しにするから。アヽ源吉君にはすまない。然しおうめさん、ほんたうに安心してくれたまへ。僕はご覽の通り、決してウソを吐かない男なんだから。

　娘、淋しい笑顔を見せる。

ア、嬉しい、僕を許してくれたね。おや何うかあつちへ行つて仕事をしてくれたまへ。見つかつて問題にされるとうるさいからね。人間が皆隱し合つてゐる世の中では、僕等もそんな氣兼をしない譯に行かないのだ。

　娘、立ち上つてつゝましく御辭儀をして入る。

何といふ眞純な女性だらう。今の社會は、あゝいふ神のやうな人間を乞食にしようとしてゐる。何といふ殘忍な社會だらう。……僕は腸が煮え返るやうだ。……それにしても、源吉君に一刻も早く取消しをしなければならない。早く戻つてくれば好いになア。アヽ僕としては近來の失敗をやつてしまつた。

　源吉、登場。先刻の浮かぬ顏は失せて、何となくソハ〳〵してゐる。伊丹、マゴマゴしながら近付いて、

源吉君、實は其の……君にだね……其の何んだ……僕は、大に其の……謝罪をしなければならないことになつたのだよ。

源吉　何んですえ、謝罪なんて、何を惡い事をしたつてんです。

伊丹　惡い事をした。確かにした。……さつき君に云つた一件ね、多美子孃との一件だ。あれは誠に濟まないが……取消しだ。

　源吉、險しい顏になる。

源吉　取消し！

伊丹　さうだ、誠に相濟まんが取消しだ。實はアレは僕の間違ひだつた。

源吉　何の間違ひたつたんです。

伊丹　いや、何、その……何だ……多美子孃の父をだね、僕にだね、取り違へてだね……。

源吉　何ですつて

　源吉、青くなつて伊丹に迫る。伊丹、タジタジとアト退りして、

伊丹　いや、それは間違ひだ、いや謔だ、多美子孃の父云々に間違ひ……ではない謔で……それは今僕がつい云ひ損つたので、實は多美子孃についてさつき云つたことは、すべて確かで、決して間違ひではないのだ……。

源吉　何を云つてゐるんです。はつきりと云つてご覽なさい、はつきり。

伊丹　はつきりいふよ。はつきりと云へば卽ちあの僕の家で會見云々は一先づ取消し……。

源吉　おい〳〵伊丹先生、あんたはあつしを玩弄にする氣だね。

伊丹　ど、何うして、決してそんなことはない。すべて眞劍だ。さつきも眞劍なら、今も眞劍だ。

源吉　人を馬鹿にしちや困りますぜ。その眞劍が何うして取消しなんです。

伊丹　マア　さう　興奮しないで聽いてくれたま

へ。實は今、君のおうめさんに逢つたんだ。

源吉　おうめッ子が何うしたつてんです。そんなことは疾うにおめえさんにこてえてあるぢやありませんか。それだからあつしは考へちやつたのに、おめえさんが何のかの云つてあつしを納得させたんぢやありやせんか。あつしは今だつておうめッ子のことを考へたんだ。けどおめえさんのいふのも理窟だし、あつしだつて凡夫の人間だから、うめえ話には一やまかけて見てえ氣になるぢやありませんか。こいつはおめえさんのいふ通り命がけの仕事だが、そこが又面白えとから思つて、すつかり腹を据ゑてしまつたんだ。何んでえ、それを來て見りや、今のは取消しだ。たア何のこつたい。人を馬鹿にするにも程があら。

伊丹　君のいふことは皆道理だ。尤も千萬だ。僕は一言ない。然しだ、おうめさんに逢つて、あの純な姿を見てだね……純な心持を聽いて見るとだね、僕も人間だ、もうすつかり參つてしまつたんだ。僕は君に惡い事を云つたとつく〴〵後悔したんだ。何うか君、許してくれたまへ。

源吉　おめえさんて人は隨分箆棒なことを勝手にペラ〳〵しやべる人だね。だからあつしはさつきそんな「惡い事」はよしだと云つた時に、おめえさんは何んと云ひなすつた。「惡い事」つてえのはあの手合の嘘のつき合ひのことだ。此方のすることは眞劍の「善い事」だつて云ひなすつたぢやねえか。だからあつしはほんとに命がけになつたんですぜ。命がけになれば、「おうめッ子の一人や二人が何んだ。」つて氣になるんだ。それを今になつておうめッ子が可哀想だなんて、人を箆棒な、煮たりさましたり、人を賣れ殘りのおでんだと思つてやがら。あつしはもう腹をきめちやつたからね、邪が非でも明日はおめえさん所へ出掛けて行くからさう思つてなせえ。萬が一約束を違えたらたゞは置かねえから。あつしはぐづ〳〵文句をいふのは嫌えな人間なんだ、すぐと片なつけつちやふからね。ヘン、馬鹿にしてやがら。

伊丹　そ、それは困る。源吉君、僕はもう全く降服してゐるぢやないか。穴があれば入りたいと思つてゐるのだ。然し君、おうめさんのあの心持を知つてゐながらそれを捨てるなんて、そんな不人情な眞似が……。

源吉　おい〳〵先生、頼みますぜ。今のさつき、おめえさんは何んと云つたい。あつしがおうめッ子にそんな不人情は出來ねえていつたらあんたは、人情なんて小さなことだ、俺達の仕事は人情以上の大きい仕事だ、だから命懸けなんだつて云つたぢやねえか。間違するにも程があらう。

伊丹　それは云つたさ。然しだよ、それは程度の問題で……いや程度ではない……本質的に場合が違ふよ。人情といつても一概に……尤も普通人情と稱するものは極めて愚劣な、卑怯未練な……。

源吉　何をぐづ〳〵云つてやがるんで。あつしは何うしても行きますよ。誰れが何んと云つても、一旦命がけの腹を据ゑちやつたんだ、おめえさんが泣いたつて怒つたつて、そんなことは此方の知つたことぢやねえんだ

伊丹　これ源吉君、僕がこれほどまでに云つても、君は許しても聽いてもくれないのか。情ない男だ。僕の胸を割つて見せたら、君はそんな亂暴なことをいつたのを屹度後悔するよ。全くおうめさんの涙が、僕を改宗させた心理を、僕は口では說明が出來ない。然しそれは全く事實だから仕方がない。僕は生來嘘のいへない男だといふことは君も知つてるぢやないか。明日は見合してくれたまへ。ね

君、拜む。僕は未だ嘗て、人に手を合はして物を頼んだことなんかない人間だが、今日だけは全く節を屈して君に嘆願する。

源吉　堪らなく屈辱を感じたやうな顔になつて　ハヽヽア讀めたぞ。おめえさんは何んだな、こゝのお孃さんに頼まれて、此のあつしをお孃さんの慰み物にさせようとしたんだナ。それでおうめツ子に泣かれたんで、氣が弱くなつて、急に取消しだなんて云ひなさるんだらう。さうだ〳〵、それに違えねえ。此頃の華族や金持のお孃さんにアそんなのが澤山あると聽いちやゐたが、自分にお鉢が廻つて來ると、此方に自惚れがあるんで、つい氣がつかずに乘せられちやつたんだ。忌め〳〵しい。何うしてくれよう。俺生れてこんな忌め〳〵しい目に逢つたとはねえ、おい先生、おめえさんは矢張り見かけ通りの野幇間だつたんだね。さうだらう。でなけれア大の男が、ブルと同じに、華族のお剩りをいたゞいて、クルクルお廻りなんかしてゐられる理窟はねえや。

伊丹　やい源吉、僕は此度ばかりは自分が失敗つたと思ふから、下から出てあやまり閉口してゐれば好い氣になりやがつて、何を云ひ出すのだ。僕等の心中が貴樣達のやうな無自覺なけだものにわかつてたまるものか。俺達は、貴樣等のやうなけだものに人間並の魂と生活を授けてやらうと思つて、こんなに苦しみ悶えてゐるのだ。

源吉　大きなことをぬかすない。小遣錢まで人から授かつてゐる人間が、人にものを授けるが聞いて呆れらア。何方がけだものだか、裏へ行つてブルに聽いて來るが好いや。

伊丹　馬鹿野郎、默れ。無智蒙昧のけだものでなければ唯は置かねえんだ。

源吉　何だと、只は置かねえたア此方がいふことだ　人を華族の馬鹿娘の慰み物にしようとしやがつて……。

伊丹　（堪へかねて）默れといふに、まだそれを云ふか。

と小さな身體を慄はせて源吉に武者ぶりつく。源吉は、大きく拳固で橫に振ふと、伊丹の身體は二三間ケシ飛んで、地上にへたばる。

源吉　ざまア見やがれ。

伊丹は倒れながら頭だけ擡げて苦しい聲で、

伊丹　貴樣は、自分達の救ひの神を拋げ飛ばして威張つてゐるんだ。情ないけだものだ。

源吉　まだけだものだとぬかすか。拋げ飛ばされて足りなきア蹴飛ばしてやるぞ。

源吉、馳け寄つて蹴飛ばさうとすると、

早見子爵（蔭で）コラ源吉、鎭まれツ。

源吉、ハツと立止る。早見子爵と多美子孃と霞町の若樣とが執事を從へて登場。執事は源吉を抑へる。

子爵　源吉、何でそんな手荒い眞似をする。伊丹君も源吉なんぞを相手にして、一體何うしたんだ。

伊丹　（痛さうに立ち上つてヒヨロ〳〵しながら）いや何んでもないんです。私が一寸惡口を利いたんで……いや一寸惡かつたんです。

子爵　源吉、伊丹君が惡口をきいた位で、そんな亂暴をするといふ法があるか。謝罪しなさい、あやまりなさい、伊丹先生に。

源吉　あつしは謝ることなんかないんです　向うが散ざばら人を馬鹿にして、果句にあつしに武者振りついて來たから張り倒したんでさア。

子爵　馬鹿にしたとは一體何をしたのだ。

伊丹　いや、そは何でもないんです、つまら

ないことなんです。

源吉　何がつまらないことなんだ。此方は命がけの腹をきめたんだ。

伊丹　さアそこだよ。だから僕が悪いと云つてるぢやないか。

源吉　ウッフ。おめえさん、蔭ぢや豪さうな口を利いてゐるが、そんなに殿様がおつかねえのかい。

伊丹　怖くはないさ。いや怖いさ、場合によつてはだ。然しそんなことは何うでも好い。マア和解しよう。

源吉　だから呆れた幇間だつてんだ。一生涯譃をついたことは只の一遍もないなんて大きな口をきいて、今のそのざまは、それア何です、あつしが見たとこぢや譃つきそつくりだがネ、おめえさんの國ぢやそれを正直者てますかい。

伊丹　（決心して）ム、源吉君、僕は譃ばかりは吐きたくない。もう決心した。（子爵に）閣下、僕は、實をいふと、先刻源吉君と相談して、閣下の尊嚴を汚し、且つ確かに早見家の秩序を破壞する仕事を企てたんです。

子爵は驚いて只眼を睜つて伊丹を見る。

それはです、僕は平生から、そこにおいでの多美子嬢が、貴族生活の虚僞と彼等の頽廢した道徳とに良心の苦惱を感じて、遂にそれが天眞の愛を求める憧憬となつたことを感知しましたんで、その、令嬢のローマンスのヒーローであるに違ひないところの源吉君に、明日僕のアトリエで多美子嬢と會見することをすゝめて、その手筈をきめたのです。

子爵　（微に慄へた聲で）そ、それは何の意味でだ。

伊丹　つまり眞純な愛の成立の爲めにです。

子爵　（怒りに慄へた聲で）何だ、それは媾曳ではないか。

伊丹　如何にも、古い言葉でいふと媾曳です。

子爵　新しい言葉で云つたつて媾曳だ。實に怪しからん。（多美子に）これ多美子、お前はそれを承知したのか。

多美子　（細い慄へ聲で）いゝえ、ちつとも……明日は伊丹さんが私の肖像を描く日なんですから私は行くことにしてゐたんです。

子爵　さうだらう。二人とも何といふ奴等だ。殊に伊丹は忘恩も甚しい。飼犬に手を噛まれるとは此の事だ。

源吉　それ先生、殿様が飼犬だつて云つてるぢやねえか。

伊丹　馬鹿は馬鹿相應のことをいふものだ。僕は今日限り、早見家の保護を拒絶する。

子爵　誰れが貴様のやうな無法者を保護するか。もう二人とも一刻も邸内に置くことはならない。今すぐと出て行け。（執事に）この二人を門の外へ追ひ出せ。いふことをきかなかつたら外のものを呼んで、皆で叩き出してしまへ。

多美子、何かいひかけようとして子爵に睨まれて黙る、青い顔で慄へゐる。

源吉　誰れがこんな邸にゐるもんか。玩弄に困つて人間を玩弄にしようとしてやがら。

伊丹　これ源吉君、それだけは全く誤解なんだ。多美子嬢を不幸な女性だと思つてくれたまへ。

源吉　往生際の悪い先生だなア、おめえさんに罪はねえんだ。おめえさんはたゞお幇間を叩いただけなんだ。

伊丹　又幇間とぬかしたな、ソヌけだもの！

伊丹、源吉に殴りかゝる。源吉、傍の[illegible]架を振り上げて伊丹に向ふ。執事、驚いて、源吉を後ろから押へて、源吉の頸を締めつける。源吉、苦しがる。

伊丹、驚いて、執事の足を持つて執事を引

倒す。

執事　これ伊丹先生、何をしなさる。

役町の若様　伊丹君、亂暴をするな。

役町の若様、執事を助けようとして伊丹に組みついて締めつける。こんどは源吉が驚いて、伊丹を助けようとして役町の若樣に組みつく。

草見子爵　これは亂暴な奴等だ。

子爵、堪りかねて、若樣を押へてゐる源吉に組みつく。

自由になつた伊丹が、子爵に組みつく。

五人輪になつて組む。

子爵令孃多美子と、その時蔭から出て來た草取娘おうめとが、雙方から互に知らずに走り寄つてブツかり合ふ。

混亂の間に（幕）

◇

玄關の傳統的貴族的威容に對して、平民的、個人的態度を示してゐるのは格子戸である。玄關が、平民の訴を聽く王公の態度を示してゐるに對し、格子戸は、平民的個人主義に閉ぢ籠つてゐる。玄關は百姓一揆が押し寄せても、優にそれに應對する構造を持つてゐるが、格子戸は、一人が身を横にして辛うじて這入れるか這入れないかの構造で、如何にも誰をも迎へる用のないやうな態度である。

格子戸は、商業主義が平民の間に普及してからの産物で、近代的個人主義の先驅を爲した入口である。重農時代には格子戸はなかつた。今でも農家には格子戸はない。格子戸は、私有財産的精神が、各人の生活に喰ひ入つてから出來たので、所謂町人生活の玄關である。

格子戸は私有財産制と個人主義生活とからの産物であるが、その私有の觀念は甚だ原始的のそれで、所謂資本的經濟制度にまで進んでゐないことを示してゐる。即ちそれは資本主義前の入口である。その時代の商人は、個人商店である。個人商店で儲けた商人が、その儲けた私有財産を、運び込むのが、あの格子戸の家なのである。

だから、原始的私有財産制の鞏固な地方ほど格子戸は、愈々堅固で狹苦しい。大阪の格子戸は、東京の格子戸よりも頑丈で、入口の幅が一尺ほどしか開かないやうに出來てゐるのはその譯である。

玄關は、「平民共能く參つた。」と大手を擴げた貴族である。格子戸は、「インエ私の懷には何も入つて居やしません。」と縮こまつてゐる町人である。

玄關の傳統に對して反逆を企て、さりとて格子戸の町人主義は唾棄するといふ態度は、待合式玄關である。それは一種のセセッションである。傳統上の約束を態と無視して、恰好や寸法や線やを勝手次第にセセルのが待合式玄關の特徴である。

而もセセッションは、畢竟文化に飽滿した結果の、あゝでもないかうでもないといふ貴族的アナーキズムに過ぎない。待合式玄關も、それと同じで貴族的根柢に立つたセセッションである。大に堂々としながら、何處かに傳統を愚にした脫線を示してゐるのである。一寸西園寺公爵といふ恰好である。

（「家」より）

エチル・ガソリン（一幕）

人物

栗地岩也　自動車ガソリン株式會社社長
民夫　理學士、栗地の甥
都喜子　栗地の娘
野々道　失業者、栗地の親類、栗地家の食客
久仁守　天下泰平傳長
村木　栗地家執事
其他書生若者等

栗地家應接の間。大きい掛時計。民夫、長椅子に寢ころび、都喜子、椅子に倚り卓子に凭れる。

民夫　うちの叔父さんほど頑迷不戻の生物はないね。つうちやんのおとうさんだけれど。

都喜子　同感よ。全く非藝術的ね。

民夫　非藝術的はよかつたね。……人眞似をしてわかりもしない油繪なんか、ロンドンや巴里でウンと買ひ入れて來て、何うする氣かと思つたら、これが一番安全な投資法だ、利子は生まんが十年も經てば何倍になる、なんて勘定してゐるんだから助からない。……そんなことは何うでもいゝが、僕の財産を僕の自由にさせないのは怪しからんよ。僕のおやぢの死ぬ時に僕の後見を頼んだのだから頑張つてゐるのもいゝが、僕ももう子供ぢやないんだからね

都喜子　ほんたうにね、若い者に餘計な財産なんか持たせると碌なことはしないから、なんてあなたを無教育の不良少年扱ひにして、私腹がたつわ。

民夫　なあに、いつぞやの失敗の穴埋めに大分痛手を負つてゐるんで、そんなことをいつてゐるんだよ。

都喜子　私達が結婚したら渡すつていふんでせう。

民夫　だから出來るだけ結婚を遲らかさうとしてゐるのだよ、柄になく、年が惡いの月がわるいのつていふから、迷信だつて云へば、世間一般の信仰は逆はぬがいゝなんて、世間なんて眼中に置きもしない癖に、自分の勝手ぢやそんなことをいふんだ。馬鹿にしてら。

都喜子　事業とお金儲けのことばかりいつてゐて、愛なんてものはこれつぽつちもわからないのね。

民夫　さうだ。愛なんて染料のことと思つてゐるんだらう。

都喜子　ホヽヽ　こんな時におかあさんがゐて下すつたらね。

民夫　此頃の容態ぢや、叔母さんが生きてゐたつて齒がたつまいよ。世界がガソリンと自動車とから成り立つてゐると考へてゐるんだからね。僕が自動車でつうちやんがガソリンでないことを遺憾とするつて調子なんだ。

都喜子　ほんたうにそんなね。でも私達二人は自動車とガソリンの間柄ぢやないの。

民夫　ウツフ。そんなもんだね（立ち上つて都喜子に接吻しようとする）

野々道登場。

野々道君か。いやにすうつと入つて來ておどかしてしまふね。相變らず影がうすいぢやな

いか。又小道を落したのかい。
野々道　世界が灰色に見えます、灰色に。
民夫　今日は曇つてゐるからね。
都喜子　私あなたの姿を見ると悲しくなるわ。
野々道　済みません。
民夫　アッハッハ、あやまらんでもいゝよ君。都喜子の悲しがるのは一寸外に事情があるんだからね。
野々道　何ういふ事情です。
民夫　なあに、僕と結婚するのをお父さんが無暗に伸すんでね。
都喜子　うそよ、でも……。
民夫　ほんとだわ、だらう。
野々道　粟地氏は、餘りに自分の荒々しい魂を信じきつてゐる。
民夫　何の事たい。相變らずわからんね。
野々道　人々は今、灼熱の太陽の下に、焼けただれた沙漠をさまよひながら、『たゞ一滴の水を。』つて、『たゞ一滴の水を。』つて、あへぎあへぎ、さういつて、あへぎ〳〵『たゞ一滴の水……』
都喜子　あゝいや、野々道さん、そんな氣味のわるい聲を出すのよして頂戴。
民夫　アッハッハ、全くぞつとさせるね。でそれが叔父の荒々しい魂とどういふ關係なのかね。
野々道　それを、それを、粟地氏は何んだあやつ等は、水が欲しいのか、水が欲しければ、それ、飲めッ。つてさういつて、大きな水晶の水盤に、波々と溢れる水を、溢れる水を、自分だけが、自分だけが、ガブガブガブガブ……。
都喜子　ホッホッホ……
民夫　アッハッハ。それが荒々しい魂かい。
野々道　さうです。さうです。ご覧なさい、羊の群に飛び込んだ獅子のやうに、舌なめずりをして四方をねめ廻してゐる粟地氏の姿を、雄姿を……。
民夫　あんまり雄姿でもないね。喰へたら離すもんかつて、あの頤の恰好だけは一寸偉觀だがね。
野々道　恐ろしいです。全く恐ろしいです。
都喜子　何がそんなに恐ろしいの？
野々道　今度會社で賣り出したあのエチル・ガソリンといふのは、一寸そのガスを嗅いでも、氣違ひになるといふぢやないですか。そんなものを、いくら金が儲かるといつたつて、それを製造するために、多くの人間を殺して、それを使ふ爲めに又多くの人を殺すのです。自動車なんて一體『惡魔の車』といはれてゐます。今度は更に『惡魔の油』で世の中を塗りつぶすのです。それを誰れも、何うすることも出来ないのです。人々はたゞ……。
民夫　「あへぎ〳〵」かい、もういゝにしよう。
都喜子　ほんたうに私、隨分困つてゐるわ。此のごろ新聞なんかが、そのことを大袈裟に書きたてるんで、私まで肩身が狭いわ　ねえ民夫さん、エチル・ガソリンてほんたうにそんなに恐ろしいものなの？
民夫　それは恐ろしいさ。何しろ、そのガソリンに混ぜてあるテトラ・エチル・レッドといふのは、一寸指の先についても、忽ち全身に毒が廻つて、すぐに氣違ひのやうになつて死んでしまふにきまつてゐるんだからね。
都喜子　そんな恐ろしいものを使はないだつていゝぢやないの
民夫　それがさ、それを混ぜたガソリンは普通のガソリンから見ると八パーセントも能率が増して、エンヂンの爲めにもノックをなくして大變にいゝし、自動車が皆それを使へば大變國益になるといふ話さ。
野々道　國益とは惡魔の喜びを増すといふことです。その喜びを増す爲めに、あのエチル・

ガソリンを製造するうちの會社の職工たちは、氣違ひになつて澤山死んで行きます。そしてその子達は生れながらに、呪はれた運命の犧牲なのです。

都喜子　民夫さん、あなた、そんなけんのんな工場で働いてずゐぶんあぶなかないの？

民夫　いや、僕達はちやんと嚴重な安全裝置の施してある所にしか居ないから大丈夫さ。職工達はさう行かんがね。十分安全裝置はしてあるが、職工は全くガスを嗅がない譯には行かないからね、何うしてもやられることは免れんのさ。考へて見れば氣の毒なものだがね。

野々道　考へてはいけません。いんや、考へなければいけません。

民夫　あの叔父と來たら、斷じて考へないね。頭の構造が違ふんだらうぜ。

野々道　灼熱の太陽はすべてをとろかします。それが粟地氏の生命です。『羊共の血潮が何んだ。流れるものはいくらでも流せ。』さういつてゐるのです。……、然しです、灼熱の太陽も夕が來れば沒します。

民夫　ところが中々沒しないから困るんだよ。

野々道　沒します。

都喜子　沒しなくつてもいゝのよ。でも、もう少し人間味が出て呉れないと、ほんたうに私達は灼熱の太陽で燒け死んでしまひさうだわ。

民夫　ほんたうに、何うかして、あの叔父を改宗させる方法はないものかね。

野々道　たゞ死あるのみです。

民夫　死にやなほるだらうがね。そいつを待つてたらいつの事かわからない。

野々道　死を想はせるのです。

民夫　死を想はせる？　何うして想はせる？　中々そんな後生氣があるんぢやないからね。

野々道　何かの機緣で、死を想ふ時が來ます。來れば救はれます。

民夫　來さうもないて。

野々道　最後には必ず來ます。

民夫　アッハッハ、最後には來るにきまつてる。ところが最後が最初のうちに來てくれないと僕等は助かりつこなしだ。

野々道　最後は最初に來ます。最後はいつ來ても最初に來たのです。

野々道退場。

民夫　アッハッハ、愈々ほん物だね。あれぢや慢性失業者より外に一寸適任はないよ。『人々はあへぎ〳〵……』

都喜子　もうよして頂戴。そんな氣味の惡い聲……。

民夫　あゝあ。たゞ死あるのみか。こつちの方がお先に參りさうだ。

都喜子　『死を想はせる』？　ねえ民夫さん、おとうさんが死の事を想ふなんて、そんな時が來るでせうか。

民夫　さあ、灼熱の太陽の來るのを待つてゐるやうなものだらうよ。

都喜子　おとうさんに死のことを想はせる工夫はないかしらん。

民夫　……。

都喜子　……。

民夫　あゝうまい事を考へついたぞ。ねえつうちやん、かうするんだ。おとうさんに、あのテトラ・エチルを嗅がせるんだ。

都喜子　（ギョッとして）エッ……。

民夫　そんなにびつくりしなくつてもいゝんだよ。眞實にかゞせたまるものかね。かうするんだ。なんでもない普通のガソリンを香水の壜に入れて、この卓子の上に置いとくんだよ。叔父さんが來ると、それを香水だと思つて嗅ぐに違ひないだらう。さうしたら、後

からあれはエチルだつたといつてやるんだ。すると叔父さん驚いて、こいつはダメだと觀念するだらう。「死を想ふ」に違ひないやね。そこで多少の後生氣も出るといふものさ。あれでもやつぱり人間は人間なんだからね。

都喜子　さうね。それはうまい工夫だわ。でもあとでいたづらと知つたらどんなに怒るかも知れないわ。それがこはいわ。そして却つて先よりも頑固になつたりしちや大變ぢやない？

民夫　なあに大丈夫だ。そこは此方がうまくやつて、とにかく一旦命をないものと思つたといふ心持をつかまへて人生の無常を感じさせるやう舵を取るんだ。さうして私達も早く結婚が出來て、財産もすつかり渡して貰へる……うまいぞ。

都喜子　うまく行つて？　あんたあんまり亂暴しちやいやよ。

民夫　亂暴？　何も亂暴なことはありやしない。たゞのガソリンを嗅がせるばかりぢやないか。

都喜子　さうね。それで改宗してくれるとほんたうに助かるわね。

民夫　ぢや早速實行だ。もうお父さん歸つて來る時分だらう。

二人とも退場。民夫すぐ登場。

(卓子の上に壜を置く)かうして置けば、香水だと思つて叔父さん、一寸かうやつて嗅ぐ。よし〳〵。

退場。栗地登場。

栗地　(新聞を見ながら)新聞といふ奴は始末に終へんもんだ。まだゆたぶり足りないと思やがつて、「又々エチル・ガソリン中毒」なんて、仰々しく書き立て居るわい。煩くてどうもならん。いつそ、此の新聞社をそつくり買ひつぶしてやるかな。外の奴は、大概吠えなくなつとるのに、こやつばかりはいやにしつこい。そんな事のために、此の國家的大事業がやめられるか。一週に一人や二人の犧牲位が何んだ。戰爭をすれば一度に何萬人も犧牲になるんぢや。

椅子により、新聞を卓子の上に投げつける。壜が倒れる。栗地、壜を取り上げて眺める。栓をぬいて頻りに嗅ぐ。

(壜を卓子の上に置いて)何んだ、誰れがこんなものをこゝへ置いたのだ。ガソリンの臭ひがしをる。

村木登場。

村木　(名刺二枚を差出し)只今からいふ方か見えて、御多忙中恐縮ですが、一寸御面會をといふことで。

栗地　志摩男爵の紹介ぢやな　こゝへ。(壜を村木に渡して)こんなものそつちへ持つて行け。

村木退場。

志摩の紹介ぢや何うせ碌なことぢや無からう。又寄附か。

久仁、村木の案内で登場。村木退場

栗地　サア何うかお掛け。

久仁　初めまして。御多忙中とは存じますが、一寸拜顏の上でないと申しあげられん件なので。(椅子にかける)

栗地　(他の一枚の名刺を見ながら)あなたが此の「天下泰平團」とかいふものの團長といふ譯かね。して御用の筋は。

久仁　早速申しあげますが、實は先頃から、貴下の會社で御發賣の、その、あのエチ……エチル・アルコールでなし、さやう、エチル・ガソリンで　かな、あのガソリンについて、世間に大分物議を醸して居るのは御承知のことと存ずるが、それについて貴下は一體どう御

考へになつて居られるか、それを伺ひたいと存じて參上いたした譯です。

栗地　ハヽア、例によつてエチル・ガソリンの件かね。いかにも、何かそこらで云つとるものもあるやうだが、此方は一向何とも思つては居らん。あれは元來、私共が、個人の利益を計つて始めた事業でも何でもない。國家經濟の上で非常な利益のあることで、今假りに日本全國のガソリン消費高を年十萬ガロンとすれば、エチル・ガソリンを使へば約一萬ガロンは浮いて來る。たいしたものぢや。今日は世界的に物資が缺乏して、日に增し物價が上りよる時代で、萬事に節約が第一義なんぢや。我々の事業は、消費經濟に於て、この世界的の必要に應じようとしてゐる譯で、決して個人の利益問題ではないのです。從つて多少の犧牲は已むを得んと思つとる。

久仁　成る程、御說一々御尤のやうではありますが、然し事業がいかに有益であつても、國民の生命も亦大切である。さやうな有毒なものを製造する爲めに、我々同胞の、一人が半分でも貴重の生命を失ふといふことは、よく考慮せんければなるまいと思ふ。それについて貴下の會社では、十分犧牲者を出さないやうな設備が整つてゐるか何うかといふことも伺ひたい。

栗地　無論、今日の科學の知識で及ぶ限り十分に整へてあるつもりぢや。

久仁　然し、新聞に傳ふるところでは、毎日のやうに悲慘な發狂者を出してゐるが、それは一體何うしたものですか。

栗地　それは君、設備は十分に整へてあるが、職工等はいくら嚴しく云つて置いても、元來無知で、怖いもの知らずといはうか、どうも規則通りを守らんで仕方がない。で時々やられる。困つたものと思つとる。

久仁　然し、あれを研究した博士達は、いかなる設備をしても、あの藥の害毒を全然防ぐことは不可能だといつてゐるではないですか。

栗地　それは學者といふものはいろ／＼にいふ。素人にはわからんと思つてな。アメリカ邊でも會社は皆それ／＼有力な學者に研究させて居るが、そんな風にいつてゐるものはありやせん。

久仁　アメリカなどでは、研究所なんてものも、皆會社が金を出してやらしてゐるので、惡い結果は發表せんのぢやと聽いてゐます。

栗地　いや歷とした大學の研究室に皆それ／＼研究を依賴してゐる。

久仁　アメリカの大學などは皆金持の金でやつてゐるので、當てにならんことに變りはない。アメリカの話は別として、現に日本の職工があのやうに悲慘な最期をとげてゐる。もう何うしても設備でそれを防ぐ譯に行かんとなつたら、おやめになるおつもりですかな。

栗地　いや、そこまでは考へて居りません。まだ學問上さうとも定つて居らん。

久仁　では、とにかく學理上未定の問題として、然らば、それまでに犧牲にされる職工等の爲めには十分の手當等を支給して居られるでせうな。又遺族の生活等について會社は十分の責任を持つて居られることと存ずるが……。

栗地　それは十分承知してゐる。

久仁　ところが、遺族等の話では、何分會社の方が冷淡で、遺族どもは、早速路頭に迷はにやならんといふやうなことですが、その邊は何ういふ風になつて居りますか。

栗地　それは、遺族等はあゝしてやればかうしろで、決して滿足するものではない、一體、職工が犧牲となつたからといつて、その遺族等が一生遊んで暮らさうと思ふのが間違ひな

んぢや。

久仁　では何ういふ風にそれを……。

栗地　一體君は、何の用事で見えたのかね。私も忙しい身體だから、用向きだけ聽かして貰つて失禮したいと思つとるが。

久仁　用向きは即ち只今申してゐることです。私共は、天下國家の爲めに、不正を懲し、曲れるを直くし、弱者を助け、驕る者を戒め、又猥りに危險の言を弄して民心を擾亂するものを討伐し、國家を泰山の安きに置かんとして日夜努力奮鬪してゐるものである。

栗地　それは御苦勞なことぢや。

久仁　であなたの會社が、口實は何うにでもつくが、一個の營利會社の癖に、わが同胞の尊き生命を犧牲として憚らんといふ態度について、甚だ遺憾に存じて參つたやうな次第である。我々は、今日富豪の輩が、自己の利益の爲めに、民衆の生活を虐げ、己れ獨り、華美豪奢を競うて憚らぬことを衷心から惡んでやまぬものである。今日の思想の惡化、人心の險惡は全く、さういふ徒輩の招いた罪だと思つてゐます。

栗地　それはよく解つてゐる。ですべてさういふ用件は、執事の村木、それ、今君を案内したあの男に全部委任してあるのだから、行つて話してくれたまへ。

久仁　いや我輩は貴下に申分があるのだ。

栗地　申分とは何だ。僕は君等に申分があるなどといはれる覺えはない。(氣を代へて)然しまあい、、君の精神はよく解つた。とにかくあつちへ行つて村木に談判してくれたまへ。(意味ありげに)決して惡いやうにはせん。

久仁　(ムッとして)これはけしからん。貴下は我輩を世間にありふれたゆすりかたりの類と思つてゐるな。失敬千萬な。我々は憚りながら國士を以て任じてゐる人間だ。自分は貧苦と闘ひながら、同胞の爲めに日夜東奔西走してゐるのだ。君の會社の横暴は、新聞にも唱はれてゐる通り、志士仁人の默視するに忍びないことだから、我輩……。

栗地　よく解つた。解つとる。だからあちらへ行つて話をしてくれたまへといふのぢやないか。な、よいぢやらう。

久仁　(憤然立ち上つて)己れッ、何處までも人を物貰ひにしてけつかる。よし、道理をいつてわからんければかうして呉れる。(懷に手を入れる)

栗地　(ポケットからピストルを出して)馬鹿ものッ、何をする。貴樣のやうなものは毎日何人でも來る。俺が應對しただけでも名譽だと思つて退散しろ。(ピストルを向けながら、隅へ行つて相圖のベルを鳴らす)

村木、いろ／＼の獲物を携へた若者數人と登場。

栗地　此の男を連れて行け。手荒いことをするなよ。村木、お前そちらで鄭重に話をきいてあげるのだ。

久仁　(退きながら)まだそんなことを吐かすか。此の酬は俺がせんでも天がする。(ガップと卓子の上に唾を吐く。男それを拭く。)

栗地を殘して一同退場。

栗地　(ピストルをかくしに收めて、ぐつたりと椅子に)「濱の眞砂はつきるとも」だ。困つた奴等だ。が然し、今のは餘り智慧がなさ過ぎて寧ろ氣の毒の方だ。始末に困るのは職工どもだ。

野々道登場。

野々道　今の騷ぎは何でしたか、また例のでしたか。

栗地　さうだ、全く飯の蠅だ。追つても追つても集りよる。

野々道　死んだ親父があなたの御厄介になり、私がまた御厄介になり……。

栗地　何を又、突然變なことをいひ出すのだ。君のおやぢさんには僕の方が世話を燒かしたんだと、いつもいつてゐるぢやないか。

野々道　おやぢはあなたを困らしてばかりゐました。

栗地　親類の間柄では、そんなことは當り前なんだ。わしは何とも思つちやをらんよ。寧ろ感謝してゐる。よくやかましいことをいつてわしを叱りよつた。君もちとその筋を引いてゐるぞ。

野々道　すみません、親の子です。

栗地　アッハッハ。君にもいゝ加減感謝してゐる。がもうちつと御手柔かに願ひたいね。

野々道　何うぞ栗地さん、お考へ下さい。此度の事業だけは、お考へ下さい。

栗地　又始つたね。もう考へに考へぬいてしまつた。此の上考へることは販路擴張だけだ。

野々道　でも……でも……あの職工達のことを思ふと、栗地さん……あの職工達の妻子のことを思ふと、栗地さん……あの人達はたゞ御飯がたべたいまでに、自分を埋める穴を掘りに、毎日々々あの地獄よりも恐ろしい工場に入つて行きます。それを見送る細君達は、今日はうちの夫は無事で歸るか、今日は擔架で歸つてきやしまいか、さう思つて、死の世界へ旅立つ夫を送り出す心持で、細君達は、夫を死の世界へ……栗地さん……。

栗地　(ぞく／＼するやうに身をふるはして、けれども輕い調子で)その變な「栗地さん」だけぬきにして貰ひたいね。

野々道　今も、先達死んだ職工の細君に會つたら……。

栗地　餘計なものに會つたもんだ。君は餘り外に出ない方がいゝよ、まだ調子が少し惡いんだからね。

野々道　ありがたう。その細君にあつたら、泣きながら、亭主の氣の狂つた話をしました。……夕御飯をたべてゐたら、いきなり、茶碗を抛り出して、怒鳴り出しました。(身振りをしながら、急な調子の大きな聲で)ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ／＼／＼ドシン。ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ／＼／＼ドシン。ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ／＼／＼ドシン。

栗地　(驚いて立ち上つて)おい／＼、何うした、落ちついて／＼。

野々道　(又前の調子で)ヂャッキ、ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ／＼／＼ドシン。ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ／＼さういひながら、から飛び上つて、ガラ／＼ガラドシン、から、尻餅をついたかと思ふと、舌をかみ切つて死んでゐました。(尻餅をついて、舌を出して首をたれる)

栗地　(身慄ひして)おい君、もうやめてくれたまへ。今日はわしは朝から氣分のわるい所にいろ／＼な奴に舞ひ込まれて、こつちの頭もあまり變でないこともないのだ。あの、窓から飛び下りた職工の妻が、新聞屋のとつた亭主の慘死した現場の寫眞など持ち込みをつて、胸をわるくした。(野々道の方を見ると依然として首をダラリと垂れて死んだ眞似をしてゐる)おい／＼、いつまでそんな眞似してゐるんだ。叶はんな。(ベルを押す)

(書生登場。)

野々道を向うへつれて行つてくれ、少し寢かした方がいゝだらう。

書生　又お代りでございますか。(野々道を抱き起しながら)此度のはいやにグニャ／＼してゐる。

野々道　(抱かれて步きながら)そこに道があります、栗地さん……あなたの行く道があり

ます。栗地さん……その道には、眞赤な血が……血が……。

野々道ぶつ〳〵いひながら書生に抱かれて退場。

栗地 （身慄ひして）……エーッ、我れながら馬鹿らしい。何事だッ。

民夫登場。

（いきなり）民夫、野々道を急に病院に入れるやうに村木にさういつてくれ。叶はん。

民夫 だしぬけに、何うしたんです。

栗地 何うもしやせん。があれはもう大分わるい。あゝして置いては、何んなことをせんとも限らん。一刻も早く入院させるがいゝ。今日のうちに入れてしまへ。

民夫 おやさうしませう。（きよろ〳〵卓子の上を見て）訝しいな。こゝにもないぞ。

栗地 何を探してゐるんだ。

民夫 いや一寸その大事のものを……こゝらに壜が見えませんでしたか。

栗地 うん、有つたが、さいぜん村木に渡してやつた。何の壜だ、あれは。

民夫 あれはエチル・ガソリンの大變エチルの強い奴です。

栗地 （ギョッとして）……。

民夫 研究所へ持つて行くつもりで、何處かへ置き忘れたんで探してゐるんです。

栗地 （慌てて）エチル……、何んでそんなものをこゝへ置いたのだ。

民夫 いや、そこへ置いたつもりぢやないんですが……何處へ置いたか全く記憶がないんです。何にしてもあれを一寸嗅ぎでもしたら、正確に五十五分經つと氣違ひになるんです。非常に強い奴なんですからね。

栗地 さうして……さうして、やつぱり生命に關するか。

民夫 無論、間もなく死にます。村木がかがなければいゝが、何しろけんのんだ、早く行つて取り上げなくちや。

民夫退場。

栗地 サア飛んだことをしてしまつたぞ、これは。大分嗅いだでなア。正確に五十五分。（時計の方を見る）もうぢきだ。すぐと醫者を呼ばんければ。いや公證人の方がさきだ。この毒ばかりは、今の醫學では全く絶望だと、うちの研究所でも決定してしまつた。騷いでも仕方がない。（長椅子に倒れかゝつて）あゝ、俺もこれで最期か。チェー殘念。まだ事業は漸く手についたばかりだ。すべてはこれからといふ所で斃れるのはいかにも殘念だ。然しもう萬事休した。（立ち上つて）後の事を考へんければならん。辯護士を、公證人を。（よろけながら卓上の電話機に手をかける）待て、そのうちに氣が狂つてはかなはん。先づ遺言狀を書かんければ。（ペンを取つて書かうとする）字が書けん。もう毒が廻つたかしら。五十五分。（時計を見て）まだ早い。（書きかけて）手が慄へてちつとも書けん。（ペンを投げつけて立ち上つて）エヽ、何うにでもなれ。何だ。これが酬いか。アッハッハ。栗地岩也はちつとも降參せんぞ。おれの行く道は、アレキサンダー、ナポレオンの凱旋する道だ。血だと。血が何うした。刃に血ぬらずに勝利が獲られるかい。死ぬ奴は死ね。それが貴樣等の幸福なんだ。貴樣等の血が、英雄の勝利の冠に塗られるのを光榮だと思へ。死ね、死ね、死ね。片ツ端から死ね。その死骸の山の上に、勝利の旗は立てられるのだ。それが何うした。さあ、それが何うした……。

（讃美歌が聽える）

おくつきさびしく
ねむると見れど
あまつみくにへの

門出なりけり
ゆく手をぐらき
死出のやまぢも
主はともにまして
みちびきたまはん

粟地　(目がさめたやうに) さうだ、おれはもう死ぬのだ。‥‥かうしては居られない。(又坐つてペンをとる) どうしても書けん。民夫を呼んで後のことを命じよう。(時計を見て) おゝ、もうすぐだ。(ひよろ〳〵と立ち上つて、ベルを押す)

村木登場。

おい、すぐ都喜子を呼んでくれ。いや民夫ぢや。いんや、都喜子も呼ぶのだ。二人ともすぐ來いといへ。

村木　何うなされました。大分御顏の色が‥‥。

粟地　いや何うもせん、とにかく民夫にすぐ來るやうにいへ、都喜子にもだ。大至急だぞ。

村木退場。民夫、都喜子登場。

民夫　何か御用ですか。

粟地　これ民夫、お前とんだことをしてくれたな。

民夫　(都喜子と顏を見合して) ど、どうしたんです。

粟地　さつきのエチルをわしは散々に嗅いでしまつたのだ。

民夫　(飛び上つて) それは大變だ、醫者だ、醫者だ。

都喜子　(粟地に抱きついて) お父さん! 何うしませう。

粟地　騷ぐな〳〵。もう醫者なんぞ呼んでもだめだ。時間がない。氣が狂つてしまつては話が出來ん。民夫、後の事を賴みたいのだ。

民夫　確乎して下さい。叔父さん、いつ嗅いだんです。

粟地　もう大分前だ。六時になると丁度五十五分になるのだ。ぐづ〳〵してはゐられない。

民夫　お待ちなさい。かういふ時は、よく氣を落ちつけて、いろ〳〵の事を篤と考へなければいけません。第一人生といふものについてです。人間といふものは‥‥。

粟地　何をいつてゐるのだ。貴樣平生ぢきにあわてくさる癖に、今日に限つていやに悠々するな。早くせんか。ペンを持つて俺のいふことを書くんだ。もう公證人を呼んでゐる間がないから、おまへに書かせるんだ。あとですぐと公證人に遺言狀としてその通り執行させるのだぞ。サア書け、いふぞ。

民夫　まあ、お待ちなさい。言ふ前によく考へて下さい。遺書を死んでから訂正する事は出來ませんから‥‥。

粟地　何をぐづ〳〵いつてるんだ。さあ　いふぞ。『一つ』だ‥‥。

(六時が鳴る)

(突然立ち上つて大聲で) ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ〳〵〳〵ドシン。ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ〳〵〳〵ドシン。

民夫　(立ち上つてまご〳〵して) 何です、叔父さん、それは。まるで工場の音だ。

都喜子　(まご〳〵して) お父さーん。お父さーん。

粟地　ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ〳〵〳〵ドシン。ヂャッキ、ヂャッキ、ガラ〳〵〳〵ドシン。

粟地さう叫びながら飛び上つて尻餅をつく。口の中からダラ〳〵と血が流れ出して、首をグタリと垂れる。民夫、都喜子、その左右に尻餅をつく。

アンチ・ミリタリストの孫

生れてから四五歳に達するまでの私の生活の、乏しい記憶のうちに、今も思ひ出すと一種の愛着を感ずる二つの玩具がある。

その一つは、掛矢と稱する、杭などうちこむ大きい木槌を、四五寸ほどの大きさに作つたのと、他の一つは小さな大八車とである。二つとも、私の五歳の折に歿した祖父が作つてくれたのであつた。車の方は、たゞ漠然と、車輪の縁が山車の車の車輪のやうに大そう幅の廣いものだつたことを記憶してゐるのみであるが、槌の方は、大きい掛矢の雛形が極めて巧妙に出來てゐて、その槌の胴の膨みの工合などまで、はつきりと今も眼に見えるやうに鮮かに記憶されてゐる。さうして、祖父は、近年まで玩具屋に見えてゐた金板を列べた玩具の木琴を叩く爲めに、私と兄とに一つづつその小槌を作つてくれたのだといふことまで覺えてゐる。

私の家は、その祖父の代まで大工の棟梁だつたといふことだが、祖父は無論大工の仕事などが出來た譯ではない。けれども、私の覺えてゐる祖父は木屑のうちに坐り込んで何かしら作つてゐたのであつた。さうして祖父の死んだ後も永く、祖父が作つたといふいろ／＼の器具が家に殘つてゐたのを覺えてゐる。狹い土間のやうな所の木屑の裡にあぐらをかいて、大きい鼈甲眼鏡をかけて、木片をいぢくつて何か作つてゐる祖父の姿と、例の木槌をこしらへあげて私達兄弟の遊んでゐる所に持つて來てくれた時の祖父の姿とが、私に殘つてゐるたゞ二つの祖父の幻像である。

その後二十年近く經つて、私は、私の爲めに車を作つてくれた祖父を突然思ひ出す機會にぶつかつた。それは初めて淮南子を讀んだ時に、『桓公書を堂に讀み、輪人輪を堂下に斲る』といふ一節を見出した時だつた。讀んで行くと『其の錐鑿をすて、桓公に問うて曰く、君の讀む所のものは何の書ぞ。桓公曰く、聖人の書なり。輪扁曰く、其の人いづくに在る。桓公曰く、已に死せり。輪扁曰く、是れ直に聖人の糟粕のみ。桓公勃然として色を作して怒つて曰く、寡人書を讀む、工人焉んぞ得てこれ譏らんや。説あらば則ち可、説なければ則ち死さん。輪扁曰く、然り説あり、臣試みに臣の斲輪を以てこれを語らん。はなはだ疾ければ則ち苦つて入らず、はなはだ徐なれば則ち甘いで固ならず。不甘不苦、手に應じ心に厭うて以て妙に至るは、臣以て臣が子に敎ふる能はず、臣が子も亦これを臣に得ること能はず、これを以て行年七十老いて輪をつくる……』とある。私は漢籍を讀んで――無論澤山は讀まぬが――これほど實感にぶつかつたためしはなかつた。私には、その輪扁なる老人が、私の祖父のやうな老爺であるやうに思はれてならなかつたのである。私は、その時、何度も、何度も、此の一節を繰りかへしてゐるうちに、涙に眼が曇つて字が見えなくなつてしまつた。

その後も折にふれて此の一節を胸のうちにくりかへす度に、玩具の車を作つてゐる祖父の姿が眼さきにちらついてならなかつた。さうして、此の文句が、支那民族の軍國文化否定の理を詩的に表現したものであると同時に、生産階級の意識を極めて具體的に説明したものであることを知つて私は、私の祖父の生活に一種の誇りさへ感ずるのであつた。

子供の時に十八史略の素讀を習つて、『耕して喰ひ井を鑿りて飲む、帝力何んぞ我れにあらんや。』といふ文句を讀ませられた時には、何のこととも合點が行かなかつたが、桓公と輪扁との對話を讀んで、さうして鼈甲眼鏡の私の祖父の幻像を思ひ浮べると、私は、永い間失くしてゐたものを見つけ出したやうな喜びを覺えるのであつた。私は、私の祖父の幻影と一緒に、私達の生活そのものの意識を取り戻したのであつた。

今でも私は、講演などに、桓公の一節を引用することがあるが、その時はいつも、私に玩具の車をくれてゐるしなびたサンタクロースのやうな私の祖父の姿が――私の祖父は人並外れて小さなお爺さんだつたといふことだ――眼前にちらつくのである。

一體、私は、生れにもよつたのであらうが、子供の時分に誰れも好くやうな軍國主義的玩具に興味をもたなかつた。無論、軍國主義的の遊戲なんぞは、全くやらなかつた。相當いたづら盛の年頃になつても、友達なんぞがそんな遊びをする時には、私はいつも、超然としてそれを見物してゐた。で『高見の見物』などと冷かされたことを覺えてゐる。從つて私の玩具のうちには、誰れの玩具箱にもあるやうな、刀だの槍だの鐵砲だのといふものは一つもなかつたやうに記憶してゐる。不思議にも――實は當然のことだが――私の兄弟達の玩具箱には揃つてそんなものが無かつたやうである。

たゞ今にでもさうだが、私達男の子は、何れも五月人形を飾る習慣があるので、その年中行事で、私達は、軍國文化の産んだ極めて高級の玩具をもたせられたのである。

實際、五月人形といふものほど、子供の生活に於て許されてゐる贅澤はない。平生可なり貧弱な家庭でも、此の儀式では、驚くべき浪費が、その家の小さな子供の玩具の爲めに費される。如何なる家庭に於ても、五月人形だけは、その家庭の生活の常識を超越して、貴族的存在を保つてゐる。

勤儉質素を四民の生活の道德とする封建時代に、何うしてそんなタブー破りが公認されてゐたかといふに、それは全く、軍國國家の軍國生活に立脚する教化の手段に外ならなかつたのである。即ち軍國主義の理想を、たゞに空虛な理智の上に成り立たしめるに止まらないでそれを生活の興味そのものの上に成り立たしめるには、軍國主義的現象を文化現象に變態せしめる必要がある。人を殺す武器を文化的に完成せしめて、刀劍裝具なるものにまで發達せしめると、そこに、所謂人斬り庖丁は、高級な藝術品となる。と同時に、その同じ方法は、軍國主義的行動を最高の人間的行動として意識せしめることが出來る。生活の興味がさう顛倒すれば、生活の哲學は、その顛倒した生活興味の上に立派に構成される。五月人形は、さういふ生活の哲學を構成せしめるやうな生活興味を起させる爲めに、軍國的産物を藝術化した玩具によつて、人間をその白紙の時代に於て變造する方法なのである。人間の本心が何うあらうとも、その本心に任せることをせずに、軍國的偶像に隨喜する心理を人工的に構成せしめねばならぬのである。それは軍國國家の生活にとつて何よりも大切のことなのである。五月人形は、この人間改――變造の目的の爲めに、國家的に仕組まれた教化の道具に外ならない。

五月人形の制度は、軍國國家が、如何に此の目的の教化に努力したかを思はせる例證の一つである。五月といへばいゝ、あやめの季節である。あやめは菖蒲である、菖蒲は尚武に通ずるといふので、五月を軍國男子の祝月とする。といふのは誰か眞實か分らないが、とにかくそれ

は、軍國國家が苟も軍國的教化を宣傳する機會あれば決してそれを逸しないことの證據である。

尤も五月人形といふものが、われ／＼平民の間にまで行はれたといふことは、少くとも封建時代に於ては、錯誤だつたのである。軍國階級の精神と形態とは、その階級だけのもので、決して他の階級の簒奪を許されなかつた。百姓町人の輩は、軍國的精神を所有すべきものではなく、その精神の犧牲となるべきものだつたのである。それは丁度、鴨や雁が、鐵砲を所有すべき生物ではなく、鐵砲によつて打たるべき生物であるのと異らない。だから、百姓町人は、弓矢刀槍の類を携帶することすら許されなかつたのである。況んやそれらの武器を使用する術を學ぶことは、叛逆者と見られる危險を冒してでなければ不可能であつた。その筈である。百姓町人は、一揆でも起す時でなければ、竹槍をすら所持し、操縱する必要を有たなかつたのである。だから彼等が刀槍を振り廻せば、それだけで立派な叛逆者だつたのである。その結果すべての人間的修養まで百姓町人には禁じられたのである。何となれば、その頃は人間といへば、殺人器具を操縱する資格のある階級の人間に限られ、生產器具を操縱するものは、農工商とも一律に人間以下に屬し、皆鴨の屬で鐵砲を所持する方でなく、打たれる方なのだから、百姓町人が人間的修養をするのは、つまり鴨の癖に英語を學ばうとするやうなもので、その精神に於て立派な叛逆なのである。

百姓町人にして所謂青表紙をひねくつたものは皆碌な最期を遂げないのは、猫が人語を語つて退治されるのと同じなのである。

その意味からいふと、武士階級の生活興味を中心とする五月人形が、百姓町人の間に行はれるといふのは、猫の仲間に漢語が流行するのと同じく、間違ひである。

然しさういふ間違ひを生じたのも、つまりは、軍國國家の教化が、如何に完全に行き亙つてゐたかを示す一例なのである。五月人形といふものは、軍國階級の生活興味を與件とするものであるが、百姓町人までが、自己の階級的生活の興味と全く異つてゐる軍國的生活の興味に感染したといふのは、軍國國家の教化が、何も知らぬ鴨や猫の間にまで行き亙つた爲めに外ならない。

人間は、歴史の示す通り、その經濟力の伸張に應じて、文化的欲求を生ずるものであるが、その要求は、事實彼等の生活を本位として、その興味の上に成立する筈のものである。だから百姓や大工の文化的要求は、當然生產階級的であらねばならぬ。然るに、此等の階級は、長年の間奴隸的生活に押しつけられてゐたので、自分達の生活を本位とした文化的自信を持つことは出來ない。より好い生活とは、彼等にとつては、彼等の生活の向上ではなく、彼等の生活とは全く範疇を異にする軍閥階級の生活であるとしか思へないのである。哲學でも、藝術でも、道德でも、宗教でも、彼等は、自分自らのものがあると信ずるには餘りに牛馬に近い生活を強ひられて來たのであつた。しかも彼等は、不幸にして人間であつた爲め、牛馬が、いつまで考へても、自分達牛馬の生活を本位とする範圍を出られないに反し、百姓町人が少し考へると直ぐと自分達の生活を離れて、軍國階級のそれを目的とするに至るのである。米を作り、家を作る農夫や大工でありながら、より好い生活とは、それらの生產の生活の向上したものとは考へないで、そんなものを全く棄て去つて、そんなことをしてゐる人間の頭の上に、殺人器具を振り廻す階級の生活のことだと考へる。彼等は自己を完成せしめようと思

ふと自己を否定する外はないといふディレムマに陥る。

それはつまり、軍國階級の教化の廣く深く滲み亙つた證據である。「人間とは何ぞや。」といふ問ひに對し、五月人形であると答へる軍國階級の生活興味が、軍國階級自らを支配してゐると同時に、その階級に虐げられてゐる奴隷階級にまで滲染してゐるのである。奴隷が主人の意識に同化した時は、奴隷制度が最も完全に最も安泰に行はれた時である。

百姓町人が五月人形を飾るのは、奴隷が完全に奴隷になつた時の、儀式である。彼等は五月人形を飾ることによつて、自己の生活を否定して、軍國階級の生活理想に思想的に同化してしまつてゐるのである。從つて、百姓町人は、自分自らは五月人形そのものにはなり得ないといふ階級的制限をも、思想的に承認してしまつてゐるのである。

されば五月人形は、百姓町人にとつては、彼等の階級的悲劇の表現に外ならない。彼等は五月人形に於て、自分達を虐げる階級の夢を空しく追ひかけてゐるのである。自分達を切捨御免にする槍や刀を崇拜する彼等の氣持は、徹底した奴隷根性である。それほど、支配する階級は、支配される階級の身體と一緒に精神をも奴隷にしてしまつたのである。

その奴隷の家に産れた私は、やつぱり、生れていくばくもなく、その五月人形を通して軍國主義の教化に浴したのである。私が初めて覺えた歴史的人物の名は、加藤清正であつた。それから久しい年月の間、私の人間に關する知識は、その清正や、牛若や、辨慶や、武内宿禰やに限られてゐた。それは單純に、それらの人形が、私の家にあつたことによつたので、私の家にそれがあつたといふことは、卽ち、軍國國家の教化奴隷の家たる私の家にまで及んでゐたことである。

嚴かめしい清正の顏、その後ろに樹つてゐる高い幟、赤坊を抱いた武内宿禰の白髪の首、鎧の上に直衣のやうなものを着た、時代錯誤のその扮裝、‥‥そんなものの幻像が、今でも髣髴と私の眼の底に殘つてゐる。

産れた子供が、何の知識をも獲ないさきに、先づさういふ幻像を通じて具體的な軍國的知識を摑ませ軍國生活の興味を味得させる。これは全く、軍國主義の教化の成功である。ペスタロッチが何うの、ヘルバルトが何うの、モンテッソリーが何うの、ゲーリーシステムの、ダルトン式のと、新舊いろ／＼の教化の學理は、それぞれ能書だけは揃つてゐるが、實際利いたといふ點では、この軍國主義の教化に及ぶものがあつたらうか。

かうして育てられた人間が、生活とは軍國生活のことだと心得てしまつたつて、それを心得違ひだと誰れがいひ得るだらう。子供の私が人間らしい人間といへば清正や辨慶のことと心得たのは、さう心得させようとした努力した教化に從順だつたに過ぎない。もしその私が、私自身、清正や辨慶のやうな發達を遂げて、世の中に出て見ると、そんな人間は全く無用の廢物だといふことを知らされて大に面喰つた所で、それは私の罪ではない。私はたゞ誰れかの罪の被害者なのである。

が幸か不幸か、私はそんな風に發達はしなかつた。父母、祖父の次ぎに、私の知つた人間が清正であつたに拘らず、私は清正の風采にも持物にも生活にも同情しなかつた。尤も清正が何んな生活をしたか、私はちつとも知らなかつたのだが、その風采と持物とで、子供の私にもそれが想像されたのでもあつた。朝鮮で虎と戰つたために一本の刃が折れたといふ長い鎌槍を小脇に抱い込んで、烏帽子中のシルクハットともい

ふべき馬鹿高い奴を頭にのせて鎧陣羽織に身を固めた姿の人間が何をする人間であるかは、子供の私も直覺的に悟らせられたのであつた。つまりそれは「人殺し」のいでたちであるといふことを、遺傳的にすべての子供は知つてゐるのである。（かういふ扮裝で敵を威赫することの出來たのも、つまりさういふ遺傳的の知識が相手方にあるからである。）

そんな文化的殺人者を偶像として與へられ、それが、私の知覺の少しでも備はると同時に、第一に與へられた幻像であつたに拘らず、私がその清正の風采にも持物にも生活にも同情しなかつたといふことは、即ち、私が清正として成長しなかつた所以であつて、それは、殆んどすべての子供が五月人形を與へられてゐるに拘らず、大抵五月人形にならずにしまふのと同じ理由に因つたに相違ない。

人間は社會生活そのものに於て生きようとする傾向を持つものである。（その筈である。さうでなかつたら、人間は社會を作ることも、生存をつゞけることも出來ない譯である。）この傾向は、人間が或る時代、或る場合に於て殘忍に、社會的生活それ自體に反する生活を強ひられることはあつても、結局、彼等をその本來の生活に立ち戻らしめるものである。軍國國家の教化は、即ち、人間をその社會的生活そのものから完全に超越せしめる力を持つてゐたのであるが、それにも拘らず、多くの人間は、依然として社會的生活そのものに執着して、互に殺し合ふことよりは、互に生きることを助け合ふ生活に沒頭してゐたのであつた。

さういふ不心得の人間の一人として、子供の私は、鎧陣羽織のいでたち、キラ〳〵ひかる鎌槍、ヒラ〳〵ひらめく旗差物……そんなものに、左樣の興味を持たなかつた。第一、その清正の人形の面相――太い眞黑な眉を怒らして、精神病者が荒れ出す前のやうな眼付をして、顎一杯に口を結んで、毛蟲のやうな八字髭を生やして、子供の私の知る限りでは、生きた人間のうちには到底比較を見出すことの出來ないやうな不自然の面構に、子供の私が到底同情することが出來なかつたのは當然である。軍國主義の美學によれば、あゝいふ相貌は、人間的威嚴の極度を示してゐるのであらうが、無論、子供の私には、そんなことはわからないし、そんな顏を見れば、たゞ人間の本性に從つて、やつぱり、人でも殺しさうな恐ろしい顏だと感ずる――といふよりは、顏だと感ずることが出來ないほど、いやな恐ろしい何かだと思ふ――に過ぎないのである。軍國主義の教化に從へば、さういふ首に對しては、威嚴を感じ、崇敬の念を起し、畏服の心理を生む筈であるが、子供の私は、その首を、その人形が壞れた後に、極端に侮辱した方法で玩弄物にしたことを覺えてゐる位、そんな軍國主義的美學に反抗したのである。

前にもいつたやうに、私の玩具箱には、軍國主義的玩具は一つもなかつたが、たゞ例の清正の持つてゐた長いキラ〳〵と光つた一本缺けた鎌槍だけは、清正の首が、侮辱されるには餘りに原形を失つた後までそこにころがつてゐたやうに記憶する。一本の槍がそんなに長く保存されてゐたといふことも、私達がそんなものに興味を持たなかつた證據である。子供に興味を持たれた玩具は、そんなに長い壽命を與へられるものではない。

とはいふものの、軍國文化は、子供にとつても大人にとつても確かに一種の蠱惑である。第一に軍國文化を根柢づける軍國的行動そのものが、人間や動物の本能的傾向に投合した行動の組織的連續そのものなのである。

人間は元來戰鬪的生物である。胎内にあつては母體と戰ひ、胎外に出れば父母、兄弟、乳母、子守とたゝかふのみでなく、手にふれるものを悉くその敵のやうに掴み取り打ち壞さうとする。もし社會的生存の組織が彼れに何にも敎へなかつたら、彼れは、徹頭徹尾戰を事とするタンクのやうな生物と發達するであらう。社會的生存の組織のうちに、彼れのあらゆる行爲は自然的に又人爲的に選擇され、漸次に戰鬪的のそれが淘汰されることによつて、彼れは、現にあるやうな、臆病にして平和な生物と發達したのである。

然るに、その淘汰をあべこべに行ふのが卽ち軍國的組織である。人間の行動から、漸次に、その平和的なものを淘汰して行つてそこに戰鬪的行動だけが選擇され、排列され、調節され、訓練され、昇華されたのが卽ち軍國的生活である。

普通の人間が軍隊に收容されると、先づそれまで彼れの生きてゐた娑婆の生活を一切すて去れと命令される。それまで着用してゐた着物が、兵營の外でぬぎ捨てられなければならないやうに、すべてのものが兵營の塀を境として取り代へられる。立派に適用してゐた言語までがその塀の内では、全く通用しないと宣告される。それらのものが、悉く切りすてられるのは、それが戰鬪の生活そのものゝ樣式又は戰鬪の生活に立脚する文化樣式に反するからといふのである。

それは常人にとつて確かに苦しい人爲淘汰である。けれども、さうして築き上げられた軍國的樣式は、それが終局目的とする軍國的行動そのものと共に、一種の魅力を以て極めて單純にさうして幼稚な人間に迫るものがある。

この魅力は、人間的性質の弱點を、社會的生存が、匡正するのとは正反對に、その弱點から出立する行動並に文化の建設に人間を導く力である。社會的生存は、みだりに戰鬪行動を挑發するやうな心理的傾向を防遏して、人間に、殺人器具を恐怖する心を起さしめる。然るに、軍國組織は、その反對に、殺人器具を文化的に發展せしめることによつて、その殺人器具に對する恐怖心を滅却せしめるのみならず、それと同時に、その殺人具に對する文化的憧憬を起さしめ、その結果、殺人行爲に對する禮讃を誘發するのである。刀を文化的に發展させて、終ひに、その刀にのみ人間的精神――大和魂――が潛在するといふやうな思惟を起させ、その結果、人間的精神――大和魂――を發揮しようとするには、その刀を振つて、刀の能力を發揮せしめる外にないといふやうな危險思想――抽象的に危險なのではなく、外科的に危險な――に導くのである。村正が作つた刀は、それを持つ人間をして、人を斬らしめなければやまないといふ傳說は、卽ち軍國主義の眞實を自白してゐるものに外ならない。精神が人間に宿らずに、殺人の武器に宿り、人間かその精神に隷屬することによつてその武器に隷屬するに至るといふことは、その「武器」といふ言葉の代りに、「組織」といふ言語を用ゐれば、そのまゝ軍國主義の眞實に該當するのである。

人間が自分の生活の用具を神化するのは、その用具がない時には、自分の生活が成立しないほど、その用具の地位の重大なる爲めである。農夫は、生産用具を神聖視し、武士は殺人用具を神聖視する。

それが逆に働いて、用具を神聖視することの爲めに、その用具の作用する行動を神聖視するのも亦當然である。百姓は鋤や鍬を神聖視することのために、農事を神聖視する。武士は刀槍を神聖視することの爲めに關聯して戰鬪を神聖視する。

たゞ戰鬪階級は、支配する階級であるために、自分の神をどこまでも向上發展させる精神力と經濟力とをもつが、生産階級は、支配される階級である爲めに、自分の神も亦、自分と同じ慘めな生活程度に停滯せしめる外はない。軍國階級は、戰鬪行爲並にそれに並行する生活組織の哲學、宗教、科學、藝術を無上に發展せしめることを得るが、生産階級は、彼れ自身のそれらのものを何一つもつことは出來ない。軍國階級の戰鬪用具の如きは、金銀珠玉を自由に使用して、高級な文化的創作たらしめるが、百姓の鋤鍬や肥桶には、金銀珠玉は愚か、漆蒔絵を用ゐたものさへない。同時に、軍國階級の生活は、それを高調する堂々たる哲學を有つが、百姓や工匠の生活は、それに加擔する何の哲學も持つてゐない。

が要するに戰鬪行爲は、人間的行動といふよりは、寧ろ動物的行動といつた方が當つてゐる程、單純で、一本調子の行動である。人間をあらゆる社會生活の生活から引離して、全く無智蒙昧の生物たらしめても、彼れは戰鬪することだけは間違ひなく出來る。(反之、生物を、社會的生活に引入れゝば入れるほど、戰鬪的衝動と能力とは失はれて、恐怖心と臆病心とが養はれ、彼れを平和的生活に執着せしめる。)それほど、本調子の生活なので、軍國生活の興味も亦、甚だ原始的である。

それは、軍國階級の好む色彩を見てもわかる軍人の服裝でも明かだが、金ピカや眞赤や眞青や、眞黄色や、われ〳〵が日常の生活の趣味では、到底採用されない色彩が、不遠慮に、臆面もなく使はれてゐる。野蠻人や赤坊が好む單純な、刺激の強い、原始的色彩が、軍人の服裝に用ゐられることは昔も今も少しも變りはない。色彩の然る如く、線も輪郭も、軍人のそれは古今を通じて一貫した原始的典型を保つてゐる。野蠻人が色土を裸體に塗つて描き出す裝飾のやうな裝飾が、軍國階級の服裝の裝飾である。軍人の兜は、昔のも今のも、アメリカインディアンやアフリカ人の、羽毛を飾つた兜の傳統を引いてゐるのである。

諏訪法性の兜とかいふのが、今を去る事四百年前の日本にあつたといふのを、芝居などで見ると、金色燦爛として、それを飾るに房々とした純白の毛をもつてしてゐる。ところが、今もロンドンには、全くその四百年前の日本の軍人の兜と同じ要領の、金色さんらんとして純白の毛が房々とそれを蔽うてゐるのを被つた馬上の兵隊がホースガードといふ兵營の門の左右に、作り物のやうに身じろきもせずに控へてゐるのである。全く舶來の五月人形である。それを以て見ても、軍國主義なるものが時代を超越し、――又は錯誤し――國境を無視し、古今東西を通じて同じ典型のものであることがわかる。

人間の感覺が進歩して、色彩の趣味が發達し、單純な黄とか赤とか青とかをそのまゝ採用することが出來なくなつてゐるにも拘らず、軍人と赤坊と野蠻人とだけが、依然として、眞赤、眞青、眞黄色ですまし込んでゐる。もし軍人でなく、赤坊でなく、野蠻人でなくて、あゝいふ色彩と輪郭と意匠とをもつ服裝で往來を歩いたら、恐らく精神病者と思はれるであらう、普通人は、正氣であつて、軍人でなかつたら、決して繪の具皿のやうな色彩を呈するものではなく、かぶと蟲のやうな輪郭をもつものではない。

軍國組織が最高調に達した時代には、その階級の人々は、悉く何等かの殺人器具の文化的に發達したのを帶同する習慣であつたことも世

界共通であつたが、軍國國家の最盛期が過ぎると共に、その習慣の廢れたことも世界共通である。その世界共通の心理を無視して、今も尙ほ、同じ危險器具を文化的によりは寧ろ實用的に帶同してゐるのが軍國階級である。今日、大小を手挾んで大道を濶步したら、これ亦、精神病者と鑑定されるであらうが、それを健全な精神狀態の下に斷乎としてやつてゐる勇氣が即ち軍國的勇氣である。この勇氣を造形美術で表現したのが五月人形である。

五月人形の軍國主義的色彩が子供や野蠻人や精神病者の原始的感覺にとつて蠱惑的であることは、即ち、軍國主義が、子供らしい、又野蠻人らしい、又精神病者らしい單純な民族的集團にとつて蠱惑的である所以である。

子供の私がその誘惑に陷らないで、高價な五月人形——人間にとつて軍國主義が高價であると同じ意味で高價な——よりも、木槌や大八車の玩具を好んだのは、それを作つてくれた老爺が階級的にアンチ・ミリタリストに屬してゐて、私はその孫だからでもあらう。

◇

○獅子は檻中に在つても食のために媚びず。

○女子の涙は勝利の涙なり、男子の涙は降伏の涙なり。

○男子は語尾を強めて語るべし、女子は語尾を弱めて語るべし。

○男子の勇氣は義なり、女子の勇氣は戀なり。

○伊佘諾は我が尻を喰へと罵り、靜は入りにし人の跡ぞ戀しきと唱ふ。

○眞に戀の經驗なき事を誇り得るものは獸なり。

○何物のよきよりもよきは善き妻なり、何物のあしきよりもあしきは惡しき妻なり。

○妻を求むる鹿の聲に僞なく、妻を求むる人の聲に眞なし。

○畏敬せらるゝ妻は恭しく離緣せらるゝ虞あり。

○産むも無意識、[illegible]まるゝも無意識、人間たる事は偶然なり。

○平民が華族となり、侯爵が公爵となる、改まれるは門標のみ。

○戰爭の前は憤怒なり、戰爭の中は悲慘なり、戰爭の後は滑稽なり。

○第一、富を得よ。第二、富を得よ。第三、富を得よ。聖賢は傭ふべく、道德は買ふべく、哲理は賄なすべし。

○獸類社會の道德には腕力を要す。

○右の頰を擊たれて更に左の頰を向けしは基督なり、右の頰を擊つて更に左の頰を要求するは基督敎國なり。

○二十世紀の基督は喇叭を吹きて異敎國を騷がす。

○明所に縮少し、暗所に擴大す、猫の瞳、紳士の膽玉。

○小山ほどの鯨は大鯨なり、大鯨ほどの山は小山なり。

○柄杓の耳搔ほど小なると、耳搔の柄杓ほど大なるとは等しく不幸なり。

○女の兒は商品なり、男の兒は非賣品なり、前者の賣れざると、後者の買はれたるとは嘆きなり。

○愛する人の面は盜みて見、憎き人の面は[illegible]うて見る。

○愛する人の聲は心臟の血を溫め、憎き人の聲は頭腦の血を沸かす。（「如是閑語」より）

アンチ・ヒロイズム斷片

――私の有史以前の記錄の數節――

胎教

私のうけた胎教――さういふものがあり得るとして――がどんなものであつたかは無論わからない。が、私が物心を覺えると、第一番に耳に入つた音響は「ヤーレエーンヤンランヤイ」といふ原始的の聲樂であつた。それは長い竹棹の先についた鍵で大勢が材木をひツかけて堀から引上げる時の木遣りの一種である。この聲は生れたばかりの私の耳に、朝から晩まで子守唄のやうに響いてゐたに相違ないが、從つて胎內の私も、亦此の聲をきいてゐたに相違ない。

此の胎教が私を不幸にしたとは思はれない。物心がついてからの私は、毎日堀端に出ては、此の聲と、それに調子を合せて上つたり下つたりする澤山の棹の一齊の動きとで耳と目とを樂しませてゐたのであつた。その棹の集まりに引かれて大きい、眞黑な、濡れしよぼたれた材木がずる／＼と引上げられる緩慢な、けれども力強い運動は、そのまゝ私の身體の裡の力ででもあるやうに、子供の私の身內に滲み込んだのであつた。そのヤーレエーンヤンランヤイといふのどかな諧調が、それを歌つてゐる大勢の人達の、文字通りの「生活の聲」であることなどは、無論子供の私の知り得たことではないが、萬一それを私が知らせられたなら、私はどれだけ「生活」といふものに親しみを感じたであらう。さうして『生活』そのものに喜びと誇りとを感じたであらう。さういふ心の經驗は、その後の私の『生活』に於ては全く與へられないことであつた。何が惡いのか知らないが――何にもわるくはないのかも知らないが――とにかく私は、その後の經驗に於て、あんな樂しさうな諧調を生活の聲として聽いたことはない。

私が、もし儒者の家にでも生れたならば、私は胎內に於て孝經の素讀の聲でも、毎日毎晩きかされたことであつたらう。それは無論胎內の私に、どういふ形式に於ても、どういふ內容に於ても、決して理解されたことではなかつたらうし、子供となつた私にも、それが決してあの木遣りの聲のやうに私の小さい胸に響きはしなかつたことを想へば、さういふ胎教は、胎兒の私にとつて、此の上もなく退屈なことであつたらう。私が儒者の家に生れなかつたことは幸ひであつた。

私がもし武士の家に生れたら、胎兒としての私も、毎日竹刀の音をきかされたであらう。さうして胎內で、その音が、自分が世の中に出てから人に打たれ人をも打つ響であるといふことを知つたならば、私は恐らく母の胎內から外に出ることを悲しんだであらう。

私のうけた胎教が、胎兒であつた私の心にどんなにしつくりと出會つたかを想はせる證據は、今でも私は偶々深川へ行つてあのヤーレエーンヤンランヤイといふ原始的の合唱をきくと、自分が溫かい、柔かい、粘膜にふはりとつゝまれてゐるやうな氣になるのである。

『顏回の馬鹿』

「ケンナルカナクヮイヤ、一タンノシ、一ペウ

ノイン、ロウカウニアッテヒトハソノウレヒニタヘズ、クヮイヤソノタノシミヲアラタメズ、ケンナルカナクヮイヤ」といふやうな、日本語だけしか習はなかつたものには決して解りつこのない――日本語の外の何處の國語を習つたものにもわからないのではあるが――やうなことを、日本語も碌々習ひ切らない子供の私が理解しやう筈はないが、わたしは七歳位の頃にある家塾に入れられて、毎日々々この意味のない――ない譯ではなからうが、あり方のわるい――文句を何遍となく、お蔭でその文句を今も宙で繰り返される位、繰り返させられた。

それでも不思議なことには、頻りに繰り返してゐるうちに、そこにどこかにクヮイといふ人間の居るといふことだけが私にもわかつて來た。するとその頃、何かの繪本で、――多分地口繪を集めた本のやうだつたが――をかしな、馬鹿見たやうな顔をした男が肱枕で寢てゐて、その枕元に瓢箪がころがつてゐる繪を見た。無論地口繪で、頭といつても簡單に點を三つ程うつて、それで目と鼻――或は口――とを現はしたきりだが、それでゐて、その顔が、子供の私にも如何にも馬鹿々々しく見えるやうに描かれてゐた。所がその繪の上のところに何か文句があつて、それが前掲の譯のわからぬ電文と聯絡があるらしかつた。どんな風に聯絡があつたか覺えないが、とにかく、子供の私は、その繪が顔回といふ人間を描いたもので、顔回とは前の電文にあるクヮイのことだといふことを、人から聽かせられたか、自分で悟つたのかして、知ることを得た。

それ以來、この孔子の一番弟子が、私の小さい頭には「顔回の馬鹿」といふ風に刻みつけられてしまつた。

その後數年經つて、駒込の妙義坂に私の家の移つた時に、家のすぐ崖下の往來沿ひにある見すぼらしい借長家に一人の獨身ものの男が住んでゐた。大道卜者か按摩かであつたが、その男はまだ老人といふ程ではないが、いやに年よりじみてゐて、商賣柄妙にキチンとした裝をして、べろ〱の衣服を着てゐたが、それが黑びかりする程汚れて且つ方々がすり切れてゐた。さうして彼れの言語擧動もキチンとしてゐる癖に黑びかりがしてすりきれてゐるやうであつた。ところがこの男の顔が、私の小さい頭に刻みつけられてゐた「顔回の馬鹿」そつくりなのであつた。子供の私は彼れに於て「顔回の馬鹿」の原物を見たのであつた。

その後私は論語をやゝ理解するやうになつても、「顔回の馬鹿」は私の頭から何うしても消え去らない。わかつたつもりで如何に論語をくりかへしても、私の頭の「顔回の馬鹿」を打ち消す反證を見出し得ない。のみならず、あべこべに、「顔回の馬鹿」の頭をもつて論語を理解しようとする。地口繪など書くものはよつぽど注意しなければならない。

されば「國定教科書以外の書物をむやみに子供に見せるな。」といふことも相當理由のあることではあるが、しかし、私がもし、その地口繪を見ずにしまつたら、顔回といふ人をさういふ風に取扱ふ人間が此の世の中にあることを全く知らずにしまつたかも知れない。それはやつぱり無知である。日本に「藝者」といふ女の人間のあることを知らない西洋人よりも、それが他國のことでないだけに、一層の無知である。

『お馬鹿さん』

私が「顔回の馬鹿」を發見した當時のことだが、私の居た家塾に塾生の最年長者ではあつたが、皆から「お馬鹿さん」と綽名をつけられてゐた、少し低能の子供が一人ゐた。子供とい

つても私よりも十歳も上で、身體は相當發達してゐたが學級は私達と殆んど同じであつた。ある遊廓の生れで、よくそこの話などを、無邪氣に皆に話してきかせてゐた。ホッテントット人のやうに厚い下唇を突き出して、長い顏をたるませて、咽喉首をだぶ／＼させて、どんよりした眼付で、所謂屈列陳型とでもいふのであつたらうが、さういふ病氣の通有性で、子供らしく無邪氣で可愛らしかつた。ある日先生が、此の子の兩親にやる手紙を代作してやつて讀ませる時に、「御依神下され度候」と先生が讀んで、それを繰り返させると、「五十錢下され度候」と大きな聲で繰り返したので皆大笑ひだつた。

私は或る日何かのことから、此の自分、殆ほどの大きさの子供と爭つたが、腕力は無論先方と比較にならないに拘らず、能力の差で、向うがヨタ／＼してゐるので、此方は増長して、箒の先で、向うの顏を逆に撫でたり、柄の方でこづき廻したりした。と、そこへ現はれた先生の身内の中年の婦人──私達の世話をしてゐた相撲のやうな體格の、親切な獨身の婦人──が、默つて私を睨んだ。私はこの親切なをばさんに睨まれたのが初めてだつたので、その福々しい顏の怒つたやうになつたのを見ると同時に、何ともいへない強い羞恥の感に打たれて、覺えず泣きさうになつてすぐと喧嘩をやめてしまつた。この時の恥かしさは、今思ひ出しても冷汗の出る位である。

私はそれきりその『お馬鹿さん』と喧嘩が出來なくなつたばかりでなく、彼れを侮辱する氣にもなれなくなつた。

顏回のやうな賢人を『馬鹿』にしてつひに後悔することを知らない私が、この『お馬鹿さん』を馬鹿にして、一遍で後悔してしまつたのは、不思議といへば不思議である。

神秘

私の産れた家の西側の塀の傍に大きな欅の木があつてその下に小さい祠があつた。何を祀つたものだか覺えないが、「齒神樣」と呼ばれてゐて、房楊枝が澤山あげられてゐた。

その頃最早九十歳近くであつた私の曾祖母は、毎朝のやうにその祠に詣で何か祈願をこめてゐた。別段齒痛でもなかつたやうだから、これは全く此の祠の主を齒科醫としてではなく、神として祈つてゐたに相違ない。

雨雲をひろげたやうな欅の大木が、既に子供の私に神秘の印象を與へてゐたが、その木蔭に隱れた小さい古い祠、その前に祈願をこめてゐる私の曾祖母のファーストの妖婆のやうな姿、さういふ取り合せの小さな場面が子供の私に與へた陰鬱な神秘の感じは、私の生涯に於ける神秘的經驗の、最初にしてそして最後のものであつた。

生長した私は、トルイストが音樂をクロイツェル・ソナタで代表させたやうに、神秘をメフィストで代表させることを憚らないのであつた。神秘に逢へば、私の先づすることは、眉に唾をつけることであつた。そんな風に子供の心から私を遠ざけてしまつたのは、白紙のやうな子供の心が私から逃げてしまつたせゐであらうか、又はすべての神秘が神秘性を失つて僞瞞性を露出せしめてゐるせゐであらうか。

如是英雄（一）

英雄豪傑の類が限りなく尊崇されてゐることは何時の世にも變りはないと思ふが、子供の時代に私の浸つてゐた空氣は、甚だ英雄豪傑の臭ひのしないそれであつた。

勿論その頃でも國家教育なるものは確立してゐて、小學讀本、修身教科書の類には澤山の英雄豪傑のことが、子供の崇拜心をそゝるやうな方法で記載されてゐたに相違ない。それにも拘らず、子供の私の頭の裡に於ける、これら國家的乃至世界的英雄豪傑の待遇はみじめなものであつた。

むろん私も亦、他の子供等と同じく、多くの英雄豪傑についていろ〳〵のことを聽かされたであらう。多少は、記憶してゐるところを想へば、聽かされたことは確かであらうが、しかし之の確かなことを『あらう』といはねばならぬほど、聽かされたといふ記憶すらはつきりしない。

しかもその英雄豪傑に關する私の記憶のし方がまた甚だ振つてゐないのであつた。つまり、英雄の英雄らしいところは全部忘れて、要りもせぬことだけで、その英雄を記憶してゐるのであつた。例へば、豐太閤といへば『猿面冠者』と覺え、その外のすべて太閤に關することは漠として覺えない。加藤清正といへば『毒饅頭』と覺え、事蹟としては虎と鬪つたといふことだけ知つてゐる。また西郷隆盛について私の最も正確にいひ得ることは、『西郷隆盛枕は要らぬ』といふその頃流行つた唄の文句、しかも前後は忘れて、その一句だけであつた。幕末の英主といはれた慶喜將軍のことは、元氣であつた私の祖母が毎晩酒をのんでは、胎兒の私にまで話したことであつたと思ふが、私のよく覺えてゐたのは、たゞ將軍が『豚一』と呼ばれたといふことだけであつた。その祖先の家康のことは更に各方面から聽かされたであらうが、子供の私はただ『權現樣は逃げるが勝ち』といふ一句を、みじめな場合に、狡猾に使用するだけの知識しか家康について持つてゐなかつた。

そんな風にして私に記憶される便利を持たなかつた英雄豪傑は、決して子供の私の親しみを得る光榮を持つことも出來なかつた。里神樂を通して子供の私に紹介された多くの神話的英雄――例へば素盞嗚尊の如き――は、私には、英雄でなくて怪物で、彼等は自分よりも弱い怪物を退治して了ふと、更に私達を退治しに來る虞れのある人物としか思はれなかつた。

教科書の努力に反して、アレキサンダーとかナポレオンとかいふ名は、子供の私には、國勢調査に於ける家族の一員同然、たゞさういふ名前があるといふだけに過ぎなかつた。

如是英雄（二）

遠い國や遠い時代や懸け離れた社會やの英雄に興味をもち得なかつた小さい私も、私自身の周圍の人々――それは川並の親方とか鳶のものとか大工とか植木屋とか木挽とかいふ人達で、私の家の座敷へはめつたに上つて來たことのない人々であつた――の裡に英雄を求めてゐたのであつた。その人選が子供らしい自己流であつたやうに、その求め方も自己流であつた。それらの人々は、或はそのがつしりとした體格に於て、或はその重々しい態度に於て、又はその敏捷な動作に於て、又或はその威力のある言葉つきに於て、それ〳〵小さな私をして彼等のうちに英雄の要素を見出さしめたのであるが、しかし此等の私にだけの英雄は、教科書にある英雄のやうに、戰爭をしたり蛇や虎と鬪つたりして私に見せた譯ではないから、私が教科書にあるやうな理由で彼等に英雄の要求を認めたのでないことは確かである。のみならず、彼等は、彼等の間に起り勝ちの喧嘩といふものを、私の前でして見せたことすらなかつた。

尤も、ある人間が虎や熊と鬪つて私に見せても、子供の私はその人間を別段英雄といふ風には見なかつたのである。もう少し大きくなつてから、日本にチャリネといふ曲馬團が來て、私は、虎や獅子を閉口させた多くの西洋人を見たが、私は彼等を英雄とは思はないで見世物師と思つたのである。（此頃ムッソリニが獅子の檻の中に入つて、英雄ぶりを誇つたといふことだが、子供の私が之を見たら、ムッソリニは見世物師ぶりを誇つてゐるのだと理解したであらう。）だから私の周圍の人々も、喧嘩をして私に見せることによつて、英雄として私に受け入れられることは出來なかつたのである。まして戰爭をして見せた所で、それは喧嘩よりも一層悪いことをしてゐるのだと子供の私は感じるばかりで、それをしてゐるものを英雄と呼ぶことは大人達の勝手だが、その英雄といふものが、子供の私には嬉しいものでも好ましいものでも何でもなかつたのである

私の周圍の英雄は、戰爭は愚か、喧嘩もしなかつたのであつて、偶に私の前で喧嘩をして見せるのは、私の英雄でもなんでもない只の人間達であつた。さうして私はそれをする者を極端に嫌つた。一度出入の植木屋の職人のうちで酒癖のわるい寅といふ男が醉つぱらつて、仲間の温和しい職人と喧嘩してそれを組伏せたのを見て、私は大に怒つて、泣き喚いたことがあつた。無論、その組伏せた寅公を英雄だとも何とも思やしなかつた。戰爭だつて同じことである。

私の周圍の英雄は、教科書や里神樂の英雄のやうに、人間を伐り從へたり人の國を征伐したりする英雄でないから子供の私も全く彼等に安心してゐることが出來た。子供は野の虎をさへ怖れないといふからどんな英雄だつて恐れないのは當り前だといふかも知れないが、さうとは限らない。英雄は、赤子の泣くのを默らせると支那の諺にもある通り、一人の英雄がゐたら、多くの人間が不安に驅られ、赤子さへ無邪氣ではゐられないのである。英雄といふものはその點に於て野の虎程も常識のない動物であるらしい。

世間でいふ英雄とは畢竟今云つた寅公の樣の人間である。反之、私の英雄は決して私の前で人を組伏せて見せたりすることをしない人間であつた。赤子の泣くのを默らせるどころか、赤子の私を默らせるために大汗を流して、結局失敗して婆やに怒鳴られる位が落ちである英雄であつた。それがどんな英雄であつたか、そのうちの一人の例をあげて見よう。

それは「煮たて隱元の爺さん」と呼ばれた煮豆賣の老人であつた。彼れが私の英雄となつたのは、その賣つてゐる「煮たて隱元」の味のよかつたことが大原因をなしてゐるとも思はれるが、――何となれば、私の感覺にぴつたりと合つた何物をも持つてゐない人間は、私にとつて何物でもあり得ないのだから無論英雄ではあり得ない。此の老人が私の味覺にぴつたりと合つたものを持つてゐたことが、私と彼れとの間に密接の關係を成立させた重大原因に相違ない――然し、此の老人の風采態度、もつと適切にいへば生活態度に對する子供の私の幼稚な感銘がなかつたならば、何うして此のむさくるしい老爺が私の英雄になり得たであらう。

この爺さんは、六尺裕かの大男で、兵隊の外套、――その頃は黑色であつた――の古いのを着て、今の電車の車掌のブラ下げてゐるやうな鞄を小脇に懸けて、大きい岡持――それは眞白に磨かれて、眞鍮の箍がピカ／＼輝つてゐて、子供の私の目にも、その中に入つてゐるもののおいしさを思はせるに十分であつた――を細引で背中に打ち懸け、前かゞみに步きなが

ら、寧ろ走りながら『煮たてーいんげん』と怒鳴るのである。ラフカヂオ・ハーンは霜夜の『按摩上下六百文』に詩人の聲を聞いたが、私はこの『煮たてーいんげん』に英雄の聲を聞いたのであつた。

さういつて駈け出してゐる爺さんの、銀の針をうゑたやうな短い頭髪に生えた皺だらけの額は、今に私の目に鮮かに殘つてゐて、時々電車の裡などで、それと同じ夜を見出して、その遠い昔の隱元豆の味を想ひ出して津液を湧かすこともある。

爺さんの『煮たてーいんげん』なる豆は、ねつとりと柔かく煮られて、しかも豆がつぶし餡のやうに崩れないで、その形を保ちつゝ、大きい琥珀色の粒がねつとりして餡に包まれてゐるのであつた。さうしていつでも湯氣の立つてゐるほど熱くて、所謂『煮たてー』の名に反かないのであつた。

さういふ煮豆を供給するについて、爺さんは商賣氣とは全く別な興味をもつて努力してゐるのであつた。それは特別に築かれた竈によつて、特別の釜を用ゐて獨特の水加減と火の焚方とによつて初めて作り上げられるので、爺さんの歳になつて、初めて理想通りの豆を作り出されるに至つた位のものである。しかもその豆が一定の溫度と一定の濕度とを保つてゐることによつて一定の味を與へ得るのであるから、その豆を味ふ時間が限られてゐた。少し早過ぎても遲過ぎても、豆はその眞正の味を失ふのであつた。從つて爺さんは、その短時間のうちに豆をお客の食膳に供するべく、適當の時刻にそれを釜から岡持に移すや、素跣足で家を飛び出して、雷のやうな聲で『煮たてーいんげん』と怒鳴りながら、大急ぎに走るのであつた。『煮たてー』といつてから『いんげん』といひ終るうちには曲り角から曲り角で姿が見失ふ、とはよく爺さんの豆の愛好者の間で語り合つたことであつた。從つてそれを呼び止めて買ひ入れるには可なりの注意を要した。がいつも正確に同じ時刻に同じ所を走るので、多くの家々では、その時刻に待ち構へてゐて遠雷の聞ゆると同時に容器を用意して待つてゐるのであつた。一二軒走り過ぎてしまつてから呼んでも爺さんは決して戻つて來ない。容器を出すに手間取つたりしてゐれば、爺さんの姿は、もう曲り角を曲つてゐる。その頃は、煮豆の如きものでさへ、喰はうとするものも喰はせようとするものも共に一生懸命であつた。

處が此の爺さんの家の近所から火事が出て爺さんは丸燒けに會つた。無論その大切の竈も釜も燒けてしまつた。爺さんは新たに竈を築いたが、それが馴れぬうちは、たゞ空しく隱元豆を煮ては捨て、煮ては捨て、決して賣物にはしなかつた。いつまで經つても工合よく竈が馴れぬといふので、爺さんは、その間長いこと黑豆を煮て賣り歩いた。その間の爺さんの悄げ方は顯しいもので、子供の私達も、前のやうに怒鳴らぬ爺さん、前のやうに駈け出さぬ爺さん、不滿らしく黑豆を掬つてゐる爺さんに同情しない譯に行かなかつた。たうとう爺さんは豆屋をやめて避病院の看護人になつた。いつまで經つても竈が馴れないので爺さんの理想の隱元豆が出來ないからである。

六七歳の私が、この頃の人間の傳記をかうまで詳しく記憶してゐることによつても、如何に此の爺さんが子供の私に強い印象を與へたかが察しられる。その後の教科書の英雄の事は片つぱしから忘れて行つた私も、此の私の英雄のことは決して忘れなかつた、その煮たて隱元の味の忘れられないやうに。

後に、私は、此の私の英雄が小金を貯めて金貸しを內職にしてゐたことなども聽いた。け

れどもそれがために、その豆をまづかつたと思ひ返すことも出來なければ、またその豆に對する「せい」さんの眞劍の態度に反感をもつことも出來なかつた。寧ろこれだけの眞面目な努力が僅かな貯金の形でしかその人に酬いて來ないのを不思議に思つてもいゝのである。

私は、無暗に人を降參させたがる教科書の英雄、里神樂等の英雄よりも誰れにも降參なんかを強ひないで、誰れもうまがる豆を、強ひて喰へともいはず、たゞ作り出すことに興味をもつてゐた英雄に左袒した子供の私に左袒する。

子供の私が歴史をかいたら、教科書を作つたら、必ず『煮たてーいんげん』の爺さん及びそれに似た多くの人々を逸しなかつたであらう。しかもその人達を、「英雄」などといふあたりまへの人間を輕蔑したやうな呼び方で呼ばないで、あたりまへの人間同士が互に呼びあふ日常の名前で呼んだであらう。

暴力

私が某の塾に居た頃、ある日、十餘人の塾生達一同が先生に引率されて寶小路の繁目を歩いたことがあつた。その時一人の年長の塾生が、向うから來た同じ年頃の二人連れの少年の一人の肩に觸れたか何うかした。その少年はいきなり猛烈な勢で私の友達につッ懸つて來た。咄嗟の事で友達はよろめいたが、ちつとも相手にせずに、たゞ自分を立て直しただけで、相手のするがまゝに任せた。相手は張合ぬけがして、そのまゝ手を引いて行つてしまつた。

私は先づ相手の少年の大膽さに驚かされた。何といつてもこちらは、十餘人が列をなして歩いてゐるのに、僅か二人きりでそれに向つて突撃を加ふる勢は私を驚かすに十分であつた。

けれども、今に私の印象に殘つてゐるのは、こづかれた私の先輩の平然として相手のするがまゝに任せてゐた態度であつた。多數を頼めば子供とはいへ十餘人もゐて、中にはかなり喧嘩好きもゐるし、二人位の少年をやつつけるに譯もないのだが、此の友達は、平然として、手も足も使はないで、相手が引下ると同時に、傍の友達と顔を見合はせて笑つたのであつた。その笑ひ顔は、私達子供同士が常に取り交してゐるそれで、別段英雄的の笑ひ顔ではなかつた。

私は今も目の底に殘つてゐる此の友達の笑ひ顔を思ひ出す毎に、暴力を輕蔑する氣持になる。

熊の使ふ人間

淺草公園が奥山といつた頃には、觀音堂の直ぐ傍から澤山の見世物小屋が並んでゐた。そのうちに熊の曲藝を見せる小屋があつた。子供の私はそれが好きでよくそこに連れられて行つた。

熊は小男位の大きさの眞黒な熊で、鮮かな月の輪があつて、まるで作り物の熊のやうに愛らしかつた。よく見ると、可哀想にも齒は皆ぬかれてゐて爪も切られてゐた。さうして鼻の障子に綱を通してこれによつて引廻されてゐた。藝といつてもたゞ電柱のやうに横木をうつた高い柱に上つて、横に寢たり逆立したりして見せるのと、人間を相手に相撲をとる位のことであつた。

此の熊が人間と相撲をとつた時には、一度は必ず人間に敗かされるやうに教へられてゐた。然しこの時、「熊敗けた。」と熊使ひがいふと、熊は猛然として立ち直つて人間を押し倒すのであつた。すると「熊勝つた〳〵。」といつて熊使ひが引離すのである。

この熊に勝つた人には景品を出すといふこと

で、客の中から熊と相撲をとるものも出たが、熊は教へられた通り一度は倒されるが、すぐと起き直つて人間を仆すのであつた。私はいつも至極汚い赤いシャツを着た小さな男が此の熊と相撲を取つてゐるのを見て、此の客はよつぽど熊と相撲をとるのがすきな人だと思つてゐた。ところがやがてその男は、熊と相撲ふために使はれてゐる熊の同伴であることを知らされた。

それを知つてから私の注意は、妙に此の男の上に注がれた。小さな圓い頭をした、ショボショボと濡れたやうな目をもつた小男で、熊と相撲をとる時も、極めて元氣のない、ほんの事務的にとつてゐるといふ風であることが子供の私にもよくわかつて甚だつまらなかつた。

けれども、此の小男の慘めな恰好と慘めな役目とが私の注意を引きつけて、私は熊よりはこの男を見るためにその小屋に通つてゐたやうなものであつた。無論、私がみじめと感じたのは、此の男が生活のために熊の玩弄になつてゐる憐れさといふやうことを思つてではない。たゞ全體の恰好や、その機械的の動作が、熊のそれとは比較にならぬほど振はないものであつた。齒をぬかれ、鼻に環を通されてゐても、熊はまだ、その自然から與へられた性質と態度と形とを全く失ひきつてゐないことを多くの機會に示してゐるのであつた。反之、小さい赤シャツの男は、どこに人間の自然から與へられた性質や態度や形が殘つてゐるかと疑はれるのであつた。それは子供の私の目が如何にこの赤シャツの男を見つめてゐても、ちつとも人間を見てゐるといふ感じを與へられないことによつても明かである。

それにも拘らず、子供の私はこの見世物小屋に入ると、此の男に私の注意の全部を奪はれて、熊や熊使ひは、此の慘めな男のみじめさを完成せしめるための存在に過ぎないやうに思はれた。實際、此の男を中心として考へれば、此の見世物小屋そのものは、熊や熊使ひや、それを見物する多くの人間やをひツくるめて、小さい赤シャツの男のみじめさを作りあげるために出來上つてゐる世界である。

無論、子供の私は、そんな風に考へたのではないが、しかし私の小さい心の働きは、熊や熊使ひの上にちつとも働かないで、ひとへにこの毎日何度となく熊にころがされてゐる小さな男の上にばかり働いてゐたのである。其の子供の私がもし歷史家であつたら、此の見世物小屋の歷史を、此の男を中心として書くより外はなかつたであらう。私がもし詩人であつたら、此の見世物小屋の詩を、熊や熊使ひに於て見出し得ないで、此の慘めな赤シャツの小男に於てのみ見出し得たであらう。



○愛する人を語る憎むが如く、憎き人を語る愛するが如し。

○ベントリロキストは腹にて物言ひ、學者は鼻にて物言ひ、富豪は金にて物言ひ、興國は劍にて物言ひ、亡國と戀人とは眼にて物言ふ。

○全く憎惡を隱蔽し得れば彼れは聖人なり、此かも憎惡を隱蔽し得ずば彼れは獸なり。

○士は己を愛する者の爲めに容り、女は己を知る者の爲めに死す。

○毒を以て殺されたるものは血を吐き、眼を以て殺されたるものは淚を流す。

○良心は屢く賣り、犢鼻褌は終に賣らず。

○女子は月經に支配せられ、男子は月給に支配せらる。

(如是閑語より)

權力の外に在る世界

――砂山をめぐる子供の共同の享樂――

一

震災後、道路や家屋の修繕に使ふ砂がところどころの道端に積みあげられてゐるのを利用して小さい子供達の間に一種の遊びが流行り出した。それは砂を榮螺形に高く盛上げて、その頂上から螺旋形の道を作つて、それにボールを轉すのであるが、その道の途中には、波形に高低をつけたり、長いトンネルを穿つたり、複雜な道路を作つたりして、轉つて行くボールが上つたり下つたり、隱れたり現はれたりして、結局思ひもよらぬところにころがり出すのを樂むのである。

私は屢々殊に停電を喰つた折などには甚だ詳細に、水道橋の停車場の高いプラットフォームの上からそのすぐ下の、濱邊の砂丘のやうに連續して積みあげられた砂丘でそのあそびに熱中する子供を見下ろした。

そこにあそんでゐた四五人の子供が、いつの間にかその砂あそびに取りかゝつた。その子供達は無論何の意圖もなしにたゞ偶然にそこに集まつた爲に過ぎなかつたであらう。そのうちの誰れかが發議したのか乃至は期せずして皆がその遊びに取りかゝつたのか、何れにしてもそこにそのあそびが始められたのである。すると子供一同は、互にそのうちの誰れ一人から命ぜられ、譯でもなく、またそれに協同したければならない何等の拘束があるのでもないのに、それが恰も當然のことであるやうに、直に一致の行動を採つて、極めて自然にそのあそびに協同したのであつた。

無論、それを見てゐるとわかる通り、そのあそびをはじめた子供等のうちの一人か二人かは、その大工事――子供にとつてはそれは可なり複雜な科學と空想とを要求せられる立派なエンヂニアーリングであつた――において、萬事に先手を打つた。設計は大體彼等の胸裡にあるそれによることとなる。砂を盛り上げる基礎的の仕事に、その少數者がまづ手を下したやうに、その後の工事の進行も彼等の手の動きがその大綱を決定した。プランも見取圖もないので、彼等の工事は、彼等の行動の動きに從つて創造されて行くのであつたが、それを決定するものは、大抵、先手を打つたその一人か二人であつた。

この少數の子供を假りに指導者と呼び、それに參加した子供たちを協同者と呼ぶならば、指導者の手の動きがその砂山を螺旋形に廻る大工事を產んで行くのであつた。外の子供たち即ち協同者は、その指導者の手先の動きを一心に見まもることによつて、自分達がその工事において働くべき行動を見出す外はなかつた。協同者は極めて自然にその遊びに參加したと同じ樣に、極めて自然に、指導者の行動――その工事に關する指導者の一擧一動を見落すまいとするのであつた。それは、もし彼等がその指導者の行動を見失つたならば、その瞬間から彼等は自分達を何う行動させていゝかがわからなくなるからである、とでもいふやうであつた。

指導者等は――工事の進行につれて指導者が次第に單數になる傾きが見えた――その小さな頭に湧いた創造の曲線を、すぐと彼等の手先の働きに現して、榮螺形の砂山の山腹にいろ／＼

のカーヴを作り出すのであつたが、協同者達は、その指導者の行動そのものを見守ることによつて、指導者の創造的衝動が一系の意圖となつて働き出されるその意圖を見出し得て極めて自然的にそれを追從するのであつた。ことさらに追從する—といふやうな意識があるともいへない位彼等はたゞ行動的に、指導者の行動に吸ひ込まれて行くのであつた。それは一つの行動をめぐつて他の行動が回轉するのであつた。

　見てゐると、指導者の手先の働きが、一定の曲線を創造すべく動いてゐる、と協同者たちの手先はその曲線のつゞきを創造すべく動いてゐるのである。時々は指導者が言語で命令する。また指導者の手先が、協同者の手先の動きを行動で指示することもある。けれどもまた協同者自身の創造した曲線が成立して、そのつゞきを指導者の創造した曲線が從つて行くこともある。時にはまた指導者の創造と協同者の創造との間に矛盾が起つて、言葉あらそひが起り、また行動でのあらそひが起ることもある。さうして、それの結局は、必ず指導者の方に決定するといふ譯でもないらしい。

　指導者が讓ることもあるであらう、また何つちが何うだか曖昧のうちに、何つちがきめたともつかない方向に——恐らく、雙方の不滿な方向に——曲線が創造されることもあるであらう。併し、大體において、協同者は指導者の意思に引つ張られることを免れないにちがひない。殊に、愈々曲線が複雜な工程に入つて、トンネルの中腹を穿たねばならないといふ場合や、興味のある岐路や迷路が作られねばならないといふ場合になると、指導者が先手を打つと共に、その創造の中心を握ることによつて工事が進行される。その場合、協同者はポカンとして、指導者の天才的な創造的な設計が何う實現されるかを注視する外はない。

二

　さういふ時は、協同者が指導者に對して最も從順になる時である。さうして創造に對する驚異が、指導者に最も指導者らしい權威を賦與するのである。工事がそこでは無論可なり困難となる。從つて指導者が協同者の助力を要求することも最も強い時であるが、その要求は極めて滿足に協同者によつて充される。協同者はその場合、殆ど單純に機械的の仕事を、取らされることになる。協同者は、その場合、さうすることが最も協同的であるといふことになるのである。從つて指導者が最も命令的な、最も強制的な態度をとることの出來るのもさういふ時である。そこにどんなおどろくべき創造が産み出されるかを、吸ひ込まれるやうな興味でながめる外に手の下しやうを知らない協同者は、前に、指導者の行動を見まもることによつて、彼等自身の行動の針路を見出したのと違つて、こゝではいくら熱心に指導者の行動を見守つても、協同者彼自らの行動の方向を見出し得ない。けれども、協同者は、たゞぼんやり見守ることだけのためにそれに參加したのではないのであつて、見守ることは、行動することの前提としてである。がこの場合、見守つてゐるだけでは行動の暗示が與へられない。で協同者は、たゞ見守つてゐるのではあるが、それは實は行動の暗示が、今得られるか、今得られるかと思つて待ち構へてゐるのである。で指導者が、一寸でもその暗示を與へると、協同者は、所謂響の物に應ずるが如く、即座にその暗示に應じて行動するのである。だから、この時、指導者が明らかな言語で命令すれば無論のこと、顎の先でちよつと何かを暗示しても、協同者は、慌てふためいて、それに應ずる行動を採るのである。

　そのやうな極めて自然なさうして極めて鞏

固な一致が、最も困難な工程において最も完全に現はれることは注意に値する事實である。それはうはべから見た形では「權力」といふ大人共の世界に行はれてゐるいかめしい、ぎごちない作用とおなじもののやうに見える。けれども、この場合は、指導者と協同者との間に、一方の人格の意思が、他方の人格の全生命と全生活との上に、理由もわからず作用もなく、たゞ先天的の命令、神祕的の脅威として君臨するといふやうなことが、爪の垢ほどもあるのではない、それはたゞこの大工事における指導者の創造力が、その工程を押し進める力として、現實に働き出されるその作用に、協同者が、何等の壓迫や脅威を感ずることなしに、その工事に自然に參加したとおなじやうな自然さを以て協同するに過ぎない。しかもそれは、指導者だけの工事ではない、指導者だけが享樂するあそびではない。指導者と協同者とは、全く渾然たる一體をなして、この一系の生活を生きようとして、そこに一個の共同社會を作り出してゐるのである。

『さあ皆來い、球ころがしをこしらへよう。』

なる程、誰れか一人が初めにさういつたかも知れない。けれども、

『さうだ、こしらへよう、皆手つだへ。』

さういつて參加したものは、初めにそれを發意したものに、征服されてゐるのでも何でもない。砂山に集まつた一群の子供の行動が、當然にそのあそびにまで進行する過程にあつたことを、初めの一人が示唆したに過ぎない。『さうだ。』と皆が應じたのは、その示唆が、自分達一同の自然の進行と一致してゐることを表示したのである。

工事の進行が、指導者の意圖によつてゐるのも、それは指導者の意思が、全的に協同者の意思を壓迫してその意思でその生活をへシ曲げようとしてゐるのでも何でもない。指導者がその工事に對して持つてゐる特殊の能力が、その工事に作用してゐるに過ぎない。

三

さうして、その工事そのものは、指導者と協同者とを含んだ一群の意圖であつて、それは、そのうちの誰れ一人でもの意思の强制に發程したものではない。いはゞ指導者の能力は、その一群の意圖に服從してそれに奉仕すべく作用してゐる力に過ぎない。それはその群を支配するものの力ではなく、群に奉仕するものの努力である。しかして協同者の努力もまた、指導者の意思と利益とに役せられる奴隷の骨折りではなく、彼等自らの意思と利益とを働き出す彼等自らの爲の行動である。指導者と協同者とは、引つくるめて、その一群の生活を働き出す爲に働いてゐる人々である。そこには、一方が他方の生活を働き出す爲に使役されてゐるものは一人もない。そこには、一人の主人もなく、一人の奴隷もない。强ひていへば、皆が主人であり、同時に皆が奴隷である。

見る〳〵うちにマウンテン・レールウェーが出來上つた。

子供等はそれを取り圍んでぐるりと圓を作つた。

『さあ、ボールだ〳〵。誰れかころがして見ろ。』

口々にさういつた時には、もうそこに指導者も協同者もない。一同は圓い輪を作つて、上位も下位もない地位に安定してゐた。だれの額にも、この山は己れ一人のものだといふ色は示されてゐない。それはその筈である、一同はその山を作るについて、いづれほどかの程度で創造者でなかつたものはない。しかもその創造者の誰れ一人も、たゞ思想や言語の上でのみ創造者

にとゞまつてゐたものはない。みんな行動そのものを以てした創造者だつたのである。

ボールを持つてゐた一人がそれを山の頂上の出發點に置かうとした時の一同の緊張した様子は、どうであつたらう。進水式の槌をうつ人のやうな態度で、その子供がボールをそこに置いてその手を高く擧げると共に、ころ／＼と轉り出したボールは、榮螺をぐる／＼まきにしてゐるカーヴを、なめらかにまた澁滯して、上つたり下りたりして走つた。ボールが岐れ道の一つをえらんだり、谷に渡された橋を渡つたり、トンネルに入つたり出たりするたびに一同は手をたゝき足を踏みならして喝采した。さうしてしまひに、複雜なトンネルの中にボールが停電してしまつた時には、一同はバネ仕掛けのやうに身體を背りかへさせて大笑ひに笑ひこけた。

その時、眞つ先にその停滯してゐるボールを救ひ出さうとして働きだしたのはやつぱり指導者であつた、大人共の世界で『責任』といふ六づかしい稱呼をもつて皆に回避されてゐることがこの子供の世界では苦にもされずに、直にその當の責任者によつて果されるのであつた。そこには、それを强制する一行の法律文がある譯ではない。まして、それをしない時に負はされるいましい制裁なんぞのある筈がない。それを教へる譯のわからない、倫理學といふやうなものがあるのでもない。それにもかゝはらず、指導者は、打ては響く自然の物理の様にすぐと進み出てボールを取り出す仕事に取りかゝつたのである。下から手を入れてトンネル内の道を取り擴げるとすぐとボールはころがり出た。けれども、すぐとまた大きな山くづれにあつてボールは砂に埋もれて見失はれてしまつた。

その邊の山をくづしてそれを取り出す外はないことになつて一同がまた協同の行動を開始した。そのうちに私は、いつのまにか指導者が代つてゐることを發見した。無論新たな指導者に對する協同者の態度は前の者に對すると少しの變りもなかつた。それは即ち、前に指導者であつたものが今度は協同者として忠實に行動してゐることを意味するのであつた。それも亦當りまへの事に過ぎないが。

指導はもと／＼その工事に對する行動の能力だつたのである。それは決して指導者の人格に先天的に賦與された神祕的の力ではない。それは現實の能力そのものの全體の協同行動の有機關係のうちにもつてゐる役割に過ぎない。だからその役割をつとめ出す力のあるところに指導關係が移つて行くのはあたりまへのことである。けれども大人共の世界においては、それが決して、さういふ自然の關係に從つて動いてはゐない。それを自然の關係に從つて移動させようとすると、必ずそこに大なる闘爭が起る。それは誰れが惡いのかよいのかは別として、兎も角も大なる闘爭がそれに伴ふばかりではなく、闘爭の結果が往々その自然の進行と相反する終局に陷るのである。それもまた當然のことではある。闘爭がもし、その子供の世界に起つたとしても、それは必ずしも指導の能力に依存して終局するときまつてゐないことはいふまでもない。闘爭の强さは、この工事の能力の有無とは別の關係だからである。しかも、大人共の世界では、その全く無關係の闘爭の强さが、この工事の指導關係を決定するのであるから、まるで方程式を逆推しで解くやうなものである。そんな無茶は、この子供のあそびに行はれる筈はなかつた。いつのまにか指導者が代つてゐたのは、この工事に對する能力の自然淘汰が、ちつとも人爲的に反抗されずに行はれてゐるのであつた。工事の全體の有機關係に從つてすべての人間が機能的にそれ／＼その地位を定められてゐるのであつた。誰れ一人の意思が

皆をこの有機關係に反する不自然な地位に壓迫するやうなことをしなかつたのである。

四

ボールが幾度も〳〵轉されるうちに幾度か改築が行はれ、幾度か指導者が交代して、益々完全にボールがころがり、いよ〳〵複雜なカーヴが作り出され、いよ〳〵奇妙なトンネルが穿たれ、ボールが思ひもよらぬ所に現はれたり、隱れたりするのを、子供たちは餘念なく樂んだ。

この享樂には全く指導者も協同者もなかつたのみならず、おどろくべきことには、そのマウンテン・レールウエーの大工事に參加しなかつた子供等までが――たゞ傍觀者として突ッ立つてゐた子供等は無論の事、偶然そこを通りかかつて立ち止まつた子供等までも――そのあそびに加はつて、砂山をめぐる子供のむれが忽ち數倍の大きさに膨脹したことであつた。指導者も協同者も、自分達の骨折りの結果を享樂するにあたつて何の骨折りもしない子供達がおなじやうにそこに加はつてワイ〳〵歡呼して、中には自分のボールをそこにころがすものさへあつても、まるでその子供達が初めから協同者ででもあつたかのやうに、ちつともそれを仲間はづれにしようとしないのであつた。

無論、そのうちの誰れかが、この大工事を破壞するやうな行動に出たならば、協同者一同は、一群となつてその亂暴者を追ひ拂つたに違ひなからうが、私の見てゐた時には、いつも決してそんなものが現はれなかつた。けれども、もし協同者だけが、自分達の作つた享樂物を全く獨占して、他の子供がそれの享樂に少しでも參加することを絶對に拒みでもしたら、屹度、さういふ亂暴者が現はれたに違ひなかつたであらう。つまり、協同者が自分達の骨折りの結果を享樂することを他の子供に頒つて少しも惜しまなかつたことが、それを破壞しようと企てるやうな亂暴者を生じない所以なのである。

獨占と排他が大人の世界の「社會秩序」と稱するものであるのに反し、この子供の世界では、共同の稼業が當然の「社會秩序」なのである。大人の世界の法律には『自分のものは絶對に自分のものだ』と規定され、その規定がまた絶對の支配を主張してゐるに反し、子供の世界には、『自分のものは皆のものだ』といふ事實だけが支配してゐて、そんな規定を固執する法律さへも持つてゐないのであつた。

しかも、そんな鐵鎚のやうな法律を有つ大人の世界が動搖と混亂と闘爭とに終始し、そんな鐵鎚をはめられてゐない子供の世界がこのやうな平和と一致とに終始してゐる。もしそこに、誰れか一人、鐵鎚をもつて皆を縛らうとしたらそこから動搖と混亂と闘爭とが生れたにちがひない。併し惜しいことには、私の見てゐる間は、そのことを證明する事例が起らなかつた。

高いところから、この子供の世界を見下ろしてゐる私は、自分の生きてゐる世界とこの子供の世界との間に越えることの出來ないへだたりがあるやうに思はれてならなかつた。しかも、私たちの世界が、今私の足下に見下ろしてゐる子供の世界に對して天國であるとは思へなかつた。私の足下の子供の世界は、私の頭の上に想像されてゐる如何はしい天國よりも遙かに天國らしい天國であるとしか思はれなかつた。

この私の足下の天國の片影さへが、私達大人の世界の何處かに見出されるだらうかと、私は考へて見た。私は僅にそれを、無智と無學との點で子供といふ自然人に最も近い人達の間に見出し得るやうな氣がした。私は古風な棟上げをしてゐる一群の鳶のものを想像した。一人の指導者が全體の協同行動を統率すると同時に、彼

れはその行動において矢張り一人の強者として現實にその機能を働いてゐる。彼れは合唱におけるソロのやうに、美音を發して木遣りの音頭をとるが、それはたゞに音聲だけで協同するのではなく、同時にその建築の協同動作の行動を以てする、指導者でもあつた。建築の仕事の指導者が同時に合唱のソロを演ずるほどの美音を持つことは、餘りに好都合のことであるが、併しその好都合が誠にうまく出來上つてゐるのであつた。さうしてこの協同の仕事において、指導者はたゞその人格に先天的に固着する不思議の力を以て他の現實の協同者を威壓してゐるのではなく、その協同動作の機能を以て、その機能が中心的たるゆゑを以て、その中心に立つてゐるのであつた。

私はまた、百姓の一家の勞働を想像して見た。その野良仕事において、父は、その勞働において、たゞ年齢に附隨する神秘の力や、偶然先きに産れたといふ何でもない事情――その勞働の關係においては何でもない事情――やによつて妻や子を彼れに從順ならしめてゐるのではない。父は、その勞働關係において彼れの分擔する機能を以て、その協同者を指導してゐるのである。だから、子が壯年になつて、父が老衰すると、指導關係は顚倒して、父は子を中心とした協同動作に從順に參加して働くこととなるのである。さうしてこの指導者の交代は、鬪爭もなければ混亂もない極めて平和の有機關係でいつのまにか行はれ、事々しい儀式さへもありはしない。

この子供に近い自然の人達が、一たび今日の組織のうちに働く人となると、その上で君臨する監督者を要し、法律を要し、制裁を要し、武器を要し、刑具を要するといふのは一體何故であらうか。それはこの人達が、砂山にあそぶ子供たちのやうに、自分たちの世界を自分たちで作り上げてゐるのではないからである。砂山の子供たちでも、彼等の協同勞働の結果を彼等自身享樂することが出來ないとなつたら、そのマウンテン・レールウエーを作るにあたつて、これを強制する監督を要し、法律を要し、制裁を要し、武器を要し、刑具を要すること大人の場合と異らないであらう。

そのことを證明するのはちつとも六づかしいことではない。私がもしこゝのプラットフォームから、子供等に向つて、

『みんなどいてしまへ。その球ころがしは己れだけが遊ぶのだ、貴樣達には遊ばせない。どけ、どけ、みんなどいてしまへ。』

と怒鳴つたら、子供等は、憤然として私に石を投ずるか、さもなければ、自分達の完成した大工事を惜しげもなく打ち壞してしまふであらう。

そこにさういふ不自然な事情さへ起らなかつたら、子供達は、外部からの強制なしに、またそのうちの誰れか一人の脅迫によることなしに、一つの完全した、平和で鞏固な協同社會を作り出してゐるのである。そこでは、その協同動作を現實に共同に働いてゐる機能が權力であつて、武器と刑具とに依據する強制を必要としないのである。

私は、この子供の世界を見おろすたびに、武器と刑具とに依據する權力から人間社會を解放するとそこに混亂と滅亡とがあるのみだと考へる人達は、母胎から大人で産れて來たのではあるまいかと疑はない譯には行かなかつた。さうしてこの美しい子供の世界が、永久に砂の上にだけしか築き上げられない運命にあるのだと思ふと、苛立たしくもあり悲しくもあつた。

街頭で考へる

一　山寨文化

A兒——

往來のモダーン・ガールに見とれて、下駄をひつくり返してころがる大馬鹿。」と君は人のことを笑つてゐるが、然し、街頭のすべての人に注目されるべく歩いてゐる人間を、街頭の人間の一人、注文通り注目したからといつて誰れからも笑はれる理由はない筈だと私は思ふ。それがために顚倒して大怪我をした所で、それは恐らくその人の罪ではない。「これ見てくれ。」と要求されたものが、それを見るために顚倒したら、要求したものが全責任を負ふべきではないか。

君はまた「あの輕佻な風采と服裝」だけが彼女といふ人間に現はれた、時代の文化內容の全部だ。二十世紀の文化もあゝいふ表現でおしまひにされては泣くだらう。」といつてゐるが、それなら二十世紀の文化は、その外にどこにどんな風に私ども往來の人間に對して現されてゐますか。

なるほど彼女の風采や服裝やの外に二十世紀に現はれた文化には立派なものがありませう。それは藝術となり、學術となり、哲學となり、ラヂオとなり、何々となり、豐富な內容と形式とをもつた立派な文化が時代の街頭に行列してゐるでせう。然し、われ〳〵往來の人間が、その文化の表現に對して、たゞポカンと口を開けて見送つてゐるに過ぎないことは、件のモガに對する場合と全く同樣ではありませんか。

君は「あのモガにぶら下つてゐた男はあれは何だ。ふら〳〵として女の身體の中途に、まるで軟式飛行船が繫留柱につながれたやうな恰好をして、往來を浮動してゐやがる。」などと例の調子で仰しやるけれども、エヂプト、ギリシャの昔から、ある一つの爛熟した文化形式にぶら下つてゐる人間は、如何なる時代如何なる社會のそれでも、みんなあの男のやうな、ふら〳〵した、あなたの所謂軟式飛行船然たる人間ではなかつたでせうか。

猛きもののふと稱せられた武士でさへ、紅地の錦の直垂に黃金作りの太刀を佩くといふあんばいに文化的になつてしまへば、牛若乃至保昌のやうに強盜を手玉にとるものなどは、小說の外にはなくなつてしまつたではありませんか。

君はまた「あの女の無遠慮にむき出した貧乏徳利のやうな足」などといふが、女の足がどういふ形でなければならないかについて、決して絕對の標準といふものはないのだから、將來あのやうな足こそは、足下のやうな人間の胸を躍らせる足であるといふことにならぬといふことを誰れが保證しますか。

いかにも、ギリシャ以來今日までの感覺によれば、いひかへれば三千年近くの間の人間の感覺では、蚊の臑のやうな足の方が貧乏徳利のやうな足よりもいゝ足だとされてゐたから、これは女の足の形の絕對の標準だとあなたはいふかも知れないが、然しそれはギリシャ以來、否エヂプト以來今日に至るまでの社會が、文化構成の方法に於て全然同一だつたからです。卽ち、文化といふものを、文化資材を創造する人間以外の人間、——言ひかへれば、他人の創つた文化資材をマンマと首尾よく手に入れた人間——が組み立ててゐたといふ社會だつたからです。

さういふ社會では文化資材卽ち文化內容の實

質的基礎たる材料を作るあらゆる意味の生產者は、悉く奴隷か又は奴隷的の階級に置かれてゐたのでした。それはさういふ奴隷的良民から文化資材をとりあげて、自分の山寨に積み上げ、それで勝手な文化の組み立て方をして、それによつて出來上つた特殊の山寨文化を誇る人間達の社會でした。數千年來さういふ人達の社會が續いたから、その社會の人々の文化感覺も依然として一貫してゐました。

然し、一朝さういふ組織ががらりと變つて、文化資材の創造者自體が、文化を組み立てるといふ時代になつたら、われ〳〵從來の人間達はもはや、自分達には全く外國人である『文化人』が斷髮露腰で兩の乳房を突出して往來を歩くのを、ポカンと口を開けて眺めながら、下駄をふみ返して顚倒するやうな目に逢はなくて濟むことになりませう。

その代りそこでは人々は貧乏德利のやうな女に有頂天になるかも知れません。それを君は、キリシャの感覺が全く失はれて悲しい事だと思ふならば、君はやつぱり、人々から文化資材を召しあげて自分の山寨だけに、特有の文化を築き上げ、時々その山寨文化人らしい風采で往來に現はれて、人々のために、もつとよりよい山寨文化の表現を希望し、さうして、口あんぐりでそれを見送る人々を馬鹿呼ばりしてゐるがいゝでせう。

二　巡査と運轉手

B兄――

巡査だつた時は、自動車の運轉手をとつちめるのが愉快でたまらなかつた。どだいあの、人もなげに往來を砂煙をあげて突走るのからが癪に障る、スリを見ても自動車ほどは癪に障らぬ、まして賞與の種と思へば有り難いとも思ふ、違犯しない自動車の運轉手は、たゞ巡査の面に後足で砂を浴びせて逃げる動物のやうに見える、とそんな風に思つたが、自分が運轉手になつて見ると、巡査といふものがまるで大手をふつて自動車を堰き止めるためにこの世に生れて來た動物のやうに思はれて、機會さへあればその目を瞞んで疾驅したくなるのは何うしたものだらう、それに關する貴見如何、とは自分ながら倫理觀に感じたものとお察しする。

然しそれでいゝのです。君は最近の某縣知事の問題を御存じでせう。これを起訴するかしないかについて、內務大臣と司法大臣との間に問題となつてゐたが、愈々起訴に決したといふ時に、內相と法相の[illegible]の決定を[illegible]いて更に[illegible]して喧嘩腰で應對したと新聞は報じてゐますと、諸君は眞實を知らないか。

ところが、これがやはり君に於ける巡査と運轉手の場合を繰返してゐるのです。即ち起訴を決定した法相も元は辯護士で、どんな犯罪をつかまへ、も『無罪だ〳〵。』と主張した人間です。それが司法大臣となると、『有罪だ〳〵』といひたくなる。而して、起訴には不服だといふ內相は、以前は檢事で、何をつかまへても、有罪だ、有罪だ。と唱へてゐた人間です。

それでいゝのです、人間は、その置かれた地位や持たされた職やによつて感情內容を決定されるものです。馬子にも衣裳髮形で、武士のやうな容裝をさせれば、馬子も『左樣然らばござる。』といひたくなると同時に、斬捨御免を、やられたのを反對に、やつて見たくもなります。

有名なジェームス・ランゲ說といふのは、悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのである、怒つたので目をいからすのではなく、目をいからすから怒るのである、といふ心理學說で、催眠術で眠らせた人間に、目を怒らせ拳骨をふり上げさせると、怒り出すのはその實驗的證明です。原といふ人に、[illegible]上の裝をさせると無罪

だ無罪だ。」といひ、それを司法大臣の椅子に坐らせると「有罪だ／＼。」といひ出す。鈴木といふ人も檢事總長の椅子に置けば、「有罪だ／＼。」といひ、内務大臣の椅子に置けば、ふら／＼と「無罪だ、無罪だ。」と囈語する。人間は地位と持物のためには催眠術にかけられます。

もしこれが反對だつたら可なり厄介なことになる。擁護すべき機關を作つてそこに人を据ゑると、その人間が反對に「有罪だ／＼。」といひ出し、起訴すべき機關を作つてそこに人間を据ゑると、其の人間が無暗に「無罪だ／＼。」といひ出しては、折角作られた機關が役に立たなくなる。

然しそんな虞れのないことは、催眠術で眠らせた人間に怒つた形をさせると笑ひ出すといふやうなことが決してないのによつても確かです。

君がサーベルを握つて街頭に立つた時は、自動車違反を待ち構へるといふ氣組でゐてよろしい。君が自動車のハンドルを握つたら、巡査の目を盗んで自動車を疾走せしめようと思つてよろしい。

さういふと君は、では俺が自動車會社の社長や株主になつたら、運轉手をこき使ひ、乘客からは貪り取り、それによつて莫大な資本と、壯麗なビ・ディングと、その中に盛る多數の無産社員とを作り出すことを考へてもそれでいゝのかといふでせう。

無論それでいゝのです。たとひそれが惡いといつた所で、それがために社長を免職させ株主に制裁を加へ得る、運轉手に對する巡査のやうなものが何處にもゐなければ、結局それでいゝこととなります。

するとその莫大な資本から『日本帝國』が出來、壯麗なビルディングから『文明日本』が出來ます。日本のために物が出來ずに、物のために日本が出來ます。これもジェームス・ランゲ説です。

人間が物を作るのではなく、物が人間を作るのだから、人間が物を支配せずに、物が人間を支配するのは當然です。日本の神々も物を創らずに皆物から創られてゐます。素盞嗚尊も鼻を洗つた水から創られたのです。

だから人間は、銘刀をもてばふら／＼と人を斬る氣になり、莫大な軍備をもてばふら／＼と戰爭を起す氣になり、女を見ればふら／＼と戀する氣になります。物のために縛られるのは泥棒ばかりではありません。

カントやヘーゲルなどといふ哲學者といふ人々がそれを口惜しがつて、『人間は自由だ。』といふことをくど／＼と、字引のやうに嵩高の書物に書き殘したが、そんなものを讀むのは大學の先生だけで、しかもそれを讀んだ先生達も、自分に月給をくれてゐる國が世界中で一番いゝ國だと考へてゐる(?)始末です。

だから人間は、正しく置かれ、正しく持たせられることを要求するのです。

三　黄金の犂

（上）

C兄——

先日知らせて下すつた、君の郷里の日向の國の傳説を、私はいろ／＼の點で面白いと思ひました。

お話は甚だ簡單で、權現山といふ山の麓に『みすみ田』と呼ばれた小さい田があつた。そこに毎晩犬が來て吠える。村の神主がその犬の吠える方向を辿つて權現山の頂上を探したら、黄金の犂が發見された。村の人はそれをその山の頂上に祀つて、村の名をそのまゝ田代神社と呼んだ。たゞそれだけのことですが、その山の麓を白馬に乘つて通ると必ず祟りがある。そこ

で村の人々は、田代神社の祟りだらうと、その社を山の頂上から中腹に移したらその祟りはやんだが、神社の神體の「黃金の犂」はいつのまにか鏡に變つて居た、と君は記してゐます。

私は君の手紙を受取つた時、丁度ある問題を考へてゐたのでした。それは人類學者の「カルチュア」と稱する、一定社會に於ける生活典型――卽ち衣食住に關する諸形式を初めとし、言語、信仰、道德、風俗、習慣、其他の諸制度――の分配過程といふやうなことに關してでした。如何なる國家、如何なる時代に於ても、一つ社會に、文化といふものが同じやうに分配されてゐないで、社會の層が異るに伴つて、各、嚴重な限界をもつて享樂すべき文化が偏頗に分配されてゐるといふことは何に原因してゐるのでせうか？　それは歷史的には必ず宗教政治の階級制卽ちハイアラーキーに伴つてゐたやうに言はれますが、その宗教的階級制といふ差別は、つまり社會的の層が出來たことに原因してゐるので、普通考へられてゐるやうに、宗教的の階級が出來たから、社會に異る層が出來たのではなく、その反對に、社會に層が出來たから制度としての階級が出來たものと思はねばなりますまい。さればその層の出來たもとを考へなければならないが、それは今日の所謂有權者、無有權者等の國家制度上の差別と同じやうに、財産上の區別であつたと考へられます。けれども、さういふ財産上の層が出來たのは、要するに歷史の上から見て、社會的生活の典型を異にするものが一つ社會に纏められたといふ事實によつたものと認めねばなりません。さうしてその最も單純な形は、戰鬪型の社會と農耕型の社會との混用であつたといはれます。

然し、私は今君にそんな理窟をいはうとしてゐるのではありません。たゞ丁度そんなことを考へてゐた所に、君の手紙の傳說の話を讀んで、そこに何かの聯絡を感じたのです。

あの傳說が何を象徵したものか、それを私ははつきり判斷することは出來ませんが、凡そ神話的の傳說は、夢と同じやうに、空想的な、內的の慾求を含むと同時に、夢よりも合理的な現實の經驗によるそれの修正を含んでゐます。つまり夢と現實の歷史との中間的の性質をもつてゐます。

『黃金の犂。』さういふものは全く空想です。誰れの空想かといへば、決して戰鬪型の社會人の空想ではありません。何となれば、さういふ典型の社會の人々が、黃金を用ゐるならば必ず彼等の生活の要具たる武器にそれを用ゐます。決して彼等が最も貴いものと考へる黃金をもつて彼等の生活に何等重要な道具ではない犂などを作らうとはしません。だからそれは決して彼等の空想ではない。

されば黃金の犂はいふまでもなく、農民の空想です。さうして農民にとつては、それは空想以外に決して與へられないものです。「黃金の太刀」といふやうなものは、戰鬪型の社會の人々にとつては、決して空想ではなく、現實に持ち得るもので、事實、黃金作りの太刀が早い時代から澤山に作られたことは、わが古墳の發掘の度に證明されてゐます。反之、「黃金の犂」は空想以外にはありません。空想としても、この田代神社の傳說以外にあるか何うか知りません。

何故、農民が、黃金の犂などを空想したでせう。犂は實用として鐵が最もそれに適した金屬です。尤も、甚だ硬い黃金の犂が出來たら鐵以上かも知れないが、黃金と犂との聯絡の如きは農民の慾求として決して發生すべからざるものと思はれるほど無用の結合です。黃金作りの太刀といふやうなものは、武器の性質上、優越を示す所の威嚇力を作ふ必要があるので、當然考へ得られることですが、犂が黃金である必要は何

處にもありません。農民が彼等自身の心理からそんな慾求の出る譯がないではありませんか。

そこで、社會層の問題です。農民は自分の社會層に於ける彼等自身の心理に於ては決して起り得ない慾求を、他の社會層を見ることによつて、言ひかへれば、他の社會層に教化されることによつて得たのです。

（中）

黄金といふものの使用を獨占したのは、農民の社會ではなく、その上層に位する戰鬪社會でした。即ち軍國貴族の社會です。この社會では、黄金をもつて、彼等の階級の生活の尊嚴をシンボライズするものとしました。無用に輝く、といふ意味からは全く適切のシンボルでした。さうしてそれの使用を自己の階級の、しかも最上級に限定しました。その最上級に於ては、黄金が甚しく濫用されたと同時に、他の階級に對しては絶對にそれを禁止しました。貨幣としてさへ金貨は一般人の使用を禁じられました。德川時代までは、わが國の通貨は、階級によつて金、銀、銅とそれぞれ使用範圍が限定されてゐた位です。

そこで夢が現實の制度を超えて跳躍するやうに、神話も右のやうな現實の禁止を破つて、農民は、黄金の犂にまで跳躍したのでした。しかも農民は、彼等自身の階級の生活範圍内に於て跳躍したのではなく、それを飛び出して、上層階級の文化典型に侵入したのでした。

黄金は農民社會の文化的金屬ではありません。それはダイアモンドがプロレタリアの礦物でないのと同じです。ダイアモンドのハンマーといふやうな突飛な結合は、勞働階級の空想としても病的なものですが、『黄金の犂』も病的の點ではそれに讓りません。それは軍國階級の文化典型を全く無意義に、決してそんなものの生れる筈のない階級に結びつけたものです。いはゞ飛騨の山奥の樵夫がアフロデイットを幻に描いてゐるやうなとんちんかんです。尤も、さういふとんちんかんは、今日は現實に於て盛に行はれてゐます。牛に曳かれた肥桶車の横行する東京の郊外に、ハリやロンドンの地獄町に見るやうなバーのあるのも、そんなとんちんかんの夢を現實にもち來したものでせう。これは、縱に層の違ふ社會の下層から上層への空想的飛躍の代りに、横に層の違ふ社會の片隅の層から眞中のそれへの横飛びです。

デリゲン小説のヒロインのやうな女が、一肥桶の市の中に現はれゝば、村の犬は乾度それに吠えつきます。それと同じ道理で、黄金の犂は、毎晩々々犬に吠えられました。農民社會の犬は、決して鐵の犂には驚きません。軍國社會の犬が黄金の太刀に驚かないやうに、けれども、その犂が農民社會的ならざる不思議な黄色い光を發すれば、村の犬の驚いて吠えるのは當然です。

農民は、自分で作つた空想の反社會性を、即ち軍國貴族的文化理想――農民社會と對立的地位にある階級の生活態度から生れた文化理想を、言はゞ敵方の守護神を、自己の社會におびき入れた逆說を、犬に吠えさせるといふことによつて自分から否定してゐます。犬は人間の生活を脅かすものを吠える動物と信じられてゐます。その意味で、黄金の犂は、犬のために盗賊の類と同視されたのでした。

君の記述によると、その犬の吠えるのを初めて怪しいと感づいて、そこに出かけたものは神主だといふことです。その神主は犬の吠える方向を見究めて、それが權現山の頂上だといふことを發見したのださうです。神主は當然そこへ出かけようと考へた譯ですが、然し、神主は自分だけでそこに行くことが出來なかつた。そこで一人の獵師の老爺に頼んで、山に分け入り、

漸くその地點に辿りついて、その「黄金の犂を」見出したのだといふことではありませんか。

こゝにまた、社會層の問題が現はれてゐます。神主は重大な發見をしたが、卽ち方針を見出したが、自分からそれに從つて行動する力をもたなかつた、さうして獵師の老爺によつて初めてそれを爲し遂げることを得た、といふのは何ういふ意味でせう。

それはいふまでもなく、神主と獵師とが前申したハイアラーキーの社會に於て、それ〳〵異る層に屬してゐるものであり、從つて、神主は、獵師的社會層に於ける行動をとる能力を缺いてゐたからです。

同じやうに、農民等は、犬の聲によつて、黄金の犂の在る方向を發見することが出來なかつたのです。それを知るには神主を待たねばならなかつたのです。神主といふものは、實際、原始社會に於て、魔術者として常にさういふ役目に當つてゐたのでした。天文、氣象、醫術、農耕、狩獵等に關する學術や技術やは、神主の領分でした。後の文明社會に於ても、神主階級でこそなけれ、やはりそれは社會層的に分かれて、農民階級自體に屬せずして、それの上に君臨する社會層に屬し、農民は、その上層社會の知慧に盲目的に從屬する外はないのでした。

（下）

で「黄金の犂」は神主の知慧と老爺の行動とによつて發見されましたが、神話は、何ういふ風にその犂を處理しましたか？

無論村の人達は、それを實用の農具に使用しようとはしませんでした。何故でせう？　いふまでもなく、それが黄金で作られてゐるからです。

何故黄金で作られた犂は實用にされないのでせう？　武士は現在に、金の鍬形打つたる兜を猪首に着なし、黄金作りの太刀を佩き、金覆輪の鞍を置いたる連錢蘆毛の馬に跨つて、實戰に臨んだではありませんか。彼等は、黄金が實用を妨げるとは考へてゐません。それを、農民は何うして「黄金の犂」を忌避するのでせう？

それがやはり社會層の問題なのです。黄金は武士にとつては實用の金屬ですが、農民にとつてはタブーです。所謂禁斷の果實です。農民は、黄金の光によつて威嚇されるべき地位にあるもので、黄金をもつて威嚇すべき地位にあるものではないのです。從つて農民は黄金に威嚇されるやうに數千年來「教化」されて來たものです。黄金を見ることとそれを獨占する階級を見るが如くせよとは、彼等のうけた魔術的教訓でした。そこから黄金は農民に對し、催眠術的威力をもつた金屬となりました。自己を壓迫する階級は、自己にとつての神であるといふ風に教訓された農民は、黄金が、上層階級の壓迫によつて絞られた農民自身の膏血の結晶であるといふ事實は、その膏血の結晶を神化するところの教化のために、農民には認識されなかつたのです。農民は自分の作つた米を、上層の社會に作つて、自分は稗麥を喰つてゐたと同じやうに、自分の掘つた黄金は、自分の作つた白米と同じく、神化されて、彼等の手の屆かぬ上層に舞ひ上り、彼等はたゞそれをタブーのかゝつた貴い物として遠くから拜んでゐることが出來るだけでした。黄金の貨幣は、農民はそれを使用することは許されずに拜むことだけを許されました。だから九死の病夫は、それを煎じた湯を飲んで命が救はれるとさへ考へたのでした。それは帝國貴族に壓迫されながら、その爪の垢を煎じて飲まんことを希つたのと同じでした。

さういふことは今日の社會にも絶えず行はれてゐる事實です。黄金式階級文化をもつた階級の下積みとなつて、その文化をタブーされてゐる人々でさへ、その黄金式階級文化の爪の垢

を煎じて飲んで、自分達の文化的生命が救はれたと考へてゐるものが、そこらに澤山居るではありませんか。

で農民は、「黄金の犂」を農具に實用しないでそれを何うしましたか？

彼等は「黄金の犂」を神に祭つてしまひました。

元來農民は農具を今の人の考へるやうなただの道具とは考へませんでした。農具自體、農民と同じやうな生命をもつて働いてゐる生物でした。道具は人間に、すべてさういふ關係で結びついてゐました。古代の唯一の機械的動力であつた水車をギリシャ人は、生きた魂をもつた、有力な伴侶と考へました。

道具は、農民や工匠にとつては、全く生きた伴侶でした。たゞそれはその感情を言語やそぶりで現さないために、まるで恐ろしく口數の少い且つ喜怒色に現さない人間のやうな神祕さをもつた伴侶でした。けれどもそれは確かに仲間です。同じ階級の働き手です。農具は農民に命令し農民を支配する權威者ではなく、彼等を扶助し、誘掖する協力者でした。

然し、その農具も黄金と結びつけば、忽ち農民の社會層から飛び出してしまひます。黄金が農具に結びつくことによつて農民社會に引下ろされないで、農具が黄金と結びつくことによつて上層に引き上げられてしまひます。それは黄金といふものの居るべき社會層が決定させられてゐるからです。

黄金の農具はそこで神に祭られてしまひました。君達はそれは馬鹿々々しいことだといふでせう。然し、一定の社會層に限定され外の社會にタブーされた或るものをもつたものは、必ずそれが許されてゐる唯一の社會層に飛躍してしまひます。武器や知慧をもつたものが、一躍してさういふものをもたない人々を奴隷にするのは、その武器なり知慧なりが、人を奴隷とする社會層にのみに許され、一般にはタブーされたものだからです。その武器や知慧をもてば、人は、それを獨占する社會層に飛躍してしまひます。

だから「黄金の犂」は一躍して武器と知慧とをもつた階級に祭り上げられたのです。

然し、面白いことには、この神は、白馬に乗つて通る人間に祟りました。黄金でこそあれ、犂は犂です。農民の伴侶です。白馬に乗るやうな人に對して、卑屈な服從を強ひられてゐる農民に代つて、威力を得た農具は、それに復讎をしました。

所がその新參の神を山の頂上から山腹に引きずり下ろしたら、その祟りはやみました。白馬の人はそれで安泰になりました。

ところが、その「黄金の犂」はいつの間にか鏡に代つてしまつたといふことです。

鏡は、黄金の屬する階級の支配意識のシンボルです。犂も黄金化すれば、農民社會的生活意識を失つて、いつか鏡に化けてしまひます。

さうしてもはや全く農民社會を離れて、それに命令し、それを支配する鏡の地位をとります。

だから農民は、權現山の頂に立つことを得ても、決して黄金の犂をそこに舁ぎあげてはいけません。ましてそれを鏡に代へてはいけません。それをすれば農民は最早農民でなくなります。

農民が鐵の犂をもつて權現山の頂上に頑張ることになつたら、此の傳說とは少し違つた歴史が出來上るでせう？ さういふ時代はいつ來るのでせうか？

四 ずるい主人

D兄——

「何某が家僕、その主人に對し、さしたる罪

なかりしが、その僕を斬らざれば人に對して義の立たざることありしに依て、主人その僕を手討にせんとす。僕、憤り怨て云、吾さしたる罪もなきに手討にせらる。死後に祟をなして必ず取殺すべしと云、主人わらひて、汝何ぞたゝりをなして我をとり殺すことを得んや、といへば、僕いよ／＼いかりて、見よ、とり殺さんといふ。主人わらひて、汝、我を取殺さんといへばとて、何の證もなし、今その證をわれに見せよ、その證には汝が首を刎ねたる時、首飛んで石に齧つけ、夫を見れば祟をなす證とすべしと云。さて首を刎ねれば、首飛んで石に齧つきたり。その後何の祟もなし。ある人主人にその事を問ければ、主人こたへて云。僕、初には祟りをなして我を取殺さんとおもふ心切なり。後には石に齧つきてその驗を見せんとおもふ志のみ專らさかんになりし故、祟をなさんことを忘れて死たるによりて祟なしといへり。

私は兄の手紙を見て、ふとこの山崎美成の「世事百談」にある話を思ひ出しました。

兄は先頃から維新史に興味をもつてその研究に沒頭されてゐることは豫て承知してゐましたが、御手紙によると、その研究が段々深味を増して、今まで何の興味も惹かなかつた些末の事柄に云ふべからざる興味を感じ出したと同時に、その詮索の容易ならざることに氣づいて、聊か望洋の嘆を發したといふことです。

ご尤もです。いつぞやも、或人は、維新當時の人が「民主」といふ言葉を初めて聽いた時どんな感じを起したか、その感じが當時の文獻にどう現はれてゐるかといふことを知らうとして大に苦心してゐるときゝましたが、私はそれならば、一そ『黑船』といふ語を初めて口に發したのは何處の何兵衞であつて、彼れはどんな心理でその語を發したかといふ詮索をして見ては何うだといつてやりました。

歷史の研究家は、自己の興味が中心となつて、特定の社會が特定の歷史を要求する理由を忘れてしまひます。維新當時の人々がフランス革命の歷史を要求したのは、當時の新生活を創造する過程に於て、さういふ過去の經驗が役立たねばならなかつたからでせう。今日の人々が維新當時を振りかへる動機が何處にあるかは問題ですが、右のやうに歷史は現在の生活を創造する過程に於て要求されるものだとすれば、生活を動的ならしめる力をもたねば、歷史の意味はない譯で、今の人が維新史を知らうとするも、それが今日の生活を動かす力をもつてゐるからでせう。兄等はよろしくその力を見出すことに努力されたいものです。

然るに歷史家は、歷史の動機を忘れることを誇る癖があります。彼等はいひます。そんなことは功利的動機といふもので、眞實の歷史はそんな動機に煩はれないものだと。

これには一分の理があります。刑事巡査が犯人の搜索に興味をもつて働く時には、探偵小說の讀者と同じく、犯罪搜査の過程それ自體を、全體の興味として、犯罪の社會的關係などは何處へかいつてしまひます。それがアリスミック・インタレストです。數學者が、數の公式そのことを生活の全興味としてそれに沒入しないならば、數學は決して發達しません。維新史も「民主」といふ言語が、誰れをどんな風にびつくりさせたかといふやうな詮索をする人を必要とすることは、大建築に砂利が必要なやうなのと同じでせうが、砂利ばかりで大建築が出來ないやうに、そんな研究はわれ／＼に歷史を與へてくれるものではありません。砂利ばかり積んでゐれば建築はいつまでたつても賽の河原です。

で歴史をして生活を動かさずに固定せしめるものたらしめようとする側では、そんな風の賽の河原的態度を奬勵します。今の人間にとつて維新史は、彼自身の生活を動的ならしめる要求に基いたものでせうが、それを珍奇な、好事的な、乃至アカデミックな容素に押し曲げて、故意に又は無意識に、歴史を、生活固定の道具にしようとするものがあります。

「歴史」や「理論」やの研究を、歴史そのもの、理論そのものゝ「證據を見せる」ことだと思ふと、『世事百談』の武士のやうなずるい人間の「證據を見せろ〳〵。」といふのに引つかゝつて、その僕と同じ運命に陷ります。石に齧みついておしまひになります。

五　最後に動け

E孃――

髮をきつたために免職になつたといふ御手紙は、いろ〳〵の意味で私を噴飯させました。

第一、今ごろ漸く髮をきるといふのが笑はせます。女の髮が高くなつたり低くなつたり、耳を出したり隱したり、髷が大きくなつたり小さくなつたり無くなつたり、そんな風に變化するのは、短ければ數ケ月で、長くて數年です。だからある流行が始まつたと思つたら、すぐとそれを實行しなければいけません。一年もたつてからそれをまねる癖がつくといつも最も舊い型を追つてゐることとなります。早く實行しさへすれば、それを抑へようとするものの出た頃は、もう次ぎの流行に移つてゐます。

壓迫する側も、さうすぐと壓迫するものではなく、必ず多少は考へる期間があります。最も早く流行に移るものは、壓迫者が考へてゐる期間を利用することが出來て、安心してその最新型を生活することを得ます。

然るに遲く流行を學ぶものは壓迫者が丁度決心した時に、それに入るのだから、すぐと壓迫されます。斷髮はもう永い間自由に跋扈してゐました。人々は、これは抛つて置いたら、すべての女の頭が男の頭と外形を同うすると共に、内容も同じになつては始末に困る故、制裁を加へようと決心するに至つたのです。そこへあなたがのこ〳〵と新しい斷髮頭を一つ加へたから、直ちに痛棒をうけたわけです。

同時に、女自身も、もういゝ加減短い髮に飽きて、今度は何ういふことにしたら男の注意をひくことが出來るだらうと目下思案中なのです。その時あなたは、恐る〳〵髮をきるのだから、とても『女性獨裁』の指導者たる資格はありません。それがため失職して泣面をするのは、あなたに相當の運命でせう。

尤も女が髮と衣裳とを長くすることは既に數千年間つゞいたことですから、髮を切り、衣服を短くする今の習慣も、もし固定すれば少くとも千年位はつゞくかも知れません。さうだとすると、あなたが今髮を切つたのを、遲いと非難することは出來ないかも知れません。

髮を切るのも足を出すのも、共に男の感覺に強くぶつかるためですが、男の感覺といふ奴もぢきに鈍つてしまふもので、中世紀の末どころではない、つい十九世紀の中頃までは女が足を出すのは男を誘惑する場合に限つたといふ程で、男は粂仙以來、それほど女の足にふら〳〵としたものです。それが、今では、女がまるで、夜河を渉る式の恰好で足を出してゐるのを見ても、誰れ一人ふら〳〵とする男もありません。もしあつたら銀座通りなどでは、日に何百人となく自動車や電車に轢かれる男がある筈です。

それほど男の感覺はぢきに鈍つてしまひます。今頃貴女が髮をきつたり足を出したりしたつて男は何とも感じやしません、たゞあなた自身が風をひく位のものです。その上免職を喰つては

全く間尺に合つた話ではありません。

然し、大多數の女は、貴女と全く同じ運命を、あなたよりも後れて追つてゐる人達です。貴女は、少數の急進的の女が、髪を切つた時には、まだ切る勇氣をもたず、といつて大多數の女が髪を切るに至るまで待つてゐるといふほど保守的ではなく、少數よりは遲れ、多數よりは進んでゐる人です。さういふ人が、一番つまらない目を見る人です。

最先に髪をきつた少數の女は、それがためにどんな目に逢はうとも、とにかくそれによつて男を驚かせる目的を達し、自己を發揚する滿足を感じ、多くの追從者をもつ誇りをもち、女の生活に一變化をもち來す動因ともなり、その行動が女の世界に何かの作用を惹き起したとすれば、女の歷史を動かした一人として生きた女だと唱はれます。

又大多數の最も遲れて動く女は、最も緩慢で最も臆病であるだけに、決してたゞ一人は動かず、必ず全體として動きます。從つて遲くはあるが、それが動く時は、女の世界全體が動いたのです。だから一人々々としては何でもないやうだが、その時の一人の動きは、即ち全體の動きで、どんな英雄の動きよりも重大の現象なのです。

ところが貴女のやうに、少數の英雄と、大多數の大衆との、どつちつかずで、早くもなく遲くもなく、所謂いゝ加減の時分に動いてゐる女は一番憐みのやうで、實は一番馬鹿な女です。

眞先に動く機會も勇氣もなかつたら、最後に動きなさい。

六　偶像の進化

（上）

F兄、——

御手紙によると西鄕隆盛は、城山で切腹したのではなく、城山から落延びる際に、附添の人々が相談して、隆盛が歩いてゐる背後からいきなり首を斬り落したのだといふ說が確かださうですが、それは附添のものが、隆盛をして所謂自腹を切らせるのは氣の毒だと思つたのか、又は隆盛が萬一腹を切ることを承知しないで生擒にされたら困ると思つたのか、などと、いろ／＼の推測がありますが、然し、解釋は何うあらうとも、右の事實が確かならば、隆盛は最後まで部下のする通りになつたもので、完全に、傳統的の隆盛らしい死に方をしたものでせう。隆盛は全く薩摩の大衆の運動に從つたものだといふのが、これまでの隆盛の解釋ではなかつたでせうか？

然し、私は貴下に西鄕隆盛を論ずるつもりではありません。一般的の指導者といふものの性質について考へてゐるのです。

通常、指導者といふ場合に、二つの全く違つた性質のものが混同されてゐます。指導者といふものには二種あります。一つは、指導の原動力で、自動車でいへばエンヂンのやうなものであり、他の一つは、指導に外貌を具へるもので、自動車でいへば綺麗に塗られた車體のやうなものです。

エンヂンと車體とが合致して、初めて自動車が出來るのですが、指導者の場合には、エンヂン的指導者と車體的指導者とは、合致しても、決して一人の人間を爲すものではなく、別々の人間です。だから此の意味の合致は、抽象的の指導者のことで、具體的の指導者のことではありません。人間としての指導者に於ては、エンヂンと車體とは離れ〴〵の別の人間です。

車體的指導者は、運動の標導として、歷史の表面に花々しく現はれる人間ですが、エンヂン的指導者は、歷史のカバーの内側に隠れて、運動の原動力を爲してゐるものです。

この場合、車體的指導者はエンヂン的指導からは絶對に離れてゐなければなりません。何となれば、エンヂンは、それが機械でも政黨でも組合でも、必ず、いろ／＼の相搏撃する力の發動です。エンヂンの各部は、決して力の一致した狀態にあるのではなく、必ず、反對した力の撃ち合ひです。その各部の力は結局、「動力」としては統一されて現はれるが、それを働き出すまでの力の各々の作用は互に搏撃してゐるものです。だからエンヂンは絶えずガタン／＼と相互に、叩き合ふ騒音を發して動きづめです。

車體がそんな風に動かれてはたまりません。車體はエンヂンから超然として、しかもエンヂンによつてのみ自分を押し進めて行くものです。エンヂンの部分的搏撃は、車體に於て初めて統一した力として現はれます。然し車體自身は何の原動力でもなく、エンヂンが無かつたら、全く用のない廢物です。

西鄕隆盛は、維新の事業を働いてゐる場合は恐らくエンヂン的指導者でしたらう。然し、西南の役の頃は、彼れは既に一個の英雄であり鄕黨の偶像となつて、何等エンヂン的活動もせず超然たる車體的英雄となつてゐました。

歴史家の口を揃へていふ通り、彼れは鄕黨の大衆の盲動とは沒交渉の地位にあつたでせう。無論、鄕黨の大衆の盲動は、ひつきやう隆盛といふ偶像が明治政府の御厨子の裡から抛り出されて、物置の棚に押し上げられたと等しい閑居生活に逐ひやられたのに端を發したのですから、この車體は、動力の又動力だつたかも知れないが、然し、運動の具體的の發動に對しては、全く超然たる事エンヂンに對する車體と同樣であつたのです。

如何なる偶像も偶像になる以前は必ず生きた人間であつたことは、お釋迦樣の場合と異ることはありません。偶像的地位を得るまでの隆盛はエンヂン的でしたらう、而もそのエンヂン的活動の歴史が事實からシンボルに代つて、鄕黨の人々に對して、磔刑の柱が十字架になつたやうに、大きい魅力をもつに至れば、隆盛は、もも早や運動そのものを働き出すエンヂンでないことは、十字架が說教もせず、噓八百を列べないのと同じです。實際のエンヂンはその十字架を高く擧げてゐる人間共です。

しかも歴史は高く擧げられた十字架の寫眞をとつて、それが歴史を創造した不思議の指導者だといつて後代に示します。走つてゐる自動車の寫眞に、決してエンヂンが寫し出されてゐないやうなものです。

（下）

然らば古來、車體とエンヂンとを一人に具象した人間がなかつたかといふに、それはありました。古代の英雄は大抵、車體とエンヂンとを兼ねた人間でした。

それは古代の社會が單純だつたからです。古代の社會は、多くの場合、常に一體として動きました。社會に相異る力の搏撃といふものは少く、思想、信仰、行動等は、全社會的に一致してゐて、少しでも異つたものは、社會から追ひ出し、又社會へ入れませんでした。だから古代の社會が動き出す時には、現にそれを動かした人間が、同時にその運動全體を表現する一人として現はれることを得ました。丁度、古代社會の移動が全社會一人殘らずの移動であつたやうに、社會のあらゆる運動が單純に一つ方向をもつたのです。さういふ時には、實際社會を動かしてゐる人が、何の矛盾もなく、運動を代表する人格として現はれます。それが古代の獨裁政治です。

然るに、社會が複雜になると、社會の運動はいろ／＼の方向に現はれます。全社會的に一致した運動はなくなります。一つの方向の運

動でさへも、その内部的勢力はいくつにも分かれます。さうなると、實際の原動力を働いてゐる人は、皆部分的の力になつてしまひます。さうしてそれを纏める人は、實は纏めるのではなく、各々の部分的の力をもつたものの搏撃による運動のシンボールになるだけであることは、十字架がキリスト敎を纏めるのではなく、纏められたキリスト敎が十字架をシンボールにするに過ぎないのと同じです。

然し、いかに複雜な社會でも、機械的に單純化すれば、やはり獨裁が成立します。即ちある階級が、全社會に對して、その階級に反對する力として存在する一切の原動力を機械的に壓迫すれば、その社會は、恰も古代社會のやつたやうな異分子排斥を實行したことになるから、古代社會的に單純になり、隨つてその運動のエンヂンと車體とは同一物となります。今のイタリーのシムソリニがそれです。近代でも、ナポレオンはそれに成功しました。然しウキルソンは、反對の力を機械的に壓迫せずに、エンヂンと車體とを一身に兼ねようとしたから失敗したのでした。

又社會が非常に複雜になつて、所謂分化の程度が進むと、抽象的の統一は不可能となり、社會運動の原動力は、偶像でも暴力でも統一されなくなると、エンヂンの各部は、互に搏撃する力をもつて一つの車體を動かすに至るまでに統一されずに、エンヂン自體が春秋戰國の狀態となります。清朝を失つた後の支那の軍閥のやうになります。

エンヂンの各部はそれ〴〵自分一人の英雄となつて、その部分的の力を縱横無盡に振り廻します。これは偶像の失はれた社會に起る事情です。今日の我國についていへば無産政黨の狀態がそれです。既成政黨が、上偶の坊をシンボールとしてよく纏まつてゐるに對し、無産政黨は、上偶の坊は全く上偶の坊扱ひにして、實際エンヂンとしての力をもつてゐる各部の原動力が、それ〴〵自分自身を車體として表現しようとします。そこから無産政黨は分裂又分裂で、まるで藝術家の寄合のやうに小さく固つてゐます。

それは大きい偶像が破壞されたためで、その點は結構なことですが、その小さい固まりにもそれ〴〵小偶像が出來てゐて、いはゞ阿彌陀佛はなくなつたが、五百羅漢が出現したやうなものではありますまいか。

一體、偶像の出來るのは、雜多な力が一定の目的で統一されるべき時に、その目的を科學的に意識することが出來ないためそれを象徴化して宗教的信仰の形で現すのですが、在來の國家運動、政治運動は皆そんな風に、非科學的に目的を象徴化しました。然るに無産階級の運動は進化の科學的意識によつて、目的を認識した運動であつたから、そんな偶像は不用になりました。然し、その偶像に代る科學的意識が十分明確に把握されないために、一大統一を生ずる筈の無産階級の運動は、互に搏撃するエンヂンの各部が、無産階級といふ一つの車體を動かすよりは、搏撃のための搏撃に法悦を感ずるやうになります。

すると、その搏撃のための搏撃に居ることから、それ〴〵小偶像が生れて、五百羅漢の壯觀を呈します。分裂した意識がそれ〴〵オロギーを構成するが、一つのイデオロギーは即ち一つの羅漢です。

そんな位なら、寧ろ阿彌陀佛でも西洋崇拜でも現はれて纏めてくれた方がいいと思ふやうになります。がそれは科學的運動の墮落です。

北京再遊問答

A　嘗て支那にゐたことのある男
B　再び支那を見て來た男

A　四五年ぶりで見た北京は、大分變つてゐたかね

B　よくさういつて聽かれたが、根つから變つたやうにも感じなかつたね。何しろ數千年の老都會だから、四五年でさう變る筈はないよ。人間だつて年をとれば中々變らないからね。

A　でも電車が開通したといふぢやないか。

B　さうだね、電車は此前行つた時には無かつたね。然し、今度行つて電車の通つてゐるのを見たが、やつぱり千年も前から通つてゐるやうな顏をしてゐたよ。

A　何がだい？

B　電車がさ。

A　電車が千年も前から通つてたつて顏をしてゐるといふのは何んな顏なんだい？

B　あんな古風な都會には電車なんてものはない方がいゝと思つたが、あつてもたいして邪魔にもならず、別段不思議なものが通つてゐるやうにも見えなかつたよ。

A　當り前さ、今時電車が「不思議なもの」でもあるまい。

B　然し誰れでもさう思つたらうよ、イギリス人なんかも、ロンドンの街を電車を通すのは不服なのだよ。

A　それは往來が狹いからだらう。

B　廣い所でも電車はロンドンの街の感じを損ふからいけないといふのだよ。テームス河の河岸工事の出來た時も、そこを電車を通さぬで、議會で激論をしたもんだよ。電燈の出來た時にもイギリス人は、あんなものは臺所や往來につけるのはいゝが、座敷にはいけないと頑張つて、今でもそれを通してゐる人もあるさうだよ。

A　それは日本だつて茶室に電燈をつけないやうなもので、つまり好古趣味といふ奴だらう。

B　ところがそのイギリス人でも、ガスはいゝといふのだからをかしいよ。

A　何ういふ理窟だらう？

B　理窟なんかありやしない。ガスはもう出來てから百年近くになつて、すつかりお馴染になつてゐるからだよ。人間の趣味なんていい加減なものだよ、ある妙齡の婦人が猿がいやだと思ふ餘りに猿を恐れるヒステリーになつたのを、ある醫者が、無理にその婦人に猿を抱いて寢かしたら癒つてしまつて猿好きになつたといふ話があるが、調和とか矛盾とかいふ感じもそんなもので、矛盾してるものを、長くくつつけて置けばいつか調和してしまふのだよ。必ずしも長くくつつけて置かなくとも、矛盾でも撞着でも、誰れも何ともいひさへしなければすぐにも調和してしまふものだよ。ロンドンの電燈だつてカーライルのやうなやかましやがブウ／＼いひさへしなければ、すぐと調和するのだよ。日本の役人のやうに、物事を七八かましくいふから、外來思想がロンドンの電燈のやうに、臺所や往來で不平を零してゐるのだよ。聖德太子のやうに、外來思想を政敵をやつつける道具に使つても、日本は得こそしろ決して損は

しなかつたのだから、日本の役人も今少し腹を大きくすることだよ。

A　北京の電車がもう脱線したね。で北京の電車はロンドンと違つて故障なしに出來たといふのだね。

B　いや多少の故障はあつたらしい。それは例の人力車夫だよ。それが反對運動をやつたのだよ。

A　よくある奴だね、然し支那の車夫と來たら數が多いから問題だらう。

B　うん、それで電車賃を人力車賃とさう違はないやうにするといふ條件で妥協したといふことだよ。

A　すると支那の車夫は電車と同じ賃銀で走つてゐるのだね。

B　さうぢやないよ。支那の電車が車夫と同じ賃銀で走つてゐるのだよ。

A　同じ事ぢやないか。

B　違ふよ、支那では、人間の勞働力の生産費と電力の生産費とがさう違はないから、結局、電車が人力車賃で走つてもさう高い電車賃にはならないのだよ。

A　電力と人力とが同値段なんてとこが、外にあるかしら。

B　それはあるだらう。大昔の奴隷制度では、人間を虐使して、斃れたらずん〳〵補充して行つたから、人力は馬力よりも安かつたのだよ。日露戰爭の時分にも、士官達が、『馬は中々補充が困難だが、兵卒は一錢五厘で補充が出來る。』といつたといふ話があるが、作り話にしても穿つてゐるよ。それと同じ理窟で、つまり奴隷は、機械や道具ほどは値ぶみされなかつたものだよ。

A　支那の苦力もその奴隷だといふのかい？

B　苦力は奴隷ぢやないが、しかし昔の奴隷制度といふものがなかつたら、今の苦力も無かつたらうよ。

A　それは何ういふ譯だい？

B　一體奴隷制度は、征服力で使役される人間が豐富に供給された時代の制度なのだよ。だから上古の軍國國家でも、人間の供給が次第に不足して來ると、奴隷制度は成立困難になつて、ギリシャやローマでも、しまひには隨分奴隷を得るに困難になつて、奴隷を供給する商賣が成り立つたものだよ。それでも交通が未だ困難な時代だからさう遠方まで奴隷を漁りに行けないので、近所で狩り集めたから、ローマ人なんかでもうつかり旅行も出來ないやうになつたのだよ。田舍を歩いてゐると、とつつかまつて奴隷にされる虞があるのだからね。そんな風に奴隷供給が六づかしくなるに從つて奴隷厚遇の風が起つて、軍國國家があべこべに奴隷虐待をやかましくいひ出したのだよ。つまり品物が少くなつたから大切にしろよ。といふまでの話さ。

A　で支那の苦力は何うだといふのだい？

B　まあ待ち給へ。然し奴隷制度は、奴隷といふ人間が目的ではなく、奴隷勞働が目的なのだから、人間は厚遇しても、その勞働は依然として安價のものにして置かなければならない。勞働を安くして置くには、勞働するものの生活標準を低くして置かなければならない。奴隷の人格は尊重しても、その生活標準は在來のまゝに止めて置くといふのだから、それはやはり奴隷制度の保存で、奴隷厚遇はつまり奴隷政策に過ぎない。しかし生活標準を低度に止めて置くといふのは、軍國的の階級制度が確立してゐなければ出來ない事だから、人格だけ尊重して生活を低度に止める奴隷主義もやはり軍國主義の階級社會が續いてゐる間だけのことで、それが崩れて近代の資本主義になると、當然そんなことは六

づかしくなるよ。近代主義は、個人主義だの自由主義だのといふ言葉が示してゐる通り、個人の發達で能率を上げる組織なのだから、人身賣買が廢れて、賃銀制度になる。この制度の下では生活標準を低度に止めて置くと個人の能率が上らないから、從つて資本の利潤が上らない、といつて生活標準を高めれば、賃銀が高くなるから、やつぱり資本の利潤が下る、だから近代主義では、賃銀奴隷の生活標準を高めねばならぬが、それを高めれば、資本家の生活標準が下る、資本家の生活標準を高く保つて置くには、勞働者の生活標準を低く保つてゐなければならぬが、さうすると能率が上らない。そこが近代主義のディレムマだが、此のディレムマを暴力で防いでゐるのが昔風の軍國主義だよ。勞働階級の生活標準を極度に低めて、上らない能率を量で補ふといふのが昔の軍國國家の奴隷制度で、此の量の供給が豐富だつたから、低い勞働能率で萬里の長城やピラミッドのやうなものも出來た譯だよ。然しさういふ筆法は、奴隷の供給の極めて豐富な所でなければ成り立たない。今日の支那は、その點で、軍國國家がさういふ筆法を用ゐるに適した唯一の國なのだよ。人口が稠密で、その人口が大部分勞働人口で、寧ろ奴隷人口で、それが悉く昔の軍國國家の奴隷の生活標準を二十世紀の今日に保つてゐるといふ珍らしい國だよ。支那の奴隷人口は、今日の所謂苦力階級だが、此の階級の生活標準が數千年來固定してゐたために、彼等は生理的に營養組織が僕等と違つてゐて、極めて僅少のカロリーで中々強いエネルギーを産み出すやうになつてゐる。軍國國家の奴隷制度の保存に最も適した國は支那だよ。

A　それが支那の車代の安い説明かい？　隨分廻りくどいね。

B　さうだよ、如何に支那が生活の必需品が豐富だからといつて、苦力の生活標準が極めて低度に固定してゐるといふ事情がなかつたら、そんな安い賃銀の保たれてゐる筈はないよ　その低い生活標準を強制的に保つてゐるのは軍國國家の階級制度に違ひないが、しかし、支那の苦力が數千年來の經驗で奴隷的の生活標準に生理的に固定されてゐなかつたら、又その人口があれほど豐富になかつたら、あの軍國主義も保存されてゐる譯には行かないのだよ。つまり支那が今だに軍國國家の支配狀態をつゞけてゐられるのは、苦力といふ奴隷階級の豐富にあることゝ、その生理狀態の固定とによるのだよ。一體何處でも奴隷制度の崩れたのは、奴隷人口の供給が減つたためなのだから、それの豐富な支那では中々軍國國家は滅びないよ。

A　實際支那人には驚くね。日本の饅頭の皮ばかりで作つたやうなスカ〳〵の饅頭を二つ三つ食つたばかりで、何日でも平氣で働くのだからね。あんな饅頭のカロリーをあれほど強い勞働力に變化させるのは全く不思議だよ。

B　草ばかり喰つてゐる牛があんなに力を發揮するのと同じ理窟だよ。人間ほどの心理的能力をもつたものが、もし動物と同じ生理的能力をもつてゐたら大變なことになるのだが、支那の苦力は、心理的能力では人間の標準以下だが、生理的能力では人間以上で動物に近いのだよ。それが支那の將來の恐るべきところだよ。すべての文明人は生理的に頽廢、墮落してゐるから、いかに心理的に發達しても、その將來は知れたものだが、支那人は生理的にまだ動物的だから、將來それが心理的に發達したら恐ろしい事になるのだよ。牛が人間ほど聰明になつたら人間はとても叶

ひつこはないよ。

A　でまだ牛の時代だから人間に虐使されてゐるのだね。

B　支那の軍國國家は支那の牛の分量と勞働力とで維持されてゐるのだよ。

A　支那は、軍閥の滅びない限りその牛もなくならない譯だね。

B　あべこべだよ。あの牛のなくならない限り軍閥もなくならないのだよ。

A　で問題は何だつたつけ、さう〳〵北京は變りはなかつたかをきゝたかつたのだよ。戰爭が近所にあつた筈だが、北京の樣子はどうだつたい？

B　戰爭はないやうだつたが、何しろつい近所の南口附近に國民軍が陣取つて、張作霖、吳佩孚の聯合軍と對峙してゐるので、北京は兵隊で目を突くやうだつたよ。公園や寺院やは皆兵隊の宿舍になつてしまつて見物も出來ない始末で迷惑千萬だつたよ。

A　君等のやうな見物人の迷惑よりも人民の迷惑が氣の毒だよ。戰爭となると、例の奴隷狩りが始まつて、人民は引つかまつて虐使される、軍需品は片つ端から徵發される。生命財產の安固も何もあつたものぢやないからね。兵隊は兵隊で只同樣の軍票を出して物を買はうとするので、軍隊が北京に入り込むといつも商賣人は店をしめる騷ぎだよ。大きな軍票を出して僅かの買物をして釣錢を寄こせと脅迫するのだから、商人は金はいらぬから品物をもつて行つてくれと賴んで釣錢を出すまいとする。つまりたゞで品物を持つて行かれるのはまだいゝ方なのだから助からないよ。

B　今度もやつぱりそれだつたよ。兵隊のゐる近所は軒並戶を閉めてゐたよ。僕達も、近郊へ出かけるのに驢馬を雇はうとしたら、いつもいくらでもある所に一頭もゐないといふのだよ。徵發されてしまつたのだといふが、中には徵發を恐れて遠方へ隱してしまつたのも大分あるといふことだ。しかも、誰れ一人、徵發されたので驢馬がないといふものはなく、今は農繁期で驢馬はないと申譯をするのだよ。子供に寫眞器などを持たせて步かせたが、兵隊のゐる近所へ來ると、子供は急いでそれを我々に返してしまふ。つまり兵隊に取りあげられることを恐れるのだね。芝居なども兵隊がたゞで入るので、滿員だとか何とかいつて玄關口で押問答をするのだよ。たゞで入る特權があるんださうだが、どこでも明いてゐる席に坐りこんで動かないので、休憩時間にも席を離れる勿れなんて揭示を出してゐる始末だよ。電車なども兵隊の只乘のために滿員で、たうとう運轉手や車掌が兵隊を乘せるならストライキをやると威嚇して、漸く少し制限した位だよ。人力車などは無暗に乘り廻して例のたゞの軍票を出してさつさと行つてしまふので、泣きつ面をしてゐる車夫を度々見たよ。驚いたのは僕の泊つた宿屋の騷ぎだよ。

A　宿屋に何かあつたのかい？

B　僕は中央飯店といふ支那人經營のホテルに泊つたのだが、丁度その日の夕方その宿に奉天軍の師團長格だといふ何とかいふ將軍が泊つた譯だよ。

A　そいつは大騷ぎだつたらう。日本ならば師團長位の軍人は電車の釣革にぶら下つて、サーベルを蹴飛ばされても小言もいへないのだが、支那ぢや大變なものだからね。

B　その大變なものたることを僕はちつとも知らなかつたのだから、何事が始まつたかと思つたよ。一寸外出して歸つて見ると、門前から玄關先まで兵隊と巡警とで一杯になつてゐて、日本ならば角袖といふ所なんだらう、

變な支那人がそれに混つて大混雜を極めてゐるのだよ。玄關を入つて見て更に驚いたのは、上り口から二階の階段に行くほんの數間のところに、武裝した兵士が、三尺おき位に立つてゐるだらうぢやないか。念の入つたことには狹い階段の中途にも、二階の廊下にも同じ間隔に武裝兵が立番してゐるのだよ。僕等が玄關口を入つて行つた時にも、そいつ等の一人が送り狼のやうに僕のあとをつけて來るぢやないか。すると向うに立つてゐた奴は、つかつかと僕の正面に歩み寄つて來るのだよ。僕は、こいつ我輩を誰何する氣か、そんなことでもしたら承知しないぞと……

A　承知しないつて、何うするつもりだつたんだい？

B　何うするつて別に仕様もないから、我れはこれ日本人。』とでもいつてやらうと思つてゐたのだ。然し、こちらが表向きは泰然として、少しも氣にとめない風をして、眞正面からやつて來る兵士を避けもしないで突當るやうに歩いて行つたものだから、そいつが傍へどいて道をあけた。あとで僕等が二三人で食堂へ入つて行くと、丁度その將軍閣下が食事中で、そのうちの一人の參謀らしい男があわてて立つて來て、上手な日本語で、「こちらは違ひます、何うぞあちらへ。」とハイカラな腰つきをして左の手を物貰ひのやうにのばして、衝立の彼方の側を指すのだよ。で僕等はそちらへ行つたが素敵もなく脊の高い兵隊が僕等にくつついて來て、後ろに立番をしてゐるのには驚いたね。ところが支那食を註文したら、支那食は部屋で喰つて呉れといはれたので、いゝ幸ひにして食堂を出てしまつた。

A　皆ホテルの客がそんな風に警戒されたのかい？

B　いんや僕だけが特別待遇だつたらしいよ。

A　大分人相のよくない日本人だといふので大に警戒したのだらうね。

B　然し翌日からは、もうそんなこともなかつたよ。二三日たつと、二階の上り口の兵隊なんかお馴染になつて、僕が歸つて來て、「ボーイ。」と怒鳴ると、兵隊が代つて返事をしたりしてゐたよ。何しろ宿屋も災難だね、その將軍のゐる間は、應接から食堂から兵隊で一杯で、皆そこで食事をする。夜もそこへごろ寝をする。どうせ食料も碌に拂ふのぢやなからうし、全く營業妨害だね。

A　その位の損害なら宿屋は感謝してゐるだらうよ。

B　それにその將軍の出入が大變だよ。まづ將軍の部屋から玄關先まで人拂ひだ。

A　もとは日本の陸軍省でも、大臣が所謂登省をすると、給仕が「大臣のお越し。」と廊下を怒鳴つて歩いたものだよ。今でもやつてるかも知れないがね。

B　で將軍が兵隊の整列の間を通つて玄關まで出ると、玄關前の廣場をいつも一杯に塞げてゐる車や自動車はすべて追つぱらつてしまつて、そこに兵隊が一小隊ほど整列してまるで陸軍の葬式か出棺といふ光景だよ。すると玄關の戸口に立つてゐる兵士がいきなり、昔の柔術の氣合のやうな恐ろしく大きい掛聲を發するのだが、あれが日本でいふ氣をつけッ！の號令だとすると、全く、氣絶したものでも氣がつきさうな聲だよ。支那の兵隊に氣をつけさせるにはあんな聲でないといけないと見えるね。やがて將軍が自動車に乘ると、その車の左右の踏板に兵隊が二三人宛兩方からしがみついて走つて行くのだよ。

A　支那の將軍達は、戰場ぢや決して死ぬ氣遣ひはないが、平生はいつ何時やられるかわ

からないのだから無理もないよ。その位用心してゐても、覘はれた奴は大概やられるからね。だからよ、その督軍が北京へでも入る時には、先づ自分の兵隊を何師團か北京へ入れて置いてでなければ入つて來られないつて譯さ。軍閥商賣も樂ぢやないよ。でその將軍は結局何うしたんだい？

B 僕のゐるうちに出征してしまつたよ。南口方面へ行つたといふが、その後もう二月餘りになるが、一向戰爭の始まつたといふこともきかない、その癖おしまひになつたといふこともきかないね。支那の戰爭は、始まりさうで中々始まらないが、その癖おしまひにもならないといふところが大阪の喧嘩に似てゐるよ。しかし大阪の喧嘩はその間盛に怒鳴り合つてゐるが、支那の戰爭は、その間默つて睨み合つてゐるのだから、大阪の喧嘩より靜かでいゝ。

A 支那の戰爭はだから安全なのだよ。さうして一方がじり〳〵と進むと、他方がじり〳〵と退く。愈々鐵砲を撃ち合はねばならぬとなると、なるべく敵のゐない方を覘つて鐵砲を放つ。愈々敵のゐる方を撃たねばならないと、日本人を頼んで來て撃つて貰ふ。そしてお互に相手の死傷何千人などとヨタ電報を打ち合ふ。戰爭が始まると、鐵砲を撃ち合ふよりも電報をうち合ふ方が盛だよ。

B だから支那は內亂によつて滅びる氣遣ひはないのだよ。眞劍で戰爭をするやうな馬鹿は支那には一人もゐないのだらうからね。然し天津邊には李景林の兵隊だつたか、青龍刀を小脇にぶら下げてゐる凄まじいのが澤山ゐたよ。日本なら突ツ込めといふ場合に、あの青龍刀を握つて突貫するのださうぢやないか。

A ところがあんなものも昔の青龍刀と同じ威嚇の道具なんだよ。だからピカ〳〵光らして、長い五色の總なんかが柄の所にぶら下つてゐるだらう。日當りのいゝ所か何かであいつをふり廻して示威運動をやるのだね。如何に支那の戰爭でも今日あんなものが役に立つ筈はないよ。尤も日本の軍人なども、日露戰爭の折には、士官以上は皆日本刀をサーベル仕立にした、丸太のやうに太い、柄の箆棒に長い、不恰好な奴を重たさうにぶら下げて出征したものだよ。此間のシベリア出征にも大分それがあつたといふから驚くよ。將校が、あんなもので何人敵を薙ぎ倒したところで高が知れてゐるぢやないか。それにも拘らず聰明な日本の將校があんなものをぶら下げて行くのだから間拔けな支那兵が青龍刀をぶら下げてゐるのを笑へないよ。

B 郊外で督軍の騎兵の行軍に出逢つたが、それは奇觀だつたよ。隊伍も何もあつたものぢやない、僕等が寄せ集めの借り馬で遠乘りをしても、もう少し恰好はついてゐるが、それが僕等の自動車に出くはして忽ち全隊ばら〳〵の驅足になると、中には畑に飛び込む奴もあり、一つ所をぐる〳〵廻つてゐる奴もあり、落馬して馬ばかりが驅足してゐるのもあり、あれぢや、敵も一寸射撃するのに見當がつかなくて困るだらうと思つたよ。

A だからさ、「兵は凶器なり」だから、凶器は成るべく鈍刀にして置くといふのが支那の流儀なのだよ。「戰はずして勝つ」ことも大切だが「戰はずして敗ける」ことも大切なのだよ。戰はずして敗けるものがなかつたら戰はずして勝つものもある筈がないのだからね……そんなことはどうでもいゝが、北京の話は何うしたのだよ。

天壇

A 例の天壇もやつぱり兵隊で占領されてゐた

らうね。あすこは、張勳の復辟運動の時に、張勳の兵隊がたて籠つて、段祺瑞の軍勢と戰つた古戰場だよ。

B 天壇も兵隊はゐたが、齋宮といふ所だけ占領してゐるので見物には差支なかつたよ

A 齋宮といふのは、天壇で天子がお祭をする時に休む所なのだよ。北京には、天壇の外に日壇、月壇、地壇、先農壇、社稷壇、先蠶壇などいつて壇が澤山あつて、春は日壇、夏は地壇、秋は月壇、冬は天壇といふ風に、天子が四季に天を祭つたものだよ。何れも規模の壯大な事は驚くべきものだが、就中天壇が一番立派なのだよ。周圍が約三哩もあつて、建築はたいしたこともないが、あの大理石だけでもたいしたものだよ。

B さうだね。今ならコンクリートやアスファルトといふ所が皆大理石なのだからね。

A それに全體が神祕的で、とても今われ／＼が生存してゐる同じ世界のやうな氣がしないだらう。

B 西洋のお伽噺の世界みたいでもあるが寧ろそれをアメリカの活動寫眞で見るやうな氣もするね。西洋人の所謂『東洋の神祕』で、僕等が見ると何うも横濱物としか思へないよ、西洋のホテルのサルンに突立つてゐる唐木の屏風の螺鈿細工を見た時の感じだね。

A 祈年殿なんてシャムの王様の冠みたいな殿堂はやゝその氣味だが、あれは明朝の建築が清朝の末光緒十何年かに火事で焼けたのを作りかへたのだし、その時にも、原の建築に關する記録が少しもなかつたので、漸く、前に修理した時に使はれた大工の記憶によつて作つて、ずつと規模も小さくなつてゐるといふからね。あすこが焼けたので、何か凶變の前兆ぢやないかといはれたが、二十何年かに再建が出來ると、それから十何年目かに清朝が滅びて、中華民國が出來上つたのだよ。

B ぢや凶事ぢやなかつたのだね

A でも清朝のためには凶事だよ。一體滅亡前には火事を出すものだよ。徳川氏の滅亡前にも、むやみと江戸城が焼けたものだよ

B 滅亡に瀕すると全體の規律がゆるむものだから、自然火の用心もわるくなるのだらうよ。

A 清朝が折角再建した祈年殿は、民國が出來てから、民國憲法を起草する委員會の會場にされたのだよ。民國二年の憲法草案をだから『天壇憲法』といつてゐるのだよ。

B だから憲法も天壇と同じやうに荒廢してしまつたのだらうよ。

A 天壇も荒廢してそこら中草莽々だが、その中に益母草だの龍鬚菜だの傑兒草だのといふ草が生えるのだよ。龍鬚菜は天壇菜といつて上等の野菜だし、益母草は婦人病の藥ださうで、中々利益をあげるといふことだよ。

B あんな建物は荒廢しなかつたら、ちつとも世間の役をしないが、荒廢すると、會場に使はれたり、野菜が出來たり、藥が出來たり、觀覽料がとれたり、いろ／＼有益に利用が出來るのだよ。それがやつぱり天の配劑といふ奴だよ。天は無用のものを有用化するものだからね。

A 然しあの圜丘といふ大理石の壇は何うも有用化しさうもないね。然し莽々たる草原の中に、あの純白な大理石の壇が聳えてゐる景色は氣に入つたらう。あれが天壇なるものの本體なのだよ。眞四角な墻の内に、純白の大理石で眞圓の壇を三壇に築いて、その三層の表面でも直徑九十尺もあるのだよ。冬至の日の未明に、篝火を焚き、犧牲を煮て、天子があすこで三跪九拜の禮で天を祭つたのだよ。今は荒廢して、石の間から草が生えてゐる始末だが、君等でもあすこ

へ行くと、一寸天を祭つて見たい氣になるだらう。

B　われ〳〵にさういふ氣を起させるためにあんなものを作つたのだからね。その手にのつて、あんなものを見せられてから天を祭る氣になるものは素人なのだよ。玄人が莫大な資本を投じてあんなものを作るのはちやんと目算があるのだよ。

A　どんな目算があるのだい。

B　ギボンはローマ人のことを『一般人民にはどんな宗教も一樣に眞實だし、哲學者にはどんな宗教も一樣に虛僞だし、支配者にはどんな宗教も一樣に有用なのだ。』といつたが、今日の支那人についても同じことがいへる、とある西洋人の本にかいてあつたよ。その筈だよ、ローマも支那も同じ性質の帝國主義國家なのだからね。

A　それが天壇に何の關係があるのだよ。

B　だから宗教の儀式は、人民によりも支配者に『有用』なのだよ。人民はどんなものでも受け容れるものだから、支配者の方では、自分の必要によつて、宗教を作りかへることも出來るのだよ。所謂神話の改作だよ。

A　でも人民のために天下泰平、五穀豐穰を祈るのだから、人民の信仰によらなければならないだらう。つまり、支配者は人民の信仰を代表してゐるといふことになるのだらう。

B　とまあいふのだがね、所が支那人の信仰といへば、今だに、山だの川だの石だの蛇だのを祭る自然宗教の境地を脱してゐないのだからね。あんな七六かしい、蒼天だの昊天だの旻天だの上天だの皇天だのてものを、『蒼天は體を以て之を言ひ、尊んで之を君とし皇天と稱す。元氣廣大、則ち昊天と稱す。仁、閔下を覆ふ、則ち旻天と稱す。上より降監す、則ち上天と稱す。遠きに據つて之を視れば蒼蒼然たり、則ち蒼天と稱す。』なんて、意味で理解してゐる譯でもなからうし、そんな意味で祭りも拜みもしやしないのだよ。無論あんなべらぼうな大理石の天壇なんてものが、天を祭るに必要なものだとは思やしないよ。大きい所や高い所がいゝと思へば、天然の山へでも登つて祈るのだよ。

A　平民は天然の山で間に合せるが、天子にでもなれば自分で壇位作る氣になるだらうよ。庭でも、貧乏人は天然の庭で我慢する外はないが、金持は天然以上の庭を作らせるといふ理窟だからね。

B　それは金も確かに一つの動機には違ひないだらう、いくら大帝國でも貧乏だつたらやつぱり天然の山の上で天を祭るだらうからね。然し、一體支那の天子があんな壇を作つて天を祭つたりするのを人民のためだと思つてゐたと考へるのが間違ひだよ。人民のためなら、あんなものを作る金でも人民に撒いてやつた方が餘つぽどいゝんだよ。少くともあんなものを作る金を人民から絞り取らない方が人民のためぢやないか。支那の天子があゝいふ壇を作つて天を祭るのは、人民に關係した事ぢやないのだよ。あれは人民に見せるものでもなければ、人民を感服させる儀式でもないのだよ。無論、人民のためにやつてゐる仕事ぢやないのだよ。

A　それなら誰れのためだといふのだよ。

B　あれはつまり、支配階級間の必要なのだよ。支那の國家は有史前から所謂多元國家で、多くの獨立國家が並立してゐて、それが一つの征服者に統一されてゐたのだが、何處の國でも、征服には第一には武力だが、第二には信仰が必要で、その信仰――といつても實は宣傳だがね――武力と宣傳と、多元的の支配者の去從が決せられる譯なのだよ。つまり征

服者は、一人きりの相手と一騎討をするのでなくて、多くの獨立國家を自分の方の味方にしたものが、多數を占めて結局勝利を得るのだから、支那の征服戰爭は何の事はない、軍國國家の立憲戰爭といふ形なのだよ。今日の支那の軍閥の戰爭でも、やつぱり澤山の小軍閥があつちへつきこつちへつきする奴を、中心勢力たる大軍閥が、武力とプロパガンダとで自分の方へ多數引きつけた方が勝利を得ることになつてゐるから、例の通電と稱する宣傳電報を頻發する譯だよ。大昔もつまりそれだつたのだよ。支配階級の間で互に自分の立場を議場で各政黨が演說するやうな工合に聲明し合ふ必要があつたのだよ。書經などにある、『誓』だの『誥』だの『訓』だのといふのは、つまり今の通電のオーソリテイーを得たものに過ぎないのよ。

A　すると書經なんてものは、周以前の通電を集めた本だといふのだね。馬鹿にしてゐるよ。でそれが天壇と何の關係があるといふのだい。

B　あるのだが、もう少し待ち給へ。支配階級の信仰といつたつて、それが直ちに人民の信仰を代表してゐると思ふと間違ひで、要するに今の政黨屋の議論が、平の人民の議論ぢやなくて、政治階級間だけの議論であるのと同じで古代の支配者のグループでの信仰なのだよ。それはつまり武力の勝利者が自分の征服をジャスチファイする場合に、共通の支配者心理に觸れた感情なり思想なりを基礎とした規範意識なのだよ。支那人が宗教的でないのはそれでもわかるよ。もと〳〵多くの民族の集合した國家だから、全體を支配する民族宗教なんぞは、とうの昔なくなつてしまつて、統一國家の出來た時分には、丁度今のアメリカの寄合世帶の國家のやうに建國的精神を民族的宗教意識に求めることが出來なかつたのよ。だからアメリカは、ウオシントンだとかハミルトンだとか、フランクリンだとかリンカーンだとかいふアメリカ聖人等の『曰く』集で、支配階級の意識統一を行つてゐること、支那の『帝曰く』『子曰く』で行くのと同じなのだよ。そこへ行くと日本のやうな民族意識の强い國家では、軍國國家共は、民族の××の××を擔いでゐさへすれば、漢學者の飯の種をこしらへてやるやうな『誓』や『誥』や『訓』なんてものは全く不用で、面倒な『曰く』集編纂の必要もなかつたのだよ。

A　あつたつて日本の無學な武人には出來もしなかつたらうよ。

B　然し支那の支配階級の理窟は甚だ簡單で『天の命』の一本調子でいゝのだから、そいつをいろ〳〵に思想的又は言語的の道具立で飾り立てたものなのだよ。然し、一方でそれを言語や思想の道具立で飾り立てると同時に、儀式や、殿堂や大理石の壇などで飾り立てるのだよ。然し、それらの有形の道具立も、言語や思想の無形の道具立も、みんな支配階級だけを相手のプロパガンダだから、平民どもにはちつとも解らせなくともいゝし、見せもしなかつたのだよ。あの天壇だつて、四書五經と同じで、支配階級にしか見せなかつたのだからね。見せたつて何のことかわけがわからないことも書經や詩經以上だからね。

A　支配階級だけを感服させればいゝのだといふのかい。

B　さうだよ。然し、その支配階級が實際『天の命』なる信仰によつて自分の支配を肯定してゐたと思ふと間違ひだよ。今日の通電なるものを發する軍閥が、自分自身、その通電の文句通りのことを信じてゐると思ふものは誰れもあるまい。その文句通りのことを彼等がほん

たうに信じてゐたら、支那にあんな戰爭の續いてゐる筈はないのだからね。だから書經に載つてゐるいろ〳〵の天子の通電などもいゝ加減なものだらうよ。滅されてゐる國家は皆大逆無道で、それを滅した國家は皆聖人の國家なのだからね。本居宣長が、それを評して、人の國を盜んで、聖人が凄まじい、と罵つたのは全く面白いよ。滅びるものにだつて善人がある、榮えるものにだつて惡人がある、それが神意なのだと宣長はいつてゐるが、支那の天は、それと違つて大分都合よく出來てゐて、滅びるものは必ず惡、榮えるものは必ず善と定めてゐるのだから、一種のマキヤベリズムを奉じてゐる天なのだよ。だからそれは軍國主義の天なのだよ。それを祭るのは、軍國國家で、決して人民ぢやないのだよ。

A　でも天の信仰は幾分軍國國家の天子に藥になつてもゐたらうよ。桀を討つて天下をとつた湯王だつて「われは後世われをもつて口實と爲すものあらんを恐る。」といつたり「われいまだ罪を上下に獲るを知らず。慄慄危懼將に深淵に隕ちんとするがごとし。」なんてしをらしいことをいつてゐるぢやないか。

B　それは貸金を催促する手紙の文句の尻に、恐惶謹言と書くのと同じことだよ。支配階級間のエチケットなのだよ。支那歴代の統一國家中の第一の道德國家といはれる周の統一を建設した武王だつて、紂王を討つ時分に、『商の罪貫盈す。天命じて之を誅す。われ天に順はざればその罪これ鈞し。』なんていつてゐるが、それほど〝天〟といふ奴は好都合に出來てゐるのだよ。

A　でも紂王は、世界の暴君中で最大の暴君で、有名のネロもこれに比べればあたりまへの王樣だと、西洋の歴史家もいつてゐる程の天子だつたのだから、當時の多數國家にも見離されてゐたらうし、武王が、天を擔いで立てば、諸侯は忽ちそれに響應して立つたのだらうから、通電だけで紂はいゝ加減參つてしまふ理窟だよ。

B　それが怪しいのだよ。武王が紂をうつのに友邦の力ばかりでなく、庸、蜀、羌、髳、微、盧、彭、濮などといふ八國の所謂蠻夷戎狄の援助を求めたのなどは謬しいよ。此の西方の野蠻國と稱せられるものは、皆支那歴代の諸國家が堯舜時代から共同の敵としてゐて、後には例の長城を築いて防いだほどの傳來の外敵ぢやないか。武王がその敵國の力を借りたといふのは、大に變だよ。支那の軍閥共が外國の力を借りるのは、今日では珍らしいことではないが、武王はその元祖なのだよ。あの時分に武王が、尚書にあるやうに、「野蠻人よ、爾の戈を立てよ、爾の干を比べよ、爾の矛を立てよ。さうして加勢してくれ。」と叫んだのは、馮玉祥がロシヤへ出かけて行つたのと、古今同一轍といひたいが、然し、今日の軍閥は皆が皆、多少とも外國の後援をうけてゐないものはないのだし、それにロシヤは何も支那の歴代の敵でもないのだから、いはゞ友邦なのだが、武王のは、それから見ると遙か謬しいよ。天の助けと野蠻人の助けとを一緒に借りるのは亂暴だよ。つまり天の方はプロパガンダに借用して、野蠻人の方は戰爭にかりたのだよ。武王の天下をとつた時には、天壇の外に、野蠻人壇――蠻夷壇とでもいふ奴を作らなければ義理がわるい譯だが、多分天壇しか作らなかつたらうよ。

A　さう云や確かに野蠻人の助けを大分借りたのだらうよ。武王が紂の死屍を刺したといふ輕劍といふ劍は、トルコの劍だといふ説を何とかいふドイツ人の支那學者がいつてゐるといふことだよ。トルコ語で兩刃の匕首をキ

ンラクと云ふが、支那でそれに漢字をあてて『輕呂』として、匈奴の劍のことだといつてゐるさうだよ。『輕劍』とはそのキンラクのことだらうといふのだよ。すると武士は武器まで野蠻人のを拜借した譯だね。

B　今の支那の軍閥だつて、武器は皆洋鬼の品物だよ。東洋鬼の武器も大分入つてゐるといふことだよ。それを賣り込む大會社の名が「泰平……」といふのは面白いよ。宣長の所謂、人の國を盜むものを聖人と稱する筆法だよ。尙書の文句も、つまりそんな工合で出來たのだらうよ。

A　然しあゝいふ軍國國家の營造物も後代に殘ると、古代文化の參考となつたり、公園の代りをしたり、廢物利用の途があるからいゝよ。

B　支那や西洋の城郭都市といふのによく、いろいろの名義で廣い土地を作つて置くのは、軍事上の目的のためだよ。いざといふ時に張勳のやつたやうにそこへ軍隊を集めるのだよ。北京に七つもある何々壇も皆その目的で『天』はやつぱりダシに使はれてゐるのだよ。

A　天壇はもうきり上げようよ。いかに天壇の話でも、さう話が天上してしまつては始末に終へないよ。

『孔子廟』と『國子監』

A　孔子廟といふものは、支那歴代の都には必ずあるものだが、北京のは元の太祖即ち成吉思汗が創めて建てたもので頗る莊嚴なものだよ。見たかね。

B　あの大成殿かい？　見たよ。

A　年々あすこで行はれる「釋奠」といふ孔子を祀る儀式は所謂天子親臨してこれを行ふ國家的の祭祀で、民國になつても續けてゐるが、何しろ支那の國家的儀式として數千年來保存されてゐる唯一の珍らしい祭だよ。

B　大成殿といふ名は、僕等は御茶の水の教育博物館の奧の方にあつた古い殿堂で覺えてゐるのだよ。お茶の水の大成殿は、ずつと前に今の帝國圖書館の前身があすこにあつた時分に、僕等はまだ子供で、先輩につれられてよく行つたのでその印象が今も頭の底にこびりついてゐる。その頃は、あの古い殿堂を文部省が廢物利用のつもりで圖書館に使つたのだよ。兩側の薄暗い長い廊下が閲覽室だつたよ。子供の僕は先輩が本をよんでゐる間に、孔子の像などのあつた廣い堂内を、寺の本堂へ遊びに行つたやうな氣で飛び廻つたものだよ。ひやめし草履で石疊の上を歩くのでいくら飛んでも跳ねても一向音がしないから叱られる虞はなし、自由に暴れ廻れるのが嬉しかつたよ。あれも震災で燒けてしまつたのは惜しいことをした。

A　お茶の水の聖堂のことなんか話してゐるのではないよ。北京の大成殿の話だよ。あすこへ入ると、支那國家に傳來の道德が具體的の形で眼前に彷彿してゐるといふ氣がするだらう。支那の國家が何かしら文化的な思想的な背景をもつてゐたといふことが想はれるだらう。いくら君のやうなものでもそんな氣がしたらうね？

B　それはしたよ。「國家には宗教が要る」といふことは、隨分古い國家でも心得てゐて、埃及などもその點からいろいろ大規模の施設をやつたものだが、「國家には哲學が要る」といふことを知つたのは、西洋では極新しい事だよ。然るに支那といふ國家は隨分古くから『哲學が要る」と氣がついてゐたところは豪いよ。尤も西洋でもギリシャ時代にはそんなことに氣がついた民間學者もあつたが、支那のはそれよりずつと古く、且つ國家がその考を實用

に供してゐたのだから豪いよ。「支配者は哲學者でなければならない。」なんてことは支那ぢや堯舜の時分に云つてゐたことだよ。

A　支那ぢや大昔から宗教的迷信よりも、道德的理性の方が強かつたから、國家も宗教よりは哲學で治めたのだらうよ。

B　さうぢやないのだよ。だれも支那を哲學なんかで治めたものなんかありやしないよ。その點は西洋の國家も支那の國家も變りはないのだよ。たゞ支那の國家は早く宗教的統一から政治的統一に轉じてゐたので、支那には政治階級といふ特別の階級が成立してゐたのだよ。所謂『百姓』といふのがそれなのだよ。この連中は傳來の支配階級だが、有力な軍國國家に統一されたので、中央權力に對する地方權力の形でその支配的勢力をつゞけてゐたのだよ。軍國貴族の後裔や地方豪族の發達したものやが、永くさういふ中間階級を形作つて、いつも中央權力に對する危險分子となつて各地に傳播されてゐたのだよ。支那の天子が「恐るべきは民にあり。」なんていつた民といふのは、畢竟さういふ支配階級の遊民のことだよ。こいつらが騷ぎ立てることは、丁度今の日本の政府が新聞や野黨政治家に騷がれるのと同じく恐るべきことだつたのだよ。

A　それが孔子廟と何の關係があるのだよ。

B　だからさ。支那の軍國國家のどれかが天下を統一して新しい支那帝國を作ると、先づこの遊民共に口を利かせない策を取らねばなるまい。日本では天下を取つたものは、さういふ場合には必ず國の宗家たる皇室を奉じて、自分が何々天皇何代の後胤だとか何とかいつて、ぐづ〳〵いふ地方の遊民や野武士等を屏息させたのだが、何んぼ何んでもさういふ出鱈目をいふ資格のないものは、前に天下をとつたものゝ正統をひいてゐるなどと稱するか、さもなければ所謂京師を挾んで、自分を皇室の藩屏の獨占者にするのだよ。所が支那は早く家族國家の形態がなくなつてしまつてゐるから、誰れを支那の正統の支配者とする譯にも行かないのだよ。孔子なんぞは周がこれだと唱へたけれど、元來周だらうが何だらうが、人の國を亡して天下をとつた點で、日本の武家領主と變りはないのだから、そんなことを誰れも承知しやしない。だから、日本の皇室の地位を支那では「天」が勤めるに至つたのよ。――その點はギリシヤなどと同じだよ。――ところが天となると、宗教かメタフイジツクで行かなければならないが、天そのものゝ宗教なんてものは餘程原始社會でなければないもので、天はどこでも大抵「神」といふ人格になつてしまつてゐる。その神の人格が進化するとメタフイジカルの「觀念」になる。そこからロゴスとかモナドとかイデエとか道とかいふ「觀念」が出來るのだよ。支那は文化が早かつたせゐか、又は民族的信仰が早く失はれたせゐか、とにかく大昔の神話的人格から一足飛びにメタフイジツクに進化して、道德的觀念が民族的の神や神學的の神やに代つて成立してゐたのだよ

A　だから支那の天下をとつたものは皇室の代りに、その「觀念」を挾んで天下を制するつて譯だといふのかい？　すると支那の國家は早くから道德國家の地位に達してゐたのだね。

B　さうだよ。ヘーゲルなどのやつたことなんか、支那人は三千年も四千年も前に卒業してゐるのだよ。

A　で、支那の國家は祖先神や宗教神の代りに觀念の神たる聖人を祭るのだといふのかい？　すると支那の人民は三四千年も昔から西洋の近代國家と同じ質の國家に支配されて

ゐた幸福の人民なのだね。

B　それはいけないよ。今もいつた通り、それは全く、支配階級仲間の陣立なので、一般生産階級の人民などはギリシャの生産階級と同じく牛馬同様に扱はれてゐて、てんで問題の中には入つてゐないのだよ。支那の國家が人民と認めたものは、ギリシャの國家が『市民』と認めたものと同じく、支配階級だけだよ。『百姓』とは姓名を與へられたもの、即ち統一される前に一個の軍國的支配者の地位にあつたものが『統一國家』に征服されたので、それに隷屬することになつたものが、然し平の隷屬民とは別の待遇を與へられたもので、そのあるものは、依然として一敵國として併立してゐたのだよ。日本の貴族階級もそれだが、しかも支那のさういふ階級は、單に軍國的であつたばかりでなく、ギリシャの市民と同じく、知識階級を構成して、そのプロパガンダは優に中心政府を震り搖かしたものなのだよ。だから支那の歴代の國家はひどく輿論といふものを恐れたのだよ。何しろあの大きい廣い範圍を腕力で統一することは不可能だから半分以上は宣傳で參らせなければならなかつたのだよ。日本ならば京都を手に入れたといふことで、遠方のもの達も諦めるが、支那ぢやさういふ都合のいゝ中心がないので、いつて見れば、盛に地方新聞を買收したり、地方政治家の獵官熱を滿足させたり、いまの政黨のやるやうなことをやる必要がいつの國家にもあつたのだよ。

A　そこで道德國家になる必要もあつたのだね。

B　さうだよ。しかし事實は道德國家になる必要はないのだよ。『俺達は掠奪を行つてゐるのぢやない、道德を行つてゐるのだ。』と叫んでゐればいゝので、事實行つてゐることは掠奪でもいゝのだよ。いや事實掠奪を行つてゐる國家ほど『道德を行つてゐるのだ。』と大きい聲で叫ぶ必要があつたのだよ。日本の金持が、少し質のわるい大げさな金儲けをしようとすると、必ず『國家のため』と叫ぶやうなものだよ。尋常なことをしてゐる人間ならそんなことを叫ぶ必要はないのだよ。支那の國家が聖賢を舁ぐのもそれだよ。

A　然し同じ舁ぐなら、平の將門なんか舁ぐよりはいゝぢやないか。

B　將門を舁ぐ方が正直でいゝよ。日本で將門が神になり、支那で孔子が神樣になるのは、日本の封建國家は『道德國家』の假面などかぶる必要はなく、童話の國家と同じく腕力だけでいゝのだから將門でいゝので、『われは鎭西八郎爲朝で結構だ。』と力んだのもそれだが、支那では近代ヨーロッパの帝國と同じく『道德國家』のシャッポを被る必要があるから、孔子を神にしたのだよ。『神は必要だ。』といふやうなことを、誰れだかがいつてゐたがほんたうにさうだよ。

A　秦の始皇帝が儒者を坑にしたり儒書を焚いたのはどうしたのだい。

B　あれは買收政策の代りに恐怖政策でデマゴーグを屏息させようとしたのだよ。つまり武力に自信があつたのか又は宣傳ではとても叶はぬと思つたのだらうよ。今日の國家でも理論やプロパガンダでは叶はぬとなれば暴力で行くのだよ。ムッソリニなどは始皇帝の組だよ。あれだつて孔子廟で間に合つたら何も黒シャツ組なんて强盜團見たいなものは作りはしまいよ。又その反對に暴力ではダメだとなれば、ムッソリニだつて孔子廟で行つたに違ひないよ。イタリーも支那のやうな大國だつたらとても黒シャツ組で切り從へることは六かしいといふことを始皇帝に鑒みてムッ

A　ソリニも悟つただらうよ。

B　支那に孔子廟の絶えない所以かね。

A　さうだよ。支那ではどんな暴力主義者も、とにかく一應孔子に賄賂を使つて置く方が安全なのだよ。掠奪を烈しくやる國家ほどそれを非難されないために、孔子に賄賂が必要なのだよ。北京に初めて孔子廟を作つたのは成吉思汗だといふぢやないか。凡そ歴史あつて以來成吉思汗の征服位亂暴な征服はなかつたのだよ。あれの歩いた跡は、アフリカの蟻の大群の歩いた跡のやうに地上に一物も止めなかつたと、白髪三千丈式にいはれる位だよ。オーストリーやロシヤなどでは、成吉思汗の征服といへば未だに泣く子を止めるといふことだよ。さういふ猛烈な征服者が支那を征服したので、腕力で始末のつく奴には恐れないが、口や筆で來るデマゴーグには手古摺らざるを得ないのだよ。丁度日本の維新の際、天下をとつた薩長の連中が、關東の知識階級が新聞や雜誌を起して政府を攻撃するのに手古摺つたやうなものだらうよ。そこで軍國匆忙の間に北京に大規模の孔子廟を營造して、天下の口舌の雄者に向つて「お前達の本尊はやつぱり俺の本尊なのだから、これから本家をこつちへ貰ふよ。」と逆襲した譯だよ。日本ならば「我こそは何々天皇何代の後胤何の誰某の何代の末裔なり。」と呼ばはるところを、孔子の正統を奉じたものだと稱するのだから、日本の原始的血緣國家の主張から見れば確かに進歩したものだよ。カイゼルのヘーゲルに於けるが如く、レニンのマルクスに於けるが如きものだからね。

A　然し孔子の子孫だつたら一層都合がよかつただらう。清朝のつぶれた時に、孔子の子孫を探し出して大總統にしようといふ說も出た位だからね。……あすこにある石鼓といふ周代の遺物と稱する圓い石に詩をほりつけたのが硝子の箱に入つてゐるのがあるだらう。實際の時代は明かでないが、發見されたのが唐代の初めで、支那で今殘つてゐる刻石のうちでは一番古いものだらうといふのだよ。後世碑に刻したのだが、初めは、太鼓形――といふよりは、日本の蕎麥饅頭の通りの形をした圓い石の周圍に刻したものなのだね。ところがあの刻文といふ奴がひどく六かしいもので、大分缺けてしまつてゐるせゐもあらうが、とにかく韓退之も首をひねつたほど難澁な文句だ さうだよ。たとへば「我車既工、我馬既同、我車既好、我馬既騎、君子負獵負遊、麀鹿速速、君子之求、」なんてので、とてもちんぷんかんぷんだよ。日本の落語家の所謂「富籟風屏小石眼人」よりは本家だけ一層よく出來てゐるよ。

B　それを日本語に反譯したのがあのずいずいずつころばしごまみそずい、ちやつぼにおはれてとつぴんしやんといふ奴だらうよ。不思議な言語は、子供と野蠻人と精神病者と國家とが作り出すものなのだよ。

A　けれども當時の支那人にはそれが作れたり讀めたりしたのだから、やつぱり相當に意味があるのだらうよ。支那の文化は大昔ほど深遠高級に發達してゐたのだからね。

B　然し、そんなむづかしい文句は却つて後代のものかも知れないよ。文句でも議論でも彫刻でも內容が貧弱で形式がそれに反比例していやに煩瑣になるのは文化の頂點ではなく、文化の墮落した時代のことだからね。さういふ時代には、文字の形や組み合せや列べ方をごて／＼にして內容の貧弱をごまかさうとするのだよ。

A　石鼓も秦代のものだといふ說もあるからそんな理窟かも知れないね。何しろ支那の古代文學は一種に謎のやうなものだが、それの極

B　端にデジェネレートしたものだらうよ。一體言語や文字も、昔の支配階級はそれを魔術につかつたものなのだよ。非常に簡單過ぎるか又はやたらに複雜な言語や文字は普通の人間には意味はとれないが、常人に意味のとれないやうなむづかしい言語や文字の使へる人間は、非凡な人間と考へられたのだよ。使つてゐる當人にも實は意味も何にもないのだが、勿體らしくそれを唱へると、唱へてゐる奴自身にもその文句が大に意味をもつて活躍してゐるやうに思はれて來て、他のものもやつぱりそんな風に考へるのだよ。オンアボキャベーロシャだの、マカモダラ、マニハンドマ、ハラバリタヤだのトーカミエミタメだのと不思議な言語を發してゐると、その當人も何だか神通を得たやうな氣になり、聞いてゐる方でもその人に何となくオンアボキヤ的の力が具備されてゐると感じるのだよ。寺院や昔の國家はさういふ一般の錯誤的の感じの上に成立してゐる組織なのだからね。今でもカソリックの寺ではギリシャ語だかラテン語だかでバイブルを讀んでゐるのもそれだよ。國家のメタフィジックだつて、同じことさ。ちつとも一般の人間にわからないやうなことで、しかしながら、一般の人間がそれで大にわからせられたやうな氣のする文句なり思想なりが寺院や國家の神學や形而上學の成立に基礎的の條件をなしてゐるのだよ。だからその石鼓の文句なども、ちつともわからないが何だか大層な實質が含まれてゐるやうに感じさせるといふ點で、その周だか秦だかの國家が支那の知識階級を降參させたものだらうよ。韓退之を降參させたとすれば、その目的は立派に達したのだよ。

A　昔の國家だつて、まさかそんな出鱈目はやりはしまい。

B　昔どころか今でも出鱈目が立派に通用してゐるぢやないか、ハレルヤ、アーメンだつて南無阿彌陀佛だつて何のことか誰れにだつてもちつともわからないか又は非常にわかり過ぎてゐるかで、決して平たくわかつてはゐないのだが、今の寺院はそんなものをすててしまへといふことが出來ないぢやないか。のみならず、ずん／＼新たにわかつたやうなわからないやうな文句を作つてゐるぢやないか。

A　まさか……

B　何だ、まさか、だよ。ドイツ哲學なんかでもやみといろ／＼の字をつぎ合せて法性寺の入道式の文字を作るのもその一例だが、又わかり切つたやうでその實ちつともわからない文句で全くわからないことを説明して大にわかつたやうに思はせるのもそれだよ。

A　何だか君のいふこともわかりきつたやうなちつともわからないやうな文句だよ。

B　わかり切つたやうでその實ちつともわからない文句で全くわからない『神』といふものを如何にもわかつたやうに説明して、それを聞いたものも、大にわかつたやうに心得るといふ例をジェームスが擧げてゐるのを知つてゐるかい？　それはかういふのだよ。神は First Cause で Necessary で Absolute で absolutely unlimitedness が神を infinitely perfect にする。神は one and only で、metaphysically simple で、immutable で、その actualization に於て no loss で、no gain である。神は神自身を、one eternal indivisible act に於て知り、on infinite self-pleasure に於て意志する。神は ad intra に於て free なのではなく ad extra に於て free なのである。神は彼自身の activity の subject でまた object である。神は self-sufficient で self-knowledge で self-

love で Omniscient で Omnipresent で Omnipotent で eternal で Holy で good で just で……

A もういゝよ。

B そんな風にわれ〱にも大抵字引を引かずに間に合ふやうな、つまりわかり切つてゐると思はれるやうな文句を使つてゐるが、その實ちつともわからない文句なのだから、全くわからないものをわかつたやうに思はせるには都合がいゝのだよ。無論いつまで云つてゐたつて結局何のことかちつともわかりやしないのだが、頭のネヂが少し狂ふと、それが大變よくわかつたやうに思はれるのだよ。そこをねらつて寺院や國家がそんな文句を諳誦させるのだよ。

A 支那のはそれが諳誦も出來ないやうな七難かしい文句なのだよ。

B 今言つたやうなわかり切つたやうでその實わからない文句を使ふのは近代的で、昔は石鼓文的のわからない文句を使つたものだよ。『悟りを開く。』と、わかり易い言語でいふよりも、『阿耨多羅三藐三菩提を得る。』といつた方が相手を參らせる效果が多かつたのだよ。『悟りを開く。』などとわかり易い言葉でいつたつて、結局それが何のことかわからないのは、アノクタラサンミヤクサンボダイを得る。」といつたのとちつとも違はないのだよ。國家もその哲學なり歴史なりを出來るだけわからない表現法で現した方がいかにも實質を豪さうに思はせる效果があつたのだよ。今でもイギリス人などは、敕語だの自分の家の系圖だのは、ドイツ人の使ふ番題目の活字で印刷させてゐるのだよ。軍國國家に國家哲學なんかある筈はないが、そのある筈のない軍國國家ほど立派な國家哲學をもつてゐるといふのも、つまり七難かしい文字や言語の魔術で文字階級を屏息させる手段なのだよ。今の國家だつてその點では五十歩百歩だよ。此頃のロシヤでさへ、恐ろしくメタフィジカルなデヤレクティックで、自分の國の知識階級やドイツや日本の知識階級を面喰はせてゐるぢやないか。國家が完成すると文字や言語の魔術が始まることは、古代埃及でも古代支那でもギリシャでもローマでも近代ドイツでも今のロシヤでも同じことなのだよ。その飛ッ汁をひッかぶつて、石鼓文を讀 こなして雷名を轟かせようと力み返つた支那の大學者のやうな心掛けをもつた學者達がそこら中に簇生することも、今も昔も東洋も西洋も變りはないのだよ。知識階級といふもの、それが商賣なのだから、そんな仕事が世界になくなつてしまへば、知識階級なんてものは地球の表面から消えてなくなるだらうよ。

A また始まつたよ……であの孔子廟の隣には國子監といふ支那の昔の大學があつたらう。

B それがその、石鼓文讀みこなしの大學者を作るところなのだよ。支那の大學といふところは、やゝもすれば掠奪國家に反抗しようとする知識階級を學問と官職とで去勢する機關だつたのだらうよ。孔子廟には歴代の進士即ち文官試驗に及第した連中の名前を刻した碑が立つてゐるが、あれは知識階級去勢碑とも名づくべきものだよ。あの石に自分の名を刻みこまれるといふことが支那の知識階級の畢生の望みで、その望みを達し損ねたものが、デマゴーグになつて、歴代の政府を惱ましたものなのだよ。

A この國の大學だつて國家のための學者と國家の役人を作る目的たらうぢやないか。

B それはさうだよ。イギリスの大學がゼントルマンを作るので學者や役人を作るとこではないといはれるが、そのゼントルマンなるも

のは即ち支配階級のことだから、結局、國家の役人の素なのだよ。支那のは然し大規模にその目的を達して、つひに國家がその制度の逆襲をうけて惱まされたのみか、つひにそのお蔭で君主國が亡びてしまつたのだから大袈裟だよ。國家哲學を周代以來石に刻んだやうに固定させてしまつたのだから、四五千年も經てば通用しない時のくるのは當り前だよ。

A　全く石に刻んだのだよ。國子監にある石刻十三經を見たらう。所謂三經三禮三傳及論語、爾雅、孝經、孟子などといふ支那の學問の精髓を石に刻んでしまつて動きのとれないものにしてしまつたのだから、その學問をした支那人も動きのとれないことになつてしまつたのだね。

B　所謂「石化」だね。しかし何處の國でも石にこそ刻まないが、動きのとれないものにしたいのは山々なのだよ。それを少しでも動かすと、思想を動搖させたと稱して、取締つたりフン縛つたりするのだからね。正直に石に刻んだ支那人を笑へないよ。

北京清華學校その他

A　學校といへば、今の支那の教育機關は清朝時代よりも遙か退化してゐるのだよ。清朝の末や民國の初めに教育制度を主として日本に倣つて大學、專門學校、師範學校、中小學などを作つて、民國四年頃には支那全國でそれらの國立省立の學校數が十萬八千餘校、生徒の數は三百六十何萬とか稱してゐたが、今日ではそのうち何れだけが開校してゐるか問題だし、開校してゐてもほんの名義だけで、實際は極めて貧弱なのだよ。

B　外國人の學校は中々盛なものだね。

A　外國人の學校は皆宗教學校で、金は豐富だし、教員も熱心だし、設備でも何でも支那人の學校とは比べものにならないから、ずん／＼發達して、同じ頃に、新教の學校だけが三千七百餘校、舊教の學校が八千餘校で、生徒の數は雙方合せて二十三萬餘と稱してゐたが、今日では英米の學校だけでも七千からあつて、その生徒は二十萬近く／もあるといふことだよ。

B　アメリカが北京の郊外に建ててゐる北京清華學校といふのを見たが、たいしたものだね。

A　あれはアメリカが清朝の末に、團匪の賠償金の一部を支那政府に還附して建てさせたものだが、その代りあすこの卒業生を年々米國に留學させるといふ條件なのだよ。醫科、農科、文科、工科があつて、年に四五十萬圓の經費ださうだから先づ支那第一の學校だらうね。

B　大講堂などは、日本の大學などには無論のこと、西洋へ行つても、アメリカの大學以外にはとてもありさうもない程立派なものだよ。體育館でも圖書館でも最新の設備で、所謂金にあかしたといふ恰好だね。

A　さうだよ。日本の大學などで、あれに匹敵するのは、やつぱりアメリカのロックフェラーから貰つた金で今建てつゝある東大の圖書館位なものだらう。

B　ところが、さういふ見物のお客に見せる物だけが東洋一なので、肝心の學課の點は、隨分いゝ加減なものらしいといふことだがさうかね。

A　それはさうさ、あれはアメリカの大學へ入るものの豫備校に過ぎないのだからね。云はば英語の練習所なのだよ。それにしてはたいした設備をしたものだよ。

B　あれは所謂文化征服が目的で、舊ロシヤが駿河臺に帝都を威壓するやうなニコライ堂を建てたのと同じ目的なのだらうよ。天主教や佛教が八堂伽藍や金襴の袈裟衣でおどすのと

同じで、アメリカ帝國崇拜熱を支那に植ゑつける手段なのだから、云はゞ大きい廣告塔のやうなものだらうよ。廣告塔にしては色電燈のイルミネーションよりも質がいゝと思はなければいけないよ。

A 日本の對支文化事業は、やつぱり團匪の賠償金で遅れ走せに始めた仕事だが、一切日本政府が直接手を下してアメリカのやうに全然金を投げ出して米支の委員に任せ切りにするといふ方法をとらなかつたので評判が惡いよ。これも日本が大に感謝されようとして始めた事業だが、今のやうに反對が起つてはあべこべの結果になつた譯だよ。北京に建てる研究所だか何だかの敷地も天壇の構内のひどく地盤のわるいところを支那政府から提供されて、あんな土地には建物は建てられないとか何とかいつて悶着してゐたがどうなつたかね。

B 一體「對支文化事業」なんて名がわるいよ。支那に云はせると日本の文化は昔から支那の傳來のものしかないので、數千年來、支那は「對日文化事業」をやつてゐたのに、此頃になつて日本が高慢な顏をして對支文化事業なんて大きな口を利くのはよくないよ。隣の家がこつちよりもずつと舊家で學者や技術家を澤山出してゐるのに、こつちからお前の家を啓發してやると申出でたら、隣家の人達は擽つたいだらうよ。しかもそれを隣の家の金でやるのだから、こつちも隨分擽つたいだらうよ。もしアメリカ人が「對英文化事業」なんてことを始めたら、それこそイギリス人は眞赤になつて怒るだらうよ。此の位人を馬鹿にした申出はなからうからね。

A さういふが、なるほど文化的には支那の方が本家だが、近代の科學に至つては、支那はまるで手がついてゐないのだから、その方面では日本の方が所謂一日の長なのだよ。對支文化事業はその方面でも力をつくすことになつてゐるのだよ。然し、とにかく先方で文化的侵略反對なんて聲が起つてゐるのに、「對支文化」なんていふのはまづかつたね。何でも支那政府にそのまゝ金を渡すと外のことに流用してしまふといふので、此方が財布を握つてゐる必要があるのだが、アメリカの清華學校式に、全然委員任せにして、表面上日本の政府は關係しないことにすればよかつたのだよ。

B 一體日本人は、支那といふと、此方から上手に出る氣になるので困るよ。「同文書院」なんてことはひどく謙遜した氣でつけた名だらうが、それでも支那人に云はせると、日支同文なんていふけれど、日本に文字なんかないぢやないか、何が同文なんだといふだらう。「同じ」といふのは二つ以上のものが同一だといふことだが、「日支同文」は、支那の文字が支那の文字と同じだといふのだから、一つのは同じものだといふことだよ。隣の人の紋付を借り着しながら、その人に「あなたの家の紋は私の羽織の紋と同じだ。」といつたら隣の人は面喰ふだらう。

A 「對支文化」どころぢやない、「同文書院」までもよして貰ひたいといふのかい? あすこは可なり支那のために働いてゐる人間を出してゐるのだよ。日本人の支那で開いた學校としては、何かの役に立つてゐるのはあの學校位なものだらうよ。尤もあすこはあんまり政治上の意味が露骨なので隨分支那人には嫌はれたものだがね。然しあれは「對日文化事業」が重だから、先方を侮辱したことにはならないだらう。

B 然し、キリスト教を看板にして、資本主義侵略の地ならしをしてゐる學校よりは露骨

の方が罪はないよ。あの同文書院の出來た頃支那に入り込む日本人といつたら、商人までも所謂支那浪人式で、大だらで支那四百餘州を日本のモノにするのだといふ風采をしてゐたのだから罪は輕いよ。それを近頃は、文化事業だなんて搦手から行かうとするから、向うでは、衣は肝に至る式の支那浪人が急にフロックコートで罷り出て來たのに出會したやうに、「一體御用は何ですか」と玄關拂ひの用意をしない譯に行かないのだよ。近年の文化的侵略反對の運動は、一つ奴がいろ〳〵の衣裳で現はれるに業を煮やした結果なのだよ。昨日は出刃庖丁を懷にして腕まくりで怒鳴り込んで來た奴が、今日は袴羽織で手土産を下げて來ても、俄かに歡迎は出來ないだらうよ。一體清朝時代に支那を戰爭で困しめて、香港をせしめたり、東京を失敬したりした英佛の運動は、つまり近代の資本主義的發展の第一歩に過ぎなかつたので、その目的は、要するに今日の支那に對する資本的征服にあつたのだよ。日清戰爭だつて、日露戰爭だつてやつぱり結局そこへ落付かうといふのだからね、今日の各國の對支文化事業は、火藥の代りに魔藥を使つてゐるに過ぎないのだよ。

A　外人の學校の設備なんかは確かに魔藥だね。支那の青年が清華學校の大講堂や體育場などを見ると、田舍者が日光へ參つたやうに、一も二もなくアメリカを有り難く感ずるだらうよ。

B　然し時代は變つてゐるよ。あのニコライ堂だつて、初めは日本人があの大きい堂宇を仰いで、そゞろにロシヤの威光に打たれたものだが、日露戰爭の近づいた時分には、あの大伽藍は、日本人のロシヤに對する憎惡の標的になつて、誰れだか、あの前に大きい張子の富士山を作つて、あの建物が遠方から見えないやうにするがいゝといふ議論をしたものがあつたよ。その頃淺草公園に、大きなさゞえを倒さにしたやうな不恰好な漆喰の富士山を作つたものがあつたので、それから思ひついたのだらうがね、然しあんな富士山でニコライ堂を蔽ひ隱すのは、隣の松の樹が目障りだといつて子供がおしめをかけ列ねるやうなものだらうよ。がそれと同じで、昔の支那人なら、あの清華學校のやうなものを見せられたら、參拜しただけで、アメリカ崇拜熱に罹つて、アメリカの目的が十分達しられただらうが、今日の支那人があれを見たら、あべこべに反感を起すだらうよ。反感は起さないまでも、自分がそこへ入れないと定つたら、空腹に蒲燒の香ひだけかゞされたやうに、一層ひもじく感じるだらうよ。一體支那の教育の現狀があんな風の慘憺たる有樣なのに、あすこの學生だけはまるで天國へでも留學したやうな貴族的の文化的の教育をうけてゐるのだから、當人も頗る變なものだらうと察しるよ。あたりまへの人間なら氣が咎めてなるまいよ。それもアメリカへでも行つてゐるならまだいゝが、支那の眞中に外國人の作つた天國へ移住して、荒らされ放題の中華民國の同胞青年達を高い所から眺望してゐるやうなのは氣持がわるいに違ひないよ。僕は大震災の當日に東京の市中から郊外の家に歸つて、自分の家の始末をしたので大に疲れて、夕方に風呂をたてて入つてぐつすりいゝ氣持に寢てしまつたが、あくる日東京の大騷ぎをきいて、その中で風呂なんかに入つて樂々と寢てしまつたのが非常に相濟まないやうな氣がしたからね。あの後も近所の人達が僕には夜警に出ないでいゝから自分の家だけ氣をつけてゐてくれといはれたので何の必要もないのだが、夜中に一遍でも起きて拍子木だけでも叩かないと世間へ

對してすまないやうな氣がして、小便に起きたついでに、申譯だけカチ／＼やつたものだよ。「今夜大きいゆり返しが來ます。」と町內の人が觸れ廻つて來ると、「馬鹿らしい、地震の來ることが何んでわかるものか。」とは思つても、世間の人が皆外へ出て來もしない地震の來るのを待つてゐるのに、自分一人家の中で寢てしまつては相濟まないやうな氣がして、馬鹿らしいとは知りながら……

A　何んだい、いつも寢てしまつて、よく近所の人に叩き起された癖に、いゝ加減なことをいつてゐるよ。

B　寢るには寢ても、何となく相濟まないといふ氣がしたことは事實だよ。人間は餘りに周圍の人々と異つた生活狀態を支持するといふことは心理的に不可能なのだよ。それをいい氣持でやり得る人達は、社會人としての素質を缺いてゐるといはれても仕方がないのだよ。

A　何の話をしてゐるのだよ。大地震の話なんかしてゐやしないよ。

B　だからさ、清華學校のあの立派な設備を見ると、あすこにゐる支那青年は、大震災の中で風呂に入つて寢てしまつた當時の僕と同じやうな氣持がしやしまいかと思ふのだよ。

A　然し、支那の將來は何うしても西洋流の學問をした青年の手に料理されねばならない無數の問題をもつてゐるのだから、そんな一時的の感情なんかに囚はれて、遠大の理想に達する道を忌避するのは愚だよ。孫文だつてアメリカの教育をうけなかつたら、あんな革命家にもなれやしなかつたのだからね。外人の學校は、皆西洋人が政治的侵略や資本主義的侵略の手段として所謂、文化的侵略を計畫したに過ぎないにしても、そこで教育された支那青年は、その專門の知識の發達と、それに伴ふ國民的自覺とによつて、自ら西洋人を無用視する地位に達するのだよ。西洋人に育てられた日本の技師が今では西洋人を排斥してゐるが、支那人もぢきにさうなるのだよ。然し今日の支那の有樣は、學校などといつたら政府のでも私立のでも、殆んど成つてゐやしないのだよ。眞面目に勉強しようとする青年は外人の學校に行くか外國に留學するかの外はないのだからね。

B　それでも反基督教運動や此頃の文化侵略反對の運動やで外人の學校は大分影響をうけたらう。

A　何うして。外人の學校はいつも入學志願者が溢れてゐるのだから、不平をいふ學生なんかずん／＼追ひ出しても、あとから／＼と入り手があるのだよ。學校は少しも困りはしないよ。元來一般の支那人は、實際的で教育といふものを極めて實用的に考へてゐるのだから、日本人のやうに大和魂を養成するために學校へ入るなどと心得てゐるものはありやしないのだよ。だから外人の學校だらうが野蠻人の學校だらうが、內容がよくて、出てから世間に通用する人間になれるといふことなら、ずん／＼入つて行くのだよ。宗教學校なんていつたつて、入つて行く青年は、キリスト教なんか何うでもいゝのだよ。そこへ入れば、外國語が出來るやうになつて、專門の知識が得られて、西洋の學問をしたといふので世間で高く買つてくれるといふので、キリスト教はありがたい宗教だといふ位のところだらうよ。だからさういふ御利益がある限り、反基督教運動が起らうが、文化侵略反對運動が起らうが、外人の學校の繁昌することに變りはありはしないよ。一體あゝいふ運動は、少數の指導的の人間が騷ぎ立てる割合に、一般の支那人には影響しないのだ

よ。南北の軍人が戰爭をしても一般の支那人は案外平氣なのと同じで、支那の青年が何よりも先づ役に立つ教育を受けようとする大勢は何うすることも出來やしないよ。だからさういふ運動をしてゐる人達の間でも何よりも先づ支那人自身の學校をよくしないでは、外人學校をぶつつぶしても、あとが困るといつてゐる人もあるのだよ。

B 君の頭は何うも物事を逆さに見る癖があるね。さつき君は、外人に育てられた日本人の技術は今は外人の技師を排斥してゐるといつたらう。

A それは云つたよ。事實さうなのだからね。

B 人間の運動といふものは、先に運動が起つてあとからその動機をこしらへるものぢやないのだよ。支那に外人學校の排斥の起つたのは、先づ外人の教化を排斥してから支那の教化を起さうとするのぢやないのだよ。支那自身の教化がある程度まで發達したので――少くとも外人の教化に盲從することが出來なくなつたといふ程度まで發達したので、外人の教化に反對し出したのぢやないか。日本人の技師だつて、先づ外人技師を排斥してから日本人の技師をこしらへようとしとのぢやあるまい。

A それはさうさ。日本人の技師が立派にどんな仕事でもするやうになつたからだよ。

B それなら支那人の間に外人の教化に反對する運動の起る原因も、これから作られるのではなく、既に作られてゐるからだと思ふのが當然ぢやないか。

A 所が、支那の教化機關と來たら、とても外人のとは比べものにならない程度なのだからね。だから支那人が外人の教化を排斥するのは、碌に鐵道の設計も出來ないうちから外人の鐵道技師を排斥するやうなものなのだよ。現に奉天から海龍へ行く鐵道を支那人の手で建設中だが、その技師といふのは、日本の學校を出たばかりの人間で、教科書と首引きならまだいゝが、教科書に見つからない事なんぞはいゝ加減にやつてゐるので滑稽を極めてゐるさうだよ。見て來た日本人があの鐵道ばかりは乘つて見る勇氣はないといつてゐたよ。一事が萬事で、まだそんな調子なのに、もう外人の學校を排斥するのだから凄まじいよ。

B 然し、とにかくも支那人自身が鐵道を自分で敷けるやうになつたのだよ。だがさういふ技術的の方面は別として、一般教化といふ點からいへば、初めて外人に教育された支那人はもう孫の時代になつてゐるのだよ。如何に支那といふ國家が何もしないでゐるからといつて、支那人そのものは時代と共に成長してゐるのだよ。學校の設備こそ、外人のそれに及ぶまいが、人間だけは、相當に發達して、學問でも技術でも外人に劣らない人間が澤山に出來てゐるのだよ。そこへもつて來て、外人そのものは、依然として阿片戰爭當時からでもなからうが、とにかくもとのまゝの西洋人で、東洋くんだりで年をとる連中だから、先づ發達の止つた方が多いのだよ。それが昔とつた杵柄をふりまはしてバイブルと薄つぺらな橫文字の教科書で、十年一日の如く、型にはまつたヤングチャイニースを作つて行からとしてゐるのだから治まらない筈だよ。チャイニースだつていつまでもヤングではゐないよ。息子が、親爺に楯をつくやうになつたのは、もう獨り立ちの出來るまでに育つたといふ證據なのだよ。それに金と自由とを與へれば、親爺同樣、或は以上に立派にやつて行くといふことは、試みに親爺が死んで見るとすぐわかることだよ。支那人もそれと同じでキ

リスト教のタブーや牧師の學力やで、支那人の教化が出來る時代は、何といつてももう過ぎ去つたよ。殊に元來言語の發達した國で、言語の發達は同時に思索能力の發達を意味してゐるのだし、その上、あの印度の佛典を殆んど全部飜譯したことによつても推し測られる恐ろしい外國文化の吸收力をもつた支那國民が、いつまで淺薄な田舍廻りの外人牧師や『天にまします我等の父』を舁ぐ牧師やにマイボーイ扱ひをされて嬉しがつてもゐられないぢやないか。そこへもつて行つて、外人の學校はどこまでも、植民地式で、生徒の支那人は、將來外人達の商賣や外交の手先きになる所謂『洋奴』を作るといふ主義で、日本の官立學校よりももつと嚴しい壓迫を生徒に加へてゐるのだから、それでいつまでも平穩で行けば支那人の方が滅びて行くだらうよ。もう支那人自身が支那人を教化して行く時代が來たのだ。來なければ譃だよ。

A　海龍へ行く鐵道の流儀でやつつければ、出來ないことはないだらうよ。

B　日本人だつて鐵道なんかはやつぱりさうだつたのだよ。東海道線でも、教科書で間に合はない所は外人技師に賴んだものだよ。淀川の鐵橋へ出る所をフランス人の技師とか設計したのだが、何うも勾配が急で工合がわるいといふので、つい十年ほど前に日本の技師が新しい線路につけ代へた所が、その翌年だかに大水が出て、新しい線路が流されてしまつて不通になつたが、舊線路は何の故障もなかつたので、恐らく外人技師は出水の場合を考へたのだらうと、初めて日本の技師が感服したといふ話をきいたが、事實か何うか知らないが、日本人も、いゝ加減にやつてのけるといふ程度を脱したのは、ほんの近頃だらうよ。鐵道なんかは利權と一緒に工事でも何でも外人の手に收めて支那人にやらせなかつたのだから、ヨタ〳〵は無理もないのだよ。ヨタ〳〵やつてゐるうちに確乎して來るのだよ。教育だつて、まだ大分ヨタ〳〵の方面も多いだらうが、然し自分の手に收めなかつたら何時までたつてもヨタ〳〵を脱することは出來ないのだよ。「教育回收」の問題が利權回收と步調を合せて進んでゐるのは尤も千萬の話だよ。これからは西洋人も今までのやうに、本國の威光と資金とで、のんきな顏で、自分の調法になる支那人を作つてゐる譯には行かないだらうよ。

A　それは西洋人もとうから氣がついてゐるのだよ。數年前に死んだアメリカの牧師で支那通のベレスフォードといふ人の書いたものに西洋の近代式の學問が支那に入つて來て、一つの墮落徵候を示してゐる、それは支那の學生が教師や當局に對して尊敬の念をもたぬこと、自由の濫用に陷つたこと、學生自身が學校を管理する權利を有すると思つてゐることであると慨歎してゐるのだよ。

B　それは西洋の學問が支那に來て墮落したのだといふのかい。

A　それもあるが、一つには教育は支那では私的のもので、めい〳〵自分の家で教師を雇入れた習慣なので、教師といふと雇人同樣に心得ることになつてゐるからだといつてゐるよ。所がそれに對する對策として、その教師殿は、日本の例をひいて、以て鑑とすべしといつてゐるから面白いよ。日本も西洋の學問のために同じ弊害を感じたので、政府は大に考ふる所があつたといふのだよ。

B　何を考へたといふのだい？

A　日本では、科學的學問に於ては西洋と拮抗するに足るほどの努力をしたが、しかし東京の大學で、官憲が、四千九百六十六人の學

生について信仰狀態を調べたら、日本固有の神道を信ずるものは一人もなく、六人が儒敎で、六十人がキリスト敎で、三百人が佛敎で、四千六百人は無神論者と懷疑論者だつたので、日本の文部大臣大に驚いて、早速神、佛、基の三敎の代表者を招集して、宗敎をもつて國家の安泰を計る根本策を立てねばならぬと大評定を開いたといふのだよ。

B　それが大に支那のためにも參考になるといふのかい？

A　さうだよ。支那も亦そのナショナル・セーフティーを宗敎――しかもキリスト敎に求めざるべからずといふのだよ。その曰くが振つてゐるよ。『もし支那人が、人間は神に象つて作られたがある不思議な次第によつてその高級の地位から墮落したものであるといふことを悟つたならば、而して、もし支那人が彼等の靈性と道德的修養とのために何うしても無くてならぬものとしてキリスト敎を採用するならば、支那人は、われ〳〵が西洋でキリスト敎を利用してゐる以上に、より廣くより深くそれを利用するに違ひない。』さうして、支那の敎育が、單に西洋化されたのみでなく、キリスト敎化されたならば、支那人の前途は歐米同樣に繁榮に輝くだらう、支那はキリストに於て新人道を實現すること遙かに西洋を超越するであらう……

B　アーメン！

A　堂々たる支那通の大家がこの調子では、僕もいさゝか、支那の學生の敎育回收運動に贊成したくなるね。手本として賢明な日本の文部大臣を見傚へなんて何といふ慘憺たる言草だらう。

B　その賢明な日本の文部大臣といふのは一體誰れだい？

A　僕もしつかり覺えてゐない位豪い文部大臣だが、その時坊さんや神官をその大臣が精養軒か何處かで御馳走したら、あとでナイフやフォークが澤山紛失してゐたのでボーイが驚いてゐたといふ話が新聞に出てゐたことだけは覺えてゐるよ。さういふ連中に日本の敎育の根本義を決定させるといふ文部大臣も隨分大膽な人だから、つまり豪い人だらうよ。

B　でもナイフやフォークを持つて歸る人は、必ずしも日本の敎育の根本義がわからない人だと定つてはゐないだらうよ。それに敎育の會議では懷に忍ばせるものもないからいゝだらうよ。…何しろさういふ文部大臣に辶をかけた外國人が支那の實際の敎育に當つてゐるのだから、支那人は一層迷惑する譯だよ。文部大臣なら一人きりだし、その上實際手出しはせず、どんな豪傑でも泥棒でも、直接ぶつからないから腹も立たない譯だがね。

A　學校の話はいゝ加減に切りあげるとして、あれから西山の方へ行つて見たかね。

B　一日自動車で西山巡りをやつたよ。玉泉山を見て西山の碧雲寺、臥佛寺、八大寺なんて名所めぐりをやつたが、立派な自動車道路が出來てゐるのには感心したよ。

A　道路のないので世界に有名な支那も、外國人等の遊覽地や別莊地だけは立派な道路を作つてゐるのだよ。あれ等も外人本位の奴隷根性の一つの現はれだらうよ。

B　さうぢやないよ。人間は無用なものから先づ完成せしめるものなのだよ。衣服の最も完備してゐるのは裝飾的の衣服だらう。家屋で一番力を入れてあるところも裝飾的部分だよ。道路だつて先づ遊覽地の道路などから完成して行くのが、人間のやり方だよ。尤も野蠻人ほどその點が甚しいのだがね。

A　それはさうかも知れないね。日本人も大連と旅順の間に立派な自動車道路を作つてゐる

ね。實用的には碌な道路も作らない癖に。

B　然し、あすこのは餘り露骨な遣り方でいけないよ。立派な遊覽道路を作つたはいゝが、それに沿うて昔のまゝの砂礫の道路を殘して置いて、肝心の荷車や牛馬は、その石ころ道路しか通行を許さないことにしてゐるのは亂暴だよ。自動車階級のための道路は荷車階級の者共に通行罷りならぬと威張つてゐるので、まるで大名の『下に居ろ』同然の封建式だよ。

A　一體日本人のやり方は露骨でいけないよ。滿洲で教育回收運動が起つた時にも、陳獨秀が何かでいつてゐたよ。日本人の教育の遣り方は、米人などのそれにはとても及ばないゝに、支那人の反對をうけることは日本人の方が烈しいのは、日本人の遣り方が拙くて露骨だからだ、奉天方面の教育侵略の方法なども如何にも日本化した支那人を作りますといふ風を見せつけるから鈍感な支那人をさへ怒らせるのだ。支那人は日本の對支文化事業にばかり反對しないで、英米のそれにも同樣反對しなければいけない、といつてゐたが、全く日本人の遣り方は今の大連旅順間の自動車道路の遣り方と同じく下手で露骨だよ。……

又話が逆戻りしたが、玉泉山の池に湧いてゐる水の綺麗なのには驚いたらう。

B　全く驚いたよ。あの支那の燒石のやうな大地から、あんな綺麗な水が湧いて來ようとは思ひもつかないことだよ。あすこへ行つて見ると、初めて此頃の支那の覺醒なるものが決して偶然でないといふことに合點が行く氣がするよ。玉泉山の水脈のやうなものが荒涼たる支那の社會の底を走つてゐるのだといふことが想像されるよ。

A　あすこでその水でラムネを作つてゐるが呑んだかい？　支那の社會の底を走つてゐる水脈から流れ出る水よりもあの水の方がうまいだらう。

B　どつちも可なり胸をすかしてくれるよ。

A　西山の附近には西洋人が盛に別莊を作つてゐるが、日本人の別莊のないのは物足りない。日本人は、何うも一しよに固まつてゐたがつて、あの邊に別莊を作るやうな度胸のあるもの少いのは心細いよ。

B　日本人は仲間を離れると、もう敵地に入つたやうな氣で緊張してしまふから、あんな所へ別莊を作つて住んだら、谷將軍が熊本城に立籠つたやうな氣持になつて、とても別莊氣分ではゐられないだらうよ。

A　西洋人は、あの邊の野原の眞中に一軒家を構へたり、支那人の村に一人だけ住つて北京へ通つたりしてゐるが、日本人には嘗てそんな眞似をしたものがないね。

B　日本人はそんな所へ住むと、今にも土匪が來襲して鏖殺しにされやしないかと思つて神經衰弱になるだらうよ。その邊に澤山の支那人が安全に生きてゐるのが目に入らないのだから變だよ。日本の人口問題は、あれぢやとても解決されつこはないよ。日本人は殖えれば殖えるほど塊つてゐたがるのだからね。少くとも死ぬ時だけは塊つて死なうといふのだよ。

A　なるほど『死なば諸共』なんて日本人の發明した文句は、支那人の所謂『人間到る所青山あり』の正反對だね。

B　日本人は『青山』といへば赤坂區にしかないものと定めてゐるのだよ。

哈爾賓直行

一

WRK兄

いま哈爾賓について、例のホテル・モデルンに落つきました。こゝまで直行したので随分弱つてゐます。その上、數日來、早くもイルリガートルの必要を感じ、長春で第一回の洗禮をうけて、絶食に加ふるに沮通をもつてした、自然の細長きに更に不自然の細長さを加へた、纖維となつた絲瓜のやうな身體と頭腦とをもつて、直ちにデスクに向ふ模範的態度は、やはり國際的旅行の與へた緊張味によることと思はれます。尤もそれは別に理由がなきにしもあらずです。前回の旅行には貴兄が牧師の役をつとめて襖の外に頑張つて下さいましたが、今度は單獨のため、洗禮室が必要となり、こゝでも、モデルンならざるホテル・モデルンの厄介とならざるを得なくなりました。このホテルがモデルンの名に背くことは、私の部室の洗面盤の『C』即ち冷水と書いてある所を捻つたら熱い湯が迸り出て私をやけどさせ、『H』とかいてあるべき所――といふのはそのHと書いてあるべき所の文字板が剝落してゐるからです――を捻ると冷水が出ることによつても明かで、モデルンなのは部屋代ばかりです。で入院したつもりでこんな所に高い入院料を拂ふの已むを得ざるに至つたことを悲觀するわけですが、恰も今度の航海で知り合ひとなつた陸軍の參謀將校で、全く私と同じ理由で旅行の度に苦しみ、しかも洗禮のみ惠みを知らないため、絶體絶命に陷る虞れがあつて旅行不可能を感ずる場合が多いといふ人を知ることが出來、私は大に喜びました。決して人の憂ひを喜ぶわけではなく、軍人でさへさういふ身體で立派に勤まることを知つて、私のやうな身體でも決して普通の生活の出來ないことを嘆ずる理由のないことを悟つたからです。これ絲瓜の巢のやうなフハ／＼の五體をデスクに凭せて、敢然として筆を執ることを得たわけです。軍人といふものは、何かにつけて人に勇氣を與へるものであることは拒まれません。

今度の航海は實に靜穩でした。私は前回には歸路をこの航路にとつたのでしたが、やはり、日夜洗禮のために密室に閉て籠り、大連から神戸までは、病院船に乘せられたと同じだつたから、今度は初航といつてもいゝのです。從つて木浦沖の多島海を通過する時など、甚だ珍らしくも面白くも感じました。

船長は、朝鮮寄りの側を指しながら話されました。あの島々を越えた向うの朝鮮沿岸は、太閤の朝鮮征伐の際、日本の水軍が全滅をした所で、土民の家々には、その時の日本軍の武器や旗印やを藏してゐたといふことです。ですから併合の際にも、此の地方の土民は我々の祖先が鏖殺しにした日本人の子孫などに我々朝鮮人が支配されるといふやうなことはあり得べからざることであると力んで、反抗心を燃やしたさうです。總督府も、どうかしてその記憶を土民から拭ひ消さうとして、その家々に殘つてゐる戰利品を買收しようとしたが、中々おいそれとは差し出さず、中には、日本人にそれを賣つて儲けるよりは寧ろ埋めてしまへと、實際埋沒させたものも多いとのことです。

民族といふものの生存は、決して軍事の勝敗

にのみよるものでないことは明かだが、民族心といふものは軍事的行動によつて最もよく刺戟されます。然し、多くの國民は、此の邊の朝鮮人と同じく、その祖先の軍事的功績を土中に埋めてしまはなければならない時期に遭遇するに至りました。祖先どころではない、自分の軍事的功績が、たゞ誇りと貧乏とを齎すものであること、徳川末期の旗本のそれの如きものであるといふ形勢が國際的に成立せんとしつゝあります。この支那に於ても、日本や英國やは、支那に對する過去の軍事的功績を出來るだけ埋沒させた方が、今後の仕事を成功させるに都合がいいといふ形勢になりつゝあります。老大イギリスの如きでさへ尙ほ且つ然りです。私は船長の話をきいて感慨無量でした。

二

私共は偶然にも、その前夜サルーンでそんな問題にふれたことを夜の一時過ぎまで話し合ひました。船では晩餐後の談話が中々面白いものです。極端に異つた種類の人間が、その異種を發揮しつゝ互に交歡するのは外の機會では得られないことです。その晩も、少數でしたがその種類は、M少將、I中佐が陸軍側を代表し、K前領事は外務省側を代表し、かくいふ私は何物をも代表する資格はないが、たゞ私自身を代表することは許されるであらう。

談はK君の支那に對する見地から口火をつけられました。K君は、その最近の支那の奧地に於ける領事時代の苦い經驗から、支那國民に對するある種の敵愾心を刺戟されて、所謂外務省的デスク外交を悲觀しました。さうして寧ろ陸軍側に同情するが如くでした。同君は外交官としてはアメリカ育ちで、支那に來るまでは無論その見地は、より客觀的だつたでせうが、一度、奧地で身命を賭するやうな危險に遭遇したため、つひに外務省をやめるやうな見地にまで到達したものと考へられます。かういふ座談の內容は、各自のためにそのまゝ發表すべきものではありませんから、こゝにそれに委しく觸れることは出來ないが、要するにそれは支那に在留する邦人の多數の意見に近いものでした。支那にゐる領事などは、いつもそれらの在留民的意見を抑へようとするために在留民から毆られたり、られんとしたりするのですが、K君は毆られる側から一足飛びに毆る側に移つたらしいのです。私は個人的經驗による感情の如きものに支配されてはならぬことを注意しましたが、實感は、そんな注意よりもずつと深く人間を支配するものですから、理窟などはその感情に對しては豆腐に鎹です。(かう書いてゐるうちに、窓から日光が頭の上に直射して如何にも苦しいが、このモデルンの窓には半分のカーテンしかない。從つて私は今や熱した頭でペンをとりつゝあるが、私のペンがかやうな個人的體驗に支配されないやうに注意しつゝペンをすすめてゐる。)

K君の話のうちに、支那に飛行機飛行船が發達して、日本に對して空中戰を行ふ時が來たら、決して今の專門家がアメリカのそれを虞れてゐるのなどは話にならない、といふやうなことがありました。いかにも、四億の民と計算されない富とを藏した支那國民が、そんな氣になつたら大變です。成程、それは昔の蒙古族の東侵に對するあの恐ろしい征服の歷史を思へば、十分考へられることです。然し、その考へこそは、日本初め諸外國をして如何に支那を扱はねばならぬかを知らしめるものです。今日まで、諸外國の支那に對してとつた態度は、支那がもし強固な國家と集中された國富をもつたならば必ずK君の怖れてゐるやうな大企圖を思ひつかしめるものでした。K君がそれを虞れるのも、

K君の屬する國家の態度が支那をしてさういふ種類の「覺醒」を持ち來らしめるものであつたからです。K君は無意識にそれを自覺してゐるのです。それがK君自身の經驗で刺戟されたやうにすべての國家も、その軍國的體驗によつて同じやうな危惧を抱いてゐます。これは支那に對するばかりでなく、強國間がお互に相手方に對してそんなことを怖れ合つてゐます。これ軍備縮少を口にしながら内々互に劍を磨いてゐる所以です。

私はデモクラシーの進展が、國内的鬪爭の性質を變へた――武力戰から宣傳戰に變へてしまつたのもその一つ――やうに、國際的鬪爭も暴力の摑み難い鬪爭の種類に變じつゝある事を見ます。各國が演說をし合つて投票を集める鬪爭はもう始つてゐます。イギリスはロンドンを飛行機で襲擊されるよりも、世界からイギリスを批判されることを恐れてゐます。かういふ事が國家社會にとつていゝ結果をもち來すか惡い結果をもち來すかは別として、とにかく共和國の大統領が武力で當選出來ない樣な形勢は、國際的にも卽ち、國家が豪いものになる場合にもやがて成立するでせう。これからの世界に、インド人や、ニグロや、支那人やがその力を如何に世界的に伸勢せしめるか――さういふことは決してユウトピアではない――は決して彼等の武力の強弱によるものでないことは明かです。それが如何なる過程によるかは將來のこと故、斷言出來ないが、それが武力的征服でないことだけは、今日の形勢から推斷される。かういふ時代に、諸國からの飛行機の襲擊を最も多く恐れるといふ心理は、畢竟その恐怖心の持主自身が、國家的競爭に於て、常にさういふ企圖を夢みてゐるからでせう。若いアメリカ通のK君をさういふのは如何にも氣の毒だが、現にアメリカにゐる日本人の多くはやはり大抵K君式見地にあります。これはアメリカ人が、彼等の所謂アメリカニズムなる建國の精神を、對英革命當時のそれから、最近發達した帝國主義時代のそれに塗り變へたために、そこにゐる日本人――そのアメリカニズムへの同化によつてアメリカを憎惡するに至ることを通例とする日本人――も帝國主義的大戰爭を夢みるに至るのです。これは夢ではあるが、社會的變化過程はやゝもすればかういふ夢をもつものを歷史の上層に浮き出させる結果となるものである故に、甚だ警戒の必要があるものです。

然しこゝでは私がやゝ意を安んじたのはかういふK君の恐るべき豫想をきいた、軍事專門家たる參謀少將と同中佐とが、必ずしも否定はしなかつたが甚だ重きを置かないやうに見うけたことです。で私は直接兵隊を訓練する將校などのうちには、隨分猛烈な空想による假想の敵を作つて、それを兵隊達の頭腦に刻み込むために努力してゐるものゝあるやうに聽いたことをいひましたが、少將も中佐も異口同音に、それが今日の陸軍側の意志に反するものであることをいつて、頻りにそれが誤傳でなければ、當の軍人等の誤解であることをいひました。それはその場の辯解であつたかも知れないが、私の兩軍人に對する直覺からいへば、兩君とも決して譃をいつてゐるとは思はれませんでした。少くとも陸軍側の意志は何うあらうとも、此の兩君だけは決してそんな妄想に支配されてゐないやうでした。それは私の直覺ばかりではなく、長い間の談話による諒解でもありました。とにかく、この頭の禿げた、もう孫もあるといふ將官と同じく禿げてはゐるが漸く四十に達したといふ壯年の將校とは、私をして陸軍の中にも、國家の軍事的態度の變遷について相當の理解をもつもののあることを知らしめました。

然し不思議なことには、私の甚だたまに接觸する高級の軍人諸君は、多少の程度で、この少將と中佐の兩君に似た見地をもつてゐることです。私は軍人の顏さへ見れば、今日わが敎育界に流行せしめられてゐるアメリカ式の軍事敎育に反對するのですが、私の稀れに逢ふ高級軍人は必ず職責上、私の反對を反駁しますが、然し私の推定してゐる軍事敎育の目的なるものについては、言を極めて否認します。これは或る意味で、職業的軍人は却つて、軍事敎育の國家的目的を意識せず――無意識にそれを承認し實行しながら――丁度、刀鍛冶が自分の作つてゐるものの殺人劍であることを忘れてしまふやうに、軍人は、觀念的に變造された意識によつて軍事敎育に從事してゐるのだともいへるが、然しまた、一面では、國家目的による軍事敎育は、軍人自身の進化した意識によつて內容的に批判されてゐるのだともいへませう。現にこの中佐も、いろ／＼と內容的に、今の方法を批評してゐました。私は自分の持說であり既にどこかで發表したことのあつた一種の『軍事敎育』をこゝでも主張しました。それは一言でいへば、軍事敎育といふ特殊の、範疇的の敎育は一切排除して、現實軍事行動の成立に必要な人間的能力を、部分品として發達助長せしめ、それを纏めさへすれば、いつでも軍事行動の技術的方面が完成させられるといふ方法をとるべきだといふのです。卽ち軍事的技術を、その各々の技術が必要とする人間的能力に分解してその能力を養ふのです。行動の方面でも、機械の方面でも、卽ち軍事敎練でも軍事科學でも、それから『軍事』を排去して『敎練』――社會的の――とし『科學』として授けるのです。このことは、甚だ精密な科學的方法を必要とするので、素人たる私達には實質的に說明するのは困難だが、要するに陸軍が現にその『科學研究所』でやつてゐることを軍隊に及ぼすのです。陸軍の科學研究所は、決して直ちに大砲を作るのが目的ではなく、大砲の各部の科學的性質を、部分的に研究してゐるに相違ない、その部分的研究をするものは、大砲そのものを忘れてゐても差支ないのです。國家の軍團的性質を緩和せしめるためには、國家の軍隊そのものの、軍事的性質を忘れて、それを軍事的行動能力に分解します、而してそれを國民に授けます。丁度、消防夫が、『軍事』といふ觀念なしに、消防用具の扱ひ方や消防夫的行動に於て『軍事的』のそれと同一性質のものを行動してゐるやうにするのです。現に、今でも人々は切符を買ふのに行列することがありますと同じやうに社會的行動として軍事的部分行動と同質のものは澤山あり、ある意味によれば、軍事行動は進步すればするほど、社會的に必要な行動と一致する傾きをもつものです。軍事技術家は同時に社會的の仕事の專門家として通用する傾きは日一日と增しつゝあります。だから私は、將來の國家は『軍隊をもたずに、軍事行動に必要な社會的技術を有する國民』を持つべきだと考へてゐます。

私の意見を兩軍事專門家は、その分解した軍事的能力を社會的に普及せしめるといふ意味の方は贊成し、軍事的形態と精神とを排除するといふ意味の方は反對しました。少將は、軍事的精神といつても、決して社會的精神と別のものであることを信じないといひました。中佐は、苟も戰爭といふものの存在するかぎり、軍事の形態と精神とは、國家から排斥することは出來ないといひました。然し、アメリカの如きは、今日こそ世界の軍事的中心を背負つて立つたやうになつてゐるが、その建國當時には立派に國家から軍國的精神を排除する覺悟で、あれほど獨立戰爭で、軍事の必要を痛感しながら、

國家的軍隊の存在を否認し、事實は國家的軍隊でも、觀念上は、出來るだけ人民の自警組織のやうな民兵主義をとりました。ワォシントンの如きは、個人的にも、さういふ觀念を具象した人間たるべく心懸けて大將軍から平民に歸ることを喜びました。アメリカが今日の大をなしたのは、あのルーズベルト以來の帝國主義的國家行動によつたものではなく、建國當時のワォシントン的心懸けによつたものだと思ひます。

旅行をしてゐるのか、議論をしてゐるのかわからなくなりましたが、實はその夜のサルーンでは船は、機關で動いてゐるのか議論で動いてゐるのかわからなくなりました。布袋和尚そのまゝの溫顏をもつた文字通り圓滿の船長は、この議論の眞中に挾まれて、低氣壓の中心に船を乘り入れたよりも困つたやうな顏をして大きい船體でなく、身體を持て餘してゐましたが、たうとう中途で、ゴースタンを極め込みました。

さうして私も折角哈爾賓までのり込んで、値段ばかりモデルンのホテルの一室でこんなものを書きつゞける二重三重の不經濟を思ひ出してこれで今便は打ち切りとします。（一〇・二二）

三

WRK兄

香港丸で大連についたのは正午前でしたが、私は豫定の通りすぐその晩に哈爾賓に向つて立ちました。神戸から同船したフランス選手の二十人程の一行も同じ汽車で奉天に向ふといふので、又汽車が混雜することを心配しましたが、この連中のために寢臺車一臺が別に連結されたので助かりました。

實際、船の中での此の選手一行の活動ぶりには皆感心又は閉口してゐました。何しろ朝起きると所謂朝飯前に何かしら一運動をして、それから一日の間殆んど間斷なしに、或は競走、或は機械體操、或はデッキゴルフ、或は輪投げ、或は鬼ごつこと、人間が運動をしてゐるといふよりは運動が人間をしてゐるといつた方がいゝ位に、上中下甲板を跳ね廻つてゐました。流石に驅ける時には、音を立てぬやうにスリッパを脫いで跣足で驅けたりしてゐましたが、とにかく船全體を自分達が買ひ切つたやうに、文字通り縱横無盡に飛び廻りました。船客や船員のうちには、その無作法をぶう〳〵いつてゐたものもあつたやうでしたが、然し私はその人達に云ひました。日本の選手などが、遠征に出かけて外國船で旅行したとしたら、とても此のフランス人のやうに無遠慮に荒れ廻る勇氣はあるまい、必ず大に紳士的態度を守るべく監督の人達から注意されなどして、坐臥行動を肅々如たり申々如たらしむべく努力することであらう、が運動家としてはそれがいゝか、またはこのフランス人等の如く振舞つたのがいゝかは問題である、我々にとつては多少迷惑であるが、然し彼等自身の生活の立場からいへば、船中で謹愼して、陸に上つてから身體が堅くなつて敗北の憂目を招く必要はないわけで、運動家たる自然の衝動なり又は訓練の必要なりから、あんな風に、ハンドルの外れた自動車のやうに狂ひ廻るのが當然であらう、日本の選手などは自國內では大に跋扈しながら、外國船へでも乘せられると質にとられた猿のやうにつくねんとしてゐるのは、必ずしも立派な態度といふわけには行かぬ、と大にフランス人の南京鼠式活動に同情したわけでした。所が上海から歸りの船での船長だかの話に、日本の力士一行が船に乘られた時には冷汗の出ることがあるといふことです。年寄や關取連が一等のサルーンにゐると、幕下の連中などが夏などは例の土俵の上

の姿そのまゝでサルーンに現はれるので、氣の弱い西洋婦人などは、自分達が上半身を素裸にしてゐることは忘れて、這々の態で逃げ出すさうです。船員がその力士に小言でもいはうものなら、裸の力士は、「俺達はこのまゝで何んな高貴の方々の前へでも出るのだ、西洋の女が何だ。」と啖呵を切つて、ぐづ／＼いふとまはしさへも外しかねまじき勢を示すさうで、全く手がつけられないことがあるといふ話でした。でも力士からいへば、自分等の裸體を賞翫する社會が、それを嫌ふのは自家撞着で、同様に、運動家を持ち上げる社會が、彼等の運動するのを嫌ふのも矛盾でせう。ギリシャ人のやうな頭のいゝ人間にはそんな矛盾はなかつたさうで、今日の人は石像や銅像の外の裸體を許さないが、ギリシャ人には、石や銅に許すことを人間だけに許さないといふやうな矛盾はなかつたさうです。

私は、さういふ矛盾が盛んに具體化されてゐる滿洲に上陸したのでした。文明國自體が彼等自身の生活に於ては既に中世紀の昔に置き去りをした、保護、特權、割據、排他等のまだ盛んに行はれつゝある支那大陸――敢て支那大陸には限りますまいが、その有力な例として擧げられてゐる支那大陸、殊に滿洲はその意味の興味だけからいつても却々貴重の地域です。今少し後には、歴史の書物の上の文字としての外窺ふことの出來ない狀態を目の當り實物で見ることが出來るのはこゝです。

キップリングを讀んだものが、彼れの詩想に魅せられると、乾度英領アフリカに出掛けたくなるさうですが、それはキップリング式の理想を現在實物で見ようとすると英領アフリカに行く外はないからださうです。キップリングといふ男の考へでは、イギリス人は、世界の野蠻國、未開國及び半開國とその上に棲息する野蠻人、未開人、半開人とを一緒に掌に丸めて作つた團子を腹一杯喰ふ權利があるといふのださうで、それはイギリス人が長い間、さういふ團子に飽滿したことをキップリングが『團子より花』と、逆に物質を靈化したのでせうが、英領アフリカに行くと、その靈化が更に物質化されて、花は再び團子になつて、イギリス人共の食慾をそゝるのださうです。

イギリス人はさういふ意味から南アフリカに興味をもつのでせうが、然し、世界の人々は他人の皿に盛られた團子に興味をもつ譯はないから、全く別の意味からアフリカの問題に興味をもたねばならぬのでせう。が何分にも世界の人々はまだ、廣大な地域に興味をもつのはそれを我がものにするためだといふやうな料見でゐるので、最早わがものにする見込のない地域には興味をもちません。自然の富源は悉く、何處の國か何の誰某かの懷のうちの私有物と考へてゐるので、それがスリ取られる見込のない時には、決してその自然にも社會にも興味をもちません。然し、私共は、人間が作つた歴史、現に作りつゝある歴史は、私共の社會の先途を示唆するものとして、決して他人事とは思ひません。私共はインドやアフリカやのことにも滿洲のそれとちつとも變らぬ程度の關心をもち、又もたねばなりません。日本人だけが、日本國だけが、同じ地球の表面に、全く異つた歴史を作りつゝあると考へるのは、キップリングが、イギリス人だけが世界を丸めて團子にする權利があると考へるのと同じ詩人的又は愚人的空想で、決して國家や人間の考ふべきことではなく、資本家でさへもが考ふべきことではありません。

蓋し資本主義そのものが、地球上の人間は全部國家や民族や皮膚や相貌やの異同に拘らず、悉く同質の、物質的及び精神的理法に支配さ

れる、といふ原理の上に成立してゐるものだからです。インドやアフリカに今も盛んに行はれてゐる時代錯誤の支配狀態を打ち倒すものは、現にその打倒を叫んでゐるインド人でもアフリカ人でもなく、世界人たる資本家その人であることは、資本主義の本質上疑ふ餘地のないことです。現に支那大陸に行はれてゐる封建政治を瀕死の狀態にまで導いたものは、外國の資本主義でした。五千年來支那大陸に嘗て成立しなかつた『民族國家』を今に至つて成立せしめたものは、やはり、ヨーロッパ大陸に古來決して成立しなかつた『民族國家』を近代に及んで成立せしめた、そのヨーロッパの、即ち世界の、資本主義です。滿洲に對する日本の國策も、日本及び滿洲に於ける資本主義の發展過程に伴つて變化すべきものたることは明瞭で、今やその轉期に面してゐることは、私共局外の觀察者よりも、當事者その人の間に既に氣づかれてゐることと思はれます。

然し、詩の作られない極東のキップリング諸君は、まだ／＼その幻想の自家陶醉から醒めない樣子です。――どころか、その陶醉氣分は最近に至つて益々甚しい樣子で、要するに德利の中の酒が乏しくなればなるほど、益々陶醉をつゞけたい希望だけが熾烈にならねばならぬといふわけです。

世界の歷史は今や反動期に入つてゐます。日本人も自分の都合によつては、決して世界の歷史から外れまいと努めます。目下滿洲に於ける日本人の頭から何んな湯氣が立つてゐるかは十分推察されませう。

哈爾賓直行が却々直行しません。ロシヤが極東の鐵道を直線的に敷いたのは、軍事上の必要からであるといふことですが、私は軍事上の必要をもたないので、曲りくねつて行きます。

四

W R K兄

大連から汽車が北行するに從つて、車室からの眼界は次第に廣濶となつて、つひに渺茫たる平野が展開されますが、それが悉く見事な耕地で、何處まで行つても、滿洲の果まで行つても同じです。汽車でさへ幾晝夜を要するやうな廣大な地域が殆んど、寸地を剩さずといつてもいゝ位耕されてゐる、一種の壯觀を見ることが出來るのは、世界廣しと雖も、恐らくこの滿洲の外にはありますまい。日本を旅行する西洋人などが、よく、日本は山の頂まで耕されてゐるといつて感心するが、この感心は『かくも狹い土地をよくもかう萬遍なく開墾したものだ。』と感心するやうなもので、甚だとんちんかんの感服ですが、私は滿洲に來る每に、『かくも廣い土地をよくもかう萬遍なく開墾したものだ。』と感服するのですから、辻褄は合つてゐると思ふのです。更に、汽車が蒙古方面に進入して行くのに乘つて見ると、何うでせう、これはまた更に／＼渺々茫々たる大平野が全く開拓されずに、草莽々たる狀態で、まるで大洋のやうです。その地平線は蜃氣樓で海のやうに見えるので、文字通り大洋の如くです。そこへ來ると私の感服はこんどは、前の正反對に、『よくもこれほど廣い土地が今まで開墾されずに殘つてゐたものだなあ。』といふ感服に變化します。

なるほど、ゴビ、サワラの沙漠、アメリカのプレーリーのやうな廣大な地域は、數千年の、或はいふ數萬年の、人間の歷史に少しも動かされずに太古のまゝに殘つてゐますが、これはその土地を利用するほどの人間の智慧が、今日まで未だ絞り出されずにゐる結果で、何の不思議もないことですが、蒙古の平野に至つては、古來、そこに滿洲族、蒙古族等がその遼遠の祖先の代から生息し、いろ／＼の歷史さへがそこを

舞臺として演出されたのです。それにも拘らずこの廣大な地域が今日まで草莽々と、太平洋に毛の生えたやうな狀態で殘されたのは、不思議といへば不思議です。世界廣しと雖も、これだけの肥沃の土地がこんな狀態で殘つてゐる所は、南米の深林地帶の外にはないでせうが、そこは、こゝと違つて所謂人跡未踏だつたのだから當然のことです。

私をしてこの二つの正反對の感心をさせる所以は、そこに二つの正反對の對象物があるからですが、この兩極端を說明するのに、いつも滿蒙民族と漢民族との對象が持ち出されます。漢民族は支那本土にあれほどの文明を建設した――いはゞ文化的に世界を二分して、その一半の主人公となつた――ほどの進化を遂げたが、滿蒙民族は、文化的には東西二文明の埒外に於ける遊牧民族のそれを脫し得ず、僅かに滿洲族が、最後に支那四百餘州の人間を一時、髷坊主にした位に止まつたのは、卽ち滿蒙の廣大な地域に數千年間草を生やしてゐた所以だといふことです。

實に、漢民族なるものは、アフリカに於ける大蟻群が、その通過する所を草の色をさへ止めない荒野にするのと正反對に、漢民族の通過する所は、如何なる荒野も忽ちにして田園となり都會となります。蒙古の曠野に鐵道が敷かれると、まだ開業もしないうちから、危險を保障されない建築列車に便乘を求めて、柏餅のやうな蒲團を背負つた無數の支那人が角砂糖に蟻がついたやうに、その列車にシガミついて、茫漠たる曠野に侵入するのは、兄も親しく目擊された通りです。全く根だけの棲家に過ぎないその曠野は、これらの支那人に侵入されると、忽ちにして豐穰なる高粱畑、大豆畑と化し、それらの集散する所に、忽ち繁華な都會が現はれます。最近には、滿蒙一體に流れ込む――文字通り流れ込むといふより外適當の表現はありません――支那人の數は一年百萬にも上るさうです。

滿洲に十年も居つたといふある日本人のいふには、「自分は十年もこゝに居るが、あの眼の屆く限り數十里に亙る高粱畑を耕す人間は一體何處から來て何處へ歸るのか、今に見當がつかぬ。日本ならば、農夫等は朝に星を戴いて出て夕に月を踏んで歸るのだが、この何十里といふ間人家のない所では、耕地へ着くのに一日も二日もかゝるだらう、この農夫等は、朝に星を戴いて出て、晝は日を戴いて歩き、夕に月を踏んで歩いてもまだ却々耕地に着くことは出來まい。いかにも不思議な次第だ。」といふのです。でそれを支那通に話すと、その人は大に笑つて、『何の不思議もあるものか、高粱畑を耕す農夫等は、例の蒲團と大きな煎餅のやうな烙餅とを携へて、あの高粱畑に、晝は耕し夜は寢てどこまででも行くのだから、あの曠原がベルリン、パリまで續いてゐても少しも閉口しないわけだよ。』といひました。成程、夜になると家に歸ることにしてゐる日本人の量見では、滿洲の經營はとても覺束ないことでせうが、漢民族はかくの如くにして、滿洲一帶に、中央支那の文明を擴大させて行きつゝあります。

反之、內外蒙古に占據する民族は、幾千年の歷史をもつてゐるに拘らず、依然として、原始文明の域を脫することが出來ず、從つてその土地は今もなほ數千年前の遊牧時代の俤を止めてゐるわけですが、滿蒙民族、殊に蒙古民族がこの定着狀態に陷つたのは、人種的特性といふよりは、自然の環境によつたものでせう。つまり支那本部のやうな、原始的交通の唯一の機關たる水路に惠まれ、その流域に包含される地域に於て、世界の他の部分から全く隔絕された別個の世界を形作るだけの自然的、空間的條

件をもつてゐるといふやうな所は、かのナイル河流域を除いて殆んど外にはないのです。アマゾン、ミシシッピー等は將來史は知らず、過去に於ては、その廣大無邊の流域を開拓する人的要素を獲なかつたので、問題にもなりませんでした。支那本部に於ける漢民族の社會は、專門家の說によつても、或は所謂土着的で、有史以前からあの土地に定着してゐたものだか、又は西方乃至北方の民族の移動したものだか、判然してゐないやうだが、もし土着だとすると、土着の民族といふものは、混淆の行はれないために發達の停頓するものですから、漢民族がその例外であれほどに發達したとすると、支那本部に於ける廣大な地域には、可なり異型であつた多くの種族の混淆が行はれたと想像する外はありません。支那の古代史にある何々氏と稱するものは、日本の古代九州に於ける諸民族と同じやうに、可なり異種的のものであつたのでせう。何しろあれだけの交通自在な地域が、單純種で占領されるといふことは、事實上、あり得べからざることですから。

反之、蒙古族などは、その地域が、海や河の、古代的交通路から隔離されてゐたので、自らその社會の發達が一つの典型に定着して、進化の契機に觸れずにしまつたのでせう。從つて彼等の歷史に現はれた國家も、その原始的形態の、卽ち狩獵、遊牧の形式の發達した掠奪遠征から一步も出ることが出來ず、支那本部に進出して一世紀餘も全土を支配し、又中央アジヤ、ロシヤ、東歐等に進出したが、それが覆沒した後には、たゞの原始的な國家の破片が殘るといふことになつて、今日に及んだものです。種族の純粹は決して誇るべきことではなく、寧ろ悲しむべきことです。

私は、滿洲を汽車で走りつゝ、いつもこの支那本部と滿蒙との、自然的環境の差異から起つた、人間社會の性質の差別を考へさせられます。それは『人種』といふやうな人間形態や人間心理の問題ではなく、寧ろその形態や心理を產み出した自然條件の問題です。然し、人間の發達は、自然の物質的、並に空間的條件を人爲的に變化させます。滿蒙は今やこの人爲的變化によつて、世界的交通網の中に織り込まれつゝあります。これほど肥沃な、これほど廣大な地域の上に、二十世紀以後の、極めて發達した人類が、自由に活躍したら、こゝは一體どんなことになるのでせう。

アメリカ合衆國はその一つの先例のやうに、我々の前に、黃金の波で世界を漂はすかの如きすばらしい景氣を見せつけてゐます。然し、アメリカは、勉强無比な、生產力と商業力とに於て、世界の諸國民を壓倒するに足る支那民族を、その廣大な天地から排除してゐます。それですらあの景氣です。今や昔のアメリカよりも有利な自然條件に充ちたこの滿蒙の大地は、人間中の蜂や蟻にも比ぶべき、恐るべき勞働能力と、ユデア人にも增した恐るべき商業能力とをもつた支那民族の自由自在に活躍し得る天地たらんとしてゐます。支那人を排除して、支那人から見れば、全く所謂ブロークンダウン・ゼントルメンに過ぎないヨーロッパのあぶれものどもだけによつて、アメリカがあれだけのものとなつたのを見ると、ヨーロッパ人に比べれば、勞働そのもの、商業そのもののやうな支那人によつて、この滿蒙がどんなものになるだらうかを考へると、私は全く毛穴のうづくほどの興味を感じます。私共は、その第二のアメリカを見ずに死んでしまふのかと思ふと全く惜しい氣がします。が恐らく私の子供――といひたいが、私にはそんなものが無いので、『あなたの子供』といひ直します――は、その第二のアメリカのどんなものであるかを、彼れが冥土

に來た時に、私に語り得るでせう。

こんども私は、汽車のうちでそんなことを考へながら、ふと開原で下りる氣になりました。御承知の通り、この邊は、漢民族の帝國國家の北方の邊境で、滿民族を驅逐してその防備のために所々に城市を築いたものと思はれます。開原もその一つでせうが、その昔、高句麗時代に既に黄龍府と稱した都會であつたといふから隨分古いものです。この高句麗王國は唐のために滅されましたが、滿鐵の案內書によると、その唐代に築かれた城は、今の開原からは一里ばかり隔つた所にその城趾があるといふことですが、私は時間に乏しく、ついそこまで行きませんでした。然し、私はその案內書に一行ほど書いてあつたこの城のことと、明朝時代にこの邊までも延びた例の邊牆があるといふことと、この城內の白塔は、高句麗王國時代に高麗人の作つたものであるといふことの記事と、私の折からの空想——今申したやうな——との連絡から、無論特にそんなものを見るつもりでもなく、さりとて見ないつもりでもなく、たゞふら／＼と開原驛に途中下車をしたのでした。で城內に行くについて驛の人達に相談をした所が、助役を初め驛にゐる日本人の人達は、城內の樣子を知らないので、支那人の驛員に樣子をきいたり、この開原附屬地の外れの開拓鐵道といふ石河臺から西豐へ行く支那の鐵道の驛に問ひ合せたり、殆んど驛員總出で斡旋してくれたのは感謝の至りでしたが、苟も驛名の元である支那の市街について、又そこへ行く方法等について、その驛の人達がこれほど大騷ぎをしなければならないのは、妙なことだと思ひました。いかにも城內までは日本里で三里ほどありますが、いかに日本人には用がないそれが支那人街であるからとて、驛の人たちが、こんな無關心の態度でゐるのは、苟も支那の土地と人間とのための鐵道を經營してゐる人達としては、少々面目に關することではなからうかと思ひました。日本人は、支那の土地で事業をしてゐても、殆んど自分達が支那の土地で、支那人の中に生活してゐるのだといふことは全く忘れて——寧ろ初めからそんな風には考へないで——日本が支那に延長したかの如く考へて、鐵道關係の人達でも、鐵道に沿うて、元來細長い日本の更に細長く延長した日本國の延長地域に閉ぢ籠つて、その左右の支那及支那人を、まるで外國及外國人のやうに見てゐるらしいといふ、私の想像の中つてゐたことを、私はこの驛の人達の私に對する親切な行動によつて發見したのでした。苟も支那の土地で、支那人のために、又支那人を得意先として事業を營んでゐるならば、たとひ用事はなくとも、驛の人々位は、その驛と同名の都會に、もう少し親密になつてゐてもよささうなものだと私は思ひました。「外國に日本を作る。」といふ古代的の侵略的態度を日本人は滿洲でだけは好き勝手に振舞つてゐることが出來ると思つてゐると、近い將來に飛んだ目に逢はねばなりません。政治家や軍人は、そんなことを考へてゐていゝでせうし、考へてゐないと彼等の商賣が立ち行かないかも知れませんが、苟も支那大陸の生活のうちに、日本人の生活をうち立てようとする、言ひかへれば、社會的交通の理法によつて、狹い日本國の行き詰つた將來を打開せんとする人々は、もつと社會的な態度をもつて進出しなければなりますまい。一時的の旅行者でさへ『郷に入つては郷に從へ。』といふことがあります。その土地に自分の生活を打ち立てようとする人々は、何よりも先づその土地に關心をもたねばなりますまい。滿洲で生活してゐる日本人には全くさういふ關心が缺けてゐるやう

に思はれます。これでは、とても、漢民族の滿蒙進出と競爭の出來る筈はありません。

昔のロシヤ人は、東京の駿河臺に所謂ニコライ堂なる大殿堂を建てて、そのころは極めて貧弱であつた東京全市を富士山が東三州に臨むやうな態度で睥睨して、意氣既に日本の帝都を呑むといふ威勢を示しましたが、その時東京人等は、いかにしてこのニコライ堂の傲慢不禮を克服すべきかといふことで議論沸騰し、あるものは、ニコライ堂の前面に、大きい張子の富士山を作つて、それを蔽ひ隱してしまへといふ名案を唱へました。この日本に對するロシヤ帝國の態度が、即ちロシヤ帝國の滿蒙に對する態度であり、そこからつひに日本のために大打擊を加へられ、結局、內部からの一層の大打擊によつて世界第一の舊式大帝國は覆滅しました。滿洲の鐵道は、このロシヤ人が東京の眞中にニコライ堂を聳かす態度で作り上げたものでした。それを繼承した日本人は、少しは、ニコライ堂の正面に張子の富士山を作らねばなるまいと考へた昔のことを思ひ出して見るがいゝのです。さうすれば、支那人が、支那大陸にニコライ堂の聳えざらんことを祈願するのに少しは同情も出來るでせう。支那大陸に於けるあらゆる外國人の事業は決してニコライ堂であつてはならぬことはいふまでもないことです。滿鐵も亦細長いニコライ堂であつてはなりますまい。支那大陸に於ける人間社會に貢獻する事業であるならば、全體的に支那といふ土地及び支那人といふ人間に最も深い關心をもたねばなりますまい。三里先の支那街にも無關心なやうな態度では、支那大陸の生活にはとても關心は持てません。『滿蒙の地圖は日本人の測量で出來た、事程左樣に日本人は、この大陸について支那人以上に知つてゐる。』と誰れかが私にいひましたが、それは丁度、私を診察した醫者をもつて、最もよく私を知つてゐる人間であるといふのと同じ理窟です。關心の焦點が違つては、いかに深い關心も、生活上の交渉を生じません。男は、女を打診することによつてその女に戀をしたとはいはれません。

一體、私は何をいつてゐたのでしたか――さうでした、開原の城內を見物せんとしてゐることをいつてゐるのでした。で助役の人が、若い支那人の驛夫を案內者としてつけてくれて、馬車で出掛けたのでした。

三里の街道は、御承知の支那道路で道幅こそ土地惜しみをせぬ大國の態度で廣々ととつてあるが、その路面は、クロコダイルの背中を虎が掻きむしつた上に砂を積み上げたやうな有樣で、馬車は中心を失つて――といひたいが、初めから失ふべき中心もない位の猛烈な震動をもつて進むので、大に走らしてゐるやうに身體には感ずるが、その實は、一上一下、一左一右の運動をつゞけてゐるので、前へは滅多に動きません。その上下左右動を引延ばしたら、城內までの里程は何十里になるか知れたものではありませんが、上下左右動の投げられるやうな速力は可なり早い理窟ですから約一時間で城內につきました。その手前にある清河は遼河に流れ込むのですが、遼河の濁流に反してこれは非常に澄んだ水で、その名を得た所以です。それに渡されてゐた長い木橋は、水に流されて少しばかり端の方が殘つてゐるだけなので鐵道の橋を渡ります。こゝの鐵道橋は、丸太を三角形に組んだのを繼ぎ合せた珍な形をしてゐるのですが、人はその橋を渡り馬車は河を渉ります。今は大豆の出初なので、例の泥色をした大袋を滿載して荷馬車が、列を爲して水を渉つてゐる光景は豆の大衆運動で却々壯觀なものです。

見當ての古塔は城內の東南隅の俗に石塔寺と稱する崇壽寺にあるのですが、高さ十六丈と

稱する八角の塔で、全體の形がいかにも整つた曲線を呈してゐます。支那の街には、必ず塔がありますが、これは大平原に於ける市街の標識として實用的の目的もあつたものと思はれます。日本人も支那に街を作ると必ず神官を作るが、これは支那大陸に於ける實用的の目的ではなく、日本には、神官といふ職業があるので、その人々が滿洲にその職業を延長せしめたもので、いはゞ神官の出稼ぎだと、ある土地の日本人が私に語りました。又他の人は、神社の作りは、日本の自然及び日本風の都會にだけ適した特有の建築なので、この邊にポカンとそれだけ建つてゐると、まるで金庫店に錢箱が一つだけ置いてあるやうで、支那人や外國人に見て貰ひたくない氣がする、少くとも日本人が立ち退いた跡に神社だけ殘つたら、支那人はとても尊いものが殘つてゐるとは思ふまい、無暗に外國に神社を作るのは一種の瀆神だと憤慨してゐました。いかにも高句麗人が立ち退いた跡にこの塔が殘つたやうな譯には行くまいと思ひました。

案内の支那の少年は、今年滿鐵經營の講學堂を出たばかりの少年で、日本語も、そこで習つたばかりだといふが却々よく話します。行きには固くなつて馬車に乘つてゐましたが、歸りには私に馴染んで、自分の身の上などを話し出して、日本人は新しく來た人は皆いゝ人だが、少し支那にゐると皆惡くなるとか、警察の人の威張るのがいけないとか、いろ／＼のことをいひ出しました。が振つてゐるのは、彼れの質問です。東京、大阪、神戸等のことを盛んに尋ねるのは、日本に對する興味をもつてゐるからでせうが、更に進んで、東京とロンドン、ニューヨーク等との比較とか、現在世界で最も有望な國は何國だとか、アメリカの將來は如何とか、ドイツの戰後の復興狀態だとか、ロシヤの近狀だとか、恐らく學校で教つた地理や歷史やで知り得た全世界について、貪るやうに質問するのです。さうして遂ひに、ロンドン、ニューヨーク等の生活狀態は何うであるか、そこまで行く旅費だとか、ヨーロッパの生活費だとかいふ點にまで及んで、自分の月給は月に十三圓で、高粱と味噌と鹽とばかりを喰つてゐるのだが、それでも十三圓では殘らないので、とても一生かかつてもその旅費は出來ない、といふやうなことを言ひ出すのです。結局商人になる希望をもつてゐるのださうですが、私は此の少年の話ぶりや質問ぶりが、同じ年頃の日本人のそれに比べて、比較にならないほど大きいスケールを持つてゐることを感じました。しかもそれは子供がお伽話の世界のことを知らうとするやうな空想的な動機からでないことを私に感じさせたのでした。

私は昔孫文のまだ生きてゐる時分に、船で、ある支那人と話をしたのですが、それは孫文が所謂二十四億の鐵道計畫を發起した時分で、私は、それを云つて、孫文は空想家だと一言口をすべらすと、その支那人は、猛烈な口吻で、私に向つて、それを空想などといふのは、日本人の小國民たる所以で、支那人にとつては、あの位の計畫は誰れでも實際的に考へ得ることだ、と大威張りでまくし立てましたが、私は孫文の大計畫よりもその支那人――それは廣東の商人でしたが――の心理をなるほどと感じたのでした。孫文の計畫は、かういふ支那人の心理を提へるためのものでした。私は今この子供の話をきいて、この一件を想ひ出したのです。支那人のこの大きいスケールを日本の尺度で計るのが、すべての間違ひの基です。今この大きい滿洲を經營してゐると考へてゐる日本人は、恐らく支那の此の一少年にも笑はれるでせう。こゝ

に來てゐる日本人の多くは、とても此の子供の心理を捉へる位の大きさのスケールの人間でさへもないのです。尤も偶々大きいのになると、一足飛びに、アジヤを統一するの、世界の中心になるのと、精神病者の大スケールに飛躍するが、秦始皇帝だの成吉思汗だのといふ大きい實物を澤山にもつてゐて、少しもそんなものを尊敬しない支那の大衆は、妄想狂的大スケールなどは鼻であしらひませう。支那人と日本人との太刀打に於ては、文字通りの太刀打——即ち戰爭——ならば日本人はビクともしないが、その外の太刀打では、文字通りの太刀打でバックされない限り、いつもタジ／＼たるを脱れない所以はそこにあるのでせう。

◇

茶室式玄關は、平凡を求めてゐるとはいへ、この平凡ほど金と手數のかゝる平凡はない。茶室に金をかけるのは間違つてゐるといふ人でも、さういふ趣味に到達するまでには莫大な金と手數が懸つてゐる。

或は文化から遠くかけ離れた僻遠の地方の農家の入口を眞似る。成程原物の農家の入口は根ツから金も手もかゝつてはゐなからうが、それを眞似ようとなれば一本の柱でも容易くは獲られない。山を轉がつてゐる巨岩を、都會の庭園の捨石にするには莫大の捨金が要る。茶室式玄關は、正統の玄關と同じことを別の型式で——もつと物好きな型式で——演じてゐるに過ぎない。堅苦しい權威を、碎けた形で現してゐるに過ぎない。仙人といふものが消極的英雄であると同じ意味で、茶室式玄關は、大名式玄關の消極的表現である。もの／＼しいことに變りはないが、たゞそのもの／＼しさが仙人式によつて誤魔化されてゐるのである。

茶室式玄關を持つてゐる人々は、右の理由で、何れもこれも金と權威とに飽くことを知らない連中である。だから彼等は、一方で屹度固苦しい大玄關を持つてゐる。彼等は時々その大玄關の堅苦しさから脱れてくつろがうとして、茶室式玄關を作るやうなことを云つてゐるが、その茶室式玄關に於ける彼等のくつろぎは、これ亦驚くべきほど形式的のくつろぎで、茶室その物が、全然眞似事の素朴であると同じ意味で、彼等のくつろぎも亦全く眞似事のくつろぎである。不行儀の戰國時代の大名が、茶室でシビレを切らしたのを、今の不行儀の紳士は眞似てゐるのである。それは眞似事で、豐太閤からは孫眞似に當る。而も太閤は、殺伐な大名を、かうして、一種の退隱式文化の奴隷にすることによつて軟化しようとしたのだが、今の紳士は、それによつて、愈々殺伐を勵み合ふのである。屎瓶のやうなものに何萬圓を投ずる勇氣は、昔の武士が命を鴻毛より輕んじたのと同じで、殺伐の一種である。殊に命を義の爲めに輕んずる勇氣なんどは、命より大事な金を屎瓶の爲めに輕んずる勇氣に比べれば、遙か打算的で、勇氣とするに足りない位だ。茶室式玄關は、武士道の勇氣以上の紳士道の勇氣を鼓舞するものだから、太閤の目的と正反對の結果になつて、寧ろ浪花節の目的に近い。

茶室と浪花節——ものは正しく考へると意外の結果になるものだ。だから正しく考へることは禁止される筈だ。

（「玄關」より）

年譜

明治八年（一歳）

十一月三十日深川扇町二番地に生る。父山本德治郎母たけの二男。父は材木商で當時二十八歳、母は二十二歳。家は祖父の代までは代々大工の棟梁で神田に住んだが、明治初年父は神田松下町に三河屋といふ材木店を開き、同七年材木問屋の本據木場に移つた。母は神田本石町の錺職吉村源治郎の長女。萬次郎の名は、曾祖母長谷川多美女（加賀金澤の生れで當時八十四歳）の命名だが、曾祖母は、氏神から名を貰ふ我家の習慣に抗して、産婦の枕頭に數時間頑張つて遂にその名を採用させた。萬次郎後に此曾祖母の家を繼ぐ。

祖父金藏隱居し、父はその名を繼いで四代目の金藏となる。

明治十二年（五歳）

七月祖父死去。

明治十四年（七歳）

深川區萬年町公立明治小學校に入學。

明治十五年（八歳）

下谷區仲徒士町私立本島小學校へ入塾、此學校は萬延元年の開校で、當時東京に殘つてゐた、寺小屋から引きつゞいた私立小學校では最も古い歴史をもつたものであつた。

明治十六年（九歳）

扇町の川向ひ木場町八番地に轉居。父は此年材木店を閉ぢ、淺草奧山（淺草公園）の植木屋森田六三郎（植六）の跡を讓り受けて花屋敷を開業。植六の庭は今の水族館の裏手から六區の池を取込んだ廣い地域に亙つてゐたが、當時その邊は淺草公園に編入され、花屋敷は、その一部の、それまでは文字通りの奧山で巨木の蔽ひ繁つた深林のやうな所を拓いた二千餘坪を敷地としたのである。

木場町の家の敷地は、木場の舊家萬和の跡で、昔の邸も庭も跡方もなくなつてゐたが、邸内には椎の大木の並樹があり、その奥に一寸した町の神社ほどの社があり、額堂などもあつて、そこには紀文時代の深川商人の豪奢を描いた「湖畔無月の圖」といふ胡粉の剝げかゝつた極彩色の額などが懸つてゐた。父はその額堂に番ひの孔雀を飼つてゐた。

明治十七年（十歳）

年頭眼を疾んで、素讀の論語孟子の大きな文字が全く見えなくなり、塾から家に戻つて數ケ月間靜養した。強度の遠視で、原因は營養不良らしかつた。

十一月（？）曾祖母長谷川多美の養子となる。

同月（？）兄山本松之助と共に本郷區眞砂町十八番地坪内逍遙先生（春のやおぼろ）の家塾に入る。塾の先輩に鈴木虎十郎（日清戰役當時海軍少尉で威海衞で戰死した）、山崎覺次郎、丘淺次郎、永富雄吉、飯田萬吉の諸氏及び我邦人類學の先驅者木村政五郎氏（翌年肺患で夭折）、逍遙先生の甥落合篤氏その他があつた。殊に木村、落合兩氏に愛せられ、木村氏には屢々近郊に石器採集に伴はれ、落合氏には時々牛肉屋に連れて行かれた。（當時牛肉飯付一人前八錢）

明治十八年（十一歳）

本郷元富士町本郷小學校へ入學。

本郷小學校の先生佐野若吉氏の下谷區徒士町の私宅に通ふ。

五月坪内氏の「書生氣質」第一號出づ。出版元晩翠堂主人間野秀俊氏は父と共に花屋敷の協同經營者で、父は晩翠堂の出資者であつた。父は既に當時から破産の場合に處する用意のためか長男山本松之助を戸主として別家せしめ、花屋敷の名義人とし、自分は後見人になつてゐた。坪内氏の著書の出版人として山本松之助又は山本金蔵の名があるのはその關係であつた。

矢崎鎭四郎氏（嵯峨屋お室）坪内家に寓し、塾生等に自作の短篇を讀み聞かすのを子供心に面白く聞く。

九月曾祖母（養母）長谷川多美死去。享年九十二歳は戸籍面の年齢で、維新當時戸籍屆出の際にもはや生年月を忘れ、誰れかが寛政六年と書いたのをそのまゝ屆けたが、事實はそれよりずつと早く、從つて享年百何歳であるといはれた。西本願寺の熱心な信徒で、多少の財産は悉く寺に納め、死んだ時には空の古簞笥一棹を殘したきりであつた。常に屑屋を呼んで持物を賣拂つてゐたことをすつかり忘れて盗賊が入つたと騷ぎ立てることが屢々あつた。恐ろしく聲がよくて又雄辯で、死ぬまで家人をつかまへて大聲で說教してゐた。

明治十九年（十二歳）

春小石川小日向の中村敬宇先生の同人社に入學、初めて英語を學ぶ。怠けて學校の試驗を休んだため落第し、坪内新夫人に呼ばれて叱られ、菓子と果物とを戴いて引下つた。それがため父の手許に引き取られ、淺草公園の自宅に歸り、毎夜十二時近くまで狹い切符賣場に閉ぢ籠められて勉强させられる。神田區淡路町共立學校（今の開成中學）に轉校。陽明學者松本豐多先生の日本外史の講義に最も興味をもつた。

十月父は深川の家を賣つて、一家淺草公園に歸る。

明治二十年（十三歳）

十二月家族一同市外上駒込村染井の田舍家を借りて移る。父一人淺草に殘る。

明治二十一年（十四歳）

春同じく上駒込村三百七十八番地（妙義坂）に新築へ移轉す。父は依然として淺草に住む。

四月三宅雄二郎、志賀重昂氏等の「日本人」創刊、初號より愛讀し、私かに新聞記者を志す。

明治二十二年（十五歳）

三月駿河臺明治大學豫科に轉ず。

明治二十三年（十六歳）

英吉利法律學校改め東京法學院（後の中央大學）豫科に轉ず。間もなく豫科廢止される。廢止の豫告の掲示の出た日、生徒等激昂して教場の卓を全部押倒し、教師を追ひ返して講義をさせなかつたが、獨り若槻禮次郎先生（當時は大學生）は生徒の騷ぐのに構はず、さつさとリーダーの講義を始め、時間通りつゞけて生徒を煙に捲いた。

屢々法學校の豫科に入つたのは父が當時の有名な代言人小川三千三、大谷木備一郎、岡村輝彦、檢事光妙寺三郎の諸氏と知り合ひであつた結果余を代言人にしようと考へたためであつた。余はそれを嫌つたため此頃屢々衝突した。從つて東京法學院豫科の廢止にも外の生徒ほど激昂しなかつた。

杉浦重剛先生の東京英語學校に轉じた。（後の日本中學、當時は東京法學院と同じ建物の半分を占領してゐた。）杉浦先生は、「日本人」一派の同人だつたので早くから尊敬してゐたから英語學校へ入學したことを喜んだ。

明治二十四年（十七歳）

東京英語學校では早川といふ滑稽な漢學教師、矢野といふ嚴格な同じく漢學教師、後に

外務省の飜譯官になつた齋藤[illegible]三郎先生の英語、山座圓二郎先生（當時大學生）の世界歴史、河島純幹先生（後に政友會系の知事となつて、「鈍幹知事」といはれた人）の日本歴史、志賀重昂先生の地理學、何とかいふ農學士の先生の動物學等に興味をもつた。最も嫌ひだつたのは水野錬太郎先生（當時大學生）の英文法だつた。矢野先生では九十何點をとつたことがあり、水野先生では危く落第點をとらうとした。

その頃から學校をエスケープしては屢々上野の圖書館に通つた。何といふことなしに亂讀したが、殊に歴史を好み、嵯峨正作氏の『日本史綱』を愛誦したが、後に河島先生が日本歴史を著してそれを教科書に使はせた時に、余はそれを嵯峨氏の『日本史綱』の剽竊だといつて友達に觸れ廻つた。

明治二十五年（十八歳）

秋頃一家は駒込から淺草公園に戻つた。後祖母と二人だけ、淺草北清島町に移つた。

神田の大火で英語學校が類燒したので、國民英學會に轉じた。

明治二十六年（十九歳）

暮祖母と共に淺草公園の家に戻る。

七月東京法學院に入學。

明治二十七年（二十歳）

父の事業は數年來漸次窮狀に陷り、この頃より、花屋敷は事實上債權者の手に移り、その代理人出張して收支を監督してゐた。兄山本松之助、「やまと新聞」に入社する。父が「やまと」の社主條野傳平氏（採菊、清方畫伯の親父）と一面の識があつたので、兄は笑月といふ號で小說を紙上に載せ、やがて社員に採用された。余の記者志望は愈々強くなつた。

東京法學院を退學した。

その後、父は花屋敷を債權者に讓り、全くの破產狀態で一家は小石川表町の借家に移る。兄は鐵砲洲の某方に下宿する。

明治二十八年（二十一歳）

小石川林町四十三番地に移る。土地の豪家杉山氏（帝大教授杉山直治郎の親父）の貸家で可なり廣い家であつたが、家賃は月五圓、それが大に停滯して、杉山家から催促に來る、同家の親戚の若い娘さんを緣下で產れた野良犬の子の大きくなつたのが七八匹で吠え立てることが屢々であつた。遂に警官が犬殺し大勢を率ゐて來襲し、猛烈な抗議を排して、犬殺し等は緣下に入つて犬共を追ひ出し片つ端から打ち殺したが、母犬が逃げたので、やがてまた盛に產んだ。

海軍省雇員に採用され、筆生となる。中學の友人か工學博士の曾根達藏氏に紹介し、曾根氏は軍令部廣瀨中佐の兄の勝比古氏（當時少佐）に紹介し、試驗をうけて生來の惡筆故全く絕望と思つたら卽座に採用された。宮内省内の軍事内局といふのに出て、日清戰役論功行賞の上奏書を書く。當時宮内省は改築中だつたので軍事内局の事務を宮中の錦雞の間と麝香の間とで執つた。屬官連や臨時雇の連中が時々大聲で騷ぐので、つひに三須人事局長（當時大佐）から、こゝは御前に遠くない場所であるから注意しろと叱られた。

明治二十九年（二十二歳）

冬中早朝に小石川から宮内省まで通つたため風邪を引き、つひに肺病となつて三月海軍省雇を辭す。小石川原町の篠原といふ醫師（今は故人となつて令弟か後を繼いでゐる）が殆んど藥價も拂はぬに拘らず懇切に見舞はれて、半年餘り靜養することが出來た。幸ひその頃父は、富士製紙の木材買賣を委託され、深川扇町の以前の家が元、番頭の兄の所有に歸してゐたのを借りうけ、會社の課長の

名義で村木店を開くやうになつたので、やゝ療養の餘裕を得た。

靜養中の退屈紛れに小説を書き、後藤宙外氏主筆の「新著月刊」に投じたのが採用され、賞金五圓をうける筈で、病後初めての外出に宙外氏の宅（牛込神樂坂）を訪ねたが、賞金はつひに貰へなかつた。然し當時賣出しの批評家として聽えた角田浩々歌客がその小説を「國民の友」で大に賞めてくれたので、五圓は全く忘れることが出來た。小説の題は夙に記憶を逸したが、少年犯罪の事實を取扱つたもので、湖戀といふ號を用ゐた。（本集所載の「ふたすぢ道」これなり——編者）

九月病を押して、東京法學院の編入試驗をうけ二學年に入る。

明治三十年（二十三歳）

兄は前年の暮やまと新聞社から中央新聞社に轉じたが、本年十一月同社を辭す。

明治三十一年（二十四歳）

一月兄東京朝日新聞社社會部に入る。

七月東京法學院を卒業。

暮に一家小石川から、深川大和町に移る。

明治三十二年（二十五歳）

一月深川區平富町一丁目一番地に移る。

此頃より多年志望の「日本新聞」記者たらんとして、同紙に投書を始める。

九月辯護士試驗をうけたが、元より本志でないので、一日大暴風雨があつて、定刻に遲れて失格したのを幸ひとした。

明治三十三　四年（二十六—七歳）

職業を得ざるため、專ら上野の帝國圖書館に通ひ讀書に耽る。犯罪研究に興味をもつ。

又初めてアナーキズム、社會主義等に觸れ、マルクスの「資本論」及エンゲルスの「空想的及び科學的社會主義」の英譯を圖書館に發見して喜んだが、その難解に辟易した。

明治三十五年（二十八歳）

「日本新聞」に「殺人詩家」「罪人の研究」「露國の内幕」（クロポトキン自敍傳の抄譯）其他を連載す。

「東京朝日」に短篇二三種を寄稿し、又「犯罪團體」を寄す。

清澤氏の浩々洞一派の雜誌「精神界」に深川隱士の匿名で「犯罪人と宗教の關係」といつたやうな一文を寄す。鈴木券太郎氏の所論を駁したものであつた。

十月（?）日本新聞社に入る。少年時代の定望が漸く實現されたわけである。社長陸實氏（羯南）の外遊中で、當時の編輯長古島一雄氏に採用されたのである。入社して見ると紙上で名を覺えてゐた人々は多く客員で、時々顏を出せるのみであつたが、三宅雪嶺、國分青厓、須崎默堂の諸氏は社員で、毎日のやうに社に出て來た。福本日南は錚々たる記者だつたが既に退社してゐて、社内では餘り評判がよくなかつた。

明治三十六年（二十九歳）

「日本新聞」では、今でいふ學藝部の仕事をして、外字新聞を飜譯したり、日曜附錄を編輯したり、學校廻りをしたり、所謂遊軍であつた。安藤正純氏が同じ方面の仕事をしてゐたので殊に懇意にしてゐた。

春本郷富坂上の某家に下宿し、後同區元町帝大正門前の新泉館に下宿した。

犯罪研究の資料を得んがために東京帝大の刑法研究室に出入したが、岡田朝太郎教授の好意によつて刑法研究室囑託となる。

九月一橋の東京外國語學校の特別科に入りイタリー語を學ぶ。やはり犯罪研究から思ひついたことであつた。イタリー語科は生徒が二人で先生が三人（伊東、鎌田、ノルサの三先生）だつたが、間もなく生徒の一人が退校し

たので、余一人となつた。ノルサといふ先生は英語で面白い話をして、足拍子をとりながらイタリーの歌を唱つてきかせ、ちつとも講義をしなかつた。翌年主任の伊東先生は閉口して、校長の諒解を得て特別科の授業を中止して余を本科の聽講生にしたが、新聞社の時間の關係上出られないので退校した。

「日本新聞」では「雲間寸觀」を日々執筆した。

明治三十八年（三十一歳）

弟の大野靜方が「日本新聞」の寫眞部に入つた。

講和談判に入る頃、默堂の跡をうけ「事局纂報」を執筆した。個人的に外務省側の「軟論」に贊成してゐたので、往々それが紙上に出て、御用紙などと攻撃される虞があつたので古島氏から注意をうけた。そんなことから講和後の焼打事件勃發の際、暴徒は日本新聞社を襲撃するといふ風説があつたが、社は別に警戒もしなかつた。暴徒は近所の萬世橋の警察署を焼き拂つたが、社の方へは來なかつた。東京市郡に戒嚴令が布かれたが、深夜當直の歸りなど、警戒の兵士に捕まつたことはなかつたが、制服の上に兵兒帶を締めて大刀を差した巡査に捕まつた。

從軍から歸つた安藤正純氏は何かの不平から出社せず、余は安藤氏と最も懇意であるといふので出社の勸告――寧ろ退社の勸告――に派遣され、同氏を訪問したが、氏は言下に退社を申出でてそのまゝ罷めてしまつた。

明治三十九年（三十二歳）

夏日本新聞社長の陸實氏は肺患のため社を伊東欽亮氏に讓つて引退した。

伊東氏は菊池武德、木下謙次郎の二氏を社員として論説を書かせ自分も書いたが、それが問題となつて、三宅雪嶺氏が伊東氏を面責したことが原因で、伊東氏は三宅、古島兩氏を引退させようと企てた。

十月日本新聞社は京橋三十間堀の報知新聞社の舊建物に移轉した。

十二月伊東氏の三宅、古島二氏排斥が具體化して先づ古島氏に退社を命じたので、十餘名の社員は三宅氏方に集合し速座に同盟退社を申合せたが、須崎氏だけは率直に「妻子を扶養する義務があるから」と反對を表して退出した。社内の加盟者は二十餘名に上り、陸時代の編輯社員全部を網羅した。が須崎氏の外に一二名が私かに裏切つたので、新聞は休刊させることが出來なかつた。雪嶺社卿の宣言書を發表したが、それに「物腐れば蟲之れに生ず」といふ文句がある。雪嶺はそれが「日本新聞」のつぶれる豫言だといつたが、數年後に同紙は廢刊した。然しそれは國家主義時代の新聞が資本主義時代のそれに轉化する時期だつたので、當時の新聞は何れもこの轉換を試みて、成功したのもあり失敗したのもあつたが、「日本新聞」は後者に屬したのである。即ち舊い典型を棄てようとしたが、新しい典型を得るに成功しなかつた例である。

「日本」退社連の多くはその日から生活に窮する連中だつたので、前社長の陸氏はストライキ組を病床に招いてそれ〴〵俸給三四ヶ月分の恩勞金を分配した。

明治四十年（三十三歳）

一月ストライキ組は、雪嶺主宰政教社の「日本人」に「日本」を併合して「日本及日本人」と改題して（金尾文淵堂が初めの一年間經營に當つた）それに立籠つたが全部を包容することは出來ないので、國分青厓、古島一雄、井上藁村、千葉龜雄、その他一二氏及び長谷川等が加はつた。後千葉氏は國民新聞社に入社して、社外から應援した。

この年初めて「如是閑叟」の號を用ゐたが、後

に「要」を削つた。

九月本郷の下宿から市外代々木山谷一八六番地秋田邸内に移り、一家平富町からこゝに轉居し、兄夫婦は深川鶴歩町に移る。

十一月同じく代々木山谷百三十番地に移る。

此秋弟大野靜方國民新聞社に入社したが、初めて出勤した當日、卷煙草の灰を床に落したとて德富蘇峰氏のために猛烈に叱られ、服裝のむさくるしいことなども罵られたので、一日限りで退社するといふので、代つてその退社を申出でに國民新聞社を訪問した。

明治四十一年（三十四歳）

四月大阪朝日新聞社に入社。大阪に赴き、北野茶屋町鶴の茶屋に下宿す。入社は鳥居素川氏の勸めによる。朝日新聞社には高橋健三氏、池邊三山氏始め舊「日本」關係の先輩多く入社した歴史あり、鳥居素川氏も日清戰役當時の「日本」記者であつた。それがため豫てから親しみをもつてゐた上に、現に兄は「東京朝日」に居り、安藤正純氏も前年「大阪朝日」に入社（氏は間もなく「東京朝日」に轉じた）してゐるので喜んで大阪行を決心した。社では整理部に屬したが、遊軍で外報部、通信部等の仕事も手傳ひ、やがて論說も擔任した。

夏大阪市外天下茶屋の下宿に移る。

明治四十二年（三十五歳）

小說「？」を「大阪朝日」に連載した。「七月」領の男」と改題して政教社から出版した。

三月天下茶屋の借家に移る。

九月（？）夏目漱石氏滿洲からの歸途天下茶屋を訪問、初めての面會である。共に濱寺に遊んで茶亭で食事したが、その時、向ひの二階座敷に宴會があつて、商店の若者らしいのが、そこの緣から盛にゲロ〳〵やつてゐるのを朋輩が背を撫でてやつてゐる。夏目氏それを見て、頻りに「面白いなア〳〵」といつてゐたが、後に何かの小說にそれを使つた。

明治四十三年（三十六歳）

二月父は代々木から市外大久保百人町三百九番地に移つた。

三月此年五月ロンドンに開かれる日英博覽會に派遣さる。十日頃に決定して十九日敦賀を立ちシベリア經由で急行した。支度を整へる暇もなく、大阪で作つた十八圓の背廣でロンドンを押し廻つた。途中ベルリンで初めて佐々木惣一氏に會ふ。氏は文部省留學生だつたが、「大阪朝日」の篤志通信員だつたので、伯林に着くとすぐシュワイドニッツェル・ストラーセといふ場末の新開地に氏を訪問したが不在だつたので行先を訪ねて市中を通つてゐると、自動車に乘つたドイツ人が英語で話しかけて親切に世話をしてくれた。翌日佐々木氏と市中見物をしてゐると別の處で偶然またそのドイツ人に出會つて二人で奇遇に驚いて握手したが、ベルリンも廣いやうで狹いと笑つた。十日ほど佐々木氏の部屋に同居して市中を案内して貰つた。四月十一日ロンドンに着くと間もなくエドワード七世急死のため、その葬儀に關する通信に忙殺された。

七月軍艦生駒兩院議員及び新聞記者を乘せてプリマスに着、後ロンドンに來る。初めて大庭柯公に逢ふ。柯公は同艦便乘者の一人であつた。同艦便乘の新聞記者と副艦長秋澤中佐等との間に確執起り、同艦は一切新聞記者の便乘を拒絕することとなつたのを知らずに、ロンドン駐在の加藤寬治中佐を通じて同艦の日本歸航に便乘を賴んで、加藤中佐の盡力で許される。

同月大陸を漫遊し、八月英國に歸り、同十四日プリマスより生駒に便乘して英國を發す。便乘者は余と荒井陸郎畫伯と二人ぎりであ

つた。艦員に新聞記者との喧嘩の事情を訊した處、記者等は艦中で、艦内の規律を無視して暴れ廻り、放歌高談し、兵隊に立番させてカルタを玩び、上陸すれば公然と立小便をする等々。然らば海軍士官はすべてこれらのことはやらぬかと問ひ返すと、それは別問題で、艦員のうちにもピカデリーで醉つぱらつて婦人を毆つて問題を起しかけたといふやうな豪傑もあるといつたやうな打明け話もするやうになつて、飛んで火に入る夏の蟲として大に虐待さるべき筈の一人の新聞記者も一向虐待されず、山梨勝之進少佐等と甲板で世界の大勢を論じたりした。八月下旬艦はナポリに入つたが、ローマに滯在し本社からの送金を受取るため船を去つた。旅費に缺乏を來したに拘らず、第一流のホテル・コンチネンタルに飛び込んで、いろ〳〵の部屋を見せられたので出て行く譯にも行かず、たうとう女中に談判して部屋代を負けさせた。大使館でそのことを話したら、日本人でヨーロッパの一流のホテルの部屋代を負けさせたのは初めてだらうと笑はれた。

九月英國船オロンテス號でナポリを出發。ポートセッドで郵船賀茂丸に乗りかへ、十一月神戸に着いた。

明治四十四年（三十七歳）

『倫敦』を「大阪朝日」に連載す。

春、兵庫縣蘆屋に移る。

明治四十五年（大正元年）（三十八歳）

四月『倫敦』を政教社から出版。

夏鳥居素川、志立鐵次郎（大朝社經濟部長）其他の諸氏と、山陽地方に巡回講演に行つたが、岩國で「死」について講演したところ、それを聽いて自殺したものがあると新聞に出たので、次ぎの講演ではそれを反駁した。

この頃から日々『天聲人語』を執筆したが、そのうちで檢事局を誹譏した言辭があつたといふので、大阪檢事局で問題となつたが、檢事「局」に對する誹譏は成立しないといふので、「君を縛り損ねた」と友人の檢事がいつた。

大正二年（三十九歳）

夏赤松麟作氏と信州から飛驒白川村を經て北陸に出る登山旅行を企てたが、赤松氏は初日に白骨溫泉で發熱してそこで靜養することとなり、余獨り乘鞍を越え豫定の行動をとり、その紀行を「山又山」と題して紙上に連載した。

その頃は登山熱も今のやうに進まず、アルペンストックなどは未だ日本に多く渡らず、大阪醫大の木下博士が書物によつて數本のアルペンストックを作らせたのを分けて貰つたが、それは身長よりも長く、手槍を振つて登山するといふ恰好であつた。

大正三年（四十歳）

大阪朝日社內には長い間鳥居派と西村派との對立があり、鳥居派は次第に優勢となつたが、鳥居氏外遊のため西村氏が編輯局長となつたので西村派は勢力を回復した所へ、鳥居氏が歸社して、桂內閣、山本內閣等に對する見地の相違、態度の硬軟等に個人的反感が加はつて兩派の暗鬪は愈々甚しくなり、事毎に衝突するので村山社長も所置に困り、幹部の意向を探らんために編輯局長を幹部の投票によつて決定することとした。その投票の結果は鳥居派少數で西村天囚氏が當選したので、余はその開票報告の會議で、西村氏は漢學者として又人物として敬意を拂ふも今日の時代の新聞記者としては全く無資格であることは誰れにも解つてゐる、然るに苟も幹部の多數が氏に投票したのは、今日の政友會の多數を得てゐるのと同じ事情によるもので、われ〳〵の打破せねばならぬ多數であるなどと論じ立てたので、西村氏は憤然として

自らそれに應酬するといふわけで、愈々紛糾を極めたが、結局村山社長は、斷然その投票の無效を宣言し、專斷で一切を解決するといひ放つた。西村派は憤慨したが、翌日村山氏は、西村編輯局長及び渡邊（霞亭）社會部長を罷め、鳥居編輯局長、長谷川社會部長と發表し、その他各幹部も總て鳥居派をもつて代へたので、鳥居派は社長の英斷に大に感激し、西村派は無論憤慨したが、然し鎭靜したもの　なかつた。このことがあつてから、社內の秘密が悉く外部に洩れて、極少數の幹部會議の內容までも雜誌などに現はれる。殊に杉中某の「新時代」といふ雜誌では詳細かに大朝社內の紛擾を掲載し、殊に鳥居派に關してある事無いことを書き立てた。鳥居派はこれは社內の西村派の所爲であると認めたが何うにもならないので抛つて置いた。然しこの杉中某といふのは寺內一派や政友會一派に聯絡のある人間だといふので、その杉中と聯絡のある西村派は、「大朝」が極力攻擊してゐる寺內、原等の一派に近いものであると認めてゐた。

夏河東碧梧桐、一戶直藏兩氏と共に日本アルプス縱斷を行ひ、三人の紀行を連載した。後に「日本アルプス縱斷記」として大鐙閣から出版された。

大正四年（四十一歲）

運動競技の奬勵のため橋戶信氏を社會部に招聘して、全國中等學校野球大會の計畫を立て、第一回を豐中グラウンドに開催したのが、今日全國を騷がしてゐる野球大會の初めである。その他極東競技大會豫選會、東西對抗競技大會等、大朝社のスポーツ界への進出の基礎は全く橋戶氏の努力に據るものである。

此月「大朝」主催で白耳義救恤の慈善音樂會を北濱帝國座に開いたが、その時警察から刑事二名を派し、出演者のうちに犯罪嫌疑者があるので舞臺裏で警戒するといつたのを余は拒絕したが、後年に至つて、それは「大阪朝日」が秘密に外國と通信するといふ嫌疑からであるといふ說を聞いた。「大朝危險思想說」はこの頃から胚胎されてゐたのであるといふ。

七月父は市外淀橋町柏木三五三に移る。

大正五年（四十二歲）

「大朝」は米人ナイルスを聘して宙返り飛行を催したが、後に至つてナイルスは、その頃では無謀と考へられた東京大阪聯絡飛行の計畫を提議して來た。これは余等社內の一二人の間で協議されたのみで、つひに實現されなかつたが、これも後年に至つて、「大朝」は外人が軍事上の機密を探らんとするものに協力したといふ嫌疑の原因となつたといふことをきいた。時代の幼稚さ加減思ひやられる。

肺尖カタルで伊豆の湯ケ島、湯ケ原等に數月間療養。その間に櫛田民藏氏入社。

大正六年（四十三歲）

春再び肺尖カタルの徵候があつた。大庭柯公の紹介で百瀨一一博士の診斷をうけ、注射を行はなければ危險であるといはれたが、迷信的に注射を嫌つたのでそのまゝにしてゐるうちに全快した。

大正七年（四十四歲）

米價騰貴のため人心恟々たる際、奸商の買占が頻りに行はれたので、「大朝」社會面で盛にそれを暴露した。神戶の鈴木商店の如きは石橋爲之助代議士（前「大朝」社員で、後に神戶市長となつた）を介して妥協を申入れたが、拒絕したので、更らに別の人を介して金子直吉氏が余に會見を申込んだが、それも無論、拒絕した。終に八月に至つて、富山縣滑川町の漁夫の女房連の示威運動が口火と

なつて、全國的の「米騷動」の勃發となつた。それがため「大阪朝日」は政府及び反動團體の窺ふ所となつて村山社長が往來で暴漢に襲はれたりした。

九月九日に內閣彈劾記者大會が大阪で開かれたが、それに關する社會面の記事中に不穩の文字があつたといふので秩序紊亂で告發され、執筆者大西利夫氏及び署名人山口信雄氏は何れも禁錮に處せられた。その公判の際の檢事の論告には「大阪朝日」の論文を無數に引用してその「危險」を指摘したが、余の執筆の分が最も多かつたといふことだ。然し中には、某氏の、ルボンの「革命の心理」を失敬したやうな論文が、「革命の何とか」といふ題のついてゐるだけで高度に「危險」と認められたといふから、すべては察するに足りる。余も檢事局に召喚されて、長時間調べられたが、鳥居氏と余とは、初めから退社を條件として見逃がすといふ方針だつたとかで、その手心で訊問されてゐることが感じられた。

村山氏襲擊犯人の豫審決定書（或は判決であつたか）には、犯人が「大朝」に賣國的行動があつたことを認めたといふ點を頻りに高調して前揭のベルギー救恤やナイルスの聯絡發行の計畫やを、外國と款を通ずる行爲だとその犯人が認めてゐたといふやうなことを長々と記載してゐた。

十月十四日、突如村山氏が社長を上野理一氏に讓つて引退した。余は即時鳥居氏と共に退社を申出る。他の幹部諸氏は、すべて居殘ることに決したが、やがて西村氏復活して、同派の本多精一氏が編輯の實權を握ることとなつたので、他の諸君も居たゝまれず、同月末には中間派の高原操氏（經濟部長）を除いて花田大五郎（調査部長）、丸山幹治（通信部長）、大山郁夫（論說班）、井口孝親の諸氏は退社し、當時渡英中であつた稻原勝治氏（外報部長）もやがて歸朝して退社した。經濟部を除く部長全部の退社であつた。櫛田氏はそれより先きに退社して客員になつてゐたが、此時それを辭した。間もなく「東京朝日」も編輯局長の松山忠二郎氏を初め、小村俊三郎、宮部敬治、大庭柯公、板垣伯勝、伊藤義藏、細井肇、岡田孝一、中山英一郎、井上正明、高梨騈、橫田政道の諸氏も退社した。

十二月五日東京に移り、市外淀橋町柏木に借家す。「犬・猫・人間」にある「我の借りた家」である。

同夜母腦溢血にて急死、享年六十五歲。母は大に余の歸京を喜んで近所の父の家から移轉の樣子を見に來たが、同夜變を聽いて余の驅けつけた時には既に息を引取つてゐた。

大正八年（四十五歲）

二月大山郁夫氏と共に「我等」を創刊。鳥居氏等退社の諸氏に新聞計畫あるために雜誌に加はらず井口孝親氏だけが參加し、又大庭柯公氏が加はつた。賛助者には今井嘉幸氏、岡村司氏その他があつた。井口氏は間もなく洋行した。

四月市外中野町九三七の廣瀨哲士氏の家を讓りうけ移る。

十一月鳥居氏等の新聞計畫熟し、資本金二百萬圓の株式會社として本社を大阪に置き「大正日々」を發刊す。大山、長谷川の兩人は新聞が出來たら雜誌をやめて參加するといふ豫定であつたが、計畫の內容その他兩人の意に充たないものがあつたので參加を謝絕して客員となる。後から聞けば發起人中の有力者も兩人を忌避してその參加を拒んでゐたのであつた。

大正九年（四十六歲）

一月東京帝大經濟部から出た「經濟學硏究」

の創刊號の森戸辰男氏の論『クロポトキンの社會思想の研究』が筆禍事件を起し、執筆者森戸氏及び署名人大内兵衛氏が告發されたので、「我等」で『森戸助教授筆禍事件の論理的解剖』を書いて、大に軟派教授連の反感を買ふ。
櫛田民藏氏、森戸辰男氏、河上肇氏、「我等」同人となる。櫛田氏洋行し、森戸氏は服役した。

大正十年（四十七歳）

七月『現代國家批判』を弘文堂から出版。
八月上海キリスト教青年會、漢口日本人會、有志等の招聘をうけ支那に赴く。上海、漢口、北京、天津、ハルピン、大連、平壤、京城、仁川等にて講演し、十月歸國。北京滯在中、京綏線にて大同石佛寺に遊ぶ。此時の旅行で中華民國人について豫て考へてゐたことが誤りでなかつたことを知つて一層支那好きとなる。

大正十一年（四十八歳）

一月『現代社會批判』を弘文堂から出版。
八月信州へ講演旅行のついで、富士見より八ヶ岳へ登り松原湖に下つて歸京。

大正十二年（四十九歳）

一月より『如是閑創作集』三册を我等社から出版。
九月關東大震災で神田鎌倉町の我等社事務所燒失し、出版物その他すべてを失ふ。中野の家は無事であつたが、叔父と從弟を失つた。

大正十三年（五十歳）

二月『眞實はかく佯る』を叢文閣から出版。
五月創作集の一、『象やの糸さん』を叢文閣から出版。
九月創作集の二、『老人形師と彼れの妻』を叢文閣から出版。

大正十四年（五十一歳）

六月創作集の三、『秋刀魚先生』を叢文閣から出版。
『道德の現實性』を京都中外日報社から出版。
夏櫛田民藏氏と同道、北海道及樺太に赴き、函館、小樽、札幌、豐原等に講演旅行の歸途羊蹄山（蝦夷富士）に登り、足を痛めて登別溫泉で數日靜養。

大正十五年（昭和元年）（五十二歳）

五月滿鐵の招聘で、滿洲に赴き、安東、奉天、撫順、長春、吉林、四平街、洮南、昂々溪、ハルピン、大連より天津に渡り北京に遊び、諸所で講演して、八月歸國。

昭和二年（五十三歳）

九月父山本金藏死去、享年八十歳。

昭和三年（五十四歳）

九月滿鐵の招聘にて、滿洲に赴く。大連、奉天、撫順、安東、開原、ハルピン、吉林、敦化、熊岳城等を巡遊、更らに大連から青島に渡り、濟南事件の跡を見、歸途淄川炭坑を見て青島より上海に赴き、南京、杭州等を經て、十一月歸國。

明治五年（五十六歳）

五月「我等」を「批判」と改題。
六月『歴史を捻ぢる』を鐵塔書院から出版。



○記憶すべき事を忘却するは太だ不便なり、忘却すべき事を記憶するは太だ不幸なり。
（其の子に與へたる親は酬はるべし、其の子に貸したる親は辨濟せらるゝ事なし。
○マホメットは打擲し、基督は怒號し、釋迦は微笑す。

（『如是閑語』より）

内田魯庵集

序

卷尾に附したる年譜は氏の生涯を語るに十分だと信ずるが、今、その中から特に三四の事項を抽出して、一般の注意を促したいものがある。

氏は緣戚として明治譯壇の先覺井上勤氏をもち、その助手として早くから文筆には親しむ機會があつたが、その前後夙に經世の志があつて暫く經濟學を修めた。晩年の老熟せる氏の社會批評に文人迂腐の跡なきは遠く玆に因するものと言はねばならぬ。

宣教師として明治文化の開發に偉大なる貢獻をしたフルベッキに依り基督教求道の指導を受けたのも文壇擡頭以前の事に屬する。但し氏の實證的傾向は、遂にその信仰を拒否したものの泰西新思潮の吸收に鋭敏であつた氏の頭腦は、蓋し彼の教養に俟つ事多大であつたらう。

別に氏の求道に就いて周圍から心を勞した人に植村正久氏がゐる。一日氏は植村氏からトルストイの「わが宗教」の英譯を與へられ、耽讀卷を措くを知らなかつた。併しこれは植村氏の期待には全く背反して、氏をます／＼基督教から遠ざからしめる楔子を作つた。但しそれと共に氏の眼をロシヤの思想文學に向かしむる動機となつた。後年氏がトルストイ、ドストイエフスキイその他の北歐文學の紹介移植に努めたについては、二葉亭の深き感化以外に、斯る世に知られてをらぬ事情も存在したのである。

後に植村氏が基督教に關する雜誌を創刊するや、氏は招かれて、二三行を超えぬ短評に社會萬般のトピックを拾ひ、斬新の形式、辛辣の批判に、大いに世の注目を惹いた。これ或は後に諸新聞が競うて短評欄を創設した濫觴であらうか。以て氏の吾が國ジャーナリズムに與へたる隱れたる一貢獻に數へる事が出來る。

本卷に採錄せる『文學者となる法』は明治二十七年の出版。氏自らその作者也と名乘れる事はかつて無きも、その然るは公知の事實で、實に明治文壇唯一無二の奇書である。當時の文人を罵り得て骨を忍ぐる概ありとは田山花袋氏の批評。今日から眺むればその時代の文壇事情を手に取る如く窺ひ知らしむる點に價値と興味とが存する。

もしそれ『くれの廿八日』（明三十一年）に到つては、自然主義勃興以前に於ける最も輝ける名篇の一つで、植氏的夢想と基督教的信仰とを綯ひ交ぜて有效に用ゐ生かした淸新の構想は、時の具眼の批評家をして讃嘆措く能はざらしめたものである。「數年前までの硯友社諸氏の作の今日となりて多く讀むに堪へざるに反し……『くれの廿八日』等明治四十年の文壇に出すとも一佳作たるを失はず。」とは正宗白鳥氏の評言である。

便宜上こゝで廣汎に渉つた氏の文壇的活動を要約しておくと、極力戲作者氣質を排擊せる高邁なる文藝批評、海外近代文藝の紹介移植、即ち文壇に於けるモダーニズム確立への援助、社會小說の提唱と創作、而して晩年には典籍趣味の普及と、博大なる社會的視野に立脚した獨得の隨筆體文明批評とに專らであつた。此の晩年の圓熟老巧なる筆致は本卷に收めた『二葉亭四迷の一生』『下谷廣小路』がよき例である。

最後に、氏はその長き閱歷に於てかつて文壇のどのグループにも屬した事がない。常に孤行獨往した。常に文壇霸權に對する反抗兒であつた。なほ片山潛氏の主宰した『勞働世界』が運動に於ける文藝の意味を認め來るや、先づその創作を氏に囑してゐるのは極めて意味が深いと言はねばならぬ。

昭和五年六月

くれの廿八日

其一

歳暮の二十八日だといふに、

こゝらに隠れもない揚土門の金満家では來陽の準備が猶だ出來ずにゐる。煤掃も障子の張替も疊の表換も庭の掃除も盆栽の手入も何一つ出來ぬさうだし、旦那様は苦い顔をして、奥様はツンケンしてござる、奉公人は佛頂面する、飼犬は噛付く様に吠える、出入の商人は竊々と來て竊々と歸る、偶さかの來客も冷えた茶一杯で追返され、座敷も庖廚も寂寞閑として八十何坪のだだッ廣い家が恰で火の消えた様である。

元來華奢好きの奥様天下で、年末は格別に人出入繁く、奉公人を初め出入の袢纏着、牛乳配達、新聞配達の末まで歳暮の氣前を見せ、世間は越すの越されぬのと遣繰に忙しい中で、此家ばかりは追羽子の春めいた音を墻越に往來の人に聞かしたのが、之はまた么麼したものか、例も二十五日拂ひが定例の勘定すら押迫つて猶だ下らない始末で、出入の者が例に由て鹽鮭や砂糖袋を持込んでヒヨコ〳〵頭を下げて揉手をしても、奉公人の脹れた面に算勘を狂はして悄然と歸る。何でも尋常事でないと、寄ると觸ると此話題で持切つてゐたが――中働きが迂濶り口走つたを漏聞くと、夫れも其筈で、

やがて一ト月前に奥様が泣聲を慄はして旦那様と大論判をしたさうだ。それから媒妁人が朝に晩に出入をする、本家から頻く手紙が來る、旦那様は二階の書齋に閉籠つた切で背戸の鶏舎でいゝツくと餌を求る祕藏のハンバーグをも餓殺しの久助爺さんに任して了ひ、奥様は離れのお部屋を閉切つて自慢の榮左衞門の音締をペンともさせないで一切の家事を仲働きの銀が詮事なしに取仕切つてゐるまゝに打棄つて置いた。てもなく他人同士が下宿してゐる様なもんで、顔を見合はしても緘默と口を交かずにゐた。

此二三日、奥様のお吉は病氣だと云つて離室の蓐に就き、甲走つた聲が例もよりは激しく奉公人の肝を冷さした。旦那様の純之助は朝から出掛けて深更けて歸ると、苦い顔をして、深い溜息を吐いて書卓の前に根が生えた様に固く、い、い、い、ッチコバッて一二時間書齋へ草臥れて蓐に入つてからも反側ばかりしてゐた。

昨日は午後から媒妁人の高橋直兵衞、湯島で梶葛と少しは人に知られた袋物屋の主人が來て、半日緩々と二階で純之助と相談した後、一緒に何處へか出掛けて、其晩深更けてから純之助だけが一人で歸つて來た。平生酒を飲まない人が不思議に赤い顔をして、不思議な足拍子で階子を躍上つて、不思議な唄を不思議な節で唄つて、草臥れてグッタリと蓐に倒れた時は欠伸交りに不思議な溜息を洩した。斯らいふ容子を見たのは奉公人も初めてださうで。

其翌る日が恰ど二十八日で――

二番鶏が啼くと間もなく、薄暗い中から雨戸を勢ひよくガラ〳〵開け、珍らしく最愛のブルドッグを伴れて朝寒を侵して散歩に出掛け、歸ると又珍らしくハンバーグに自身と餌を與つて珍らしく茶の間で朝食を濟まし、珍らしく小間使の濱を撫揄つて高聲に笑ひ、珍らしく庖廚へ來て久助爺さんに無益口を叩き、珍らしく中働きの銀に二階の掃除を命令け、珍らしく庭下駄を引摺つて離室の縁からツイ四五尺を離れた鐘乳石の傍でブルドッグを撫揄ひながら乾蒸

餅を與つた。

で、窺と障子の硝子越に離室を覗くと、お吉は良人の冴えた聲が珍らしく庭先で聞えるを知らぬ振して後向きのまゝ咳きさへもしなかつた。が、眞實睡つてゐるとは請取れぬ容子で、此容子を見た純之助は暫らく躊躇つたが么麼やら面白からぬ顏して再び半日の樣に二階の書齋に引込んで了つた。

『日月籠中の鳥、乾坤水上の萍、』と高らかに古詩を吟じて後ろざまに投出す樣に羆熊の皮を敷いた籐の寢臺椅子に倒れ、眩しさうな眼を半分閉ぎ小鼻に皺を寄せて何處となく睨んだ。

純之助は三十二三で、中脊の肥滿した、眼付の鋭い口元の緊つた、肩幅の廣い、何方かといふと嚴格い方で、揉上から頤へ掛けて疎らな髯の生えたのが一層男振を一ト際有り氣に見せた。

莫大小の襯衣を二三枚着た上にフラネルの單衣と黒ッぽい銘仙の綿入とを重ね薩摩の紺絣の綿入羽織を引掛け、鼠色に化けた白縮緬の帶を細の樣にしごいて締めた風采は、何處やらに品格があつても一級所得稅を納める區內の金滿家らしくは見えないで、

『小糠三合――往時からの相場だ、』と口の裡で呟いて喟然として歎息した。

軈て椅子を離れて、十疊から次の六疊へと殆んど機械的に直角を作つて運動し始めた。恰度疲勞した兵士が士官の號令に餘儀なく進行する樣に姿勢も步武も力が拔けてゐた。

二階は二室だけで、二室とも書齋らしく綺麗に整理つて、法隆寺模樣の段通を一杯に敷詰め、心越禪師の扁額を楣間に揭げ、抱一上人が源氏繪扇面散らしの金屛風を片隅に建て、顏輝が錦襴表裝の大幅、唐物古銅の獅子の香爐、柿右衛門が錦染の花瓶、寬齋が蒔繪の手匣など、先代が好事家だけに何れも由緒ある有川家自慢の逸品を床、違棚に飾立てた中に、表紙の手擦れた洋書、報告書めいた假綴物、四五本殘つた葉卷の箱、封口を開けた葡萄酒の瓶、古新聞で包んだ農產物、薦繩掛けの標本を塵埃と一緒に埒もなく散逃し、折角好事家が忝けなさに涙零して勿體ながる名物を可惜見榮もなくがらくたの中に埋めてゐた。

で、風雅でもない男が、昨夜酒氣に乘じて江戸川半切の繼いだのに、一和順齊レ家之本、循レ理保レ家之本一と拙劣い我流の毫を墨黒々と揮つて其下に告朔餼羊坊と落款したのを、和洋の書籍をギッシリ詰込んだ大形の西洋書架の上に張付けたのが部屋の中で何よりも一番目に着いた。

一巡隅から隅を運動して壁上に掛けた墨西哥及び中部亞米利加の圖の前まで來ると、蹶然と佇立まつて苦い顏が次第に和いで來たまで見蕩れてゐた。

『南太平洋鐵道を下つて……』と指頭で地圖を摸つて獨語ちた。『國境エルパソを通過ぎてチワワ……』

チワワ――渺茫たる原野に僅々數年の間に五萬の小都を作り出した、殆んど蜃氣樓を欺く奇蹟で、州知事のアウマダと革命の元勳テラザスとは永く歷史に傳はるべき名だ。爰にはまた墨西哥の華盛頓と云はるゝエズイト宗のイダルゴ上人が血を流した遺蹟が今でも行人の征衣を濕す哀れを留めてゐるのだ。此チワワを南下する更に三四百哩、ザカテカス市は西半球の最大著名の地で、コロンブスの大陸發見後、爰で初めて銀山が發見せられ、恰度今のクロンダイクの騷動の樣に投機熱が遽に勃興して、北米大陸で初めての百萬兩富限が一夜の中に首を持上げ、北米大陸で初めての新銀貨が燦々光り出したのだ。今から三百五十年前で、此發見隊の一番偉い奴がクリストーバル、デ、オニャーテといふ大膽不敵の冒險者だ。此奴の小倅が其上手を

行く無敵な豪傑で、コルテズ將軍の孫女を女房にして同氣相求むる剛腸石心の鐵脚隊を組成つてネブラスカからカリフォルニヤ灣まで探險した奴だ。今の合衆國の西南三分一は即ち此オニャーテ父子が勁勇無雙の鐵腕で創建したので……

『クリストーバル、デ、オニャーテ――豪傑だナア、』と思はず力瘤を入れて慷慨した。『野猪の勇、野猪の勇……かも知れぬが豪傑だ。黄金に渇する奴、酒肉に飽く奴、美人に溺るゝ奴……』……如斯な下劣の匹夫に何が出來る？ オニャーテが九牛一毛ほどの仕事も恐らく難かしからう。獵官だの、買收だの、政綱だの、マニフェストだの外資輸入だの増税だの軍備緊肅だのと騷立てるが、トヾの結局は弗箱一杯の金子を貯めて色の生白い奴を四五人も飼殺しにしたいばかりの國利民福論で自分等が酒を飲みたさに祭禮騷をする町内の若者と何邊に相違がある。策士と金看板打つた大政黨家が何をした？ 高價で政黨を賣附けて機密費に煖まる駈引が精一杯で眞向に殖産興業を振翳して國益の急先鋒と稱する大實業家が何をした？ 不相應な配當に株の相場を狂はして手拭紙にもならぬ株券を賣飛ばす魂膽が滿身の智慧袋だ。惣じて一國を擧げて利奔名走に勞らされ、鶯鳥の花に醉うて夕風の葉越に來るを知らぬ間に濠洲は獨立の歩を進め、南米諸國は次第に文明を競ひ、墨國太平洋鐵道は瓦地馬拉國境まで聯絡し、尼加拉瓦運河は疏通し、巴拿馬の開鑿は竣功し、太平洋と大西洋は俄に近接し、キャリビヤン海が海上均勢の中心となり、中部亞米利加が東印度の繁昌を來し、布哇群島が東西二球の樞軸となり、太平洋が世界の檜舞臺となるのだ。十八世紀に勃興した南歐の遠征熱革命の聲に銷沈して歐羅巴が内爭に惱まさるゝ事凡そ百年、人種の膨脹と社會の逼迫とで必要上再燃した殖民の競爭が漸く激烈となるは既に數年に差迫つた二十世紀で、我々が未來の太平洋問題に處して平和の鑰を把持する盟主となるには北緯三十度以南の太平洋一帶の地に雄鎭を築くが第一の準備である。我々はヒューマニチイを宣傳し、能ふべくんば世界の軍備を撤回するを庶幾するが故に歷史上必然避くべからざる人種の衝突を救はんが爲め縱令卵殼を以て巖石を碎くより難くとも此風雲に際會して平和の福音を傳へんとするので、恰もノアが天の未だ霖雨せざるに先だち明命を畏みて方舟を建造したと同じ心持で、此獸慾的競爭の高調に乘じて無人の樂郷に新ユートーピヤを創開かんとするのである即ち此無人の樂郷は……

『墨西哥……墨西哥、』と猛然として腕を叩いて慷慨した。

サンチアコの沿岸に牛馬を放つも面白し、チワワの深山幽谷を探つて鑛脈を覓ふも面白し、アルメリヤの北岸に日本式の稻田を拓くも面白し、シナロアの森林に堅材を伐出すも面白し、ソコヌスコの耕圃に珈琲園を開くも面白し――と歷々地圖を案じて餘念もなく其處此處を辿つて行く中、端なくも三百年前支倉六郎左衛門が上陸したアカプルコに指頭が留つた。

『アカプルコ――我々の耳には郷里の樣に響く、』と口裡で云つて莞爾と微笑した。で又、憶出した樣に、『墨西哥……墨西哥、』と拳手して滿身に力を籠め、肩を怒らし、肱を張つて、唯ツた五尺三寸の男が仁王の擔ぎ出す如き身振で大跨に二タ足三足歩き出した。

が忽ち又、力の拔けた樣に滿身の筋肉が弛み、燦ついた眼が光彩を喪くして靜々と以前の籐椅子に倒れ、暫らく眼を閉ぢて沈吟してゐた。軈てちよッと舌鼓して無理やりに突起ち、力の無い聲で前と同じ古句を口吟んだ。『日月籠中の鳥、乾坤水上の萍……』

處へ襖がすゥッと開き、中働きの銀が敷居越に手を突いて、「お客樣、」と案内した。同時に顏を出したは、二十一二の高尚な束髮姿で、微塵も白粉氣なく薄手とした風采は少と俠らしいが、色白のぽッとりした豐下の愛嬌ある容貌で、

「珍らしいッ、」と純之助の淋しい顏は俄に春めいて來た。

『ツイ忙しいので、」と嫣然笑ひながら黑の斜綾の吾妻コートを脫いだ。「クリスマスを濟まして漸と樂になつたの。』

質朴な唐繻の上着に小紋を捺いた支那縮緬を重ね、黑斜子の被布を着た野暮くたい服裝で、チョイと衣紋を直しながら銀が薦めた紙布織の座蒲團に遠慮もなく坐つて、光淋が蒔畫をした桐胴の火鉢に摺寄つて寶石入と槌目の指環を穿めた眞白き手を惜氣もなく火に翳した。

「寒いのネエ、』と火鉢を央に相對ひに坐つた純之助を見上げて、「寒いのネエ……雪が降りさうだワ。』

「忙しかッたの、」と純之助は懐手をして貧乏搾りをしつゝ、「二タ月ばかり見えんかッたネ。』

「忙しかッたの何のッて、」と火鉢に翳した手を揉みながら、「學期の試驗をした上に、受持の生徒が閉校式に演る諳誦や唱歌の練習をしてやる、其間には外國教師がクリスマスの買物をする隨行を仰せ付かる。忙しいの何のッて一日起ち續けで日が暮れると疲勞して坐睡が出て來るの……本統に骨が折れて閉口しちまッた、」と暖めた手で頰を壓付け、「それでも閉校式が濟んでからお庇で生徒が能く成效たッて外國教師が喜んで下すッたから……さう〳〵お目に掛けようと思つて、」と憶出した樣にお納戸繻珍の帶を搜つて七寶製の冠を嵌めた黃金の十字架を時計の鎖から脫して、『好いンでせう。ミセス、リンチから贈つて呉れたノ――ソラ此夏、妾が案内者になつて日光へ伴れてッて上げた波士頓の貴夫人……』

純之助は十字架を掌上に載せて其裏に毛彫で「神の榮光がミス中條靜江に惠を垂れ給ふ事を祈る」と英語で刻り付けたのを見、無言で微笑した。

『好いンでせう、』と靜江は左も嬉しさうに嫣然して、「簡單で高尚で、妾は大好き。クリスマスの晩に鳩が澤山飛んで來た夢を見たから、必と喜びの音信があると喜んでたら、其翌る日に屆いて來たの……眞實！ ヤコブやヨセフの夢は悉皆的中ってよ。』

純之助は故とらしく呵然と笑つた。靜江は片頰に微笑みつゝ、

「舊約時代の夢は悉皆正夢でしたよ。夢は心の反映だから默示錄みた樣に解釋の仕方で大變面白くなるワ。昨夜も天使と惡魔の面を前後に有つてるスフヒンクスみた樣な動物が蛇や蜥蜴に攻められながら底の無い坑に落ちてく夢を見たの、其動物の胸に墨西哥と書いて有ってよ。オホヽ……そりやア虛誕。』

純之助は苦々しげに笑つた。靜江は黃金の十字架を時計の鎖に穿めながら嫣然して、

『そりやア虛誕、貴郎をスフヒンクスに喩へちやア失禮ネ。墨西哥は貴郎の約束の地だもの。ですけれどカナンに行くにはヨルダンの水を潜つて聖めなけりやア……么麼なすつたの、恐い顏をして、」と純之助の苦り切つた顏を凝視めて、「惡語を云つたもんだから、怒ッちまッて……』

『墨西哥は中止にした。」と純之助は投出す樣に云つて頤の髯を捩りながら、「お父さん不承知を云出して、實に當惑した。』

「夫人が……其筈ですワ。結[illegible]して一[illegible]たないんだもの。妾だッて故障を云ひますワ。

イスラエルでは新たに妻を娶つた者は兵役さい免れて一年間は家に籠つて妻を慰める義務が有るンだッてますよ。第一夫人は御病氣ですッてネ、今お銀さんに聞いたら。」

「なアに例のヘステリーを起したンだ、」と冷笑して、『或ひは僕を恐嚇する示威運動かも知れんよ。』

「示威運動だなんて、貴郎は餘り冷淡過ぎる。ですから夫人がお憤ンなさる。女ッてものは……』

と言掛けた時、銀が銀瓶に湯を入れたのを持つて來た。で、違棚から古い青九谷の急須茶碗と錫の壺形の茶入と琢齋が蟠龍を鑄出した水翻と紫銅の唐形の茶托とを綺麗に拭込んだ蝦夷盆に載せたまゝ持出した。

『銀、奥さんは么麼なだい？』と云つて純之助はサビタの吸口に土耳古卷を插んだ。

「まだ御飯を召上りません、」と銀は疊一枚下つて中腰のまゝ、「二三日前からの御癇癪で……」

「氣の毒だナウ、」と純之助は眉を顰めて銀の顔を見、「乃公にさい毒口を叩く女だ。お前達には猶更酷く當るだらう。」

「否エ、此婢どもは、何でムいます、全く不調法で行屆きませんので ツイ……」と調子よく取繕つて、「今朝ほども濱が、膳が行きませんので ツイ御機嫌を損ねたさうで、誠に困り者でムいます。」

『濱も可哀さうに、』と純之助は吸口を横啣へにしたまゝ、『靜江さん、斯らいふ咄がある。先月だッた、日が暮れてから濱が風呂を浴つて白い物を塗立てたのだ。元來綺麗な娘だから粧し込むと大變目に立つ。するとお吉が睨付けて、オヤ大層洒落るネ、奉公人のくせに生意氣だよ、情人でも出來たんだらうの、旦那様のお氣入は違つてるの、何だの彼だのと意地惡くい、い、ケッケ云ふンだ。可哀さうに濱は涙ぐんンでおまッた……如斯な調子だからナ、實に困る。」

「あれは旦那様、」と銀は如才なくお吉を辯護つて、「あれはアノ、濱が平日から餘り粧し過ぎますから奥様がお叱り遊ばしたので……ネエ中條さま、なんぼ妙齢でも御奉公致してをる者が濱のやうにいゝア粧り立つては御主人様がお叱言仰しやるのは御道理でムいますネ。」

靜江は無言で微笑した。

「此婢どもは關ひませんが、旦那様が御心配遊ばすのがお氣の毒さまで、」と靜江の顔を見つゝ銀は言葉を繼ぎ、「眞實に貴郎、御大抵ぢやムいません。奥様も隨分、御病氣の爲でせうが御無理を仰しやつて御癇癪をお起し遊ばしますから……其たんびに……」

「お前達が槍玉に上げられる、」と純之助は呵然と笑つた。

「此婢どもは關ひませんが……」

「乃公は關はんよ、そこが夫子の辛抱どこだナ、」と純之助は一向氣に掛けぬ體で、「家附の奥様は正直の竈神さまで、乃公は先ア天井の鼠同様かナ。」

「オホゝゝ、元來旦那様が餘り淡薄していらしツて、他の旦那様のやうに奥様をチヤホヤ遊ばさないのがお惡いのでムいます。」

『眞實！』と靜江は眞摯に頷いて、「お銀さんのいふ通りよ。妻を遇ふには弱き器の如くしッて事があるワ。もつと〳〵親切に慰めて上げなければ……』

「お銀さん、」と唐突に聲を掛けて二階の上り口に顔を出したは今晩に出た小間使の濱で、「奥様が呼んでらツしやるよ。」

「何だネ、無作法な、」と銀は顧眄さつゝ口嘴に嗜めて、「あいよ、今行くッたら……」

『早く行かないと叱られるワ。眞實に妙な方ッたら、何にも粗忽をしないのに叱られてばッかり……』と濱は年の行かぬ無邪氣さに遠慮もな

く言掛けたが、恰も純之助の睨めた眼に衝突ると周章てて口を噤んで了つた。
　すると恰も、
「銀や、」とお吉の甲走つた聲が全家を劈くばかりに聞えた。「銀や、銀や、銀や！」

其二

『聞えないッて、聞えない事があるもんか、』とトンと長羅宇の煙管を叩いて長い煙を吹き、片手を帯に插んで意地惡さうに横目でジロリと下手に控へてゐる銀を睨んだのは有川家の御新造お吉の方で。
　年頃は二十三四、色の淺黑い、鼻のツンとした、眼尻の釣上つた、唇の薄い、眉毛の濃い、細面の、險のある容貌で、洗晒した秩父の寐衣に博多の男帯をぐる／＼と纏付け、染返しの小紋の平常羽織を引掛け、蚊帳內の夜具を撥退けて白フラネルのシートを敷いた蒲團の上に坐つてゐた。
「何だい、お二階の御用をしてゐたツて、」と焦れつたさうに二つに割れた丸髷の根が緩んでガツクリ頸覆つてゐるを搖ぶりながら、「二階の用をしてゐると返事が出來ないかい。」
「ツイ御用を致してをりましたので……」と銀は恐る／＼詑つた。
『解つたよ。御用々々ッて旦那樣の用さいすりやア好いと思つて、』とお吉は煙管を灰に突き、後れ毛の煩ささうにパラ／＼下るを前齒でギリギリと嚙んで、「妾の大きな聲が聞えないなんて、人ゥ馬鹿にするのも好い加減におし。元來なら寢てエるンだもの、呼ばないからッて時々は用を聞きに來るのが可いやネ。濱は么麼したい?」
「濱もお二階に。」
『呆れッちまふよ。揃ひも揃つて妾を馬鹿にしてゐるネ。可いよ、澤山馬鹿になさい。旦那樣のお氣に入りさいすりや可いと思つてるネ、』とお吉は前額に靑筋を出して、「銀、お前知らないかい、自家の旦那樣は養子だよ。」
『存じてをります。』
「それお見、知らない筈はない、」とお吉は侮蔑む樣に下目に見て、「自家の旦那樣は書生さんだよ。先日まで下宿してゐた書生さんだよ。少とは新聞に名なんか出て稼ぎもなさる樣だが、恁した門構へを張つて區內で指折に數込まれるのは皆妾の光輝だアネ。縱令んば立派な伎倆があるにしろ、纔一文生活の足に入れて下さるぢやなし、お前達の給金から、御自分の道樂で飼つて置く犬や家禽の餌まで皆自家の財產ぢやないか。そりやア旦那樣の事だから、妾だッて吝嗇した事ア云ひたかアないが、世間並に主人風を吹かされたり、加之にお前達にまで馬鹿にされちやア、なんぼ好人物でもツイ腹が立つて餘計な事の一つも云ひたくなる。元來先ア、何の御用がありました?』
『あのゥ……お客樣がムいましたので、』と銀は怯づ／＼云つた。
「お客樣が……高橋さんかい?」
『否エ、あの……中條樣。』
　お吉の顏面は忽ちひく／＼ッと動いて眼尻が釣上つて來た。
「中條さん——博江さんかい、」と懷へる聲を故と和げて、「久しく來ないと思つたら……那樣な衣裳をしてエたい、金時計を下げてたらう?」
「矢張例の黑紹子の被布をお召しになりまして、お時計は如何でムいましたか……」
「必と下げて來たよ。生命から二番目だから、」とお吉は冷笑して、「生意氣だアネ、二十圓の紋師さんが金時計を下げるなんて……お前、あれはネ旦那樣が買つて與つたンだよ。」
「へーエ、左樣でムいますか、」と銀は感心した樣にお吉の顏を見た。

『二十圓ばかし取つてるくせに、』と二十圓に力を入れて、『金時計を下げたり、寶石入の指環を穿めたり、イヤに權識振つて如斯な生意氣なお擬ツたら見た事ア無い。いくら教師さんだッて、人の家イ來てまで先生を鼻の頭へぶら下げなくても可さそうなもんだネ。眞實に如斯な高慢ちきツたら無い。妾なんかには鼻洟も引掛けないで澄アしたもんだ。』

『第一お前、』とお吉は疊掛けて、『人の家イ來たら、女は女同士で先づ主婦に挨拶するのが作法といふもンだ。女のくせにツーと澄して直ぐ主人の部屋へ通るツてのは耶蘇のお仲間は知らないが世間には無い事ッたネ。妾の樣な意氣地なしだから斷念めてるが、氣の強い細君なら主婦を措いて主人に交際ふ樣な女は出入をさせませんネ。當然だともお前、往時なら他の良人を寐取ると云はれたツて一言も無いサ。ねエ、爾うぢやアないか。いくら學問が出來る同士だからッて世間が承知しないからネ…‥』

　と云ひつゝお吉はジウと云はして吸つた貪若の烟を輪に吹いて何處となく凝視めて暱ッと考込んだが、軈てトンと煙管を叩いて銀の顏を見た。

『馬鹿々々しい! 是れだけの財産を有つてゐて、二十圓ばかしの教師さんに馬鹿にされるンだからネ、お前達にも馬鹿にされるサ。』

『飛んでもない事を、奧樣。』と銀は呆れた顏をした。

『可いよ。馬鹿におし、さんざ馬鹿におし。どうせ養子に掻廻されて家を潰しちまふお馬鹿さんだからネ。今にネ財產を欺騙されッちまふとお俠さんが乘込むンだから、お前達も今の中から詔諛をすッて置くサ。』

『飛んでない事を、奧樣。』

『爾うなるンだとも、解つてるサ。妾だッてお前、馬鹿は馬鹿なりに了簡があるからネ、旦那樣が學者だからッて靜江さんが教師さんだからッてさう〳〵欺騙されてばかしゐないサ。けれどもお前、お前は知るまいけれど、旦那樣は新聞や雜誌へ書いたり社の飜譯をしたりした報酬を悉皆靜江さんに入上げッちまふンだよ。今話した金時計だッて中々廉かアないやネ。寶石入の指環だの縮珍の帶だのッて御自分は着物一枚新調いないで靜江さんにお金子を注込むッてのは何かお前、道理がなくちやア……なんぼ死んだお友達の妹だからッて、他人ぢやないか。私通がなくちやア如斯も身を入れて世話ア出來ないやネ。』

『でも奧樣、中條さまはお宗旨の方だッて伺ひましたが。』

『お宗旨ッてお前、耶蘇だもの。切支丹で國を亡さうッていふ恐ろしいお宗旨だもの、』とお吉は苦々しい顏をして、『耶蘇を奉る人に一人だッてお前、碌な人は無いよ。元來當家はお父さんもお母さんも耶蘇が大嫌ひで、存生てらッしやる時分は甚麼た親しい間でも耶蘇を奉るッて聞くと直ぐ交際を留めたもんだよ。だから妾だッても先日までは耶蘇を奉つてる人は義理が出るほど嫌で金輪際我家へは出入をさせまいと思ッてゐたネ。それがお前、チョク〳〵やッて來られて、妾を度外にして旦那樣と狎着かれちまア、なんぼ好人物だッて腹が立たアネ。人ッ、あんまり馬鹿にしてゐるよ、今頃は復た二階でベタベタしてエるンだらう。』

『大丈夫で厶いますよ、奧樣、』と銀は笑掛けさうにして口を結んだ。

『笑ひ事ッちや無い、』とお吉はツンとして銀を睨付け、『何が大丈夫だい。妾が何にも知らないと思つて、好い加減に馬鹿におし。旦那樣が薄情だと、お前達まで見習つて妾を欺騙さうとする。お俠さんの肩を持つて何とでも云ふが可いサ。妾だつて眼もありやア耳もあるからネ、

ちやアんと知つてますよ。』
『奥様、先ア……』
『可いよ、知らないッてば、辯疏なんかは聞きたかアないよ、』とお吉は焦れて前歯をギリ〳〵と噛んだ。
銀は手の着けられぬお吉の癇癪に困じ果てて無言で俯向いてゐた。
『嗚呼、嗚呼、』と暫らく經つてお吉は溜息を吐き、『奉公人にまで馬鹿にされ――……矢張妾が意氣地がないンだ。全體あの人を出入させるのは、高橋さんから話が有つて妾も承知したには違ひないが、もつと温和しい柔しい初心な娘だと思つてたら、如斯なヅウ〳〵しい洒蛙突くな耶蘇なンだもの。元來高橋さんが大丈夫だ大丈夫だッて保證ふもんだからツイ迂濶り口に乘つたのが矢張此方が馬鹿なのサ。だから自分が馬鹿だと斷念めさいすりやア、お前達に馬鹿にされても仕方がないよ。』
『飛んでもない事を、奥様、』と銀は恐る〳〵お吉の顔を見て、『御主人様を馬鹿にするなんて氣が爪の垢ほどもムいましたら、それこそ罰が中ります。』
『甘い事を云つてる。何とでも云ふサ。どうせ馬鹿だと斷念めてるからネ、』とお吉は俄に憐れツぽくなツて片手を帶に插んで頤を襟に埋めて了つた。
銀は言葉の附穗なくて手持無沙汰で當惑してゐた。
『ねエ銀や、』とお吉は漸と沈んだ調子になツて、『妾ア眞實に最う心配でネ。だからツイ癇癪を起すとむら〳〵ッと前後が解らなくなツてお前達を困らせるが全くはネ賴りにしてゐるンだよ。高橋さんは粗々くさしてゐるし、古田の伯父さんは磊落な方だから少とも頓着なさらないし、正可の時に相談しようッてのはお前達ばかりだからネ。妾はネ、餘程妙なんで、腹が立つてムシヤクシヤするかと思ふと、急に悲アしくなツたり、嬉しい樣な氣がすると直ぐ復た嫌アな心持になツたり、何だか物事が思ふ樣にならないやうで、焦れツたくて焦れツたくて、ツイそれだからお前達に喰つて掛る。全く其樣なに腹を立てるンぢやないが、何だか時々妙な氣になつて煩悶して來るンだよ。矢張病氣かも知れないネ。だからお前、恕して落着いて了ふと、今癇癪を起した事が氣の毒で、氣の毒で、なんぼ奉公人だからッて眞實に濟まないと思ふよ。』
『勿體ない事を、奥様、』と銀は俄にお吉の機嫌が變つて來たに怪訝な顔をして、飛んだ事を仰しやいます。御主人様が奉公人をお叱りンなるのは當然で、濟むも濟まないもムいませんワ。』
『いゝえお前、なんぼ主人と奉公人の間だからッて、妾の樣に無理な癇癪を起しちやア、お前だから勘辨して呉れるけれど、尋常の者なら誰だッて怒りますよ、』とお吉は么麼いふ拍子か急に眞摯な分別が附いて來たらしく、と云つて嫣然笑つた。
『だがネエ銀、』とお吉は再び心細さうに鬱込ンだ。『眞實に心細くなるワ……馬鹿で意氣地が無いからネ。迚も都江さんの樣な學校で揉まれた摩れッからしに協ふ筈がないサ。だからクワッと逆上せた時は旦那樣に反抗つても、結局は妾が負けになッて見棄てられるのかと思ふと情なくなるワ。』
『大丈夫でムいます、奥様、旦那樣はお柔しくて能く人情の解る方ですし、中條樣だッて教師をしていらッしやる位なお學問のある方ですもの、歴とした奥樣のある旦那樣を横奪する樣な开んな筋道の違つた事は正可に遊ばすまいと存じますワ。』
『それがお前、安心出來ないよ。學問が出來るたッて近ごろの女教師や女學生が油斷なるもん

かネ、能く新聞にも出てヱるぢやないか。彼樣いふ生意氣な耶蘇ッ臭い人が猫を被ッてるもんで妾ア恐くてならないよ。么麼な事を企ンでるか知れやしない。第一、旦那樣が、と格別に力を入れて、一寸とも恃にならないよ。妾アお前、嬉しいと思ッたのは唯ッた半月ばかりで、夫れからッてものは妻ッて名ばッかりで顧盼いても見ないから、女の身になると么麼なに辛いだらう。能く世間ぢやア聟取は威張れるッて云ふけれど、妾なんかは餘程意氣地が無いンだネ。そりやア威張らない事は無いサ、隨分放縱も云ひますサ。けれどもお前、靜江さんて彼樣な智慧の廻る摺れ辛しに屬いてられると、何時見棄てられるか解らないと思つて妾ア最う心配で堪らないよ。眞實に何んて因果だらう。養子を貰つて此樣な心配をするなんて……、とお吉は精々歎息した。

『大丈夫でムいますよ、奥樣、と銀は故と口輕に笑顏さへ粧つて、『此方の旦那樣ぐらゐお柔しくてお堅くて結構な方は何處い行つたツて在りませんワ。其上に御酒は召上らず、お蕩樂を遊すぢやなし、お堅い一方で、衆人が奥樣は幸福だと云暮してをります。夫ですもの奥樣、此方の旦那樣に限つて奥樣をお見棄て遊ばすなんて、何んな事は決してムいません、銀が必ずお保證ひ申します。』

『いゝえ、お前知らないからだよ、とお吉は斷然とした調子で、『元來、なんぼ學問が出來る人達だッて、赤の他人の若い男と女が唯だ兄妹の樣に睦まじく何時までも淨潔にしてゐられるもんかネ。第一、之が不思議でならないよ。けれども梶善さんも大丈夫だッて云ふし、妾だッて手證を見たわけぢやなし、妾なんかと違つて學問の出來る豪い人達だから間違ひないとした處で、お前、斯ういふ事があるよ、——番町の伯父さん家の福彌さんネ、あの人のお嫁に靜江さんをッて相談があッたンだよ。』

『へーエ、』と銀は初めて聞いたので眼を圓くした。

『處がお前、可訝しいぢやないか、旦那樣が好い顏をなさらないンだよ。でも伯父さん家からの相談だから、義理一遍で靜江さんを呼んでお話しなすッたの。妾も餘計なお世話だが傍から口を酸くして勸めて見たの。處がお前、案の定、立派なお謝絶ぢやないか——妾は生涯嫁づきません——とサ。』

『へーエ。』

『お前だッて驚いたらう、』とお吉は夫れ見ろといふ顏付で、『誰だッて驚かアネ。何處の國に、尼ぢやア有るまいし、尋常の容貌を有つて生涯お嫁に行かないッて人があるもんかネ。女敎師さんだッて靜江さんは一寸男好のする顏だから、お俠だッて生意氣だッて活潑だとか學問があるとか何とか名を付けて迷ふ人が無いでもないサ。現在福彌さんが餘程の執心で、貰はうと思へば華族さんからだッてお嫁に來人の若干もある身分でゐながら、好事に十分支度料を出して貰はうッてンだからネ、妾が靜江さんなら、氏なくて玉の輿だもの、二ッ返事で直ぐ諾と云ふワ。それをお前、愛想氣もなく立派に斷然と跳ねたぢやないか——妾は生涯嫁つきません——とサ。』

『へーエ、』と銀は愈々眼を圓くした。

『如何だい、感心したらう。二十圓の敎師さんの權識ッてものは違つたもんだネ。福彌さんは才子で男振も好くッて、加之に洋行して免狀まで取つて來た方だし、第一日本で何人と指を折られる素封家の相續者ぢやアないか。如斯な願ッたり協ッたりの縁談は鐘と太鼓で搜したッて有りやアしないワ。それだのにお前、旦那樣からして氣乘がしないッてのは餘程變だと思ふネ。縱令んば自分で身ぢんまくが出來る技倆が

有るにしろ、二十圓の教師さんでゐるより閣爛さんの大人になつて榮耀の仕合を爲た方が若干好いか知れやしない。それだのにお前、あれだけの容貌を有つて加之も立派な貰ひ人があつて嫁だッて首を掉るのは何か道理がなくては――男に貞操を立てるとか、秘密の良人があるとか――でなくては然麼したッて合點めないワ。だから妾ア最う心配で〳〵……」

　とお吉が心配するは萬更根も葉も無いわけでなく、純之助と靜江とは十年來骨肉の兄妹同樣にした間で、純之助の謹嚴硬直を知る者は格別疑ひもしなかッたが、左りとて二人に進んで縁談を持込むものもなく、云はゞ二人の關係は疑問であッたのである。然るに純之助が湯島の理髪の店の筋向ふに下宿してゐた頃、お吉が何處かで不計思染めたのが緣で、梶善が種々手を廻して詮索した末に、二人の關係を清淨潔白と認めてから本家筋の吉田翻一に相談し、何も彼も一切梶善が引受けて媒妁人と抱許とを兼ねて、故郷に遠い親戚がある外天涯に寄邊なき浮浪の措大純之助を、兄妹同樣の靜江といふ附屬物のあるを承知の上でお吉の婿に迎へたのだ。

　であるから靜江が出入するに彼是苦情は無い筈であるが、扨て出入されて見ると餘り好い心持もせず、且つ遊藝の外は嫌ひだと言通したお吉と、聖書で四角四面に育てられた靜江と談話の適ふ筈がない故、自然純之助ばかりと睦まじげに物語つてお吉を度外にするのが面白くなく、靜江が來る度に次第々々に不愉快が萬じて奉公人を對手にお侍であるお撥である生意氣である揣れ當しであると眼の敵に靜江を散々に罵つて腹慰をしてゐた。時とすると、純之助の目の前で夫れと云はずに惡口雜言した事さへあるが、元來寡言で沈着な純之助は張合のないほど一向平氣で、靜江もお吉が敵意を挾むをトント氣の附かぬ容子で、いつも恭やしくお吉を夫人夫人と立てるのが却て又癡呆にされる樣な氣がしてゐた。

　殊に面白からぬは純之助が靜江に金子を注込む事で、勿論靜江が賴りない孤獨の身であつて從來も純之助が應分の世話してゐたのは知拔いてゐるが、既に獨立して行かれる給金取となつてからも、純之助自身は有川家の資產で衣食しながら靜江には時計や指環を買つて與つたのが如何にも腹立たしくて、「二十圓ばかしの教師さんが……御大層な、」と冷笑つてゐた。

　殊に又面白からぬは純之助が表面だけ柔しい口を交いて何事もお吉の欲するまゝに任せるに係らず、大抵二階の書齋に閉籠つて頻りに考へたり勉强したりして、其時はいつもお吉の對手になッて吳れず、お吉が手持無沙汰に控へてゐるを見向きもせずに自分の勝手な仕事をしてゐた。

　殊に愈々面白からぬは、斯る場合でも靜江が來ると直樣仕事を止めて、お吉にはてんで關ひつけずに何だか解らぬ話を洋語交りに面白さうに仕てゐた。

　其上に益々面白からぬは、お吉が純之助の衣裳持物を心配して晴の小袖から金時計其他、紳士の體面を飾るべき一式を揃へたのを純之助は嬉しいとも思はずに「乃公には之が相應だ」と書生時代の服裝を更めずに唯の一度もお吉が心盡しを着て吳れなかッた。

　如斯な鹽梅しきで、お吉は純之助を水臭いと恨み、靜江を狡黠くて智慧が廻ると恐れ、責めてもの心ゆかしに財產を鼻に掛けて家附娘の權威を揮回して見たが、それも頼少い樣な氣がして、日に增し浮世の儘ならぬのが染々と思當つて來た。

　純之助は、實は、初めから冷淡なので元來架空の妄想に馳つて常に虛空を攫る大鵬の心持

でゐるから、お吉が泣いたり拗ねたり憤れたりするを全く氣に掛けないではないが、深く心に留めずにゐた。で、古今の征略史、殖民史、經濟策、社會說等を涉獵し、地圖を案じて一家の經綸を講じ、唯ツた一人の妹同樣な靜江が來る度に此經綸を話して聞かせるのを何よりの快事として、お吉を初めから度外に置いたは畢竟お吉が純之助の生命たる此經綸を聞く耳を持たぬからである。

けれども無敎育なお吉には純之助の心持が全く合點めないで、只管讀書硏鑽に耽つて夫婦の情愛を顧みないのを一途に薄情と思込んで、殊に靜江と左も面白さうに自分に解らぬ難かしい談話をするのを口惜しがつて、純之助が無頓着だけに愈々胸中に鬱結して、格別際立つた衝突なしに何時となく家庭に低氣壓が生じて來た。

處へ偶然にも本家から靜江に緣談を申込んで來たは、恰度重圍に陷ちた城兵が味方の援軍を望んだ樣に先づ當の敵たる靜江を遠ざくる事が出來ると小躍りして喜んだにも關らず、意外にも靜江の旗幟は嚴然として更に動かなかッた。

加之も、自分の都合は左に右、靜江一身の利益を計るも冥加に過ぎた出世の沙汰であるべき緣談を猫に小判ほども思はず菅なく後足で蹴付けて了つた。加之も此緣談のみならず——妾は生涯嫁づきません——と立派に言切つて了つた。加之も第一に喜んで盡力るべき筈の純之助がねッから氣乘がしないで唯の義理一遍の取次ぎしただけで更に慫慂めなかッた。

さアお吉は益々氣が揉めて來た。有川の家庭を壓迫する低氣壓の傾度は漸く險急となッて、今にも疾風暴雨を來さんとしたが、其時はお吉が癇癪を起して甲走つた聲で奉公人に當り散らしただけでお終ひとなッた。

其時分から眼の輝つた脊の高い人や、髯の毿毿した筋骨逞ましい人や、鼻の低い色の黒い西洋人らしくない西洋人やが繁々出入し始めて、純之助も忙しさうに彼地此地奔走し、夜も碌に睡らないで調査物をして離室のお吉の部屋に設けた寢はいつも空にして書齋の籐の寢臺椅子の上に毛布に纏まつたまゝ假睡をしてゐた。

で、或る日お吉を呼んで平日より一層嚴肅に自分が生涯の事業たる墨西哥經略を嚙んで含める樣に話し、愈々同志との熟議も整つた故近日其計畫に着手る筈だと打明けて、就ては結婚の當初媒妁人の高橋善兵衛まで申入れて置いた條件として、差當り渡航費用一萬圓を有川家の資產から支出して貰ひたいと相談を始めた。

お吉は寢耳に水で、初めから此計畫と此條件とあるを夢にも知らなかッたから、驚くまい事か、懷上つて眼の色まで變へ、クワッと取逆上せて事の仔細は能く解らず、唯だ一途に自己は棄てられ財產は奪はれる樣な氣がして、今までの積重なッた不平不愉快が一時に爆發し、洪河の決潰する勢を以て喧囂に純之助に噛つて掛つた。

平素は穩和で餘り口數を叩かぬ純之助も今度ばかりは赫として、實際此條件を申込んで置いたを今になッて詐欺者の如く或は破落戶の如く罵らるゝは自分の生命たる大計畫を侮辱する魍魎の業であると立腹し、平日の樣に女の愚癡育昧を憐れむ勘辨は亡くなッて顯赫叱咤して斷然離緣すると言出した。其時の論判は凄まじい騷動で、お吉の泣聲は遙か幾間か距れた女部屋にまで手に取る樣に聞えたさうだ。で、愈々有川家を引拂はうと斷然決心した純之助はお吉が泣聲に振向きもせずに急使を媒妁人の家に馳せ、其間無言で煙草を喫續けて到頭サビタの口を嚙潰して了つた。お吉は泣頽れて俯伏したまゝ歔欷り上げてゐた。

案に相違した藤江はキョト〳〵して首を竦んで突たゝ。本家の前で老人も旧い鞄を携げて呼んで来た。段々話題を出すと云ふ抗議に藤江が旨よ一縁談を纏めようとして此工夫を実作して縁談したと知った。それも突然からでなく、彼は金策に尽瘁の末に上って家族安全商売繁昌を祈る断念に…から純之助の心を翻意して、一同に債権二百兄して四萬圓の旨を躊躇するは職うでもなさ商量だと考へ、且つ平素口にする目前家は結局一事平々で一旦約束の様な家庭の組を定めたも切…解して了ふと言ひし、萬こ一の間違ひが…にしろ、お父さんが承知すれば家縁談に就て、相手が家族を率たと自分できめにして、前後の細を詰て…まりさうな結婚を断念して[illegible]藝を顧って承知したので、今更辛苦を重ね一言目を[illegible]もない[illegible]錢を疊に擲付けて若い入った。本家の伯父は[illegible]手にならず、商い敵の[illegible]ない[illegible]に[illegible]すこと[illegible]を[illegible]にして了った。純之助もとい[illegible]して[illegible]前[illegible]を[illegible]に[illegible]くない[illegible]お吉[illegible]って一時[illegible]洋行を[illegible]として[illegible]の[illegible]を[illegible]えた

之が藤江の一ト月前で、純之助の洋行中止で結婚が附いた筈であるが、お吉の心は未だ解け切れず、性質其等分藤江が學校の試驗とクリスマスの準備とで暇らしく見えなかったのが疑念の種子で、純之助の墨西哥洋行といふは自分を棄てる口實で、でなくば財産の一部を奪ふ策略で藤江が殊さらに見えぬは純之助と誤解づくでないにしろ既に默認してゐたのではないかと邪推して二人の間に清浄潔白らしく見えても、藤江は油斷のならぬ女藝、純之助は精にたら白痴薄情者と憎み、捉て此財産を斥ける力量なきを歎き、此薄情者には未だ〳〵未練が殘つて、小な食變心から睡一まで片意地を張つてゐたが、實は意外心配が募りて來て六疊の離室に乗籠めてい〳〵と思ひ出す、近頃好きの女が遠方に引外へ出ないで、純之助と顔を合はせるのも嫌つて三日に上げず床に就き、偶に家庭姫の獲物を示さうと藤江と純之助とを罵り主公人を叱り飛ばして漸く内心の心細さを自ら慰めてゐた。

『だからね、心細いや。』とお吉は概略の顛末を語つて悄然と頭を膝に埋め、『墨西哥だの何だかって、家も財産も今に取られッちまふンだよ』

『そんな事が、東様、』と藤江は慰め顔に、『近頃は立派なお方が皆さん洋行を遊ばします。』

『墨西哥ってお前、日本から一萬里もある裏側みたいな様な處だよ。皆さんが洋行なさる様な好い處なら見物に行つて事もあるが、何もお前、財産で樂に遊んで行かれるものが、丹…な處へ出掛けなくたって、好事にも程があらアね。旦那様は縁起しい事を御しゃったが、ムーしたって財産を奪って妻を棄てる口實だとしきゃア思はれないロ』

『そんな事はムいますまい、高橋さんや番頭の喜太様が附いてらつしゃいますから』

『高橋さんや番頭の喜太さんが當になるもんかね、御…旦那様に勧められてゐたもの。何へそんなこと、是になって了ふ、旦那様が墨西哥へ行くのを大變嫌さうに賛立てゝ御家の為だとか何とか感心してゐるんだよ。妻には解からない事ア解らないから、家いのかも解らないが、萬い人ってものは親や女房子には薄情なもんだから純之助は心配だアね。純一お前、藤江さんて人が附いてるからね、墨西哥だなんて何處の墨西哥だか知れたもんぢゃない』とお吉は心細さうに考へ込んで了った。暫らくして眼の縁を赤く見て、『お前知らないかい。昨日高橋さんが來

た時、旦那樣が旅行をなさるッてお話があつたのを――濱から仄ッと聞いたが、妾ア氣が揉めてならないから、お前知つてるなら話してお呉れ。』

『ヘーエ、左樣でムいますか、』と銀は力を入れて、「少とも存じません。』

「何でも其樣な相談があつたとサ。馬鹿々々しいやね、巡禮ぢやあるまいし、諸國行脚に出掛けて怎麼するンだらう。矢張家にゐるのが忌だもんだから、何だの彼だのッて外へ出る算段ばかり爲るンだよ。だから妾ア心配で、靜江さんでも作れてくんぢやないかと思つて……』

「ヘーエ、少とも存じませんかッた。どちらの方へ?』

「何方だか知らないが、何でも旦那樣が剛情にお出掛けなさるッてんで、高橋さんが困つてたとサ。その昨日、今日ッて日に靜江さんが珍らしく來たんだから、妾ア其相談ぢやアないかと思つて……爾うなりやアお前、妾だッて蟲があるからネ。確かり度胸を定めて、出掛けるッたッて出すもんかネ。人ウ馬鹿々々しい、好人物だと思つて勝手な眞似をしようたッて爾うは行くもんか。墨西哥を口實に遣つて、眞實に孳尾のついた猫みた樣だよ。』

「元來奧樣がお溫和し過ぎます、』と銀はお吉の不機嫌を慰めかねて忠義振つた。『奧樣がお溫和し過ぎます。旦那樣が勝手にお遊びなさるなら、奧樣も負けないお氣になつて、少と湯治にでも行らしッてお浮れ遊ばせ。』

『眞實だよ、養子なんかに威張らして置く事はないネ、』とお吉は淋しさうに笑つた。「思切つて浮れ出さう、最う暴氣だアネ。』

お吉は滿腔の不平話をあらひざらひ打明けて多少か氣霽れがした樣に長閑に莨の煙を燻かした。で、痒さうに顏を顰めて翡翠玉の銀簪で前髮の下を掻きながら、『二階はしんねこだネ、復た妾の棚下しだらう。』

といふ途端に、庭下駄の音がしたので、お吉は首をすぼめて障子の硝子越に見ると靜江と純之助とが前後して飛石傳ひに來たから、ハッと氣色を變へ、周章てて横臥になッて後向きのままスッポリ前額まで夜具を被つて了つた。

其三

『オイ銀、』と純之助は唐縮緬友染の座蒲團にむずと坐りながら引退らうとした銀を呼留めて、「カ、オを――可いか、煉乳を入れて來い。なにッ?……無ければ新らしい罐を切るンだ。』

「夫人、如何遊ばしましたの?』と靜江は低やかにお吉の枕許に坐つて柔しい聲で丁寧に機嫌を取つた。

お吉は後向きに夜具を被ッたまゝ知らぬ面をしてゐた。

『どうだい、機嫌を復しちやア。御馳走を調いて來た、』と純之助は二階から攜帶した沖繩塗の菓子器の蓋を取つて蓐の傍に置き、「靜江さんと大盡力で調いて來たンだ。赤玉蜀黍を煎つて砂糖を掛けたンで、美味いぞ、輕くッて頰べたが落ちる。先ア起きて見なさい、恰で梅の花に雪が積ッたやうだ。』

「夫人、御覽遊ばせ、眞實に梅の花に雪が積つた樣でムいます。』と靜江も同じ樣に言葉を添へた。

『オイ、起きないかい。折角乃公が調いて來た菓子だ。ポツ〳〵喰ひながら、久し振だ、三人でトランプでもやらう、』と純之助は袂から出した骨牌を切りつゝ、「嫌かい、困るナア、爾う何時までも機嫌を惡くしてゐては……え、機嫌を復して呉れんか。トランプが忌なら氣霽らしに三味線でも彈いて見たら……久し振で時機を聞からぢやないか。え、默つてゐては困る。三味線が嫌なら唯だ談話をしよう。靜江さんも漸

と學校が閉になつて、折角遊びに來たのに、肝腎のお前が機嫌を惡くしてゐては乃公も當惑する。え、お吉、いつまでも愚圖らないで淡泊として呉れ。

お吉は凝と[illegible]たッて身動きさへしなかッた。二人は互に顔見合せて手持無沙汰でゐた。處へ銀は平戸燒の珈琲碗にカヽオを盛つたのを各々の前に置き、小間使の濱は紺繻子の客蒲團を靜江に薦め、臺十主の火を桐胴の火鉢に移した。で一座のしらけた容子を不思議さうに見ながら引退つた。

『熱いうちに飲らんかい、』と純之助は銀の匕でカヽオを攪廻しながら、『靜江さん、こいつは先日墨西哥の友人から態々送つて呉れた本場の、といふほど格別美味かアないがネ、市中の氣の脫けた黴臭い奴とは自然違ふよ。』

『好い香味ね、』と靜江は一匕吸つて、『カヽオは墨西哥の名産?』

『タバスコ州の耕作は重にカヽオださうで、あの界隈では何處でも作ります。煙草と珈琲とカカオは墨西哥人の日常缺くべからざる必要品ださうで我々も至極同感だが、トマトオとプルケイ酒の好物ッてのは辟易する。支那人の韮蒜と鱶の鰭、墨西哥人のプルケイ酒とトマトオ、日本の婦人の蕃茄と甘藷、恐らく世界の三大惡食でせうナ。』

と云つて純之助は得意らしく微笑を含んだ。靜江もオホヽと低音で笑つた。けれどもお吉は寐返りもしなかッたので二人は再び無言となッた。

『お吉、』と純之助は軈て優然と調子を更め、『好い加減に機嫌を復さんかい。お前がいつまでも癇癪起してゐると家内が我他彼此して乃公は實に弱る。今も靜江さんに是々の紛紜があッたンだと此間中の顚末を委しく話したンで、乃公も多少か過言ぎたから、お前の憤るのも道理だが、悉皆誤解だと判然して了ッたら可ささうなもんだナ。何が不足なンだ。墨西哥一條は高橋の粗忽で行違だと解り、乃公もお前が承知しないのを無理に行かうッて云ふぢやなし、お前の得心出來るまで中止する事にしたら最う不足は無い筈だが、それとも猶だ外に不足があるなら氣に喰はぬ廉を云つて貰はう。詑るもんなら詑つて綺麗灑洒に結局を着けないと乃公も面白くないが、お前も毎日嫌な感情をして結局身體が惡くなる基だ。奉公人もハラ〳〵して仕事が手に附かぬ樣だし、高橋も心配して忙がしい中をチョク〳〵やッて來る。それでは餘り一家の締めくゝりが出來ぬ樣で如何にも乃公が世間に顔向の出來ぬ話だ。昨夜も高橋と一緒に番町へ行つて種々相談をしたンだが、么麼にかお前の氣の休まる樣にしたいと思つてナ……』

純之助は紙卷莨に火を點しながら凝とお吉を見た。お吉が空寐入は見透いてゐるが、彼程に胸を割つて醇々と語るを蚊一匹の鳴くほどにも思はぬ心憎き擧動に有繁ジリ〳〵として來たをグッと抑付けて、

『靜江さんとも相談したンだが、』と益々言葉を柔げて、『將來の相談は左も右、今日は先づ三人で心持よく遊んで從來の行掛りを全然忘れて了はう。え、お吉、嫌かい……嫌な事は無からう。さッ、さッ、起きないかい。』

お吉は猶ほ身動きもせず、死んだ樣に堅くなッてゐた。

『困るナア、』と純之助は持てあぐんだ體で、『いつまでも執念深く拗ねてゐちやア……如何だい、早午餐を濟して薄暮の景氣を見物旁々上野邊を散歩いて、歸途に西洋軒か何處かで晩餐を奢れよう。嫌かい、是も。』

純之助はほと〳〵張合が拔けて歎息を吐いた。で、俯向いて紙卷莨を燻かしつゝ思案に暮れた。靜江も周旋し樣がなく俯向いてゐた。

『うむ、斯うしよう、』と純之助は漸く考附いた樣に、『大磯へ行きませう。靜江さんも休暇だから、之から松の取れるまで三人で近縣旅行をやらう。一週間も汐風に吹かれたら、大概な病氣は癒つて了ひます。ナア靜江さん。』

『癒りますとも、必と氣が晴れ〳〵しますワ。』と靜江は飽までも謙遜ツて賴む樣に、『ね、夫人、行らツしやいましナ、妾もお伴が致したうムいます。新らしい空氣をお吸ひ遊ばすと必と癒りますワ。』

『行くンだとも、大磯なら行くンだとも、』と純之助は單りで合點んで了つた。『さツ、起きて支度をしなさい。着替を二三枚革鞄に捻込めば澤山だ。うむ…グラモフォーンを携帯ツて紙腔琴より外知らない田舍者を驚かしてやりませう。ナアお吉、』と故更に元氣を裝つてせか〳〵急立つて、『さツ、起きなさい。今から出掛けると十一時五十分のに間に合ひます。さツ、大急ぎで…粧し込むには及ばんよ。例のちよい〳〵着で――うむ、先日新調た寶石嵌入鈕釦の屬いた吾妻コート、あいつの着初をしなさい。さツ、さツ…』とお吉が愈々固くなツて返事せぬを戻かしがつて、夜被の襟に手を掛けて強く搖ぶッた。

『お止しなさい、』とお吉は手荒に純之助の手を撥退けた。『嫌ですッたら…』

『嫌だッ？』と純之助は途方に暮れたらしく腕組をして吻と息を吐いて考込んで了つた。

『お嫌？』と靜江は夜被の襟に隱れたお吉の顏を覗込む樣にして、『お嫌なの？』

『嫌だッたら、』とお吉は言葉鋭く投出す樣に、『執拗いッ。』

『嫌かい』と純之助はキッとお吉を睨まへ、流石に堪忍袋の切れかゝッたを再び思返して氣を取直し、『嫌なら仕方が無い。だがナウ、乃公もお前の立腹が萬更無理でないと思へばこそ、下から出て頭を下げないばかりに賴むのを、爾う剛情を言張ると事が圓熟く行かんで誠に困る。…さツ、機嫌を復して快よく笑つて吳れ。靜江さんも大變心配して、何卒お前の氣の休まる樣にと、先刻から種々相談して、乃公が惡い段は詫まッて、お前にも勘辨して貰つて、三人で今日は快く遊んで和睦をしようと思ッたンだ。…なッ、解つたかい。解つたなら起きなさい。』

お吉は忽ちガバと撥起きた。焦り〳〵した氣味合で煩ささうに眉を顰めて後れ毛を掻上げ、蒼い顏をして眼尻を釣上げ、キッと二人を睨付けた。

『何ですと、妾の氣の休まる樣に靜江さんと相談なすッたッて…どうも御親切樣。お氣の毒ですが、放蕩者ですからネ、貴郎方のお交際は出來ません、』と噛んで吐出した樣に愛想氣もなく云退けた。『人ウ、欺騙さうッたッて爾う行くもんか。』

『お吉、』と純之助は凝とお吉を見て愈々言葉を柔らげ、『お前を欺騙して什麼するのだ。能く考へて見ろ、連添つてから彼是一年にもなりやア少とは乃公の氣性も合點めさうな…』

『解りませんよ、』とお吉は迫立ちて、『馬鹿ですからネ、貴郎の樣な賢い方の氣性は解りませんよ。貴郎の…』

『先ア、靜に、』と純之助は懌く抑へて、『い、とッい、くりと乃公の云ふ事を、可いか…乃公の墨西哥は大分古い話で、誰も知つてる…』

『妾は存じません。』

『先ア聞きなさい。お前には格別な話をしなかッたが、前以て高橋に話して置いたので既う知つてる事と思つたのが乃公の了簡違ひだッた。實は話掛けた事もあッたが細かい面倒な話は爲たッて解るまいと思つてナ…』

『どうせ解りますまい、馬鹿ですから。』

「先ア憤らんで……解るも解らんも無い、畢竟乃公が話さなかッたのが失策だと氣が付いたから墨西哥一條は止めて了つたのだ。それだのに一ト月にもなる今日が日まで猶だ機嫌が復らんのは、乃公の平素の仕向が氣に喰はんのだらうが、夫れでは餘り頑固過ぎる。……お前を欺騙して么麼する？　大磯へ行かうッてのが何故欺騙すンだ？』

『何とでも仰しやい、口は調法ですからネ。大磯いなと何處いなと、靜江さんと二人で行らッしやい。妾は御免を蒙ります……ハイ、お邪魔でムいませうからネ。』

靜江は呆れた顔でお吉を一寸いと見て再た俯向いて了つた。純之助は暫らく腕組をして凝と考へてゐたが、軈て靜に首を昂げ、お吉の顏をキッと見て重々しい聲に力を籠めて、

『お吉！』

お吉は物をも言はず冷笑ふ様にジロリと純之助を見た。

『嫌か……么麼しても嫌か。よろしい、乃公を困らせる氣だナ。』

『勝手になさいッ、大磯いでも、京阪いでも、墨西哥いでも、何處いなと勝手に行らッしやい、』と、お吉は唾壺を取つてクヮッと啖を吐き、氣の泣立つを故と沈着いて見せて、「女狂ひは男の働きッてますからネ、靜江さんなり、他の女なり、好きな方を大磯三界まで伴れてッて上げるサ。嘸お樂みでムいませう。靜江さんて方、」と靜江を後目に掛けて、「貴孃は苟めにも教師さんで人の模範にならうッて方が若い身そらで男と勝手に遊んで歩くつて法はありますまい。夫れとも耶蘇ッてものは他の良人を竊んでも可いお宗旨ですかネ。』

『お吉、』と純之助は聲荒らげて、『失禮な事を云ふな。』

『失禮だッて、』とお吉は自棄腹に度胸を据ゑた氣味で、『靜江さんに物を言ふと罰が中るの？』

純之助は無言でハッタと睨付けた。

『何が失禮だらう、』とお吉は一向平氣に空嘯いて、『無教育で沒分曉で耶蘇の法ッてのを知らないから聞いたのが何故失禮だらう。耶蘇の流行るのは若い男と女が公然に調戯けたり、痴狂ッたり、勝手な眞似が出來るからだッて能く云ひますからネ、矢張他の良人を竊んでも可いのかと思ッて……』

純之助は靜江に目瞟して突と座を起ッた。

靜江も續いて起たうとした。

『お待ちなさい、』とお吉は重々しく純之助を呼留めて、『何處い行らッしやる？』

『乃公の勝手な處へ行く。』

『何處だか仰しやい。良人の出先を聞くのは女房の役です。』

『大磯、』と純之助は豪然と言放つて冷笑した。

『勝手になさいッ、』とお吉はツンと他方を向いて、『人ゥ、蹂躙けるにも程度が有らア。養子のくせに、人が默つてりやア好い氣になッて、妻の財産を喰潰してゐながら女狂ひも能く出來た。靜江さんて人も、鐵面皮しく他の良人を能く啗へて歩けるネ。學問のある人達ッてものは違つたもんだ。』

『何をいふ？』と純之助は聲高に叱咤して睨付けた。

『何にも云ひませんよ。貴郎方はお豪らムいますッての。お怜悧で、學問が出來て、技倆があッて、英雄で、豪傑で、賢人で、聖人でいらッしやるの。ハイ、誠にお豪うムいます。人目を關はず粘着いたり、是れ見よがしに調戯けたり、夫ンな淫らな眞似はなさいませんからネ。誠にお豪いもんで……』

『默んなさい、』と純之助は兩腕に力を入れて身構をした。

『何をなさる、打つッてノ、』とお吉はむら／＼

と逆上せて聲慄はし、『打つならお打ちなさい。打つとも突くとも勝手になさい。人の家い養子に來て、黒西哥だの何だのッて財産を欺騙さうたッて此方にも眼もありア耳もありますからネ。欺騙さうたッてチャアンと知つてます。男らしくもない。騙して奪らうたッて……さア、腕力づくで打つとも突くともして、横領出來るもんなら横領なさい。生柔しい口や軟かい手で嬲り者になるより、御先祖樣のお位牌の前で、打たれるとも蹴られるとも――殺されたッて關やしない。さア、貴郎の勝手になさい。』と顏色を變へて蓐を滑り下り、前額に青筋を出して血走つた眼を逆だて、身を慄はして純之助に詰寄つた。

純之助の顏色は蒼くなッて口髭の尖は戰き、拳を固めた手は振へてキッと睨んだ眼は物凄い光を放つた。

『何ですネ、貴郎、』と靜江は尋常ならぬ容子を見て二人の間を割つて仲裁へようとした。『夫人も先アお氣を靜めて……』

『何だい、生意氣な、』とお吉は慄聲を搾つて、『妾の良人に妾が口を利くのに餘計なお世話だ。高慢ちきな、仇浮らしい、胸糞の惡くなる人だ、』と疊掛けて罵倒しつゝ力一杯に靜江を突倒し、『さア、お打ちなさい、』と吼立ッて純之助に武者振り付からうとした。

處へ最前から襖の影で立聞きしてゐた銀が堪りかねて飛込み、後ろからお吉を兩手でムズと押へた。

『お放しッたら、放さないか、』とお吉は涙聲を甲走らし、身を悶いて振放さうとして、力が餘つて悸々と尻持突いた。其途端に純之助が置忘れた骨牌を摑むや否、覘も定めず發矢と投付けると、恰も逃損ッた靜江の肩に衝つて赤いと黒いとが八方に碎けた、ジャック奴は天井に飛上り、クヰーン殿下は障子の桁に蹈舞し給ひて、スペードのキング先生は宙返りをして翩々とお吉が髷の上に落ちた。

カ、オの茶碗が轉がる、玉蜀黍の煎つたのが覆れる、煙草の箱が蹴飛ばされる、長羅苧の煙管が翻飛ばされる、火鉢に掛けた湯沸が轉がる、灰神樂が立つ、蒲團が濡れる、濱が烏鷺々々する、座敷はドタバタ狼藉して緣前にはブルドッグが身構へして唸り出す、此混雜の中に靜江と純之助とは何時か見えなくなッて、罵詈の聲を絶たで暴廻るお吉は無理やりに漸と蓐の上に据ゑられた。

『奥樣、丈夫遊ばして……』と銀は甲斐々々しくお吉の背を撫でて力を入れた。

お吉は切齒嚙んで蒲團にしがみ付き、口惜しさうにシク〳〵泣出して歔欷上げた。

其四

純之助は平常着の上に二重外套を引掛けて靜江と共にプイと出て了つた。恰度門前を掃除してゐた下男の久助爺さんは周章ててモンパの襟卷をかなぐり棄て、握箒で水洟を拂ひながら小腰を屈めた時、純之助の顏色の尋常ならぬと靜江が平日と違ひ莞爾ともせぬを不思議さうに見送つた。

入代つて勝手口から案內も請はず、ヅカ〳〵と遠慮なしに茶の間に來て、調子高の磊落な聲で、『怎麼したい、銀どん、濱どんも……恰で空屋でがすナ、』といふは、五十を五ッ六ッ越した年配の、肥胖した赤ら顏の、眼の細い口の大きな、縮れ毛で髭の無い角袖外套で、左の手に鼠の中山高と鰐革の手提革鞄を持つてゐた。

『オヤ、高橋さん、』と緣側の障子をガラリと開けて顏を出したは小間使の濱で、『高橋さんだよ。誰だと思ッたら……大きな聲を出して、吃驚しちまッたワ。』

『こいつ罰中り奴、』と角袖外套は故と睨付け

る眞似をして、『大事な情人をつかまいて呆れたもんだ。』
『嫌な人だよ。情人なんて知らないワ、』と濱は憮然とした。
『ふむ、爾うだッけ、ウフヽヽヽ、』と高橋さんは腹の底から可笑しさうに笑出した。で、口眞似をして『情人なんて知らないワ。呆れたもんだ……白ばッくれても聞いてるよ。濱どんの情人はお庖廚の久助どん……』
『知りませんよ、』と濱どんはピシャリ障子を閉てヽ了つた。
『濱どん、濱まッたよ、』と高橋さんは障子を開けて、『濱どん、濱どん。』
『嫌な人だよ、』と濱は振返つて故とプリ／＼した顏をした。『最う諾きやアしないワ。』
『濱まッた、本統に濱まッた。濱まッた證據に、』と高橋は莞爾した顏で、『高橋善兵衛、清水の嬶あから飛下りる了簡で、尻の屬いたモールの袴の帯を買つて獻じようかナ、』
『然う、有りがたう、今ッからお禮を云つて置かなくッてよ、』と濱は嫣然しかけて忽ち再た澄し返ッた。『でも貴方、其樣にお金子を費ふと鴉に啄つかれるワ。』
『何故――何故？』
『善兵衛が金藷きや鴉がほじくるッて、オホホ、』と濱は一生の洒落をぢぐッて周章てヽ逃出した。
『此奴め、擔いだナ、』と高橋は太い聲を振立ててユサ／＼と廊下を追つて來る。濱はトッパクサと離室に逃込んで、初めて氣が附いた樣に急に眞摯臭つて、袖で口を覆つて銀の耳の端に低言いた。
『高橋さんよ。』
『喧ましいネ、靜かにおしッたら、』と銀は低音で叱り付けた。
お吉は半潰れの丸髷を蒲團に擦りつけて歔欷上け、銀は頻りに介抱つて賴もしがる事を陳べてゐた。其蔭に濱はツイ今がたの元氣は何處へやら消えて眞面目に小さくなッて了ッた。
太い聲を先に重さうな身體を搖ぶッて來た善兵衛君は此時常ならぬ容子を見て俄にショウゲ返ッて怪訝な顏をした。
『么麼なすッたい？』と善兵衛君は突立つたなりに言葉を掛け、銀が攔く振向いて丁寧に低頭したを機に濱が薦めた座蒲團にムズと坐つた。
『么麼なすッたい？』と再び言葉を掛けて更めて銀に向つて、『么麼いふ仔細でがす？』
『儂も彼方に居りましたので……』と銀は沈着拂つて、判然は存じませんがを前置に云々の顚末とお吉か惡さうな廉は好い鹽梅に潤飾へて、多少か靜江と純之助とを貶す氣味合で夫婦が衝突した一條を饒舌り立てた。
善兵衛は、ふいゝ、ふウむ、ふいゝ、ふウむと一々首肯いて感服して聞いてゐた。で、銀が饒舌り止むと同時に象牙の煙管筒をポンと拔いた。
『旦那も溫和しくねエな……こりやア奧方の方が道理でがす。だがネ、奧方、』と雲外の銀張羅垂の煙管を捻りながらお吉の顏を覗込む樣に身を屈め、『貴婦も餘りムキに腹を立てるから矢張拙いや。男ッてものは――あッしは旦那の肩を持つんぢやがアせんよ。宜うごすか――男ッてものは、此家の旦那には限らねエ、誰だッて餘り胸糞な事を云はれるとぐウッと癪に觸つて仕たくねエ喧嘩もツイ行りたくなるもんでがすよ。……銀どん、お前も宜しくねエ、』と忽ち鋒尖を向變へて、『元來なら此樣な衝突ンならねエ中に、及ばずながら平日から氣を付けて丸く治めるのが一歲でも年を老ッたものの役でがさア。そいつをお前其樣な事は先ア有るめエが、萬一奧方を焚付けでも……』
『妙に仰しやいますネ、』と銀は憤然として吻尖らし、『何時儂が奧樣を焚付けました。飛んだ

事を仰しやる。』

『先アさ、爾う怒らずに、』と高橋は兩手を伸ばして銀を押付ける眞似をして、『咄ぢやがアせんか。爾う直ぐ怒ッちやア咄が出來ねエ。宜うごすか、何でも先ア家内は丸く和合せエすりやア息災延命福壽無量の基といふもんで、一軒の主人を初め奉公人衆も其心持でゐて貰エてエのだ。銀どんも好い苦勞人だ。あッしは何もお前が奥方を焚付けて此樣な衝突ンなッたタア云はねエが、早エ咄が御夫婦の間に衝突が持上ッた時は、無事に丸く〱と骨を折つて仲裁へて貰エてエ處へ、縱令んば惡氣でねエにしろ、旦那は勿論静江さんを一トロでも貶す語氣があると、其處が夫れ么麼も可笑しくねエ。あッしは其處を頼むんでがす。』

『ツイ不調法だもんですからネ、』と銀は投出す樣にトゲ〱しく、『之でも奥樣をお和め申す所存で一生懸命なんですけれども……』

『解ッた、解ッた、』と遠くから平手で銀を叩く眞似をして、『解ッた、銀どんの心持は能ウく解ッた。最う聞かねエでも解ッた、何でもナア、丸く〱——善兵衛生得いて大嫌エは松魚の鹽辛と女の憤れた顏……』

『どうせ憤れた顏でムいます、』と銀は眞赤になッた。

『ホイ失策つた、』と高橋は平手で輕く前額を叩いて、『先ア爾う憤り給ふべからず。銀どんも好い苦勞人だ。何でも丸く〱、なッ、銀どん、怒らねエで……』

お吉は漸と涙に汚れた顏を上げた。青白い細そい指で片頰に粘着く後れ毛を掻上げつゝ、摩赤めた眼を釣上げてキッと銀を睨んで、『失禮な……お茶でも持つておいでナ。』

『爾う叱り給ふ勿、あッしが惡いンだ、』と高橋は如才なく周旋した。

銀は不承々々の顏をして濱と共に四邊を整理けて引退るを見て高橋は膝を進め、

『旦那は在宅でせうか？』

『在やアしませんとも、必と出掛けましたのサ。』とお吉は嗔恚の焔の猶だ消えぬを強に抑制けて故と沈着拂つた。『大磯へ行くッたから今頃最う汽車に乘つたでせうよ。』

『旦那も短氣過ぎるワイ、』と云つて高橋はスパスパ莨菪を燻かし出した。『……貴婦も少と行り過ぎたナ。』

『何故です。妾だッて馬鹿々々しい。人ウ、面白くもない。見ッともない眞似は仕たかア有りませんサ。けれども餘り蹂躙けられると何ぼ好人物のグウダラだつてツイむか〱として來ますからネ。』

『それ、そいつが能く有る行違ひで……』といふ時、銀がカヽオを二人分珈琲碗に煎れて來たので、『銀どん、旦那は？』

『唯今お出掛けですッて……』

『ね、高橋さん、妾の云ッた通りでせう、』とお吉は夫れ見ろといふ顏つきで、『なんぼだッて大磯くンだりまで公然に他女を引張り廻されちやア連添つてる身になると餘り好い心持は爲ませんからネ。いくら妾が意氣地なしで氣に入らないからッて、養子のくせに少とは遠慮が有りさうなもんだ。好きな眞似をするに事を缺いて……』

『先ア〱靜に……爾うポン〱仰しやるから話が丸く纏まらねエ、』と銀が襖を閉切る音と共に珈琲碗を攫みながら前へ乘出し、『あッしはネ、旦那の肩を持つンぢやねエが、此家の旦那は石橋を敲いて渡る處ぢやがアせん、ダイマンに白金を被せた鞴ぢや溶けねエッて堅固人で、此家い來るまで彼ゝ齢ンなッて女の味を知らねエなンて嘘で譃の樣な咄でがす。静江さんて娘も若いには珍らしい感心なもんで、耶蘇の固信者だッて事でがすが、お題目に凝固ッてお會式の

晩に小色を稼がうッていふ町内のお轉婆とは譯が違つて、表面は温和しい、娘風でも中心は滅法に野暮堅く緊ッてる中々な丈夫だッて掛宅の老妻が舌を捲いてる位でがさア。でがすから旦那と靜江さんとなら先づ辨慶と小野小町ッて取組で間違えッこは無エ、』と故と呵然と笑つて、『第一あッしが鑑識で靜江さんて附屬物のあるを初手から百も承知でお世話したンだ。高橋善兵衛、老僕しても龜の甲より年の功、五十何度大晦日に責められたお庇に袋物と人間の鑑識は滅多に敗を取らねエ積りでがす。あッしが保證ふからは心配する事ア少とも無エ。他の女と交際ふのは此家の旦那には限らねエ、近來ぢやア西洋風ッて貴顯方や書生さん達の開けたお仲間には流行るッて事で……あッしの様な往時者が聞いてせエ不思議には思はねエ時勢でがす。そいつを洋犬の蘇當なんかは今時の奥方の粹にも似合はねエッてもんで……』

『何ですと……澤山仰しやいまし、どうせ洋犬の蘇當です、』とお吉は怫然として眼尻を釣上げ、寄つて集つて衆人で寝果にしてゐる。……

『ホイ復た失策つた、』と兩手で頭をかゝへて、『高橋善兵衛、生得いて世辭が無エでがすからナ、ツイ口を滑らして丸く納まるものを破壊す。だが惡氣ぢやがアせんからナ、先ア腹を立てれエで……あッしは此方の旦那なら女と一緒に寐てエても保證ふネ、大丈夫でがす。元來淡然した氣性で女なんかに頓着しねエから奥方の身んなると物足りねエだらうが――、其處が價値でがす。今の若エ者の様に麝香と白粉の香を浴びせられると土砂を掛けられた様に直ぐグタグタになる氣遣は無エ。そこは安心でがすよ。袋物と人間の鑑識は滅多に敗を取らねエあッしが保證つたら大丈夫、安心でがす。』

『復た保證つてる、十八番だよ、』とお吉は冷笑む様に云つて澁い顔をしつゝ不味さうにカヽオを三匕啜つた。『貴君の保證ふのが信用になるもんか、先日の指環だッて直ぐ假玉が脱けッちまッたワ。』

『こいつア恐入ッた。危い處で痛く攻撃けますナ、』とお吉の機嫌が復りかけたに乘じて、『宜ウがす。高橋善兵衛、屁理窟と負惜みは大嫌エだ。先日の指環ぢやア大へこみに凹んだが、此方の旦那なら印紙の百枚千枚貼つても保證ひますナ。奥方、貴婦は尚だ知らねエから癇癪の蟲が不平治まらねエンだが、旦那は貴婦より最つと心配して氣を揉んでるンだ。あッしは昨日旦那と一緒に番町のお邸へ出ましたらう。其時の相談を貴婦は尚だ知らねエんだ。――實は斯うでがす……』

と語るはお吉の一身に取りては容易ならぬ重大の事件で、其前日純之助に先づ高橋善兵衛を招いて種々協議を凝して後、二人して伯父なる古田朔一の家に同道した時は實に去就の問題にまで立入つて、純之助の決心は既に半ば離別に傾いてゐたのである。

元來純之助は跌宕猖介敢て人に下らず、堅く自ら信ずる主義を奉じて世間を傲睨する癖物であるのが、么麽した拍子か圓轉滑脱の才子肌ならでは及第すまじき養子に見立違ひをされて、平生なら冠冕に唾く富貴に冷かな男が苦もなく説落されて驕慢放縱なる世間知らずと偕老の契を結んだが、今更考へると千金の身を以て鼷鼠の弥繩に陥つた様なもので、墨西哥一條が破裂してからは殊に其境界の自由ならぬを嘆息し、一時姑息の考案で強ひて壯志を抑制けたが畢竟腐索を以て犇馬を留めんとすると同じく胸中鬱勃の念は時々刻々暫らくも絶間なかつた。

である上に、お吉は何時までも釋然たらず、思ふまゝの放縱を振舞つて益々嫉妬偏執を増長させるは人の妻たるものに爲すまじき擧動

で、左もなくとも多年の懷抱を將に行はんとするに逆げられたを平かならず思ふ身の愈々怏々として樂まなかッた。

　精々考へるとお吉は無學で沒分曉で其日々々の贅澤に驕つて化粧三昧物見遊山をする外は理想もなく信仰もなく意地もなく、緊肅もなく、其上にも推強く頑なで、唯だ根が好人物だけに不愍であるが、紛々たる世間の功名利達以外に超然として蓋世の經綸を行はんとする大志ある者の配でないは火を睹るよりも瞭かで、自ら惡因を作りし過失ありとは云へ、拂き道德に縛られて斯る匹婦と伴ふは枯骨を抱いて生きながら墓穴に葬られると同じである。

　純之助の墨西哥經綸は殆んど其生命で、之なくんば呉姫越女に圍繞かれて錦衣玉食するも蕭條無人の域に孑然たる如く、生なかに命壽多き市井に住するよりは寧ろ林間に殘骸を養うて猿鶴の伴侶たるが勝しで、今更に由なき惡緣を結んだを千悔萬悔しても效がないから、所詮滿身の血液を凉らして活ける木乃伊となる能はざる限りは暫らく眼を閉つて斷然たる處分をしようと決心した。

　唯だ殘念なは、慈じ衝突が有ッただけに有川家の資產を自由に動かし得なかッた不平だと誤解する世間の陰口であるが、天が自分の雙肩に懸けた責任の大なるを思ふと、斯る猥瑣の是沙汰に汲々しく依違するは丈夫の爲でない樣な氣がした。且つ將來を考へると、自己を知らざる妻の粱食に賴るよりも一簞一瓢自ら劬勞して粒々辛苦の熱汗を流して之を贏すは遙かに潔よい男らしき所爲で、縱令當初は有川の資產を目的にしたでないにしろ、苟くも蓋世の大志あるものが區々たる目腐れ金に眩んだ樣な氣がして恥かしく思つた。

　で、終に斷然有川家を去らうと決心したが、扨て氣の毒なは高橋善兵衞である。

　善兵衞は本と有川家へ出入の職人で、先代に資本を卸して貰つて、今では椎善と相應に賣出してゐるを全く其先塋と有がたがッて責めては相續者のお吉に立派な聟入れを肝煎つて恩報にを仕ようと心掛けてゐた。處へ、偶然橋渡しを賴まれて純之助の物堅い謹直な確毅した氣象と學問が出來て見識が高いのに感服して了つて必死に盡力つて說破し、本家の朔一老人に紹介すと果して豫想通り、『お吉には過ぎた立派な人物だ』と褒められて首尾よく緣談が纏つたから、初めて先代へ恩返しが出來たと歡んでゐたので——であるから墨西哥一條の破裂した時は氣の毒なほど純之助にもお吉にも平謝まりに詫まッて、匆卒粗笨な職人出身の正直一遍の男に二一天作の五に外れた純之助の深謀が解らう筈はないが、左に右此衝突の罪過を一身に引受け百方陳謝して圓滑く纏めようと苦心したを、今更一ト月も經つた今日になッて一旦落着したものを再び沸騰させるは好んで破壞を求めるに似て、篤實律儀な善兵衞に愈々心配を掛けるのである。

　之を考へると俄然に離別も云出しかねたが、去りとて我が精神を殺してお吉に殉じようとは決心しかねて、頻りにとつおいつ考へた末、終に養痾労々一つには家庭の風波を鎭める爲め暫らくお吉から遠ざかるが良策だといふを名として、七分は離別噺を爲る意氣込で全國漫遊の計畫を持出した。罷り間違つて愈々離別と運ばないまでも、切めては鐵鞋山河を破つて鬱勃たる壯志を養はんが爲に、全國の農工業を視察して胸中の磊塊を吐かんとしたのである。

　然るに善兵衞先生は墨西哥渡航が中止になつて漸と安心した處へ、思ひきや再び此難題を持出されて唖然と途方に暮れ、何とも返事が仕かねて兎も角本家の主人の裁決を請ひに二人して同道した。善兵衞の所存は朔一老人の權威で

純之助の所謂ゆる佗き野心・突飛の擧動とを根本から顛覆して貰はうとしたので。

有體は裸一貫、生國を出奔して山に千年海に千年の苦勞を積んだ古狸だけに、早くも純之助の心根を觀破つて頑き無益の小言は云はで傑の豁達な氣象から小氣味よく、「餞別さッしやい、」と云退けた。「困つた噺ぢやナウ……面倒ぢや、噺が幾ツ取るより墨西哥へ行かッしやるが可エ。一萬や二萬の端多錢は足下が事業の餞別に私が献じるワ。」

と斯うずばぬけて打出されると、苦肉の計略と見透くだけに、其處は人情で直ぐ其言葉に乗じるわけにも行かないで、加之も零落の下に嘗れた苦痍を味ふと一萬や二萬の端多錢は出して呉れようといふ意味合が任俠らしく請取れると同時に利刃を以て弱點を劈かれた様な氣がして、ツイ謝禮を云ひそゝくれた上に、全國漫遊の計畫をすら撤回して、お吉が不貞くされは畢竟自分が所天の德を缺く故だと懺悔し、此上は飽くまでも自身足らざるを責めてお吉と伉儷の情を厚うし努めて一家の和熟を計り一重ねて心配を掛けまいと堅く約束した。勿論潮一老人は碌に其約束に耳を留めないで、「足下が勝手ぢや、」と何事も淡泊と聞流して、頻りに純之助が小鍋殼に跼蹐するを屑しとせざる意氣壯んなるを激稱し、「私も十年若かッたら……」と萎びた腕を撫つて力味返つた。善兵衛先生は何かなしに無事に濟んだのが嬉しく胸膛で下して吻と息を吐いた。

之が即ち昨夜の始末で。

恐らく今朝がた偶然靜江が來たを幸ひに此顛末を物語つて其力を借らうとしたのであらう。で、靜江と共に書齋に來て頻りに温言を以てお吉の不平を慰め互に融合つて汪洋たる和樂に日出度く從來の確執を一掃しようとしたのであらう。然るにお吉は心快く思ひ定らず、嫉妬の餘り前後を忘れ、純之助の心盡しを仇にして簸事を破壞して了つた。純之助は勘辨強く義理堅い上に僅に前の晩古田の伯父に誓言立てた事ゆゑ、男の面目に對しても此一事で再び離別咄を持出さうとも思はれないが、確に持出さぬと信じてゐても若しや自己高橋善兵衛が折角苦心した九仞の功を一簣に缺く様な結果を來しはせぬかと梶善老人は頗る心配して當惑の色を現はした。

「ですからナ、」と小鼻に皺を寄せて飲餘しのカヽオをぐいッと一ト息に苦さうに嚥つて下へ置き、「こいつア少と奥方が行り過ぎたといふンでがす。純之助さんも本家の旦那に熊野の起請を書かねエばッかりに立派な誓言を立つて來なすッたのだ。之からは奥方を大切に家内を和合させようッてお心持の處へ眞黒に妬かれちや此奴ア藥に爲りまさアね。擂木の樣な苦茶老妻なんかは最う色氣が無エから貴婦と一つにはならねエが、先アお聞きなせエ、あッしが好い歳をして浮氣をやる——交際でがすからナ、隨分行りますワ——一ト晩家を明けても茫然歸る。オヤ好てたかエ、嬉しさうな顔してるよ、てな調子でがさア。勿論婆さん管てねエと初めッから知れてるから心配する世話が無エやうなもんでがすが、先ア世間一般が斯うしたもんで貴婦の様にヤキモキして騒ぐなア滅多に聞かねエ噺でがす。夫婦の情愛が普通大抵でなく深エ處だらうが、それぢやア旦那の意氣を殺らせる様なもんで結局貴婦の損になる。此方の旦那の様な堅固人なら大丈夫でがすが、能く世間には餘り女房が世話を焼き過ぎると堅い亭主が依怙地になッて浮氣をやり出す例が若干も有るやつで、女は此處が大事でがす。昔時ッから川柳點に惡語を云はれるのは斯う云つた連中で、あッしは此家の先代には大い世話になッたし、奥方は子供の時分からの馴染なら純之助さんも格別

贔屓にする間だし、何卒丸く內輪で治めて世間に惡い噂を立てたくねエと思つて……なッ、奧方、あッしは世辭は嫌エでがすからナ、好うごすか、思切ッた憎まれ口を叩くのも悉皆此家の利益を思つて先代の名を出すめエと心配するンだ。」

好意の親切は言葉の上に見はれ、純之助の心持も大概は知れて靜江の氣象も朧ろけに合點めたので、お吉は流石に自分が淺慮なる嫉妬に逸つたを恥ぢて、袂と襦袢の袖で涙を拭いた。

「氣が小さいもんだからツイわく／＼して。眞實に濟みませんかッた。」

「濟むも濟まねエも無エ。貴婦が氣が附いて吳れさいすりやア、あッしも盡力甲斐があッたンだ。旦那は物の解つた結構な方でがすからナ、貴婦が優しくして旦那樣を崇めてせエゐりやア、何一つ不自由の無エ家を棄てて遠走る事アねエとあッしは思ッてる。靜江さんも大丈夫でがす。大丈夫でねエ位なら初手から知れてるものをあッしがお世話アする氣遣はねエぢやアがアせんか。なにしろ學問は出來る、耶蘇には凝ツてる、他の亭主を竊む樣な眞似エする事ア決して無エ。あッしは保證ふ、大丈夫でがす。」

お吉は長煙管を膝に突いて性悍さうに俯向いてゐた。

「妾だッて其樣に根強く思つてやしません。是までだッて今日の樣な事ア一度も無かッたンですが、何故だか此頃は急に悲アしくなッたり急に腹が立ッたりして自分でも變だと思ふ位で、久し振で靜江さんの顏を見たらツイむかむかとして來て眞實に今考へると貴方にも面目ない……」

「あッしは關ふ事ア無エ……」

「否エ、眞實に濟みません、御心配を掛けて。怎麼して妾は此樣に氣が小さくて煩悶するかと思つて――自分ぢや其樣に古く積りもないンですが、純之助や靜江さんの顏を見ると何だか急に心細くなるもんだから……」とお吉は頤を襟に埋めて鬱込んだが、軈て顏を上げて唐突に、「大磯へ行つたでせうか？」

「そこでがす、」と善兵衛も腕こまぬいて考へた。「行かねエとも限らねエ。」

「それが妾ア心配でネ。若し行つたとすると怒つてるから急に歸つて來まいと思つて……」

「歸らなくても心配な事ア無エ。大磯へ行つたツて靜江さんと私通もしめエから。」

「衛うぢやないの……歸らなくても可いけれど、口論をした擧句だから何だか氣に懸つてネ。……寧そ迎ひに行かうかしら。」

「アッハヽヽヽ、」と善兵衛は呵々と笑出した。「旦那が戀しくなりやア先ア家內安全で目出てエや。實アあッしも昨夜の今日が心配で一寸くら通行掛けに覗いて見たンだが、貴婦も然う解けて下さりやア、雨降つて地固まるで、あッしも重荷を卸した樣な……」と云掛けて懷中の袂時計を出して眺め、「こいつア失策つた、十二時だツイ、」と俄に忙がしさうに煙草入を小革鞄に突込んで歸り支度をした。

「先ア午餐を……」

「[illegible]でがす。何うしちやアゐられねエ、」と輕く會釋して、お吉が頻りに留めるのを手首を振つて、「今度の時までお預けぢや……ぢやア宜うごすか奧方、自由にならねエのが浮世でがすからナ、少との事は勘辨して氣を寛く持つて心配しねエ樣にナ、」と革鞄を提げて廊下へ來て忽ち憶出した樣に、「時に奧方、滅法すばらしい絹更紗を掘出しやした。一つ粹なものを造つて獻じようかナ。」

「衛う、是非拜見したいもんです。」

「絹更紗ツて奴ア、此方の旦那の樣に一寸と素人に直踏の出來ねエ代物でがす、」と云つて調子

高に成つた。お吉も一緒になツて珍らしく華美やかに笑つた。

銀之助はお吉の跡に從いて玄關まで送出した。久助爺さんは何た寒さうに箒を操つて玄關前に突立つてゐた。

「久助どん、寒いのに能く精が出るナ。あツしなんかは、サラ襟う意氣地が無エや。」

久助は莞爾をなして滅茶苦茶に折腰した。

恰度正午の號砲が風の加減で平日より強く松が枝を搖つて耳の根に響いた。

其五

朝は薄日で寒風が身に浸みたのが正午頃から段々和げて來て微との風さへ吹かぬ上日和となツた。道が遠に人の出盛る上野公園も押迫つてからは寂寞として、のんきにステッキを揮回し紙卷烟草の烟を空中に靡かして漫歩く氣樂さうな太平の民は一人も見掛けないで、言譯ばかりに陳べた茶屋の腰掛も、情然と寒さうな美術協會の高札も、手持無沙汰にがらんとしたパノラマも、大佛堂の古佛も、朽掛つた黑門や木葉を拂ひ落した淋しい森と共に冬日の哀れさを增し、忙がしさうにチョコマカ走る下駄に蹴飛ばされる小石が凍てた土に響いて水を詰びせる樣な寒氣が折々頭筋に襲ツと浸徹つた。で、斑ほらと見ゆる吾妻コートや臙脂へル毛布の帶付外套や、キャラコの黑紋付の羽織や毛海獺のホック掛や、菖蒲革の信玄袋や、何れも歳末の氣を包んで、木にも山にも浮世の空氣が充滿ちてゐた。

丁度鐘樓で一時を撞出して間もなく、精養軒を出て大佛の背後を裏崕の小山傳ひに佐久間大膳の大石燈籠の傍へ拔けた若い男女の二人連がある。男は鍔廣の黑の米利堅帽に細メルトンの川獺襟の二重外套を着て葉卷を燻らし、女は夜會結に黃玉の簪を挿し黑斜綾の吾妻コートに纏まつて黃金の蹄鐵形のブルーチで衣紋を留め水色縮緬の刺繍の肩掛と淡鳩羽の頭巾とを一緒に左の腕に抱へてゐた。東照宮の前を通拔けて五重の塔を横に森然たる杉林の中をわざ〳〵人目を避けて二三尺離れて行つた。

他目には新婚の若夫婦、さもなくば情遊の味をやる嬉しい仲と想像れるが——でもないらしくて、爰にも浮世の風が吹くかして笑顏の中に何處か淋しさうな色が見え、會話は斷續々々で其聲に愁を帶びてゐた。

「だツて無理だワ、」と女は俯頭いたなりに一寸いと男の顏を横に見て、「嫌だツて謝絶つたものを無理だワ。」

「無理かも知れないが、」と男は煩ささうに外套の羽を背ろに撥つて、「其處が考物だ。貴孃だツて生涯獨身でもゐられまいし。丁度吉田から申込まれたのが幸ひ、現在が身の定時だと思ふネ。禰彌さんだツて萬更見下げた男ぢやない。左に右亞米利加の學士で歐羅巴も一巡漫遊いたし。交際は上手。語學は達者にやる。男振だツて……」

「お止しなさいよ。开ンな話は、」と女は鋭く男の言葉を制へて、「聞きたかないワ。嫌だワてものを仕樣が無い。」

「何故氣にならないノ？」と男は女の顏を覗込む樣に見た。

「何故ツて嫌ひなんだもの、嫌なものは仕樣がない、」と女は極めて率氣なく、「貴郎も非道いワ。妾の心持は能く御存じなくせに……禰彌さんの樣な人は大嫌ひ、」と故と語尾に力を入れた。

男は緘默と口を緊結んで凝と考込んで了ツた。斜に森を橫つて、花園町へ下りる狹い石段の口まで來るともなしに來ると、急に踵を返して、木の間を縫ひながら霜柱を踏んで、態て動物園の境界の溝まで來て、喧ましい禽鳥の聲

と絹帛を裂くやうな鶴の聲が一緒に耳元を劈いた時、男は唐突に、

「一生獨身でゐるの？」

復た同じ事を、と女は面倒臭さうに、「愛がないのに結婚する道理がないッて、何度も云ひましたぢやないか。」

「何故愛が生じないだらう？」

「復た何故ッて……愛は疾う失くなッて了ッてよ、」と女は一向平氣に澄し込んで、「犬も大好き、猫も大好き、學校の生徒も大好き――、けれども男ッてものは大嫌ひ。」

「そんなら、」と男は笑ひ掛けたを眞面目に結けて、「僕は――矢張嫌ひかネ。」

「嫌ひよ、」と女は少しも萎まずに、而も思切つて小氣味よく、「貴郎は、一番好きぢやなくッて。」

男は悵然として默つて了つた。

森を出て動物園の前まで來ると男は急に思附いた樣に一寸いと佇立つて燃えさしの葉卷の灰を叩き落し、衣兜から摸出した燐マッチを擦つて火を點し、渦を卷いた白い煙をハッと吐出した。

道行く人は何れも珍らしさうに二人の容子を眼を圓くして見た。八丈の長襟を掛けた唐棧の袢纏の若い衆も見た。嘴ばかり喫かさうに萌黄の風呂敷を卷付けた千草の股引の書僮も見た。勢よく綱曳を走らした金縁眼鏡のチョボ髭も惶てて顧返つた。三人連の薩摩下駄は遠慮もなく衝突る樣に擦違つて二三歩行過ぎると破鐘聲で「チェスト、」と叫んだ。一人は杢山を劈くばかりにピュッと口笛を吹いた。恰度通り合はした綿入の道行を着たくの字形の隱居さんは吃驚して急遽て振返つて呆れた顏をした。

美術學校の前を再び森へ木の根を踏越えて入ッた二人は思ひ〳〵に屈託して、垂頭き勝ちで森の半ほどまで來ると、男は矢庭に振向いて力の無い聲で、

「何故嫌ひます？」

「何故ッて何を？」と女は既に忘れて了ッたを漸と考出して宛も可笑しさうに笑出した。「オホヽヽヽ――何故貴郎を嫌ひだッて理由？……

貴郎も神經家ネ。」

「嫌はれても關はんが、餘り牝鷄司晨だと誤解されやせんかと思つてナ。」

「牝鷄司晨だなんて――だから嫌ひだッての。牝鷄司晨どころか、貴郎の方が夫人を犧牲にしていらッしやる。だから妾は嫌ひだッての。」

男は無言で苦々しげに微笑した。

「何故です、的中りましたらう、」と女は言葉鋭く、「凡そ貴郎の樣な人道を說く人が現在の妻を功名心の犧牲にするなんて――だから嫌ひですワ。」

「犧牲にする？」と男は故と沈痛顏つて、「無益らん事をいふ。お前を棄てると云やアしまいし。」

「否え。仰しやらないでも、假令へば棄てなくても、貴郎の胸に愛が消えて了へば既う犧牲にした樣なもんです。ですから優しい言葉で親切をなすッたッて、智慧の仕業で情が少しも働かないから夫人の胸に徹しないのは當然ですワ。」

「殘酷い事をいふ！」

「殘酷いッて、何うですもの。功名心の爲に結婚して、一日も早く功名心を滿足させようと急立つて夫人を冷淡になさる。愛を殺して家庭を輕蔑なさる……」

「殘酷い！　實に殘酷い！」

「殘酷くたッて關はない。功名心に囚つてる人は惡魔ですもの、」と女は次第に舌鋒鋭くなッて、「元來功名心の燃んに燃えてる人は、寢ても覺めても其れにばかり屈託して妻なんかは么麽

でも可い様に思つてますネ。ですから少とでも功名心を果す道が立つと直ぐ妻を犠牲にして了つて更に良心に恥ぢないでゐる。恥ぢない處か、夫婦の恩愛に繋がれないのが英雄豪傑たる所以だと自負していらッしやる。能く云ひますネ、女房は床の間の置物だの、疊と女房は新らしいに限るだのッて。斯様な野蠻な考は道德心の低級な下等社會に限ると思つてたら、學問のある立派な紳士達が功名心を男子の面目だと云つて平氣で愛を翫んでいらッしやる。最つと非道い方になると功名心を託けに妻を棄てたのを公然披露して手柄顔をしていらッしやる。如斯な方には愛なんかは御馳走の下物より最つと下等らないかも知れませんよ。猶だ最つと非道い……

――と茲まで淀みなく辯じて來た時、忽ち三尺ほど高さの堤へ突當つて、男が前へ苦もなく乘越した跡から女は足場に踏迷つて、ツイ談話を途切らして了つた。

暫らくは二人とも無言で、男は殊に深く沈吟して足の運びさへ重さうに始終爪先ばかり見てゐたが、軈て口裡で聞えるか聞えないかの聲で呟いた。「誤解、――誤解!」

『猶だ最つと非道いのが……』と女は男の呟いたを少しも氣に留めぬ容子で、『猶だ最つと最つと非道いのが有りますワ。例へば貴郞の様な方……』

男は愕然として女を顧眄いた。女は平氣に澄し込んで男をジロリと見た。

『云ひますワ、遠慮なく云ひますワ、口外したもんだから悉皆云つて了ひますワ、』と女は嫣然笑つた。『例へば貴郞の様な、道德の理想も高くて其理想に近づからッていふお志も十分有るくせに、花々しいヒロイカルな人を驚かす様な、雄大とか壯大とかいふ事業の好きな方は――斯ういふ方は非常な場合の道德だけを重んじて日常家庭の道德は輕蔑していらッしやる。ですから道德の理想ッても、すばらしい立派な天國や獻身的の大事業ばかりで、家庭の幸福なんかは頭から輕んじてますネ。現に何時だッけ、貴郞は樂しき家庭は凡人の樂園だッて何とかなすッた。如斯なお心持だから、妾は夫人がお可哀想で貴郞は實に家庭の罪人だと思ッてますワ。之が世間普通の人なら格別、道德の理想の高いだけに一層罪が深いかと思ひますネ、』

『だが靜江さん、』と男は一寸と嘴を入れた。『僕は――實は初めからお吉を愛しなかッたのだ。』

『愛しないッて?』と女は流石に男を睨んで、『愛しない方と何故結婚なすつた? よもや功名心の爲めでも有りますまいネ?』

男は默然として了つた。

『何故結婚なすッた?』と女は疊掛けて、『正可に功名心の爲めと初手から意識なすッたわけぢやアなくて、能くいふ魔がさしたンでせう。勿論愛しないのに結婚するのは世間一統の風ですから、先ア理窟はないものとしませうが、爾んなら何故一旦杯した方を愛して上げないのです? 妻を愛するのは雄大でも壯大でもありますまいが、之が道德の本源ですから、妻を愛しない人が么麼な功名を仕遂げたからッて道德上からは無論殘忍と見做して處分しますネ。能く支那の小說に有る、妻を殺して恩人や主君に肉饅頭を獻じるッて話――あれですよ。貴郞なんかも精神的に夫人を殺して墨西哥に肉饅頭を獻じていらッしやる……』

男の顏色は次第に蒼くなッた。女は一向怯げないで舌鋒益々鋭く、

『貴郞は口癖に人道と仰しやるが、貴郞の人道は氷點以下に降つて夫人さい愛出來ないで……』

『だが靜江さん、』と男は再び談話の腰を折つ

て、『愛するにも爲ないにもお吉の樣に無教育で、沒分曉で、執拗で、放縱で、邪推深くては……』

『お止しなさい、』と女は叱咤る樣に男の話頭を制へた。『だから貴郎は同情が無いツて云ふの。同情が無い上に却て反感を有つていらツしやる。貴郎は能く夫人を邪推深いの執拗だの放縱だのツて仰しやるが、お小さい時分に御兩親や乳媼を亡くして眞實に愛を知らない方だから、少とやそつとの事は寛大に見て上げなけりやア……縱令へば貴郎の仰しやる通りにしろ、パウロが云つた――不信なる夫は其妻に由りて潔くなり不信なる妻は其夫に由りて潔くなるので、貴郎が温かい情で導いて上げさいすれば、么麼なにでも立派な貴婦人にして上げる事が出來ますワ。それを貴郎は冷淡に少とも關ひつけないで脚下しばかりしていらツしやる。夫婦は互ひに感化し感化されるものですから、夫の不德は妻の罪、妻の不德は夫の罪で、道德の責任は相互に連帶してゐますネ。ですから貴郎の樣に夫人の棚下しをなさるは恰度鏡に映る御自分の影を見て罵ると同じですワ。』

男は蒼ざめた唇を慄はして口裡で呟いた。

『殘刻極まる……』

『だツて何うでせう。貴郎は實に非道い非道い道德の罪人です、』と女は終に辣手と辛辣な宣告を下した。『或人は功名心の爲に愛を棄てる。或人は功名心を託けに愛を棄てる。けれども如斯な人達は大抵自分で良心に責められたり、或は無邪氣に輕薄を吹聽して自分の價値の下るのに氣が附かないもんですが、貴郎は其上手を行つて、功名心の爲に愛を喪くして置いて、猶だ飽足りないで夫人の瑕瑾を數立てて、愛を喪くした原因を夫人の罪に託けてお了ひなさる。其上に御自分の責任を棚へ上げて夫人の瑕瑾を冷淡に手嚴しく批評していらツしやる。他人を議るは正しく己れの罪を定むるなりで、貴郎が社會の不德に慷慨なさる人道のお説は其まゝ御自分の罪を審糺く宣告文になりさうだ――と妾は思ひますネ。』

男は全く顏色を喪くして瞳を据ゑ眉を顰め、唇を嚙占め、足の運びも覺束なげに折々立留つて手に持つ葉卷さへ何處へか落して了つて力の無い嘆息を屢々洩した。

『妾の言ふのは間違つてますかネ、』と女は一段温和かな調子に復つて、『妾は爾う信じてます。ですから思切つて遠慮なく直言して、生意氣に羅馬人と議論したパウロを氣取つて見たの、』

と云つて婉然微笑を洩らした。

男は呪ツと考へ込んで、女の今の言葉が全で耳に入らなかツたらしかツた。で、二人とも無言で何時の間にか何書屋の前まで來ると、男は俄に左も草臥れたらしく倒れる樣に只有る寺何の大夫獻上と彫付けてある石燈籠に凭れた。で、氣の拔けた顏をして恰度客を通拔けて櫻木町の方へ廻りながら行く職工らしい紺足袋の女の後影を見送つた。

女は其傍に佇立つて、氣遣はしさうに男の横顏を瞶めてゐた。

『么麼したの、腹ア立つて？』

男は初めて氣が附いた樣に、乾と女の顏を見て淋しさうに微笑した。

『怒つたの？』と女は心配さうに、『餘り生意氣を云つたもんだから……』

『怒りやアせんよ、』と男は嗄れた聲を淸らうと咳拂ひして、『貴孃の苦言は實に身に染みて滿身に冷汗を流した。――だが靜江さん、少とは同情して貰ひたい。お吉の道理の解らんのは言語道斷で、今度の苦情も墨西哥一條に始まツたンだが、其遠因は全く貴孃に由來してゐるンだ。』

女はさツと顏を紅め、背後の石燈籠に跳いて

頷いて了つた。で、微かな声で、「何故でせう？」
「それが無神経だから困る、」と男は深い溜息を吐いて、「今日の騒動ですからナ。對手が貴孃だから好い様なものの、實に赤面する。」
女は今まで淋々と男の道徳を縦横に論難してゐたのが、俄に自分の立場を失つた様に、早速の返事に行詰つて了つた。
男は再び新らしい葉巻を吸付けて、長い煙を燈籠の笠に吹きつけては何處ともなく凝視めてゐた。女は相變らず屈託顔で俯頭き、二人ながら化石に密着いた様に動きもしなかッた。
爰らは上野の奥で人氣なく、物古りたる木立を隔てて浮世の音は更に聞えず、森々として日の光さへ薄く、苔蒸したる石燈籠の林の如く列べる、錆びたる丹碧の青銅の屋瓦と相映ろへる、鳥雀の時々に木の間に囀ずる、落葉を掃ふ箒の音の何處かに聞ゆるが、四邊の風情が何となく閑寂でゐるだけに二人は殊に身に染みる哀れを感じたらしかつた。
『靜江さん、』と男は葉巻の灰を燈籠の臺座で叩き、「功名心ッていふが富貴に淫し功名に汨する賤しい志は嘗つて微塵も無い。斯ういふと抱負に堪へた大言だが、自分には人徳も力量もないけれど、志だけは釋迦や孔子と同列にある所存だ……」
「何んなら聖人のお志になツて夫人を十分愛してお上げなさい。惡を以て惡に報ゆる勿れ善を以て惡に報ゆる勿れ却て此の如き人の爲に福を求む、して之が聖人の志ですワ。」
「畏つた、十分解りました、」と男は心底から首背いた。「有川家へ養子に行つたのは無論鄙劣な心でなかッたが、今となると殺蟲嚢へ落ちた蛇と同じ窮状で實にお恥かしい。全く僕の人生は理性だけで生なか智慧の樹菓を味つたお陰に純無垢の情が消えて了つたのだらう。僕だツて萬更愛が無いではなかッた。今更思ふと、力量に過ぎた大事業を思立つて其慾望が膨んだツた爲に愛が犠牲になツてゐたので、如斯な窮屈な境界になると往時を憶出して戀しくなる事が度々有る、」と女の顏を意味有り氣に呪ッと視て、往時は將來の經綸が腹一杯で、黄昏の煙の中にさへ自分の理想共和國が見えたものだ。だから早く死別れた父母も戀しくなく、同志の外は朋友も欲しくなく、愛如きは自分の偉いなる使命に比べると滄海の一粟に過ぎないと蔑視してゐたのが、今では鴻鵬翼に乗じて無邊際を逍遥る様な夢想は桎梏に苦まされて滄海の一粟と思つた愛を懐ふ念が却て盛んに熾立つ時がある。……斯ンな場合でもお吉の顏を見ると、么麼いふもんだか、縮立つた情が直ぐ萎縮して了ふ。」
男は悲しさうに垂頭いて了つた。不思議さうに凝視めてゐた女も眼を潤まして同じ様に垂頭いて了つた。
『人の運命ッてものは妙ですナ、』と男は悄然として、「天の甘露を齎らす神女を冷淡に看過して茵蔯を懐にする妖魔と眠る者がいくらもある。加之も不思議なは自己の才能力量を確信する者は自分が妖魔の迷宮に陥ちた不明を悔いないで直ちに妖魔と格鬪を試みてゐる。加之も往々不思議なは格鬪に負けても菩薩の手に救はれるのを嫌つて甘んじて妖魔の犠牲となつて了ふのがある。斯ういふ意地が切めて半分もあると一切を冷笑し去つて了ふ事が出來るが——情ない——僕は實に無氣力漢だ。好んで幸福に背いて得ようと思へば得られた愛を棄てて今日の不平不愉快を求めて買つたのは全く自分の罪過だ——と斯う覺悟めると其應報としても煩悶愛苦は忍ばねばならぬ様な氣がして、今だに違去

の幸福が戀しくて、氣に入らない女の面倒を生涯見て面白くなく老朽ちるのかと思ふと、理想も抱負も滅茶苦茶となつて了ふ。」

男は悄然として搾出した樣な溜息を吐いた。

女は折々竊む樣に男の顏を見つゝ故更に無心らしく肩掛の流蘇を玩んでゐた。

『悉皆神樣の攝理ですワ、』と較やあつて女は聲を曇らしつゝ、「ですから氣を腐らせずに正しい道を行けば貴郎の抱負を行ふ時が必と來ますワ。急がば廻れッて、何でも氣を長アく悠然と待つて屈しさいしなければ何時かは必ず成功します。モーゼが埃及を去る時は强惡非道のパロの迫害をさい神の力に頼つて凌いだンですから、貴郎も餘り怏々なさらないで……第一、夫人を愛してお上げなさい。何をなさるにも夫婦が同じ心でなければ決して成效ませんからネ。それには貴郎の方から折れて夫人を安心させる樣に大切に柔しくして上げなければ……』

『無益だ、最う無益だ、』と男は獨言の樣に呟いた。

『無益だなんて、苟りにも人道を說く方が夫人を愛出來ないッて……』

『既う愛は消えて了つた。』と男は悄然として、『往時は架空の夢想に浮れて愛の有るのを忘れてゐたのが、人生の苦患を救ふのは愛の靈泉だと初めて氣が附いた今日は、愛の靈泉は既う涸果てて了つた。有川家の家庭を無事に治めるだけなら出來ないではないが、自分の身體は脫殼で死んだと同樣です、」と口裡で消えて了ひさうに云つて力の無い溜息を吐いた。

女は垂頭いたまゝ折々手巾で祕と眼の縁を拭いて、幾度か鼻を拭んだ。

「二人とも不幸ですナ、」と男は軈て力の拔けた聲で、「貴孃も不幸だ。貴孃の愛が喪くなッたといふ言葉は能らく僕の心根に徹した。僕の愛が消えて了つたといふのも貴孃の情に徹しましたらう。二人とも誰一人掣肘する者の無い自由の身で、思ふ事が自由にならなかッたのは之が卽ち運命といふンでせう、』と祕と顏を上げて女の顏を見た。

『之からは其運命に默從して正義の道を蹈んで行くより外仕方が無い。な、靜江さん、何時までも長アく骨肉の兄妹だと思つて睦じくしませうな。』

女は手巾を顏に當ててゐた。銀鼠の絹手袋を緊くり穿めた指頭が微かに慄へて、腕に掛けた肩掛と頭巾がずり落ちたを拾はうともしないで、薄淋しい夕暮の光が葉越しに黃玉の華簪を燦つかしてゐた。

男は肩掛と頭巾を拾取つて女の肩に掛け、遂ッと容子を見てゐたが、陰しさうに垂頭いて眼の縁を撫でた。四邊は昏さめて口髭の尖が戰いてゐた。恰度通り合にした巡行の巡査が不思議さうにジロ／＼見て、四五間行過ぎると一寸いと佇立まつて顧盻つたが、忽ち復た行つて了つた。

『靜江さん、』と男は較や暫らく經つて再び同じ事を繰返した。『貴孃も不幸だ。不幸だが諦めて下さい。僕も運命と覺悟してお吉の面倒を見てやると決心した。貴孃も嫌だらうけれどもお吉とも睦じくして。……實に困る、お吉は貴孃の潔白を誤解してゐるから……』

『最う止めませう、斯ンな愚癡ッぽい話は、』と女は顏に當ててゐた手巾を引奪る樣に取つて故とらしく嫣然笑つた。眼の縁が赤くなッて涙の痕が染んでゐた。

『妾は既う神樣にお委せ申して基督の御心に隨つて生涯働く身ですから、』と女は沈んだ聲で眞情を搾出した。『貴郎御夫婦に限らず、誰方とも兄弟姉妹同樣に睦まじくお交際ひ致しますワ。夫人に誤解されるのは矢張妾が惡いンですから、一生懸命になッて夫人のお心持を

和らげて、妾も可愛がつて戴きますし、及ばずながら貴郎とのお間も和熟る様に骨を折りませう。――罵らるゝ時は祝し辱めらるゝ時は忍び譏らるゝ時は善をなす――ツて、妾は此金言を守つて自分の本分を盡し、基督の御心通りに詬られても詬り返さず苦まされても厲い言葉を慎んで義を以て鞫く人に託せる積りでゐますワ。ですから貴郎も其お心持になツて、一度消えて了つた貴郎の愛を最う一度燭して、何卒夫人を幸福にして上げる様に……ね、是れだけは妾お赤誠を打明けて貴郎にお願ひ申します。妾は生涯人の為に働いて神様の御恵にお委せ申ましたから不幸でも何でも無いワ。唯だ貴郎御夫婦が幸福にお暮しなさるのを見れば之で最う十分です。』

女は再び袂と手巾で眼の縁を拭いた。軈て俄に急出した様に何か華やかな艶のある聲で『オホヽ』と笑ひ出した。

『妾まで眞面目になつて、餘程么麼かしてゐるワ、』と女は石燈籠を離れて肩掛を頸に纏付けつつ肩をすぼめて、『オヽ寒！　風邪を惑きさうだワ。さツ、行きませう……何時まで斯んな處にゐると人が見て變に思ひますよ。』

男は顔の色を失くして首俛れ、グッタリと力なく石燈籠に凭れ、眼を閉つて考へ込んで了つて中々立ちさうにしなかツた。

梢越しに御靈屋の金碧を反射す夕映の眩きと、塒求めに木の間を噪がす鳥の音の哀れなると、折から不思議さうに二人を見て通過ぎた耄碌頭巾のしよんぼくない顔とが左らぬだに人氣少き小路に夕暮の物凄さを添へ、颯と音して木立を掠めた寒風は襟元から慄ツと滲徹つて、何處からか途切れ／＼に聞ゆる軍歌に山は今黄昏れかゝツた。

『さツ、行きませう、』と女はスッポリ頭巾を被つて、肩掛を其上から纏付けてブルーチを插した。『さツ、行きませう。』

男は木像の様に凝結くなツて女の聲も耳に入らないらしく中々動きさうにもしなかツた。

處へ何時の間にか背後から忍足に忍寄つた二人の兒供が矢庭に耳の端を劈く様に『四百餘州こぞる』と唱つてバタ／＼と駈出した。其拍子に赤い房の附いた制帽の丸々と肥つたのが小石に躓いてコロ／＼と轉がツたを、一人が引攫起して周章てゝ逃出し、續て踏留つて此方を振向き、一齊に『騷つたア！』と叫んで兩手を高く差上げた。

此物音で、男は始めて眼の覺めた様に愕然と立ち、吃驚した顔をして子供の方を頻と見た。子供は忽ち逃出して了つた。

女は其吃驚した横顔を見て、片頬にニッと微笑みつゝ男の傍へピッタリと寄添つて一緒に新坂の方へ目的もなささうに歩出した。男は無言で沈んでゐたが、女の冴えた笑聲は折々聞えた。

新坂を下りて鐵道の踏切を越すと、間もなく下りの汽車が地響をさせつゝ黄昏罩むる靄を鋭き汽笛に劈きて長蛇の蜿蜒る如く坂下を横切つた。二人の後姿は其影に隱れて忽ち見えなくなツた。

其六

市中は歳暮の賣物で平日よりも賑かである。門松、七五三飾、神棚、宮居、羽子板店と此に我樂多道具、古本古雜誌、古下駄、古帽子、見切物の瀬戸物、專賣特許卸便利の發明品、何でも選取つた二錢八厘店、舊物、石鹸、熊の膽と森羅萬象の露肆處せきまで列びて、兩側の商店は戸毎に看板を立て、堆かく山ほどに仕入れた商品を積上げ、仰々しい球燈に賣出しの景氣を見せて新裁の半纏を着た出入の消防夫の張番嚴かしさうに顧客を送迎する掛聲の高き

を互に競うてゐた。

仲町の角で靜江を腕車に送らして分袂れた純之助は此雜然擾然たる中を氣の拔けた顏して茫然と雜沓に押されながら行つた。

電氣燈、瓦斯燈の光輝眩く、薩摩蠟燭の油煙風に靡いて、市の賣聲喧しく、大根〴〵を重さうに擔ぐ丁稚、歳暮の鮭を二三本肩に背負つた革羽織、輪飾、弓弦葉、風尾草を五器や神酒口と一緒に一ト風呂敷下女に持たして前へ立つ吾妻コートの奧樣、室咲の梅の盆栽を高く捧上げて裕かに紙卷貫燻らす二重外套の旦那樣、羽子板店の前に羨ましさうに立つ肩掛の桃割、熨斗餅の駈引に不景氣を嘆息する二子袢纏の嚊衆、女と見ると矢鱈に衝突つて歩く粹な瓦斯風通の若い衆、春の準備や歳暮の魂膽に忙がしい人が右往左往に押しつ押されつ蟻の這ふ隙もないほどに雜沓ふ中を一緒に揉まれながら何時の間にか本郷通りまで來た。すると突然『掏兒、掏兒!』といふ聲がしてドタ〳〵と一トなだれ人浪を打つて混雜返した騷動に純之助は只在る横町へ跳出されて了つた。

今まで心配に屈託して雜沓をさして煩いと思はなかツた純之助は初めて氣が付いた樣に呆れた顏をした。で、暫らく此芋を洗ふ騷動を見物してゐたが、再び押合へし合する氣もなくて、群集を拔出たを幸ひに裏通りへ外れた。

爰は大路の物騷がしきと變りて人通り少く無商賣家の多く軒を並べた中の偶々の商店も猶だ宵ながら戸を半分卸して街燈の二ッ三ッ見ゆる外は折々飛ぶ樣に駈拔ける俥號の弓張の仄ほらするだけで、其度に甲高に慄へた人聲が大地に響く屐の音と共に冬夜の寒氣を增した。

紺碧の大空に砂子を散らす星は底光りに光つて薄綿に似た霜を置く萬家の瓦を照らし此頃に無い十年振の寒氣は隙間なく襲つて毛襟の下に隱れた口髭に通ふ鼻息を凍らして、左らぬだに一年の慚愧悔恨を集むる押迫つた日に、拔山翻海の壯圖を將に行はんとする首途に故更に自ら挫せしめた純之助は、押返されぬほど賑かな市中から一歩を移すと忽ち寂寞し物淋しくなツたに、宛ら人生の悲觀が掌返す間に變はるを實地に見る樣な氣がして更に感慨を深くした。

只見ると、二三軒先の下等料理屋めいた西洋館の樓下は眞黑で樓上の窓の磨硝子に明るい人影の仄々映るのが眼に留つた。で初めて爰まで浮々と來たのに氣が附いた樣に、茫然と佇立つて暫らく窓を見上げてゐたが軈て、『須山!』と呼んで、追掛けて再た聲を張上げて繰返した。

『須山!』

すると窓硝子をスウと上げて二三人が一緒に顏を出した。象に似た太い粗かな聲が一番先に、

『誰だい? 有川君か? 好い處ぢや。衆人來とるぞ。』

『有川君かい? 好丈夫來る何ぞ遲きや。僕を待つ事大旱雲霓の如しだ、』と地方訛りの黃色い聲は云つた。

純之助は首肯いて入口の戸を推すと、途端に錠を開ける音と共に内部から戸を開けたは、ヒヨロッと背の高い男で、無言で恭やしく頭を下げたを輕く會釋し返して、直ぐとツつきの螺旋狀の階子段を上つて正面の扉を排すと、肉と酒との臭が一度にプウンと鼻を衝いた。

室内は楕圓形の大卓子を圍んだ八九人の一座が會食最中で、彼是十五六疊の廣さの四壁に南米、濠洲、墨西哥等各地の圖を掛けて、煖爐、棚に椰子菓や玉蜀黍やを加里保爾尼コンドルや角鷹の卵と一緒に盛つた葡萄の籃と棕櫚竹の大きな鉢栽を置いた外には裝飾らしいものは一品もなかツた。

『やア、』と二三人の聲が一度に掛ると同時に輕

く起つて笑顔で會釋した正面の紳士は四十恰好の肥胖したフロックコートで。戸口に一番近い椅子に半分坐りかけてゐた鈕釦の一つ脱れた背縫の背廣は即ち窓から顔を出した黄色い聲の主で、ヒョロ〳〵と脊ばかり高くて痩せこけた顔の尖がッた近眼の男である。席を離れて煖爐に脊を向け外套の裾を撥ねて煖めてゐるは二行鈕釦の背廣が破裂れるほど肥つた身材の矮いズングリした愛嬌のある男だ。

「待ツとッたよ、」と顔の尖つた半鐘君は待しさうに顧盼いて聲を掛けた。「……滿萬戸侯の美酒あッて一言鶴釣の君が快談なきを遺憾としとッた。」

「何處い行ッた、」と破裂れさうなズングリ君は象に似た太くて柔かな聲で、「今夜はな、偶然我黨の豪傑が揃つたので、急に忘年會旁々君を正客として我々墨西哥連の爲め祖道の筵を張らうッて催しだ。處で御正客樣を迎ひにやると、君、驚いたよ――直に風餐露宿の程に上らうといふ矢先に細君携帶で大磯へ旅行ッてのは何ぼ驚いたよ。君の如き咄々怪事は我黨の主義に反いてると一同大憤激で恰も今君の黨籍除名問題を議しとる最中だ。……一體何處い行ッたンだ？」

「上野を散歩いて、今が歸途だ。」と純之助は何氣なく微笑した。

『上野を……細君携帶でか？』

『一人よ。妻は家に居る筈だが。』

「はッ、はッ、祕しとるナ。』と眼の細い鼻のチョッピリした扁平い生白けた顔の黒帽子の五紋は大きな口を開いて呵々と笑つた。「祕しとッても無效だ。君と並んで行く美人の後影を見たもんがあるぞ。」

「有川君、」と、黒無地の羽織を着た銀縁眼鏡の小肥りの男は正座の紳士の次に革張の椅子を据ゑて純之助を招いた。之を機に純之助は他の言葉を耳にも掛けないで輕く會釋しつつ座に着いた。

銀縁眼鏡君は此筵の東道らしく見えて頻りに彼地此地と周旋し、ヒョロリと脊の高いノッとした給仕男が和洋折衷の不思議な料理を巡々に運んで今着座したばかりの純之助の前にも敏捷く三皿列べた。

「有川君を祝します、」と古ぼけたスコッチの背廣に金鎖を斜にダラリと[illegible]つかした滿面黒痘痕の毛[illegible]頭君は顔に似合はぬ玲瓏たる美音で演説を始めた。「有川君及び細君の健康を祝します。諸君。我黨を同々倶樂部と稱するは一つ窖の狐貉と云ふ滑稽かと存じますが、拙者は更に一歩を進め寧ろ動物倶樂部と改稱すべき建議を致します。といふは敢て拗者のスウヰフトが云つた――人の形したものは獸の心で、獸の形したものは却て人の心である、といふ意味でなくて、諸君が何れも人間以上の美丈夫で迚も業平如きを美男とする風流專門の日本には不向きだといふ面々の寄合であるからだ。第一にはヒッポポタマスの如く獰猛魁偉醜貌なる拙者……

一同は興に乘じて手を拍いた。半鐘君は詑ッた聲を張上げて、『夫子自ら知る！』と叫んだ。

『……ホルスタインの如く――便々たる腹將に地に着かんとする肥大の長南太郎君……』

一同は俄に哄き渡つて、二行鈕釦の背廣君は天井を仰いで吹き出した。

「……パルセロンの如く馬車馬的に健脚なる神樂武市郎君、臘肭獸の如く婦人を寵愛する有川純之助君……」

滿堂は破れるばかりに哄と聲を上げ、黒の五紋君は腹を抱へて椅子の顚覆るまで絶倒した。純之助も苦々しげに微笑した。

平然として莞爾ともせぬ演説者は冷かな論鋒

を進めて、
一諸君。蕃殖と發達とを比較すると人間と動物とは全く逆比例だ。人間は次第に墮落し且つ減少し牛馬は却つて益々進歩し且つ蕃殖する。即ち人間は退歩し動物は正に進化しつゝあるのだ。諸君は牛馬の發達を以て人間の智力に歸する。或は左うかも知れぬ。したが舊約時代に神が人間の發達を計りつゝ今日全く影を潜した樣に、人間は動物を進歩せしめつゝ終に消滅して了ふ。即ち我々は滅亡の淵に瀕する人間倶樂部たるよりは寧ろ大いなる將來を有てる動物倶樂部たらん事を望む……」と演説者は滔々と喋々異同の舌を縱横に揮つて今の社會の墮落——上下悉く色に淫し酒に溺し黄金に醉ひ紫綬金冠に爭つて狂奔すと慷慨し、地獄の餓鬼は自己の罪を懺悔して大叫喚に哀みを乞へども今の社會は其精神既に永沈奈落の底に落ちて大焦熱に苦まるゝも嬉々として笑ひ揚々として驕ると熱罵し、政治は黨人に弄ばれ、法律は大盜に破られ、經濟は株屋に惱まされ、宗教は祈禱に勞らされ、道德は憲法に縛られ、病既に膏肓に入つて一家は淪落に腐敗し、一國は軍備に破産し、社會は梅毒に滅亡せんとすと喝破し、世既に道德なければ不德もなし、ヒューマニチイなければアニマリズムもなし、ヒツポポタマスの勇壯、ホルスタインの温柔、ハルセロンの駿慧、鴛鴦の熱愛は寧ろ人間の浮薄邪僞に比して何等の高級道德ぞやと萬丈の氣焔を吐いた。

一爰に至つては、」と演説者は喝采の鎭まるを待ちて、所謂文明人種が占領する土地は世界の面積の十分一で我々非人間種屬の住むべき土地は猶だ澤山ある。即ち我が動物倶樂部の領袖有川純之助君は同志の長南太郎君、熊田武市郎君、及び狐の如く狡猾で蜂の如く盛んに喰ふ須山平四郎君……」

講座は再び動出すばかりに哄いて暫しは鳴が止まなかツた。黄色い地方訛りの半鐘君は頭を掻いて澁い顏をして苦笑ひをした。演説者は愈々押し返つて冷かに語を繼いだ。

一即ち有川君は此三氏と共に恰も膃肭獸が温水を索ねて北緯三十度に南下する如く遠く墨西哥の密林沃野を跋渉し、千里の廣原を相して新共和國を創開かんとするので。我々は先づ謹んで此壯圖を祝し、同時に諸君が現在の堂々たる君子の智慧がなくて、巷談買の妄狂ひに浮身をやつし、義太夫や謠曲に凝つて胴魔聲を迂鳴り、米や株や濡手で粟の摑取りを工風し、政府と肝膽相照らして在任の高官となる能はざる不幸を弔す。」

一殊に有川君に於て奇とするは、」と演説者は直ちに其間なく語を繼ぎ、「有川君は最も婦人を敬愛する論者だが、古來人の輕んじた人慾には冷々淡々で。昔は河藻屋が十年の貶謫に屈しなかツた鐵石心を梨皮の笑渦にコロリとやられた。蘇武は雪を嚙み血を流して節を持したが胡帝に屈しない代りに胡婦を娶して了つた。ラッサルの慘死もブーランジェの最期も皆婦人に起因してゐる。獨り有川君は大に之と異つて美貌花の如き才女と十年往來して終に枯木寒巖流を押通して了つた。新たに娶られた令夫人も沈魚落雁閉月羞花といふ美人だ。然るに蜜月の夢未だ圓ならざる中から既う墨西哥へ高飛をしようといふのだ。是れ最も人間の難んずる事で、今の最も流行する風流才子の樣に、待合の春の晨羅浮山の夢覺め易きを恨み、海水浴の夏の夕蚊帳越の月に情なきを口説かれ、あら好くツてよの秋波に腸を溶かし、とうとうツたらようのぐりぐりに有頂天となる——斯の如き經驗は一度もなかツた一大轗軻不遇を弔し、而して此不遇無愛家が創建する新共和國が冷々索々、希くは動物倶樂部の一變して鑛物倶

樂部たらざらん事を祈る。』

矮軀猪首君の非人間イズムの演說は大拍手大喝采の中に終つた。今まで椅子に反返つて天井の隅を睨んでゐた色の淺黑い目の光つた筋骨逞しい長大の紺ヘル背廣の熊稻武市郎君は突と起つて麥酒の大杯を高々捧げた。

『セニョール有川――我が新共和國のパードレ及びプレシデンテとしてセニョール有川の健康を祝す。』

衆員は之に和して各々大杯を擧げて有川純之助の前途を祝した。靄然たるフロックコートの紳士は殊に滿腔の溫情を籠めて恭やしく祝杯を擧げた。

滿座は喧譁して笑聲嬌叫聲歡聲は皿の音栓子の音響の音と混じ、新たに運出した七面鳥のスチユウと豚脂で煮付けたトマトオは人の鼻を撲つ甘さうな香を放つて黑麥酒の空瓶は其處此處の足許に二三本宛轉がつてゐた。興味正に湧くが如く殊に墨西哥連は意氣盛んに大杯を滿引して傍若無人であつた。

單り純之助は今まで猶ほ決しかねて胸中に包んでゐた墨西哥行の中止を、同志の者だけに内々に打明けようと思つたのが、案外な一座でツイ發言す機會を失つた處へ、偏てつなる長演說で、平生は此演說者の得意な險句冷語をラムネの栓子の抜けたほどにも思はなかつたのが身に染々と惡感情がした。其上に一同から祝杯を擧げられたは恰度敗軍の將が凱歌に迎へられたと同樣で純之助は竊に憮然として羞ろんだ。

『好下物あり、好丈夫あり。美酒あつて美人なきを如何、と突然叫んだものがあつた。

『有川令夫人を招待すべし、』と痘痕君は直ちに其聲に應じた。

『贊成ッ、』と黑の五紋君は忽ち贊成した。『諸君。有川君は非常に意氣銷沈しとるぞ。宜しく令夫人を招待すべし。』

一同は愈々喧譁した。純之助は終に意を決して、迚も云はで止む事ならねば墨西哥行中止の一條を披露し、諸氏が祝杯の恩に應ふる能はざる遺憾を陳べようと突と席を起つた。其途端に狐の如き豚の如き須山半鐘君はヒョロッと起立し、鐵櫪の眼鏡の下に醉眼を蕩つかして、

『先づ吾輩をして演說せしめよ、』と地方訛りを甲走らした。『諸君、有川君が聰明雋介の志を以て腰纏萬金の資を携げて墨西哥に渡航せらるゝは鵬翼に乘じて萬里長風に駕するもので百怪魑魅横行する當今の黑暗々を破るに足る快事である、』といふを序開きに山田長政や、角倉與一や、二宮尊德や、高田屋嘉兵衛や、伊能忠敬や、キャボットや、コルテズや、サンマルチンや、ボリバルや、サンシモンや、ルイブランや、マルクスや、近くはトルストイからナンセンまでを關係に撈出して盛んに純之助の雄風高節を稱へて殆んど古今獨步の大豪傑に祀り上げて了つた。之と同時にお吉夫人までを天晴の淑女賢女烈女である如く滿腔の丹誠を以て熱心に吹立てた。

『須山君、』と純之助は輕く手を擧げて此賣藥功能的演說を止めた。實に冷汗を流すお褒詞だ。……須山君及び諸君。諸君の慇懃な御忠告と御祝詞に對して私は頗る忸怩にたへない事を申上げて諸君の同情を請はねばならない。私は一家の事情の爲め餘儀なく一時墨西哥渡航を中止しました……』

一同は啞然として、恰も名優の演劇が幕明にならぬ間に閉場て了つた樣に――一萬噸の戰鬪艦が戰爭の始まらぬ中沈沒して了つた樣に、敵も味方も純之助の利器を認めるだけに呆氣に取られて顏見合はし、暫らくは寂として了つた。長南ホルスタインは眼を瞠つて鼻息を荒くして純之助をキッと凝視めてゐた。須山半鐘君

は度肝を拔かれた樣にポカンとして吻を尖らしたまゝ立往生をした。

『之には種々錯綜んだ事情がありますが、』と純之助は言葉靜に沈着いて、『簡單に申せば一家の繫累が私の外國に行くを許しませんので……唯だ偏に諸君の御賢察を仰ぎます。』

『膃肭獸君、』と動物辯護の演說者は滿面の痘痕に皮肉な微笑を浮べて冷語を放つた。『不幸にも拙者は須山君の嘖々する所謂古今獨步の大豪傑を膃肭獸君と呼ばざるを得ざるを悲しむ……』

純之助は默然とした。一同は苦々しい顏をした。獨り黑斜子の五紋は呻然として笑出した。

『我黨は牛馬の嘶くに聞いて艷妻の聲に聾なるを誇る。』と演說者は頗る冷淡に言放つた。『昔項羽は山を呑むの意氣を以て咸陽宮を一炬に焚き笑聲天に充ちて骸骨麻の如く亂るゝを見ても神色自若としてゐた。然るに虞美人の淚に悲歌悵飮して脊々別るゝに忍びなかッたは鐵作の心も恃にならぬと我々は常に人間の愚劣なのを憐んでをる。有川君は我々の同情を求めらるゝに由て、我々は愼みて人間の墮落と見做して同情の言葉を獻じます。』

『我輩も同情する。美なる細君と、美なる御令妹――』と五紋紳士は滿面に冷笑を含んで、『有川君は實に多恨多情の風流才子だ。』

『有川君、』と長南ホルスタイン君は太い聲を便々たる腹の底から搾出した、『么麼云ふ事情かネ……あんまり寐耳に水で恰で夢を見る樣だ。是まで準備をしたのを今更止すッてのは么麼いふ事情かネ？』

純之助は默然として答へなかッた。一同は汗を握つて其辯解を待つらしかッた。

『君は一言中止すると云つて平氣でゐるが、我々は實に當惑する。神稻君初め悉皆旅裝が出來て、來春は早々立つばかりになツとる。必ずしも君が同行を望まんが、一旦約束したものを唯だ事情があるで中止は甚だ其意を得ない……』

純之助は冷然として聞かざる如く默してゐた。何時の間にか其周圍を取捲いた二三人と共に須山平四郎は氣遣はしさうな顏して一心に純之助を瞻視めてゐた。痘痕辯士は一向無頓着に七面鳥の解剖を始めて肉刺と皿の音を戛々させてゐた。神稻武市郎は遙か離れて葉卷を燻らしつゝ知らぬ顏をしてゐた。

『諸君にも面目ない。君達には殊にお氣の毒だ、』と稍やあつて純之助は極めて沈着拂つた語調で、『ただ事情といふは一家の私事だから精しくお話しするわけに行かぬ。唯だ僕を信じて止むを得ざる義といふだけで承知して戴かう。』

『止むを得ざる義は甚だ困る、』とホルスタイン君はいつかな諾かないで、『拙者は既に郷里の朋友親戚に暇乞を濟まして餞別まで貰つて來た。明夜は又同窓の友が寄つて送別會を開いて呉れる筈になツとる。それを今更君が約束に背いたからッて拙者が止めて了つたら世間に顏出しが出來ない話だ。何とか條理の判然した事情を話して貰はんと、拙者は實に天下の物笑だ。向後の信用にも頗る關係する。』

『我輩も同感だ、』と須山平四郎君も俄にホルスタインの臀尻に附いて怒り出した。『餘りに唐突だから我輩は猶だ信僞を疑ツとる。苟くも男子が口外した金鐵の言を變ずるには頗る重大な事情が有る筈だ。君は一家の私事と明言しとるが、一家の私事の爲め社會の經綸を棄てるは我輩實に君の名譽の爲め惜むナ。既に世間――少くも我々社會に公けになツた計畫が說明出來ない事情の爲め中止になツたら世間は何といふ？我々は墨西哥移住の計畫があると世間を

瞞着して社會經綸家の名譽を詐取したといふ
だらう。我輩は夫れを殘念に思ふ。』
『夫子先づ瞞着されたり、』と誰かの聲が叫ん
だ。
『我輩は君を信用しとる。君の赤心を信用しと
る。長南君も君を信用しとるだらう。しかし
世間は猶だ十分に君を了解してをらんから君が
聲を大にして叫んだ墨西哥殖民が道理なく消
滅して了つては少からず君の進路を妨げるだ
らうと我輩は夫れを懸念する。苟くも意氣を重
んじて社會に立つ男子が一家の繫累如きに縛ら
れるツてのは我輩決して信じる事出來ん。殊に
君が剛毅屈せざる精神で一旦思立つた事業を頓
挫せしむるは必ず他に大なる理由があると我
輩は想像する……』
『大に有る。我輩敢て有川君に代つて辯じよ
う。』と五紋紳士は傲然として着席のまゝ得意
に一同を見巡した。長南ホルスタイン君、須
山半四郎君を初め五六人の視線は此意味有り氣
な容貌に集注つた。痘痕辯士は七面鳥を平げて
口の周邊を手巾で拭いてゐたが、隣席のホルス
タイン君の七面鳥の皿に手が附かぬを得たりと
素早く[illegible]取つて再び庖丁と肉刺を揮んでシャ
に掛へた。神代パルセロンは葉卷を燻らしつゝ
部屋の中を上下してゐた。
『我輩は仔細あつて早くから今日あるを知つと
る、』と五紋紳士は仕たり顏に辯じ始めた。『し
かし多く祕密に屬して有川君の名譽を傷つける
から掻摘んで說明しよう。先刻の辯士は有川君
を不遇戀愛家と云つたが、之は大に君を知らん
說で、有川君には准令妹或は准令閨ともいふ
美人がある……』
『知つとるぞ……枯木寒巖流だ、』と痘痕辯士は
七面鳥を頰張つたまゝ獨言の樣に叫んだ。一
同は忽ち視線を轉じたが、痘痕君は一向平氣に
顏も上げないで肉の寄方を工風してゐた。ホル
スタイン君も顧盻いて見たが自分の皿が蠶食さ
れてゐるとは毫しも氣が附かなかツた。
『枯木寒巖流であるか無いかは疑問だ、』と五
紋君は輕く答へて麥酒を一ト口飲んだ。『然る
に近頃米國歸りの紳士が非常な熱心を以て此美
人を所望した。すると有川君は若し准令妹た
らば喜んで許すべき學識名望財產共に備つてる
紳士の申込に大抗議を試みた。處が此紳士は
細君の內緣の者で大抗議も餘り效力が無かツた
ので其處で大躍起運動として始めたのが即ち墨
西哥探檢だ。有川君の墨西哥探檢は畢竟美人
保護の躍起運動に留まツてるンだ。』
『否!』と鋭く叫んだは須山平四郎である。長
南太郎は耳を傾くる價値なしと冷笑して空嘯い
て了つた。
『諸君は有川君が以前に殖民の大抱負があつ
たのを知ツとる。しかし其元氣は既に沮喪して
了つたのを知らんのだ、』と五紋君は益々得意
になツた。『苟くも海外移住の志があるな
ら養子に行つて好んで繫累を求める事はなから
う。既に資產家へ養子に行くツてのが元氣沮喪
した十分の證明だ。』
『否!』と須山平四郎は再び苦り切つて叫んだ。
『須山君は有川君恩顧の幇間だから否といふだ
らう。しかし我輩は正論する……』
『何だ……幇間とは何だ、』と半鐘君は忽ち勃
然となツて氣色を變へた。
『君はネ、』と五紋君は須山の顏をジロリと偸
蔑む樣に見た。『君はネ、頗る義人だから一個の
恩になつたと殆んど幇間の樣に曲從阿諛百方
諛らざるなしだよ。』
『何だ……失敬千萬な、』と須山平四郎は嘴を尖
らし拳を固めて居丈高に詰寄つた。『元來貴
樣の面は[illegible]に顯る。貴樣の面には犬偵と書いた
るぞ。貴樣は我黨の社會的祕密を搜りに來た
探偵だらう。』

『須山君は否といふ。しかし我輩は正論する、』と五紋紳士は須山の言葉を一向耳に留めないで、後目に掛けて頭から冷笑しつゝ、『我輩は更に有川君の心事を剔抉して正論たる所以を證明しよう。有川君細君は美人で……』

『默れ！』と平四郎は猛然じい勢で吹付く樣に叫んだ。『有川君は貴樣如き小人には解らんぞ。』

『我輩は有川君の人物を論じない。唯だ事實を語るのだ……』

『默れ！ 默らんか！』と平四郎は鐵拳を固めて掴みかゝらうとする權幕で、ホルスタインは漸く慰諭め賺して强やりに室隅の方に引摺つて行く。五紋紳士も有繫に口を噤んで了つて、一座はしらけ渡つて寂とした。痘痕君の皿の音とパルセロン君の靴の音だけが高く聞えた。

痘痕君は都合三人前の七面鳥を征服して初めて倦怠くなツた樣に庖丁と肉刺を投出して椅子の背に疲勞して凭れた。で、胃腑の脹れたを洋服の上から撫つてゐたが、一座の聲なきを見て、麥酒の大杯を一ト息に鯨飲つて突と席を起つた。

『拙者は深く有川君に同情を寄せます。所謂止むを得ざる事情を大凡想像し得たに由て深く有川君に同情を寄せます。之と同時に人間が貪瞋癡毒の塊物で淺陋輕薄無劣鹵莽淫蕩野蠻兇險邪惡有らゆる醜怪を盡してゐるを益々痛切に感じます。而して有川君が糞汁に浴する覺悟を以て此渦中に捲込まるゝ勇猛心を喜びます。而して又有川君が木乃伊取の終に木乃伊とならざらん事を希望します。』

『無用！』と叫んだは室隅に抑へられてゐた須山平四郎で罵聲口を突いて絶えなかツた。

其間純之助はフロックコートの紳士と頻りに耳語いてゐたが、軈て突と席を起つて神稻武市郎と二言三言互に頷き合つて戸口で一同に目禮し、闥を排して階子段を下りた。之と同時に痘痕辯士は妙な身振で足踏鳴らしつ得意のマドロスの歌を唄ひ出した。

痘痕君と相對ひの斜視の胡麻鹽君は今まで一言も饒舌らないで一ダースの麥酒を傾盡し、昏々として睡つて正に椅子から轉けんとした時、忽ちマドロスの歌に醉眼を瀾と開いて恰もガルバニック電氣に感じた樣に躍り出した。『大けなけん、、、たま伊達には持ゥたぬ』と濁みたる土佐音は一堂の索漠を破つて喝采の聲は四壁を驚かした。神稻武市郎は獨り冷然として窓に倚つて三分一ほど殘つた葉巻を燻かしてゐた。

其七

夜は大分更けて裏通りは殆んど人氣が絶えた。純之助は無量の感慨を胸一杯に滿んで倶樂部を出て凡そ二町も行くと、

『有川君、有川君、』と呼んで追駈けて來たは須山平四郎で喘々呼吸を切らしてゐた。『有川君。』

純之助は佇立つて顧盻つた。

『實に不愉快だ、君、』と須山は外套の衣兜に手を突込みスコッチの鳥打帽を被つた頭を前へ出して、『實に不愉快だから追駈けて來た……君と運動しようと思つて。』

『最う遲い。僕は歸家るンだ。』

『好いやアな、』と尻上りに甲走らして、『一寸と其處いら運動しよう。歸つても細君は在ないよ。』

『在なくも關はん。最う時刻外れた。』

『衛うかい、』と云つて二三歩踏出すと忽ち復た足を留めて、『好いやアな。一寸と其處いら……少ウし運動しよう。』

『僕は歸家る、』と純之助は簡單に斷乎と言放つて關はずに歩いた。

『衛うかい、』と途方なしに復た一ト足下りに歩

き出して、『么麼しても歸るかい？……そんなら、君の家の方へ一緒に行かう。』

『實に我輩は不愉快で堪らぬ、』と較や有つて須山は肺腑から搾出した樣な聲で、「君は何故墨西哥行を止めた。么麼な事情があるか知らんが君の大經綸を抱いて折角の壯圖を空らするは實に千秋の恨事だナ。……君はあんなガスモク野郎に買られて殘念に思はんかい。我輩は實に君の爲に切齒扼腕した。」

「君達には氣の毒だッた。」

「我輩如きは關はんが――唯だ君の事業に犬馬の勞を盡さうと期したのが畫餅に屬したを遺憾に思ふだけだ。」

「君達の盡力を無效にしたのは濟まんかッた。何れ損害は僕が無論償ふ。」

「金錢の心配は要らん。我輩は金錢の爲め奔走したのでない。君の事業を一世の快事として一義を以て君と結託して敢て一臂の力を效さうとしたのだ。然るに君……我輩は實に不愉快で堪らぬ。君が我輩の心事を知らんで、ガスモク野郎どもが毒舌を揮ふのが實に癪に觸る。我輩は渠に鐵拳を喫れてやらうと思つたが、長南君が頻りに留めるから辛抱してやッた――何のガスモク野郎奴、他日機會があッたら何處の新聞を借りて十分に筆誅して喫れる。失敬千萬な――我輩の事を君の幇間だと吐かしやアがッた。我輩は君が絶倫の才器と君が濟世の志とを欽仰して不肖ながら君の鮑叔を以て任じとる。且つ君が經綸に成る事業の當今曾て聞かざる大規模なるは我輩一箇の私論でない。然らば君の行色を壯んにする爲め我輩の口から百萬の讃辭を陳ねたからッて、敢て良心に疚しくない。我輩は決して諂諛だとは思はない。君に諂諛して何の求むる處がある。我輩は斷じて諂諛したんではない。衷心君を當世の人物と信じとるンだ。我輩は實に憤慨に堪へん。……君の幇間とは失敬千萬な。」と純之助の顏を覗込む樣にして、「だが君……我輩は幇間と見えるかい？」

純之助は冷然として顧眄きもしなかッた。

「我輩は君の恩命に感泣しとる。君の才と德とに推服しとる。君の如き異材が當世に志を得ないで凡才俗物が横行闊歩するを常に慷慨しとる。今の社會は日月光なき黑暗々で君子は韜晦し達人は影を潛し小人匹夫單り時を得顏に陸梁跋扈しとる。鐵中の錚々、庸中の佼々が卽ち俗氣紛々たる雜才で我輩は渠等を猾中の狡々と目しとる。（と得意に冷笑して、）「□□如き主義も節操も力量もない奴が藩閥の老朽元勳に謳歌しただけで救參に有附いた。□□如き俗智倖才――我輩は渠の名を聞く度に嘔吐を催す――渠如き片々たる刀筆の吏が何の德器があつて大臣の椅子を博し得た。實に百鬼夜行だ。苟くも清廉潔白節を重んずる者は燕趙悲歌の士とならざるを得ない、」――と泣くが如く恨むが如く憤るが如く訴ふるが如く眉を昂け聲を顫はし首を掉り立てて悲憤慷慨した。

「君は何故墨西哥行を止めた、」と再び左も殘念さうな語調で、『假に我輩をして揣摩せしめて止むを得ざる事情が細君の故障に生じたなら我輩は大に君の爲に取らんな。苟くも當世の功業を建てんとする者が區々婦人の言に左右せられて志を移すは我輩大に取らんな。我輩は敢て君が家庭の琴瑟調和しとる幸福を破るを欲しないが、社會は實に君の如き勇邁卓犖の士が人道の爲め起つを渴望しとるんだ。君の敬虔なる經綸を先づ墨西哥に施したなら以て一世を驚倒する事が必ず出來る。神稻君や長南君は共に當今獲易からざる高才逸足で君の左右翼とするに足る。我輩とても敢て駑鈍の才を以て犬馬の勞を盡さうとしたのだ。……何故君は是まで準備が出來た墨西哥植民を俄に止めて了つたのだ。我輩實に社會の爲め君が頓挫したを悲

しんどる、」と、須山は滿面に苦皺を寄せて仁義廢れ僞善行はれ罪惡到る處の社會に充つるを痛嘆し、苟くも世の墮落を憂ふる涙あらば今が即ち三尺の劍を揮つて起つべき時だと繰返した。「君は何故墨西哥行を止めた？　我輩實に大不愉快だ。」

純之助は初めから須山の言葉が耳に入らなかツた。勿論朋友の非難や攻撃は頭から覺悟してゐたが、少くも莫逆を以て許す一二人は自分の遠大の志と不撓の節とを知つて同情して呉れると確信し、他の沾々たる陶犬瓦鷄の徒輩が冷嘲熱罵の如きは深く意に介さなかツた。唯だ靜江が自己の愛著心を棄てておま吉の幸福を量らうとする正實潔白の心栄と其苦衷の尋常ならぬを味ふと遡然として腸腑の沸熱る心地がして來た。

「君は何故墨西哥行を止めた？」と暫らくして須山は復た同じ問題を反覆した。「我輩實に大不愉快だ。我輩今夜は痛飲淋漓して天下を罵倒して呉れようと思つたのが、喜憂忽ち地を變へて九天の上から九地の底に落ちた氣がした。君は如何しても止めるかい？　君が若し細君一掬の紅涙に折れたなら我輩敢て申包胥となツて哭霽天を貫いて見せる。なア君……斷然思留るのかネ、我輩は實に君の纏綿を憐むんだ。孟賁の勇も咨咀逡巡する時は庸夫と相去る唯だ一尺だ。我輩は萬斛の涙を揮つて君が更に三思して猛然起つ事を熱望するネ。」

須山は純之助の顏を覗込む樣にして据々、千言を陳ねて口說き立てたが、純之助は他事に屈託して更に耳を傾けなかツた。須山は幾度も「實に大不愉快だ、」を繰返してゐた。其中何時か此處らに唯ツた一軒の揚土門の前まで來て純之助は忽ち立停つた。

「君。茶でも喫んで行くか？」

「いやツ、我輩は、」と須山は來るともなしに茲まで來たを初めて氣が附いた樣に、「……最う少と歩かう。」

「最う遲い。拙家で茶でも喫んで行け。」

「先ア好いやアナ。其處いら最う少ウし運動しよう。」

「運動には遲過ぎる。……君も直ぐ歸家るが可い。」

「我輩は最う歸家らん。歸家つても迚も安眠出來ん。實に大不愉快だ、」と左も煩悶に堪へざる樣な調子で、「我輩は酒が飲みたい、大に倒醉しなければ迚も最う堪へられない。」

「拙家には酒は無いからナ……」

「だからナア。ナア君、何處かへ行かう。大に快[illegible]野郎どもを罵つて呉れよう。」

「御免を蒙る。……君も歸家つた方が可からう。」

「我輩は歸家るのは嫌だ。實に大不愉快で酒が飲みたい。……君は如何しても我輩に酒を飲ませる氣は無いかい。」

「拙家には酒が無いよ。」

「だから行かう。好いやアな……俥を飛ばせば直ぐだ。我輩は最う歸家る氣がしない。」

「斷然御免だ。酒が飲みたいなら待合せを與るから君一人で行け。」

「[illegible]かい……如何しても交際つて呉れんかい。君の細君は今夜[illegible]ないよ、」と云從ふて頻りに[illegible]逆いてゐたが、左も恥入つた樣に頭搔きつゝ、「ちやア君。三枚か四枚貸して呉れ。我輩大に飲まんければ……」

「さア、」と純之助は懷中から十圓札を出して手渡しした。「君も種々準備をしたのに無益になツて弱るだらう。損害は僕が償ふから、何れ近日神稲や長南を會して、皆木の計畫に就て今度中止の善後策を相談する所存だ。」

「我輩も實は洋服も新調いたし、革鞄だの時計

だの種々準備をしたし。止せば可かッたに神稲君ッ注意で拳銃まで買込んだ。其上に大遠征に出掛ける名殘と思つて毎日非常に快飮したからナ。此歲暮は頗る大恐慌だ。……だが君、我輩は實に不愉快で堪らん。之を慰むる唯杜康先生ありだ、」と云つて紙幣を衣袋に捻込んで躊躇してゐたが、縮上げた樣な細い聲で、『君、最う一夜——唯一枚だけで可い。車賃が欲しい。」

純之助は門柱に裝置けた電鈴の釦鈕を推しつゝ一圓札を渡した。

『之で我輩大豪遊をやる、』と須山は俄に元氣附いた樣にハシヤいだ聲で、『長鯨百川を吸ふが如く痛飮して天下のガスモク野郎を罵倒して呉れるワ。ぢやア失敬する、』と云棄てて洋服姿に足早に後戻りして忽ち暗黑の中に消えて了つた。

其途端に久助爺さんが潛門を開けて恭やしく叩頭するを後に純之助は玄關から直ぐ二階へ上つた。銀と濱は周章た睡さうな眼をしてランプを點ける、火鉢に火を煽す、鐵瓶の湯加減を見て茶を淹んで出す、——序に次の室に夜の蓐まで設けて了つた。

お吉は果して在なかツた。銀の談話に由ると此日高橋が來ての懇々の理解に漸く打解けて夕方まで頻りに純之助の歸宅を待侘びてゐたさうだ。到頭待草臥れて必然大磯と見當つけて夜汽車で迎へに出掛けたさうだ。若し純之助と會はなかッたら明朝は一番で歸京つて來るといふ事だ。

『馬鹿なッ、』と純之助は擲出した樣に云つて苦り切つた。

銀と濱が許可を得て引退つた後は既に世間が寐靜まる頃で、左らぬだに物淋しき此邊は寂として夜商人の賣聲さへ絕えて了つた。

純之助は昨夜古田と高橋とにお吉との契終生變るまじと誓つてから今日の葛藤、靜江の苦言、倶樂部の浮浪論客が演說、一々腦裡に繰返して胸に迫來る感慨に、二重外套さへ脫がないで茫然と籐椅子に凭れて了つた。

其心は既に斷然——縱令一時にしろ——墨西哥經綸を拋棄し、暫らく幕天席地の志を韜んでお吉が希望のまゝに銀行會社の配當に喜憂し、牙錢に齷齪する竪子の間に雌伏して家庭の團欒を買けうと決してゐた。で、徐ろにお吉を教育して切めては人道の大義を全く理解せぬまでも自分の事業に安心出來るだけ會得まして然る後再擧を計畫らうと決してゐたのである。

であるが——扨て十年一日の如く志を更めないで、之が爲には靜江に對する愛すら潛伏せしめ、眼中利祿なく名譽なく、況んや酒色の慾望の如きは塵芥よりも輕しとし孜々忽々其一路を志して縕袍粗糲幾年の苦辛に成つた經營畫策を一時なりとも拋棄するは、卞和の璧を抱いて却て刖らるゝ樣な感情がした。

自分の經綸は他の攻略的殖民若くは貨殖的移民と全く違ひて、本と道德の理想に根基したものゆゑ、自分の鄙しき道根と拙き力量とでは畢竟蚊虻山を負ふの大望で或はカベーが實際的腕力なくしてイカリヤ國創建に失敗したほどにも成效しないかも知れぬが——しかしプラトン以來前賢が幾度か企劃して幾度か失敗した理想共和主義を我が溶爐に陶冶して道德的新乾坤を山紫水明の樂鄕に開くは縱令砂上城郭の嘲弄を買つて敗るゝも、丈夫が一世の本懷とするに足る快事である。

自分は飽くまでも聖賢の訓に從つて眞人の道を行く社會的事業だと信じてゐた。然るに敬虔の信仰に富める靜江すら好大是れ喜ぶ尋常の野心だと云つた。況してや無智文盲のお吉が全く理解し得ないは本と當然で、維納の樂人

が妙なる曲は終に牛馬を動かし得ないと同じであらう。勿論一旦お吉を棄てぬと決したからは悠々舒々赤子を教ふる心でお吉の俚心を開發する覺悟だが、果して所存通り自分の事業に同情し得るまでに知識を積め德性を磨き理想を高め能ふやは疑問で——否、我が苦心の效あらしむるは到底不可能なが明瞭であるらしく思惟はるるに、大いなる使命の我が頭上に宿るを棄てても猶ほ區々鈍才下根の一婦人を教ふるに生涯を殉ぜざるを得ざる乎。我は大に惑ふ。

と頻りに反覆熟慮して沈吟する中、偶然とキサンチップを憶出した。此頑硬鷙悍制馭しがたき惡婦にすら忍んだ德量が即ち悠々毒杯を銜んで靜に死を說く大聖人を化現したのだと氣が附くと、俄に毛骨悚然として自分の道心の缺けたる淺ましさが歴然見られる樣な心地がして我知らず慄とした。

鰐魚すら動かした人がある。妖魔すら平らげた人がある。羅刹すら感化した人がある。汎く學び深く考へて詭道險語を蜜よりも甘しとして縱說橫議する曲學異端を笑つて折伏した人さへある。然るに自分は苟りにも道德的新乾坤を創開かんとする獻身の志あつて而も多少放縱にして沒分曉にしろ根が好人物のお吉如きに暫しなりとも念頭を騷がしたは、恰度萬鈞を扛ぐる力ある者が偶々纖毛の輕きを見て却て遲疑したと同じである。自分は勿論口舌巧辯の徒が色を賣り媚を呈し艷言浮詞を盡して叱咤にすら佞する醜を學ばうとは思はぬが、號泣旻天に訴ふる心持で赤誠を示したなら、お吉は忽ち脆くも折れて、或は牛刀鷄を割く樣なものかも知れぬ——と純之助は獨り莞爾として呟いた。『滑稽劇だナア!』

左にも右にも初め赤手を以て事を成さうとしたを、不斗した出來心で豫ての素志に背いて富家の子と養はれたのが生涯の失策であッた。百エクタラや二百エクタラの土地を借りるに若干の金子が要る。墨西哥に渡航するに若干の金子が要る。珈琲の苗、カヽオの苗、葡萄の苗、玉蜀黍や馬鈴薯の栽附をするに若干の金子が要る。堂々たるチワワの殖民會社すら十年前の經營は僅に移民二十戸土地三百エクタラを以て始めたのだ。米國の農夫が一家の獨立とするは土地百エーカー、馬三頭、乳牛五頭、親豚二頭、羊三十頭、鷄五十羽で——自分が事業の基礎とするは是だけの經營で十分であッたのだ。富を墨西哥に作るは海綿を以て水を吸ふより易しといふ格言さへあつて、——自分は勿論殖民の投機を好まない者だが、無資無産の身で容易に勞働獨立の道德を模範的に示さうとするには此饒の樂土を擇ぶに如くはないと確信したので。昔は阿堵物を惜んで黑夜去來する乞食の聲に泣き、朱頓の門に嘯きて妻を娶らば正に嬋娟を提ぐる宦が婦たるべしと豪語したのが、今は則ち食前方丈の榮華に飽くを得ずと却て一銅一飯をも憚らざるを得ざる自繩自縛の守錢奴たるに過ぎないのである。

其初め若し黃金の聲に魅せられただけなら、有川の姓を棄つるは弊履を擲つより容易である。唯だ生中にお吉が戀慕の情あるを知つてお吉不便と思ふと、苟めにも一旦偕老を契つた身が俄に袂を拂つて去るは飽くまでも道德的使命を享けたりと信ぜざるを得ざる多年の志に恥ぢて、左樣右樣思ひ惱んだ末、終に暫らく自ら韜晦してお吉の幸福に殉じようと決心した。

昨夜は古田の老人や媒妁人の高橋に心配掛くるが氣の毒さに決心したを、今日は靜江が潔氣な心栄に恥ぢて決心し直して、復た更に丁寧反覆して同じ決心を愈々堅くした。

斯う決心して了つてから、何事も悲觀せざる純之助の心に想像せらるゝは、今から半年乃至一年經つた後の家庭で、お吉は果して靜江

の様に柔順になツて、靜江は愈々神々しくなツて、二人ながら姉妹よりも一層睦まじくして、自分は目的通りに數萬の資本を携へて墨西哥に渡航し、五千尺の高原に稻田菜園を拓きて拮据經營する傍ら經濟を説き人道を敎ふる快樂で——

「コルテズは戰つて奪ひ、我は耕して濟ふ」と覺えず高聲に叫んで莞爾と微笑した。

只見ると壁上の地圖は明かに我が埋骨の地を畫して自分を歡迎する樣な氣がした、

「先月末に出帆したら、」と呟いて身に染々と長歎した。「既にアカプルコへ上陸して墨府へ行く途中だ……」

セリヤ、マドレの長前峻岳、メスカラ河の急流激湍、サカマヤカの玉蜀黍畑、サンタ、ロサの比丘尼寺、トレスゲルレスの大美術——想像すると墨西哥の風物奇勝が目前に段々現はれて恍然として暫らくは我を忘れた。

壁上の地圖は朦朧の中に次第々々に薄くなツて、ユーカタン半島のあたりが段々黑くなツて、其黑闇々がいつとなく蔓延つて終に純之助の身を包んで了つた。

何處かの山林で、烏木やマホガニイやセダーやワナカステやが蓊然として下草の茂れる中に孑然と佇立んだは有川純之助で、上野を散歩いた時の紺メルトンの二重外套を着てゐた。

「イリユージョン！」と高く叫んで竊と眼を開いた。が、いつか段々眼瞼が重くなツて來ると、其黄色い玉が數限りなく眼前に轉がり出して、其煩さに拂つても拂つても消え切れないで、次第に此無數の玉が遠くなツたかと思ふと、身は何時か黄砂漫々たる大道を右に低い片跛の驢馬に乘つて旅してゐた。左右は蓊鬱たるマホガニイの大森林で凹陷凸起せる惡路を薄暗くし、漠々として見ゆる涯なき眞直の路を自分の外は人氣なく、馬背に心細く搖られつゝ行く中馬は俄に暴出して驀地に森林に馳込んだ。で自分は一生懸命に鞍壺にかじり附いてゐると、いつか森を乘越して馬上の人より高い龍舌蘭の重なり合つて生茂る處へ來た。一際目立つた大きな葉の蔭に大瓶を背負つた髯男がマゲイの汁を頻りに吸つてゐるのが見えた。

其傍に淡色のソムブレロを被つた同じ樣な女が二人立つてゐた。其面貌が、一人は靜江に、一人はお吉に肖てゐたので、何だか不思議になつて西班牙語で髯男に、

"Son ellas sus hermanas de V?"

と聞くと、男も女も素知らぬ顏をしてスタ〳〵と振向きもせずに龍舌蘭の中に隱れて了つた。で、狂人の樣になツて其跡を追つて彼方此方と搜すと何處からか靜江の聲其まゝの美音で、

"……El camino del vi cio,

Nunca bonne quer ir stuh spacioso,

Hasta esta tarde……"

と唄ふのが鮮かに手に取る樣に聞えた。

はツと思つてこゝの邊と見當附けて馬から下りた。で、ムシャクシャに草を掻分けて行くと何時の間にか此森を離れて茫漠たる大原野が眼前に擴がりて遙にポポカテペトルの丁度富士を二つ列べた樣な、其下に尖つた屋根がゴタゴタと突出てゐる町が小さく見えて、何でもフエブラの古戰場らしくて、思はず恍然と景色に見惚れてゐると、遠くの方から豆の如き馬乘の女が段々近ついて來た。只見ると黑ツぽい鬟の有る衣物に燦々光る寶石をいくつとなく飾つたのを着た豐頰曲眉の美人で何處かセニョーラ、カルメリタに肖てゐた。すると近づくに從つて其氣高い神々しい容貌が段々と靜江に變つて來たので、呀と消魂を上げて其踵を追つた。女の徐々行くのが怎麼しても追付かれないで、次第次第に遠く消えて了つた。で、微に——「El camino del vicio……」と唄ふの聲風に傳はツ

て聞えた。

其腸を斷る樣な淋しい聲が呑かしさに口裡で繰返して口吟むと、其聲が東西南北に反響して草も木も天も地も"El camino del vicio"で一杯となツて終には殷々碌々たる雷鳴と變じて朦々たる黑霧が再び純之助を包んで了つた。――で忽ち豁然と眼を覺ました。

暫らくは茫然と氣の拔けた樣に窮窟の間に低迷してゐたが、忽ち復た同じ聲が耳の底を劈くと純之助は猛然起つて身を慄はして步き出した。何かなしに此"El camino del vicio"が自分を警戒する靜江の聲である樣な氣がして終に斷然家庭に身を殉ずる決心の臍を堅くした。

惻々たる夜の寒さは身に浸徹つて鐵瓶の沸る音のみ高く、熒々たる讀書燈の圓圏に照らされたプレスコットの征略史は俄に色褪せて悵める樣に見えた。背戸のあたりに獅子の如く嘯くブルドッグの聲は物凄まじく寂寞を破つた。

* * * *

明くれば戊の春元旦。有川令夫人吉子の方は紋附三枚襲ねの禮服で華美々々しく作粧り立ててゐた。殊に目に立つ白茶地蓬萊模樣の金入繻珍の帶と金脚七分の淡色珊瑚の簪とは來客を驚かした。殊に明くれば二十五の奥樣が大切さうに立派な三人立の羽子板を抱へてゐたは愈々來客を驚かした。で、ツイ四日前の癇癪を全で忘れた樣に機嫌よく、朝から庭向で小間使の濱を對手にキャッ〳〵とはしやぎ切つてゐた。

靜江は歳末に押迫つてから外國婦人と一緒に何かの用事で俄に關西地方へ旅行して了つた。

早朝に一束の年始狀と共に屆いた淺草と消印した須山平四郎の手紙は、「近日大不平大憤悶。中山千日の酒に忘れんとして流連數日。輕囊傾盡して豪興猶ほ未だ盡きず。若し重ねて君が買山の錢を辱うして更に暫らく僕をして青州從事君と親むを得せしめば幸福無疆、君が爲に三度大白を擧げて將に天下の豪傑を罵殺せんとす」云々と筆太に蚯蚓流を蜿蜒らしてあッた。

一番早かツた年始客が尾髙の旦那で、春の屠蘇機嫌で一段陽氣に「でがすからナ」を拝廻した。正午近き頃ホルスタイン君、パルセロン君、黑瘦辯士君の三人が一緒に見えて、二階は一日の酒宴にホルスタイン君の濁みたる聲が"ニー！ ニー！"と唄ひ出して得意なサモアの踊が始まツたらしかツた。

庖廚では渠が忙かしさうに去年の着物のまゝ働いてゐた。

「久助どん、」と竈の前に蹲んでゐた[illegible]卷に向つて、『能くまア旦那樣は辛抱なさツたネ？』

「まだ〳〵、」と久助爺さんは鼻頭の水洟を滴らしさうに鉈切の壞れたのを繕つて、「之から中々難かしかんべエ。」

(本篇は腹案なる長篇の發端とも見るべきものなれば文技の拙きに加へて作者の感慨未だ盡きざる處多かるべし讀者諒焉〇三十一年二月十九日脫稿)

◇

(延寶頃の流行唄なるべし。

「三谷堤下に大きな奴が捨ててある。さだめしきんきめ綱かでごんちやるからは女郎の子でごんちやるべえ」

愛鶴軒の主人より聞きたれば何かの珍書にあるなるべし。當時の江戸詞を知るに、これは頗る面白し。

([illegible])

文學者となる法



Lo! Those Ōbake to
belle-lettres fly!
In vain! They dip, turn
giddy, rave and die!

謹みて遼東の豚の子一匹を今の文學者各位の前に呈す

(百木の中屋)

序

こゝ神田鍋町の麥酒屋に寄合ふ「[illegible] Club」に折々顏を見せる三尺八寸の大入道あり。團栗眼を光らして濃厚粧の姉さんを凝視めながら廣くもなき部屋の隅々を九十度の角を作りて上下するは飛ンだ氣紛れなスウヰフトどのと、我れ一文字屋風帶恐る／＼席を進んで先生の高名[illegible]に聞くを得んとアヂソンの二代目を極込めば、入道尻目に掛けて冷然として云へらく、『何と申す‥‥己の名が聞きたいか、己はナ、三文字屋金平ぢやぞ』と、聲「ニコライ」の鐘よりも大なり。『さては金平どのでおぢやるか‥‥と申して聞いた事もなき名なれども我より二文字屋多きだけにて天晴當世無雙の大豪傑とお見受申す。何か一ツ教へて下されㇾ』。先生かッと痰を吐いて大喝すらく、『退け、退け！　何奴もこいつも青瓢箪よろしくだ‥‥とそンな野暮は云はぬから安心しろ。己も岡清兵衛殿御内にゐた頃は武勇拔群の譽を得たもンだが、斯う太平が續いた日には力瘤が拔けて何の役にも立たぬ。そこで、實はナ、近日のうちに髮を刈込み鬚を剃り「ポマドンヌール」でも塗りちらしていゝぐッと當世になる考だ。見掛は恐ろしい大入道でも、昔取ッた杵柄で諸事萬事の魂膽に行渡ッてゐる己様なればこそ時勢を見て直ぐ宗旨を變へる。貴様たちのやうな頑童にはこゝの調子が合點行くまい。堂ぢや教へて呉れうか‥‥ヤイ／＼何とか返事をしろ、木葉野郎め！』。一座吃驚仰顚して眼ばかりハチつかせる中に我れ漸くガタガタ慄へる身を堅め、「先生願はくは怒鳴り給ふな。御講釋は隨分辛抱して聞きませう」と仕方がなしに下から出れば、『然らば說法して呉れう』と上座に直りてニタリ／＼と笑ひ、呆れた顏の姉さんを横目で睨み澁茶をぐッと引掛けて、『是は眞言祕密の教だが、辛抱して聞かうといふ殊勝にめでて說法して呉れる。耳をほッ立てて能ッく聞け』と、初めは鰻のヌラクラするが如く、中頃は飄風砂礫を捲くの勢にて、終りは潤水滑々として石竅を穿つの辯をもて饒舌りたつる事凡そ四時間。姉さんは呆氣に取られて心の内に「きッと天麩羅を喰べて來たンだよ」。我は汗を流して一心にさら／＼さッと筆記したれど何の事やら更に分らず。

二十六年の大晦日前三日

弟子分　一文字屋風帶　識す

目次



原本の口繪
(菊二倍大の木版十數度刷にして中央の道標には「骨あるもの入るべからず」「是より文學園」看板には「名物骨ぬきだんご」とあり)

○「インスピレーション」○新體詩人の三病○敍事詩の役目○意味の分らぬが「ドラマ」及び新體詩の極意なり○小說○戲作小說家の說○悲劇○女主人公○男主人公（男が惚れる時は女も惚れる○戀愛小說の順序○當世京小說○戀愛小說家たらんとする者の心得○戀愛小說○惡人と善人との不必要○傑○江戶ツ子の見本○評釋を聞く事○批評の工夫○某先生の大著述○チ、イと工風して、チ、イと筆を競ふ○ウヰリヤム、ブラック及び其他の作者○ヂ、ケンスとスコットとサ、カレー○お手輕主義○幸福先生の操觚事業○外山大先生○著述家たらんとする者は幸福先生を學ぶべし○著述の順序○先づ雜誌或は新聞に寄書すべし○初めて新聞に載りし時は嬉しがるべし○新聞或は雜誌に載りし後は主筆に面會すべし○無暗矢鱈に投書すべし○如何にして書肆と關係を結ぶべきや○ポープが書肆を咏める詩○カールと大橋佐平氏○和田篤太郎氏○出板人の大氣量○書肆の主人と操觚者○英國の出板人○お宮廻りの職人○人氣○書估は人氣の保證者なり○學者不十分の病人○賣れッ子の原稿料○書肆の黑幕宰相○ヨカ〳〵の飴賣と文學者○卑〳〵文學者○社會の報酬

爲文學者經

三文字屋金平　述

棚から落ちる牡丹餅を待つ者よ、唐様に巧みなる三代目よ、浮木をさがす盲目の龜よ、人參呑んで首縊らんとする白癡漢よ、鰯の頭を信心するお怜悧連よ、雲に登るを願ふ蚯蚓の輩よ、水に影る月を奪はんとする山猿よ、無爲無能食もたれ總身に智慧の廻りかぬる男よ、木に縁つて魚を求め草を打つて蛇に驚く狙獵者よ、白粉に咽せて成佛せん事を願ふ艶冶郎よ、鏡と睨め競をして頤をなでる暗昇屋よ、惣て世間一切の善男子、若し遊んで暮すが御執心ならば、直ちにお宗旨を變へて文學者となれ。

我が所謂文學者とはフィヒテが„Ueber das Wesen des Gelehrten"に述べたてしむづかしきものにあらず。内新好が『一目土堤』に穿りし通仕込の御作者様方一連を云ふなれば、其職分の更に重くして且つ尊きは豈に夫の扇子で前額を鍛へる野幇間の比ならんや。

夫れ文學者を目して豫言者なりといふは生野暮一點張の釋義にして到底㗴の出來るやつにあらず。我が通仕込の御作者様方を尊崇し其利益のいやちこなるを欽仰し、其職分をもて重く且つ大なりとなすは能く俗物を教へ能く俗物に渇仰せらるゝが故なり、（渠等が通の原則を守りて俗物を斥罵するにも關はらず。然しながら縱令俗物に渇仰せらるゝといへども路傍の道祖神の如く渇仰せらるゝにあらず、又賞で喜ばるると雖ども親の因果が子に報ふ片輪娘の見世物の如く賞で喜ばるゝの謂にあらねば、決して〳〵心配すべきにあらず。否な、俗物の信心は文學者即ち御作者様方の生命なれば、否な、俗物の鑑賞を辱うするは御作者様方即ち文學者が一期の榮譽なれば、之を非難するは畢竟當世の文學を知らざる者といふべし。

此故に當世の文學者は口に俗物を斥罵する事頗る甚だしけれど、人氣の前に拜屈して其奴隸となるは少しも珍らしからず。大入だ評判だ四版だ五版だ傑作ぢや大作ぢや豐年ぢや萬作ぢやと口上に咽喉を枯らし木戶錢を半減にして見せる緣日の見世物同様、薩摩蠟燭てら〳〵と光る色摺表紙に誤魔化して手拭紙にもならぬ厄介物を賣附けるが斯道の極意、當世文學者の心意氣ぞかし。さりながら人氣の奴隸となるも畢竟は俗物濟度といふ殊勝らしき奥の手があれば強ち無用と呼ばはるにあらず、却て之れ中々の大事決して等閑にしがたし。俗人を教ふる功德の甚深廣大にしてしかも其勢力の强盛宏偉なるは熊膽奇丹の販路廣き

をもて知らる。洞簫の聲は嚠喨として蘇子の腸を斷りたれど終にトテンチンツトンの上調子佻つぽきに如かず。カントの超絶哲學や餘姚の良知說や大に即ち大なりと雖ども臍栗錢を捲摺り出すの術は遙かに生臭坊主が南無阿彌陀佛に及ばず。されば大恩教主は先づ阿含を說法し志道軒は隆々と木陰を揮回す、皆之れこゝの呼吸を呑込んでの上の咄なり。流石に明治の御作者樣方は通の通だけありて俗物濟度を早くも無二の本願となし俗物の調子を合點して能く幇間を叩き、お髭の塵を拂ふの工夫を大悟し、向う三軒兩隣りのお蝶丹次郎お染久松よりやけにひねつた「ダンス」の Miss B. A. Bee. 瓦斯絲織に綺羅を張る印刷局の貴婦人に到るまで隨喜渇仰せしむる手際開闢以來の大出來なり。聞けば聖書を糧にする道德家が二十五錢の指環を奮發しての「エンゲージメント」、綾羅錦繡の雛樣が玄關番の笛助君にいゝの〳〵を極め込んだ果の「ニローブメント」、皆之れ小說の功德なりといふ。よしや一斗の「モルヒネ」に死なぬ例ありとも月夜に釜を拔かれぬ工夫を廻らし得べしとも、當世小說の功德を授かり少しも其利益を蒙らぬ事曾て有るべしや。冒險譚の行はれし十八世紀には航海の好奇心を煽し、京傳の洒落本流行せし時は勸當帳の紙數を増加せしとかや。抑も辻行燈廢れて電氣燈の光明赫灼として晝夜なき明治の小說が社會に於ける影響は如何。「戯作」と云へる權袴を脱ぎ「文學」といふ冠着けしだけにても其效果の著しく大なるは知らる。

英吉利は野暮堅き眞面目一方の國なれば、人間の元來醜惡なるにお氣が附かれずして、ゾオラが偶々醜惡のまゝを寫せば青筋出して不道德文書なりと罵り叫く事こそとは野暮の行き過ぎ餘りに業々しき振舞なり。さりながら論語に唾を吐きて糟粕を六韜三略とする當世の若檀那氣質は其れとは反對にて愈々賴もしからず。東京の或る固執派教會に屬する女學校の教師が曾我物語の插畫に男女の圖あるを見て猥褻文書なりと叫ンだ感違ひして爐中に投込みしといふ一ツ咄も近頃笑止の限りなれど、如何考へても聖書よりは小說の方が面白いには違ひなく、教師の眼を竊んでは一よく〳〵ッてよ[illegible]讀小說に現を拔かすは近頃の女生徒氣質なり。例へば頭を打つては[illegible]も青年男女にして小說讀まぬ者なしといふ鑑定は恐らく外れッこなかるべし。

俗界に於ける小說の勢力斯くの如く大なれば隨て小說家卽ち今の所謂文學者のいゝいゝチヤホヤせらるゝは人氣役者も物の數ならず。此故に[illegible]き血の[illegible]尖せて白粉の香鼻を突く太平の御代にては小說家卽ち文學者の數次第々々に增加し、[illegible]は花は見ぬ里もあれど、[illegible]寄る北海の濱邊、[illegible]る九州の山奧に到るまで[illegible]ざるの地なしと鼻うごめかし[illegible]學の功德無量廣大なるを說く當世男[illegible]なり。[illegible]涉翁は[illegible]化の一人子であると[illegible]を振染り西鶴は九皐に[illegible]ンだ通を拔かし、何かにつけては文學[illegible]をして田舍者の緋メレンスは鮮かだから美で江戸ッ子の盲縞はいゝだから美でないといふ滅法の大[illegible]に近所合壁を[illegible]す事少しも珍らしからず。好[illegible]な統計家が概算に依れば小遣ひ帳に元祿を[illegible]人迄算入して凡そ一町內に百ダースを下る事[illegible]

あるまじといふ。
夫れ臺所に於ける鼠の勢力の法外なる飯焚男が升落しの計略も更に討滅しがたきを思へば、社會問題に耳傾くる人いかで此・町内百・ダースの文學者を等閑にするを得べき。若し惣ての文學者を驅つて兵役に從事せしめば常備軍は頓に三倍して強兵の實忽ち擧がるべく、惣ての文學者に仕拂ふ原稿料を算れば一萬噸の甲鐵艦何艘かを造るに當るべく、惣ての文學者が消費する筆墨料を徴收すれば慈善病院三ッ四ッを設る事決して難きにあらず、惣ての文學者が喰潰す米と肉を蓄積すれば、百度饑饉來るとも更に恐るゝに足らざるべく、若し又惣ての文學者を一時に殺戮すれば其死屍は以て日本海を埋むべく其血は以て太平洋を變色せしむべし。
文學者は一の社會問題なり、貧民か、僧侶か、娼妓が社會問題となれる如く。
熟々考ふるに天に鳶ありて油揚をさらひ地に土鼠ありて蚯蚓を喰ふ目出度き中に人間は一日あくせくと働きて喰ひかぬるが今日此頃の世智辛き生涯なり。學校の卒業證書が二枚や三枚有つたとて鼻を拭く足にもならねば高が壁の腰張か屏風の下張が關の山にて、偶々厄介にして一簞笥に藏へば縱令へば蟲に喰はるゝとも喰ふ種には少しもならず。學士でげの何のと云ッた處で味噌摺の法を知らずお辭儀の禮式に熟せざれば何處へ行つても敬して遠ざけらるゝが結局にて未だしも敬さるゝだけを得にして責めてもの大出來といふべし。ミルトンの詩を高らかに吟じた處で饑渇は中々に醫しがたくカントの哲學に思を潜めたとて嚴冬單衣終に凌ぎがたし。學問知識は富士の山ほど有ッても麵包屋が眼には嘅錢一文の價値もなければ取ッけエべエは中々以ての外なり。トヾの結局が博物館に乾物の標本を殘すか左なくば路頭の犬の腹を肥すが世に學者としての功名手柄なりと愚癡を零す似而非ナッシュは勿論白癡のドン詰りなれど、さるにても笑止なるは世の是沙汰、飯粒に釣らるゝ鮒男がヤレ才子ぢや怜悧者ぢやと褒めそやされ、偶さか活きた精神を有つ者あれば却て木偶のあしらひせらるゝ事沙汰の限りなり。騙詐が世渡り上手で正直が無氣力漢、無法が活潑で謹直が愚圖、泥鼈は天に舞ひ鳶は淵に躍る、さりとは不思議づくめの世の中ぞかし。
斯る中にも社會に大勢力を有する文學者どのは平氣の平三で行詰りし世を屁とも思はず。春うら／＼蝶と共に遊ぶや花の芳野山に玉の巵を飛ばし、秋は月てら／＼と漂へる潮を觀て綸島の松に猿なきを怨み、嚴冬には炬燵を奢の高櫓と閉籠り、盛夏には蚊帳を榮耀の閑小屋として、米は俵より涌き錢は蟇口より出づる結構な世の中に何が不足で行倒れの茶番狂言する事かとのンきに太平樂云うて、自作の小説が何十遍摺とかの色表紙を付けて賣出され、二號活字の廣告で披露さるゝ外は何の慾もなき氣樂三昧、あッたら老先の長い青年男女を墮落せしむる事は露思はずして筆費え紙費え、高が大家と云はれて見たさに無暗に原稿紙を書きちらしては屑屋に忠義を盡すを手柄とは心得るお目出たき商賣なり。月雪花は魯か犬が子を産んだとては一句を作り猫が肴を竊んだとては一杯を飲み何かにつけて途方もなく嬉しがる事おかめが甘酒に醉ふと同じ。
斯くの如く文學者は身分不相應に勢力を有し且つ身分不相應にのンきなり。世に氣樂

なるものは文學者なり、世に羨ましき者は文學者なり、接待の酒を飲まぬ者も文學者たらん事を欲し、落ちたるを拾はぬ者も文學者たるを願ふべし。

然るに世にすいねたる阿呆は痛く文學者を斥罵すれども是れ中々に識見の狹陋を現示せし世迷言たるに過ぎず。冷靜なる社會的の眼を以て見れば、等しく之れ土居して土食する一ッ穴の蚯蚓螻蛄の徒なれば何れを高しとし何れを低しとなさん。濁醪を引掛ける者が大福を頰張る者を笑ひ黄色に現を拔かす者が女房にデレる鼻垂を嘲る、之れ皆他の鼻の穴の廣きを知つて我が尻の穴の窄きを悟らざる烏滸の白者といふべし。窮理決して迂なるにあらず實踐何ぞ淺しと云はんや。肴は生臭きが故に廉からず蔬菜は土臭しといへども尊し。馬に角なく鹿に鬣なく犬は喈と啼いてじやれず猫はワンと吠えて夜を守らず、然れども自ら馬なり鹿なり犬なり猫なるを妨げず。稼ぐものあれば遊ぶ者あり覺める者あれば醉ふ者あるが即ち世の實相なれば己れ一人が勝手な出放題をこねつけて好い子の顏をするは云はう樣なき沒分曉漢言語道斷といふべし。縱令石橋を叩いて理窟を拈る頑固黨が言の如く、文學者を以て放埓遊惰怠慢癡呆社會の穀潰し太平の寄生蟲となすも、兎に角文學者が天下の最幸最福なる者たるに少しも差閊なし。然るを愚圖々々と賢しらだちて罵るは隣家のお菜を考へる獨身者の繰言と何ぞ擇まん。

加之、文學者を以て怠慢遊惰の張本となすおせッかいは偶々怠慢遊惰の却て神の天啓に協ふを知らざる白癡なり。謹んで慮るに神の御惠洽かりし太古創造の時代には人間無爲にして家業といふ七むづかしきものもなければ稼ぐといふ世話もなく面白をかしく喰つて寢て日向ぼこりしてゐられたものの如し。アダム――の二本棒が意地汚さの撮み喰さへ爲ずば開闢以來五千年の今日まで人間は樂園の居候をしてゐられべきにとんだ飛ッ塵が働いて喰ふといふ面倒を生じしは扨も迷惑千萬の事ならずや。神が創造の御心は人間を樂ましめんとするにありて苦ましめんとするにあらず。無爲は天則なり、無精は神慮に協へり。正直の頭に神宿る――嫌な思をして稼ぐよりは眞ッ正直に遊んで暮すが人間の自然にして祈らずとても神や守らん。文學者を以て大のンきなり大氣樂なり大阿呆なりといふ事の當否は兎も角も眼ばかりパチクリさして心は藻脫の殼となれる木乃伊文學者は豈に是れ人間の精粹にあらずや。

且つ又聖經の教ふる處に依れば天國に行かんとすれば是非とも小兒の心を有たざるべからず。小兒の如くタワイなく、意氣地なく、瀞白で、だゝをこねて、遊び好きで、無法で、沒分曉で、或時はお山の大將となりて空威張をし、或時はデレリ茫然としてお芋の煮えたも御存じなきお目出たき者は當世の文學者を置いて誰ぞや。

文學者なる哉。**文學者なる哉**。天變地異を笑つて濟ますものは文學者なり。社會人事を茶にして仕舞ふ者は文學者なり。否な、神の特別なる最屓を受けて自然に「ミユーズ」でさるゝものは文學者なり。**文學者なる哉**、**文學者なる哉**。

我れ文字屋金平風に救世の大本願を起し、終に一切の善男善女をして悉く文學者たらしめんと欲し、百で買ッた馬の如くいゝのたり〳〵として工夫を凝し、頭を拈る事一萬疋に及びし時酒屋の廝童が「キンライ」

眼を開いて豁然大悟し、茲に椽大の椎實筆を揮つて汚く衆生の爲に爲文學者術を說明せんとす。

何からしても何から見ても文學者は最幸最福なる職業なり。我が其著與業の說法を聴かるゝなく、一途に有がたがつて盲信すれば此書から、辯業往生決して難きにあらず。景氣の下落を心配する商賣人、月給の減額に頭を痛むる官吏先生、若くは身體にも一てあますもたれの貧乏少才、無暗に首を捻りたがる讀子の中、宜しく此說法を聽聞し而して一ぱし文學者となれ、何と容易の仕事にして天下を驚かす、重臣列朝よりも甚だしく天下に評判さるゝ、自讃美男よりも隆んなるは唯夫れ文學者あるのみ。文學者あるのみ。

第一　文學界の動靜を知る法

文學者となる前に先づ文學界の通即ち通人者となるを要す。例へば爾を食らんとするに臨みて一讀、あゝ經驗の支度萬端並にとかく一の頭より尻を心得るが肝要なる如く今の文學界を一ト通り見渡して始終其大體模様を觀察し其内幕を洞視するの明を養はざるべからず。若し此邊の心得なくして、お先真闇に文學界に飛込めば、恰も八幡の藪に入りしが如く許底有漏無漏の間に彷徨して損勞れがする許りならん。

さて如何にして文學界の通となり得るかといふに極めて容易なる一法あり。先づ新聞は國民、讀賣、朝日の三種にて、理由なれば政治や何や彼は措いて、國民なれば湖處子愛山生並に[illegible]主人の小說紀行文若くは評論、讀賣なればば小說及び雜錄、朝日なれば小說の外題撰六の口上及び竹の屋の紀行文或は劇評を油斷なく讀むべし。

又雜誌は國民之友、女學雜誌、早稻田文學、三籟、文學界、[illegible]草紙等を讀むべし。讀まずとも可ない、讀者の目錄たけ見れば理由なし。

斯くて一ト月も新聞雜誌を研究すれば文學社會に通ぐ人の名だけは覺えらるゝ。而して一々、名の出るを大家なりと心得べし、二號活字にて廣告せらるゝを愈々立派なる大家なりと心得する事肝心なり。例へば由來愛山先生は一週間に三四度位宛、時に依れば毎日續きて國民新聞に名の出る事すらあれば勿論大家なり。又江見水蔭中村花袋諸先生の小說はいつでも二號活字で讀賣新聞に廣告せらるゝが故に、正札附の大家といふべし。

大家といふは役者の看板の如く、活版の舞臺に出る時は如何しても被らねばならぬものなり。夫故ミストル何某は大家にあらずとするも何じ其人が何々居士或は何々屋何と名乘つて活字に上る時は既に／＼大家なりと心得べし。大家を尊きものゝ如く考ふるは非なり。誰も彼も等しく皆大家なりと自他平等に考へて少しも偏頗あるべからず。

昔の噺に世事の好きな結床の親方が何人を見るも必ずイヨ、色男！と呼びし如く、如何なる文學者を見るもイヨ、大家！とあしらふ事是れ第一の秘訣也。

大家の名を覺え終れば略ぼ區分を爲して忘れぬ様に腦に刻むべし。今[illegible]者の爲め假に分類して一目瞭然たらしめば、

民友社派
(1)十二文豪大家
(2)日曜講壇大家
(3)人物評及び史論大家

女學雜誌派

(1)『ドラマ』大家
(2) 武道禪大家
(3)『隨感大家』 一名『泪』の大家、ことに堅苦及び古文切拔大家とも云ふ
(4) 俳諧切拔大家

三籟派
(1) ……ミ大家
(2) 飜譯大家 一名法語切拔大家とも云ふ
(3) 欄邊大家 附鳴棒大家

讀賣新聞社派
(1) 支那大家 一名反古紙張繼大家とも云ふ
(2) 月曜附錄大家 附「ポンチ」繪大家
(3) 雜俎大家 一名樂屋落製造大家ともいふ

朝日新聞社派 一に樂々會派とも云ふ
(1) 旅行大家
(2) 劇評大家
(3) 樂屋吹聽大家
(4) 茶番大家

硯友社派
(1) 詩滴大家
(2) 小櫻縅大家
(3) 口上茶番大家
(4) 引札大家

この外早稻田派、柵派等數へ上ぐれば中々多けれど、ざつとこゝらを飲込めば十分なり。少し位は分類法正鵠を得ざるも差支なし。唯記憶の便宜を計りて區分せしなれば名目の如きは各々の勝手にて、或る一派を目して跡引大家、他の一派を稱して駄洒落大家など名附くるもよし。

兎にかく都合好き樣に工夫して諸大家の名を飲込めば、主として早稻田文學の文界現象を基礎となし、次第々々に揣摩を逞うすべし。少々位間違ッた處で毒にならぬ事はいくら『通』を極めても大事なし。

近頃歐羅巴の批評法は其著作と其著者の傳紀とを併觀するを以て一般の通則とす。蓋し境界の勢力は人の製作に影響を與ふる事極めて大なればなり。

今の文學者が作を讀むに當つて此邊の覺悟があれば愈々妙なりといふべし。例へば愛山生が新婚後鎌倉に遊びし紀行を國民新聞に載せられし時、僅かに一欄半に過ぎざる文中に『細君』なる文字を凡そ二十有餘數ふるを得たるなど愛情濃やかなる容子中々に奧ゆかし。又女學記者が關西に旅行せし日記中に『かの人』なる文字を發見する事頗る夏蠅き程なりき。『かの人が縫うて異れし下着』『かの人が簡んで異れし茶』『かの人が笑うて異れし失策』等の如し。又近頃國民新聞に連載せられし『小生涯』を讀めば湖處子が sweet home ありありと眼前に見はるべし。こゝらに目を附けるが極めて肝要なればゆめゆめ油斷あるべからず。

總て文學社會の天氣觀測者たらんとするには一を聞いて十を吹聽する勇氣と是非に關はず雷同する公共心とを蓄へざるべからず。例へば誰それが妻を貰つたと聞けば直にあの細君には中々の曰くありだと吹聽し、二十五座の新狂言は面白いと云へば見ても見ないでも面白いと雷同するを可しとす。殊に文界知名の人は成るべく秘密である如く振れ回るは昔も今も變りなく三馬時代の犬悅馬骨の心意氣と同じ。

一寸見本を擧ぐれば、

『イヤモウ文人交際も恐れるよ、此頃小石川へ行つて駄法螺と澁つ茶でいぢめられた時は嘔吐を催したネ。又此間は向島へ行つたら用が有るといふのに無理に引留められて三日三晩飲通して五臟六腑を酒浸しにしちまッた。昨日は昨日で根岸がやツて來て何でもかんでも交際へと云はれて到頭三崎座へ引摺られた。イヤハヤ樂隱居なら好からうが忙がしい身體ぢやア少と閉口する』だが文人は何だか嬉しいよ。今年の月見に大勢呼んだ時にも牛込連中は茶番をする、

根性一まきは洒落の掛合をする、どンなに陽氣だッたか知れねヱ、君なんぞも少と交際をして見給へ、職人なんぞと逆つて飛んだ高尚で面白い事がある。第一世間に廣く名が賣れて慾得づくから云ニャア廣告料が出ずに濟むといふもンだ。ソレ君も見たらう、此間の讀賣新聞に僕の新舊を混した牛込の狂文が出てゐたらう。其中には古藤庵が十五六頁の「ドラマ」を作つて呉れると云ふはずだ。借なンぞは俗物だから鰹節を買つた方が好いといふかも知れンが、此お影で僕の名が後世に殘るから有がたいよ。ホイ忘れた、是から小梅の忘年會に行かざアなるめヱ。イヤハヤ何ンの彼ンのと面倒で堪らぬ。」

當世の太平樂は以上の修行にて十分自由自在に吐く事を得べし。

文學の「通」と云はるゝには——小說を書けとか「ドラマ」を作れとか勸められるが其ンな面倒臭い事は嫌ひだ——と吹聽するが肝心にて、己が筆を採れば天下の文學相場が狂ふ」と云はぬ許りの容子を煙草の烟の中に見せるが奥の手なり。新聞雜誌の修行を十分積んで此奥の手を心得れば天晴文學の「通」と云はれて管待さるゝ事請合なり。

しかしながら文學者を罵るは無用なり。好き程に罵るは愛敬あれども餘りに手厳しく云ふ時は出世の蔓を失ふ恐れあれば謹むべし。苟にも文學者とならんとする所存あるものにして先輩を罵るは禮を知らざるばかりか身の程を忘れたりといふべし。

豐川様のお狐を見よ。八方よりためつすがめつ瞻視めた處で紛れもなき獸體なれば尊ぶに足らぬは勿論なれど、之を稻荷の使はしめなりと思へば有がたがるは當然なり。今の文學大家が如何程にエラキかエラクなきかは別問題として兎も角も「アポルロ」神の權化なれば信心渇仰決して怠るべからず。況んや今の文學大家は豐川様のお狐よりも更に大々怜悧なるに於てをや。

然れども猶ほ初心なるウブの文學通が輕卒に先進の諸大家を批判する事の却て錯誤に落ち易きを危みて爰に今の文學の偉大なるを告ぐべし。

1 民友社派は平民文學の代表者なり。平民主義とは"Commonism"の義なれども此社の特色は往々"Vulgarism"と混同するにあり。平民文學とは必ずしも淺薄浮貶を意味するにあらねど、廣き範圍に說法するには勢ひ平凡にして入り易き思想と文字を以てせざるべからず。此故に此派の人は詩若くは哲學に耽る人を嘲つて高蹈と呼び仙人と目す。深奥なる思想は白雲以上なりと笑はれ、玄妙なる言詞は蛇行文字なりと罵らる。誠に千古の卓見と云ふべし。

此派の文學大家は既に此卓見を抱懷するが故に其博宏なる學識を藏し其高深なる思想を曲げて態々俗人に投じ易き文字を作る。其大深切心は我等凡々社會に深く感謝せざるべからず。若し又「十二文豪」其他を以て淺膚なりといふ不心得者あらば、其蒙を啓かしむるが爲に平民主義の凡俗主義に等しきを講釋して以て民友社擁護を勤むる事文學熱心家の義務といふべし。

2 早稻田派は沒理想の本家本元なり。古人曰く一字の恩忘るべからずと。「沒理想」なる破天荒の學語を教へし此派の大恩は決して〳〵忘るべからず。

早稻田派はシェークスピーヤの氏子なり。若し强將の下に弱卒なしといへる言を信ずればシェークスピーヤの氏子が中々の豪傑なる事は信ぜざらんと欲するも豈に得べけんや。

早稻田派は勸工場文學のお祖師様なり。若し勸工場が明治の商業を發達せしものならんには早稻田の文學が今日の文界に長足の進歩を與へん事決して疑ふべからず。

早稻田派は"Paradoxical"のお護符授與所な

り。此お護符は定見もなく膽識もなく總ての事物を判ずるに矛盾衝突撞着を生じて常に迷宮に彷徨する我々鈍物に安心立命を與ふる利益あれば、之を授與する早稻田派の大慈悲心は飽くまでも崇仰せざるべからず。無法なる感違ひをなし向う不見の議論をなす屁痢理窟家は此派の馬標『パラドックス隨分結構如來』を仰ぎ見てホツと一ト息したるは更に疑ひなし。

兎も角早稻田派は明治文學の先覺なれば之を尊み奉る事土でつくねた天神樣に於けるが如く白木のお三寶の上に安置するは後進文學生の義務なりとす。殊に此派は能く見識を落して諸方に雜兵を派遣し我々に御注進を勤むる事近頃御苦勞千萬なれば毎朝此泥の天神樣にお水を供へる心をもて感恩のお祈禱をなすは頗る妙なりといふべし。

(3)女學雜誌社派と文學界派及び三籟派は萬更他人にあらず。縱令兄弟にあらずとするも隣同士位の關係あるべし。其證据には盆や彼岸に牡丹餅の取遣をするが如く三派の豪傑は互に文章の交換をなして各々機關雜誌に掲載す。此派の人は一般に基督教社會の大通なり。就中女學雜誌社派は能く自ら大通なる事を知るが故に恰もポーロが宣言する如く諤々の辯をなすをもて長處とす。此派を目して頑迷なりと云ふは極めて非なり、此派の頑迷らしきは宗派心厚きに依る、(但し此宗派心とは例の“Sectarianism”の如き狹陋なるものにあらずといふ)。

此派は禁酒廢娼の大名家なり又教會論の大特色を有てり――一言すれば社會改良の大先生なり。獨り改良する必要ある社會を改良するに止まらで改良せざるも毫末の差閊なき社會をも改良せんとし、自然に改良されべき順序をも關はず人爲的に改良し得べき全能あるものと信じ、改良の方法若くは效果は更に研究せずして直ちに改良せんとする大決斷力を有し、社會に同情する如き面倒を避けて強ひて自己に同一ならしめんとする大勇氣凜々たる豪傑なり。

三籟派も又中々の大通なり。此派は人爲の「クリード」を奉ずるを屑とせずして全然基督教と背反する大哲論を發表する勇氣を有てるほどの大通なり。之を嘲つて“Heathen Christian”など云ふものあれど三籟派はさる烏滸なるものにあらずして今日最も進歩したる所謂“Pantheistic deism”を主張する大達眼者也。又此派の長處は法語語錄樣の佛書切拔にあり。佛書を切拔くは佛書を以て文語粹金と見做すにあらずして基督教徒の宏量を示すにあり。否な基督教徒と目されんよりは寧ろ一層進んで宗教哲學者と稱せられんことを希望するなり。誠に道に熱心なる篤學の君子といふべし。

三籟派の人は教育上神學上文學上哲學上等の問題を喋々するを以て天下の最も迂濶なるものとなし、其研究の一切は打置いて直ちに社會を救濟するを以て本願と心得るテモ頼ましき大“Saviour”なり。

文學界には大評論家あり、大ドラマ作者あり、大抒情詩人あり、大人物論者あり、大佛教學者あり、大六號活字記者あり、いづれも大々づくしの名士頻々濟々たり。此故に世人は文學界に依て「ドラマ」なるものを悟り文學界に依て浪六が大小說家なるを知り文學界に依て歷史以外即ち歷史上の人物とは全く相違せる他の一休阿佛尼埼撿按等を教へられたりき。文學界は兎に角異色、恰も薦色に似たる大異色を有てりと或人は評しぬ。何の事なるやを知らず。

(4)硯友社派は大々通人の大一座なり。古今無比の大自信を蓄へたる頗るエラキ御連中樣なり。此派の秀拔敏明なるは既に定評あれば贅語を費すを要せず。

ふ朝日新聞社派一名舊根岸黨は今日の老練株なれば我等乳臭の徒は之を奉つて拜伏するのみ。

(6) 柵草紙派は學者肌なれば我々凡人は之を仰望して其堂奧に入る能はず。此派の本尊樣は藥師或は不動の如く澤山の童子を携帶せり。此童子はいろ〳〵さま〴〵なれども皆是れ見事菅秀才のお身代となり得べき玉簾の中の御育ちばかりなり。

此派は派と名くべきほどのものにあらずして實は鷗外漁史一人というて可なり。他の者は恰も寶劍を大臣が袞龍の下に隱れて其位に居る如く鷗外の光明の下にコソ〳〵名を賣るに過ぎず。鷗外先生は日本のハルトマンなり鷗外先生は日本第一の審美學者なり鷗外先生は日本第一の物識なり。鷗外先生は一轍、を辨ずるに四頁二百行餘を費し逍遙園を退治するに前後二十餘頁を無駄にせしほどの大家也。若し一言の御忽をして先生の御機嫌を損ずる事あれば忽ち二三十頁のお世話を掛くる恐あればゆめ謹んで決して危きに近寄るべからず。

(7) 博文館派は八宗兼學の大々智識のお揃ひなり。

此外に正太夫といふはスネ男なり驀海居士といふは第一番の老人なりと知らば十分澤山なり。

早譯りする爲め之を政黨に譬ふれば早稻田派は自由黨なり、民友社派は改進黨なり、舊根岸派は國民協會なり、政教社派は同盟倶樂部なり、柵草紙派は國家學會なり、其他は大抵壯士の連中なりと心得べし。勿論壯士といふも放浪なる日雇取のみにあらずして、中には役者もあり、『おッぺけ』節の名人もある事と承知すべし。今に大政事家になれると思ふが壯士の常にして浪人的文學者も決して之に異らず。先づ此位を合點すれば恐らくヒケを取る事なかるべし。

新聞雜誌を讀む事は必ず〳〵怠る勿れ。縱令面白からざるも、否な面白くなきは勿論なれども面白くなきを辛抱して讀むが文學通の修行法なり。面白くなしとて退くる樣なる不心得にては所詮出世は覺束なし。

大家の名を覺え込みて後は廣告だけ見れば足れり。春陽堂或は博文館の新刊物は繪雙紙店の店先にて表紙だけを督と見て置くべし。此繪雙紙店ゾメキといふ事は文學通となる一の修行なり。誰の小説は面白いとか何の雜誌は賣れるとかいふ當世文學の評判を繪雙紙店の主人より傳習受くるも極めて早道なるべし。

先づ此邊の調子工合萬端心得るが文學者となる第一の階段なり。若し斯ンな下らぬ事はいやだといふ見識があれば迚も今日の文學者になれぬこととあきらめるがよし。飽くまでも下らなくなる辛抱なくんば如何で雷名轟き渡る文學者となるを得べき。何事にも辛抱が肝心なれば隨分タワイなく下らなくなるが當世文學者となる第一の祕訣なり。既に文學の通とならんと欲するもの豈に是れだけの辛抱なくして可ならんや。

斯くて人既に略ぼ今日の文學に通じ早稻田文學の文界現象を讀みて大勢を揣摩するを得るほどの大觀測者となれば果して自己が・・・・

第二　文學者となり得る資格

を有するや否やを究めざるべからず。

(イ) 先づ身體上より云へば文學者は成るべく美丈夫、寧ろ美少年たらざるべからず。稀にはポープの如き不具者もあれど恐らく無意氣の骨頂とも云ふべきスウキフトすら若き時は隨分美しかりしと聞けば文學者は到底美しからざるべからず。夫故に若し美しからざる時は精々身嗜みを能くして例へば「ポマドンスール」或は「ポスタ、マック」の類を使用する心掛あるべし。

詩人バイロン曾て一佳人に思を寄せし時「醜男あか階上の沙汰なり」と罵られて厭世の芽を萌せしといふ。這箇大詩人既に一瑣言に憤る事斯くの如し。「醜男」は文學者に取りては能く能くの禁物といふべし。但し美男子なりとて己惚るゝは極めて智慧のなき咄なれば口先では「己の様な彦徳の二代目が……」と際立ッて力を入れていふも文里然として面白し。尤も素振では何處までもブルが肝心なり。

ウオルヅウオルスは眉目儼然として自ら仁厚篤信の風あり。シルレルは蓬髪隆準英姿颯爽として古豪傑の容を具ふ。カアライルは蓬頭突鬢常に鬱憤鬱結して深く思を潜めるものゝ如し。ゲーテは魁岸奇偉其強硬なる髑蓋骨以て宇宙を支ふるに力餘りあるを示す。然れども是等の風貌を備ふるものは今の文學界には不向にして賣口思はしからず。飽くまでも穏麗清雅にして柔情弱態を極めたる者ならざれば不可なり。一見洒落なる十返舎一九或は傲岸眉宇の間に溢るゝ曲亭馬琴に肖たらんよりは寧ろ艶娟妖嬌婦人に近き粋で高尚で深切らしい唐琴屋丹次郎先生に髣髴たるを以て合格なりとす。

(ろ)次に文學者となり得べき心性には怠慢、無精、放浪、無頓着にして偏見狹量愚癡を零し泣言を云ひ且つタワイなき虚飾心に富み外見を專一とするをもて要件となす。

●●怠慢はゴールドスミッスの如くなるべし。例へば此可憐なるノオルが親戚に泣付いて算段せし亞米利加行の旅費を賭博に拋棄せし程に怠慢なれば面白し。式亭三馬が無理遣に本屋の二階に上げられて著作を強制せられし如く怠慢なれば天晴大家の資格ありといふべし。

今の大家が前取の原稿料を飲棄てにし或は一ト月の義務を三日の劇評で濟ますを罵る者まゝあれども、是れ怠慢が文學家の通有性たるいはれ因縁を知らざる僻言にして是等の大先生は畢竟怠慢の祕奥を搜り得たるならん歟。

●●無精はゴンチャローフの域に達するをよしとす。渠は曾て仰向けに長椅子に倒れ扁額を釣せし絲の將に斷れんとするを瞻視めつゝありしかば傍なる人痛く驚きて君が頭上に墜ち來らんとするを避けずやと注意せしにゴンチャローフは平然として答ふらく、否な驚く勿れ余は其角度より測度して余が頭を去る凡そ一尺の地に落つるを知ると。

ウヰルキイ、コリンスも中々の無精者にして其書齋は旁午狼藉して塵積る事常に一寸なりしといふ。我が國の小野蘭山の如きも無雙の無精家にして古典珍書を羅列する中に瓶甕古器碎玉怪石より古書畫古器玩博物標本洋籍諸物等雜然として殆んど足を容るゝの地を餘さず、僅に尺寸の間に身を置きて微醺低唱以て樂みしと聞く。

是等の無精は鳥渡稽古して出來る無精にあらず。且つ當世に込の文學者は至極清潔好きの衞生家なれば斯くの如き無精は以ての外なり。然れども文學者の一分として無精を極めざれば協はぬ故、「イヤモウ面倒臭くて」位の口癖を附けるがよし。一層奮發して京傳が虎子を座右に置きし猿眞似をせば其れこそ一足飛に大大家なりと其處ら中に評判嘖々たるべし。

●●放浪も亦文學者の一特性なり。サヴェージ或はゴールドスミッスの如き俊才すら此一點を矯正する事を得ずして生涯を果敢なく終りたりき。就中サヴェージが生涯は悲酸中の悲酸にして之を借財の歴史といふも可なるほどに斷れなれど渠とても人間の現世及び未來の福利を得るに必要なるは至善なる事を知らざるにあらず。しかも最も道德眞實若くは正義を說くこと頗る熱心なりしがたゞ文士の通有性たる放浪病に罹りて終に首も廻られぬ程の大患に陷りしなりき。

今の文學界にはジョンソンの如き世話焼もなければ、是等の連中の放浪を學べば忽ち棄てられて大失策を仕出かす事勿論なれども、或は女人の所有品を借りて返濟を怠り或は下宿屋の賄料を滯らせ或は小買物の拂を水に流すなども亦妙なりといふべし。

しかしながら放浪に陷るほど落落なるは今の文學界には乏しく、却て放浪に過ぎたるは多少嫌はるゝ氣味合あるが故に諸事愛敬を專一とする當世には迚も相應せぬ情性と云ふべし。

第四に文學者が無頓着とは寛厚なるが故に、若くは恬淡なるが爲に無頓着なるにあらずして一口に云へば無神經なるが故に無頓着なる也。

文學者が文學なるものゝ外更に頓着せぬは可なり。然れども文學に執着する人が文學に無頓着なるは極めて妙ならずや。之が即ち文學者となるに中々の思案を要す——といふは今の文學者志願の者は本と文學に執着するにあらずして唯文學熱心を口にするばかりなれば其心の奥底に探を入るれば意想外に文學に無頓着なるを知るべし。

例へば文學の定義或は文學の歴史などは一向無頓着にして如何有らうと關はず、隨て文學上の議論には少しも注意する事なくして一向平氣なるは局外にて迚も想像しかぬるほどの無頓着なり。

衣服調度等惣ての嗜に無頓着なるは英國のアン時代の文學者の普通性なりしが日本の今の文學界にては文明開化のお影にて古の襤褸的は到底見るを得ずして何れも美裝盛服の貴公子なり。然れども「無頓着」が文學者に缺くべからざる情性なるを知つて「一向に頓着なしサ」といふ套語を八方に振撒く事少しも珍らしからず。

惣じて文學者は不規則にして絶えて秩序を守らざるを尊しとす。秩序を守るは俗物なり、横の物を縦となさず百で買ッた馬の如くノソリノソリとして怠惰者で横着者で且つヅウ〳〵しきを以て襟懐虚活清曠飄逸の大風流人といふ也。

今の文學者の大半は大通人に屬するをもて「秩序」——諸事萬事キチンとして雛樣をならべし如き『秩序』の奴隷となれば幸ひにも或は不幸にも自然天然と此不規則的生活に遠し。然るに不思議なるは、文學者としては當り前かも知れねどこの雛樣的秩序を守るに適したる文學者が無暗に不規則的大風流人を氣取り、如何しても模擬し能はざる時は左も大風流人らしく『昨夜十時頃ふッと思立つて傳通院の墓場の中を歩行いた』とか、或は『何心なく新橋迄行くとツイふら〳〵と汽車に乘つて鴫立澤に行つた』とか、鳥渡聞くと狂人の沙汰らしく思はれる事をいふ癖をつける。文學熱心の輩はこゝらを能々飲込むべし。

哲學者をもて「智」の精靈とすれば文學者は『情』の怪物にして通となるも風流となるも根底に蟠る道理あるにあらずして何だか——なッて見たい」といふ位の謀叛氣よりフラ〳〵と浮氣になるが何よりの證據なり。夫故後進の文學熱心家も一切の「智」の作用は悉く抛棄して何事を爲すにも「情」の命ずる處唯々として是れ遵ひ其奴隸となるをもて名譽とす。從て後日に惡結果を生じ來る時は自己が「情」に盲從せし過失あるを忘れて悔恨怨恨の焰を何の罪もなき外界に吐き散らすこと少からず。昔トーマス、ナッシュといふ狂阿呆は、『失意の操觚者が愁訴』と題せし詩を作つて八方に當りちらし此圓滿無垢なる社會を極惡無道鬼畜道の魔窟となしぬ。今の文學界にもまゝ此ナッシュに似たる泣男多くして我が度量の狹隘なるを一生懸命に吹聽する事さりとは面白をかしき限りぞ

かし。一面には曠放磊落の氣象を見せびらかし。一面には纏綿哀の泣言を洩す事古今稀有の癡珍プイ〳〵ならずや。

是れしかしながら文學者の何者たるを知らざる僻言にして此「パラドキシカル」が文學者をして鬼神を泣かしむる大文字を作らしむるものといふべし。恐らくマカウレイの如き大矛楯の生涯を送りたる事蹟を讀まば偶さかの小矛楯に喫驚する事の却つて世間に狹きを證明するに似たるを悟らん。

情は玄陰に隨て滯り心は回飈と與に倶にす、文學志願者は浮草のうね〳〵として昨日は東今日は西とあちらこちらの岸邊に漂ふ如くフウハリとしたる情性の典型の中に自己を鑄入するをもて肝要なりとす。

(6) 文學者となり得る經驗は、

(1) 小說好きなりし事
(2) 學校にて怠惰者の名を博せし事
(3) 芝居ごッこ火事ごッこに名譽ありし事
(4) 曾て女と男と豆入りの浮名を立てられし事
(5) 借馬場弓位の武術を鍛錬せし事
(6) 少くも一度は戀煩を爲せし事
(7) 一度位はアッサリと女に振られし事
(8) 酒間の取持にもてはやされし事
(9) 點取俳諧に功者なりし事
(10) 歌骨牌或は「トランプ」に名人なりし事
(11) 清樂若くは謠曲に評判ありし事
(12) 大磯興津等の海水浴場或は熱海箱根等の湯治場に通なりし事

等皆必要條件なり(文學者となりし後すらも)。

之を概括すれば文學者となるには無邪氣にして且つタワイなき經驗あれば足れりとなす。

一例を擧ぐれば、五歳にして草雙紙をナスリ、八歳にして蜘蛛の魔法を遣ひ、十歳にして踏臺に跨り拂塵を揮つて一の谷の狂言を其處に演じ、十三歳にして初めて艷書を認め、十五歳にして楊弓場にシケ込み、十七歳にして戀煩に呻吟し、十八歳にして首尾よく戀に失敗し、十九歳にして學校に落第し、二十歳にして懇親會の席上にて酌人より寫眞を貰ひ受け其お禮として名字讀込みの都々一を雜誌に投じ、二十一歳にして妄想をデッチあげた才子佳人小說を作り初めて大家となる。

先づ尋通一遍の履歷書は大抵こんなものにて澤山なり。

兎に角幼少の時神童とまで云はれざるも有望をもて目さるゝほど怜悧ならざるべからず。言換ふれば鼻先の事に小賢しく振舞うて買被らるるほどに猿利根なるを最も妙なりとす。シルレルは三歳の時電光の閃々たるを見て母よ何ぞ其曄々として美しきや、と云ひし事ありと聞けど、斯樣なる小間しやくれた事實は無きも更に差支なし。唯むかしの名僧智識が四五歳にして出家得道の志ありしが如く天智天皇を諳んじ神稲水滸傳に現を拔かせば文學者の幼時としては既に吞牛の象ありといふを得べし。

パスカルは幼時「ニークリッド」の幾何說に時を潰しドストエーフスキイは森林に徘徊し植物採集に餘念なかりしといふ。又我が國現時の文學者にして今は跡を俗界の中に韜晦する某氏は一ト度陸軍大將となりて東亞に威武を輝らさん事を欲し某氏は常に天象を窺つて更の闌はなるを忘れしと聞く。然れども是等は文學者としては餘りに野暮に過ぎて妙ならず。寧ろスコットが競爭者たる小兒の常に胸衣の釦鈕を捻りながら質問に答ふるを見て潜かに其釦鈕を斷つて狼狽せしめ終に勝利を得たりといふ罪なき惡事の面白きに如かざるなり。

天才といふ者ほど履歷の眞面目ならざるはな

し。此故に眞面目ならざる履歴を有する者は天才らしくて人の聞えもよし、（「Converse is not true」などゝはいふべからず惣ての論理は文學者に取りては禁物なり）。文學者とならんとするものはこゝを能く合點して――若し自己の履歴が餘りに平凡なれば、成るべく眞面目に遠き事實を製造して先進大家の門に入る時面白をかしく之を吹聽すべし。「私は子供の時から普通の人とは變りまして…………」といふ嘴工合なり。

ヂッケンスの如きラムの如き皆幼時より艱難辛苦を試めしものなれども、是は誠にお氣の毒さまの事にて今の文學界に乘出すには却て乳母日傘のお坊樣育ちの方が蟲氣がなくてアドケなくて評判は一層好し。艱難辛苦をせざるが故に浮世の味を知らずと罵る迂濶者あれど同じ論法を用ゆればお坊樣育ちを知らざる貧乏人は美衣美食の上等生活に暗しといふを得べく畢竟どちらにしても同じ事なれば寧ろ不自由せぬ丈けが結構なるべし。

揚弓場にシケ込み或は緣日をソヽり歩行くなどの小學入門より漸々に庄司甚内の遺跡を尋ね「君は今」のお名號を頂戴し若くは面白くもなき基督教を信心し讃美歌を唱つて東髮の腸を斷るに苦辛するは皆强ちに色道修行の爲のみにあらずして世態學研究の一端ともなりぬべければなり。

俗人の俗眼より見て惣てかいなでに『道樂』なりと斥けるものは文學的タドポールに取りては是非とも喰べて見ねばならぬ營養分なり。不道德なりといふは『通』の通たる所以を知らざる言草にして一度は踏んで見るべき檜舞臺を等閑にするは以ての外なりといふべし。

名妓なにがし曰へらく、此廓に來て色男とたれぬ程の者が社會に出て勢力を得らるゝものですかと。天晴なる金言なる哉。文學界に乘出して勢力を得んとする野心あッて『此廓』に遊ばざる者は大馬鹿の素頓邊にあらずや。又若し此廓に遊んで隨分色男なりと自認し得る程の者は一篇の小說を作らざるも既に大文學者なりと自惚れて少しも差閊なし。

既に「此廓」に遊ぶも差閊なしとすれば東髮の美人雲の如く集まれる教會に參列するも何ぞ碍ぐる事あるべき。會堂は聖典を講じ福音を傳へ惣ての人の罪を悔改める最も清く最も嚴かなる正しき場なれば其神聖なる空氣に觸れ主イエス、キリストの恩と神の愛と聖靈の交際すべての聖徒と共に在らん事を願うて昭明君蒿彩雲に乘じて紫皇の殿に行くの思あるべし。文學志願者が教會堂に行くは畢竟此敬虔の念を養ふ爲なれば恐らく此一點には純潔外道も難を入るゝの地なかるべし。然れども黔雷の前に頓首して阿香に流し目を遣ひ玉帝の目を竊んで瑤姫の手を握らんとするは文學者が義理にも衒ふべき特性なれば此清き會堂に列して東髮の結び方に氣を附けざらんと欲するも豈に得べけんや。之を以て直ちに其心を汚れたりと爲す者あらば恐らく朽木の窩より生れたる無類の唐變木といふべし。

兎にも角にも近頃の實際派と云ふは社會の活寫眞なれば文學者となるには勢ひ社會を知らざるべからず。社會を知るには隨分諸方に出入せざるべからず。而して我が興味を有たざるものは自然觀察の行屆かぬがちなれば最も大なる興味を有つ婦人社會を一心に研究する當時の文學志願者の心掛は極めて感心なる事ならずや。若し之を非なりと云はゞ酒屋が試酒をなし菓子屋が餡を嘗めるも勿論排斥せざるべからず。文學志願者は斯くの如き木訥漢の言を顧みず一心に勉强して上は鹿鳴館の貴婦人より下は燐寸の箱を張る内職女に到る迄目の屆くだけはあらゆる婦人社會を研究すべし、文學界の婦人科專門も又大に必要のものたればなり。

加之、實地踏んで見ぬことは分らぬものなれば一度は戀煩をしたり惚れた女に振られたりする經驗も極めて必要なり。餘り度々に過ぐる時は多少男が廢る恐あれば二三度位にして止めにすべし。しかし世の俗人原と遊び飽くまでも磊落たるが卽ち文學者なれば之を大業に披露するが好し。隨分三度女に振附けられて世を味氣なく思ふなど云ふ逸事はお誂向なれば影にて噂さるゝほどに吹聽するが働きなり。バイロンやショオペンハウエルの如き大豪傑が厭世となツたは一ツには女が原因なりと云へば女に振られて厭世となるは學者一代に特筆すべき大出來といふべし。

男女の戀を知らざる者を咄せぬ奴と斥けし兼好は流石に大文學者なり。傲岸不羈一世を睥睨せしスウキフトすらステルラが愁黛啼紅に魂を消したるは人情の不思議な處なり。文學者及び文學志願者は思切つて女に惚れるべし女にデレるべし。振附けられても關はずに惚れるべし。振附けらるゝを恐るゝは俗人にして平氣の平三で落語家の所謂貸家を索す氣で惚れるが男らしくて好し。十人を口說いて一人承知すれば結局一割の得にして金利賤き今日にては此上もなき儲物ならずや。

グレイは生涯獨居して終りし人なり。曾て若き婦人と同住して共に讀書し共に食事して殆んど夫妻の觀ありしが終に結婚せずして勿論淸淨に暮したりといふ。

パスカルにも較や似たる履歷ありて其結果はパスカル全集中の有名なる戀愛論となりにき。然れども是等は餘りに淡薄過ぎて『情』の奴隸たる文學者には不相應なりといふべし。文學志願者が學ぶべきは寧ろ此にあらずして「戀」――爲永春水が理想の『戀』にありとす。『情』の分量の多少は以て文學者の價値を上下するに足る。而して此『情』の分量を示すの法は唯一つの法――女に惚れる一法あるのみ。

文學志願者は女に惚れるべし。若し夫れ反對に女に惚れらるゝに到つては恰も上帝より文學卒業證書を賜はるに同じければ十倍二十倍大に之を廣告する事極めて可なり。

何處までも文學志願者は下らなくダラシなく子供らしき幇間染みたる履歷を作るを要す。少時に於ける歷史は飽くまでも婦人と關係を結ばざるべからず。探偵小說家が所謂「大なる犯罪の下には婦人あり」と云へる常套語を借りて『大なる文學者の履歷には必ず婦人あり』と云ふを得べし。

(ロ)最後に、文學者とならんと欲するに幾何の學識を要すべきや。

兎も角も文學者と云へば學者の一なるべければ此知識の分量こそ文學鄕の關守に喰はせる最大の苞苴なるが如し。

然るに文學者が更に學者ならぬこそ中々に可笑しき限りなれ、例へば泣蟲といふも眞の蟲族にあらざるが如くに。

文學者は詩人なり、美術の人なり、何ぞ深廣該博なる知識を要せんや。たゞ文字、云はゞ字ツナギの類に長ずれば則ち可なり。特に非常なる知識の必要ある如く感ずるは畢竟文字の何物たるを審かにせずして世中に今の文學者を學者と誤認すればなり。文學は豈に哲學と同じからんや。否な、哲學すら偏に考究を重んじて讀書を尊ばざるにあらずや。

文學の本尊シェークスピーヤを見よ。渠は"Small Latin and less Greek"と嘲罵せられたりき。然れども斯く渠を嘲りし人よりは遙に勝れたる名譽を得て今に於て隨喜渴仰せらるゝは何故ぞ。知識は文學者に取りては車夫馬丁の口髭の如し、生えしとて終に何の役に立たず。

文學者が要する知識は小學科の程度にて澤山なり。博物生理物理等の科學に到つては猶ほ少

しく進み過ぎたるの感あり。惣じて學問――取分け科學上の知識は多く有れば有るほど詩腸を腐らすと大マコウレイは說法したるを以て、今の文學者は學問を見る事山犬の如く敬して遠ざくるを常とす。見ずや、三馬は源氏物語の講釋を唾棄したれども其皮肉に入るの文字は之が爲に價値を減ぜず馬琴は却て「ペダントリイ」の爲に幾分か其見識を下落したり。文學者に學問ありとて何かせん、文學者は無學文盲を以て尊しとなす。

「ロビンソン、クルーソオ」の著作者デフォーは曾てスウヰフトより「其名は忘れたれど或る無學者…」云々と冷罵せられし男なるが、後年其不平を洩して云へらく、「余は曾て當時の風流社會より無學者なりと嘲られし一記者を訪ひしに、恰も渠は西班牙文にて書されしブロオの地理書よりボリスセニース河の記事を飜譯しつゝありき。其のち余は渠が羅甸文より譯せし彗星論を讀みて其古語に熟通するを知りぬ。斯くて暫時の中に渠が羅甸西班牙伊太利希臘及び佛蘭西の五國語に通曉するを知りたれども――猶ほ渠は學者にあらざりき。科學上の知識を云へば余は曾て渠が天體の運行、行星の距離大小循環、就中彗星の性質等を談ずるを聽きたることあり、然れども渠は學者にあらずと云ふ。若し夫れ地理と歷史の造詣を問はゞ渠は其指頭に殆んど全世界を集めしかの如く何れの都市山川を說くも人をして其地に生れたるやの感あらしむる程極めて精細に其製造商業風土人情より之に伴ふ歷史を盡さざるはなし。然るに他は此人を見るに學者を以てせず。抑も學者と呼べる奇怪の一物は何ぞ。余は大に惑はざるを得ず。五國の言語に熟し天文地理歷史に精通し多くの科學上の知識に富める事斯くの如くにして而して人は猶ほ斥けて學者ならずと云ふ』云々。

スウヰフトは滿身冷罵冷嘲をもて溢るゝ男なれば此デフォーを無學なりと云ひしは當然にしてデフォーは愚癡を零すだけ野暮といふべし。我が國今日の文學者となるには無學文盲にて宜しけれど、デフォーの如き無學文盲にては餘りに堅過ぎて却て容れられざるべし。

ミルトンは政治に宗教に侃々諤々少しも假借する事無かりし程學殖造詣頗る深宏なりき。ゲーテは物理に動物に植物に潛心苦慮して飽くまでも知識を貪りぬ。然れども此二人は共に文學界の不具者なれば、『健全なる文學者』の標本とし見るべきものにあらず、何處までも無學文盲なるが文學者の本色にして無學文盲なればこそ仕方がなくも文學者となるなれ、文學者豈に澤山なる知識を要せんや。

デッケンスは少時よりラベレイ或はゴールドスミッスの作を愛好せし外絕えて攻學研究の跡なし。然れども十九世紀のシェークスピーヤとして名聲を歐米に馳せたる所以何ぞ。文學者の重んずる處自ら有るあり、學問知識の如きは山車人形の造花の如く有るも無きも大なる關係あるものにあらず。

此故に當世の文學者たらんとするには深宏該博なる知識斷じて無用なり。淡泊と萬事を飲込んで何事も早合點で濟まし絕えて研究を爲さざるを以て第一の祕訣となす。

今試に學問の程度を示さば、

(1) 國文學幷に歌學

(a) 枕草子 (b) 徒然草 (c) 今昔物語
(d) 太平記 (e) 曾我物語 (f) 源平盛衰記
(g) 古今集 (h) 新古今集

先づ此邊を博文館飜刻の文學全書にたよりて二三ケ處拾ひ讀すれば好し。「源氏物語」は大部なれば拾ひ讀だけにても容易ならず「忍草」にて埒明けるを訣祕とすれども之も面倒なれば「田舍源氏」にて大體の趣向を推量し若し人に聞かるれば『ありやア

その……まア今の實際派小說の様なもンで……實は詰らない下らんもンでせう』位の返答をすべし。聞く人も讀まぬ人なれば大抵な駄説を吐きしとて反駁さるゝ心配は更になし。

『太平記』其他は實錄物を讀むと同じく面白ければ忽ち讀み終るべし、文章などには少しも氣が付かざる中に。たゞし雄大莊重なる文學なりと思へばよし。俊基朝臣東下りの一節は小學校の生徒も諳んずる名文なれば、苟にも一世の文學者たるべき豪傑は一心に負けぬ氣になりて諳誦せざれば恥辱といふべし。

國文の文法は數限りなく殊に諸說紛々として定まらざれば之を攻究するは閑潰しなり。況んや今の國文の大先生方にすら十分理解せらるゝは少ければ落合先生の『日本文典』位にて澤山なり。又平生『柵草紙』或は『文海』等を精讀して『ぬ』『たり』『き』『あはれ』『あらず』等の用法に注意する心掛肝腎なり。惣じて今の文界に勢力ある文體は餘りに西洋染みて不熟なる造語をもて溢るるばかりなれば、少しく古文をひねくりて雅言を交へ成るべく廻りくどき文字を作れば忽ち國文家なりともてはやさるゝ事受合也。近き例が國文を唾棄せし無學文盲の三馬すら萬葉に擬へし戯歌に巧みなりしをもて見れば國文家として今の文界に立つ事既に難からず、況んや他の死文法を守る事を成さずして日本文章の粋を取る開進的國文家となるは眞に飯前の業に過ぎず。

歌學は『古今集』『新古今集』を巾箱本となし兼ねて『柵草紙』を油斷なく讀めば一寸した咄は出來る。縣居の翁は何うだとか桂園派は斯うだとか云ふ位の事は自然と解る様になるべし。勿論純粋の歌人となるには自ら他に便利法あれど爰には云はず。廣き意味の文學者としての修養は之にて澤山なり。歌道奥の手の祕本として珍藏すべきは佐々木信綱先生の『歌之栞』落合直文先生の『新撰歌典』等其外博文館本數種とす。

(2) 漢文學幷に漢詩

(a) 蒙求　(b) 十八史略　(c) 文章軌範
(d) 唐詩選　(e) 論語　(f) 聯珠詩格

是れだけにても大體は解るべし。近頃は『漢學速成』と云へる調寳なるもの出來たれば漢學者となるは最も容易なり。又科用書は何れも益友社出版の講義本たるべき事。

漢學者とならんとすれば多少支那哲學を心得ざるべからず。支那哲學と云へば大層難かしさうなれど老子と莊子だけにて澤山なり。莊子は内篇だけが『早稲田文學』にあれば之を熟讀すればよし。實は讀まないでもよし、何でも老子や莊子は雲を攫む様な途方もない事が書いてあると思へば十分濟む。例へば中西梅花先生は大の老莊學者であるが故に『梅花詩集』に少しも譯が分らぬ。譯の分らぬものが老莊なりと心得ればよし。

漢學者と目せらるゝには難かしき字をひねる事必要なり。例へば尋常の操觚者が『陶朱猗頓の富』といふべきを『富は陶白に埒しく貲は程羅より巨なり』といひ、『驕る者久しからず』といふべきを『鎖落渾沈は速かずして來り池館丘隴は倏忽に滅す』といふ如く惣て日常の言語にて濟む事を故らに難かしく畫の多き字を衒ふが漢學的操觚者のエラキ處なり。こゝらの骨を隨分辨ふべし。

參考書として珍藏すべきは『圓機活法』なり、近頃新鐫の銅板摺一帙あれば忽ち大漢學先生となるを得べし。『佩文韻府』『五車

細瑣等も必要なれど是等は大家となツて後の心掛にして修行中のものにあらず。

(3) 外國文學

是は全く知らざるも差問なし。當時の文學者志願の輩にして外國文學の知識を有たば、鬼に鐵棒といふよりは寧ろ蟻に燈心の觀あるべし、加之、愛國心乏き我が文學界にては夷狄の文學に降參する卑劣者なく、萬一にも外國文學を讃歎する者あれば日本に大文學あるを知らざる白癡と云はる恐れあるが故に、全く知らざるを以て却て幸ひなりとす。たゞ然しながら「ランプ」「マッチ」等が普通語となりし今日にては皆無盲目なるも不便なれば『七ツ伊呂波』的英語を知る必要あり。例へば詩歌を「ポエトリ」、小說を「ノベル」、政治を「ポリチク」といふ位を心得れば十分なり。若し此上を貪つて大學者とならんとすればブリンクリンの『語學獨案内』を閑にあかして勉强すべし。又磯部彌一郎先生の「英文學講義錄」中の日本文の解釋だけを辛抱して讀めばエライ學者となる事勿論なり。

座右に備ふべきは、

(a) ナショナル第五讀本

(b) スウヰントン氏英文學

(c) モオレイ "Great Authors."

(d) ルートレッヂ板の六「ペンス」小說二三冊

(e) キャッセル板の國民文庫二三冊

(f) シェークスピーヤ全集（「グローブ」、「ライブラリイ」位が手頃によし）

此外に亞米利加の "Eclective series" 二三冊は義理にも備へざるべからず。是等の書物は勿論讀むが爲に備ふるにあらずして外國文學に通ずる文學者の體面として備ふべき也。

次に外國文學者の名を覺ゆる事必要なり。

先づ英國にては、

(1) ヂッケンス　(2) サッカレイ

(3) リットン　(4) ビイコンスフヰールド

(5) マカウレイ　(6) カアライル

佛國にては、

(1) ゾオラ　(2) ドオデ

(3) ユーゴー

獨乙にては、

(1) ゲーテ　(2) シルレル

(3) レッシング

魯西亞にては、

(1) トルストイ　(2) ツルゲニエフ

(3) ドストエーフスキイ

亞米利加にては、

(1) アーヴヰング　(2) エメルソン

(3) ロングフェロオ

是れだけの名を飲込んで自在に濫用する勇氣を養成し、例へば十二文豪とか十三文豪とかの目論見あれば、縱令著作は魯か曾て其傳紀の一頁だに讀まざるも直ちに一人を選んで其傳を編む志を起さしむるほど頭腦に浸染せしむべし。さる故に平生使用する時は「ヂッケンス」と「サッカレイ」を一ト讀みに「ヂッケンサカレイ」と呼びユーゴーが宗教の改革者でアーヴヰングが大哲學者である位の誤解は大負けにすべし。要するに外國文學の知識は今の大家壇に登第する第一の要件にあらざれば也。

(4) 歷史學幷に傳紀

所謂硬文學者となるには是非とも研究せざるべからず。又强ち硬文學者とならざるも多少此心得なければ讀賣新聞の歷史小說を書いて百圓の一等賞をせしめる事協はねば平生よりの心掛肝腎なり。今の歷史家若くは人物評論家の資格を得

るには勿論大なる知識を要せず、先づ次の書物位を讀めばよし。

(a)日本外史　(b)國史略　(c)讀史餘論
(d)太平記　(e)日本開化小史
(f)常山紀談　(g)藩翰譜
(h)軍記實錄物いろ〳〵

是れだけにて『足利尊氏論』位は出來る。又論文の出來不出來は兎も角も事實を羅列するだけの手際は請合也。

史學上の考證を爲すには井澤長秀の『俗說辨』でもあれば威張ツたもの也。古實を知るには貞丈の『雜記』或は『四季草』の類を涉れば恐らく負を取る事あらざるべし。

歷史の參考として是非とも机上に置かねばならぬは、

(a)萬國歷史全書　(b)日本歷史評林
(c)世界百傑傳　(d)日本百傑傳

何れも博文館出板なれば其效益無比なる事疑ひなし。

西洋の知識を得んとするにはスウヰントンの萬國史にて澤山なり。之は教科書なれば幾分かの見識を衒ふ者は博文館の歷史に依るを便宜とす。同じ教科書にてもフヰッシャー若くはスミッスの萬國史或はマッカーシイ、マルチノウ等の近世史なれば申分なけれど萬事速成を尊ぶ今の世の中にてはマウンダーの『歷史寶函』を珍重するが一倍利方なりとす。人物評論文にはマカウレイの飜譯文數多あれば飽くまでも原文は玉の如きもの也と想像して讀むがよし。民友社は人物評の本家元なれば其社の出板物は總て斯道の三墳五典なりと心得て研究怠りあるべからず。

(5)德川文學

(a)先哲叢談并續篇　(b)先哲像傳
(c)俳家奇人談并續篇　(d)戲作者小傳
(e)戲作者六家撰
(f)物之本作者部類
(g)德川時代文學の現象(『坪內雄藏先生講述』『早稻田文學』により)
(h)戲曲叢書(武藏屋翻刻の活板淨瑠璃本)
(i)帝國文庫(博文館翻刻)

右の外近頃は活板本澤山有れば勉強するに都合よし。惣じて德川文學の中心は西鶴芭蕉近松の三人なればその心組にて研究するを法則とす。然れども此三人を研究する必要は更になし。たゞ此三人が中心なりと心得てゐるさへすれば可なり。

平安朝時代或は鎌倉時代は共に文學の盛運を效したれど德川時代の如く雜駁にして廣大なるはなし。此故に少しく德川時代の文學に精しければ忽ち堂々たる大文學者として一方に屹立するを得。饗庭篁村先生或は幸堂得知先生が當世の老大家として尊崇せらるゝは共に德川文學の精粹を極めたるが爲にして其小說に精妙なるは著し二の次なるべし。

今若し文學志願の人にして此高き聲名を貪らんとすれば一心に辛抱して八文字屋本黃表紙蒟蒻本等を讀むべし。是等の下らなきは云ふ迄もなけれど大家となる爲には此位の辛抱勿論覺悟あつて然るべし。惣て珍本なるものは世に管待されざるが故に埋沒せしなれば傑出の作にあらざるは云ふまでもなし。然るに此下らなき珍本を涉獵せずば德川文學の黑人と云はれざるは難儀至極なれど根限り出精して反古調をするが此派の極意なり。例へば『風流伽羅人形』とでもいふ延寶板の零本があれば本文の面白味を吟味せず直ちに机上に安置して頓首再拜するほどの心掛を養成するが專一なりと知るべし。

俳諧を研究するには三森幹雄先生の『俳諧

自在法』など屈竟なるべし。參考書には『俳諧五百題』或は『俳諧一萬集』等宜しかるべし。『七部集』に所載せざれば面目に關はるをもて必ず本箱に收むべし。『七部大鏡』を巾箱本とすれば其れこそ大學者を極め込みて俳友社の大宗匠連を對手に取る事も出來る。中々難かしさうで意外に容易なるもの也。

俳文を稽古するに近頃尤も重寶なるは岸上質軒先生の『俳諧文選』なりとす。其外『鶉衣』『風俗文選』等は六韜三略なればゆめゆめ等閑にすべからず。

淨瑠璃は金櫻堂出板の『三十六佳選』を通讀すれば此上もなけれど同じ家にて出板せし『繪入倭文範』にてもよし。之は自身で讀むよりは寧ろ竹本綾之助先生或は竹本越子先生の顔讀を聽聞するが早譯りしてよかるべし。

詞曲の研究も必要なり。まさかに『きんらい節』や『やツつけろ節』では素人臭ければチョイと博文館の『新選歌曲集』をひねるも面白し。『由縁江戸櫻』はおつだ位の事を云ふには十分なり。又大家となれぬ中には是れだけ心得れば大物識と云はるべし。

猶ほ以上五科目の外に心得べき事少からねど餘りに煩はしければ省く。

むかしの文學者――輕文學者は文字の示す如く鵞毛の如き輕妙なる工夫あれば何等の知識をも要せざるが故に若し以上の五科目を悉く飲込めば餘りに學者となる恐ありといふ杞人あれども、昔は昔、明治の文學者は餘りに學者過ぎるが却て時勢と釣合つて結構なるべし。

本より前にも云ふ如く文學者は大なる知識を要せず。『自然』といふ書物さへ讀めば澤山なり。流石に今日の大先生は能くこゝを飲込んで知識を貪るには到つて冷淡の方なれども夫れすら以上の五科目に列記せしものよりは更に一層大なる知識を有し給ひぬ。尺蠖の蟻蛉に比して足の疾きを見て驚く者は明治の文學者が "*more than that*" の知識に富めるを欽仰せざるべからず。

明治の文學者は文學者としては惜しきほどの學者なり。しかもゲーテ或はデフォーの如く偏固なる研究を爲しゝものにあらずして、一途に奧深く恰も八幡の藪を詮索するの方針をもて純文學を涉獵したり。大概の學者は大なる知識を要せざるものとなすも其上に列記せしだけは隨分辛抱して勉强せざれば迚も今の大家の如き大名を賣る事出來ざるべし。

文學者が有てる蜆貝一杯の知識にて學海を酌み乾せりといふを得ざれども、此一杯の水も蜆貝一斗を包む大きさの唐紙を濡らすに足るを思へば決して之を蔑しろにすべからず――こが肝腎なり、注意せよ！

學者と文學者――決して同一の者にあらず。之を混同して學者を大學者の如く思ふは非也。但し德元が『雪ほど玄きものはなし』の論法を用ゆれば知らず。以上を概括すれば文學者とならんとする者は、

(1) 餘りに莊重若くは魁岸なる風丰を備ふべからず色白にして柔しく上品で若様染みたるがよし然らずんば淺黒くシャンとして粋な男振をよしとす。

(2) 氣立は柔しく寧ろ意氣地なくグヅで如泥で怒る時は蒟蒻の如くプリ〳〵として嬉しい時は鹽を掛けた蛞蝓の如くトロ〳〵として萬づにタワイなくボンとして拔けたるを尊しとす、但し又横着で杜魯で無精で怠慢なるは愈々妙といふべし。

(3) 履歴は板で押した如く平調で極り切つて無事平和で伊勢物語然たる逆事に富み隨分人に持餘されたる厄介哂を作りしも

のならざるべからず。

(4)學識は可成缺乏して兎角に間違だらけの好作話を傳ふべきほどの勇氣あればよし。無學文盲の世界に住めば十分合格也。其境を去る僅に一尺なるが適宜なりといふ。

此四條件に相當する者は慥に文學壇に登第すべし。

さて首尾よく登第して後の心得は如何。是からが中々の思案もの也。能く〳〵研究せよ。

第三　文學者として學ぶべき一般の見識及び嗜好並に習癖

既に文學者となる。是より後は一切萬事文學者●●然とせざるべからず。爰に於て文學者的見識及び嗜好幷に習癖を說くの必要なり。

文學者といふは、

(甲　新聞及び雜誌に投書する人

(乙)小說、韻文、脚本、批評等を製造する人

(丙)新聞の雜報卽ち艷種を書く人

(丁)民友社、春陽堂、博文館の廉き本を買ふ人

(戊)文學者めきたる先生と親交ある人

の五種に分たる。其中俞看板といふべきは前の三種にして後の二種は准●●●●文學者なりと知るべし。

偖て文學者若くは准文學者と成り果すれば先づ次の三ケ條を守らざるべからず。

一成るべく人の眼に付く樣に心掛くる事

一成るべく門戶を高うし狹き城府を設くる事

一成るべく自身を廣告するに盡力する事

右の條目は皆傳として口授すべき祕密なれば縱令三度の飯を一度忘るゝとも是ばかりは決して忘却すべからず。

文學者としての惣ての見識、嗜好、若くは習癖は皆此三ケ條より割出せしものなれば、能く此一々を嚙分けて身を處せば、恐らく人後に落つる事あるまじく、其評判は忽ち揩鉢山よりも高く、「きんらい」節よりも廣く歌はるゝ事保險附なりといふ。

文學者としての見識は先づエラク、、、ならざるべからず。エラク、、、なるには人以上に超絕せざるべからず。人以上に超絕せんとすれば勢ひ他を見下げざる可からず。爰に於て自己を雲上界に置き此社會を假に『俗』と名附け、一切の人間を擧げて『俗物』と稱へ、惣て人間のする事業を悉く『俗事』と擯斥す。

絕對に斯く惣てを罵りちらして自ら行はんとすれば、管渴冷汗を感ずる人間は甚だ迷惑千萬なるをもて、文學者は智慧囊を搾出して、『俗に似たる雅』なるものを發見し之を以て漸く安心立命の基礎となしぬ。

例へば日本を喰ふと云ふ事は俗である。しかし狂歌或は川柳を作るが爲に喰ふならば目的が雅なる故に俗でない、但し腹が減つたとか直段が廉いとかならば目的が賤しき故に勿論俗であるといふが如し。

又例へば茶番をするといふ事は俗である。しかし人を樂ましむる爲め或は養生喰をすると同じ心得で爲るなれば目的が眞面目なる故に俗でないと云ふが如し。

此二例の如きを、俗に似たる雅』と名けて珍重する事一方ならず。元來『俗』といふは普通一般に行はるゝ惣ての事物を冷罵するの語にあらざれども、今の文學界に跳梁跋扈する『Gero-[illegible]』的のスノップ先生は之を濫用して特別なる惡意味を附會し却て『Dilettantism』を主義とするは少しく見當のちがひたる嘲なれど、此見當の遊ひたる處が當世なり。エラクなるには飽くまで惣てを冷罵して人以上に超絕せざるべか

らず、何ぞ斯る見當ちがひをなすを怪まんや。

凡ら當世の眼から鼻へ拔ける文學者先生が此位な道理を知らざるわけなし。十分知り拔いて而して後『俗』字を口にするは、云はゞ話術にして意味あるものにあらず。多くの人が必要もなきに『成程』『如何樣』等の言葉を重ねると同じ。

例へば、

『我輩昨夜は俗な事ッたが、酒に喰べ醉つて、勿論俗氣退散の爲だが、處が甚だ俗な咄だが五度便所へ通つてイヤモウ大閉口、便所も五度となると俗です。第一斯らなると人間は元來俗だから、我輩も忽ち俗ッぽくなッて、實に恥入るけれど俗物の眞似をして醫者に掛ッた。藥なンぞを飲むといふは俗極まるが腹の下るのも俗の甚だしいものだ。そこで我輩頗る俗な事を工夫した、俗の大關の藥を飲んで俗の骨頂の下痢を癒すのは十九世紀の俗物が所謂俗を以て俗を消すといふもンだテ、あッはゝゝゝ』

この數多の『俗』は意味なし。意味なき『俗』字を吐きちらすほど修行が積めばモウ占めたもの也。

此次に覺込むべきは『通』と『粹』也。『粹』も『通』も殆んど同義にして之もむづかしき意味あるにあらず。若し辛抱して八文字屋本丼に蒟蒻本を讀まば自然と了解すべし。

『粹』道の祖師を井原西鶴と云ひ、『通』學の開祖を山東京傳と云ふ。此二菩薩の遺教經は我が當時の文學界に活氣を添へたる事一ト方ならねば信心渇仰怠らず斯道の梁佘經とも云ふべき『一代男女經』若くは『總籬經』、『絹篩子』等を誦讀凡そ三百遍せば必ずや思半ばに過ぎん。

蓋し此『俗』と『粹』若くは『通』とは恰も世人のいふなる『善』と『惡』とが常識の上より漠然たる間に猶ほ限界を有する如く自ら劃定せる區域なきにあらねども之を抽象的に説くは中々難かし。其碩の『傾城禁短氣』或は京傳の『京傳餘師』を讀めば略ぼ首肯する處あるべけれど、さりとて今の文學社會の大半が一切の動作を支配するほど大勢力ありとは隨分怪しかる事ならずや。

然れども怪むを止めよ妙法樣のお水すら九死の病人を救ふ事ありといへば『粹道』必ずしも效なきにあらず。之を善用して能き程に切上ぐれば二階から眼藥程の效能あるべけれど兎角鰻登りをしたがるが惡き癖にて『俗』字を振廻すと共に粹の頂邊まで引り詰めるが今の世の作者氣質なり。『通人の寢言』といへる本の序に『我は大通と思ふが不通にておれは自讚をあげぬといふ奴が矢張自讚をあげるのなれども日本一痲病の藥とかきし看板にひとしく誰も問はぬが繁華の地の有がたさ也』と聞いた風な事いふ男も同じ大通のはしくれなるべし。

『俗』と斥くるは世に超絶せんが爲なり。『粹』と信じ『通』と思ふは狹小なる城壁を作りて立籠らんが故なり。其心事は誠に可愛らしきほど子供らしけれど之が當世文學者ともてはやさる秘訣なれば中々馬鹿にすべからず。

又或る他の一派にては甚だしく此『俗』と呼び『粹』と稱するを斥罵するものあり。然れども是等の一派自ら套語なきにあらず。『健全』、『純潔』、『博愛』、『天道』、『確信』、『禪味』、『厭世』、『義俠』、等數へ擧ぐれば頗る多し。何れも皆意味の有りさうで無き言葉なれば商人の符貼の如く心得れば可なり。兎にかく意味の無き言葉を工夫して濫りに振回せば忽ち俗界の四辻に金看板を擧ぐるを得べし。

爰に必要の事あり。文學者となれば――否、文學者とならぬ時すらも――『號』なかるべからず。我が國にて所謂『號』なるものは有つても無くても同じ。然れども町内の遊人すら『グニャ富』とか『デコ岩』とか名乘る中は社會の師表とも云ふべき文學者にして『號』なきは冠履顚

倒言語道斷と云ふべし。アービングが「ニックブローカー」と稱しヂッケンズが「ボズ」と名乘り、ホルランドが「ティットカム」と云ひし如き東西古今の例極めて多し。我が國の佐藤直方が生涯「五郎左衞門直方」と稱せしは餘りに野暮堅き律儀過ぎたる咄なり。當時の文學者は早くもこの野暮臭きを嫌つて都々逸一ツ作り得ぬ中から號を付け親が呉れた名は却て忘れて仕舞ふほどなり。名刺にまで本名を書かずして號をしるし、何の某といふ立派な名は唯區役所だけの通用を爲すに過ぎず。近頃ゾオラが倫敦の新聞記者總會の席にて匿名の必要を演說し假名を用ゆるも又止むを得ぬ事ありと曰ひしが、我が國にては「號」と「本名」と其位置を替へて「本名」の方却て一人に知られずといふは面白し。例へば思案先生の名は宇内に鳴響けども石橋助三郎氏の名は氏自身の家人すら其誰なるやを訝るといふが如し。(之は風說なれば其眞僞は知らず)。

既に「號」あり。而して「俗」、「通」、「粹」等の言葉若くは或る他のお題目を振廻せば大願成就正に紛れもなき文學者となるを得。

是より文學者として存すべき見識を解かん。

文學者としての見識は材木屋の鳶でも困る。竹藪の雀位にてよし。許六が下駄を穿いて師翁の腹中に入る者は己ばかりだといツたはエラいものなり。浪六先生が堤に茶屋を開いて男の小萬を極込んだもエライものなり。徂徠が將に死せんとする時雪降れるを見て海内第一流の人物を悼みて天この世界をして銀ならしむと云ひしはエライものなり。思軒先生が杯を銜んで終生の恨事は徂徠及び山陽と時を同うせず相見て文を論ずるを得ざるのみと慷慨するもエライもの也。晋其角が江戸は日本橋を渡りしものにて此其角を知らぬ者なしと大津の浮浪人を罵りしはエライもの也。南翠先生が東京は築地一丁目の裏に住む者皆御存じの肖像入の紀行文を大阪作者の乙夜の覽に供へしもエライものなり。

文學者は斯くの如くエライものとなるべし、山は平地より高からざれば山にあらず、文學者は常人よりエラからざれば終に文學者にあらず。

然らば如何にしてエラキものとなるべきやといふに文學者の見識は「ブル」が第一なり。「ブル」とは英語にていふ牡牛なり。他國人は英國人を嘲りて「ジョン、ブル」といふ。牛は涎を垂らしノロ〳〵として折々半間な聲にてモウモウと吠ゆるものなれば元來勇猛なるにも似ず外觀は極めて阿呆らし。此故に「ブル」と云ふ接尾語を附すれば英雄豪傑仁人君子等總ての偉人秀才悉く馬鹿々々しき阿呆げたる形に變ず。「英雄ブル」、「君子ブル」、「學者ブル」、「作者ブル」、「大家ブル」——「ブル」は一切の俊髦英物を擧げて愚鈍癡漢と化すの力を有てり。

然るに此「ブル」が文學者の見識を增すといふは可笑しな咄なれど能く〳〵考ふれば決して不思議にあらず。夫れ世間は盲目千人盲目千人にして目の明いた奴一人もなければ髭の生えたが官員樣で束髮が女學生と思ふ外は何も分らぬが當然にて折角の文學者樣を所謂「俗物」と同視する事なきを保せず。萬一誤解せらるゝ曉には悔いるも詮なければ文學者は飽くまでも文學者らしからざるべからず。是れ強ちにブルにあらずして天眞爛漫の有の儘をさらけ出すのみ。

ブル——文學者ブル。そこで盲目も文學者だナと氣が附く故にエライと讃める、(文學者はエライものと盲信するが爲め)。爰に於てか文學者大先生は氣八荒を呑み森然たり茫然たり快然たり正に是れ豚の才を生溫風に曝し土臭を白蟻溝に御するの勢。

然らば如何にしてブルを得べき。崇拜すべき

人を崇拜して其眞似をすれば足れり。英雄崇拜を貶す者あれども英雄崇拜は人間の自然にして何人も崇拜せずといふ人すら猶ほ何人以外の或る理想體を作爲して崇拜するが常なり。古哲學者の言を借りていへば既に人間が自ら不完全なるを認むる以上は焉んぞ『完全』を忘想せざるを得んや。或る文學者が自ら足らざるを知つて他の秀れたる文學者を崇拜するに何の不可なる事やあるべき。又模倣を甚だしく忌むものあれども古の碩儒が云ひし如く首尾よく聖人の眞似を仕果せし者は即ち聖人なり。己れが先進の模倣を爲すに少しも差閊あるなし。飽くまでも崇拜すべき人の眞似をするがよし。怒る時に眼の釣上がる工合から喜ぶ時に相好の頽れる度合までも。此眞似をするをブルといふ。文學者は大にブルべし。ブツて而して後文學者たるか、文學者となつて而して後ブルか。こゝ莊子が胡蝶に於けると同じく分明ならぬこそ面白し。（注意、單に眞似をするをブルと思うては困る、何でもなき人が何でもある人の猿眞似をするをブルと云ふ也）。

そこで大にブランとするに當り古今文學者の嗜好習癖を吟味するの必要あり。

先づ衣食住器具調度等に於て見よ。

冬一裘、夏一葛、一簞の食、一瓢の飲――是れ古の文士が陋巷に窮居として猶ほ樂む所以なり。然れども今日は物質的の世界なれば百年乃至二百年前の生活を以て規矩すべきにあらず。有ゆる利便を知つて之を用ゐざれば兎も角も、既に利便あるを捨てて顧みざるは迂腐の毀を免かれざるべし。

京都の畫工某氏東京に來るに曾て汽車の便を借らず、常に云ひけらく、轉瞬の中に五十三次を通過するは旅の哀を忍ぶ道にあらずと。其風流なるや非風流なるやは別問題として、今の物質世界に循行する人にあらざるや勿論也。

今の文學者は斯くの如くヒネクレたるを喜ばず、どこまでも物質世界のお供をして行く方針を取れり。唯一から十まで流行を外さぬ樣にするには勢ひ多くの富を要し、且つ俗物の眞似をするも餘りに腑甲斐なければ流行を追はぬ振して追ふをもて主義となす。

少しく大人らしく振舞ふには一時の流行を競はずして二百年來の流行を心掛くべし。例へば元祿振とか天明仕込とか云ふが如し　若し一切の器具調度悉て今樣を蔑みて百年前のものならずんば用ゐずといふまで眼が高くなれば大の大通人と崇めらるゝ事疑ひなかるべし。

さりながら是は稍やヘモクレたる黨派なれば手本にしがたし。第一多少隨筆物を研究して後日本橋の中通り或は下谷淺草界隈をまごつく苦勞を積まざれば出來ぬ事なれば當分はあとまはしにして夫よりは寧ろ新聞の雜報欄内の流行物でも切拔いて置いて參考に供するが近道なり。

衣服は成るべく華美にするがよし。是れ「俗中の雅」にして常識ある俗物が容易に學び能はざる處也。紅葉先生曾て友禪の下着を着せし男子を見て箱根以東の化物なりと罵られしが、此男子極めて馬鹿なり、若し友禪の襦袢だけにて辛抱せしならば「俗中の雅」のお仲間入が出來べきに惜むべし。

ゴオルドスミツスは伊達を好みし寛濶男なり。「タイル」染の藤色絹の洋袴を穿き黄金の頭附きたる杖を持つてノソ〳〵と來る姿一段の見榮なりきと史家は書き殘しぬ。あはれ此男も藥屋に駈付けて漸くに麵包にありつき肌衣一枚になつて大陸を漂泊ひし事ありと思へば可笑し。人は決して汚れたるを好むものにあらず。清きが上にも清く美しきが上にも美しからんを願ふはおしなべての人情なり。古の文士が垢蘚の衣を纏ひて平氣なりしは畢竟瘦我慢の類に過ぎざれば。明治の盛大に生れしもの何ぞ斯

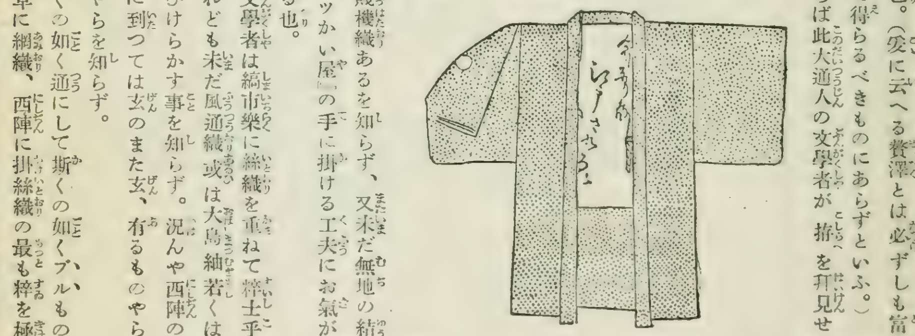
る負惜を爲す事を要ゐん。大にシャレるべし、一生懸命にシャレるべし。

十返舍一九は古今になき不所存者なり。春王の元日賀客に風呂を勸めてソックリ其禮服を着て年始廻りに出掛けしに到つては無法も甚だし。今の文學者は流石に身嗜能く紋附羽織袴は魯か「フロックコート」燕尾服「シルク、ハット」の心掛まであれば何時曲馬の口上言ひに雇まるゝも更に差閊なし。

まだ／＼是だけにては不足なり。素袍大紋烏帽子直垂等の用意なくんばあらず。文學者としてシャレるには此位な贅澤は魯かな事なり。其むかし松木淡々が仕たい放題な榮耀に較ぶれば、純子のてゝら錦の鼻拭を用ゆるも決して僭上の沙汰にあらず。况してや今の文學者が紗綾縮緬絲織一樂を不斷着となすも、袖裏に異り切を用ゐる吹殼の跡を下前に直す丹精あるに於ては、何ぞ之を贅澤なりと咎むるを得んや。

勿論！　今の學者は決して贅澤にあらず。たゞ自ら贅澤を盡せりと思ふなり。否、贅澤を盡せりと思ふにあらずして盡さんと思ふなり。否、贅澤を盡し得るの美術心に富めりと思ふなり。否、世の中の贅澤を衒ふ俗物めらよりも遙に勝れたる贅澤を盡すの道に悟入せる大通人なりと思ふ也。（茲に云へる贅澤とは必ずしも富の勢力にて得らるべきものにあらずといふ。）

いざ去らば此大通人の文學者が拵を拜見せんに、



今の文學者は黑の羽織を着して、殿様然たり。其地は斜子織若くは一樂織を用ゆ。然れども未だ賤機織あるを知らず、又未だ無地の結城紬を「しッかい屋」の手に掛ける工夫にお氣が付かれざる也。

又今の文學者は縞市樂に絲織を重ねて粹士乎たり。然れども未だ風通織或は大島紬若くは縞斜子をひけらかす事を知らず。況んや西陣の織出小紋に到つては玄のまた玄、有るものやら無いものやらを知らず。

夫れ斯くの如く通にして斯くの如くブルいもの如何で岐阜に網織、西陣に掛絲織の最も粹を極めたるもののあるを知るべき。高が呉服屋の番頭の講釋を聞いて江戸ッ子の顔をするが頗る大膽也と云ふべし。

試に上圖の羽織を見よ。これ今の最も勢力ある文學者の一派が讃仰の美術心を搾りし拵なりと云ふ。胴裏地に西陣を用ゆれば大出來なり。古純子を用ゆれば夫こそ恐入りし次第なり。又おつにひねッて京染の古代更紗の斜子を用ゆれば妙のまた妙なるもの。然るに一尺十三錢切の甲斐絹に『命』『もと』、若くはお手製の發句を黑々と書かれ、しかも町内の印判師に十錢の刻料で註文せし駄印を眞朱に捺されたるお手際は抑も大の大の大通ならずや。縱令へば何處の古手屋を搜しても無い處が恐らく珍重する所以なるべし。

是等の一派が用ゆる帶を見よ。角帶は博多が廢れしを御存じだけは天晴江戸ッ子なれども繻珍の既に時遲れとなりしは一向夢中なるが流石なり。稀には男物に向かぬ邯鄲織を無理にひねらうと云ふ野心家なきにあらねど焦坡織といふは何處で出來るものか更に知らず。

更に又兵兒帶の嗜好を吟味せば其愈々奇絶妙なるは古の馬骨子亞流を瞠若せしむるに足る。

今の通は天竺木綿の保の好きを嫌つて八王子の

縮緬の切れ易きを尊ぶ。八王子にもせよ、兎に角丹後縮緬といふ名の立派さに惚れて。しかも無地の白にては脊觸れて面白からずといふ好奇から歟、或は汚れて困るといふ心配から歟、更紗或は小紋に染めたるを用ゆ。之も笠仙に註文せし拵へ染なれば一寸憎い思附なれど、中幅一尺三十錢見當の染上を氣張るが常なり。それも是も惣て好し、若し染色或は形がヂミでシブいものならば。隨分甚だしきは十八九の妙齢ならずば婦人の帶上にすら用ゐまじき柿色への伊達を見せる凝り性もありといふ。

此胴裏の羽織で「この更紗縮緬の兵兒帶で――其上に飛白の石川足袋を穿いて――猶ほ其上に香取屋を聞覺えて伊勢芳を知らぬ下駄通がオホンといふ黑羅紗の鼻緒を引掛けて――且つ猶ほ其上に野田屋の前を素通りして菱屋に氣の付かぬ帽子通が「モール」の紐を飾りし鳥打帽を被ッて、而して後ぐつと反身になつて澄ます時は之を折紙附の通人的大文學者なりと云はずして何ぞ。

文學者の大通既に折紙附となれば、一切萬事が通の極道に達せし物ならざるべからず。此に於て書齋は云ふ迄もなく茶の間座敷向の裝飾中々大事となる。

文學者が意匠を凝す室內裝飾に千種萬樣あり。たゞ最も著しく人の注意を曳くに足るものは作者風の書齋なり。

作者風とは何ぞ。卽ち文學者ブルを云ふ。一般にブルの必要なるは前に述べし如し。書齋に於ても亦大にブラずんばあらず。

作者は敢て小堀遠州の風雅を極めたるにあらず、千利休の寂を好むにもあらず、將た又ラスキンが審美的建築の祕奧を搜りしにもあらで、唯わけもなくブラんとするが爲に世間人並に外れたる數奇を盡して、獨身者がお茶を貰ひし如くホク〳〵悅喜ましますだけの事なり。

作者風の書齋とは大道の露店の如く「ゴミ」を飾り立てるを云ふ。今の文學者の見解に依れば天晴美術家が首を捻らうと云ふ物は大抵『俗』に屬する代物にして、眞個の見識ある者が珍重すべきにあらず。殊に尋常一般の人の如く尋常の器具調度を用ゆる事は大通たる文學者們に之を爲すを恥づ。

むかし烏丸光廣卿は扇子箱を硯箱に代用し、山東京傳は生涯天神机を用ゐたりと聞く。今の人――明らさまに云へば曾て我樂多連三人男の一人と仰がれし某先生は婦多川の妓女が名殘の化粧臺を文机となして引出に白粉の香あるを誇り、卷煙草の箱に硯を入れて「マニラ」の香に薰ずるを樂み給ふ。古人の心を得たるもの、豈に夫れ恐ろ感心と云はざるべけんや。

今の文學者が好事は槪ね斯くの如し。夫故に家の造作木材のあしらひ方は宛がお茶屋の座敷向で覺えた位に過ぎざれば猫屋をひやかして番頭に首を捻らせる心配なき代りに、物之本で白檀の尊きを知るばかりで吉野杉の品の好きを知らず、一ト口に唐木と呼びて黑檀鐵刀木の値高きに膽を潰せど終に黑部杉屋久島杉の澁きを御存じなし。云はゞ奧山普請で大通を極込むに過ぎず。

普請既に斯くの如し。造作は如何かといふに、桐の骨に神代杉の緣を附け掛川の葛布或は芭蕉布を貼るお好を御存じなきは大事なけれど、田舍の旅籠屋から思附いて再板物の歌麿の美人畫、石板摺の古文書、甚だしきは俳諧のちらし等を交張りにして天晴の通を極めるに到つてはげに〳〵大膽不敵といふべし。

文學者は勿論金持にあらねば家の汚きは更に差閊なし。併長屋的の普請造作もまた頗るよし。唯それ大通なる文學者にして赤松の床柱、檜の天井板、「ガンゼキ」或は泥間合の襖にて滿足するは妙なり。君子は能く足るを知る。文



當今の小説家の揮毫依頼何ぞ曰く有りげなり

學者は眞個に足るを知る。

此足るを知る文學者なればこそ器具調度に到る迄惣て足るを知るも無理ならず。强ちに勤儉尚武を主とするにあらず、決して廢物利用を心掛くるにあらず。而して渠は化粧臺を以て机となし煙草の空箱を以て硯箱となす。

古往今來文學者は多少美術の嗜好に富む。ディフォーの如きドストエーフスキイの如き殆んど科學者に類せる者を除くの外美術の趣味を備へざるはなし。グレイ或は今のラスキン等に到つては專門美術家を以て目するも可なり。美術を解せざるは文學者として第一の恥辱なり、ひねり屋の若檀那が木綿を被りし美術心にあやかれば一期の面目といふべし。

今の文學者は能く美術に通ず。此故に文學者たらんとするものは美術に通ずる顔をせざるべからず。少くも美術が好きだといふ顔をせざるべからず。縱令無理に[illegible]し彫刻料を奮發しても『美術世界』に序文を書き『繪畫叢誌』に投書する覺悟なかるべからず。よしんば一段見識を下げても當世畫工(平手でもよし)に交際を求める決心なかるべからず。成るべく展覽會或は共進會を縱覽して草臥足を引きずるを[illegible]なかるべからず。

唯是れだけにては濟まず。此上に古道具屋をひやかして贋物をつかませらるゝを最も妙なりとす。林述齋曾て狂言の大名が太郎冠者に騙さるゝを妙なりとして云へらく、今の大名は騙されぬが却て殘念なりと。今の文學者は狂言の大名なり、就中美術に於ては太郎冠者に騙さるゝ事頗る多し。若し林述齋をして在らしめば必ずや之を以て大の大の美徳なりと賞さん。

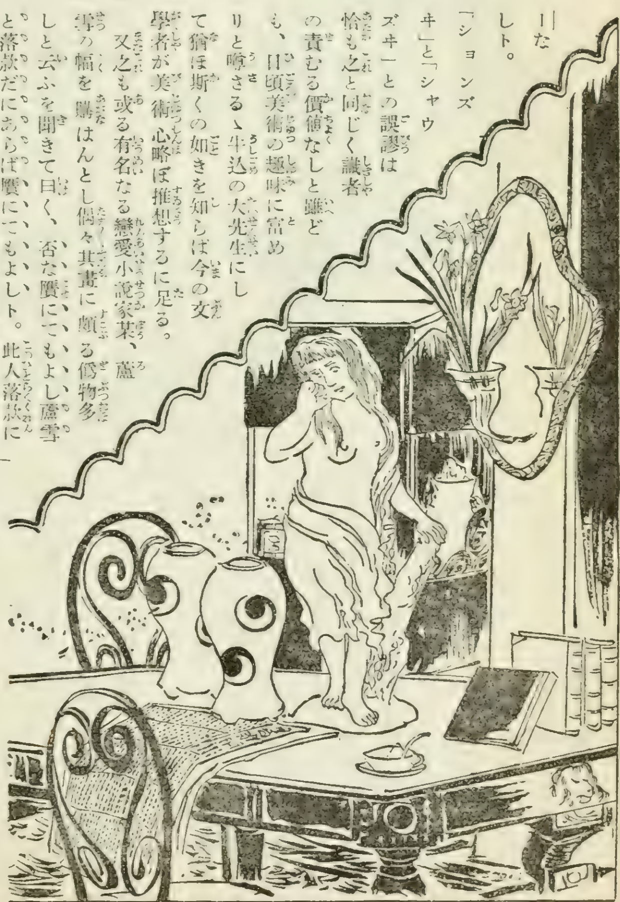
勿論時たまの展覽會に硝子越で研究する美術家なれば、何を見ても妙だ不思議だ能く出來てると讃めるより外評する事の出來ぬは當然にし

て、却て素ッぽい處が憎氣なくてよし。然るに今の文學者は古道具屋然とエタイの分らぬ代物を並べちらして、牛糞をつッついて「シャモ」の味を賞すると同じ名評を吐く。まことに人を驚かすの法を知れるものといふべし。

徳田や吟松堂を日本一の骨董屋と心得、玉忠、細宗あるを御存じなき御方なれば、緣日商賣に類する中通りで高い物を賣附けらるゝも無理はなく、勿體らしく「ゴミ」を飾りたてるも當然なれど、種々の講釋をして人を迷惑がらせる事古人に比類なき大通ならずや。「河東節親類だけに二段聞き。今の文學者に河東を聞かせらるゝ恐たけれども、美術の講釋を聞く覺悟なき時に隨分迷惑する事あるべし。

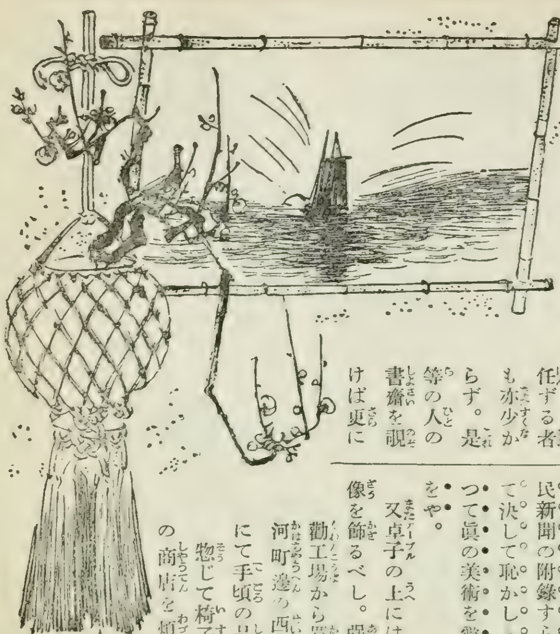
茲に面白き逸話あり。某生曾て一文を草し今の最も有名なる牛込の某大家の許に行き刪を乞ひしに、先生讀んで偶々『祥瑞』なる文字に「ションズヰ」と振假名附けられしを見て喝して曰く、卿が疎鹵何ぞ甚だしきヤト。即座に朱墨を以て『シャウズヰ』と改めたりといふ。

去年折風界に於て衝突問題喧しかりし時丸山茱井上博士を嘲つていへらく、博士は荐りにシオッペンハウワーなる人の名を擔ぎ出せども獨乙にシオッペンハウエーありてシオッペンハウワーなしト。「ションズヰ」と「シャウズヰ」との誤謬は恰も之と同じく識者の責むる價値なしと雖ども、日頃美術の趣味に富めりと噂さるゝ牛込の大先生にして猶ほ斯くの如きを知らば今の文學者が美術心略ぼ推想するに足る。



又之も或る有名なる戀愛小說家某、蘆雪の幅を購はんとし偶々其畫に頗る僞物多しと云ふを聞きて曰く、否な贋にてもよし蘆雪と落款だにあらば贋にてもよしト。此人落款にて繪を買ふと見えたり。某美術家曾て云ひけらく、余は落款の何たるを問はざれば勿論眞僞を辨ぜず唯その凡と非凡とを鑑別するのみト。前の小說家は則ち然らず、眞僞の如何を問はずして落款だにあらば平凡々にても之を愛重して置かざるが如し。所謂道風の朗詠集宋板の大明律若し有らば之を愛惜するもの恐らく此人なるべし。

文學者の美術心は先づ此位にて澤山なり。此くの如き興ある好逸事を作るほど美術心あれば足れり。書畫を商ふもの常に云ふ、最も鑑識に精しき者は困る全く暗き者も困る多少聞囓りて高慢を云ふ者が第一の顧客なりト。文學者は則ち此第一の顧客とならざるべからず。



墨繪なれば墨色が好いと讃め、彩色畫なれば着色が妙だと云ひ、支那物なれば雅致があるとそやし、日本物なれば古雅だと感服し、足利物が見事で元祿物がオツだと賞歎する。若し試に『美術評語類纂』を編輯せば恐らく新聞半欄位にて今の文學者が用ゆる評語を盡すを得べし。

多くの文學者、中には西洋美術の鑑識をもて任ずる者も亦少からず。是等の人の書齋を覗けば更に風變りがして中々妙を極む。先づ楣間には髮結床然としても關はざれば「クローム」の繪を額とすべし。額縁は純子も高し金縁も嫌味なりといふ處で斑竹或は煤竹を用ゆ。又「クローム」繪も獨乙或は佛蘭西出來のものは高ければ小川町通りの寫眞屋で賣る亞米利加仕入の一枚二十五錢止りの廉物がよし。随分「グラフキック」或は「フキガロ」の附錄を夜見世で買出してもよし。國民新聞の附錄すら額にする人あるを思へば決して決して恥かしき事にあらず。況んや大見識あつて眞の美術を愛するの餘りに出でたるに於てをや。

又卓子の上には是非とも石膏細工の裸體美人像を飾るべし。强ち洋行する人に頼んで羅馬の勸工場から買つて來て貰ふにも及ばず。三河町邊の西洋道具屋を冷かせば五十錢位にて手頃の品を得る事容易なり。

惣じて椅子卓子卓氈等は杉田或は木平の商店を煩はさずとも萬事和製で濟ますが國への忠義といふものなり。殊に卓氈は花紋の更紗で澤山也、更紗は舶來品なれど廉物なれば大事なし。

西洋好きで日本品を珍重するは可笑しき様なれど、成るべく日本の品を用ゐて西洋風を作るは國粹的進步主義とか云ふ有がたきものなる由。此故に或る一派の頑固連は甚だしく擯斥すれども例の一ト口に「濱物」と呼ぶ見掛の綺麗なテカ〳〵、ヒカ〳〵、ギテ〳〵したる——辨天通りの雜貨店で賣捌く日本美術品を重んずる事一ト方ならず。九谷有田の贋物を恭やしく陳列す。之れ西洋崇拜文學者の特色也。

要するに西洋風にしろ日本風にしろ部屋の狼藉したるを趣味多しと考ふるが故に、煙草屋の店と同じく、襖は本より天井まで春畫繪びら小說の插畫學校の卒業證書女の交際見世開きの引札等を隙間なく張附け、壁には雜誌赤本の散然たる間に人形轉がり西笠投出され瓶子倒れ釜チンとすまし込んど足の踏所なきまでにかゝり柱には傑作の假面邀手として睨まへ天井よりは[illegible]ユラリとブラ下る意匠をもて珍の又珍馬鹿不思議と申す。

中には美術嫌を看板とする大文學者もあり。常に我雅は更に分らず「一と ズバ拔けるは豪壯活達にして面白し。縱令其人は牛無美術家の珍重する南宗の畫山水を床の間に懸けるも。

むかし熊澤蕃山は常に天神様の繪を書齋の

床に掛けたりといふ。天神様の掛物面白し、權兵衛評書と認めたる稲荷大明神の掛物ならば愈々面白し。

或人は妙にヒネリて掛物を裏返して白畫の三尊佛を張り或人は益々ヒネリて一休の『し』の字を書きて壁に張付け又或人は愈々茶かして壁に鳥佛師、百萬塔、土偶の泥畫を描きぬ。是等皆面白し、到底常人の想像しがたきまで典型以外に走りたる實に茲に到つて極まる。

然れども天下に文學者と名乗らんとするものは斯くまでヒネらざるもよし。一番世話のなきは自分で美術に明るいと思へば濟む。自分の意匠を凝らし室内装飾に建築上の參考となると思へば濟む。又斯くまでに思はざるも一見して直ちに大文學者の書齋と分るに違ひないと信ずれば則ち足る。

縦令復た萬一自信の念足らずして斯く書齋を作り上げた處で果して大文學者の書齋なるや否やを疑ふ事ありとするも、斯る意匠は到底今の大文學者ならずば思付かざればどンな田舎漢が見ても一ト目ではゝア文學者様のお座敷だナと消魂る事請合なり。

扨て書齋は斯くの通り出來上ッたれば之より食物の吟味を少しく試むべし。

文學者はどこまでも通人なり。此故に食物も衛生的ならんよりは寧ろ通人的なるをもて主義と爲す。

強ち贅澤を衒つて三度の食膳に甘い物づくしをするに及ばず。唯折々「通」をやればよし。牛込なれば吉熊、新橋なれば大又、根岸なれば伊香保温泉、下谷なれば伊豫紋あたりへチョクチョク行くを「通」といふ。

散財は多きを喜ばず、席の長きを以て『通』と爲す。料理は甘きを欲せず、楼婢の綺麗なるを以て善しとす。此故に上等會席には行かず。ツマリ江戸ッ子の料理人の名あるには行かず。知れる家には行かずして田紳を歡迎する立派なお茶屋にて反吐をはくを『通』の極意とす。

むかし堅田松庵あり。友に招かれてたゝき菜の馳走になりし時舌打して云へらく、是れ男のたゝきしものなり女のたゝきしにあらずんば味なしト。主人大に怪み厨に行きて之を問へば果して男のたゝけるものなりき。

又茶人某有名なる割烹店に行きて刺身を命じ喫して曰く、是れ鐵の臭ありト。料理人則ち竹を以て料れるを出す。曰く是れ竹の臭ありト。最後に伊萬里の鉢を破して其碎片をもて宰れるを供せしかば、茶人初めて其味を賞翫して置かざりしといふ。

今の文學者は斯くの如く味神經の發達せしにあらで、唯一途に『喰へども味を知らず』の嘲を免かれんとするに汲々として即ち『通』を氣取る。

又むかし某あり、鎌倉の三橋に行き五圓金を投出して曰く、「余は魚鮮に厭きたれば之にて精進物を賄ふべし」ト。番頭唯々として退き大に五圓金を持餘せりといふ。

今の文學者は是れだけのシヤレすら爲る道を知らざるなり。唯あてがはれたる料理を乙だと賞めて御馳走で頬べたを叩く事のみを知る。

八百善の味を知らざるをもて文學者を咎むる勿れ。文學者は能く八百善の名を知る。獨り花屋敷の常磐屋に到つては其名だけを知るものすら寥々として晨星の如し。去年或る大家は紀行の端に平清を甚だしく稱揚して東京一と云ひしにも關らず、終に一言の常盤屋に及ばざりしは、恰も關羽の武勇を語りて諸葛孔明の偉略を忘れしに同じ。

有名なる會席すら忘るゝ事あれば、甘い物屋を知らざるも決して怪むに足らず。島村を知らざるは當り前也。堤から轉して來た常盤を御存じなきは勿論々々咎むるだけ却て野暮といふ

もの。

繰返していふ如く、文學者の『通』は國民新聞の斬馬劔禪（昨二十六年の夏頃）如何にして東京に生活し得べきや」なる名文を作つて大に通をきめし人迪（一）より上る事一等の大通なれば諸事萬事に行渡ッて、東京に住む猫も杓子も皆知つてる事だけは悉く御存じなり。淺草に觀音があつて品川にお臺場がある事から榮太樓が甘納豆をもて評判高く鎭屋が金鍔をもて名よゝある事まで一切承知之助ぐッと飲込んで「オホン……限るわとすます位なものなり。

食物が通だと云ッて何も有數の人が知れる珍味を賞翫するわけでなく、兒守はボッタラ焼に咽喉をグビ付かせ斷童は今川焼に涎を滴らす事を知るだけにて同じ切餅の附焼でも何處の河岸のが切が大きく分があッて搗が好く醬油の味が能くコンガリとして甘いかは御存じなし。尤も車夫や立ちん坊の舌の加減を御存じなきは貴族的に育ちし文學者ならねば道理なれど、扨是より以上な處で同じカステラでも風月堂と藤村と壺屋とは如何味が違ふかは一切夢中なり。中には凝性な御連中が銀座の古月や中橋の松屋で出來る新菓を新聞の廣告で承知して取寄せるもあれど、遠州好みの縣焼或は梅花堂の珍菓に到つては知らぬ處が文學者也。

物は總て不變不動と心得るが今の文學者にて、二十年前に亡くなられた爺イ婆アが淨土の土産話にした一々を聞噛りて鮨は與兵衛、汁粉は氷月、團子は言問、蕎麥は藪、天麩羅は天金と、三井大丸と同じく日本中に知れ渡り！だけを吹聽して、お盆は丸い物お膳は四角な物と覺込みしお抑も通の通たる證據なり。

文學者中の大通は國々の名産を珍重する事一ト方ならず。國産とだに云へば、へいへい〳〵と首の砂糖漬も田螺の鹽辛も妙だ〳〵と賞める事請合也。縱令陰にてホキ出し水にて咽喉を洗ふ事ありとも兎も角表面だけは珍味して見せるが通といふものなり。

惣じて今の文學者の衣食住に於ける嗜好は大抵同上の如ければ――よし二三人は此以外の野暮なりとも――こゝらを斟酌すれば略ぼ推知するに足らん。

猶ほ其他の事を少しく述ぶれば、

名刺は是非とも用意せざるべからず。「ケント」の紙に築地活版所の印刷なれば所謂出ず入らずで温和しけれど、其れでは文學者らしからざれば白檀に朱字を用ゆるなど面白し、或は支那人の模倣をして朱唐紙に黒肉を用ゆるも妙也。名刺の文面は、

風來山人
本名 [illegible]

或は單に、

式亭三馬

として裏に住所本姓名をしるすもよし。又號のみにて本姓はしるさざるもよし。何となれば文●學●者●と●し●て●の●號●は●本●姓●よ●り●も●[illegible]●け●れ●は●也。

活字は久永を嫌ふ。最も普通も行はるゝは蜀山風の石板摺なり。但し老成の蜀山にあらずして、專ら若書の癖多きを重んず。

德川時代の文學者は印刻を愛し、山陽或は淡窓の如き自ら篆刻を爲しゝ者すら少からず。今の文學者にもまゝ好む者なきにあらねど、もと俳諧の點印或は摺物の落款で感服せし印通なれば、鷄血とはどンな石だか、西漢とはどンな書體だか御存じなく、天賞堂の廣告で徐田蒼遠と濱村大澥を覺えし外は畑河を日本一の名人と思ふだけが關の山にて、町内の印判師に御自

筆を揮らせる事のみを知つて通を極める也。

茲に一大文學者ありと假定せよ。此大文學者先生が車を篆刻師の格子に横附にて横柄に活版屋の小僧を叱る心をもて註文せしと假定せよ。しかも町内の印判師にお世辭を云はれた呼吸を飲込ンで素人臭いかラ威張をして譯の分らぬ御託を陳べたりと假定せよ。殊に先が迷惑がるをも思はずして印判師から聞嚙ツた書體の通を拈ツて其お影に滅法高い料を取られたりと假定せよ。又其上に陰で笑はるゝを知らずして一ト山いくらといふ賣竹と恩に被せて呉れたりと假定せよ。若し此事實まことに有らば則ち如何。

幸ひに今の文學者連中には是ほど氣のきかぬ笑はれ草を作る癡呆なく、六書通すら覗いたことなき代りには象の形をした眞書印で玩び、若くは宿根に大和古字の交で嬉しがるだけ溫和しくてよし。其他の文房諸具に到つては經机を用ゆる外は全く知らず。勿論知らぬ處が尊し、萬一知つてゐては道具屋と謬られる恐あるが故に。

大體右に述ぶるが如し。

要するに衣食住しも悉くブラざるべからず。文學者は斯への如きものなりと覺込みて精々油斷なく模倣をすれば請合つて忽ち文學者となれる。

流行——は文學者が忘れて濟まぬもの故萬事飲込んだ顔をしてゐるべし。さりとて流行の奴隷となるは隨分金子が掛つて厄介物なり且つは見識のなき咄なれば成るべく流行におくれる樣に心懸くべし。しかし丸切りおくれると流行を知らぬと思はれる憂あれば手輕で濟む事だけ流行を競ふべし。

巴黎の流行は一日々々に變る。文學者の流行は五年位續く。之を俳諧の語にて云へば不易と流行と相兼ねたるものにて世間の人はスタレたと思ッても文學者だけは猶ほ流行だと思つてゐる。其證據には文化文政度のお孃樣が今でもゐる事だと信じ爲永時代のお衣を今でも着てゐる事と考へるが何より也。

是れしかしながら文學者の有がたき處なり。流俗以外に超然として『通』と呼び『粹』と誇る。噫、是れ最もエラキ處ならずや。

是より文學者が交際の心得を說くべし。

第四　交遊に於ける文學者の心得

倫敦には政治社會と稱すべきものなし。寧ろ外交社會、法律社會、遊藝社會等と云ふべきものあるも單に政事家のみの會合或は團體を見るを得ず。之と同じく特別に文學社會、美術社會、演劇社會と名くべきほど凝結せる獨立の社交を絕えて作る事なし。何れの集會に望むも必ず文學者の三々五々群を爲すを見る、宮庭の夜會にも、政事家の宴席にも、學術の講談會にも、踏舞會にも、遊藝會にも。然れども特に文學者のみが一團を作りて別世界を爲すを知らずト。是れ數年前倫敦滯留の外國人が著しゝ「倫敦社會」中の一節なり。アングロサクソン人は世界を以て家となすの氣象あるが故に、社交上に於ける心もこれと同じく、社會の公人としては各々政事家たり文學者たり美術家たりといへども、一私人としては互に往來して其間更に墻壁を設けず、誰も彼も打交りて少しも挾む處なし。

日本は之と變りて、小にしては互に城堡を守りし封建の遺風、大にしては外國の交通を拒絕して堅く自ら閉鎖せし餘波未だ消えず。業を異にすれば互に睨め競をして政事家は政事家、文學者は文學者、美術家は美術家とおのがじし蝸牛の殼に等しき小邦國を作り、各々我が傍輩で自らを揚げ他を落すに汲々と堅く守つて籠城を爲す。

一ッ穴に棲める文學者同士すら斯く交る事出來ずして、似た者連中が小黨派を作りて向うの隅にコソ／＼此方の隅にチョコ／＼寄合を附けるが名にしおふ大和民族の特色なり。小黨樹立の政治界を怪む勿れ。主義の異同も感情の行違もあるにあらずして猶ほ無數の黨派に分るゝ文學者あるをもて見れば黒砂糖の凝塊がいつの間にか出來るも不思議にあらず。

文學者としての交際は第一に小黨派を作るにあり。勿論幾分か主義を同うする者或は嗜好の似たる者同士にあらずんば提携するを得ざるは當然なれども、文學者の黨派は斯る面倒臭き手數を要せず、例へば同じ町内に住む者なれば同町内といふだけの好誼にて同じ樣に酒を飲めば好酒家といふだけの廉で四人なり五人なりの連中を作る、之が第一の秘訣なり。

どうにか斯うにか連中が出來れば、此連中で茶番をする、酒を飲む、芝居に行く、花見に出掛ける、雜誌を發行する、一ッ新聞の寄書家となる、互に各々の著述を讃め合ふ――陰ではおの／＼舌を吐いて修羅を燃してゐようとも表面だけはざッこばらんの無禮講を樹てて文壇に何派ありと氣焔を吐く。

最も "homogeneous" で且つ "heterogeneous" なるものは文學者なり。漸く五人か六人の小黨派を作りながらも猶ほ互におのれの城郭を設けて、例へば打解けし酒宴の席ですら籠城の策を講ずるは不思議な程なり。三日三晩飲明したとか或は一ト月餘りも一緒に旅行したとか聞けば、さも睦まじさうに思はるれど、陰で熱罵冷諷互に敵の備たきに乘ずる軍略片時も油斷せず益々守備を嚴うして壘を高うす。而して相遇へば歡喜を眉宇の間に溢らして兄弟の如し。

蓋し何故に斯く裏面に相せめぐ者が兎に角表面だけは親密たるやと云ふに、前にも述べし如く當時の文學者は「通」且つ「粹」たらんと欲して常に恬淡和平勤めて胸襟の廣きを粧ふが爲なり。むかし千松は曰く、おなかが空いても飢じうない。今の文學者は即ち曰く、腹は立つても怒らない。縱令何かの不滿足あるにしても其不滿足を忍ぶが粹なり、通なり、殊にまた何かの便宜が此不滿足の埋合せをするに違ひなければ結合團體を作るは極めて必要也。所謂一本の矢は折れ易けれども一束の矢は折るべからざる道理にて。

白勝は白酒を賣りし匹夫なり。時遷は鷄を盜みし草賊なり。然れども之を梁山泊一座の豪傑と呼ばばその匹夫草賊たるを忘れて先づ天下を動かす人なるやを思ふ。當時の文學者が各々樹立せる黨派に於けるは恰も之と同じく何黨の誰と云へば都々逸發句の外は何物をも爲り得ざる事に氣附かずして直ちに天下文壇の大將軍なりと信ず。黨派豈に輕んずべけんや、黨派は實に勢力を作る。

流石に立憲治下の文學者だけありて能く黨派の利益を悟り、幾分かは勢力の增進をも冀潤して不滿足ながらも何々派の尻馬に乘りて文學の戰場を踏みちらす心掛感心なりといふべし。

見よ、田舍新聞の續き物にも劣る小說ですら何黨の某が述作とだに云へば東京の大書肆が立派なる表紙と口繪を添へて出板し、堂々たる大家先生が長々しき批評をなすにあらずや。

人は云ふ、今の文學界は門閥なりと。然り、今の文學界は門閥なり。然れども此讒言を爲す者は自らを門閥に化する力なきやくざもの也。官に媚ぶる者は故らに雜音を模ね長人を氣取る。文界に旗擧げせんとする者は「粹」と「通」の洗禮を受け進んで何れかの黨派に屬せざるべからず。

而して此黨派に屬するは決して難事にあらず。本より二名以上の紹介者を要せず、年齢財

產等の資格も入らず、投名狀も不用なり、大盤振舞も無用なり。惣て極めて手輕に何人も加入するを得。縱令へば文章に名もなきともがらなりとも其連中たる榮譽を大なりと信じて極めて有がたく思へば。又縱令有がたく思はずとも筆や口の先で何かの序に、『私は何々派の端武者です、宜しく御贔屓を願ひます』との意を吹聽する心掛さへあれば。

先づ其一策を舉ぐれば是等の黨派の御本尊樣の家近く住ひて折々文學や美術の講釋或は奧妙なる洒落を拜聽する爲め腰を屈め首を下げて參向し、『どうぞ宜しくお引立を・・・』とだに云へば暗々の中に入黨の式は濟む。然らずんば・單簡略に初手から弟子入を申込むがよし、弟子となッて諸事萬事引立てて貰ふが早手廻しにて世話入らず。第一の良策といふべし。

むかし中江藤樹は自ら德薄く學少うして師たるの力に乏しとなして人の其門に入るを許さず、熊澤了介の如き門に立つ事三晝夜に及んで漸く弟子の禮を執るを得たりしといふ。

今の文學者は此野暮堅きを嫌つて弟子の・・・・押賣をするに拮据勉勵す。何事も商賣繁昌といふは能き心掛なれば強ひて嫌だと云はぬ限りは、隨分嫌だと云ふ者にまで弟子の名を賣附ける事決して惡からず、是れ商賣上手といふものなり。一度なりとも先生のお名前を欽慕してゐたとか或は是れに御染筆を願ひますと短冊でも出せば直樣弟子の名を賣附けらるゝ。甚だしきは・・・・・・無斷に獨り極めに賣附けた積りにして誰それは・・・・・・自分の弟子だと吹聽して吳れる。『あア、あの男は僕の門下生・・・どうか贔屓にして吳れ』と一ッ穴の貉どもに賴む。

漫りに弟子となる事を嫌ふ勿れ。平田篤胤は相會はずして本居宣長の門人と稱し、式亭三馬は全交門の一人と名乘つて滿足せるものの如くなりき。然れば今の音に聞ゆる文學者大先生の弟子となるは玉帝より古褌を拜領したるほどの大榮譽にあらずや。殊に寺子屋入とちがひ朋輩弟子に煎餠を振舞ふ手數すらなきに於てをや。況んや弟子となれば名洒落を聞き名茶番を拜見する役德あるに於てをや。

此手順を踏んで弟子となる歟、然らずんば幇間的のお出入を求めるが交際の第一階段にして、此首尾さへ濟ませば一ト月二タ月を經る中に自づと自分の名も廣まり知らぬ間に文學者の仲間入が出來る。

師弟の間とか或は兄弟分とかになれば惣ての事——著述、出板、觀劇、遊興等何や彼に都合よく世間の人からも羨まれる。否な、慥に羨まれると思ふ樣の氣がする、恰も孩兒が赤ければ「メレンス」をも見せびらかす如く。

しかし斯く互に師弟若くは兄弟分となりて、且つ又縱令表面だけなりとも唯美しくしてゐるばかりでは餘り平調で面白くない。そこで文學者先生は時々仲間喧嘩する必要がある。是れも喧嘩すべき理由があれば當り前なる故更に妙ならず。夫故喧嘩すべき理由少しもなきに尋常人より見れば卯の毛で突いたほどの廉を見附け出しては喧嘩するが即ち文學者なり。

文學者の喧嘩は殊に業々しきをもて特色となす。渠等が忽ち絶交するといふは剛毅の精神を示せしものにして、苟くも男子殊に文學者たるものは優柔不斷ぐづら／＼とすべからず。氣に入らずんば男らしく直に潔く絶交すると云へ。

然しながら文學者は強いばかりでは困る。剛情を言通すのは却て男らしからず。何處までも胸襟洒落で行くが文學者の文學者たる所以なれば、一端絶交したと云ひし事は忘れて仕舞うて再び仲好く交るをもて妙となす、恰も孩兒が『モウお前とは遊ばないよ』といふ言葉の下から甘諸の交換をする如く。

勿論時としては全く背中合せをして犬と猿の觀をなす者もある。畢竟是は文學者の通有性とも云ふべき嫉妬偏執が原因で總ての事を邪推の眼を以て見るから起る。

古き例を云へばポープとアヂソンの間の如き、初めは互に原稿を示して意見を聞きし程の間柄なりしものが一朝猜疑の念を惹して以來反目して殆んど掴み合をせぬばかりなりき。猜疑はまゝ人を盲にす、嫉妬は往々良心を殺す。

然れども嫉妬或は猜疑の極めて卑劣なるは文學者能く之を知る。少くも自分だけは此卑劣なる感情の奴隷たらざる事を欲す。此故に他の嫉妬偏執に陷りて邪推を逞うするを嘲罵する事甚だしけれども已れが同じ嘲罵を値するに氣附かず——縱令幾分か氣が附いて心竊かに恥づるも表面には更に現はす事なし。

『あの男は僕を怨んでるさうで……あア氣が小さくても困る……』——といふお方自身も斯く人々に吹聽するほどに氣が小さくて困る。

七代まで祟ると云ふは猫か狐の執念也。文學者先生も多くは七代まで祟る。即ち猫か狐の執念を有つ者と云はざるべからず。

むかし物徂徠常に堀川の一派を罵つて曰く渠等は賣講者なり聖人の道を賣つて口を糊すト。聖人の道を賣ると匹夫の道を賣ると其何れか勝りたるやは爰に問はずして堀川の流に飲する者の言を尋ぬれば必ずや蘐園の俗子は二三百石の餌に釣られて諸大名の幇間に甘んずと云ふべし。徂徠は磊々落々自ら東亞の第一人を以て任ず。而して猶ほ此言を爲すをもて見れば所謂商賣忌敵の俚諺に文學者も終に免かるゝを得ず。

文學者は互に罵るべし。唯わけもなく罵るだけにて氣が濟まざる時は七代まで祟るべし。若し又淡泊にして七代まで祟るを面倒臭しとする者は一寸絶交すると云つて再び暫時の間に仲直りする洒落をなすべし。

文學者の交友は膠漆の如くならんよりは寧ろ泡の如くなるべし。然らずんば水と油の如くなるべし。然らずんば消炭の如く熾るも頗る早いが消えるも極めて早きをもて特色となす。

今又平生の心得を云はゞ、文學者は時たま留守を遣ふをもて極意となす。強ち多忙なるが故に詮方なく不在を詐る拙策を取るにあらずして、留守を遣ツて見ねば大家らしくなきが爲にチョイと此惡戲をする也。

『誰が來たから留守と云ツた』——『面倒臭いから會はんかッた』——『五月蠅いから斷ッた』——『心持が惡いから留守を遣ッた』——『昨日は一日留守だと云ッた』——『當分の内は留守といふ積りだ』

是等は多くの文學者の口より唾の如くハネる言葉也。

或る大家は已れの不在に公然の不在と内々の不在との二種あるを宣言し、或る大家は誰それに限りて必ず不在を詐ると名言し、或る大家は縱令紹介狀あるも初對面の人には決して會はずと斷言し、又或る大家は異種類の人には留守を遣ふが定例なりと高言しぬ。是等の人皆大家たるに恥ぢず。

人既に大家となりし後輕々しく面會しては大に見識を損ずるが故に不在と詐るも妙なり。二度も三度も無駄足をさせた處で畢竟幾度も來る者は用があるに違ひなければ更に接待の道を缺けるにあらず。云はゞ足を運ばせる度に隨うて此方の見識が一段づつ上るといふものならずや。

又更に歩を進めて云へば如何にも本統らしく留守を遣ふは妙ならず。誰にも感附く樣に、例へば一寸後姿を見せるとか或は特に奥で話聲を聞かせるとか若くは態々間の惡さうに執次

に斷らせるとか、兎にかくどンなボンクラにも『はゝア留守を遣ふナ』と氣が附く樣に不在と詐るをもて愈々妙なりとす。此時若し影にても『あの男は留守を遣ふ』と噂さるれば直樣おれも大家となつたと己惚れて少しも差閊なし。

萬一留守を遣ひ損ねて化の皮が露現れたとしても、そこは文學者なり、竹を割つた樣な磊落肌で『あッはゝ……』と笑つて誤魔化す事を知つてゐる。

むかし或人中井履軒を訪うて其平生無沙汰なるを謝せし時、履軒云く、否な無沙汰の方がよし度々來ては甚だ困るト。又木村蓬來は客を戒めていへらく、用あれば來るも可なり用なくんば決して來る勿れト。

又或人債鬼の襲來せし時云へらく、主人不在なりト。債鬼肯かずして曰く、そこにゐるではないか。爰に於て主人障子の影に隱れて『見えるか……見えなければ即ち不在なり』と。事古き隨筆に見ゆ。

先例既に斯くの如く多ければ、文學者は留守を遣ふも可なり、斷乎と客を謝絶するも可なり、隨分無駄足をさせるも苦しからず、時には詐が知れて苦笑をするも又頗るよし。

『何曜日接客日』、『何時より何時迄來客に接す』、『紹介狀なき者は面會を謝絶す』、『何分以上の談話は御斷り申す』——といふ如き札を玄關若くは應接室に掲ぐるは頗る事務家に類するの感あれども之れ中々に主人が世に時めける大文學者なる事を證明するに足れば夢々此心掛忘るべからず。

文學者は人に訪はるゝとも人を訪ふ勿れ。取分け後進生を訪ふ事は見識を下ぐれば必ず無用也。近き頃魯西亞のペテルブルグ大學に留學せる日本人某一文を草して或る雜誌に投寄せしに、文豪トルストイは讀んで太く歎稱し直に其大學の教授を介して面會を求めたりといふ。日本の今の文學者は却て其見識を下ぐるを恐れて絶えて這般の事を爲さず。

之を日本現今の政治界に於て見るに、在朝の人は決して在野の人を訪はず改進黨員は曾て自由黨員と席を同うせず。若し萬一にも事ありて往來すれば無數の蜚語は忽ち四方に喧傳す。文學界も亦之と同じ。何等の主義なくして結合せるにも關らず一の黨派に屬する者は必ず他の黨派に連なる者を訪はざる也。偶さか往來する事二次三次に及べば其首領たる者は趣味半分を交ぜて之を警戒す。

文學者は必ずしも交際家にあらねば唯往來尋訪にのみ心を勞らすは美事にあらず。然れども今日の東京社會の如く政事家は政事家、宗教家は宗教家、文學者は々學者と各々特殊の結合を爲すすら不思議なるに、其上にも同じ文學社會を更に分割して其極小世界にカジリ着くとは常識の上より定めし窮屈ならんと思はるれど此窮屈を何とも思はぬが即ち今の文學者の愈々エラキ處なり。

淺草の觀世音菩薩は御像の丈一寸八分にして十八間四面の大伽藍に住給ふ。今の文學者は六尺の身體を屈めて却て燐箱ほどの天地に棲息す。塵を着て塵の中に隱るゝ蓑蟲の生涯とは豈に是れ今の文學者を形容せしものにあらずや。

文學者の交友は狹きを尊ぶ。及ぶだけ其區域を限りて他人の入るを許さず、恰も平家の落武者が海も陸も源氏の白旗飜るを見て恐懼し山又山と分入りて溪極まり水盡くる處に襤褸家を作り漸く安心して舞樂管絃を樂むが如くに。

是れ然しながら文學者を以て平家の悲境に陷りたりといふにあらず。松風蘿月に心耳を澄すも夢は通ふ福原の榮華に昔を忍ぶ涙せきあへぬは平家の落武者が運命なり。芥子粒の中に家を作りながら廣き社會を見透す如く己惚れて

安らかに太平の夢を結ぶは今の文學者が中々に有がたき處なり、並木五瓶は筆を執る時は世界に臨む心掛なかるべからずと狂言作者を戒めしが抑も戲作的天地を作りて唯我獨尊を極込むもの如何で此無盡藏世界を筆の先に操るを得べき。而して此出來さうもなき仕業を造作なく遣つて退けるが故に今の文學者を目して頗るエライといふ。

ゲーテの生涯を見よ、如何に渠が學者と往來し王侯と結び政事家と接し婦人小兒と遊び優人伶官と相來訪せしことよ。次ドストエーフスキイの一代を鑑みよ、渠は惡漢兇徒と眠り野人傖父と語り渇者饑人と談じ貧夫賤民と交り而して同時に學者縉紳と款語し佳人淑女と嬉笑したりき。

同じ羽の鳥は共に集る——此俚諺の眞理は最も能く今の文學界に於て現る。文學者の交友は同じ樣に新聞に寄書し同じ樣に小冊子を作り同じ樣に駄酒落を吐き同じ樣に酒を飲む仲間のみに止る。良禽は木を擇む、文學者は友を限る。ゲーテ或はドストエーフスキイの如きは今の文學界に於ける交友の心得を知らざるものといふべし。

加ふるに文學者の交友は極めて物質的なり。少陵が、貧交行、若し唐時代の文學社會に横行して詠みしならば今の文學界に翻手作雲覆手雨の好句を吐く者必ず有るべし。勿論今日は惣てが物質的なれば柚味噌にて打する往日を學ぶべくもあらねど昨日相携へし者が今日饑境に瀕するとも見て見ぬ振する手際さりとは現金過ぎたる事ならずや。ジョンソン一派がサヴェージの爲に力を盡して奔走せし好話は今の文學界に求めんとするも決して得べからず。サヴェージは放浪無殘なる惡詩人にして負債山の如き中にあるも更に省慮たるなく行鹵莽を極め濫費益々多く或は官に訴へられ或は饑に瀕し終に牢獄の裡に悶死したれども渠の友は猶ほ此放埒男を棄つることを爲さざりき。噫、サヴェージにして若し今の文學界に生れしならば如何。縱令渠は獄裡の苦を嘗めて亡びしもジョンソン時代に生れしだけ責めてもの幸福といふを得べし。

ジョンソンは慈善の人なり。乞喰は「ジン」或は煙草に浪費する事多きが故に益々之に施與するの必要ありと云ひしほどの慈善者なれば其諸友に接するに厚かりしは當然なれども如何に信切に渠がゴールドスミッスを憂厄の中より救ひたるかを讀まば百載の後猶ほ人をして涙襟を沾さしむるもの多し。

然れども昔は昔、今は今なり。今の文學社會にジョンソンなきは是れ文學者の特に冷淡浮薄なるが故にあらずして十九世紀の文明が物質的に流れし結果のみ。達人は世と推移す。文學者は須らく物質的の社會に伴うて働くまでも冷淡浮薄なるべし。道德上の缺損少しにてもあらば直ちに其罪を憎んで其人をも憎むべし。縱令道德上更に缺損なきも貧に陷りし者は身から出た錆なれば遠慮なく唾棄すべし。又縱令當奇にして運拙く不幸の境遇に落ちし者ありとも是れ自然の結果にして詮方なければ目を瞑つて知らぬ顔をすべし。

貧者を饑寒の境に救ふは乞食增殖策なり。懶惰者を困厄の中より助くるは怠慢奨勵法たり。十九世紀の道德は勤勉を基礎と爲すが故に斯くの如き補策を執らずと雖ども不幸にして此「怠慢」なる一種の精神病に罹りし者ありとせば之を罪惡の奴隷となるに放任して顧みざるを以て德義に協へりと爲すべきや。況んや一度は一つ鍋のものを箸にて專合ひし友が偶々世に遇はずして不平を醸し若くは一時の心得違ひにて道德上の缺損を招き之が爲に不幸の域に墮落せしものを弊履の如く棄てて顧みざるは抑も

閒々侃々の情となし得べきや。
あらず、何から何まで御存じの文學者豈に此位の道理を知らざらんや。たゞ然しながら流俗以外に超然として高く標置する文學者いかで俗社會の道徳に律せらるゝ事あるべき。文學者は飽くまでも是等の平凡道徳を棄てゝ一朝事あらば畜の如き交情を變化して氷の如く冷かにすべし。文學者は勿論朋友の爲に生れたるにあらざれば二人や三人の友を犠牲にするも我が富貴功名は毫も損せざらん事を勤むべし。

獨り一度は兄弟も啻ならざりし朋友を弊履のごとく棄てゝ顧みざるのみならず、一旦棄てて後は馬鹿なり狂人なり阿呆なり無氣力なりと隨分口汚く罵るは却て損耗せる元氣を鼓舞するに足れば毫も遠慮なく悪口を叩くべし。蓋し人は意外なる罵詈を受けて一大決心を起す事少からず。スウヰフトは大學に落第して諸友に毀笑せられヂスレリイは初演説に冷嘲を以て嘲弄せられし如き皆他日の成效の基因たりしをもて見れば岩をも透す人間の一心は臍に徹する恥辱を受けし刹那に熖ゆる例中々に多かるべし。且つや眞摯の心より出づる直截の言は古骨鯁の忠臣が其主君に向つてすら吐きし處なれば何ぞ隔意の情に於て憚る事あらんや。勿論本人の爲なれば思ふ樣骨身に染みるほど恰も師直が判官を罵る如く口を極めて讒謗すべし。但し面前に於て罵るは粹道の深く戒むる處なれば陰にて自然に本人に感通する程思切つて罵詈嘲弄を逞うし更に毫釐だも寛假する處あるべからず。

文學者は一ト度席を共にすれば忽ち刎頸の如く語らひ、僅に物質上の缺損或は精神上の小瑕瑾あれば直ちに土塊の如く之を唾棄し、而して嘗ては本人を推薦せしめんとする信切心より裏店住ひの匹夫匹婦すら口にすまじき罵詈を加ふ。

朝に源氏を送り夕に平家を迎へ越人に嘯々するの口を以て楚人に媚を獻ず。世甚だしく娼婦の情を憎む者多し。然れども傾城に誠なしとは誰が云うた野暮の口から行き過ぎな、手練手管を看板とする水商賣には縱令奥州が眞情なきも何を咎むべき。若し夫れ日耳曼の衣裳博士を傭來つて今の衣冠する人、道徳を說法する人、學理を探究する人、慾濤に奔走する人の衣を褫ぎ取らば娼婦の心ならざるもの果して幾人か有る。獨り文學者は流石に流俗の上に超然たれば曾て娼婦の心を有たざるなり。文學者が斯くの如く朋友に親しみ朋友を棄て而して信切心の爲に惡言するは娼婦の心を有つものにあらずして大納言樣の御癇癖あらば也。娼婦の心と大納言樣の御癇癖――文學者の俗人と異る豈に夫れ豚の子と狗の子との相違ならんや。

度量大海の如き孔夫子すら少正卯を誅せり。烈性大納言樣に等しき文學者いかでか其友を棄つるに躊躇すべき。是れ强ちに棄てる者の勝手にあらずして棄てらるゝ者の自業自得なり。然るに又棄てられし文學者は――(若し光譽ある文學の天職を有つ者にして其友に棄てらるゝ如き事あらば)――我が自業自得には心附かずして濫りに他を垢罵して輕薄なりといふ。偶々眞面目に忠告する者あれば却て君子流と呼び僞善的と斥け惣ての信切交誼を一彈指の下に掃蕩し去つて已れは別に妄想世界を造り懸然索居して泥龍の嘆を洩す。

惣ての人は鮑叔にあらず。然るに己れ管仲にあらずして世に鮑叔なきを嘆ずるは非なり。棄てる者も文學者、棄てらるゝ者も文學者なれば畢竟「タドポール」の離合聚散と同じく何等の意味あるにあらず。意味なくして結び意味なくして別る、何ぞ特に輕薄なりといふを要せん。

一言以て云へば今の文學界には眞の交友なし。社會に向へる半面に於ては數多の小黨を樹立せるにも關らず、情に於て相愛し智に於て相

敬し固く結託して雷霆といへども割くを難んずる交友は決して之を求むべからず。然れども此眞の交友なきこと今の文學者が猶ひも揃つて千載稀に生ずる大豪傑たるを證するに足るべし。「千年以前若くは千年以後にあらずんば我が友を求むるを得ず」と柱に記れて嘯きしは長州の元就なり、『人は自己に似たる者を好む臣は愚人の友たるを恥づ』と王の前に揚言せしは伊太利のダンテ也。今の文學者は交友の情なきにあらず、唯その情を捧ぐるの友なきのみ。文學者の大才は能く元就、ダンテに恥ぢざるの言を吐くを知る。

又然れども友なきに安んじ塊然獨處して箕潁の情を歌ふは偏狭頑硬の形なれば今の文學者は之を學ばず。兎角不平は恆の心なきに出づるものなれば「己れは不平なり」と吹聽するに等しき挙動は一切無用也。縦令へば眞の交友に乏しとするも表面だけは飲んで駄洒落を吐いて手品を遣うて茶番をして天下泰平國土安穏を歌ふの遥に勝れるに如かず。樂天！　樂天！　文學者は飽くまでも樂天教を奉じ酔生夢死主義を守り飲んで駄洒落を吐いて空々寂々。噫、樂天！

噫、酔生夢死！

文學者の團體なるものは即ち此樂天的酔生夢死主義の結合せる「かるめら」然たるものなれば文學社會に交友を求め世間の人に金箔附の文學者と思はれんには第一に此樂天的酔生夢死主義を理解して之を奉ずる覺悟なかるべからず。

何をか樂天的酔生夢死主義といふ。曰く萬事に空々寂々として、、、デレリ茫然と月日を送るをいふ。左次郎茶目吉生涯の如き即ち是也。生涯一事業を爲さざるも可なり。社會人事は顧みざるも可なり。唯目前の名利に汲々として内には群犬肉を爭ふの情を熖しながら外には御前三太夫の禮讓を示す。偉なる哉、酔生夢死主義！

文學者たらんとするもの及び既に文學者の豫科生たるものは此處の、、コツを飲込む事肝要なり。然れども絶對なる酔生夢死主義を奉じ第二の元政亜流となるは白癡の極度なれば目前の名譽利益は隨分貪るに油斷なきを以て今の文學者が流儀となす。左次郎茶目吉すら猿島山の茶番に如何に工夫を凝したるかを推究すれば今の文學者が生平修養する處略ぼ察知するに足るべし。

試に天機を洩して渠等が團欒の模様を説かば、

談話——文學者の談話は極めて、、、タワイなく少しも纏まりの附かぬを尊しとす。眞面目にて且つ根底ある話柄は最も大禁物なり。徂徠が炒豆を噛みながら古今の豪傑を論じカアライルが咄々として獨乙の哲學を讃ずる底の好話は容易に聞くを得ず。夫れ味噌の味噌臭きが上味噌にあらざるを知らば文學者の談話が文學者らしからざるも何ぞ怪むを要せん。渠等が放蕩なる少年若くは輕薄なる都門式の薄弱なる婦女子の口吻を擬ぬるは即ち是れ大文學者たる所以也。

宴遊——文學者集まれば必ず酒を飲む。文學者は勿論禁酒會員にあらねば博物館に陳列せる魚介昆蟲と同じく「アルコオル」漬となるもよし。古の詩人皆酒を飲む、下戸の作りし詩にすら『對酌』、『泥飲』、『玉山頽』、『壚頭酔』等の句あるをもて見れば酒と詩人は到底離れぬ悪縁なるべし。詩人既に然り、文學者豈に大に飲まざるべけんや。

酒を飲まば須らく劉伯倫を壓倒すべし。一盃を飲むも上戸、百盃を飲むも上戸なれば一ト度盃を唇に接せし曉は少くも一晝夜は是非とも飲明かさざるべからず。一ッ座敷も面白からざれば甲料理店より乙茶屋に行き丙島屋より丁蕎麥屋に轉じ其處ら中を飲歩くも一興なり。

若し斯る場合に辟易して中頃より逃出す時は卑

艸なりと笑はるればゆめ〳〵要愼すべし。
　益田鶴樓は客を喜び酒肉席に絶えず醉へば則ち杯盤狼藉の中に顚睡す。十返舍一九は豬口を手にすれば本屋の督促をも忘れてグビリ〳〵と、一日を飮暮す。酒なくて何のおのれが作者哉。苟くも文學者たらんとするものは古今の文人に鑑みて少くも一升の酒を飮まざるべからず。
　飮んで而して後何をか爲す。文學者には頗る藝人多し。十六藝を綜ぶる柳澤淇園の如きは扨置き桂山彩巖の樂律に深き益田鶴樓の俗曲に通ずる、近くは大槻修二先生の河東及び園八に於ける、福地櫻癡先生の琵琶に於ける、若くは劇評の大家黄表紙の大通とし尊まるゝ何某先生の初代段十郎の聲色に於ける、福助褌をもて名高かりし某新聞の主筆それがし先生の布袋踊に於ける皆夫れ妙の妙を極めざるはなし。文學者須らく隠し藝を研究して之を宴席に披露するを怠る勿れ。(但し美人席に侍せざる時はシラを切るが奥ゆかしくてよし)。縱令歌澤は調子外れにても苦しからざれば遠慮なく胴魔聲を振立てるが通なり。縱令一番なりとも癇ばしッた聲を出して福助だと講釋を附けるが通なり。

藝自慢が一層長じると茶番の催となる。勿論萬事大道具にして口上茶番の比にあらねば酒の擧句といふ譯には行かぬ。此時は中々の大騷ぎ、恐らく三馬若くは鯉丈の筆を借らば三冊物十二編位作る事容易なるべし。
　一ト頃西洋熱の流行せし時、英語會の餘興に『ベニス商人物語』、活人畫に『鳥羽の里』を演じし事ありき。又シルレル、レッシング等戲曲家の逸事を見れば身自ら劇を演じて同好に示したるが如し。然れども是等皆素人臭くして面白からず。我が文學者連は殆んど黒人を凌駕するの藝人なれば、或時は紳士の別莊にて、或時は櫻雲臺鷗遊館等にて、甚だしきは某の往來にて數多の公衆を傾倒せしめし事さへありといふ。昨二十六年の末某の宴會にて四五の新聞記者兼通人的文學者(?)が偶々隠し藝を披露せしに二三の新聞は大に其品格を傷くるを毀りたれど、之れ文學と演藝との關係を知らざる野暮の言草なり。夫れ一人にして作劇家となり俳優となり道具方となり衣裳方となり振附よりは隈取の化粧まで自ら之を爲すに到つては多藝なりと云はずして可ならんや。況んや時としては專門家をして劇評を書かしめ寫眞師をして扮裝のまゝを撮影せしむるに於ては既に〳〵素人藝の上に出でる數十等。
　藝と云つて善きか惡しきかは知らねど茲に朗讀なるものあり。之れ亦交友の一助として重んぜらる。此朗讀は坪内、關根、饗庭等諸先生の首唱せられし處にして最も進歩せる文學者の慰に相違なきはエドウヰン、アーノルドが二圓の聽料を課して鹿鳴館に『世界之光』を朗讀せしをもて知らる。
　且つや坪内先生は曾て國民之友に於て長々と朗讀法を解說せられたりき。然れども朗讀法は到底天が無藝文學者に惠與せし一藝たるに過ぎず。文學者は元來藝人なれば餘りに無藝にして恥かしと思ふ者は此朗讀法を研究すべし。勿論御神燈をぶら下げて朗讀の師匠をする者もなければ精々勉强して自己流の節を工風し隣近所の水甕に罅をいらせるべし。修行積みし上は箱根に出張して首尾能く旅宿の下婢を驚かす樣になればモウ占めたものと思へ。
　惣じて是等の遊藝は交友の一助となして便宜なるものなれども、他を娯ましめんとするにあらで自らを樂ましむるものなれば對手の迷惑は更に斟酌すべからず。隨分同席の者がモヂ〳〵して欠伸を噛占めるまで自分だけに面白く興を添ふべし。文學者の藝は友を困らせるをもて其



主意となす。此故に謠曲を唱りしものは遠慮なく節附の講釋をして胡麻摩を振染り、茶の湯を稽古せし者は矢たらに薄茶を飲ませんとて變な手附をなす。影で舌を出して笑はるゝとも目の前で中々お上手だと追從云はるればホクノヽ喜いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝぶが今の文學者の特色なり。

むかし叡山の法王音律を好み太宰春臺が善く笛を吹くを聞き使節をもて之を召す。春臺堅く辭して曰く余は儒生たり儒を以て召さるれば元より駕を俟たず然れども私かに嗜む末技を以て王門の伶人となるは余が欲せざる處也と。百有餘年の歲月は學者の見識を一變して、今は自ら進んで下手い藝道を披露し諸人の見世物となッて得々たり。是れ然したから文學者が『藝なしぢやア交際が出來ないから』といふ哲學に出でたる也。春臺は王門の伶人たるを恥づるを知れども法親王と交るに嗜みの音律を以てする方便を解せず。今の文學者は交際を弘めんが爲に見世開き、夷子講、或は新年忘年等の宴席に茶番を御覽に入れ歌澤をお聞きに達し手踊聲色手品に愛敬を添へるの法に熟す。吁、エライ哉文學者！朗讀をして酒の醉を醒まさする如きは之と比較すれば最も氣のきかぬ藝なし猿といふべし。

惣て文學者の交際は眞心を吐いて奥底なく語らひ艱難相救ひて苦樂を偕にするといふ例は更になく、外見を專一として腹內に物插まりたる言葉をならべる輩、然らずんば萬里の長城を其間に築く振舞を示すをもて極意となし、偶々「アルコオル」の爲に其嚴重なる用心弛み本色を現示する時は駄洒落交りのすッぱぬき閙苦しき文句をペラつかして恬として平氣の平三なり。

十七世紀より十八世紀の初めに到る英國の文學者は概して放蕩無殘にして寧ろ道德に觸るゝも仕たい三昧の惡戲を仕盡さざる時は文學者らしからざる心地したるが如し。當時に於ては道德の缺損は少しも社會の制裁を受けざるばかりか華美豪奢を極めたる流行社會に於ては悖德の汚點を有つ者却て歡迎せられたりき。

オートウェイの如き即ち其好例也。縱令渠は終に饑餓の淵に瀕し道途に乞食して一紳士より一「ギニイ」の惠與を受け久し振の麵包に舌打して僅に一ト口を嚥下するや數日の疲勞の爲め忽ち卒倒して亡びし慘絶の最期を遂げしと雖ども、如何に渠が榮華の日に於て有らゆる輕薄の數を盡して猶ほ人に嫌はるゝ事なく却て其同儕の間に優待せられ名利の寵兒と花やぎしかを見ば略ぼ一般社會の好尙を覗ふに足る。シェンストン或はサヴェージの如き今更云はざるも可也。

恰も我が今の文學者間に於ける交友の情態はやゝ此觀を爲すに似たり。ジョンソンの語を借りて云はゞ "Their kindness without benevolence, their familiarity without friendship." 信用なき愛好と友愛なき親密を結びて飲んで且つ笑ふだけを主義となす。しかも其交友の極めて少數に限らるゝは水溜の中に蝌蚪の相追逐するに同じ。

ウヰリヤム、ブラックは交際家なり。バッキンガム街の僑居に於て數多の客に接し改革俱樂部に列して朝野の政客と談ずる外ブライトンの閑居に退いては夫人と共に來賓を管待すに忙が

しく、渠の家は殆んど歐米各國の名士が安息所且つ伏匿所たる如くなりといふ。渠は曾て一人の客に誇つて曰く、朝にはツール來り夕にはスペンサーを見る我が家には美術家と哲學者と政事家と實業家と軍人と文學者との團欒を作るを得べしと。渠が述作の價値は爰に云はず、是は勿論別問題なれば也。唯交際の一點に於て小說家たる渠が範圍如何に廣きかは到底我が文壇の諸先生と比するを得ざるなり。

ポープは形佝僂にして心偏狹なり。しかも其交際の極めて廣くして頗る寬量なりしは渠が書齋に集まれる人さまざまの心餘りに異へるをもて知らる。皮肉なるスウヰフト、知剛なるアツターベリイ、溫厚なるスペンス、嚴峻なるウオーバートン、德淳なるバークレイ、不德なるボーリングブローク、畫人ヒーター、ボロオ、詩人ゲイ、機才あるコングリーブ、愉快なるローウヱ、奇矯なるクロンウヱル、頑硬なるバサースト、皆是れ卓を共にして談笑せる者なりき。

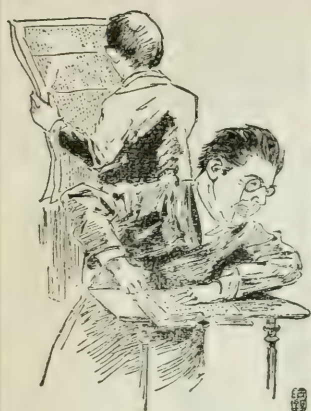
若し夫れジヨンソンのボスウエルに於ける、グレイのワルポールに於ける、カアライルのチンダルに於ける、ブラツクのブライトに於ける如きを問はゞ我が文學界に其例を缺くといふも可也。

文學者の交友夫れ斯くの如し。此故に他の學術宗敎政治實業等の社會に於ては不完全ながらも團體を作りて互に各自の專門に屬する知識の增進と交友の親睦を計りつゝあれど獨り文學社會に於ては竟に此種の組織を見ず。一ト頃德富森田朝比奈等の諸先生が先棒となつて組織せられし萬代軒月次の會合の如き萬代軒の沒落と共に消滅して、今に浮名の殘れるは龍溪先生、大演說、青萍學海二先生が大議論なりかし。又近く去年の秋以來催されし築土文學會とやらはまだ漸く二度か三度集まりしだけなれば、よもやと思へど其消息杳として聞くなきは心細さの限りならずや。曰く樂々會、曰く硯友社、曰く何、曰く何と、數は澤山あれど皆是れ飲仲間、洒落仲間若くは茶番御連中たるに過ぎず。

文學會なるもの何ぞ。その今の文學社會に於ける有效無效或は必要不必要は爰に云はず。唯夫れ異主義の者一堂に會して相談議し生平互に見ざる者交を新たにするの興趣あるに於ては之を全く無用なりと云ふを得ず。然るに今の文學者は餘りにエラクして他人の說を聞く必要なく、餘りに超然として世の交を求むるを嫌ふが故に、異分子の團體に入るを欲せずして、毎日顏を合はせる同町內の者か或は師弟の關係ある者同士が寄合を附けるをもて樂となす。

ジヨンソンの文學會は會員少けれど異分子を糾合せり。アヂソン、コングリーブ、スチール、ゴールドスミツス等の文士は姑らく置き、理財學者アダム、スミツス、政事哲學家バルク、美術學者レイノールヅ、――殊に俳優ガアリツクを一堂に聚めしに到つては我が文學社會の情態より見て奇とせざるを得んや。然れども之れ決して奇ならず。前にも說きし





如く日本人本來門鎖主義なれば文學者も奥深く書齋に垂籠めて座禪面壁浮世は斯うだあアだと生悟りに濟し込む流儀を尊ぶ。唯然しながら『通』と云ふ持藥を朝夕服用するお蔭に外觀だけは此流儀を棄て、「兎角浮世の味は試めて見にや分りません」といふ申譯を作つて己が軟弱なる舌に適する甘味だけを賞翫する傍ら、「它山の石は磨くべしとやら」と口だけ賢い言を陳べ、好きな名を附けて大家陳列會を催す事少からず。都々逸の好きな者が無盡に等しき餘興を添へて慾を餌に釣出す都々逸會すら中々永續出來ぬ日本人の根性にて、道樂を犠牲にして眞面目を衒ふ會を起すもなどか首尾能く持續するを得べき。世界を家として太陽曾て沒せずと誇る英國に行はるゝ交際法が鎖國籠城主義の日本に行はれずとも何の不思議あらん。岐阜の大地震百度揺つて日本の天地悉く顚倒するも、詩人と科學者と小説家と相場師と評論家と工藝家との會合を見る事中々に難かるべし。

試に今の文學者の會合を透視するに、平生最も多く顏を合せる者が二三人宛あちらにコソ／＼こちらにヒソ／＼、恰も祕密の相談をする如く首を鳩めて低語き宛ら人に聞かれん事を厭ふに似たり。此故に一人の親交なくして席に臨まば容易に談話相手を作る事出來ず、ケロリカンとして茫然たらざるべからず。質に取られし啞の苦痛を嘗めたき者は須らく文學會に臨むべし。

しかも猶更辛きは態々會費を拂つて無言の行を修めに來たばかりか面白い顏の一ツ位はせざるべからず。殊に一層辛きは名士の大演説を拜聽して是非とも絶體絶命に敬服せねばならぬ義理づくめなり。傍聽者の義務は演説者をして『己の演説をみンな感服して聞いてゐるナ』と信ぜしむるにありといふは文學會に於ける倫理の法則なり。

文學者は必ずしも多言せず。勿論平生無用の饒舌を弄するに極めて得意なれども斯る會合に列する時は妙に人見しりをして何かの問題出づれば甲譲り乙辭退し各々逡巡する算段を廻らす。此場合に限りての逡巡辭讓誠に古聖賢に恥ぢずといふべし。

然れども此逡巡辭讓も席煖まれば忽ち忘れて持前の放言漫罵座客を呆れさして以て得たりとなす。偶々沈默の冷笑を加ふる者あるも、却て傾聽してゐる事と感違ひして愈々止度なく立板に水を流す辯を奮ふ。

バックソオン客の問に答ふらく、文學會を以て知識の交換場となし先づ交換に値する意見を畜へて出席せんとするは御身の誤解なり。自ら光明を放つて厚待せられん事を望む勿れ。渠等の文學會に出席するは畢竟他を奉戴せんとするにあらずして各々自身の燦然たるを示さんが爲なれば也。余も初めは御身の如く考へ必ず多少の研究を費して後出席せしが、其結果は甚だ生意氣なる辛抱出來ぬ文士なりと爪彈きせられ若し我が交友の仕方を改めざる時は忽ち絶交せられんとするばかりなりき。御身能く／＼心得よ、最も上手なる聽者は最も拔群なる智者なる事を。若し御身爽かにして他と互に五分々々に語り合ふ時は思ひ切つて其男の著述をカラ褒めして同時に當今の作者を甚だしく貶黜すべし。萬一特別なる盟友の述作を推奬する者あらば、此時に限りて故らに其

說に反對し口を極めて之を罵るを習ありとす。斯る場合には縱令自身が推奬せし言を破られて困迫するも決して不快の感を待さず却て得意の色あるものなり。文學者ほど他の瑕瑾をあばくに最も公平無私なるは少ければ御身も其所存にて當面の人の作を褒むると共に思ふさま遠慮なく他の著書を罵るべしと。

クレイコンは斯く記しゝ宗教の文學社會なれど、我が東京の文學會といふも之に同じく、云はゞ天狗の鼻くらべ、突合せては互に鼻柱を折つて呉れんと隙に瑕をつくる股原の寄合也。此故に文學會に臨まんとするものは罵、嘲、若くは背にあらざる限りは、可笑しくなきに笑ひ、連ら鈍著述をアヽ褒めし、根もなき饒舌を弄し、或は時に依りて沈默思案の體を粧る術を學ばざるべからず。

「我輩も芝居には少し意見がある、實は近々の内「ドラマ」を作らうと思つて既に腹案は出來てる。一體今の「ドラマ」を論ずる黨派はシェークスピーヤとかモリエルとか但しは近松などと本尊を作るのが分らぬ。殊に近松如きを尊んで丸で神の樣に思ふ氣が知れない。大久保君なンぞも議論は甘いが、畢竟る處第一シェークスピーヤ第二近松門左衛門第三が即ち乃公自身だから困る。何も左う見識を低くするに當らぬ。我輩には我輩の天地がある、シェークスピーヤも近松もない。我輩の天地を以て一大「ドラマ」を作つて見せる……」

斯ういふ人は自ら光明を放つに汲々として、唯他が若しや自分をエラクないと思ひはせぬかと考ふるなれば何でも「はイ〳〵」と聞流して、折々は嵩と乘地になつて先生か……成程、先生が「ドラマ」をお作りになれば」など調子を合はして、同時に思ふさま話中の大久保君を惡くけなすべし。

『時に諸君、拙者は今度彌次喜多會といふを起さうと思ふ、ト云ふは諸君も御承知の通り彌次郎兵衛北八の兩人は喜憂苦樂を偕にして古の管鮑の交を結んだ天晴の君子だ。加之、東海道を見物しようといふ風流心があるばかりか、道々で詠殘した秀吟を見れば中々の文學者と思はれる。然るに此履歷が今に傳はらぬは日本文學史の缺點と信じますから、そこで新たに同志の人を得て「彌次喜多は如何たる人ぞや、何を知れりや、何を爲したるや」を研究して見ようかと思ひます。』

斯る言を吐く人は「創意」を以て任ずるなれば、其着眼を褒め其研究の方法に感服し、『先生のお考へは又格別だ。私も先日いろ〳〵古書を捜つて法性寺入道とヘマムシ入道と師弟の關係ある事を發見しましたが、先生のは又流石です、氷川氏なンぞは三歳兒も心得てゐる歷史上の事實より外は氣が附かんから駄目です』と淡泊同じ黨派を毀るが妙也。

「君は牛之屋ごぜんの一奴だこ」を讀ンだかエ、中々能く出來てる」と讀める人ある時は浮と油斷すべからず、却て態と反對するが秘訣なり。「牛之屋如きものの作を能く出來てるとは先生の批評眼にも似合はない、ごぜんに緣のある冷飯草履から思附いた樣な奴小說がどうなるものか」といふ勢で滔々と惡口を叩くべし。先生苦笑して前額をなで、「さう惡く云ツたものでもない」と内々大恐悅にて「君も中々目が長えてきた』とお讚めになる。

中にはタワイなく無駄口を叩く流儀あり。「どうだエ、近日の中に鯨飲會を催しては、「よからう、會費はいくら」、「我黨は何れも紳士だから多きを厭はず」、「そンなら百圓では多からうか」、「百圓！　君の方では百圓を多いとするだらうが我輩の方では一圓を甚だ多しとする」、「はアてね、一圓合點が行かぬ」

先づ此邊の調子を呑込み、自作の高慢を聞流

し、座に列せざる人を罵り、古き洒落を吐きちらし、手製の通言を陳べたて、出放題なる議論に感服し、資本のかゝらぬお世辭を振りまけば首尾よく文學社會の一人ともてはやさるべし。

文學社會に於ける交遊は大體以上の如く心得べし。"*To sleep away the days and drink away the nights*" 喰つて、寐て、起きて、飲んで、洒落て、愚痴を零して、不平を訴へて、自作の自讃を陳べて、世間の惡口を叩きて、おべいゝゝんちやらを遣つて、調子を併せて、富貴なる時は兄弟の如く、貧賤なれば路人を以て見る、是れ之を文學者の交際法といふ。

渠等が勝負事或は一般の遊戯に關し、若くは散策旅行等に於ける交際法は管々しければ云はず。以上說く處を嚙分けて能く味を知るべし。

第五　著述に於ける心得並に出板者待遇法

在ながらにして文界の雲行に通じ、能く風丰態度を整へ、有らゆる嗜好習癖を覺え込み、惣ての交際法に熟し、而して後文學者たるを得る乎。

曰く否な、縱令以上の事項に於て悉く滿點及第をするも未だ目するに眞の文學者を以てすべからず。若し夫れ一ト度著述し大書肆より出版せられ新聞に廣告若くは吹聽せらるゝ時は則ち完全なる文學者と云ふを得。

然らば如何にして著述すべきや。是れ極めて至難の事業に似たれど却て案外にも容易なるお茶漬さら／＼の仕事也。(茲に著述といふは必ずしも一篇の冊子となすの謂にあらずして新聞或は雜誌に投書するを云ふ。)

單に文學上の著述といふも其意頗る廣ければ假に之を大別して、

(a) 人物評及び史論
(b) 批評
(c)「ドラマ」附たり新體詩
(d) 小說

の四類となし、序を追うて之を說かん。

(a) 今の人物評及び史論――を爲す者に二種あり、一は題目の新らしきを競うて議論の平凡なるを厭はぬもの、一は論評の奇矯なるを誇りて問題の古きを顧みざるもの即ち是なり。而して二者共に其評論の正鵠を得たるや否やを問はざるに於ては同樣なりとす。

人物評を爲す者の秘訣は―渠は―の使用法なり。此故に此使用法に熟する爲め第三讀本位の直譯を諳誦する事中々大切なり。今其一例を擧ぐれば、

「萬世橋の畔、砂塵捲揚がる中に一人の小兒立てり。渠は帽を被らず、此故に渠の頭は砂を以て白くなれり。渠の赤き筒袖は破れ渠の冷飯草履は切れて一見貧窮さうなり。然れども渠の傲岸なる氣象はすでに馬車の馭者を馬鹿にして、一圓二錢の鐵道馬車に飛乗るの權を擅にせり。而して渠は敏捷活潑にして且つ無邪氣なる朝日新聞……一枚一錢の聲は新聞と共に乗客の膝に投出されたり。渠は商界の麒麟兒なり。見よ、面白さうなる渠の賣聲は竟に肥滿なる田舍紳士の手より一錢の銅貨を奪ひ取れり。馬鹿にする勿れ、此怜悧なる赤き筒袖の小兒を。電話、電燈、電信の諸線をもて充てる萬世橋の空氣は渠をして東洋のエヂソンたらんとする希望を起さしめぬ。」

成るべく廻りくどき記述法を用ゐ、日本の文法に外れる樣に心掛け、主客を顛倒して誤解に陥り易き句法を工夫し、耳觸りな文句を澤山に入れ、十分に直譯調を用ゐるをもて極意となす。

今の人物評にたゞ文章の目新らしきを學び

て、全く見觧陳腐說歟は問ふ處にあらねば、文章のみを研磨すれば則ち足れり。加之、人物評の文章は强ち名文を欲するにあらずして從來の文格以外に馳するをもて手柄とすれば唯無法なる字句の排列を案出するだけの工夫にて澤山なり。平田久先生の「カアライル」或は高木伊作先生の「ゲーテ」を讀まば思ひ半ばに過ぎん。

惣て聲色遣は癖を眞似るが肝心なり。人物評を作らんとせば勢ひ德富氏の聲色を遣はざるべからず。而して德富氏が近日の文章は頗る絢爛の域に達したれば著しく其文癖の露れたる『將來之日本』或は『國民之友生れたり』時代の文を學ぶをもて最も賢しとす。且つ德富氏の文致は本と西文より借り來りしなれば其本元たるマカオレイ文の直譯を精々勉强して移植すれば忽ちヽヽヽヤンヤと云はるべし。

島田鳥山先生の『開國始末』はマカオレイに似たりとの褒辭を受け、竹越與三郎先生の『新日本史』はマッカアシイの如しとの讃評を蒙らせり。然れども此大批評を奉呈する人も果して何れの點がマカオレイにして如何なる部分がマッカアシイなるやを知らず。偏に從來漢儒が漢文にて書し〻者を俗文にて書きしだけを隨喜渇仰せしに止まる。岡鬼門氏が『尊攘紀事』の如きも若し俗文を以て書し四五の外國語を交へ紀傳の順序を少しく顚倒すれば必ずマッカアシイやマカオレイを引合に出して嘖々せらるべきに悟むべし。

試に『六雄八將論』或は『良將達德抄』若くは『藩翰譜』、然らずんば『先哲叢談』『近世叢語』の類を取り、其二三節を交互參錯し、傍らアリボーンの『金言集』を參考し、『渠』と『的』と二三の外國語及び四五の新製熟語とを羅織して所謂人物評然たる鵺文章を作爲せよ。慈悲深き江湖は思掛けなき讃評を著者の頭上に加へん、曰く是れマカオレイの再生也ト、曰く是れカアライルの怪詭とエメルソンの靈彩を兼ぬるものト。

爰に一例を擧げて其最も容易なるを示さん。

江湖傳（節略）

（上略）江湖は斯くの如く多角的なり。然れども渠の心は極めて無邪氣にして、恰も生ける紙屑籠の如く、常に故紙汚物を以て充たさるゝといへども更に不平の聲を洩さず。又時としては眞珠珊瑚を投込まるゝ事あれども、渠は其眞價を辨知する能はざりき。渠は實に生ける紙屑籠なり。

此故に渠は美妙齋を謳歌し、漆過屋を歡迎し、硯友社と款語し、根岸黨と結託し、或は浪六茶屋に壯語を吐いて東京文學の寂寞を破り、或は闇の世の中に彷徨して社會の腐敗せるを叫破したり。而して放肆なる驕兒の常として、渠は意氣投合せる友に遇へば直ちに名譽の玉體を捧げ讃稱の聲を揚ぐるに蜘蹰せずといへども、一端厭倦の情を起せば之を唾棄して顧みざるのみならず、忉利天の上より奈落の底へ突落して踊躍三百以て第一の快樂となす。夏桀殷紂の驕樂も猶ほ渠の慘酷に及ばざるなり。

渠は曾て空想を吟唱して樂めり。今や渠は古今の人物と手を携へて治亂興亡の跡を論議せり。渠が人物評時代は來れり。時は明治二十六年十二月。渠は條約の厲行を絶叫し、國會の解散に赫怒せるの日、『王陽明』を一蹴し吉田松陰と相抱擁して社會を睥睨しぬ。嗚呼、是れ朔風雪を飛ばし、滿目頓に荒涼たる十二月の天なり。

渠が言動何ぞ夫れ佻々盪々として規律なきの甚だしき。渠は沈摯なるが如くして一却て噪狂なり。渠は識見あるに似て案外にも盲目なり。渠は一個の「プリンシプル」を蓄へず、——否、「ドグマ」すら有たざるなり。

渠が無學文盲にして定見なきに八ツ目鰻よりも更に數多き渠が眼の中何に暗然として枯魚の如きかを見て知るべし。…………
……(以下略す)

此意味もなく面白くもなきものを氣紛れた世間、何か有がたさうにステルンとかシドニイ、スミッスとか言囃して呉れる、(——だらうと此作者即ち金平門下の一人は氣を揉めり)。要するに人物評は文章で賣出すものなれば平生十二文家を初め民友社諸先生の文味を咀嚼し其調子を飲込む事肝心なり。

既に其調子を呑込めば安積澹泊、中井竹山、賴山陽あたりの論贊文若くは『神皇正統紀』、『東鑑』等を材料として日本の大歷史家を極めるもよし、又"Worthies of the world"或は"English Men-of-Letters"に賴りて西歐人物評の大家となるも可なり。社會は事物を稱贊するの美德を有するが故に其眼光の鋭利靈活にして且つ精透深刻なるを推奬して止まざるべし。

詩人或は哲學者の傳を序するには大たる識見と廣き學問を要す。少くも外界と隨伴し若くは逆行せる精神上の歷史を詳かにせんが爲め其惣ての著作——斷簡零楮までも研究せざるべからず。然れども今の人物評を爲る者は此迂遠なる道を採らずして直ちに前人の攻査せし結果を收めて我が物となす。此故に"Sartor Resartus"を讀まざる人もカアライル傳を編むを得べく、"Faust"を窺はざる者もゲーテ傳を作るを得べし、否な、フルウド或はグリンムの手に成れる傳紀すら繙く事を爲さずして。

湖處子先生が「ウォルヅウォルス」に於ける浮名の如き本より口善惡なき京童の飛語たるに過ぎず。誰か博識宏聞、殊にウォルヅウォルスに私淑する先生が其傳紀と其全集に精通するを疑はんや。然れども今のお手輕主義人物評時代に之を公けにせしは則ち先生の不幸にして、寧ろマイヤースが著しゝ傳紀を其まゝに飜譯するの智あるに如かざりき。

アヂソン嘗て田舍牧師を贊稱して云へらく、渠は能く己れが肺腑より出づる說の餘りに拙陋なるを知りて有名なる都會牧師の說を丸取りにし其身振、色までを模擬して直ちに其人の說教を聞くの思あらしむ、庸劣なる自家の心を藏して秀拔なる名士の口吻を傳語す、豈に是れ最も智ある者の一にあらずやト。今の人物評は即ち此田舍牧師の說教にしてアヂソンが所謂智者の一ならん事何の疑か有らん。

他に一派の人物評連中あり。此派の者は評せんとする人の著作中より二三節ヅツを拔き之れを巧みに接合するの才あれば足れり。例へば兼好法師を論ぜんとせば、徒然草より二三行ヅツ拔萃し點綴するに四五の禪語或は譯語を以てするが如し。加ふるに此派の人は如何なる人物にも厭世家、大悟者、若くは任俠等の冠詞を與ふるを極意とす。曰く鷺阪伴內は大俠骨也、十返舍一九は厭世的大詩人也、ヽヽらく〳〵坊萬橋は大悟徹底の善智識也、曰く何、何、何——是にて十分澤山といふべし。

要するに人物評は難かしさうなれど、渠は「」の使用法と、『日本外史』を素讀せし者は誰でも御存じの事實を左も珍らしさうに逆寫倒描する法に熟せば忽ち大家と云はるゝ近頭隨一の早手廻したり。

(ろ)批評——は近來新發明の簡便法にして、今より四五年前或るエラキ人讀賣新聞に、"大家となる法"を寄投し普く人々に批評家となれと勸告しぬ。批評は最も容易なれば不器用なる人といへども猶ほ且つ作るに決して難からず。こゝに其極意を二ツ三ツ擧げて最も働なき男の栞とすべし。

(1)先づ緒言若くは凡例と目錄と、最初・中

ごろ、及び最後の二三頁を讀んで大體を想像すべし。

(2)筆法はどこまでも『決して感服せず』といふ意を十分含ましむる事。

(3)若し小瑕瑾――責むるに足らざる極々の小瑕瑾を發見しなば業々しく理窟をこねつけて非難する事。

(4)"Art of Authorship" の如きものを祕本となして文學上の金言を振まき、成るべく之に附會する多くの講釋を添ふべし。

猶ほ此外にあれど、批評家は餘りに榮えぬ仕事なれば、殊に世間受も宜しからねば寧ろ他の道に志すをもて智ありとなす。

(c)「ドラマ」――を作るの大家は古藤庵先生と透谷先生のみ。新體詩の大家は湖處子、殘花、操山、雲峰、紫苑、吉郎等諸先生あれど是れ亦限られたる數なり。而して今の文學界に若し天才の必要ありとせば开は慥に此韻文社界なるべし。到底天才なくんば此「ドラマ」或は新體詩を作る事能はざる也。試に之を説かば古藤庵先生の『琵琶法師』、『茶の煙』、『朱門のうれひ』若くは透谷先生の『蓬萊曲』の如き所謂「ドラマ」は勿論、其他多くの新體詩に到る迄大抵は何の意味やら悉皆譯の分らぬほど餘りに高遠雄大に過ぐ。夫れ斯くのごとく高遠雄大なる詩想はいかで尋常頭腦の産出し得る處ならんや。非常に不規律にして、非常に紛糾せる――特に天が惠與せし非常づくしの頭腦にあらずんば中々に此作家の班に入る能はず。

抒情詩人の「インスピレーション」を重んずるは藝術に氣合の大事なるが如し。然るに今の新體詩人は「インスピレーション」の待遠しきを嫌つて、從來有り來りの歌調を唯長々とダラシなく書き陳ねるに巧みなり。勿論此頃は種々工夫を凝して或は禪語を交へ或は漢詩を燒直し、若くは俳諧の調を其まゝはめるもあり。要するに形はさま〴〵なれど想に到つては千篇一律偏に陳腐ならん事を望むに似たり。湯淺吉郎先生が須磨の磯邊に夏服の巡査を見て大「インスピレーション」を招せし俳句の外は絕えて秀拔の想ありしを知らず。

新體詩人に三病あり。無邪氣、高潔、及び優美是なり。新體詩を作るもの是非とも此一病に感ぜざるべからず。若し三病俱に感染すれば大願成就、新體詩の大家と云はれん事請合也。

新體詩人は時として敍事詩の復興を說きミルトン若くはダンテの面影を渴望するは見ぬ戀にあこがるゝ處女の如く、或は鈿女命を中心として天の岩戶開きを味まんと云ひ、或は斧九太夫を主人公として忠臣藏を歌はんと云ふ。而して萬一出來上る時は之を稱して「ドラマ」と名く。

兎に角「ドラマ」及び新體詩は意味の分らぬが專一なり。恰もブラウニングの詩が晦澁險怪にして何人も解し得ざりし如く。但し無邪氣にして高潔を兼ね優美の姿を衒ふを忘るゝ勿れ。

(d)小說――を書くは最も、最も容易なる仕事なり。天下に恐らく茶漬をかッこむほど容易きものを求むれば小說は蓋し其一なるべし。

牛込派に在る者ありと聞えたる氣骨小說家曾て某生の問に答ふらく、小說を書くに當り初めより趣向を立つるは甚だ拙也、唯思ひ寄れるまゝダラ〳〵と書聯ぬる中自づと趣向の出來るもの也ト。同じ人また或る男に告げて曰く、我が黨の志す處は詩の意を小說的に書くにありト。

初めの說は何ぞ夫れ信切にして初心者を導くに便利なるや。初めより趣向を立つるは愚也といふ。趣向を立てずして筆を採らんとするは到底出來ない相談に似たれども此出來ない相談を見事にヤッてのけるが今の小說家の極めてエラ

キ所以也。

又終りの說は餘りに幽渺深遠にして凡人の中に理解し能ふものにあらず。抑も詩の意を小說的に書くとは如何なる事を云ふや。更に百解千解萬々解するにあらずんば我々俗物其域に到達するを得ざるなり。例へば江見水蔭先生の諸小說、殊に去年の夏頃讀賣新聞に連載せられし『盆燈籠』の如きは卽ち所謂『詩の意を小說的にかきしもの』なりとシャニムニ有がたがるより外致し方なかるべし。

今の小說家は悲劇を重んず。この悲劇とは何でも主人公が死ぬとか、或は生別れになるとかして局を結ぶものをいふ。殊に此悲劇の主人公は「ウォーレンスタイン」或は「タイモン」の如き壯絶を極めるものにあらずして癡情の塊物たる軟弱婦人を興ありとなす。

思ふに添ふは昔の小說が面白き所以にして赤本の終りはいつも目出たし〳〵と定まりぬ。思ふに添はぬは今の小說の賣れる理由にして團圓は必ず淚交りの述懷ならざるはなし。川上眉山先生が『かゝり舟』の如き卽ち此類にして愛讀の令孃方をして『ほんとに可哀さうだワ』とホロリ一滴の雫を落さしむるを目的となす。

女主人公は絕世の美貌を具へて「ダンス」或は文金の高髷に結ふ箱入の孃樣か、然らずんば赤いてがらの奧樣たらざるべからず。而して輕薄なる男の甘ツたるい舌の端に乘せられて殆んど玩弄物になるを知らず何事も唯々諾々として思ふさま自由にせらるゝほど柔弱なる淑德を具へざるべからず。

男主人公も之と同じく、粹で高等で、衣服萬端どこまでも紳士風にて、七子の紋附と市樂及び絲織の二枚小袖をぞろつかせ織物の鼻緒をつッかけて「カメオ」を環に吹く外は何事も知らず、學問も見識も抱負も志望もなく、唯兒女の歡を買ふをもて生涯の目的となし、孃樣の脇の下をこそぐり藝妓の膝を枕にするをもて男の能事と心得る天晴の好男子たらざるべからず。

男が惚れる時は女も必ず惚れる。女がいとしいと思ふときは男も必ず可愛いと云ふ。是れ今の小說家が慣手の趣向なり。但し男が惚れる事少くして女が惚れる事無暗に多く、今の小說より世態を推想せば恰も男は女に惚れられんが爲に此世に生れしかの如く男の身に取りては誠に心丈夫の限りといふべし。小說家は多く經驗を寫すものなりと聞けば今の小說家が艷福萬歲なりと諸方より羨まるゝも決して無理ならざる也。

萬一男の方より惚れる事ありとするも其志望は必ず成就して女は忽ち惚れて呉れるのみならず却て十倍の熱愛を通はすに到る。川上眉山先生の『曉櫻』の如きは近頃の異例なれども是とて嫌はれしにあらず、基督敎徒の所謂聖愛は十分其間に成立したりき。『二筋道』の一重に於ける文里の如き情は中々に見るを得ず、『寢耳鐵砲』のおまんに於ける道也の情は之に似たれど露伴氏は今の文學界の變物なれば此人の文字を一般の代表となす能はず。況んや『Notre Dame』のクワシモドオとクロードフロオがエスメロオルダに於ける關係の如きは、若し之を描出するものあらば必ず文界の左道なりと斥罵せらるべし。

春廼屋先生のお辻、紅葉先生のお藤、忍月先生のお八重等皆是れ男を懷うて男に棄てられし可憐の女性にして、浪六先生の井筒女之助、澁柿園先生の山中猪之助、思案先生の花房長次郞等何れか女殺しの尤なるものにあらざるべき。要するに今の小說世界にては昔の芝居と同じくお姫樣の方よりヤイノ〳〵を極め込まざるべからず。露伴子の珠運、紅葉山人の粕壁の如きは少しく風變りなれど、通例男は飽くまでも移氣にして女は是非とも焦れ死をせざる

べからず。

戀愛小說の順序は大抵次の如し。

(1)女、男に遇うて罪しさうな人だと思ふ。(2)男、女に信切な言葉を掛けて洒落交りに機嫌を取る、(大抵兄さんのお友達とか、妹の友達とかに限る)。(3)女荐りに男の噂を友達に話して嬲られる。(4)男、女と相對にて甘ッたるい應待をする擧句に女の脇の下を擽る狼藉に及び、女胸を躍らし身を震はしてぼうッとなる。(5)女獨りで氣を揉みとつおいつ空想を恣にして姉或は親友に慰められる。(6)男いつの間にか忘れて他の女と緣組をする。(7)女鬱々として病氣になる、男の手紙或は寫眞を出して荐りに追懷する。

通例は之を骨として色々の肉を附けるだけ也。此故に其人物は或は書生、紳士、田舍漢、或は夫人、令嬢、小間使等の區別あれども、恰も目鬘を掛けて大將となり娼妓となり藝妓となり狐となるに同じ。又此趣向は時として多少異るも、云はゞ一ッ庭の趣を變へるに等しく左隅の松を右隅に移し右隅の櫻を左隅に栽替へるも、一ッ庭は矢張一ッ庭なり。

戀愛小說は一に實際派小說と云ふ。然れども此實際派小說とは佛國に行はるゝものゝ謂にあらずして單に――ゾオラの形に類するが故に便利上斯く云ひならはしゝなり。我が硯友一派の諸先生は識見高ければ夷狄の文物を崇拜する事を爲さず、飽くまでも西鶴傘伴水主義を奉ずるなれば何ぞ之を實際派なりと云ふを得ん哉。偶々不幸にしてゾオラの"Une Homme"或は『藥の傑作』に暗合せし作の出來し爲に直ちに實際派なりと噂されしは寧ろお氣の毒千萬の事と云ふべし。

此故に戀愛小說家たらんとする者は實際派なる名目に迷はず西鶴の『一代女』『一代男』其頃の『紫短氣』春水の『英對暖語』谷峨の『連理梅』其他金水、春鶯、路考、鼻山人等の諸作及び織田先生譯述の『花柳春話』紅葉先生の『隱肩』思案先生の『京鹿子』忍月先生の『お八重』等を研究して其奧を極むべし。ゆめ/\眞の實際派なりと誤解してゾオラの"L' Assommoir"ト――ルストイの"Anna Karenine"等に氣觸るゝ勿れ。

戀愛小說の外に近頃流行するに張扇小說なり。張扇小說とは講釋師の張扇の音に大悟して立案せしものを云ふ。最も珍重せらるゝ材料は町奴、俠客、二本差、○○組、若衆、朱鞘、革足袋、前額の刀傷、腕の彫物、釣上ッた眼、さらけ出した毛臑、膽のすわッた女、力のある色男等なり。

此派の小說には惡人無用なり。例へば惡人を描くとも心底の惡人でなく義の爲とか忠の爲とか何か曰くありて惡を働く者ならざるべからず。獨り惡人のみならず善人も同じく不必要なり。若し善人を寫す事あらば此善人は慈悲の泉を滿腔に蓄へて貧しきを愍み衰へたるを勞るものにあらずして自ら妄想せる善事の爲に他を殺戮殘害して以て快となす善人たらざるべからず。

人は云ふ、此派の小說は『俠』を以て主眼となすト、然り、『俠』は此派の最も尊重する處なるべし、然れども此『俠』なるものは寧ろ『狂』に近きほど十層倍大の『俠』ならざるべからず。少くも向島に接待の茶見世を出して一椀の澁茶と三枚の煎餅を施すほどの『俠』ならざるべからず。

むかし江戸の男零落れて裏店に住みけり。以前懇意の友氣の毒がりて尋ねしに男は太く喜びて馳走をしたけれど此通りの始末にて面目ないと云ふ折、恰も夕がしの棒勇ましく鰯を賣りに來れば直樣呼込みて市着の底を叩き盤臺の魚を悉く買取り直ちに溝板にブチまけ掃溜

の傍に欠伸する犬に喰はせて久々對面の興を添へぬ。然るに其後再び尋ねしかば、男は顔を見ると同時に窗に掛けし釜を取りて微塵になれと土間に叩きつけ、一客人、今日は湯を買ふ錢も無エ――

若し此微塵に釜を環破せし老俠骨を主人公として、まかり突ン出て、毛臑をさらけ出して、二尺八寸太刀を掴んで、三ピン待ツたと罵り、淺草觀音の飛ンだり躍ねたりの如く太刀打せば、立派な張扇小說忽ち出來上るべし。

此派の小說家たらんとするものは精々勉強して講釋――就中吉瓶、貞水、燕林、伯山等の講釋を聞きに行き一心に張扇の叩き工合を研究し、二ツには軍書實錄物、取分け『幡隨院長兵衛實記』或は『天保水滸傳』の類を朝夕二三遍づつ復讀する心掛肝腎なり。此上隨筆を拾ひ讀して寶永前後の小道具を三ツ四ツ覺え込めば一足飛に大家となるは恐らく外れツこなかるべし。

總じて今の作家は優れて微妙じき天才なれば大抵大文字を咄嗟の間に辨ず。縱令實際は多少の經營を凝しゝものなるも口にては咄嗟の間に辨じたりと云ふを見とする習はしなれば、作家たるもの、此心掛あつて隨分神速の工夫を練るべし。又此正則の作術を欲せざるものは始終間に合仕事をして表面だけは三年も五年も苦心したりとの吹聽をなすべし。

近頃某先生あり、其大著述の緒言に七年の歲月を費し五千卷の書籍を參考し、二萬有餘の引證を爲せりと書き給へり。七年の歲月は長しといへども僅に二千五百餘日に過ぎず。此二千五百餘日に五千卷の書籍を涉獵し二萬有餘の引證を爲しゝとは豈に是れ鬼神の所爲と云はざるべけんや。況んや某先生の筆硯に忙はしき、いゝ、あちらよりも此方よりも御用と仰しやる中に何の閒ありて此研究を爲しゝや。是よりして此著述者は數學を知らずとの噂騷がしかりしが、是れ畢竟變則の作術に長じたる故なりかし。

斯くの如く一作毎に經營慘憺したりと吹聽するも妙也。咄嗟の作でござると披露するも面白し。兎もかく何れにしても眞個に苦心する古作者を學ぶは今の時世には餘りに正直過ぎたれば萬事手輕にチョイ〳〵と工夫してチョイ〳〵と筆を奮ふを當世才子の才子たる處なりとす。

ウヰリアム、ブラックは著作家としての技倆實に第三流に下らず。然れども其著作に於ける苦心は稿を更むる事數度に及ぶも猶ほ曾て倦まずといふ。コリンスに到つては平生の用意自ら愼密にして多くの事實と多くの性格を記錄に留めて蓄藏し一篇の骨子を案出する毎に此筐底の材料をもて巧みに錯綜せる結構を作りたりと聞く。若し夫れラム或はデクヰンシイの苦心を云はゞ之に過ぐる事更に一層にして片々たる小册子にすら數年の日子を費したるも少からず。“Confessions of an Opium-eater”の如き實に十有餘年の鍛錬より成る。

チッケンス或はサッカレイの如きは最も著作に富めるもの也。スコットに到つては山の如き負債を辨濟せんが爲に日夜營々として筆を放つ事なかりき。しかも一代の著作其に二十有餘に過ぎず。是を以て紅葉先生が僅に數年間に五十餘種を作りしに比すれば卽ち如何。(紅葉先生が五十餘種の題目は知らざれども春陽堂の廣告に依て其多きを疑はず)。縱令前者は“Life of Napoleon Bonaparte”“Vanity Fair,”或は“Davip Copperfield”の如き浩瀚なる大册を含み、後者には「命之安賣」の如き煙草一服の間に讀得るものを數込みしにもせよ、數十年の生涯に於ける二十餘篇と數年の歲月に於ける五十餘種とは其相違も餘りに甚だしからずや。紅葉先生が才と學は是等英國第一流の作家よりも十層倍大なるは勿論疑ひなけれど久以て我亦作家

社會のお手輕主義を知るに足るべし。

　獨り小說家のみならず、總ての今の著作者は皆此お手輕を以て與の手となし、たゞ廣告の文面に於てだけ七年の苦心をしたりとか十度稿を更めしとか廣く群籍を涉獵したりとかの御託を述ぶ。バツトレルが「類推論」に於ける、ギツボンが「羅馬衰亡史」に於ける、アダム、スミツスが「富國論」に於ける辛苦は焉んぞ我が操觚社會に求むるを得べき。

　大著述家幸福先生の操觚事業を見よ。先生は「體操法」を著せり、先生は「哲學大意」を著せり、「算術五千題」、「代數一千題」、「幾何一千題」、「初等三角術」、「普通教育學」、「通俗教育演說」、「小倫理書」、「小心理書」、「小論理書」、「小地質學」、「小天文學」、「社會學」、「手工學」、「英國文學史」、「獨佛文學史」、「希臘羅馬文學史」、「婦女龜鑑」、「福之神」、「處世活法」、「幸福要訣」、「神童」、「萬國發明家列傳」、「西洋妖怪奇談」、「國民錦囊」――ア、草臥れた――何ぞ夫れ諸般の科學に精通する愛に到れるぞ。人はゲーテが科學に深くミルトンが政治宗教に篤きを驚く。然れども幸福先生が宏博なる大々知識を以て比ぶれば是等皆云ふに足らず。

　外山正一大先生は學カントよりも深く識スペンサアよりも宏く加ふるに菲留那の辯とミルトンの文を兼ぬるの學者なれば東西南北狄西戎、何れか其雷名を聞いて肅然として尊崇の念を起さざるはなし。然るに其著述は「學校管理法」の翻譯と「露西亞の大恩」及び「漢字破」等片々たる二三冊子に過ぎず。是れしかしながら先生が攻學研究に忙がしく且つ學生の薫陶と國家の經營に半身を分つが故なるべしといへども抑も日本の文科大學長にして社會學の講座を擔任せらるゝ大學者が小新聞の論說に劣るとも優るまじき小冊子の外に著述なきは如何にも不思議千萬の事ならずや。

　帝國大學の博士は斯くの如し。博文館の博士は即ち之に反す。外山先生に博士を授くる文部省は何故に外山先生より十倍增したる大著述をなせる幸福先生を蹉過して贈るに博士の榮位を以てせざるや。豚は大なりといへども芋の尻尾を喰ふ菜食家なり、土鼠は小なりと雖ども蚯蚓を餌となす肉食家なり。外山先生は勿論エライ人なり。幸福先生も亦是れエライ人なり。一のエライ人は博士となつて一のエライ人は博士となるを得ず。運不運は是非なければ、幸福先生敢て嘆息するを休めよ。社會は先生の大恩を決して忘れざるなり。先生自ら先生の德あり、敢て苦情を訴ふる勿れ。

　著述家たらんとする者よ、宜しく幸福先生を學ぶべし。昨日は審美學を說き今日は料理法を談じ明日は海軍術を講じ、其間芋屋の引札を書き傳授屋（斯るもの有りや否や）の廣告を草し、猶ほ閑あらば女義太夫の口上を認めお開帳の緣起を立案するも著述家としての一興にあらずや。京童は云ふ、幸福先生の著述一ケ月凡そ五百頁に上るト。豈に是れ區役所門前の代書人よりエライと云はざるべけんや。

　博文館は著述家の淵藪なり。○○先生、○○先生、○○先生、、、、、、皆是れ立派なる金箔附の大著述家にしてクレイヨンが邂逅せし夫の所謂「ミミミ」なるものにあらず。罵へど、縱令へば此罵評を當れりとするも、男子生れて日に一石の糊を費し三本の鋏を喫ぎ耗すを得ば明日死するも又遺憾なかるべし。

　文學者志願の輩よ、第一に萬能の著述家となれ、第二に小說家となれ、第三に新體詩家若くは「ドラマ」の作家となれ、第四に人物評及び史論の大家となれ。一人にして有らゆる大家を兼ぬるも又決して難きにあらず。石板縮彩色の傳習を受くるには五十錢の束脩を要す、文學者

となるには竟に一文の入費を要せざる也。

然れども著作しただけにては世に文學者と管待さるゝ事能はず。此故に世に公けにせんが爲め出板するは勿論なれど、本屋は名の賣れざる人の著書を出板する事極めて少ければ先づ新聞或は雜誌に寄書するを順序となす。

先進即ち彼方の電信あれば申し分なけれども此便宜を缺けば初めの中は精々勉強して日に五社或は十社に向けて原稿を送るべし。初めは詮方なければ沒書を覺悟し唯根よく勉強すべし。斯くて郵便税を凡そ五十錢分も損する中首尾よく編輯局の氣に入れば必ず掲載の榮を得る事がある。此氣に入るといふは強ち立派だからといふわけにあらず。云はゞ「どッこい／＼」と同じく本のまぐれ當りに過ぎざれども萬一此榮譽を得し時に其圖を外さず一ツには原稿をドシ／＼送り二ツには社員に交際を求め一生懸命にお世辭を聯べお引立を願ふが極意也。

而して初めて新聞或は雜誌に掲載せられし時は有頂天になつて嬉しがるが文學者らしくてよし。ディッケンスが初めての作は「Old Monthly Magazine」に現はるゝや、この印刷の名譽を得し嬉しさに逆上して物の色を分つ方角もなかりしかばウエストミンスター會堂に登りていきつく胸をさすり僅かに三十分間ほどは道路を歩する能はざりき。ジエーン、アオスティンは其が生涯に最も愉快なりしは何事ぞと王の問へるに嬌羞を帶びて答ふる樣「开は御言葉まででもなし妾が著書の初めて出板せられし時に候」ト。斯くの如き先例あれば文學者は飽くまでもタワイなく嬉しがつて諸人に吹聽する事勿論なるべし。ゲーテは斯る瑣事を屑とも思はぬ大氣量人なりしが夫れすら「我が原稿の見事に印刷せられし試刷を見る時は其豫想よりは一ト際詞藻のめでたきを覺ゆ」と云ひぬ。シユライエルマヘルに到つては寧ろ己れが著書の出板せらるゝを厭ふと云ふ變物なれども猶ほ且つ「昨日は我が夢想せる愉快の中に原稿を印刷者に送りし一事を數ふるを得たり」云々と記しゝ事ありき。文學者が己れの名作を剞劂に附せらるゝは武士が戰場に出でゝ敵の大將に一ト矢を向けしと同じければ喜ばざらんと欲するも豈に得べけんや。

一ト度新聞若くは雜誌に掲載せられし時は直ちに刺を通じて其主筆に謁を求むるを肝腎なりとす。若し應接所に請ぜられ一椀の澁茶を薦められし時は己れは既に／＼大家となりしと自惚るゝ事最もよし。恰も「タアナメント」に勝利を得たる武士が王城の公主より賜はる引出物を待つ如く意氣揚然として人を呑むに非ずんば忽ち安く見らるゝ恐あり。しかれども――こゝお氣樂もかなり――餘りに昂然とすれば一ツには歡心を失ひ二ツには敬して遠ざけらるゝ憂あれば隨分言語を謹み、貴君の人物論は皮肉に入るの妙があるとか貴君の新聞は日本一だといふお世辭を丁寧に述べて私も及ばずながら驥尾に附いて文學の爲め力を盡さうと存じますと下から出るが第一なり。言語を恭しくして動作を傲慢にするは文壇に於ける最上の方策なり。ドストエーフスキイの初めてベリンスキイを見るや太く稱讚せられたりしが後年其所思を記して曰く「余は夢にも此大批評家の許可を得るほどの大家なりとは思はざりき、勿論其以後に於ても曾て自ら大家なりと信じし事なけれども特に此時に在つては我が胸の躍動するを禁ずる能はざりき」云々。冷淡且つ嚴酷なる評家より意外の賞讚を博せし二葉の詩人が當時の胸中實にさもありぬべし。但し今の文學者はドストエーフスキイの如く夢にも自ら大家なりと信ずる能はずなどと野暮なる事をいふべからず。必ず一ト度新聞に掲載の榮を得て其新聞の主筆と會見せし曉には直ちに大家と成りすま

したる心持なかるべからず。

斯くて首尾よく新聞社會に出入する便宜を得れば無暗に數でこなす覺悟を以てドシ／＼投書を爲すべし。世間の人は多く名の出るをもてエライ事と考ふるが故に三月も經てば天下晴れての大家となるを得。是に於て一旦新聞に載りしものを集めて一卷となし之を書肆の手に託し立派なる表紙を附けて出板すれば心願全く成就、末世必ず文學史に名を殘すに足ると思ふべし。縱令文學史の著者が粗忽しい男でツイ忘れたにしても書籍館だけに其本の殘るは決して間違なし。又一旦新聞に載りしものを更に出板するは兎角「引眉毛」だの「洗張」だのと惡口を云へどジョンソン、ゴールドスミッス、アヂソン、バルク等の諸著は勿論、ディッケンスの小說は多く"Daily News"に連載せられマカオレイが論文は大抵"Edinburgh Review"に現はれたりき。殊に最も尋常の讀者には不向なるドストエーフスキイの小說すら莫斯科新聞の紙面に載りしと聞けば文學の模範とし尊まるゝは概ね所謂「引眉毛」若くは「洗張」にあらざるはなし。文學者は是非とも新聞の古物を出板する算段を廻らさざるべからず。同じものを二度に利用し得る俳人は初めて之を大家なりといふ。

さて如何にして書肆即ち出板商と關係を結ぶべきや――といふに、先進大家の紹介あれば容易なれども、紹介なくして本屋の臺所口より恐惶再拜して主人に謁を求むる如きは不見識にして學ぶべからず。さりとて草廬の諸葛先生を模擬て三顧の聘を待つも迂遠なれば、車を店前に横附けにして横柄に面會をもとめ、盛裝に主人を眩燿せしめて當世文學の駄法螺を吹き、初めは原稿料に就て喋々を費さず、唯世間の迷夢を覺醒せんが爲に我が著述を公けにしたきの意を述ぶべし。但し此處が即ち容易ならぬ七分三分の兼合なれば先づ東京の書肆に就き少しく語らん。

書肆が實業社會に於ける位置若くは商業上の能力は爰に云ふの必要なし。たゞ現時如何なる境界にありやと問はゞ恰もポープが次の嘲誚を値するものと云はん。

"*Obscene with filth the miscreant lies*
bewrayed,
Fallen in the plash his wickedness had
laid;
Then first (if poets aught of truth
declare)
The caitiff vaticide conceiv'd a prayer."

此惡詩が正面の的となりしは十八世紀に最も名を轟かしゝ出板人エドマンド、カールにして活潑有爲の氣象を抱いてトンソン、リントット亞流と共に商界に驅逐せしにも關らず此冷淡なる皮肉の詩人よりグラッブ町の破落戸と共に一喝せられしは嘸も氣の毒千萬の事ならずや。

カール何人ぞ。十八世紀の英國出板社會に於ける大橋佐平氏なり。佐平氏が堂々たる天下の奇傑にして一擧萬金を得て内は出板社會に驚慌を起し政府をして特に法令を發布せしめ、外は米歐に漫遊して到る處出板業の肝膽を寒からしめたるは人の皆知る處なり。曰く『日本大家論集』、曰く『日本文學全書』、曰く『新撰百科全書』、曰く『支那文學全書』、曰く『帝國文庫』――何ぞカールが輿論の反擊を受けし五部の書と相似たるの甚だしきや。

ポープは嫉酷の尤なるものなり。此故に當時の最も公共心に富めるジャコップ、トンソンをすら『渠は王が勳爵士を造るが如く詩人を製造したり其は名譽を與ふるにあらずして金錢を燕まんが爲なりかし』と嘲りぬ。而して此トンソンが製造せし詩人とはドライデン、ジョンソン、ヤング若くはポープ渠自身等の如き實に天

與の詩人なりしに關らず猶ほ其冷藏の中に埋められしを見ば、誤植に富める羅甸の文を印刷してウエストミンスター學院の書生に靴をもて蹴られしカールを汚濁の中に突落して快哉を歌ひしも怪むに足らず。

誰か佐平氏を以て唯利に敏き商人なりといふや。佐平氏は單り利に敏き商人なるのみならず內藤某が所謂『仁者』にして天下の書籍を廉賣して普く知識を廣むるに汲々たる一種の“Philanthropist”たり。他は『日本大家論集』或は『新撰百科全書』を見て剽竊書肆なりと罵り『文學全書』若くは『帝國文庫』を證として古本綴直し所なりと笑へども是れ佐平氏が知識の普及に熱心なる所以なり。ドナルドソンが書物の價尊きがために讀書の範圍限らるゝを憂ひ故山より蹶起して倫敦の市場に出で一時出版社會をして愴惶せしめ有ゆる非議誹評の焼點となりしが如き頗る相似たる者あれども、死に臨み其巨萬の富を擧げて、貧民院を創立したるに及んで偶々其志を見るに足る。未だ佐平氏に於て這般の美擧を見ずと雖ども其志あるに到つては勿論云ふまでもなし。佐平氏も亦人なり。徒らに他の專權に屬するものを剽竊し古本を綴直し、しかも間違ひだらけの粗本を濫刷し、單り生ける操觚者を乘合馬車の馬の如く苦めるのみならず、苔の下に安眠せる古人の屍を蹴るの不敬を爲して休むものならんや。

カールはウエストミンスター學院院長の羅甸語演說を印刷して運動場に牽摺り出され學生が熱罵亂拳の下に毆打蹹倒せられ、『ウヰントン侯裁判始末』を出板して貴族院に呼出され議長の前に平蜘の如く三跪九叩して罪を謝し終には“Mist's Weekly Journal”に於て“Sin of Curlicism”なる題目の下に甚だしき攻擊を受くるに到りぬ。其一節に云へらく“The fellow is contemptible wretch a thousand ways; he is odious in his person, scandalous in his fame, ... more beastly, insufferable books have been published by this one offender than in thirty years before by all the nation.”云々。

「ダウントレス」大橋・カールとドナルドソンを配合したるが如き外貌を具ふる爲に平沼某と同じく世に毀らるゝは酷も又甚し。『大家論集』よ、『日本帝國史』よ、『支那帝國史』よ、『新撰百科全書』よ、爾等は佐平氏を戕賊せし「バチルス」なり。佐平氏に罪あるにあらず、罪は佐平氏の出板物にあるのみ。

博文館と對立して文學書――と云はんよりは小說の出板をもて聞ゆるは通四丁目の春陽堂なり。主人姓は和田、名は篤太郎、鷹城と號す。夙に文雅風流の道を弘むるに志厚くして初めて櫻田に業を創めし時より『糸竹の栞』、『八重櫻甲』『縮入唐詩選』、『春之錦無之友折』、之夕暮』等の傑作名篇を出板し近時に於ては殆んど小說專賣所の觀あり。之を英國に求むれば則ちヘンリイ、コルバアンならんか。

鷹城先生は奇骨ある士なり。此故に作者に屈するの腰を持たざる代りに世間の兒守や髮結床の嗜好を見るの眼ありて色摺の表紙に粗惡の印刷紙を誤魔化すの大才を有す。人は七錢の探偵小說を悋む事甚だしけれども此同じ人が『水沫集』、或は『葉末集』を出板せしなれば功罪相償ふといふべし。

和田氏は曾て南翠、篁村兩先生の御用書肆なりしが、今は紅葉、浪六二大關の出板家元の名譽を戴けるは恰もトンソンがドライデンに於けると同じ。但しトンソンがローウェに依て、

“The Jacob Tonson, wont, to my
conceiving,
The cheerfullest, best honest fellow
living.”

と唱はれし如く操觚社會に敬愛せらるゝや否。

やに到つては問題外也。

トンソンを謳歌せしものは獨りドライデンのみにあらず。同じ出板を業とするダントンすら「トンソンは能く著者并に其述作を判斷するの識力を有し極めて正確に且つ頗る公平に鑑定して猥瑣の冊子を絕えて出板せず」と評したりき。されば渠はドライデンの著書の外ミルトンの「失樂園」を公けにし初めてシエークスピーヤの全集を印行して世間の眼に觸れたりといふ。出板者も爰に到れば批評家の資格ありといふを得べし。

鷹城先生は日本の大出板人たりといへども未だトンソンの如き名譽あるを聞かず。否な、先生も「闇之世の中」を印行して世論を喚起し「三日月」を出板して新大家を紹介せし功あれば之を鑑識の明なしとすべからず。況んや亞米利加探偵譚の趣味を輸入し「名譽實錄」の知識を世に與へしに到つては天晴殊勝の振舞にして、コルバアンが小說のみを出板しながら終に一の傑作を紹介せし事なき比にあらざるなり。

博文館と春陽堂のほか文學書類を發行する書肆決して少からず。曰く學齡館、曰く嵩山堂、曰く新進堂、曰く東京堂、曰く金港堂、曰く民友社、曰く上田屋、曰く吉岡書籍店――何れも皆堂々たる大出板業を營むものにして天下の文學を生産する事凡そ一年に萬を過ぐ。近頃我が繩張内に開店せし有文社すら毎月一回づつ雜誌を刊行するのみならず既に十餘種の書籍を公けにせりと云へば日本の文運も又盛なる哉。

人はロングマン或はハーパーの事業を見て日本の書肆の小なるを呟けども「君の樣な人に來られては大變だ」と倫敦の出板者を辟易せしめし大橋佐平氏を初めとして和田篤太郎氏、上田屋銀治氏、吉岡哲太郎氏、原亮三郎氏、內田芳兵衞氏等悉く稀有の企業家にして之に依て獲得せし收益に多少の區別こそあれ澁澤某若くは益田某に劣らざる商界の奇傑なれ。ネルソンがお伽話を出板せしに業を創めて四百五十人を頤使するに到りし事業に比すれば佐平氏が七十人の傭人を役するも極めてケチなるに似たれど抑も間男相場と同じ原稿料を稽首百拜して有がたく頂戴する今の文學者に較ぶれば又頗るエラシと云ふべし。

書肆の主人は一般に大企業家なれば、拔山蓋海の意氣込ありて著作者を小兒同樣に掌上に弄び內心の內心にては飽くまでも馬鹿にして好加減に綾なせども表面は先生と呼びて優遇等閑にあらず。

此故に操觚者は貧乏人なれば啗はすに利を以てすれば必ず自由になる者と高をくゝりながらも禮を文士に缺くの拙策を執らずして敬して遠ざくるの工夫を廻らすに巧みなり。若し夫れ數でこなす轆轤細工的著述に堪能なる著作家を遇するに到つては活板拾ひの小僧を睨視するの眼を以て之を見る。

操觚者に對するに二法あり。一は金錢を以て其心を縛らんとし、一は朋友となツて懇意上の義理を結ばんとす。前者は賣物買物主義にて原稿は先方のもの金錢は己の物、買はうが買ふまいが此方の勝手で、買つてしまへば燒いて喰はうと煮て喰はうと關ふものかといふ了見で、萬一不平を陳べる事があつても平氣の平三知らん顏の半兵衞で澄まし込む。

之に反して後者は何處までも先生々々と持上げ、隨分調子に乘る時は君、僕の應對まで切込み、諸方へお作をして駄洒落の聽手を勤め茶屋の會計役を仰せつかり、何事も圓滑に切廻して談笑の間に原稿料を直切るをもて得意となす。

英國の出板人は概ね有識の士にして著作者と對等の交際をなす。例へばフオスターがチツ、

ケンスに於ける如き最も其關係を證するに足る。然るに日本に於ては全く其觀を異にして著述者は恰も他の出入職人と同じ待遇を受くるに甘んじ唯表面だけ先生號を奉られて得々たり揚々たり。

ジョンソンは古今に類少き貧困作者の一人にして幾度となくケーヴ、ドッヅレイ、リチヤアドソン等の書肆より救はれたり。然れども是等の書肆一人としてジョンソンを禮遇するに等閑なるは無かりき。夫れケーヴが無名の貧書生の手に成れる「倫敦」(ジョンソンの處女作也)に向つて分に過ぎたる原稿料を投じ、ドッヅレイが八年の長日月に渉りし字書の出板を約束して其間資給を怠らざりしに到つては我が國終に其比を求むるを得ず。

出板人が著作者の奴隷にあらざるは勿論なれども、著作者も亦決して出板人の奴隷にあらず。然るに出板人は表面に於て先生々々と呼べども心に於ては見るに奴隷を以てし金力を借りて飽くまでも頤使せんとす。此故に偶々氣骨あるの士其頤使を肯んぜざる時は陽に尊敬の意を表して陰に力を極めて排斥す。面諛叩頭頻りに大鼓をたゝくものは書肆の眼より見ば大々大の文學者なり。

途に某小說家に遇ふ。問うて曰く何處へ?答へて曰く『お店廻りに……』。是れ書肆と作家との關係を證する好適例にして、今の文學者なるものはお店の註文を受けて口糊する職人の一種なり。何ぞカアライルが所謂世道を補修し人心を指導する底の「ヒーロオ」を以て擬するを得んや。

然れども文學者が腰を低うして書肆に出入するは、我が著述を出板して貰ひたさが一心にして、我が著述を出板して貰はんとするは唯金錢に代へんとする慾望のみにあらずして畢竟世好の低きを導かんと欲する志念切なればなり。

勿論強ちに人氣に投ぜん事を努むるにあらねど、賣行惡しき者を出板する書肆なきをもて、世好の上進を計らんとすれば勢ひ俗人に阿る工夫を爲さざるべからず。書肆の氣に投じて首尾よく原稿料萬歲を歌はんとすれば、先づ此人氣を取る事を心掛くるが第一なり。

「人氣」は文學者が一念を注ぐ金的なり。首尾よく之を射透せば原稿料といふ景物に有附くを得。世には人氣を毒蛇よりも恐ろしがる無氣力漢あれども、人氣畢竟蜜の如し。一ト度賞翫すれば夫に〳〵甘くて〳〵耐へられたものでない。金が取れて、人にもてはやされて、しかも幾分かは或る影響を與ふる事を得て。若し『人氣』に投ずるをもて卑劣なる賤人根性となさば、シェークスピーヤも慥に此根性を有てる男なり。『おれが下手なものを作つて世の喝采を受けぬをもて仕方がなしに、我は人氣に媚びず』といふは古今の大俗なり。然るに此大俗が偶々世に容れられし大詩人を評して直ちに世好に枉屈する幇間的作家となすは其心のさもしさ推量られて氣の毒千萬ならずや。

ジョンソンは字典の編纂を終りし時人に語るらく、書肆は文學の保護者なりト。若し渠をして今の日本に生れしめば如何。渠は人氣の尊きを知らず、人氣に阿諛する事の却て名譽なるに心附かず、人氣の前に叩頭禮拜する作家の本分を忘るゝが故に、其「倫敦」、其「ラセラス傳」、其「Vanity of Human Wishes」等必ずや惣ての書肆に排斥せられて空しく屑籠の中に葬らるゝ運命に陷りしなるべし。渠は咳くべし、**書肆は人氣の保護者**なりト。

今の作家中にて最も商賣下手なる某嘗ていゝヤケ腹の氣味にて曰く、書肆の滅絕を計らざれば文學を如何ともする能はずト。又大理想を攫んで濶歩する某作家に曰く、出來損ひは本

屋に賣れト。若し書肆にして出來損ひの著作を買つてヒク〳〵と世を渡るものならば何千萬軒をたゝき潰すもいかで文學を上進するを得べき。今の書を估ふものは多くは營養不十分の病人にして氣息奄々將に倒れんとす。何ぞ特に滅絶の速かなるを望まんや。

此羸弱なる書估の壽命長久を願ふ文學者は須らく出來損ひの著作をシコタマ製造して賣附けるべし。是れ今の世に處する著作家として第一の仁德なり。一に世好を上進し二に書肆を救ひ三に自己の收得を增す。豈に是れ明治の聖代に恥ぢざる才人の事業にあらずや。

文學者よ、文學者よ、爾は「人氣」の僕隸となつて書估の前に三拜せよ。是れ決して恥辱にあらず。縱令一歩を讓りて恥辱となすも世好を上進し文學を發達させんが爲ならば此位な恥辱やはか忍ばれぬ事あるべき。文學者は先づ人氣奇妙頂來を念じて書肆のお出入となるべし。

お出入となつて後の心得一二を說かば、

第一、自己が賣れッ子なる事を吹聽すべし。例へば甲の書店に行けば乙の本屋から原稿を催促されて困ると云ひ、丙の出板人に遇へば丁の家のものを請合つてゐると話し、戊の書估を訪ふ時は己の店から發市す筈と語り、庚の番頭に向つては辛の編輯所から復た賴まれたと披露し、壬の小僧に遇へば癸の家から原稿料の前借をしたと法螺を吹く。

書肆の催促と原稿料の前借は文學者が最も誇る箇條にして、文學者人に遇へば必ず此頃は每日催促されるから逃げてゐると御託を吐く。是れ我は大家なりといふに同じければ也。

第二、原稿料は隨分十層倍にして披露すべし。例へば實際十圓で賣れたものは五十圓、二十圓で賣れたものは百二十圓と輪を掛けるが如く。

第三、成るべく本屋の御機嫌を取りて他人には自己が恰も其書肆の黑幕宰相であるかの如く物語るべし。書肆の黑幕宰相——嗚呼、是れ絕代の榮譽にあらずや。

其他に猶ほいくらもあれど、兎にかくこゝらの調子を飮込んで立廻れば、廣告は立派で、製本は見事で、而して評判の花やかなる書物が出來て、目出度く明治の大々文學者となれる事請合申す。

傑作とは何ぞ。印刷したる紙を綴ぢしものなり。文學者とは何ぞ。此綴本を作る人なり。世間に何が一番容易く、一番安心で、一番金が儲かッて、一番名か賣れて、而して一番資本の入らぬものと云へば、恐らく此文學者なるべし。

「ヨカ〳〵」の飴賣を見よ、派手な衣裝をして、面白い歌をうたひ、可笑しい舞蹈をして、ソシテお錢が取れて、其上に粹な乳媼や可憐ない兒守にチヤホヤされるとは古今隨一の果報者といふべし。

是にも增して文學者は一室の中に安居し白紙に無駄書をするばかりの事で、外に出でては社會の師長と仰がれ王侯貴人に等しき尊榮を受く。其餘得を云へば不相應なる富を獲收し美人の崇拜を辱うす。なンと甘き商賣ならずや。

文學者を以て阜螽に比するものあり。曰く、阜螽に數種類あり、「イーバッタ」「ヨクバッタ」、「ヘイツクバッタ」、「イチバッタ」、「フンバッタ」、「ゲスバッタ」、「シャチコバッタ」、「デシャバッタ」等の如しト。

白晝は躍り半夜は歌ふを天職となし草の葉に置く露を吸うて空しく跳廻り竟に秋風と共に枯行く身の果を知らざる憐れさよ。されど、輕やかに飛んで辭美しく綿々喞々休みなく吟じて浮れ暮す果報ペルシャの王より更に目出たし。

カウレイ歌ふらく、

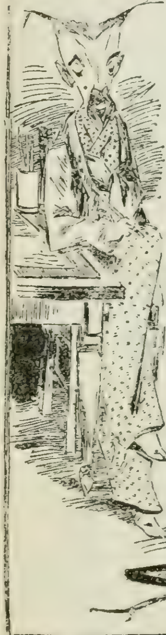
"All the fields which thou dost see,

All the plants belong to thee;
All that summer hours produce,
Fertile made with early juice."

天の甘醴を樂み萬頃の麥野稻田を我がもの顔に振舞うて飛跳ねる幸運を擅にする阜螽は亦是れ一種の豪傑なる哉。

或人が文學者をもて阜螽に比せしは何の故なるを知らず。さりながら寸に足らぬ身を以て天地の間に逍遙遊する無想の豪傑先生に比せられしは豈に是れ一大榮譽と云はずして何ぞ。*Epicurean animal*！ 爾は稻と麥とに滿足せず飛んで本屋の弗箱に行け。本屋は爾を款待し與ふるに黃金の靈水を以てすべし。縱令二三者より米搗阜螽の綽號を受くるも如かず此靈水を酌んで醉歌放吟、躍り狂ふて浩然の氣を養はんには。





Happy insect, happy thou!
Dost neither age nor winter know;
But when thou'st drunk and danced and sung
Thy fill, the flowery leaves among,
(Voluptuous and wise withal,
Epicurian animal!)
Sated with thy summer's feast,
Thou retir'st to endless rest!

—— *Cowley.*



多くの詩人は社會を冷酷なるものの如く歌へり。ドストエーフスキイの如き其尤なる者なり。然れども日本の社會が中々に拔目なく名士を優遇するに吝ならざるは錦織剛清君に謳歌せし一條にて分明ならずや。今最も分り易き樣に社會が與へし文學者の報酬を算測せば、

一『三日月』……總字數凡そ三萬六千
一冊定價二十錢にて賣部數を一萬二千部と見積れば總高二千四百圓――即ち一字七錢に當る

一『井筒女之助』……總字數凡そ五萬
一冊定價三十錢にて賣部數を一萬部と見積れば總高三千圓――即ち一字六錢に當る

天下に雷名轟ける浪六先生の爲め社會が仕拂ふ報酬は大抵一字六七錢內外なり。此算法にて見積る時は春陽堂の『探偵小說』に對しては一字四錢位、博文館の『少年文學』に對しては一字七錢內外を仕拂へり。而して最も有名なる錦織先生の『闇之世之中』に向つて社會は實に一字概ね十五錢を投じたりき。所謂一字千金の相場に行かざるも社會が文學者を禮するを盡せりといふべし。『鹽原多助一代記』の如き發賣部數殆んど二十萬に越えしと聞けば日本の社會は著作者を遇するに決して冷酷ならざるなり、

乞ふ、一回顧して森鷗外氏の『水沫集』を見よ。京童の言を信ずれば發賣部數五百に超えずと。『水沫集』は六百頁にして字數凡そ四十萬なれば之を算測すれば一字僅に七八毛に該當す。噫、鷗外氏が空前の大文學者なる事は上、天帝より下、水呑百姓に至る迄首肯して承認する處なり。然るに浪六先生の文字を買ふに十錢近き高を奮發する社會が一釐をだに吝むとは豈に夫れ不思議千萬と云はざるべけんや。

しかしながらこゝが不思議さうで決して不思議ならぬ一事なり。世に文學者として立たんとすれば必ずこゝの工合を飲込むべし。第一に社會の御機嫌を伺うて飽くまでも御意に逆はぬ樣にすれば請合つて十分に歡迎して呉れる。云はゞ孫の子には黄金の玉より芋の尻尾の方が尊いと同じ道理にて鷗外氏の深宏なる學識も未だ愛に及ばざりし也。

賢き書估某云く、最も苦辛せし著作は最も賣れぬものなりト、最も高價なるものは最も賣行惡しいト。文學者は必ず經營慘憺の刻苦を爲すべからず。極めて卑俚淺近なる題目を選びお茶漬さらさら主義にて精々お手輕に唯筆尖を器用に働かすれば社會に十分滿足を與ふるを得べし。

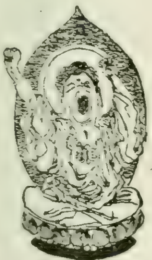
斯くて首尾よく社會に滿足を與ふるを得ば一足飛に屈指の大文學者の班に入るを得べし。云はゞ『人氣』の試驗を受けて及第するや落第するやといふ咄にして『人氣』は文學社會に於ける唯一の「ゴッド」なり。

文學者となれ！　文學者となれ！　猫も杓子も文學者となれ！　人氣如來に祈請を掛けて一心に大家段に上る工夫を運らすべし。惣ての如露如泥なるニヤケ男一ト度粉骨虀身すれば一躍して遊冶郎の境界を脫離し洽く世間に歡待せらるべし。

●　●　●　●　●

諸君！　あア、くたびれた！　まだまだいふ事は澤山あるが是で一ト休みすべし。以上の外に婦人に接する禮式、家庭に於ける心得、或は宗教道德其他の社會人事に關する文學者の見識を說法したいが先づ今日はお預けとすべし。あア、くたびれた！

以上　風帶子　筆記





二葉亭は無類の猫好きだつた。兒供のやうに、といふよりも寧ろ兒供以上に可愛がつてゐた。其の祕藏の猫が他から見ると、怎うして那樣な猫が可愛いだらうと思ふほど厭な猫だつたので、折々猫の棚下しが始まる度に二葉亭は大不服で、『猫の器量が好いの惡いのと人間の眼で見てドウシテ定められる。猫仲間から見たなら人間の惡いと思ふ方が却て好いのかも解らん。此奴なんかも……』と左も可愛くて堪らぬといふやうに眼を細くして膝にうづくまつてゐる猫の頭を撫でつゝ、『君達は貶すが猫仲間では必と別嬪に違ひない。でなきア那樣に牡が競爭して挑りに來る氣遣ひがない。これでも此町內ちや引手數多の入山形の二つ星といふ處サ』と會心の微笑を洩しつゝ煙草をキユウと吸つて煙管をポンと叩いた。

（『猫』より）

二葉亭四迷の一生

二葉亭の歿後、坪内、西本兩氏と謀つて故人の語學校時代の友人及び故人と多少の交誼ある文壇諸名家の追憶又は感想を乞ひ、集めて一册として故人の遺靈に手向けた。其折諸君のまち〳〵の憶出を補ふ爲めに故人の一生の輪廓を描いて卷後に附載したが、草卒の際序述屢々先後し、且故人を追懷する感慨に失して無用の冗句を累ね、故人の肖像のデッサンとして頗る不十分であつた。卽ち煩冗を去り補修を施し、且更に若干の遺漏を書足して再び爰に收錄するは二葉亭四迷の如何なる人であるかを世に紹介する爲めであつて、肖像畫家としての私の技術を示す爲めでは無い。且私が二葉亭と最も深く往來交互したのは『浮雲』發行後數年を過ぎた官報局時代であつて幼時及び青年期を知らず、更に加ふるに晩年期には互ひに俗事に累はされて往來漸く疎く、膝を把つて深く語るの機會を多く持たなかつたから、二葉亭の親友の一人ではあるが、其のボスウェルとなるには最も親密に交際した期間が限られてゐた。且此一篇は初めからデッサンのつもりで書いたゆゑ、如何に改竄補修を加へてもデッサンは終にデッサンたるを免れない。勿論二葉亭の文學や事業を批評したのではなく、云はゞ履歷書に註釋を加へたに過ぎないので、平板なる記實に若し幾分たりとも故人の人物を想到せしむるを得たなら此の一篇の目的は達せられてゐる。更に進んで故人の肉を描き血を流動せしめて全人格を躍動せしめようとするには勢ひ內面生活の細事にまでも深く突入しなければならないから、生前の知友としては却て能くし難い私情がある。故人の瑜瑕並び蔽はざる全的生活は他日再び傳ふる機會があるかも知れないが、今日はマダ其時機でない。且自ら別に傳ふる人があらう。本篇は唯僅かに故人の一生の輪郭を彷彿せしむる爲めのデッサンたるに過ぎないのである。下記は大正四年八月の舊稿を改竄補修をしたもので、全く新たに書直し、或は書足した箇處もあるが、大體は總て舊稿に由る。

一　生ひたちから青年まで

二葉亭が明治二十二年頃自ら手錄した生ひたちの記がある。未完成の斷片であるが、其幼時を知るには之に如くものは無からう。曰く、

『余は元治元年二月二十八日を以て江戸市ケ谷合羽坂尾州分邸に生れたり。父にておはせし人は其頃年三十を越え給はず、また母にておはせし人も尚ほ若かりしかば、さのみは愛し給ひしとも聞かざれど、祖母なる人のいとめでいつくしみ給ひて、父の叱り給ふ時は機嫌よろしからぬほどなれば、おのづから氣隨におひたてり。されど小兒の時余の最もおそれたるは父と家に藏する鍾馗の畫像なりしとぞ。

『幼かりしころより明りに他人に親まず、所謂人みしりをせしが、親しくゆきかよへる人などにはいと打解けてませたる世辭など云ひしと叔母なる人常にの給ひき。

『六歲のころ父なる人自ら手本をものして

取らし給ひつ。されど習字よりは畫を好みて、夜は常に木偶の形など書き散らしこ樂みしが、たゞみづから畫くのみならで、繪卷物(註、錦繪の事なり)など求め出よろこびて常に玩べりとか。

『畫の外余の最も好みしは昔物語りにて、夜に入ればいつも祖母なる人の袖引きゆるがして舌切雀のはなし給へとせがみしといふ。

『されどこれらは幼き時のことなれば今は覺えなし。たゞ祖母なる人の物語り給ひしを記せるのみなり』

『上野戰爭後諸藩引拂ひの時余の一家は皆尾州へおもむきたれど、只父なる人のみは尙ほ留まりて江戸の邸を守り給へり。

『尾州に到りてのちに初めて學に就けり。組外れに漢學塾ありたりしが、その門に入りて漢學を修めり。又余の叔父なる人に就きて素讀を修めり。藩に學あり、英佛兩語を敎授す。余亦之に入りて佛語を修めり。

『余は常に學校に行くを樂みとせしが、學問するが面白きにはあらで、學校にて衆童と遊戲嬉笑するが面白きゆゑなりき。

『余のすめる近傍の兒童は皆余の朋友なりき。但し何人も經驗したる事ならんが、余の朋友中年たけたるもの二人ありたり。件の兩人相親しむ時は余らは皆其麾下に屬してさまざまなる惡戲をして戲れしが、兩人仲違ひしたる時は余らも亦仲間割れをせり。余は別して臆病なりしかばかゝる時は常に兩人中余の尤も懼るゝ方に附き隨ひて媚を獻じて其機嫌を取れり。

『余は此の如く他人に對しては臆病なりしかど、家人に對しては大膽にて所謂澹泊を極めたりき。余は甚たしき癇性にて每朝衣服を母なる人に着せて貰ひしが、常に一度にては濟まず、何處か氣持惡しければ二三度も着かへるを常とせるをもて、是に由りて母なる人を苦めたる事もありき。

『概して云へば當時の余の心狀は卑劣なりしなり。』

以上は其全文である。取出て云ふほどの奇は無いが、二葉亭の一生を貫徹した潔癖、俗に云ふ氣難かし屋の氣象と天才肌の―シャイ―、俗に云ふ羞恥み屋の面影が兒供の時から仄見えてをる。且此自傳の斷片は明治二十二年ごろの手記であるが、自ら當時の余の心狀は卑劣なりしなり」と明らさまに書く處に二葉亭の一生鞭撻して止まなかつた心の惱みが見えてをる。

尾州から父に伴はれて父の任地島根に行き、殆んど幼時の大部分を島根に暮した。其頃の父の同僚であつて叔父同樣に親しくした鈴木老人其他の話に由ると、頗る持餘しの茶目であつたさうだ。軍人志願で、陸軍大將を終生の希望とし、亂暴して放屁するを豪いやうに思つてゐたと、二葉亭自身の口から聞いた。

二葉亭の伯父で今猶ほ名古屋に健在する後藤老人は西南の役に招集されて、後に內相として辣腕を揮つた大浦兼武(當時軍曹)の配下となつて戰つた人だが、西郷贔屓の二葉亭は此伯父さんが官軍だといふのが氣に喰はないで、度々伯父さんを捉まへては大議論をしたさうだ。二葉亭の東方問題の抱負は西郷の征韓論あたりから胚胎したらしい。こんな鹽梅に兒供の時分から少し變つてゐたので、二葉亭を可愛がつてゐた祖母さんは「此子は金鵄指すか薦被るかだ」と能く人に語つたさうだ。(金鵄指すか薦被るかといふは、名となるかこじきになるかといふ意味の名古屋附近に行はれる諺)

十五歲の時、島根から上京して四谷に忍原横町の親戚の家に寄食した。其時分もヤンチャン小僧で、竹馬の友たる山田美妙の追懷談に由

ると、お神樂の馬鹿踊が頗る得意であつて、兒供同士が集まると直ぐトッピキピを始めてヤンヤと云はせたさうだ。間もなく芝の愛宕下の高谷塾に入塾した。高谷塾といふは『日本全史』といふ可成浩瀚な大著述をした其頃の一癖ある漢學者高谷龍洲の家塾であつて、可成多數の書生を集めて東京の重なる私塾の一つに數へられてゐた。大阪朝日の舊社員の土屋大作や、今は故人となつた帝劇の座付作者の右田寅彦兄弟も同塾であつたさうだ。然るにイタヅラ小僧の茶目の二葉亭は高谷塾に入塾すると不思議に俄に打つて變つた謹直家となつて眞面目に勉強するやうになつた。知らない顔の他人の中へ突き出されて、持前の羞恥み屋から小さくなつたのでもあらうが、一つは今なら中學程度に當る東京の私塾の書生となつたので、俄に豪くなつて大人びたのでもあらう。

其時代一番親しくしたは二葉亭の易簀當時暹羅公使をしてゐた西源四郎と陸軍大尉で早世した永見松太郎の二人であつた。殊に永見は同時に上京した同郷人であるし、同じ軍人志願であつたから猶更深く交際した。然るに永見は首尾よく陸軍の試驗に合格したが、二葉亭は其頃からの強度の近視眼の爲め不合格となつた。(永見は其後參謀部の有數な秀才と歌はれてゐたが惜しい事に大尉で若死して了つた。福島大將と同時代であつたさうだ。)二葉亭は運惡く最初の首途に失敗つて了つたが、首尾よく合格して軍人となつても狷介不羈の性質が累をなして到底長く軍閥に寄食してゐられなかつたらう。

其頃二葉亭は既に東亞の形勢を觀望して遠大の志を立て、他日の極東の風雲を豫期して舞臺の役者の一人とならうとしてゐた。陸軍を志願したのも、幼時は左に右く其頃では最早唯軍服が着たいといふやうな幼い希望では無かつた。夫故に軍人志望が空しくなると同時に外交官を志して舊外國語學校の露語科に入學した。其頃高谷塾以來の莫逆たる西源四郎も同じ語學校の支那語科に在籍してゐたので、西は當時の露語科の教師古川常一郎の義弟であつたから猶更益々交誼を厚くした。其後間もなく西が外務の留學生となつて渡支してからも山海數千里を距てて二人は片時も往復の書信を絶やさなかつた。其頃の二葉亭の同窓から聞くと、暇さへあると西へ遣る手紙を書いてゐたさうで、其手紙がイツデモ國際問題に關する侃々諤々の大議論で、折々は得意になつて友人に讀んで聞かせたさうだ。二葉亭の露西亞語は日露の衝突を豫想しての國家存亡の場合に活躍する爲めの準備として修められたのだから、「君は支那公使となれ、我は露國公使とならん、」と云ふが二人の青年の燃ゆる如き抱負で、殆んど天下の英雄は使君と操とのみの意氣込であつた。二葉亭が死ぬまでも國際問題を口にしたのは決して偶然では無いので、マダ二十歳になるかならぬかの青年時代から血を湧かした希望であつたのだ。(二葉亭の歿後、或人が西を訪問して其頃の二葉亭の遺事を聞きたいと云つた處が、西は頗る冷然として二葉亭とはホンの同窓といふだけの通り一遍の淺い關係だから其頃の事は大抵忘れて了つたと云ふ至つて素氣ない挨拶だつたさうだ。御當人が然ういふ健忘性だから世間からも西といふ公使が有つたか無かつたか今では全く忘られてゐる。)

明治十八年の秋、舊外國語學校が閉鎖され、一ツ橋の校舍には東京商業學校が木挽町から引越して來て、佛獨語科の學生は高等中學校に、露清韓語科は商業學校に編入される事になつた。當時の東京商業學校といふは本と商法講習所と稱し、主として商家の子弟を收容した今の乙種商業學校程度の頗る低級な學校だつたから、士族氣質のマダ失せない大多數の語

學校學生は突然の廢校命令に不平を勃發して、何の丁稚學校がといふ勢ひで商業學校側を睥睨した。今なら怎んな專制的命令が行はれる筈もなく、然ういふ場合學生は聯合して示威運動でもする處だが、當時の學生は未だ然ういふ政治運動をする考がなく、硬骨連が各自に思ひ思ひに退校届を學校へ叩きつけて飛出して了つた。二葉亭も亦其の一人で、一時は商業學校に學籍を轉じたが、翌十九年一月、到頭辛抱が仕切れないで怫然袂を拂つて退學して了つた。最う二三月辛抱すれば卒業出來るのだし、二葉亭は同學中の秀才だつたから、其儘缺席して試驗を受けないでも免狀を與へようといふ校長の內諭もあつたが、氣に喰はない學校の卒業證書を恩惠的に貰ふ必要は無いと、キビ〳〵跳付けてプイと退學して了つた。

が、此頓挫が二葉亭の生涯の行程をこじらす基ゐとなつたは爭はれ無い。當時の商業學校の校長矢野次郎は二葉亭の才能を惜んで度々校長室に招いて懇諭し、愈々學校を退學してからも身分上の心配をしてやらうとまで厚意を持つて吳れた。が、不平で學校を飛出しながら校長の恩に縋るやうな所爲は餓死しても二葉亭には出來なかつた。且露語科に入つた當初の志望こそ外交官であつたが、語學の研究の爲め露西亞文學を涉獵し初してから何時の間にか露國思想の感化を受けると同時に、夫まで潛在してゐた文學的興味、藝術的意識が俄に頭を擡上げて來て、當初の外交官熱が次第に冷め、其時分は最早以前の東方策士氣質でなくなつてゐたから、矢野の厚意に縋つて官界なり實業界なりに飛込む氣にはなれなかつた。元來が軍人志願の漢學仕込で、岳武穆や陸宣公に鍛へられてゐた上に、ヘルチェンやビェリンスキーの自由思想に傾倒して意氣鬱勃としてゐたから、一から十までが干涉好きの親分肌の矢野次郎の實業一天張の方針と相容れる筈は無かつた。算盤玉から彈き出したら矢野の云ふ通りに溫和しくなつてる方が得策であつたかも知れないが、矢野が世話を燒けば燒くほど、世話になるが利益と思へば思ふほど益々反抗して、折角の矢野の厚意をヒタリと蹶付けて後足で蹴つて了つた。無論、學校を飛出してから何をするといふ恃は無かつたが、此場合是非分別を考へる遑もなくて、一途に血氣に任して意地を貫いて了つた。

二 春廼舍との握手

恰も其頃であつた。坪內逍遙の處女作『書生氣質』が發行されて文學士春廼舍朧の名が俄に隆々として高くなつたのは。（『書生氣質』は初め淸朝四號刷の半紙十二三枚ほどの小册として神田明神下の晩靑堂といふ書肆から隔週一册づつ續刊されたので、第一册の發行は明治十八年六月二十四日であつた。）丁度政治が數年後の國會開設を公約されて休息期に入つて民心が文學に傾き、リットンやスコットの飜譯小說が續出して歡迎され、政治家の創作が頻りに流行して新らしい機運に向いてゐた時であつたから、今の博士よりも遙にヨリ以上重視された文學士の肩書を署した春廼舍の新作は忽ち空前の人氣を沸騰し、堂々たる文學士が指を小說に染めたといふ事は從來戲作視した小說の文學的位置を重くもし、世間の好奇心を一層喚びもした。其頃までは靑年の靑雲の希望は政治に限られ、下宿屋から直ちに參議となつて太政官に乘込まうといふのが靑年の理想であつた時代であつたから、天下の最高學府の出身者が春廼舍朧といふ粹な雅號で戲作の眞似をするといふは辯護士の娘が女優になつたり、華族の冷飯がキネマの興行師となるよりも一層意外で、『書生氣質』が天下を聳がしたのは其の藝術的效果よりも實は文學士の肩書の威力であつた。

夫故世間は半信半疑で、初めは矢張政治家の小說と同じ一時の流行カブレで、堂々たる學士がマジメに小說家にならうとは誰も思はなかつた。處が高田半峰が長々しい批評を書き、春廼舍も亦矢繼早に『小說神髓』(此頃『書生氣質』『小說神髓』とドッチが先きだらうといふ疑問が讀者子間にあつたら、いふ、『神髓』はタシカ早稻田の機關雜誌の中央學術雜誌に初め連載されたのが後に單行本となつたので、『書生氣質』以後であつた。)から續いて『妹と背鏡』を發表し、スモレット、フヰールディング、ディッケンス、サッカレー等の英國小說家が大文豪として紹介され、戯作の低位から小說が一足飛びに文明に寄與する重大要素、堂々たる學者の使命としても恥かしくない立派な事業に跳上つて了つた。夫まで政治以外に青雲の道が無いやうに思つてゐた天下の青年は此の新らしい世界を發見し、俄に目覺めたやうに翕然として皆文學に奔つた。美妙や紅葉が文學を以て生命とする志を立てたのも、動機は春廼舍の成功に衝動されたのだ。

二葉亭は之より先き語學校の科目としてゴンチャローフやゴーゴリやレルモントフやドストエフスキー等の大文學を研究し、進んでビェリンスキー、ドブロリューボフ、ヘルチェン等の論文集を耽讀し、殊に深くビェリンスキーに傾倒してゐた。尤も半ば語學研究の必要の爲めに外ならなかつたが、當時の語學校の教師グレーといふが中々な文學家であつて、其の露文學を講ずるや微に入り細に渉つて批評し、且エロキューションに極めて巧妙で、身振聲色交りに手を振り足を動かし眼を剝き首を掉つてゴンチャローフやドストエフスキーを朗讀して聞かしたのが作中のシーンを眼前に彷彿せしめて、一ト度グレーの講義を聞くものは皆語學の範圍を超えて其の藝術的妙趣を感得し、露西亞文學の熱心なる信者とならずにはゐられなかつた。二葉亭も亦此の一種の天才ある教師の指導を受けて何時とはなしに藝術的興味を長じ、進んで專門文人となるまでの斷乎たる決心は少しも無かつたが、知らず識らずに偶然文人の素地を作つてゐた。時も時、學校を罷めて何をすると云ふ方角もなく、滿腔の不平を抱いて放浪してゐた時、卒然として此の文學勃興の機運に際會したは全く何かの因緣であつたらう。

當時の春廼舍朧の聲望は旭日昇天の勢ひで世間の『書生氣質』を感嘆するや恰も凱旋將軍を迎ふる如くであつた。が、世間が驚嘆したのは實は威力ある肩書の爲であつて、其實質は生殘りの戯作者流に比べて多少の新味はあつても決して餘り多く價値するに足らなかつたのは少しく鑑賞眼あるものは皆認めた。況してや偉大なる露國文學の一トわたりを究めた二葉亭が何條肩書に嚇かされよう。世間が『書生氣質』や『妹と背鏡』や『小說神髓』を感嘆する幼稚さを呆れると同時に、文學上の野心が俄にムヅ〳〵して來た。尤も進んで春廼舍と競爭しようといふほど燃上つたのではなかつたが、左に右く春廼舍の技巧や思想の闇穰さに堪へられなくなつた結果が『小說神髓』の疑問の箇處々々に不審紙を貼つたのを携へて突然春廼舍の門を叩いた。語學校を罷めてから間もなくであつた。

二葉亭が春廼舍を訪問したのは、昔の武者修行が道場破りをするツモリで他流試合を申込むと多少似通つた意氣込が無いでは無かつた。が、二葉亭は極めて狷介な負け嫌ひであると同時に又極めて謙遜であつて、如何なる人に對しても必ず先づ謙虚して教を待つの禮を疎かにしなかつた。春廼舍を憚らなく思つてゐたには違ひないが、訪問したのは先輩を折伏して快を取るよりは疑問を晴らして益を享くるツモリであつたのだ。が、ビェリンスキーに傾倒しゴンチャローフ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー等に飽滿した二葉亭が『書生氣質』の著者たる當時の春廼舍に教へらるる事は餘り多く無かつたのは明かに想像し得られる。

が、其以後屢々往來して文學上の思想を交換すると共に文壇の野心を鼓吹された事は決して尋常でなかつた。矢崎鎭四郎を春迺舍に紹介したのも矢張二葉亭であつた。矢崎は明治十九年の十月には處女作『守錢奴の肚』を公けにし、續いて同じ年の暮れに『ひとよぎり』を出版し、二葉亭に先んじて逸早く嵯峨の屋お室の文名を成した。

二葉亭の初めての試みはゴーゴリの飜譯であつた。が、世間には發表しなかつた。其の發表しなかつた理由は不明であるが、多分性來、自重心が輕々しく公けにするを欲しなかつたのであらう。其時分またビェリンスキーの美論の一部を飜譯した事があつた。尤も此飜譯は春迺舍を初めビェリンスキーを知らない友人に示す爲めであつて、公けにするツモリは無かつたのであるが、其中の一部分が飜譯後暫らく經つてから冷々亭主人の名で前記した早稻田の機關誌の『中央學術雜誌』に掲載された。が、ビェリンスキーの美論は當時の讀書界には少し高尚過ぎたから、誰にも碌々讀まれず、殆んど注意されずに終つたが、今から三十年前に恁ういふ深邃な美學論が飜譯されたといふは恐らく今の若い人たちの思掛けない事であらう。其時分二葉亭は冷々亭杏雨、率性堂、又は翁々亭と稱してゐた。

其頃二葉亭は學校を罷めてゐて、之から先き怎うにも一本立にならねばならない場合であつた。親代々家祿で衣食した士族出の官吏の家では官吏を最上の階級とし、官吏と名が附けば腰辨でも一廉の身分があるやうに思つてゐたから、兩親初め周圍のものは皆二葉亭の仕官を希望してゐた。が、二葉亭は決然袂を揮つて退學した餘勇が猶ほ勃々としてゐた處へ、春迺舍からは盛んに文學を煽り立てられ、弟分に等しい矢崎ですらが忽ち文名を揚ぐるを見ては食指動くの感に堪へないで、周圍の仕官の希望を無視して、砂を嚙んでも文學をやると意氣込んでゐた。其時分の文學的覇心は殆んど天に冲する勢ひであつた。

三　『浮雲』及び其時代の生活

『浮雲』の第一篇が發行されたは明治二十年七月であつた。此の第一篇は今も昔も變らぬ書肆の商略から表紙にも扉にも春迺舍朧著と署して二葉亭の名は序文に見えるだけだから、世間は春迺舍をのみ嘖々して二葉亭の存在を少しも認めなかつた。二葉亭の名が一般讀書人に知られて來たは公然其名を署した第二篇の發行以後である。が、夫すら世間は春迺舍の別號或は傀儡である如く信じて二葉亭の存在を認めるものは殆んど稀れであつた。

尤も第一篇は春迺舍の加筆が可成多かつたから多分の春迺舍臭味があつた。世間が二葉亭を無視して春迺舍の影法師と早呑込みしたのも萬更無理では無かつた。が、誰でも處女作を發表する時は臆病で、著作の經驗上一日の長ある先輩の教へを聞くは珍らしくない。況して謙遜な二葉亭は文章の造詣では遙に春迺舍に及ばないのを認めてゐたから已れを空うして春迺舍の加筆を仰いだ。春迺舍臭くなつたのも止むを得なかつた。が、一旦發表して後は自信を強くし、第二篇には思ふ存分に大膽な言文一致を試みて自個の天地を開き、具眼の讀書子をして初めて春迺舍以外に二葉亭あるを承認せしめた。

言文一致の創始者としては山田美妙が多年名譽を獨占し、今では美妙と言文一致とは離る可からざるものの如く思はれてをる。が、美妙の『夏木立』は明治二十一年八月の出版で、『浮雲』第一篇よりは一年遲れてる。尤も『夏木立』中の『武藏野』は初め讀賣新聞に載つたのであるが、矢張『浮雲』の方が先んじてゐた。或は『浮雲』第

一篇は嚴密な意味の言文一致でないといふ人があるかも知れぬが、『武藏野』も亦頗る雅文臭いもので、時代の先後を云つたら二葉亭の方が當然其試みに率先した名譽を荷ふべき筈である。不思議な事には美妙と二葉亭とは親たちが同じ役所の同僚であつて、兒供の時からの朋友であつた。尤も竹馬の友といふだけで、中ごろは交際が絶え、相談したのでも申合はしたのでも無かつたが、相期せずして幼友達同士の此の二人が言文一致體を創めたといふは頗る不思議な因縁であつた。尤も之より以前、漢字廢止を高調した假名の會の創立當時から言文一致は識者の間に主張され、極めて簡單な記事文や論說を言文一致で試みた者もあつた。同時に之より三四年前に發明された速記術が其頃漸く實際に應用されて若林玵藏の速記した圓朝の「牡丹燈籠」が出版されて活きた口話の實例を示したのが俄に言文一致の機運を早めたのは爭へない。美妙も二葉亭も此の圓朝の口話の速記に負ふ處が多かつたのは想像するに餘りがある。明治の文章史を作る者は圓朝の『牡丹燈籠』と速記者若林玵藏の功勞とを無視する事は出來ない。

且又美妙と二葉亭との文體は等しく言文一致であつても著しい語系の差異がある。美妙は本とが韻文家であつて韻語に長じ、兼ねて戯文の才が有つたから、夫だけ從來の國文型が拔け切れない處があつた。二葉亭も院本や小說に沈潛して好んで馬琴や近松の眞似をしたが、根が漢學育ちで國文よりは寧ろ漢文を喜び、且深く露西亞文に親んでゐたから、容易に國文の因襲を脫して思切つて大膽なる言文一致を試みる事が出來た。春廼舍の加筆した『浮雲』第一篇は別として、第二篇となると全然從來の文章型を無視した全く新らしい文體を創めた。二葉亭の直話に由ると、愈々行詰つて筆が動かなくなると露文で書いてから飜譯したさうだ。二葉亭の露文は學生時代からグレエ敎師が感嘆したといふ位で、後にダンチエンコが來朝して能見物に案內した時、ダン君に示す爲めの當日の能の筋書を前夜の中に露譯したといふほどの腕達者だから、露文で書いて邦譯したといふのも強ち英雄人を欺くの放言だとは思はれない。ゴンチヤローフの眞似をして出來損つたとは二葉亭が能く人に話した謙遜のやうな自得のやうな追懷であつた。『浮雲』の文章に往々多少の露臭があるのは之が爲めであらうが、そこが在來の文章型を破つた獨創の貴さである。美妙のは花やかにコツテリして故とらしい厭味のある歐文の模倣に充ちてゐた。丁度油をコテ〳〵塗つて鬘のやうに美しく結上げた束髮が如何にも日本臭いと同樣の臭味があつた。二葉亭のは根本から歐文に醇化され、極めて氣樂に日常用語を消化して全く文章離れがしてゐたが、美妙のはマダ在來の文章型を脫し切れない未成品であつた。美妙の功勞を十分認めるとしても、又創始者たる名譽は二人の中のドッチとも定められないとしても、今日の言文一致の宗とするは美妙よりは寧ろ二葉亭である。

扨て此の『浮雲』の構案であるが、一體此構案を何處から得て來たかは不明である。二葉亭は自分の性格の一部を極端に誇張したもの即ち文三を中心として兩親や周圍の人物の性格を同じく極端に延長したものを配して新舊思想の衝突を描いたのであると、極めて漠然たる話をした事があつた。大雜駁に云へばツルゲーネフ等に倣つて時代の葛藤を描かうとしたのは爭はれないが、多少なりとも之に類似した事實が作者の視聽內に有つた乎否乎は二葉亭は曾て明言しなかつた。但だ其頃の作家は自分の體驗を有の儘に書き周圍の人物をモデルとするやうな事は餘り做なかつたから、『浮雲』のモデルさへ事實は先づ無かつたらうと信ずる。

二葉亭から直接聞いた咄に、二葉亭の家の直ぐ近所にA・Nといふ其頃若い書生間に評判な新らしい女が住んでゐたが、强ひて云へば此女が「浮雲」のお勢のモデルであつたさうだ。女學生ではあるが學校へは行かないで弟と二人で世帶を持つて、國から送る學費で氣隨氣儘に暮してゐた。少とばかり洋書が讀めて多少の新らしい趣味を解し、時偶は洋服を着る當時の新らしい女で、男とばかり交際してゐた。其頃は今より一層甚だしい歐化熱の頂上に登り詰めた時代であつて、青年男女の交際が盛んに鼓舞され、本鄕神田邊の學生間に□□會、△△倶樂部などと稱する男女交際を唯一の目的とする、今なら不良扱ひされる青年の團體がイクツもあつた。Nは恁ういふ團體の何處へでも顏を出して跳廻つてゐたから、御面相は頗る振はなかつたが若い男の中には顏が賣れてゐた。當時のチヤキ〳〵の新らしい男たる硯友社の中にも此女と親しいものがあつた筈である。其上に此女は弟と二人ぎりの氣隨氣儘の暮しをしてゐて、遠慮氣兼をする者が一人もゐなかつたから、若い男は好い遊び場にして間斷なしに出入して、毎晩十二時一時ごろまでもキヤツ〳〵と騷いでゐた。小說家となるツモリになつてゐても志士氣質の失せない二葉亭は、女と交際するやうな事は決して無かつたが、ツイ眼と鼻の間だから近所の評判となつてる此女の噂を聞いてゐたので、愈々小說を立案するに方つて偶然憶付いたのが此女であつた。そこで此女をモデルとして當時の新らしい女を描かうとし、此目的の爲めに屢々此女の住居の近所を徘徊して容子を瞥見し、或る晩は軒下に忍んで障子に映る姿を見たり、戶外に洩れる聲を竊み聽いたりして、此女の態度から起居振舞、口吻までをソツクリ其儘に寫したのがお勢であるさうだ。無論外形の一部分をモデルとしたので、全體を描いたのでは無かつた。第一、此女は隨分マヅイ御面相で、お勢のやうな美人でなかつた。且お勢よりもお轉婆であり引摺であつた。其上に御面相の振はないのを自覺してゐた爲であらうが、男と交際してゐてもお勢のやうな *coquettish* な容子は少しも無かつた。假に此女と本田と取組ましたなら、お勢のやうに本田の翫弄にならないで却て本田を翫弄にしたかも知れない。恐らく此女は當時の世評嘖々たる「浮雲」を讀んだに違ひないが、自分がお勢のモデルであるとは氣が附かなかつたであらう。お政にも昇にもモデルがあると云つて、誰それであらうと揣摩する人もあるが、作者自身の口からは絕えてソンナ咄を聞かなかつた。勿論、文三が作者自身の性格の一部を極端に誇張して作爲したのが爭はれないと同樣に、作者に近接する人物の性格の一部をモデルとしたに違ひなからうが、二葉亭はお政や昇に就ては何にも咄さなかつた。

全體として評すれば「浮雲」の文章及び構作は共に未成品たるを免れない。が、「浮雲」を評するものは今より殆んど四十年前の作、二十四歲の青年の作である事を記憶せねばならない。之より以後多くの文人が續出して、代る〳〵に文壇を開拓して佛露の自然主義まで漕付けるに凡そ二十年を費してゐる。少くも「浮雲」の作者は二十年、時代に先んじた先驅者であると云はねばなるまい。單に文章の一事だけでも、今日行はれてる小說文體の基礎を築いた功勞者であると云はねばなるまい。何の道、春迺舍の「書生氣質」や硯友社連の諸作と比べて「浮雲」が一頭地を挺んづる新興文藝の第一の曙光であるは爭ふ事は出來ない。中には文學史上の著名の傑作が時代といふ考を去ると屢々價値が乏しくなる幾多の例から推して、「浮雲」をも亦時代の産物以上の價値が無いもののやうに輕視す

るものがあるが、外國の名著と比べたら或は餘り多くを價値する事が出來ないかも知れないが、日本のとなら同時代のものは扨置き、今日續々される諸作と比べても決して軒輊する處が無い。但し『浮雲』は二葉亭の思想動搖の過程に跨がつて作られてるから、第一篇と第二篇と第三篇と、各々獨立してゐて一貫する脈絡を缺いてゐる。が、各々獨立した箇々の作として見ても現代屈指の名作たるを少しも妨げない。強ひて評價すれば、第一篇はマダ未熟であり、第三篇は脂が抜けて少しくタルミがあるが、第二篇に到つては全部が緊張してゐて、一語々々が活き〳〵と生動してをる。未成品であつても明治の文學史に燦爛たる頁を作るエポック・メーキングの名著である。

四　『あひゞき』及び『めぐりあひ』

丁度同時代であつた。徳富蘇峰は、將來之日本を掲げて故山から上つて帝都の論壇に突入し、續いて『國民之友』を創刊して文名隆々天下を壓する勢ひがあつた。當時の青年は皆其風を望んで蘇峰に傾倒し、『國民之友』は殆んど天下の思想界に號令する觀があつた。二葉亭も亦蘇峰が高調した平民主義に共鳴し、背を抱つて共に語る友と思込んで、辭を低うし禮を盡して蘇峰を往訪した。が、熱烈なる天才肌の二葉亭と冷靜なる政治家氣質の蘇峰と相契合するには餘りに距離があり過ぎたから、應酬接見數回を重ねた後はイツとなく疎遠となつて了つた。が、天下の英才を集めて『國民之友』を賑はすのを片時も怠らなかつた蘇峰は此間に二葉亭のツルゲーネフの飜譯を紙面に紹介して讀書界の耳目を聳動した。『浮雲』は初め春廼舍の作として迎へられ、二葉亭の名が漸く知られて來てからも矢張春廼舍の影武者であるかのやうに思はれてゐた。二葉亭の存在が初めて確實に世間に認められたのは『浮雲』よりは寧ろ『國民之友』で紹介された飜譯の『あひゞき』であつた。

　其頃の飜譯は皆筋書であつた。大體の筋さへ通れば勝手に省略したり刪潤したり、甚だしきは全く原文を離れて梗概を祖述したものであつた。且飜譯家の多くは邦文の造詣に貧しい唯の語學者であつたから、飜譯文なるものは大抵ゴツ〳〵した漢文崩しや或は舌足らずの直譯や或は半熟の馬琴調であつて、西文の面影を偲ぶに足らないは魯か邦文としても亦讀むに堪へないものばかりだつた。此の非藝術的濫譯橫行の中に在つて、二葉亭の『あひゞき』は殆んど原作の一字一句をも等閑にしない飜譯文の新らしい模範を與へた。後年盛んに飜譯し出した頃二葉亭は『あひゞき』時代を追懷して、「あの時分はツルゲーネフを崇拜して句々皆神聖視してゐたから一字一句どころか言語の排列までも原文に違へまいと一語三禮の苦辛をした、あんな馬鹿骨折は最う出來ない、今ならドシ〳〵直してやる、」と笑つた事があつた。『あひゞき』の譯文の價値は人に由て區々の議論があらうが、苦辛慘憺は實に尋常一樣で無かつた。

　が、餘り原文に忠實であり過ぎた爲め、外國文章の句法辭法に熟する人でなくては迚も理解されない難かしいものとなつた。尤も當時のタワイない低級小說ばかり讀んでる讀者に對して一足飛びにツルゲーネフの鑑賞を要求するは豚に眞珠を投げるに等しい無謀であつて、大抵な讀者は最初の五六行から消化し切れないで降參して了つた。此の難解な譯文を平易に評釋して世間に示し、口を極めて原作と譯文との妙味を嘖々激稱したは石橋忍月であつた。當時の一般讀者が『あひゞき』の價値を略ぼ了解してツルゲーネフを知り、且二葉亭の譯文の妙を諦認したは忍月居士の批評が與かつて大に力があつた。

續いて『都之花』の發刊と共に『めぐりあひ』が五號に渉つて連載された。『あひゞき』に由てツルゲーネフの偉大と二葉亭の譯筆の價値とを確認した讀者は崑山の明珠を迎ふる如くに珍重愛惜し、細さに一字一句を翫味研究して盛んに嘖々した。が、普通讀者間には矢張豚に眞珠であつて、當時に在つて此の二篇の價値を承認したものは眞に寥々晨星であつた。が、同時に此の二篇に由て初めて崇高なる文學の意義を了解し、堅實なる新らしい文學の基礎を固め、若くは感激して新文藝の開拓を志すに至つたものは決して少くなかつた。國木田獨歩の如きは實に其の一人であつて、獨歩一派の自然主義運動は實に此の『あひゞき』と『めぐりあひ』とに發途してゐる。短い飜譯であるが啻だ飜譯界の新生面を開いたばかりでなくて、新らしい文藝の路を照すの先導ともなつた。其の文壇に與へた效果は『浮雲』よりも却て偉大であつたかも知れない。時代の先驅者としての二葉亭の名譽は今から三十餘年前にツルゲーネフを飜譯した功績だけでも十分承認しなければなるまい。

五　『浮雲』時代の失意煩悶

『浮雲』著作當時の二葉亭は覇氣鬱勃として、僅に春廼舍を友とする外は眼中人なく、文學を以てしては殆んど天下無敵の慨があつた。が、一面から見れば得意時代であつたが、其の得意といふは周圍及び社會を白眼傲睨する意氣であつて、境遇上の滿足でも又精神上の安心でも又思想上の矜恃でも無かつた。

其頃の二葉亭は生活上の必要と文藝的興味の旺盛と周圍の壓迫に對する反抗とからして文學を一生の生命とする熱火の如き意氣込があつた。が、二葉亭の文學と云ふは人生に基礎を置く文學であつて、單なる藝術一天張の享樂主義や遊蕩三昧や人情趣味の文學では無かつた。即ちビェリンスキーの文學、ゴンチャローフの文學、ドストエフスキーの文學、ツルゲーネフの文學であつて、京傳の文學、春水の文學、三馬の文學では無かつた。

然るに當時の文壇は文藝革命家をもて他も許し自らも任ずる春廼舍主人の所説ですらが根本の問題に少しも觸れてゐない修辭論であつて、人生問題の如きは全く文學と交渉しないものと思はれてゐた。例へば『浮雲』に對する世評の如き、口を揃へて嘖々稱讚したが、渠等の稱讚は皆見當違ひ或は枝葉末梢であつて、凡近卑小の材を捉へて人生の機微を掴まうとした作者の觀照的態度に對して批判を加へた者は殆んど一人も無かつた。尤も此の二葉亭の目的は失敗してゐたが、其失敗を認めて考察の足りないのを痛切に感じたのは作者自身であつて、世間一般の讀者は（文壇の審判官たる批評家でさへも）作者が油汗を流した人生の觀照には全く無關心沒交渉であつた。如何に感嘆されても稱讚されても藪睨みの感嘆や色盲的の稱讚では甘受する事が出來ないで、先づ出發の門出から不滿足を感ぜざるを得なかつた。

加之ならず、初めは覇心鬱勃として直ちに西歐大家の壘を衝かうとする意氣込であつたが、愈々着手するとなると第一に遭逢したのは文章上の困難であつた。如何に因襲の舊型を根本的に破壞するツモリであつても、日本文で書く以上は日本の在來の文章語や俗談口語の一ト通りを究めねばならなかつた。二葉亭は漢學仕込で魏叔子や壯悔堂を愛讀し、國文俗文の一ト通りにも通じてゐたが、愈々文學を生命とするとなると、夫迄は閑餘の漫讀に過ぎなかつた辭書の涉獵にヨリ一層進んで深く造詣しなければならぬから骨が折れた。然るに二葉亭の志す文學は道樂氣分の遊戯でなくして眞劒の命掛けであつたから、如何に文章を研究する爲め

でも、日本の在來の遊戯文章を眞面目になつて研究する馬鹿々々しさに堪へられなかつた。二葉亭の當時の日記に、「我れ今まで薬袋もなき小說を油汗にひたりて書き來りしが、是れよりは將た如何にすべき、我が筆は誠に稚し、若し之よりも小說を書きて世を渡らんとせば先づ文を屬する事を習はざる可からず、迷惑がらるゝを目をねぶつてこらへ、人の藏書を借りて讀まざる可からず、その書は如何なる類かといへば、粹とか通とかいひて此世を遊び暮せし人々の食はらが爲め呼吸をしようが爲めに書散らしたる有りても益なく無くとも不自由にも無きつまらぬ書物のみなり、斯る書類に眼を勞らせ肩をはらし命を拷り取られて一世を送るも豈心外ならずや」云々とあるは當時の心事を洩らした述懷であつて、二葉亭は此の文章上の困難に一ト通りならない苦辛をした。取別け自己を批判するに極めて苛酷な人の癖として十目の見る處『浮雲』が文章としても亦當時の諸作に一頭地を挺んづるにも係らず、深く自ら恥ぢ且懼れて「自分には小說は書けない、自分は文人たる資格が無い、」とまで氣を腐らせて了つた。

且又二葉亭の爲めには文學夫れ自身よりは根本の人生問題の方が重大であつた。ツマリ人生の爲めの文學といふが、抑も人生を怎うしようといふの乎。人生の歸趣とか目的とかいふものが果して有るのだらう乎。安心とか信仰とかいふものが果して得られるのだらう乎。知識で究めるのは果しが着かないといふなら、科學や哲學に何の權威がある乎。科學や哲學で究めても解らないものなら文學や宗教で怎うして滿足出來る乎。そんな疑問が推究すれば推究するほど後から〳〵と生じて終には文學其物の價値までが危つかしくなり、ツルゲーネフやドストエフスキーの後光が段々薄くなり出すと、是等の文豪に比べて遙に天分薄い日本の文人亞流――自分も其一人として――の文學三昧は小兒の飯事同樣の遊戯であつて、人生の爲めの文學などとは片腹痛い心地がして堪へられなかつた。

然るに又一方には物質上の逼迫がヒシ〳〵と日に益々加はつて來た。尤も其頃二葉亭はマダ部屋住であつて、一家の事情は二葉亭の自活又は扶養を要求するほど切迫してゐるとは岡目には見えなかつた。左に右く土藏附きの持家に住つてゐた。シカモ餘り廣くはなかつたが、木口を選んだシッカリした普請で、家財道具も小綺麗に整然と行屆いてゐた。親子三人ぎりの家族で、誰が目にも窮してゐるどころか、寧ろ氣樂さうに見えてゐたが、其頃の――恐らくは今でも――總ての人の親は、家に資産が有ると否とを問はず一家の運命希望を我が子の立身出世に繋いでるから、滯りなく無事に學校を卒業してドコへか就職して呉れなければ安心もし滿足もしなかつた。折角卒業の間際まで漕付けながら袴を脱ぐ如く暢氣に學校を罷めて了ひ、シカモ罷めて了つて後に何をする見當もなく、何にもしないで懷手をしてブラ〳〵遊んでゐると外思はれない二葉亭の態度や心持を慊らなく思ふは普通の人の親としての當然の人情であつた。昔の士族氣質から唯一の登龍門と信ずる官吏となるのを嫌つて、碌でもない小說三昧に耽るは昔者の兩親の目から見れば苦々しくて默つてゐられなかつた。

尤も『浮雲』に由て一躍大家數に入つた二葉亭の成功に就ては老親初め周圍のものは皆驚嘆もし滿足もした。丁度ドストエフスキーの『虐げられた人々』中のイユメニエフといふ老人が青年作家たる若い甥の評判高い處女作を讀んで意外な作才に驚〳〵と同一の趣きがあつた。が、文名の齎し來る收入はといふと幾許も無かつたので、感嘆も滿足も唯の一時であつた。加之ならず、二葉亭は一足飛びに大家班に入つた

に係らず、文學を職業とする氣が有るか無いか解らぬくらゐノンキであつて、文名の籍甚に乘じて文壇に躍り出すでもなく、然うかと云つて他に相當な生活の道を求める手段を講ずる氣振もなかつたから、一途に我が子の出世に希望を繋ぐ親心からは歯痒くも思ひ呆れもして不滿たらざるを得なかつた。

搗てゝ加へて一家の實際の事情は岡目で見るほど決して氣樂でなかつた。氣樂どころか寧ろ逼迫してゐた。之より二三年前、二葉亭の先人は官を罷めて聊かの恩給に衣食し、二葉亭の毎月の學費も最後の一二年は蓄財を割いて支辨しつゝ萬事の希望を二葉亭の卒業後の榮達に期してゐたのである。であるから二葉亭は卒業するとしないとに論なく、學校を罷めた其日から直ぐ一家を背負つて立たねばならない實際上の責任があつた。二葉亭の日記に由ると、父の恩給高は十一圓であつたさうだ。如何に物價の安い四十年前でも又如何に小人數でも十一圓で一家を維持するといふは容易でなかつたから、岡目から見るやうに氣樂でなかつたのは想像されるので、此窮狀を子として拱手して知らぬ振する事は出來なかつた。尤も公債もあり蓄財もあり、家屋も自分の所有であつて、正味十一圓こつきりの身代では無かつたが、割合に氣樂な官吏の生活を送つたものが多年倹約して剩した蓄財を目に／＼減らして行くは、骨を削り肉を刻むに等しい堪へ難い苦痛であるのが當然で、何かにつけて愚痴の出るのも無理では無かつた。且恰も少年時代から友達同士の山田美妙が同じ文壇に立つて名聲籍甚し、『以良都女』や『都之花』の主筆として收入も亦豐かであるのを見ては、二葉亭の生活上の煮え切らない態度が戻かしくなつて、何かにつけては『山田の武さんを御覽』と云ひ／＼した。

二葉亭が若し『山田の武さん』の眞似をするツモリなら、生活問題の如きは造作も無く解決されたのである。が、二葉亭の文學といふは滿身に力瘤を入れて大上段に振りかぶる眞劒勝負であつて、矢聲ばかりを壯んにする小手先劒術の見せ物試合でなかつたから、美妙や紅葉と共に轡を駢べて小手先きの藝頭を競爭するやうな眞似は二葉亭には出來なかつた。文學の立場は各々違つてるから、一概に美妙や紅葉の取つた道を間違つてると輕斷するではないが、二葉亭に云はしむれば生活の血の滲まない製作は文學を冒瀆する罪惡であつたのだ。『あんな器用な眞似は出來ない、自分には才が無い』と二葉亭は謙遜してゐたが、出來る出來ない、才の有る無しよりは自分の信奉するツルゲーネフやドストエフスキーやゴンチャローフの態度と違つた行き方をして生活の方便とするを内心窃に爪彈きしてゐた。其頃、二葉亭の交際した或る文人が或る雜誌に頼まれて寄稿した小說が頗る意に滿たないツマラヌ作であるを頻に慚愧しながらも、原稿料を請取ると大に滿足して直ぐ何處へか旅行しようと得意になる心のさもしさを賤んじて日記に罵つてゐる。自信の無い作を與へて報酬を請取るを罪惡の一つとしてゐた二葉亭は、之では迚も文學でパンを得る事は覺束ないと將來を懸念したばかりでなく、實は『浮雲』で多少の收入を得たをさへ恥ぢてゐた。文壇的野心の鬱勃としてゐた當初は左も右く、自分の文學的才能を危み出してからは唯一の生活手段とするつもりの文學に全く絶望して、父の渋面、母の愚痴、人生問題の紛糾疑惑、心の隅の何處かに尚だ殘つてる政治的野心の餘燼等の不平やら未練やら慚愧やら悔恨やら疑惑やらが三方四方から押寄せて來て、恰も稻麻竹葦と包圍された中に籠城する如くに拔差ならない煩悶苦吟に苛まれてゐた。

二葉亭の日記の數節を引いて、其當時の煩悶

焦慮を二葉亭自身をして語らしめよう。

『白石先生の折焚柴の記を讀みて坐ろに感ずる所あり、先生が若かりし日、人のさかしらに仕を罷めて浪人の身となりさがりたる時、老いたる父母を養ひかねて心苦しく思ふを人も哀れと見て、或は富家の女婿になれと勸められ、或は醫を學びて生業を求めよといさめらる、並々の人ならましかば、老いたる父母の貧しうくらすを看過しがたしとて志も挫け氣の衰ふるにつけ、我に便よき說をも案じ出して、かゝる折なほ獨善の道を守らば彌々道に背かんなど自らも思ひ人にも云ひて節を折るべきに、さはなくて飽くまでも道を守りて其節を渝へず、父なる人も並々の武士にはあらで却りて之を嬉しと思ひたり、アヽ此父にして此子あり、新井父子の如きは今の世には得がたし、われ顧みてうら耻かしく思ふ。』

『嗚呼我が氣力は衰へたる哉、學校を出でしより以來一日として心の霽るゝ事なければ樂しとおもひたることもなし、今の我が身の上をひし／＼と思ひつむる時、生きて斯る憂目見んより死して此苦を免るゝ方はるかに勝るべしなど思ひたるは幾度もありたれど、その頃はまだ氣力衰へたれど漸減するには到らざりしをもて、筆を執りて文を草することも出來しなり、されどこのごろは筆を執るも難くてたゞおもひくづをれてのみくらす、誠にはかなきことにこそあれ。』

『反譯叢書は本月うちに發兌せんといひしを如何にせしやらん、今に於て其事なし、此雜誌には余も賴まれて露文を反譯せしにより、其飜譯料をもて本月の費用にあてんと思ひをりしに今は空だのめとなりしか、』

『此頃は新聞紙を讀みて、人事齟齬多し、堪えず一歎を發す。』

『何某は剛毅なり薄志弱行の徒は慚死すべしなどいふ所に到れば何となく我を謗りたるやうにおもはれて、さまざまに言譯めきたる事を思ふなり、かくまでに零落したる乎。』

當時の二葉亭の煩悶は此數節に由るも明かであらう。進んで小說家たる覺悟も勇氣もなく、左ればとて退いて欲するまゝに靜かに讀書硏究するをも許されない境涯であつた。二葉亭の日記に、『公債を買ひたい買ひたいといふゆゑ周旋していよ／＼となるといやになり、借家を買ひたい買ひたいといふゆゑ周旋していよ／＼となると之もまた二の足を踏む人は周旋人が迷惑すとかやいひたり、行き事をいひたるものなり』とあるは當時の二葉亭が右すべきや左すべきやと迷つた心狀を自ら罵つた冷嘲であらう。二葉亭は人のする事が何でも面白くなつて常に氣が變るを到底事を成すに堪へざる性格として同じ日記中に自ら嘆息してゐるが、恁ういふ性格も多少は手傳つたのであらうが、當時の境遇上處世の方向に迷つたのは無理も無かつた。

其間に試みたのがツルゲーネフの「あひゞき」の飜譯であつた。が、此飜譯は前にビェリンスキーを飜譯したと同じく、自ら傾倒するツルゲーネフを紹介して公衆に興味を頒たうとしたので、原稿料を取る爲めでは無かつた。勿論、民友社は報酬を支拂つたが其報酬は何ほどのものでも無いから生活を補ふ資にはならなかつた。

今の女子學院の前身の櫻井女學校に聘されて文學を講述したのも此時代であつた。ツイ先頃歐羅巴から歸朝する早々腦栓塞で急死した著名の英語學者長谷川喜多子女史や女子學院の學監三谷民子女史はタシカ當時の聽講生であつたと思ふ。が、ビェリンスキーやドブロリユーボフを祖述する二葉亭の文學論は當時の女學生の耳には(恐らくは今の女學生にも)餘りに高遠

深邃であつて、滿堂殆んど耳を傾くるものが一人も無いのに失望して幾何もなく罷めた。が、之も亦生活の爲めではなかつたので、自分の信奉する說を一人にだも多く――うら若い婦人に對してすらも――講演して新らしい思想を鼓吹する機會を得たのを喜んで應じたのであるから、此の窮乏の間に處りながら初めから報酬を辭して受けなかつた。

六　『浮雲』第三篇及び官報局出仕

『浮雲』第三篇の發表されたのは之より少し後であつた。此の三篇を書いてゐた時は恰も胸中の悶々に堪へなくて努力も功名も消えて了つた眞最中であつた。日記に、『余は今日に到るまで小說家にて世を送る望みなしといひつゝも倘ほ小說家とならんことをのみつとめり、他より見ればをかしく見ゆべし』とあるは毎月書肆から若干宛貢給されてゐた義理合上餘儀なくされて澁り勝なる筆を呵しつゝ據ろなしに机に向つてゐた消息を洩らしたのであらう。

二葉亭は何をするにも眞劍勝負であつた。褌一つ鉢卷に股立取つて、滿身に力瘤を入れつゝ起上つて、右からも左からも打込む隙が無い身構へをしてから、曳やッと氣合を掛けて打込む命掛けの勝負であつた。追取刀でオイ來たと起上る小器用な才に乏しかつた。「間に合はせ」とか「好い加減」とかいふ事が嫌ひであつたし、又出來ない人であつた。談話するにさへ一言一句を考へ〳〵腹の底から捻出し、口先きでお上手や胡魔化しをいふ事が決して出來なかつた。其故、文藝上の興味が冷め、生活上の苦勞に苛まれてゐても一夜漬けの書流しで好い加減に鳧をつけて肩を拔いて了ふといふ事は出來ないで、イヤ〳〵ながらも矢張同じ苦辛を重ねてゐた。が、實は最う小說どころで無かつた。其本の人生の大問題が頭の中で渦を巻いてゐた。身に迫る生活上の苦勞がヒシ〳〵と押寄せて來た。惰力で筆を執つてゐてもイツマデ經つても油が乘つて來なかつた。イクラ悶いても焦つても少しも緊張して來なかつた。眞劍勝負でなければ何にも出來ない人が怎うしても眞劍勝負の意氣込になれなかつた。

『浮雲』第三篇は作者の日記の端に書留めた腹案に由ると、お勢の墮落と文三の絕望とに終るのだが、發表されたものを見ると、腹案の半ばにも達しないで中途から尻切とんぼに打切られてをる。恐らくはマダ發表するを欲しない未定稿であつたらうと思ふ。尤も此の悶々の場合に之より以上に玉成する事は迚も出來なかつたらう。且、二葉亭の性質として決して好い加減に書擲つたものではないだらうが、三方四方の不平不滿が一時に殺倒する心的葛藤に忙殺されてゐては、虛心坦懷に沈着いて推敲鍛鍊してゐられないのが當然であつた。恐らく書肆に對する義理合上據ろなしに自分でも滿足しない未成の原稿をイヤ〳〵ながら引渡したに違ひないのは前後の事情から明瞭に推斷される。

二葉亭の日記に由ると、第三篇の發表された『都之花』を請取つた時は手がブル〳〵慄へて、歩きながら讀んで行く中に忽ち顏色が變つて、『之ほど拙いとは思はなかつた、印刷して見ると我ながら拙くて讀むに堪へない』と、讀終つた時は心が早鐘を撞く如くワク〳〵して容易に沈着いてゐられなかつたとある。

成程、前にも云つた通り、第三篇は油の十分乘つた第二篇に比べると全部に弛みがあつて氣が拔けてをる。が、同じ時代の他の作家の作と比べて決して見劣りしなかつたが、己れの瑕瑾を感ずるに餘りに鋭敏な作者は、丁度神經過敏家が卯の毛で突いたほどの負傷でも血を見ると直ぐ氣絕するやうに、自分の作が意に滿たな

いと坐ても起つても居られなかつたらしい。聰明に過ぐるものは自信を缺くと昔から云ふが、二葉亭の如きは其の適切な一例であつた。自分を局外に置いて見る時は群小作家皆豆粒よりも小さかつたが、自分を其中の一人として比較する時は豆粒よりも小さく思ふ人よりも更に一層自分が小さく思はれて堪へられなかつたやうだ。其時の日記にも、「今までは某々らの作る小說は拙くして讀むにたへずと思ひつるが、余の作に比ぶれば彼らの作は遙に勝れり、余は元來小說家にも非ず、又小說家とならんとも思はず、」云々とあるやうに、之より以前から文學に絶望して衣食の道を他に求めるべく考へてゐたのが此の不快な絶望に愈々益々沮喪して斷然文學を思切るべく決心した。

だが、世間は作者自身が失望する如くに此の第三篇にも失望しないで、文人は交を求め書肆は原稿を乞うて益々止まなかつたので、文學を思切つた二葉亭は是等の文人交際や本屋の應接に堪へられなかつた。日記の一節に曰く、「一吉岡書店よりまた新著百種をおくりこす、是は第三卷なり、から發刊の都度々々におくりこすは予にも筆を執らせんとの下心あればなるべし、夫を知りつゝ取り置くは愚なり、辭みやらんとは思へども流石に打付けに左云はんも何となく氣の毒にてそのまゝに打過ごす、余はかほどまで果斷なき乎、歎ず可き事の第一なり、」と。又曰く、「書肆某來りて四方山の物語をす、余はかゝる射利の徒と交るだも心苦しけれども之も交際と思ひ返してよきほどにあしらへり、若し心に任せたる世ならましかば彼等如き輩を謝して明窓淨几の下に靜かに書を讀むべきを、」と。二葉亭が全く文壇から遠ざからうとして苦悶してゐたは之を見ても明かである。

此決心は第三篇の執筆中から萌してゐた。飽くまでも自分の天分を否定し、文學では迚も生活する能力は無いものと斷念め、生中天分の乏しいのを知りつゝも文學三昧に沈湎するは文學を冒瀆する罪惡であると思詰め、何とかして他に生活の道を求めて學問才藝を潰しに投賣しても一家の經濟を背負つて立たうと覺悟した。が、此覺悟はありながら、一面には極めて狷介で人に下るを好まないと同時に、一面には人に對して頗る臆病であつて、傳を求めて權門貴戚に伺候するは魯か、先輩朋友の間をすらも奔走して賴んで廻るやうな小利口な眞似は生得出來得なかつた。怎うにかしなければならないと思ひつゝも怎うにもする事が出來ないで獨りで窘窮煩悶してゐた。此苦境を見るに見兼ねて、若し仕官する希望でもあるならと片肌抜いで吳れたのが語學校の舊師の古川常一郎であつた。二葉亭は此間の消息を日記に洩らして、「官吏は元來心に染まぬが今の場合聊かなりとも俸錢を得て一家を支へる事が出來るなら幸ひであると古川に賴んで、「扨てそのあとで、」何となくうら恥かしきやうに心落ちゐず。白石先生の事など憶出せば背に冷汗を流す、」と書いてをる。二葉亭の自卑自屈を餘儀なくされる窘窮煩悶の狀が此の二三行の文字に見えるやうである。

が、結局古川の斡旋で、古川部下の飜譯官として官報局に出仕したのが明治二十二年の夏であつて、之から以後の數年は生活の保障に漸く安心して暫らく官途に韜晦し、文壇からは全く緣を絶つて讀書に沒頭する事が出來た。

七　官報局及び雌伏時代

露語の兩川・高橋時代の官報局・精神心理の研究・罪惡心理と下層研究・最初の家庭生活の失敗・片耳・官報局を去る

二葉亭の仕官を說く前に先づ其恩師古川常一郎を語らねばならない。古川は今から十四五年前に不遇の中に易簀して了つたが、今でも猶ほ健在である筈の市川文吉と聯んで露語學界の二

大先輩であつた。此の兩川に二葉亭即ち長谷川を加へて露語の三川と稱されてをる。不思議な事には兩川とも功名心が薄く、各々數年露國に留學して歸朝した後、屢々先進の大官から重要の椅子を薦められても決して肯んじないで、一は終生微官に安んじ、一は早くから仕官を辭して、功名榮達を白眼冷笑してゐた。殊に古川は留學前は大隈侯の書生であつて、義弟西源四郎は伊藤公の知遇を受けて終に公の駙馬となつた淺からぬ緣故があつたから、若し些かでも野心が有つたらドンナ方面にでも活躍出來たのである。が、富貴顯榮を見る土芥に等しく、舊外國語學校廢止後は官報局の一屬僚を甘んじて世の榮達を冷笑してゐた。市川文吉は多少の資産があつたからでもあらうが、早くから官途を退隱して釣道樂に韜晦してゐた。二葉亭は此の兩川の薰陶を受けたが、就中古川に親近して古川門下の顏淵子路を任じてゐた。其の性格の一部が古川に由て作られたのは爭はれない。

當時の官報局は頗る異彩があつた。局長が官界の逸民たる高橋健三で、飜譯課長が學界の隱者たる濱田健次郎、其下に古川常一郎、陸實等、何れも聞ゆる曲者が顏を列べ、而して表玄關の受附には明治の初年に海外旅行免狀を二番目に請取つて露國の膽脊嶺系を縱斷した大旅行家の嵯峨壽安が控へてゐた。揃ひも揃つて氣骨稜々たる不遇の高材逸足の集合であつて、大隈侯等の維新の當時の築地の梁山泊は知らず、吏臭紛々たる明治の官界史に在つては恐らく當時の官報局ぐらゐ自由の空氣の横流してゐたは蓋し類を絶してゐるだらう

高橋健三は官報局の局長室に坐してゐる時でも從五位勳何等の局長閣下でなくて一個の處士自恃庵主人であつた。濱田は簡撲質素の學究、古川は卓落不羈の逸民、陸は狷介氣を吐く野客であつた。而して玄關番は高田屋嘉兵衞、幸太夫に續いての露國探險者たる一代の奇傑兒壽安老人であつた。局長と云ひ課長と云ひ屬官と云ふは職員錄の紙の上の空名であつて、堂々たる公衙は恰も自大相下らざる書生放談の下宿屋の如く、局長閣下の左右一人として吏臭あるものはなく、瑣瑣なる吏務を執るよりは寧ろ詩を品し畫を評し道德を說き政治を談じ、大は世界の形勢より小は折花攀柳の韻事まで高談放論珍說奇議を鬪はすに日も足らずであつた。

二葉亭は此中に投じた。虛文虛禮便佞諂諛を賤しとして仕官するを欲しなかつた二葉亭も此の意外なる自由の空氣に滿足して、局長閣下と盛んに人生問題を論じて大得意であつた。左に右く此間は衣食の安定を得たので、思想を追究する恰も餓うるが如き二葉亭は安心して盛んに讀書に沒頭した。殊にダーウヰン、スペンサー等の英國進化論を專ら研究したが、本來ヘーゲルの流れを汲む露國の思想に養はれてゐたから、到底是等の唯物論だけでは滿足出來ないで、終にコントに走つて爰に初めて一道の曙光に接する感があつた。恐らく二葉亭の思想の根本基礎を作つて終生を支配したのはコントのポジティヴヰズムであつたらう。

此時代の愛讀書であつて、二葉亭の思想を豐かにし根柢を固くしたのはモーヅレーの著述であつた。殊に其の Physiology of Mind は最も熱心に反覆翫味して巨細に細究した。此時分の二葉亭の議論の最後の審判官は何時でもモーヅレーであつて、何かにつけてはモーヅレーを引合に出した。『浮雲』に二箇處まで見えるサリーやベインも愛讀書であつて、サリーの所說は屢々議論の典據となつたが、殊に傾倒してゐたのはモーヅレーの研究法であつた。

が、二葉亭は如何なる場合にも批評家であ

つた。科學を除いては總ての研究は空理であると云ひつゝも科學にも亦不滿足であつて、科學に偏するスペンサーの哲學の如きも或る程度以上は決しに推服してゐなかつた。日常に曰く、『科學となると全然無識だから、勞ひ兜を脱いで降參しなけりやならぬが、例へば２２が４といふは欺くべからざる確實の數理であつても、科學者が天體を觀測するに方つて毫釐の違算が屢々何千萬億の錯誤を來すと同樣に、眼前の研究にも亦同じ誤算が無いとは限らない。數其物は確實であつても數を算出する運算の方式は必ずしも正しいとは信じられない。』と。此理由からして科學者の說を有力な參考としてゐても或る程度以上は矢張餘り信仰しなかつた。『科學者といふものは枝振や花ばかりを氣にして根を枯らすを忘れる素人植木屋のやうなものだ、』と云つてゐた。

吳秀三博士の『精神啓微』や『精神病者の書態』を愛讀して、親しく吳博士を訪うて蘊蓄を叩いたのは矢張其頃であつた。續いてロンブロゾ一派の著書を搜つて、白癡敎育、感化事業、刑事人類學等に興味を持ち、日本の現時の敎育家や宗敎家が是等の科學的知識を缺く爲め渠等の手に成る救濟事業が往々無用の徒勞に終るを遺憾とし、自ら感化院を創めて不良少年の陶冶や罪人の矯正をしようといふ計畫を立てた事もあつた。

無論書齋の空想で、實行する意があつたとも思はれ無かつたが、計畫は頗る科學的であつた。當時の二葉亭の說を簡單に撮摘むと、善と云ひ惡と云ふは精神の健全不健全の謂で、所謂敗德者、墮落者、惡人、罪人等は皆精神の缺陷を有する病人である、其の根本の病因を醫さないで訓誡、懲罰、刑辟を加へても何の效が有る筈が無い。今日の感化院が科學の敎養の無い道學先生に經營され、今日の監獄が牛頭馬頭に等しい無智なる司獄官に一任される間は百年河淸を待つも惡人や罪人の根を絶やす事は決して出來ない。夫よりも先づ一種の特殊精神病院を建設して所謂不良少年や罪人を收容し、最新科學の研究を應用して渠等の感覺缺如や精神缺陷を精査し、根本の病因を究めて之を醫療するのが科學的でもあり且有效でもある。尤も今日の科學はマダ研究が足りないから、罪人や不良少年に對する根本的精神療法もマダ十分に攻究されてゐないが、先づ一つの實驗所を作るツモリで科學的手段を應用する感化院や監獄を設置し、恰も病人に對する醫者の態度で渠等の犯罪や惡癖に對する對症療法を研究するが社會政策上最も急務である。之までの所謂哲學や宗敎や道德や法律は皆此の根本の人間の疾患に立到らない空理空文である。若し此の精神的缺陷に對する心理療法が完成したなら古今の聖賢の敎訓は總て皆廢紙となつて了ふと云ふのが其頃の二葉亭の說であつた。

此說はモーヅレーやロンブロゾから得たので、二葉亭自身の創見では無かつた。且近世心理學の片端をだも嚙つてるものなら誰でも心得てる格別目新らしくも無い說であるし、今では此一派の學說は古臭くなつてる。が、二葉亭は總て此見地から人を見てゐた。例へば下層社會の低劣な品性の如きも敎育の不備よりは寧ろ精神缺陷に歸し、一時好んで下層社會に出入するやライフの研究者を任ずると共に下層社會に共通する惡俗汚習の病因たる精神缺陷を救ふの敎師を自任し、細さに下級の生活狀態を究めて種々の自己流の精神醫療の方法を案出して試みた。尤も此試みは大抵失敗して、傍觀者から頗る滑稽に思はれた事もあつたが、當人自身は一生懸命で、此失敗を來す所以は畢竟科學の素養を缺くから應病與藥の適切な方法を案出する事が出來ないのだと考へて益々研究に

深入した。一時は其の手段の一つとしての禪の研究を思ひ附き、『禪門法語集』や『白隱全集』を頻りに精讀し、禪宗の雜誌まで購讀し、熱心鋭意して禪の工夫に耽つてゐた。が、營養療法や靜坐法を研究する意で千家の茶事を學ぶに等しい二葉亭の態度では禪に滿足出來る筈が無いのが當然で、結局禪には全く失望した。禪は思想上のキューリオ、精神上の催眠劑であつて、今日の紛糾錯綜入亂れた文化の葛藤を解決し制馭する威力のないものであると云ふのが二葉亭の禪に對する斷案で、何かの茶喞の序に一休は賣僧、白隱は落語家、桃水和尚はモーヅレーの研究資料だと茶かした事があつた。

結局書齋の研究ばかりでは滿足出來ないで、實學者の畑水練は何の役にも立たぬからと、實際に人事の紛糾に觸れて人生を味はうとし、此好奇心に煽られて屢々社會の暗黑面に出入した。役所に遠いのを假託に、猿樂町の親の家を離れて四谷の津の守の女の寫眞屋の二階に下宿した事もあつた。神田の皆川町の桶屋の二階に同居した事もあつた。奇妙な風體をして――例へば洋服の上に羽織を引掛けて肩から瓢箪を提げるといふやうな變挺な扮裝をして田舍の達磨茶屋を遊び廻つたり、印袢纏に彌藏をきめ込んで職人の仲間へ入つて見たり、然らかと思ふと洋服に高帽子で居酒屋に飛込んで見たり、垢染みた綿服の尻からげか何かで立派な料理屋へ澄まして入つて見たり、大袈裟に威張散らして一文も祝儀をやらなかつたり、態と思切つて吝つたれた眞似をした擧句に過分な茶代を氣張つて見たり、シンネリムッツリと佛頂面をして置いて急に燥ぎ出して騒いで見たり、故更に桁を外れた馬鹿々々しい種々雜多な眞似をして一々其經驗を味つて見て、之が人生だよと喜んでゐた。

殊に其頃は好んで下層社會に出入し、旅行をする時も立派な旅館よりは商人宿や達磨茶屋に泊つたり、東京にゐても居酒屋や屋臺店へ飛込んで八さん熊さんと列んで醤油樽に腰を掛けて酒盃の獻酬をしたりして、人間の美しい天眞はお化粧をして綾羅に包まれてる高等社會には決して現はれないで、垢面襤褸の下層者に却て眞のヒューマニチイを見る事が出來ると云つてゐた。此の斷案の中に眞理が無い事は無いが、此の偏つた下層興味に屢々誤まられて、例へば婦人を觀察するに方つても、英語の出來るお嬢さんや女學校出の若い奥さんは人形同樣で何の役にも立たないと頭から蔑しつけ、下等女の阿婆摺を活動力に富んでると感服したり、貧乏人の娘が汚い扮裝をして怯めず憶せず平氣な顔をしてゐるのを虚榮に侔はれない天眞爛漫と解釋したり、飛んでもない見當違ひをする事が度々で有つた。

同じ見當違ひからして罪人や墮落漢や敗徳者に極端に同情し、時としては同情を通り越して矢鱈と讃美し、宛も渠等の總てが皆ショーペンハワーやニーチェのやうな天才であつて、社會の壓迫に餘儀なくされ、或は求めて反抗して誤まつて岐路に奔つた氣の毒な犠牲であるやうに考へてゐた。少くも渠等が世間の道德に背いたには疚しくも恥かしくもない立派な哲學的根據があるやうに思つてゐた。此考察も滿更見當違ひでなく、世には確かに二葉亭の信ずるやうな據ろない境遇の犠牲となつて墮落した天才や、立派な主張を持つてる敗德者も有るには有るが、二葉亭は一切の罪人や墮落者の罪惡を強ひて肯定する氣味合があつた。殊に貧民に對しては異常な同感を拂つて、若し人間から學問技藝等のお化粧を奪つて裸一貫の露出しとしたなら、貧乏人の人格の方が遙かに高等社會に勝つてゐると常に云つてゐた。此説も亦必ずしも見當違ひでなく、無知文盲なる貧民階級に往々

縉紳貴族に勝るの立派な人格者を見出す事も稀には有るが二葉亭は强ひてイリュージョンを作つて總ての貧民を理想化して見てゐた。

此見地からして二葉亭は無智なる腹掛股引の職人を紳士と見て交際し、白粉を塗つた淪落の女を貴夫人同樣に待遇し、渠等に恩惠を施しつつ道德を說き、渠等を罪惡の淵から救うて眞人たらしむべく種々の手段を講じた。が、實行に就ては全く失敗した。晚年或る時、此の時代の誤解や失敗の經驗を語つて曰く、『あの時代、無暗と下層社會が戀しかつたのは、矢張露國の小說に誤まられたのだ。スラヴ人は元來空想に耽る國民性だから、無教育者の中にも意外な推理力や想像力を蓄へて人生をフキロソファイズするものがある。露西亞は階級制度の嚴重な國だから立派な學問權識があつても下層に生れたものは終生下層に沈淪してをらねばならない。其結果が意外な根柢ある革命的煽動が下層社會に始まつたり、美しいヒューマニチイが貧民の間に發現されたりする。露國の小說には此間の消息が屢々洩らされて下層社會の爲めに氣を吐いてゐる。恁ういふ小說に讀耽つたもんだから自然下層社會に興味を持つやうになつたが、日本の下層社會は根本から駄目だ。精神の缺乏が物質の不足以上だから、何を說いても空々寂々で少しも理解しない。倫理も哲學もあつたもんぢや無い、根柢からして腐敗し切つてゐて到底救ふ可からずだ――』と日本の下級者の無智無恥に愛想を盡かしてゐた。恁ういふ見當違ひをしたのはツマリ理想負けがしたので、二葉亭の面目は恁ういふ失敗に却て躍如してをる。

官報局に出仕する間もなく二葉亭は家庭を作つて兩親と別居した。初めは仲猿樂町に新居を構へたが、其後眞砂町、皆川町、飯田町、東片町と屢々轉居した。皆川町から飯田町時代は兒供が二人となつた上に細君(先妻)の妹を二人までも引取り、兩親にも仕送つてゐたから、家計は常に不足勝ちであつた。其上に二葉亭は、ドチラかといふと浪費家であつて、衣服や道具には無頓着であつたが食物には可成な贅澤をした。加之ならず、其頃の先妻は家政を料理する才が缺けてゐて、二人が二人とも揃つて經濟に無茶であつたから、左らぬだに不足勝ちの家計が一層紊亂して、內證は岡目に解らぬほどの不如意を極めてゐた。

且加ふるに夫婦の間が始終折合はないで、沈默の衝突が度々繰返された。其間の紛糾んだ事情は餘り深く立入る必要は無いが、左に右く夫妻の身分教養が著しく懸隔して、互に相理解し相融合するには餘りに距離があり過ぎたのが原因であつた。公平に見たら二葉亭の方が暴君で、細君の方は極めて柔順な奴隷であつたらうが、夫婦の間が暴君と奴隷との關係では互に滿足出來る筈がないから、常も利刃を揮つて泥土を斬るに等しい何等の手答への無い葛藤を何年か續けた後に、二葉亭は終に力負け根負けがして草臥れて了つた。二葉亭の爲めにも勿論不幸であつたが、細君の方にも同情すべき氣の毒な事情があつた。到頭最後の破綻となつて、善後の處分をする爲めに二葉亭は金を作らねばならなくなつた。

其時分、文壇の機運は愈々益々爛熟し、紅露は相對峙して互に覇を稱し、鷗外は千朶山房に群賢を集めて獅子吼し、逍遙は門下の才俊を率ゐて早稻田に威武を張り、樗牛は新たに起つて旗幟を振ひ、四方の英才俊髦一時に崛起して雄を競うてゐた。二葉亭は、浮雲以後全く韜晦して此の文壇の氣運を白眼冷視し、一時莫逆を結んだ逍遙とも音信を絕してゐたが、丁度其頃より少し以前、逍遙と二葉亭とは偶然私の家で邂逅して久闊を敍し、夫から再び往來する

やうになつてゐた。其頃「早稻田文學」を根城として專ら新劇の鼓吹に腐心してゐた逍遙は頻りに二葉亭の再起を促しつゝあつたが、折も折、時なる哉、二葉亭は此の一家の葛藤の善後處分を逍遙に謀つた結果、終に再び筆を操るべく餘儀なくされたのがツルゲーネフの「アーシャ」即ち「片戀」の飜譯であつた。

其時は明治二十九年の十二月、即ち「浮雲」第三篇發表後八年目であつた。世間は恰も暫らく消息不明であつた遠征將軍が萬里の旅から凱旋したのを迎へるやうに歡呼した。が、二葉亭自身は一時の經濟上の必要の爲め據ろなく筆を操つたので、再び文壇に歸るツモリは毫しも無かつた。文學に對する態度も亦隨つて以前とは全く違つて、一生の使命とするといふやうな意氣込も理想や抱負も全で失くなつてゐた。以前は重く感じた責任をも感じなくなつて、「自分は文人で無い、」と文學とは絕緣した意でゐたから、ツルゲーネフを譯したのも唯の一時の融通の爲めの據ろないドラッジェリーで、官報局で外字新聞を飜譯した時と同じ心持であつた。尤も二葉亭は外字新聞を飜譯するにも矢張相當な苦辛をした。如何にドラッジェリーのツモリでもツルゲーネフを外字新聞並に片附ける事は二葉亭の性分として出來得なかつた。が、其心持は以前と違つて遙かに氣樂であつた。夫ゆゑ「片戀」一冊ぎりで再び彗星の如く隱れて了ふ意であつたが、財政上の必要が「片戀」一冊の原稿料では充たすに足りなかつたので、恰も凱旋將軍を迎へる如くに爭ひ集まる書肆の要求を無下に斥ける事も出來なかつた。

折から恰も官報局長は更任して、卓犖不羈なる處士高橋自恃庵は去つて、「晨亭門下の叔孫通たる奥田義人が代つて其椅子に坐した。奥田は東京市の名市長として最後の光榮を棺に飾つたが、本來官僚の寵兒で、禮儀三千威儀三百の官人氣質の權化であつたから、豪放洒脫な官界の逸人高橋自恃庵が作つた放縱自由な空氣は忽ち一掃されて吏臭紛々たる官場と化して了つた。陸や濱田は早くも去つて古川一人が自恃庵の殘壘に據つてゐたが、區々たる官僚の規矩を守るを屑くしないスラヴの變形たる老書生が官人氣質の小叔孫通と容れる筈が無いから、暫らく無言の睨み合ひをした後終に引退して了つた。二葉亭は本來狷介不羈なる性質として迎合屈從を一要件とする俗吏を甘んじてゐられないのが當然であつて、八年の長い間を官報局吏として辛抱してゐたのは、上に自由なる高橋健三を戴いて、恩師古川の下に吏務に服してゐたからであつた。高橋が去り古川が罷める以上はイツマデ腰辨を甘んずる義理も興味も無いので、古川が罷めると間もなく自分も辭職して了つた。二葉亭の一生中、其位置に滿足して矻々として職務を樂んでゐたは官報局の雌伏時代のみであつた。

八　放浪時代から語學校教授

原稿生活・實業界・海軍編修・語學校教授

官報局を罷めてから暫らく放浪してゐた。其間に海軍の編修書記ともなり陸軍の囑託教師ともなつたが、ドレも之も一時の腰掛であつて、初めから其椅子に安んずる意は少しも無かつたのだ。ツルゲーネフの「ルージン」を初めゴーゴリやガルシンの短篇の飜譯にクツクツとなつて「新小說」や「太陽」や「文藝俱樂部」に寄稿したのは其時代であつた。

が、文壇的活動は元來本志でなく、一時の方便として餘儀なくされたのだから、其日々々を糊口する外には何の野心が無かつた。「浮雲」第三篇が發表された「都之花」を請取つた時は手が慄へたといふほどの神經質にも似合はず、此時代は文壇的には無關心であつて世間の毀譽褒

貶は全く風馬牛であつた。同じ飜譯をするにも『あひゞき』や『めぐりあひ』時代と違つて餘り原文には拘束されないで、自由氣儘にグン〳〵譯し、『昔のやうな糞正直な所爲はしない、拙い處はドン〳〵直してやる、』と、屢々豪語してゐた。が、興に乘じた氣焰の飛沫で豪さうな事を云つても、根が細心周密な神經質の二葉亭には勝手に原文を抜かしたり變へたりするやうな不誠實な所爲は決して出來ないので、『無暗と譯しなぐるんだ、』と云ひつゝも世間の尋常飜譯と比べては矢張忠實に原文に從つてゐた。

が、イクラ譯しなぐるツモリでゐても、世間の賃譯をするもののやうな無責任にはなれないのが二葉亭の性分であつた。例へば『浮草』の如き丁度關節炎を患ひて足腰が起たないで臥てゐた最中で、病床に腹這になつて、病苦と鬪ひながらポツ〳〵譯し、三十枚四十枚と譯し了ると直ぐ讀返しもしないで金に換へたものであるが、それでも二葉亭の飜譯としては可成不手際であつても、英譯本と對照するに矢張擅に原文を抜いたり變へたりした箇處は少しも無かつた。イクラ譯しなぐる意でも二葉亭には譯しなぐる事は出來なかつた。

二葉亭が官報局を罷めた直接の原因は局長の更任に續いて恩師古川の理由なき罷免に對する不滿であつたが、其以外に何時かは俗吏の圈内を脱して自由の天地に翺翔しようとする豫ての志望が幇助つてゐた。本と〳〵二葉亭は軍事であれ外交であれ、左に右く何でもあらうとも東亞の舞臺に立つて活動したいのが夙昔の志であつた。軍人たらんと欲して失敗し、外交家たらんと願うて亦蹉躓し、據ろなしに一時横道に外れて文學三昧に遊んでゐたが、夙昔の志望は決して消磨したのでは無かつた。官報局に在職中、哲學や精神生理に頻りに興味を持つて研究してゐたが、東亞の國際關係や產業等の調査は之が爲めに少しも怠らないで繼續してゐたので、一度は東亞の舞臺に躍り出して一ト芝居打たうとする念は片時も絶えなかつた。官報局を罷めたのは偶然であるが、退職すると同時に此野心が俄に活火山の如く燃上つて來た。

然るに野心を充たす爲めの計畫は浮んで來ても、何をするにも先立つ金を作るは決して容易で無かつた。一家の葛藤を處理する爲めの聊かの金ですらが筆の稼ぎでは手取早く調達し難いのを沁々と感じた渠は、『文學は迚も駄目だ。金儲け、金儲け！』と心の底から叫ぶやうになつた。加之ならず、語學校時代の友人の多くは實業界に投じ、中には立派に成功して財界の頭株に數へられてるものもあるので、折に觸れて渠等と邂逅して渠等の辣手を振ふ經營振を目のあたりに見る度毎に自分の經濟的手腕の實は餘り賴りにならないのを内心危ッかしく思ひながらも髀肉に堪へられなかつた。其度毎に獨語して『金儲け、金儲け！』と呟きつゝ金儲け專門の實業界に乘出さうとした。

其必要からして、官報局を罷めた後の二葉亭は俄に邊幅を修るやうになつた。一體衣服には少しも頓着しない方で、襤褸の古ぼけた銘仙にメレンスの兵兒帶で何處へでも押掛けたのが、俄に美服を新調して着飾り出した。『之が資本だ、コンナ服裝をしないと相手になつて呉れない、』と常綺羅で押出し、學校以來疎縁となつた同窓の實業家連と盛んに交際し始めて、隨分待合入りまでもして渠等と提携する金儲けの機會を覗つてゐた。が、二葉亭の方は心の底から眞劍であつても、對手の方は少しもマジメに請取つて呉れなかつた。

『右の手に算盤を持つて、左の手に劍を把り、背ろの壁に東亞圖を掛けて、傍ろには刑事人類學を入れて置く、之でなければ不可ん、』などと頻

りに空想を談じてゐた。尤も座興の戲れで、如何に二葉亭が世間に暗くても之ほど空想的では決して無かつた。が、恁ういふ座興の戲れが折角實業界へ飛込まうとするマジメな希望をどれほど妨げたかは解らなかつた。且又、之ほど空想的で無かつたにしろ、極めて平凡な常識一點張の實業家氣質から見れば二葉亭の實業論が非常な空想を加味してゐたのは爭はれなかつた。第一、實業界の金儲けは金を儲ける爲めの金儲けであつて、金を以て始まり金を以て終るが、二葉亭の金儲けは何時でも人道又は國家の背景を背負つてゐるのが不用意の座談の中にも現はれてゐたから、實業界に飛込むマジメな志はあつても對手になつて機會を與へて呉れるものは一人も無かつた。

加之ならず、一方には生活上據ろなしに續々飜譯し、心にも無い文學上の談話が度々雜誌に載せられて文名が日に益々高くなるので實業界の友人からは愈々文人扱ひされ、マジメに實業談を試みても一笑に附されて了つた。「小說なんぞを書いてちやア迚も駄目だ、全で對手にして呉れない、」と度々不平を洩らしてゐた。

二葉亭を海軍編修書記に推薦したは矢張舊友の一人たる鈴木某（其頃海軍主計大監）の幹旋であつた。鈴木は極めて粗放な軍人肌であつて、二葉亭の人物や抱負を理解もしなければ理解しようとも思はず、但だ二葉亭が浪人してゐるのを氣の毒がつて幹旋して呉れたので、「丁度君には適當の位置だ。恁うして辛抱してゐれば追々高等官になれる、」と大に兄貴振を發揮して二葉亭に辛抱を勸告した。

「親切な好い男だが、高等官になれば誰でも滿足するものと思つてる、」と二葉亭は苦り切つてゐた。（鈴木は日露戰爭後は海軍を引退して實業界の諸方面に頭を突込んでゐたが、位階勳等を持つてる軍人だから、置き物に祭り上げられるだけで一向花々しい成功もしなかつたやうだ。今はドウしてゐるかサッパリ消息を聞かない。）

語學校の教授となつたのは夫から間もなく、明治三十二年の九月であつた。高等官の教授を榮としたわけでは無いが、露語科の主任たる恩師古川の推擧を滿足して喜んで就任した。古川は其後幾何もなく病氣の爲め辭職したので、二葉亭は代つて主任の椅子に坐した。

教師としての二葉亭は極めて丁寧親切であつて、諸生の頭に徹底するまで反覆教授して少しも倦まなかつた。だが、夫よりも猶ほヨリ多く諸生を心服さしたのは二葉亭の鼓吹した學風であつた。凡そ語學は先づ民族の研究から始めなければならない必要と、日露の地理的關係から生ずる露語學者の特殊の使命といふやうな事を語學を教授する傍ら常に怠らず力說し、尋常語學の學習以上に露語學者としての特殊の氣風を作るに少からず腐心した。同時に露語に交渉する各會社各事業から浦鹽の商人にまで連絡をつけて卒業生の生活の便宜まで心配した。二葉亭が語學校に在任したは僅かに三年であつたが、其人格は遍く露語學生を薰化して、先進市川及び古川と聯んで露語の三川と仰がれるまで悅服された。日露戰爭に參加して拔群の功績を擧げた露語通譯官の多くは二葉亭の薰陶を受けたものであつた。

九　哈爾賓行

二葉亭當時の實業論・女郎屋論・哈爾賓の生活及び奇論

が、二葉亭は長く語學校の椅子に安んずる事が出來なかつた。本と〳〵教職に就いたは恩師の推薦を德とした爲めで、教育家を一生の仕事とするツモリは無かつたのだから、暫らくすると一時鎭靜した實業熱が再び沸熱して來た。恰も其時分、暫らく西比利亞に滯留してゐた

舊同窓の佐波が浦鹽から歸朝して屢々二葉亭を訪問し、新たに薩哈連から浦鹽へ渡航した一人の友人からも度々手紙が來て、浦鹽方面の消息が頻りに耳に入るので、機會を待構へてゐた實業上の野心は忽ちムク／＼と頭を擡上げて食指俄に動くの感に堪へなかつた。

二葉亭の實業といふは單なる金儲け一天張では無かつた。實業側の友人から餘り對手にされなかつたは之が爲めであつたが、二葉亭の夙昔の希望から云へば一貫した國際的興味を有する問題であつた。二葉亭に云はせると、日本人が浦鹽あたりで盛んに商賣するのは、當人自身は金儲けより外考へないでも、之が即ち日本の勢力を扶植する所以であるから、商賣の種類は何であらうとも關はぬ、海外の金儲けは即ち國富の膨脹、國權の伸長、國威の宣揚である。

極端な例を擧げれば、醜業婦の渡航を國辱である如く騷ぐは短見者流の島國的愛國論であつて、醜業婦の行く處必ず日本の商品を伴ひ日本の商業を發達させ日本の地盤を固めて行く。東露に若干たりとも日本の商業を擴げる事が出來たのは全く醜業婦のお庇である。露國は自國の商工業を保護する爲に外國貨物に重稅を課し、例へば日本の燐寸の如き一本イクラに賣らねばならぬほどの準禁止稅を賦課してゐる。が、恁ういふ極端な保護政策を取つて外國貨物を塗絕しようとしてゐるが、獨り外國醜業婦の移入に限つては殖民政策の必要から非常に歡迎し、上陸後も亦頗る好遇して營業の安全及び利益を隱然保護してゐる。浦鹽に於ける日本の商賣が盛んに發展しつゝあるは畢竟醜業婦の背後に隱れて活動する結果であるから、此特惠に乘じて愈々益々多數の醜業婦を輸出するは取も直さず益々日本の商業を振ふ所以である、といふのが其頃屢々二葉亭に力說された醜業婦論であつた。

二葉亭の醜業婦論は一時交友間に有名であつた。其頃二葉亭の家に出入したものは大抵一度は醜業婦論を聞かされた。二葉亭の說に由ると、日本の醜業婦の勢力は露人を風化して次第に日本雜貨の使用を促し、例へば鰹節が極めて滋味あり營養ある食料品として露人の間に珍重されて、近年俄に鰹節の輸出を激增したのは露人が日本の醜業婦に教へられた結果である、且日本の醜業婦の露人に落籍されるものが益々多く、中には案外なる上流階級の主婦となるものさへあつて、之が爲めに日本風の生活が露人間に流行し、日本品でなければ上等でないやうに思ふものが段々殖えて來た、其結果が日本の商品の販路擴張となり、日露兩國民の相互の理解となり、國際上の無言の勢力となるから、若し資本家の保護があれば國際上の最良政策としても浦鹽へ行つて女郎屋を始めると云つてゐた。此女郎屋論は座興の笑談でなくして案外マジメな實行的基礎を持つてゐたらしかつたが、餘り突梯だから誰もマジメに聞かなかつた。二葉亭と實業といふさへも大抵な人の耳には奇怪に響いた。況してや二葉亭と女郎屋といふに到つては小說の趣向を聞くと同じ興味を以て聞くより外無かつた。

左に右く二葉亭の實業といふは女郎屋に限らず、總て單なる金儲けでは無かつた。金に逼迫してゐたから金も儲けたかつたらうが、金を儲ける以外に大なる經綸があつた。其經綸が實業家の眼から見ると云ふべくして行ふべからざる空想であつたから、偶々其方面の有力者に話しても聞棄てにされるばかりで話に乘つて吳れなかつた。

然るに浦鹽の友なる佐波武雄が浦鹽の商人德永と一緒に歸朝して偶然二葉亭を訪問したのが二葉亭の希望を果す機會となつた。佐波は夫まで二葉亭から度々浦鹽渡航の希望を洩らされ

ても、文人の性格と商賣とは一致しないといふ理由から不理を説いてゐたが、怎ういふキッカケからか三人が相會して一夕の交歡を盡した席上、徳永商店の顧問として二葉亭を聘さうといふ相談が熟した。其頃浦鹽で最も盛んに商賣してゐたのは杉浦龍吉で、杉浦が露國に於ける日本の商人を代表してゐた。徳永は新進であつたが、杉浦と拮抗して大いに雄飛しようとし、恰も哈爾賓に手を伸ばして新たに支店を開かうとする際であつたから、怎ういふ方面に二葉亭の力を煩はす意があつたか知らぬが、哈爾賓の支店に遊び半分來て呉れないかと云つた。二葉亭は徳永とは初對面であつたが、徳永の人物を臂を把つて共に語るに足ると思込み、其報酬は漸く東京の一家を支ふに過ぎない位であつたが、極めて束縛されない寛大な條件を徳として、豫ての素志を貫く足掛りには持つて來いであると喜んで快諾した。且恰も語學校の校長高楠と衝突して心中不愉快に堪へられなかつた際だつたから、決然語學校の椅子を抛棄して出掛ける氣になつた。多くの友人の中には折角足場の固くなり掛けた語學校の椅子を棄てるを惜んで切に忠告するものもあつた。家族は前途を危んで餘り進まなかつた。加之ならず語學校の僚友及び學生は皆留任を希望して嘆願した。が、二葉亭は寶の山へ入る如き希望を抱いて、三十五年の五月末に斷然語學校を辭職すると直ちに東京を出發した。

此の西比利亞行に就ては色々な説がある。啻に徳永商店の招聘に應じたばかりでなく、別に或筋からの使命を受けてゐたといふ説もある。が、恐らくは一個の想像説であらう。二葉亭は早くから國際的興味を有して或る場合には隨分熱狂してゐた。が、祕密の使命を果すに適當な人物では決して無かつた。二葉亭の人物を見立ててそんな使命を託する人もあるまいし、託せられても輕率に應ずる二葉亭では無かつた。且若しそんな使命を受けてゐたなら、二葉亭は最少し豐かであるべき筈であつたが、哈爾賓到着後は萬事が豫想と反して思ふやうにならなかつたのみならず、財政上にも亦頗る窮乏して自分自身は猶更、留守宅への送金も亦豫期の如くならざるほど頗る困迫してゐた。

東京を出發する前、二葉亭は暇乞ひに來て、『何も特別の用務は無いので、唯來てさへ呉れゝば宜いといふのだ。露西亞では官憲の交渉が七面倒臭いから、多分そんな方面にでも向ける意だらう。左に右く來いといふから行つて見るので、其中に面白い仕事が見付かつたら其方へ行つて了ふのさ、』と無造作に云つた。

が、哈爾賓へ行つて何をした？　縱令僅かにもせよ旅費まで出して呼ぶからには必ず何かの思はくが徳永にあつたに違ひない。が、二葉亭が着くと間もなく哈爾賓では猛烈な虎疫が流行して毎日八百五十人といふ新患者を生じ、シカモ防疫設備が成つてをらんので患者の大部分が斃れて了ふといふ騒ぎであつたから、市民は驚慌して商賣は殆んど閉止して了つた。搗てて加へて其頃から外國人、殊に日本人に對して嚴しく警戒し、動やともすると軍事探偵視して直ぐ逮捕した。或る日本人は馬車の中で寺院の寫眞を見てゐた處を警吏に見咎められて十日間抑留された。又他の或る日本人は或る工事を請負つて職工を捜す爲め浦鹽哈爾賓間を數度往復したので三ケ月の禁錮に處された。日本人といふ日本人は皆怎ういふ常識では理解されない無法な壓迫を受けたから手も足も出せなくなつた。大いに發展するツモリの徳永商店も手を伸ばす處か壓迫されて縮小しなければならなくなつた。

搗てて加へて哈爾賓へ着く草々詰らぬ奇禍を買つて拘留された。當時哈爾賓では畜犬鉗口令

が布かれ、箝口せざる犬は野犬と見做されて撲殺された。然るに徳永商店では數頭の飼犬の中の一頭だけ轡を施して鎖で繫いだが、殘りの何頭は野犬として解放して了つた。すると或る日、其中の一頭が巡査に吠付き、追はれて元の飼主たる徳永商店に逃込んだのを巡査は追掛けて來て、店から引摺出して店前で撲殺し、且徳永を飼主と認定するゆゑ即時に始末書を警察へ出せと嚴命した。丁度二葉亭は居合はしたので不法を詰つて彼是れ押問答をすると、無法にも二三人の巡査が一度に二葉亭に躍り蒐つて戶外へ突飛ばし、四の五の云はさず拘引して留置檻へ投げ込んで了つた。日本人は此報を得て喫驚し、重立つものが數人警察署へ出頭して嘆願し、二葉亭が徳永店員で無い事を證明したので一時間經たない中に放還され、同時に二葉亭の身分や位置が解つたので、其晩巡査部長が態々來訪して全く部下の一時の誤解であつたから何分穩便にして呉れと平詫まりに陳謝して、事件は何でもなく容易に落着したが、詰らぬ事で飛んだ目に會つた。二葉亭が軍事探偵の嫌疑で二タ月か三月も拘禁されたやうに噂され、之に關聯して祕密の使命を受けてゐたかのやうな想像說まで生じたのは多分此事が訛傳されたのであらう。事實は大の間違であつたのだ。

こんな咄にもならない馬鹿々々しい目に會つて二葉亭は幾分か氣を腐らせた。もと〱初めから徳永商店に長く粘り着いてる心持は無く、徳永を踏臺にして他の仕事を見付ける意でゐたのだから、日本人の仕事が一も二もなく抑へつけられて手も足も出せない當時の哈爾賓の事情を見ては、此上永く沈着く氣になれなくなつた。そこで哈爾賓を中心として北滿一帶東蒙古に到るの商工業、物產、貨物の集散、交通輸送の狀況等を細さに調査した後、終に東清鐵道沿線の南滿各地を視察しつゝ大連・旅順から營口を經て北京へ行つた。

十　北京時代

川島浪速と佐々木照山・提調時代の生活・衝突歸朝

北京へ行つた目的は極東の舞臺の中心たる北京の政情を視察する傍ら支那を知る爲めの必要上、本場の支那語を勉強するツモリであつたのである。幸ひ舊語學校の同窓の川島浪速が其頃警務學堂監督として北京に在任して聲望隆々日の出の勢ひであつたので、久し振で訪問して舊情を温め交々志望を打明けて相談した處が、一夕の歡談が忽ち肝膽相照らして終に川島の配下に學堂の提調に就任する事となつた。

川島浪速の名は今では知らないものは無い。近年滿洲朝滅亡後北京の舞臺を去つて歸朝し、淺間の山莊に蟄伏して靜かに形勢を觀望してゐるが、川島の名は肅親王の側近として復辟派の日本人の巨頭として嵎を負ふの虎の如くに今でも恐れられてをる。舊語學校の支那語科出身で、若い東方策士のグループの一人として二葉亭とは學校時代からの親交であつた。舊語學校廢校後は左らでも需要の少い支那語科の出身は皆窮乏してゐたが、殊に川島は三國志か水滸傳からでも抜け出して來たやうな豪傑肌だつたから他にも容れられず自らも求めようともしないで陋巷に窮居し、一時は朝夕にも差支へて幼き弟妹が僅に泣くほどのドン底に落ちた。團匪事件の時、陸軍通譯として招集され、從軍中屢々清廷の宗室大官と親近する中に、計らずも肅親王の知遇を得たのが青雲の機緣となつた。事件落着後清廷が目覺めて改革を行はんとするや、川島は肅親王府に厚聘されて警務學堂を創設し、毎期四百名の學生を養うて清國警察を補充し、常に學堂教務を統ぶるのみならず學堂出身者の任命及び進退黜陟等總て

を委任するといふ重い權限で監督に任じた。當時の（或は今でも）支那の軍制は極めて不備であつて、各省兵勇は恰も烏合の無頼漢のやうなものだつたから、組織的に訓練された學堂出身の管吏は兵勇よりも信頼されて事實上軍務をも帶びてゐた。隨つて之を統率する川島の威權は我が督軍總監以上であつて、肅親王を背後の力として聲威隆々中外を壓する勢ひであつた。

提調といふは監督の下に總教習と竝び立つ學堂事務の總轄者であつた。出納庶務から人事の一切を統べ、學堂の機密にも參じ外部の交渉にも當つて、恰も大藏と內務と外務とを兼掌してゐたから、任務は頗る重くて極めて困難であつた。二葉亭は生中文名が高く在留日本人間にも聞えてゐたので、就任の風說あるや學堂の面々は皆小說家の提調を迎ふるを喜ばなかつた。就中、總教習稻田穰の如きは當初から不信任を公言して抗議を持出さうとした。然るに愈々新任提調として出頭するや、一同は皆瀟洒たる風流才人を見るべく想像してゐたに反して、意外にも狀貌魁偉なる重厚沈毅の二葉亭を迎へて一見忽ち信服して了つた。

川島の[illegible]婿たる佐々木照山も蒙古から歸つて俠骨稜々として北京に傲睨してゐた大元氣から小說家二葉亭が學堂提調に任ぜられたと聞いて太く憤慨し、虎髯逆立つて川島公館に怒鳴り込んだ。「小說家を提調にして怎うする、」と噪聲川島に喰つて蒐ると、「先ア左も右くも一度會つて見るサ、」と云はれて川島の仲介で二葉亭と會見し、鼎座して相語つて忽ち器識の凡ならざるに嘆服し、學堂の爲めの良提調、川島の爲めの好參謀を得たるを滿足し、夫から以來は度々往來して互に相披瀝して國事を談ずるを快としたさうだ。

二葉亭の提調生活は當時私に送つた次の手紙に髣髴としてをる。

「拜啓、今日は支那の十二月二十八日にて學校も冬期休業中ゆゑ至て閑散なるべき理窟なれど小生の職務は學堂庶務會計一切の事宜を辨理するに在りと支那流にては申す職掌ゆゑ日曜も祭日も滅茶苦茶に忙がしく、一昨夜なども徹夜して所謂事宜を辨理候始末ほと〳〵閉口致候うちに自ら一種のおもしろみ流石になきにしもあらず、このおもしろみ讀書の面白味にもあらず談理のおもしろみにもあらで一種變挺なおもしろみに候、小生惟ふに學者の樂しむ所は理のおもしろみ、詩人の樂しむ所は情のおもしろみ、事務家の樂しむ所は action のおもしろみ、事の趣にあらんか、元來當學堂は表面は滿國の一學堂なれど裏面は日本の勢力扶植の一機關たれば自ら志士集合所の如き趣ありて公使館あたりの純然たる官吏社會より觀れば頗る危險の分子を含みたる一團體の如く目さるる傾有之、爲に隨分迷惑を感じ候事も有之候へど、そこが卽ち一種の面白味の存する所にて學堂の仕事常に必しも學堂らしからず、時ありて梁山泊の豪傑達が額を鳩めて密に勢力擴張策を講ずるなど隨分變挺來な事ありて其都度提調先生私かに自ら當代の蕭何を以て處るといふ、こんな學堂が世間にまたと有るべくも覺えず候、然れどもおもしろみの在る所は又くるしみの伏在する所にて其間一種いふべからざる苦痛も有之、此苦痛最初は至て輕微なりしも仕事に深入すればするほど重且大になりゆきて時には殆んど耐へがたき事も有之候、小生の力能く此苦痛に克ち四圍の困難を

掃除する事を得ば他日多少の事功を成就し得んも、此苦痛と困難とに打負くれば最早それまでにて滅茶々々に失敗致すべく、さうなつたら已むを得ず日本へ遁歸りて再び生命を一枚の筆に託せざるを得ざるべきも、先づそれまでは死力を盡して奮闘の覺悟に候、北京の町の汚さお話になつたものにあらず、官中厠と申候共同便所の如きもの往來の兩側に處々散在すれども日本の共同便所と同日に談ずべくもなし、唯大道上に一坐地を劃し低き土壁を繞らしたるのみにて糞壺もなければ小便溜もなく皆垂流しなり、然れども警察の取締皆無の爲め往來の人隨所に垂流すが故に往來の少し引込みたる所などには必ず黄なるもの累々として堆く、黄なる水湛として窪みに溜りをりて臭氣紛々として人に逼る、その癖大通に在つては兩側に櫛比せる商戸金色燦爛として遠目には頗る立派なれど近く視れば皆芝居の書割然たる建物にて誠に安ツぽきものに候、支那は爆竹の國にて冠婚葬祭何事にも之を用ゐ、毎夜殆んどハチ／＼ポンの音を聞かざるはなし、日本の花火は之が進化したるものにはあらざるべきか、其他衣食住に於て日本に類似せる點多く、流石昔は東洋文明の卸元たりし面影どこかに殘り居候――」

天晴東洋の舞臺の大立物を任ずる水滸傳的豪傑が寄つて集つて天下を論じ、提調先生揚然として自ら蕭何を以て處るといふ得意の境場が髣髴として此の文字の表に現はれてをる。

眞實、提調時代の二葉亭は一生の中最も得意の時であつた。俸祿も厚く、信任も重く、細大の事務盡く掌裡に歸して裁斷を待ち、監督川島不在の時は處務を代理し、隱然副監督として仰がれてゐた。然るに此の得意の位置を怎うして拋棄するやうになつた乎、其原因が判然しないが、左に右く止むに止まれない或る事情があつて、監督川島及び友僚が頻りに留任を勸告するをも固く謝して、決然辭任して歸朝した。

此間の事情は當時の消息を知るものの間にも種々の説があつて判然しないが、假に川島或は友僚との間に多少の面白からぬ衝突があつたとしても、其衝突は決して辭職を値ひするほどの大事件では無かつたらしい。ツマリ二葉亭の持前の極端な潔癖からして夫ほどでもない些細な事件に殉じて身を潔くする爲めらしかつた。二葉亭自身も此事に就ては餘り多く語らなかつた。腹を立てるほどの事でも無かつたので、少と早まり過ぎたのサ、とばかり輕く云つてゐた。

間もなく日露の國交が破裂した。北京に在留中から露西亞の暴狀を憤つて、同志と共に屢々公使館に詰掛けて本國政府の斷乎たる決心を迫つた事もあり、豫てから此の大破裂の生ずべきを待設けて晴れの舞臺の一役者たるを希望してゐたから、此の國交斷絶に際して早まつて提調を辭して北京を去つたのを内心竊かに殘念に思つてゐたらしかつた。「恁う早く戰爭が始まるなら最う少し北京に辛抱してゐるのだつた、」とは開戰當時私に洩らした述懷であつた。

十一　朝日新聞社に入る

北京から歸朝したのは三十六年の七月で、歸ると間もなく腦貧血症に罹つて田端に閑居靜養した。三十七年の春、日露戰爭が始まると間もなく三月の初め内藤湖南の紹介で大阪朝日新聞社に入社し、東京出張員として東露及び滿洲に關する調査と、露國新聞の最近情報の飜譯とを擔任した。滿洲及び北京から歸朝して

の意氣込もあり、豐富に資料も蓄へてゐたし、此調査には頗る興味を持つて大に滿足して職務を服した。

然るに新聞紙の材料は巧遲なるよりは拙速を重んじ、堂々たる大論文よりは新鮮なる零細の記事、深く考慮すべき含蓄ある說明よりは手取早く呑込む事の出來る記實、噛占めて益々味の出るものよりは舌の先きで嘗めて直ぐ賞翫されるものが讀者に受ける。新聞紙の壽命は唯一日であつて、各項記事に對する讀者の興味を持つは唯二分間か三分間である。此の二分間三分間の興味を持たしめるのが新聞記者の技倆であつて、十日一水を描き五日一石を描く苦辛は新聞記事には無用の徒勞である。此點に於て何事も深く考へ細さに究め右から左から八方から見て一分の隙も無いまでに作り上げた二葉亭の原稿は新聞材料としては勿體無さ過ぎてゐた。折角苦辛慘澹して拵へ上げた細密なる調査も、故池邊三山が二葉亭歿後に私に語つた如く參謀本部向き外務省向きであつて新聞紙向きではなかつた。例へば當時朝日新聞に連揭された東露及び滿洲輸送力の調査の如きは參謀本部の當局者をこへ驚嘆せしめたほどに周到細密を究めたが、讀者には少しも受けないで誰も振向いても見なかつた。新聞紙は一に讀者の興味を標準として材料の價値を定めるゆゑ、如何なる貴重の大論文でも讀者の大多數が喜ばないものは編輯局も亦冷遇する。折角油汗を流して苦辛した二葉亭の通信が屢々大阪の本社で冷遇されて往々沒書となつたのは、二葉亭の身にすれば苦辛を認められない不平は道理であるが、新聞記事としては止むを得なかつたのだ。加ふるに東京出張員とは云ひながら東京に定住して滅多に大阪へ行かなかつたから、自然大阪本社との意志の疏通を缺き、相互の間に面白からぬ感情の行違ひを生じ、或時は斷然辭職するとまで憤激した事もあつた。此間に立つて調停する掛取役を勤めたのは池邊三山であつて、三山は力を盡し二葉亭を百方慰撫するに努めた。が、二葉亭が自ら本領を任ずる國際又は經濟的方面の研究調査には矢張少しも同感しないで、二葉亭の不平を融和する傍ら、機會ある每に力を文學方面に伸ばさしめようと婉曲に慫慂した。二葉亭は厚誼には感謝したが、同時に頗る慊らなく思つてゐた。

が、三山の親切に對して强ひて爭ふ事も出來ずに不愉快な日を暮す間に、大阪の本社とは日に乖離するが東京の編輯局へは度々出入して自然親みを增し、折々編輯を助けて意外な新聞記者的技倆を示した事もあつた。ポーツマウスの條約に擧國の不平が沸騰した時に偶然東京朝日の編輯局で書いた「ひとりごと」と題する桂首相の心理解剖の如きは前人未着手の試みで、頗る讀者に受けたもんだ。(此一篇は二葉亭全集第四卷に載つてをる)(全集は第十篇第十算に在る)。或は前人未着手で無いかも知れぬが、之ほど巧みに之ほど小氣味能く窮所を穿つたものは恐らく先人未言であつたらう。二葉亭の直覺力と洞察力と政治的批評眼とが無ければ迚も書けないものであつた。或は不滿足なる媾和に憤慨した餘りの昂奮で筆が走つたので、平素の冷靜な二葉亭では却て書けなかつたかも知れない。恁ういふ方面に專ら力を注いだなら新聞記者としても亦必ず前人未拓の領土を開き得たらうと、朝日の僚友は皆二葉亭が一度ぎりで此種の試みを止めたのを惜んでゐた。が、二葉亭は却て之を恥ぢて、「あんな輕佻な眞似をするんぢや無かつたつけ、」と悔いてゐた。

十二 『其面影』と『平凡』

其中に戰爭は熄んだ。讀者は最う露西亞や滿洲の記事には飽き〳〵した。二葉亭の熱心なる東露の產業の調査は益々新聞に向かなくなつ

た。そこで三山初め有力なる朝日の社員は二葉亭をして愈々力を文學方面に伸ばさしめようと百方勸說した。其度毎に苦い顏をされたが、何遍苦い顏をされても少しも尻込しないで口を酸くして諄々と說得するに努めたのは社中の弓削田秋江であつた。秋江は二葉亭の熱心なるアドマヤラーの一人として、朝日の忠實なる社員として、我儘な華族の殿樣のお守りをするやうな氣になつて、氣を長くして機嫌を取り／＼到頭退引ならぬ義理づくめに餘儀なくさしたのが明治三十九年の秋から朝日に連載した『其面影』であつた。續いて翌年の十月は『平凡』を續載して二葉亭の最後の文藻を輝かした。此二篇の著されたのは全く秋江の熱心なる努力の結果であつた。

有體に云ふと『其面影』も『平凡』も惰力的勞作であつた。勿論、何事にも眞劍にならずにゐられない性質だから、筆を操れば前後を忘れるほどに熱中した。が、肝腎の藝術的興味が既くの昔に去つてゐて、氣の拔けた酒のやうな氣分になつてゐたから、苦辛したのは構造や文章の形式や外殼の修飾であつて、根本の內容を組成する材料の採擇、性格の描寫、人生の觀照等に到つては『浮雲』以後の進境を見る事が出來なかつた。

殊に『其面影』は三十年振の創作であつたから、恰も處女作を發表する場合と同じ疑懼心が手傳つて、眼が窪み肉が瘠せるほど苦辛し、其間は全く訪客を謝絕し、家人が室に入るをすら禁じ、眼が血走り顏色が蒼くなるまで全力を傾注し、千鍛萬錬して日に幾十遍となく書き更めた。夫故兎角に毎日の締切時間を遲らし勝ちなので、編輯局から容子を見屆けに度々社員を派したが、苦辛慘澹する現狀を見るものは誰でも氣の毒になつて催促しかねたさうだ。池邊三山が評して『造物主が天地萬物を產出す時の苦み』と云つたは當時の二葉亭の苦辛を能く語つてゐる。が、苦辛したのは外形の修辭だけであつて肝腎の心棒が拔けてゐたから、二葉亭に多くを期待してゐたものは期待を裏切られて失望した。

『其面影』を發表するに先だちて二葉亭は新作の題名に就て相談して來た。『二つ心』とか『心くづし』とか「新紋形二つ心」とか云ふやうな人情本臭い題名であつて、シカモ此の題名の上に二ツ巴の紋を置くとか、或は『破れヰオリノ』といふ題名として絃の切れたヰオリンの畫の上に題名を書くといふやうな鼻持ならない黴臭い案だつたから、同時にドレも之も擯々遊文學の詰であると遠慮無く貶しつけてやつた。彼是れ往復二三回もした、最後に『其面影』でマア我慢して呉れと云つて來た。此相談を受けた時、二葉亭の頭の底ッコにマダ三馬か春水の面影が殘つてるんぢやないかと、內心成功を危まずにはゐられなかつた。

愈々『其面影』が現はれて、回一回と重なるに從つて益々此懸念が濃くなつた。『其面影』の妙處といふは二十年前の『浮雲』で味はされたものよりもヨリ以上何物をも加へなかつた。加之ならず『浮雲』の若々しさに引換へて極めて老熟して來ただけ夫だけ或る一種の臭みを帶びてゐた。言換へると『浮雲』の描寫は直線的に極めて鋭く、色彩や情趣に缺けてゐる代りには露西亞の作風の新らしい匂ひがあつた。之に反して『其面影』の描寫は婉曲に生温く、花やかな情味に富んでゐる代りに新らしい生氣を缺いてゐた。幸田露伴は曾て『浮雲』を評して地質の斷面圖を見るやうだと云つたが、『其面影』は斷面圖の代りに横濱出來の輸出向きの美人畫を懷出させた。更に繰返すと『其面影』の面白味は近代人の命の遣取をする苦みの面白味でなくて、澁い意氣な俗曲的の面白味であつた。

『平凡』は復活後の二度目の作であるだけ、『其面影』よりは筆が樂に伸んびりしてゐる。無論『其面影』と同じ洗練を經たので、決して等閑に書きなぐつたのでは無いが、『其面影』のやうな細い斧鑿の跡が見えないで、自由に伸び〱した作者の洒落な江戸ッ子風の半面が能く現はれてゐる。ツマリ『其面影』の時は『文人で無い』と云ひつゝも久し振での試みに自づと筆が固くなつて、餘りに細部の雕琢にコセ〱したのが意外の累ひをした。が、『平凡』の時は二度目の經驗で筆が練れて來たと同時に、文學はドウでも宜い、といふ氣になつて、技術の慾を離れて自由に思ふまゝを發揮したから、前者に比べると荒削りではあるが活き〱した生氣に富んでゐる。文人としての二葉亭の最後を飾るに足る傑作である。

が、何れも『浮雲』の惰力的勞作であるは爭はれなかつた。『浮雲』以後の精神的及び物質的苦悶に富んだ二葉亭の半世の生活からは最少し徹底した近代的悲痛が現はれなければならない筈であつたが、案に相違して極めて平板な不徹底な家常茶飯的葛藤しか描かれてゐなかつたのは畢竟作者の根本の藝術的興味が去つて了つたからであらう。

十三　第二期の失意煩悶

朝日社内に於ける葛藤不平・國際的危機と『平凡』前後・實際的抱負

が、夫にも拘らず、世間は盛んに嘖々して歡迎し、東朝編輯局は主筆から給仕に到るまでが擧つて感嘆した。前には滿蒙に關する二葉亭の論策研究を虐待した大朝の編輯局が二葉亭の籍が大阪に在るを名として當然大阪の紙上にも載すべきものだと抗議を持出した。各文學雜誌は爭つて文學及び思想に關する論文又は談話を請うて載せ、社會の公人としての名は益々文人として輝いた。

二葉亭は益々不平だつた。半世の夙志が總て成らずに、望みもしない文人としての名が愈々輝くのが如何にも不愉快で堪らなかつた。が、世間は如何に見ようとも、自分の使命は國際的舞臺にあるを飽くまでも任じて、少しも志望を曲げずに極東時局に關する内外の著書は得るに隨つて精讀し、内外新聞の外交に關する事項は細さに究めて切拔きを保存し、殊に『外交時報』は隅から隅までを反覆細讀してゐた。（二葉亭は『倫敦タイムス』、『ノーウ・オウ レーミヤ』『モスコー・ウェドモスチ』等の英露及び支那日本の外字新聞數十種に常に眼を晒してゐた。『外交時報』は第一號から全部を取揃へて少しも座右から離さなかつた。）

此の如く全力を傾倒して國際問題を鋭意研究したのは本と〱青年時代からの夙志であつたが、一時人生問題に沒頭して全く忘れてゐたのが再燃したには自ら淵源がある。日清戰爭の三國干渉の時だつた。或る晩慨然として私に語つた。「日本は之から先き世界を對手として戰ふ覺悟が無けりやアならん。東洋の片隅に小さくなつて蹲踞まつてるなら知らず、聊かでも頭角を出せば直ぐ列強の壓迫を受ける。白人聯合して日本に迫るといふやうな事が今後無いとは限らん。夫も壓迫を受けるだけなら、忍んで小さくなつて辛抱出來ない事もなからうが、壓迫が進んで侮辱となり侵略となつたらドウする。國際公法だの仲裁條約だのといふはまさかの時には何の役にも立たない空理空文である。歐洲列強間の利害は各々相扞格してゐても、根が同文同種同宗教の兄弟國だから、事となれば平時の葛藤を忘れて共通の敵たる異人種異宗教の國に相結んで衝るは當然有得べき事だ」と、人種競爭の避く可からざる所以を歷史的に說いて、「此覺悟で國民の決心を固め、將來の國是を定めないと、何十年後に亡國の恨みが無いと

も限らない。』と反覆痛言した事があつた。二葉亭の青年時代の國際的興味が再び熱沸して來たのは其頃からで、此の憂國の至誠から鋭意熱心に東洋問題の解決を研究するので、決して大言壯語を喜ぶ單純なる志士氣質や或は國家を飯の種とする政治家肌からでは無かつた。二葉亭の文學方面をのみ知る人は政治を偏重する昔の士族氣質から産出した氣紛れのやうに思ふが、決して其んな浮いた泡のやうな空想では無かつたので、牢乎として拔く可からざる多年の根强い根柢があつたのだ。今にして思ふと、三十年前に人種競爭の止むを得ざる結果から歐亞の大衝突の當然來るべきを切言した二葉亭の巨眼は推服すべきものであつた。

明治四十年の六月、突然急痾に犯されて殆んど七十餘日間病牀の人となつた。夫から以後著しく健康を損じて、平生健啖であつたのが俄に食慾を減じ、或る時、見舞に行くと、『此頃は朝飯はお廢止だ。一日に一杯ぐらゐしか喰はない。夜もおち／＼寢られない。』と云つた。『そりや不可ん。轉地したら怎うだい、神經衰弱なら轉地が一番だ。』といふと、『轉地なんぞしたつて癒るもんか。社の者も頻りと心配して旅行しろといふが、海や山よりは町の方が好きだ。なアに、僕の病氣は何でも無い、小説を書かないでも濟むやうにさへして呉れたら其瞬間に直ぐ癒つて了ふ。』と云つて淋しく笑つた。

一體が負け嫌ひの病氣に勝つ方で、どんなに苦しくても滅多に弱音を吹かなかつた。官報局を罷めてから間もなく、關節炎に罹つて腰が立たなかつた時も元氣は頗る盛んで、談笑自如として少しも平生と變らなかつた。其時から比べると、病氣は夫程重くも見えなかつたが、元氣は全で失くなつて頗る銷沈してゐた。豈夫かに嫌ひな文學を强ひられるばかりで病氣になつたとも思はなかつたが、何となく境遇を氣の毒に思つて傷心に堪へなかつた。

『平凡』の豫告が現はれた時、二葉亭が昔から推奬したゴンチャローフの名作を憶ひ浮べて題名に興味を持つたので直ぐ手紙を送つた。文句は忘れたが、意味は斯うである。――『平凡』といふ題名が如何にも非凡で面白い、（といふのは前にも云つた通り『其面影』の題名に關して往復數回した事があつたからで、）定めし面白いものであらうと樂みにしてをる、左に右く現に文學を以て生活しつゝある以上は假令素志でなくても文學にも亦十分身を入れて貰ひたい、人は必ずしも一方面でなければならないといふ理由は無いから、文人であつて政治家或は實業家を兼ねるのも妙であらう、政治或は外交に興味を有するが故に他の長所である文學を廢するといふは少しも理由にならない、且苟くも前途に平生口にする大抱負を有するなら努めて寛濶なる襟度を養はねばならない、例へば西園寺侯の招宴を辭する如きは時の宰相たり侯爵たるが故に謝絶する詩人的狷介を示したもので政治家的又は外交家的態度では無い――といふ、斯ういふ意味の手紙であつた。

無論此手紙を送つたのは二葉亭と議論する意でも何でも無かつた。唯『平凡』の題名に興味を持つた儘りに筆を走らしたので、陶庵侯招宴一條の如きは二葉亭の性質として應じないのは百も二百も承知してゐて少しも不思議と思つてゐないから、二葉亭の氣質を能く理解んでる私が更めて爭ふやうな事は決して做ない。無論又數行の手紙で二葉亭を反省させ或は屈服する事が出來ようとも思つてゐなかつた。

然るに此位な揶揄弄言は平生面と向つて談笑の間に言合ふに拘らず、此手紙がイラ／＼した神經に餘程觸つたものと見えて平時に無い怒氣紛々たる返事を直ぐ寄越した。曰く、『平凡は平凡也、それを强ひて非凡とおつしやるなら非凡

でもよろし、されど平凡は矢張平凡也、首出の招待に應ぜざりしはいやであつたから也、このいやといふ聲は小生の存在を打てば響く聲也、小生は是非を知らず、可否を知らず、只之が小生の本來の面目なるを知りたる而已」云々と。夫から最後に、「何れ其中に行く」と私が書いたに對して、「謀面は今時機に非ず、軈て折あるべし」と結んで、手もなく當分面會謝絶を通告して來た。私が二葉亭から請取つた何十通の手紙の中で是程墨痕淋漓とした痛快なものは無い。青筋出して肝癪起した二葉亭の面貌か文面及び筆勢にありありと彷彿して、當時の二葉亭のイライラした極度の興奮が想像された。が、腹の立つた有の儘が少しも飾られないで表白されてゐるだけに、二葉亭の面目が歴々と最も能く現はれてゐた。此のいやといふが二葉亭の存在を打てば響く聲であると云つたは何よりも能く二葉亭を説明してゐる。

二葉亭の文學嫌ひは前に云つたやうに單純な志士氣質や政治家肌からでは無かつたが、夫程に懊惱してジリジリと興奮するまで文學を嫌ひ拔いてゐたのは、一つは此のいやといふ存在の聲』が手傳つてゐたのである。二葉亭は何事についても右と云へば左、左と云へば右と云ふ一種の執拗な反抗癖があつて、終局の歸着點が同一なのが明々白々に解つてゐても先づ反對に立つて見るのが常癖であつた。如何なる得意のものでも褒められると苦い顔をして、如何なる不得意のものでも貶されると一生懸命になつて辯明した。假に若し其の欲する如くに政治家又は實業家として相當の位置を作らしめたなら、其時は恐らく、余は政治家に非ず、實業家に非ずと云つたかも知れない。之が即ち長谷川辰之助の存在の聲であつたのだ。

尤も文學を嫌つて實際界に志したは強ち此一端からばかりで無く、實際方面に於ける抱負も或る人々の思ふやうに萬更詩人的空想から産出したユートピヤ的或は志士氣質の自大放言では無かつた。一寸つと聞けば馬鹿々々しい浦鹽の女郎屋論でも、底を叩くと統計やら報告やら頗る周到細密な數字的基礎があつた。殊に北京から歸朝した後の説には鑿々傾聽すべき深い根柢があつた。無論實際の舞臺に立たせたなら直ぐ持前の詩人的狷介や道學的潔癖が飛出して累をなしたであらうが、夫でも若し愈々其方面に驥足を伸ぶる機會が與へられたら、強ち失敗に終るとも定められなかつた、或は意外の功を擧げないとも計られなかつた。左に右く終に一回も此の自信ある手腕を試みる機會を與へる事が出來ずに了つたのは、二葉亭自身の一生の恨事であつたのみならず、二葉亭の知友としても亦頗る遺憾であつた。

十四　露國の亡命客及びダンチェンコ

其頃波蘭の革命黨員ピルスウツキーといふ男が日本へ逃げて來て二葉亭を訪ねて來た。其外にも二葉亭を頼つて來た露國の虚無黨亡命客が二三人あつた。二葉亭は渠等の爲めに斡旋して或は思想上多少の連絡ある人士又は政界の名士に紹介したり、或は渠等が長崎で發行する露文の機關雜誌を助成したり、渠等の資金を調達する爲めに布哇の耕地の買手を捜したり、或は文藝上の連絡を目的とする日波協會の設立を計畫したりして渠等の爲めに種々奔走をした。二葉亭は曾てヘルチェンやビェリンスキーに傾倒して虚無黨思想に就ての多少の興味をも持つてゐたから、帝國主義を懐抱して日本の膨脹を夢見つゝも頭の隅の何處かで渠等と契合してゐたかも知れぬが、其以外に渠等を利用して國際的芝居を一ト幕出さうとする野心が内々有つたらしい。其頃北京時代の友人川部精二へ

送つた手紙に、「西伯利より露國革命派續々送込み、中には東京へ來るものも有之候故、此等を相手に一ト仕事と出掛けし處、相手が丸でお坊ちやんにて話にならず、到頭骨折損となりたり、今も革命派の上京する者は必ず來つてあれこれと相談を掛け候へども最早相手にならない事に決し候、渠等は皆空論を以て事を成さんと欲する徒にて口舌以上の活動をせんといふ意なし、こんな事で何が出來るものかと愛想をつかしたる次第に候、實は最初は今度こそ一世一代の仕事といふ意氣込で取掛けたれども右の次第にて之も亦駄目となりたり、嗚呼心中の遺恨誰に向つて訴へん、此上は最早退隱の外なし、小說でも書いて一生を送るべく候。」とあるは多分此間の機微を洩らしたものであらう。が、露西亞の革命黨員を相棒に何をするつもりであつたらう。二葉亭は明石中佐や花田中佐の日露戰役當時の在外運動を頻りに面白がつてゐたから、或はソンナ計畫が心の底に萌してゐたかも解らぬが、夫よりはソンナ空想を燃やして儘にならない鬱憤を晴らしてゐたのだらう。公平に見て二葉亭が實行力に乏しいのを輕侮した露西亞の亡命客よりも二葉亭自身の方がヨリ一層實行力に乏しかつた。二葉亭では明石中佐や花田中佐の眞似は迚も出來ないのを自ら知らないほどのウッケでは無いが、そんな空言を叩いて據ろなしの文學三昧に溺る不愉快さを紛らす爲めの空氣焰を吐いたのであらう。

明治四十一年の春、ダンチェンコが來遊した。二葉亭は朝日を代表して東道の主人となつて處々方々を案內して見せた。ダンチェンコは文人としては第二流であるが、新聞記者としては流石に露西亞有數の人物だけに興味も識見も頗る廣く、日本の文人のやうな文學一天張の世間見ずではなかつた。隨つて思想上に契合するものが有つても無くても、每日々々諸方を案內しつゝ互に宏博なる知見を交換したのは、恰も籠の禽のやうに意氣銷沈してゐた當時の二葉亭の憂悶不快を紛らす慰藉となつたらしかつた。

ダンチェンコは深く二葉亭に服して頻りに露都への來遊を希望し、且池邊三山及び村山龍平に向て露都通信員の派遣を勸告し、其の最適任者としての二葉亭の才能人物を盛んに推奬したので、朝日社長村山も終に動かされて其提案に同意した。耆婆扁鵲の神劑でも迚も癒りさうもなかつた二葉亭の數年前から持越しの神經衰弱は露都行といふ三十年來の希望の滿足に拭ふが如く忽ち掻消されて、恰も籠の禽が俄に放されて九天に飛ばんとして羽叩きするやうな大元氣となつた。其當座は丸で嫁入咄が定つた少女のやうに浮き／＼と燥いでゐた。

十五　露都行及び其の最後

露都行の抱負・入露後の[illegible]・[illegible]・[illegible]・葬儀

斯う決定してからは一日も早く文學と終始した不愉快な日本の生活から遁れるべく俄に急き立つて、入露の準備をする爲めに殆んど每日、朝から晩まで朝野の名流を訪うて露國に關する外交上及び產業貿易上の意見を叩き、碌々家人と語る暇が無かつた程に奔走した。

愈々新橋を出發したのが四十一年の六月十二日であつた。十四日に恰も露西亞から歸着した後藤男を敦賀に迎へ、其の翌日は米原まで男爵と同車し、隨行諸員を遠ざけて意見を交換したさうだ。如何なる意見が交換されたかは今猶ほ不明であつて、先年追悼會の席上後藤男自らの口からも其談話の內容を發表する事は出來ぬと云はれたが、左に右く此會見に由て男爵の知遇を得、多年の夙志が男爵の後援で遂げられさうな緒を得たのは明かであつた。米原で後藤男の一行と別れて神戸へ行き、神

戸から乘船して大連を經て入露の行程に上つた。其途上小村外相の歸朝を大連に、駐日露國大使マレウヰチの來任を哈爾賓に迎へて各々意見を交換した。是等の會見始末は精しく三山に通信して來たさうだが、亦國際上の機微に渉るが故に世間に發表出來ないと三山は云つてゐた。此の三山も今では易簀して了つたが、手紙は多分三山の遺篋の中に殘つてるかも知れない。

が、露國へ行つて何をするツモリであつた乎は友人中の誰にも精しく話さなかつたが、左に右く出發に先だつて露國と交渉する名士を歴訪し、更に其途上わざ／＼迂回して後藤や小村やマレウヰチと會見した事實から推しても二葉亭の抱負や目的を略ぼ想像する事が出來る。

出發前數日、文壇の知人が催した送別會の卓上演說は極めて抽象的であつたが抱負の一端が現はれてをる。其要旨を摘むと恁うである。

『自分は平生露西亞の新聞や雜誌を讀んで論調を察するに、露西亞人の日本に對する睚眦の怨は結んで中々解けない。時來らば今一ト戰爭しようといふ意氣込は十分見えてゐる。蓋し白人種の異人種を征服するは征服されるものから見れば領土の簒奪であるが、白人種の立場から云へば、人類の幸福の爲めの未開の土地の開發であつて、露西亞の南下の如きも露西亞人は神の特別なる恩寵を受くるスラヴ人の當然の使命だと思つてもゐるし、文明が野蠻に打勝つ自然の大法だとも信じてゐる。夫故に露西亞人の眼から見て野蠻國たる日本に露西亞が負けたのは英人がブアに負けたのと同樣、啻に露西亞一國の不名譽ばかりぢや無い、世界の文明國の前途の爲めの由々しき一大事である。此儘に若し濟ましたなら、白人の文明は或は黄人の勢力に蹂躙されて終には如何なる慘禍を世界に蒙らすかも解らん。ツマリ黄人の勝利は文明の大破壞であるから、此儘指を銜へて引込んでる事は世界の文明の爲めに出來ない。勝誇つた日本の羽翼未だ十分ならざる內に二度と再び起つ事の出來ないまでに挫折いて置かねばならんといふのは單に露西亞一國の爲めばかりで無くて、世界の文明の爲め人道の爲めだといふが露西亞人の腹の底の覺悟である。可也、先方が其了簡なら此方もそのツモリで最う一度對手にならうと云ひたい處だが、一度の戰爭は東洋問題を解決する爲め止むを得ないとしても、二度の戰爭は殘念ながら日本の國力が許さない。日本人としては日本の國力が十分恢復出來るまでは何とかして二度の戰爭はあらせたくないといふのが當然の願ひで、夫れには露西亞人がまだ知らない日本の文明の眞相を理解させて、日本人はブア人のやうな未開人でないといふ事を十分會得させるが第一策だと思ふ。無論、其麼な姑息の方法では根深い誤解を除く事は迚も出來ないかも知れんが、少くも彼我國際間の融和を計るには日本の文明を紹介するが有力なる一手段である。自分が露西亞に行くのは朝日の通信員としてであるが、此機會を與へられたを幸ひとして、及ばずながらも盡して見たいと思ふは此方面の努力で、甚だ不完全であるが聊かの經驗ある露西亞語を利用して日露國民相互間の誤解を釋き、再び不祥の戰爭が無からしむるやうに最善の努力を盡したいと思ふ。自分の微力を以てしては精衞海を塡むる世間の物笑ひを免れんかも知れんが、及ばずながらも之が自分の抱懷の一つである』云々。

果して二葉亭の云ふ如く其頃の日露國民間に暗雲が低迷してゐたか否かは別であるが、國家を憂ふる赤誠は此の一場の卓上話の端にも十分現はれてをる。出發前暇乞ひに訪ねて呉れた時も、露國へ行けば日本に通信する傍ら露國

の新聞にも頻々投書して日本の文明及び國情を紹介し、場合に由れば講演をも開く意だから、就ては材料となるべき書籍を折々廻附して貰ひたいと云つた。私は大に同感を表して、取敢へず手許に有合はした『開國五十年史』を贈り、註文次第何でも送ると快諾したが、露西亞へ着いてから尚だ一回も註文を受ける間も無い中に不起の病に取憑かれて了つた。朝日の通信員としてタイムスのブローウヰツやマツケンジーを期すると同時に日本の平和の爲めの福音使ともならうとしたらしかつたが、其抱負の一端だも實行の緒に就く遑がない中に思はぬ病の爲めに歸朝すべく餘儀なくされた。

二葉亭は學生時代から呼吸器が弱かつた。自分でも要愼して痰は必ず鼻紙へ取つて決して矢鱈と棄てなかつた。殊に露西亞へ出發する前一年間は度々病氣になつて著しく健康を損じてゐた。此の懸念される容體で寒い露國へ行くのは險呑だから一應は健康診斷を受けて見たらと口まで出掛つたが、幸ひに何にも故障が無ければだが、萬一多少の故障があつたからツて之が爲めに多年の夙望を思留りさうもなし、折角意氣の旺盛なる目出度い門出に曇影を與ふるでもないと思つて、多少は遠廻しに匂はして見たが、強ひては餘りに勸めなかつた。だが、こんなに早く不起の病の牀に就かうとも思はなかつた。

露都へ着いたのが四十一年の七月十五日であつて、着くと直ぐ、一ト月經つか經たない中に神經衰弱に罹つて了つた。で、彼是れ半年近くも何にも做ないで暮して、怎うか怎うか癒り掛けた翌る四十二年の二月十四日、ウラヂーミル太公の葬儀を見送るべく、折からの降りしきる雪の中を行列筋の道端に立つてゐると、何しろ露西亞の冬の嚴しい寒さの中を降りしきる雪に打たれたのだから、病上りの身の何とて堪へらるべき、忽ち迷眩して雪の上に卒倒した。同伴の日本人の誰彼れは驚いて介抱して直ぐ下宿に連れて戻つたが、之が病みつきとなつて終に再び枕が上らなくなつて了つた。其果が到頭露人の病院に入院して肺結核といふ診斷を受け、暫らくオデツサあたりに轉地するかなくば斷然歸朝した方が上分別であると、醫師からも朋友からも切に忠告された。

此忠告を受けた時の二葉亭の胸中萬斛の遺憾苦悶は想像するに餘りがある。折角爰まで踏出しながら、何にもしないで手を空うしてオメオメと怎うして歸られよう。此儘縱令露西亞の土とならうとも生きて再び日本へは歸られないと駄々を捏ねたは決して無理は無かつた。が、此儘滯留すれば病氣は益々重るばかりで、終には取返しが付かなくなるのが看え透いてゐながら萬に一つ歸朝すれば恢復する望みが無いとも限らないのを打棄つて置くべきで無いと、在留日本人の某々等は寄つて集つて歸朝を勸告し、初めは何と云つても首を振つて諾かなかつたが、剛情我慢の二葉亭も病には勝てず、散々手古摺らした擧句が據ろなく納得したので、病氣が稍や平らになつたを見計らつて大阪商船の末永支配人が附添ひ、四月[illegible]日在留日本人の某々らに送られて心淋しくも露都を出發し、伯林を迂廻して倫敦に着し、郵船會社の加茂丸に便乘したのが四月九日であつて、末永支配人に船まで送られて、包むに餘る萬斛の感慨を抱きつゝ心細くも歸朝の途に就いた。

初め愈々歸朝と決するや、西比利亞線を歸る手、或は倫敦へ出て海路を取る手といふが友人間の問題となつたさうだ。其結果が短距離の西比利亞線を棄てて態々遠廻りの海路を擇ぶに決したのは、寒い西比利亞線を行くよりは船で歸るが海氣療法ともなるといふ意見が勝つたから

だらうで、不思議に加茂丸へ移乘した時は擔架で運ばれたほどの重態が出帆してから次第に元氣を恢復して來た。木永大阪商船支配人の特別の依頼と云ひ、朝日の記者、名譽ある文人としての名は事務長を初め船員が皆知つてゐたから、船醫の外に特に一名の給仕を附添として手厚く看護し、此元氣なら滯りなく無事に歸朝出來さうだと一同安心して大に喜んでゐた。然るにポルトセイドに着き、愈々熱帶圏に入ると、氣候の激變から病が俄に革まつて、コロンボへ入港したころは最早頼み少になつて來た。

電報は櫛の齒を引く如く東京に發せられた。一電は一電よりも急を告げて、歸朝を待侘びる友人知己は其都度々々に胸を躍らした。

五月十日、船は印度洋に入つた。世界に著き澎湃たる怒濤が死ぬに死なれない多感の詩人の熱悶苦吟に和して悲壯なる死のマーチを奏する間に、恰も夕陽に反映されて天も水も金色に彩どられた午後五時十五分、船長事務長及び數百の乘客の限りなき哀悼悲痛の中に圍繞かれて眠るが如くに最後の息を引取つた。

五月十五日新嘉坡に着いた。近藤事務長は土地の有志と計りて、事務長以下十數人、遺骸を奉じて埠頭を去る三哩なるパセパンシヤンの丘巓に假の野邊送りをし、日本の在留僧釋梅仙を請じて懇ろに讀經供養し、月白く露深き丘の上に遙かに印度洋の鞺鞳たる波濤を聞きつゝ薪を組上げて荼毘に附した。一代の詩人の不遇なる最後にふさはしい極めて悲壯沈痛なる劇的光景であつた。空しく壯圖を抱いて中途にして幽冥に入る千秋の遺恨は死の瞬間までも悶えて死切れなかつたらうが、生中に小さい文壇の名を歌はれて枯木の如く疊の上に朽ち果てるよりは、遠くヒマラヤの雪巓を觀望する丘の上に燃ゆるが如き壯志を包んだ遺骸を赤道直下の熱風に吹かれつゝ荼毘に委したは誠に一代のヒーローに似合はしい終焉であつた。

遺骨が新橋に歸着したは五月三十日で、越えて三日葬儀は染井墓地の信照庵に營まれた。會葬するもの數百人、權門富貴の最後の儀式を飾る金冠繡服の行列こそ見えなかつたが、皆故人を尊敬し感嘆して心から慟哭し痛惜する友人門生のみであつた。初夏の夕映の照り輝ける中に門生が誠意を籠めて捧げた百日紅樹下に淋しく立てる墓標は池邊三山の奔放淋漓たる筆蹟にて墨黑々と麗しく二葉亭四迷之墓と勒せられた。

三山は墓標に揮毫するに方つて幾度も筆を措いて躊躇した。此の二葉亭四迷は故人の最も慊める名であつた。此名を墓標に勒するは故人の本意で無いかも知れぬので、三山は筆を持つて暫らく沈吟したが、シカモ此名は日本の文學史に永久に朽ちざる輝きである。二葉亭は果して自ら任ずる如き實行の經綸家であつた乎否かは永久の謎としても、自ら屑しとしない文學を以てすらも猶且つ此の如く永久朽ちざる事業を殘したといふは一層故人の材幹と功績の偉なるを傳ふるに足るだらう。と、三山は終に意を決して二葉亭四迷と勒した。

以上は唯だ一生の輪郭を描いたに過ぎないが、人物と思想とは特に剖析細究しないでも略ぼ知る事が出來よう。文人としての二葉亭の位置の如何なるやは暫らく世間の判斷に任すとしても明治の文壇に類の少い飛離れた人物であつたは此の白描のデッサンを見ても大凡推測られよう。文人乎、非文人乎、英雄乎、俗人乎、二葉亭は終に其の全人格を他にも自分にも明白に示さないで、恰も彗星の如く不思議の光芒を殘しつゝ倏忽として去つて了つた。渠は小說家でなかつたかも知れないが、渠れ自身の一生は實に小說であつた。

（明治四十二年六月記、大正十三年十月補修）

下谷廣小路

東京を縦貫するバックボーンは南端の銀座を受けて北端は上野の聖丘を背負ふ江戸時代からの廣小路である。廣小路と稱する町は淺草に兩國に中橋に其他にも有らうが、祖師は日蓮に奪はれ大師は弘法に奪はるの格で、全國に知られてるのは上野を背景とする下谷の廣小路である。此の廣小路に王者の如く君臨するは松坂屋の鉅觀で、高架線御徒町の停車場に下車すると堂々十層樓の松坂屋の新館はプラットフォームの前面に一大城郭の如く聳えてる。

此の松坂屋から差渡し數町、車坂の三間町に今でも有る有名の質屋佐野屋の前の小さな家で私は生れた。私の生れた家はツイ明治三十年頃まで有つたが、夫でも百坪餘りの地坪の二階建だつた。丁度上野の戰爭の一ト月前で、私は生れたばかりの乳呑兒だつたが、後に聞くと、其日は夜の白々明けに一發の大砲が家を震ふを合圖に戰爭が始まつて二三發の銃彈が續けざまに壁を貫いて飛込んださうだ。私が生れた頃から開戰は豫期されて、氣早の者は早くから家を疊んで妻子を近在へ逃がして置いたので、幕臣の私の父は彰義隊には屬さなかつたが砲聲を聞くと等しく蹶起して、二三日微恙で病臥してゐたが、急ぎ身支度をして、『お柳、遺念だぞ！』と祕藏の古鏡を母に投げつゝ東照宮守護に上野へ飛んで行つた。父は討死するツモリであつた乎無かつた乎知らぬが、砲煙彈雨の眞只中を指して飛んで行く父を送り出すと直ぐ母も甲斐々々しく身支度をし、生れたばかりの私を家婢に負ぶはして父が遺念だと云つて投げた小さな古鏡を帶の間に入れつゝ、身から一つで淺草の山の宿へと逃げた。戰爭は正味二三時間に足りない小衝突であつたが、三百年來槍は鞘に弓は袋に收まつて太平を樂んでゐた江戸の市民の動亂は尋常で無かつた。別して其の中心地たる上野界隈の騷ぎは地震どころで無かつた。折からの雨の中を右往左往に逃惑ふ避難民の中に交つて私の母と婢も砲聲に慄きつゝ、流れ彈に脅かされつゝアッチへ逃げコッチへ追はれ、其處此處で官兵に誰何され抑留され、ツイ近くの西町の親類へ避難するツモリであつたのが、行く先々を遮斷されたので迂廻して漸く淺草の山の宿へ落延びて、身寄の家に辿り着いたのが日暮し頃、主從母子生きてる空は無かつたさうだ。

父は彰義隊で無かつた。が、彰義隊からは二股武士と睨まれ、官軍からは錦旗に刃向ふ叛徒の片割と目指される危い身の上であつた。砲煙彈雨を衝いて上野へ駈付けたのだから命は無いものと覺悟してゐたらう。母も亦所詮無事には戻つて來られないと斷念めてゐたらう。が、當の叛徒の彰義隊で無いのだから、萬一に牽かされて山の宿から數日過ぎて車坂の家へ歸つて來たが、父はマダ歸つた容子は無かつた。が、命辛々逃出して雨戸一枚閉めなかつたが、不思議に誰も闖入した痕が見えなかつた。無數の彈痕が壁や襖に殘つてゐたが皿小鉢一つ紛失したものも破損したものも無かつた。が、父は三日經つても五日經つても十日過ぎても二十日過ぎても戻らなかつたから母は既う歸らぬものと斷念めて、佛壇に燈明を供へて密に後生を弔つてゐたさうだ。すると一ト月ほど過ぎた或日、蓬頭垢面、見窄らしい姿でヒョッコリ歸つて來た時は夢かとばかり狂喜したさうだ。父と

母とが相擁して無事を喜び合つたのは想像される。其日父は東照公の御神體を守護して安全な場所へ奉安して後上野を落ち、其途中家重代の大小を道端の畑へ埋め、百姓の蓑笠に變裝して遠く逃延びた。二三夜を露宿して漸くに幕府に同情する民家に落付き、戰ひ鎮まつた後も脱走兵に對する官軍の詮議が嚴しかつたので、彰義隊にあらぬ身も世を狹くして隱れてゐたのださうだ。御神體の顛末や月餘を民家に忍んでゐた間の精しい話は父からも誰からも聞かなかつたから以上の外は何も知らぬが、東照公御神體守護の功績の賞與として其後徳川家から白銀二枚を賜つた御沙汰書は父の物故する頃までは殘つてゐた。

私の母は私が五歳の時に易簀して、母の憶出としては之より外に無かつたから、夫から後の幾春秋、車坂から上野界隈を通るたんびに五月雨のソボ降る砲煙彈雨の中を生れたばかりの乳吞兒を婢に負はせつゝ彼方此方と逃延びる若い母の姿を思浮べた。上野へ父が病床を斷つて立際に母に殘した古鏡は幾程もなく母の遺物ともなり、上野の戰爭の憶出ともなつて、何十年來何でも机の上の書鎭として、左ほど珍重すべきほどのものでないが日夕愛撫してをる。

上野の戰爭は時代が新らしくて記憶が生々しい上に、戰爭といふのは餘り大袈裟過ぎる小競合であつた。が、三百年の長い將軍政治の沒落に殉した江戸の武士のラスト・スパークだつたから、戰局は小さかつたが歴史的意義は深かつた。戰國時代の群雄割據の一興一亡の亂戰混戰よりも遙に悲壯なドラマチックのものだつた。

其日の總攻撃は數日前から豫想されて此界隈は人心恟々として皆逃支度をしてゐた。官軍が一擧に上野を屠るべく砲列を布いたのは丁度松坂屋あたりだつたさうだ。官軍の總參謀大村益次郎は江戸全市を燒拂つて江戸城總攻撃をする心算でゐたのが、城明渡しと聞いて足摺して殘念がつたといふ果斷の英雄だつたから、下谷一圓を火にする位は朝飯前であつたらうが、彰義隊が脆くも總崩れとなつたので民家は多少の砲火を浴びたが危く總燒拂ひとなる兵燹を免がれた。當時松坂屋は官軍の牙營となつて、維新の大立者の大西郷も松坂屋の一室に軍議を凝らしたといふ說がある。上野の戰爭の立役は大村益次郎だつたが、事實上の官軍の總帥たる大西郷が軍監として官軍の牙營に臨んだのは容易に想像される。西郷と勝とが相會して談笑の間に江戸城明渡しを議した城南の薩摩屋敷の遺跡が史蹟として標識される以上は松坂屋の一室も幕臣の殘黨たる彰義隊を潰敗せしめた官軍の牙營として保存史蹟の中に加へらるべきであらう。

由來古戰場は淒涼索寞、鬼啾々を作ふが李華以來の約束であるに反して上野は其以後年々殷賑を極めてをる。一つは戰蹟が餘り新らしいのと江戸時代からの四季の遊覽地であつたからである。殊に櫻は向島と江戸府内の二大名所として全國的に知られてる。一體上野の櫻はイツ栽ゑられたかハツキリした記錄が無いやうだ。淨心の『慶長見聞集』には上野の記事があつても櫻に就て何にも書いて無いから慶長時代には櫻の名所では無かつたのだらう。其頃の上野は寂寞たる武藏野の一隅の單なる一丘陵であつた。『八犬傳』だと忍ヶ谷の支城になつてるが、城といふと御大層だが、要害の地だから太田道灌の陣屋ぐらゐは置かれた事があつたかも知れない。左に右く寛永寺の寺域となるまでは人ツ子單り滅多に通らない狐狸の巣窟であつたのは想像するに難くない。櫻が寛永寺の造營と同時に植樹されたか否かは知らぬが、忍ヶ岡の道春の別業(今・清水堂のあたり)の庭に

栽ゑたのが初めだといふ說がある。天和の宗因には著名な「上を下へえいとう山の花見哉」の句ありて延寶の『江戸雀』には既に櫻の名所として記されてるのを見ると、延寶天和貞享頃には既に花見の群集が出盛つたやうである。が、山は花紅葉の名所として既に遠近に聞えたであらうが、山下はマダ其頃には松原續きで、廣小路あたりはトップリ日が暮れゝば追剝の出さうな場所であつたらう。了翁僧都が辨天祠畔に經藏を建て、嗣いで藥鋪を開いて錦袋圓を賣始めたのも其頃からだと傳へられるが、今の仲町通りから湯島邊は案外早く開けても山下から廣小路へ掛けての低地は元祿頃まではマダ町家續きとはならなかつたやうだ。ツイ近くの明治となつてからもお成街道筋は道幅が狹く、神田や日本橋あたりから見ると場末染みてゐた。地勢上北部に偏在してゐる上に、將軍の菩提所ではあるし、戊辰の血腥臭い記憶が生々しいから、上野は櫻の名所であつても、山下の附近の町は何となく陰慘であつた。

上野の戰跡の血を洗ひ流して新らしい文明の生彩を冴返らしたのは明治十年の博覽會の開場式であつた。今考へると夫程でも無かつたのだらうが、酸漿提灯を八重十文字に釣るして晝夜間斷なく花火をポン〳〵打上げたお祭り騷ぎは今日の百萬燈のイルミネエションよりも市民を魂消さした。薩南の風雲が收まつたばかりの人心の猶ほ恂々たる不安を鎭靜する爲めの政策もあつたのだらうが、十年前の戊辰の修羅場に一大歡樂鄕を展開して滿都の市民を踊躍さしたのは確かに上野新繁昌記の一紀元であつた。此の博覽會の開場式の當日今の精養軒の入口のあたりを當時の內務卿の大久保甲東が威儀堂々たる大禮服姿で凱旋將軍の如く濶歩してゐたのを瞥見して、小さな英雄崇拜を誘られたのを幼な心に今でも記憶してゐる。

博覽會に續いて上野を花火と酸漿提灯の山と化したのは明治十二年のグラント將軍歡迎會であつた。此時は將軍を款待す爲めの流鏑射や犬追物のクラシカルな演武の催しがあつたが、恁ういふ武技を餘興としたのがいとゞ益々太平の氣分を漂はした。搗て加へて遠來の外客を主賓とした國際的の空氣が島國日本の東京の公園をして世界的に著名ならしめた。

グラント會遊の記念樹たる「グラント扁柏」及び「グラント玉蘭」の二樹は今も猶ほ漫遊觀光團の外客の東京ヒルグリメージの一つとなつてをる。

池の端の裏通りの仲町は今も昔しも狹い通りであるが、此の仲町は上野の仲見世である。安政のコロリで賣出したといふ守田寶丹は今も猶ほ榮えてゐるが、勸學屋の錦袋圓に次いで池の端の「ぬし」である。初代守田治兵衞は上野から山下廣小路へ掛けての庄屋樣で、寶丹以外一風の書を以て鳴つた。肩下りの曲りくねつた書道の後期印象派とでも云ひさうな妙な書體であつたが、此の寶丹流が妙に人氣に投じて、一時は下谷一圓の看板は、待合でも料理屋でも、煮豆屋でも漬物屋でも皆寶丹流の看板となつた。

噺は少し橫町に入るが東京の看板は明治の初年山岡鐵舟と巖谷吞澤山人と守田寶丹とに三分されて、下谷はお膝元だけに殆んど寶丹が看板を獨占した觀があつた。

守田は逸聞畸行に富んだ多方面の才人であつた。古泉の蒐集家として成島柳北と相角逐した藏泉家であつたのは誰も知つてるが、此の守田が西洋音樂の愛好家であつたのは餘り知るものは無からう。尤も西洋音樂といふのは餘り大袈裟で滑稽に類するが、守田は一時流行した「オルゴール」——鼓笛入の大きな「オルゴール」「オモチャ屋に賣つてる小さなのでは無い。」を秘藏して、客が來ると、手前の愛玩の琴をお聞きに入れ

ませう〳〵と必ず自慢で鳴らして聞かしたもんだ。

今聞くと餘り馬鹿氣てるが、蓄音機以前の「ミュージカルボックス」は相應愛翫されたもので、守田の秘藏のボックスも三尺ほどの大型のものであつたといふから相當高價を拂つたものだらう。今なら「ピヤノラ」の格で、守田が愛翫したといふは音樂の趣味をも理解してゐたと見える。守田は古錢の古い趣味や絲脈の靈感の難有屋ばかりでは無かつた。今生きてゐたら何とか交響樂團の向うを張つたかも知れない。

此の守田の筋向うに小さなオモチャ菓子專門の金花糖屋があつた。家名を何と云つたか忘れて了つたが、此の種の雛菓子風のオモチャ菓子の專門菓子を金澤と云つてゐた。ツイ十四五年前までお山道の入口に金澤があつたが、仲町の方が店こそ小さかつたが精巧な菓子が多かつたやうだ。此の金澤の店は兒供の人氣を呼んだもので、坊ちやんお孃ちやんがイツデモ此前で駄々をこねてゐた。

仲町と對した東側の六阿彌陀、今の瓦煎餅の角を折れた通りを摩利支天横町と呼んだ。昔は水天宮金毘羅に匹敵する御利益の顯著な神で、月々の御緣日は盛つたもんだつた。此の横町の女王が明治の初年の藝壇を風靡した奥原晴湖であつて、摩利支天横町の先生と云へば此界隈で知らぬものは無かつた。木戸孝允が晴湖に潤筆料二百圓を支拂つたといふは當時の著名なる逸話であるが、兩に米が二斗、下谷あたりなら地所が坪五十錢かそこらの時代――剩つさへ畫なぞは顧眄いて見るものも無かつた時代の二百圓は今の二三萬圓以上にも當るだらう。

此・ザンギリのデブの豪放磊落の女先生はタシカに明治の初年の一異彩で、摩利支天横町の大名物であつた。

此の摩利支天横町からお徒士町へ拔けるあたりに明治の詩壇の星宿たる槐南の先人春濤翁の家塾があつた。春濤翁が家塾の機關として發行した雜誌「新文詩」は白紙木版の三遍摺で、今の雜誌とは比較にならぬ風雅な體裁のものだつた。春濤翁が存生時代、槐南はマダ十四五の弱冠で、摩利支天横町の麒麟兒として詩壇の老宿達に舌を卷かした。

下谷は昔から文人墨客の淵叢として知られ、正保の昔池の端で江戸で初めての本屋を開いたものもあり、延寶の頃には了翁僧都が江戸で初めての文庫を開いた因もあつて廣德寺前から山下、廣小路、お成道へ掛けて江戸末から明治の初年はリテラリー・クォーターで本屋が多かつた。今の黒門町の文行堂、お徒士町の吉田里子などは其頃からの古い老舗だが、勸學屋の錦臺閣の店を讓受けた琳琅閣の先代は明治の本屋歷史の逸すべからざる怪物であつた。琳琅閣の先代は齋藤バイブルの名で通つてゐた。なぜバイブルと綽名されたか知らぬか、一説には初め露店でバイブルを賣つてゐたとも云はれる。坊さんの了翁僧都の勸學屋のアトが耶蘇教のバイブルだといふのは面白い。とにかく露店から叩き上げて碌すつぽな眼識も無くて度胸一つで、今も和本屋には無いアレだけの大きな屋臺骨を背負つて立つやうになつたのは怪物と云はなければならない。無邊俠禪渡邊國武は能く此のバイブルに車を横付けにし、ボロ〳〵した本を山ほど車に乘つけては書庫の引越しのやうにアトからテク〳〵ついて歸つたが、此の無邊俠禪とバイブルとの問答は手も無く蒟蒻屋問答だつた。ドッチが蒟蒻屋六兵衛さんかといふと無論バイブルで、役者が一枚上だといふほどバイブルの商賣は無茶で出鱈目で太ッ腹であつた。

山下から車坂を經て廣德寺前へ出る大通りは町内續きであつたが、横町や裏通りは佛寺が多く、上野と淺草との間は殆んど寺續きであ

つた。「牡丹燈籠」で名高い幡随院は、今は淺草區に編入されてるが、本とは下谷の地界ひの俚俗埋堀の横町である。此の幡随院を外れると、五代目の當り狂言の三千歳直侍で著名な入谷田圃である。私が兒供の頃にはマダ處々田圃があつて三千歳の寮を懐はせるやうな舟板塀があつた。トップリ日が暮れると人足が途絶えて蕎麥屋の風鈴の音が淋しく、仲藏の衣鉢を承けた昨年故人となつた松助の丈賀を懐はせる按摩が笛を吹いて行く、犬の遠吠えが聞える、默阿彌の舞臺ソックリであつた。此のあたりから根岸一帶は江戸時代からの別莊地であつて、舟板塀に見越しの松、金目垣に枝折戸といふやうな粹な風雅な家が建並んでゐて、ドコからとなく一中か富本の澁い音締が洩れる中本の世界であつた。

入谷といふと恐れ入谷の鬼子母神の古いシャレを憶出させる。ドコに鬼子母神があるか土地のものさへ知らない小さな祠であるが、此のシャレがある爲めに鬼子母神の總本家の雜司ケ谷のよりも鳴響いてゐる。此の鬼子母神と三千歳直侍と共に入谷に名高いのは朝顏であつた。入谷の朝顏は團子坂の菊や大久保の躑躅よりも江戸情味が深かつた。いつ頃から名物になつたか知らぬが、「江戸名所」にも「東都歳時記」にも見えないから多分朝顏が流行り出した嘉永頃からだらう。團子坂の菊や大久保の躑躅と共にイツの間にか無くなつて了つたが、ツイ二十年ほど前までは東京の年中行事の一つであつた。夜の白々明けに家を出、入谷を一巡して笹の雪で卯酒を酌むといふが朝顏見物の寸法であつた。笹の雪も今は箱が入るさうだが、其頃は燒海苔と湯豆腐だけ。丁度蕎麥猪口ぐらゐの容器に豆腐を入れたのを一度に十杯二十杯と注文する。蕎麥猪口ぐらゐの容器だから、ドンナ少食の人でも五杯や六杯では足りない。イクラだつたか忘れたが二杯一錢ぐらゐだと思つてる。一本か二本つけてドンナに大食しても一人で二十錢と散財するのは容易で無かつた。安値なもんだつた。

が、笹の雪が繁昌したのは安値な爲めばかりでは無かつた。淡泊で滋味があつて口へ入れると融けるやうなは江戸人の口香に適してゐたからだ。丸ビルの地下室の花月の食堂ではドンブリ飯には豆腐の清まし汁を添へるが、あの食堂のゴタクサした中で一つテーブルに目白押しとするのでは豆腐の味は解らない。笹の雪も朝顏時分には丸ビルの食堂と同じで、間仕切ハ敷居の上までギッシリ詰つて戸外の縁臺にまで溢れてる。斯う世の中が殺風景になつては最う笹の雪時代では無い。山下から三橋へ向つて左へ折れた松堂得知の忍川は、地代後はドウなつたか知らぬが、其つくの昔、料理會席となつた。小糸畫伯の揚出しも中食のお茶屋で揚出しで無くなつた。帝室技藝員の某彫金家が金ピカの大禮服で揚出しへ上つて氣焔を揚げた一つ噺が今でも名人氣質の逸話となつてゐる。大禮服で揚出しへ飛込まうといふ江戸ッ子のお客さんも今は在なくなつたが、豆腐一つで客を呼ぶ家も最う無くなつた。

講釋にも芝居にもなつてる小梅の小倉庵は料理屋と汁粉屋とを兼帶し、汁粉で一杯呑むといふ雨天秤の豪傑を喜ばしたが、根岸の岡野も汁粉はお手の物だが料理も乙なものを喰はせるといふので繁昌した。庭が凝つてるので評判になつた。汁粉屋といふ俗、嚴しい玄關構へで平民は近づけず、上流の貴婦人令孃ばかり出入するといふのでワザ〳〵貴夫人令孃拜見に出掛けるものもあつた。名高い小說家のＩが日曜毎に愛の離れを借切にしてお孃さんを物色に出張したといふ一つ噺もあつた。汁粉屋と云へば此頃イツの間にか影を潜めた池の端の氷

月も東京の名代の家だつた。明治十八年の「東京流行細見」では人山形に二つ星のお職の格で、上野を一ト巡りした歸途が氷月のお汁粉といふ家族伴れの日曜散策のプログラムであつた。

氷月は地震前から南風競はず、昔の氷月を知つてるものは偶々立寄つて幻滅を感ぜずにはゐられなかつたが、東京一と鳴らした頃の氷月は一ト口に汁粉と輕蔑されない贅澤な家だつた。其頃は汁粉の種類も十何通りかあつて、「紅鹿子」と云つたのは一杯二十五錢だつた。蕎麥が「もりかけ」八厘、牛肉が一人前五錢、洋食が七、皿の定食五十錢であつた時代の一杯二十五錢の汁粉は驚くべき高價であつた。汁粉屋といふ條、氷月の格は之でも想像されよう。

だが、最う汁粉屋の時代では無い。氷月に限らず專門汁粉屋は最う成立たなくなつた。汁粉屋ばかりではない、專門の鮨屋も蕎麥屋も年々減るばかりださうだ。今は食堂とカフェーの時代で、新橋を起點として上野にターミネートする東京のバックボーンの南端の銀座も下谷廣小路もカフェーと食堂で鼻を銜いてゐる。上野の山と不忍の池を控へた廣小路は山下から仲町へ掛けては昔からの享樂の巷で、自動車の目眩しい雜沓の今も猶ほ遊山氣分に充たされてゐる。

銀座と相對して東京の二大ブールヴァールである。

珍書掘出し話

日本でも此頃は古版が著しく流行して、今までは好事な學者や讀書家に限られてゐたのが、近頃は骨董同樣に金持の寵兒となつて自然相場がメキ／＼騰貴した。お庇で古本屋が大分成金になつたといふ噂だ。が、珍書も骨董同樣、普通の店で普通の價で買ふのでは面白くなく、意外の家から安價で掘出す處に道樂の興味がある。昔から、珍書の掘出し談は澤山あるが、珍書癖は歐洲人の方が遙かに長じてゐるから、珍書掘出し談も歐羅巴の方に澤山ある。大英博物館の著名な"Book of Saint Albans"も初めは詰らない植木屋が持つてゐたのだ。然るに此植木屋が死んでから後家さんが某商人に九片で賣つたのを、ゲーンスボローの薬屋が店の包紙に使ふつもりで更に買取つた。處が面白い繪があるので包紙にして了ふのも少し惜しいやうな氣がして、或る文房具屋に一ギニイで賣付けようとした。小汚い古本を一ギニイは高すぎると思つて文房具屋は逡巡したが、兎に角暫く預かる事にして飾り窓に飾つて置いた。すると忽ち行人の目を牽いて、近所の或る紳士が五磅で買はうと云出した。そこで文房具屋も萬更なもので無いと氣が付いて、二磅奮發んで薬屋から買取つて、今度は或る珍本屋へ持つて行つて七ギニイで賣つた。此珍本屋から買取つたのが即ちグレヴヰル公爵で、其時の價が七十磅であつた。公爵死後遺愛の藏書が大英博物館に納められ、本書も亦其有に歸して以來俄に好評判が世界に鳴響い。今では若し賣物に出たなら恐らく數萬金以上であらうと、世界の古版鑑賞家を垂涎せしむる大英博物館の誇りの一つとなつてゐる。だが、初めは唯つた九片であつた。

本書は"Bokys of Hunkying and Huntying; and also of Coot armnris"と云つて、聖アルバンスの書といふは俗稱である。之はカクストンの死後カクストンの助手の蘭人ヴォルドが印刷したもので、千四百八十六年即ち我が文明十八年の版である。カクストン版に續いての貴重な古版である。

（「痴の耳垢」より）

年譜

明治元年（一歳）

閏四月五日、下谷車坂六軒町に生る。本名貢、幼名貢太郎。父は幕府の家人内田鉦太郎（後に正と改む）、母は龜戸の茶屋の娘お柳、貢はその長男なり。

五月十四日、上野の戰爭起るや、父は東照宮神體守護のため上野に走り、貢は母に負はれて淺草山の宿に難を避く。（この間の消息は『下谷廣小路』中に詳なり）

この年、母乳乏しかりしため、里親を求めて變ふること二三に及べりと云ふ。

明治三年（三歳）

四ツ谷仲町に住む。

十一月、妹哲子生る。

明治五年（五歳）

淺草北清島町の松前侯下屋敷に移り住む。

九月、母と死別す。

明治七年（七歳）

和泉橋附近の松前小學校に入學す。同窓に笹川臨風、三田村鳶魚等あり。

明治十一年（十一歳）

この頃麹町區飯田町中坂の裏通りに住む。

明治十二—十七年（十二—十七歳）

この間の消息詳ならず、僅かに、小學を終りて後、攻玉舍、立教大學、大學豫備門等に學びしこと、および高等商業學校の入學試驗を受けしことあるを傳ふるのみ。

明治十八年（十八歳）

工部大學入學を志したれど、體量八貫にすら充たざるため斷念す。

夏八月、親戚のもの四五と共に野州鹽原に滯在、專ら、叔母婿井上勤の名によりて後に世に公けにせられしバーテルの『會話編』の下譯に從事す。（當時すでに斯る仕事によりて自活の道を得つゝありしなり。）

フルベッキに就いて基督教を聞きしはこの頃の事と思はる。

明治十九年（十九歳）

飜譯を主とせる雜誌『文學の花』の編輯に井上勤を助く。

ゲーテの『狐の裁判』を飜譯す。蓋し政治家より建築家へ、更に實業家へと三轉せしその志望、やうやくこゝに回轉して文筆生活に入るの端を發せしものと見るべし。

明治二十一年（二十一歳）

山田美妙齋の『夏木立』に感激して書き送りし一文、「山田美妙齋大人の小說」と題せられて岩本善治氏の『女學雜誌』に掲載せらる。これ世に公けにせられし處女評論にして、又、後に同誌寄稿家として不知庵の名を著明ならしめし機緣なり。

十一月、「『眞美人』を評す」を同誌に發表。

明治二十二年（二十二歳）

春、尾崎紅葉と相識る。

夏、富士山麓に遊び、折柄携行のドストエフスキイの『罪と罰』を讀みて露西亞小說の偉大なるに甚深の感動を與へられ、初めて小說に對して敬虔の情を持つに至る。

十一月、二葉亭四迷に初對面をなす。これによりて更に文學の中に人生と交涉する嚴肅なる意味を認むるに至る。

この年、二月「スウキフト傳」を『女學雜誌』に、「『蝴蝶』評」を『以良都女』に、三月「竹柏園女史の『胸の思ひ』」を『女學雜誌』に、七月

「詩文の感應力」を、八月「市川白猿」を「國民の友」に、十月『詩文の粉飾』を、十一月「日本小說の三大家」を「小文學」に、「紅葉山人の『戀の山賊』」を「女學雜誌」に、十二月「饗庭篁村先生の文章」を同誌に發表す。又、隨筆『落葉』もこの年の作なり。

明治二十三年（二十三歲）

二月一日、「國民新聞」の創刊に當り德富蘇峰氏に聘せられて民友社に入り編輯の一員となり、爾後足掛二年主として文學評論に筆を執る。（勤人らしく日々外出する生活形式をとりしは一生を通じてこの二ケ年のみなり。又、交友多くしてよく談ずるの性なりしも、文壇人らしく一黨一派に加はるが如きことは遂になさゞりき。）

この年、二月「梅見ずの記」を「國民新聞」第九號に、三月『安房巡禮』を同紙第五十六號に、八月『瀧見物』を同紙第九十一號に、十月『見聞のまゝ』を、十一月『綠蔭茗語』を、何れも「國民の友」に發表す。

齋藤綠雨と識りしはこの頃なり。

當時は神田小川町に下宿す。

明治二十四年（二十四歲）

一月「談辯」（こは「指環」評）を「女學雜誌」に、二月「鷗外に與ふ」を「柵草紙」に、三月「饗庭篁村氏」、五月『東花坊支考』、七月「雜筆」、十一月「現代文學」を、何れも「國民の友」に載す。

明治二十五年（二十五歲）

二月「讀小說法」を「少年園」に、「二十四年の文學を懷ふ」を「早稻田文學」に發表。

三月「文學一斑」を處女出版す。

當時は神田猿樂町の板垣に下宿す。其前後に於て土手三番町、本鄕眞砂町、同じく弓町等に轉々せしも、この板垣にて漸く落居を見出せしが如し。

十一月飜譯『罪と罰』卷之一を出版。

明治二十六年（二十六歲）

二月『罪と罰』卷之二を出版。

四月飜譯『巨人談』を「三籟」に、七月『今日の小說及小說家』を「國民の友」に、九月トルストイの『凄涙』を同誌に發表す。この年アンデルセンの『極樂鄕』『雪の女王』、アーレン・ポーの『黑猫』、ブレットハートの『孤屋』、ヂィツケンスの『黑頭巾』、ウエールスの『明日』を集めて飜譯短篇集『鳥留好語』を出版。

明治二十七年（二十七歲）

四月戲文『文學者となる法』を三文字屋金平のペンネームにて出版す。世評高し。此の月「ラセルス傳」を發表。

五月、飜譯トルストイの『めをと』、ドストエフスキイの『損辱』を「國民の友」に發表。

七月「ジョンソン傳」を出版す。

十月、父正病死す。

明治二十八年（二十八歲）

二月「沙翁の事歷」を「二六新報」に、五月「戰後の文學」（發表誌不詳）、九月「夏と秋とに係る和歌及俳句の評」、「小說界の新風潮」、十月「一葉女史の「にごりえ」」、十一月「讀詩饒舌」、十二月「「獺祭書屋俳話」を讀む」を、何れも「國民の友」に發表す。

明治二十九年（二十九歲）

一月「閨秀小說を評す」を「每夕新聞」に、「國民之友新年附錄を評す」を「讀賣新聞」に、七月飜譯「しき浪」を「文藝俱樂部」に、同じく飜譯『しだら電』を「時事新報」に、ジューマの『椿夫人』を「世界之日本」に、八月『雨の日ぐらし』（發表誌不詳）を發表。

明治三十年（三十歲）

一月飜譯コンウェーの『彫像師』を出版す。

二月「ゾラの「戰塊」の後に書す」を「文藝俱樂部」に、五月「芭蕉桃青傳」上を「太陽」に。

明治三十一年（三十一歳）

二月『處女小説』くれの廿八日』を「新著月刊」に發表し所謂社會小説の創作に先鞭をつく。世評高し。又この月『如是放語』を發表。七月『破落戸』を「新小説」に、『とはず語り』を「太陽」に、『今樣濁世界』を「文藝倶樂部」に、九月『老車夫』及『芭蕉後傳』を「太陽」に、『湯女』を「新聲」に、『政治小説を作るべき好時機』(詳不)等を發表。九月、布施讓の長女敬子と結婚し江戸川邊に一戸を構ふ。家の近きにより川上眉山と盛に往來せしはこの頃なり。片山潛と若干の交渉をもち、「勞働世界」に「革命會議」を連載す。未完。即ち早くよりこの方面への志ありしを知るべし。

明治三十二年（三十二歳）

一月『あたら夜』を「天地人」に、二月『伯剌西爾文豪シルヴヰオ・デイナルテ』(發表誌不詳)、三月『落紅』を「太陽」に、四月『かた鶉』を「文藝倶樂部」に、五月『霜くづれ』を「新小説」に、六月雜録『朝茶の子』を「新小説」に、八月『嚼氷冷語』を「太陽」に、『血ざくら』を「新小説」に、九月『電影』を「太陽」に發表す。

明治三十三年（三十三歳）

二月十五日、長男巖生る。

二月『雪ごもり』を「二六新聞」に、三月『愛慾』を「文藝倶樂部」に、四月『天籟鈔』を「新小説」に、五月『青理想』を同誌に、『國有鐵道』を「太陽」に、七月『隣同志』を「新小説」に、九月『夜行車』を「新聲」に。この月、少年讀本『荻生徂徠』を出版。十月『しのびね』を「文藝倶樂部」に、十一月『獵官』を「太陽」に發表。

明治三十四年（三十四歳）

牛込東五軒町に移轉す。九月丸善本社に入り、機關誌「學燈」に善六、善吉、柏木衛門、駿河呼然の戲號にて執筆す。（爾來三十有餘年圖書顧問として同店に勤續　この年初めて魯庵の號を用ふ。他に砂邱子、無名庵、蠹魚窟善休、郊外生、藤阿彌、黒瘦子、大窪桃人、燕夢等の匿名を用ひし事屢々あり。

この年一月「文藝倶樂部」に發表せし『破垣』發禁さる。また『老莊士』を「太陽」に、『古情人』を「女學世界」に、三月『丸の内』を「太陽」に、五月『投機』を同誌に、『藤さくら』を「花月世界」に、八月『横ぐも』を「文藝倶樂部」に、『ノルダウの十九世紀評』を「新文藝」に、九月『學生監督』を「太平洋」に、『古物家』を「太陽」に、十二月『片時雨』を「文藝倶樂部」に、『犬物語』(發表誌不詳)を發表。

明治三十五年（三十五歳）

この年九月創作集に『破垣』に就ての論文を附し『社會百面相』を單行す。三月『貴夫人』を「太陽」に、四月『温泉場の一日』を「新小説」に、五月『破調』を「太陽」に、『社會詩人』を「文藝界」に、六月『茶筅の塵』を「文藝倶樂部」に、十月『すねもの』を「太陽」に發表。

明治三十六年（三十六歳）

四月、次男健生る。

九月牛込新小川町に移轉。

平子鐸嶺、結城素明等と知る。

一月『むかし氣質』を「女學世界」に、三月『女先生』を「太陽」に、八月『御用商人』を「太平洋」に、九月『家庭難』を「文藝倶樂部」に、『英文學書史』を「學燈」に、十月『狂畫學』を「太陽」に發表。

明治三十七年（三十七歳）

春、牛込砂土原町に移る。

この年二月『トルストイ談』三月『夢に老翁と語る記』、四月『トルストイの『復活』を評するに就て』を何れも「學燈」に、六月『みあかの記』を「文藝界」に、七月『續篇問答』を「學燈」に、十二月『戰死者の妻』を「太陽」に。

明治三十八年（三十八歳）

一月「擬寶石」を「太陽」に、「トルストイ訪問記」を「學燈」に、十二月「大英百科全書物語」を同誌に發表。

明治三十九年（三十九歳）

一月トルストイの『イワンの馬鹿』を單行。

十二月麹町富士見町に移る。

この年六月「コローの作畫」を「讀書偶筆」に、八月「慈善夫人」を「太陽」に發表。

明治四十年（四十歳）

四月二日、長女百合子生る。

明治四十一年（四十一歳）

再び牛込砂土原町に移る。

六月京阪地方旅行中に、川上眉山の訃報に接す。

二葉亭四迷の露西亞行を送る。

八月次女田鶴子出生。

この年十月、トルストイの『復活』前編を單行。

なほ一月「書籍趣味」を、六月「文界時言」を、「演舌筆記」「二葉亭送別會」を、いづれも「趣味」に、九月「人生に觸るゝとは何ぞや」を、十月「性格描寫と事件」をいづれも「文章世界」に、十一月「自殺に就て」を「趣味」に、十二月「問はず語」を同誌に發表。

明治四十二年（四十二歳）

五月親友二葉亭と永別す。

同月翻案「イカモノ」を、十一月シェンキーウイッチ『二人畫工』を上梓せしが、後者は發賣禁止となる。

この年一月「忙中一閑語」を「趣味」に、二月「三ケ日」、五月「對客雜談」を、七月ラバータの「生れ變りし後」を何れも「趣味」に、「獨歩氏の作品と世間の好尚」を「新潮」に、「二葉亭四迷」を單行本「二葉亭四迷」の中に、十月シェンキーウイッチの「十字架のエス」を「趣味」に、十一月「予が見たる伊藤公」、十二月「今年の特徴三つ」を共に「文章世界」に發表。

明治四十三年（四十三歳）

一月トルストイの『復活』後編を上梓。

四月「灰燼十萬卷」を「趣味」に、「要ある團體と要なき團體」を「文章世界」に、「鷗外博士のキタ、セクスアリス」の批評「日本の道學先生」を「東京朝日」に發表。七月傳記「牛岳遺事」を宮田家の爲に執筆。同月「英國に於けるイブセン劇の編年書史」を「學燈」に、八月「飜譯文と文章の進步發達」を「文章世界」に、九月「書齋生活」を「學燈」に、十月「早稻田派」、十一月「森鷗外論」をいづれも「新潮」に發表。

明治四十四年（四十四歳）

一月「錦繪の國としての日本」を「日本及日本人」に、「一年の暮」を「朱欒」に、二月「小說脚本を通じて觀たる現代社會」を「太陽」に、六月「自覺せよ若き女」を「婦女界」に、七月「眞に文章を學ばんとする者に」を「文章世界」に、九月「性慾研究の現在」を「新公論」に、「罪と罰」の新譯及舊譯出版」を「文章世界」に、「婦人の自覺に就て」を「早稻田文學」に、ワイルド作「悲劇革命婦人」を「東京朝日」に發表。

明治四十五年（大正元年）（四十五歳）

一月「醒めた女」を「東京朝日」に、四月「明治の文學の開拓者」を「中央公論」に、五月「明治の飜譯」を「新潮」に、六月「二十五年間の文人の社會的地位の進步」を「太陽」に、七月「トルストイの話」を「東亞の光」に、八月「嫉妬論の不必要」を「廓清」に發表。また「移轉男」（掲載誌不詳）を執筆。九月「明日の飜譯」を「新潮」に、十月「氣紛れ日記」を「太陽」に、十二月「或る朝の座談」を「新潮」に發表。

大正二年（四十六歳）

市外淀橋町角筈へ移轉す。

十月三女美莉子生る。

この年一月「新しくない新しい女」を「新公論」に、『多讀する予多作する予』を「文章世界」に、二月『シロウトの書世書』を、三月「俗氣」を何れも「現代」に、同月「露西亞文學に影響せず」を「東京朝日」に、『「杏の落ちる音」の主人公』を「ホトトギス」に、『傍觀者としての文壇の瞥見』を「文章世界」に、四月「綠雨の十週年」を「現代」に、「何人も洋行の必要あり」を「新潮」に、五月「驅逐されんとする文人」を「現代」に、六月『新しい女の第一努力』を「太陽」に、七月「日本に於ける婦人問題」を「中央公論」に、九月「書齋の窓より」を「太陽」に發表。

大正三年（四十七歳）

この年九月病人續出のため柏木に移る。爾來十餘年の長きこの家に住む。悲喜いづれにも思出多き家なり。

五月、文集『沈默の饒舌』を「大正文庫」より上梓す。

一月『淀橋の長者傳說』を執筆。三月『新劇團の現在及將來』を「新潮」に、六月「蘆花君』を「中央公論」に、九月『美學上の一新假定「書盜」』を「學燈」に、『德川時代の所謂軟文學の價値』を「國民文學」に發表。

大正四年（四十八歳）

一月『一九一五年を迎へ「一生活問題を思ふ」』を「時事新報」に、五月「齋藤綠雨」、八月「山田美妙」を執筆。九月「三十年前」「インカ鳴壺」を「犬梟」に、十月『淡島椿岳』を「硯友社のむかしの憶出」に、十二月「御大典記念として亞細亞圖書館の建設」を「太陽」に發表。

大正五年（四十九歳）

この年三月隨筆『きのふけふ』を單行。又博文館より『獨逸の誇大妄想狂』を上梓す。

大正六年（五十歳）

一月「蠹蟇錄」を「學燈」に發表。

一月四女惠美子生る。

同月「温情の裕かな夏目さん」を「新小說」に發表し、十一月「顧愷之の「女史箴」」を執筆。

大正七年（五十一歳）

三月、三男穆生る。この頃より長女百合子病む。

この年、一月「露西亞は分裂乎滅亡乎」を「太陽」に、二月「永井荷風氏の印象」を「新潮」に、十二月「蠹魚談」を「學燈」に發表。

大正八年（五十二歳）

この年次男健も病臥し憂苦を二倍す。

一月『ひとりごと』、二月「中世紀の最も美しいローマンス」、四月「古羅馬の圖書館」、五月「東西の蒐書及印書の比較」、六月「書目瑣談」を、何れも「學燈」に、九月「文壇四十七家の都下新聞同盟休刊に關する感想」を「新潮」に發表。

大正九年（五十三歳）

七月末、長女百合子病死す。悲しみのあまり生前の面影十條を收めし寫眞帖「百合の花びら」を作り、亡兒を偲ぶ。

四月「初めから縮本である雜誌」を「集古」に、十二月隨筆『バクダン』を「讀賣」に連載す。

大正十年（五十四歳）

五月「鎖の舌」を春秋社より出版。十月『ポスター雜說』を「國粹」に發表。

大正十一年（五十五歳）

十月「バクダン」を春秋社より出版。尚ほ八月「鷗外博士の追憶」を「明星」に發表。

大正十二年（五十六歳）

一月一日、次男健二十一歳にて死去。九月大震災に遇ふ。之より元氣頓に衰ふ。七月「日本の漫畫家」を「中央美術」に、十月「典籍の廢墟」を「改造」に、「永遠に償はれな

い文化的損失」を「東京日々」に發表。

大正十三年（五十七歳）

一月「捷書是非」を「大阪毎日」に、四月「圖書館の復興と文獻の保存」を「報知」に、五月「蠹魚の自嘲」を、七月「出版上の道德」を、いづれも「東京日々」に、十月「最後の大杉」を執筆し、十一月「讀書は文化的享樂」を「東京日々」に發表。

大正十四年（五十八歳）

この年大久保百人町に移轉し、元氣やゝ恢復す。

六月「思ひ出す人々」を春秋社より單行。

なほ一月「ド・リブレエル」を「書物往來」に、九月「法然傳」を讀む」を「東京日々」に、「本屋と著作」を「報知」に、十一月「丸善再度の典籍禍」（隨錄書）「人相見」を「文藝春秋」に發表。

大正十五年（昭和元年）（五十九歳）

一月末より大腸加答兒にて六十日間臥床す。

なほ一月「一葉の廿八日」その他」を「早稲田文學」に、「江戸ッ子大臣」を「文藝春秋」に、七月「自由民權の憶出」を「新舊時代」に、十月「新舊を閑却するは本當の讀者家に非ず」を「東京日々」に發表。

昭和二年（六十歳）

勢力減退し筆力苦澁を極め、更に十一月尿毒症に犯され、一時執筆全く不可能に陷る。

この年、四月「古本及古本屋」を「古本屋」に、六月「明治十年前後の小學校」を「太陽」に、七月「八犬傳僻道」を「日本名著全集」に、十一月「古本屋の目錄」を「古本屋」に發表。

昭和三年（六十一歳）

健康漸く勝れず。

一月「書齋の Past and Present」、十一月「藏書票」をいづれも「中央公論」に發表のほか「市島春城翁の「賴山陽」」を執筆せしのみ。

昭和四年（六十二歳）

一月「銀座繁昌記」を「中央公論」に掲載す。

二月七日、松坂屋より依囑せられし「下谷廣小路」の執筆中、突然失語症に陷る。多年の精神過勞の結果なり。

爾後、一時小康を得しも病臥半歳に亙り、遂に六月二十九日、代々木山谷の假寓に逝く。越えて七月二日、平素既成宗教に沒交渉なりし故を以て友人葬の名の下に青山齋場に於て葬送の式を營む。



○或人梅室の「風吹かぬ方に行燈おち向けて」の句に脇を作らんとて種々推敲すれども適句を案ずるを得ず。漸く「馬に召せよと蒲團投出す」の句を考へ出せしか、猶ほ安んずるを得ずして去つて蒼虬に量る。蒼虬即下に筆を執てさらさらと認めて曰く「去らるゝ覺えないとゐすわる」と。其人大に喜びて句を以て梅室の許へ行きて示したりしに、梅室數度吟じて曰く、我が句の脇としては「去らるゝ覺えないとゐすわる」の句は、動かぬ案なり。然れども此句を案ずる者は當今蒼虬一人なり。足下輩の作り得るものにあらずと。即ち「馬に召せよ」との句を採て其脇とす。此逸事の眞僞は知らねども面白ければ人の語るまゝ。

○此頃讀みし古人の俳句中、

ちやんがらちやんがらあほゝおほゝの花の山　來山
寐てゐるよが起きてゐるようが花の春　西吟
花化けて目鼻ばかりや暮に聲　高政

餘りに笑止しければ書留めたり。談林の句は得て無法に流れ易し。

（「落葉」より）

武林無想庵集

あさごはんくはずとなか
ちなのしおい
何を
あての ぶらくらへつ
しん和ん 花

ピルロニストのやうに

なぜ生まれたのか、なぜ生きなければならぬのか、なぜからやつて生きてゐるのか、さうしてなぜ老い朽ちて、なぜ死なねばならぬのか、私はもう四十だが、さうして多く考へてばかり暮らしてゐる身だが、今もつて分らない。恐らく死ぬまで分るまい。

私はたゞ漠然と生きてゐる。時々金がほしいと思ふ事もある。けれどもそれは美人を見たり、立派な邸宅を見たり、世界漫遊がしたくなつたりする時にかぎる。からやつて、まづい物をたべて、汚い着物をきて、本を讀んだり、飜譯をしたり、ゴロリと臥ころんだりしてゐる時は、何にもほしくない。さうして頗る滿足だ。

併し隨分退屈で困る時もある。文章は書く氣にならず、本は讀む氣にならず、ゴロリと臥て見る氣にもならず、實際在ても立つてもゐられなくなるほど、退屈でく／＼たまらない事がある。さういふ時には、一番景氣よく新橋か柳橋へ出かけて、大勢美人でもよんで、成金達のやりさうな馬鹿眞似がしたいと思ふ。が、考へて見ると、私にはそんな金のありさうな筈はない。そこで美人は斷念する。友達のとこへでも押しかけて話し込まうかとも思ふ。けれども友達は皆な他人だ。會つて話して見たところで、お互ひにごく上つ面の事しきや話す筈はない。友達はやめにする。芝居にも寄席にも行く氣はしない。たゞブラブラと散歩するのも下らない。どうしていゝか分らなくなつて、しかもいよ／＼退屈でしかたがなくなる時がある。

矢も楯もたまらなくなると、とりあへず、兎に角外へ出る。歩けば露路に沿うて自然と電車通りへ出る。知らず／＼停留場の前までゆく。築地兩國が來る。九段兩國が來る。淺草が來る。上野が來る。三四臺やりすごすうちに、自然と出かける方向がきまる。大抵は淺草へゆかうと思ふ。新聞廣告で見たキネマ倶樂部か電氣館か帝國館かへ行つて見る氣になるのである。さうしてその三館を皆見て了つたやうな時には、銀座へゆかうと思ふ。銀座はたゞブラつくだけだ。

歸ると大抵十一時すぎになつてゐる。婆さんの敷いて置いてくれた寢床の中へすぐにもぐり込む。さうしていろ／＼な夢を見て、翌朝目がさめると、この退屈が生ずるまで、まづい物をたべ、汚い着物をき、書を讀み、飜譯を續けるといふ、甚だ平凡な、しかも甚だ滿ちた日程に這入る。

――人は希望に生き、滿足に死す。といふやうな諺をば子供の時耳にした事があつた。考へて見ると、私には今全く希望といふものがない。さうしてたゞ現在の滿足だけが殘つてゐる。諺の言葉に準ずると、私は死んだ人間と云はなければならぬ。

財布の中に金がなくなると、同時に私には世の中がなくなつて了ふ。たとへば友人と會食する約束をしたとする。友人は私の財布にも相當の金があるものと信じてその約束を守る。然るにその當日となつて私の財布に一文の金もなくなつてゐる場合には、私は約束した會食の場處へ行く事が出來ない。葉書も買へない時が

ある。心ならずも私は友人に待ちぼけを食はせるやうになる。從つて友人は私を信用しなくなる。友人に信用がない事は、世の中のない、最も有力なる證據である。

いつぞや、活動で、Beggars on horseback といふ文字を見た事があつた。さうして自分も亦馬上の乞食の一人だと思つた。

この世智辛い世の中に、何事もたゞ金ばかりで解決が出來さうに見えてゐる世の中に、私は悠々閑々として棲息してゐる。即ち金になりさうな事には全く頭も手も使はずに生きてゐる。自分ながら隨分愚かな人間だと思ふ。隨分無能を極めた人間だと思ふ。でも仕方がないと思つてゐる。かういふ風な傾向を持つて生まれて來たのだから止むを得ないと思つてゐる。奮發といふ事をしなければ、努力といふ事をしなければ、人生は果して過してゆけないところだらうか？ それが爲に若し人間が必ず自滅する筈に出來てゐる人生なら、私は晏如として自滅するより仕方がない。昔は從容として死に就く事を士の本分だと心得てゐた。犬死でも何でもかまはない。金をとる努力をしなかつた爲に、私は從容として死に就かう。さう覺悟して私は生きてゐる。

私のやうな人間が多くなれば、その社會は必ず墮落する。その國家は必ず滅亡する。私は社會主義者の敵である。私は國家主義者の黴菌である。けれども生物學上の見地からすると、一主義者の敵も、一國家の黴菌も、それ自身としては、必ず潑剌たる一箇の生物である事を忘れてはならない。

私の兩親は私に失望して死んだ。私の妻は私に虐待されて去つた。私の友人は私と行動を共にする事を厭うて遠ざかつた。又いろ／＼の處女は私に弄ばれたさうである。又人妻で私の爲に身を誤つた女もあると云ふ。けれども私は彼等の誰もに對して決して罪惡を犯すなどとは思つてゐない。私はたゞかく生れたにすぎない。さうしてたゞかく外界と接觸して來たにすぎない。正とか邪とか稱せらるゝ一箇の幻影があつて、そこにはじめて罪惡とか不正とかいふアトリビュートが生ずる。私には幻影がない。隨つて正邪の觀念がない。善惡の差別が分らない。私は恐らく道德上の色盲患者なのであらう。

日の經つてゆくのが恐ろしいやうな氣がする。勿體ないやうな氣もする。怠惰といふ事に對する因襲的の觀念が無意識に働いて、さうした氣を私の心に起させるのはよく分つてゐる。怠惰と戰つて何かするのも、怠惰のまゝにうち任せて暮らすも、結果から見ると同じ事なのだが、結果といふものに重きを置く觀念かやつぱり因襲的のそれに外ならない。私は怠ける事も出來ぬ。又勿論働く氣も起らない。さうして日は經つてゆく。どし／＼と經つてゆく。

明らかに私は穀潰しである。社會にとつて有害無益な人間である。けれどもそれに對して私は責任を持つ事が出來ぬ。私は勝手に生れたのではない。生まれたくて生まれたのではない。私の父母も私のやうなものを生みたくはなかつたであらう。それゆゑ父母にも責任はない。生まれて見ると、私が斯く穀潰しであつた

にすぎない。これは誰にもどうする事も出來ない。一日も早く私の有害無益なる生存が社會から消滅する日を待つより外に仕方がない。但しそれは社會といふものを標準にした場合にかぎる。私には社會を無視する事が出來る。利己の外何事をも考へないでゐる事が出來る。自己以外の一切を持つて、悉くたゞ自己の生存の材料であると考へる事が出來る。さう考へると、私は決して穀潰しではない。宇宙は皆私自身の生存を享樂させる爲に存在してゐるのだから、享樂の出來得るかぎり彼等を享樂して死ねばいゝわけである。社會中心か自己中心か、而も私はそのどちらをも信用が出來ない。元來中心のない宇宙に、そのどちらも強ひて假設の中心を置いて考へた事だからである。然らば假設の中心を置かずに、人は何事かを考へる事が出來るか。それは出來ない。出來なければ中心を置いて考へるより外に仕方がないではないか。けれども人は必ずしも考へる爲ばかりで生きてゐるわけではない。假設の中心を置いて強ひて考へるにも及ばない。考へたい人は考へるがいゝ。併しどの考もすべて皆假設の上に立たざるを得ない。さうして人には一切の假設を信用しない自由がある。私はたゞ一切の考を信用しないやうな傾向を持つて生まれ出た人間であるにすぎない。

友人が來る。飮みに出る。梯子をやる。自動車へ乘る。よからぬところへ足を踏入れる。四十圓や五十圓は忽ち飛んで了ふ。私の收入は月に百圓しきやない。友人が二三回やつて來ると、家賃も拂ふ事が出來なくなる。私には友人は禁物だ。或友人は私の收入は少くとも三百圓位あるだらうと云つてゐる。して見ると、私の生活の外形は二百圓かた虚僞が含まれてゐるわけだ。さうして相互の友情は多くその虚僞の上に成立つてゐるから面白い。友人と遊び歩いたあとで、私はいつも不快を感じない事は少い。

それは酒をのむからだ。それは性慾を充たしたくなるからだ。倘一歩進めて云ふと、女なしに生活してるからだ。云ひ換へれば、幸福なしに生活してるからだ。働かずに生活してるからだ。働かないから退屈する。幸福を感じないから生きてる甲斐がないやうに思ふ。心から愛し合ふ女がゐないから幸福が感じられない。そこで酒でごまかす。そこで賣女を抱いて一時の慾を遂げる。ます／＼不快となる。ます／＼得られぬ幸福を憧憬する。ます／＼捨鉢な了見が起る……私はなぜこんな生活ばかり續けてゐなければならぬのか？

私の心はまた混亂しはじめた。やりかけた飜譯も續ける勇氣がなくなつて了つた。書物などはもう二十日間まるで手にさへした事がない。起きると机へ向つてすぐ手紙を書くのだ。どこへ？ どこへと考へてもいやになる。どうした心の加減か知らぬが、私は急に或女を戀しはじめたのだ。それは人の奥さんだからいやになる。どうせ遂げぬ戀とは承知しながら、何の因果かどうしても諦められぬ。そこでその苦しさを筆に愬へる。それが手紙となる。出したつて仕方がないと思ひながら、封筒の上書をかく。切手を貼る。ポストへ抛り込む。今度は返事が待遠しい。一日に何度となく郵便受函を覗いて見る。その奥さんは勿論おやさしい方だから、可哀さうだと思はれて、三度に一度は返事を下さる。それゆゑなほ戀が募る。ねてもさめても

目先にチラつくお顔が實際に見たくなる。顔を見たらそれでいゝのか。話が出來たらそれでいいのか。何といふ私は馬鹿者なのであらう？

家に居ても何一つ手につかない。外へ出る。酒をのむ。よからぬところへ足を向ける。茹だるほど飲んで飲んでからだをこはす。一文なしになつて、死んだやうになつて、立歸るとすぐ寢床の中へ横たはる。さうして奥さんの事ばかり思ふ。たまらなくなると、机へ這ひよつて手紙を書く。さうして足を曳きずるやうにして出しにゆく。たま〳〵返事でもくると、蘇つたやうに終日その手紙を讀み直してゐる。私は氣が狂つたのかも知れぬ。奥さんに決して私のやうな無法な戀を受入れるやうなお方ではない。それはよく分つてゐる。分つてゐるくせに諦めかねてゐるのだ。諦めるどころか、いよいよ戀しくてたまらなくなるのだ。馬鹿な。馬鹿な。どうしたらこの戀を思ひきる事が出來るだらう？

家財道具を叩き賣つて了ふ事にきめた。書物はもうみんな賣つて了つた。私は鞄一つになる。さうして日本中を放浪する、札幌にある私の地面が賣れるまでは日本の外へは出られない。併しそれも賣る筈になつてゐる。さうしてそれが若し賣れた時には、私は日本を立去る筈になつてゐる。何の爲に鞄一つになる氣なのか、何の爲に外國へ行く氣になつたのか、自分でもわからない。その外遊について或友人はこんな手紙をくれた。

――君が求めてゐるものは「仕事」とそれから「愛」の二つではないでせうか。それが得られない爲に、君は始終自己に對してむごたらしい反逆を企ててゐるのではないでせうか。この二つのものを把握しさへすれば、君は聰明な善良なると同時に幸福な人として生きる事が出來るのではないでせうか。僕にはどうしてもさうとしか思はれないのです。

――この二つのものは外國に求めるよりも寧ろ日本に於いて求むべきだと思ひます。また日本でなければ求められないかとも思はれます。

手紙はまだ長いものだが、主意はこれだけのものである。私は果して「仕事」を求めてゐるのか知らん。また「愛」を求めてゐるのか知らん。よし求めてゐるとして、それが求め得られるものか知らん。私には妻がない。職業がない。たゞ私に妻がないのか知らん。なぜ私に職業がないのか知らん。なぜ私はその二つのものを求めようとはしないのか知らん。さうして私は鞄一つになるのだ。さうしてその鞄を棄てて了ふ日もさう遠い事ではなからう。さうしてそれは恐らく私のこの世を去る時であらう。

――私は死ぬのは平氣ですよ。と、奥さんが云つた。

――あなたは？　と、訊かれて、私は返事に困つた。

私は別に今死にたくはない。併し死が目前に迫つたところで私は決して恐れもしない。が、さういふ死はいつ私の目前に迫るであらう。

放浪をはじめて今日でもう五日目になる。爰は靜かだ。十疊間の天井が高い。取替へたばかりの疊が清新な匂ひを放つ。波の音が遥かに轟いてゐる。廣い庭に松ばかりある。松を越えて海が見える。海のかなたには島も見える。ゆうべはその島にチラチラあかりなども見えてゐた。

私はどうしてこんなところへ來たのだらう？ 又昔茲は谷崎君が時々見える宿屋ださうな。又昔山本君も長らく滯在してゐた事があるとかきいた。なるほど南君の氣に入りさうな家だ。金のある間は私もかういふ家にゐたいと思ふ。

——お一人ではお淋しうございませう。と、どの女中もどの女中も同じ事を云ふ。

——奥さんをお招びになつたらいかゞでございます？ と云つてくれる者もある。

招びたいのは山々だが、人の奥さんでは致し方もない。

放浪をはじめた日から、私の頭の中にはあの奥さんの姿ばかり執拗にコビリついてゐる。その奥さんの顏が見たくて、手が握りたくて、たゞそれだけの爲に、忠實な婆さんを棄て、愛する猫をすて、家財道具の一切を棄て、書物を棄て、東京の生活全部を後にして、フラフラとかうして出て來たやうな氣がしてたまらない。

家を出る時には、婆さんはまだ殘つた品物に未練らしく取りついてゐた。辻君が賴んで來てくれた車に乘つて、私は東京驛へ赴いた。さうして鞄を一時預けにして、食堂へ這入つた。二三杯引つかけたウヰスキイの元氣で、私はそれからお名殘りに銀座を散歩した。

その四五日前、私は辻君と二人で銀座をブラついたが、その時辻君はこんな事を云つた。

——僕は銀座へ來ると、自分がエトランゼのやうな氣がする。

私は心の中でかう思つた。

——俺はこの世の中にゐるなと考へる時、いつでも自分がエトランゼのやうな氣がする。廣い天地に俺は死ぬまでひとりぼツちでゐなければならぬのだ。

辻君はプロレタリヤを以て自ら任じてゐる人だ。それゆゑに仲間がある。さうしてその仲間は世界中に擴がつてゐる。私には仲間といふものがない。私の頭には國家もない、社會もない、世界すらもない。たゞ奥さんの姿ばかりがある。さうしてその姿が私の頭から消ゆる時は……

——香風園まで。

——宿屋ですね。

——さう。

山本君のところへ立寄り、水島君の家へ一泊して、私は雨の東京を去つた。さうして三浦半島の唯ある停車場で降りた。

香風園といふのは、小綺麗な溫泉旅館で、廣い美しい庭園の中に、貸別莊がいくつか建つたところだときいてゐたが、車夫の抱き込んだ家は、小汚い下宿屋見たやうな家であつた。あんまり不思議なのできいて見ると、

——あすこはこの六月に成金さんに買はれて了ひましたので一時廢業致しましたが、先月から又こゝで始めましたのでございます。と、たつた一人しきやゐない女中が答へた。

雨は降る。夜にはなる。止むを得ず一泊する事にきめた。ヤケ氣味で、藝者などをよせ、大酒を呷つてねた。それが放浪の第一日!!

翌日はいゝ天氣であつた。前日にこりたので、最初は小町園で極める事にした。隣りは婆さんの信心する日朝様だ。その寺の屋根が見えて、目前に擴がつた廣い庭の一隅には、菊などが造られてあつた。

酒をのみながら奥さんへ手紙を書いた。すぐ返事があつて、七時頃まで待つててくれといふ

命令だ。所在なさに、又昨日の杳のやうな顔した藝者をよんで、トランプなどして他愛もなく遊んだ。

藝者を返すと、間もなく奥様が見えた。

逢つたら、いろんな話をするつもりだつたが、顔を見ると、何にも話す事はない。

――そんなもの見なくたつてよござんす。と、奥様は私の手にあつた旅行案内を奪つて食卓の下へ押し込んだ。

――では、どつしたらいゝでせう？ と、私は酔つぱらつた眼を強ひて見張つてきゝ返した。

――遠くへ行つちやいやよ。と、奥様は媚びるやうに答へた。私はその媚びるやうな眼に征服された。

一寸先は暗だ。私はとにかく小町園へ荷物をあづけて、而も勘定をすまして、手拭までもらつて、奥様と手をつないで歩いた。暗い町を歩いた。どこまでもどこまでもと歩いた。私はどこをどう歩いてゐるか知らない。が、奥様はよく知つてゐるのだ。御自分の家へお帰りになる道を歩いてゐられる事を知つてゐるのだ。私と奥様とはそれだけ地位が違ふ。道がわるかつたので、二人は時々手を放さなければならなかつた。けれども星は美しい夜だつた。

四日目には奥様へ電報などかけた。どうせ来ては下さるまいと思つてゐると、

――御婦人のお客様でございます。と、翌日の午後、女中が物静かに襖をあけて案内した。私はハッと嬉しかつた。が、坐るか坐らぬのに、

――けふはすぐ帰ります。あしたまた来ます。と、奥様は意地の悪い事を仰しやるのだ。

――それぢや、お帰りなさい。もう来なくたつてよござんす。と、癪に觸つたので、私は心にもない事を云つた。

――憤っちや駄目よ。けふはよつぽど止さうかと思つたの。都合のわるい事もあつたし、それに雨も降つてゐたので……

それでも奥様は夕食に箸をつけてから帰られた。

暗い、道のわるい、方角のさつぱりわからぬ松原の道を、さんざんに迷ひ迷つて、二人は又手をつなぎながら歩いた。かうして歩いて下さる奥様のお志のほどを思ふと、私はもうこのまゝ死んでもいゝやうな心持になつた。

翌日も曇つたり降つたりした。

けふこそは来て下さるまいと思つて、別れの手紙など認め、夕飯の膳に向つて、チビリチビリのみはじめてゐると、案外にも奥様は又来て下さつた。

ゆうべは思ひがけなく奥様が来て下さつた嬉しまぎれか、或ひは一本よけいに飲んだ爲か、ひどく神經が昂奮して、さんざん、子供のやうに駄々をこねた擧句、奥様の帰られたあとで、妙に胸が一杯になつて、ボロボロ涙さへとめどなく流した。

その涙の顔を女中に見られたのが小愧かしくて、戀の家にゐるのが一刻もいやになつた。それに天氣がばかによくなつた。とにかくヂッとしてゐられなくなつたので、朝飯をすますと、すぐ勘定して出かける事にした。

――大そうお早いのですね。これからどちらへおいでになります。と、女中が云つた。

せう。

——さア、とにかく藤澤まで出よう。

それでは車屋さんにさう申して置きませう。

あんなに駄々をこねたまんまで、永久に遠いところへ行つて了ふのも、何だか寝覺がわるいやうな氣がしたので、藤澤の方へゆく電車に乘る事は見合はした。

鞄を一時預けにして置いて、心地よく朝日の輝いた松林の道を通つて、鳥居を潜つて、橋をわたつて、畦道をぬけて、もう決してまたぐまいと思つた家の玄關へかゝつた。

玄關には男の下駄が一足脱いであつた。それを見ると急にいやアな氣がしたので、よつぽど引返さうかと思つたが、そのうち女中が出て來て、

——どうかお上り下さい。と、云つたので、心弱くも、やつぱり又例の立派な玄關へ通る事になつて了つた。

やがて奥様は出て來られた。非常に蒼白い顔をして……

——誰か來てゐるのですか。

——いゝえ。なぜ？

——でも男の下駄があつたから。

——さう？　と、云つて、奥様はニツコリせられた。さうして俯向いて、頻りと火鉢の中へ火箸で字を書いてゐられたが、思ひ出したやうに、もう一度ニツコリして、チラリと、私の顔を、竊視るやうにしながら、

——駄々つ兒！　と、叱るやうに、小さな聲で云はれた。

私は嬉しかつた。

——すまないと思つて來たの？　あんなに來るのをいやがつてゐた家へ……ゆうべは本當に困つたわよ、あんまり駄々ばかりこねるんだもの……でも、本當に可愛いと思つたの……と、奥様は言葉を續けられた。さうして一寸愧かしさうに火鉢へかじりつかれた。

私は顔が赤くなるやうな氣がした。

——だからお詫びに來たのです。惡かつたから許して下さい。私はどんな事をしても、人にあやまる事は嫌ひだけれど、あなたにだけはあやまります。すぐ上方へ行つて了はうかと思つたけれど、何だかあやまらずには行かれないやうな氣がしたので、思ひきつて來たのです。ね、どうか許して下さい、惡かつたから……

——いゝわよ。あやまらなくたつて……でも、あなたはさういふしをらしいところもあるのね……

——冗談ぢやない。まで、お許しがかなつたら、早速お暇としませう、これからすぐ汽車へ乘つて上方へゆきます。

さう云つて私は立ちかゝつた。奥様は少しばかり慌てたやうに、

——そんなに急いで行かなくちやならないの？　と、引留めるやうな眼つきをせられた。その眼を見ると、私はまたニヤニヤになつて了つた。

——急ぐわけぢやないけれど……と、口籠りながら、——ぢや、けふは天氣がいゝから、二人でどこか散歩しませう。夜まで……どうせ汽車へ乘るのは夜の方がいゝんだから……

——でも、けふは駄目よ。

——下駄の一件で？

——そんな事はないけれど、今晩どこか近所で泊まつてくれない？　あした朝早くゆくから……

——そりやかまはないけれど……ぢや、今晩はあすこで泊りませう……私はまだ一度も行つ

た事はないけれど、私の妹がいつぞや新婚の晩泊まつた家……知つてるでせう？

——知つてるわ……ずつと昔一度行つた事があつたわ……景色のいゝ家よ。

——出來るだけ早くいらつしやい。

——寢込みに踏んごんであげるわ。

——きつと？

——それでもよければ……

——いゝどこぢやない……

・

停車場まで歸る途中で、駱駝の肌衣だの猿又などを買つた。

——襟卷はいかゞです。これは本年の流行で……と、番頭は黒天鵞絨の襟卷を出して見せた。

ボヘミアンに流行は何だかをかしいやうな氣がした。けれども餘程買はうかと思つた。

汁粉は私の事をエレガント・ボヘミアンだと云つた　或は蓋し適評かも知れない。

・

次の停車場で降りて、自動車にのつて、別莊地をすぎて　大杉榮君が市子に傷けられた家の前をすぎて、近所に全く人家のない唯ある海角で自動車から降りた。

——御晝飯でございますか。と、女中が訊いた。

——泊つちやいけないのかい。

——お泊りでございますか。

——さア、まア。とにかく晝飯をたべてから……

——フム、この部屋かい。

私は盃を手にしながら、妹がはじめて亭主と寢たといふ座敷を見廻した。

あんまり上等な座敷でもない。それでも、襖の代りに厚い板戸などがはまつた、極めて森閑とした二間つゞきだ。緣側の隅には鏡や洗面臺が取着けてある。朝起きた時などは至極工合がよささうだ。坐つてゐて外の見えるのは緣側の方ばかりで、一方の側は高窓になつてゐる。さうしてその緣側の方から見えるのは、前の芝生と、芝生を越した海と、それから海の上の富士ばかりだ。

——なるほど、新婚旅行には持つて來いといふ部屋だね。これでこの部屋專用の溫泉でもあつたら申分はない。

——左樣でございます。と、女中はニコリともせず、恐る〳〵酌をした。

この晩は氣がイライラして寢つかれなかつた。晝食と夕食の兩方で八合ばかり飲んだ酒が、妙に胸から頭へ停滯してゐて、少しも醉が發散しないばかりでなく、却つて神經を病的に昂奮させ、しきりに感傷的の精神狀態に陷つて、右往左往に心が亂れた。

私は死にたくなつた……

たべたくもない朝飯をそこ〳〵にすまして、縹渺と朝日のあたつた海波の上へ、幻のやうにボンヤリと浮んでゐる富士の姿を眺めながら、私は寢不足の頭を强ひて机の方へ抑向けつゝ、書きさしの隨筆を續けて見た。

書物は殘らず賣つて了つた。ノートや原稿は皆燒きすてて了つた。さうしてこの書きさしの隨筆だけを携へて、私は放浪の旅をはじめたのだ。

この隨筆は私に殘つた唯一の友だ。これから

先の私の生活は荒涼たる人生の曠野に、たつた一人でさまよひ歩く私の生活は、恐らくこの隨筆の外に、この隨筆を續ける事の出來得る時の外に、私に對して生の意義をも慰めをも與へる事はないであらう。

私にとつては、この人生は全く無意義だ。又全く無價値だ。けれどもその無意義なる無價値なる人生との接觸から生まれて來る、このはかない、貧弱な、空疎な、とりとめのない、同時に氣まぐれなる私の隨筆は、私にとつては決して無意義でも無價値でもない。

これから先の私は、何だかこの隨筆を續ける爲に生きてゆくやうな氣がする。この隨筆をも續ける勇氣のなくなつた時は、同時に私のこの世を去る時であらう。この隨筆はこの隨筆を入れた鞄と同樣に死ぬまで私には必要だ。

寢込みには踏込んでは下さらなかつたが、約の如く奥樣は見えた。

――またこんなものを見てゐて……と、机の上にあつた汽車の時間表を見つけて、たしなめるやうに、先づ口を開かれた。

――もつと早く來るんだつたけれど、店の番頭に私があべこべに寢込みに踏込まれてしまつたんで……いゝ加減にあしらつて追返すと、今度はまた停車場で出つくはして了つたの……一寸面喰つたわ……どちらへと云ふから、ついそこまでと誤魔化して來たの……と、言葉をつづけて、嬉しさうにニッコリ微笑まれた。

――ゆうべは寢られなくてね……と、私が云ひ出すと、

――私だつてちつとも寢やしない……と、奥樣はホッと溜息をつかれた。

――でもけふは大層血色がいゝ。

――そりやあなたの顏を見たからサ。

――ばかにしてる……併しあなたがさういふ健康さうな顏をしてると私は嬉しい……きのふの朝の顏色ツたら無かつたからネ。

大騷ぎをやつて見たところで、二人はこんなはかない會話をとりかはすだけなのだ。云ひたい事は胸一杯に充ち溢れてゐるのだが、どういふものだか、顏を見ると、こんな言葉より外に口へ出て來ない。

(以下五行抹殺)

午餐をすますと、

――サア、早く、その着物とお着かへなさい……と、奥樣はせき立てた。

私は褞袍をぬぎすて、女中がゆうべ疊んで置いてくれた自分の着物をきた。

硝子戸をあけると、宿の下駄が二三足揃へてあつた。二人はそれを穿いて芝生へ出た。

――いゝお天氣ね……嬉しいわ。と、奥樣はいかにも晴々としたやうに、滴るやうな空や海を眺めながら云つた。

黄いろく枯れはてた草土手を下りて、波打際の砂濱へ出た。右手には御用邸の大きな一郭を越して、遠くの方に色々の形をした別莊地の家々が、小さく〳〵畫のやうに見える。左にはすぐ目の前に松などの生えた岩つゞきの細長い海角が突出てゐる。海は極めてのどかだ。沖には心持よささうに漁船が漂つてゐる。さうして恰もこの地上から解脱でもしたやうに、空と海との間に夢のやうな富士が浮ぶ。

――あの鼻の端へ行つて見ませうか。と、私は左手の海角を指した。

――えゝ。と、奥樣は何だか行かれさうもないところだといふ眼つきをして、私の指す方を見やつた。

人氣がないので、二人は手をつなぎ合つて歩

いた。

砂濱の盡きたところに絶壁が聳えてゐる。さうしてその絶壁が卽ち海角の根方なのだ。とても傳はつて行けるやうな岩ではない。

――こりや駄目だ……あの後ろへ廻つて見ませう。と、私は草土手の小徑について登りはじめた。

――それ御覽なさい。といふやうな顏をして、奧樣も後れじと跡につゞいた。

登り終ると街道へ出た。坂の上から荷車が一臺下りて來た。それをやりすごして二人はその小さな坂を登つた。と、そこは丁度道路の曲角になつてゐた。突當りに柵があつて、道は柵について左へ折れてゐる。柵の外は絶壁で、向側の海が際涯なく見える。右手は岩組だ。卽ち海角と陸地とが接合した結目だ。

私はその結目の岩組へつかまつて攀ぢ上つて見た。が、やつぱり海角の尖端へ出られさうな小徑はなかつた。

――およしなさいよ。どうせ行かれる氣遣ひはありやしないから……お降りなさいツてば……と、岩組の下で奧樣が云つた。さうして困つた坊やだといふ顏つきをした。

仕方なしに私は降りた。

それから二人は寄添つたり離れたり、手をつないだり放したりしながら、爪先下りの街道に沿うて、ブラリブラリと歩いた。暖かい日光を心ゆくばかりに浴びながら、際涯を知らぬ大洋をいづくまでもと見はるかしながら……

小さな橋をわたつて、ゆく手の道端に、十本ばかりの木立が海を遮つたところがある。その木蔭にベンチなどが置いてあつた。さうしてそのベンチの上には人がゐた。

その側までゆくと、二人は云ひ合はせたやうに、ピタリと立ちどまつた。さうして顏を見合はして、同時にニッコリした。

――下へ降りて見ませうか。

――えゝ。

草土手について砂濱まで降りる小徑がある。二人はその小徑を下つた。途中に一寸した平地があつた。

――休みませうか。と、先へ立つた私が云ふと、

奧樣はやッぱり簡單に、

――えゝ。と、答へて、さうしてもう一度ニッコリして見せた。

私も又思はずニッコリして枯草の上へ腰を卸した。さうして卷煙草を出してマッチをすつた。

――羽織を脱いで敷いてあげるところだけれど、私は何だかウオルタア・ラレエでもなささうだからネ……

――私こそエリザベス女王ぢやないわ。と、奧樣も腰を卸して橫倒しに草の上へ坐つた。

――何だか新婚旅行のやうですネ。

――さうなのかも知れない。と、云つて、奧樣は一寸下を向いてクスクス笑つた。

――新婚旅行は新婚旅行でも、惡くすると、勘彌と菊枝の新婚旅行になりさうだ。

――でも、あなたは勘彌ぢやないわ。

――勿論、あなただつて菊枝ぢやないけれど……併し、さう云へば、何だかこの下の砂濱を房子のお婆さんが通りさうですネ。

――情愛の水を持つて……

――その情愛の水を今頃宗之助があなたの家へ忍び込んで、萬年筆のインキでいたづらしてるかもわからない。

――よしませうよ、もう、そんな下らない喜劇のしやれなんて……

二人はいゝ心持で宿へ歸つた。

よほど傾いた夕日が、縁側から部屋の中へかけて、やんはりとさし込んでゐた。と、そこへ今迄濱邊で遊んでゐたらしい漁村の子が二三人、てんぐ〳〵に介殻を手の平へ盛りあげて、縁の前まで來て、物ほしさうな眼つきをしながら、その手の平を私等の方へ突出した。

――お茶屋の旦那さん、辻占を買つて下さい。

と、云はれたやうな氣がして、私はいやな氣持がした。

小錢をやつて子供等を追返すと、私は障子を閉めて了つた。

――さア、いつまでからしても居られない……そろ〳〵支度にとりかゝらうか。と、私は奥様から離れて、原稿紙やいろんな物をバスケットへ詰めはじめた。

鏡の前で髪を直してゐた奥様は、いかにも無器用な私の手つきを横目で見て、

――私が今チャンと入れてあげるから、お風呂へでも這入つていらつしやい。と、叱るやうに云つた。

私は云はれるまゝに手拭をブラさげて風呂へ行つた。歸ると電燈がついた。さうして夕飯になつた。

何から何まで鰯づくめの食卓に向つて、私は元氣よく酒をのんだ。さうして元氣よく喋つた。

夕飯がすむと間もなく自動車が來たといふ知らせがあつた。

――ぢやア、行きませう……

――えゝ……

××××××××××××××

部屋を出る時、ふと氣がつくと、バスケット一つだけの筈なのに、丈の高い風呂敷包が殖えてゐた。

――こりや何です。

――ウヰスキイよ。あなたは私よりこの方が可愛いんでせう？　これと心中なさい。と、奥様は口早に云つて、丁度そこへ來た女中にそれをわたした。

三浦半島に別れを告げて、東海道線の列車へ乘換へると、私の醉は一時に發して來た。空氣枕にのせた頭が、車輪の音と呼應してガンガン鳴つた。さうしてどこからともなく大風の吹きすぎるやうな悲壯な聲がして、

――虚無だ。虚無だ。一切が虚無だ

――破壞、破壞……破壞の外に人間のなすべき事はない……と、しきりに絶叫して、絶叫して、絶叫しつゞけてゐるやうにきこえて來た。

夢を見てゐるのか、目がさめてゐるのか、私にはわからなかつた……



一册の本を讀めば、すぐその書物にとらはれる。一人の女に接すれば、すぐその女にとらはれる。さうして讀書と女とが、たうとうわたしをからしてとらはれた一生を築きあげさしてしまつたものなのだ。

もちろん決して書物がわるかつたわけではない。女がわるかつたわけでもない。要するにFaultはこの到底救ふべからざるわたし自身のあまりに脆弱な性格中にある。

（「[illegible]がもと」より）

性慾の觸手

たうとう時が來た。

いよ／＼食へなくなつたら、その時こそは文章を賣つて糊口を繋がうと、甚だ横着かもしれないが、二十年前からマキシマムの高を括つてゐた。その時が來たのだ。

極めて僅かばかりだが、その上り高、――地代、――即ち不勞所得から、人一人は一生どうにか衣食してゆかれるほどの地所、その親讓りの地所を賣つて、親不孝にも叩き賣つて、何がしかの金を懷に入れると、忽ち女房を持つて、忽ち新婚旅行なるものに出かけたものだ。その旅が終つたのだ。云ひかへれば、金がなくなつて了つたのだ。

人生は或は必ずしも金ばかりでは解決のつかないところかも知れぬが、學者先生のむづかしい論議は別として、何がさて、人間がその日その日の飯を食ひ、雨露風雪を凌ぐ家に住み、季節毎の衣服を纏ふにつけては、何よりもまづ金が第一だ。金さへあれば、たゞもう金さへあれば、結局一切合財の埒がサラリとあくやうに、不思議な事には、世の中といふところは、誰が造つたとはなしに、さう造りあげられてある。いよ／＼一文なしの、にツちもさツちもゆかぬ身の上となつてから、今更珍しさうに、こんな世の中は不都合だ。と絶叫して見たところではじまらぬ。

新婚旅行を終つた位だから、勿論女房がある。その上旅行中に子供まで産まれた。要するに親子三人だ。その親子三人の衣食住だ、その衣食住に對して支拂ふべき金だ。どうあつてもその金を稼ぎ出さなければならぬ。

――一箇月にいくらあつたら生活が出來るものか知らん。と、私は女房に訊いて見た。

――どうしても三百圓はなくてはねえ。と、女房は平氣な顏して答へた。

三百圓！　三百圓と云ふと、一日十圓だ。一枚四百字詰の原稿が、必ず一圓宛に賣れるものとして、一日十圓の金を稼がうとすると、いやでも應でも日に十枚宛の原稿は書かなくてはならぬ。

――あなたに毎日十枚宛の原稿が書けるか知らん。と云つて女房はニヤリと笑つた。

――一日作さざれば一日食はず。よし、その覺悟で一番書いて見よう。と、私は少しムキになつた。

――危いものねえ。と、女房はもう一度ニヤリとした。

まづその女房を持つた事からはじめよう。

その時分私は鵠沼にゐた。鵠沼で宿屋住ひしてゐた。なぜ私が特に鵠沼にゐたか、なぜ宿屋住ひしてゐたか、それも私が女房を持つやうになつた重大なる原因の一つだが、それは女房自身とは直接の關係がないから、爰では暫くアンダスツッドして置くだけの事にする。

とにかく私は鵠沼の宿屋にゐたのだ、詳しく云へば、その宿屋の九號室で、鯉の潛出る池や茶室や亭を適當に配置した、松や砂がその白と緑のニュアンスを心地よく漾はしあつた大きな庭園、その庭園を前景としたノンビリした海が、江の島が、恰も青春の夢の殘塊のやうに、朝夕ウヰスキイの角壜を載せた私の机の上へ、飄渺と訪れて來ると云つた二階の八疊間だ。

私はそこで何してゐたか。勿論、なす事もなく、終日チビリチビリとウヰスキイばかりのんでゐた。さうして週に一二度訪ねてくれる金持の奧さんへあてて、年にも憚らず、徒らに感情を誇張した、甚しくセンチメンタルな手紙をば、セッセと書いてゐた。その合間にはしきりに諸方から金の前借をしては、たま／＼その爲替でも屆くと、すぐ飛出して東京へ出懸け、待合から遊廓、いかなる下等な賣淫窟のどんぞこでも、ゆき當りバッタリに、そこで出來得るかぎりの泥醉と獸慾との耽溺に漬るのが、その頃の私の仕事になつてゐた。それほど私の生活はデスペレートな狀態に陷つてゐたものだ。

デスペレートと云へば、隣室に北國訛の若い學生がゐた。早稻田の哲學科に籍を置いて、專攻は認識論だといふ事であつた。その青年は殆んど每晩のやうに話しに來て、時には一緒に食事をする事もあり、また夜をふかす時は、三時四時までにも及んで、倦む事を知らず、ボソボソと談り合つた。

はじめのうちは、しきりにゾルレンだザインだといふやうな言葉を並べあつて、まるで哲學概論の復習見たいな談話ばかり多かつたが、お互ひの話題が一旦戀愛や性慾の直接經驗に集中されるやうになると、二人の交情は俄に親密の度を增して、それからが頻繁に徹夜してまで意中を吐露し合ふ事になつたものだ。尤もこの青年と私との間には年齡に於いて十五六年の距離があつた。それゆゑ青年の眼に映ずる私といふものは恐らく十五六年がたの未知數を含んでゐたであらう。けれどもお互ひの思想が、生命の根本問題――たとへば生死と云つたやうな――にカチリと觸れあつた剎那には、それんばかりの未知數は、恰も日光に逢つた魑魅魍魎のやうに、かき消す如く雲散霧消して了つたものであらう。そこにはたゞ生々しい二箇の生命の血漿ばかりがあつた。一極微の刺戟にも剎下に白熱光を放射する潑剌たる何物かがあつた。

――僕は三度喀血しました。今度喀血したら、恐らくもう駄目でせう。三十まで生きられたら餘程の奇蹟です。と、眉宇をも動かさずに、青年は冷然と云つた。北國生まれだけにクッキリと色の白い、美しく眼の輝く、細面の、きやしいやな青年の顏は、そんな樣な事を云ふ時には、殆んど神々しく見えた。

私はキーツを思ひ出した。ワイニンゲルを思ひ出した。サニンの中のセミヨノフを思ひ出した。

――その女は勿論僕よりズッと年上です。だから逢ふたび每に盛んに性慾の滿足を要求されます。それが何より苦痛です。そのたび每に生命を削られるやうな思ひをします。その時ぐらゐ命の惜しくなる事はありません。三四年を待たずして、僕は必ず死ぬにきまつてゐます。併し死ぬのはいやです。どうしても死にたくはありません。

青年の聲は別に顫へもしなかつた。却つてその聲をきく私の方が、身を切らるゝよりも辛い、何とも云ひやうのない思ひをした。

――その女の方は僕等のしてゐる事をよく知つてゐます。併し決してそれを色にも表はしません。僕に對する態度などは、それは非常に鄭重を極めたものです。なぜでせう？　僕は時々それが不思議に思はれてたまらなくなる事があります。名前を云へばすぐ分る兜町で有名な仲買です。仲買なんてものはみんなあんなに冷靜なものなのでせうか。あゝいふ人の結婚は全然利害關係の外に何もないものでせうか。その女の里は、これも名前を云へばすぐ分る、山の手で有數な基督教徒で、同時に一門の廣い有

力な富豪です。僕はその女の妹聟になる事にきまつてゐるのです。そいつはまだ基督教の女子大學へ通つてゐます。社會なンて奇妙なところですよ。資本と資本とを結びつける爲には、僞善といふ凡ゆる僞善を捏ちあげて、そのコンクリートで嚴重に取廻した土塀の中で、夜も日も足らず、その上塗りをしつゞけて生活しなければならぬのです。マルクスのいふところはウソぢやありません。僕は實際その通りの事實を毎日のやうに見てゐます。見てゐるどころか、自分も平氣な顔して、その惡臭の中へ漬り、彼等と全く同樣な僞善ばかりやつてるぢやありませんか。自分で自分を嘲るより外に仕樣はありません。それだけの事で死ぬのです。僕にはさういふ社會を脱却するだけの健康と餘命がないのです。全く慘めなものですよ。」

が、この青年からかういふ悲壯な言葉をきゝ得るのは、それはたゞ深夜だけに限られてゐた。白晝はまるで別人のやうに快活な顔を輝かして、氣のきいた配色の縞シャツなどを一着に及び、頗るハイカラな洋裝に納まつて、同宿のお孃さん方と一緒になり、いかにも嬉しげに、樂しげに、青春の希望に充ち溢れてピンポン臺に向ひなどしてゐた。

この宿屋で、その前後に私の知り合ひになつた人は、この隣室の哲學生と、それからこの哲學生に紹介された三田の學生と、その二人きりであつた。哲學生とは反對に、これは南國の青年で、中肉中脊の、いかにも穩しやかな、漆黑の髮の毛をばいつも見事な總髮に梳きあげた、角のない、上品な美男子であつた。この人は勿論理財科の學生だが、それが頗る新しい詩・方面に通じてゐて、新刊書の出るのを待ちかねるほどに、しきりとさうした作物にのみ目を曝してゐた。從つて自分自身の創作も相當に試みつゝあるものと見えて、時々そんなやうな紙片をば哲學生に示してはニッコリしてゐる事もあつた。

──何人も一度は詩人になる時代がある。と誰やらが云つたが、なるほど其通りだ、と私は思つた。二十年前には、私もたしかにさうした意味の詩人であつた。壁にキーツやシェリイの肖像を貼りつけたり、同好の友人等とエンディミオンの輪講を　たり、お互ひの創作を朗讀したり、こゝパンがなければお互ひの戀で生きよう。といふやうな言葉に涙を流して嬉しがつたりした時代があつたものだ。その時代の事を思ふと、凡てがたゞ〳〵非常にノンビリと可愛らしく見える。同樣にこの詩の別天地に浮身を窶してゐる優しい學生姿を見てゐると、いかにも可愛らしくてたまらなくなつた。

この學生の部屋は、私達のゐる二階からは大分隔つた、下は廊下續きではあるが、全く別棟の、そこへゆくには、いく度も廊下を曲りくねつて、中々覺えられぬやうなところにある階段を上つた舊館の二階にあつた。學生はそこにもう三箇月から滯在してゐるといふ事であつた。醫者に勸められて、出來るだけ早く轉地したのだが、爰へ來ると間もなく、ヤッぱり喀血して了つたのださうである。

──血を見た時は氣が遠くなりましたが、死ぬ事は一向怖くも何ともありませんでした。却つて重荷が下りたやうな心持がして、樂々した位です。けれども血がとまつて、まだ死なぬ事がわかり、意識が死といふ事から離れると、急に國の母親や妹の事を想ひ出して、それから無上に死ぬのが怖ろしくなりました。生きたくて、生きたくてたまらなくなりました。と、學生は落ちついた聲で、もの靜かに云つた。

きゝながら私は心の中で、──地質學の方でいふ今のこの地球上の世紀では、正に人類と黴菌との爭覇戰が白熱してゐる眞最中だ、といふや

うな奇說もきいた覺えがある。かりにその說に從へば、凡ゆる肺病患者はその戰闘の第一線に立つ無雙の勇士と云はなければならぬ。などと下らぬ事ばかり思つた。さうしてこれ等のいぢらしい青年達をば、どうにかして十分に慰めてやりたいと努めて見たが、口に出しては全く何とも云ひやうはなかつた。

デスペレートな、或は寧ろデゼスペレな、頭のいゝ早稻田の認識論專攻生が、例の盛んに性慾の滿足を要求すると云つた三十恰好の案外野暮くさい女に迎へられて、滿開の紅梅や、白い李の花が、スッキリと澄み返つた青空や松林に、仄の〴〵と匂ひ漾ふ朝、いそ〳〵とこの宿屋を引拂つて、いづくともなく、立ち去つて了つた日の、恰もその午後であつた。入口の襖が音もなくスーと開いて、

――いらつしやいました。と、きこえぬほどに云つたかと思ふ間に、女中はコッソリ逃げるやうにトントンと階段を下りて行つた。と、ヘリオトロープの薫香が俄に室内に漲つて、その薫香と共に、靜かに襖を閉めながら這入つて來たのは奧さんであつた。さうしてイキナリ火鉢の向側に坐つて、

――寒いわ。冷たいでせう？と、火鉢越しに私の手を握つた　その血の氣の少いほッそりした手は、なるほど大理石のやうに冷たかつた。

――私は暖かい。

――きまつてるわ。相變らずそんなものを飲んでるんだもの。と、奧さんはジロリと机の上のウヰスキイを横目で見て微笑した。

――君のくれたのがなくなると、隣りの哲學者が氣をきかして一本買つて來てくれたわけサ。但しこれはあまり上等ぢやない。と、私は飲みさしのコップをぐツと乾した。

――あなたには到るところ親切なお友達がゐて羨ましいわ。そんな事と知つたら、私なんぞが女だてらにわざ〳〵こんなものを買つて來てあげるにも及ばなかつたわよ。と、憎らしさうな眼をして、奧さんは一寸私を睨みつけ、さうして風呂敷をほどいて、その中から取出したブラックをば、哲學生の角壜と並べて机の上に置いた。

――これは豐年だ。かうなくちやウソだ。ウヰスキイでもくれる人でなけりや、今のところ私にや全く用はない。

――それぢやア、けふだけは私もあなたに用のある人間の一人になれたわけね。

――まア、そんなものでせう。

二人は罪もなく笑つた。

この奧さんは勿論私の女房ぢやない。他人の細君だ　十年來或る大きな商人の其相續人の嫁さんになつてゐる。二人の子まである。さうしたブルジョアジイの世界では、理想的に貞淑な令夫人として甚だ評判が高い。夫が自分の妹に手をつけても、藝者の家へ入浸りになつても、まるで女今川の貞女のやうに、ヂッと辛抱しつゞけて、冷然と子供達の守ばかりしてゐる　のみならず、謠自慢の夫の爲に、熱心に鼓の稽古にまで通つてゐる。その稽古に通ふ暇をぬすんでは私の宿屋へ訪ねてくれるわけだ。甚だ光榮なわけだ。×、×××××××××
×××××、×××××、×××××××××
××××、××××××××××××××××
××××、××××××××××××××××
×××××××××××××、×××××××
××××××××××××××××××。少くともこの奧さんが側にゐてくれる間だけは私は無上の幸福を感ずる。さうして決してデスペレートな氣分などは毛頭起らない。

『かういふ女がなぜ私と朝夕を伴にしてくれないのか。』と、ふとさう思ふと、私は矢も楯もたまらず、人生に對する憤怒と復讐の念が、ムラムラと心の底から湧上つて來て、それを怺へる爲には、どうしてもウヰスキイの魔力を借りなければ一刻もゐられなくなる。考へて見れば、私は極端な幸福の追隨者だつたわけだ。

――けふはどうだね、夕飯でもたべてから歸つたら…女がイヤにソハソハし出したので、私はソロソロ不快を感じはじめて、さう云つた。

――駄目よ。四時には東京からやつて來るから…

私はウヰスキイを酌いで一息にのんだ。

――大家の奥さんに可愛がられるのは私にや全くガラにない。これが役者か藝人だと相當なんだけれど…

――何と思はれても仕方がないわ。どうせ私が意氣地なしなんだから…

――いツそこのまゝ爰へ來てしまつたらどうだね…

――さうしたくてたまらないんだけれど…

――だけれど?

――だけれど、駄目よ。今はまだ駄目よ。どうしても駄目なの。

――ひどく駄目なんだね。と、私は立てつづけに二三杯グイグイ引つかけた。――まアいいサ。それぢや駄目で無くなる時機まで待つとするサ。

――すまないけれど免して頂戴…私が一思ひに死ねるといゝんだわねえ…

――ばか〳〵しい! これから本當に生きる道を求めようとしてゐる人間が、死にたいなンて全く間違つてる。

――間違つてても、死にたいの。本當よ。

――それぢや舊式に心中しようか。と云つて、私はカラカラと笑つた。さうして、心中する人間なら、俺はとうの昔二度も三度も心中をすましてゐた筈だ。と心の底で思つた。

――心中はいやよ。私は一人で死ぬの。この上あなたに御迷惑はかけたかないわ。

――ばかに水臭いんだね。

――水臭いんぢやない、たゞ氣が小さいの…本當に私は意氣地なしね。

(以下二十三行抹殺)

――歸ります。と云つた。

――さう、もう四時すぎだね。

私はこの上强ひて引き留める氣にもなれなかつた。

――ぢや、送つてつて上げよう。

――送らなくてもいゝわ。

――まア、送つてつて上げようよ。

――ぢや、一緒にいらつしやい。と、コートを着ながら、奥さんは寂しく微笑んだ。

玄關は人がうるさいので、二人は人影の見えぬ庭口から、池の裏へまはり、あき屋の貸別莊を一周して、砂濱へ通ずる木戸口から外へ出た。

――どうせ遅くなりついでに、片瀨まで歩かないか?

――歩きませう。と云つて、奥さんはまた寂しい笑顔を見せた。

丁度その笑顔のやうに、江の島までが何となくうら淋しげに見えた。いつのまにか空も灰色に塗られて、冷たい風がザクザクと砂濱を踏む二人の裳裾をば折々ヒイヤリと飜した。

渡し場まではかなりに長い路程であつたが、その間二人の口からは一言も言葉は洩れなかつた。二度三度手はつなぎ合つた。砂山の蔭で一度は唇も觸れあつた。けれども全く物は云はなかつた。さうしてその都度奥さんは一杯涙をためた眼で氣の毒さうにニコリとした。

氣の毒さうに……さう、或は憐みを乞ふやうに！ いづれにしても、自然に湧くべき感情をば努めて裏切つた微笑であつた。が、『無理もない。』と私は思つた。『可哀さうに。』と私は思つた。

瀬の早い川口の小さな渡舟に乗つて向側へ越えると、そこに出入口のある長い〳〵棧橋から、江の島がへりの人逹がゾロゾロと溢れ出てゐた。

——すぐ片瀬から乗る？

——どうでもいゝわ。

——ぢや、もう少し歩かう。

——えゝ。

二人は人込みを避けて、たま〳〵電車の通る外、人通りの少い七里ケ濱へ出た。

——くたびれたらう！

——えゝ、少し。

——今度電車が來たら乗らうか？

——えゝ。

二人とも默々と山を背負つて海を脚下にした唯ある停留場で佇んだ。さうしてやがて來た電車に乗つて、大町で降りた。

——歩いてゆく？

——俥でゆきます。

——ぢや、爰で別れよう。

——えゝ。

奥さんは人目を惧れるやうに足早に俥屋へ馳け込んだ。さうして一層青ざめた顔をチョイとふり向けて、物をも云はず、『左様なら。』といふ表情をした。私はいそいで俥屋の前を通りすぎた。跡をも見かへらず、そのまゝ大股でドシドシと歩いた。一散に長谷の方へ向つて歩いた。

パラパラと雨が降りだした。……

宿へかへると、ガッカリした。恰も過度の勞働でもした後のやうに、からだ中が、一體にコハばつて、とても起きてはゐられぬほど疲れた。私は掻卷を引きずり出して横になつた。さうしてグッスリ眠らうとした。が、よッぽど神經が昂奮してゐたものと見えて、眠らうとすればするほど愈々眼はさえ返つた。と、凡ゆる種類の妄念雜念が、凡ゆる方面から心頭へ殺到して、忽ち九國の戰ひが開かれた。

—俺は本當にあの女を戀してゐるのか？ このまゝ若しあの女をあの女の家から引張り出す事が出來なかつたら、あの女の全部を所有する事が出來なかつたら、即ち絶對に同棲する事が出なかつたら、さうしたら俺はどうする？ さうしたら俺は死ぬ事が出來るか？ それほどまでに俺は眞劒にあの女一人のみによつて自己の生活の完成を求めてゐるのか？

——いや、俺は決して眞劒に戀などの出來る人間ぢやない。

——が、若しあの女が今夜にも、家から夫から二人の子供から、一切の束縛から脱却して、不意と爰へとび込んで來たらどうだ？

——そんな事は斷じてない！

——あの女はまだプラトニック・ラヴの空想から覺めきらない。本當にあの女を愛しつゞけてやる氣なら、その空想を破らずにソッとして置いてやるべきだつたのだ。

——馬鹿な事を思ふナ。プラトニック・ラヴなんてものはブルジョアジイの産物だ。あの女の眼を開いてやるつもりなら、まづさうしたものから破壞してかゝらなくてはならぬ。

——あの女にブルジョアジイの脱却が出來るか？

——出來さうもない。

——そんな女になぜいつまでも戀々としてゐるのだ？ それだけ俺自身がやつぱりブルジョ

アジイから脫却の出來きらぬ證據ぢやないか？

――俺は家財道具の一切を賣拂つて、わづかの着更と原稿紙ばかり塡めた鞄一つの境涯となつた。即ち天下無住の身となつたわけだ。即ちブルジョアジイから脫却した證據ぢやないか。

――愚かな事を云ふナ。ブルジョアジイの形式を破壞したところで、それが直ちにプロレタリヤになつたものと思ふか。俺は一度でも額に汗して働いた事があるか。現に家財道具を賣つた金で、かうやつて[illegible]縮緬の搔卷にくるまつてゐるのぢやないか。

――これは破壞の途中だ。刻々破壞しつゝあるところだ。

――誤魔化すナ。聖フランシスはどうした？

――俺は聖フランシスぢやない。俺は聖人ぢやない。聖人なンてものを俺は信じない。俺の前にはたゞ凡人ばかりがある。五慾煩惱の凡人ばかりがある。

――そんなに凡人がるなら、なぜ天下無住の身となつたのだ？　凡人で甘ンじてはゐられないからだらう？

――それが凡人だからなのだ。子供の時分から俺はエライ人間になりたかつた。さうしてエライ人間なんてあるものぢやない事がわかつたのだ。人間は皆凡人だ。凡人だからエラクなりたがるのだ。エラクなりたがらぬ人間が一人だつてこの世の中にあるか？

――だから人間は昔から階級を拵へて、その秩序を破るまいとしてゐる。佛教でさへ鐵輪銅輪銀輪金輪摩尼輪などと信仰の程度にまで階級を造つてゐる。エラクなりたければ秩序を踏め。

――いゝい、ものさしの表では俺自身は計られぬ。

――そんならものさしの裏で計れ。

――裏でも表でも既う駄目だ。ものさしでは駄目だ。俺はもう とうの昔凡ゆるものさしをへし折つて了つたのだ。

――それがどうしたのだ？

――だから破壞だ。破壞の外にはもう何もない。一切ない。

――勝手にしろ！

――破壞しろ、破壞しろ、手當り放題破壞しろ、盲滅法に破壞しろ、無二無三に破壞しろ……破壞だ……破壞だ……』

私はギョッとした。

俺は氣が狂ふのぢやないか知らん？　ふとさう思ふと、急に怖ろしくなつて、ガバとはね起きた。が、氣が　くと、いつの間にか身内の疲れは安まつてゐた。昂つた神經も落ちついてゐた。

「やつぱりいくらか睡つたものと見える。」と思つて、私はホッと息をついた。

夕飯をすますと、散歩に出た。

あたりはもう暗くなつてゐた。溫氣を含んで棚引いた淡靄が、そこら中に春めいて、ところどころに立つ電燈の光りまでホンノリと花の咲いたやうに見えた。雨はやんでゐた。ポチャリと池の鯉の潑ねあがる音をきゝながら、私は暫間違つた小徑を廻つて砂濱へ出た。砂濱は暗かつた。その眞暗な砂地の上を、あてどもなくブラリブラリと彷徨ひながら、私はまた思ふともなくさま〴〵な事を思つた。が、いくら思つて見ても、結局は同じ事であつた。

『人間はたえず何かを待つて暮らしてゐるのだ。さうしてその何かはいつまで待つたところで、決して來る氣遣ひはない何かなのだ。それが人生だ。それだけが人生なのだ。要するに人生はXだ。どこまで行つてもXだ。Xの

答はXだ。Xの答はX'だ。年々にダッシの數が殖えてゆくだけで、一生Xから離れる事は出來ない。全く不可能だ。
『人間は意志で生まれて來たものだから、やつぱり意志で死ぬ方が自然だ、といふ自殺論者がある。一應は道理なやうにきこえる。けれども人間が果して意志で生まれて來たものかどうかが先づ第一の疑問だ。が、かりに意志で生まれて來たものとする。併しそれにしたところで、意志で死ぬ事は決して自然とは云はれない。或はその方が論理的かも知れぬ。けれども論理は必ずしも自然ではない。（$X=X'$ $X'=X''$ $\therefore X=X''$）これが論理だ。さうして自然は常にXだ。俺には自殺は出來ない。
『が、俺はこの上生きてゐたくないのだ。俺にはもう澤山だ。こんな人生と知つたら、決して生まれてなンぞ來るのぢやなかつたとさへ思ふ。食慾に釣られ、性慾に釣られ、狗の枯骨を啃むやうな八萬四千の煩惱慾に釣られ釣られて、缺乏の上にも缺乏を遡ふる人生には全くあき〳〵した。死ぬ方がましだ。が、死にきれない。このまゝではどうしても死にきれない。なぜなのだ？　なぜなのだ？』
ザブンザブンと波はしきりに何事をか答へてゐた。が、私にはそれが何の意味だか勿論わかる筈もなかつた。
チラホラと燈の見える江の島の方へ後ろを向けて、私はそこから出て來た木戸口へ戻つた。亭の下の松杉を潜つて、來た時とは反對に築山を半ば廻ると、枯薄などのカサコソと殘つた廣やかな池の前へ出る。
三棟四棟と押並んで、間毎に燈の這入つた、二階建の宏大なこの宿屋は、池を隔てて恰も美しい芝居の背景のやうに見えた。氣に入つたシーンの幕があいたやうな心持がして、私は思はず見惚れて佇んだ。と、どこかの部屋からコロリンと琴の音が起つた。續いて尺八の調べもそれに伴つた。嬉しさが私の心の底の方からコミ上つて來た。
『人生はやつぱり佳い。清心の死にきれないのは道理だ。』と、私は思つた。
——("La première vert c'est la joie de vivre.")
『さうだ、その通りだ。』と、私は思つた。
『千鳥』か『江の島』か、曲は私にはよく分らなかつたけれど、その十三絃と竹洞の音とが、虚空に縺れて、花のやうに散つて、霏々と落下して來るシムフォニイを浴びて立つ間、私の心はその瞬間だけ須彌山頂の技藝天部にあつた。さうして生も死も思はなかつた。
すぐ部屋に歸るのも惜しいやうな氣がしたので、私は途中の廊下から外れて、飄然と三田の學生を訪れた。
——何となく春らしくなりましたね。と、私はいつになく世間並な事を云つた。
學生はニツコリした。さうしていかにも物やはらかな手つきで茶を淹れながら、
——實は今晩一寸お邪魔に上らうかと思つてゐたところでした。と云つた。
——さうですか。それぢや、これからすぐに來ませんか。
——えゝ、……なあに、どうせおいで下さつたのだから、茲でお願ひしてもいゝんではれど……まあ、どうぞ、番茶でも召上つて、御ゆつくりして下さい。
——あゝ、有難う。ぢや、その御用といふのを、早速茲で伺はうぢやありませんか？
いえ、何でもない事なんですが、實は私も頼まれたものですから、それで一寸あなたに伺つて見ようかと思つてゐたんです。

――どういふ事ですか？

――實は……と、學生は妙に聲を低くしながら、――あなたは山村とか山中とかいふ女の小說家を御存じですか？

――山村？　山中？　さういふ女の小說家？知りませんね。

――ぢや、そんなに有名なんぢやないんですね。

――いや、有名かも知りません？　恐らく私が知らないだけなんでせう。私はこの頃の新しい人の名前をちつとも知らないんだから……雜誌も新聞も一向氣をつけて見ないんでね……で、その女の小說家がどうかしたんですか？

――えゝ、その女がきのふからこの隣りへ來て泊つてゐるんです。と、學生はいよ〳〵聲を低くした。

――別嬪ですか？　と、私は笑ひながら訊いた。

――さあ、どうでせう？　私にやよく分りませんが……と、學生もニッコリして、――とにかく眞白に白粉を塗つて頗るハイカラなものです。

――いくつ位です？

――さあ、それもよく分りませんが、二十五六でせうか……

――なるほど？　そこでその女流小說家がどうしたのです？

――それがあなたにお目にかゝつてお話を伺ひたいと云ふのです……實はその紹介を頼まれましたので……お逢ひ下さいますか？

私は何の事だと思つた。

――えゝ、えゝ、おやすい御用です……逢つて下さるといふお方なら、どなたにでも私は喜んでお目にかゝりますよ。どうぞ、さうお傳へ下さい。

――さうですか？　そりやどうも有難うございました。それぢや後程一緒にお伺ひする事に致しませう。と、學生は重荷を卸したやうな顔つきをして云つた。

と、さすがに少しくすぐつたいやうな心持がし出したので、

――そんな事なら、どうです？　さういふ面倒な手續きを踏まずに、これからすぐ隣りへ押しかけて行つては……と、私はわざとらしい輕薄な調子で云つた。

――それでもかまひませんが……と、學生は眞面目な顔をして、氣遣はしさうに隣りへ聽耳を立てながら、――多分まだ歸つてゐないでせうと思ひます。あなたのおいでになる少し前に、どこかへ出かけたらしいやうですから……そしてまだ一向戻つたやうな樣子もなささうです。と、何か言譯でもしてゐるやうな、いやに重苦しい口つきで答へた。

私はいよ〳〵そこら中がムズ痒くなつて來たので、

――ぢや、部屋でお待ちしてゐますから……失敬。と云つて立上つた。さうして來た時と同じやうに、飄然と廊下へ出た。

『この俺に會ひたい女……女の小說家……頗るハイカラ女……お話を伺ひたい……』さう思ふと、たまらなく賑アな氣持になつたので、大急ぎで自分の部室へ歸ると、大急ぎでウキスキイに取着いた。

いゝほどに醉がまはつて、やゝ陶然となつたところへ、約束どほりに三田の學生がやつて來た。と、その後ろからスルスルと小柄の女がすべり出た。

私はソロソロまた朦朧としかけて來た醉眼を睜いて、やがて二人の座の定まるのを待つた。

――こちらが……と、不自然にかしこまつた

學生か、片苦しく紹介の辭を述べにかゝると、
――私が山極です。と、小柄の女は器用に引取つて、スンナリと撫肩の手をつかへた。
――あゝ、あなたが山極道子さん！　と、私は瞬間に名前だけ思ひ出したので、愛想よくさう答へた。
――はい、その世間をお騒がせしたアバレ者でございます。と、女は卵形の薄手な顏を動かして、さわやかにホヽと笑つた。
――世間を騷がしたかどうか知らないが、山極道子といふ名前だけはきいたことがありますよ。……こちらが山村とか、山中とかいふ女の小說家だなンて云はれるものだから、どうしても思ひ出せなかつた……と云ひながら、私は心の中で、『全體何事を仕出かした女の名前だつたらう？　さう、本莊幽蘭――下山京子――月旦稻子――山極道子……そんな類推の下に出て來る名前だから、何でも新聞とか、雜誌とかに關係のある女には相違ないのだが……』と、色々に考へて見たけれど、結局どうしても見當はつかなかつた。恐らくどこかでその名前の端くれだけを散見した事がある位に留まつてゐて、さうした名前が齎す事實の内容は、あまり世間とは交渉のない迂濶な私の耳へも目へも、全然這入つてはゐなかつたものであらう。
が、その内容を熟知してゐる人間の一人だと早合點したものかどうか、女は得たりと附込むやうに、
――どこへまゐつても、本名を申しますと、世間がすぐ面白がつて、ある事ない事、いろ〱さま〴〵な評判を立てますので、それが爲に私はどの位迷惑を致したかわかりません……ですから、もう近頃は、どんなところへまゐりましても、それがうるさうございますから、決して本名は名乘らない事に致して居ります……それで、山村だの、山中だのと、その時その場合出まかせに、出鱈目勝手放題な名前をつけて置くのでございます。と、一生懸命辯明に力めたものだ。
學生は少し煙に卷かれた形で、喋り立てる女の顏をば、呆れたやうな目つきをして、横からチョイチョイ竊視てゐた。
『鎌倉の奥さんとは大分ちがふ。』と、私は思つた。さうして白兎のやうに落ちつきのない女の一擧一動をば、見るともなく見やりながら、
――あなたはいくつになります？　と、だしぬけに訊いた。
――私？　私はもうお婆さん！　と女は怯まず答へて、またホヽと笑つた。
――こちらは二十五六だと仰しやつたが、私は三十一二だらうと思ふ。
――あなたの眼はお高いわ。仰しやるとほりです。
――仰しやるとほりとは？　一ですか？　二ですか？　三ですか？　四ですか？
――まあ、いゝぢやございませんか、その邊のところで……もう慥かにお婆さんには相違ないんですから……
――ぢや、ハッキリ三十一といふ事にして置きませう。
――あなたは非常にキチャウメンなお方なのね。と、女はさも感心したやうな、人を馬鹿にしたやうな、胡散くさゝうな、一種異樣な眼つきをした。
『三十一は奥さんの年だ。』と、私は思つた。さうしてその奥さんの憐みを乞ふやうな、潤みを帶びた、殊勝らしい眼つきをば、まざ〱と心の中に思ひ浮べて、何となく物悲しくなつた。私はぐつとウヰスキイを呷つた。大分醉がまはつて來た。
――どうです？　あなたにも若き燕がありますか？

――どう致しまして？　私は雷田さんのやうなエライ方とはまるツきりちかひます……評判ほどにもない、實際はこれで、本當に氣の小さい、意氣地のない、それは平凡な女なんです。ですから、いくら氣に入つても、年下の方なンぞには、とこも賴りなくて、どうしても戀する氣にはなれませんのよ……と云ひながら、心あり氣に學生の方を見て、浮々と無邪氣に笑つた。

――さうすると、君はとにかく落第だね。と、私も學生の方を見た。

學生もニッコリ笑つたが、かうした返事には困つたと見えて、たゞ頭を搔いてゐた。

――僕は及第だ。僕はズッと年上だ。どうです？　僕になら戀が出來ますか？

――さア。と云つて、女は一寸眞面目な眼つきをして、ジロリと私の顏を見た。――さア、どうでせう？　ひよつとすると出來るかも知れませんわね？　あなたはこれで一寸賴れさうなお方だから……

――ぢや、早速とりかゝつたらどうです？

――なんぼ何でも、さうはゆきませんわ。今はじめてお目にかゝつたばかりのお方ですもの。と女は打消すやうに手を振つた。

學生は聲を立てて笑つた。

――一目見たばかりで陷るやうな戀でなけりや本當の戀ぢやない。遠慮せずにドシドシおやんなさい……さあ、手でも握りませうか？　と、すぐにも飛びつきさうな調子で、私は云つた。

が、女は平然として取合はなかつた。さうして巧みに話頭を轉ずるやうに、

――戀にもこれで色々ございますわね。と、淀みのない聲で、サラサラと述べはじめた。――その色々ある戀を私は大別して、黃金の戀、ダイヤモンドの戀、さう二つに分けて考へて居りますのよ。

――いやにピカピカした戀ばかりですね。

と、私はまぜツ返した。が、女は動ぜず、

――まあ、お聞き下さい……ダイヤモンドの戀と云ふのは今あなたの仰しやつたお互ひに一目見たばかりで陷るやうな、ロミオ、ジュリエットの戀を申すのです。さう云つた詩的な戀はこの實世間には決してありさうな筈はございません。實世間の戀はきつと利害關係を伴つたものです。

――そこで黃金の戀ですか。君も中々感心な事を云ふね。そりやそれに相違ない。そこで？

――ですから、私は賴れる人でなければ、どうしても戀する氣にはなれないのです。

――さうすると、その賴れる人といふのは、金でもある人の事を云ふのですか？　黃金の戀などと云ふからね……

――さういふわけぢやございません。お金ばかりあつたつて、賴れない人はいくらでもあります。

――ぢや、どういふ人です？　學者ですか？　政治家ですか？　宗敎家ですか？　實業家ですか？……

喋つてゐるうちに、私は急に自分自身が馬鹿らしくなつた。さうして心の底で、何たつて俺はかういゝ氣になつて、こんな愚にもつかぬ下らない問答に係りあつてゐるんだらう？　と思つた。けれども、だん〳〵醉がまはつて來た脣は、何と思はうと心には一切お構ひなく、たゞ脣それ自身だけで、ペラペラと隨氣儘に滑つて行つた。

――さういふ意味ぢやございませんのよ。職業とは全く關係がないの。と、女はまだ提供した黃金の戀を講究しつゞけてゐた。

――さア、わからなくなつた？　どういふ種類の人か知らん？

――つまり、みんなから凭れかゝれるやうな

人なのよ。

――みんなから靠れかゝれるやうな人？　恐ろしく大力な人だね……が、要するに大人物を云ふのでせう？

――それが強ち大人物には限りませんの。さア、何と申したら宜しいでせうね？　と、女は一寸困つたと云ふやうに、仔細らしく小首を傾けた。と、暫く間を置いてから、やがてさも巧い言葉にでも思ひ當つたやうに、嬉しげに續けた。――世の中にはかういふお方がございますでせう？　たとへば私なら私といふ一人の女が、かりにあなたならあなたといふ一人の男を本當に戀してるとします……勿論かりにですのよ……と云ひさして、チラリと秋波を見せ、――ところが、愛にまたもう一人の女があつて、その女の方も全く私と同じやうに、やッぱり心からあなたを戀してゐるとするのです。さうしてそれをお互ひの女同志が十分に諒解し合つてるわけなのです。ようござんすか？　それでゐて、雙方とも決して嫉妬がましい念などは、つゆ起らないばかりでなく、それが爲に却つてます／＼親しみを增す事になり、姉妹のやうに睦じく往來をし合つて、どこまでもあなたの爲に盡さうといふ氣になる……と、まア、さう云つたやうな人ですのよ。と、女はしたり顔に言葉を切つた。

――そんな男はないね。それは寧ろダイヤモンドの方の口だね、丁度本妻と妾との間を往來して途中で夜が明けた、といふ昔話と同じ事だ。男ばかりぢやあない。そんな女はこの世の中には斷じてない。女性といふものは、嫉妬を離れては決して成立するものぢやない……あなたはそんな御伽噺を信じようとしてるのかね？　と、私はムキになつて反駁した。

女は笑つた。さうして中々負けてゐずに、

――ところが、ありますのよ。私はあなたのやうな學問こそございませんが、長い間いろんな世間を渡り歩いたお蔭で、さま／＼な男の方を見てまゐりましたわ。その經驗から、さういふ人はあると信じますの……女性は嫉妬だなンて、それこそ學者の空想ですわ。男次第で女はどうにでもなるものですわよ。さうした男に對したら、女は必ず嫉妬なンぞ起すものぢやございませんのよ。と、云ひ返した。

私は少しばかり小癪に觸つたので、

――はゝア、さうすると、なんだね、現在あなたが世話になつてる人間は、つまり、さう云つた人物なんですね？　と、殘酷に突込んだ。

女はやゝ面くらつた體であつた。が、いかにもスバシこく立直つて、

――御冗談ですわ……私に若しそんな人がございます位なら、何を苦しんで、一人でこんな田舍へまで來て、食べる爲の小說なンぞ書かうとしてゐるものですか？　と、ケロリとして答へた。

――大きにね……で、どうです？　その小說はちつとは書けましたか？

――それが書けないんで、本當に困つてゐるのでございますの。と、さも／＼困つたやうに、女はそのしなやかな撫肩を搖ぶつた。

――そりや、お困りでせう？　ちツと手傳つてあげませうか？　と、私はからかひ面に云つた。

すると、女は、俄に膝を進めて、

――どうぞ、どうぞ、本當にお願ひ致します。私、學問といふものをしなかつた罰で、それはちツとも頭がないんですの……材料は山のやうにあるのですけれど、それをどう取捨したらいいものか、そこんところがどうしても分らないんですの……と、本氣に哀願するやうな調子で答へた。

今度は私の方が面くらふ番であつた。

――そりや、一手傳ひしてもいゝがね……但僕は專門の小說家ぢやないからね、お手傳ひしたら、それこそ却つて變なものにして了ふのでせうよ。

――變でも何でもかまひませんの。お手傳ひして戴けさへしたら、それだけで結構ですの……本當に私困つてゐるんですから……

私は少々片腹痛くなつた。そこで、

――そんな思ひまでして、小說なンぞ書かなくたつていゝぢやありませんか？　と、眞顏になつて云つた。

と、女はいかにも途方にくれたやうに、

――さうすると、私、毎日の御飯が滿足に戴けなくなるんですもの……

私はカラカラと笑つた。

――まア、そんなに心配したものでもないでせう……さしづめ私が養つてあげますよ。さう、さう、幸ひこの隣りの部屋が明いてゐるから、早速今晩から引越したらどうです……ねえ、さうなさいよ。小說なンぞ潔くやめてサ。その代り……と、私はもうよほど醉つて來た。――その代り、毎晩私に××××××んですよ。よござんすか……なに、かまふ事があるもんですか？　あなたも一人身だし、私も一人身だ！　さうしてお互ひに肉體の發達しきつた男と女だ！　抱擁し合はないが、寧ろよつぽど不自然だ、よつぽど不合理だ……

學生は責任を感じて立上つた。

――今晩はもうよほど遲いやうですから、これで失禮いたしませう。と、さう云つて、不安な目顏で女を促した。

――それでは。と、輕く頷いた女は座蒲團をすべつて、しとやかに一禮すると、――いろいろお話を伺つて、ほんとに有難うございました。と、朗らかな聲で囀りつゝ、忽ち襖の外へ出て、忽ち階段を鳴せ下つた。その調子のいゝトントントンといふ足音をきゝながら、

――逃げるのかね、卑怯だね、君は……などと、もうよ廻らなくなつた口の內で、クドクドと私は呟いた。さうしてそのまゝそこへ倒れてしまつた。

ふと眼がさめて見ると、私はふは／＼した厚い敷蒲團の上へチャンと横たはつて、いつもの通り、炎え立つやうに眞紅な、甚だ氣のひけるほどひどく艶めかしい友禪縮緬の掻卷にくるまつて、その上へ緑色の郡內の夜具など蔽ひかけて、若殿樣のやうに穩しく寢てゐた。糟糠の妻のやうにやゝ口やかましいが、中々親切でよく行屆く女中のお鹿さんが、ゆうべは恐らく非常に難儀な思ひをして、二十貫もあるこの重たい私のからだをたすけ起し、さうして多分やう／＼の事でこの蒲團の中へ臥かしつけてくれたものであらう。

外はよほど好い天氣だと見えて、もうかなり高さうな日光が、パッとまぶしいほど濶達に、白い障子の紙を耀かしてゐた。が、私はおいそれとすぐには起上らなかつた。長々と仰向けに臥そべつたまゝ、時々目をハチクリ開閉させるばかりで、身動きもせず、ヂッとしてゐた。

廊下では二三の女中達が、せつせとそこらの拭掃除に忙しさうな樣子であつた。この二階には客は今私一人なので、さうしてその私をばまだ熟睡の最中だと高を括つてゐたものか、彼等は大びらでしきりに客の噂をしてゐた。私は知らず／＼聽耳をそばだてた。

――ほんとにいゝ了見だよ。朝から晩まで、白粉ばかり眞白に塗り立ててゐながら、どうもこの部屋は騷々しくて書きものが出來やしない。だとさ、ばかにしてゐるぢやないか。

――でも、あすこは全くうるさいよ。下の私達の騷ぎが筒拔だからネ。

――それにしてもサ。

――お花さん、小說つてむづかしいもの？

――そりや、書くものはむづかしいやネ。

――いつぞや、この九番にいらつした谷崎さんなんぞは、それこそ大變な騷ぎだつたわ……晝眠て夜どほし起きていらしつてね、それで何枚も何枚も書き潰しばかりなさつてね、一日かかつて、それはホンの僅かしきやお出來にならないやうだつたわ……だから大したものよ、小說を書くなんて……

――てんなむづかしいものが、あの人に書けるのかしら？

――そりや、書けるんだらうよ、あんなハイカラさんなんだから……

――どうだかわかるものかね。おほかたそんな事を看板にして、金持の坊ちゃんでも引つかける氣でゐるんだらうよ。

――まさか。

――お梅さん、お梅さん、おきゝよ。さういやね、私にそれとなくこんな事を云つてたよ。『あゝあ、小說なんぞ書くのはつく／＼厭になつた。誰か私に一萬圓ばかりくれる人はないかしら。若しさういふ篤志家があつたら、たとひそれがどんないやらしい爺さんでも、びつこでも、めツかちでも、何だつてかまやしない、わたしや小說なンぞよしにしてすぐ飛んでゆく。』ツてよ。

――いゝ了見だ。

私は大きな聲でアクビをした。彼等はハタリと鳴りをひそめた。さうしてコソコソと階段を下りて行つた。

下郎は口のさがなきものか。と、私は可笑しく心の中で呟きながら、やがてノソノソと起支度をした。

手拭をブラ下げて、私は風呂場へ赴いた。風呂場には誰もゐなかつた。私がゆくとすぐ出て來て、いつも背中を流してくれる風呂番の爺さんまで、どうしたのかけふは姿も見せなかつた。と、隣りの別風呂でボチャボチャと湯を使ふ物音がした。

『はゝア、けふは珍しく隣りの風呂も立つてるのか。』と、私は思つた。と、さう思ふと殆んど同時に、忽ち隣りからヒソヒソと男女の話聲が洩れた。私は思はず耳をすました。

――私はほんとに、それは／＼お風呂がすきでね、かうして一日お風呂のある家だと、日に三度でも四度でも這入りたくなるのよ。と、きき覺えのある聲が云つた。

きゝ覺えがあるもないも――それは飽きるほどきいた、ゆうべの女の聲であつた。私はムラムラとその女の裸體が見たくなつた。と、男の聲がした。

――どうぞ御遠慮なく何遍でもお這入り下さいませ。

と、ザアと背中へ湯をかける音がした。

『なアんだ。風呂番か。』と、私は一寸輕い失望を感じた。同時に、立騰る湯氣と共に、萬遍なく暖かい雫の這ひまはる、大理石の彫刻のやうな、滑らかに白い女の背中を想像した。さうしてすぐ立上つて、よツぽど隣りへ押しかけて行つてやらうかと考へた。けれども、さすがに氣がとがめて、それだけは思ひとまつた。

風呂から歸ると、早速朝飯の膳に向つた。給仕に來たのはお庭さんではなくて、女中頭のお冬さんであつた。

――けさは大分御ゆツくりで……と、お冬さんは物靜かな、いかにもアカぬけた聲で云つた。聲ばかりではない、顏から、姿から、表情から、起居振舞まで、お冬さんの一切は心持よくアカ

ぬけてゐた。
　が、勿論その筈であつた。去年の春まで、お冬さんは大阪の南地に住んで、永らく宗右衛門町の大きな席から出てゐた姉さん藝者の一人だつたさうである。それがいろ／＼例の込入つた事情の下に、きれいサッハリ商賣の方の足を洗ひ、同時に男といふものにも一切の念を斷ち、今度こそ本當に一本立の女となり、もと／＼好きな道ゆゑ、東京へ出て、一生歌澤の師匠で終る考になつたものだといふ。さうして其芝派の家元から出る許しとやらを待つ間、幸ひこの宿屋が近い親戚の一つであるに任せ、しばらく茲で若い女中達の監督がてら、かく手傳ひをしてゐる身の上だと、いつだつたか、私の部屋へ手紙かなンか書いてもらひに來たやうな時、お冬さんは、しめやかに物語つてゐた。
　――昨晩は何ですか大そうお美しいお客様だつたさうで……
　――いや、お美しいのは結構だつたが、ダイヤモンドの戀には弱つたね。
　――へえ？　ダイヤモンドの戀？　何ですか活動のやうなお話でございますね？　で、どうしてそれにお弱りになつたのでございます？　あなたでもお弱りになるやうな事がお有りになるのでございますかねえ？　と、お冬さんは茶碗を受取つた盆を引きながら、冷かすやうに輕く目で笑つた。
　――そりや僕だつて弱るサ。あゝ臆面もなく滔々と喋り立てられちやね……とにかく雄辯なものだ。
　――でも、嘸々御標致のいゝ方でございますねえ？　あのお方は……と、再び盆を差出しながら、お冬さんは眞顏で云つた。
　――さうかね？　と、私は飯を裝つた茶碗を受取つて、疑はしさうに答へると、
　――そりやとても此間おいでになつたお方とは比べものにはなりませんけれど……と、お冬さんは思はせぶりに附加へた。
　――冗談ぢやない。と、私は飯を搔込みながら苦笑した。
　――いえ、全くでございますよ……內のお神さんも、お越しになるたび、帳場からよそながらお見かけ申して、「ほんとにお立派なお方だ。ほんとにお立派なお方だ。」と、つく／＼感心して、しきりに首を振つては、さう申して居ります……あゝいふお方に可愛がられていらつしやるあなたは、何といふお仕合せな人だらう？……なんてね……いえ、本當でございますよ……と、お冬さんは澄まして人の敷島を一本拔きとつて吸ひつけた。
　私は默つて一茶碗を差出した。と、お冬さんは吸ひつけた莨を慌てて灰の中へ插し込み、
　――相すみません。と、恐縮しながら盆を出した。が、恐縮したのは勿論そのサーヸスの態度ばかりで、眼はいよ／＼明瞭にその冷笑と揶揄とを裏切つてゐた。
　――あなたといふ方は、ほんとに罪作りでございますよ。あゝいふお美しい方々に、あちらでも、こちらでも、やいの／＼と氣をもませていらつしやるんですからねえ……實はあなた、けさほどねえ……と、灰の中から引出した莨に火をつけて、忙しさうに一二服吸ひ、――山村さんが起きぬけにお神さんとこへ押しかけてらしつたと思召せ。で、何を仰しやるかと思ふと、まア、からぢやございませんか……あなた、よつぽどお弱りにならなくちやいけませんよ……ほんとですよ……と、出すぎた煙を器用な手つきでうるささうに拂ひのけながら、――「お神さん、お神さん、私ね、仕事の上でいろ／＼先生に伺ひたい事や教はりたい事がありますからね、後生ですから、あの隣りのお部屋へ引越さして頂戴よ。」どんなもんでございます？　お弱り

になる値打は十分にございますでせう？…と、お冬さんは湯呑に出花を注いで、それをお膳の横手へ置きながら、『いかゞでござる？』といふやうな顔つきして云つた。

私は思はず釣込まれて、

――お神さんは何と云つたね？　と、湯呑の茶を茶碗の中へ移しながら訊いた。

――お神さんも弱りましたね…何しろどちらもお客様の事でございますからねえ？　お断りするわけにもゆかず…と云つて、若しさうなれば、あなたの御迷惑はわかりきつてゐるし…

――いや、僕は決して迷惑どころか…

――いえゝ、無論、そりや、あなたの事ですから、さう仰しやるにはきまつてゐますけれど…それにしても、あの穏しい奥さまに對して、そんな事を致しては、まことに、義理の立たないわけだから…と、あとでお神さんはしきりに申してをりましたよ。

――さうかね？　そりや殘念だね？　併しお神さんは中々エライね…僕なんぞの事について、そんなところまで心配してゐてくれるのかね？

――そりや、あなた、大切なお客様の事でございますもの…

――なるほど、さうしたものかね？…いや、御馳走。と云つて、私は爪楊枝を使ひながら、膳の前から離れた。

――お粗末さま。と、例のサーギスだけはよそ行きに、恰もその『大切なお客様』に對するものの如く、疊の上へ額までつけた甚だ鄭重なる一禮を終ると、お冬さんは膳部を片附けはじめた。

時計を見ると、十二時すぎてゐた。

のどかに肱枕でもして、ゴロリと日向ぼつこしながら、氣に入つた小説か隨筆を讀みたいやうな日だ。けれども本はもう家財道具と共に一つ殘らず賣拂つて了つた。

三四枚ある奥さんの寫眞を出して見る。急に手紙が書きたくなる。すぐ机へ向ふ。机の上には雜誌社と約束した隨筆の原稿が十枚ばかり書きかけたまゝ載つてゐる。と、その原稿を續けようかと思ふ。さうして一行ほど書いて見る。すぐ厭になる。やッぱり手紙にしようと思ひ返す。が、それも既う厭になる。

結局、ウキスキイだ。ウキスキイだけは厭にならない。奇體に厭にならない…三馬に出て來るケチ助の要領で、私は一人チビリチビリと飲む。

フラフラと私は立上つた。無意味に立上つた。つまり、坐つてはゐられなくなつたからだ。勿論、強烈なアルコールの化學作用が、筋肉の運動を支配する神經細胞を刺戟した結果には相違なからう。が、なぜ殊更に坐つてはゐられなくなつたものか、それはわからない。なぜ無意味に立上らなければならなかつたのか、それもわからない。たとひそれが自分自身の動作でも、無意識だから分らないのだ。人間の動作は大抵無意識だ。

私は障子をあけて、廊下へ出た。ばかにいい天氣だ。と、散歩がしたくなる。引返して、マッチと敷島の袋を袂の中へ抛り込む。手ついでに、意地ぎたなくもう一杯ひッかける。ぬすみ酒でもするやうに。さうして不必要ないそぎ足で、あたふた階段を驅け下りたものだ。

上下に二間づつあるこの一棟は、左翼に於けるこの宿屋の最端頭に位してゐるので、一旦階段を下つた者は、戻つて便所へ赴かないかぎり、

否でも應でも、歩けば自然と中央なる玄關へ足先の向くやうに、棟毎に異つた各様の廊下が、目まぐろしく曲折してゐる。

私は二つばかり廊下の角をまがつた後、何の氣なしに唯ある階段の下で立留まつた。同時に、いろ／＼先生に伺ひたい事や教はりたい事が……といふ聲がきこえたやうに思つた。さうしてそれはさつき聞いたお冬さんの聲色ではなかつた。

私は薄暗い階段を見上げた。が、

——まア、やめて置かう……と、さう思つて、二三歩階段の下を通りすぎた。通りすぎたかと思ふと、私の足は突然引返した。引返して階段を上つて了つた。

女の部屋は階段のすぐ側にあつた。天井が低くて、日當りのわるい、いやに狹苦しく感じられる廊下に立つて、私は障子の隙間からオヅオヅ覗き込むやうに、

——おいでですか？　と、よそゆきの聲をかけた。心の底では、しきりに、『ばか／＼しいから止せ、ばか／＼しいから止せ。』と、力なく叫びながら……

が、一向に返事はしなかつた。ゐないのか知らんと思つて、氣がついて足元を見ると、果せる哉、あるべき筈の場所に草履の影もなかつた。

私は安心したやうにホッと溜息をした。さうして、ついでながら、隣りはと見ると、草履は同じくそこにもなかつた。

——なんだ、馬鹿にしてゐる。お揃ひでお出かけか……と思ふと、どういふわけだか、忽ち今度は妬ましいやうな一種の妄念が、ムラムラと心の底から炎え上つて來た。

私は散歩をやめて、そのまゝすぐ部屋へ歸つて了つた。

夕飯の給仕にはお鹿さんが來た。

——あなた、いけませんよ。あゝいふお方があるのに、いゝ氣になつて浮氣なんぞして歩いちや……と、いきなり、お鹿さんは攻撃をはじめた。

——僕が浮氣？　どうしてね？

——どうしてもないもんです。そんなにおとぼけなさつたつて駄目です。チャンともうみんなに見られて了つてるんですよ。

——をかしいね、何を僕が見られたんだらう？

——しら／＼しいよ。まだあんな事を云つてらしやる！　のめ／＼と……

——驚いたね、一體まア、どうしたわけなんだ？　と、私があんまり眞面目なので、

——ぢや、やッぱりあなたぢやなかつたのかしら……と、お鹿さんの鋒先は忽ち鈍つて了つた。

——僕ぢやなかつたとは？

——いゝえね、さつきみんなで大騒ぎしたんですよ……何でもね、ドテラを着た、丁度あなた位の丈恰好をした男の方と、それは／＼山村さんソックリの後姿をしたハイカラさんとが、いかにも睦じさうに手をつなぎ合つて、向うの砂濱の上を歩いてるぢやありませんか……あたし達はテッキリあなたと山村さんに違ひないと思つたんです……やッぱり、あなたなんでせう？　と、急にまた疑はしくなつたらしく、お鹿さんは私を睨みつけた。

——冗談云つちや困る。僕はけふ一日どこへも出やしない。

——さうですかしら？　でも浦上さんが雙眼鏡で見て、たしかにさうだつて、仰しやつてましたがねえ？

浦上さんとは三田の學生の事だ。

——そりや浦上君の見そこなひだ。馬鹿にし

てゐるぜ。一日この室内へ閉籠つてゐた人間がどうしてあんな砂濱の上なぞが歩きまはれると思ふね？　つもつても見るがいゝ。と極力辯明に努めながら、私は心の中で、『はゝア、して見ると、別段浦上君と一緒に出かけたわけでもなかつたのか。』と、思つて、自分では氣がつかなかつた今迄の屈託が、急に跡方もなく消失せたやうな心持がした。

——君はどうも怪しからんね……ドテラを着た男なんぞと、睦じさうに手をつなぎ合つて、白晝公々然、砂濱の上をイチャツキ歩いたりして……と、夕飯後、今度は堂々と女の部屋へ乘込むや否や、私はエライ勢ひで浴びせかけた。女は妾宅の猫のやうにチョコナンと火鉢の前に坐つてゐた。さうして私の不作法な語氣には一向辟易した樣子もなく、

——オヤ、それは耳よりなお話でございますこと……と、ニコニコして答へた。

——そのドテラは何者です？　と、私は遠慮なく引寄せた座蒲團の上へドシリと大胡坐をかきながら疊みかけた。さうして酒くさい息と共に、ふうッと敷島の煙を吐いた。

と、そのとたんであつた。とても既ふ怺へきれなくなつたと云つたやうな、壓殺した男女の笑聲が、襖を隔てた隣室からクスクスと起つた。

ギョッとして私は顧向いた。さうして、

——浦上君、ゐるのかい？　なアんだ？　とテレ隱しに云つて、ガラリ襖をあけた。

見ると、そこには、ニヤニヤした浦上君と食卓を取圍んで、各自にトランプの札を持つた三人の女中がゐた。

——あけなくてもよござんすよ。と、そのうちの一人が忽ち叱りつけた。それはお鹿さんであつた。

——まア、いゝサ……浦上君、トランプは後廻しにして、これから二人がかりで、緊急なるドテラ問題を解決しようぢやありませんか？　と、私が云ふと、

——浦上さん、行くんぢやありません！　と、今度は離れて來さうにする浦上君を頭から高飛車にキメつけて置いて、お鹿さんはそれではまだ溜飮が下らぬやうに、ツカツカと席を立つて來て、ピッシャリと襖をしめて了つた。さうして、

——そッちはそッちでお樂しみなさい。こッちはこッちで勝手に遊びますから……と、金切り聲を振り立てて叫んだ。

——お鹿さんがやきまアす！　と、誰かが囃すと、一同はドッと笑つた。

——さア、それぢや、こッちはこッちでお樂しみだ。と、私は向き直つて、座側を据ゑたやうに云つた。さうしてそれとなく女の顏色を窺つて見た。が、女は不關焉と同樣に坐つたまゝ、變らずたゞニコニコしてゐた。

——そこでドテラだ。と、私は火鉢の方へ手を出して莨に火をつけた。と、

——ドテラは冤罪でございますよ……と、女は小さな脣をしをらしく動かしながら、——私、今日は、一日齋藤美代子さんのお宅で、まるつきり暮らして了つたんでございますもの……と云つて、——あなた、齋藤美代子さん、御存じ？　と、媚びるやうな目にシナをつくつて訊いた。

——齋藤美代子さん？　さう、きいた事があります ナ……丁度、あなたの名前をきいた事があると同じやうに……と、ドテラの事たんぞは忽ち忘れて、私は答へた。

——私も今日はじめてお目にかゝりましたの……さうしてスッカリお話が合つちやつて、

もうまるで十年もおつき合ひしたやうなお友達になつて了ひましたのよ……

――へえ？ それは結構でしたね……で、どんな人です？ その齋藤美代子さんといふ方は……やつぱり、あなたのやうな別嬪ですか？

――あら、御冗談ばッかし……何で私が別嬪なものでせうか……と、否定するやうに手を振りながら、しかしまた嬉しげにホホと笑つて、――私なンぞとはまるで異つて、美代子さんは、それは美人でいらつしやるわ。と、急に眞顔になり、――お書きになつたものとは全然正反對な、羨ましいほど落ちついた、非常に口數の少い、それはドッシリとした方ですの……

――鵠沼にゐるんですか？ その人は……

――えゝ、えゝ、もう十年からいらつしやるさうです……ついこの御近所なのよ、お家は……

――誰かの奥さんですか？

――いゝえ。

――ぢや、お嬢さんですか？

――まさか。

――そんなら、何です？

――何でもございませんわ。お母さんとからだのわるい妹さんとお三人きりで水入らずに暮らしておいでになつてるだけですの。

――さうして靜かに小説を書いてね……羨ましいなア……一つさういふところへ聟にでも這入りたいもんだね。

――喜んでお聟さんになさるでせうよ……あなたのやうなお方なら、二つ返事でね……早速、御紹介いたしませうか？

――どうぞ願ひます……と、それでその方の片はついたと……そこで今度はあなたの番だ。と、私は女の撫肩のあたりから人形のやうにチンマリした胸の邊へかけて、ヂッと視線をそそぎながら云つた。潔く白狀する。私はこの女と差向ひで話してゐると、どういふわけだか、自然に×××して來る。痩ぎすで小柄な女だから、打見たところ、どことして肉感的な箇所はない。外形的には、寧ろそれとはオー・コントレエルだ。それにも拘らず、しきりにさういふ氣がして來るのが、自分ながら不思議でたまらぬやうな思ひをした。

そんな怪しからん考など起してゐるものとは、機敏な女もさすがに直感は出來なかつたと見えて、

――え？ 私の番？ と、極めて無邪氣に訊き返した。

――つまり、あなたの身の上話がきゝたいのです。

――私の身の上話？ まア！ と、女はニッコリした。さうして俄に眞意は測りがたいと云つたやうな胡散くさい眼の底をチラリと輝かしながら、――私の身の上話なンぞ……と、投げ出すやうに云つたかと思ふと、すぐそばから、――それはお話しろとあればしない事もございませんけれど……と、大いに色氣のあるところを附け足した。

――さア、して下さい……この通り謹聽してゐます。と、私は剽輕に目をつぶつた。

――する事はしますけれど……と、女はさも當惑したやうに、――でもね、それはとても一晩や二晩ぢやお話しきれませんのよ……と、ジラスやうにコロコロ笑つた。

――一千一夜かゝつたつてかまひません。昔圓朝の鹽原多助をきゝに一日も缺かさず九段の定席へ通つた要領で拜聽します。

――まア、大變な御執心でございますこと……それにしたところで、さア、どこからお話したものでせう？ あんまり色々な事がゴチャゴチャと澤山あつて……

――「最近の御感想」から伺ひませう。と、私は出來るだけ巫山戯た調子で促した。が、さ

すがに懐から手帳を出す眞似まではしきれなかつた。

やがて女は語り出した。はじめのうちはやゝ話しにくさうに時々ポツリポツリ途切れたが、話してるうちに、だん〳〵氣が置けなくなつたものと見えて、一言ごとに人なつこい調子が加はり、打ちとけ〳〵隔意なく物語つて行つた。二人の子供を殘して、最初嫁入した家を出て以來、新聞記者になつて、その所謂『お目見え日記』を書く爲に、或時は待合の女中となり、或時は吉原のお針女に住込み、千變萬化の假裝生活が成功して、非常にその新聞の社長に可愛がられた事から、その結果社員等の反感を買ひ、自然退社して暫く京阪地方を流浪した擧句、尼になる氣で嵯峨の天龍寺へ驅込んだ事や、ところが、そんなナマやさしい事位では、中々前世の宿業はつきなかつたものと見えて、忽ちそこに修養してゐた哲學青年と出來合ひ、再び結婚して東京へ歸ると、さしあたり衣食に窮したところから、少し氣の變なその青年に突ツつかれて、やがて書きあげたのが、例の世間を騷がした、もとの社長と自分との關係をば忌憚なくスツパぬいた文章であつた事や、それからその文章の反響が凡ゆる社會の反感となつて自分一身へ集まつて來た苦痛と、さうして爲す事もなくたゞかぼそい女の筆先に縋つてのみ衣食しようと企てる、あまりに無能な、同時に又蛇のやうに執拗な、考へてもゾッとする青年の追窮とから、どうにかして身を免れようとして、或は別府の山の中へ隱れ、或は海を越えて遠く上海まで落ちのびた事や、さうしてその青年ときれいサッパリ手のきれるまでは、斷じて日本の土を踏まぬ覺悟で、それから少しばかりの化粧品や人形などを擔いでは上海、天津、大連、奉天、京城の間を股にかけて、ゆく先々でバザアを開いたり、時には音樂會を催したりして、とにかく今日まで誤魔化して來た事まで、臭味なくスラスラと物語つた。

『案外に正直な女だ。』と、私は思つた。

——それでその青年との關係はどうなりました？

——去年漸く籍を返してくれましたの。

——へえ？　法律上の手續まで踏んであつたんですか？

——えゝ。ですから、向うでも意地になつて、あゝ執念ぶかく追蒐けまはしたものなんでせう。下の關で警察へ引張つて行かれた時などは、本當にもう殺されるかと思ひましたわ。

——警察へね？　何だつてまた……

——船へ乘るところを見つかつて、警察へ訴へられたんですの……その時は私も既う一生懸命ですから、死物狂ひになつて署長さんへ泣きついたものです。さうして漸く虎口から遁してもらひましたの……よくわけのわかつた署長さんだつたのでね……

私もたうとう憮然として耳を傾けざるを得なくなつた。が、それにも拘らず、例の怪しからん考が、場所柄をも辨へず、遠慮會釋なく、ヒョイヒョイと頭をもたげるには弱つた。

——この女にかぎつて、なぜまた特にこんな氣が起つて來るのか知らん？と、私は自分ながら愛想のつきたあまりに要領を得ぬ自分自身の肉體を疑つた。

——さうして人形賣はなぜやめたんです？……小説なンぞ書くよりやその方がよッぽど面白いぢやありませんか……

——そりや面白うございますわ……面白いにや面白うございますけれど、やッぱり……

——やッぱり？

——やッぱり、何かにつけて、女一人ぢや心細うございましてね……それに不圖、表面こそワイワイ云つて、面白をかしくバザアなど開い

てゐる時でも、不圖自分自身といふものを考へ出すと、さア、不安で〳〵たまらなくなりますのよ……たとひこんな私のやうな淺薄な女でもね……

――なるほど、大きにね……そりやさうあるべき筈です。そこで小說を書く氣になつたんですか？

――まア、そんなわけなんですの……ですけれど、不安はどうしてもなくなりませんの。却つてだん〳〵不安になるばかりなので、私、どうしたらいゝものか、全くわからなくなつてゐますのよ。

――そりや當然ですよ。自分自身といふものを考へ出したら、人は誰だつて不安でたまらなくなるものです。

――どうしたらいゝものでせう？

――さア、どうしたらいゝものでせうね？……二祖の慧可が、七日七夜も雪の中へ立ち通して、命懸けで達磨にきいたのも、つまり、そこなんでせうがね……

――で、達磨さんは何とお答へになりましたの？

――そんなに不安な心なら、その心を爰へ持つて來い。さうしたら不安を取除いてやらう……と云つたさうです。

――慧可といふ方はどうなさいましたでせう？

――忽ち腕を切落して達磨の前へ持つてつたものださうです……どういふ了見ですかねえ……

――それから？

――すると、達磨は大喝一聲して、『心はどこにある？』と怒鳴りつけたものです。と、その刹那に、慧可はガラリと悟つたんだといふ話ですよ。

――何を悟つたんでせう？

――さア！ 何を悟つたんですかね。

――分りませんわ。

――誰にも分りッこはないでせう。

――慧可といふ方は本當にお分りになつたんでせうか？

――そりや分つたんでせう。分つたからこそ禪宗の衣鉢が繼げたんでせう。

――どうして分つたんでせうか？

――勿論、達磨が怒鳴つてくれたからですね。

――さうですかねえ……と云つて、女は溜息をついた。さうして、

――私も達磨さんに怒鳴つてもらひたいわね。と、いかにも思ひせまつたやうに呟いた。

私は怒鳴つてやりたくなつた。が、殘念ながら、私は達磨ではなかつた。

二人の間には暫く沈默が續いた。隣りではバサリパサリとトランプの札を打つ音がして、時々ガヤガヤとお互ひに何か云ひかはす聲々がきこえてゐた。が、かう押し默つてゐると、どうもこの、例の邪念が一層ヘルプレスにモゾモゾし出すやうな氣がしていけないので、別に云ひたい事もないのだが、私は强ひて、

――そりや、何ですよ……と、口を切つた。さうして出まかせに、――つまり、まア、要するに、どこかの專門道場へ出かけて行つて、公案の一つも貰つて來て見るんですね……そりや、どうせ、今時、達磨さんのやうな一代の名僧智識はゐる筈もありますまいがね……と、つぎ足した。が、女は、

――さうも思ふんですけれど……と、それには大して興味もなささうに答へた。

――それでなけりや、やッぱり適當な男を一人つかまへて、この際思ひきつて結婚して了ふんですね……私は寧ろその方が贊成だ……その方が生きた公案だからね……

——それは私もさう思つてゐるんですの……と、女は極めて眞面目に云つた。さうして、——でもねえ……と、ニッコリ砕けて、——その適當な相手が中々思ふやうに捉まつてくれないんですもの……と、肩をゆすぶつた。

——さうぢやないでせう？　捉まる男はいくらでもあるんだけれど、あなたの方があんまり贅澤に選り好みをしてゐるんでせう？……例の黄金の戀などと云つてね……

——あら、そんな事はございませんわ……いくら私でも自分の價打ぐらゐよく存じてをりますの……でもねえ、これでもまさかまだ電車の車掌さんの女房にはなりたくございませんのよ……

——電車の車掌ぢやなぜいけないんです？……あなたの所謂みんなから戴れかゝれるやうな人は、將來大きにさういふ方面から出るかも知れないぢやありませんか？

——そりやさうかも分りませんけれど……と、女は社會問題などはどうでもよささうに生返事したが、何を思ひ出したのか、急に悲しさうな顔をして、——私ね、今、本當にどうしたものかと、それはいろ〳〵に迷つてゐるのでございますのよ。と、さも術なささうに云つた。

何事か一寸見當はつきかねたが、そのいかにも術なげな調子に乘せられて、私は何となく或る責任のやうなものを感じたので、とりあへず、

——迷つちやいけないね。迷つちや……何にかぎらず、迷ふのが一番わるい……私は迷ふのが大きらひだ。と、何か意見がましく云つた。

——ぢや、どうしたら宜しいのでございませう？

——何をですか？　たゞどうしたらぢや分らないが……まア、仰しやつて御覽なさい……

——申上げて了ひませうか……思ひ切つて……ザックバランにね……

と、女は暫く躊躇つてゐたが、やがて決心したやうに、——申上げて了ひますわ……どうせもう何もかもお話しちやつたんだから……實はね、と、漸く本題に這入つたやうな顔つきして云ひ出した。——實は只今ね、私の生活と關聯して……と申したところで、別に何も肉の關係があるわけぢやございませんが……私の一身上について、それは親切に相談相手になつて下さる方が一人ございますのよ……

——肉の關係があつたつていゝぢやありませんか？　と、私はすぐ嘴を入れた。『大かたそんなこつたらうと思つた。』と、いさゝかヤケ加減に心中で呟きながら。

——ところが、その人は、肉にはもうスッカリ飽ききつてる方なんですの……まア、福澤桃介さんと云つたやうな、新橋では誰一人知らぬ者もない位な遊びやさんでしてね、その方にかけては、中々スゴイ腕を持つてるんだとか云ふ話です。その新橋の藝者を一人引かしてお妾さんにしてゐます。もう四つ位になる坊ちやんもあります。えゝ、無論その藝者にです。それから帝劇の筑間路子……御存じでせう？……あの人の旦那にもなつてゐるのです。それからもう一人、これにはある待合の娘分になつてた女ですが、まだ年も非常に若うございますし、見るからいかにも水々とした、それこそ全く肉の塊に出來てるやうな女でしてね、それがまア、つまり支那流に申せば、第四夫人になるのでございますわ……

——さうしてあなたが第五夫人といふわけですかね？

——冷かさずに、まア、お聞き下さいましよ……さういふやうに、肉には十分に飽いてるわけなんでございませう？　ですから、その上にまだ、さういふ方面には全く取柄のない、私の

やうなこんなお婆さんを、ウンにもお世話して下さらうといふのは、勿論、肉の爲ではないのでございますね。

――へえ？ それぢや何の爲でせう……

――つまり、肉の女にはもう倦々したから、今度は方面をかへて、肉とは全く關係のない、精神的……と云つちや少し大袈裟ですけれど、まア、新聞記者でもした女と始終話がして見たくなつたものなんでせう。

――そこで、今、あなたはその男の世話になつてるわけですか？

――どう致しまして！ 鐚一文だつて世話になぞなつた事はございません……私、これでもまだ、少しばかり人形を賣つたお金を持つてをりますから、當分は人樣のお世話にならなくても、どうにか斯うにか一人でやつてゆけない事はないのでございますの……たとへば只今住まつてゐる家にしたところで……無論そりやキリギリスの籠見たいな家ですけれど、自分一人の力で借りてる家には相違ございませんの……ですから、私、その方の世話になる必要は全くないのでございますわ。

――さア、少しわからなくなつたやうだね？ さうすると、どういふ事になるのです？ その男があなたの世話をしたい、それをあなたは世話になりたくない、と、さういふ狀態にあるわけなんですか？

――いえ、なりたくないわけぢやないのですのよ……ですけれど、第五夫人になる事は眞平なんでございますの。

――をかしいね……世話になるのがいやでないとすれば、自然、第五夫人の地位に納まる事になるでせうがね……

――それがいやなんですの。

――妙だね……はゝア、わかつた！ つまり、からなんでせう……第五夫人ぢや御免蒙る。第一夫人なら御話に乘らう……と、さう云つたわけでせう……

と、女はホホと笑つた。

――さう……仰しやられると、さういふ事になるかも分りませんわね……ですけれど、いくら圖々しい私だつて、そこまで考へてるわけぢやございませんの……

――中々むづかしいね……併し、まア、その男の要求に對するあなたの心持は大抵わかりました……そこで、その男といふのはどんな人間です？

――そりや教育のある立派な紳士でございますわ……そして氣味のわるい位緻密な頭を持つてる方ですの……始終家へいらしつても、それは本當に嚴格なものよ。膝一つ崩さないでね……で、しきりに『勉強しろ、勉強しろ。』と鞭撻して下さいますの……アメリカの大學を出た人ですから、英語がよくお出來になるので、私、この節はその方に『エヴンジェリン』を敎へて戴いてますのよ……

――『エヴンジェリン』？ ロングフェローの詩ですか？

――えゝ。あなたお讀みになつて？

――二十年前から名前はよく知つてゐますが、まだつい驅けちがつて、一度も讀んだ事はありません。面白いですか？

――何ですか、私にやたゞむづかしいばかりでね……

――むづかしい事もなからうが……と、私は少々ディスイリュージョンを感じた形で、同時にさう云つた男に對する嫌惡の情と嫉妬の念まで手傳つて、――さういふ高尚な人だとわかつて見れば、そりや無論その人の世話になつた方がいゝね……いゝねどころぢやない、進んで世話になるべきだね……第五夫人だらうが、第六夫人だらうが、もうさうなりや、何だつてか

まやしない……どうせそのうち、人形の金なんぞ、またゝく失つて了ふでせうからね……と、ツケツケと云つたものだ。

が、そのイロニイには、女は一向感じた樣子もなく、

――でも、さうまで負けて了つては、それぢやあんまり、自分といふものが、今迄苦勞して來た自分といふものが、あんまり可哀さうなやうな氣も致しますのよ……と云つて、――それに……と、何やらまだ云ひたさうな口を不圖氣がついたやうに閉ぢた。

――それに？　と、私はすかさず訊いた。

――それに、何でございますよ……私もね、これで今迄、歴とした奧さんのある方にはさんざん苦勞しぬいて、しみ〲もう懲りてる身でございますからね……

――へえ？　そんな事が今迄にもあつたんですか？

――えゝ。無論、年下の方には戀の出來ない、私のやうなお婆さんに捉まる方は、どうしたつてもう奧さんやお子さん方のあるお人にきまつてゐますわ……ですから……

――それを一つ何はうぢやありませんか。ついでに、と云つちや失禮だが……參考の爲にね……

――えゝ。お話し致しますわ……實はこれは取つて置きのお話なんですけれど……と、女は嬉しさうにニッコリして、――もう、かうなりや、ありッたけお話して了ひますわねえ……同じこつてすから……でも、愛想がおつきになるでせう？　大變な女だとお思ひになつて……と、氣の毒さうに云つた。

――どう致しまして……だん〲あなたといふものが明瞭になつて來るので、それが私にとつては非常な學問になります……愛想なんぞは決してつきません……つきるどころですか……

――さう仰しやつて下さると、本當に張合ひがあつて、何でもかんでも、いゝ氣になつてみんなお話がして了ひたくなりますのよ……あなたも倂し隨分罪なお方ね……

――まア、いゝからお話しなさい……そりやどういふ人です？

――その人ですか？　その人はズッと遠いところにゐる人ですの……

――ズッと遠いところといふと？

――爰からは、さうですね、多分五百里もあるでせう。

――五百里？　朝鮮ですか滿洲ですか？

――まア、いゝわよ、五百里ぐらゐなところで……

――さうですか。ぢや、その五百里さんは何をしてる人です？

――その五百里さんは……と、ウッカリ釣込まれたので、女は思はず笑ひながら、――その人の名前を五百里さんといふ事にして置きませうね……

――さうしてさッきの、その、例のエヴンジェリン氏は、さしづめ新橋さんですか……

――えゝ、それがいゝ事よ……その五百里さんは建築やさんですの……

――工學士ですか？

――さうなんでせう？　多分……

――さうしてやッぱり新橋さんのやうな人ですか？

――いゝえ、まるつきり反對なの……それはボーッとした、影のうすい、新橋さんのやうには少しも頭の働かない、さうですねえ、まア、全體が斯うどこまでも灰色の人ですの……それは天下泰平な人なのよ……大連のヤマトホテルで私が音樂會を催した時……と云ひかけて、女は罪もなく想出し笑をしながら、――その音樂

會には私が狂言の「こふなふな」を出して、その太郎冠者になつたんですから變胸のいゝもんでせう？……何しろあゝいふ殺風景きはまる土地ですから、皆さんが非常に珍しがつて、それは大變な成功でしたの……その音樂會の發起人連が、あとで慰勞會を開いた時、その席上で、誰だつたか一寸忘れましたが、その人にはじめて紹介されたのが、つまりその五百里さんだつたのです……まるでゐるかゐないか分らないやうな人でね、その時は一向氣にもとめず、例によつて忘れて了つたものなんです……と、それから間もなくでした。その忘れられた人が、或日ヒョッコリ私を尋ねて來たのですの、さうして云ふには、『自分は今度太平洋商會といふ一事業を計畫して、大いに日米の貿易界に活動して見る考だ。就いては、その事業發展の爲に、是非一つあなたのやうな婦人の手を借りたいと思ふ。若しお差支がなかつたら、どうか今後商會の一員となつて働いてはくれまいか。』といふやうな事だつたのです。非常に眞面目な態度なのです。私も考へました。これで人形の行商といつたところで、もと〳〵深い考へがあつてやり出したわけではなく、ホンの一時の思ひつきにすぎないのですから、どうせさう長くは續ける氣もなかつたのです。それに重なる土地はもう大抵行きつくして、これからは商賣もだん〳〵骨が折れてゆくにきまつてゐるので、自分としてはソロソロ厭氣のさしはじめて來た矢先でもあつたのです。そこで決心して、快く五百里さんの勸誘に從つたわけですの。……

——ウム、中々面白い……それから？

——それから、その五百里さんの祕書役といふ名義で、毎日太平洋商會の事務所へ出勤する身の上となりましたの……やり出すと何でもすぐ一生懸命になる性質ですから、それは非常な熱心さで働いたものです……五百里さんも大そう重寶がつてくれました……が、それだけなら無事だつたんです……

——そりやさうでせう……ところが、人生は中々さううまくは出來てゐないからね……

——えゝ。今考へると、やッぱり私の修行が足りなかつたんですね……見す〳〵苦勞するにきまつてる境遇へ、愚かにもウカウカと陥り込んで行つて了ひましたの……氣がついた時にはもう駄目でした……ニッチもサッチも行かない身の上になつて了つてゐたのでね……と、女は思ひ出してもゾッとすると云つたやうに、ホッと溜息をついた。

——孕んだんですか？と、私は殘忍に指摘した。が、女は悪怯れず、明瞭に、

——えゝ。と答へた。さうして恰もその時の苦悶から一刻も早く逃れたいやうに、急いでそのあとの言葉を續けた。

——五百里さんの奥さんは基督教出のお方だつたので、私達の關係を御承知になると、人一倍の御苦勞をなさつた御様子でした。結局、非常なヒステリイに御罹りになつて、五百里さんの御家庭は、それからと云ふものは、全く暗の夜に包まれてお了ひになつたのです……私はます〳〵苦しみました……苦しんで、苦しんで、苦しんだ擧句、死ぬ覺悟で飛び出しました。さうして金剛山へまゐりました。

——金剛山？　朝鮮のね……

——えゝ。と、女は首を垂れて、苦しげに口を閉ぢた。

——さうして、その孕んだ子はどうしましたか？ と、自分でも少々殘酷すぎるとは思つたが、私は倘意地悪く訊いて見た。

——幸ひそれは流産して了ひましたけれど……

——幸ひね？

——えゝ。

『女にとつて、流産が幸福となる位、それほどその女の不幸はない。』と、私は心の中でさう叫んだ。さうしてさういふ不幸の女の非常に多い社會組織がますます呪はしくなつた。

——まア、その話はもうそれ位でいゝでせう……妻子のある人を戀する事がどの位苦しいものであるかはよく分りました……そこで現在へ戻りませう……例の新橋問題へね……と、私は出來るだけ言葉の調子を和らげて云つた。

その所謂新橋問題が、まだ女の脣の上に漂つてゐた時まで、性懲りもなく執拗に私を惱ましつゞけてゐた例の無遠慮な怪しからん考が、ふと氣がつくと、いつのまにかもう跡かたもなく私の肉體から消滅してゐた。私は再び自分の肉體の不可思議きはまる作用を疑つた。

バタバタと廊下に足音がした。ガヤガヤいふ人聲もそれに伴つた。それが話に夢中になつてゐた私の耳には、グヮンと響いた。いかにも突然であつたやうに……

——もう一時すぎましたよ。今晩はこちらへおやすみですか？ と、入口の障子を二つ三つ小突きながら、憎らしさうに呶鳴つて、その儘階段を下りて行つたのはお鹿さんの聲であつた。

私は思はず苦笑した。さうしてすぐ立上つた。

——それぢや、新橋問題はまた明日伺ふ事にしませう……ねむかつたでせう……おやすみ。

——おやすみなさい……失禮いたしました……

そのションボリした哀切な女の聲が、部屋へ戻つても、床の中へもぐり込んでも、中々私の鼓膜から消失せてゆかなかつた。さうしていつまでもいつまでも寢つかれなかつた。

あくる日、朝飯の膳に向つてゐる間、お鹿さんは器械的に給仕の任務に當る以外、全く一言も口をきかず、盆を横たへて、プウとそツぽうを向いたまゝ、安本龜八の出來のわるい人形のやうに、身じろぎもせず、苦蟲をかみつぶしてゐた。

『女護の島の住民には困つたものだ。』と、私は少々ばからしくなつて、同じやうに物をも云はず、食ひたくもない飯を、止む事を得ず、強ひて默々と嚥下してゐた。

やがて食事もすんで、ガタピシとお鹿さんの立上つた後、けふこそは久しぶりで雜誌の原稿を續けようと思ひながら、やをら机に向つた時、再び階段に足音がして、勢よく襖をあけたのは、ちゞれツ毛の、まる顔の、ひどく愛嬌のある、お蔦さんといふ年若な女中であつた。

——ゆうべはお樂しみ……でも、もうおよしなさいよ……このお方にお氣の毒だから……と、お蔦さんはコロコロ笑つて、一通の西洋封筒を出した。——これ、あの方からでせう？ 何にも書いてなくても、私には、チャンと分るわ……千里眼でせう？ 私は……そこで私には何を奢つてくれるの？……今度東京へいらしつたらね、木村屋のパンを買つて來て頂戴よ、……よう、きつとよ！……忘れちや駄目よ……

などといふ、罪のない、勝手放題の熱をガラガラ吹きちらして、お蔦さんはその外二三通の手紙を置くと、サッサと出て行つた。

原稿なンぞはすぐ忘れて、私はガツガツと奥さんの封筒にとツついた。と、手紙には至極簡單にかうあつた。『あなたがあんな事を書いて下さつたばつかりで、私はもう身動きも出來なくなりました。もう多分お目にはかゝれないでせう。』と、それツきりだ。

『あんな事を書いた。』とは、今月の或雜誌へ出

た、小說のやうな、隨筆のやうな、至極曖昧な、下らぬ私の文章の事だ。文章は下らなくても、事實は別荘社會の問題になつたと見える。そこで監視が嚴重になつたわけだ。但し、もう多分お目にかゝれないでせう。」は、少々意氣地のなさすぎた弱音だ。或は……さう、或は……

『若しかしたら、自殺でもするつもりではないかしらん？』と、ふとさう思ふと、私の心は忽ち緊張した。さうして、もう一度、ヂッと手紙の文面を凝視した。が、文面だけでは、インキの色だけでは、字並びだけでは、さうした豫感はどこの隅からも嗅ぎ出せなかつた。

私は瞑目して考へて見た。二人の愛兒を左右にした、五人の女中を侍らした、數寄を凝らした檜づくりの別荘に起臥する、一度棄てては二度と得難い奧さんの境遇を考へて見た。夫はたゞ我儘なだけで、世間普通の極めて善良な坊ちやんにすぎぬ。岳父はやかましいが、そのうちには死んでゆく人だ。呉服を主とした大商店の主人だから、着たいキモノはいくらでも着てあるける。有數な家作の持主だから、固定財產は五百萬圓を越えてゐよう。さうしてそれが十年もたてば殆んど全く自分一人の掌中に落ちるのだ……それを棄てて自殺する？……奧さんはそれほど強い情熱を持つてゐるだらうか？……

「波の音でもきゝながら、松の梢でも眺めながら、乳呑兒でも緊と抱きしめて、恐らく世の味氣なさを泣く位が關の山だらう……自殺なンぞするものか！」と、私は奧さんの自殺を否定した。と、同時に、それとは全く正反對な考が、俄に私の胸の中に浮んだ。

「はゝア！　女今川の貞女は、丁度いゝ潮時を見すまして、體よく緣切り狀をよこしたわけか？……」さう思ふと、今度はぐッと小癪にさはつて來た。若しさうだとすると、卽ち感情を弄ばれたのは私であつた。男のくせに、私であつた。四十面さげた私であつた。

「だから文士はいやになる……ありもしない事を想像して、出鱈目に誇張して書きちらすから……知らない者は本當だと思ふ……』と、さう云つて置きさへすれば、それで貞女の一分は立つのだ。一分なるものが立ちさへしたら、それで貞女は貞女のまゝで通るのだ。どこの國のブルジョア社會でも、さういふ貞女が、どうしても必要なのだ。その社會を維持する爲に必要なのだ。

『どうして復讐してやらう？……』と、私はウヰスキイを引寄せて、頭の中に短銃だの白刃だのを閃かした。かと思ふと、考は、またすぐ逆戻りして、「だから、私はいつでも死ねるやうに、簞笥の抽出しへ劇藥をしまつてあるのよ……」と云つた奧さんの言葉を想出した。さう云つて淚を一杯ためた奧さんの眼を想出した。私の頭は混亂した。私はつゞけさまにウヰスキイをガブリガブリ飲んだ。

『なんだ、下らない！　死なうと生きようと、それは向うの自由ぢやないか？　他人の自由意志には立入る權能はないのだ……感情を弄ばうと弄ぶまいと、それも向うの勝手ぢやないか？　弄ばれて腹が立つたら復讐してやるがいゝ。復讐なぞするのが子供らしいと思つたら、冷然として取合はぬがいゝ。取合はぬがいいのだ……さうだ、今日にもあの女が潔く自分の境遇をぬけ出してくれればよし、さもなくば、そのまゝに放つて置くがいゝのだ……

『あなたと私とはグラウンドが全く異ふ……』あの女の口癖だ……グラウンドとは何だ？　フン、テニスやベースボールぢやあるまいし……五百萬圓の相續者を養育する役目が、それほど深いグラウンドに立つてると思ふのか？……本當に若しさうあの女が確信してゐるとすれば、

俺とあの女とは思想上の敵味方だ。從つて生存上の敵味方だ……グラウンドが異ふ？ 全く異ふ……地面を叩き賣つて、その金を撒きちらして、裸一貫の放浪生活へ這入つてやらうと企てゝゐる人間と、あのまゝのあの女の身の上とは、そりやグラウンドの異ふのが當り前だ……あの女が自分の立つグラウンドを棄てて、俺の生活と同化する氣にならないかぎり、そりやこの戀愛の成立たない事は分りきつてゐる……それでも俺はあの女を見ると、すぐ××たくなるのだ。あの女も俺が××××××××つくのだ……汝の敵を愛せよか。路加はうまい事を云つてゐる……さう云へば、あの女は基督教學校の出だつたッけ……

『えゝ、放ツて置け……何がどうならうと構はない筈だつたのだ……これッきりあの女と永遠に別れて了つたらそれがどうなのだ？ それが俺自身の生活と何の關係があるのだ？ 俺はただ俺だけの生活しきや持つてゐない筈だつたぢやないか？ さうだ、俺は俺だけなのだ。俺一人きりの生活なのだ……それだけなのだ……』

　などと、葡萄が酸ツぱいやうな、負惜しみに似た、結局は僻んで萎けた考をば、ものほしさうにあちらこちらと持ちまはりながら、私は封をきつたまゝ讀みもせぬその外の手紙の上へ、徒らに明盲のやうな眼を走らしてゐた。その手紙は三通あつた。さうしてそのうちの一通は書留であつた。

　書留に氣がついて、俄然として正氣づいて、と、見ると、膝の上には二百圓の郵便爲替が乘つてゐた。さうしてそれに添へた故郷の實父の克明な手紙が眼に這入つた。走り讀みすると、手紙には賣れた地所の手附金が月末には受取れるとあつた。又金の這入る事を安心してあまり諸方へ前借はせぬやうにとも注意してあつた。

『フン、大きにお世話だ……人の地所を賣つて、その金の一部から、ひそかに自分の家庭の安全を計らうとしてゐるくせに……』と、私は思つた。さうしてどこまでも私有財產制度といふものに頓着して、その外には人間に生きる道はないやうに考へてゐる實父の了見が情なくなつた。尤もそれは實父に限つた考ではなかつたけれど……

『おやぢのやうな貧乏人はじめ、先に立つてそんな了見でゐるからこそ、所謂資本階級の連中が、いゝ氣になつて、時を得顏に、飽く事を知らず、無產階級を蹂躙してやまぬのだ……貧乏人が善良で正直である事はプロレタリヤにとつては非常なる損失だ……』と、私はそんな事まで思つた。實父こそいゝ面の皮だ。

　もう一通の手紙は私の文集を出せといふ或書肆の勸誘狀であつた。それから最後の一通は流感で死んだ友人の父親から四十九日の法會に出席して呉れといふ案內狀であつた。考へて見ると友人の四十九日は丁度養母の祥月命日に當つてゐた。

『さうだ。友人の法會をすましたら、その足で母の墓詣りでもして來よう。』と思ふと、忽ち八年前に死んだ懷しい養母の顏がまざ〱と心に浮んで來た。養母とはいへ、四五歲の頃から眼の中へすり込むほど可愛がつて〱育てて來てくれた母親だから、私にとつてはそれが本當の母親であつた。母親に死なれてから私の心は一層荒んだやうに考へられる。若し母親がいつまでも生きてゐてくれたら、それは時々喧嘩もしたであらうが、私の心は恐らくかうまでデスペレートにはならなかつたであらう。そんな事を考へると、私は何だか子供のやうに聲をあげて泣きたくなつた。

　くさ〱して來たので、莨を銜へながら長廊下へ出た。と、パツとまぶしいやうに目は眩る

かつた。けふもきのふのやうな上天氣だつた。相變らず江の島は夢のやうに微笑んでゐた。相變らず、砂濱が、松林が、別莊が、池が、鯉が、藤棚が、やんはりと視線に絡みついてニッコリした。

――お早う。いゝお天氣ですわねえ……と、下から誰やら聲をかけた。

私は覗いて見た。

――あゝ、あなたですか……どうです？ 上つて來ませんか？ そして昨晩の續きをきかして下さいよ……

――お仕事してらつしやるんでせう？

――なアに、仕事なんぞ出來るもんですか……こんないゝ天氣の日は、あなたのやうな別嬪さんとお話でもするより外に、何一つ手につきやしませんよ……さア、上つていらつしやいよ。

――あら、いやだ……でも、本當にお邪魔ぢやなくて？……さつきからお伺ひしようかと思つてたんですけれど、お仕事のやうでしたから、さし控へてをりましたのよ……と、日を受けて眼を細くした顏を快活に振上げながら、淀みのない聲で女は喋つた。

――まア、さう遠慮しないで、早く上つてらつしやい。

――ぢや、伺ひますことよ。

やがて女は私の前にあつた。森閑と松風の音を立てる火鉢を隔てて、女はいつも奧さんが來て坐る位置と、丁度全く同じ位置へ、同じ角度をなして、同じ要領で、無意識に私と差對つたものだ。私は一寸變な心持がした。

――どうですナ？ 小說は進行しますかね？

と、口を切りながら、私は心の中でそれとなく奧さんとこの女とを比較して見た。

――とても書けやしませんの……何しろ期日が切迫してますので、たゞ氣ばかりわく／＼致しますんでね……

――へえ？ 雜誌の原稿なんですか？

――それがもうあと五日しきやないのですもの……

――何枚位書けばいゝのです？

――一部はもう向うへ行つてるんですけれど、まだ百枚ほど書かないと纏らないんですの……

――そりや大作だ……併し五日間に百枚は少々無理らしい……幹彥君なら一晩でも書けるだらうが……

――ですから、茲のところ、すッかりもう閉口頓首してますの……と、いかにも思案投首と云つたやうに、女は剽輕に首やからだを搖ぶつた。

一奧さんに比べると、この女の方がよほど線が柔らかい。」と、私は思つた。

――まア、いゝでせう、そんなに閉口頓首などしなくたつて……出版者の云ふとほりになつてた日にや、とても文士の命は續きませんよ。

――でも、お金はもう先へ貰つてあるんですから、全く絕體絕命なのよ……

――そんな事はかまふもんですか。……露伴先生がね、昔、僕等にこんな事を云つてたッけ……本屋の二三十軒も叩き潰す了見でなくちや、とても一人前の文士にやなれつこないたんてね……

――まア！ でも、私達にや中々そんなわけにや參りませんわ……あゝ、さう／＼、あなたはTさん御存じ？

――自然主義のTさん……えゝ、よく知つてゐます……滅多に遇つた事はないけれど……それが？

――Tさんは私の先生ですの……二年このかた、先生に書いたものを見て戴いてますのよ。

忽ち私の心にT氏の蒲團が閃いた。

——へえ？　さうでしたか？　それはいゝ先生を捉まへたものだね……Tさんの眞劍な態度には僕も昔から敬服してゐますよ……あの態度でゆきさへしたら間違ひはない。

もう十二時になつたものと見えて、

——御免下さいまし。と云ひながら、お冬さんが膳部を捧げて這入つて來た。

——何んだ、もう飯かね？……いかゞです？　あなたも愛で一緒に召上つちや……

——オヤ、もうさうなりますの？……それぢや失禮いたしませう……いゝえ、有難うございますけれど、私、いつもお晝は戴きませんの……それに、午後からはまた齋藤美代子さんのお宅へ上るお約束がしてございますから……と、女はさう／＼立上つた。

——さうですか？　それぢやまた晩にお目にかゝりませう……さうだ、かうしたまへ……晩にね、齋藤美代子さんを愛へ引張つて來ませんか？　鳥でも御馳走しますよ……あなたより美人だといふその方に一遍お目にかゝりたいからね……ねえ、さうおしなさい。と、どうしたわけだか、私は無上にこの女を引きつけて置きたくなつたものだ。

——ほんと？　ほんとなら、遠慮なく上りますよ。美代子さんもしきりにあなたにお逢ひしたがつておいでですから、どんなにお喜びになるでせう？……ぢや、左樣なら。と、女はいそいそと出て行つた。

——案外、あなたも外交家でいらつしやるのね——恐入りましたよ……全くね。と、大袈裟に感心したやうな顔つきを拵へて、徐ろに餉臺の向側へ直ると、お冬さんは給仕盆をシャに構へて囁いた。

晩には約束どほり鳥鍋を用意して待つてゐた。馬鹿な顔して待つてゐた。と、女も約束どほりやつて來た。約束どほり相棒まで引張つてやつて來た。さうしてお冬さんとお松さんとがいやに改まつたサーヴス振りを發揮して、鞠躬如とそこらあたりを周旋した。お松さんは女の方の部屋附女中だが、この宿屋中で一番別嬪だ。かうして四人の女をヅラリと眼の前へ並べて見ると、さうして君はこの中のどれを取るかと訊かれたとすると、××××××ら、私はきつとお松さんを擇ぶに相違ない。それほどお松さんばかりが頭拔けて美しいわけではないのだが、その點に關しては、何としても肉體の潑剌清新が最喫緊の要件として、動き易い私の性慾の觸手に感じて來る……そこが恐らく天命耳順の齡にも憚らず、前後不覺の大金を投じてまで、黒にもつかないお前の尻に武者振りつく所以であらう……お松さんに比べると、あとの三人は、要するに皆それ／＼のデカダン趣味をば、それぞれの姿態に應じて、俳に發散させつゝあると云ふにすぎなくなる。但し、齋藤美代子さんだけは、その中の一人としては、まだよッ程どデカダン程度の微弱な方で、睫毛の濃い、伏目勝のその大きい眼や、赤味を帶びた豐頰、盛上つた肩の肉の締り加減、それから力強い腰の邊の太い線などが、正に發達の絶頂に立つ年増女の健康を思はせた。さうして美代子さんの唇は、その厚く重くるしい唇は、凝結した血のやうな色をして、堅く結ばれたまゝ、非常に堅く結ばれたまゝ、滅多には開きさうに見えなかつた。

——御免を蒙つて、僕は遠慮なく酒をのみますから、あなた方は勝手に飯でも何でもたべて下さい。と云つて、私は早速猪口をとり上げた。が、側に侍してお酌をしてくれる人は、お生憎樣ながらデカダン組のお冬さんであつた。さうしてお松さんは美代子さんの横手にひどくか

しこまつて、牝鹿のやうな眼をパッチリと睜きつゝ、傍目もふらず、フツフツと煮え立つ鍋の中をば、恐る〳〵杉箸で突ついてゐた。

――あなた方はお二人で一日何を話してゐたのです？　と、私は先づ道子女史の眞白な顔を見て、それから美代子さんの出來のわるい銀杏返へ眼を移し、最後にチラリと恥しさうなお松さんの横顔を窺視て、グルリと顔の位置を轉ずると、お冬さんへ猪口をさしつけながら、僅に話の緒口を見つけた。

――それはいろんなお話よ。と、道子女史がすぐ引取つた。お冬さんは一寸頭をさげて、

――私へでございますか？　恐入りますね……と、器用な手つきで猪口を受けた。と、その猪口へ徳利の口を持つてゆきながら、

――いろんな話ぢやわからないね……内容を話してくれなくちや……と、私は人に物を食はせる時の卑しい優越性を聊か感じながら、馬鹿殿樣のやうな顔して云つた。

――あなたはお人が惡いからいやよ。と、女史は美代子さんと目くばせして、――ほんとに、こちらはお人が惡くていらつしやるのよ……嫌をかけちやア、人に何でもかんでも吐き出させてお了ひなさるんですもの。と、お冬さんの方を向いて、――ねえ、さうですわねえ、お冬さん。と贊成を求めた。

――そりや、あなた、こちらにかゝつちや敵ひませんよ……何しろ海山千年といふ札つきのお方ですもの。と、お冬さんは猪口を返しながら合槌を打つた。と、それをきいて、お松さんはそツと私の顔を見て、罪もなくニッコリした。その笑顔が私の心にひどくこたへた。

――海山千年は殘酷だ。そりやお冬さんの事さ。

――どう致しまして、あなた……あなたが、若し千年と致せば、私などはやツと五十年か百年位になつたばかりの、それはホンの雛つ子でございますよ……まア、あなただけにお人が惡くならうとするには、そりやどうしてよツぽどの修行がいりますよ。

みんなは聲をあげて一齊に笑つた。

――怪しからんもんだね……ソレ、ソレ、人の惡口にばかり熱中してるから、その通り鳥が煮つまつて了ふ……綠雨の曰く、「食ふばかりの口なりしなり。」サ……ちツと食ひけの方に精を出しちやどうです？　と、次第にダラケて來た唇をベロリと舐めて、私が云ふと、お松さんは慌てて鍋の中をいぢりはじめた。

――へえ？　それはどういふ事でございます？　その、「食ふばかりの口なりしなり。」といふ言葉の意味は？　と、質問して置いて、女史は、――私達は御遠慮なく御飯を戴かうぢやアないこと？　と、美代子さんを促して茶碗を出させた。お松さんは急に忙しくなつた。さうしてまめ〳〵しく飯櫃を引寄せたりお盆を出したりした。

――それは綠雨が子供の頃、叔父さんに叱られて「食ふばかりの口ぢやないぞ。」と云はれた事があつたんださうです。併し年をとつてから、その言葉を想出して見ると、『今にして思へば、食ふばかりの口なりしなり。』といふわけです……眞理でせうがね……と、私はソロソロ管を卷き出した。

――全くでございますわねえ。と、お冬さんは感じ入つたやうに首を掉つた。

――眞理かも分りませんが、少し皮肉すぎるやうですわねえ。と、女史はササミを挾んで口の方へ持つてゆきながら不服さうに云つた。

――あなた皮肉はお嫌ひかね？　眞理はすべて皮肉ですよ……眞理の嫌ひなものは、從つて皮肉が嫌ひだ。さうして女は大抵皮肉が嫌ひですよ。それ故に女は大抵眞理が嫌ひです……ど

うですか？　齋藤さん、あなたもその組ですか？

――私？　私はさうでもございません。と、白瀧を挾みかけた箸を引込めて、美代さんは低い調子で答へた。

――フム、さうでもない？「でもない」は少し氣にくはぬが、とにかく「食ふばかりの口」へ好意を表してるだけはたしかだ。さすがは綠雨と名字を同じうしてるだけの事はある…そこでだ…そこで、齋藤さん、あなたは今迄讀んだ小說のうちで、何が一番あなたの御氣に入りました？　と、私はいゝ氣になつて疊みかけた。

――さア…と、美代子さんは茶碗と箸とを勿體らしく左右の手へ持つたまゝ、小首を傾けて、ヂッと考へ込んだ。さうしてよほど間を置いてから、――私には分りません。と、道子女史の方を向いて、いかにも應援がしてもらひたさうな顏して云つた。

――そりや、あなた、少々御無理な御質問でございますわ。と、女史は早速心得て援兵に出かけて來た。

――なぜ無理ですか？

――なぜッて、あなた、第一讀む本讀む本をさう一々覺えてゐられるものでもございませんし、それから、そばから忘れてゆく澤山な本のうちから、どれが一番氣に入つたものか、それを擇び出せと仰しやつたつて、それは御無理でございますわ。さうぢやございませんか？

――いや、僕はそばから忘れるやうな本の事なぞきいてやしない。面白くて忘れられない本のうちで、どれが一番氣に入つたかときいてゐるんです。

――そんな本はございませんわ。讀んでるうちはそれ〴〵皆相當に面白うございますけれど、讀んで了へば大抵そばから忘れて了ひますわ…少くとも私はさうですの…齋藤さん、あなたはどう？

――さア…と、聊か援兵に裏切られたやうな姿で、美代子さんはまたヂッと考へ込んだ。

――なるほど、そりや一理ある。作者は必ずしも讀者ぢやないからね。さうしてあなた方は作者なんだからね…さう、そりや大きにさうかも知れない…さう云や、ある日本畫家が僕にこんな事を云つてましたよ。「他人の畫ばかり氣をつけてた日にやア、いつまでたつたッて自分の畫なンぞがかけるものぢやない。」ッてね…そりや、なるほど、さうに違ひない…して見ると、一本まゐつたことになるかね。と、私はそら〴〵しくアハハと笑つた。その笑聲をきくと、自分ながら馬鹿らしくなつた。

ひとしきり話が途絕えて、兩女史は食事の終りを急ぐやうに、茶漬などセッセッとかつこんでゐた。

――なんです、あなた方はもうおしまひかね？　今はじめたばかりぢやありませんか？　なんぼなんでも、あんまり俺氣ないね…と、興さめ顏に私が云ふと、

――もう澤山頂きましたのよ…と、女史が答へて、――私は元來非常な少食でございまして…宅に居ります時は、毎朝きまつてパン一きれに玉子をお一つ、それでお午はヌキ、さうして晩ほどは大抵お饂飩を一つ、それに御茶漬を、さうでございますねえ、これよりもう少し小さいお茶碗にかるうく一膳いたゞくだけですの…ですから、今晩はお調子にのつてよつぽど餘計に戴いてゐますのよ。と、香の物をカリカリ云はせて、旨さうに番茶をのんだ。

――はゝア、だからあなたはそんなに瘠せてゐるんですね？　パンに、饂飩に、茶漬一杯か…さうしてキリギリスの籠に住んでりや世話はない…まるで仙人だ…それでよくからだが續

くもんだね？と、私はまたアハヽと笑つた。さうして腹の中では、時たま氣がふれたやうに東京から逃亡して、饘粥ばかり啜つたり、生味噌だけですましたり、まるで下手に穿きちがへた赤脚行者の猿眞似に浮身を窶しつゝあつた、醉興な、愚蒙な、さうして淺墓な自分自身の叡山生活をば、苦々しく、また呪はしく想出してゐた。と、女史はひどく眞面目くさつた顏つきをして、

——人間はどう致しても菜食主義の方がお宜しいやうでございますね。どうもその方が人間の稟性に適つてゐる樣な氣が致しますわ。私の知つたお方のうちに、左近さんといふ餘程變つた歐洲航路の船長さんが一人ございますが、そのお方はお船の中でも何でも必ず菜食ばかりしていらつしやいました。さうしてそのお方の仰しやいますには、菜食のうちでも、三度三度胡桃ばかり食べてゐるのが、一番人間のからだにいゝさうでございます……などと流暢に演說しはじめた。みんなは謹んで耳を傾けた。が、私は少々くすぐツたくなつたので、

——へえ？山雀のやうな人ですね？……角兵衛獅子は子供のうちから酢ばかりのまされるといふ話だが、その船長さんもやつぱり宙返りが巧いですか？と、意地わるく半疊を入れた。みんなはドッと笑つた。と、女史はやゝムッとして、

——なるほど、あなたはお口が惡いのね……それだけが玉に疵ですわ。と、たしなめた。

——や、これは恐縮……そこで、その船長さんには奧さんがおいでですか？

——えゝ、えゝ、それはもう、左近さんは有名な奧樣孝行でいらつしやいます。が、お氣の毒な事には、始終奧樣が御病氣なのでね……

——どんな御病氣です？

——さうですねえ、まア、やッぱり神經衰弱なんでございませうねえ……

——神經衰弱？そうら、云はないこつちやない。それが卽ち胡桃の祟りだ。

——なぜでございます？

——なぜツて、そりやきまつてますサ……毎年引續き四月五月といふ長い航海にばかり出かけて、たま〱歸りやア、その通りの山雀仙人だ。普通の女なら恐らくヒステリイになる方が當り前でせう……進んで××でも行はないかぎりはね……白樂天の樂府にこんなのがありましたよ。文句は忘れたが、何でもね、醉興な男があつて、そいつが親類縁者の意見などいッかなきゝ入れず、家藏まで叩き賣つて、事もあらうに、大それた仙人修行をはじめたもんですナ……お定まりの霞をくらひ露をすひですよ。さうしてつぶさに長年の辛酸刻苦を嘗めた後、もういゝ加減、虛空の十哩位は飛べるやうになつたらうと思つて、一日、崖の緣を滑走した勢ひで、スハヤと谷の中へ飛込んで見たところが、殘念ながら忽ち腰骨を碎いて、命だけはどうやら取止めたが、たうとう一生不具の身となつて、前に意見された親類縁者の食ひ潰しで終つたといふ話です……白樂天曰く、『哀しい哉、夢仙の人、一夢一生を誤まる。』は、どんなもんです？……左近船長、バベルマンデブあたりで盛んに嚔をしてやしませんか？……と、私は得意然と喋つて、さて冷たくなつた猪口をチュウと啜つた。

——いかゞでございます？ソロソロ御飯になさいましては……お銚子はもうおツモリでございますが……と、橫合からお冬さんが注意した。

——さう……と、私はふと氣がついて、と見ると、もうとうに箸を納めた雨女史が、葱や白瀧や臟物の、きたならしく蔦色にいりついた鍋の前で、いかにも手持不沙汰さうに坐つてゐた

ので、――いや、飯はよさう……一向食ひたくない……その代り、と、……その代り、なんだ、爰を一つきれいに取片附けて戴かう……それから……さア、水菓子でも持つて來てもらはうか……さうして、スッカリ六根清淨になつて、そこで改めて仙人話を續ける事にしませう……仙人話は大好きだ……と云ひながら、私は顧向きざまに、机の上から恩賜のブラックを取卸して――どうです？僕の仙人ぶりはかうした要領です……飯なぞは斷々乎として食ひませんよ。さうしてかういふ露ばかり飲んでゐる。アハハ……と、例の馬鹿笑ひを吐きちらしたものだ。

やがてそこらが片附いて、火鉢のそばへ兩女史が席を移して、そのうちに水菓子も來て、海山百年のお冬さんが、大切な私の掌中から、お松さんといふ寶珠の玉を奪取つて、遠慮なく階下へ拉し去つて了つた後、道子女史は早速蜜柑を一つ撮んで

――私が考へますには……と、皮をむきながら、――あなたはどうもお話が下手でいらつしやいますのね。と、だしぬけに私の演說ぶりを攻撃した。

私は頭を搔いた。さうして、

――さうかね？そいつア困つたね……自分ではこれで中々話上手のつもりでゐるんだがなア……と、わざとらしく小首を振つて見せた。

――なぜかと申しますと……と、女史は蜜柑の實から白い纖維をむしり取りつゝ、――あなたは學者でいらつしやいますから、大變いろいろな事を御存じのやうではございますけれど、それが私の頭へは、そのいろ〳〵な事柄が、一遍にゴチャ〳〵と聯絡なくとび込んでまゐりますばかりで、その間に一向前後の筋道といふものが立ちませんから、私達のやうな無學な者には、お話しになる事が、どうもハッキリ捉まへられませんの……たとへば、只今の仙人修行のお話に致しましても、それがどういふわけで左近さんの胡桃と特別の關係があるのやら、つまり、さう云つたところが非常に分りにくいんでございますの……私が思ひますには、お話のなさり方がお惡い爲に、多分さういふ結果になるんだらうと存じますわ。と、待ちかねたやうに蜜柑の袋をヒョイと口の中へ抛り込んだ。

――中々あなたは批評家だね。さう指摘されて見ると、なるほどその通りだ。全く一言もない……さう……『胡桃が飛行機に乘つて、紅海を出るや否や、忽ち嚔をした』おやア、一寸分りにくい。云つてる私自身にも、ヤッぱり分らないやうだ……爰がイソップなら、そこんところを何とか巧く工夫して、宜しく社會道德の常識哲學と結びつけて了ふ場合なんだらうが……

――まア、負けて置きますわ、あなたの事ですから、分らなくても……と、女史は矢繼早に蜜柑を頰張りながら、――分らなくツてもかまひませんから、もつとお話して頂戴……と、眼を細くしてネダルやうに云つた。と美代子さんも漸く蜜柑へ手を出して、ちよいと女史と眼くばせして、同じやうにネダルやうな視線を向けながら、チラリと私の顏を見て、分らぬほどにからだを搖つた。

――さア……さういふお許しが出たとすると、一つ大いにお話しなくてはならない事になりますね……と、私はウヰスキイをチビリチビリ舐めながら、――何のお話をしませう？……と云ふ刹那に、忽ち私の心の中へ、フォルベルグの『戀愛科學』中にある『Tribadibus』の芳烈極まる實例が、連續して紛々と浮んで來たが、いくら醉つても、さすがに口へ出してはいひ出す

勇氣はなかつた。

――胡桃がミニコイ女人島に漂泊したかたちだから、やつぱり仙人話の續きをやりませうか？

――何ですか、サッパリ分りませんけれど、どうぞ願ひます。

――三宅雪嶺の說によると、仙人とは谷の人なる俗人に對して元來山にかぎつた人なんださうです……これならよく分るでせう？　チャンと筋道が立つてゐるから……

――えゝそれから？

――そこで胡桃仙人がいよ〳〵リヤンカ島なるカンディ山中へ着陸して、そこへ歡喜踴躍して出迎へた八大龍王の哀願切願を容れると、忽ち太古の釋迦牟尼如來が小龕に籠つて來て、滔々として一大說法を試みたのが、この佛魔梵頂出楞枷經といふ、アナンガ・ランガやカアマ・シュウトランと並稱された珍本の一つださうです……こりや分らないでせう？

――分りません。何の事やら……

――分らなくてもいゝのです……その本に仙人の事が出てゐるのです……胡桃如來の說法によると、支那の仙人は印度の天人がまだキンチンギンギに雪原の生じなかつた頃、須彌山を一足飛びにしたものださうです……

――お話の中ですが、その須彌山といふのは何の事でございます？

――須彌山ですか？　須彌山は印度の山の名ですよ。希臘のハルナッス、日本の久遠佈留嶽、支那の崑崙山、元來はみな同じものです。「藐たる姑射の山、淖約たる仙子多し。」などといふ、その姑射山も同じです……つまり、カントやラプラスの考へてゐた宇宙は、それ等と全く正體を同じうしたものなんです……印度人はまづ第一着に空輪といふ途方もない大きな圓を一つ考へて見たものですね。その圓の上へ風輪と云ふ第二の圓を層ねます。其上へ水輪と云ふ第三の圓を層ねます、第四の圓は卽ち金輪です。例の金輪奈落といふ奴ですナ……奈落とは梵語のナーラカで、地獄と譯してゐます……要するに、宇宙の土臺は、空風水三輪の層なり合つた無限大圓の上へもつて行つて、恰も齊天大聖孫悟空の頭のやうに、黃金製の箍を象眼してあるものと、スッカリもうきめ込んで了つたわけなんですよ……印度人は馬鹿なもんですナ。尤も印度人が馬鹿なら、カントやラプラスも馬鹿に相違ありません。ネビュラ・システムの假說が卽ち馬鹿の證據です……どうです、中々學者でせう？

――へえ？　夢見たいなお話でございますこと……それが須彌山なんですか？

――いや、まだもう少し……そこでその金輪際から、四箇の大海洋が湧き出てゐて、同時にその海洋の中心から、蘇鐵のやうにニョキニョキと虛空に屹立したものが、卽ち九峰をなした須彌山です。須彌は又蘇迷盧と書いて、梵語のスメーロです、妙高と譯してゐます。高さ八萬四千由旬、一由旬は二十哩足らずだから、とても想像の出來ぬ高さです……ニューヨークのスカイスクレーハアなンぞは、まるで芥子粒見たいなものです……須彌山を環つた四大海洋中に、それ〴〵一箇宛の四大洲があります。東西南北にあるのです。我々の眼耳鼻舌身意識に觸れ得る世界は、そのうちの南瞻部洲に屬する一小部分にすぎないので、纔かに限られた娑婆國土だけなんださうです……娑婆もサハといふ梵語で耐忍と譯してゐます。つまり、耐忍するより外に生きる方法のない所、といふ意味でせう……滑稽な事には、日月が須彌山の左右に恰も提灯の如くブラ下つてゐます。コペルニクスの考へ方とは大變なちがひですナ……で、この須彌山を中心とした一組のグロテスクな太陽系をば、

名づけて一小千世界の器世間と申します。器世間はラプラスのメカニックなどと多分同じ意味なんでせう。さうしてその一小千世界を十箇併せて中千世界と申します。その又中千世界を十箇併せて大千世界と申します。所謂大中小を併せた三千大千世界ですよ……どうです？　退屈しましたか？……

——いゝえ……でも、あなたは本當に博學でいらつしやるわねえ……と、力のない聲でお世辭を云つた脣をば、慌てて兩手で押隠しながら、道子女史は小さなアクビをした。さうしてそのアクビを誤魔化すつもりらしく、そのまゝ兩手を頬の上まで延長して、のぼせたやうにゴシゴシとこすつた。

——御質問の須彌山が片附いたから、いよいよ本題の仙人話へ戻りますかね？……

——えゝ、どうぞ……と、女史は止む事を得ず生返事したが、忽ち何か重大な發見でもしたやうな顔つきして、——私、さき程から、お話を伺ひながら、からしてヂッとあなたのお顔を見てをりますと、しきりに誰やらのお顔が目先にチラックやうに思はれてなりませんでしたの……今、ふと氣がつくと、それが大谷光瑞さんだつたのです……あなたは非常によく光瑞さんに似ておいで遊ばすのねえ……と、大して冷かすつもりでもなささうに云つた。と、美代子さんも同感のやうに輕く頷いて、さて改めて私の顔を凝視した。

——へえ？　私がね？……と、私は不意に自分の造作などへ肉迫されたので、思はず度を失つたが——それは光瑞ぢやあなくて、光瑩の至りですね……と、駄洒落で食ひ止めて置いて——尤もね、やはり或る女の方が僕の顔を評して、徳川家達公に似てゐると云つた事がありますよ。どちらにしても、甚だ貴族的な顔だと見えますナ……但し、或る藝者に云はせると、僕の顔は六代目ソックリださうです。藝者だけに大分品位が下ります……ところがまた、或る寫眞師の評によると、僕には頗る徳富蘆花さんの面影があるとも申します。どれもこれも、すべて、『もたいなや祖師は紙子の五十年』ですが、そのうちにも、僕にとつては、寫眞師の評が一番氣に入つてゐます。けれども、併し……顔だけ似たんぢやつまらない……どうせ似るなら、僕の文章が殘らず蘆花さんのやうに賣れ出してくれなくちやアね。アハハ……と、オヒヤラかして了つたものだ。女史もさすがに二の句はつげなかつた。美代子さんはソロソロもぢもぢしはじめた。さうして二人でまた目くばせを交換すると、

——私、ウッカリしてをりましたが、もうよほど遲くなつたんでございませうね？　と、女史が云つた。

私は顧向いて時計を見た。

——十時五十七分九秒……十秒……ですか。まだ宵の口でサ。

——アラ！　と、美代子さんは喫驚したやうに云つて、——どうも色々……と、慌てて席をすべつた。

——そんなに騷ぎ立てるほどの時間でもありませんがネ……と、私は不興氣に又ウヰスキイの瓶を引寄せると、

——いゝえね、私は夜明しでも何でも驚きませんけれど、齋藤さんはお内でお母さんが御心配遊ばしますから……と、女史は取做した。

——さうですか？　さういふ事なら致し方がない……然らば今晩はこれでエマンシペートしてあげませう。と、ウヰスキイはやめにして私も立上つた。さうして、——どうれ、西洋流にお宅まで送つて上げるかね……やゝ送り狼の感もあるが……と、屈んで莨に火をつけた。

——えゝ、どうぞ。と、二人はもう部屋の外

へ出てゐた。
眞暗な松林へ這入ると俄に口がきけなくなつた。一時に醉もさめたやうな氣がした。耳元でボツボツと兩女史の話聲はきこえてゐるのだが、私の目の前へは蒼白な奥さんの顏が朦朧と現はれて、一杯涙を湛へた眼で、恨めしさうにヂッと私の顏を見つめてゐるのだ……

——齋藤さんのお宅には羊がゐるんですの……と、女史は私に話しかけた。

——へえ?……と、私は器械的に答へた。

やがて美代子さんを送り屆けて、その歸りみち、勿論、歸りみちは二人きりだつたので、女史はくら闇に怯えたやうに、歩くたび手首の觸れ合ふほど、ヒタヒタと私のからだに寄添つた。さうして、

——暗いわねえ……と、私語くやうに云つて、ホッと熱い溜息をついた。

その息を感ずると、私のからだはブルブルと震へた。危く猿臂を伸ばして、女の首を抱へさうになつた。女の髮の毛が私の頰に觸れさうになつた。そのとたん……奥さんの眼が燐のやうにキラリと光つた。大きな別莊の門の前で、思はずだき緊めた奥さんの脣の上へ、烙鐵のやうに灑いだはじめての接吻が、忽ち私の心頭へ閃いた。と、私の足は我知らず大股に動き出して、女の先へ立つと、一散に燈光の射す四かどを目がけて、大急ぎでくら闇の中から逃れた。

宿へ歸ると、二人は例の階段の下で別れた。その時まで、お互ひに一言も口はきかなかつた。

——有難うございました……

——おやすみ……

ガランとして古寺のやうな深夜の建物へ、二人の聲は薄氣味わるく反響した。

一千九百二十六年十月五日(一)

どうも、かう、始終わく／＼して、一瞬間も心に落ちつきをもたないやうに素質づけられてゐる、わたしのやうな人間には、小説を書くなどといふことは、どう考へても、よほど無理だ。かうした日記が、そのまゝに小説であり得る場合をのぞいては、わたしにはどうも全く小説家としての資格はなさゝうだ。

なが年の經驗上、文章を書くにあたつて、わたしは刻々のわたし自身の心理狀態をばそのまゝ無邪氣に敍述してゆくといふ、この特殊の形式が、どうしても一番わたしに適當したもののやうに思はれる。

つれ／＼なるまゝに、日ぐらし硯にうち向ひて……と、日本では誰でもよく知つてゐる文章の書き方がある。

つれ／＼草は小説ではあり得ない。小説ではあり得ないけれど、生命の書ではあり得る。

わたしはつまり生命の書がつくりたいのだ。生命の書をつくることに、一生を獻げつくしたいのだ。

一千年の間に、日本には、さうした書物をつくり得た人は、わたしの記憶では、たつた三人しきやなかつた。清少納言がその一人だ。兼好法師がその一人だ。さうして齋藤綠雨がその一人だ。

所謂隨筆を書いた人は澤山ある。けれども隨筆を書くより外に全くその生命のもつて行きどころのなかつた文士は、非常にすくない。業平には短歌があつた。蜀山人には狂歌があつた。露伴、鷗外、漱石、荷風等には、單なる隨筆の上にのみ、その全生命を見出すべく、あまりに豐富なその他の才能があつた。

(「最も價値低き生活の上に」より)

第十一指の方向へ

日に十枚なんて、とても覺束ない。御覽のとほり、まる〲二月、かゝりどほしにかゝつて、えんやらやッと百三十八枚だ。一日に平均して了ふと、たつた二枚と十分の三にしきやならぬ。はなはだ甲斐性のないお話だが、これが私の精一杯といふ力量なら、何とも手のつけて見やうはない。

ところで、その精一杯といふ、その何とも手のつけて見やうのない、その私自身の力量なるものをば、最初立案した目安どほりにして、かりに一枚一圓の金貨本位で、とりあへず換算して見るとすると……云ふまでもなく百三十八枚は百三十八圓だ。さうしてそれが丸二箇月間の全金額なんだから、日割にすると、百三十八圓の六十分の一、即ち二圓三十錢ならしとなる。

然るに一方、飜つて、それに伴つた私達一家の支出額はと云ふと、神戸へ上陸して以來、この二箇月間に消費した金高は、〆めて一千二百圓に達してゐる。これを百三十八圓の總收入と對比すると、つまり、差引一千〇六十二圓の缺損となる。蓋し一日十七圓七十錢の不足だ。云ひ換へれば、私自身の精一杯の力量は、要するに、每日十七圓七十錢宛のマイナスによつて、金貨本位の日本紙幣と交換されるべき運命にまで、餘儀なくされつゝあるといふ事になる。

明らかにこれは不合理な生活だ。不合理であつて、同時にまた不可能な生活だ。不合理な生活は、或は續けて續けられぬ事もないか知れぬ。けれども不可能な生活を續けてゆく事は、人間には絕對に不可能だ。

たとへば、爰に一定の與へられた金額があつて、さうして徹頭徹尾たゞその定額の制限內のみで、人間が若しどうしても生活しなければならぬものとすれば、人間の生活は否應なしに金錢の蔓で束縛されて了ふ。從つて潑剌たる本來の生命の手も足も出なくなる。これは必ずしも與へられた金額の高によらない。何となれば、貨幣生活は社會制度の缺陷に乘じて、たゞ少數の搾取者のみがだん〲に好都合になつてゆく、極めて不公平な必然性を有してゐるからなのだ。それゆゑに多數の被搾取者にははじめから生活の自由性が賦與されてゐない。自由性のないものはすべて不合理だ。さうして人生に於ける一切の不合理は、私にとつては不俱戴天の敵だ。即ち百三十八圓の制限內で、冗談にも一家を支へて見ようなんどといふ意志は、毛頭私の心からは生じて來さうな筈もない。然らば百三十八圓の收入から、傍若無人に千二百圓の支出を企てる氣かと云ふと、それは私には絕對に不可能だ。

二月で千二百圓、月にして六百圓、日にして二十圓。それだけの金は、私達一家の生活には、貨幣制度の撤廢されないかぎり、何としても必要だ。さうして私自身の精一杯の力量は、四捨五入して一日二枚平均に限る。云ひ換へれば、二枚書くのに二十圓の金が必要だといふ事になる。即ち四百字詰一枚十圓の原稿料は、私としては、たとひ理が非でも、これはどうあつても、是非申受けなければならないといふ結論になる。

――どうだね？ それなら當分心配はないだらうが……と、私は子供を抱いた看護婦にソリニエされつゝある病床中の女房に向つて云つた。

と、女房は蠟のやうに血の氣の失せた、蒼ざめきつた顔に、强ひて微笑を浮かべて見せながら、

——私の惡口を書いて、それが一枚十圓に賣れて、れたら、私はそれこそ本當に安心して死にます……が、そんな茶氣のある本屋は、とても世の中にはないでせう……と、力なく答へた。

——たとひ女房の惡口でも何でも、私は一字一句、滿腔の藝術的良心に愬へつゝ、一生懸命に書いてゐるのだ。若し其の努力で、滿足に妻子が養へず、醫者や看護婦を自由に聘する事も出來ないと云ふのなら、私はまたヤケクソになる。

——さうして又お酒ばかり飲むの？

——いや、酒なンぞ飲まない。その代り、爆彈製造にとりかゝる。

——そんな事をされちや、なほ困るわ……一枚十圓に賣れなくてもいゝから、まあ、氣長に穩しく稼いで行つて下さい……その內に賣れさへしたら、今度は本屋の方から、爭つて一枚五十圓でも百圓でも出すやうになるでせうから……

私も今ではかうした女房の意見に耳を傾けるやうになつた。併し、その頃は……鵠沼の宿屋にゐた頃は……

居ても立つてもゐられない程、それ程セッパ詰つた心の狀態にあつた。何一つ手につかぬ。何一つ考へる氣にもならぬ。と云つて、何もせず、何も考へず、たゞヂッと坐つてはなほゐられぬ。苦しまぎれに、半可な座禪など組んで見る。形式ばかりの死猧狙趺坐が、かうした際には何の益に立たう！

たまらなくなつて、私は部屋の外へ出た。さうしてその足ですぐ階段を下りた。と、そこに人がゐた。女が一人ゐた。階段の降り口と椽柱一本を隔てた、一寸した小さな洗面所の前へ佇んで、ほッそりと前屈みに佇んで、眞白に堅練を塗つたばかりの襟足が、折からケバケバしく動いてゐる最中であつた。氣をつけて見るまでもなく、勿論、それは道子女史の首に相違なかつた。

——へえ？　いつの間に引越して來たんです？　と、朱鷺色の細帶一つだが、さすがに締りのよささうな、恰好のいゝ腰の邊へ、すりつくほどにピタリと近よつて、私はやり場のない熱烈な息をば、頭の上からいきなりホッと浴せかけた。

女はギョッと顧返つた。

——アラ、どなたかと存じましたわ。と、わざとらしくニッコリして、——昨晩引越してまゐりましたの……あちらはあんまりお賑やかでございますので。と、恰も吐きかける私の毒氣からでも身を避けるやうに、一步二步タジタジと跡じさりした。

——そこですか？　と、私は丁度私の部屋の眞下に當る部屋の入口を指した。

——えゝ。と、女は姿見に映る自分の顔を眺めながら、指先でチョイチョイと小鼻の上を觸つて見たりした。

——なぜ僕の隣りへ引越して來なかつたんです？

——オホホ。でも、それぢやあ、あんまり押しつけがましうございますからねえ……それに……と云ひさして、女は一層聲高に笑つた。

——それに？　どうしたんです？

——あのお方がおいでになつた時、きつとお邪魔になるに違ひないと存じましたんで……と、女は秋波を湛へた眼で一寸睨む眞似をした。

——あのお方とは誰の事です？

——おトボケなさつても駄目。御存じないの

はあなたばかりでせうよ、多分ね……と、今度は打つ眞似をして、それから、『えゝ、えゝ、そりやあもう。』と云つたやうに、二度三度愛くるしい顎の先を動かして見せた

——あなたまでがそんな事を云ふから困る。あれはたゞ妹の親友だと云ふにすぎないんです。たつた一人の親友が、アメリカへ行つて了つたんで、その心の缺陷を充たす爲に、せめてその兄貴にでも逢つて、わづかに親友の面影を偲ばうと云ふぐらゐな、極めて單純な話で、それであゝして時々やつて來るんです。決してみんなが騷ぐほどの問題ぢやありませんよ。冗談ぢやない。

——ホラ、さうムキになつて云譯なさるだけなほ可怪しいわ。みんなが騷ぐほどの問題だつてお宜しいぢやございませんか？

——驚いたね。こりやとても敵はない。ドレ、それぢや、足元の明るいうちに、サッサと引上げる事にしますかね。と、私はエヘラニヘラと笑ひ乍ら、片手に握つてゐた鳥打帽子を被つた。さうして、

——いや、お化粧のお邪魔さま。と云ひすてて、飄然と隣りの建物の廊下へ移つた。

——鎌倉へお出かけですか？　まあ、お樂しみなこと。と、朗らかな女の聲が、後ろから襟元へぶつかつて、私の神經の中樞へゾツと滲徹つた。

電車を降りたのは鎌倉だが、私のゆきついた先は、すぐ傍の郵便局であつた。實父から屆いた二百圓の郵便爲替が、鎌倉局の指定になつてゐたからだ

とにかく金だ。金を手にする事だ。その持つてゆきどころに困るほど、それほど鬱屈しきつてゐた私の懊惱も、高は纔に二百圓だが、と、金の顏を見ると、十圓紙幣を數へて二十枚受取ると、不思議な事には、忽ち一條の血路を發見したやうな心持になつた。同時に、東京に於ける氣に入つた飮食物や、それから待合や遊廓の、臥床の中なる藝者や花魁の半裸體が、馥郁として、繚亂として、見る／＼仕掛花火に口火がついたやうに、華輪車の如く目まぐるしくクルクルと陰慘な私の腦中に廻轉しはじめた。私はニヤリと薄氣味のわるい笑みを洩らした。

が、郵便局を出て、いそ／＼とガードの下を潛つた時、どうしたのか、俄に華輪車の廻轉が停まつて、その中から途方にくれた奧さんの顏が、さめ／＼と慘み出た。

『けふあたり、或はあすかあさつて、ひよツとして行違ひに、留守中の宿屋へ、意地わるく訪ねて來はしないだらうか？』はツとさう思ふと、私は我知らず踵を引返した。さうして、『さうだ。一應東京へゆく事を斷つて來なけりやならない。さうだ。』と、急にわく／＼して、のどかに石の鳥居の立つた、松林の間の砂道をば、雪駄ですべり／＼海岸の方へいそいだ。

が、滑川の橋を渡つて、材木座の區域內へ踏込むと、私の步武はおのづと緩やかになつた。さうして暫く左右に連らなつた田畠の間を拔けて、やがて辿りついた最終の右側なる畔路をば、マルグレ・モアに、しかし思ひ切つて曲つた頃には、もうスツカリ厭氣がさしてゐた。それでも惰性で門の前まで行つた。コンモリと植込に圍まれた、奧床しい別莊の門の前まで……はじめて×××××××、×××××の前まで××××。

と、私はそこで立竦んで了つた。あたりはシンと靜まりかへつてゐた。植物の香と土の匂ひとがひた／＼と身に迫つた。

『ばからしい。』と、私は思つた。『どうして俺はこんな下らない氣にばかりなるんだらう？』と、つく／＼自分の心の愚劣さ加減に愛想がつきはてたやうに思つた。

で、そのまゝコソコソと元の畔路へ引返して、ひろ／＼とした繩手まで戻つた時、私は何となくホッとして、「まアよかつた。」といふやうな心持がした。さうして足早に橋の上まで歸つた。と、枯蘆の間から、四つ手網が一つ、ゆらゆらと水面へ浮び上る瞬間が、ふと眼に這入つたので、それに興趣を感じたわけでもなかつたが、私は思はず立留まつて、欄干へ靠れた。

『なぜ俺はかう意氣地がないのかしらん？』と、愚癡ッぽい心が、未練がましく私を責めた。恰も進んで門内へ踏入る勇氣の出なかつた事が、いかにも男らしくない行爲ででもあつたかのやうに。

私はもう一度出掛けようかと思つた。が、其氣は直に否定された。否定されたかと思ふと、すぐまた首を出した。すぐまた否定された。行かうか？　行くまいか？……私は欄干へ頬杖をついて迷つた。

四つ手網には、纔かばかりの塵芥の外、何一つ獲物もかゝらなかつた樣子で、またゆら／＼と枯蘆の間へかくれた。

『どういふわけで此細な事にかうまで迷ふんだらう？　俺はどうしても低能兒だ！』さう思ふと、なさけなくもなつた。悲しくもなつた。生きてゐるのが心苦しくもなつた。と、急に腹立たしくなつた。ムカムカッと反感が起つて來た。何物に對してといふアテもなしに。

『低能兒ぢやなぜ惡い？　低能兒だつて、生きてゐられぬといふ法はない。俺は生きる。低能のまゝで生きる。生きてやる。生存競爭に敗けるまで、生きられるだけ生きてやるのだ。』と、恰も生そのものの absurdité に對する面當のやうに、ムキになつて、イライラと、心の中で絶叫した。

紙卷に火をつけて、私は欄干を離れた。橋を渡つて、松林へ這入つた。で、再びガードのところまで來ると、私の足は忽ちまた電氣にでもかゝつたやうに、ブルブルと痙攣して竦んだ。

『さうだ。手紙でも出して置かう。』といふ念が、ヒラリと腦裡を掠めると、私は人目を忍ぶやうに左へ折れて、かき消す如く郵便局の中へ姿をかくした。

今度は無事に停車場へ行きつく事が出來た。發車間際だつたので、とかうの思案する暇もなく、白煉瓦のトンネルを潛つて、一息にプラットフォームの上へ出た。さうして列車の到着するのを待つた。と、『やつぱり手紙など出さなけりやよかつた。』などといふ妄念が、表皮の薄い心の一角を食破つて、又ぞろヒョイと嘴を出した。叩きつけると、すぐ引込んだ。すぐ新らしい薄皮が、食破られた隙間を塞いだ。轟然と列車が來た。

まだ本當にプロレタリヤとなりきれない證據には、私は無意識に青切符を買つて、當り前のやうな顏して二等車に納まつたものだ。二等車はガラあきであつた。東京通ひの別莊組が、蟲酸の走るばかり、お互ひに衒耀と絢爛とを競ひつゝ、時を得顏に爭ひ乘る時間ではなかつたと見えて……

紺青色の鮮やかなクションを兩側に縁取つた、長い二等室の一隅には、ブルンネットの豐麗な髮の毛をばフサフサと波打たした、病身らしい十三四の女の子が、その母親らしい西洋婦人に、すりつくやうにして腰かけてゐた。反對の一隅には、四十恰好の色澤のいゝ、仕立卸しの印半纏を着た男が、赤靴を穿いた足をば、遠慮なくクションの上へ長々と伸ばして、いゝ心持さうに睡つてゐたが、その息は酒臭さうであつた。さうしてそのドンブリの蔭なる白縮

縮の三尺からは、重さうな金鎖がダラリと腰掛の端へ這ひ出してゐた。

私は中央へ陣取つた。と、列車は間もなく動き出した。向うの宿屋も動き出した。洋館の屋根も別莊も、海も、山も、町も 木叢も、みんな一齊に動き出した。私は汽車が好きだ。子供の時から好きだ。子供のやうに好きだ。ソラ、トンネルだ。

私の前には美しい女がゐた。乘つた時から目についてゐたのだが、又それが爲に中央へ陣取つたわけなのだが、さすがに氣がさして、眞正面にヂツと視線をそゝぐ無遠慮さにはなれなかつた。それほど美人だつた。それほど氣になつた。それほど見ぬふりをして、チョイチョイと樣子を窺つた。

年の頃は先づ十八九であらう。割合にヂミなお召の不斷着に 歌麿のやうに飽まで軟らかさうな肉線を浮かして、ひどく艶かしい色をした錦紗の羽織を無造作に引つかけてゐた。羽二重肌の瓜實顏で、就中、その目元と口つきとが、堪らなく可愛らしかつた。毛筋の細い、然しさう地の薄くない洗髮が、櫛卷が、ばかに全體を意氣なものにして見せた。澁蛇の目色の、市村格子の、氣のきいた日和下駄の爪革が、不用意に突ツかけたその足音と共に、薄暗い蔭から私の心の琴線に觸れて、否應なく懊惱の抛射を吸收した。

どこからどう見ても、少しも處女らしいところはなかつた。さうかと云つて、人の細君では無論なかつた、妾か？ 妾としても、ありふれた花柳界上りのそれではなささうだ。ラシヤメンか？ それにしては、横濱くさいところがあまりになさすぎた。

(以下十行抹殺)

私はニヤリとした。さうして女を見た。が、女は知らぬ顏で、膝の上へ薄い横文字の本を擴げて、大して讀み耽るでもなささうに眺めてゐた。横文字の本！ 私は一寸意外な感に打たれた。洗髮の美人が横文字の本！ 市村格子の爪革をした女が横文字の本！ 立花屋がワイルドのサロメを繙いてゐるよりも、私には一層奇異に思はれた。

『何を讀んでゐるのか知らん？』と、私はソツと好奇心の眼を光らして竊み見た。

女はやがてページをまくつた。と、細い白金の指環に嵌め込んだ、素晴らしいダイヤが燦爛とした。

眼が少し近いのと、光線の工合が惡いのとで、どうもよく分らなかつたが、その字配りから察すると、何だか外國の教科書らしいやうな氣がしたので、聊か失望した。表紙は舶來の海老茶色をしてゐた。一度も習つた事はなかつたが、昔ナシヨナルやロングマン以前に行はれた、私はローヤル・リーダアの、その第一讀本などを想ひ出した。今時、この若さで、まさかそんな黴くさい書物をヒネくる筈もなからうが、それにしても、その教科書らしい體裁が、何としても不服であつた……大きに憚りさまな話だけれど。

二等車位へ乘れさへしたら、それだけでもう萬事が解決したやうな恰好をして、印半纒は高鼾でまだ眠つてゐた。ブルンネツトはクションの奥へ膝を突入れて、窓硝子へ頰をすりつけて、貪るやうに外の景色に見入つてゐた。丁度戸塚のトンネルを出たばかりのところであつた。

私も外を見た。このあたりは何となく山奥を偲ばせるやうな趣きがあつて、比較的里離れをしてゐた。山や谷のたゝずまひに、中々侮り難い風情があつた。西洋人の好みらしい別莊も、チラホラと一つ二つ見えた。

『さうだ。あんな別莊に閉ぢ籠つて、それこそ出雲八重垣でもつくつて見たいやうな女だ。』と

思つて私はまたチラリと女を見た。

下讀みはもう濟んだと見えて、女はこれも澁蛇の目色をしたツバクロの中へ丁寧に書物をしまつてゐた。私はこの女にかつら下地が結はせたくなつた。さうして五つ六つ年を跡戻りさせて、清元の稽古所へ通はしてやりたくなつた。が、時代はもうとうの昔、容赦なく私の空想を置きざりにして、大股でズンズン先へ進んで了つた。汽車は程ケ谷を通過した。

女と西洋人親子とは横濱で降りた。入れちがひにドヤドヤと乘客が這入つて來た。さすがにその物音に目がさめたものであらう、印半纏はムツクリ起反つて、アクビまじりに、ジロリジロリ、小癪にさはるやうに入り來る人々を睨めつけてゐた。

新橋へ降りるたび、私は一體何のためにかうして東京へ來るのかと、いつもきまつて、來て見ると用のない自分を不思議に思ふ。東京には何十萬軒家があるか分らない。何百萬人ウヨウヨしてゐるか分らない。が、そのうちの一軒として、そのうちの一人として、炎々たる私の心の要求と、切實に、熱烈に、シツクリと密觸した、食ひ入るやうな交渉を開き得る家も人も絶對にないのだ。それは強ち東京に限つたわけではないかも知れないが、ヒネくれきつた私のやうな人間にとつては到るところの人生のすべて、到るところの社會のすべてに對して、反感の外は、瞋恚の外は、全く何も持ち得ないのかも知れないが、かうして新橋へ降りるたびに、今更のやうに、恰もそれが東京だけにでも限つたやうに、しみ〴〵とさう思ふ。

『何のために東京へ來たのだ？　何しに來たのだ？……なアに、二百圓懐にしたから出て來たのだ。それだけだ……旨いものが食ひたくなつて出て來たのだ。それだけだ……刻薄な Volupté に苛まれたくて出て來たのだ。それだけだ……それだけなのだ……なアに、それだけなのだ……

『母の墓まゐり？　それはウソだ。それは淺薄な口實だ。それは偶然けふ母が死んだ祥月命日に該當してゐるといふまでの話だ。なるほど、長年母の世話にはなつた。その記憶だけはたしかにある。が、記憶が何だ？　何のタシになる？・そんなものが母親に對する感謝の念の裏書にでもなると思ふのか？　一歩讓つて、殊勝にも、かりに感謝の念を起し得たものとして、それがどう　のだ？　死ぬ前はもとより、死んでから一層シンニウをかけて、ヘギイをかけて、飽くまで母の希望に裏切りつゞけて來てゐるではないか？　さうしてそれを氣の毒とは思つても、決して惡い事だとは信じてゐないではないか？

『友人の四十九日？　それもウソだ。それも口實だ。俺は一度でもあの友人を愛した事があるか？　徹夜して一緒に酒をのんだ？　一緒に女郎買ひに行つた？　それが友人を愛してゐた事なのか？　友人の方からは、非常に厚く、非常に濃やかに、或は俺を愛し俺を敬し、恐らく兄事してまで交つてくれたもののやうだ。それに對して、俺はあの友人をどう思つてゐたか？　どう取扱つてゐたか？　俺に對するあの友人のそれと同じやうに、俺は果して同程度の友情を披瀝して、あの友人を愛したか？　あの友人を敬したか？　あの友人を信じたか？　なアに、生きてゐた時でさへ、あの友人の事なんぞ、俺はまるッきり眼中に置いてゐなかつた。あの友人ばかりには限らない。俺は俺自身の事の外、いや、寧ろ俺自身の疑惑の外、一切の友人は勿論、一切の他について、一切の非我について、全然考へた事はなかつたのだ。今だつてその通りだ。』

いつの間にか新橋を渡つてゐた。いつの間にか銀座の歩道をあるいてゐた。が、どこへゆかうといふ意向も、見當も、私の頭には、間斷なく妄念同志の修羅場を現出しつゞけてゐる私の頭には、てんで浮んで來る餘地はなかつた。從つて全く無方針であつた。全く無目的であつた。さうして私の爪先は、習慣的に、遺傳的に、四足獸以來の反射作用を繰返しつゝ、たゞ無意識に運ばれてゆくにすぎなかつた。

プンといゝ匂がした。煉香の薫が鼻先を掠めた。鳩居堂の軒下を通りすがつてゐたものだ。

『さうだ。沈香でも買つてやらうかしらん？死んだ時香典をやりはぐつて了つた代りにナ。』と、私はふと思つた。と、急に四十九日の法會に列席する氣になつた。で、二三歩跡戻りして、ツカツカと鳩居堂の店頭へ這入りかけた。と、また、すぐ厭になつた。惶しいばかりで落ちつきのない、形式ばかりで內容の皆無な、僞善ばかり往來して眞實味の通らぬ、所謂法會なるものの光景が、苦々しく識域にコミ上げて來たからだ。

彈ねとばされたやうに、私は店頭を離れた。さうして尾張町の交叉點へ立つた。そこにゐた巡査と同じやうに、ポカンとして歩道の突角へ立つた。

例によつて夥しい人間だ。滿員の電車がひつきりなし縱横に隱顯する。タンクのやうな乘合自動車が、甲蟲のやうなオトが、タクシイが、恰も亂打する世の終りの警鐘にでも脅かされたやうに、周章狼狽して、右往左往に出沒する。取殘された人力車は、危ッかしげにその間を縫ひながら、喘ぎ〳〵這ひまはる。人間は飛礫のやうだ。石合戰に抛げつけらるゝ、擲きつけられて翻筋斗をうつ、河原に撥ねかへる飛礫のやうだ。

『××が起つたら、澤山人死のありさうなところだ。』と、私は思つた。さうしてゾツとして群集を見た。が、この國にかぎつては、決してそんな忌はしい事の起らう筈もなささうに、又ない事を確信して疑ふ餘地もなささうに、群集はそれ〳〵そのまゝの秩序に甘んじ顏に、それぞれそのまゝの泰平に多忙を極めてゐた。

『かうやつて、銘々に一つ宛の虛僞と不條理とを、後生大事に持ちまはつてゐれば、それで一日が暮れるのだ。一日が無事安穩に暮れさへしたら、虛僞で御座れ、不條理で御座れ、そんな事はもう問題ぢやないのだ。金だ。金だ。金だけ握れば、それでいゝのだ。眞理が何だ？正義が何だ？すべて過去の夢ぢやないか？そんなものが、何でいま要るものか？金だ、金だ。たゞそれ金だ。徹頭徹尾金だ、最後まで金だ、死ぬまで金だ…あゝ、いやな世の中だ…』とさう思ふと、私はジレつたくつて堪らなくなつた。『諸君！』と、だしぬけに呶鳴つてやりたくなつた。×××××××××たくなつた。トタンに、交叉點の中心に直立して、操り人形のやうに手を上げたり下げたり、たえず身體の方向をば、クルリクルリと、風見の如く轉換させつゝある、恰も社會奉仕そのものの權化のやうな、緊張しきつた交通巡査の姿が、ふと目に映つたので、思はずヒヤリとした。氣がつくと、傍にも巡査が一人ブラリブラリしてゐた。私の足は直ちに動き出した。歩道に沿うて、何氣なく左方へ折れた。

――貴下はいかなる御用命で御來朝になりましたか？

――C'est simplement, Monsieur, pour goûter de "Templa" à la Temquine, n'est-ce pas?

鹿爪らしい新聞記者の問に應じて、二三年前、フランスの或る實業家が、言下にニコニコと、さう云つた當意卽妙な返答をしたので、座にあるものは悉くアッとあいた口が塞らなかつたさうだ。

それほどまでに、果して天下の珍羞かどうか知らないが、足都合がいゝのと這入りやすいのとで、私はよく天金の二階へ押上る。時間に制限のない身の上だから、たとひどのやうに込合つてゐても平氣でチビリチビリと盃を舐めながら、何十番でも悠然と待つてゐる。

今しがた、新橋の停車場へ降りた時は、何の爲に東京へ來たものやら、あまりに目的がなさすぎて、殆んど途方にくれた位だが、かうして偶然目の前へブラ下つた、墨痕淋漓たる天金の看板に、遮二無二引張り上げられて見ると、さうしてかく明瞭を極めたる、甚だ單純な、甚だ均等な目的下に殺到した、稻麻竹葦も物かはといふ老若男女の間へ割込んで見ると、不思議な事には、どうやら當然納まるべき筈のところへ、正に滯りなく豫定どほり、判然落ちつき得たやうな心持になつたものだ。

立錐の隙間もない群集の一角から、わづかに發見し得た私の席は、便所と隣合つた小座敷の閾際であつた。階段の方からグルリと延びて來た廊下の末端は、丁度私の鼻の先で行詰まつてゐた。と、そこに開閉自在の扉の袖があつた。さうしてその袖に手首や臂や肩先を小突いては、入替り、立替り、善男善女の思ひ〳〵に出入する度毎に、千態萬狀のニュアンスを攪拌した、凡ゆる行屎走尿の錯綜せる臭氣が、さなきだに室内に漲つて低迷した、ギチギチした、脂ぎつた雰圍氣と飽和して、芳烈に、峻烈に、私の空腹のどん底へ、刳るが如く沁み徹つた。

私は寧ろ小氣味がよかつた。さうして思ひ入れその匂を吸收した。

『さうだ。この匂だ。この匂こそ、肉迫した、詮じつめた、生そのものの眞劍味ではないか？　嚴肅なる生活そのもののラボラトワアルから、永劫に、不易に、宇宙に向つて發散しつゝある靈氣の脈搏ではないか？　この匂を取除いて、果して人生には何物が殘る？　何物も殘らない。何物もない。さうだ。この匂を中心として、俺自身の生命は、ガッガッと、必死と、茲を先途と、旋風の如く輪轉しつゞけてゐる眞最中なのだ。哲學も、宗教も、科學も、藝術も、要するに、たゞこの匂からのエマナチオンとしてのみ、俺自身には纔かに價値が保てるのだ。この匂のない哲學も宗教も、この匂のない科學も藝術も、それゆゑに、俺には絕對に空なものだ。絕對に無用なものだ……』

銚子代りの三本目に、例によつて海老ばかりとカキ揚げとが、各〻一人前宛の箱に這入つて、思つたよりも早く私の前へ並べられた。私はニッコリして先づ海老ばかりの方の蓋を開いた。

『天麩羅にかぎる。』と、私は舌鼓を打つて、さう思つた。『腹のすいた時、待ちに待つて、好きなものを口の中へ入れた刹那ほど、それほど間違ひのない幸福が、この人生にまたとあらうか？』と、さう思ひながら、ムシャムシャと一疋平げた。丁寧に尻尾まで平げた。尻尾は殊に旨かつた。カリカリして齒當りが何とも云へなかつた。

『×××の行はれる世が來たら、さしづめ天麩羅のスペシアリテを代表する一般市民の食堂となつて、このまゝに殘り得る家だ。愛ばかりぢやない。橋善、高七、中清、天新……一文も持たずに、どこへでもお好み次第に行けるのだ。』

とそんな事を思ひながら、二疋目を食つた。

天麩羅と蒲燒と彌助とを考へないで、鮪のさしみと海苔と佃煮とを考へないで、東京市

民に××××××××ようと企てる位愚な事はない。凡ゆる東京のプロレタリヤが、擧つて好む食物をば悉く、×××××××××××××××了ふ事から始めなければならない。食物から衣服だ。衣服から住宅だ。一切の衣食住を××××！……とそんな事を思ひながら、三疋目を食つた。

一人前の箱は見る〱カラになつた。私の箸は引續いてカキ揚げの方へ移つた。さうしてそれもきた〻く併呑して了ふと、今度はカクヤでさら〱と茶漬を二杯食つた。と、さすがに腹がいツぱいになつた。私は滿足らしくゲーイとオクビを一つした。

『さア、晩には何を食はう？……織田へ行つてシャモを食はうか？　それとも前川の中ぐしにしようか？……』などと、どこまでも意地ぎたなく食ひけにばかり支配されながら、やがて勘定を濟すと、間もなく大金を出た。

私はひどくい〻心持になつた。

ホロ醉にくづれた顏を振上げて、服部の大時計を仰ぐと、さうしてまだ二時過ぎたばかりだと確かめると、私は、『本願寺へ出掛けてやらう。』と即決した。

酒の氣が少しでもある時とない時とでは、私の頭はまるで覗きカラクリのやうに、バタバタ、ガラリと調子が變つて了ふ。醒めて否定する事は醉つて肯定する事だ。前者の躊躇は後者の敢行だ。疑ひ、迷ひ、怯え、尻込む、さうした薄志弱行は彼に屬する。輕躁ぎ、浮かれ、笑ひ、怒る、さうした輕擧妄動は是に屬する。死んだ友人にも同一徹な傾向があつた。

さつきとは別人のやうに、私は勢よく鳩居堂へ這入つた。さうして亡き友人の佛前へ手向けるつもりで、飛切り上等の箱入りになつた煉香を買つた。黑と白の水引もかけて貰つた。ついでに自分用の沈香も買つた。白檀も買つた。梅花も買つた。もつと醉つてゐたら、恐らく伽羅まで買ふ氣になつたかも知れぬ。それほど私は香が好きだ。

鳩居堂を出ると、各種の香を包んだ紫色の袱紗を抱へて、私はすぐ築地行の電車に飛乘つた。

死んだ友人は江戸ッ子だつた。八幡鐘から臍の緒を曳きずつて來たやうな、鋸屑や介殼の、苦みばしつた木の香潮の香から、止むを得ず拵り出された深川ッ子だつた。

『遮斷生活』などと標榜して、四疊半の中二階にまで鍵をかけて、一切人には面會しない時だつたが、はじめて寄越したこの友人の敬虔な手紙を見て、その人知れず道を求むる眞面目な態度に動かされて、私はふと會つて見る氣になつて返事を出した。道を求むる心！　道！　少くともそれが二人の友情をつなぎ合した緣口には相違なかつた。道！　二人には勿論藝術であつた。同時に宗教であつた。いや、宗教と藝術とを打成一片とした、さうして所謂藝術ではない、所謂宗教でない、生々しい何物かであつた。

が、お互ひに初對面の顏を見かはすが最後、二人の間には忽ち烏賊鍋が躍り出でて、直ちに道を遮つた。菊正の銚子盃が矢叫びの如く飛びちがつて、道の表面を暗くした。蹣跚として、跄踉として、無頼漢、破落戸となりすまして、板橋街道を練歩いたのが第一日であつた。

第一日は第二日に續いた。第二日は第三日に續いた。三年四年は瞬時にして過ぎた。その間、酒と淫蕩とは、恰も極印を打たれたやうに、必ず二人の交情に附纒つた。

去年以來、友人は參禪をはじめてゐた。隻手

の華を松蔭の扉から、一心不亂に敲き出さうとして、密々の工夫を凝してゐた。私は健氣だと思つた。『たうとう自力で捉まへたナ。』と思つた。同時に、「俺の役目もすんだのだ。」とも思つた。二人の道はそこで左右へ岐れたのだ。手に手をとつて、諸共に參禪の道に進む事は、まだ中々私のベデカアへは出て來さうにもなかつたからだ。のみならず、公案などはいつの間にかそッちのけにして、禪そのものすら、弊履の如くかなぐり棄て去つて、かく最も安價なる、甚だとりとめのない雲水の旅に上つて了つたものだ。恐らく鳶がムシロに變化して、疊を叩いて杳然として去り、その行くところさへ知らぬのがオチであらう・・・

讀經は始まつた。

――佛說阿彌陀經・・・如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園・・・いつ聞いても同じ經だ。何度きいても同じ經だ。きいてもきかなくても同じ經だ。あつてもなくても同じ經だ。私はもうこの經文から、宗教的の價値はもとより、文藝的の、考古學的の、或は音樂的の興味すら、全く感ずる事が出來なくなつて了つてゐた。

土龍のやうに太陽光線を怖ぢ恐れた、いやに陰氣な、幽暗い佛間の奥に、かの內陣と稱して、片腹いたく人間味を回避した、神祕くさげな格子張りの蔭に、古代めかした油皿や蠟燭の薄あかりに、チラチラする塗金の斷面を漾はした、極樂淨土の阿彌陀佛も、緣のきれた私自身の心には、もう何程の功德も莊嚴もなささうに窺はれた。

勿論、どこの隅々を探しても、死んだ友人の面目などが殘つてゐさうな筈はなかつた。徳川時代の封建制度が、切棄御免の素町人共から、巧みにその反抗心をば蕩し去つた、穩しやかな門跡信仰の、その『美風』をそのまゝに、千番一番に、危機一髮に、動もすれば誤魔化されやすい、善良極まる家族主義者等へ、難なく傳統して來たまでの話だ。その家族主義に對する叛逆なのだ。その叛逆から始まつた道行なのだ。その道行が絕體絕命の三十五年だつたのだ。その絕體絕命こそ、卽ち死んだ友人の面目だつたのだ。さうしてその悲壯な道行とは、三十五年の眞面目とは、こんな法會が、こんなコンゼンショナリズムが、何等の關係も存し得ぬ事は、太陽を仰ぐよりもよッぽど明らかだ。

――皆樣、どうぞこちらへ・・・と、所謂燒香なるものが、一わたりすみかけると、誰やらが號令をかけた。

と、今までヂッと辛抱して、その愚鈍な讀經の華をば、固唾を吞むやうな恰好をして、神妙にきかされてゐた人々は、ホッと夢から覺めたやうに、責任解除の寬ぎを感じたやうに、眉を開いてぞろ／＼と佛間を出た。さうして比較的明るい書院のそこ爰へ、落葉のやうに、サラサラと一塊りづつ散亂した。

サラサラと！ さうだ。さういふ音もした筈だ。見渡すと、大抵みな折目正しい仙臺平の袴を穿いてゐたからだ。さうして洋服でない人々は、殆んど一人殘らずと云つてもいゝ、一樣に端然と黑羽二重の紋付羽織に身をかためてゐたものだ。中に例外の無作法者も、一人二人はあつたけれど、たとひ小倉でも、擊劍用然としてゐても、袴だけは克明にくゝりつけてゐた。從つて、よごれくさつた大島の着流し一張羅で、場所柄をも辨へず、臆面もなく圖々しく、大胡坐などかいてゐる人間は、私を除いて誰もなかつた。

が、さすがに自分ながら、あんまりいゝ心持もしなかつたと見えて、『別に異を立てるつもりではない。洋服も禮服も持合はさぬまでなん

だ。また胡坐をかいてゐるのは、一分と正座してゐられぬほど、この通り肥つてゐるからなんだ。』などと、心の中で言譯がましく呟いたりしてゐた。さうして死んだ友人の父なる人に、鄭重を極めた挨拶に及ばれた時などは、變に恐縮して、

――こんな失禮な風體をも顧みず……なんかん〱、白々しい言語を發したりした。

そのうちに酒が出た。オヤと思ふ間に、引續いて吸物椀だの、燒鳥の小鉢だの、壽司まで皿に盛られ、順々に現はれた。肉食妻帶の淨土眞宗には、坊主さへ優婆塞だから、無論水淨火淨の面倒はなかつたが、又人知れず障子の棧の埃をつまんで、嫁味たらしく珍饌嘉肴へ彈き落す似而非持戒にも及ばなかつたが、さうして私は原始佛教の信者でも何でもなかつたが、何しろどうも、詰込んだ天金腹がいつぱいなので、義理にも箸はつけられなかつた。が、併し酒だけは飲んだ。引受け〱遠慮なく飲んだ。盃の顏さへ見ると、そこが寺の書院だらうが、四十九日の法會だらうが、そんな見さかひは一擧に超越して、忽ち天下泰平の氣分となり、悠々自適の姿となり、便々と、ダラリと、いつまでも飲みつゞけてゐたくなるのだ。困つた性分だ。

死んだ友人の父なる人は、今度は盃を捧げながら、再び私の前へかしこまつた。

――生前におきましては、倅は特別にあなた樣の御指導を蒙りまして……格別に御厚情を辱うしまして……えゝ逆樣ながら、亡き倅に代りまして……と、しきりに何やら云ひはじめた。

――なアに、酒ばかり飲んでゐたんですよ。二人とも飲み出すと止められないんでね……と、私はいゝ心持になつて受けた。

――どうか、これを御緣に、宅へもチョクチョクお越し下さいますやうに……えゝ、それからどうぞ亡き倅の事につきまして、新聞雜誌の紙上へ、十分にお書き下さいまするやう、何分共に、くれ〲もお願ひ申上げまする……これ、お銚子を早くこちらさまへ……と、さう云つて、父なる人は忙しさうに向うへ立つて行つた。

入替つて、弟なる人が酌に來て、矢繼早に注いでくれた。この人も何だか長々と口上を述べてゐたやうだつたが、それにはもう耳には入れてゐなかつた。

――や、しばらく！　その後どうだい？　鵠沼には美人はゐないかね？　と、錢湯のやうにガヤガヤした騷音の中から、さういふ聲が突然きこえたので、私はヒョイとその聲の方を見た。

五六年顏を見なかつたKが、背廣など一着しこ筋向うに陣取つてゐた。

――何だ、君か！　鵠沼に美人？　そりやアゐるとも、澤山ゐる。少くとも東京よりや澤山ゐる。

――肺病患者ばかりだらう？

――なアに、肺病はみんな男ばかりだ。

――齋藤美代子に逢つた事があるかい？

――ウン、逢つた。山極道子といふ海千が引張つて來たッけ。

――へえ？　山極道子が鵠沼にゐるのかい？　いつ日本へ歸つたんだらう？　あいつは女天一坊だぜ。氣をつけないとひどい目に逢ふぞ。

――さうかなア？　見たところは、たゞ薄ッぺらな女にすぎないがなア……

――ところが、あいつにやア、さすがの孫逸仙も手を燒いたさうだからね。

――孫逸仙がお目出度かつたんだらう。

――今、何してるのだい？

――T氏の弟子になつて、小說を書いてるのださうだ。

――危險千萬な話だなア。

――併し、あの女は小説を書くよりや、姿でもしてる方が、遙かに適任のやうだ。

――そりや、その通りだ。現在は誰の姿か知らん？

――當人の口吻から察すると、何でも福桃式虚業家の姿らしい。

――からかつてやつたらどうだい？

――我輩か？

――さうサ。

――我輩は孫逸仙ぢやないからナ。

恐らく天に酒星が瞬いて、ふんだんに地から酒泉でも湧いて、さうして何代變らうとかまはないから、たゞそれ水さへ向けてくれる相手があれば、私はどんなところへでもかく大胡坐を据ゑたまゝ、永遠であれ、無窮であれ、天壤と共に極まりなく、それこそさゞれ石が巖となつても驚かずに、この通り泰然自若として、屁の腐るまでかうした輕口を鬪はしつゞける氣であらう。

――そろ／＼引上げようぢやないか？　と、隣りにゐたYが見かねたやうに促した。

いつとなくKもゐなくなつてゐた。心づくと、殘つてゐるものは、私の周圍二三人を除いた外、あとはたゞ死んだ友人の家族らしい人々ばかりであつた。

――ウン、行かう。どこへでも行かう。と、私はヒョロヒョロと立上つた。醉李白のやうに立上つた。

一千九百二十六年十月五日（二）

さう、まだもう一人あつた。『方丈記』の作者のあつたことをわたしは一寸度わすれした。で都合四人だ。幸にしてそのうちへ若しわたしを加へることができるなら、都合五人となる。

なんといふわたしは思ひあがつた人間であらう？　わたしは果してさうして一千年間の一民族のうちに、五指を屈するにも足らぬほど珍しい人間の列へ、堂々として伍し得られるだけの本當に人間らしい心を有する文士なのであらうか？　わたしはどうしても誇大妄想狂だ。

が、どうかしてわたしはこの一度生まれて二度とは生きられない人生のうちへ、その人生そのものの眞價をば、そのまゝに文學に具象して殘してゆきたい一念にもえてゐる。

詩でもない、小説でもない、戲曲でもない、また哲學でもない。つまり、あゝでもない、かうでもないのである。要するに、醋豆腐なのであらう。さうしてそれにも拘らず、何かしらん書かずには生きてゐられないのだ。何かしらん直接心に觸れて來ることをば、文字のかたちに直して置かなければ、一日として安心がならないのだ。

不快だど。うしても不快だ。小説として書きはじめた文章を讀みかへすと、たまらなく不快になる。努めてあとを續けようとすると、いひやうのない不快さが、心の底からムッと突きあげて來て、ピタリと續けようとする筆先をとゞめて了ふ。と、例の、ゐても立つても、どうしてもゐたゝまらぬ、不快きはまつた心の狀態に陷る。

本當のことを書かうとして、知らず／＼ウソを書いてゐるからなのだ。

――まことはうその皮、うそはまことの骨、うそとまことの仲の町、迷ふもよし原、悟るもよし原。（「最も價値低き生活の上に」より）

ダンス・マカブル

外はまだ明るかつた。

が、そこら邊の小さな寺々の屋根や、石垣や土塀や、もくり〳〵と頭を出す木叢の低い梢などへ、絡まつたり獅嚙みついたりして、頗る往生際のわるい斑點をとゞめてゐる落日の殘光も、地球それ自身のロタシオンには詮方なく、不本意ながら淡黄色の微翳に弱められて行つた。

MとYとのまん中へ介まつて、そろ〳〵足元も覺束なげに、私は細い裏通りをユサリユサリと歩いた。六七間づつの距離を置いては、三々五々の中折や二重外套が、大して急ぐでもなく、又ハッキリした目標もなささうに、幾組も〳〵、後になり先になり、私達のゆく手に動いてゐた。

角を一つ曲ると、俄に寒い風が吹きつけて、捲き上つた砂埃の尖端が、ジャリリと私の目鼻から口中へまでもシブきかゝつた。私は思はず嚔した。さうしてハンケチを曳きずり出して鼻をかんだり、眼鏡をはづして着物の袖口で玉を拭いたりした。

—東京は砂の都會だね。

—昔は土一升と云つたものサ。

—埃及でナポレオンの見た蜃氣樓は東京だつたかも知れない。

—砂の上に築ける城か。

—雨が降りやたん圃の中だ。

—だから勢ひ空中へ樓閣を造りたくもなるサ。

駄辯の相手は大抵Mであつた。Mは書かきで文章家で、口數の少い饒舌家で、記憶がよくて、皮肉が好きで、さうして十六代も連綿とした江戸つ子であつた。が、死んだ友人とは異つて、Mは町人の倅ではなかつた。卽ちプロレタリヤの出ではなかつたのだが、如何せん、薩長の足輕共に、殘念ながら旗本八萬騎の榮華の夢を一掃されて了つた跡へ、武運拙くヒョッコリ生まれて來たのだから止むを得ない。從つて、今では、プロレタリヤの別名であるところの、一箇薄給のサラリエとして、資本主義の奴僕たる、タワイもない贅六新聞の、その東京の出店へ忠勤を挺んでつゝ、漸くにして一家四口の飢餓だけは免れてゐる狀態だ。が、Mは甚だ負惜しみが強い。寺門靜軒の如く凡そいかなる場合でも、その高楊枝の口ばかりは決して減らない。

—近頃は創作はどうです？　と、MはYに云つた。どんな平凡な言葉を發しても、物靜かなMの聲は、どういふものか、何となく皮肉に響く。Yは苦笑した。さうして巨きな眼玉をギョロリと動かして、

—僕の創作は子供を拵へる事だね。と、太いバスの聲で答へた。

—今度で何人目だい？　と、別に訊きたくもない事を私は訊いた。

—七人目サ。と、ひそかに自ら嘲るやうに云つて、Yはやゝ剽輕らしく、併し又やゝ棄鉢氣味に、一寸ばかり鼻の先で笑つた。

Yも江戸つ子だ。が、二代ほど前には、どこか印旛沼附近に蟠踞してゐた貧乏大名の、その家老職を勤めた家柄だつたと云ふからして、血統に於ては、とてもMだけの誇るに足りさうな連綿さは持合はしてゐなかつたわけだ。けれども、その代り、これは不遜なMなどには遙かに及びもつかぬ、卽ち、物質的方面に限られた、かのブルジョア的江戸趣味に對する陶醉と執着と

は、殆んどそれが病的である程度にまで、Yの生活本能の膏肓に達して、ピッタリと深く鉤状菌の如く食ひ入つて離れないのだ。さうしてYは詩人なのだ。十八大通の境界標から、決して一歩も踏出さぬ、踏出す事を肯んぜざる、象牙塔中に錦繍を綴つて倦まぬ詩人なのだ。さうしてYは資産家だ。三高利貸の一人として、氣概のない官員原から怖毛を震はれた、立志傳中の父親から、在ながらにして數十萬の遺産相續を敢てした資産家だ。

もう八九年にならう。その頃、Yのブルジョア趣味と、さうしてその小遣錢とを中心とした、世間はもとより、文壇の注意すら、一向に喚起し得なかつたところの、しかも飽くまで高踏的であつたところの創作雜誌が、臆面もなく月毎の各店頭へ、恐らく一冊も賣れる事なしに、堂々と曝されてゐたものだ。同人は六七名であつたが、Mも私もそのうちに數へられてゐた。が、お互ひに時流を超絶した、純眞な、眞劍な、所謂『創作』に沒頭し合つたと云ふよりは、むしろいつも豐かなYの懷ばかりアテにして、到るところで長夜の宴を張り歩く事の爲に、徒らに健康と精根とを消耗しつゝあつたと云つた方が、今にして思へばどうも適切であつたやうだ。

海から續いたキャナルの橋を渡つた時、ハッと眼がさめたやうに電燈がついた。精養軒の二階から迸つた光が、なみ／＼と湛へた滿潮の水の上へ、稻妻の如く散亂した。さうして歌舞伎座の前あたりが、俄に陽氣らしく輝き出した。人通りが繁くなつて、もう四十九日の連中も、思ひ／＼の都會の夜へ、いづくともなく吸收されて了つた。

――いゝ人であつたがなどと土手でいひ。

と、輕く口誦んで、――燒場の歸りでもないが、あの男もあれでとにかく仕合せな死に方をしたわけさ。と、Mが云つた。

――併し禪宗で悟つた人間へ、いくら死んだからいゝわと云つて、きこえよがしにお文さんを讀み上げるのは酷だ。いくらか死屍を鞭打つと云ふ形があるね。と、振舞酒のさめかけて來た私が云つた。

――だが、先生の禪學は要領よく葷酒山門に入つた方なんだから、あれで結構さ。

――尤も、山門よりや大門の方へ、とかく足の向き勝な男ではあつたけれど……

――死ぬのはいかん！　と、Yは思ひ出したやうに唸いた。

三十間堀の橋畔にさしかゝつた。

すると、何やら考深さうな顏をして、Yはふと立止まつた。

――どこかへ行つて、晩飯を食はなくちやならんが……

――さあ……と云つて、頭の中で料理屋の選擇でも始めたやうに、一寸小首を振りながら、Mも立止まつた。

――卓袱はどうだい？　と、私は卒然と云つた。

――戻るのは面倒だ。と、Yはすぐ否定した。

ちや、春日もちつと遠すぎるだらうね。と、はじめから否定を豫期して、Mが云つた。

――遠いばかりか、あすこは高い。と、Yは顏をしかめた。

不決定のうちに、言はず語らず、三人は橋を渡つて了つた。

――どうせYが奢るのだ。どこへでも行け。――と、私は思つた。Mは猶更さう思つたらう。

――そこへ行つて見ようか、と、Yは弓手の横町を指した。どうやら最初からチャンと目星をつけてでもあつたらしく。

――よからう。と、私は何の苦もなく贊成した。

――まづい家だがね。と、一應は難癖をつけたが、別段不贊成を唱へるほどの理由も必要もなかつたと見えて、Mも私達と打連立ち、寧ろ快然としてその料亭の門を潜つた。

――思ひ切つて俗惡な部屋だね。と、通された座敷へ落ちつくと、Mは先づ罵倒から口を切つた。

――これが現代サ。純日本趣味サ。茶室と銅壺とを取違へたやうに磨き立てたところが自慢なんだ。

――椋の皮を入れるべし。と書いた人の設計に相違ない。

――これでいかにも金が掛つてゐるらしく見せかけた苦心は大したものサ。

――現代人の苦心はすべてこの流儀だ。

――青黄粉式か。

――××も滅びるね。

――なあに、もうとツくの昔滅びて了つてゐるんサ。お互ひに氣がつかないだけだ。

――さう、文明はね。だが、氣もつかぬ筈サ。滅びて惜しいやうな文明は、もと〳〵無かつたやうなものだからね、××には。

――一體文明といふ奴は元來滅びて惜しいやうな代物ぢやない。ルネッサンス文明でも、ロココ文明でも、勿論、近代の所謂科學的文明でも。

――そこへ行くと支那なンぞは大いに見識がある。その時々の都合次第で、未練も遠慮もなくバタバタと滅びてゐるからね。

――歐羅巴だッてさうさ。猫の目のやうに頻繁を極めて滅びつゝある。文明とか進歩とかいふものは、つまり、あゝしたわけサ。

――ところで、まだ一度も滅びた經驗のない國はと云ふと、それは恐らくたゞ日本とアメリカばかりだらう。

――お互ひに滅びて見る事サ。

このベルは利かないのか知らん。ばかに遲い。と、Yはジレつたさうに手を叩いた。さすがに際限のないMと私との駄問答には、聊か辟易もした樣子で。

――お待遠樣。と、やがて女中は膳部を運んで來た。

酒宴は始まつた。

恰も自分の創造した天地が現前したやうな顏をして、Yは莞然として盃をとつた。Yは本當に酒が好きなのだ。心から好きなのだ。但しアルコホルがお好きなのぢやない。Yには酒でなければいけないのだ。日本酒でなければいけないのだ。但しモッキリや升の隅などといふ類は大嫌ひなのだ。相當な日本間で、相當な肴を並べて、氣長に、上品に、ユックリユックリ、落ちつき拂つて飮む事が好きなのだ。所謂五分もスキのない通客のブルジョア趣味だ

飽まで徹底したYの、この垢拔けた、この洗煉された趣味に對して、いかにブルジョア嫌ひの私でも、どうして容易く反感などが持ち得られよう？　とても反感は持ち得なかつたばかりぢやない、寧ろ却つて反對に、常に大いに尊重し、常に大いに敬慕してやまなかつた位だ。江戸つ子ではないのだけれど、生まれ落ちるなり、そのまゝ江戸つ子の手一つで育てあげられた關係上、生活樣式の趣味に於いては、勢ひ私もまた一箇の江戸つ子であるべく運命づけられて了つたからだ。

が、それだけでは物足らなかつた。どうしても、どうも、それだけでは、そこに何かが缺けてゐた。さうして強ひてそれだけの上に安住しようとすると、たまらなく心に壓迫を感じて來るのだ。恐らく江戸つ子でない生來の血肉が、江戸つ子である母親の薫育に裏切つて、氣が氣

儘に叛逆を企てゝある所以であらう。

――このカジキはいかん！　と、一目見て、Yはもう箸をつけなかつた。

――ウン、駄目だ。と云ひながら、私は平氣で食つた。

――それほどでもないがなア。と、酒客でないMは恬淡に味つた。

生活に處する三人の態度は、一寸まア、こんな調子に異つてゐた。Yは嚴密だ。Mは温順だ。さうして私は出鱈目だ。

Yのそれに比べると、私の酒量は遙かに弱かつた。それにも拘らず、いつも私の方がYよりは餘計に飲んだ。從つてYはその分限を越えて、滅多に微醺以上に出る事は稀れだつたが、私は飲めば必ずベロベロに醉つた。醉はずにはゐられなかつた。醉へば醉ふほど意地になつて飲んだ。飲めば飲むほど滅茶苦茶に泥醉を欲した。さうして終ひにはウヰスキイだ。

――すぐ鵠沼へ歸るかい？　と、さも心地よげに醉つたYが、劬るやうな調子で、やさしく訊いた。

――さア、ついでに母の墓まゐりをしてゆくつもりだつたんだが、かう日が暮れて了つちやア、お話にならない。親孝行も、まア願下げだ。と云つて、このまゝすぐあんな沙漠へ引上げて了ふのも何だか一寸業腹な氣もするやうだ。が、もと／＼女中どもへ土産を買つてつてやる事の外、東京には全く用といふものがないんだから始末がわるい。せめて、濱松屋の立見でもして行つてやらうかとも思つてゐるんだが……と、口のまはりの筋肉が弛み出した聲で、私はウダウダと答へた。

――濱松屋はもう遲いだらう。と、もう飯を食つて了つて、所在なささうなMが注意した。

――とにかく、もう一本飲んで、爰は出かけよう。と、Yが云つた。

女中は心得て立つて行つた。

――どうも日本の食物は酒を飲むやうにばかり出來てゐるんで、ほんの見た目と口先だけの淺薄な味試しきや考へてゐないんだから、酒本位になれない僕等にとつては、甚だ食ひ足りない。そのくせ腹にはわるくモタレるんだが……

――つまり、この建築と同じわけサ、物質的經濟的の現代人の生活とは、甚だ距離の遠いものだ。食物は何と云つても支那料理だ。

併し日本の支那料理は駄目だね。或男が帝國樂園へ支那人を連れてつたら、貴國の料理は頗る樂園の珍に似たりと云つたさうだ。似てゐるとは思つたが、あれが支那料理だとは氣がつかなかつたものなんだらう。

――あれは飜譯だからサ。我輩の飜譯のやうに門並誤譯だからサ。

――誤譯なんぞは問題ぢやない。正式に胃の腑の要求に應じてゐるかゐないかが問題なんだ。その點から云ふと、日本では長崎料理が一番傑作だ。舊い飜譯で誤譯も澤山あるらしいが、あれなら立派にオリジナリテが出てゐるね。恐らく鳩摩羅什の舊譯に匹敵すべきものだらう。觀自在よりや觀世音の方が、たしかに胃液の分泌量が多いよ。

――君はライオンを食つたさうだね。

――惡食はやつぱりいけない。殊に猛獸の肉は駄目だ。豹もライオンも臭くてね。

――馬の睾丸はどうだつたい？

――ウン、ありや一寸オツだつた。シコシコして、齒切れがよくて、丁度動物性の松露といふところだ。

Yの茶漬を裝つてゐた女中は、喫驚してMの顏を眺めた。が、Mはバクリハクリと紙卷の烟を吐き出しながら、眉宇さへ動かさず、尋常茶飯な顏して喋つてゐた。

――マリネッティのマファルカ・ル・フュチュ

リストには、悍馬のペニスを食つて、猛烈な滑慾を起した事が書いてあつたが、多少さうした傾向があるものかね？

――麝香ほどの利目もなかつたやうだね。尤もシェンが外れてゐた爲かも知れないが……

――勘定してくれたまへ。と、飯を食つて了ふと、Yは女中に云つた。

――介之推の髄は丁度シェンに相當してたものと見えて、重耳は羊肉だと思つて、旨さうに食つてゐるぜ。

――九江王が名詮自稱にゲイゲイ云つて、手妻遣ひのやうに小蟹なンぞを吐いたのは、大方彭越の醢が産卵期の肉だつたせゐだらうよ。

――劉安の噂はサンマイにオロされたが、玄德は何だと思つて食つたらう？

――滎陽の燎跡から黒焦の紀信を曳擦り出して、はじめて人肉の美味に舌鼓を打つたのは、多分チャーレス・ラムの仕業だらう。

Yが書附を前にして、嚴粛な顔つきをしながら、氣前よく勘定をしてゐる間、Mと私とはわざとその方は見ぬふりをして、テレ隱しのやうに愚談を續けてゐたものだ。

――さア、行かう。と、Yは立上つた。待ちかねてゐたやうに、二人も立上つた。

外へ出ると、クワツと醉が發して來た。光が、Mの横顔が、犬の尻尾が、電車の踏段に留まつた人の片手が、暗が、物音が、レールが、店先が、女の笑顔が、時計臺の針が、スパークが、雲が、Yの眼玉が、騒然雜然と、グワラリグワラリと、恰も未來派の、ダダイストの、表現派の、奔放な、錯落な、無作法を極めた色彩と、畸形と、それ等から生ずるニュアンスとが、一時に目まぐるしく私の眼前に渦卷いた。さうして私の魂はハチきれさうになつた。魂と名がつけられる何物かが、若し私の生命のどこかにあるならば……

――君のところの鹽せんべいは旨いかい？

と、私はよろ〳〵しながらさう云つた。が、私が云つてるんだか、誰が云つてるんだか、私にはよく分らなかつた。

――君が食ふのかい？　と、不思議さうにYが訊いた。

――母は非常に鹽せんべいが好きだつたよ。さうサ、母の好きなものは、クサヤの干物と、シャケの茶漬と、それから鹽せんべいだ。それから小鍛冶だ。長唄サ。勿論、野暮な御新造だつたからね。併し役者は成駒に五代目だ。バアバアの成駒屋だぜ……ウン、所作事と云つたものサ……姉さん、君も江戸つ子だらう？　江戸つ子なら鹽せんべいが好きな筈だ……當今のバケモノは何かと云ふと、そら、タマルやだ、ツル勝だとぬかしやアがる。ヘン、けふは帝劇、あすは三越」が、二度云つたら風をひく玉サ……但し斷つて置くが、これは必ずしも雜司ケ谷へ御持參に及ばうといふ了見ぢやない……いくら醉つても、もう日が暮れた位の事は、チャンとわかつてゐる。だから雜司ケ谷ぢやない。だから親孝行ぢやない。二十四孝でもない。季札が劍を引懸けに行くんでもない。高がお庶さんサ・鵠沼の女房へ持つて歸るお土産なんだ……わかつたかい、姉さん？　わかつたら手をあげて……オヤ、この姉さん、一寸澁皮がむけてるぜ？　こつちを向いて御覽？　いくつだね？

――へえ、お待遠樣。と、笑ひを押殺した、氣のよささうな姉さんは、わざ〳〵鑵入りにしてくれて、丁寧に新聞紙へ包んで、吊下げるやうにまでしてくれた鹽せんべいを差出した。

――スパシイボ！　トウシャ！　ダンク、シェン！　メルシ、ボオクウ！　アハハハハ！

大層な機嫌で、私は前後不覺に喋りつゞけながら、MとYとに擁護せられつゝ、忽ち明るいところへ出た。人間の頭が珠數つなぎになつて、ヒュウヒュッと私の左右を飛びちがつてゐた。Mの顏がダンテに見えた。Yの顏がジオットオに見えた。

――君は飯を食はなかつたが、腹はすかないかい？ Yが云つた。すると、Yの顏が、今度はウゴリノ伯に見えた。

――ウン、何か食ひたいナ。から、ドロドロと血の滴れるやうな奴を……

――風月のビフテキを食はうぢやないか？ 西洋料理にロクなものはないが、あれだけは旨い。と、Yは柄にない事を云つた。Yも大分まはつてゐるのであらう。

――まだ食ふつもりかね？ と、Mは興さめ顏に云つた。

――食ふよ、食ふとも。どうしたんだか、この頃は物が無暗に食へる。さうして何でも旨い。死に目が近いのかも知れない。ハ、ハ、ハ。

底力の籠つた、Yの低いバスの聲が、何となく悽愴に響いた。

――さうかね。と、氣のないやうに、Mが答へた。恰も肚の中で "Not in abundance, but in virtuonsity" といふ句を想出してでもゐるやうに。

やゝ暗い横町へ折れた。

風月の二階で、

――君は？ と、トボケたやうにMの顏を見て、わざとらしくYが訊いた。

――さア、僕はよして置かう。紅茶ぐらゐなら貰つてもいゝが……と、Mはもうかなり迷惑さうであつた。

――さう。おや、ビフテキが二人だ。それに菓子が一人、日本酒に、紅茶に、ウヰスキイが、各一人づつだ。あゝ、さうだよ。銘々別々だ。それ〳〵流儀が異ふんだ。ハ、ハ、ハ。と、Yは大分上機嫌だ。

――畏まりました。と、角帶をしめたギャルソンが、笑ひもせずに立去つた。

私は殆んど幻想の中にゐた。ピカピカしたナイフを見ると、戸外では雪が降つてるやうな心持がした。若し顧向いたら、そこに眞白な頸を延べて、金髪の美人が、ル・アヴルの助役の細君が、蠟燭のボンヤリした、朦朧たる火影に照らされながら、スヤスヤと睡つてゐさうな氣がした。さうして、――さうだ。今だ。あの頸筋を……さうだ。あの眞白なところをグサリと……ウン、グサリとこのナイフでやるのは……と、ういふわざだか、さう思ふ事が、別段不思議でも何でもなくて、それが極めて自然であるやうに考へられたのだ。で、プツリと刺した。一寸血が滲み出た。ばかにいゝ心持だつた。そこで左の手で突刺したまゝ、右の手でスッと切つた。血脂が皿一杯に亂れた。私は笑ひたくなつた。

――人肉もやッぱり此の方が食用に適してるものか知らん？ と、フォークへ貫いた肉片をば夢現で口の方へ持つて行きながら、私は呟いた。と、プンと一種の臭氣がした。ワキガに似た臭氣が……

――カンニバル系統と貝塚系統とは、恐らくその舌の先の感覺に於いて、或はその祖先を同じうしてゐるのかも知れないね。と、Mの聲が冷やかにきこえた。

スラスラする感觸が、私の舌の先にツルリと滑つた。「オオバリシュタカ」といふ梵語が、忽ち私の腦中へ衝上つた。クラクラと眩暈がした。私は慌ててウヰスキイをグッと飲みほした。

――君、ギャルソン君！ アンコールだ。

角帶がついと來て、チックで光つた頭髮を心持傾けて、無言で、無表情で、形式的に八分

ほど注いで行つた。

――どうだね、一杯、君も？　と、私は壺中の黄金水を透し觀るやうにして、Yに云つた。

――いやア、と、Yは首を振つた。ウヰスキイは旨いよ。アルコールのうちぢや、そりや一番旨いよ、だから飲まないのだ、怖いのだよ。僕が若し君だつたら、今頃はさつさと死んでゐるだらうよ……

――死んでもいゝぢやないか？

――死ぬのは厭だね。

――どうせ死ぬんぢやないか？

――それでも厭だね。

Yの壜詰はオツモリになつた。

――出掛けようぢやないか、と、潮時を見計らつたやうに、Mが云つた。

――我々はいそぐ必要もないが……と、二合壜を逆様に搖つて、殘惜しさうに雫をきりながら、――君は？　まだ汽車があるのかい？　と、Yは氣遣はしさうに私の顏を見た。

――一體何時だらう？　と、何時だつてかまはないのだが、さうしてもう鵠沼へ歸る氣などは、てんでなくなつてゐたのだが、私は器械的にさう呟いた。

――さア。と、帶の間から重さうに曳出した、甚だ舊式だが、併し又ばかげて目方のありさうな、素晴らしい金時計を伏目に見て、――十時だね。と、歸るなら今のうちだといふやうな顏をしながら、Yが云つた。

――ぢや、まだいゝ。十一時まであるんだ。尤も終列車だと、向うへ着くのが一時になるけれど、そんな事はかまはない。ばかりか、下の山極道子の部屋へ×××にでもゆく氣なら、却つてその方が、結句、お恰好な時刻になる。ハハ！　と、出任目に喋つてゐるうちに、私は急にムラムラとなつて、これからすぐにもその××が實現して見たくてたまらなくなつたものだ。と、無上に歸りたくなつた。追立てられるやうに歸りたくなつた。さうしてヒョイと立上つた。

――とにかく出よう。

私の眼の前には友禪縮緬の搔卷の下に横たはつた女の寢姿ばかりがチラチラした。

三人は狹苦しい階段を下りた。

下の店先で、Yがその子供達への栗饅頭かなんかを買つてゐる間、Mと私とは暗い歩道を押並んでブラリブラリしてゐた。

――家へ來て泊らないか？　と、Mはやさしく云つた。

――さア、さうしてもいゝんだが……と、私は曖昧に答へた。さすがに、――どうしたんだか今晩はたまらなく女が抱きたいのだ――と、さうは俗々しく口へ出してまで、思ひきつた白狀もしかねたからだ。

ジリジリとアルコールに燒きつけられた、アツフツと湯玉の如く沸えくりかへつた、ウヨウヨと百千の鎌首を一齊にもたげた、驀地に異性を目覓けて、身悶えして、火焰を吐いて、さも苦しげに虛空を摑みつゝあるところの、恰も蟻塚の様な私の肉體の、凡ゆる細胞の生理的叫喚をば、其のまゝに擔いでゆける方角としては、Mの家庭は餘りに健全すぎてゐた。餘りに幸福すぎてゐた。餘りに春風駘蕩としすぎてゐた。

――ねえ、さうしたまへ。と、Mは重ねて勸めてくれた。が、

――さうさなア……と、私はます〳〵煮え切らない返事をした。私の心にはMの長男の機敏な顏が浮んだ。愛嬌のある剽輕なその次女の樣子が目に見えた。親切なその細君の歡待が想出された。それだけになほ苦しくなつた。な

ほ辛くなつた。一層自分の孤獨がたへきれなくなつた。

――お待遠。と、大きな紙包をば、これもどうやら幸福ならしくブラ下げたYが、やがて出て來て私達と一緒になつた。

私は大きな絶壁に突當つたやうな心持がした。それは幸福といふ絶壁だ。突當つては跳反され、突當つては跳反されてゐる、その絶壁だ。さうして、"Open, Sesame!"ぐらゐな呪文では、決して開きさうもない絶壁だ。

私は息づまりさうになつた。MもYも私の親友だが、私を自分達の兄弟の一人のやうに、或は恐らくそれ以上の親しさで、諒解もし取扱つてもゐてくれる人々なのだが、石のやうに冷たい私自身の乾枯びた孤獨は、かたくなに、偏屈に、この二人の生活から投射される幸福の閃光をば、動もすれば水臭く回避するのだ。云ひ換へれば、私はかうやつて、たゞ私達三人きりで、永遠に續いてほしい夜の闇の巷をば、いつまでも、どこまでも、このまゝに放浪して歩きたかつたのだ。さうしてそれが出來ない爲に、さうしてそれを二人から阻隔するところの、容赦なく二人を奪去つてゆくところの、彼等の家庭が邪魔になつたのだ。腹立たしくさへなつたのだ。

――すぐ停車場へゆくかい？ と、Yは云つた。

――ウン……と、私は答へた。さうして莨の烟にむせて、續けざまに咳をしながら、

――さう、さう、木村屋のパンに西洋菓子といふ註文があつたツけ……木村屋はもう駄目だが、龜屋はまだ開いてるかも知れない……開いてたら、ついでに買つてツてやらうか。ハハハ！ 恨みッこないやうにナ……と、云譯のやうに、獨語のやうに附加へた。

――龜屋なら僕も一緒に行かう……珈琲を買つて歸らうと思つてゐるから……とMが云つた。

私は早く二人から逃れたかつた。

龜屋はまだ半分が扉が開いてゐた。いきなり珈琲の香ばしい包が鼻を衝いた。棚に並んださまざまな洋酒の壜が、恰も學者先生の本箱が無學な低能兒を威嚇するやうに、花やかな電燈の光を燦爛と受けて、しきりに購買力の薄い貧乏人どもを嘲つてゐた。

――鵠沼のお金さんが好きさうな西洋菓子はあるかい。と、ヅカヅカと通つて、硝子張の臺の中を覗き込みながら、巫山戯た調子で私は云つた。

――えゝ、えゝ、御座いますとも。と、色の白い、眼の可愛らしい、年若な店員が、スルリと近寄つて、利發さうな聲で答へた

――ウム、君は中々感心だ。我輩のいふ事がよく分る。その要領なら、きッと出世する。ところでどうだい？ 君は何かね？ 出世とストライキとでは、どつちの方が、好きだい？

――へへへ！ そりや出世の方が宜しうございますね。

――いよ〳〵頼もしい。その位頼もしけりや、我輩の妹の聟にしてやつてもいゝ。

――へえ、どうぞ宜しくお願ひ致します。

――よし、その代りに、何だぜ、それと同時に斷然人間を廢業するんだぜ。いゝかね？

――承知しました。そこで、お金さんのお土産には何を差上げませう？

――お金さんの好きなものなら、何だつてかまはない……すべて君に一任する！

――宜しうございます。では、おいくらばかり？

――それもまかせるサ……十圓でも二十圓でもかまはない……

――では、百圓ほど包みませう。

——あゝ、いゝとも。

鹽せんべいの鑵の外に大きな紙包がもう一つ殖えた。かうしたハイカラな店はYには全く用はなかつたが、Mは何やら大分仕入れた樣子であつた。

——ぢやア、僕等は爰で失敬しようぢやないか？　と、もうよほど光の弱くなつた歩道へ出ると、Yが云つた。

——やつぱり歸るかい？　と、力なささうにMが云つた。

青白く街燈の薄あかりを浴びた、細面の華車なMの横顏には、實意の籠つた『淋しいだらうね！』といふ表情があり〳〵と暖かく溢れてゐた。

——失敬……

思ひもよらぬ涙が、どうしたのか、ホロリと私の眼から出た。私は勢よく歩き出した。

碾きたての、新鮮な、ばかにいゝ珈琲の匂がプンプンした。氣がつくと、その匂は左の手首から來てゐた。左の手首には持重りのする包が大小三つまでブラ下つてはゐるのだが、どう考へても、珈琲などは買込んだ覺えはなかつた。まさか龜屋の店から曳摺つて來た匂とも思はれなかつた。それにしてはあまりに薫が高すぎたからだ。

『不思議な事もあればあるものだ。』と、私は思つた。さう思つて新橋を渡つた。渡る時、チラリと暗い水の上を見たが、その拍子にゾクリと襟元に寒氣がして、何んだか醉がさめかけたやうな氣がした。と、急に粹アな氣がして來た。

『俺は本當に今晩鵠沼へ歸る氣でゐるのか？　と、私は自分の心へ訊いて見た。

——歸りたければ歸るがいゝぢやないか？　と、心は答へた。

——別段歸りたい事もないが……

——××××たいのか？

別にあの女に限つた事はないのだ。

——そんなら、ワザワザ鵠沼くんだりまで歸らなくつたつて、女はどこにでもゴロゴロしてゐる。

——ウン、この邊にも澤山ゐる。

——そこで間に合はして置け。

——さうしようか？

——さうしろ、さうしろ！』

私は可笑しくなつた。さうして聲を出して、わざとらしくカラカラと笑つた。珈琲の匂がプンプンした。大橋行の電車の中で、革につかまつたMの顏がまざ〳〵と見えた。中根岸のMの二階にスヤスヤと睡つてゐる自分自身の姿が見えた。と、妙に悲しくなつた。また涙が出て來た

『馬鹿！　そんなにセンチメンタルなシチンムングに漬りたいのか？　と、どこかの隅から心が叱つた。

——なあに、さういふわけぢやない。まだ醉ひかたが足りないのだ。

——ぢや、もツと飲め。

——ウン、飲むとも。

——意識を失ふまで飲め。

——ウン、死ぬまで飲む。』

いつの間にか停車場へ這入つた。終列車にはまだ三十分ほどあつた。

『なアんだ、やつぱり××にしたのか？　と、突當りの時計を仰いだ時、ニヤリと心が冷かした。

——ばかを云へ！　なンであんな女に執着があるもんかい？

——負惜しみを云ふな、負惜しみを

——負惜しみぢやない。これから鵠沼へ歸る

位なら自動車で村木座へ押懸ける。
――そんなら、さうして見ろ。
――馬鹿野郎！
私は二階へ上つた。
――今しまつたばかりのところで御座いますか？ と、ボーイは恐る〳〵云つた。
――いや、何にもいらないんだ。たゞウヰスキイを二三杯のめばいゝんだ。後生だから飲ましてくれたまへ、命にかゝはるんだから……頼む、頼む。この通りだ。と、私は手を合はして、拜む眞似をした。
ボーイは噴き出した。さうして人がよささうに半分ばかり這入つた壜とコップとをテーブルの上へ置いて行つてくれた。
――それぢやア、まア、御ゆつくり……チーズでも差上げますかね？
――エライ―― 君にかぎる！
ボーイは笑ひながら、やがてチーズも持つて來てくれた。早速つまんで見ると、思ひきつて下等なチーズだつたけれど、それだけに何その惡臭い匂が、この際却つて痛快にも味はれた。で、それを肴にして、立續けにグイグイと飲んだ。飲みながら、ふと、"Another ken" といふ言葉を想ひ出した。さうして思はず微笑した。
――アナザア軒。さうだ、こんな時、あの男が一緒だとなア……と、私は思つた。
あの男とはJの事だ。北越山の雪の中に閉ぢ籠つて、セッセとスチルナア翻譯に精を出しつゝあるJの事だ。三ケ月以前、まだかうした取りとめのない放浪をはじめなかつた頃は、夜になると、きつとJを誘ひ出して、こんな風に到るところでウヰスキイを飲みちらして歩いたものだ。出鱈目な英獨佛をゴチャまぜにした言葉をば、お互ひに喋々と囀りかはしながら、一軒へ這入つて、一杯のむかのまぬうちに、ヒョイと立上つては、
――アナザア軒！ と云つたものだ。さうしてそのアナザア軒の見つかり次第、殆んど一軒も見のがす事なしに、次から次へと、根氣よく停留所のやうに廻しをとり歩いたものなのだ。で、落ち行く先は、きまつて新宿とか、御宿とか、又吉原なら小格子といふところだつたが、甚だしい時は一晩に十五六軒も立寄つた事があつた。
Jも江戸つ子だつた。助六の子孫で、花川戸ではないが、藏前に巢をくつたお札差しの倅だか孫だかだ。母親は名にしおふ角宿の娘ださうで、その氣前のいゝ全盛ぶりは、子供心ながら凡そ溜飲が下つた位のものだつたといふ。お蔭で早くから苦勞をさせられて、十八九の頃から、Jはもう學校の教師などをして、迚も背負ひきれる筈のない一家を支へて來た男だ。さうした感心な男に連添つて、二人まで子供を産んでも、自由戀愛といふ奴はまた格別な味がするものと見えて、Jの女房はその穩しい亭主を、潔く振りすててからに、強い、勇ましいアナキストの懷を目蒐けて、飛鳥の如く跳込んで行つて了つたものだ。それが爲めにJまでが名高くなつて、名高くなりついでに、世間からは馬鹿だの、意氣地なしだの、低能兒だのと云はれてゐる。
――低能兒ならどうした？ 低能兒で惡けりや殺してくれ！ さア、遠慮なくスッパリとやつてくれ！――と、頭の中へフンぞり返つて、Jは默阿彌の主人公の一人のやうに、フテブテしくタンカを切つた。が、よく見ると、タンカを切つてるのは、Jではなくて私自身なのだ。尚よく見ると、Jは却つて氣の毒さうな顏をしながら、淺猿しくフンぞり返つた私自身の側へ坐つて、香箱をつくつた猫のやうに、時々ギッと眼を閉つたり、ニヤニヤ笑つて見たりしてゐた
『さア、もういゝから起きたまへ、さうしてこれ

から君の妹のとこへ案內しようぢやないか？ と、ノンビリした聲で、Jが云つた。

——どこだい、一體、そこは？ と、私はムックリ起上つて訊いた。

——大文字の前サ。

——その女はソシアリストなのかい？

——なくたつていゝぢやないか？

——なけりやア、つまらない。

——ソシアリストかも知れないよ。この間までソシアリストのバアにゐたんだからねえ……

——君は買つた事があるのかい？

——僕等にやアどうしても賣らないんだよ……カマラードを絞る氣にはなれないと見えてね……そんな御遠慮にやア及ばないのだが……

——それぢやア、我輩だつて、やッぱり駄目だらう。

——君なら大丈夫だ。大島ぞろひのソシアリストといふなア、日本ぢやまだあんまり見かけないからね。

——さうかい。それにしても妹ぢや一寸氣がさすなア。

——だから尙ほ案內したいのだよ……Inceste はサアドによつて痛快に解放されたものサ……

——そんなに似てゐるかい？

——この寫眞そッくりだ。』

私は停車場を出た。

——どちらまで？

——A "Onzième Doigt"

——え？ と、ショッファが訊返した。

——ハハハ！ 吉原の事サ。

——吉原？

——いやかね？

——まゐります。まゐります。

——大文字の前だぜ？

——承知しました。

醉つ拂つて、たゞ一人、夜更けのタクシイの中で、ドシン、ドシンと、小氣味よく衝上げられてゆく心持は、何としても、やつぱり下戶には分らぬ味だ。

死んでもいゝと思ふ。何がどうならうと管ふものかと思ふ。川へ陷らうと、電柱へブッかゝらうと、電車にハネとばされて、滅茶々々に破碎しようと、そんな事が何だと思ふ。このまゝ無事に行き着いて見たところで、どうせ吉原だと思ふ。

つッつッツと走る。電燈が走る。軒が走る。人影が走る。店先が走る。線路が走る。交番が走る。暗闇が走る。何もかも走る。走る。が、何物が走るのだ？ 視覺が走るのか？ 自分が走るのか？ ショッファが走るのか？ 賃銀が走るのか？ 支拂能力が走るのか？ 文明が走るのか？ 野蠻が走るのか？ 生が走るのか？ 死が走るのか？……

『とッとと走れえ！』と、粉屋のチホンが昔ジレつたがつた。が、その時分はノロくさい馬車だつた。尤もロシアの片田舍なら、今だつて同じ事かも知れぬ、粉屋のチホンは人道主義者だから、無暗と先ばかり急いでゐたものだ。それゆゑ、馬車を自動車に取更へて乘せられても、そのいかにも氣が氣でなささうな『とッとと走れえ！』といふ音には、一向變りはないであらう。

『人道主義なンて大嫌ひだ。』と、走りながら私は思つた。

『チェラウェーク！ ロシア人にはそんなにいい音に響くか知らないが、俺には別段何とも響かない。多分俺が馬鹿なんだらう……が、さうかと云つて、非人道主義は尙ほ大嫌ひだ。一體、俺は何にかぎらず、主義といふものが嫌ひたの

だ。さうして就中一番嫌ひなのは無主義といふ主義だ。ピルロニズム！　イズムが既に厭だ。アタラクシイ！　ニルヴナ！　言葉が厭だ。そんな言葉を想ひ浮かべる、この念頭が厭なのだ。叱！　叱！　ハハハ！　閑居靜處がチャンチャラをかしいや！

「動くと思ふから急ぐのだ。俺は急がない。アイレ・ミット・ワイレなんて、そんなサモしい了見からぢやア、とら〳〵ない。アキレスが龜の子を追越す事が出來ぬといふ、そんな代數から割出したんでも勿論ない。たゞ急ぎたくないから急がぬ迄の話だ。タクシイの急ぐのはショッファの勝手だ。俺の知つたこツちやない。

『が、なるほど、急ぎこそはしなからうが、どこへ向つて動きつゝあるかといふ事だけは、さすがに俺も知らないとは云ひきれない。たしかに吉原へ向つてゐるのだ。急速力でその方角へ疾驅してゐるのだ。それだけは何と云ひぬけても事實だ。ソラ、今越したのは淺草橋だ。これから雷門へ出て、吾妻橋の手前から左折するのだ。行程は立派にきまつてゐる。寸分の疑ふ餘地はない。見ろ！　女が抱きたいのだ。最も簡便に異性の肉體へ觸れたいのだ。フン、簡便にナ！

『一簞の食、一瓢の飲、さうして小店女郎か。ハハハ！　まづ顏回式といふところだ。回也に果して女郎買をやるだけの元氣があつたかどうか知らないが、ディオゲネスにならば慥にある。あるどころぢやない、立派に女郎に惚れられたものだ。女郎の名前まで分つてゐる。仙臺さんの吊し斬りにこそならなかつたが、又なるにはあまりに聰明だつたが、千金で購はうとしたデモステネスには、こツぴどい肱鐵砲を食はしてゐる。アレクサンドルがオートクラットなら、さしづめデモステネスはブルジョアだ。さうして酒樽の仙人は勿論プロレタリヤだ。プロレタリヤ中の錚々たるものだ。そのブルジョアを振つたのだ　振つたばかりか、すツ飛んで行つて、酒樽仙人へかじりついたのだ。ライスは小氣味のいゝ女だ……ライス！　ライス！……

―ライスはディオゲネスの妹そツくりだつたかも分らないが、小式部はJの云ふほど俺の妹に似てゐるとも思はれない。なるほど、さう思つて見れば多少目鼻立にさう云つた面影もありさうだ、脊が高いとか、無口とか、無表情とか、それ位なタイプだけは、或は似てゐると云つても差支がなからう。併し感じはまるツきり異ふ。感じが異つちやア、似てゐないも同然だ。初會の時にはJの外にYも一緒だつたが、YまでがJの間違つた鑑識に雷同してゐた。人間の鑑識ほどアテにならぬものはない。

『が、妹になンぞ似てゐなくたつて管はないのだ。ソシアリストでなくてもいゝのだ。ライスのやうな見識も望まないのだ。又惚れても貰ひたくはないのだ。女であればそれでいゝのだ。人間であればそれでいゝのだ。人間！　チェラウェーク！……して見ると、俺もやツぱり人道主義者なのか知らん？……オ、もう大門だ……」

右へ曲ると、タクシイは停まつた。

フラフラとよろけ込むと、それ〳〵に一箇宛、生きた人間を磔けた引伸の額面がズラリ、こまごまと罪狀を數へ立てた、恰もお上の高札を見るが如く、一網打盡に壁上へ括着けられてゐた。と、その寫眞の女達の顏が、わづかに悲しげに見分けられる程度に於いて、薄ボンヤリした光線の搖曳する、入口の三和土の奧深く蹲まりつゝ、宛ら人生に飽きはてた押丁のやうな牛太郎は、ポツネンと行火かなんか抱へてゐた。

――どうだい？　大將、忙しいかね？　と、私はいきなりその前へ立ちはだかつて云つた。眼のギンヨリした、圓遊のやうに鼻の大きい、ちゝ

むさく鬚の針のフキ出た、もう四十はとうに越した筈の、色のわるい、ひどく憔悴した男だ。

――サ　バリ閑でいけませんや……と、さも大儀らしい顔をあげて、物臭さうに口の内で呟いたが、忽ちそのドンヨリした眼の底へ、狡猾な、淫靡な、そして下司張つた、異様に後ろ暗い光を滲ませると、――よ、遊んでらツしやい、よう、一時間でもいゝから……ね？　ね？　いゝでせう？……と、内證話のやうに私語いて、牛太郎は小馬鹿にしたやうな頤をしやくッた。

――遊びに來たものなら遊んでゆくだらうよ……えエ？　さうぢやないか？　それとも貴公はどう思ふ？

――へへへ！　御尤も……お馴染さんはどなたで？

――お馴染なンてもなア問題ぢやない。まあ、どう思ふよ、貴公は？　我輩は果して遊びに來たものかどうか？

――大分いゝ御機嫌様で……果してと來たね……果してお遊びにいらつしッたものと睨んだね。へへへへ！　だから上つて下さいよ……

――貴公は牛太郎だらう？

――まづね。

――牛太郎は人間だらう？

――さア、人間の部ぢやなささうだね。ヘッ！

――なに？　人間の部ぢやない？　そんな事があるものか！　馬鹿ツ！　牛太郎は人間サ。立派に人間サ。ロイド・ジョージやヴァンダアリップよりや、チイとばかり出來のいゝ人間サ……惜しむらくはたゞ權力と金とがないだけだ。さうだらうが？

――その通り、その通り……だから、景氣よく上りたまへ……

――我輩は女郎買に來たんぢやない、人間に逢ひに來たんだ。遊びに來たんぢやない、一人前の人間になりに來たんだ。牛太郎は人間だから、人間の云ふ事は分る筈だ。

――分つた、分つた、分つたから……

牛太郎が持てあましてゐると、見知り越しのをばさんが、折から店廊下を通りがけに、チラリと私の姿を見つけて飛んで來た。

――何を店先で牛太郎なンぞをいぢめてゐるんだよ、このしとは？　さア、さア、もういゝから、上つたり、上つたり……と、私の手から包を引ツたくつて、バタバタと先へ立ち、階段を昇ると、大きな聲で、――小式部さんエ！　と、をばさんは呶鳴つた。

ドタン、バタリと、やにツこい板敷を踏みぬくばかりに、凄じく廊下を轟かして、導かるゝまゝに私は引付けへ這入つた。

安下宿にでもありさうな、汚らしい部屋だ。敷島の吸口や突刺した割箸が、粉炭に混つた灰の中で、貧乏くさく燻つてゐた。シミだらけな鍮壺、曇つた電球、薄ッぺらな座蒲團、掃除の屆かぬブクブク疊……が、私にはそんな事はどうでもよかつた。

――もう大分這入つてるやうだから、お酒は大壜一本で澤山だらう？……何かくらふかね？

――ウム、天麩羅蕎麥が一杯食ひたいナ。

――みンなにやア、何を奢つてくれる？

――花魁と相談しろ。

――花魁もあたいもお辨當だ。面倒くさいから、みンなおんなじにしとから。いゝかね、五本ばかりとつとくよ。

――いゝとも。

――ぢや、さう云つてくる……花魁すぐよこすよ。

をばさんはテキパキと出て行つた。

天金の女中、小格子のをばさん、その事務の簡捷ぶりに於いて、その頭のよさに於いて、夙に私の敬服して措かぬものの一つだ。更に附加へれば、芝居の出方だが、人間の頭もあの位機

敏に實際的に働けば、この世に於いてもう全く思ひ殘すところはなささうだ。「日に〳〵新たにして、又日に新たなり。」とはあの事だ。「一日の事は一日にして足れり。」とはあの事だ。

ニチャニチャした餉臺へ靠れかゝつて、私は吸ひたくもない紙卷の煙をば、强ひてプカプカ吐き出しながら、まじ〳〵と酒と女の來るのを待つてゐた。

夕方から吹き出した風は、かなり勢ひを增したやうな氣はひがする。シュウマイ屋の笛が遠くなつたり近くなつたりして響く。お茶屋の二階か、大文字の奧の廣間か、鼓や太鼓の這入つた騷ぎが時々吃驚させるやうに脅かす。また、

「いけエのドンガメなりやこそ……ズボンボヤ……」など、唄ふ文句が、どこかからきこえて來る。氣がつくと、××××××××××××××。

私は氣が滅入つて來た。

「何の爲だ？……」と、私は思つた。

「何の爲に生きてゐるのだ？　生きたくて生きてゐるのか？　生きずにはゐられなくて生きてゐるのか？　他人は知らない。こんなにまでして生きてゐたいのか、少くとも俺は？　一思ひに自殺の出來ないのは、人一倍臆病な俺の性癖なのか？　それとも別に理由のある事か？　熱鐵丸……生を得ず、死を得ず……

「さうだ。みんな苦しむのだ。生まれたほどの者なら、人間には限らず、凡ゆる生物には限らず、この地球自身からして、太陽も、恆星も、銀河も、宇宙そのものも、みんな、みんな苦しむのだ。さうして苦しむだけのものなのだ。苦集滅道……生滅の四諦……無生の、無量の、無作の、四々十六諦……天台無間、禪天魔……唯有一乘法、無二亦無三……言語道斷、心行處滅……法華涅槃……佛……

「いや、俺は佛を信じてゐない。俺は佛教徒ではない。俺は全く何も信じない。全く何でもない。たゞの人間にすぎぬ。人間そのまゝだ。なまなましい野生そのまゝの人間だ。食慾と性慾との外は、一切何も考へぬ野蠻人なんだ。さうだ、野蠻人だ。たゞアフリカに生まれそこなつただけなのだ。誤つて文明國へ生まれただけなのだ。さうだ。ターザンだ。たゞターザンと俺とでは、その養母がちがふだけだ。ターザンの養母はゴリラだか豹だか、とにかく猛獸だが、俺の養母は江戸つ子だつただけのちがひだ。それだけだ。」と、突然、母の墓まゐりに行かなかつた事が悲しくなつた……

「母はけふ死んだんだ！」と、思ふと、ポロポロ涙がこぼれて來た。

「さう、さう、あの前の晩、Ｙが歴としたなりをして、それとなく俺を帝劇へ誘ひ出しに來たつけ……」

サラリと入口の障子が開いた。酒と臺の物とが來たのだ。

——オヤ、お一人でげすかい？　と、「ほんとにすまない。」といふ顏を拵へて、若い衆は擔いで來たものを餉臺の上へ置いた。

——ウム、一人で淋しいから一杯つき合ひたまへ。と、私は五人廻しの一人のやうな要領で、杯洗から盃を撮み出して、若い衆の鼻先へさしつけたものだ。

——へへへへ！　こりや恐れ入りましたね……えエ？　さうでげすかい？　それぢや、まア御遠慮なく……

と、尻の大きな兄さんは窮屈さうに坐り込んだ。

——君は酒が好きかね？

——酒と來ちやア、へへへへ！

——女は？

——勿論でげすなア。

——母親は達者かね？

——ヘッ？　母親？　わッちのでげすかい？　と、兄さんは眼を白黒した。

——さうサ。

——へえ、まア、お蔭様で……

——泣かしてばかしゐやしないか？

——御冗談でげせう……旦那はどうも人が悪くていけねえ……

——いや、君の相はたしかに親孝行だよ。母親を泣かしたのは俺の事サ……俺は泣かしたもんサ……

——でも、旦那なんざ少しばかりお道樂をなさつて見たところで、金がウンとおありなさるんだから、お袋さんだつて、さうシンペイなさるがもなアねえ……こちとらと來た日にやア、ヘッ！

——何だい、何だい、いゝ氣になつて．久米公は？　と、ガラリ現はれると、——何をくだまいてるんだよう、こんなところで！　旦那も旦那だ……と、をばさんはキメつけた。

——へへへへへ！　と、久米さんは忽ち敗亡して、立上つたが、——花魁はエ？　と、恰も私へ對する義理立のやうに、詰るが如く一寸をばさんへ刃向ふまねすると、

——餘計なお世話だよッ！　早くおいでッたら……と、一刀の下に腰斬された。で、

——へえ、へえ、と、泥龜の如く首をちゞめ、——どうも旦那、大きに御馳走様でげした。と、久米さんは、ダアと出て行つた。

小式部がすうとやつて來た。Jの敵娼であるところの、元氣な、酒の強い花魁まで這入つて來た。

——なぜ内の人を連れて來ないんだよ！　實がないね、この人は！　と、Jの敵娼はいきなり私の後から抱きついて、脇の下から片手を差入れると、いやと云ふほど内腿のあたりをつねッた。

——痛い！　オイ、亂暴するなよ。小式部が泣くぜ。

——誰がお前さんのやうな不實な人の爲に泣くもんか……ねえ、小式部さん。

小式部はニコニコして、穩しく横の方へ坐つてゐた。

——どッちがお神さんだか、かうなると分らなくなるね……まア、いゝから、もう勘辨してやつて、仲直りに一杯お上り……と、をばさんは馴れきつた事務に取掛つた。

——さア、かうなりや、もうヤケクソだから、思ひ入れ飮んでやる……その杯洗お貸し……いいから、お貸しッてば……どうせ小式部さんは飮まないんだから、ムダなこつた。と、猩々のやうな顏したJの敵娼は、猩々のやうに飮みはじめた。

——小式部さんエ！　と、廊下で男衆の呼ぶ聲がした。

小式部はをばさんと顏を見合はした。さうしてお互ひに何やら目と目で信號すると、今度は私の方へ一寸媚びるやうな視線を拋げかけて置いて、そのまゝ、又すうと出て行つて了つた。

——今ね、むかうの煩いお客を、すぐ寢かしつけて來るから……と、をばさんは子供でもだますやうな眼つきをし．ソッと私語いた。

——君は今夜はお茶を引いたわけかい？　ニ、小式部の中座なんぞは問題ぢやないといふ態度をして、私はJの敵娼の方へ鷹揚に顏を向けた。

——馬鹿におしでないよッ！　から見えたッてね、憚り様だけれど、あたいはお茶と風邪とは引いた事がないといふ姉さんなんだ……お前さんに岡惚れしてるからなんぢやないか……忙しい中を、かうやつて、わざ〳〵逢ひに來てやつてるのは……分らないのかよう？　ジレつたい！　と Jの敵娼は又候私に武者振りつい

て、××××××××××××××、酒臭い息で、××××××××××××××。

——いゝ加減、お巫山戯よ、小牧さん。と、をばさんは窘めた。

が、私はむしろ惡くない心持がした。さうして××××××××××××。

お誂への辨當が來た。天麩羅蕎麥も來た。ヒイキ分にそれまで五つ來た。

三疊ばかりの名代部屋へ、どうやらかうやら、間もなく寢かしつけられて了つたが、肝心の小式部は容易に姿を見せなかつた。

五燭の電燈が一つ、不景氣に天井からブラ垂つてゐた。見るともなく、そのウスぼけた小球をばマジイリ、マジリと見詰めながら、私は仰向けにフンぞり返つたまゝ、

「フン、からした小店の女郎にまでフラれりやア、もう世話はない。」と思つた。

硝子戸のはまつた小窓の外は、例のバアなども巣くつてゐる、曲折したラビリンツの一郭だと見えて、醉拂つた足音が、だらしのないぞめき聲とたがひちがひに、ガタガタと溝板を踏みちらして、轟かして、絶間なく通りすぎてゐた。

——お寄りよ。お寄りッたら……などといふ、骨がらみにでもなつたやうな、毒々しい女の聲もきこえた。

大變な墓まゐりになつて了つたものだ。と、私はまた思つて苦笑した。

「が、考へて見ると、雜司ケ谷だつて、吉原だつて、大した異りのあるところでもなささうだ。どつちだつて墓場なんだ。白く塗れる墓の隙間もなく行列してゐる點は、どつちだつて同じ事だ。死に對してまで虛僞を離れる事の出來ない人間が、生に對して虛僞を販ぐのは當然の話だ。雜司ケ谷も人間の虛僞の結晶だ。吉原も人間の虛僞の公設市場だ。

『つまり、人間の生活は、はじめから虛僞で、虛僞だけで成立つてゐるのだからなのだ。それゆゑに、まッ正直に、人間の生活から一切の虛僞を取除いて了つたら、人生は全く空虛になる。眞空になる。眞空の中ぢやア、生物は生きられッこはない。從つて、かうやつて生きてゐると思ふのは、とりもなほさず、虛僞の中に漬つてゐるといふ事にすぎないのだ。

『虛僞だ。虛僞だ。一切が虛僞だ。生きるといふのも虛僞だ。死ぬといふのも虛僞だ。生死を超越するといふのも虛僞だ。大道無門？勿論、虛僞だ。透得斯關？もとより虛僞だ。その虛僞と絕叫する虛僞が虛僞だ……

「なアんのこつた。フン、從假入空觀のおさらひか……「眞諦を得て、肉眼を具し、羅漢果に入る。」が、きいて呆れらア……ばか／＼しい。」それよりも、××××××××漲溢しはじめて來た。どうして……くれるんだ？……」

私は固有のデコ山さんを想ひ出した。さうして一人をかしくなつて、思はずクスクスと笑ひ出した。

——何を笑つてゐるの？と、小式部が這入つて來た。

（以下四十行抹殺）

……黑髮の末端をば、巨大なる鷲の嘴でくはへた、炯々たる兩眼をクルリクルリと回轉させてゐる怪鳥が、なま／＼しい血糊の絲を牽く、うら若い女の生首を提灯のやうにブラ下げながら、氷柱をその樹幹とした、白刃をその樹葉とした、身の毛もよだつ幽林中に飛翔してゐた。百羽や二百羽ではきかなかつたであらう。さうしてそれ等の暗色の雙翅翼が、一際にフハフハとひるがへるたび毎に、白刃の葉枝

は燦々と相觸れ相交り、閃々と隨處に火花を散らして、同時にバサリバサリと薙ぎ落される人間の首や手足や胴體をば、流るゝ血潮と共に慘憺と照らした。

それが夢だなとわかつてゐても、私にはどうしても眼を開く事が出來なかつた。千鈞の錘をつけて、ぐい〳〵と泥底へ曳きずり卸されるやうに、痺れきつた頭はどう藻搔いても擡げる力が出なかつた。さうして私の關節は悉く釘づけになつてゐた。

盛んに雨の降る音がきこえた。

……女の口は耳まで裂けた。兩眼が飛び出して雙頰の上で止まつた。殘された眼窩は眞紅になつて笑つた。鼻孔から大きな蛆が這ひ出した。髮の毛は燃え上つた。腐つた乳首からベロリと舌を吐いた。××が皆蛇になつた。××は青脹れにくづれ爛れて、　××××××××××××××××××××　×××××××××その間から出かゝつてゐた。さうして腫物でウヂャヂャけた、その赤子の脣の中には、××××××××××××××、×××××××××××××××××××××。　×××××××××××××××、×見る〳〵××へからみついた……

私は嘔きたくなつた。ハラハラと雨の足が消子窓へしぶきかゝつた。

――けふは降りだナ……と思ふと、私の意識は少しハツキリして來た。無性に水が飮みたくなつた。

やツとの思ひで眼を見開くと、舟底枕の上には、もう小式部の首はなかつた。雨降りで微暗いけれど、夜はスツカリ明け放れてゐたものだ。

息もつがずに水を飮むと、私はわづかに人心地がついた。が、箍のかゝつたやうに頭は重かつた。節々が痛かつた。

あまりと云へば自分自身が馬鹿らしくなつた。自分自身のする事なす事が淺猿しくてたまらなくなつた。が、それが自分なんだ。本當の自分自身なのだ。いくら馬鹿らしくても、いくら淺猿しくても、その外には別に自分自身といふものの存在しやうがないのだから仕方がない。

「なぜ俺はあんなに酒を飮むのだらう？　なぜ酒を飮むと、俺はあゝいふ氣になるのだらう？」と、疲れきつて、グッタリと蒲團の中へ五體を投り出したまゝ、私はキヨトンと眼を開いたまま、發狂のやうに身動きもせず、考へるともなく考へた。

――放縱だ……これが放縱な生活といふものだ。デカダンとかデヂェネレとか呼ばれてゐる人間の狀態はこれなのだ。精神的の自殺者か。全くそれに相違ない。俺にはもう精神などといふものは影も形もなく全く滅びて了つてゐるのだ……たゞこの肉體を組織しつゝある無數の細胞が生きてゐるから、それだけの事で生きてゐるといふまでだ。つまり、細胞が生きてゐるだけなのだ。別に俺自身といふやうなものが生きてゐるわけぢやないのだ。マテリアリストの考へそツくりだが、事實その通りなんだから、それでかまはない。

細胞が酒を飮めと命令するんだ。細胞が女のゐるところへ行けと命令するんだ。細胞が放縱のかぎりを盡せと命令するんだ。人間のからだは凡ゆる細胞のデモクラシイなんだ。俺はたゞその命令に服從したまでだ。それに反抗する自由意志なんてものが、俺には全然缺乏してゐるからなのだ。

「なるやうになつて行け……さうだ、俺はいつでもさう思つて茲まで來たのだ。つまり、細胞

の要求どほりになつて行け、といふ事だつたのだ。さうして俺はいつの間にか運命論者になつて了つてゐたのだ。

『が、果して俺は運命論者か知らん？　周圍から決定された運命に對して、俺は果して何等の叛逆も企てなかつたか知らん？　叛逆！……なアに、叛逆ばかりだ。叛逆といふ事から離れては、今迄の俺の生活は全く考へられない。第一番に××××××いた。それから親に背いた。妻子に背いた。家族主義そのものに背いた。それから教師と先輩に背いた。友人に背いた。常識に背いた。社會そのものに背いた。それから凡ゆる宗教に背いた。凡ゆる學問に背いた。凡ゆる藝術に背いた。文明そのものに背いた。結局、自分自身に背いたのだ。

『が、何が背かしたのだ？　何が何に叛逆させたのだ？　細胞の要求が背かしたのか？　アニマリテの無上命令が一切のコンヴェンショナリテに叛逆させたのか？　さうだとすると、運命に反抗する爲に、ヤッぱり運命に陷つた事になる。さうしてその結果が、とりとめのない、だらしのない、この放縱なのだ。

（以下十三行抹殺）

私は頭がすうツとした。心持のいゝ音を立てて、雨はザアザア降つてゐた。

――サア、サア、起きた、起きた……どうせ、けふ一日ブン流すンだらう？　そのつもりでお部屋を綺麗に掃除して置いてある……サア、サッサと起きて、あつちへ行つたり、行つたり……と、這入つて來たをばさんは、いきなり私の夜具を剝いだ。

――向うのお客はもう歸つたのかい？

――何時だと思つてるんだよ。このしとは？　もう十二時すぎてるんぢやないか……默つてほつときやア、いつまで寢てるか分りやしない……呆れたもんだよ、フンとに……

私は寢間着のまんまで否應なく追ひ出された。

晝間は廊下が眞暗がりなので、ところどころの足元へもつて行つて、四かくい小さな明り孔などが苦しまぎれに切取られてあるのがをかしかつた。小式部の部屋はその廊下の一番奥にあつた。

勿論、爰とても、同樣に素人下宿以上には出さうもない、粗末な六疊一間だか、壁に所帶じみた簞笥が嵌込んであつたり、茶棚や長火鉢がそれぞれ適當に排置されてあつたりして、たとひそれ等が極めて形式的で且つ極めて安直なものであつたにせよ、人間味にあこがれきつた學生や、或は荒みきつた放浪者の心には――私もその一人だ――何となく沙漠の中からオアシスでも發見したやうな心持になる。

顏を洗つて再び部屋へ歸ると、私は小式部と相對して、長火鉢の前へトグロを卷いた。私の心はノビノビした。久し振りで一人前の人間になつたやうな氣がした。さうして、出來るなら、いつまでも、このまゝ爰にからしてゐたくなつた。

――お蔭でサッパリした。之でもうこの世に思ひ殘す事は何もない。と、私は獨語のやうに呟いた。

小式部はニッコリしたが、別に何とも答へようとはしなかつた。

やがて、持ち込んだ寄せ鍋をば、仲よく長火鉢の上へかけたりして、私は迎へ酒をチビリチビリ飲みはじめながら、

――君は社會主義だつて話だが、それは本當かい？　と、改めて口を切つた。

――貧乏人なら誰だつて社會主義サ。と、小式部はケロリとして答へた。

私は一本まゐつた。

——さうか。なるほどその通りだ。併し、貧乏人でも社會主義でない奴はいくらでもあるぢやないか？

——みんな馬鹿だからサ。

私はまた參つた。さうしてこの女がひどく嬉しくなつた。ばかりか、どこかエライところのある女のやうな氣までした。そこで、

——どうだい？　俺の女房になる氣はないかい？　と、冗談に云つて見ると、

——受出してくれさへしたら、誰の女房にだつてなる。と、小式部は眞面目な顏して、キッパリ答へた。

私はこの女を思ひきつて女房にしてやらうかと思つた。見たところ、身體もまだ少しも荒れてゐないし、體格もよし、年は若し、頭もよささうだし、一擧一動に無駄も油斷もなし、度胸もありさうだし……と、そんな事を考へながら、

——一體、いくらあつたら受け出せるのだい？　と、今度は眞顏で訊いた。

——九百圓あつたらいゝ。

——九百圓？　フム、千圓ならお釣りが來るのか、……

——まア、そんなものだね。と、小式部は心もちニッコリした。

『月末には三萬圓出來るのだ。千圓ばかり何でもない。』と、私は思つた。『さうだ。この女を受出して、この女を連れて、さうして外國へ行つてやれ。』と私は思つた。と、さう思ふと、私は何だか急に前途が明るくなつたやうな心持がし出した。

私は小式部の側に二日ゐた。

一千九百二十六年十月五日　(三)

蜀山人にこんな文句があつた。はじめてその句に接した時、わたしは躍りあがるほど嬉しくてたまらなかつた。

——拈華微笑の猪牙にのりて、涅槃の床に帶をとかせ、面壁九年のゐつゞけは、なんぢが尻のくさり緣か、金がふんだんだるまなるか、喝ツ。

からした爛熟したデカダンスの上で、一生飄忽としやれのめしてゐられた時代もあつたのだ。さうしてそんな時代はとうの〳〵昔この地球上から名殘りなく消え失せて了つてゐる。

——潯陽地僻にして音樂なし。

それにも拘らず、同氏には「琵琶行」の名吟があつた。

わたしはクロ・ド・キャアーニュに流離しつゝ、三十年來の解けやらぬ懊惱に、七顚八倒しつゞけてゐるだけだ。

十一月十六日

ボオドレエルの「散文詩」と、スウヴェストルの『屋根裏の哲學者』とを讀む。この一世紀以來、どちらも世界で有名な本だ。さうして十數年以前、どちらも嘗てわたしの一度よんだ本だ。

人間世の平凡さがいかにたへられぬものであるかを前者はしみ〴〵と愬へてゐる。人間世の平凡さをいかに最後まで耐ふべきかを後者は懇切に教へてゐる。さうしてどちらのいふことも眞實だ。人間世のあらんかぎり眞實だ。生きようとする人間の心には、かならずいつもこの兩面が啀み合つてやまない。

(「最も價値低き生活の上に」より)

『Cocu』のなげき

サン・ジャン・キャプ・フェラにて

あかるい、ほがらかな青空が見える。たゞ一つある窓から見える。したゝるばかりスッキリと清澄な深藍色の下の、松、橄欖、オランジ、シトロン、ミモザの黄、スリージエの白、さうしたものの一團になつてフウハリと盛りあがつた丘陵の中の、いかにもあざやかな淡紅色の小別莊を、そのクッキリと目にたつ濃綠色の鎧戸を、ときどきまぶしい瞳にうつしながら、あまりに思ひでのふかすぎる、あまりにくるしい、にがい、またやるせのない、おそらくいくら書いても永遠に書きつくされぬであらうところの、この悲しい物語をわたしはいま語りがちに書きはじめようとしてゐる。

をとつひの晩から、わたしは南フランスの、アルプ・マリーチーム縣、サン・ジャン・オー・ポールといふところにゐる。そこの小さな美しい舟つきばに面した、二十世紀式の、もつとも單純な、安價な、もつともエコノミックに建築された、しきりにまだペンキのにほひの到るところに發散しつゝある、それほどにまあたらしい、同時にはなはだ無趣味きはまつたパンション・ド・ファミイユの一室にゐる。

わたしはどうしてこゝへ來たか？　どうしてこゝへ？　こゝへ來るまへにはどこにゐたか？　どこからこゝへ……思ひだすとつらい。考へると死にたくなる。このまゝ消えてなくなりたくなる。

みんな、みんなわたしのした事だ。わたし自身のぐうたらかした事だ。これほどまでにわたし自身がぐうたらであらうとは、わたし自身ですらいままでまつたく知らなかつた。

諸法因緣生だとか、自然の法則のまゝに、なるやうになるのだとか、無抵抗主義の、一木一草無不中道、と、エラさうに悟りがほした自分自身の愚かさがはづかしい。

巴里生活の滿一ケ年、あゝ、あの一ケ年、ダンテの煉獄にも、また地獄にも、たとへて決してたとへられないことのない、そのわたし自身のこゝろの苦しみやうといつたらなかつた。

こゝへ來るまへには、わたしはいふまでもなく巴里にゐた。

女なしでは、妻子の顏を見ることなしには、わたしは一日もおちついてこの世に生きてはゐられぬやうに生活づけられてしまつた人間だ。わたしはよわい。わたしには自分自身の生活といふものがない。わたしの生活の中心は妻だ。妻と子だ。さうしてその愛する妻と子との一顰一笑によつてのみわたし自身のはかないその日その日が成りたつてゐる。

さうしたとらはれた生活中につかりながら、わたしはたえず文藝をおもふ。たつた一人きりのつよい自由な、天地に俯仰してまつたくおそるゝところのない自我そのもののなかにとぢこもりながら、「ミゼラーブル」を書きつゝあつた時のユーゴーのやうな、「戰爭と平和」に沒頭しつゝあつた際のトルストイのやうな、全提全令創作的努力をおもふ。

妻子の一顰一笑はザインとしてのわたしの生活だ。全提全令の文藝はゾルレンとしてのわたしのそれだ。要するにわたしの生活はザイン

とゾルレンとのたゝかひだ。倒れてのち、息の音のとまつてのち、はじめてやむ人生の白兵戰だ。

わたしの妻と子とは今わたしと一緒にゐない。

このサン・ジャン・オー・ポールのつゝましやかな家並をぬけて、裏山の方へ二三町はひり、遠く近くボーリューからモナコのあたりまで、白い岩山と、碧い海と、世にも美しい別莊やホテルの數かぎりなく點綴した、コット・ダ・ジュールの町々をば、あたかもこの世ながらの極樂淨土のやうに、脚下に縹眇と眺めながら、葉のうらの白く光る橄欖の林の中の、素樸に急峻な石坂道をよぢのぼつて、ところどころにエレガントな小別莊のさしのぞく心もちのいゝ松林の崖道をば、夢のやうにうかうかと六七町もゆきつくすと、そこに燈臺の立つカップ・フェラの岬端へ出る。

わたしの妻と子とは、二週間以前から、去年の夏フランスへ留學に來た、まだ十分に年の若い農政學の秀才と共に、その岬端に輪奐の美を極めたグランド・ホテルにゐる。

滿一ケ年のわたしたちの巴里生活の結果がこれだ。妻子に對するわたしの愛の足らなかつた結果がこれだ。あゝ、人類愛！　わたしの愛は淺かつた。あまりに淺すぎた。

わたしとA君とだけに送られて、わたしの妻子を擁護しつゝ、ある夜人知れずガール・ド・リヨンを出發して數日、農政學の秀才は、カップ・フェラのグランド・ホテルから、その間わたしの毎日食事を共にしに通ひつゝあつた、巴里なるリュ・ド・リイルのF氏方へあてて、「トゥブンコココニヰマス」といふ電報をうつてよこした。わたしは生きかへつたやうなおもひをした。とびたつばかりに胸をとゞろかした。さうしてすぐにも妻子のあとを追つて、カップ・フェラへゆきたくなつた。

ガール・ド・リヨンを出發する際、もちろんわたしは一緒にゆきたかつたのだが、わたしの妻はそれを喜ばなかつた。さうして、

——いゝ家でも見つかつておちついたら、わたしたちのゐるところへよんであげるから、それまではバチニョルに一人ゐて、おとなしく原稿でも書きはじめておいでなさい。さうして御飯はFさんとこへ行つて、みんなと一緒にたべさしてもらふといゝわ。と、そッけない調子で云つた。わたしは悲しかつた。

バチニョルは秀才がサン・ジェルマン・アン・レェから巴里へ出て來て間借りしたばかりの家だ。わたしは妻の云ひのこした言葉どほりにしてゐた。

電報をうけとつた翌朝、わたしはバチニョルの寢床の中であわたゞしいA君にその寢込みをたゝき起された。A君はインタアナショナル・トランスポートのガイドだが、さうして秀才の巴里到着以來何かにつけて一切の世話をしてゐる青年だが、同時に秀才から巴里に於けるただ一人の親友として考へられてゐる人だ。

——きのふ行つて見たんですか。と、A君は椅子へ腰かけると、當惑したやうな表情をした。

——どうしました？

——はじめはどうやらわたしてくれさうな樣子で、いま荷物をまとめるからとかなんとか云つてゐたんです。で、Kさんはなんべんも階段をあがつたり降りたりしてゐました。さうしてその間いつたい何をしてゐたものか、ばからしく長い間人を待たして置いた擧句、結局から云ふんです。執達吏から手紙が來てゐて、二十四時間内に家賃を拂はないと、あなたや奥さんの持物と衣類とが差押へられることになつてゐるから、もしその時何も殘つてゐないと詐欺に

なるんださうです。
——で、わたしてくれなかつたの？
——えゝ。と、A君は力なげに答へて、わたしの妻にあてた執達吏の手紙をわたしの手にわたした。
わたしは不快でたまらなくなつた。Kの手元から一刻もはやく一切の妻の記念物を奪ひ去つてしまひたいのがわたしの切なる希望だつたのだ。
寢室の瓦斯ストーヴに火をつけて、マリイランを一本くはへながら、わたしはしばらく無言のまゝとつおいつ思案にくれて見た。が、どうしても都合のいゝ考がうかんで來なかつたので、
——ぢや、しかたがない。あすこの荷物は放棄することにしませう。どうせもう碌なものは殘つてゐないのだから……が、もしそのうちいい機會があつたら、とつて來て、君の手元へ保管しておいてください。
——えゝ。
子供のやうにこらへ性のないわたしのこゝろは、そんなことを云つてるうちに、もう一刻もはやくこのいまはしい巴里をぬけ出して、すぐカップ・フェラへとんで行つて、妻子の顏が見たくてたまらなくなつてゐた。が、出發の際、秀才がわたしの手に殘してくれた二百フランの金がもう百フランにも足りなくなつてゐることを思ひ出して、さうしてそれでは到底三等の汽車賃にもならぬことを考へて、わたしのこゝろは急にくらくなつた。巴里からカップ・フェラにゆくには、PLMのラピッドにものの十八九時間のりつゞけなければならぬのだ。
—考へて見ると、僕はもうこゝにかうしてゐる必要がなくなつてしまつたやうな氣もするが……と云つて、みんなのところへ出かけて行くだけの旅費もなし……と、わたしはひとりごとのやうにつぶやくと、A君はわたしの心もちには大して同情のないやうな調子で、
——えゝ。と答へた。
わたしはふと妻の殘して行つた日佛銀行の小切手帳を思ひだした。四ケ月まへ、妻が倫敦なる日本料理店の主人Kと共に、巴里なるリュ・ケプレルといふエトワルにちかい小さな裏通りで、かれ等二人の共同事業といふ名目の下に、その料理店の支店の經營をはじめた時、百磅ばかりのわれ〳〵夫婦の殘金を土臺として、その店の日常の金錢をだしいれする唯一の經濟機關にしてあつた小切手帳だ。
ねまきのまゝわたしは立つて行つて、ゆうべぬぎすてたディヷンの上のヴェトンの内がくしから、その帳面をつかみだして來ると、それを不案内さうな顏してるA君に示した。
——こゝにこんなものがあるんです。立つとき三四枚このとほり妻にサインしてもらつてあるんだが、……實は二三日まへKの手へも一枚だけわたして置いたから、よツとすると、もうKが全部引きだしてしまつてゐるかもわからないけれど……或はまた、ひよツとすると日佛のH氏が、家主へ對する、自分が家賃支拂の保證に立つてゐる關係上、この金をおさへて一文も引きださしてくれないかも知れないけれど……とにかくまだ六千フランぢかく殘つてゐる筈なんです……
——なるほど。
——で、僕はこのとほりこの際世間から姿をかくしてゐる身だから、僕自身銀行へ出かけてはゆかれないのだから……どうでせう、君ひとつ、御面倒だけれど……なに、もし銀行でおさへてゐなかつた場合なら、單に受取人の名まへを書き込みさへしたら、八百屋でも肉屋でも、もちろんすぐ引きだして來られる金なんだから……そこを何とかして今明日中に……

——旅費だけあればいゝんでせう？　と、A君はいろ〳〵に云ひよどんでゐるわたしのことばをばもどかしさうにスパリと切つてくれた。ホッとした思ひでわたしは、

——まア、さうです。と口ごもつた。

——三百フランもあつたらいゝでせう。二等でね……その位のことなら、わたしがけふ中にこしらへて來てあげます。

——君にそんな心配をかけてはすまないけれど……

——なにかまひません。では、今晩六時ごろまでに。

要領よくA君は立去つた。

要領よくわたしもその晩ガール・ド・リオンを出發した。

樂師たちが力を籠めて熱心にしきりと嚠喨たる管絃の音を立ててゐるかなたには、十分に日光をうけた、すばらしく天井の高い、見事な石造の大廣間で、幾組かのダンスの群が大理石の大柱のあひだ〳〵に、みやびやかに見えたりかくれたりしてゐた。

秀才の名をコンシェルジに告げると、胸へズラリと小さな金ボタンを縱列させた一人の美少年が、意をうけて小走りにその人を迎へに行つた。

わたしはすわりごこちのいゝやはらかいフォトイユの上に腰かけて待つた。

花やかな日本服を着た妻と子とに伴つて、わたしは一年まへ同じこのホテルの同じこの廣間へわざ〳〵ニースから茶をのみに來たことがあつた。

なんといふ心もちのちがひであらう？

去年は幸福であつた。妻の心にもわたしの心にも決してまだなんのわだかまりがなかつた。友禪の袂をひるがへして、わたしの子供は嬉々としてフランスの青年たちと踊つた。妻はよろこんだ、屈託のない目を細くして、滿足さうに、得意さうに、罪もなく無邪氣にニコニコとほゝゑみつゞけてゐた。それが今年は……

あゝ……今年は……

わたしはダンスの群を見てゐるにたへなくなつた。

と、目をそらすとたん、アッサンスールとおしならんだ階段のうへから、四歳ばかりの日本人の女の子がひとり、チョコチョコとかけおりて來るのがたちまち目にはひつた。あたゝかい嬉しさが泉のやうにわたしの心頭にわきあがつた。

いふまでもなくそれはわたしのイヴォンヌであつた。

イヴォンヌは洗ひざらしのうす青い天鵞絨のローブを身にまとつてゐた。また風でもひいたと見えて、鼻の下を眞赤にしてゐた。あまりにリュックスなあたりの光景にひきくらべて、彼女の姿はわたしにはなんとなくみすぼらしく感じられた。

——パパ公！　と叫んで、彼女はわたしにとびついて來た。

——ママ公のところへイヽ公が一緒につれてつてあげるから、さア、來なさい。と、大人らしい口をきいて、彼女はわたしの手をひッぱつた。

——ママ公は今なにしてる？

——ママ公、いまね、お部屋でお仕事してるよ。

——イヽ公のお部屋はどこだ？

——ツウタンオーだ。

あたりまへのやうに使ふフランス人とまつたく同音の彼女のフランス語をきくと、わたしは思はずニッコリした。

秀才もやがて降りて來た。

わたし達は一緒に昇降機にのつた。

たゞ三つしきやない最上層の客室の、中央

のそれが、彼等の四五日來同棲してゐる部屋であつた。大きなアルモアール、厚い石榴色のタピ、さうしてその左手には、あたゝかさうな寝臺が二つ、それから入口の通路を狹くして、子供の寝臺が一つ、なんとなく邪魔さうにおしならんでゐた。

いひやうのない淋しさが、わたしのこゝろにこみあげて來た。

おくの方のオリーヴ色のフォトイユにうづまつて、ものおもはしげに針仕事してゐたわたしの妻は、わたしの姿をチラリと見ると、いやな顏してすぐ目をそらした。さうしてまつたく同情のない目を伏せたまゝ、

――なんだつて勝手に出て來たの？　と、にがにがしい調子で、まづつめたくわたしをなじつた。

わたしはまづ失望した。

――一刻も巴里にゐるのが、いやになつたからさ……と、わたしは苦しげに答へた。

と、そのわたしの弱みにつけ込むやうに、

――一刻もゐられなくなつたからツて、ばかばかしい、子供ぢやなし、あんまり辛抱がなさすぎるぢやないの……と、妻はつけ〳〵と云つて、いま〳〵しさうにそッぽうを向いた。

妻とこの若い學生との間にはもう肉の交渉が成立してしまつてゐるのか知らん？と、わたしはこゝろの底で忖度して見た。が、學生の態度にも妻の擧動にもそれがもう成立してしまつたやうな陰翳はまだ感じられなかつたので、わたしはやゝ安堵の思ひをした。

――イヽ公はまた風をひいてるやうぢやないか？　しばらくたつてから、わたしは口を切つた。

――例の鼻ッかぜよ。だけど、こゝなら風はいくらひいたつて、ちつとも心配なんぞありやしないわ。

――さう、氣候はよし、空氣はよし、海の中にゐるやうなものだからね。

話頭がイヴォンヌに轉ずると、けはしい妻の表情はすこしばかりやはらいだ。

――一昨夜、あまり暖かすぎて、室内の温度が高すぎたので、イヽちやんは夜中に蒲團をふみぬかれたものです。それが原因だと考へます。と、秀才は甚だ責任を感じつゝあるもののやうに、ひどく恐縮して云つた。

そんな事にまで氣をつかはなければならぬ學生の偶然に陷つた奇妙な境涯にわたしはすくなからず同情した。

寸刻もその潑剌たる活躍をやめることのできないイヴォンヌは、いつのまにかそこへひきずつて行つた椅子のうへにあがつて、とツついた一隅の洗面器のロビネから、ふんだんにジャアジャアと湯や水をひねりだして、それを香水の空瓶へ入れたりこぼしたりしてゐた。

――イヽちやんはまた水いたづらをして……お風邪をひいてるんぢやありませんか……と、これもその子供と同樣に一分とは仕事の手をやすめてはゐられないヘルプレスに能動的な母親がたしなめた。

――すぐやめる。すぐ……いまね、クイジンをかたづけてゐるんだから……

――やめないか？　やめないとつめるよ。

かうした家庭の一角をばエスカルゴのやうにその雙肩に擔つたまゝ、わたしの妻はこの年若な農學士と或夜ひそかに巴里から驅落して、さうしてこゝまでおちのびて來てゐるのだ。さうしてその驅落を默許した、或はむしろ勸誘した、むしろ教唆した、はなはだ氣のしれぬ彼女の夫であるところのわたし自身が、かうしてますます妻にいやがられる、わく〳〵と女々しくも彼等のあとを追ひかけて來てゐるのだ。

なんといふ不可思議きはまつた人間同志の近

代的シチュアシオンであらう？

——來てしまつたものだから仕方がないけれど……今晩はお部屋を一つ賴んで來てあげるから、一ばんだけこゝへとまつてもいゝとして、あしたの朝、さつそくどこか近所のやすいパンションをさがして、そこへひツ越すやうにしてもらひたいよ。

さうした妻の言葉どほり、わたしはその翌日からこのパンションへ來てゐるのだ。

原因はすべてわたしに金のないことからだ。わたし自身にまつたく世才といふものの缺けてゐることからだ。世才のみならず、生活に對する努力の念の、病的に薄弱な、自分ながらあきれるほどのなまけものであることからだ。さうしてそれにもかゝはらずわたしの妻がいくつになつてもあまりにその容貌と姿かたちの美しさを減ぜぬことからだ。

駿馬癡漢をのせて走る——それだ。さうしてもうことしで滿五ケ年走つた。

——わたしがむかし名古屋にゐた時分に、近所にバカ勝といふ、いつもボンヤリふところ手をした、あなたもおなじやうにからだの大きい、のそツとした白癡がゐたけれど、あなたがさうやつてなんにもせずに、たゞポカンとつツたつてゐるところを見ると、そのたんびに、いつでもそれを思ひだすわ。と、ときどき妻は歯がいたらしく云つた。

わたしはバカ勝だ。

かうやつてほんたうの一文なしになつても、まつたくの着のみ着のまゝになつても、そんなことにはもう一切おかまひなく、わたしは毎日このパンションを出ては、或は日に二度も三度も、ちやうどサカリのついた時のみすぼらしいをす犬のやうに、前後不覺にあの石坂をのぼり、あの松林をぬけて、一心不亂にグランド・ホテル・デュ・カップ・フェラの最上層へ通つた。妻はいやがつた。治郎左衛門に對する八つ橋のやうにしてまでいやがつた。さうしていやがられればいやがられるほどわたしは櫻姫にあこがれる清心のやうにしてまでつきまとつた。

白い小石のはき淨められたグランド・ホテルのはれがましい前庭をつと横ぎつて、相對した小綠崖のシットリとした花壇を縫へる、百花のほゝかにみだれさいた間の小石階をのぼり、秀才とわたしとが、かはるがはるイヴォンヌの手をひきながら、をぐらくかぶさつた綠葉をくぐりでた時には、背中の肉のハチきれさうに盛りあがつたマダム・シェッフェーアと、支那美人のやうにほツそり黒琥珀の外套につゝまれたわたしの妻のうしろ姿が、したしげにかたり合ひつゝ、いつのまにかもうむかうのダラダラ坂の上までのぼりきつてゐた。

丘陵はことごとく松でおほはれてゐた。その間の別莊のかずかずが一歩ごとに蒼空と海面とを奪ふ人のこゝろをそゝつた。山上には赤い小さな信號所の建物が見えた。心ゆくばかり空氣がすんで、心ゆくばかり森閑としたものであつた。

こんなところで書物を讀み、こんなところでものを考へ、こんなところで文章を書き、さうしてこんなところで愛する妻と子とを養へたら、わたしにとつてはもうこの上の幸福はないと思つた。

貸別莊の代理人マダム・シェッフェーアがやがてわたし達に見せてくれたヴィラの名はパギャテルと云つた。

うつくしい花毛氈を敷きならべたやうな庭園、ところどころに配置よく立つパルミエ、オリヴィエ、ユーカリプトュス、あをあをした芝生、

さうした中からぬきいでた二階建の小別莊、わたしの妻子が秀才の出費によつて、もう今明日のうちに日本から全さへ來れば、すぐにもこゝへ住み得られるのかと思ふと、わたしは嬉しくてたまらなかつた。が、同時にその幸福なわたしの妻子と同棲する人が、かれ等の夫であり父であるところのわたし自身ではなくて、その出費者たる農政學の秀才であることが、白刃で心臟をさし貫かれるほど、わたしには苦しくも辛くもあつた。

『あらゆる幸福は出費者のものだ。』――さう思つて、わたしは人しれず心で泣いた。

二階のバルコンへでて眺めやると、松、橄欖の一帶のみどり、點々たる家並のあかい瓦、それ等にいろどられた紺碧の海、マリアの像の立つサントスピースの岬からボーリユーの絕壁、グランド・コルニッシユ、そゝり立つたトユルビイの山頂をなすまッ白な岩塊へかけて、晝にも夢にも未だかつて見たことのない一灣の風光が、脚下に婉麗にまとめられて見えた。

――こりやいゝ！

感嘆の絕叫が心の底から思はず三人の唇にほとばしつてふるへた。

マダム・シェッフェーアとはヴィラ・バギヤテルの裏木戶の前でわかれた。

十二分にひきつけられたこの貸別莊に於ける來るべきわたし達の新しい生活に對して、心におもひ／＼の空想を描きながら、三人はそゞろにあとになり又さきになり、とはいへ、無心に道草をくふイヴォンヌをば無意識に擁護しつゝ、例の石坂を下り、サン・ジャンの港町をぬけ、松林の斷崖をたどり、さうしてサントスピースのマリア像まで散策してかへつた。

わたしのこゝろはだん／＼ふかく憂鬱の雲にとざされて行つた。

ゆふぐれ、グランド。ホテルのかれ等の部屋までたちもどつた時、さうして妻が入浴に赴いたあと、さうして秀才がイヴォンヌと共にしばらく部屋を留守にしてゐる間、わたしはグッタりくづをれたフォトイユの腕にもたれて、ポロポロと淚をながしながら、たゞひとり身をもだえてすゝり泣いた。

と、秀才がはひつて來た物音に、わたしはハッとして顏をそむけた。さうしてテレかくしにシガレットに火をつけた。

――今から二十分ほどしたら、あなたに湯殿まで來て下さるやうに云つてゐられました。とそれだけ云ふと、秀才は又すぐ姿をかくした。

湯殿！…

わたしの全身の血は一時にサッとよみがへつた。

『湯殿！…妻の心の底には、まだわたしと二人きりで、おたがひに裸體のまゝ、天眞爛漫に相對してくれるだけの無邪氣さが失はれずにゐたのか…』と、さう思ふと、わたしは妻に面目ないやうな心持になつた。

で、机の上へ時計をだして、わたしはぢつと短針を見つめながら、正確に二十分のすぎさるのを待つた。

なんといふ捉はれきつたわたしの渴慾の癡愚さであらう！

二十分たつた。わたしはドキドキ胸をとゞろかしつゝ湯殿の戶をたゝいた。と、戶は内部から素直にあいて、立ちのぼる湯氣にふうはりとつゝまれた薔薇色に水々しい妻の全肉體が、たちまち燃ゆるわたしの瞳孔を射つた。わたしのからだはぶる／＼とふるへた。

――こゝで着物をぬいで、すぐあとへおはひりなさい。と、大きなタオルで背中を拭ひながら、無表情に妻は云つた。

（以下三行抹殺）

――××××××××××××××××

××××××わかつてゐるよ……わかつてゐるよ……わかつてゐるけれど、わたしは意氣地なし大きらひ、弱蟲は大きらひ……辛抱して傑作をお書きなさい。と、あたかもだだつ子でも教へさとすやうに、言葉やさしくなだめすかしながら、妻は手早く着物をきて、さつさと外へ出てしまつた。

わたしのこゝろは又もとのまゝの憂鬱にもどつた。さうしてまともに妻から指摘された自分自身の本質的なぐうたらに對して、その上に云ひやうのない恥辱さへおぼえた。

「妻のおれから求めてゐるものはたゞ傑作なのだ。文士としての社會的名聲なのだ。さうして愛慾の對象としてのおれ自身ではなかつたのだ。」と、石鹼と妻のからだの垢の浮いた浴盤中で、わたしはほとんど半年の間しかたなし抑制すべく餘儀なくされた性慾をもてあつかひながら考へた。

オルネエ・ヴレエ・オー・ルー

自分の金がなくなつて、他人の金をつかふやうになつてから、わたしの幸福は奪はれて了つた。

わたしの幸福とは何か?

パッスィの小さなアパルトに住んで、夫はすきな本を讀んだり、氣まゝな原稿を書いたり、妻は炊事をしたり、針仕事をしたり、フランス語の稽古をしたり、さうして二人の間の一粒だねであるところの、巴里で生まれたイヴォンヌの成育をたのしむといふ、いたつて單純な幸福だ。

――珈琲ができたぜ。

――茶目が起きてからさ……役者がそろはないと、つまらない。

――まつたくだ。

カチャンといふタースの音をきゝつけると、むく／＼と茶目が起きあがる。それ、おしつこ、それ、パントッフル、それ、牛乳だ、お砂糖だと、それをきつ けにして、ワチャ／＼とたゞわけもなく暮れゆく一日がはじまる……と、まア、云つたやうな程度にすぎないほどの幸福だ。

が、いくらさうした單純な幸福でも、このあまりに不幸にみちみちた世の中から見れば、さうながい筈のない一生中に、殊に破綻の多い生活ばかりつゞけて來たわれ／＼夫婦のやうなものにとつては、一度失つたら又と得がたい、これでなか／＼、それ相當にたふとい價値をもつたそれであつたに相違ない。

わたしはそれを失つたのだ。むざ／＼と失つて了つたのだ。五十ぢかくなつても、いまだにお坊ちゃんかたぎのぬけきらぬわたしは、それが親ゆづりであるところの、自分の金といふものがなくなると同時に、一たまりもなくそのたふといものを失つて了つたわけだ。

愚癡をこぼしたつて、くだらない。愚癡はよさう……が、愚癡をのぞいて、わたしに果して書くことがあるか? だら／＼と愚癡を書くよりほかに、今のわたしには果して働けることがあるか?

金がなくなつたので、わたしは妻にあいそをつかされたのだ。一文も收入の道を工夫する能力がないので、わたしは妻に見すてられたのだ。妻はイヴォンヌをつれて、同じパッスィの、月に千三百フランもする立派なアパルトで、その愛人であり保護者である男と一緒に暮らしてゐる。さうしてわたしはそこへ足ぶみすることを拒絶されてゐる。あたりまへだ、すべてがあたりまへだ。あまりにあたりまへだ。一週間まへ妻からわたされた十磅の金がなくなれば、わた

しは自然餓死することにならう。それでいゝのだ。結局それでいゝのだ。

巴里のダンフェルからソオ・ロバンソンゆきの郊外鐵道で三十分、その終點から一キロ、セイヌ州のシャトネエ、俗にオルネエ、又狼谷といふ、土曜日曜のほかは、それは閑寂な別莊地の、はなはだ古ぼけた、はなはだ野趣を帶び、宿の二階で、こんなことを書きはじめた男が、その妻へあてた手紙。

「わたしもよッぽどどうかして了つた。あんまり靜かなのと、萬感が胸一杯になつたのとで、さッそく日記にでもとりかからうと思つて、内がくしへ手を入れると、いつもあるはずの萬年筆がない。けさそちらで洋服をきかへる時、ぬいだ方へ入れ忘れて了つたものだ。さツき旅券をとりに行つた際、どうしてそれが思ひだされなかつたのであらう。もう十時すぎだけれど、母屋へ行つて、今夜だけペンとインキをかりて來た。あしたはさツそく一キロあるいて、ロバンソンの驛前まで買ひに出かけなければならない。その節ついでにアルコールランプや食料品を仕入れて來ることにしよう。實はけふこゝへついて見ると、隣りにもう一室あつて、そこには二年越し人がゐるのださうだ。この間見に來た時、この建物は上下二間きりだとばかり思ひ込んでゐたところが、上に二間、下に二間、都合四室あつたわけだ。何事に對しても迂闊なわたしは、かんじんかなめの自分の物を考へたり書いたりすべき場所の選定さへ滿足に出來ない男なのだ。愛する女房に見かぎられるのも無理はない。又利口な人々のより合ひであるところの世間から、ばかにされるだけばかにされるのも無理はない。普通の人間なら、とうの昔に自殺してゐるはずなんだけれど、妻子に執着して死にきれないほど愚癡になりきつて了つてゐるのだ。すこしも愛情をもたぬ妻に對して、又たうてい養へもせぬ子供に對して、のみならず自ら働いて食へる自分自身さへもたぬくせに、それでも食ふだけは一人前に食つて生きたいのだ。これ以上に意氣地ない男もめつたにないであらう。要するにすべてわたしが惡い。責めるならいくらでも責めてくれ。わたしはお前達のやうな利口な人間から十分に責めて責めぬかれる價値があるのだ。」

――六月二日

「宿の亭主の云つたとほり、なるほど小鳥がさかんに啼く。まへの大きな花園では、美しいさまざまな花が、到るところ塊をなして、咲きほこつてゐる。濃綠淺綠の木々、庭木の苗、すべて植木會社であるところのベピニエールといふ家の庭だ。閑かなことだけはこの上もない。爰でおちつけなかつたら、よつぽどどうかしてると、お前たちは思ふであらう。たゞし夜はペトロールのランプだ。便所はこのホテルの庭のうしろの、しげみの奥の、ひどくきたないところにあつて、それがほとんどたれながしのまゝだから、日本の田舎と大したちがひはない。しかし文明はすべて金で買ふものだから、さうして今は一文なしなんだから、それんばかりの辛抱はもちろんしなければならない。愛する妻子をどこまでもパリジエンヌの妻にして置きたければ、何よりも

かによりも、この際は金が第一だ。道成寺の文句ではないけれど、その金には恨みがかずかずござるだが、恨んで見たところで、それがはじまるものでもない。金がなくて妻子の養へなくなつた男と、世わたりの腕があつて、人の妻子をあづかり得られる男と、さうした間へ立たせられたら、どんな女だつて今どきその取捨選擇に迷ふものがあらう。わたしが女だつたら、やつぱりお前のするとほりしたにきまつてゐる。

『人間の運命といふものはいつどうかはつてゆくかわからぬものだ。今はこれが運命だと思つてゐても、すぐそのそばから次の運命が人しれず食ひ込んで來てゐるから、さうしてそれはそれぞれの人間がおたがひに氣づかずにゐるものだから、いざそれが形にあらはれるとなると、病氣と同樣おたがひにビックリするのが常だ。

『幸福が幸福でない。不幸が不幸でない。人間の世の中に永遠性のあるものは一つもないことは誰でも知つてゐる。が、併しもし人間生活のうちで、何が一番幸福で、何が一番不幸だといふと、それは貧乏しても乞食しても氣兼なしで暮らされる時が前者で、形は幸福でも心に屈託がある時が後者であるにきまつてゐる。さうして今のわれわれの生活はすべて不幸だと云はれなければならぬ。たゞその間にあつて全く何も知らぬ茶目だけが幸福だ。わたしは茶目が幸福でありさへしたら、もうそれでいゝ。一切が茶目中心だ。

『わたしはこれから一生懸命になつて原稿を書きはじめよう。たゞ茶目のためにのみ働かう。茶目が一人まへになるまでには、まだ十四五年ある。普通の健康者は六十までは働ける。殊にわたしのやうな原稿生活者なら、七十か八十までも働ける。わたしの餘生はまだ働くには十分餘地がある。人間が十年以上一定のことを怠らずみつちりやり得たら、たとひわたしのやうなボンクラでも、たぶん普通人のやり得られる程度の事は出來るであらうと思ふ。

『The Child is The Father of the man ――とウァーヅヲルスが云つたが、子供はたしかに大人の父だ。男女の戀はおたがひに幸福も與へるけれど、不幸を與へる分量の方がむしろはるかに多い。ところが子供は兩親にかならず幸福のみを與へるものだ。子供によつてのみ男女はこの世の中に希望を置くことができる。子供は今の時代にはもつとも偉大なる救世主だ。

來るべき時代のために。さうだ。それがためにのみわれわれはよろこび勇んで粉骨碎身の勞働ができる。

『筆をもつと、かうした感想が自然に筆先へにじみ出て來る。わたしは要するにたえず筆をもつてゐられる狀態に置かれなければいけない人間だつたのだ。わたしを自然のまゝのわたしらしくして置いてくれ得る女が本當にわたしの妻だ。』

――六月三日正午

『十時五十分が終列車だつた。一時間以上もあつたので、ダンフェルの角のカフェで音樂をきゝながら待つた。ドミを一杯、フィンを一杯、二フラン四十、チップ六十、合計三フランがところ散財して、

チッとメトロの赤デンキを見つめたり、疾走するタクシを見送つたり道ゆく人々の足首を眺めたりして待つた。さうして例によつてさま〴〵な雜念に捉はれながら待つた。このたえまなく雜念にのみ捉はれることが、たうとうわたし自身をば知らぬ間にこんな境地にまで陷れて了つたのだ。それにも拘らず、わたしには到底この雜念に打克つだけの力がない。結局このまゝかうしてこの雜念に捉はれながら死んでゆくだけの話だらう。「狐に穴はあれど、人の子に枕するところなし」――キリストもさういふ愚痴をこぼした時もあつた。お前のおかげで今はまだ枕するところはあるけれど、そのうちにはきツと狐にも劣る時がまはつて來るに相違ない。一生懸命に原稿を書く？さう、書けさへしたら……さうして改造の山本氏の氣に入る原稿でもできたら、それは成程二の宮時代の生活はつゞけ得られるかも知れぬ。從つてその位の程度なら或は巴里でも親子三人水入らずの生活ができるかも知れぬ。が、そんなシミツたれた生活を待ちのぞんでゐるお前かしらん？ 又さういふ生活をもたらすべくわたしを奬勵してくれるだけの好意で、お前の保護者はお前を引きとつてくれてゐるわけか知らん？……まア、まア、それはさうとして置かう。とにかく一生懸命に原稿にとりかゝることにしよう。

『ロバンソンでは終列車で二十人ばかり降りたが、わたしのゆく方向へむかふ人は一人もなかつた。宿へつくまで一人きりだつたが、月があるのと、二町おき位に街燈があつたので、大してさびしくもなかつた。又犬にも一度もほえられなかつた。すぐ寢床へ這入つたが、丁度十二時だつた。このごろのわたしの生活中で、寢床にゐる時が一番つらい。寢床に關聯したお前の生活が、とめどなく頭にうかんで來て、それに苦しめられ脅かされるからだ。朝目がさめた時もさうだ。ほんたうに目がさめていよ〳〵起きあがるまでは苦しめられつゞける。食慾に餓ゑなければならぬ前に、わたしはまづ性慾に渇しなければならぬのだ。さうして食慾と性慾とに對してかくまで飢渇しなければならなくなつたのは、みんなみんな自分一人がわるいので、決して自分以外の人々のあづかり知つたことではないのだ。わたしは自分自身のわるかつたことのために人間生活の基礎をば徹底的に奪はれる刑罰に處せられなければならぬわけだ。さうしてわたしの犯した罪といふのは何か？ いかなる罪か？ それは單純にお人よしといふ罪だ。自分自身の五慾に對してはなはだ忠實でなかつたといふ罪だ。

『起きて、お前からもらつて來たおべんたうのすしをたべる。それから裏の便所へゆく。この便所がとても大變なものだ。こいつに毎朝閉口させられなければならぬかと悲觀する。併しどうにでもして用がたせさへしたらいゝのだから、そのうちには馴れるだらう。女が部屋の掃除に來たので出てゆく。前の森林の中の道をゆく。左は廣やかな大森林だが、それはメーゾン・ド・サンテの私有地だから這入れない。病人で金があつたらかうしたところにもゐられるのだ。四十分ばかり散歩してかへる。到るところヴィラがあ

る。かういふ別荘に親子三人で住み得られたら、などと考へてばかり歩いた。三十五六の夫婦が十位を頭に三人の子供をつれ、森の中でたのしさうな午めしをたべてゐた。人間らしい幸福といふものは、まづあの邊のところに位してゐるものだらうと、しみ〴〵思つた。それにつけても一文なしでは駄目だ。月に三四千フラン收入のある生活にとりつけなければ、あの位の單純な幸福でも、容易にもたらし得られないのだ。なんといふおれは意氣地なしなんだらうと、さうした一家團欒の前をとほりすぎながらはづかしくなつた。

『午後からすこし仕事らしいものを書きはじめて見たが、二枚ばかり書くと、あんまり下らないので、例の反古にして了ふ。こんなことしてはゐられないのだが、ゐられないのだゞと、追ひたてられるやうにたえず思つてはゐるのだが、やりはじめると相變らずこれだ。どうしてもこれではいけない。わたしの頭は根本的にぶちこはして、その中からなま〳〵しい血をほとばしり出させなければ駄目なのだ。

『先達て大事な萬年筆を落してペンの先がをかしくなつて了つて以來、どうも書きにくいので、ロバンソン驛前へ、このペンとインキとを買ひに行つた途中で氣がつくと、どこの家でも電燈はあつたのだ。考へて見ると、ホテルでも母屋の方にはついてゐたのだが、わたしのゐる建物だけはついてゐなかつたのだ……萬事がこれだ。人がよくて、迂濶で、その上にクジ弱いと來てゐるのだから、みじめだ。いくら閑かだつて、いくら眺望のいい窓があつたつて、電燈のない部屋を二百五十フランも出して借りてゐるおめでたさが、自分ながら本當にはがゆくなる。が、それにしても閑かなのはまつたく申分がない。

『ロバンソンから玉子とソーシスを買つて來て、アルコール・ランプで米の飯をたいてたべる。』 ——六月四日午後七時

『美女は命を斷つ斧と古人も云へり——と西鶴にあつたが、わたしは今美女であるところのお前といふ斧によつて、古人も云へるとほり、たうとう命を斷たれようとしつゝある過程にあるところだ。何だか非常にからだが疲れて、ゴロリゴロリ横になりたくばかりなる。けさもフェア・デ・シャンブルの間散歩に出たが、森の中をあるいてゐると、足がフラフラする。もつとも、きのふから米を一リーブルと玉子一つと小さなソーシス一つたべたきりだから、おなかのすいてるせゐかも知れない。横になると、すぐウトウトする。ウトウトすると、苦しい夢ばかり見る。ゾッとして目があく。なるほどかうして人は死んでゆくものかと思ふ。書きたいと思ふことが、いろんなかたちで頭の中へ浮かんでは來るけれど、さてまだ意を決して筆の先でそれをつかまへるところまでゆかない。直接女に溺れてたわいなくなる、とはわけのない話だが、そいつを筆に上せることは中々むづかしい。天才のない文士の苦悶をしみじみ考へる。併し天才と云つたつて、要するに熱中力の程度なんだから、どうかしてその熱中力を全身の底からよび起したいものと工夫をこらしてはゐるのだ。そ

れが即ち生きる力だ。念彼觀音力だ。今度はどうなつてもそいつを呼び起さなくてはならない。

『「來るべき次の時代のために」――さうした題目がしきりに頭の中を往來してゐる。子供が一人生きるために、父母をはじめとして、あらゆる周圍の人々が、進んで犧牲になつてゆくことと、又何だかだとそれ〳〵自分勝手な理由のもとに、實はその子供の母親であるところの美女を獨占しようとして、とんで火に入る夏の蟲のやうに悶き死してゆく男達の姿とを、ドラマでも小說でもいゝから、何とかした一つの新しい藝術樣式にまとめあげて見たいと思つてゐる。人類はじまつて以來、いや、むしろ生物はじまつて以來、テーマとしては新しくも何ともないけれど、わたしの一生の直接經驗が、しきりにわたしにそんなことを思はせるからだ。

『大正六年十月一日、例の大風がふいて、小石川の家にヒビが入つた時、北海道へ赴いて、あの家を賣ることにきめるまでは、わたしの生涯も、單に足のわるい妹のために犧牲となつただけで終つたのであらう。ところがその翌年の三月、所謂ナベを東京へつれて來る問題が起つてわたしはたうとうかうした放浪の生涯を志す動機をつくつて了つたわけだ。さうした容易ならぬ過去をしよつてのお前との結婚禮讚だつたものだ。今日となつて見ると、そんな因果な過去をしよつての消えがたい一生の苦悶が、お前との今日までの同棲に對して、何とも云ひやうがない氣の毒なことをして了つた原因になつてゐるわけだ。

『大正九年三月二十六日、お前の神明町の家から鵠沼の東屋へ赴いた時、札幌の父から驚くべき手紙が來てゐたのだ。わたしは便所の中でそれを讀んですぐすてて了つた。それはその月の六日、即ちわたしの養母の命日の日、わたしが墓まゐりに赴くべく東京へ出かける際、東屋の九番室から階下へおりて、恰も朝の化粧中であつた洗槽の前の、まだ何の關係もなかつたお前と冗談を云ひかはした日、ナベがわたしの子供を生みつゝあつたわけだ。腹ちがひではあるけれど、わたしには自分の妹に子を生ました男だ。ナベが若しもうすこし狡猾な女であつたら、その子供はきつと正式の夫の子として世の中へパスしてゐたであらう。然しナベは正直な女であつた。それを夫の前へ自白して裁斷を仰いだ。さうしてその夫の裁斷の結果、ひそかに北海道へかへつて、その子供を生み落したものだといふ。札幌の實父にとつては、悲慘にもそれが本當の初孫であつたものだ。北海道の宅地に關しては、さうした事件が裏面にある。

『わたしはその事をばお前と一緒になつた後に知つたけれども、つい〳〵勇氣がなくて今日までお前に白狀する機を逸して了つた。わたしの甚だ重くろしい人間である所以がそこにある。わたしの物を本當に書けなかつた原因もそこにある。又わたしのやうな人間がなぜ茶目をあのやうに愛するか、なぜ茶目と離れては暮らせぬやうに思ふか、その動機もそこにある。父母のそろはぬ子供は不幸だ。わたしは自分自身にしみ〳〵それを體驗してゐる。それにも拘らず、わたしはま

だ見たこともない、さうした不幸中の不幸なる子供を日本へ殘してゐるのだ。殘るところは茶目一人だ。どうかして茶目だけは兩親そろつた中で育てたいと思ふ。

『「來るべき次の時代のために」――どうかして茶目だけは活潑潑地の身神ともに健全な本當に獨立した女に仕立てたいと思ふ。

『働から。働から。自分の體驗した生活そのまゝがもうすでに立派な藝術品ではないか？

『たゞそれを立派な藝術品として表現するためには、文字どほり一生懸命の努力がいる。努力だ。努力だ。一生懸命の努力しさへすれば茶目だけは必ず兩親そろつた中で育てられる。この世に於いて唯一つのこつたわたしの希望がそれだ。』

――六月五日午後五時半

ベルを押すと、もう正午だといふに、まだねまき姿の青い顏した妻が、これもねまきを着てはだしのまゝのイヴォンヌと共に顏を出す。

妻は不快な顏して、

――何しに來たの？　といふ。

――ズボンがほころびたからなほしに來たのサ。

――近所で針でも絲でも買つて、自分でなほせばいゝぢやないか。

この暑いのに風邪をひいたと見えて、茶目は鼻汁をたらしてゐた。

保護者であるところの妻の同棲者もまだ浴衣がけのまゝで、妻と共に箒をもつて、そこらを掃除してゐる最中であつた。

ズボンをぬいで、サロンのディヴンへ腰かけ、さつそく修繕にかゝる。イヴォンヌは針だ絲だ鋏だと、そばへつききりで、面白さうにいろ〱と手傳つてくれる。

やがて修繕のをはつたころ、妻がそばへ來て腰かける。

――こつちへおよこしなさい。わたしがなほしてあげるから。

――いゝよ。もう出來たんだ。

――さう……と、出した手をひつこめたが、と、ツケツケした聲で、

――どうしてあんな愚癡ばかり毎日々々書いてよこすの？　あんなくだらもない愚癡の百まんだらを書くひまで、なぜ一行でもお金になる原稿にとりかゝらないの？　あんなものをよこしたつて、わたしはろくすつぽよみやしないよ。ばか〱しい。

――あれは日記のつもりで書いてよこすのサ。だから讀まなくてもいゝからとつといてくれたらいゝだ。

――日記なら日記で自分のところへとつとけばいゝぢやないか。あんなものをよこすとうるさいよ。

――さらか。そんならさうしよう。

――何しろあんたも男一疋のくせに、妻子を養ふどころか、自分一人の飯代さへ自分でかせぐことができず、何から何までみんな他人のお金をつかつてるといふ境遇ぢやないか。ちつとは人間らしい考になるものだよ。

『茶目。おかぜはなほつたかい。お前がねむると、ママ公はすぐお前のそばにゐなくなるんだらう。それでお前がふとんをふみぬいだまゝ、ながいことねてゐるので、それがためこのあたゝかいのに、かぜなんぞひくんだらう。もつともかぜ位ひいたつてかまはないサ。めしさへくはしてくれるならそれが何よりだ。それ

が第一だ。パパ公はこの世の中で、この上もない腰ぬけで、なまけもので、お前の飯の種をこしらへてやることができないのだよ。お前の生きてるのは、みんなママ公のおかげなのだ。ママ公のべつぴんさんが、お前ばかりでなく、このむしろ死んだはうがいゝパパ公まで養つてくれてゐるのだ。

『茶目。パパ公はさびしいよ。朝から晩までたつた一人ツきりなんだ。一人ツきりでいろんなことを考へてゐるんだよ。御飯もきのふまでは毎日お米一リーブル半に玉子三つしきやたべなかつたのだが、あんまりおなかがすいていけないから、ゆうべから奮發して、お庭のこんもりした木の下の食堂へ行つて、夕御飯だけこのホテルでたべることにしたよ。イヽ公はまだお庭の木の下で御飯をたべたことがないだらう。なか／＼いゝ氣持のものだよ。併し御飯は何と云つてもママ公とイヽ公とパパ公と三人きりでたべるのが一番おいしいよ。パパ公も澤山々々お仕事して、一日もはやくさういふ御飯のたべられる日が來るやうに勉強しなけりやならないね。

『茶目、お前はいゝママ公をもつて仕合せだが、わるいパパ公をもつて不仕合せだね。パパ公はね、あんまりわがまゝそだちだつたものだから、增長して、自分のする事はなんでもいゝ事だと思ひつめて來た罰で、たうとうこんな身の上になつて了つたんだよ。さうしてかんじんのママ公にまでにくまれるやうになつて了つたんだよ。ママ公がパパ公をにくむのはあたりまへだけれど、茶目だけはいくらパパ公がお金ぐらゐなくたつて、そんな事でにくまないやうにしておくれ。

『茶目。をどりは上手になつたかね。小森さんのをぢさんのいふ事をきくんだよ。さうして早くをどりが上手になつて、ママ公と小森さんと三人で、大勢の外國人の前でをどつて見せなければならない。さうしたらみんながきつと「ケル・ミニオン」といふだらうね。でも、決して增長だけはしてはいけないよ。增長するとパパ公のやうになつて了ふのだから。

『茶目。パパ公はそのうちすこしお仕事がはかどるやうになつたら、又せんのやうに一日ボアへ行つて、砂いぢりしたり、毬なげしたりして遊ばうね。ボアでなければ、リユクサンブールでいゝ。ギニヨルを見たり、バランソワールへのつたり、木馬へのつたり、驢馬へのつたり、アレーへのつたり……パパ公はね、もうこの世の中で、イヽ公と森や公園で遊ぶよりほかには、なんにもたのしみがなくなつて了つたんだよ。イヽ公が大きくなつたら、いろんな御本を敎へてやるのだけれど、イヽ公はまだ御本をよむことができないから困るねえ。早く大きくおなり。さうしてマダム・キユリイのやうな上等な頭になつておくれ。お金なんぞあつたつてなくたつて、上等な頭になりさへしたら、人間はそれでいゝものだよ。』

この手紙を出さうか出すまいかと思つてゐるところへ、妻の方から意外にこんな手紙が來た。

『パパ公。

『いまやうやく小森さんとスキ燒をたべて、あとかたづけをしてすんだところ。こんな小さな家でも、一日用事をすると、

かぎりもなくあつて、女中の來ない間は、とても物をかくどころか、學校にもゆけさうにもない。

「きのふブローのおかみさんとフォンテンブローへ出かけて行つた。一々云ふのはうるさいからだまつてゐるけれど、何をしてもどうもあんたのことが氣になつていけない。殊に愉快に原稿でも書いてゐると思ふとさうでもないが、例のウツウツと何にもしないで考へてゐられると思ふと、しきりに氣になる。おまけにイヽ公が、何かすると、パパ公、パパ公と連發する。とにかくあんたの思つてゐるやうに、こつちでも決して氣兼なしに面白をかしく暮らしてゐるわけではないから、なるたけ辛抱して、原稿を書いてもらひたい。「念々不離心」で、五年間しみこんだなじみはやはり五年もかゝらないと、一寸ぬけさうにない。殊に茶目公がからしてくツついてゐる間は、決してどんな場合でもパパ公をないがしろにはしないから、安心して、とにかく原稿を一生懸命書いて下さい。さきのことはどうなるかわからないとして、とにかくあんたが一生懸命原稿を書いて、それがすこしづつでも發表されてゆくやうになれば、一切の狀態がまた自然とちがつて來る。決して今より惡くなる筈はないと思ひます。突拍子もないあんたのザンゲをよんでも、私は別におどろきも呆れもしない。

「ハハン、さういふこともあつたのかな。と思ふくらゐなもので、それよりも現在の親子三人が今よりよくなること以外に、オテンタウ樣の中からスッポンが逆さに落ちて來たときいても、私は別に呆れも珍しかりもしない。たゞ親子三人が今よりよくなること！ それ以外に何にもない。が、親子三人が今よりよくなることと云つても、それは必ずしもリュ・デュバンのやうに、三人で爪に火をともして暮らすといふことではない。とにかく表面はどうでも、こゝしばらくはあんたもこの狀態で辛抱して、不自由を忍んで、一生懸命原稿を勵んで下さい。あの話の一件では北海道はどの道棒にふるよりしやうはあるまいから、その代り幸ひK氏の方が都合よく行くやうだから、それを足場に、われ／＼もなるべく早く一人だち出來るやうな努力をおたがひにしようではないか。あんまり下らなく考へ込まないで！

「博覽會のはうも景色のいゝ間に、なるべく早くケリをつけて、眞の商賣にうつる豫定です。そのうちにはパパ公の旅行費ぐらゐラクに出るやうになりませうから、こゝもとしばらく不自由と淋しさを忍んで、茶目公のためにいゝものを書いてやつてください。

「この手紙の裏へ茶目が書くと云ふから手をもつてかゝしてやるよ。

——ハパコー、ゴキゲンコー、メルクルディニイラッシャイ、イヽ公ガヲドッテミセマス。　イヴォンヌヨリ

パパコーへ

「三分ほどのちがひで、終列車にのりおくれたが、併しそのおかげで、朝まで夜どほし巴里中をうろつきあるいた。同時にそのおかげでわたしの心には或る今までにない何物かが目をさまして來た。云ひかへれば、苦悶して、苦悶して、苦悶しぬいた結果、四十年來の迷夢がすこしばかり

さめはじめた曙光を感じたのだ。昔の言葉で云へば、さしづめ復活だ。今の言葉で云へばクラルテだ。さうしてわたしにとつては新生だ。今日たゞ今から勇ましく進んでゆくべき道の緒口だ。わたしはやうやく物質上の人間生活から超越しさることができた。ただリユ・デユバン時代の大問題であつた「饑死」に對する恐怖の念が根本的に消滅してしまつたのだ。一路居士の公案の意味がハッキリわかつたのだ。

「われ〳〵親子三人の幸福は、決して單なる肉の問題ではなかつたのだ。人間の愛情はつねに肉から發足するけれど、肉を離れることの出來ないうちは、決して徹底したものになり得ない。さうした昔からわかりきつてゐたやうなことが、今迄ほんたうにわからなかつたのだ

「わたしはもう大丈夫だ。茶目とお前とに對するわたしの愛情は、こゝにやうやく一進歩を劃することができたわけだ。さうしてもうきのふまでのやうなあゝした淺薄なものではなくなつたわけだ。もつともつと深い愛情がわきはじめたのだ。淸い、尊い、ほんたうに生きてこの世に生き甲斐のある、力づよいものに變りはじめたのだ。

「わたしの今後の行動は、もちろん今までどほりのお前の命令のまゝだけれど、それが今までとはちがつて、決していやいやではなく、よろこび勇んでお前自身の生活の都合のいゝやうになる氣になることができるやうになつたのだ。

『かうした心の狀態を得た以上は、いふまでもなく原稿はかならず書ける。二十年前志を立てて文士にならうと欲した時以來、書かうとして遂に今までその緒にすらつきかねてゐた文章をば、今度こそは本氣になつて書きつゞけ得られるに相違ない。さうしてそれをもつて本當に終生の事業とすることができる。

「わたしは單なる言葉の藝術家としての文士ではなかつたのだ。それにもかゝはらず、わたしは言葉の藝術を市場に賣りだしにゆく人々の眞似をしようとばかり企ててゐたものだ。さうしてそれが根本的の大いなる誤謬であつたのだ。まつたく身のほどを知らなかつたのだ。さうしてそれがために、本當に開放された、本當に自由な、本當にかの威武も屈することのできない自分自身といふものがつかまへられなかつたのだ。書くべきことが山のやうにありながら、なぜ今まであゝして書けずに來たものかといふ理由が今日やうやく會得できた。

「再び云ふが、わたしはもう大丈夫だ。お前の夫として、又茶目の父として、かならず恥かしくない人間になつて見せる。どうか今後のわたしの生活ぶりを刮目して見てゐてくれるやう願ふ。

「負債に對するわたしの態度も、お前に對するわたしのそれも、すべてバルザックが手本だ。お前も知つてゐるとほり、バルザックの小說はすべて前半生にしよつた借金をかへすために出來たのだ。又バルザックはハンスカ夫人と本當の意味の結婚をするために一生を賭したのだ。さうして死が目前に迫つた時、はじめてその臨終の床の上で成就することができたのだ。バルザックの死んだ年まで、わたしにはまだ十年ある。わたしはバルザックの心意氣にまけないやうな文士

として一生を終りたい。
『もう一度いふが、わたしはもう大丈夫だ。だからその點に於いては安心してもらひたい。要はたゞ今後だ。今日たゞいまからの將來だ。茶目のためには、われわれは命がけで働かなくてはならなかつたのだ。わ しはきのふまでの自分自身がシンソコはづかしい。それはどうかゆるしてくれ。
『今あさの五時半だ。起きて、しばらく忘れてゐた冷水摩擦をやる。隣室の若い勞働者はもう働きに出てしまつてゐる。母屋はまだねてゐる。木々の小鳥は心持よささうに囀つてゐる。しげみの中の便所へゆく。庭では十羽ばかりのヒヨコを引きつれて、母鶏がしきりと餌をあさつてゐた。わたしは茶目のため又わたしのために餌をあさつてくれてゐるお前の美しい心を思つた。お前の手紙に「念々不離心」といふ言葉が出て來たので、それからわたしはお前に對してスッカリ安心するやうになつたものだ。お前はやはりわたしの妻だつたのだ。お前の美貌とお前の誘惑に對する弱さとが、わたしとお前との間に立つて、長いことわたしを苦しめたけれど、美貌や誘惑にはかぎりがあつて、さういふものに捉はれてゐるうちは、本當に大自然のふところに抱かれて生死すべき人間の道には這入れない。わたしの苦しんだのは、その點にまだ徹底した悟りが開けなかつたからなのだ。が、一昨夜からきのふの朝にかけての巴里の彷徨は、おぼろげながらわたしにその悟りをひらかしはじめた。わたしはもう大丈夫になつた。わたしはもう働ける。』

半世紀のあひだ、わたしはたえずいゝものを書きたい／＼と思ひつゞけてくらして來た。さうしてたゞ單純にさう思ひつゞけて來たばかりで、いゝものはさておき、わるいものすら、ほとんどまつたく書けなかつた。

半世紀の事實が示すとほり、わたしは文士ではなかつたのだ。云ひかへれば、詩人でも、小說家でも、思想家でも藝術家でも、實は何でもなかつたのだ。從つてわたしのこれまでの一生は、朝から晩まで、たゞ漠然と文藝々々と念じつゞけ云ひつゞけて、しかもまつたく自分自身には何事をも創作し得る能力のない、いたづらに空虚な、ぐうたらた、人間として最も生き甲斐のない、人類の一員として最も恥づべき、單なる穀つぶしとしてのそれであつたにすぎなかつたものだ。

原因はすべてわたしの頭にある。異常に薄弱な頭にある。刻々周邊からの刺戟に動かされつゞけてゐて、一瞬も心に落ちつくひまがなく、さうして普通人のやうに仕事に對してはおのづから一切の刺戟を排し本能的に自分の意志を行つてゆくことが、極端にできないやうに組織づけられた非常識の頭にある。

さうした頭から生ずるわたしの一擧一動は、それゆゑに常識的の打算では、普通人の意識的意志では、どうしても現はれて行つてくれない。要するに、たゞその時／＼の無意識的衝動でのみ動かざるを得なくなる。

從つて氣がむかないと、全く何もしたくなくなつて了ふ。物も云ひたくなくなる。机へ向つても、一行も一字も書けたくなる。さうしてたゞヂッと仰向けに臥そべつてゐたくばかりなる。一口に云へば、我儘だ。甚しい氣むづかしやだ。

金があつて遊んでゐられる間はそれでもよかつた。しかし働いて食はなければならぬ境遇の下には、それではすまされなくなつた。

復活しなければならない時が來た。根本から出なほさなければならない時が來た。平凡な、溫健な、たゞ一個の、人間らしい人間として、普通人らしく働きはじめなければならない時が來た。

「けふはじめて二十枚書いた。お前に送つた手紙がみんな原稿になつたわけだ。

わたしはこれからこれを動機として、わたし自身の一生の苦悶を書く。一寸の蟲にも五分の魂といふやうにわたしにも魂はあつたのだ。文藝は形式や文字ではなく、一個の人間の全人類に浸染する魂の表現だぐらゐのことはわからなかつたわけでもなかつたが、たうとう今日までその緒につく機會を得なかつたものだ。さうしてその機會をばたとひ無意識でもわたしに與へてくれた人はお前だ。わたしは改めてお前にお禮を云ひたい。

「一生懸命の努力しさへすれば、茶目だけは必ず兩親そろつた中で育てられる。この世に於いて唯一つのこつたわたしの希望はそれだ。

「わたしの魂は苦しめられた。十重二十重にとりかこまれた肉體のために、スツカリ魂の自由を失つて了つてゐたものだ。二十代にわたしは人間の自由そのもののためにこの人世へ發足した。併しそれが、半世紀の間、ますます〲かへつて自由そのものを緊縛してゆくやうな生活ばかりつゞけて來たものだ。人妻を犯し、妹を犯し、親にそむき、朋友にそむき、國も社會もかなぐりすてて、さうして何日つしきりと何ものかを求めつゝ來たのだが、それは要するに二十年前一度失つた自分自身の魂を求めてゐただけの事であつたにすぎなかつたものだ。

「わたしは今肉から解放された。わたしは魂の自由をとり戻した。これでこそ今迄のわたし自身のにがい人世の體驗も、決して無意味ではなくなつて來たのだ。

「生活とは所謂肉慾の事ではなかつたのだ。肉慾こそはかへつて人間の眞の自由、眞の歡喜、眞の愛情、眞の善美を滅ぼすものだつたのだ。惡魔主義は痛快だつた。併しその痛快さは一轉して自己の魂を滅亡の斷崖へ導きつゝあることに終つた。二十代に發足した惡魔主義は半世紀の格鬪を經て、たうとう魂の勝利に歸した。

『人世には正しい事と正しくない事とがあつたのだ。わたしはそれを無視して、知らず識らず正しくないことばかりに捉はれて來てゐたのだ。

「どう考へても茶目は救世主だ。この世に茶目が出現しなかつたら、わたしは今日のこの徹底を把握することができなかつたものだ。おたがひに茶目のためには命がけで生きなければならぬ。

「人間は何をしてもかまはぬものだ。しかしそれは魂の解放を目的とした場合にかぎる。然らざれば人世の一切は必ず無意義にをはる。』

――六月十三日午後

（一千九百二十五年）

飢渇　信

何を措いても人間はまづ食はなければならぬ。――働かざるものは食ふべからずと、たとひレーニンが云つたにしても。

なぜ人は働くか?――食ふためぢやないか、

なぜ人を欺くか?――食ふためぢやないか!

なぜ人は戰ふか?――食ふためぢやないか!

なぜ人は考へるか?――食ふためぢやないか!

さうして食ふためを除いては、果して人間に何が殘る?

蕩々漾々たる南フランスの碧海碧空と、又四時花さく繚亂たる色と光との交錯中に、愛妻と愛子とを左右にして、死ぬまで三十三天の香夢にのみ浸つてはゐられないことを悟つた無想庵が、愛妻の意見を快く容れて、卒然としてニースから汽車に乘り、卒然としてたゞ一人巴里へ來て了つたのも、畢竟するに、たゞ〳〵食ふために外ならない。

で、汽車賃を拂つて、無想庵のガマ口には五百フラン殘つた。かれはその五百フランで出來るだけ長く食ひつなぎ、出來るだけ奮勵して原稿を書き、出來るだけ多く又あまねく日本へ送り、さうして日本の各新聞雜誌社から、南フランスに留まつてゐる愛妻愛子の許へ出來るだけ澤山の原稿料が送つてもらへるやうに、是非したいもの是非したいものと、一心にたゞそればかり念じつゝ巴里へ着いた。

十年前、無想庵が麹町九丁目の家をたゝんだ時は、たつた一枚のよごれくさつた着更と原稿紙だけを亂雜につッ込んだ手鞄一つきりで、絶望的の所謂放浪の旅へ上つたものだつたが、今回はそれとは全く異り、むしろ希望に充ち輝いた、甚だ奮闘的の旅であるのみならず、内に愛妻の暖かい心添への籠つた、仕立卸しの着更から、又新しいシャツから、靴下から、針絲、靴墨の末に至るまで、又自炊道具としては、アルコールランプの蕊、鰹節かきに至るまで、何くれとなく用意周到に持つて來たので、お蔭ではちきれるばかりに重たい〳〵鞄が二つになつた。

そこでその重たい二つの鞄をさげては、到底宿屋さがしには歩けぬので、ギャール・ド・リオンへつくといきなり、汗水たらしつゝ、やつとの思ひで、それをコンシイニュまでかついで行き、とにかく一時あづけにしてホッと解放された心持になり、たゞ前日愛妻が山のやうにこしらへてくれたサンドヰッチの、汽車の中ではたべきれなかつた、その殘りの紙包だけを小脇にかゝへ、折からプラターヌの若葉あざやかなセーヌの河べりに沿うて、ブラリブラリと河下へ歩道を辿つて行つた。

出る時、外套は、あの最後の人のヤニングスのやうに、鞄と一緒に一時あづけにすることにしようなどと笑つたが、來て見ると、雨模様の巴里は冬のやうに寒く、南フランスではもう一ヶ月以前から使へなくなつてゐた、厚いレグラン外套が、大いに役に立つことになつた。

無想庵には勿論巴里は珍しくない。併し放蕩息子がひとりしよんぼりと故郷へ立戻つた、さうした人知れぬなつかしさだけは、何となく心の底からコミあがつて來るやうに思へた。

「さう。やつぱり思ひきつて出て來てよかつた。」と、オテル・ド・ヴィルの百貨店前の、稍濠竹葉のやうな人波をかきわけながら、心の中でかれは呟いた。

セバストの大通りを横ぎる前の、とある入り込んだ横町に、二三軒 Chambres Meublées と看板の出てゐる小ホテルが目についたので、試にそのうちの一軒へはひつてきいて見ると、忙しさうに廊下を掃除してゐた若いかみさんが、にべもそツけもなく、たゞ一言オーキューン。と答へた。一つも部屋は明いてゐないといふことだ。部屋の明いてゐるゐないに拘らず、答はまづどこでもそんなところだらうと觀念して、セバストを横ぎつて、ピグマリオンの裏通りへはひる。

間もなく、右手横町の奥に、建物の最下を弓形に打貫いた、さうしたところによく有るパサージの門が見えた。と、その門を通して小さな公園の噴水と、それから異樣な大鐵骨の一角とが、電光の如く無想庵の視線に閃いた。かれは一議にも及ばずその横町をまがり、足早にその門をくゞり、いそいでその大鐵骨へ近づいた。

只見る、恰もエッフェル塔をひきずり倒して、それを幾何學的に寄せ集めたやうな、すばらしく巨大な、又すばらしく堅牢な、全部まつ黒な鐵製の大建築が、ところ／＼に山形若しくは方形の屋根をもたげつゝ、幅二町長さ五六町にわたつて、一大怪物の如くガッシリと地をふまへて立つてゐる。それこそ一年三百六十五日、毎日午前の二時頃からはじまつて、夜の白々明までのうちに、凡ゆる國々の食物原料を滿載した、凡ゆる形の貨物自動車や凡ゆる種類の荷馬車手車が、先を爭ふ數萬の人々と共に、狂氣の如く殺到するところの Aux Halles だ。

中央市場――ゾラは昔これに對して『巴里の腹』と名をつけた。なるほど巴里の胃腸に相違ない。云ひかへれば Paris qui mange だ。

無想庵が決然妻子に別れを告げて、勇ましく巴里へとび出して來たのは、いふまでもなく食ふためだ、さうして爰は正しく食ふところの巴里だ。かれが第一の根據地として、さしあたりまづ爰を選ぶ氣になつたのは、いかにも無想庵らしい端的さではないか。

行列した馬車と自動車と手車と、その間にころがつた空箱と空籠と空袋と、又その間に踏みにじられた野菜の屑と藁屑と紙屑と、又その間を流れまはる魚類市場からあふれ出る腥い汚水と、ほとんど足の入れどころもないやうな車道歩道を練り歩きつゝ、かれはキョトキョトホテルの看板をさがしながら、この大建築の周圍をば三度まはつた。さうして四度目に峨々と聳ゆる眞黒な山塊のやうな、一大寺院のうしろへ出た時、そこに大勢の勞働者達がかたまつて立飲みをしてゐたバアとバアとの間へはさまつた狹い小さな入口の上に、きたならしい文字でおぼつかなく Chambre à louer と書き出してあるのが、忽ち目にはひつた。

『いゝ加減にきいて見よう。』と思つて、かれは入口の戸を押した。すると、横手のバアへつゞいた別の入口の戸がすぐあいて、テキパキしたやうなかみさんが首を出し、

『何御用？』ときいた。

『安い部屋があつたら、借りたいんだが……』と云ふと、

『お前さん、一人？』とじろ／＼見る。

『一人さ。』

『さう。あるにはあるけれど、お前さんには高すぎるでせうよ。』とひどく見くびつたことを云ふ。

『高いつて、いくらだい？』

『一週間五十フラン……でもね……』と話してるうちに、かみさんはいかにも無想庵のうすぼんやりしたところを見てとつて了つたやうに、

『お前さん、とにかく一週間ゐる氣なら、來週は三十八フランの部屋があくから、そつちへ引

越せるよ。』

『五十フランは高すぎるが、まア、その部屋を見せてもらはうか。』

『ぢや、こつちへお出でなさい。』とかみさんは先へ立つて案内する。

とても狭苦しい、とても小ぎたない、さうしてとても眞暗な階段だ。それにどういふわけだか右へ左へと、いろ〱奇妙に又はなはだ不規則に昇つて行く階段で、たゞところ〲に思ひがけないやうな分岐點ができてるばかりで、一體どこからどこまでが一階なんだか二階なんだかさつぱり見當のつかない、まるで迷宮の中をでもひツぱりまはされて行くやうな家だ。

と、やがて頭上へポウッと外光のさしはじめた、とある階段の下へ出る。恐る〱かみさんのあとについて登つて見ると、そこは丁度船の甲板のやうな凹字形のテラッスになつてゐた。四方はすべて建物の内側で、所謂壁立萬仞、さうして脚下は深い井戸の底のやうなまつくらがりの中庭であつた。で、テラッスには部屋が二つキャビンのやうに入口を見せてゐたが、貸してくれようといふのは即ちその一つだ。

『これは二人部屋で、百フランなんだけれど、お前さん一人だから五十フランにして置くのサ。』

と、かみさんは恩にきせたやうなことを云ひながら、ガラス張りになつてゐる入口の戸を開いて中を見せる。

何のことはない、谷底へ臨んだ洞穴のやうな部屋だ。さうしてそ　洞穴のやうな感じがまづ無想庵の氣に入つた。どこかでピヨピヨと小鳥が啼いてゐる。さうしてその外には物音といふものが何にもしない。シンとしたものだ。

『併しこの部屋はまるで日がさゝないね？』

『さう、日はさしやうがないからね。』

『濕氣がひどいだらう？』

『こんな高いところに濕氣なンぞあつてたまるものかね。』

『なるほど、そりやさうだ。だが、南京蟲はゐるだらう？』

『そんなものは決してゐない。それは保證する。』

『さうかい、そ　ぢやとにかく一週間ゐて見よう。』

話がきまつて下へ降りる。

無想庵はバアへ行つて、ドミを一杯ついで來ると、やがて勞働者達のゴヂャゴヂャとかたまつたそのうしろのテーブルの一隅へ陣どり、汽車の中で食ひあましたサンドヰッチなば後生大事と開き、心に愛妻と愛子のことを未練らしく、しきりと思ひ浮べながら、且つ飲み且つ食ひはじめた。それがかれの午飯だ。

で、食事がすむと、かみさんから部屋の鍵を受取つて、ズボンのポケットへ突込み、かれは飄然としてこの名前ばかりのオテル・ド・サヴォアを出た。

『巴里へ着いたら……』と、無想庵は汽車の中で、『まづ第一にレ・アールの近所へ宿を定める事、それから辻潤にあひにゆく事、さうして第三に朝日の重徳氏をたづねて、日本の雜誌社との交渉に關する件を相談する事。』と恰も馬鹿が使にやられたやうに、何遍となくこの三つの事を諳誦してゐたものだが、第一の件がとにかく曲りなりに片づいたので、かれは忽ち辻潤を訪問する氣になつたものだ。

が、あんまり自動車馬車の往來が烈しいと、それから無暗と野菜果實の露店の數が多いのに目がくらみ、つい鼻先の、サン・チュウスターシュ寺の根方に、チャンとレ・アールのメトロがあるのに氣がつかず、人波に押されつゝ、うかうかと反對の方向なる、もう一つ先のエチエンヌ・マルセルのメトロまで歩き、その入口に揭げられた巴里の地圖の前に立ちどまると、かれ

は多分その邊であらうと見當をつけたダンフェル・ロシュロオの周圍をば、目を皿のやうにしてさがしたが地圖の文字がいやにチカチカして、辻潤のゐる筈なるボオニエといふ通りがどうしても見つからない。

そこで業を煮やした無想庵は、

『やつぱりダンフェルまで行つて巡査にきくことにしよう。』と呟いて、例の背中を丸くしながらメトロへはひつた。

しばらくすると、かの物々しく目をむいてゐる巨大なライオンとは反對の一隅にあるダンフェル・メトロの出口から、人ごみの中では特に際立つて黄ろい顔に鐵縁の近眼鏡をとつけ、あらいヨコ格子の白ツぽいレグランにカスケツトをかぶつた、かれのジャポネエ姿がソソクサ吐き出された。

で、さつそくながら、自動車の疾走する中の狭い安全地帶で悠々と逍遙してゐた巡査をつかまへて、ボオニエはときくと巡査はもう一度メトロへ乘つてポルト・オルレアンの終點まで行けと答へる。

『メルシ・ビヤン。』とは答へたが、かれはメトロへは行かず、折から傍で發車したばかりのブスを追ひかけてとびのつた。さうしてのるが早いか、すぐ又車掌をとツつかまへて、ボオニエはときく。

『三つ目の横町がボオニエですよ。』と車掌はにこ〳〵といかにも親切氣のタツプリ溢れた聲で云つた。と、その車掌の聲と氣のきいた容貌とさうしてほがらかな態度とが、スツカリ無想庵の氣に入つて了つた。かれはいきなり車掌に握手したくなつた。抱きついて思ひ切りキスがしたくなつた。けれどもさういふ事を傍若無人に敢へて行爲の上に實現すべく、かれは生來それほどのフツナチツクではなかつた。又十年前の無想庵の如く、それほど茶氣滿々たる醉つぱらひでもなかつた。

ボオニエは人通りの稀れな極めて靜かな横町であつた。で、番號を見い〳〵歩いてゆくと、やがて横町の盡きた最端に、なるほど Hôtel Hôtel と看板が出てゐた。無想庵の今きめて來たホテルとはまるで格式のちがふ立派な家だ。で、はひつて、そこの家の人のよささうなかみさんに、ムツシュウ・ツジはゐるかときくと、さアわからない。第一このかみさんにはツジといふ日本の發音がとてもむづかしくて、口に出して云ふことができない。從つて、いくらこつちで、ツジ、ツジと繰返しても、それからがかみさんにはきゝとる事ができないのだ。しかたがないから、

『むすこさんをつれて來た日本人ですよ。』と云ふと、かみさんは忽ち破顔一笑して、

『あゝ、そんなら四階の二十九番にゐます。』と何の苦もなく答へた。

早くさう云へばよかつたと心に悔いながら、

『メルシ・ビヤン。』と暗い階段を一つ二つと數へながらのぼる。

二十九番はすぐわかつたのでトントンと叩いて見る。

『アントレエー！』と爽やかな子供の聲に應じて戸が開かれると、出會がしらに、五六年前無想庵が支那へ赴くべく、改造社へ金を借りに行つて、山本社長の部屋へ導かれた時、そこではじめて會つた野枝さんそつくりな顔した少年が、ヒヨツコリと立つてゐる。同時に、左手の壁際にあつた寢臺で、ムツクリ半身を起しながら、

『やア、さうだらうと思つた、きのふ内海が來て、けふ君が來ると云つてゐたからね……』と比叡山宿院の第二號室よろしくといふ聲を出したのは、勿論、蓬髪垢面の辻潤であつた。

『なアんだ。まだ寢てるのかい？ 一時だぜ、

もう。』

『さうかい……何しろ夜が遲いんだからネ……まア、そこへ掛けてくれたまへ。』

無想庵は外套もぬかず、カスケットも被つたまゝ、寢臺に並んだ新聞雜誌やいろんな和洋の書籍の雜然とのッかつてゐる圓卓の前へ、恰も病氣見舞に來たやうに腰かける。さうして、

「寒いね、巴里は。」と云つた。

「あゝ、寒いよ。まるで冬だね……マロニエの花も散りはじめたといふのにね……それにかう雨ばかり降てられちやア全く助からない。」

「こりや中々い、部屋だ、いくらだい、これで……」とキョロキョロ見まはしながら無想庵はきいた。

「一月三百だよ。」と、寢臺の上で身動きもせず辻潤が答へた。

「三百に安い。僕の今きめて來たところは一週間五十だ。それで水も湯も無論出ない。尤も場所がちがふからね。」

『どこなんだい、そりやア？』

『まア、西河岸と云つたところだね、東京なら、さしづめ……』

「といふと？」

『と云つたつて、君はまだ巴里の地理をよく知らないだらう？』

『知らない。』

『それぢやお話にならない。とにかく、リュ・モンマルトル二十四だ。」

「さう〳〵、君は今度モンマルトルへ來ると內海が云つてゐた。』

「そのモンマルトルとはちがふ。內海の云つたのは、淺草のモンマルトルのことだが、僕のついたのは日本橋のモンマルトル町だよ。尤もその通りをどこまでも上つて行きやア、淺草へも出ることは出るがね。」

「さうかい。そりやア、さうと、君はまだ飯前だらう。」

「冗談ぢやない。今晝飯をくつて來たところだ。朝飯はけさ七時ラローシ・ミジエンスといふ停車場のプラットフアームでやつて來た。」

「が、まア、一緒に珈琲でものんでくれたまへ。」

この問答の間、少年は小まめに珈琲を入れ、新しいパンなど買つて來て圓卓の上へ置く。

無想庵は一口のんで、

「中々よく出てゐる。炊事はおやぢより子供の方が上手なんだらう。けさのキャフェはまづかつたよ。それでクロアッソンつき二フラン五十もとりやアがつた……ウン、こいつア上等だ。」

「すこし淡すぎた。湯がぬるかつたんだらう。」

「なアに、牛乳なしだからこの位がいゝ。すると、炊事はすべてせがれの掛りといふわけかい？」

「さういふわけでもないんだが、こいつはマメだから、こんな事をするのが好きでネ……僕がやらうとしても手をつけさせないのサ。」

「さうでもないぜ。」と少年はクスクス笑ひながら云つた。

「親の食物をこしらへるのは、昔は孝行と云つたものだ。家何とかして孝子出づか。ハハハ。いくつだね？」

「もう十六になるんだが、カラュキシ子供でネ。一番すきな事はリュクサンブールの池へ舟を浮かしに行く事なんだ。」

なるほどラヴボオのそばに小さな帆前船が置いてある。無想庵は感慨深さうにそれを見て、

「僕も三年前にはよく子供をつれて、リオクサンブールへは行つたものサ。あの男の子の舟を浮かしてゐる池のまはりをば、よく驢馬なンぞに乗せてまはつたりしたよ。あすこは子供にはもつて來いといふ公園だ。」

『アンドレ・ジイドも子供の時あの公園へ毎日つれて行かれたことを書いてるネ。』

『さう〳〵、あの眼のわるい公園友達のくだりはバカにサンチマンタルだ。』

『ジイドはフランスではエライのかい？』

『とてもエライだらう。死んだプルーストとヷレリイとジイドとが現代フランス文學の三角形の各邊だ。』

『フランス文學の三角形か。さうして內角の和は依然として二直角に等しか。』

『フランスは幾何代數の國だからネ。殊にヷレリイと來たら象徵詩人でゐながら數學の大家だ。』

『日本とはちがふね。』

『日本ぢや頭のわるい奴にかぎつて文士になる。』

『頭のわるいのは文士ばかりぢやないぜ。』

『だから敎育が普及すると、みんな神經衰弱になる。』

おやぢとおやぢの友達とがまるでタバコの煙のやうな、吹けばとびさうな、一向面白くもなささうな事をば、とめどなく喋りはじめたのにウンザリしたらしく、

『おとうさん遊びに行つてもいゝ？』と少年が云つた。

『ウン、行つてもいゝが、その前にビールでも買つて來てもらはうか。』

少年は圓卓の上の小さな空罐の中から錢をつかみ出して降りて行つた。

『ビールなんざムダだな。のどが乾いたら水をのんだ方がいゝ。』

『巴里の水はのんぢやいけないさうだよ。それにビールは安くてうまいからね。』

『うまくもないぜ。』

『葡萄酒よりやいゝよ。』

『さうかなア。とにかく日本酒のないことがお互ひにドマージだ。』

『やつぱり、食物と飲物とは日本にかぎるネ。』

『さうかなア。日本人の頭の惡いのはその爲だらう。』

『どうして？』

『日本の食物はたしかに胃腸にわるい。それから日本酒位頭をこはす飲物はない。』

少年がビールを二本かゝへて歸つて來るで、口をぬいて、それを各自の前へ置いてコップへつぎをはると、その手で空罐から小錢をつかみ出し、

『ぢやア、行つて來るぜ。』と再び降りてゆく。

『どこへ行くんだい？』

『近所に緣日があるんで、アテモノをやりにゆくのサ。』

『町つ子だな。先生、巴里は氣に入つてるのかい？』

『どうだか知らないが日本へは歸らないつもりでゐやがる。』

『おやぢは？』

『おやぢの方は、まア、金がなくなつたら歸らうと思つてゐる。君はどうだ？』

『僕か……さうさなア。何しろ子供が巴里うまれなんでネ。フランスは自分の國だと考へてゐる。さうして日本語が一向できない。だから一層の事奴さんが獨立できるまで、こつちにゐてやらうかと思つてゐる。』

『食へさへすりやアね。』

『だから、食へるかぎりやつて見るんだ。』

『日本へ原稿を送つてるんぢやア骨だネ。』

『骨でも原稿が賣れてくれる間は脈はあるが、それが日本の新聞雜誌社から一齊にボイコットを食ふやうになつたら百年目だ。』

『その百年目にはどうするつもりだい？』

『そこまではまだ考へてゐないネ。恐らく考へたくないんだらう。或は考へるだけの餘裕すら

ないのかも知れぬ。だから、まア、お先まつくらに、書けるだけ書いて、送れるだけ送つて見てゐるわけだ。』
『ラクぢやないな。』
『つまり、冒險サ。』
『冒險と云へば、僕も子供をつれて來たんで、結局冒險になつちやつた。』
『よく併し思ひきつて連れて來たネ。』
『なにしろ來たがるんでネ。』
『そんなに來たがつたのかい？』
『さうサ。そこで降參して連れて來たのが親馬鹿チャンリンさ。』
『尤も母親はあの始末だし……無理もないが。』
『諸法因緣生だよ。』
『所謂イージイ・ゴーイングの歸趨かネ。』
『さうだよ。』
『併しイージイ・ゴーイングが冒險にをはるのは少しをかしかないか？』
『をかしかないよ。あらゆる冒險はすべてイージイ・ゴーイングだ。
『でも世間ぢやイージイ・ゴーイングをぐうたらと同義に使つてゐるぜ。』
一世智辯聰から見りや、ぐうたらサ。要するに無賴漢だからネ。』
『ルムペンか。』
『マルキシストのプロレタリヤはルムペンを勘定に入れてゐないらしい。』
『さうすると、マルキシズムといふものは小ブル思想のイデオロギイ以上にはでない事になる。』
『何しろたゞ經濟から割出したものだからネ。』
『さうして經濟を忘れた奴が無賴漢だ。』
『だからお互ひにルムペンなのサ。』
『だが、ルムペンはお互ひに廢業したいネ。さうしてマルキシストになりたいネ。』
『できたらネ。』
『ところで、今日本ぢや、マルキシストでないと原稿が賣れないさうだが、本當かい？』
『さア、漢すでに楚を得たるか、といふ奴だらうよ。』
『すると、九里山では誰が洞簫を吹いてゐるんだい？』
『そりや誰だか知らないが、張良ぢやたしかにないらしい。』
『世は戰國か。』
『支那が象徵だ。』
『世界の動亂は支那からはじまると、昔大隈が云つてたが、奴は日蓮以來の大豫言者かも知れない。』
『だが、日蓮も大隈もとにかく故郷に入れられた方の口の豫言者だ。』
『狐の穴のあつた方だらう。』
『而して枕するところのないのはルムペンばかりだよ。』
紫色のかなりな花瓶をかついで、少年が歸つて來た。アナモノであてて來たのだ。
『豐干饒舌、豐干饒舌。』と云つて無想庵は口を噤んだ。
『吐哉々々。三界輪廻かネ。』と辻潤はニッコリ笑つた。
そこへコツ〳〵と戸を叩く音が響いたので、少年があけに行くと、セルの日本服を着流しにした、瀟洒な青年が一名はひつて來た。
『これが今度日本から僕等と一緒の船で來た近江君サ。』と辻潤は紹介する。
『あゝ、あのペナンの支那寺でうつした寫眞中の近江君かい？』
『ウン、あの寫眞、君に送つたけかな。』
『もらつたよ。併しあんまり寫眞とは感じがちがふので、同じ人ぢやないと思つた。』

「どう感じがちがひます？」と近江君は興味深さうに訊いた。
「さう寫眞中の君はいかにも勞働階級に屬した主義者然としてゐたが今お目にかゝると、何となく待合から出て來たばかりの人のやうな感じがする。」
「待合から出て來たはヒドイ！」と近江君は苦笑した。
辻潤はとりなすやうに、
「近江君はネ、農業に從事する目的で出て來た人だよ。」と説明した。
「農業？ フランスで百姓にならうといふ……」
「さうぢやないんだ。近江君のはもう少し複雑だよ。百姓はブラジルでやるのだ。」
「へえ、ブラジルで？ それぢや直接ブラジルへ行つた方がよささうなもんぢやないか？ こんなところにマゴマゴしないで……」
「そこが即ち複雑な所以でネ。」
「わからんネ。」
「實は……」と近江君はきまりわるさうに口を開いた。「一年ばかり巴里でフランス語を勉強しまして、それからブラジルへ渡りたいと思つてゐますので……」
「でも、君、ブラジルは葡萄牙語の國ぢやないですか？」
「併しブラジルの地主はみんなフランス語を話すのださうで。それですからハトロンをつかまへますには、どうしてもフランス語ができませんでは……」
「なるほどネ。だが、併し、それは聊か大風が吹いて箱屋をはじめる口に近いネ……僕の親戚にこんなのがあつたよ。甲種實業を出た時「君はこれから何をやるつもりだ。」ときいたら、その男は大まじめで、洋食屋へはひつて、コックをおぼえると云ふんだ。あんまり奇抜だから、理由をきいて見ると、つまり、その大風なんだ。先生の大望は洋行にあつたのサ。そこで考へたわけだ。まづ、洋食屋へはひつてコックになる。それから横濱へ行つて、西洋人の家へ住込む。信用を得る。と、西洋人のことだから、いづれ本國へ歸る時が來るだらう。それ、その時には、きつと自分を連れて行く、……近江君の農業も、その男の洋行ぢやないかネ？」
「そんなことはありませんよ。」と近江君はやゝムツとして答へた。無想庵は委細かまはず、
「併しどうも君は勞働者ぢやなささうだネ。おいくつ すか？ 失禮だが……」とだん／＼無遠慮になる。
「いくつ位に見えます？」と近江君もすこしスネる。
「いくつ位に見えようと、そんなことは問題ぢやない。率直に君はいくつだときいてるんだ。」
「まだ三十前ですか？」
「もうすぎました。」
「ほう、三十すぎた！ 一人前なんだネ、すると……日本では今迄何をしてゐました？」
「百貨店です。」
「三越の店員をやつてたんですか？」
「近江君の百貨店といふのは……」と辻潤が説明しかゝると、
「あゝ、宮島資夫の意味かい……」と無想庵は頷いて、「それぢやア、いよ／＼百姓は柄になささうだ。」と首をふる。
「それでは何になれるでせう？」と近江君は片腹痛さうにきゝ返す。
「さア……やつぱり文士ぢやないかネ。宮島資夫の例に從つて……尤もネ、ジェローボアムといふ猶太人の説によると、一體株屋と文士には生え拔きはない。かれ等はかならず元何かであつた奴等ださうだ。して見ると、元ナマケモノであつたり、元學生であつたり、元坊ちやんであつたりした、所謂大學の文科を出た連中よ

よりは、とにかく元糊口のために百貨店を歴訪した宮島式の方が、或は文士としては本物かも知れない……』

『その說は古いよ。』と辻潤は橫槍を入れた。「それは歐洲大戰前の思想だ。今日ぢやア、文士といふものは、出版業といふブルジョア資本的搾取機關の一機械にすぎない。つまり、政府の役人とか、生命保險の勸誘員とか、銀行の帳方とか、さういふものと同じだよ。だから元何かにあつたんぢやない。これから何かになり得る可能性のあるものだ。從つて代議士にもなれるし又地主にもなれる。ソヰエットにしてからが、ルナチャルスキイのやうに花々しい文部大臣にもなれる、殊にマルクス的であればあるほど、さういふ可能性が濃厚になる。』

「近江君はマルキシストですか？」と無想庵は辻潤の高論卓說を、ハグらかすやうにきいた。

『いゝえ、僕はそんな……』と近江君は辟易して口ごもる。

そこへクシャクシャなアルパカを着たヲヂサンが現はれた。いきなりヲヂサンと云つたつて、讀者にはわかるまいが、これは二年前渡佛した太平洋畫會に屬する青年畫家だ。鈴木武志君といふのだが、一昨年の暮から去年の春へかけて、同君が南フランスのクロー・ド・キャーニュへ滯在してる間に、無想庵の愛妻愛子から、當人にとつては甚だその意を得ぬところの、ヲヂサンなどといふ變な名前をもらつて了つたのだ。なぜかといふと、無想庵の愛妻愛子の眼に映つた鈴木君の容貌風采が、すこぶるヲヂサンと呼ぶに適してゐたからだ。で、ヲヂサンのこのホテルにゐるといふことは、無想庵は夙に承知してゐたのだが、實は飯をくはなければならぬ人生だといふ事よりは、どうも獨りよがりの空理空論的ヨタ文藝の方にばかり支配されがちな薄弱な無想庵の頭には、それが三四ケ月間南フランスの風光明媚な海濱の松林の中で、一つ鍋の米の飯をくつた間柄であるにも拘らず、たゞ單にヲヂサンが辻潤のやうな獨りよがりの空理空論的相棒でないばツかりに、不幸にもこの瞬間まで閑却されてゐたわけだ。

「さう〳〵、君もこのホテルにゐたんだツけネ。』

「エタンだよ。」と福島縣の人だから、キをエと發音して、ヲヂサンは喜ばしさうに、『今廊下で爰の息子さんにきいたんだが、こんどみんなで巴里へ引越して來るさうだネ。エエなア。」といふ。

「ところが、引越して來る前に、親子三人ヒボシになりさうになつたから、そこで、とりあへず、一番よけいに食ふ我輩の口だけ先づ減らすことにして、さうしてその減らされた口が、御覽のとほり先發隊として、かく巴里へ減らず口を叩きに來たわけサ。」

『とにかくエエよ。それにあんたが巴里へ出て來て、それで食へないといふことはねえからネ。」

『どうして？』

「そりやあんたは僕等とはちがふからネ。」

「どうちがふ？　ちがふのは僕が畫かきで僕が文士だといふ位のところだ。それだから尚始末がわるいよ。」

『なぜ？』

「頭が惡いネ。だつて、原稿は遙々日本まで送りつけるんだぜ。さうして新聞雜誌で買つてくれたかくれないか、それがわかるには三月も四月もかゝるんだぜ。時には半年も一年もかゝる事がある。さうして賣れたにしたところで、その原稿料といふ奴が、これが又いくら早くても半年仕事だ。さうして飯を每日食はなければならないことは、日本だつてフランスだつて同じこつた。ひよつとすると、日本ぢや、フランス

は一年に二三度食ひだめしといたら、あとは食はずにゐられるところかと思つてるのかも知れないがネ……』

『でも、あんたは書きさへすれば、日本で誰かしらん買つてくれるからエエさ。おれなんぞはいくら描いたつて買つてくれるものがねえからネ。』

『そりや賣りに歩かないから悪いのさ。巴里は畫商といふ奴が門並ぢやないか？　はるばる日本へ送らなきやならない品物とはちがふ。かついで一歩外へ出りやア、賣りつけるところはいくらでもころがつてゐる。』

『ところが繪かきの數がまた腐るほどあるんだからネ。』

『まア、さう勇氣を沮喪せずに、どしどしかついで歩いて見るサ。兵糧がつきたら、買つてくれる奴があるまで、門並畫商を廻るんだネ。藤田だつてはじめは同じことサ。食はずにゐた日が三日あつたとかいふ。奴は辛抱しとほしたんだ。その點だけは藤田が手本だよ。』

　他人のことだと忽ち悟つてましたと利口さうな口を滔々ときゝはじめるのが無想庵の持前だ。そこで自分の懐の毛頭痛まないビールを遠慮なくガブガブやり、

『そこでかういふ世の中になつて了つた以上は、畫なんぞはうまからうが、まづからうが、もうそんなことは問題ぢやないんだ。まづ、畫商をとツつかまへることさ。さうして一方で何でも人のアッといふやうな眞似をして、ゴシップ種をさかんにつくり、プロハガンダを怠らぬことサ。ドゥキルへ行つて、世界のバクチ打どもの中を、生魚をからだ中へとツつけて練りまはるもよし、又煙突ほど太い鉛筆で、通る奴を片端から寫生するもよし、又オペラの舞臺で柔道の型をやつて見せるもよし、一歩進んで、おれを支那人と云つたからと云つて、大いに離婚訴訟を起すもよし、何でもすべてプロパガンダ中心サ。さうすりやフランス政府だつて、きつとたゞは置かない。聰明なエリオのやうな文部大臣だつたら、必ずレージョン・ドノウルをくれる。いやしくも畫をかいて、それで出世するつもりで、若しフランスへ來たんなら、君もよろしくその流儀でやるべしだ。昔は盲千人と云つたものだが、二十世紀はそんなこツちや追ツつかない。全世界の人間がみんな盲なんだ。盲十五億サ。だからジュリアン・バンダの曰くだ。現代は âge de quantité（數量時代）だ。從つて qualité（質量）なンぞはもう問題ぢやない。わかつたか、君？』

『わかつた、わかつた……』とヲヂサンはうるささうにつゞけさまに頷いて見せる。

『よし。わかつたら、こんなところにグヅグヅしてゐないで、今からすぐ繪をかついで、ボエシイへ出かけたまへ。』

『ウン、行く、行く……行くことは行くが、ビールばかりぢや淋しいな。鮭のクヮン詰でも買つて來ようか？　大根を卸してまぜて食ふとうまいぜ。大根はおれの部屋にある……』と立ちかける。

『鮭のクヮン詰、買つて來る？』と少年が云つた。

『あゝ。ついでに晩のものも買つといで。スキ燒でもして食はうか。』と辻潤は財布を引きずり出しながら、『君、飯を食つてつてもいゝんだらう？』と無想庵に云つた。

『願つたり叶つたりだ。僕は今日はもう停車場へ行つて、荷物をとつて來て、宿へ歸つてねるばかりだからネ。』

　ヲヂサンは自分の部屋へ大根をとりに行つた。少年はサックを下げて買物に出かけた。

　辻潤は依然として寢臺の上でアグラをかいてゐる。さうしてしばらくパクリパクリと莨をふ

かしてゐたが、何を考へついたのか、突然、

「僕のことを日本の若い連中は古いと云ふが、なぜさう思へるのだらう？　僕位新らしい思想を帶してゐる人間は日本にやアゐない筈なんだがネ。」と云ひ出した。

「それはあなたの江戸趣味のためでせう。」と近江君は漸く自分の國へ歸つたやうに辻潤の疑問を解釋した。

「江戸趣味ねえ……」と辻潤は不足らしく小首を傾ける。

すると、何か問題が出ると、どうしてもだまつてゐられない、困つた性分の無想庵は、すぐ口を出して、

「近江君、江戸つ子と江戸趣味とは全然別物だぜ。辻潤のやうな本當の江戸つ子には江戸趣味なんてものは必要ぢやないよ。さうして江戸趣味の必要を感ずるものは必ず田舍者にかぎる。齋藤綠雨がさうだ。泉鏡花がさうだ。永井荷風がさうだ。僕なンぞも勿論その組だ。かれ等は單に江戸文明の讃歌者にすぎない。のみならず、どだい趣味などといふ言葉からして、既にもう江戸のものではないからネ。趣味は舶來だ。さうして今のその永井荷風といふ熊襲とオキヤアセの混血兒が、お平の長芋然とフランスから歸つた頃から、日本に流行り出した言葉でネ。中國者の西本波太などといふ篤志家が現はれて、田地まで賣つて『趣味』といふ雜誌まで出して大いに趣味がつた時代もあつたものサ。さうて江戸趣味といふ言葉は、むしろその後に出來た筈の言葉なんだから、生拔きの江戸つ子とは勿論何等の關係がないものだ……」などとお調子にのつて得々と小うるさくからみはじめる。が、問題が問題だけに、

「とにかく江戸趣味ッてのは變だよ。」と辻潤もいゝ氣になつて相槌を打つ。

「さうですかなア。」と、すこしばかり狐につままれたやうな顏して、近江君は考へ込む。

「そこでサ。」と無想庵は尙ほつゞけて、「さつきの、その、甲種實業を出て、洋行すべくコックにならうと志した男が、或時うどんかけを食へと云はれた時、どうしても食はないことがあつたんだ。きらひかときくと、きらひではないと云ふ。ぢやア、どうして食はないのだと問ひつめられると、その男は困つたやうな顏して、實はいつぞや寄席で小さんが、うどんを食ふ奴は江戸つ子ぢやないと云つたからだと、答へたもんぢやないか？　その頃だよ、江戸趣味の盛んに行はれた時代はネ。」と巴里にゐることなんぞはスッカリ忘れはてて喋り立てる。

ところへ少年が買物から歸つて來て、

「けふは肉屋はどこもみんな閉つてる。」と云ふ。

「さう／＼、方々に旗が立つてたネ。するとお祭りだ。」と無想庵が頷く。

「なんのお祭りだい？」と辻潤がきく。

「バントコットだらう。」

「ペンテコステなら聖靈の節かネ。」

「そりや猶太人のお祭りだ。」

「すると、カトリックぢや何のお祭りかな。」

そこへヲヂサンがフロマージ卸しとナヴェと稱する一種の蕪をかつぎ込んで來て、

「マリアの死んだ日だ。」と答へる。

「字引には聖靈降臨祭とあるぜ。」と無想庵は學校の先生のやうにすぐ揚足をとる。

「何しろお祭りの多い國だネ。」と辻潤は首を捻る。

クワン詰が開かれる。ヲヂサンはゴシゴシ蕪を卸す。

少年はアルコールランプに火を點じて飯をたきはじめる。

無想庵はそれを見て、

『大人がタバコをふかし、ビールをのみ、徒らに空理空論に時をつぶしてゐる間に、子供は人間に一番肝腎な勞働に從事してゐる。不思議な現象だネ。』

と柄にもなささうな感慨を洩らす。

『おれだつてやつてるぜ。』

と、ヲヂサンは皿へうつしたクワン詰の鮭と大根卸しとまぜながら抗議を申込む。

『君のは併し無益な勞働だ。のんでものまなくてもいゝビールの、あつてもなくてもいゝ肴ぢやないか？ さうして肴がなくてはビールの飲め いのは日本人ばかりだよ。日本人は一體無益な勞働を平氣でやつてる國民だ。生活目的のあるなしに拘らず、たゞ小まめに動いてゐさへすれば、それで働いたと思つてゐられる人種なんだ。だから日本人位世界で犧牲的精神に富んでる國民はないよ。』と辻潤はニヤリと笑ふ。

『それが封建制度に馴れた奴隷國民のいゝ證據ぢやないか？』

『一旦緩急あれば義勇公に奉じサ。命なんぞ捨てることは朝飯前のやうに考へてるんだから。兵隊にやアもつて來いだ。』

『だから今日のやうな時勢になると、各國の將軍達がみんな日本を羨んでゐる。』

『何しろ世は劍刃上の事だからネ。』

『禍事、禍事か。』

『人間の頭數はすばらしく殖える。貧富の懸隔は著しくなる。從つて本國ではどうにもできない人間が多くなる。自然他國へはひり込む。鵜の目鷹の目で、テンデに自分ばかり旨い汁を吸はうとする。はひり込まれた國々は迷惑する。戰が上手だと思つてゐるから、反感はもつてもだまつてゐる。が、反感は年と共に增長する。が、そんなものはいくらもたれたつて一向に驚かぬ。なアに、おれの國は軍が強いからと、心でみんなが高を括つてゐる。伊太利人がみんな日本人のやうであつたら、どんなによからうと、ムツソリーニの思ふのも無理はないサ。』

『ムツソリーニは本當にそんなことを思つてるのかネ？』とヲヂサンは目をまるくする。

『そこまでは實のところ知らないがネ。多分さうだらうと思ふのサ。』

『エピナアルでも茹でようか？』

と少年がきく。

『あゝ。玉子は買つて來たかい？』

『買つて來たよ。それも茹でる？』

『僕は生の方がいゝ。』

と無想庵がいふ。

『さう。』と少年はエピナアルを茹ではじめる。

『玉子はみんな生でやらうぢやないか？』

近江君は鰹節をかく。

ヲヂサンがゐなくなる。

『ヲヂサン？』

はと氣がついて無想庵がきくと、

『あの人は一緒に飯をくふ人があるんだ。』

と辻潤は又ニヤリ。

『語學の先生か？』

『多分さうだらう。』

飯がはじまる。

『君は日本とフランスとどつちがいゝ？』と飯をよそつてもらひながら無想庵は少年にきく。

『さア、どつちかなア……でも、僕にやアどつちだつて同じこつたなア……』

と少年はニコニコしながら、飯をよそつたポルを無想庵にわたす。

『ありがたう。』と受けとつて、無想庵は心の中に、なるほど、どつちで成長して見たところで到底坊ちやんではゐられる筈のない境遇の下にある少年にとつては、地球上のどこで暮らしたつて同じことだと思つた。

飯がすんで、時計を見ると、もう十時すぎてゐる。無想庵は慌てて外套をきて立上る。

『ぢやア、御馳走様。しやべるだけしやべつたから、今晩は思ひ置くことなしに、グッスリ寢られるだらう……さア、これから荷物運びだ。嚊の志がこもつてゐるから、そいつがとても重いんで……ぢア、左樣なら。おやすみ。』

『失敬。』

と辻潤は寢臺の上でアグラをかいたまゝ云つた。

ヒョツコリ、ヲヂサンが姿を現はして、近江君と二人で、日本流に階段の下まで送る。

『君、フランスぢやホテルの廊下はすでに天下の大道なんだぜ。だから、こんなところまで送つて來る奴はないよ……ボンソア。』

と無想庵は最後の毒舌を殘して、ホテル・ビュッファロオの表へ出る。前の木立が森のやうに黒い。

と、どうしたのか、ヲヂサンだけはまだついて來てゐたので、

『どこかへ行くのかい？』

と無想庵はきいた。

『いや、メトロまで送つてあげようと思つて――』

『なアに、巴里の案内なら、君より僕の方がよく知つてゐる。いゝから歸りたまへ。』

『さうか。ぢや、歸らう。』

とヲヂサンは引返す。キャフェのあかりが晝のやうにあかるいところへ出ると、無想庵は足早にポルト・オルレアンのメトロの口へ急いだ。

無想庵は吹けば飛ぶやうな、枝をはなれた木の葉同然、東西南北の風のふきまはしで、どうにでもなる魂の持主だから、たとへば妻に、

『いつまでもこんな外國の片田舎で暮らしてゐるのはつまらない。』と云はれると、

『ウム、まつたくつまらない。』とすぐその氣になつて了ふ。

『ねえ、子供だつてこのまゝにほつて置いたら、そりやアからだこそ丈夫になるか知れないけれど、きつとナナやノエミのやうな田舍者になつて了ふわ。』

『ウム、そりやきつとさうなるだらう。』

『あなただつて、いつまでもこんなことをしてゐたら、何しろ周圍からの刺戟といふものが全くないのだから、いつまでたつたつて人並の物は書ける氣づかひはないでせう。』

『ウム、そりやないだらう。』

『日本では若い人達がどし〳〵現はれて、時勢がどん〳〵變つて行つてゐるんだから、あなたなんぞは時代遲れになつて、そのうち人から忘れられて了ふわ。』

『ウム、そりや忘れられて了ふ。』

『さうすりやあなたの原稿なんぞ誰一人見向きもしなくなるでせう。』

『ウム、そりやさうなる。』

『さうしたらあたし達は御飯がたべられなくなるんぢやないの？』

『ウム、そりやたべられなくなる。』

『それぢや困るぢやありませんか？』

『ウム、そりや困る。』

『あなたは一體いくつなの？　もう五十でせう？』

『ウム、もう五十になる。』

『さうしてその五十年といふ長い間に、あなたは何一つ仕出かしたことは全くないんぢやありませんか？』

『ウム、そりや全くない。』

『あなただつて文士のはしくれでせう？』

『ウム、そりやはしくれだ。』

『だから一生に一度はせめて文士らしく何かま

とまつたものを書いたらどう？』
『ウム、そりや書くつもりだ。』
「つもりだけぢや駄目よ。書いて見せなけりやいけないわ。
『ウム、そりや書くよ。』
「それにはこんな田舎にばかりくすぶつてゐてはどうしても駄目だから、この際思ひきつて巴里へ出たらどう？」
『ウム、そりや巴里へ出てもいゝ。』
「うして妻子のことなんぞ忘れて、一心不亂に書いて御覽なさい。」
『ウム？　さうしよう。』
かうした問答の結果、かれは飄然と巴里へ出て來たものだ
即ち、地震のやうな三等車で十八時間ゆられつゞけ後、さうしてそのあげくの疲れきつた小半日をば、たづねあてた辻潤の宿で、どういふ了見かは知らぬが、べん／＼だらりとはなはだとりとめのない空理空談を費した後、それから一時あづけにして置いた重い／＼荷物をば、ギャール・ド・リオンからモンマルトル通りまで、喘ぎ／＼運んだ後、（さうしてその荷物を運ぶにも、ポルタアは勿論、かれはタクシイの七ハンラン　ところを倹約するために、汗水たらして自身にメトロの底までかつぎ込み、又メトロを出てからも、ポツポツ雨の落ちてゐた薄暗い街燈の下をば、よろめく十歩に一休みしては、ほとんど半死半生の體で、例の洞穴の中まで、よんやらやつと擔ぎあげたものだ。）で、汗ビッショリのシャツ、ズボン下をかなぐり捨てると、マトラのへんにデコボコしたいきれくさい寝臺の中へ、スッぱだかでもぐり込むが早いかそのまゝ丸太のやうに熟睡した無想庵は、恰も深山幽谷の夢のつゞきでも見てゐる最中のやうに、洞穴の外でしきりにピヨピヨさへづる雲雀の聲で目をさましたものだ。
二十年も前、雪の妙高山を登つた時、雪の神經纖維のやうな白樺の林の中で、折からそれが三月の中旬すぎであつたので、季節を忘れぬ正眞正銘の雲雀の聲をば、かへつてさながら幻覺のやうにきいた事を、かれはふと思ひ出した。
「さうだ。こいつもやつぱり幻覺ぢやないのだ。この上の部屋で誰かが飼つてゐる籠の中の本當の雲雀なのだ。」と、一晩ねて見ると、もう一向そのデコボコも苦にならなくなつてゐたマトラの上で、樂々と臥そべりながら、無想庵は思つた。
「だが、五感の上の一切は……」と、ひとりきりでゐると、かならず湧然とわきあがつて來るのを常としてゐる持前の雜念妄想に、抵抗力のない無反省な柔弱極まるかれの頭腦は、たわいもなくすぐ捉はれて、フハフハと煙のやうに動きはじめる。決して幻覺ではないけれど、同樣に佛說の般若のやうに、たしかに内容のない空なものに相違ない。即ち幻覺そのものと等しくない。だが、それにも拘らず、なぜあの雲雀をきくとこんなに快適な心持がするんだらう？　同時に、なぜ深山幽谷を聯想するんだらう？　さうして雪の赤倉だけが、あらゆる深山幽谷から、又あらゆる聽覺的經驗から、特にその一つだけが擇び出されて、かく思ひ出されざるを得なくなるんだらう？……が、人間の五感といふものは、」と　ここまでも一つの問題に即して、そいつを徹底的に分析解剖して考へて見るだけの準備と根氣を缺く頭の習慣から、即ち物ぐさから、直觀的と云はんよりは、むしろ藥鉢的に、「要するに生の慾求だ。」と　ひとりぎめに片づけて置いて、さて雲雀の啼くのは、」と、足とびに目前の現象へ逆戻りして了ふ。「草の中でも、籠の中でも、それは明らかに生殖慾の表現だ　さうしてそれを快適な心持できく人間の

聽覺は、それが生理的機構の一作用であるかぎり、やつぱり人間自身のうちに伏藏するミディアムの同じ生殖慾に反應するかゝではあるまいか？……が、それにしてからが、この五感の上の快適そのものは何物なんだらう？……たとへば味覺……』と、思ふと、無想庵は急に腹のへつてゐることに氣がついた。

『さうだ。とにかく米を買つて來なければならない……』

そこでかれはハネ起きて顏を洗つた。

例の迷宮のやうな細く、狹い、曲りくねつた眞暗な階段を下りて、一歩外へ踏み出して見ると、內の深山幽谷的靜寂とは急激なコントラストをなして、外はとても凄じい騷々しさであつた。山のやうにバナナを積んだ手車がすぐ鼻先にある。そのとなりへ無數の魚類をなまぐささうに並べた戶板がある。さうしてその前を往來する肩摩轂擊の人々をつかまへては、鬼のやうな婆さんが眼をキラキラと光らして、一々片手に握つた眞鰈をつきつけつゝ『キロ八フラン！』と叫び立ててゐる。その又となりはフロマージ屋だが、と、見ると、血だらけな白い上つ張りを着た若者が、切口の柘榴色に突起した、首のない赤剝の小牛の胴體をばユサユサとかついで通る……人と車と食料品で、人道と云はず、車道と云はず全く立錐の餘地もない。さうしてその喧々囂々さ……無想庵はまづ茫然として立ちすくんで了つた。

『みんな食ひものだ……みんな食ふためだ……さうしてどうしても食はずにはゐられぬといふ人間自身の本能即ち弱點につけ込んで、しかもお互ひに人知れず自分だけがどうかして人よりは餘計に利益を獲得しようとして、即ちよりよきものをより多く手に入れようとして、かく血眼になつて、かく必死となつて狂奔してゐる有樣なのだ……これに一臠の肉を投ずれば、と、寒山が云つた……さうしてそれが人間本來の姿なのだ。人間そのものの正體なのだ……』

が、さうは思つたが、かれはもう十年前までのかれのやうに、かうした苦樂の現象に對して別段もう嫌惡も無常も感じなかつた。

『さういふ自分だつて、これから食はうとする米を買ひに出て來たにすぎないんだからなア……』と、心にほゝゑましく呟きながら、無想庵は人波をかきわけ／＼、米を賣つてる店はないかと、そこらあたりをキョロキョロ見廻しつゝ歩き出した。

ホテルからレ・アールの廣場まで出る間に、パン屋は二軒もあつたけれど、かれはすべての歐羅巴人のやうに、この際第一の食料品としてパンを買ふ氣にはどうしてもなれなかつた。鷄肉屋もあつた。羊肉屋もあつた。さうしてその羊肉屋の肉切臺の上には、勿論それとは心づくきづかひはないであらうところの、かれ自身の屬する眷族の首を切られ、皮をはがれ、內臟をとり除かれ、さうして四足を開いてブラさげられた無數の犧牲者を目前にして、恰も飼猫のそれのやうに、例の血だらけな上つ張りの若者達に、しきりと鍾愛されつゝある可憐な生きた小羊が一疋ゐた。タバコ屋もあつた。菓子屋もあつた。又勞働者達の一杯たかつたバアは何軒もあつた。が、肝腎の米を賣つてる家は一向に見あたらなかつた。

と、油をたゝへた鐵鍋の中で、ジウジウカフあげにされてゐるソオシッスを、肉刺でつきとほしては大きなパンの間へ押込んで、一個一フラン五十文で賣つてゐる露店の前を通りすがつた時、かれはよつぽどそいつで朝食をすますことにしようかと考へたが、

『まてよ。かりに一キロ三フラン五十文の米を買ふとすると、それだけで正に三日はしのげる。鰹節も醬油もカバンの中にある。アルコール

も一瓶もつて來てある。して見ると、今本當に必要なのはたゞ米だけなのだ。さうしてその外の一切はすべて贅澤だ……』と、さう思ふと、フラリとそのツオシッス入のパンを買はうかと思つたことが、いかにも自分の心のデタラメさ加減を證據だてゝゐるやうな氣がしたので、丁度そこが裏町へ三角形の頂點をなして折れまがる角になつてゐたところの、その露店の前をいまいましさうに尻目にかけつゝ通りすぎた。

やがて小さな伊太利食品屋が見つかつたので、何だかすこし高すぎるやうな氣はしたけれども、とにかくとりあへずそこで一キロ三フラン五十文のピエモン米を買つてかへることにした。

で、ホテルへ立戻ると、さつそく引きずり出した、ところ〴〵剝げちよろけになつた諸々方々のホテルの貼紙がきたならしく附着してゐるところの、さうして獨身時代からのこの世に於けるかれの唯一の伴侶であるところの、舊式な古鞄の中から、小鍋だのアルコールランプだのをつかみ出して、何はともあれ、まづ米の飯をたきはじめたものだ。

『かうして米の飯を食はずにゐられないところが、即ちきつてもきれない日本人である立派な證據かも知れない……』と、フロマージ卸しでゴシゴシ鰹節をかきながら、考へるともなく無想庵は考へる。『いや、さうぢやない……たとへば内の子供だ。内の子供はきつてもきれない日本人には相違ないけれど、彼女は米の飯がまるツきり嫌ひだ。たゞに米ばかりぢやない。味噌から醤油から鰹節から、凡そ日本人の食ふものと云へば、何にかぎらず一切嫌ひだ。彼女の味覺は絶對的に日本人ばなれがしてゐて、不思議なほどフランス人そツくりだ。して見ると、所謂常食といふものが、必ずしも人種を決定することにならなくなる。從つて米を食はずにゐられないといふことだけは、決してきつてもきれない日本人である證據にはならない……』

併し、』と、飯が吹きはじめたので、アルコールランプの火を細くしながら、かれはなほ考へつゞける。『併し、たとひきつてもきれない日本人であらうがなからうが、人間は食はずにゐられぬことだけは事實だ。さうして食ふ以上は、それが米であらうと、パンであらうと、かうした社會組織の下に棲息すべく餘儀なくされるかぎり、その食料はどうしたつて錢で買はなければならぬ……錢！……』と、飯ができたので、アルコールランプを消すと、鍋の蓋をあけて、かたい鰹節をいきなり湯氣の立つ飯の上へぶツかけ、それへ醤油を落し、さて箸をとつて、無想庵はそのまゝ食ひはじめる。さうして食ひながら考へる。『錢！……錢はエゴイズムだ、人間のエゴイズムの結晶だ。スチルナアではないけれども、人間がみんなエゴイストであることは錢といふものの存在が證據だてゝゐる。先立つものは、といふ、即ちアプリオリだ。さうしてそのアプリオリの正體が、エゴイズムなのだ。』と、さう思ふと、かれは急に飯が咽喉につかへるやうな氣がした。そこでコップの水を一杯ぐツと呑み下しながら、『社會主義の實現した時代を人は黄金時代だなどと云つてゐる。黄金とは錢のことぢやないか？……古來人間の考へた極樂淨土で、尤も多量の黄金を豫想しない世界は、一つだつてなかつたぢやないか？……今流行のマルキシズムだつて、詮じつめたところは、阿彌陀如來の黄金的佛國と、實は大した異りがないものぢやないか？……千乘の家を倒すものは百乘の家だ。さうしてブルジョアジイを倒すものはプロレタリヤだ。さうしてプロレタリヤが權力を握るといふ。權力とは何だ？權力のあるところへ黄金の集中することは、歷

史が夙にそれを敎へてゐる。蘇我氏を倒した藤原氏は望月の缺けたるところなきまゝの榮華を極めたものだ。さうしてそれを羨んだ武門武士が幕府を開いたんぢやなかつたか？　秀吉はなぜ關白になつた？　藤原氏の榮華を模倣したかつたんぢやないか？　重きを負うて遠く行く人の心意氣で家康は何を望んでゐたものであらう。さうして日光廟は大佛建造以來最も多く錢のかゝつた建築物ではないか？　十一代將軍は五十人の妻妾を侍らして、種彦に田舍源氏を書かしたではないか？　云ふまでもなく藤原氏の生活模倣ではなかつたか？　さうして薩長の足輕どもがその同じ榮華を羨むことによつて、維新と稱する大業は成つたのではなかつたか？アキレスを模倣したのはアレクサンドルだ。アレクサンドルを模倣したのはジュリウス・カイザルだ。さうしてジュリウス・カイザルを模倣したのはナポレオンだ。模倣は羨望だ。プロレタリヤがブルジョアを羨望し、模倣するのは理の當然ではないか？　舜何人ぞや？　我何人ぞや？　さうして人生は五十年だ。男子こゝに居るべからざる乎？　と將門に云はした賴山陽は、つねに黄金づくめの大小を挾んでゐた遊冶郎ではなかつたか？　さうして幕末の青年は爭つて、日本外史を讀んだではなかつたか？　日本外史には何が書いてある？　權力に對する羨望がその基調をなしてゐるところは、その粉本たる史記よりは遙かに濃厚ではないか？……羨望、嫉妬、復讐……さうしてそれが爆發したものが、卽ち革命ぢやないか？……

鍋はカラになつた。考へ〱丹念に一粒のこさずたべをはつた無想庵は、やがて箸をさし置くと、立ち上り樣、クルリと洗面臺の方へ向きかへた。さうしてヒビの入つた安大理石の上の、唐草模樣のデッサンのある、又ところ〲にやきつぎの痕跡をのこした、古色蒼然たる陶器の洗盤の中で、かれは鹿爪らしい顏つきをしながら、馬鹿丁寧に鍋と箸とを洗つた。で、そばに掛つてゐたセルヰエットで淸拭きすると、それ等を鞄の中の元の地位へ收め、さてその代りに紙とインキとペン、ペン軸の類をとり出して、机の上へ整然と置きならべたものだ。さうして置いて、かれは悠然と再び椅子へ腰を卸した。と、上衣の横がくしから、スカフェルラチの青袋をつかみ出して、その中から一本ぬきとり、そいつを口にくはへると、マッチを擦りながら『このたばこは二フラン三十五文だ……』と考へる。『かりに一日半キロづつ食ふにしたところで、米は一フラン九十五文ですむ。然るにたばこは毎日どうしても一袋は要る。卽ち二フラン二十五文づつ要る……

すると、この必需品より贅澤物の方へ餘計錢をかけるといふ事が、何となく矛盾した生活のやうな氣がしたので、かれは一寸眉を顰めたが、

『が、併し、たばこはおれにとつては決して贅澤物ぢやない……なぜかといふと、おれはたばこを喫かしながらでないと、どうしても原稿が書けないからだ。さうして米よりたばこの方が高いのは、それはおれのせゐぢやない。こんな杉葉の屑をつめ込んだやうな下等品を、二フラン二十五文などといふ大それた値段で、否應なしに消費者に押しつけるフランス政府が因業なんだ……』と、そんなことを考へるかれの頭の他の一隅では、『さア、書かう……書かなけりやならん……と、何から書かう？　どこから書かう？……ウム、さうだ……いや、それはいかん……』などとわく〱と無上に氣をもんでゐるのだ。

無想庵はかくして原稿を書きはじめたが、さて例によつてそれが一向捗らなかつた。一行書いては消し、三行書いては反古にし、たまた

ま十行も書いたかと思ふと、そのうちの一句が氣に入らないので、それがために又はじめから書きなほすといつた調子で、一時間たつても二時間たつても、いたづらに机の一隅へ反古の山を築くばかりで、たつた一枚の原稿さへ、粗雜なかれの頭では、さうオイソレとは纏らなかつた。

「こんなことぢやいかん、こんなことぢや妻子は愚か、自分ひとりの飯だつて食へさうもない……」と、一生懸命にペンを働かしてゐる一方で、原稿の内容とはまるで關係のない念が、そばから〳〵かれの心に浮んで來る。――とにかく今ある五フランで、少くとも百枚は書かなくちやならん……さうしてそれを日本へ送つて、それが金になつて戻つて來るまでは、このまゝ書きつゞけながら、たとひ食ふものがなくなつても、チッと辛抱してゐなくちやならん……前田河氏の書いたものの中に、アプトン・シンクレアは林檎と水だけで原稿を書くとあつたが、いくらアメリカだつてたゞでは林檎もくへまい……で、若しいよ〳〵兵糧がつきたら、おれはシンクレア以上に出て、たゞ水だけのんでやつて見よう……ところで、今とにかく五百フランあるんだから、かりに一日の費用として、まづ米の一フラン九十五文、たばこ二フラン二十五文、アルコール九十文、それに宿料の七フランを加へて、總計十二フラン十文、さう、さうする……」と、反古の上で除法を行つて見て、『さう四十一日間は大丈夫支へられることになる……さうしてその四十一日間に、送つた原稿が多少の金になつて日本から戻つて來ないかぎり、四十二日目からいよ〳〵水だけのんで原稿を書かなければならないことになる……よし、若しさうなつたら、さうすることにきめよう……さう云へば、先日ニースで普化和尚のやうに、ガラスを敷きつめた寝棺へ仰臥しながら、五十日も斷食して人に見せてゐたアメリカ人があつたつけ……印度には昔から赤脚仙などいふ苦行の徒がゐたのだ。同じ人間でゐて五十日や六十日の斷食ができないことはあるまい……さうしてまさかまちがつて死んだら……さう、それこそフランス人の云草ぢやないが……タンピー！だ。」

と、無想庵は心の底から滾々と湧き出て來る一大勇猛心を感じた。

一千百二十六年十月三日

すばらしく大きな雷雨があつて、急にさむくなつた。秋だ。

また秋だ。しかしクロ・ド・キャアヌの秋はわたしたちには初めてだ。下の家主さんの一族も、けふをかぎりとして、ニースのその住宅の方へ引きあげる。イヴォンヌのともだちが一時に三人までゐなくなることになる。（略）あしたからイヴォンヌはさぞ淋しいことであらう。

また秋だ。なんべんくりかへした秋であらう。さうしてくりかへすたびごとに、だんだん意味のふかくなる、だん〳〵身にしみる程度の増し來る、何といふ不可思議微妙の秋であらう。

――死なば秋つゆのひぬまぞおもしろき。

それは紅葉の辭世の句だ。有島さんも、もう一度秋を見てから死にたい、と云つたさうだ。

わたしは死にたくない。ます〳〵生きて働きたい。眞實と正義と潔白との上に立つて、とし迫る饑餓と惡戰苦鬪しつゝ、力のかぎり働きたい。（正しく食つて生きんがために（より））

年譜

明治十三年（一歳）
二月二十三日、北海道札幌で生まれたものださうだ。そのことについては『ニュアンス・フェイヤント』と、『無想庵物語の序』に書いて置いた。

明治十七年（五歳）
小菅丸といふ船で小樽から出た時、大吹雪だつたさうだから、雪のふりはじめた頃だつたのだらう、養父母に伴はれて海路東京へ出た。馬喰町の苅豆屋から四谷荒木町、まもなく幼年校下の坂町へ移る。

明治十八年（六歳）
麹町區一番町十一番地へ養父母の新築した寫眞館へ引越す。

明治十九年（七歳）
番町小學校へはひる。何でも、初等科六級といふのへ編入されて、「およそ地球上の人種は五つにわかれたり。」といふ小學讀本を教はつた。大正天皇が陸軍少尉の軍服を召されて、習字の時間に、教室を御覽にお出でになつたことを覺えてゐる。校長は丹所啓行氏。

明治二十年（八歳）
その頃はたゞ草原であつた日比谷へ東京中の小學校が全部あつまり、大運動會を催した。尋常二年生としてその中に立交つて行つた記憶がある。歸りは半藏門で日が暮れたが、養母がそこまで迎へに來てゐて、嬉しまぎれに「おツかちやん！」と飛びついたものだ。

明治二十三年（十一歳）
十二月、高等一年生の時、油波安榮二と二人學校から選拔されて、帝國議會開院式の唱歌を音樂學校へうたひに行つた。

明治二十七年（十五歳）
三月、番町小學卒業。
四月から築地の東京府尋常中學校へ通學しはじめる。今の東京劇場の位置で、日比谷第一中學の前身だ。運動場の裏に名妓ぽんたの妾宅があつた。

明治二十八年（十六歳）
十一月、品川沖にかゝつてゐた吉野艦を見に、四挺櫓のボートへ九人ものつて出かけ、風雨にあつて流され、千珠といふ帆船の軍艦に救はれ、品川まで送つてもらつた。それを『品海の千珠』と題して、「文庫」へ投書して掲載された。これが世間の雑誌へ自分の文章を發表した最初のものだ。

明治二十九年（十七歳）
六月から八月へかけて腸チブスに罹つて死にかゝつた。駿河臺の山龍堂病院へ入院してやつと助かつた。村井弦齋の「日の出島」が報知へ載りはじめたのをその病床でよんだ。

明治三十年（十八歳）
七月、坪内逍遙を崇拜するあまり、親にだまつて早稲田專門學校の入學試驗を受けて通り、九月から出席して見たが、校内の空氣にスッカリ幻滅し、すぐやめて了ひ、元の中學へ戻つて了つた。その七月から八月へかけて、重病中の實母を見舞ひに、上京以來はじめて札幌へ赴いた。函館まで五年間番町の家で兄弟の如く机を並べてゐた叔父の一人と同行した。札幌ではその時十三歳だつた妹光子と六歳だつた弟鐵治に生まれてはじめ

て會つた。實母は十一月九日に死んだ。

明治三十二年（二十歳）

三月、中學卒業。その月、「新小説」の懸賞に應じて、「夢うつゝ」といふ短篇を書き同社へ送つた。中學時代には、一二年の頃、「日月」、三四年の頃「築地文藻」といふ例の廻覽雜誌をやつてゐたが、五年の時、「硯月」といふ印刷したものをはじめ、全國の中學へ會員を募集したり、大町桂月や佐藤鞆香に逢ひに行つたりした。相棒は一高で死んだ山内冬彦といふ秀才だつた。

四月、札幌の妹光子が上京して赤十字病院へはひる。七月、一高の試驗を受けて及第し、文科へはひつた。文科一年の主任は藤代禎輔先生だつた。同じ中學からは小山内薰と自分だけが文科へはひつたわけだ。川田順、吉田豐吉、上村清延、高瀨精太、太田善男、即ちその後の雜誌「七人」の同人はこの時の同級生だ。九月から東寮五番へ寄宿した。

明治三十三年（二十一歳）

一月、「新小説」懸賞小説が發表されて、露伴紅葉鷗外逍遙四大家の選の下に、齋藤溪舟、雄島濱太郎、中村春雨、神谷鶴伴四人は當選し、その選外十人のうちへ自分のもはひつたか、特に鷗外博士が自分のを第一等に選んでゐたのを見て、ひどく自惚を起したものだ。永井荷風もその十人の中にはひつてゐた。

明治三十六年（二十四歳）

九月、文科大學の英文科へはひる。高瀨、小山内、川田、太田と一緒だ。小山内が先立ちになつて雜誌「七人」を起す。自分はドオデェの『サフォ』を英譯から譯し、その雜誌へ連載した。

明治三十七年（二十五歳）

學校を休學して、『神祕』と題するヘンなものを「帝國文學」へ連載しはじめたが、生活發展の方がいそがしくなつて中止して了つた。

明治三十八年（二十六歳）

雜誌「七人」へメロドラマ『竹村翠』を載せ、本郷座の高田藤澤河合等が上演することとなり、いよ〳〵稽古にかゝつた日、警視廳から上演禁止された。

休學後は國文科へ移つて見たが、結局學校は面白くなくてやめて了つた。この頃島崎藤村、小栗風葉、國木田獨步、田山花袋、蒲原有明、柳田國男などといふ文壇の人々と知合ひになつて龍土會へは最初から顏を出した。川上眉山、柳川春葉などといふ人にはそこで會つた。又國木田獨步の雜誌「新古文林」へ小説を三つほど書いたのもその頃だ。はじめのは題は忘れたが、二度目のは「雫」、三度目のは『とんでゆく』といふのだ。

明治三十九年（二十七歳）

女狂ひして、たうとう親の家をとび出して了つた年だ。丁度養父が自分の爲に小石川宮下町七番地へ立派な家を建ててそこへ麹町から引越した年なのだが。

國木田獨步の名刺を三枚もらつて、女と生まれてはじめて箱根から西へ行つて、京都で女とわかれ、自分はそのまゝ京都に殘つて、堀江純吉氏の京都新聞社員となつた。そこで大森癡雪君と北村鈴菜君とから「無想庵」といふ雅號をもらつた。『木乃伊採』『無邊際空』及びハウプトマンの『織匠』譯などを同紙上へ連載した。

明治四十年（二十八歳）

養父の病氣が重くなつて東京へよびかへされた。

明治四十一年（二十九歳）

三月、結婚し、四月九日、養父が死んだ。勿論、小石川宮下町の家でだ。この年國木田獨步が死んだ。川上眉山が自殺した。

明治四十三年（三十一歳）

一月二日年始先から中澤臨川と痛飲し、興に乘じて湯河原温泉へ赴いたが、前年の十二月生まれた子供が死んだといふ電報を受け、そのまゝ歸らず、熱海から下田、江尻から京都へ赴き、京都新聞社の同人達と痛飲、それから槇岡盧舟、大平野虹と比叡山へ登り、敎王院で飛田孝正師からはじめて摩訶止觀をかりてよんだ。敎王院から富田溪仙の『臺湾漫畫』へ序文を書き、又妻へ離緣狀を送つた。

明治四十四年（三十二歳）

三月、雪の妙高山へ登る。佐渡、新潟はこの時に一巡、新潟では關屋の有明館で、オスカア・ワイルドの『インテンション』なんか讀んでゐた。妙高山から降りて、直江津から越中の泊まで徒歩旅行、金澤で雪山僧徹に逢ひ、京都で富田溪仙と寫眞をうつし、大阪で槇岡盧舟方へ二三泊、法隆寺へ一週間、吉野へ三泊、高野へ二泊、和歌の浦から乘船、熊野勝浦の赤島へ一週間、那智を見、徒歩新宮へ戻り、熊野川を溯り、宮井へ三泊、北山川をのぼつて瀞八町を見、又熊野川をのぼつて湯の峰本宮まで行き、再び新宮から乘船、熱田から東京へ歸つた。この旅行は自分にとつて甚だ意味の深いものだと考へてゐる。

明治四十五年（大正元年）（三十三歳）

七月、山本露葉と知合ひになる。『モザイク』同人を承諾し、ゴンクウルの『ラ・フォスタン』を譯しはじめる。

大正二年（三十四歳）

三月六日、養母が死んだ。その月新潮社から『サフォ』譯が出た。

養母沒後、しきりに吉原の林屋へ赴き、大酒に生活をもち崩す。

大正三年（三十五歳）

七月、妹と札幌へ赴き、八月、定山溪温泉で山津波に逢ふ。

大正四年（三十六歳）

七月、比叡山敎王院に籠つて『サニン』を譯了した。

大正五年（三十七歳）

叡山で知合ひとなつた能登徳田村の堀田良吉宅へ妹と一緒に行つた。

大正六年（三十八歳）

十月一日、大風がふいて家が破損した。その家の相談のため札幌へ赴く。途中、平泉の中尊寺を訪ふ。又登別の奥のカルヽス温泉へ赴き、はじめて雪の美を感ず。

大正七年（三十九歳）

三月、第二の妹を伴つて上京、小石川の家を賣却した。今川橋の松橋紋三氏方へ一二ケ月假寓、それから麹町九丁目の借家に移る。

大正八年（四十歳）

八月、妹光子渡米する。十月、辻潤その借家へ來て、マックス・スチルネルの譯をはじめる。十一月、家を放棄することに決定した。辻潤を比叡山へ追ひあげ、自分はカバン一つとなつて放浪の旅に上る。十二月、比叡山宿院三號室で『放浪第一信』を書き、『讀賣』へ送る。又善光院へこもつて、『ビルロニストのやうに』を『改造』へ送る。

大正九年（四十一歳）

相州鵠沼の東屋で中平文子と知り合ふ。三月末、東京芝神明町二十四の文子方へ押しかけて泊る。四月、文子と結婚。五月、文子と支那へ新婚旅行を試る。八月、同じく文子と横濱丸にのつて歐羅巴へ赴く。十二月五日、巴里十六區ブルヴァール モンモランシイ六十二、ヴィラ・モリエールで、文子からイヴォンヌが生まれる。大住嘯風君がイヴォンヌと名づけ、狩田亨君が『五百野』と譯

したが、文子はそれを「五百子」にした。

大正十年（四十二歲）

巴里パッスイのポオルソオニエール一番地へ家庭を持つ。七月、一家英國へ赴く。二十日倫敦滯在。八月、白耳義ブルセル、獨逸キョルン、ボン、それぞれ一二泊し、ライン川を溯つて、マインツ一泊、ウイスバーデン二三泊、フランクフルト・アム・マイン、ハイデルベルヒ等を歷遊し、伯林へ一週間、瑞西へ赴き、チュリッヒ、ルツアン、アルパナック、マイリンゲン、インタアラアケン、それからユングフラウ登山、つゞいてベルンへ二泊、ジュネーヴへ二泊、レエマン湖を汽船で縱斷、モントルウへ三四泊、國境に近いシオンといふところへ一泊、瑞西の國境をシムプロン線で伊太利のミラノへ出、そこに兩三泊、コオモ、ダヴィンチの壁畫を見、ヴェネチアへ一週間、ボロニヤへ四五日、フィレンチェへ一週間、ピザの斜塔へのぼり、羅馬へ一週間、ナポリへ十日ほど、その間カプリの琅玕洞へ行き、ポンペイを見步き、ヴェズウヴ山の噴火孔をのぞき、羅馬へかへつて又一週間、それからトリノ線を通つて巴里へかへつた。

大正十一年（四十三歲）

一月、鹿島丸で歸朝、妻の故鄉松山へ赴き、道後溫泉で二ケ月餘暮らし、そこで『性慾の觸手』を書いた。

三月末から翌年大正十二年九月卽ち地震まで、相州二の宮の中平家へ假寓。「結婚禮讃」と、「文明病患者」二册、改造社より出版。「大阪朝日」「改造」「我等」等へ書いたのを集めたものだ。

暮から極度の神經衰弱にかゝる。

大正十二年（四十四歲）

六月、二の宮で老朽するのがいやになり、支那から西藏、印度等を經て、陸路歐羅巴へ行つて見ようと思ひ立つ。妻に諫められて、十月、榛名丸で一家巴里へ赴くことにきまる。然るに九月一日の大地震で、妻は横濱の山下町で地に埋まり、車夫に助けられて英國船に救はれ、神戸へ送られ、攝津病院へ三ケ月入院。自分は横濱へ妻をさがしに行つたが、さうときいて、急ぎ草鞋ばきで箱根を越し、沼津から汽車で神戸へ赴く。同じく入院中の車夫に逢ひに來てゐたその父親と御殿場まはりで一度二の宮へかへり、妻の母とイヴォンヌとを伴ひ、再び神戸へ行く。

妻の入院中、御影の川田順方へ客となり、そこで『妻をたづねて』を「大朝」へ連載した。十二月上旬、神戸からそのまゝ香取丸で、再び歐羅巴へ赴く。

大正十三年（四十五歲）

一月、ニースのシャルドナンス・ホテルへ滯在。

二月、巴里へ出て、ローリストンのパンション・マルタに滯留。

四月から十月までハッスイのリュ・デュパンで家庭を營む。早川雪洲夫人來訪。

將來の生活不安から妻倫敦へ赴き、資本主を見つけて巴里で料理店を出さうと計畫す。さうして連れ戻つたのが「湖月」の主人。十一月からリュ・ケプレルで日本料理店を開く。慾ばつたことに碌なことはなく、大失敗を招く。

大正十四年（四十六歲）

妻子南フランスへ赴く。自分はそのあとを追つて行く。

伊太利ミラノ、コモ、ルツアン、ベルンと通つて、又巴里へ歸る。その年の四月末の話。

十二月、妻小森氏と共にフェミナ座で浦島の乙姬を踊る。すぐ南フランスへ赴き、「湖月」

の主人と共に、モントカルロで又々料理屋をはじめ、妻そこで踊をやることになる。

大正十五年（昭和元年）（四十七歳）

一月はじめ、どういふ物のまちがひか、「湖月」の主人、モントカルロのオクスフォードレストランで妻にピストルを放つ。妻左頬をうちぬかれたが、幸ひ生命には別條なく、モナコ病院へ入院。

一月末退院して、佛國女流小説家マルセル・ヴィウー女史の好意で、女史の別荘トライヤスのラ・メーゾネットを貸してもらひ、三月末まで滯在。その間ミラマアのバルビュスを四度ほど訪問した。

四月からクロー・ド・キャーニュのヴィラ・マックス・ロロットへはひる。十月、すぐ近所の新別荘ヴィラ・レ・パンへ移る。

昭和二年（四十八歳）

八月、エヴィアン・レ・バンへ赴き、それからモンブランの一部、エイギエット山のサモトウなる、山奥の一軒屋、ケールツビバといふ瑞西式別荘を借り、一家一夏を暮らす。

十月ニースのサン・バルテロミイで、新建のアパルトを借り、道具を買込む。併し住んで見ると、景色ばかりよくて住心地がわるかつたので、十一月、又々クロー・ド・キャーニュのヴィラ・サン・ミッシェルへ移る。同家の持主パルスリエ氏はイヴォンヌ（十二歳）になるまで滯在せよとすゝめてくれる。イヴォンヌの爲にボブといふ犬まで飼つてくれる。

昭和三年（四十九歳）

一月、妻胃病に苦しみはじめる。で、それをなほす爲に、天野常子といふ日本人とイタリイ人の合の子と共に、ミラノ、ボロニヤを四月一杯踊りまはつてかへる。

五月、自分は辻潤に會ひがてら巴里へ上る。

六月、妻子も巴里へ來る。ホテル・ミュラアへ落ちつく。それからブーロンニュのアパルトへ引移る。十一月、妻和蘭白耳義へ踊りに行く。同時にパストウルのシテファルギエールへ引移る。イヴォンヌはブーロンニュ小學校からパストウルの小學校へ轉校する。辻潤父子日本へ歸る。

昭和四年（五十歳）

一月、巴里ポール・ロワイヤル街のアパルトへ住む。

こゝでウージェヌ・シュウの『巴里の祕密』抄譯を脱稿する。クロード・キャーニュ時代、バルビュスの『耶蘇』を譯し、『無想庵物語の序』『椎が本』「正しく生きて」などを「改造」へ送る。巴里へ出てからは、「飢渇通信」を書いた。

三月末一家伯林へ赴く。妻がウインテルガルテンへ雇はれた爲だ。

五月一日伯林を立つて、シベリア經由七年ぶりで日本へかへる。『エミール・ゾラ全集』を出す本屋をさがす爲だつた。春秋社でやることにきまつたので、七月末巴里へ歸る。

九月、メダンで暮らす。十月七日、エミール・ゾラ例年祭へ出席して佛語演説をやらせられる。同月、オー・アールのサンドニ・ホテルで『巴里の胃袋』を譯しはじめる。

十一月より十二月までホテル・ミュラアで『巴里の胃袋』脱稿。

昭和五年（五十一歳）

一月から「ラ・テール」に着手。

春秋社で約束どほり本が出ないので、心配して、三月末再びシベリア經由で歸朝した。

（相州二の宮原田前中平家にて）

昭和五年七月十日印刷
昭和五年七月十三日發行

現代日本文學全集第四十一篇



著作者 長谷川如是閑
内田魯庵
武林無想庵

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

株式會社秀英舍印刷





改造社